

TSから始まるヒロインアカデミア

破戒僧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーローを目指し、名門『雄英高校』に通うこととなった少女、『栄陽院 永久（えいよういん とわ）』。彼女は元男・現女の、いわゆるTS転生者だった。

世界総人口の8割が何らかの『特異体質』である超人社会で、ある特殊な『個性』とそれによる『宿命』を背負いつつも、ヒーローを目指して少女はひた走る。

あ、それとその途中でとある男の子をちよいちよい手伝ってたら何かすごいペースで超強くなってくんですけどまあいいよね、なお話。

独自設定・解釈満載でお送りします。駄文ですが、よろしければ暇つぶしに見てってください。

目次

第1章 TS少女と雄英高校

第1話 TS少女と入学試験 | 1

第2話 TS少女と合否通知 | 12

第3話 TS少女と登校初日 | 22

第4話 TS少女と体力テスト | 29

第5話 TS少女と緑谷出久 | 35

第6話 TS少女と戦闘訓練（前編） | 47

第7話 TS少女と戦闘訓練（後編） | 54

第8話 TS少女と個性実演 | 60

第9話 TS少女と自主訓練 | 72

第10話 TS少女と課題分析 | 79

第11話 TS少女と個性制御 | 90

第12話 TS少女と男女感覚 | 102

第13話 TS少女とUSJ襲撃 | 112

第14話 TS少女と脳無と死柄木 | 122

第15話 TS少女と割とガチの死闘 | 130

第16話 TS少女と次なる目的 | 145

第2章 TS少女と体育祭

第17話 TS少女と体育祭 | 153

第18話 TS少女とトレーニングジム | 162

第19話 TS少女とマッサージ | 170

第20話 TS少女と続・トレーニングジム | 188

第21話 TS少女と開会式 | 200

第22話 TS少女と障害物競走（前編） | 207

	第23話	TS少女と障害物競争(後編)	218
	第24話	TS少女とチーム交渉	233
	第25話	TS少女と騎馬戦(前編)	243
	第26話	TS少女と騎馬戦(後編)	255
	第27話	TS少女と昼休み	268
	第28話	TS少女とトーナメント①	277
	第29話	TS少女とトーナメント②	287
	第30話	TS少女とトーナメント③	297
	第31話	TS少女とトーナメント④	304
	第32話	TS少女とトーナメント⑤	321
	第33話	TS少女とトーナメント⑥	334
	第34話	TS少女とトーナメント⑦	346
	第35話	TS少女とトーナメント⑧	363
	第36話	TS少女とトーナメント⑨	緑谷VS爆豪(前編)
	第37話	TS少女とトーナメント⑩	緑谷VS爆豪(後編)
381	第38話	TS少女と表彰式	396
	第39話	TS少女と『栄陽院』の一族	406
	第40話	TS少女と『デウス・ロ・ウルト』	416
	第41話	TS少女と優勝祝い	428
第3章	TS少女と職場体験		
	第42話	TS少女とヒーロー名	444
	第43話	TS少女と指名リスト	457
	第44話	TS少女と体験先	467

第45話	TS少女とベストジーニスト	476
第46話	TS少女とヒーローのお仕事	487
第47話	TS少女とパトロール	500
第48話	TS少女と事務仕事	510
第49話	TS少女と保須市	519
第50話	TS少女と保須市炎上	529
第51話	TS少女とヒーロー殺し(前編)	537
第52話	TS少女とヒーロー殺し(中編)	546
第53話	TS少女とヒーロー殺し(後編)	556
第54話	TS少女と事件解決	567
第55話	TS少女とテレビ局	578
第56話	TS少女と報告会	589
第57話	TS少女と救助レース	596
第58話	TS少女と更衣室	603
第59話	TS少女とカミングアウト	611
第60話	TS少女：オリジン	621
第4章 TS少女と育成計画		
第61話	TS少女と2つの『新企画』	636
第62話	TS少女とプログラム説明	652
第63話	TS少女と緑谷の1日	663
第64話	TS少女と教師達の密談	678
第65話	TS少女と軍人幼女	688
第66話	TS少女と軍隊式教練	699
第67話	TS少女と工房の女ヒーロー	712
第68話	TS少女と修行のコンセプト	722

第92話	TS少女と作戦会議、と緑谷の成長	1017
第91話	TS少女と期末試験	1009
第5章 TS少女と期末試験		
第90話	TS少女と緑谷の決意	998
第89話	TS少女と壊理ちゃん	987
第88話	TS少女と後始末の大捕り物	971
第87話	TS少女と病室の密談	956
第86話	TS少女と騒動の顛末	938
第85話	TS少女と新たなる目覚め	920
第84話	TS少女と死穢八斉会	910
第83話	TS少女とオーバーホール	896
第82話	TS少女と混迷のクルーザー	883
第81話	TS少女と洋上の死線	867
第80話	TS少女と湾岸騒乱	859
第79話	TS少女と遭難者捜索	847
第78話	TS少女とキャンプ場の子供たち	836
第77話	TS少女と入浴事故	821
第76話	TS少女と取陰切奈	808
第75話	TS少女とワイルドワイルドプッシーキャッツ	799
第74話	TS少女とそれぞれの修行	788
第73話	TS少女と今後のカリキュラム	778
第72話	TS少女と最後の性癖	769
第71話	TS少女と原作ヒロイン	756
第70話	TS少女と修行の日々	747
第69話	TS少女とラバーエンプレス	736

第93話	TS少女と13号	12901
第94話	TS少女と試験終了……？	12791
第95話	TS少女と追試験	12691
第96話	TS少女と地下迷宮	12601
第97話	TS少女と課題達成（ひとまず）	1247
第98話	TS少女と『後半戦』	12271
第99話	TS少女とそれぞれの課題	12171
第100話	TS少女 VS 緑谷出久	12051
第101話	TS少女：ピリオド	11951
第102話	栄陽院永久：オリジン	11841
第103話	ショッピングの陰で	1175
第104話	夏休みの予定	11661
第6章 栄陽院永久と夏休み		
第105話	I・アイランド	11561
第106話	オールマイトとデイヴとナイトアイ	11451
第107話	コスチューム・アップグレード	11241
第108話	デヴィッド博士への依頼	1101
第109話	新たな協力者	1094
第110話	哀しい過去と、残酷な未来	1082
第7章 栄陽院永久と林間合宿		
第111話	林間合宿・スタート	1072
第112話	魔獣その他色々の森	1063
第113話	1日目、終了	1054
第114話	『個性』伸ばし	1043
第115話	謎の『胎動』	1031

第116話 2日目、終了

第117話 夢と『エネルギー』

第118話 合宿、4日目、折り返し

第119話 『必殺技』を求めて

第120話 5日目

第121話 バーベキューと決意表明

第122話 闇の蠢動

第123話 襲撃

第124話 『開闢行動隊』来襲

第125話 緑谷VSマスクユラー

第126話 私の、ヒーロー

第127話 死闘、あちこちで

第128話 夜の終わり

第8章 栄陽院永久と神野区決戦

第129話 広がる波紋、生まれる波紋

第130話 『オール・フォー・ユー』の献身

第131話 長い夜の始まり

第132話 あつちにもこつちにもそつちにも

第133話 戦闘許可、再び

第134話 標的変更

第135話 さよなら

第136話 『覚醒』の光

第137話 真骨頂

第138話 狂気と執念の大怪獣

第139話 GIANT KILLING

15441533152415151507149914901482146914581447

1431142114081396138513771360134913401330131813091300

e	1821	エピソード	One for All	All for One	1811
	1800	最終話	私達のヒーロー・ヒロインアカデミア		1786
	1775	第157話	結束と協調と未来予想図		1764
	1750	第156話	仮免試験・1次		1750
	1750	第155話	『仮免試験』へ追い込み		1750
	1750	第154話	全寮制へ		1750
	1750	第153話	OFA・AFO・AFY		1750
	1720	最終章	栄陽院永久のヒロインアカデミア		1720
	1709	第152話	世界よ、これがヒーローだ		1709
	1696	第151話	折れない意思と鍍金の平和		1696
	1674	第150話	VS オール・フォー・ワン		1674
	1658	第149話	名もなき英雄の拳		1658
	1647	第148話	緑谷VS死柄木		1647
	1636	第147話	VS 連合メンバー		1636
	1623	第146話	VS キュレーター		1623
	1611	第145話	VS ウォルフラム		1611
	1589	第144話	VS ハイエンス		1589
	1579	第143話	スーパーヒーロー大戦		1579
	1566	第142話	最終決戦		1566
	1555	第141話	絆が呼ぶ奇跡		1555
	1555	第140話	残酷な真実、数多		1555

第1章 TS少女と雄英高校

第1話 TS少女と入学試験

『もう大丈夫……私が来た!』

……このニュース、というかこの映像……もう何度テレビで目にしただろうか。

特に狙って探さなくても、この国に住んでいるというだけで見る機会が多い、多すぎるこのVTRは、昔の大災害の現場を映した映像だ。

倒壊したビルだか何かから、筋骨隆々のヒーローっぽい見た目のおじさんが、1000人だかの被害者を救いだした映像。それも、たった1人でだ。

そりやあんた、機械も何も使わずにたった1人で1000人救ったってなれば、マスコミも騒ぐだろう。人々はこぞってその人を褒め称え、一躍ヒーローになれるだろう。

けど、この場合の『ヒーロー』ってちよつと違うんだなあ……。

私が前に住んでいた世界では、『ヒーロー』ってのは、英雄的な行いをした人に対する賞賛であると同時に、あくまで比喻表現だ。

テレビの中に現れるような、仮面のバイク乗りとか5人1組の戦闘部隊とか、あるいは光の国出身の銀色の宇宙人といった、超自然的な存在を現すものじゃなかった。あくまでそれは、フィクションの中だけだ。

何を当たり前のことを言ってるのかって? いや、それがねえ……

どうも違うらしいんだよね、この世界ではさ。

簡潔に、2つの事実を言おう。

まず1つ目。この世界には……『ヒーロー』が存在している。

それも、テレビ画面の向こうにしか見ることのなかった……超人的な力を使って、悪の怪人と戦って世界の平和を守る戦士、という意味でだ。

そしてもう1つ。

さつきから『この世界』とか『前に住んでいた世界』とか、何を言っ

てるんだろうと思ってる人も多かつただろうが……ああ、すまない、自己紹介が遅れたね。

私の名前は、『榮陽院えいよういん 永久とわ』。15歳。

前世男、現在女の……どこにでもいる『TS転生者』だ。

……そんなどこにもいないって？ わかつてるよ。

☆☆☆

前世、それこそどこにでもいるサラリーマンだった私が、何の因果かこうして2度目の人生を、しかも性別を変えて歩むことになってから、もう15年が過ぎたわけだ。

それも……こんな、明らかに元の世界とは違う世界で。

ここは確かに日本であり、そのへんに立っている建物やら道路やらといった風景は、私の記憶にある前世のものときほど違いはない。

せいぜい、ちよつとばかり近未来的な建物やら構造物がそこかしこに見られるくらいだ。

なのでここだけ見れば、私は『なんだ、元の世界か、同じような世界に生まれ変わったんだな』くらいに思っ、TSしたのはしたなりに2度目の人生をエンジョイしただろう。前世の価値観に依存して困るようなことも、特段ないだろうし（性別が違うことによるものを除けば）。

しかし1つだけ、この世界は……私が元いた世界と大きな違いがある。

この世界には『個性』と呼ばれる……どう考えても『超能力』あるいは『特殊能力』にカテゴライズされる力が存在する。

しかも、それは限られた一部の人間がもっているとかではなく、世界総人口の8割が持っているというのだから驚きだ。

それを風刺してか、今のこの世界は『超人社会』だの『超人時代』だの呼ばれてるらしい。

『個性』の種類は十人十色、千差万別。ものを引き寄せるとか視力が人よりいいとか、地味、ないし危険度が少ないようなものもあれば、超

人的なパワーが出せるとか、炎や電撃を操れるとか、ファンタジーの中で見られないような、派手で危険度が大きいものも存在する。

さらには、『異形型』なんてカテゴライズされるものに至っては、およそ人間には見えないような見た目をしている者もいるくらいだ。

今も私がこうして普通に歩きながら周囲を見渡すだけで、2、3人はそういう見た目の人(?)を見つけることができる。

前から歩いてくる大学生くらいの兄ちゃんの頭には角が生えてるし、私の数歩手前を歩いている女子中学生(多分)は、見た目が普通の人間だが……髪の毛が植物の蔦とか茨みたいな感じだ。車道を挟んで向こう側の通りを歩いているサラリーマン風のおっさんに至っては、顔が完全にライオンである。勇猛そうな雄ライオンがびしっとネクタイを締めて、腕時計で時間を気にしながら走ってる光景は、ちよつとどころじゃなくシユールだ。

そして、そんな状況を誰もおかしいと思っていない。

この世界では、これが普通なのだ。

ふと私は立ち止まり、横を見る。

ショーウィンドウの大きなガラスに、私の『今の』姿が映っていた。率直に言って、かわいい。美少女だと、自信もって言える。

顔も整ってて可愛いし、肌はシミ一つなく色白。目元はちよつとツリ気味で気が強そうに見えなくもないけど、気にする人は少ないだろう。

スタイルもよく、出るとこ出てしまるとこしまっている。女性らしい体つきだと言っていていいし、手も足もすらりと長い。

中学生には見えないくらいに膨らんだ胸元は、すれ違う男性の2人に1人はチラ見、あるいは二度見してくるくらいの魅力はあるだろう……私も元は男だ、気持ちはわかる。自分の胸だが。

気にしないから見るくらいなら好きにしてくれ、ただし触ってくるのは許さん。

サラサラの黒髪は、肩口くらいまでのセミロング。女子たちにうらやましがられるレベル。中学に上がりたての頃、特に手入れも何もしてないって言ったら超驚かれた。

邪魔なのでばっさり、男と同じくらいの長さまで切りたかったんだが（ベリーショートっていうのかな）、キレイなものにもったいないって止められて、以来何となくこの長さに落ち着いた。もっと長くすれば？ って言ってくる友達もいたが、これ以上長くすると洗うの大変なんだ。

身長188cm（去年の春にやった身体測定時。今はもうちよつと伸びてるかも）と、女子にしてはかなり大柄なのは賛否別れるかもしれないが……総合的には美少女と言っていていいだろう。

……最低限、人間っぽい見た目でよかつたと思う。性別は違うけど。

いや、異形型個性の人たちを悪く言うわけじゃないが……ほら、どうしても個人的な価値観ってもんはあるから。まして中身が転生者だとさあ。

ネット小説とかで、スライムとかドラゴンとか、鬼とか剣とかに転生した作品はいくつも知ってるけど、実際そんな境遇になったらパニックになるし、生きていけないだろうし、私。

そんなことを思ったところで思考を切り上げ、私はまた歩き出す。余裕をもって行動してはいるが、無駄に時間を使って万が一にも『遅刻』なんてことになったら笑えない。絶対に間に合うように行動しなくては。

何せ今日は……高校受験当日だ。

前泊でホテルを取って今日の日に備えていた私は、本日これから、この世界のヒーロー教育の中心とも言っている学府である『雄英高校』を受験するのだから。

☆☆☆

『今日は俺のライブへようこそー！ エヴィバデイセイハイ!!』

……ここは受験会場、だよな？

なんか、夜のクラブとかにいなそうだなDJっぽい見た目の人がはつちやけたトークをかましてるんだが……受験生のこと『リスナー』っ

て呼んだぞ？

言動だけならともかく、髪型や服装といった見た目も考慮しても、とても教師には……いや、雄英高校はヒーローが教師をやってる学校だったな。それもあって、スーツ着用とか学校っぽい被服規定みたいなのはなかった気もする。

だからってあの格好はどうなんだと思わざるを得ないが……あの
人普段から、授業する時とかもあななんだろうか。テンション高いな
……誰もコール返してこないのに。

まあそれはいい。実際説明してくれる内容はまともだし。なるほど、市街地を模した試験場で、仮想『敵』^{サイラン}を相手にした実戦形式の試験か。

その撃破によって手に入る『ポイント』を競う。つまり、いっぱい倒せばいいわけだ。シンプルでいい。

プリントを見る限り、ロボっぽい見た目のようだが……強度はどんなもんかな。止める、あるいは破壊すればポイントになるって話だし、相応の頑丈さに調整してあるんだと思うけど……

(……ま、何とかなるだろう。フィジカルには自信あるし)

説明の最中、なんだか真面目そうなメガネの人がプリントの内容について質問したり、その流れ弾で別な受験生がディスプレイられる場面があったが……気にするほどのことでもないので、あんまり聞いてなかったし覚えてない。

ただ、その後に説明された内容は聞いていた。倒しても加点されない、O P tのお邪魔虫がいるってか。

……嫌な予感がする。『見つけても無視推奨』とか言われてるけど、そういうのって何かしら無視できない要素が含まれてること多いよね？

その後に聞かされた、この学校の校訓……『Plus U l t r a』。

『更に向こうへ』って意味らしい。ナポレオンの言葉だそうだな。うん、いい言葉だとは思う。できればもうちよつと真面目な雰囲気の中聞きたかったと思わなくもないけど。

まあ、もしかしたらあの先生も、受験生たちの緊張を和らげる目的であんな風に言ってくれてたのかもしれないし………普段からあんな感じである可能性も、否定できないけど。

でもまあ……そのへんがどうなのかは、後でわかるだろう。

この試験に受かって、雄英に入学しさえすれば。

さて、ジャージに着替えて『試験場』とやらに行くとするか。

☆☆☆

「ハイスタートー」

気の抜けた声が、何の前触れもなく試験場に響き渡った。

スタート地点に集まっていた受験生たちが、『えっ?』とでも言いたげな顔で、声が聞こえてきた方を見る。

「どうした!? 実戦にカウントダウンなんざねえんだよ! 走れ走れ、賽は投げられ——」

(あーなるほどそういう感じね)

最後まで聞き終わらないうちに、私は地面を蹴って走り出す。いい趣味してやがる、と心の中で悪態をつきながら。

ガチガチに緊張しているであろう受験生たちを相手に、明らかに狙ったもの言いだ。

しかし、言っていることは筋が通っているのも確かだ。もし本気でヒーローになるというのであれば、いつでもどんな事件が発生し、あるいはどんな敵が暴れ出すかなどわかったものではないのだから。

まあ、それにしたってどうかとは思うが、どっちにせよ今はそんなことを考えている暇はない。悪態も反省も後でいい。とにかく狩りを始めなくては。

幸いと言っているのか、仮想敵はすぐに見つかった。走り始めてすぐに、曲がり角を曲がって何体もこっちに向かって走ってくる。

他の受験生たちより一拍早く走り出せたのに加えて、自慢じゃないがこの長くて強靱な足のおかげで、一気に距離は詰まっていく。あわててスタートしたその他大勢を置き去りにして。

『標的発見……ブツ殺スー!』

……口の悪いロボットだな。

開発者は何を考えてコレ……敵を意識してだろうか? サイラン 安直だな。

まあいいかと小声でつぶやきつつ、私はそいつ目掛けて突っ込みながら拳を振りかぶる。

向こうも負けじと突っ込んでくるが……遅い。遅すぎる。

攻撃のたれに向こうが動くより先に、懐に飛び込んだ私は、その頭部分めがけて拳を振りぬいた。

——バキヤアツ!!

叩きつけた拳は、仮想敵の顔面を粉碎し、首を砕いて潰し、その向こうにあった胴体パーツをも粉々に粉碎して……完全に破壊した。当然のごとく、全ての機能が停止し、動かなくなる。

これで……1Ptか。

「うえっ!? い、一撃で粉々に……」

「マジかよ、すげえ! アレどうみても金属だぞ……あの女子何者だ!？」

そんな声を後ろから聞きながらも、私は足を止めない。

スクラップになってパーツを四散させる敵ロボと、すれ違うようにして走り抜ける。足を止めずに次の標的を探す。

派手に音を立てたのがよかつたんだろうか。今度は3体まとめて寄ってきた。しかも、全部2Ptか3Pt。

(ポイント高いだけあって、さっきのよりは頑丈そうだな。まあ、それでも……私には関係ない)

「エネルギーチャージ……腕力強化200%」

意識して私の『個性』を発動させ、最初に接敵した2Ptを思いきり殴る。

さっきよりも大型だったにも関わらず、仮想敵ロボはまたしても粉々になって爆散した。

そのまま、後2体いるうちの1体の懐に飛び込んで、その胴体部分を下からつかんで持ちあげる。

そしてそのまま、もう1体の方に、渾身の力で叩きつけた。

「りやああああ!!」

——ごっしやあツ!! ×2

自重＋私が投げつけた衝撃をモロにくらった2体は、原型なんて留められず、バラバラに破壊されている。どこからどこまでがどっちだったのかわからないくらいになっている。スクラップされたガラクタの集合体、って感じた。

ふと目の端に、さっきのパンチの時以上に驚いている受験生が何人か映ったが、別に気にするようなことでもないので、放つといてさつさと次の標的を探しに行く。

ほら、あんたらもさつさと動かんぞ……敵がいなくなるぞ。

「しかし、3Ptでも結構脆かったな……こりや『個性』いらないかも。素の腕力で壊せるな……せつかくしこたま『チャージ』してきたのに」

それからしばらく、見敵必殺、サーチアンドデストロイの精神で狩りまくっていた時のことだった。

地響きがするような衝撃と、何かが崩れ落ちるような轟音が響き渡り……何かと思つて周囲を見たら、正面にある建物の向こう側に、なんかドでかい動いてる影が見えた。

まさかと思つて、狭い路地を通り抜けて——途中にいた1Ptをすれ違いざまに蹴り碎いて——向こう側に出ると、やはりそこに居たのは、プリントにもあったOPt敵……『お邪魔虫』だった。

いや……デカすぎだろ。ビルくらい大きいんだけど。

試験会場内を『所狭しと大暴れしてる』とは言つてたけど、マジで狭そうだなアレじゃ……動いただけで周辺の建造物ぶつ壊しまくつてるもん。

当然ながら、それを前にした受験生たちは一目散に逃げていく。走つてそこから離れていく。

中にはもしかしたら、さっきのDJ先生（私の記憶が正しければあの人名乗ってないのでどう呼んでいいかわからぬ）の説明を聞いて『倒してみようかな』とか思つた人もいたかもしれん。腕試しとか、アピール目的で。

けど実際に見たらそりゃ……こんなヤバいもん相手にしたくないわな、倒せるビジョンなんて見えないだろうよ。逃げて当然だ。

安全は保障されている試験だとも言った気がするが、こんな踏み潰されたり、破壊された瓦礫が落ちて来て当たった時点で即死してもおかしくないと思うんだが……

……それはさておき、だ。

「……………いけるか？」

多分だが、私はここまでで、ポイント的には十分稼げたと思う。これ以上狩る必要はないんじゃないか、と思えるくらいに。

そもそも、仮想敵もほとんど狩りつくされて残ってないしな。

だとしたら、腕試しと………これを見ている教員とか試験官へのアピールも含めて、アレを相手取ってみるのも一興か？ 破壊できるなら破壊してもいい、って言われてるしな。

しかし、アレを壊すなら………流石に『個性』をフルで使わないことには………ん!?

その時、私の目に………ただ1人、逃げようと動く人の流れに逆らつて………OPt目掛けて逆走していく1人の受験生が映った。

(あれ? アイツ確か、説明の時にメガネの堅そうな奴にディスプレイられてた………)

見るからに気の弱そうな、もじやもじや髪の毛の彼は………腕試しやアピールのためにOPtに挑もうとしている………ようには見えなかった。

顔が、表情が………必死だ。怖いけど、怯えてるけど、それを無視して、押し殺して飛び出しているような………そんな俗な目的とは全く別な理由で、必死で走っている感じに見えた。

と同時に気づく。OPtの進行方向上に………怪我でもしたのか、倒れて動けないらしい女の子がいる。そうか、あの少年は彼女を助けようとして………自分も怖いだろうに、それを押し殺して命がけで走ってるのか。

しかし、正直危ないなそれでも………最悪2人共踏み潰されかねない。

……仕方ない、見捨てるのも寝覚めが悪いし、助けるか！

しかし私の目の前で……女の子に駆け寄ると思っていたその少年は、地面を蹴って……凄まじい跳躍力で飛び上がったかと思うと、

『SMASH!!』

繰り出した拳の一撃で、ビルほどもあろう巨大なOPt敵を、真正面から粉碎した。

(……………マジかよ)

余りに衝撃的過ぎて、その光景に唾然として固まってしまった私。気が付けば、全てが終わっていた。

その少年は、OPtを完膚なきまでに粉碎したものの、その反動でか手足がバッキバキに折れてしまい、そのまま転落しそうになっていたところを……たった今彼が助けた女の子に助けられていた。瓦礫と一緒に浮かび上がって助けたように見えたが……触れたものを浮かせる個性か何かか？

その2人が地面に着地して間もなく『終……了……!!』という声が試験場内に響き渡った。

それを聞いた受験生たちのほとんどは、その場から立ち去って帰路につくが……私はなんとなく、倒れたままになっている少年から目を放すことができずにいた。

怪我をしているらしい人たちが運ばれたり、その場で治療されている中で……彼は意識がないのか、身動き一つしない。

よく見れば……腕や足があらぬ方向に曲がってしまっている……折れてるといふか、砕けてるといふか。あの超パワーの反動か？

……こんなになって大怪我して……ひどく危なっかしい子だ。

けど……

(きつと、彼みたいなのが……『いいヒーロー』になるんだろうなあ) 他人のために全力で、命をかけて動くことができる彼を見て……そう思えた。あの様子じゃ、打算なんてもんは頭になかっただろう、そ

れこそ、反射的にと言っていていくらいの動きだった。

彼にとって、人助けは……反射あるいは本能レベルで体を動かすほどの、強固な信念なのだろう。

そして、それを理解した瞬間……

——とくん

(……………え、何……コレ?)

私の胸の奥で、何か……よくわからない感情のようなものが、鼓動を刻み始めた気がした。

その正体は何なのか……私はまだ、何も知らなかった。何もわからず、理解できなかつた。

私はその時の鼓動の正体に気づくのは、もつとずっと後になってからだ。

この私……『栄陽院永久』と、彼……『緑谷出久』の、

そして、私と彼、それぞれの『個性』の出会い。

その意味、そして……その行き着く先が何なのか。

しつこいようだが、この時の私は、まだ何もわからなかつた。

第2話 TS少女と合否通知

薄暗い部屋の中で、いくつもあるモニターに『実技試験』の映像が流れていた。

机についてそれらをじつと見る、様々なコスチュームに身を包んだ……ヒーロー達。

彼ら、彼女らは単なるヒーローではない。ここ『雄英高校』の教師陣……その中でも、今回の入学試験・一般入試の試験官として選ばれた者達だった。

1つの町を模して作った広大な試験会場で実施されている模擬戦等の様子を、何台、何十台と設置されているカメラで逐一チェックしている。その目的は、不慮の事故による死亡者・重傷者を出さないためと……もう1つ。

一般には公開されていない、『救出ポイント』^{レスキュー}の審査を行うためだ。仮想敵ロボットの撃破ではなく、他の受験者の危機を助ける行為によって審査制でつけられるポイント。ヒーローに本質的に必要だと言われている、自己を顧みず他者を助ける精神性と信念の強さが得点になる。

無論、この判断基準を見抜いて点数のためにそれを行う者も出てくるだろうが、それはそれで問題ない。その際の能力の高さも含めて評価対象なのだから。

それらの採点も終わり、敵ポイントと合わせた実技試験の総合成績が最後に表示される。

その中でもひととき大きなモニターに、2人の受験生の姿が大写しになっている。

1人は凶暴そうな笑顔を浮かべ、動きやすそうな黒のタンクトップで、両掌を爆発させながら、向かってくる敵を次々と破壊していく金髪の少年。

もう1人は、おどおどとした態度で動きもそこまでよくはないものの、終盤見せた、他者を助けるために巨大なO P t 敵に立ち向かう度胸と自己犠牲の精神、そしてその際に発揮した驚異的な破壊力が印象

的な、緑髪の少年。

『救出ポイント0で1位とはなあ……後半、他が鈍っていく中、派手な個性で敵を引き寄せて迎撃し続けた。タフネスの賜物だ』

『対照的に……敵Pがゼロで救出60Pt。アレに立ち向かったのは過去にも居たけど、ぶっ飛ばしちやったのは久しく見てないね……』
『しかし妙な奴だな……自身の攻撃の反動で莫大な負傷とは……まるで発現したての幼児だ』

爆豪勝己と、緑谷出久。2人の少年は、対照的な評価点を持つ者達として比較されていた。

暫く話が続いた後、画面が切り替わり、その片方には、黒髪に長身の少女……栄陽院永久が映し出された。

丁度、素手の拳で仮想敵を2体まとめて薙ぎ払うように破壊したシーンが映されている。

『こちらもそうですね。敵Pのみで76点……点数は先程の彼に1歩及ばずですが、彼女は個性らしい個性を使用した様子もなく、単純な腕力のみで全て粉碎しています。見た目に現れない増強型の個性、ということも考えられますが……』

『それにしても強いな、脆く作ってあるとはいえ、金属製の仮想敵をほぼ全て一撃でとは……』

『ただ、動き方は完全に我流の喧嘩殺法だな。武術って感じはしねえ……ちと荒っぽいな』

『だがその分、きちんと自分の能力や欠点はわかっているようだぞ？』

救出がゼロなのは、派手な戦い方に他人が巻き込まれるのを嫌って、誰もいない場所にどんどん移動したからだろう』

『周りが見えていないわけではないということか。まあ、だからと言つてさすがにポイントをつけるわけにはいかんが……しかしこの娘、苗字を見て思ったんだが、あの『栄陽院家』か？』

『はい。現当主の娘……三女です。提出書類を見るに、少々複雑な家庭環境のようですが……』

『そこは我々が深入りするところでもないだろう。本人の能力と人格に問題ないのなら、我々はそれを受け入れて育てていくだけだ。さ

て、では次に……』

手元の書類に少し気になる点があったのか、やや長めにその永久について議論が交わされた場面があったが……それもすぐに終わり、画面は次の審査対象差に切り替わった。

☆☆☆

朝、ベッドの上で目が覚めた私は……もつと寝ていたいという誘惑を断ち切り、ふかふかの柔らかい布団を押しつけて起き上がる。

その下からは……何一つ衣類を身に着けていない裸体が現れる。布団をどかしたことで、まだ窓を開けていない薄暗い室内で、それがあらわになった。

……寝る時に何も着ないで全裸で寝るので、割と気持ちいいんだよな……。肌が直接布団に触れて、体全部が包まれてる感じが意外とこう……

コレ、親譲りの感性らしい。母親もそうだから。

最初は裸族とかどうかと思っただけで、1回興味本位でやってからはちよつとその……病みつきになって……なんか、エロい習性が身についてしまった。

立ち上がって大きく伸びをすると、よく育った胸部装甲がふるんと揺れる。

上から見ると、その大きさを足元が見えづらいレベルのそれは……自分のものながら、いい形してると思う。さすがに自分の体に欲情はしないが、エロい体に育ったもんだ。

全裸のまま洗面台に向かい、顔を洗って歯を磨き……そのまま部屋に戻って箆笥から下着を出す。特に何も考えず、目についたブラジャーとパンツを身に着け、他の衣服も手早く……

「……また大きくなったか？ 胸がきつい……」

『あの日』と同様、女になって初めてわかる辛さである。

男だった頃は、人並みのスケベ心もあったし……女性の大きなおっぱいには、夢と希望がまつているんだとか何とか、アホなことを考

えていた時期もあった。

しかし、いざ自分がその立場になると……サイズ更新による余計な出費と肩こりを誘発するだけの、どっちかと言えば邪魔者という認識が強くなってしまった。

それだけならまだしも、揺れるから動くのに邪魔になるし、外出すると視線を集めるし、電車に乗れば痴漢に遭うし……あと、他の女子からの憎しみと羨望のこもった視線が割と怖い。

中学2年の時、ある希少価値（婉曲表現）な女子から、更衣室で着替え中に『ちよつとわけろや！』とすごい形相でわしづかみにされた時は……ただただ怖かった。もがれるかと思った。

似たようなことが在学中に8回あった。女子怖い、マジ怖い。

女だから女子更衣室も女湯も入り放題だー、なんて考えは一瞬で吹き飛んだ。

女の体に精神も引っ張られてるのか、『同性』の裸なんか見てもそんなに興奮しなかったし……むしろ、過激なスキンシップと、自称『持たざる者』の皆さんの嫉妬の視線が怖くて……

そもそも最近の私は、精神はすっかり女のそれで……ただ単に、男の価値観と記憶が混ざってるだけ、みたいな感じになりつつある気すらするしな……ってそんなことより服だよ。

「まあ、お金に困ってはないから、服買うの自体は別にいいんだけど……」

ひとまず他の、比較的ゆったりした服を選んで着ると、手早く朝食の準備にかかる。

私は中学生ながら、この家で一人暮らしをしているので、炊事洗濯掃除その他、家事は自分でやっているのだ。

これには私の家庭環境が関係している。ちよつと特殊なのだ。

私の母は、私を生んですぐに父と離婚し、その後しばらくは女手一つで私を育ててくれた。そのため私は、実の父親には会ったことがない。

その数年後、母は国内でも有数の資産家一族である『栄陽院家』の跡取り息子と再婚し、私共々苗字が『栄陽院』になった。

しがたい一般市民から資産家のお嬢様にランクアップした私だったが、周囲からの目は冷ややかだった。

再婚した相手……つまりは私の義父は、こちらも奥さんと別れている。ただしこっちは、離婚ではなく死別。死に別れて独身に戻ってしまつたわけだ。しかも、子供もいた。

そこを、当時新人秘書として働いていた（どんな経緯でそんなところで働いてたんだろうか）私の母が優しくしてあげたらベタ惚れされて、そのあまりの熱意に負けてゴールインしたらしいが……後妻とその連れ子なんて、名家のお堅い価値観からすればそりゃ……ねえ？

それでも文句を言われないのは、ひとえに母の教養の高さと気立ての良さ、そして妻として秘書として、公私にわたり夫をサポートする能力の高さゆえだ。

そして何より、再婚した翌年、母は男子を出産している。

すなわち、私の弟だ……腹違いならぬ、種違いの。

当時、夫の連れ子も含めて、子供は全員女性だった。古臭い価値観を残している『栄陽院』の家の者達は、後妻の子という立ち位置には眉を顰めつつも、跡取りとなれる血筋……男子の誕生を喜んだ。そしてそれを成し遂げたうちの母は、『栄陽院』の家に見事居場所を作り上げた。

しかし、それでも私への冷遇は、完全にはなくなることはなかった。

いくら母の容姿がよからうが、いくら能力があるうが、いくら元プロヒーローという経歴があるうが……そのへんの価値観はどうしようもないってことか。血の繋がっていない子供は肩身が狭い。

父は私を守るため、そして本家の連中の顔も立てる妥協点として、私にこの家、というか部屋を与えて一人暮らしをさせているのだ……要するに、穏やかに家を追い出されたわけである。

もつとも、それ以外に何か嫌がらせを受けているわけでもない。生活費も毎月、与えられている口座にきちんと振り込まれる。まだ自立もしていない、女子中学生という身分には明らかに釣り合っていない額が。おかげで貯金額は増える一方だ……ついこの間、9桁の大金に突入した。

この部屋の家賃はもちろん、光熱水費等全ての経費は父が払ってくれるし、セキユリテイも万全だ。ああ、言い忘れたが今私が住んでいるここは、セレブ御用達の新築の超高級タワマンの最上層フロアの一室だ。このくらいの物件じゃないと、安心して一人暮らしなんかさせられないって。

ここまでしてもらってるんだ、文句なんてあろうはずもない。

何より……父も母も、私のことをきちんと考えてくれてるし、愛してくれてる。

父の連れ子である、私の2人の義姉も同様だ。最初は流石にぎくしゃくしてたが、今ではすっかり打ち解けているし、ここに遊びに来ることもある。

……説明している間に朝食ができた。

以下、本日の朝食。今日のは……さほど手間もかからない、簡単なものにした。

白米のご飯。大きなどんぶりに大盛り……3合くらい。

牛乳を1リットルパックで2本。

ハムエッグ。卵10個とハム1本丸々使用。味付けはシンプルに塩コショウ。

付け合わせにウインナーソーセージを20本ほど。お好みで粒マスタートドを添えて。

コーンポタージュスープ。小鍋1杯分作った。インスタントの手抜き。

生野菜と海藻のミックスサラダ。レタス、トマト、わかめ、玉ねぎ、海苔などをたっぷりボウル1杯分。1日の目安摂取量がこれ一回で余裕で取れる量。マヨネーズたっぷりかけて。

(他全部洋食だから白ごはんだけ浮いてるな。食パンがあればよかったんだけど……昨日の夜、夜食で食べちゃったのすっかり忘れてた……まあいいか、白米は何にでも合う万能主食だし)

リビングの机に持っていく、それを並べて『いただきます』と手を合わせる。

そのまま、テレビをつけて天気予報を見ながら食事をする。今日も

いい天気だ……ロードワーク、ちよつと足伸ばして遠くまで行くか。
天気予報を見始めてから、『今日の占い』を見て……次の番組が始まるくらいに食べ終わった。ご馳走様でした。
ちなみに占いは11位だった。ガツデム。

皿洗いを含めた後片づけをきちんと済ませる。後でやる後でやるって言っていると、いつまでも手に付けられないで終わってしまうことが多いということを私は経験則で知っている。

特に私は、たいていの場合、食事に比例して洗う量も……というか、洗う食器がかなり結構大きいので、時間があるうちにさつと済ませてしまわないと流し台が使えなくなるのだ。

(まあ、別に普通の食事も問題ないっちゃないんだけど、『個性』の関係で少しでも多く『蓄えて』おいた方が色々便利なんだよな)

パーティ用の大皿——さっきまでハムエッグが乗っていた——を洗いながら、私はふと、自分のくびれたウエストに目をやる。

リビングのテーブルの半分以上を占領する量の食事を流し込んだというのに、そこはちよつとお腹が膨れて見えるくらいにしかかたっていない。それも、1時間とかけずに引っ込んで元通りになるだろう。ホント便利だ……私の『個性』。

しかし、高校生になつたらもつと生活が忙しくなるんだろう……食器洗い機買おうかな、多分、特注の大きい奴じゃなきゃダメだろうけど。

この後はジャージに着替えてロードワークに行くつもりだったが、その前に郵便ポストを確認しようとマンションの1階に降りた。

タワマンの不便な点の1つは、この郵便物確認が面倒なことだよな……部屋まで届けてくれればいいのに……あ、それだとセキュリティの意味がないのか。

ポストの中を見ると、富裕層向けのダイレクトメールにまじって……見慣れない封筒が1つ入っていた。記載されている文字は……『雄英高校』。

小さく息をのんだ私は、小さな封筒をジャージのポケットに突っ込

んで、部屋に戻った。

リビングに戻り……さすがにちよつと緊張しながら、恐らくは合否通知であろうそれを開く。

しかし、中から出て来たのは……小さい円形の機械だった。

戸惑いながらそれをテーブルの上に置くと、何がスイッチになっていたのかはわからないが、突然その機械の中心から光が放たれ……空中に映像が……

『私が投影された！』

「……ほあ?」

そこに映し出されていたのは……この国では、知らない人はいないとと言えるほどの有名人。

玉石混合、数多いヒーローの頂点に君臨する、し続ける巨星……No. 1ヒーロー『オールマイト』その人だった。

テレビでよく見る、アメコミを思わせるパツパツのヒーロースーツ……ではなく、なぜか普通の社会人っぽいスーツに身を包んではいたが。胸筋でスーツ破けそうになってんだけど、仮装?

つか……え、何でコレ……雄英からの手紙(紙じゃないけど)にオールマイトが?

頭に3つ4つ『?』を浮かべたままの私の前で、映像のオールマイトはいくつかのことを語った。

まず、私の合否判定について。これは文句なしの合格。入試の成績は、全体の次席……つまりは第2位だったとのことだ。女子では1位らしい……つまり主席は、誰かは分かんないけど男子か。

……まあ、私も中身は男だが。

そしてどうやら、あの試験では敵を撃破して獲得できる『敵^{ヴァイラン}ポイント』の他に、他の受験生を助けたことで手に入る『救出^{レスキュー}ポイント』なるものが存在していたらしい……知らなかった。そんなのがあったのか。

私は、該当する行為を行っていなかったため、そのポイントはなし。撃破に入ったポイントだけでこの順位はすごいけど、出来れば今度か

らは周りもよく見ようね、と言われた。すみません。

さらにもう1つのニュース。なんとオールマイトが雄英に教師として務めることになったとか……こりやビッグニュースだ。マスクミが放っておかないだろうな。

さらにさらにもう1つ。なんと私に、入学式で新入生代表の挨拶をしてほしいと。マジでか。

そういうのって、普通主席の人がやるもんじゃないのか？

「ああ、入試主席は確かに別にいるが、筆記試験では君がトップだったのさ。それに、主席の彼はちよつとこういうことに不向きと判断されゲフンゲフン。と、ともあれよろしく頼むよ」

録画だよなコレ？

ぴつたりのタイミングで返事というか、疑問への答えを返されたんだが……つか、主席の人どんな人なんだ？ 不向きって……無口とか？ あるいは、集団の前で話すのに向かない『個性』？

「来いよ、栄陽院少女……ここが君の、ヒーローアカデミアだ！」

その一言と共に映像の再生は終わり、機械は沈黙した。

……何はともあれ、合格だ……よかった。

大丈夫だとは思ってたけど、きちんとこうして結果が出ると嬉しいもんだな。

(しかし……雄英はコレ、人数分用意してるのか？ 合格者だけだとしても、ヒーロー科だと……確か一般入試で36人なんだよな？ 全員分オールマイトが録った？ ……お疲れさまだな)

ファンサービスも欠かさないNo.1ヒーローの勤労精神と、決して高くはなさそうだが安くもないであろう機械を、この数分のためだけに用意する雄英の太っ腹に感心しつつ、私は充電中だったスマホを手を取った。

とりあえず、実家の母さん達に連絡。

それから……時間見つけて、新入生代表のあいさつ考えないとな。やることは多い。

そこまで考えて……ふと思った。

(『救出ポイント』なんてものがあるなら……あの時のあの少年も、合

格してても全然おかしくなさそうだよな?)

入試当日に見た、あの気弱で、しかしあの瞬間誰よりもヒーローだった、もじやもじやの緑髪の少年のことを、私はなんとなく思いだしていた。

第3話 TS少女と登校初日

雄英高校、入学初日。

私は真新しい制服にそでを通し、時間に余裕をもって電車に乗り……痴漢してきた不届き者の手首の関節を外して、次の駅で駅員に引き渡して、再度電車で高校を目指す。

事情聴かれて時間取られたせいで、電車2本ずらすことになった……余裕持つて行動しといてよかった。

私が痴漢されるのはこれが初めてではない。むしろ、電車に乗ると割としょっちゅうだ。

最初のうちは、ただ偶然当たってるだけかもしれないと思って放つといた。

実際、慌てて引つ込められたり、しばらくすると感触がなくなったりしたこともあったので、そういう人もいたんだと思う。痴漢冤罪で泣く人を生み出さなくてよかった。

けど人によつては、何も言わず抵抗もしないのいいことにエスカレートしてくる場合も多かった。さりげなくなってもんじやなしにわしづかみにしてきたり、服の下に手を入れようとしてきたり、腰のあたりにある硬い感触を押し付けてきたり……最後のは多分、ベルトのバックルとかじゃなく……私も前世で持っていたものだろう。使う機会はなかったが（自虐）。

それでも、騒ぐとめんどくさいのと、不快感はあれど中身は男、そこまで怖くもなかったんで、急いでる時とかは特に、無視することも多かったんだが……流石に下着の中に手を入れられそうになった時は反撃した。

あと、同乗してた勇敢な人や、たまたまそこにいたパトロール中のヒーローが助けてくれることとかもあった。

『もう大丈夫よ？ 平気？』なんて気遣ってくれたりして、大変ありがたかったんだが……その結果、事情聴取やら何やらでめっちゃ時間取られた。しかも、警察関係とヒーローの仕事関係で2回同じ話をさ

せられることもあった。

その際、私がかめつ面をしていたのを、つらいことを思いださせて申し訳ない、つて言つてたんだが……すみません、大して気にしてないです。時間かかるのが嫌だっただけです。

以来私は、そういう事態になると余計に面倒だとわかったので、確実に痴漢行為だとわかった際は自分で検挙することになっている……とまあ、そんな話はもうおいといて。

余裕をもって行動したおかげで、遅れることなく目的地……『雄英高校』に到着。

1年A組の教室は……ここか。

ドアでけー……4mくらいあるんじゃないか？ 異形型個性とか、そういう人達に対して配慮してるのかもな。一種のバリアフリーか。

デカくはあるが、開けるのに力はいらなかった。きちんと普通の体格の者にも優しい作りになっているようだ……地味に設計者の腕に感心しつつ、中に入る。

中に入ると……ドアの大きさがそこまで必要そうな人はおらず、しかしちらほらと異形型らしい人たちがいた。

クラスみたいな頭の男子に、角ばった見た目（髪型が角刈りとかじゃなくて顔自体が角ばってる）の男子、腕がいっぱいある大柄な男子に、服だけが浮いているかのように見える透明な女子。あの異様にちっちゃい男子は……いや、あれはただちっちゃいだけか？

残念ながら知り合いは1人もいないようなので、座席表を確認してさっさと席に向かう。

「……ツ……おお……！」

前側の扉から入ったので、教室を横切る際、何人かの視線が向けられるのを感じたが——そしてそのうちの何人かは胸に目が向いていたようだが——いつものことなので気にしなかった。

なお、多分変な声を上げてたのは、位置からしてあのちっちゃい男子だ。視線は私の胸に固定、隠す気もなくガン見状態。私は気にしないが……他の女子にはやるなよ、嫌われるぞ。

で、私の席はここか。廊下側、一番後ろの前の席。

前はまだ空席。後ろには……男子が座っていた。尻尾が生えている異形型個性のようだ……しかし、何の尻尾なのかはわからん。太くて毛深く……こんな形状の尻尾の動物いたのだろうか。

椅子を引いて座席に座り、荷物を置いてから……椅子に横に座るようにして、後ろの彼を振り返り、軽い感じで『よつ』とあいさつした。「えつと、そこ、あんたの席でよかった？」

「えつ？ あ、うん、そうだけど……」

「そうか。私、この席だから。あ、名前は栄陽院永久。よろしく」

「ああ、うん。俺は尾白猿夫。よろしく」

いきなり話しかけられてびっくりしてた風だが、すぐにそう返してくれた。そうか、『尾白』か……よし、覚えた。

「さつそくだけどさ……私、ここ座って大丈夫かな？」

「？ どういうこと？」

「この通り、女にしては身長あるもんでさ……中学の時とか、前に座ると後ろの奴が見えないってんで、最後尾に移ることとか多かつたんだよ。黒板見る邪魔になつてないかっていう話」

「ああ、そういうことか。大丈夫だよ全然。端の方の席だから斜めで見えるし」

「そっか、ならよかった。でも、見えづらかったら遠慮なく言ってくれな、これからよろしく」

「ああ、よろしく」

そのまま握手。その瞬間に思ったのは……尾白、武術とかやってるのかな、つてことだった。手の平にも甲にも、硬くなってタコみたいな感じになつてる個所がいくつかあったから。

タコの位置からして、空手とかの徒手格闘に、柔道みたいな手のひらや指を使うタイプのそれも鍛えてるな。それらほどじゃないけど……ひよつとして剣道とか武器術もやってる？ この中指の付け根のは多分……

それもこの感じは……相当やりこんでるな。手も大きいし、肉弾戦タイプかな？

「あ……あの……栄陽院、さん？」

「ん？ ああ、すまん、ちよつと気になって」

ふと見ると、尾白がちよつと赤くなって戸惑ってた。

ああ、手、握手したままいつまでも離すの忘れてた。そのまま表面とか触ったりしてたし。

「ごめんごめん、ちよつと気になっちゃってさ、つい」

「え!? あ、うん、いや、い、いいんだけど……気になった……?」

話した後、小声で『柔らかかった……』って呟いてた尾白だが、私の言葉にふと気になったところがあつた様子である。

せつかくだから、『武術とかやってんの?』って聞こうとしたら、前の方が騒がしくなった。

見ると、机に脚を上げてどかつと座ってる不良っぽい男子と、入試の時にも見たお節介なメガネが言い争ってた。

メガネの名前が……飯田天哉、か。『い』なら、私の前あたりの席かな?

その直後、あの緑色の癖つ毛の少年が入ってきた。やっぱり受かってたんだな。

さらにその後、あの時助けられてた女の子も加わって、和気あいあいとしたトークが始まるかと思われた……その時、

「お友達(トモ)っここがしたいならよそに行け」

そんな言葉と共に……扉の向こうに、寝袋に入つて10秒メシのゼリーを『ヂュツ!』と飲み干す不審者が現れた。

しかもびつくり、不審者は担任の先生だった。

そして言った。

「早速だが、体操服(テニス服)着てグラウンド出ろ」

☆☆☆

「個性把握テストお!!」

いきなり着替えさせられてグラウンドに連れ出されて、担任だという相澤消太先生に告げられたのがそんな内容だった。一日目からそんなことさせんのか? 今日、入学初日なんですけど……

「入学式は!? ガイダンスは!?!」

同じことを思ったようで、前の席の麗日ちゃんがまくしたてるように聞くが、返ってくる言葉は無情なものだった。

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事に出てる時間ないよ」

いや、だからってバツクレるのはまずいだろ。

もつともらしいこと言ってるように聞こえるけど、必要ないんだつたら企画自体してないだろうし……ていうか、入学式出ないの? だとしたら……

「雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは、先生側もまた然り」

「……あの、すいません相澤先生。私たしか、合否通知のメッセージで、新入生代表のあいさつしろって言われてたと思うんですけど、それいいんですか?」

「代表……ああ、お前か、入試次席の栄陽院。それは入学式の進行の先生に頼んで省略してもらおうことにしたから問題ない。安心しろ」

私の3時間25分の努力が水泡に帰した瞬間だった。

何回も書き直して暗記するほど読み込んだのに……ガッテム。

「お前らも中学の頃からやってるだろ? 個性使用禁止の体力テスト

……爆豪、お前入試主席だったよな。ちよつと来い……ソフトボール投げ、自己ベスト何mだった?」

「……67m」

「じゃあ『個性』使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい」

そう言われて、ソフトボールを投げ渡されたのは、さつき教室で飯田とののしり合っていた不良っぽい奴だった。あいつかよ主席……私アイツに負けたのか。

見た目に寄らず頭はいいんだろうか、なんて思っていると、その少年……爆豪は大きくボールを振りかぶり……

「死ねェ!!」

ソフトボール投げに似つかわしくない掛け声と共に投げ……ると同時に、手の平で爆発を起こした。そしてそのまま、空のかなたにボールは飛んでいった。

少しして、はるか遠くにボールが落下したのがかろうじて見える。

同時に、相澤先生の手元のスマホ……じゃないな、小型のタブレット端末みたいなのに、705.2mという記録が浮かび上がった。おい、マジかよ。

掛け声と本人の素行はともかく……なるほど、爆発か。強力な『個性』だな。

そんな中、誰かが言った『面白そう』という言葉に、相澤先生が反応した。

「面白そう、か」

その途端、空気が変わったような感覚が、私……だけでなく、この場にいる全員を襲う。

「ヒーローになるための3年間、そんな腹積もりで過ごす気であるのかい？ よし……トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し……『除籍処分』としよう」

「はああああああ!?!」

響き渡る絶叫。しかし、相澤先生は『冗談だ』とか言って撤回する様子はない。

……えらいことになったぞ、マジかコレ。

「生徒の如何は俺達先生の自由……ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」

「さ、最下位除籍って……入学初日ですよ!?! いや、初日じゃなくても理不尽すぎる!」

「自然災害、大事故、身勝手な敵……いつどこから来るかわからない災厄。それらの理不尽を覆していくのがヒーローだ。放課後マツクで談笑したかったならおあいにく、これから3年間、雄英は全力で君達に試練を与え続ける……『Plus Ultra』さ、全力で乗り越えてこい」

その校訓の使い方、正しいんですかね……？

そのやり方だと、例えば本人に非がなくても、最下位ってだけで除籍されることになるんだが……一応私達、体力にしる学力にしる、最低限のラインを満たしてるから入学させてもらえたんじゃないのかよ。いきなりそんなふるい落とすような真似……大丈夫かこの先生？

……言っても聞かなそうだから、言わんけど。
とりあえず、最下位にはならないように全力を尽くしつつ……『君
たちが本気になるように嘘をついたのだよ』的などんでん返しがある
ことを祈ろう。

第4話 TS少女と体力テスト

○第1種目 50m走

『エンジン』とかいう足が速い個性を持つ飯田の独壇場かと思いきや、その他にもかなり早い人は多くいた。蛙っぽい見た目の女の子や、地面を凍らせてスケートみたいに滑走した男子、あの爆豪って奴は、爆風で加速してたし。

私は、普通に走った。このくらいの距離なら……瞬発力の問題だ。『個性』使っても使わなくても大して変わらないと思うし……後に温存したい。

それに……全力で走るとちよつと困る問題が他にも1つあるからな。

一緒に走った尾白とそんなに変わらないタイムでゴール。私の方が少し早かったけど。

しかし、飯田や爆豪と比べればそんなでもないタイムだと思うんだが……何でか皆、私の方を見てざわついている。何か、気になる点でもあつたんだかな？

「お、おい見てたか瀬呂、今の……」

「あ、ああ見てたぜ上鳴……すげえ揺れ方だった……！ あのサイズであんな豪快に走ったらまあ、そりゃあ、そうなるとは思ってたが……」

「よ、予想以上だ……あふう……この学校入ってよかった」

「おい、そのへんにしとけ、先生こっち見てんぞ。女子も何人がゴミを見る目になってる」

「そんなこと言っただってよお……しょうがねえじゃねえかよ、あんなもん見せられたら……」

「峰田、前かがみになるなよキモいから……あ、尾白お疲れ。残念だったなお前、あのお宝映像見れなくてよ」

「……いや、見えてた。後ろからでも……横からはみ出して……」

「……………マジか」

○第2種目 握力

腕が6本ある覆面男子……障子とやらが540kgという大記録を出していた（3本腕全部で握って）。コレは純然たるパワー系種目だからな、私も……力を入れるならここか。

「……エネルギーチャージ、握力強化上限……500%」

『力』を手に集中させていく。ためておいた力を、ここで燃やす……一気に吐き出すイメージ……！

確かに私の手が熱くなり、力がみなぎってきたのを確認しつつ、握力計を握る。

「……栄陽院、420kg」

障子程とは言わないまでも圧倒的なその記録に、ほとんど全員戦慄していた。

『マジかよ』『さつきはそんなに普通だったのに……どこにそんな力が』『いや、普通ではなかったけどよ』『た、確かにそれはそうか……』『男子サイテー』……何かちよいちよい関係なさそうなセリフが聞こえてくるな。

「ほい、尾白、次だろ？」

「あ、ああうん、ありがとう……すごいな、420kgって……栄陽院って、増強型の個性なのか？」

「そんな感じだよ。時間ないから詳しくは説明できないけどな、ほれ」ちなみにこの種目、最高成績は……八百万という女子だった。

しかし、計器を握るのではなく、『個性』で作った万力できりきりと圧迫して……1. 2tという記録をたたき出していた。おい、いいのかあれ？ 握力じゃないじゃん。

……いいそうです。個性で出したものだから。マジかよ、自由だな。

○第3種目 立ち幅跳び

……一瞬程度なら問題ないだろう。

さつきと同じように、脚力を強化して跳び……記録は35m。

ここでも、着地の瞬間に何か視線が集中するのを感じた……ああ、うん、だんだんわかってきた。この視線の正体というか、理由と云うか。

○第4種目 反復横跳び

ここで事件は起きた。

ゆえあつて最低限の強化でコレをこなした私。記録は59回。

それでもかなり早い回数ではあるが……謎のブドウみたいな球体をスプリング替わりにして残像ができるほど跳んでいた少年・峰田を始めたとして、超えてくる奴はいっぱいた。

で、その峰田を筆頭に数名の男子が、やつてる最中の私をガン見していたので、私の予想はやはり当たってるんだと……

——ぶちん

「……………あ」

嫌な感触がしたので、測定終了後に挙手して先生を呼び止める。

「すいません、相澤先生、ちよつと外していいですか？」

「? どうかしたのか、栄陽院？」

「いえ、激しく動きすぎて上の下着がぶつ壊れました。すぐ戻るの
着替えさせてもらえればと」

言いながら、私はホック部分が引きちぎれてしまったブラジャーを、シャツの下からずるりと抜き取って先生に見せた。あー、これ修理無理だな、買い直しだよ……

「「ブフオツ!!」」

と同時に、男子たちの方から噴き出すような音が一齐に聞こえた。

何ごとかと振り返ってみると、男性陣の半分以上が口を、というか鼻のところを押さえている。前かがみになっている男子も結構いた。「で、でっけえ……アレがアレを包んだのか……」

「い、今ああして手に持ってるということは、あの体操服の中には今、2つの果実がそのままの姿で……」

「お、俺ちよつとトイレ行ってくる……」

「峰田……走り方がキモいぞ」

そんな声が聞こえてきてようやく察した。

あ……無意識にやっちゃったけど、今のつて結構目に毒……だったか。いっけね。気を抜くとすぐ忘れるというか、頭からその辺の意識が飛んでく。

「……そんなもんをこんなところで出すな見せるなこの大馬鹿者。さっさと行ってこい」

「うっす」

10分後。

「只今戻りましたー」

「あ、お帰りなさい、えーつと……栄陽院さん。予備の下着に代えてきたのですか？」

「いや、そうしたところでまた壊れると思ったから、保健室行ってサラシもらってきて巻いてある」

「さ、サラシですか……」

気遣ってくれた八百万にそう返事しておく。

運動する時は私、もっと頑丈な下着付けてくるようにしてるんだよな。特注の。

けど、流石に今日……入学式とガイダンスのはずが、バックレて体力測定するなんて思わないじゃん？ 知ってたら運動用の奴着てたよ……あるいは、最初からサラシに変えとけばよかった。

あー、したらもつと記録出せたのに。50m走とか反復とかも。相澤先生にダメもとで測りなおせないか聞いた。

ダメだつてさ。知ってた。

……今後は突発的に運動するような機会もあるのかもと考えれば、普段から運動用の奴着ておくべきなんだろうか？ でも着け心地がな……

○第5種目 ハンドボール投げ

サラシを巻いた私にもう怖いものはない。

腕力にエネルギーを回し、思い切り振りかぶって……投げる！

「私の3時間を……返せえ!!」

((何その掛け声!))

掛け声についての追及はなしで。

相澤先生をちらつと見ると、言いたいことは大体察してくれているようだが……やはり謝罪や慰労の類を囁いてくれるつもりはないらしい。

淡々と、手元のタブレット端末に表示された記録を読み上げる。

「……栄陽院、999m」

「「おおおおおー!」」

「す、すごい……けど、そこまで行ったんなら何でももうあと1mいかなかった……」

「それ私も思ってる。なんでもう少し頑張れなかった私……!」

尾白の言葉に、抑え込もうとしていた謎の悲しみがぶり返してくる。いや、大記録なのはわかってる、わかっているよ……けどコレは下手にミスするより悔しい……。

2回目だからやり直すこともできないし、仕方ないので退散する。そしてそのしばらく後のこと。

「SMASH!!」

特徴的な掛け声と共に、あの少年……緑谷出久が投げたボールが、700mを超える大記録をたたき出していた。

「……………!?!」

さつきまで、どの種目でも振るわない成績だったはずだけど、ここに来て……

いや、それだけのパワーがあることは、あの入試の日にも見て知っていた。おそらくだけど……その反動が凄まじいために、そう軽々しく使えないんであろうことも。

さつき、2投目を投げる前に相澤先生……改め、抹消ヒーロー『イレイザーヘッド』と話していたようだったけど……それが何か関係し

ているんだらうか？

「先生！ まだ……動けます！」

「……コイツ……」

そんな、傍から見ていても意味が分からないやり取りに、どんな意義があつたのかは、私にはわかるはずもなく。

しかし、それとは関係なく……

——とくん

入試の時と、同じ感覚。

私の胸が、また高鳴った。え、何今の？

………ひよつとして、これが……恋？

(……いや、ないだろ)

確かに、今といい、入試の時といい………何で緑谷を見てドキツとしたのかは、未だにわからないけど………多分恋とは違うぞコレ。

第一、私は体は女だけど、心は………あー………半分くらいはまだ男のはずだ。多分。きつと。めいびー。

だから、男に恋するとか………いや、マジでない………と思う、んだが………。

しかしだとしたらこの感情は何だらう？ 毎度ボロボロになつて緑谷に対して、心配してるというか、ほっとけなくて目にかけているというか、むしろ『私が守ってあげたい』的な？

そう言う感情を何て言うんだ？ 恋じゃないとして………母性？

………余計嫌かもしれん。

あ、ちなみに全種目終わった段階で、緑谷は最下位だった。

けど、除籍は嘘だった。『合理的虚偽』とかなんとか………よかつたけど、相澤先生エ………。

第5話 TS少女と緑谷出久

「ねえねえ栄陽院さん、ちよつといいかな?」

体力テスト終了後、着替えて教室に戻った私達。

そこで、唐突に私に話しかけてくる声が出て……振り向くと、そこには、ピンク色の肌と黒い目、くせつ毛に……角?が特徴的な女の子が立っていた。前のめりになって、いかにもワクワクしていいような感じで。

その後ろには、教室入ってすぐに目に入った透明人間女子や、体力テスト総合1位だった八百万に……って、女子全員いるじゃん。

「すごかったね体力テスト! 握力とか男子よりめっちゃ上だったし!」

「うんうん、でも持久走はもつとすごかったね! ずっと全力疾走してなかった?」

「あーそれ私も思った! ヤオモモの原付に追いついちやいそうな勢いだっつたし」

ええと、確か……芦戸と、葉隠、それに耳郎だったかな? その後ろに居るのは、麗日と八百万はいいとして、蛙っぽい子が、蛙吹だったか。

「確かにすさまじい力でしたわね……パワーだけでなく、スタミナも……テスト中は聞く機会がありませんでしたが、どういった個性なのですか? 増強系かその類とお見受けしますが……教えていただきたいも?」

「ああ、うん。いいよ?」

別に隠してるわけじゃないからね……聞かれなきや答えないけど。

帰り支度の手を止めて、椅子に横に腰かけて答える。

「私の個性な……『無限エネルギー』っていうんだ」

「『無限』!?」

個性名を聞いて、驚いたらしい女子たちの声が揃う。

おや、女子だけでなく……密かに聞き耳を立てていた、あるいは偶然聞こえていた男子たちも驚いたみたいだ。女子たちの向こう側に、

目を見開いて驚愕した表情がいくつも見える。

「そ。腕や足なんか自在にエネルギーを充填して強化することができる『個性』。エネルギーが続く限り、パワーもスピードも爆発的に上げられるし、その間はスタミナ切れもない。エネルギー切れを起こしても、さらに充填すれば再度パワーアップや回復も可能、って感じの増強系だな」

「そ、それで……持久走を全力疾走で最初から最後まで、なんて真似ができたのかあ……」

「腕力や握力、脚力の強化も自在……スタミナも無尽蔵……とんでもない強個性ですわね」

「ていうか、そのエネルギーが無限にあるの？　いくらでも強化できるの!?!　うっわー、それって超強いつていうか、え、最早ずるくない!?!」

葉隠の言う通り、と言いたげな視線があつちこつちから突き刺さる。

そんな汎用性抜群なエネルギーが、しかも無限に使えていくらでも体を強化できるなら、そりやチート級の個性だよねえ。うん、私もそう思う。

ただ……ちよつと違うんだよなあ。

「いや？　無限じゃないよ?」

「へ?」

「使えるエネルギーにはちゃんと限界がある。エネルギーが切れたらそりや、強化もできないしスタミナも減るよ」

そんな私の言葉に、何を言ってるの?　って感じできよんとする面々。さつきまでの興奮が大きかっただけに、今言っていることの意味がわからない、上手く飲み込めない感じだ。

「えーつと……エネルギーは無限じゃない?」

「うん。量に限りがある」

「でも、名前は『無限エネルギー』?」

「うん」

「……ややこしくない?　ていうか、タイトル詐欺みたくなってるん

「だけど……何ゆえ？」

『無限』の意味が違うんだよ。この個性はさ、無限にエネルギーを發揮できるんじゃないよ……無限に『蓄えられる』個性なんだ」

「……………」

「どうやら今の説明で、何となくでもわかったのは、八百万だけのようだ。」

「私の個性『無限エネルギー』は、食べたものを消化吸収し、『エネルギー』に換えて蓄積しておくことができるものだ。」

「それを必要に応じて引っぱり出し、腕や足に充填することでパワーやスピードを強化することができる。また、エネルギーが続く限りはスタミナも無尽蔵と言っている。再生系・治癒系の個性ほどじゃないが、傷の治りも早くなる。」

「だから今回みたいに、腕力や握力を強化して、握力測定やソフトボール投げでそれに応じた結果を出したり、持久走で最初から最後まで全力疾走したり、なんていう無茶苦茶なことまでできる。」

「某狩人漫画で例えるなら『オーラ』、某グルメバトル漫画で例えるなら『カロリー』になるか。というか、実際に食べ物からエネルギーを摂取するから、そのまんまカロリーな気もする。」

「ただし、蓄積しておいたエネルギーが底をつけば、当然強化もできないし、持久力無限なんてこともできなくなる。私自身の素の身体能力しか残らない。」

「それでもある程度戦える自信はあるけど。入試の時とか、ほぼ『個性』なしでやってたようなもんだし。そのくらいには鍛えてある。」

「ただ、最大火力がガクツと落ちるのはね、やっぱり怖い。」

「そんなだからまあ、矛盾とかややこしいとか『タイトル詐欺』とか言われても、まあ仕方ないわな……実際私としても、名前負けもいとこな『個性』だと思ってるし。」

「ただしこのエネルギーは、溜めておける量の方には上限はない。」

「食べれば食べた分だけ、『無限』に絶対量を増やすことができる。」

「もしかしたら限界もあるのかもしれないが、今までそういうのにぶち当たったことはない。」

ただ、それ以外にももう一つ……少々、ややこしいというか、厄介な『制限』があるが、まあそれはまた今度つてことで。

そしてこのエネルギーは、普通に日常生活を送っている分には……要は、『個性』を使わずに生活していれば、減ることはないし、栄養が足りなくなったら、このエネルギーを代替にして生きていくこともできる。肉体に限界を超えて栄養を貯蔵しているようなもんだと考えてもいい。

これまた某グルメバトル漫画で例えるところの、限界まで食材に感謝して食に没頭するアレである。

「なるほど……聞いた当初の想定とは違いますが、十分に強力な個性ですわね」

と、八百万。

「聞く限り、その『エネルギー』は……それ自体が使い道に相当な汎用性があります。肉体の強化、スタミナの代替物、治癒力の促進、さらには生きていくための栄養素としても使用可能……そしてそれを、事前に食事をしてさえおけばほぼ無限に蓄えておけると」

「そういうこと。さらに言うなら疲労そのものを打ち消すこともできるから、その気になればエネルギーがある間中不眠不休で動くこともできるよ」

肉体的にはともかく、精神的にはきつちり疲れるけど。

「……欠点は、エネルギーを蓄えておくには、通常の食事よりもより多く食事をとらなければならぬ、という点ですわね。普通の量の食事しかなければ、その分のエネルギー、もといカロリーは、基礎代謝で普通に消費されてしまいますから」

「そっか、必要以上に食べないとエネルギー蓄えられないんだ」

そういうこと。

しかし今の所、私はそれで困ったりしたことはない。

「この個性のせいもあると思うんだけど、私結構大食いでき？ テレビでやってるようなデカ盛りメニューのカツ丼とかオムライスとか、普通にペろっといけちゃうんだ。それをエネルギーに変換して日頃からため込んで。だからいつでも使えるエネルギーはそれなりに

蓄えられてるし、逆に何もしなければ私は数週間は飲まず食わずでも生きていける」

その分、『個性』使うと消費も激しいから、残量には常に気を付けてるけど。

「おお、なんて都合のいい体質……いや、個性ありきの体質になったのかな？」

「多分そうだよ。私のこの肌もさ、私の『酸』の個性の影響で色がこんな感じになってるから」

あ、芦戸の肌ってそういう感じの理由だったんだ。……でもじゃあ、角は何でだ？ 遺伝？

「それは……うらやましいですわね。私の個性も、体内の脂質を消費して物体を生み出していますから、貯蔵量は多いほいほいなのですが……やはり限りがありますし、補充するのも大変なのです。脂質を必要量摂りたくても、満腹感がブレーキになってしまいますので」

なるほど、八百万の『創造』はそんな仕組みになってたんだな。ノールスクでポンポン物を作るわけではないと思ってたけど、なるほどそんな感じか……

「いや、十分あんたもそれに適した体質持つてると思うけどさ……発育の暴力……」

なんか耳郎が小声で恨みがましく何かを言った気がした。聞こえなかったし、八百万にも聞こえてなかったようだけど。

「でも確かに……ヤオモモが永久ちゃん個性を併せ持ってたらしいきよーだったかもね」

「無限のエネルギーから無限に物質が『創造』されるわけか……確かにすごいねそれ」

「けろ。でも、その『エネルギー』が脂質の代わりに使えるかどうかはわからないわ」

そんな感じで盛り上がりつつあったところに、耳郎が声をかけて来た。

「……ところでさ、栄陽院。今の話聞いてて、ちよつと気になったところがあったんでききたいんだけど」

「? どうした?」

「あのさ……あんたさつき、食べた分の余剰エネルギーは蓄えられ
るって言うってたじゃん。余分に食べなきゃ蓄えられないって。でも
それってつまり、逆にさ……」

一拍、

「……あんた、何をいくら食べても……それこそ好きだけ食べても
絶対太らないってこと?」

「「……………?!?!」」

「? まあ、余剰分のカロリーは全部エネルギーに変換しちゃうから
……………」

あれ、何か周りを取り囲む女子たちの大半が怖いオーラを纏った気
が……

「何それー!? ずるいー!」

「ちよつと待ってその体質はガチでうらやましい! 女の子はいつ
だってスイーツその他のカロリーと戦ってるもんなのに、そんな悩み
と無縁なんてうらやましすぎる!」

「……………けろっ。さすがにちよつと不公平だと思っちゃったかも」

「……………神はなぜ、ここうも持つ者と持たざる者を区別するよう
なことを……………」

芦戸に葉隠、蛙吹まで!! あと最後、謎の呪詛をつぶやいてる耳郎
が怖いです。

何を考えてるかは……大体わからなくもないけど。視線が私と八
百万の胸を行き来してるから。

なお、その八百万はというと、

「そうでしょうか……? 私も脂質の補充のために、なるべく多く栄
養価のあるものを食べるようにしていますが、それほど……」

ぐりん、と。

それを聞いた耳郎の首が回って八百万の方を向いた。ちよつと動
きがホラーじみてて怖え!

葉隠と芦戸も同じように振り向いて(こっちはホラー要素なしで)、

「ヤオモモ——! お前もか——!!」

「ここか！　ここだな！　ここに蓄えられてるんだな！　食べた分全部ここにいつてるんだな！　そうだな！　ちくしょー！」

「ちよつとよこせえ……………」

「ふあつ!?　ちよ…………やめてくださいな芦戸さんに葉隠さん！　そこ、触らないで、あつ…………じ、耳郎さんはその、め、目が怖いです！」

あの、私何かまずいことを……………」

「待て待て待てちよつと待て！　特に耳郎は待て！　おちつけ！　教室でキャットファイト始めるなって、まだ今日入学初日だぞ……………」

「うっさいわ！　あんた達持つ者に持たざる者の気持ちがあわかってたまるかあー！　こうしてやるうー！」

「ひあつ!?　ちよつ、やめ、痛つ、こら…………こん…………上等だコラア！」

「うわ、永久ちゃんがキレた!?!」

「耳郎ちゃんのわきの下がっ、ホールドからの超高速こちよこちよで大変なことにい！　汗かいて涙流すほど笑わされて見た目的になんか色っぽく!?!」

「それでも栄陽院ちゃんの胸を放さない耳郎ちゃんの執念がちよつと怖いわね……………」

「…………俺、今年この学校のこのクラスに入れてよかった……………」

「俺も…………うわ、栄陽院の胸部装甲が、耳郎の手でわしづかみにされて変形して大変なことに……………」

「信じられるか？　今日、入学初日なんだぜ……………」

「峰田、流石に撮影はやめとけ、アウトだ」

男子達がそんな会話をしていたのが耳に届いたが、女子のかしましトークにかき消されて私らの意識に入ってはこなかった。

ちなみに、『食べても太らない』論争にただ一人参戦して来なかった麗日はどうして黙っていたのかと聞いたら、

「1日3食お腹いっぱい食べられるなんて…………それだけで幸せやん」

何か別種の闇が垣間見えたのでそれ以上聞くのはやめた。

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

「あぁ、疲れたぁ……」

雄英高校、登校初日。

入学式だと思ってたらいきなり体力テストが始まり、そこで除籍のかかった（実際にはかかってなかったけど）真剣勝負に挑まされ、その後、自業自得だけど指バツキりいって保健室で手当してもらって、その治癒に体力を持ってかれてすごく疲れた……

全体通しての感想が『疲れた』で埋まったと言っても過言じゃない感じだ。

念願かなって入った雄英だけど、今日は朝からずっと疲れっぱなしで、さすがに今は一刻も早く帰って休みたい気分だ。校内の見学とかはまた後日やることにしよう。

……その見学とかって、たぶん本来は『ガイドダンス』でやるはずだったんだよね？ 相澤先生、はたしてコレは本当に合理的な時間の使い方だったんでしょうか……雄英にはあこがれてるけど、僕は高校生活1日目からちよつと疑問が生まれてしまっています。どうしてくれるんですか。

そんなことを考えながら歩いてたら、視線が下向きで気づかなかつたのか……何かにぶつかった。

頭が、ぼいん、って、何か柔らかいものに当たって弾かれた感触が……何だろうと思って視線を上にあげると、そこには……

「うん？ 緑谷？」

「……え？ え、栄陽院……さん？」

僕より頭一つ分近くも身長が上の女子生徒……クラスメートの栄陽院さんだった。

僕と同じ、あるいはよく似た増強系『個性』の持ち主で、スピードとパワーを兼ね備えた動きで体力テストでは大活躍していたから、印象に残っている。そのパワフルさは、女性でありながら、どこか僕の憧れであるオールマイトを思わせるような部分すらあった。

彼女の動きを参考にできないかと思つて、ひそかに観察してたんだよね……無理だったけど。

あと、女性だからこそ、要所要所でちよつと別な部分に目を奪われる場面が多くて……集中力が足りませんでした、目がそつちに行きましたごめんなさい。

ていうかちよつとまつて？ 今ぶつかったのつて栄陽院さん？

しかも、僕と彼女の身長差からして、い、いいい今の柔らかい感触はまさか………

「ご、ごごごめん栄陽院さん！ わ、わざとじゃ、ええつとその僕その考え事してて前見てなくてホントにその……」

やばいやばいやばい！ 今の僕の行為はその……わざとじゃなかったとはいえ完全に世の女性を敵に回すようなアレなことでも！ もしここで栄陽院さんに騒がれようものなら……クラス中、いや学校中の女子に冷たい目で見られて、問題になって職員室に呼び出されて、相澤先生に冷たい目で見られながら見込みゼロの烙印を押されて除籍処分、最悪そのまま警察のお世話に……

ていうかそんなことを考えながらも僕の視線は、ふいに目の前に現れた栄陽院さんの胸にくぎ付けのまま動かせない！ くそお、動け僕の体！ せめて視線をずらせ！ たのむ動いてくれ！ ひっこめ煩惱！

はっ、そうだいつそのまま土下座でも何でもしてしまえば、目線を外すのと謝罪が一度にできて一石二鳥……なんて考えた瞬間、突然僕の頭は栄陽院さんに抱き抱えられた。

「むぐう!？」

「ちよつと緑谷うるさい、暴れるな騒ぐな黙れ一回」

目の前にあつた胸に、今度は顔面が全力で押し付けられてうずめられて……や、柔らかい!? しかも何かいい匂いが……

するとそのまま栄陽院さんは僕を体ごと抱え上げ、すごい速さでそこから走り去つて物陰に隠れた。そこで僕を解放する。

ぷはっ、と地味に息ができなかつた僕は、そこで息をついた。か、感触が幸せすぎて呼吸困難に気づかなかつた……。

はっ、そ、それよりも土下座しないと！

「いい、いい、いいから落ち着け緑谷。謝んなくていいから、怒つてないから別に私」

「えっ!? そ、そう……なの!?!」

栄陽院さんはちよつとあきれ顔で笑いながら『落ち着け』と手でジェスチャーまでしながら言ってくれている。お、怒ってない……ホントに? 問題にしない? 通報しない?

「しないしない、わざとならまだしも、こんなことで目くじらたてないつて……別に減るもんでもないし。それよりあんな往来で騒がれて人の目が集まってくる方が迷惑だって」

なんかすごく豪快と言うか、懐の深いことを言ってくれる栄陽院さん。どうやら本当に気にしていないし、問題にするつもりもないみたいだ。

よ、よかったあ……優しくして心の広い人で……。

僕のヒーローアカデミア、完! みたいなことにならなくてよかったホントに……!

入学初日にこんなことで除籍になったりしたら、オールマイトに何て言ったらいいかと……

するとこうして僕を抱き上げて物陰に隠れたのも、あくまで目立つのがいやだったからか。

いや、あれはこつちが逆にびっくりしたからなあ……ま、まだ顔に感触と匂いの残り香が……。

「でもまあ、これが私以外だったら……まあ問題になるどうかは別としても、白い目で見られたりするくらいは確実にあるだろうから気をつけなよ」

「う、うん……ありがとう。ホントにごめん……気をつけます、以後、絶対に」

「だーから別に謝んなくて……あ、そうだ、それなら緑谷、ちよつといい?」

まだ顔が熱い。多分赤くなってる。

けど、何か思いついた、あるいは思いだした様子の栄陽院さんに呼

ばれて、何だろうと視線を上げると……彼女は、その手にペットボトル飲料を持っていた。

しかも……見る限り2本、同じのを。中身は……カフェオレ？

よく見ると……片方には水滴がついていて、もう片方にはついていない。

「これなんだけどさ、さつき間違えて、『あつたかい』買うつもりが『冷たい』買っちゃってさ……妥協したくなって結局買い直したからコレ余ってるんだけど、貰ってくんない？」

「えっ!? い、いいけど……ていうか喉乾いてるからむしろ貰えるならうれしい。いいの?」

「いいのいいの。それなら逆にちょうどいいしな」

「う、うんわかった。ありがとう。あ、お金払うから……」

「いーってそんなの! みみっちいこと気にするな!」

そうして僕はカフェオレの500mlペットをもらった。

栄陽院さんは、目の前でカフェオレのボトルを軽く振って沈殿をなくしてから、キャップを開けてごくごくと一気飲みしていた。豪快だ。

僕も早速いただこうかな。

パキツ、と子気味いい音を立ててキャップを開けて、中身をごくぐくと飲み下した。

(……あ、美味しい)

甘さも苦みもちょうどよくて、口当たりまろやか、後味もすつきり。

このメーカーのカフェオレ、こんなに美味しかったんだ……知らなかった。

あんまり美味しくて……気のせいだろうか、さつきまでだるかった体にエネルギーが戻ってきて、はきはき動けそうな気すらしてきた。

いや、気のせいだろうけど。栄養ドリンクだってそんな即効性ないだろうしね。

……って、あ、全部一気に飲んじゃったよ。いつの間にか500mlが空だ。

「どう、美味かった?」

「うん、すごく。これからこのメーカーの買うかも」

「ははっ、そりやよかった。じゃ、私これで帰るから」

「うん……あ、ペットボトル僕が捨てとくよ」

「マジで？ あーじゃあ、頼もつかな」

僕に空のペットボトルを手渡して、そのまま栄陽院さんは帰っていった。

その横顔は、にこにここと機嫌よく、嬉しそうに笑っていたように見えた。

……自分の好きな飲み物を褒められてうれしかったのかな？

いやしかし、ホントに美味しかったな……ホントに今度から、カフェオレはコレ買おうかな。メーカー名と銘柄覚えとこ。

「美味しかったか……ふひひ、そりやよかった……あーやばいちよつと顔がにやける……」

後日、僕は同じものをコンビニで買って飲んでみたんだけど……不思議なことに、この時ほどは美味しくは感じなかった。何でだろう？

……その直前にあった出来事のせいで、緊張して喉がカラカラに乾いてた分美味しく感じた、とかだろうか？ い、嫌だなちよつと、そうだとしたら……煩惱が後押しになったみたいで。

第6話 TS少女と戦闘訓練（前編）

「わーたーしーがー!! 普通にドアから来た!」

そんなセリフと共に、オールマイト先生、1-Aの教室に降臨。

No.1ヒーローの登場に、教室中が興奮と感動の渦に包まれる中……オールマイト先生が発表した本日の『ヒーロー基礎学』は……なんと一発目から戦闘訓練。

場所はグラウンドβ、入学前に提出した『個性届』と『要望』に沿って業者に発注した『コスチューム』に着替えて集合、とのことだ。

戦闘用の装備で戦闘訓練か……いきなりにも程がある気がするが。

なんてことを考えてたら……考えを読まれたわけじゃないだろうが、オールマイト先生は言い放った。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!! 自覚するのだ!

今日から自分は……ヒーローなんだと!」

そうして着替えを済ませ、グラウンドβ……というか、入試の時に使った市街地型の演習場じゃないのかここ。

そこに集まった私達に、オールマイト先生は今日の訓練内容を説明してくれた。

「敵退治は主に屋外で見られるが、統計で見れば屋内の方が凶悪犯出現率は高いんだ……君らにはこれから、『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて、2対2の屋内戦闘訓練を行ってもらおう!」

設定は、テロリストが市街地のアジト内に核兵器を隠していて……ヒーローはそれを処理しようとしていると。設定が海外ドラマみたいだ……先生が考えたのかな?

敵役が先にビルに入って準備を整え、5分後にヒーローが行動開始。

ヒーロー側の勝利条件は敵2名の確保か、核兵器の確保。核兵器の方は、張りぼての爆弾にタッチするだけでいいそうだ。

敵の確保については、気絶させるか行動不能にするか、あるいは事前に渡された『確保テープ』を体のどこかに巻き付けることで達成と

する。

一方、敵側の勝利条件は、同じくヒーロー2名の確保か、あるいは制限時間15分の経過。

コンビ分け及び対戦相手はくじで決定されると……なるほど。で、そのくじ引きの結果決まったのが……次のような形だ。

緑谷・麗日コンビ VS 飯田・爆豪コンビ

轟・障子コンビ VS 尾白・葉隠コンビ

蛙吹・常闇コンビ VS 八百万・栄陽院コンビ

砂藤・口田コンビ VS 瀬呂・峰田コンビ

耳郎・上鳴コンビ VS 芦戸・切島コンビ

ううむ……チームにも対戦の組み合わせにも、一癖も二癖もありそうなのがそろったな。

☆☆☆

1回戦、緑谷・麗日コンビ対飯田・爆豪コンビは、ヒーローチームである緑谷達の勝利で終わった。2人共ボロボロになっての辛勝だったけど。

それに対して、敵側はほぼ無傷……ただ、何か爆豪は終了後、何か考えこんでたのかぼーぜんとしてたな。オールマイイト先生が現場行って声かけるまで、過呼吸気味になって汗だくだった。

双方のチームに課題の多かった試合だったと思う。

戦闘後の公表でオールマイイト先生……というよりも八百万先生に言われた通り、爆豪は連携の『れ』の字もない戦いだっし、麗日は状況把握が甘く、訓練だということに甘えた立ち回りだった。緑谷は、作戦構成こそ見事だったものの、そこに至るまでの過程がガタガタでスタボロに。

特に緑谷と爆豪は、どっちも通路と壁面吹き飛ばすわ、パンチで建物を縦に貫通させるわ……ビルぶっ壊しかねない威力の攻撃を……『核兵器』が本物だったら完全にアウトだもんなアレ。

ということで、MVPは飯田……そう言われた瞬間。じーんとして

感動してたな。

ただ……やはり、緑谷は『いい』な。

あの、ビルを縦に最上階まで貫通させたパンチ……あの瞬間に発揮されたエネルギーは、今の私の全力と同等、いやそれ以上かも……！例によって腕ぶつ壊してたから、制御できていない状態だとしても……あれだけのパワー、そしてさらに残されている伸びしろ……。

何より……どれだけ痛めつけられても、ヒーローとして大事なことを心の中から捨てることのない精神、その状態で冷静に状況を分析する頭脳……そして、オールマイト先生もほめていた、彼が『ヒーロー候補生』足らんとする純粹さと正義感……！

緑谷に関しては、少し調べた。それでヒットしたのは……約1年前に、とある町で起こったという『ヘドロ事件』。

流体の体を持つヴィランに対して、相性が悪いか場所が悪いかの理由で、その場にいたヒーローたちが、人質にされている中学生を放置して立ち尽くす中、一般人の少年が飛び出してその人質を救おうとしたってという話。ネット上に動画も残ってた。

ちなみにそれ解決したのはオールマイト先生で、その人質がなんと爆豪。マジか。

表の報道では、人質にされながらもそのタフネスで耐え抜いた爆豪の心の強さとかが賞賛されてたけど、義姉さんに頼んでちよつと裏から調べてみたら、その時に飛び出したのが緑谷だと判明。

当然、無茶な行動だからってその場にいたヒーロー達にきつく叱られたみたいだったけど……義姉さん達が調べてくれた情報の中には、その場にいた野次馬の証言もあった。飛び出す時、緑谷は……爆豪に『何で来た!』って言われて、こう答えていたそうさ。

『君が、助けを求める目をしてた』……と。

「……………うん……………いい」

「はい？ 何かおっしゃいましたか、栄陽院さん？」

「うん？ ああ、いや、何でもないよ八百万。えっと……………って、あ、すげえもう2回戦終わりそうだな……準備しとくか」

「えっ!?! あ、そ………そうですね。私達は次でしたか」

画面の向こう側では、一瞬でビル全体を凍結させた轟・障子ペア（つていうかほぼ轟）が、余裕の歩みで核兵器にタッチして、尾白・葉隠ペアに勝利していた。

右で凍らせて左で燃やすのか……強い、っていうかも怖い。さすがは推薦入試……。

「……相手が悪かったなー、尾白達は」

「そうですね……あれはそれこそ、専用の装備でもなければ対応できないでしょう。葉隠さんに至っては、その……隠密性を最重視して、全部脱いでしまっていました……」

「……透明人間っていう意味では正しい判断ではあるな。倫理的にはアウトだけど」

つか、葉隠のアレはコスチュームの意味はあったのか？

「正面から戦えば尾白も強いと思うぞ？ 多分だけど、格闘技経験者だし」

「そうなのですか？ どうしてそのようなこと……お聞きになったの？」

「いや、入学初日に握手してさ、その時触ってわかったんだけど、すごく硬かった（手が）。大きくて（手が）厚くて（手の皮が）、ごつごつしてたし（手が）。相当使い込んだと思う。本人もがっしりした体格でパワーもあるから、まともにやったらかなり苦しい（戦闘が）」

「なるほど……そういうえば尾白さんは、栄陽院さんの後ろについていましたね（座席が）。言われてみれば、立ち姿も見事なものでした……経験豊富なのでしょうね（格闘技の）。そうになると、単純な近接はもちろん、組技や寝技なども得意なのでしょうが」

「だな。派手な技ばかりにかまけてそのへんを疎かにしてるとは思えない。まあ、実戦で使う機会はそう多くないだろうが、拘束するのとかは得意だと思う。一旦組み付かれて、そのままのしかかられて押さえつけられたら、抜け出すのは至難の業だな。それに、あれだけ長く太くて立派なものも持つてるんだ（尻尾）、体格も合わせてフルに生かせば強力な武器になる」

「そうですね。長くて太くて立派で毛深くもありますものね（尻

尾)。弾力もあるから受けるのも得意でしょうし（防御力という意味）」

「み、峰田……」

「わかってる、わかってるよ上鳴、瀬呂。そういう会話じゃねえつてのは……けどよお……」

「う、うん、わかる……あの2人がああいうこと言ってるってだけでやべえ……」

さー、出番だ。

☆☆☆

私達がヴィランということで、5分早くビルに入って作戦タイムと相成ったわけだが。

「ところで栄陽院さん、先日の体力テストやそのコスチュームの形状からして……あなたの戦闘スタイルは接近戦ということでしょうか？」

私の体全体を上から下まで見ながら、八百万はそう聞いてきた。

「？ ああ、まあな。近づいて殴るくらいしか……いや、本気出せば拳とか振りぬいた勢いで衝撃波みたいな出せなくもないけど、どっちにせよ緑谷のフルパワーには及ばないと思う」

八百万の言った通り、私のコスチュームは、わかりやすく近接戦闘用だとわかる作りをしていた。

一言で言ってしまうば……改造学ラン。もちろん、男用の。

学ランの上下を、上着の前のボタンを留めずに着崩して着ている。上着は丈の長い、いわゆる『長ラン』と呼ばれるタイプで、激しく動くとマントみたいに翻る。

中に着ているインナーはタイツスーツみたいなぴったり体に密着するタイプ。色は白で、手首と足首、そして頭を除く体全体を覆っている。腰から上は、胸の上のあたりまで、コルセットみたいなもので

おおわれている。見た目的には、サラシを巻いたようなデザインだ。腰に巻かれたごついベルトには、いくつかのポーチみたいなのがつけられて、小物類をいくつか入れられるようになってる。

これらに加えて、頑丈なブーツを履いて、暗視装置付きのバイザー（普段は帽子のつばの部分に隠れている）と無線機が搭載されている特殊学帽をかぶれば完成。これが私の『戦闘服』だ。

無論、これら全て戦闘用の頑丈な特殊素材なわけだが、逆に言えばそれだけだ。学帽以外に特殊な装備みたいなものはない。

単純に頑丈さだけを追求した作りで、攻撃手段は単純に肉弾戦だからだ。

「アレは……今思いだしても不思議ですわ。まったく個性を制御できていない、まるで個性が発現したての子供のような……この年になるまでトレーニングも何もしてこなかったのでしょうか？」

「私有地以外では個性の使用なんてできないからなあ……そもそも、あんだだけのパワーだし、ろくに訓練できる場所もなかったんじゃないかな？　あるいは、試すたびに大怪我するから、発動するだけでも危険だと考えてろくに訓練もさせられなかったか」

「なるほど……よくよく考えれば、雄英生がこんな実戦的な訓練をできるのは、リカバリーガールという優秀な養護教諭がいてくれるからですものね。一般の家庭環境では、確かに……」

「治癒系の個性は数が少ないからな。使うたびに大ケガするくらいなら使わない、っていう選択肢があってもおかしくはないだろう……さて、緑谷のことはおいといて、作戦考えないと」

「そ、そうでした……もう3分くらいですわね」

喋りながらも八百万は『創造』を続けていた。彼女の体から、湧き出すようにほとほと無機物が生み出されている光景は、なんとというか……不思議な見た目だ。

ていうかコレ……ひよっとして確保テープ？

「ええ。私の能力で大量に作ってトラップを設置します。通路もですが、それよりも窓を中心にした方がいいかと」

「窓？　それは……ああ、蛙吹か」

「ええ、彼女の個性は『蛙』ですから……蛙のように壁を伝って侵入してくるようなことも考えられるかと。それに常闇さんの個性も、同じようなことができなくもないですし」

確かに……結構な色物コンビだよな。あの2人。

蛙もそうだけど、常闇の『黒影』ダークシャドウだっけ？ あの影モンスターも、攻守一体でかなり汎用性が高そうないメージだったし……

あ、ちなみに今喋ってる最中だけど、簡単な罠をあちこちに作ってる。口動かしながら手もきちんと動かしてる。

「けど、守ってるだけで勝てるほど甘くもないだろ？ どっちも立体的に動ける個性だ……多分、トラップは見極めて突破してくるぞ。この短時間で複雑なトラップを仕掛けるのは無理だし……まあ、八百万が『創造』できるなら別かもだけど」

「作れないことはありませんが、私の個性は作るものの構造が複雑であればあるほど、大きければ大きいほど、時間も脂質も多く消費してしまいますので……確かに難しいですね」

……………ふむ？

「それなら、簡単な構造のものなら手早く大量に作れたりする？ 例えば……」

八百万に、今ふと思いついた作戦と共に、作ってほしいものを提案する。

「……ええ、それでしたら構造もよく知っていますから、少し手を入れたとしても、残りの準備時間でもそれなりの量作れるかと。ただ……大ききさ的にかなりのものになりますので、材料となる脂質がとても……」

「なるほどな……よし、それなら問題ない。私に考えがある」

「……………？ 考え……ですか？」

第7話 TS少女と戦闘訓練（後編）

栄陽院と八百万が入って5分後、ヒーロー役である蛙吹・常闇コンビは動き出した。

スタートしてすぐに蛙吹は壁に張り付いて外から侵入を試み、そして常闇は中から進んでいく。

しかし、使えそうな窓にはことごとく仕掛けが施されていることに蛙吹は外からでも気づけたため、なかなか侵入経路を探せずにいた。時間を気にしつつ、中にいる常闇に連絡を取る。

「八百万ちゃんやるわね……外からの侵入にはしつかり対策済み。無暗には入れないわ……常闇ちゃん、中の様子はどう？」

「中は各所に捕獲テープの罠が張つてある……大量にだ」

「大量……そうか、八百万ちゃんの個性で複製したのね」

「そのようだ。この短時間だ……複雑な仕掛けではないと思うが……ッ！」

「？ 常闇ちゃん、どうし……」

——ドゴオン！

「!? 常闇ちゃん、どうしたの？ 状況は？」

「ッ、敵チーム……栄陽院と遭遇！ すまん、余裕がない！」

「わかった……私も急ぐわ、気を付けて！」

蛙吹が慌てて（表情からはわかりづらいが）動き出した頃、中ではすでに栄陽院と常闇の戦いが始まっていた。

近づいて殴る、というシンプルな接近戦を仕掛けてくる栄陽院に対し、常闇は個性『黒影』を出して応戦する。スピード、攻撃力共に優秀な個性だが、接近戦において、その戦闘性能は一步栄陽院に譲っていた。

「エネルギーチャージ、全身300%……！」

体全体にまんべんなくエネルギーをいきわたらせ、床を蹴り碎きかねない勢いで突進する。真正面から突っ込んで放ったフックの一撃で、黒影の攻撃を弾いたばかりか、その体を大きく揺らす。

『痛ッテエ！ 何テバカカダ、コノ女！』

「っ……正面からではさすがに不利か！」

「悪いが喧嘩じゃ負ける気はしないね！ その分絡め手を使われるとヤバいから、短期決戦で決めさせてもらおう！」

「道理だな……だが、作戦や弱点を自ら明かすとは……迂闊だぞ」

「安心しな、問題ないさ……お前、もう逃がすつもりないからな！」

そこから始まる、栄陽院の怒涛のラッシュ。拳が、蹴りが、冗談のようなプレッシャーと風圧を伴って常闇と黒影を襲う。

そして、パワーだけでなくスピードも速い。間合いを離そうとしても即座に追いつかれ、むしろ縦横無尽に跳びまわってこちらの横や後ろに回り込もうとしてくる。

足だけでなく、時に手をつけて猫のように着地したり、壁を走ったり天井を蹴ったり、体全体をバネにして跳ねたりとダイナミックに動く。

それだけの無茶苦茶な動きをしても、息一つ乱れる気配はない。

(無尽蔵のスタミナ……聞いてはいたが、常に全力で動き続けられるとはここまで厄介か)

受け流すようにして戦い、時に黒影が常闇をかばうようにしつつも、その全てを防ぎぎることはできない。少しずつだが、ダメージが蓄積して動きは鈍くなっていた。

(……黒影は、闇の中ではより強くなる……薄暗いビルの中で、黒影の戦闘能力は確かに上がっている。にも拘らず防戦一方とは！ パワーもスピードも段違い……それに、あの学ランが……！)

その時、常闇は栄陽院の背後に、ピンク色の鞭のようなものがしなるのを見て、はっとした。

その常闇の表情の変化に気づいたのか、それとは別に音か何かが聞こえたのかはわからないが……突進のモーションに入りかけていた栄陽院は素早く身をひるがえし、横に避ける。

一瞬前までその体が在った場所を、蛙吹の蛙のような舌が薙いだ。

「けろ、遅くなってごめんなさい、常闇ちゃん」

「……すまん、助かった」

「ち……合流されたか」

この状況になる前に勝負を決めるつもりだったらしい栄陽院が舌打ちをする。

しかし、怯む様子は微塵も見せない。2人を相手にして、距離こそ取りつつも退くつもりはない姿勢で立ちはだかつている。階段を背にしている辺り、ここから先へ通すつもりはない、ということなのだろう。

「……時間がない、撤退して迂回路を探してはタイムアップになる……戦闘は避けられん。気をつける蛙吹、奴の接近戦闘能力は桁違いだ、パワーもスピードも、反応速度も……スタミナもな」

「知ってるわ。でも、2人がかりなら何とかなる……私も黒影ちゃんもリーチが長いから、距離を空けて慎重に攻めれば対応はできるはずよ」

「ああ……だが、それでも気を付けろ。特に、あの学ランが厄介だ」

「? 学ラン? どうして、何か仕込みでもあったの?」

「防御力が高い以外はただの学ランだ。だが……アレが栄陽院の動きに合わせて、マントのように派手に翻るせいで、奴の手足の動きが隠れて初動が読みづらい。厚手だからか、腕や足の微妙な動き、筋肉のこわばりなども隠してしまう……対応が後手に回りがちだ」

「けろ……了解。そこまで計算したコスチュームだったのね」

そこまで2人が小声で話したところで、栄陽院は1歩足を前に踏み出した。

警戒して構えを取る2人。少しの動きも見逃さないように、栄陽院の拳動1つ1つに注目し、集中力を保ったままにらみ合いが続く。

栄陽院はというと、すたすたと散歩でもするかのように普通に歩いている。特に構えもとらず、しかし視線だけは常闇と蛙吹に向けたままで。

何をしてくるかわからない不気味さが、2人の警戒心を掻き立てる。

常闇は、次の瞬間急加速して突進してきたり、あるいは先程までの攻防で転がった瓦礫を投擲、ないし蹴飛ばしてきても対応できるよう

に、すぐに柱の陰に隠れられる位置で身構えていた。

……が、それがまずかった。

——ボウンツ!!

「なっ!?!」

「常闇ちゃん!?!」

『ナンダア!?!』

突如、常闇のすぐ横に在った柱が中から爆発し……そこから、大量の『確保テープ』を編んで作られたネットが飛び出して、一瞬にして常闇と黒影を覆ってしまった。黒影がとっさにもがいたせいでネットは複雑に絡まり、常闇もろとも体中をがんじがらめにされてしまふ。

どこか一カ所にテープを巻き付けければ確保扱いになるルールだが、これでは全身にそれがなされているようなものだった。

そして、吹き飛んだ『張りぼての柱』の中から……ネットを撃ち出したギミック銃らしきものを構えた八百万が、ふう、と息を出て来た。

「うまくいきましたわね……」

「つ……偽物の、柱だっただと……?」

「ああ。気が付かなかったか? このフロアの柱が、他より1本多かつたことにさ」

☆☆☆

作戦は単純なもんだ。

核を置いてある最上階の窓は『わかりやすい』しかし『解除もできない』トラップで全部塞ぎ、その他の出入り口も全て塞いでおく。核がある最上階への出入りが、今私が守っている階段以外ではできないようにしておく。

あとは私はそこで待ち構えていれば、ヒーローたちは必ずここに来る。来ざるを得ない。

2人共破壊力がそこまである個性じゃないからな、壁を壊して侵入

とかは無理だ。ひよつとしたら黒影ならできたかもしれないが、無音では無理だ。変な音が聞こえた段階で私が行く。

そしてそのフロアの端に、八百万に個性で『偽物の柱』を作ってもらい、その中に潜んでいてもらう。当たれば一撃必殺の『捕獲テープ』ならぬ『捕獲ネット』を打ち出せる銃を持って。

そして、戦闘中に隙があれば、無理そうならどうにかして私が気を引いて隙を作るから、射程圏内に入ったヒーローを一気に『捕獲ネット』で捕獲する、と。

ホントは2人まとめて一網打尽にできれば一番よかったんだが、まあ贅沢は言うまい。

『常闇少年、君は『確保』扱いだ！ 悔しいだろうが、そこで待機しているように！』

「……承知」

無線機の向こうから聞こえたオールライト先生の声に従う意思を見せ、身動きをやめる常闇。

さて……コレで残るは、蛙吹だけだ。

その直後、八百万は柱の中からさらに2丁の『確保銃』を取り出し、それを手に階段の前まで行って立ちふさがった。射程距離のある、それも攻撃範囲が広い『網』を放つてくる武器が相手では、伸びる舌を持つ蛙吹でもうかつには近づけないだろう。

何より、もたもたしている間に私が後ろから襲い掛かるし……そうでなくともここからは、八百万が守りに回っている以上、蛙吹は私と戦わなければいけない。戦闘能力では黒影よりも劣るだろう彼女には、それは無理だと即座に分かるはずだ。

「けろ……仕方ないわね」

そうつぶやく蛙吹。

諦める、という意味ではないことは、次の瞬間の彼女の挙動ですぐ分かった。彼女は蛙の脚力を活かして、窓目掛けて突っ込んでいく。

そのまま、腕を顔の前でクロスさせて突っ込み、ガシヤアン!! と窓ガラスを派手に割って外に飛び出した。なんか、こう……脱出の仕方がかつちよええ。

おそらく、あのまま壁面に張り付いて直で上の核を直指すつもりなんだろう。

私達が2人ともここにいるんだから、逆に言えば核を守っている奴はいない。トラップだけで守られている。

窓を割れば音で見つかるとかそのへんはもう気にしなくていい。それらを強引にでも何とかやり過せば、核を確保できると考えたんだろう。

だが……

——ビタアツ！

「……ける!」

窓を突き破った蛙吹は……その窓の内側から出て来た、というか仕込まれていたテープネットに取っ捕まっていた。常闇と同じくがんじがらめになった状態で宙づりになっている。

『確保ネット』じゃなく、無色透明のただのテープで作られたネットだから、そうなくても確保扱いにはならないが……身動きできなくなったことには変わりない。

そして、蛙吹が状況を飲み込めずに混乱している間に……

『タイムアップ！ 15分経過だ！ よってこの試合、ヴィランチームWIIIIIIIN!!』

無線から流れて来たその声が、戦いの終わりを告げた。

「やられたわ、八百万ちゃん、栄陽院ちゃん。まさかこんな罠まで用意していたなんてね」

「最上階の窓の罠は、見てわかる罠ばかりだったからな、盲点だったか？ きちんと目に見えない形でトラップがあったことにさ」

「ええ……それもまさか、こんな手の込んだ作りにして隠していたなんてね、そんな時間はなかったはずだけど……どうやったの？」

「そのへんは、この後の講評の時にでもな」

第8話 TS少女と個性実演

さて、皆の所に戻ってきて……講評の時間だ。

結論から言うと、私と八百万がフロアに仕掛けたトラップはまだ他にもあった。

その1つが、窓に仕込んだネットテープだ。普通のガラス窓に見えるそれを、2枚重ねのガラスの間にテープのネットが挟まれている特殊なガラスにすり替えておいた。

というか、窓ごと八百万に作ってもらって付け替えたのだ。それも、フロアの窓全部。

今あるものに細工するよりこっちの方が楽だし簡単だし、簡単な構造の物なら八百万は素早く作れるって話だったからな。

これで、外から入ってくるにせよ中から外に飛び出るにせよ、簡単には窓は割れないし、無理に割って飛び出せばその瞬間身動きできなくなるようになっていた。

その他にも、最終手段として、仕掛け一つで張りぼての天井が落ちる吊り天井トラップとか、その向こう側からさらに天井全体……というかフロア全体を覆う確保テープネットが落ちてくるトラップとか、階段を上ろうとすると階段に沿って張って隠してあったテープネットが跳ね上がるトラップとか、上からネットが落ちてくるトラップとか色々用意してたんだけど、出番なかったな。

「そんなに用意してたの……」

「もはや要塞だな、あの場を切り抜けてもそれらを突破しなければいけないかったのか」

「すごかったよな。八百万がどんどんテープとかトラップ作ってさ、それをすごい速さで動いて栄陽院が部屋中に仕掛けていってつたもんな。スタミナ無限だから常に全速力で」

講評の最中、私達がやってたことを説明すると、蛙吹と常闇は哑然とし、それに乗っかる形で切島が率直な感想を述べていた。

「うむ、相手の先を読み、またあらゆる状況を想定したトラップの数々、見ている見事だったぞお2人さん。少々力技だった印象はある

がな！」

と、オールマイイト先生の講評。

その他こまごまとした反省点を話し合った後、ふいに蛙吹が『ちよつと』と挙手した。

「1つ気になっていることがあるの。トラップの数々は、恐らく八百万ちゃんの『個性』で作ったものだと思うけれど……どうしてそこまですべて『個性』が続いたの？ あれだけの規模の罠を用意するには、相当な量の脂質が必要なんじゃないかしら？」

「それは俺も気になっていた。今の八百万は、先日の体力テストの時よりも疲労が少ないように見える……体力テストの時は体を動かしたからだとしても、今回の『創造』は規模が2つも3つも違うはずだ、どうしてこれほどまでに、力押しと呼べるほどの発動が可能だったのだ？」

と、ヒーローチームだった2人が聞く。

確かに、フロア1つ分の窓全部、天井、さらに階段、張りぼての柱まで用意するとなれば、八百万の個性の代償になる脂質の消費量はバカみたいに多かつただろう。実際、そこまでの規模を用意するのは無理だと言ってたしな、自分で。

けどそれは……と、私が説明しようとした途端、モニターで見っていたクラスメート達の大半が顔を赤くした。

『あー』とか『そういうえば』とか『あれかー……』なんて声も聞こえる。

上嶋と峰田だけは、なぜかいい笑顔でサムズアップをしてきていた。

よくわからないが、こちらもサムズアップを返しておく。

その光景を見て、きよとんとする蛙吹と常闇の2人。

少しして蛙吹が何か思いついたように、

「……ひよつとして、また栄陽院ちゃんが何かやらかしたのかしら」

「またって何さまたって。失礼な……」

「いえ、でも実際間違っておりますわよ……その、私もアレは少し恥ずかしかつたですし」

隣にいた八百万のまさかの裏切り！

……いや、ごめんなさい。嘘つきました。

私もその……ちよつと恥ずかしいことしたなあ、っていう意識はあります。

「あーそうだね、私も実の所気になってはいたんだ。よければ説明してもらえないかな、八百万少女に栄陽院少女。君たちは準備時間中……」

……なぜかしばらくの間、抱き合っていたのはどうしてだい？ し
かも、栄陽院少女はコスチュームの上着を脱いで」

「……？」

「……ッ!？」

きよとんとする蛙吹。『わけがわからないよ』とか考えてそう。

一方……常闇はやっぱり男の子だからかな、ちよつと戸惑ってた。
頭、カラスっぽいけど。

そして、恐らくモニター越しに見ていたその光景を思いだしている
んだらう……顔が赤くなったり、挙動不審気味になっている男子、数
多。女子の一部もそんな感じだな。

上鳴と峰田は安定のサムズアップ。ああ、そういう意味だったのね
アレ。いいもん見せてくれてありがとよ的な。

もちろん、アレは別に視聴者サービシ的な意味でやったわけではな
い。ちゃんと意味がある。

「あれはですね……私から八百万にエネルギーを譲渡してたんです
よ」

「「……えっ？」」

言つたとたん、皆の赤面や挙動不審が引つ込んで、代わりに驚きや
きよとんとした表情がその場を埋め尽くした。

「エネルギーを……譲渡？」

「……栄陽院ちゃんの言う『エネルギー』ってつまり、この間聞いた、
食べ物を消化・吸収して変換する『エネルギー』のことよね？ 栄陽

院ちゃんが攻撃や防御の時に使う、スタミナや治癒力の代わりに必要な汎用性抜群の」

「そうだよ。そしてそれは……他人に譲渡することもできるんだ」

こんな風にね、と言いながら、私はちようと近くにいた尾白の手を握る。

突然のことに『え!?!』と驚く尾白は……さっきの戦いで轟に氷漬けにされてしまって、あちこち冷えてダメージが残っていた。直接凍らされた足の裏とかに、特に。

それが、徐々に治っていき……顔色もよくなっていく。

びつくりして照れてる様子だった尾白だが、すぐに別な理由で驚きなおしていた。細かい傷がいつの間にか消え、あるいはかさぶたになり、それもあつという間に剥がれる。白かった顔色や肌の色には血色が戻っていくのを見て、啞然としていた。

「え? う、うわ……何か、確かにこう……体があつたかくなって、元気がでてくる、ような……これが、『エネルギー』?」

「そ。体調も体力も、あらかた戻ったろ? こんな風に、蓄えたエネルギーを他人に分け与えて、体力を回復させたりすることもできるんだ、私の個性は。方法はこんな風に、手で触れるとか接触する感じの……まあ、他にもあるけど」

「マジでか……ってことは栄陽院、回復までできるのか」

「恐ろしいのはその汎用性、そして即効性ですわ。どれだけ効率よくエネルギーを補給できる栄養ドリンクでも、消化器官で消化・吸収されるまでには数分から十数分は必要です。しかし、一旦栄陽院さんの体内で変換された『エネルギー』は、譲渡した端から即座に吸収されて体力を回復させますから、その後すぐ動いたり、個性を発動させることもできるんです」

「あ、だからヤオモモ、エネルギー貰った端からどんどん『創造』でトランプとか作れたんだ!」

「……なるほど、汎用性が無類つてのはマジらしいな。八百万の個性発動に必要な脂質の代わりにもなるのか、お前の『エネルギー』は」
「点滴か何かみてえだな」

芦戸と轟が納得したような顔になっていた。あと砂藤、わかりやすい例をどうも。

「おまけにその理屈だと、ひよつとして……ねえ栄陽院さん。栄陽院さんの個性を使えば、例えば……相手の体力を消費させずに回復させたりとかできたりもするんじゃない?」

「お、正解。いいところに気が付いたな……ってか、ああ、緑谷戻ってきたんだ?」

質問が飛んできた方を見ると、いつの間にか戻ってきた緑谷がそこに立っていた。

さっきの試合の後、救急用のハンソーロボに運ばれて行ってたけど……リカバリーガールの治癒、もう終わったんだな。よかった。

……って、アレ? 腕吊ってるけど? 治してもらえなかったん? 「アレ、デク君……腕、怪我、治してもらえなかったん?」

ちようど今気付き、同じことを疑問に思ったらしいお茶子が聞いていた。

「ああ、いや、コレは僕の体力のアレで……そうだった、栄陽院さん」「うん? ああ……そうだよ、私の『エネルギー』の譲渡は、治癒に必要なエネルギーというか体力? カロリー? そのものを渡すのと同じだから、相手の体力は減らない。リカバリーガールの治癒とは逆になるのかな」

雄英高校の養護教諭、妙齢ヒロイン・リカバリーガール(若干のネーミング詐欺)の『個性』は、治癒能力の超強化だ。

その名の通り、怪我人自身の治癒力を活性化させてまたたく間に傷を治してしまうものだけ……治癒には怪我人自身の体力を使う。だから、治すと同時にどつと疲れる……らしい。治癒してもらったことないからわからん。

だから怪我人自身の体力に余裕がなければ使えないし、最悪、治しすぎて体力が足りなくなって『逆に死ぬ』こともあるとか。

逆に私の『エネルギー譲渡』による治癒や体力補充は、私がそのまま体力を補充してやるから相手の体力は使わない。その代り、あくまで治癒力は自分が持つてるものを多少後押しする程度だから……疲

労はともかく、ケガの治癒に関しては劇的には進まない。ちよつとずつ進む。

「……って、ああ、緑谷もしかして、体力足りないから一度に治癒できなかつたとか？」

「あ、うん……昨日の体力テストの時にも怪我しちゃったから、その時にも治癒してて……その上訓練終わりで疲労困憊だから、体力足りないって。それでも、予想してたよりずっと体力残ってたみたいだから、とりあえず応急処置して歩くくらいはできるようにしてもらったんだ。後は、日をまたいで少しずつ治していくしかないって」

「ほー……」

思ったよりずっと体力は残ってた、ねえ。

ふふふ……そりゃよかった。早速昨日のカフェオレが役に立ったみたいだな、緑谷。

ふひひ……やばい、顔が……にやけそう。耐えろ、私の表情筋……あ、そうだ。

「そうだ、それならさ……緑谷、ちよつとこつちおいだよ」

「え？ うん……」

すたすたと歩いてくる緑谷。

その目の前で私は、バサツと学ランを脱いで、ちよつと持つてて、と尾白に預ける。

「え？ ちよ……栄陽院さん？ 何するん……」

—— ぽふ

「!!」

「……っ!!」

そのまま私は、緑谷の小さな体を（私と比べて、だが）、抱き寄せる。身長差があるので……彼の顔は私の胸に押し付けられて押し付けられるというか、埋もれるような形になっている。

「む、むぐ……!!? ちよ、ちよ……ちよちよちよ!!? え、栄陽院さん!!? む、胸、当たっ……ていうか、息が……」

思わず『あててんのよ』って返したくなかったが、我慢我慢。

「あーあー、暴れんな緑谷。くすぐったいから、じつとしてなつて」

顔を真っ赤にしてじたばたと暴れる——私にケガさせないように器用に動かしてるあたり彼の優しさを感じる。かわいーなあ——緑谷だが、よく見ればわかるけど………どんどんその顔色はよくなってきたている。さっきの尾白と同じように、体に血色が戻り、足りなくなっていた体力も補充されて行っているはずだ。顔色は………赤くてわかりにくいけど、ホントにいいぞ？

あと、もぞもぞ動くから、髪の毛の感触とかも当たって………くすぐったいのもホントだ。

……ちよつと汗臭いな。まあ、運動した直後だから当然だけど。でも……嫌じゃないかも。

……待てよ？ やば………ということは私も……

「あーごめん緑谷、ひよつとしたら私、運動した直後だから汗臭いかもしれないけど、我慢して」

（全然そんなの気にならないしむしろそんなこと言われたら意識しちゃうんですけど！ ていうかむしろ、その、昨日と同じでいい匂いがツ………！）

緑谷がやがて抵抗をやめてぴくぴくし始め、クラス全員が嘩然として見守る中………そのままたつぷり30秒ほど抱きしめてから、私は彼を解放した。

……ふう、堪能した。

顔が真っ赤になってふらふらになってる緑谷を解放する。

「は、はうう………」

「で、デク君大丈夫!? 息してる!? っていうか、顔赤っ!」

「いや、あんなことされたらそりゃ赤くなるだろ………」

「緑谷ア……羨ましい………ツ!」

「気持ちわかるけど怖エよ峰田………止めろその血涙」

「栄陽院君! いや、今のはいくらなんでもはしたないというものだぞ! 年頃の女子なのだからもつと慎みというものを持ちたまえ! 大体何だっけいきなりこのような………」

「いや、緑谷が治癒するのに体力足りないって言うから、実演もかねてエネルギー分けてやろうかと。私の『譲渡』さ、密着してる面積が大

きいほど、一度にたくさんエネルギー渡せるんだよ。尾白にやったみたいに手つなぐ程度でもよかったんだけど、それだと時間かかるよなーと思ってる」

「……あ、ホントだ。なんか……すごい、力が戻ってる……っていうか、みなぎってる、かも」

と、どうにか正常な思考能力を取り戻した緑谷が、自分の体の変化に驚いていた。

「授業終わったらもつかい保健室行きなよ。多分そんだけあれば一気に治せるから」

「あ、うん、ありがとう栄陽院さん……でも、出来ればもうちょっと別な方法がよかったかも……」

しかし思いだしてしまったのか、また顔が赤くなる緑谷。

「もうちょっと別な方法ねえ……あるにはあるけど、あつちは流石に私もヤバいなって思うし……」

「「ヤバいってこれ以上!」」

驚愕するクラスメートたち。

一部を除いて（一部っていうか轟）騒然となる中、妙に元気になる奴がいた。

「あーなんか疲れたなー！　なんか出番まだなのに疲れちゃったなー、このままじゃ模擬戦で十分に結果を発揮出せないかもしれないなーあーどうしたらいいんだー!」

「くっ、お、オイラも……畜生、今朝から何も食べてなくて、体力がもう残ってねえぜ畜生……！　誰か、誰か助けてくれ……!」

明後日の方向を向いてうそぶく上鳴と、うずくまって苦しそうにしながらそんなことを言う峰田。峰田は無駄に迫真の演技である。

そしてそんな2人に注がれる女子たちの白い目。

「あのバカ共……」

「魂胆見え見えだね」

「サイテー」

「み、峰田君、そんなにお腹すいてるなら、リカバリーガールに貰ったグミあるけど食べる?」

「要らねえよボケ緑谷邪魔すんな死ぬ」

「小声ですんごい罵声ぶつけられた!？」

「ああいうのが出るから、あんまり軽率にああいうことしちやダメよ、栄陽院ちゃん」

「あーまあいいよ。よし、そんなにご希望ならやってやる、その2人、ちよつと来な」

「あざーっす!」

元気ないんじゃないかなかったのか。

思わずそう突っ込みたくなるほど元気いっぱいな返事と共にこつちに来る2人。つか峰田なんてスキップしてやがる。あるじゃん体力。

まあ、いいけどさー、そんなことはわかり切ってたし。

慌てた様子の子の耳郎が私を止めてくれる。

「ちよ、ちよつと栄陽院ってば、いいってあんたそれ……騙されてるとは思わないけどさ、あんまり甘やかすとあの2人調子乗るからホラ……っっていうか、あんたもうちよつと自分を大事に……」

「大丈夫大丈夫、まあ見てなっつて」

女子たちの、っつていうかクラスメイトたちの心配する視線を受けながら、私は歩いてきた2人の前に立つ。なお、学ランは脱いだまま。

「じゃ、まず上鳴ね」

「はいッ！ お願ひしやスー!」

元気よくてよろしい。鼻の下びろんびろんに伸びてるけど。

直立不動で立つ上鳴に言っつて、肩幅に足を開かせる。

私は左手でその胸倉を（ガシッ!）つかみ、半身に構えて、右手を軽く開いて振りかぶるように後ろに引いて……と、この辺りで何かおかしいことに気づいた上鳴が『ん?』という表情になった。

しかし、もう遅い。

「あ、あの……栄陽院サン？ ちよつとその、何なさるおつもりで？ 何かさつきと雰囲気違……」

「行くぞっ!」

「行くっつて何を!？ 待て、一旦待つてとまっつて! コレなんか毎年年

末のアレみたいなの——」

「闘魂注入！」

——バシィン!!

炸裂するビンタ。

吹っ飛んで倒れる上鳴。

クラスメート一同、沈黙。

「……………え? 何今の……………え?」

「いやホラ、怪我人の緑谷にコレやるわけにはいかないじゃん?」

「これ回復の手段なの!? 余計ダメージ受けとるやんどう考えても!」

「上鳴イイイ! 大丈夫か!」

心配して駆け寄る瀬呂の言葉に、むくりと起き上がる上鳴。あ、涙目だ。

ひっぱたかれた個所をさすりながら……

「痛い」

「だろうな」

「……………けど回復した」

「マジで!?!」

「信じられないけど、ていうかむしろ認めたくないけど……………マジ。力がみなぎってる……………今なら200mくらい全力疾走しても全然疲れないような気がする……………痛いけど」

みんな一様に『信じられん』みたいな顔になって困惑してるが……………さて。

「次はお前だ」

「お、オイラやっぱりその、アレー急にお腹いっぱいになってきたぞ!」

コレはもう何も回復とかなしで行けるからごめんなさい許してアレは嫌ですオイラが悪かったからどうか命だけは——」

「あー安心しろ、お前には違う奴やるから。とりあえず、顔を上に向けとけ」

「お助け……………え?」

私は今度は、ベルトのポーチの中から、ちっちゃい試験管みたいな

ピンを1つ取り出した。中には、白い液体が入っている。それを見て、葉隠が尋ねてきた。

「永久ちゃん、何それ?」

「ただの牛乳だよ、ほら峰田、上向いて顔向けて。私とあんた身長差ひどいんだから」

「へ? 顔?」

きよとんとする峰田の理解を待たず、私はそのピンの蓋を開け、中身の牛乳を口に含む。そして、峰田にむかって人差し指をちよいちよい、と動かし、『来い』とジェスチャーをした。

それを見ていた常闇がはっとしたように、

「……まさか、口移し?」

「!?」

再び驚きに支配されるクラスメートたち。

そしてそれを聞いた瞬間、峰田は一変してスケベ心が前面に押し出された獣の目になり、背伸びまでして『ん〜!』とこっちに目いっぱい唇を突き出す姿勢に入った。

欲望を隠す気ないな……いつそすがすがしい。

今言った通り、私と峰田は身長差が酷い。身長190cmオーバーの私に対して、峰田は100cmちよつとくらいだから、倍くらい違う。

なので、片膝をついて背丈を可能な限り合わせてやる。

皆の視線が集中する中、私は峰田（目が血走っている。唇タコのごとし）の顔を、両側からそつと手で包むようにして持ち………
なんてことはせずに、ぐわし、と乱暴に髪をつかむ。

そして、

——ブフウ——ッ!!

口に含んでいた牛乳を、霧吹きのごとく峰田の顔面にぶっつけた。

「「……………」」

沈黙再び。

牛乳顔面噴射を食らった峰田は、ぽたぽたと顔から牛乳のしずくを

たらしながら、何とも言えないような表情で静かに立っていた。

「……………これはひどい」

「えーと……………栄陽院さん、これは？」

「な？ コレはホラ……………痛くはないけど、見栄え悪いだろ？」

「見栄え悪いって言うか……………ほとんどいじめの現場じゃねえか」

「教育現場では絶対に見せちゃいけないえ光景だな……………」

「み、峰田、その……………大丈夫か？」

恐る恐る、と言った感じで上鳴が尋ねると、峰田は表情を変えずに、
ゆつくりと上鳴たちクラスメートの方に振り返り……………

……………サムズアップをした。

「アリです」

「マジか峰田!?!」

峰田という生き物のストライクゾーンの広さと精神の強靱さ……………
というか、単純にその寛容な変態性にドン引きしている級友達の凶。
やっという何だが、私もちよつとたじろいだ。マジかこいつ……………や
るな。侮れん。

「HEY有精卵たちよ！ 何か私も思わずって感じで見入っちゃって
たけど、栄陽院少女の個性はわかったからそろそろ授業再開するぞー
！ 時間は有限、早くしないと時間内に終わらない！」

と、オールマイト先生の声が聞こえたところで、なんかグダグダと
続いていた話は終わりを告げました。

よし、ここからは私もまた見学側だ、皆の戦いから色々と学ばせて
もらおう。

次出るのは……………あ、峰田じゃん。

第9話 TS少女と自主訓練

戦闘訓練が終わって翌日。

たった1日ではあるが、実戦さながらの本気の訓練、手合わせを経て……うちのクラスは随分と変わった気がする。無論、いい意味で。

各々が自分の戦い方の中における課題に気づけたのはもちろん、今まで気づけなかった自分の『個性』に関する得手不得手、『ヒーロー』と『ヴィラン』というものに対しての考え、等々。

そして、何より訓練を経てクラスの皆と打ち解けて仲良くなることのできた者が多くいた。

かくいう私もその1人だ。

女子とは初日のトークを経てほしい打ち解けてはいた——というか、最初から色々ぶつ飛んだ話をした分遠慮しなくてよくなったというか——な、感じだったんだが、男子とも結構壁が取れて気軽に話せるようになった気がする。

あまり女子っぽくない、って言ったらアレかもだが……男子からすると私はどうやら、女子の割に男子っぽい話題についても普通に話せる相手、みたいな立ち位置になったっぽい。結構遠慮なしなトークを瀬呂や切島と楽しんだりしている。

かと思えば、女子っぽいトークができる男子とかもいるし。

料理、特にお菓子作りが上手いらしい砂藤や、動物好きな口田とかな。

そんな風に性別について考えていると、最近私が元は男だったことを忘れそうになっていることに気づかされる。

……まあ、もうこの性別で生まれ落ちて16年だ。そろそろそういうの吹っ切る時期なのかもしれないが。

年月や周囲の環境、反応以外にも……それを後押しする要素が、つい最近身近に生まれてしまったからなあ……。

私は、話の最中に……ちらつと眼の端に移った、緑の癖っ毛の地味目な少年を見ながら、そんなことを思っていた。

さて、ちよつと意味深なモノログはそのへんにして、と。

今日は『戦闘訓練』の翌日である。

特に何の変哲もない一日だったが……いやごめん、割と変哲あったわ。訂正。

1つ目。私達1―Aは今日、相澤先生のお達しにより、学級委員長を決めた。

最初は投票で緑谷が委員長になったんだが、その後色々あつて飯田がやることになった。

八百万が『残念です……』って落ち込んでた。

やりたかつたのか……ごめん、私飯田に入れちゃったよ。副委員長にはなれたみたいだから、まっ、頑張れ。

そしてもう1つ……なんか今日、教室でご飯食べてたらサイレンが鳴った。

弁当（お重。ファミリー仕様、5段）を取り出した時は、同じく教室で食べてた面々が啞然としてたけど、その後すぐに打ち解けておかず交換大会とか始めた。砂藤の手作りスイーツがめっちゃ美味かった。

で、よりによってそんな風にまったりしてた時に……どうやら学校内に侵入者が出たとかで、『セキュリティ3が破られました』とか何とか。

速やかに屋外へ避難してください、って話だったけど、出入口がすし詰め状態になってとても出られなそうだったので、ちよつと待ってから移動しようかなとか思ってたら、いつの間にか騒動自体が収まってた。

その際、飯田が避難誘導に活躍したことが理由になって、緑谷が委員長を押し付……もとい、委員長の座を譲っていたみたいだ。

ちなみに侵入者はただのマスクミだったらしい。報道加熱って奴だろうか……やだやだ、迷惑。

そして、その日の放課後のこと。

「……戦い方を教えてほしい？」

「うん、その……突然でごめん。でも、こんなこと頼めるの……栄陽院さんくらいしかいなくて」

『今日この後ちよつと時間いいかな？』って呼び出されて、仮眠室で緑谷に聞かされたのが、そんな話だった。

ちなみに場所が仮眠室なのは、あんまり人がいない場所で話したいってことで、どこがいいかと緑谷が考えた結果だそう。知り合いがよく利用してらしいが……誰のことだろう？

「えーつと……まず、何でそれを私に話すんだ？」

「その……栄陽院さんの『個性』が、何となくだけど、僕の『個性』に一番近い気がして……それで、力の扱い方、みたいなものを教われなかなと思っただ。戦闘訓練で見たと思うけど、僕、自分の『個性』を全然制御できなくて……1発撃つたびに戦闘不能になっちゃうから」

「ああ……そう言えばそうだったな。アレやっぱり制御できてないのか」

「うん……」

しゅんとなる緑谷。

しかしすぐに、申し訳なさそうな目をしつつも、視線を上げて真正面から頼んできた。

「だからその……同じ増強系の『個性』を持つてる栄陽院さんの話なら、一番参考になるかと思っただ。似た個性だと、砂藤君とかがいるけど、彼のトリガーは糖分の摂取だから、『制御』っていう点ではあまり似てる点がなくて……でも、麗日さんに聞いたんだけど、栄陽院さんはどのくらい体を強化するかを『制御』してるんだよね？」

「まあ……な。どれだけエネルギーを蓄えてあっても、あんまりその、許容上限を超えて体を強化しすぎると、逆に負担の方が大きくなつて文字通り体壊しかねないし……ああ、言われてみると似てるかもな、私の『個性』って、緑谷のと」

「っ……やっぱりー！」

それを聞いて、まさに希望を見出した的な表情になった緑谷。

その後、今度はそれを真剣なものに引き締めると、

「栄陽院さん、迷惑は承知で……お願いします！ 力の制御の仕方、教えてください！」

「いいよ」

「早っ!？」

腰を90度に折って頼む……と同時に許可を出した。

「い、いいの……? そんな簡単に……」

「まあ、時間がある時とかでよければ。私も色々やることはあるから、その邪魔にならない範囲で、になるけどな。あ、でも部活入るつもりはないから割と時間ある方だとは思うけど」

「十分だよ！ あ、ありがとう栄陽院さん！ お礼は今度必ずするかー!」

「いーっていーってそんなの。多分だけど、私にも利益のある話だし」

「え? 栄陽院さんにも?」

「ん……ああ。ほら、よく言うだろ? 人に教わるのと同じように、人に教えるのも勉強になるって。似たような『個性』持つてる緑谷への指導を通して、私も何か得るものがあるんじゃないかと思ってるさ」

「そ、そっか、成程……」

「それで……いつにする? 何なら今からでもいいけど。今日なんもないし」

「え!?! じゃ、じゃあその……それなら一番うれしいけど。あ、でも訓練スペース使う申請出さないと!」

「それがあつたか……うまいこと空いてるといいな」

雄英高校には、『個性』のトレーニングを行うための訓練室がいくつも存在する。

クラス丸ごと1つの授業で使うような大きなものもあれば、バスケットボールコートくらいの大サイズの、個人で小規模に使う用もある。

使用するには事前に申請が必要になる。いや、別に空いてさえいれば当日申請でも使えるが、向上心豊かな性格の生徒が多いこの学校で

は、人気の訓練室は結構予約で埋まる。

シーズンにもよるけど、既に予約が入ってどこも使えなかったり、何週間先まで埋まっています的な状態であることもあるらしい。定期試験の前とか特にそうなんだって。

今回私と緑谷が使うのは後者（個人で小規模）だ。運よく空いたので、直前の申請でも使うことができた。

「何も設備のない、ただ頑丈なだけの部屋は比較的取りやすいんだけど。よかったな空いてて」

「そうか……僕らみたいな、特定の訓練機材を必要としない目的の人くらいしか使わないからか。本当に頑丈なだけの何も無い部屋だから、何かするなら自分で持ち込まないといけないんだ」

私達が行うのはホントに基礎的な力の制御だけなので、特別な設備は必要ない。

なのでこんな、前後左右上下、全面がコンクリート張りの部屋でも十分なのだ。

……っていうかこの部屋、全面コンクリってことは、国語担当のセメントス先生とかなら一瞬で作れそうな、壊れてもすぐに修理できそうな部屋だな。あの人の『個性』、触れたコンクリートを自在に操れるって奴だったはずだし……案外そうしてたりして。

さて、そんな部屋に私と緑谷は2人である。

「さて、待たせちゃってごめんな緑谷、さっそく始めようか」

「うん、よろしくお願いしますー！」

「ははは、カタいつて。別に私や先生じゃないんだからさ」

そう、私は先生じゃない。

そんな大層な立場じゃない。

確かに私はこれから緑谷、お前を導くだろう。

でもそれは、お前のためでもあるけど……それ以上に、私のためだからだ。

私がそうしたいと思ってるからだ……『本能』で、そうすべきだと思えないからだ。

私がやりたいたいから、お前を強くしたいから……強くなってほしいと思うからやるんだ。

そうすることこそ、私の役目。

そうしたいというのが、私の欲望。偽らざる本音。

この……『無限エネルギー』という個性を持つ者の宿命。

……こないだから、私は緑谷のことを明確に気にしていた。

入試の時からちよいちよい『とくん』と謎の胸の高鳴りを感じ、どうしてなのかはいまいわからないまま、私は彼に惹かれていた。

恋愛感情だとも思えず(元男の精神的な拒否感を考えなくても)、かといって危なっかしい彼に対して庇護欲や母性が芽生えたわけでもない。

なのに、何かにつけて彼を気にしてしまう自分がある。

世話を焼きたいとか、彼の役に立ちたいと、気が付けば思っつて、色々と考えている。

こないだあの『カフェオレ』を渡したのだから、彼が喜ぶ、彼の役に立つだろうと思っつてだ……いや、間違えて買ったのはホントなんだけど、そのあとちよつと『小細工』までしたのは……ね。

……この、ずっと謎だった感情の正体が、最近ようやくわかってきた。た。

がんばるぞ！ と、無邪気に笑う緑谷を見ていると……ずっと前、まだ私が母さんと一緒に住んでいた頃のことを思いだす。

私が……『栄陽院』の名を手にするよりも前のことを。

あの日私は、会ったことも無い自分の父親について、母さんに最初で最後の質問をした。

『ねえ、お母さんはどうしてお父さんと別れたの？』

『それはね……お父さんが、お母さんじゃない人を好きになっつてしまったからよ？』

『お母さんはそれでいいの？ お母さんは、お母さんの全部でお父さんを支えて来たのに……他の知らない女の人に、お父さんをあげ

ちやつてもいいと思ったの?』

『いいのよ。私がそうしたいと思ったの……そう、思ってしまったの。私の全部を尽くして、この人の望みをかなえてあげたい。この人を、大きく育ててあげたいって……だから、私の望みはもう既になつていた。お父さんが笑つてくれて、成功してくれたから、ただそれだけでよかったの。しいて言うなら……あなたを、父親のいない子にしてしまったことだけが、申し訳ないと思うわ』

『んーん、全然いいよ。お母さんと一緒っていうだけで、私幸せだから! でもそうだ……お父さんつて、ヒーローだったんだよね? 強かったの?』

『どうかしらね……ええ、強かつたと思うけど、テレビとかで有名になるほどじゃあなかつたから、知ってる人はそんなにいないかもね。……もう死んでしまったから、猶更ね』

『そっかー……』

『……もし、私の力が、『個性』がもつと強ければ……あの人はもつと強く、もつと大きくなれたんじゃないか……そう思うわ。でも、それは無理だつた……あの人にとつても、私にとつても、あれが限界だつたのよね……』

『? お母さん?』

『……永久、あなたはきつと、私よりずっと強い『個性』を使えるようになるわ……私にはわかるの。この個性の持ち主は、同じように強い『力』に、そして何よりも……『もつと強くなれる力』に敏感なの。だから……あなたもいずれ、きつと出会う。自分の全てを捧げてでも、育てたい、支えてあげたい、押し上げてあげたい……そう思えるような人に。それが、この力を持つ者の宿命。大丈夫、全てはあなたの『個性』が……』
『が、教えてくれるわ』

……ふふふ。

第10話 TS少女と課題分析

「さて、じゃあまず緑谷……あんたがその力を制御しようとする時に、どんなイメージでというか……個性を制御する時、どんな風にしようとしている?」

「い、イメージ?」

「そう。別に緑谷はさ、暴走させようと思って暴走させてるわけじゃないんだろ? 今まで自力でできる分には『制御しよう』してたんだろうし、その内容、って言えばいいかな? いきなり私がどうやってるかかっていうイメージを話すよりは、今まで緑谷がどうしたのかをきちんと把握してからの方がいいと思ってさ」

「そ、そっか……うん。僕は……」

で、聞いてみたところによると……『感覚』だそうです。

え、何? 電子レンジの中に卵? ワット数を下げる? タイマーを短く?

卵が爆発しないイメージを反芻し続けて、ひたすらそれだけで

「アホか」

「うえええ!」

思わず割り込んで言ってしまった。

しかし、仕方ないと思う。

緑谷曰く、そのトレーニング……もとい、制御方法は、緑谷がお世話になったらしいある人から教えてもらったものらしいが……あえて、はつきり言おう。

その人多分、人にもものを教える才能……欠片もないぞ。

「そ、そう……ですかね?」

「……緑谷の尊敬する人を悪く言いたくはないんだけどな、間違いないと思うぞ。多分だけどその人、やりたいことは全部感覚でやっちゃえる、言ってみれば天才肌の人じゃない?」

そう聞くと、緑谷の顔に『どうしてわかるの!』ってわかりやすく書いてあった。表情豊かで見えて楽しい奴だなーホント。

しかし、やっぱりな……そういう人にありがちな思考というか、教

え方だと思つたよ。

基礎の部分というか、初心者に教えるにあたって一番大事な『わかりやすく』教えること、そして、何でもいいから『とっかかりをつかむ』っていうことができてないからな……。

誰だホント、緑谷にそれ教えたの。腹立つ。

コレ、その酷い教え方のおかげで緑谷の成長が阻害されたまでであるんじゃないのか……律儀にそのアドバイスだけ守って修行してたら、緑谷いつまでたっても制御なんて夢のまた夢だったぞ。

まあ、悪気はなかったんだろうし、その人はその人で本当に緑谷のことを思つてたのかもだけど……それでも酷い。

「……よし、緑谷の考え方とか、その現在地みたいなもんはわかった……修業始めるか」

「は、はい……よろしくお願いします」

「敬語はいいって、同級生なんだから……こつちも肩凝るわ」

「まずさ緑谷……できるならでいいけど、その卵と電子レンジでもの考えるの、一旦やめるか」

「え?!? ど、どうして? い、いや、やめたほうがいいって言うならそうするけど……」

「これは私の主観なんだけど……いまいち表現がわかりにくいのと、あとそれそもそも、やっちゃいけない方のことだろ? 電子レンジに卵って、爆発する奴じゃん」

緑谷はそれを、『卵が爆発しないイメージ』でものを考えてるらしいが……そもそも、結果もイメージも『失敗例』あるいは『やっちゃいけない例』を起点にするっていうのがどうも……

「つまり、あの自爆が『卵が爆発』なわけか。まあ、全く間違いないと思うけどさ、イメージするのはどうしても最初に思い浮かべたものに引つ張られちゃうし、そもそも『くする』イメージがすでにあるところを『くしない』に変換するのって相当難しいぞ? やり方がわからないんなら猶更な。それよりだったら、より明確に『成功するイメージ』を思い描いた方がいいと思う」

「成功するイメージ……なるほど。でもだったら、何を思い浮かべれば……オールマイトが必殺技を繰り出して敵を倒すところとかかな？」

「……そういや緑谷って、何かつちゃあオールマイトに結びつけるよな。やっぱりファンだから？」

「え!?! あ、う、うん……そうなんだ。小さい頃からのあこがれで……そそそそれに、この個性もその……同じように増強系だから、どうしても意識しちゃって」

ああ、そういや緑谷って、戦う時にいつも……というか、本気出す時にいつも『SMASH!!』って言うな……アレもオールマイトファンだからか。

根っからのヒーローオタク、あるいはそれを通り越してマニア級だって聞いたし、その情熱が向けられてるんなら、オールマイトのファンでそれを意識してるってのもわかるが……

………何だろうな？ 私の勘が、それだけじゃないと告げているような……。

……緑谷には、いや、その個性には……何か秘密があるのか？

誰にも話したがない………そして、何かオールマイトと関わりがある………とまでは言わないまでも、オールマイトを意識せざるを得ないような、何かが……

………ま、考えても仕方ない。緑谷が話すつもりはないなら、聞いても無駄だろうしな。

とりあえず、今分かっていることで、今ある材料でできることをしていくとしよう。

『オールマイトの必殺技シーン』は、成功した時のイメージにはいいかもしれないけど………現時点での緑谷は、そこに至るまでの道筋が何もできてないからな。イメージを持つのはいいけど、いきなりそこへ向かおうとするのはNGだ。野球のバット持ったことも無い奴が、いきなり打席に立ってホームラン打るとは思わないだろう？」

「そ、そっか………そうだよな。うん」

丁度いい例えが今口からさらっと出たので、コレ使おう。

野球の試合でホームラン打つためには、ただバット持ってバッターボックスに立てばいい……わけがない。そこに至るまで、無数にやることがある。

体を鍛え、ボールを外野を越えて観客席に叩き込めるだけの力を出せるようにする。

バットの握り方を、そして振り方を学ぶ。力を効率的に振るい、そして伝えられるように。

バットにボールを当てられるようにする。当たらなければどうにもならない。

他にもやることは色々あるだろうが、これらをきちんと段階を踏んで身に付けていき、さらに反復練習でその錬度を極限まで上げ、そしてきちんとした性能の、自分に合ういいバットを選んで使うところまでこつて初めて……ホームランという目標に届く。

緑谷にとつての『ホームラン』が、制御を完璧にした一撃だとすれば、そこに至るまでの全てがこいつには足りてないのだ。

あるべき過程がほぼ全て欠落している。これも違和感つちや違和感なんだよな……

「緑谷、もう一つ聞いときたいんだけどさ……前に爆豪がなんかギャーギャー言ってたのを聞いただけんだけど、あんたって『個性』最近発現したの？」

「えっ……あ、うん……入試の直前くらいに、かな。前例がないくらいに遅咲きで……だからその……まだ使えるようになってそんなに時間たつてなくてさ、それもあつて制御とか全然なんだ」

なるほどねえ……錬度不足はただ単に付き合いの短さか。

戦闘訓練の時に八百万が言ってた例えが、まさか正解だったとは……そりやうまく使えるわけないわ。

しかしそれならそれで、余計に『イメージ』だの『感覚』だので使いこなせるはずないだろうに……つくづくその指導をした誰かに対してヘイトが募る。

イメージは確かに大事だ。しかし、イメージ『だけ』でいいはずがない。

何度も言うように、重要なのは積み重ねなのだから。

「緑谷。あんたが『個性』そのものの初心者だつてことを前提にしてアドバイスするけど……まず大前提。『個性』はあんたの体の一部だ。私達みたいな増強型は特にね」

こくり、と頷く緑谷。

「だからこそ、増強型にとっての戦闘とは、例え『個性』を使ったものであっても、それは自分の体の延長上で起こることに変わりはない。緑谷、昨日とか一昨日に触ってみた感じ、あんたは体だけは鍛えられて割と立派なもんが出来上がってる。けど、それだけじゃ多分足りないんだよ」

「もつと体を鍛えなきゃいけない……つてこと？」

「いや、そうじゃない。例えば緑谷、あんたは必殺技を出す時、どんなふうにしてるんだっけ？」

「えっと……腕とか足、体力テストの時は指に……つまり、パワーを発揮させたい部位に意識を集中させて、力んでパワーを集めるような感じで……『SMASH!!』の掛け声で放つ、感じかな」

「なるほど。緑谷、あんたは多分……『個性』を特別視しすぎだね」

「? 特別視?」

「あんた自分の『個性』を、攻撃の瞬間に放つだけの『必殺技』みたいなものだと考えてない?」

「え……?」

「ゲームでコマンドを入力すると必殺技が出てくるように、銃を構えてトリガーを引くと弾が飛び出て相手を殺すように……刹那的な、一瞬の『技』だと考えてる。あんたの『個性』は、『SMASH!!』と叫んだ瞬間の、その拳の一発なんだと。それが全てなんだと考えてる気がする……どう?」

「……言われてみれば、それは確かに……」

ビンゴ。

緑谷にとって、オールマイットの必殺技は、イメージとして特別なものなんだろう。大ファンでよく知っているから、明確にイメージが出来上がってるからこそ、それを再現するかのように力を解放すること

は難しくない。すんなりできる。

(でも、それしかできない……いや、それだけができてしまう、と言うべきか)

やっぱりコイツ、要するに……途中積み上げるべきものをガン無視して、究極の結果だけを簡単に引き起こせるようになってしまったんだ。そりゃ体が耐えきれないに決まってる。

だけど、さっき言ったように、一旦できてしまったイメージを抑え込むのは至難の業だ。なまじ『ぶっ壊れる』レベルの方が『ぶっ壊れない』レベルよりも簡単に想像できてしまうから。後者を想像しようとしても、ふとしたきっかけで前者が出てきてしまう可能性が高い。

となると、今こいつにやらせるべきは……

(……今できてるものを抑えるより、いつそゼロから作った方が早い！)

「緑谷、トレーニングの方針が決まった」

「！ 本当!?!」

「その前に、さっき話した『個性Ⅱ必殺技』理論だけど、特に私達みたいな増強系個性の使い手において、そんなことはありえないと断言しとく。発動型の……そうだね、上鳴や芦戸みたいな個性なら、個性を使った瞬間に狙った事象が起こって……それで終わりだ。でも私達増強型は、今ある肉体を使う以上、使う前から使った後まで、そしてその次の行動まですら、全部一続きなんだよ」

拳や腕だけを鍛えたところで、オールマイト級のパンチが打てるはずもない。

腕につながる肩、肩からつながる胴……腹筋や背筋、ひねる腰、地面を踏みしめる足腰、そしてそれら全てを最適のタイミングで動かす指令を出す頭。

全てがそろっていて、全てを鍛えていて始めて『パンチ』という一撃の威力が生まれる。

実際私は、腕力を強化する時に、腕だけじゃなくそこからつながる全部に、必要な分エネルギーを回して強化するようにしている。

じゃないと、腕の力だけが強すぎて肩が外れたり、腰痛めたりする

こともあるし。土台がしつかりしていなければ、存分にパワーを発揮することなんてできない。

しかし、緑谷の『個性』は、どういうわけかそれができてしまう。それゆえに、その分の負荷が全部腕に返ってきてぶっ壊れる。

「課題は2つ！ 1つ、パンチの威力に負けない『土台』を早急に作る！ そしてもう1つ……パンチの威力を、ひいては自分への負担を抑える！」

「土台……それに、負担を抑える……。2つ目の方は、今までと同じってこと？」

「いや、アプローチを変える。緑谷は今まで、100%の攻撃を抑える方向でイメージしてできなかったんだろ？ だから、その逆……0%から徐々に上げていく形で加減を覚える」

「え!?! で、でも……そんなやり方僕わからないよ!?!」

「だからやるんだよ。そもそも、100%出す方法しか知らないって言う今の状況がおかしいんだ。普通こういうのって、最初はいつちゃん小さい力から使って慣れていって、徐々に使える力が強くなってくもんだろ？ 緑谷はいきなり到達点を最初に使って、それを『目標』にするならまだしも『基準』にしちゃってるから加減がきかないんだよ。だったらゼロから模索した方が早いし确实だし、そもそもそれが本来の順番だ。緑谷自身、コツコツ努力して積み重ねていくタイプだろ？」

「……………」

「体の、そして『個性』の使い方を学ぶ時、一番いい方法は反復練習だ。何回も繰り返し返して体で覚える。けど緑谷は、『失敗⇨腕ぶっ壊れ』だからこの方法が取れない。まさか毎日何回もぶっ壊して、私がエネルギーを渡してリカバリーガールに治してもらおうわけにもいかないし」そんなことしたら『自分の体を大事にできない奴にしてやる治療はないよ!』とか言われて保健室出禁になりそうだ。緑谷には死活問題だな。

そもそも、そんな風に人の体や健康をないがしろにする方法は私も取りたくない。だから……

だから、例えスローペースでも、基礎になる『最低出力』をゼロから作り出すことをやる。

そうすれば、緑谷の中にもう1つ『基準』が生まれる。

今すでにある『100%』と、新しく覚えた『1%』の2つの感覚を生かして……間を取るような感じでさらに微調整する、なんてこともできるようになるだろう。それを繰り返せば、ゆくゆくは自在に力を操れるようになるはず。

そう考えると、『100%を知っている』っていう現状は、必ずしもマイナス面ばかりじゃないな。

そしてもう1つの方の課題。『土台』の形成も……同時に進める。

ただしこれはどっちかかって言うと、緑谷自身に『気づかせる』方が重要だな……『個性』は体の一部』『腕だけ鍛えても必殺のパンチは打てない』……ヒントは既に出した。

この2つを最大効率で同時に進める方法……そしてそこに、若干の私の趣味と欲望を込めて……と。よし。

トレーニング法は……これだ！

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

「ちよ、ちよちよちよちよつと栄陽院さん!? ななななな何なのこの恰好!?!」

「言っただろ、力のコントロールのための修行だよ」

「ホントに!?! これが!?!」

「嘘ついてどうする……ほら暴れんな、くすぐったいだろ」

それは例によって栄陽院さんが僕の体に密着してるからだよね!?!

今僕は、わけのわからない状況に置かれている。

具体的に言うと……栄陽院さんに、訓練室の床に仰向けに押し倒されている。

しかも、ただ倒されているだけじゃなく、両手を力比べみたいにガシツと組んで指を互いに絡めさせ(恋人つなぎっていう別名があった

気が)、その状態で僕の上に体ごとのしかかっている。

そのせいで栄陽院さんの顔がすぐ目の前にあるし、む、胸が僕の胸板に当たって潰れてやややや柔らかい感触がああ！ お腹とか足にも、ジャージ越しとはいえ栄陽院さんの体の感触が当たって……ちよつとコレは本当にまずいよ!?

健全な男子高校生の精神力というか自制心がゴリゴリと削れていく音が聞こえるう!?! そして、万が一にもこんな場面を他の人に見られたりしたら何て言えば!?!

流石に色々とシヤレにならないので、このいたずらにしか思えない体勢をやめてもらおうと……いやもういつそ強引に押しつけようと力を籠めるけど、も、持ちあがらない!?! 栄陽院さん、力強つ……つていうかこの感覚、『個性』使ってない!?! なんでこんなことまでして……

ほ、ホントに許して!?! これ以上はその、反応しちゃいけない部分が反応するまである……!!

そんなことになったら羞恥心で死んでしまう……でもそんな僕の意味はきれいに無視して、生理現象は進んでいく。腰より下に血が回って熱くなっていくのがわかる……。

もうだめだ、おしまいだあ……と思っていたその時、

「いいか緑谷、簡潔に説明するぞ。今私は……『あなたの素の身体能力では、ギリギリ絶対に抜け出せない程度の力』で、あなたの体を抑え込んでいる」

「……え?」

「あんたがこの拘束を振りほどいて起き上がるには、『個性』を使うしかない。しかし、わかるとは思うが、振りほどくのに100%の力はいらない。ほんの1%か2%程度……いや、もしかしたらもつと少なくてもいいかもな。とにかく、あなたの素の身体能力を、ほんのちよつぴりでも超えられれば、それで……腕の力だけで私の体を引きはがせる」

ただし、と栄陽院さんは続ける。

「あなたの『個性』なしの身体能力だけじゃ絶対に無理。体のどこをど

う動かしてもな。重心とか関節とかをうまく使って、そうなるように抑えてる……もうわかるな？ 私は何を言いたいのか」

「……この状態から、最低限の力だけを使って起き上がれ……つてことだね？」

「そういうこと。最大値のあのパワーからして、1%でも発揮できれば簡単だろう。けどあんたはノウハウが全くないから『1%』を上手いこと発揮することもできない。だからそのノウハウを……ゼロから見つけ出すんだ」

「ゼロ、から……！」

「そうだ。時間はいくらかかってもいい、むしろ大いにかける。何時間でも、何日でも、何なら休日でも付き合ってやる。0.1%、0.01%、あるいはもつと少ななくても……意識を向ける程度にでもいい、ちよつとずつ、ちよつとずつ力を使うってことを覚えるんだ。使えない力を使えるようになれば、『使える』だけの力を『使いこなせる』ようになれ！ 今はじやじや馬でも、それは紛れもなく……緑谷の力だろ！」

「……………」

瞬間……緊張とか動揺とか、その他一切の雑念が消し飛んだのがわかった。

同時に、この間の『戦闘訓練』の日……その放課後に、他ならぬ僕が、かつちゃんに言ったことが……脳裏によみがえった。

『人から授かった『個性』なんだ』

『まだろくに扱えもしなくて、全然モノにできてない状態の『借り物』で……！』

『いつかちゃんと自分のモノにして、『僕の力』で君を超えるよ』

自分でも生意気だなど思いつつ、かつちゃんに告げた……弱弱しい決意表明。

……あの場になかった栄陽院さんが、このことを知ってるはずもない。単なる偶然だとすぐにわかる。

それでも……

(そんな風に言われたら……やる気を出さざるを得ないっ……！)

やってやる……身に着けてやる！

僕の『個性』の……『僕力』の！『ワン・フォー・オール』の完全な制御！

——ふによん

(でもやっぱりできればこの体勢はやめてほしいって言うかせめて胸だけでもどかしていただいた方が集中力とか考えた上でも色々とうわああああいい匂いで柔らかくてああああ………)

………あっ

「……！」

「………」

「………」

「………(泣)」

「……緑谷」

「……はい」

「わかっているとは思うけど、一応言っとくと……『そこ』の力でも持ちあがらないからな？」

………死にたい。

第11話 TS少女と個性制御

S i d e . 緑谷出久

「ふう……はあ……ふう……！ つく、う……んんっ……！」

「……なんか、寝転んで私の下になってそういう喘ぎ声っぽいのだし
てる緑谷、エロいな」

「それ……栄陽院さんだけは、言っちゃダメな奴……っ！」

むしろ僕を押し倒してるのは栄陽院さんの方で、どっちかっていう
と襲ってる絵面だし……って、そんなことはどうでもいい。今は、修
行に集中しないと。

栄陽院さんに手伝ってもらって、『ワン・フォー・オール』の制御の
ための修行を進めている僕だが……今の所、情けない話だけど、一向
に進展はない。

前からそうではあるけど、『卵が爆発しないイメージ』で『ワン・
フォー・オール』を使うっていうことが、上手くできない。

暴発しないように使おうとすると、結局何も出てきてくれない。

しかし、ムキになって使おうとすると、暴発して腕が壊れてしまう。
未だに僕は、0か100かでしか力を使えていない。

『個性』は体の一部……僕の個性は最近、しかもオールマイトに貰っ
たものだから、そんなことは言い訳にしかない。体の一部なら、
使おうと思えば自在に使えるなきやおかしいし、使えないのならそれは
僕の努力が足りないだけだ……それはわかってるんだけどなあ
……)

せめて、とっかかりが欲しい。なにか、この力を制御する第一歩に
なるものが。

オールマイトは、感覚だつて言ってた。何でもいい、力を暴走させ
ずに制御できるイメージを持って使うことが大事だつて。

けど栄陽院さんは、『イメージは大事だけどそれ『だけ』でできるは
ずもない』つて言ってた。

力の制御に限らず、何かしら『できない』を『できる』に変えるに
は、すべからく『積み重ね』が必要なんだつて。失敗を繰り返して成

功へ少し近づけるのが一番確実だって。

けど、僕の『ワン・フォー・オール』は、失敗がイコールで大怪我になる。だから、それもできない……失敗しないようにしつつ、手探りで正解への道標を探すべくやってるのが今の訓練だ。

けど、コレはコレで進捗が全く感じられない……手ごたえがないから改良のしようがないというか、ここからどう進めればいいかわからないというか……。

何せこの姿勢、本当に僕の『素の力』だけじゃ、全く、1ミリも栄陽院さんの体、持ちあがらないんだよなあ……。全力で腕を伸ばそうとしても、組んでる場所から全く押せない。

そしてそれがずっと続いている。一瞬たりとも力が抜ける時間はなく、隙をついて一気に押す、なんてこともできない……いや、隙をついて押せても、それじゃ今度は訓練の意味ないけど。

……そう考えると、栄陽院さんはすごいな……
ずっとこの状態のまま、僕が押し返せないギリギリの力を込めて、それを維持してるんだろう。

重心とか関節とかを利用して言うってけど、それ以上に、超がつくくらい精密に『個性』であるエネルギーの操作を行っているんだと思う。必要なだけのエネルギーをこめて使い、継続的に必要な力を腕に発揮させている。

……いや、多分腕だけじゃなく、腹筋や背筋、足なんかにもそうしてるんだと思う。

さつき、つい腕だけじゃなく、時々腹筋とか足とかにも力を込めて動かそうとして、それを助けにどうにか腕を動かせないかな……つて試したことがあった。

結果は、やはり無理。胴体も足も、拘束されていない部分はともかく、やはりこちらでも動かすこともできなかった。まるで、彼女は全身をギプス代わりにして僕を固定しているかのよう。

……昔のテレビアニメに、体を鍛えるためにすごい強力なばねの力のギプスをつけて練習をする野球少年の物語があったらしいけど、それを彷彿とさせるなあ……今の僕の状態。

それにしたって、腕だけじゃなく腹筋も足も全く動かないってことは、そっちも『個性』で強化している可能性が高い。

つくづく便利な『個性』だな、と思う。腕や足だけでなく、その気になれば全身どこでも強化できるんだから。それこそ今なんか、全身そういう風にしてるから僕の方が抵抗する余地がないんだろうし……そう考えると不安になるな、ホントに僕、これ腕の力だけで……

(……………あれ?)

何だ? 今何か、おかしいところが……今考えたことの中に、何か違和感があったような?

見過ごしちゃいけない何かを、さらっと頭で考えて、そのまま流しちゃったような気が……

今、僕は何を考えた? 思いだせ。

(足も胴体もろくに動かせないことからして、栄陽院さんは恐らく、腕だけでなく全身を『個性』で強化してる。それを僕は、僕だけ『腕だけ』で押し返せるのかって……………ツツ!!)

そうか! 『全身』だ! 腕だけじゃなく、他の所を使う……………これだ!

腕は、肩とつながっている。肩は背中と、背中は腰や腹筋と、そして下半身とつながっている。

腕を使って大きな力を使う時、これらの繋がっている部位、ないし筋肉をうまく使えば、同じ腕力でもより大きな力を生み出せる。ましてや、『個性』でそれを強化できるならなおさらだ。

だから僕は、『個性』で全身を強化している栄陽院さんに対して、僕は腕の力だけでそれを押し返すことなんてできるのか、と思った。

ついでに、栄陽院さんは全身強化してるのに、僕だけ腕だけなんてずるい、とも思った。

そこで、ふと思ったのだ。

(だったら……………僕も使えばいいじゃないか! 全身を!)

思えば僕は……………栄陽院さんに、『ほんの1〜2%程度力を出せば、

腕の力だけでも押し返せる』と言われた。

けど……『腕の力しか使えない』とは言われていない。

さらに言えば、僕は無意識に、僕は腕でしかこの力を使えない、ということにしてたけど……思えば、それだって勝手な決めつけ、思い込みだ。

入試の時、足で力を使つて跳ぶことができた。

体力テストの時は、指先の一点に力を込めた。

腕以外で使うことができるんだから、そして、どこか一点に絞つて力を使うことができるんだから……それとは逆に使うこともできるんじゃないか？

つまり……『全身で『ワン・フォー・オール』を使う』ことが、できるんじゃないか？

そしてこれって、今思いついたけど、ひよつとしたらもう一つの『課題』……力を使つても大丈夫な『土台』を作るっていうその答えにもなるんじゃないか？

腕だけで力を使おうとすること、それ自体に無理があるんだ。腕と繋がってる肩や背中も鍛えて強くしてあつて、初めて十分に強い力を、思う通りに、あるいは思う以上に発揮できる。

だったら、あらかじめ全身をそれに……力の行使に耐えられるようにしておけば……力も強まるし、腕への負担・反動も少なくなるはず。

よく考えてみれば……オールマイトだって、戦う時、『ワン・フォー・オール』の力を使う時は、『マッスルフォーム』に変身してる。あれだって多分、力を使う前準備になつてるんだらう。

あのやせた姿、『トゥルーフォーム』のまま『ワン・フォー・オール』を使う所は……ちよつと想像できない。というか、出来そうになり。

それこそ、僕みたいに反動で腕を壊してしまうんじゃないかとすら思えてしまう。

だから、『土台』が必要なんだ！ より強く、より安全に力を使うために。

僕はオールマイトみたいに『変身』するなんてことできないけど……というか、あの変身ホントにどういう仕組み？ あれも『ワン・フォー・オール』の力の一部なんだろうか？

オールマイトは『力んでる』って言ってたけど……力んだだけであんな、体積変わるほどのことは起こらないだろうし……いや、まずはそこはいい。

ともかく！ 今、僕がすべきこと……できるようになるべきことは定まった！

(腕だけじゃなく、全身で……その上で腕を、あるいは、特に腕に力をこめて使う……！ プールに入る前の準備体操と同じ。いきなり使って反動が大きくなるのを防ぐために、『力を使うための力』を間に用意して……いや、そもそもこの考え方がダメなんだ！ 栄陽院さんも言ってたじゃないか、『個性』を特別視しすぎだって、体の一部、使えて当然のものだって！)

かつちゃんは攻撃だけじゃなく、移動や姿勢制御、威嚇にすら『爆破』をうまく使ってた。

栄陽院さんも肉体を強化しての戦闘……そこで、打撃のみならず移動、さらにはこんな訓練中の人間ギプスみたいな形ででも使えている。

麗日さん、飯田君、クラスの皆……幼い頃から『個性』を使って来たからだろう、わざわざ『使う』なんて意識を持たずに、手足を動かすように、当然のように使えている。

『個性』は体の一部、使えて当然の……そこにあって当然のもの……！

僕も同じように、もっとフラットに『ワン・フォー・オール』を考える……！

一発一発が特別な『技』としてじゃなく……

(弱くていい、扱えるだけでいい……常に、全身に……！)

そう強く意識して、全身に力を籠めるようにした瞬間……

にこり、と、

目の前にある、栄陽院さんの顔が……笑った。

☆☆☆

個性『無限エネルギー』を持ち、自画自賛ながら、体内における『エネルギー』の扱いに長けていると自負している私は、他者の体から感じ取れるエネルギーにも敏感だ。

特にこんな風に、密着している状態であれば、なおさらに。

それこそ、まだ流れていない、しかし、『流れようとしている』エネルギーの挙動すら、時に見抜けてしまう。

だからこそ、早くも緑谷が、謎の超パワー個性を『全身で』『少しずつ』使うという発想に至ったことを感じ取った時、思わずにやりと笑ってしまった。

しかし、だからといってすぐさま一步前進、というわけにはいかない。

『全身を強化する』ことで『土台を作る』のはいい。けど、それに回すために肝心な『力の制御』という課題がそのまま残っているのだから。

……だから、もうちょつとだけ手助けしてやるくらいは……いいよね？

「今日はここまでだな……初日だし、まあ、こんなもんだろ」

「うん……そう、かな。でも、全然うまくいかなくて……結局、栄陽院さんに時間使わせちゃっただけだった気が……なんかごめん」

「いいんだって、私がしたくてやってるんだから」

「え？ したくて……？」

「ああ、いや、こつちの話。それよかほら、疲れただろ？ コレでも飲んで」

そうやって私が差し出したカフェオレに、緑谷は『あー』と、ちよつと驚いたような反応を見せた。それは、前に私が緑谷に渡したのと同じメーカーの、同じ商品だ。

運動後で熱いだろうと思って、今回買ったのは最初から『冷たい』で
ある点を除けば。

それを、何か考えこむようにしながらも、『ありがとう』と言って受
け取った緑谷は、キャップを開けてそれを口に含み……飲み込んでか
ら、

「……おいしい」

「だろ？ 私もこのメーカーのは一押しで……」

「……それだけじゃない。何だか、コレ……飲むと力がみなぎって
くるような気がする。あの時と同じ……やっぱり、気のせいじゃなかつ
たんだ」

……おお、気付いたか。

思わずにやりと笑ってしまう私。それを見てかどうかはわからない
が、緑谷はもう一口カフェオレを飲んでからこつちを向いて、

「ねえ栄陽院さん、このカフェオレ……何？ ただのカフェオレじゃ
ないよね？ すごく美味しいし、それ以上に……この力が湧き出てく
る感覚……僕は、知ってる。これって、君の『個性』の……『無限エ
ネルギー』の譲渡の時と同じことじゃない？」

「美味しいのはともかく……よく気付いたな緑谷。その通り、それも、
こないだのカフェオレも……普通に市販の奴だけど、私がちよつと
弄って手を加えたものなんだ」

そう言っつて、私が飲んでいたもう一本のカフェオレを緑谷に『飲ん
でみ』と差し出す。

緑谷はなぜか顔を赤くして困ったようにした。

……ちよつと考えて、間接キスになるからだと気づいたが、そんな
もん気にしなきゃ一緒だと押し切る。恐る恐る、つて感じで緑谷は口
をつけて、ごくりと一口。

「……普通だ。味も……性能も」

「性能で。ははは……んじゃ、ちよつと貸してみ」

緑谷からカフェオレを受け取り、私はそれに……『個性』を使う。

ペットボトル越しに、私の体から『エネルギー』が注ぎ込まれ、カ
フェオレに溶け込んでいく。

エネルギー自体は不可視だ。隣で見ている緑谷には、ただ私がカフェオレのボトルを持っていているようにしか見えないうが……扱っている当人である私は、感覚でそれを理解できる。カフェオレに溶け込んでいるエネルギーの量が、どんどん多くなっていることも含めてだ。

15秒ほどで、その作業は終わり……私の手元に出来上がったのは、『エネルギー』がたっぷり溶け込んだ特製カフェオレだ。

もう一度それを緑谷に渡す。それを口に含んだ緑谷は、

「……やっぱり、僕のカフェオレと同じになってる」

驚いた、しかし納得した顔でそう言った。

「私の『個性』は、エネルギーを他人に譲渡できるのは知ってるだろ？その応用で……食べ物とか飲み物に溶かし込むこともできるんだよ。そしてそれを摂取すれば、体内に入った瞬間、体力を回復してくれる……回復アイテムになるってわけだ」

もつとも、あまり効率がいいとは言えないが。

エネルギーを注ぎ込む際に、一部は霧散してロスしてしまうし、一旦注ぎ込んだエネルギーも、時間と共に少しずつ消失してしまう。今やこの間みために、作ってすぐに食べたり飲んだりしてもらわないとあまり意味がない。

いざという時のために大量に作って、エネルギー入りのドリンクをストックしておく……なんてことはできない。

また、この能力はカロリーの高いものほど多くエネルギーを溶かし込める。

水とかお茶みたいに、ほぼゼロカロリーのものにはあんまり多くは溶かせないし、エネルギーが抜けてしまうのも早い。逆に、カロリーが大きめで、かつ、味が濃い目で、『動物性たんぱく質』に近い性質のものであれば……より多く溶かし込めて長持ちする、という性質がある。

要するに、牛乳やカフェオレなんか最適なわけだ。

もつとも、ロスするエネルギーのことを考えれば、普通に手を握るなりハグするなりして譲渡した方が効率はずっといいわけだが……

コレはコレで使い道はあるんだよな。

今、ちょうど緑谷が、目の前でごくごくカフェオレを飲んでるわけだが……恐らく、その効果というか、私が意図した『使い道』に気づいたんだろう。

「回復する……だけじゃない。体の中に、エネルギーが満ちていく感覚がよくわかる……！　もしかして栄陽院さん、あの時も今も……コレを狙って？」

「いや、あの時はただ……まあなんていうか、頑張ってるから差し入れみたいな気持ちで、ただのお節介だったよ。でも今回は……狙った通りの反応してくれて嬉しいよ、緑谷」

『食物からエネルギーを摂取する』という、本来のプロセスに近い形で取り込むからだろうか……この方法で摂取すると、そのエネルギーが体に染み渡るような感覚がより強く感じ取れるのだ。

そしてその感覚は……『力を体にいきわたらせる』という点において共通しているため、今まさに緑谷がしようとしていることの参考になるはずだ。

ちなみに、味は別に変わらないはずなんだが……人によっては、より美味しく感じることもあるようだ。体にエネルギーがみなぎる感覚が心地よく思えて、脳が錯覚するんじゃないかって、母さんは言ってたっけな。

感覚をつかむため、そして体力を回復させるためっていうのも合わせて、あつという間に私が渡したカフェオレを飲み干した緑谷。

もともと持ってた自分の分もそのまま全部飲んで……飲み終わってすぐに、すつくと立ちあがる。

……何気に2本全部飲みつくされたけど……まあいいか。

「……すうー……はあー……。食べ物、飲み物は、吸収されて体の一部になる……そして、個性は体の一部……なら、今の、エネルギーが染み渡る感覚を追いかけて……『ワン・フォー・オール』を、自分の体の一部にする感覚で……！」

(………？ 『ワン・フォー・オール』……？)

今、多分……緑谷の悪い癖の1つである、独り言をブツブツ呟く癖

が出てるんだと思うけど……何か、気になること言ってたな？ それも、恐らくは無意識に……自分自身気づいてないかも。

何だ、『ワン・フォー・オール』って……文脈からすると、緑谷の個性名か？

しかし、それを聞くより前に……緑谷の体に、劇的な変化が起こった。

——バリ、バリバリ……

弾けるような音と共に、緑谷の体全体に……明るい緑色の火花が散り始めた。

線香花火くらいか、それよりも小さいものでしかないが、手に、足に、胴体に肩に迸るそれは、不思議な『力強さ』のようなものを見る者に感じさせる。

『エネルギー』に敏感な私にはわかる。これは……『兆し』だ。

これから緑谷が強くなっていく、ヒーローとしての高みに駆け上がっていくための……紛れもない第一歩。それが、この現象に現れている。

オールマイトが、戦闘訓練の時に言ってたセリフを思い出す。

『有精卵』とは……よく言ったもんだ。まだ生まれることもできていない……どころか、どんな形に育つかすら定かでない、未熟どころの問題じゃない状態。

卵の中で殻と親に守られ、静かに形ができるのを待ち、漂っているだけの時期。

けど……

(だからこそ……育つのが楽しみになる……！)

全身に散る緑色の火花を自分でも見て、1つのラインを超えたことを確信し、笑顔になる緑谷を見て……私は、自分の抱いていた2つの『予感』が正しかったことを知った。

1つは、緑谷はこれから、飛躍的に強くなるということ。

今まで輪郭さえ見えていなかった、自身の『個性』を……その一端

とはいえ、確かにその手につかんで見せた。彼の勤勉さをもってすれば、ここから怒涛の勢いで追い上げていくだろう。

そして、もう一つ……私が、彼に惹かれる理由。

ちらつと考えた、頑張り屋で危なっかしい彼を支えていたいというお節介な思い、ないしは母性……その予想、ある意味で間違っていないかった。

ただ、そんな微笑ましい感情が根源にあるものじゃなかっただけで。

……私は、彼の傍にいたい、と思っっている。

彼を傍で支え、後押ししたい。彼に強くなってほしい。成功してほしい。ちよつと生意気な言い方をするなら……彼を一流のヒーローに育て上げたい。

まだまだ制御は未熟だが、底知れない力を秘めているのであろう、彼の『個性』。

何事にも一生懸命で、正義感と向上心に満ち溢れた、彼の精神。

それらから導き出される、彼の将来性。頂点にすら手が届くであろう可能性。

それが、私が彼にほれ込んだ理由だ。

未だ残る、私の男としての感性が、彼の不屈のハートを気に入った。

2度目の人生で培った女としての感性が、彼の危なっかしさを放っておけなかった。

そして……最後にもう一つ。

コレは、直感的にしかわかっていないこと。しかしそれゆえに、はつきりとわかること。

私の『個性』が、彼の『個性』を選んだ。

かつて母さんが言っていたことが、少しずつ私にもわかってきた。

(わかったよ母さん……この『個性』を持つ者の宿命、つてやつが……言葉じゃなくて、魂で理解できた)

がんばれ、緑谷……今決めた。

あなたが前を向く限り……私も全力であなたを後押しするよ。

第12話 TS少女と男女感覚

『フルカウル』

それが、緑谷が考えた新しい技の名前らしい。技って言うか、ただ単に今まで体の一部分で、しかも瞬間的にしか発揮できなかった『個性』の力を、全身で使えるようにしたっただけではあるけど……今迄から考えれば雲泥の差なのは確かだ。

現に、『フルカウル』を使うようになってから、緑谷の動きは格段に良くなった。

感覚としては、まだ1〜2%程度しか性能を出せていないとのことだったけど、それでも身体能力は爆発的に上がっている。

入学式の日（入学式をバツクレて）やった、個性把握テスト。同じ内容を『フルカウル』状態でやって記録を再度測ってみたんだけど……上位入りは間違いない記録が出たからなあ。

身体能力が関係ない長座体前屈と、テストの時に指ぶっ壊して大記録を出したソフトボール投げ以外は全部記録更新。そのソフトボール投げも、数字こそ下がったが、総合的な成績としては、クラスでも上位に食い込めるレベルにまで一気に上がった。

まだまだできたばかりの発展途上でコレは……正直、予想以上だな……。

これなら、嬉しくなって技名とかつけちゃうのも仕方ないってものか。

動けるようになったのが嬉しいのか、緑谷は演習場を縦横無尽に飛び回ってはしゃいでる。すごいいい笑顔で。かわいい。

しかし、ちよいちよいずっこけて顔面から壁に突っ込んだり、ダイナミックにしりもちをついたり、顔面から床に突っ込んだりしてしまっていた。

まだ制御が甘い証拠だな。これから安定して使い物になるように、そして徐々に出力を上げていけるように、訓練を重ねないと。

「それはわかるんだけど……わざわざ訓練方法を寝技にする意味ってあるの？」

「こっちの方が、意識してどこにどのくらい力を籠めるかっつのを調整しやすいからな」

床に突っ伏して足を曲げ、伸ばせないようにされている緑谷。

それを、上から覆いかぶさる形で押さええている私。

例によつて、的確な部位に的確な力を、的確な順序で発揮させることができれば簡単に解除することができるので、緑谷がそれを探つて実践するの待ちだ。なお、間違つた力のかけ方をすると、逆に関節とかに負担がかかつて痛い。

こんな感じの訓練を、今日はもう何回も繰り返しているが、流石に慣れて来たのか、緑谷も素早くクリアすることができるようになってきている。

まず足首、次に膝……つま先を支点にしてぐいっつと背中と腰を押し上げる。そのまま腹筋と背筋で姿勢を起こし、僅かに隙間ができたところで腕も振りほどく……よし、達成と。

「お疲れさん。だんだん早くなつてるなー、緑谷。覚えいいじゃん」

「ははは、ありがと……栄陽院さんの教え方が上手いおかげだよ。実際に力を入れる所まで試させてくれるし、本当に助かつてる。ただまあ、出来れば寝技以外の方法もとつてくれたらなく……つて思わなくもないけど……」

「……そんなに嫌か？」

「いや、いやその、嫌つてわけじゃないけど……その、やっぱり、は、恥ずかしいっていうか……」

「……………」

——むぎゆ

「ふおおあ!? ええええええ栄陽院さん!? な、何でだだだだ抱きしめ………」

「いや、なんかかわいいいなーと思つて、思わす」
「かわつ!」

「親戚の小学校中学年くらいの子が生意気にも異性を意識し始めて、去年まで普通に抱つことかしてたくせにちよつと素っ気なくし始めたのをほうふつとさせる微笑ましき」

「二応回い年ですけど!？」

や、わかってるんだけどさ……サイズのにもちようどいっていかね? 絶妙に抱き心地いいし……いやもちろん、きちんと効率を重視した結果として私は人間ギプス役やってるんだけど。

「それに、私自身こうして鍛えて、細かい制御も覚えたから、地味だけど確実に成長見込めるってわかってる方法だし……変な話、愛着というか思い入れもあるんだよ」

「へえ……栄陽院さんも、誰かにこうしてもらって、寝技で覚えたの?」

「いや、私の時は普通にそれ用のギプス使った。けど今持ってないから人力で代用してるだけ」

「あ、そうなの……」

あ、ちなみに緑谷はもう解放してます。

その上で、訓練終了後の柔軟をきっちりやりながら、そんな会話を交わしているところ。まだ顔がちよつと赤いけど、持ち前のストイックさゆえだろうか、筋肉や関節各部のケアは、教えた通りにきちんとやっている。

そんな緑谷に、そろそろ恒例になりつつあるカフェオレ（エネルギーイン）を渡し、

「しばらくはこんな感じで、強化状態での体の動かし方を覚えていこうか。なまじいきなり力が出るようになった分、頭での認識と現実の運動能力の違いが事故につながったりするから、地味なのはわかるけど疎かにできない部分だよ。コレ、経験者は語るって奴ね」

「ってことは……栄陽院さんも制御に失敗して怪我したことあるの?」

「んー。流石に緑谷みたく骨バッキバキってのはなかったけど、勢いつきすぎてパンチと同時に肘と肩脱臼しちゃったことはあった。ただのパンチがそのせいでリーチ伸びてロケットパンチみたいになっちゃってさ、あっはっは」

「は、ははは……面白そうに話してるけど、すごく痛いよねそれ?」

うん。脱臼って人にもよるけどめっちゃ痛いからね実は。

「うまく体が扱えないうちから下手に実践訓練とかすると、そうやって体壊したり変な癖がつくから、基本は大事だつて繰り返し教えられたつけ……体ができてること、戦えること、あと『個性』を使いこなせること、この3つは全部、関係はあれど基本別物に考えるべき。以上、おわかり？」

「う、うん、ありがとう！ すごくためになると……やっぱり、栄陽院さんに頼んでよかった！」

「……本当なら、あんたがお世話になってるっていうその人が真つ先に教えるべきことなんだけどね、これも」

「……………」

何とも言えない気分になったまま、その日の訓練は終わった。

☆☆☆

そんな感じでちよいちよいテンポ崩したり、これまでの緑谷の訓練方法にツツコミどころを発見したりするものの、訓練自体は順調に進んでいます。

今のところは、ほぼ一方的に私が緑谷の面倒を見てるような感じだけど、まあそれは仕方ない。

私は私で自主トレはちゃんとしてるから問題はないし、緑谷が順調に育ってくれば、徐々に私の訓練の相手として、組手とか色々することもできるだろうし。その時に恩というか、かけた分の手間は返してもらおうってことで。

楽しみだなあ……緑谷、あとのくらいで、どこまで強くなるかなあ。

そう考えると、頼りない私の表情筋はいつも簡単に緩んで笑顔を作ってしまい……その様子を横で見ていた砂藤と瀬呂に見られた。

「お、何だ栄陽院、お前そんな風に笑って」

「何だ、腹減ってたのか？ そんなに昼飯楽しみだったのかよ」

「うん？ いや、そういうわけじゃ……な……いわけでもなくもなくない」

「いやどっちだよ」

びしつ、と『なんでやねん』的なジェスチャーと共に言う瀬呂。ちなみに、本物の関西人（だと思う）である麗日は学食派なのでここにはいない。今は昼休みであり、同時に我々生徒たちにとっては待ちわびた昼食の時間である。

瀬呂もいつもは学食派らしいのだが、時々こうして教室に残って、私や砂藤など弁当派の面々と一緒に食べることもある。

理由というかそのきっかけは、偶然学食に行くのが遅くなった日に、私達の昼食シーンに遭遇したことだった……と思う。

実際、今日も何やら期待するような目でこつちを見てるし。

「それで？ 今日はどうなの作ってきたんだよ栄陽院？」

「瀬呂、何そんな期待するような目で見て……自分のあるんだからたかるのやめなよ」

「いやいやいや、たかるってそんな人聞き悪い……ただのホラ、ほほえましい弁当交換じゃん。女子高生とか教室でよくやるアレだって、何もおかしくないことないって」

「お前ちよつと自分の性別言ってみ」

「けどよ栄陽院、たかり云々は別にしても……お前の昼飯、っていうか弁当に注目すんなってのは無理だろ。見た目からして」

そんな風と言う砂藤のしている前で、私は鞆から弁当箱を取り出し……机に置く。

——ドスン。

弁当箱らしからぬ音と共に。

たった今、私の学習机の面積の半分近くを占領して置かれたのは、黒塗りのお重タイプの弁当箱（5段重ね）である。運動会とかのイベントの時に主に活躍する、家族全員で食べる前提のサイズのアレだ。

ちなみに、それが入っていた私のカバンは登山用リュックである。教科書とかいれても余裕ある容量だし、手も自由になるので、長年のお気に入りだ。

で、その弁当箱をさらに段ごと分割して展開する。あつという間に私の机だけでは足りなくなつたので、周りの机……尾白や砂藤、あと

ここにはいないけど飯田のも（許可は取ってある）合体させてそこに広げる。

必然、机を貸してもらってる砂藤とかとは一緒に食べることになるわけで……それがきっかけで仲良くなった感じである。

特に砂藤は、自分も弁当を自ら作って持参することも多いお弁当男子なので。人は見かけによらないもんだ（失礼）。

そして、机を一部貸してもらってる面々には、迷惑料として私の弁当をちよつとつまんでもいい権利をプレゼントしている。自分言うのもなんだが、割と好評である。

ちなみに瀬呂は特にそのへん関係ないのだが、一回私の弁当風景を見てからは時々交ざりに来る。

いやまあ、いいんだけどね？ みんなでワイワイ食べるのとか嫌いじゃないし。ちよつとわかるくらいなら全然……ただ、あんまり行き過ぎたあたりとかには断固として対処するけども。

この日の弁当タイムには、砂藤と尾白に加え、飛び入り参加で瀬呂と葉隠、それに八百万が参加している。後ろの2人は初だな。

「わー、すつごーい永久ちゃんのお弁当！ 今日豪華ー！」

「豪華……というよりは、豪快、って感じだな。メニューも何かこう、がつつりしたものが多いし」

「あ、それは確かに言えてるな……とりあえず好物全部突っ込んだ感じに見える」

「和洋中全部入ってるな……いやでも、どっちにしろめっちゃ美味そう」

ちなみに今日の弁当の中身は、主食のおにぎりに加え、弁当定番のオムレツやハンバーグ、鶏のから揚げ、牛肉のしぐれ煮、きんぴらごぼうに海藻サラダ、餃子、シユウマイ、小籠包などなど。

うん、瀬呂のツツコミに反論できん。実際に適当に今日食べたいもん作って突っ込んだし、冷凍食品そのまま突っ込んだ横着メニューも多い。

「確かに美味しそう……ですが、少々栄養バランスに難がありませんか？ 野菜が少ない気が……お肉ばかりでお魚も食べた方がよろし

いかと。味付けも濃そうですね……」

「いやーじゃん八百万、こういう味が濃くてカロリーも高い料理好きなんですー私は。あと野菜は多分足りてるから、絶対量的には」

「……確かに、野菜も量はあるんだよな……全体の量が多すぎてバランスは壊滅的だけど」

「お重の1段全部ハンバーグってすごい光景だねー……わんぱく男子の夢ではあるかもだけど。……って、アレ？ 形が微妙に違うのが混じってる気が……」

「お、よく気付いたね葉隠。ここからこつち側はスコッチエッグなんだ」

「10個くらいあんだけど……卵1パック丸々1食分の弁当に使うってすげーな。でも美味そうだから1個貰っていいか？」

「いいよいいよ、持ってって。いっぱいあるから。あ、瀬呂、その漬物美味しそうだね？ 自家製？ 貰っていい？」

「おう、いいぜ。じゃ俺、さっきからから揚げが気になってるから貰うわ。見た目からして柔らかくて美味そうだってわかるもんな」

「じゃあ俺は……小籠包もらっていい？」

「いいよー尾白。あ、砂藤、スコッチエッグ食べるなら端の方にソースあるからお好みでどーぞ」

「餃子が美味しそう……でも、午後も授業あるのにニンニクの匂いが出てしまうのは乙女としてちょっと気になる……」

「あ、葉隠。この餃子弁当用のニンニク抜きの奴だから匂いの心配はいらないよっ。」

「よっしゃいただくー！」

「で、では私は牛肉のしぐれ煮をよろしいでしょうか。実は先程から気になってまして……」

そんな感じで、時に軽口を交えつつ楽しい弁当タイムを過ごす。いいなー、こういう時間。

美味しい食事は偉大だ、あつという間に人と人を仲良くさせる。

私の場合、弁当の見た目とそれを完食する私自身のインパクトもあつたかもしれないけど、それがきっかけに打ち解けていけたのは確

かなわけだし。入学してまだ数日だったのに、こうしてクラスの男女が交ざって仲良くお弁当トークできるくらいに仲良くなってるんだから何も問題ない。

まあ私の場合、まだ確かに私の中に残っている『前世：男』の価値観が、男の子相手のトークをしやすくしているってのもあるのかもしれないけども。

小学校とか中学校の時からそうだったからな。女の子ならちよつとついていけない、あまり興味を持たないどころか話題にもしたがらないような事柄でも、私は男子に交じって熱く語ることができたから、私の交友関係の起点は女子よりも男子だった気がする。

女の子がテイベアや着せ替え人形、可愛いデコレーション小物の話をしている傍で、変身ヒーローやカードゲームの話題に花を咲かせたり……男子に交じってサッカーや野球、バスケットかしたこともあったっけな。

地元であったカードゲームの大会で優勝した時は、決闘者^{デュエリスト}としての弟子入り志願者が殺到したこともあったっけ。

しかもその時使ったのが、かわいい女の子系のモンスターで固めたお色気デツキだったっけ……あんなんでよく勝てたもんだ。あの時の私はやんちゃだった……。

まあ、年齢を重ねるうちに徐々に女子の価値観とかもわかるようになってきたから、中学も半ばになるくらいには、どっちにも適応可能なハイスペック(?)ボーイッシュ女子が完成してた。

代わりにその頃には、体型はボーイッシュとは言えなくなってたから、否応なしに女子扱いする男子が大半になっちゃったけど。ちよつと寂しかったな。

私はもう、今世の性別は『女』だと割り切ってはいるし、人格も女だと思っ。

が、心のどこかに『男』が残っているのも確かだ。

私は、中学時代に何度か男子に告白されたことがあるが、それらは全部断ってきた。

好みじゃないとか、恋愛する気になれないとかじゃなくて……単純

に、男を『異性』として見ることができなかつたからだ。恋愛の対象として、心躍る青春時代を過ごす相手として、どうしてもイメージできなかつた。

かといって女子相手だつたらそういう気になるのかつて言うと、それも微妙なんだよなあ……体に価値観が引つ張られてる部分も確かにあるから。

女子を見て可愛いと思つたことは何度もあるし、心の中に残る『男』の部分が反応したりすることもなくはない。女子更衣室とか女子トイレを使う時に、緊張しなくなり、罪悪感も覚えなくなるまで随分かかつたもんだ。が、それでもやはり恋愛の対象にはならない。

じゃあ結局私はどうしたいんだ、っていう話になるわけで。

男も女も異性として見れないなら、私は将来どういう道を行くのか。生涯独身のまま人生を終えるのか、なんて言う風に何度も考えたが、答えは出なかつた。

その答えは、今も出ていない。

尾白や砂藤、瀬呂を、一緒にバカ話をしていて楽しい男友達として見ることが出来る。

葉隠や八百万を、女子特有のスキンシップもありのおしゃべり友達として見る事が出来る。

それは友達という関係だからだ、と言えばそれまでだけど……結局私は、中途半端に男と女の価値観がまじりあつた感覚を根付かせてしまったような気もしてならない。

男子に対して親しみやすい性格である一方、危機意識みたいなものが希薄で、平気で薄着になつたりするから無防備で不用心だ、って何度も女子に注意されたことがある。

男性のようでもあり、女性のようにもあり……しかし結局そのどちらとも言えない。

長らくそんな感じで、なあなあにしてきた私に……しかし今、確かに一石が投じられようとしている。この所毎日のように、放課後に一緒にいる少年によつて。

……………ふふふ。

「おい、また何ニヤニヤ笑ってんだよお前。そんなに美味かったか瀬呂の漬物」

「あ、いやそういうんじゃない。ごめん、ただの思いだし笑い」

「むむつ、その思いだしたものは一体……先程の幸せそうな顔からしてズバリ、それは男の子だね永久ちゃん！ アオハルだね！」

「ええつ、そ、そうなのですか？」

……葉隠、鋭いのかあてずっぽうなのか、はたまた適当に言っただけなのか……

「そういうんじゃないって、今の所その手の話は影も形もないし……ていうかこのたった数日だけの付き合いでもわかり始めて来たけど、葉隠ってそういう話題好きだね」

「そりやもう！ 花の女子高生ですからコイバナは好物ですともー！ ねーホントにそういう話ないの？ 割とさっきのにやけ顔はホントにビビツと来たんだけど」

「コイバナレーダーの感度調整し直しな。目下私の恋人は家にある特大フライパン（焦げ付き防止加工）とそれで作る料理だよ」

「栄陽院お前……男の俺が言うのもんだけどよ、それ女子としてどうなんだ？ よくOLとかが『仕事が恋人』とか言ってるのと同じくらい哀しいだろ」

「そうだよ永久ちゃん。一度しかない高校生活だよ！ レモン味の甘酸っぱい青春時代を送ろうよ！」

「私の青春はデミグラスソース味なんだよ」

「こんな『色気より食い気』を地で行く女子初めて見たぜ……」

……こんなこと話してたらそりや女子扱いされづらいわな。

第13話 TS少女とUSSJ襲撃

「一塊になって動くな！ 13号、生徒を守れ！ アレは……敵だ！」
1-Aの面々が『人命救助^{レスキュー}』の訓練ということで訪れた、『ウソの災害や事故ルーム』……略して『USSJ』。

そこで、今まさに授業が始まろうとしていた時……黒い靄のようなものの向こうから現れた、大小様々、人型に異形に入り乱れた、統一性のない集団。

共通しているのは……こちらに対する『悪意』。この一点。

色々とツツコミどころ満載のこの場所にて、彼ら・彼女らは、プロヒーロー達が相手にしている、本物の『敵』、本物の『悪意』を相手にすることとなる。

☆☆☆

……よし、ちよつとばかり状況を整理しよう。

私達は今日、ヒーロー基礎学で『人命救助^{レスキュー}』の訓練を行うために、バスに乗って広大な雄英の敷地内のどこかにある演習場を目指していた。

そのバスの中では、皆思い思いに会話を楽しんでいた。あまり騒がしくなく雑談するくらいなら、相澤先生もうるさく言う気はないみたいだったし。

そんな中でも一時特に盛り上がったのは、やはりというか『個性』に関する話題だった。

「あなたの個性、オールマイトに似てる」

自分で曰く『思ったことを何でも言っちゃう』らしい蛙吹がそう言ったのを皮切りに始まった会話。緑谷はそう指摘されて、照れてるのはたまたま戸惑ってるのか、とにかく慌てていたように見えた。

「待てよ梅雨ちゃん、オールマイトはケガしねえぜ？ 似て非なるアレだぜ」

そう切島が反論してきたので、注目はそっちに移ったけど。

それを聞いた時、私は『ああ、そうか』と思った。こいつらまだ、緑谷が個性をうまく使えるようになりつつあるんだってことを知らないんだっけ、と。

あれ以来、個性を使って全力で戦闘するような訓練はなかった。そもそもコスチュームを使って訓練に出るのだって、戦闘訓練から間が開いて、これが二回目だし。

なお、緑谷のコスチュームは爆豪とのバトルで破損してまだ修理中らしく、今日は体操服に一部のコスチュームパーツ……手袋やマスク、ブーツやベルトをつけただけでの参戦だ。

……元々のコスチュームが地味め(麗日曰く『地に足付いた感じ』とのこと)だったのもあって、あんまり印象変わらん……。

むしろこつちの方がカッコいいというか、似合うというか、私はそう見える。

というか、雄英のジャージって結構『ださい』って言われて評判悪かったりするんだけど、そんなにダサイかな……私は結構好きなんだが。

まあ、私も今日はコスチュームで来てるが。せつかくあるんだから着ないともったいないし。

「しかし『増強型』のシンプルな『個性』はいいな！ 派手でできることが多い！ 俺の『硬化』は対人じゃ強エけど、いかんせん地味なんだよな」

「僕はすごくカッコいいと思うよ。プロにも十分通用する『個性』だよ」

「プロなー……しかしやっぱプロも人気商売みたいなどこあるぜ？」

それに、派手で強いつて言ったらやっぱ轟と爆豪だろ」

「でも爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気出なさそ」

「んだとコラ出すわ！」

聞いてて楽しい会話だな、なんて思っていたら、

「俺は栄陽院や八百万の方が注目株だと思うね。派手さじゃ爆豪や轟には一歩劣るけど、今切島が言ってたように、あの2人はできること

がめつちや多いだろ？」

あら、私が話題に上がった。

しかし離れた席にいたので、私自身は話に参加できず。聞くだけである。まあいいけど。

「ああ、それは確かに……今考えると『創造』ってほぼチート級だよな。構造知ってれば何でも作れるんだろ？」

「でも分子構造から細かく理解していないといけないらしいから、本人の知識と経験、努力ありきの『個性』だと思うよ。八百万さんがそれだけ努力を積み重ねて来たからこそ、あそこまで万能な、汎用性の高い個性として使いこなせてるんだと思う」

私の斜め前に座っている八百万の顔が……ポーカーフェイスでどうにか耐えてるけど、よく見るとちよつと赤くなっている。嬉しいのね、褒められて。

「あー、それは確かに……俺、仮に八百万の『個性』持ってたところで使いこなせる気しねえよ」

「お前が持つっても作れるのはテープくらいだろ。なじみ深い物質」

「それ今と変わんないじゃん」

「うっせえな、お前だつて似たようなもんだろ上鳴！ 単三電池がせいぜいだろが！」

「はっ、バカ言うんじやねえよ、電池の仕組みなんて知らないから作れねえっつーの！」

「いやあんた大威張りで何を盛大に自虐してんの？」

「使いこなせないって言えば……緑谷ちゃんが個性を使いこなせるようになったら、栄陽院ちゃんみたいにすごいパワーとスピードで戦えるのかしら？」

「ど、どうかな……多分そうだと思うけど……。つていうか……」

「あ、やっぱり緑谷の『個性』って制御できねえからあなんだな。俺てつきり、自分の体の一部を犠牲にして超パワーを出す的なやつなのかと思ってたわ」

「え、あ、いや、そんな自爆技的なものじゃなくて……ごめんなさい、ひとえに僕が未熟なせいです……で、でも……」

「いやそんなガチで落ち込んで謝らんでも……」

「そうそう、前向きに行こうぜ緑谷！ お前が修行すれば栄陽院みたいに戦えるようになるかもしれないんだからよ！ 一緒に頑張ろうぜ！」

「き、切島君………ありがとう。僕、頑張るよ！」

そう、切島のエールに感激して言ったかのように見える緑谷だが……ちらつと私が見ると、若干顔色に気まずそうな部分が混じっているのが分かった。

多分だが……すでに多少は制御できるようになっている、っていうの言い出すタイミングを逃したからだと思われる。

会話の端々で言おうとした感じだったのに、ことごとく割り込まれてたな。哀れ緑谷。

「でもそれを差し引いても、栄陽院ちゃんの『個性』は強力よね。使い方次第で攻撃に回復、味方のサポートすらもできるんだもの」

「だよな。事前に充電しとかないといけないっていう制約はあるけど、それを差し引いても余りあるっつーか……何より貯蓄上限無しってやべーよ。日頃からコツコツ溜めといて、有事に一気に放出する、なんてこともできるわけだろ？」

「都度補給するにしても、アイツ超早食いで大食いだから、補給も手間がかかんねえし一気に行けるもんな。車とかで移動中に飯食つとけば、現場ついてすぐに動き出せるわけだし」

「え、瀬呂何でお前そんなこと知ってんの？」

「いや、昼休みによ……」

こんな感じで雑談に花を咲かせていられるうちは、まー平和なもんだった。

当たり前だけど、この時の私達は……この後、こんなことになるなんて、思ってもみなかったのだから。

それからしばらくして、『USJ』という、ツツコミどころ満載と云うか、裁判沙汰にならないのか心配と言うか……色々な不安を掻き立てられる施設に来た私達は、担当である13号先生と合流し、『個性』

を使うことに関してのちよつとしたお小言……しかし、忘れちゃいけない大事なことについて聞かされた。

その話が終わった後、いざ授業が始まるってタイミングになって……突如、施設の中心部付近に謎の黒い靄みたいなものが現れ、そこからわらわらと不審者の集団が湧き出してきた。

それを見て、血相を変える相澤先生。一気に塗り替わっていくその場の空気。

瀬呂が『また『訓練はすでに始まっている』的なアレか?』と呟き……実際にその通りだったら楽だったんだが……残念なことに、今度はマジ物の『敵』^{ヴァイラン}だという。

私達生徒を逃がすために相澤先生は1人で何十人もの敵の中に突っ込み、私達は13号先生に誘導されて避難を開始。

しかし、行く先にさっきの靄……かと思ったらなんか微妙に人の形をしてる、どうやら異形型個性らしい奴が現れた。しかも、あの黒い靄ってワープゲートの能力を持ってるらしく、何も無いところから突然現れたし。

おまけにそれに対処する際、爆豪と切島が13号先生の前に飛び出して攻撃し(しかもそれ効いてなかったし)、射線を塞いじまったせいで対処が遅れて……

「私の仕事はこれ。散らして……罫り……殺す!」

私を含む、クラスメート達の大半が、黒い靄に包まれ……次の瞬間、ここに転送されていた。

「で、(ここ)は……どこだ?」

「た、多分だけ……火災現場を模したエリア、ってところじゃないかな? USJはもともと、災害現場での救助訓練のための施設だから……」

「この熱っちい空間はそれでか。訓練施設とはいえ、実際の現場と変わらないな……リアリティもここまでくると……先生方の監督なしで行動するの、ガチで危険なレベルだな。さすが雄英!」

一緒に飛ばされたらしい尾白と、周囲の状況を確認しながら。

周囲はビルや家屋が立ち並び、それらのほとんどから火の手が上
がっているという状況だ。

まさしく災害現場を模して作られている完成度の高さには驚かさ
れるし、ここで『学べる』というのならこの上なく恵まれた学習環境
だと言えただろうが……どうやら、今は違うようだ。

あくまでここで本来行われるのは『訓練』。生徒に危険が及ばない
ように見ていてくれる先生方がいない今、ここは火災現場そのものと
言っている。

そして、私と尾白はここに放り出され、取り残された……半分、被
災者のような立場だ。

しかも、並の人間ならこれだけでも割とピンチだろうに……危険は
それだけじゃないと来た。

「来た来た……こいつらを殺せばいいんだな？」

「おう、ボーナスだボーナス、へへへ……」

「ちっ、たった2人かよ……もつと送ってくれりゃいいのに、しけてや
がる」

周囲にぞろぞろと現れる、数人じゃ利かない数の不審者たち。

恐らくは、いや間違いなく……全員『敵』だろう。

これから何をするつもりなのかがわかりやすいというか……聞く
手間が省けた。

なぶり殺す、なんて言うくらいだもんな。こんな場所に送り込んで
それでおしまい、なわけがなかったか。

服装に統一性はなし。動きを観察するに……そこまで強くもない
な。

会話の内容からして、金で雇われたゴロツキか？ 仕事は、飛ばさ
れてきた私達の抹殺だな。

「おい、なんかよく見たらいい女もいるじゃねえか？」

「ホントだぜ……へへっ、殺す前にちよつと遊んでやるのもいいん
じゃねえか？」

「バカ、時間あんまりねーって言ってただろうが、そんな暇ねーよ……
やるんなら攫って帰ってからゆつくりと、だ」

「ぎゃははは！ お前話わかるじやねーか！」

うつわあ……しかもこういうタイプか。典型的小悪党だー……。

困んでるほとんど、つていうか全員が男だから、舐めるような視線が私の全身に注がれるのを感じる。改造学ラン着てるとはいえ、前は大きく開いててコルセット着てるから、体の線結構出てるからなあ……野郎連中が欲情するのには十分な刺激だったか。

「聞いた尾白？ 私このままだとこいつらに酷いことされちゃうんだって。エロ同人誌みたいに」

「冗談でも笑えないから今はそういうのやめよう、栄陽院さん……いざとなったら君だけでも逃げてくれ、僕が食い止めてみせるから」

あー、ガチな上にイケメンな返答……ちよつとドキッと来た。

なるほど、普通の女の子はこうして恋に落ちるのか。

尾白は、自身も感じているだろう恐怖や不安を押し殺して、一步も引かない覚悟で、敵達の前に立ちはだかっている。

その姿を私は、素直にかっこいいと思ったし……正直、緑谷と出会っていなかったら、ちよつと危なかったかもしれん。クラツと行きかけたかも。

(……私つてもしかして、チョロい？ い、いやいやいやいや、そんなわけは……)

消える雑念。尾白にも緑谷にも失礼だ。

さて、気を取り直して。

もしこれがエロゲーなら、こいつらの言う通り、私はこの後、果敢に戦うも数の暴力の前に敗北し、年齢制限のかかるシーンにまっしぐらな末路をたどるだろう。

それこそ、かの有名な『くっ、殺せ！』とかいう展開になってしまいい、しかし殺されるより残酷な、女としての地獄を延々味わわれ、強気な仮面が？ がれて涙ながらに許しを請うようになり、ぼろ雑巾のようになるまでお楽しみのお道具にされ、最後には惨たらしく殺されるか、どこかに売られるかしてしまうのだろう。

尾白はその前に殺されるのかもしれないし、もしかしたら目の前で延々『その光景』を見せつけられ、死ぬよりも残酷かつ屈辱的な形で

己の無力を突きつけられるのかもしれない。

……ここまでよく一瞬で想像できたな私。さすが元・男。

しかし、敵諸君には残念なことながら、私はお前らに見せてやるほど安い肌は持たない。

代わりと言っちゃなんだが、午後10時台のドラマならギリギリありそうなセクシーシーンくらいなら披露してやろう。

——ぎゅっ

「っ!? え、栄陽院さっ、何して……あ……」

尾白に後ろから抱き着く私。

その光景を見て、一瞬きよんとした敵達だが、すぐに自分達に都合のいいようにその光景を解釈し直す。

「あん、何だおい、やっぱり怖くなっちゃまったのかよお嬢ちゃん!」

「ぎゃははは! タツパはあるくせに可愛いとこ見せてくれるねえ!

おら彼氏、おっぱい大きい彼女が怖いってよ! 悪者をやっつけて助けてほしいってよどうするう?」

だみ声で煽り文句を飛ばしてくる敵達だが……その中心にいる尾白は、一瞬驚いていたものの、すぐに今何が起こっているか……というか、私が何をしているかを理解していた。

自分の体に流れこんでくる、膨大なエネルギーによって。

抱き着いていた時間はほんの数秒。しかし、全速力で注ぎ込んだ。

「……これで、10分くらいはノンストップで動けると思う。ちゃんと2人で生きて帰るぞ」

「っ……ありがとう、栄陽院さん!」

短く言葉を交わして離れると、私は私で、尾白と背中合わせになるように立ち、拳を握ってファイティングポーズを取る。その様子に、笑っていた男たちが『あん?』と怪訝な表情になる。

「何だよおい、今更やる気にな——」

「いきなり300%だアアッ!!」

——ドゴォ!!

言い終わる前に一瞬で距離を詰め、ひときわ大柄なその男の鳩尾に拳を叩き込む。

男は息が詰まって声が出なくなり、体を『く』の字にまげて、あまりの衝撃に体が宙に浮く……どころか、吹き飛んでいつて火災現場のビルの壁に突っ込んだ。

そのままめり込んで、落ちてこない。気を失ったのか、身じろぎもする様子はない。

「……は？」

余りに想定外のことが起こったからか、咄然として動かなくなる敵達。

チンピラっぽい割に喧嘩慣れしてないな。敵を前にして棒立ちの上視線を外したままとか、自殺行為にもほどがある。

すぐ近くにいた別な敵にリバーブローを突っ込んで吹き飛ばし、その隣にいた別な奴をひつつかんで膝蹴りを叩き込む。

このへんで一部の敵が再起動し始めたので、今膝蹴りでオトしたそいつをまた別な敵に投げつけて怯ませ、飛び込んでその顔面に飛び膝蹴りを叩き込む。

後ろから襲って来た敵の攻撃を体をひねってかわし、一瞬かがんで……立ち上がる勢いも乗せて渾身のアツパーカットを叩き込む。打ち上げ花火のごとく吹っ飛んだ敵は、ちょうどその先にあったビルに突っ込んで、最初に吹っ飛ばした奴と同じように沈黙した。

その直後、視界の端に大きく息を吸い込んでいる敵がいるのを見て、私は学ランを翻して盾にするように目の前に広げる。その瞬間、その敵が吐いた炎が襲い掛かってきた。

「火災エリアに配置されるくらいだ、そりゃこのフィールドに有利な個性の奴置いてるわな」

しかし、耐火性能ばっちりの学ランはそれをやすやすと防ぎ、渾身の攻撃が効かなかったことで隙だらけの姿をさらしているそいつの顎を蹴りぬいて沈黙させる。

学ランを着なおしながらふと目をやると、尾白もあつちで獅子奮迅の活躍を見せている。

何人もの敵に同時に襲い掛かれながらも、尻尾をうまく使って立体的に動き回り、かすらせることすらなくその攻撃をいなし続けてい

る。

そしてその合間に、時に拳で、時に蹴りで、時に尻尾で一撃を叩き込み、ヒットアンドアウェイの要領で1人1人着実に敵達を沈黙させていく。

淀みない連続した動き……武術やってるとは思ってたが、予想以上の錬度だな。

あ、今なんか不用意に飛びかかってきた敵を、3人まとめて薙ぎ払うように尻尾で吹っ飛ばした。ありやまとめて気絶したな……。

(すごい……！ 栄陽院さんの『個性』によるブースト、ここまでのものだったとは！ パワーもスピードも大幅に上がったし……休まず動いても息が切れない、全然疲れない！)

「尾白ー！ やりすぎて死人出すなよー！」

「今まさにつ……それが冗談でも何でもないことを痛感してるよっ！」

「そりや何よりだ！」

さて……あつという間に半分くらいは切ったな。折り返し地点は過ぎたってことで……もうひと踏ん張りだ！

第14話 TS少女と脳無と死柄木

S i d e . 緑谷出久

水難ゾーンに飛ばされた僕、蛙吹さん、峰田君は、峰田君の個性と僕の『ワン・フォー・オール』の合わせ技で、どうにか一網打尽にして倒すことができた。

その際、水に大きな衝撃と叩きつける必要があったから、せつかく最近制御できるようになってきた『ワン・フォー・オール』をわざと暴発させて、指一本またダメにしちゃったけど……こればかりは仕方ないと割り切った。

痛みもどうにか引いてきたし、動く分には問題ない。

その足で、相澤先生を助けるべく中央エリアに戻ってきた僕らは……黒い巨漢の敵に組み伏せられてボロボロになっている相澤先生を目の当たりにすることになった。

腕が不自然な形に歪んでいる。あの黒い奴……『脳無』とか呼ばれていた敵が、怪力で小枝みたいにへし折ってしまったのを見た。

水難ゾーンにいた奴らとは明らかに違う。あの全身に手みみたいな装備？をつけた奴と、黒い巨漢の異形は……レベルが違う。

正面から相對しているわけでもないのに、それがわかってしまう。しかも、そいつらと同じくらい注意が必要であろう、あの黒い靄みみたいなやつまで合流した。

しかし、『黒霧』と呼ばれたそいつが持ってきた報告は、生徒を一人逃がしてしまったというもので……それを聞いた手の男——『死柄木弔』というらしいそいつは、苛立ちを隠そうともせず、悪態をつきながら……『帰ろっか』と、撤退すると言いだした。

その言葉に、どこか気味が悪いものを感じつつも、これで終わるのかと安堵していた僕達だったが……

「けどその前に、平和の象徴としての矜持を少しでも……へし折って帰ろう」

言うと同時に、目にも留まらぬ速さでこっちに突っ込んできた死柄木が、その手を蛙吹さんの顔に向けて伸ばした。さっき、触れただけ

で相澤先生の肘を『崩した』その手を。

それを認識すると同時に……いや、ほとんど反射的なタイミングで僕の体は動いた。

自分が認識するより早く体が動き、全身を『フルカウル』の火花が包む。水を蹴って飛び出し、今まさに蛙吹さんの顔に触れそうになっている手を……下から殴って弾く。

ばしやあん、と大きな水しぶき、水音を立てて振りぬかれた僕の拳は、死柄木の腕を弾いて、その瞬間素早く死柄木は後ろに飛びのいて距離を取った。

僕もすぐに自ら出て陸地に立ち、死柄木から目を放さないように構える。

「なんだよ……思ったより速いな。くそ……びびって動けないままでいればよかったのに……」

「緑谷ちゃん……今……？」

「み、みみみ緑谷あ!? おまつ、その……火花!? 何……」

「ごめん2人とも、説明してる時間ないんだ」

2人を背中にかばう位置に立ち、目の前でゆっくりと起き上がる死柄木に集中する。

手のようなマスクの向こうからのぞくぎよろツとした目が、酷く不気味なものに見えた。

「……ふーん……子供だけど、立派にヒーローってわけだ。そんな顔で無理して強がってまで、お友達を守ろうって?」

「……っ……!」

「鏡持ってりや、その汗だくで今にも泣きそうな顔、見せてやれるのになあ……まあいいや」

その瞬間、僕の目の前にすごい速さで死柄木の手が突き出され……僕は間一髪横に体をひねって避ける。よけきれず、顎の部分を覆うマスクにチツ、とかすってしまうが……つかまれるのはどうにか免れた。

けど、このまま大きく横に跳んだりしてかわすわけにはいかない。そうになったらこいつは多分、蛙吹さんと峰田君の方へ行く。

突き出された死柄木の腕をつかもうとして……しかしそれより早く、もう片方の手が突き出される。これもどうにか避けるけど、今度はガツとやや大きめの衝撃が腰のあたりから伝わってきて、ベルトにつけていたポーチの1つが粉々になった。

けど、今ので懐に入れた。素早く体を小さくし、肘を突き出してみぞおちを打つ……

(……っ、ダメだ！)

僕の肘が鳩尾に突き刺さるより早く、素早く回り込むように死柄木の手が構えられた。

このまま打てば、さつき相澤先生にしたのと同じように、肘が崩される。

無理やり技をキャンセルして体勢を崩した僕に、また死柄木が手を突き出し……

——ゴッ!!

「ぐ!?!」

体勢を崩した勢いを逆に利用して、やぶれかぶれで放った蹴りが顎に当たった!

完全なラッキーパンチ(キックだけど)。しかしチャンスには変わらない。後転の要領で体勢を立て直しながら距離を取り——

「驚いたけど……やっぱガキだな」

その途端、物凄い力で地面に叩きつけられて、息が詰まった。

一瞬意識が飛んだかと思った。けど、痛みと苦しみで逆に気絶できなかつた。

「な、んっ……!?!」

うつぶせに抑え込まれている状態——しかも、コンクリートの地面にひびが入るほど強く——で、どうにか首を動かして見上げると……さつきまで相澤先生を抑え込んでいた黒い敵が、片手で僕を背中から抑え込んでいた。

「俺の手を警戒するってことは、さつきの戦い見てたんだろ? なのにその先生と同じやり方で負けちゃうなんて……雄英も大したこと教えてないのかな」

抑えられる力が強すぎて、息が上手くできない。

このまま窒息死するのだろうか、それとも、その前に相澤先生みたいに力で叩きつぶされるのか……はたまた、死柄木のあの手で粉々にされるのか……

妙に頭が冷静に動くことに、自分でも少し不気味というか異常を感じていた。って言うかコレひよつとして、死ぬ間際に景色というか時間がゆっくりになるっていうアレじゃ……

遠くの方で『緑谷ア！』と峰田君が叫んでいるのが聞こえる。

『僕のことはいいいから相澤先生を連れて逃げて』って、どうにかして伝えたいけど……ろくに声も出せない。まずい、このままじゃ皆……

と、その瞬間……すごい爆発音が響き渡ったかと思うと、それとほぼ同時に、背中を抑え込んでいた力がすつとなくなつた。

まだ体中が痛いけど、どうにかして立ち上がって、音のした方を見ると……一体この一瞬の間に何があったのか、そこは火の海になっていた。所々に、さつきまではなかつたと思う、機械の部品みたいなのが落ちてるようだけど……

死柄木はしりもちをついて倒れていて……それをかばうように、さつきの脳無ってやつが仁王立ちしていた。周りの地面と同じように、脳無の体が燃えている。酷いやけどのような状態になっている箇所も確認できた。なのに、本人は痛がったり慌てるそぶりも全くない。ただただそこに立っているだけというその状態が、酷く不気味なものに見えた。

何が起きたんだろうと困惑する僕の耳に、その声は聞こえて来た。「うおつ、何かに使えるかと思つて持つてきたけど、やばいな火炎放射器……こんな威力あるんだ」

「いや、少なくともアレは火炎放射器の本来の使い方じゃないよ……まあどつちにしる物騒なことに変わりはないんだけどさ」

その瞬間、僕の体は伸びて来た蛙吹さんの舌に絡めとられて彼女の所に引き戻され、それと同時に……たった今中央エリアに戻ってきた、栄陽院さんと尾白君も、同じ場所に駆けつけたところだった。

☆☆☆

火災エリアの敵を片づけて、ついでに何かに使えそうだったことで火炎放射器その他装備をいくつか強奪して、大急ぎで中央エリアに戻ってきた私と尾白。

そこで見たのは、ボロボロになって倒れ伏している相澤先生と、黒い敵に押さえつけられている緑谷、プールの縁で動けずにいる蛙吹と峰田。そして、今回の主犯と思しき手だらけ男と、その横のワープ野郎。

とりあえず背中に背負っていた火炎放射器を全力で手の奴に投げた。

そしたら、図体に似合わないすごい速さで割り込んできた黒い奴が仁王立ちで盾になって、激突した瞬間に燃料がまき散らされて引火、爆発。周囲一帯が火の海に、黒い奴は火達磨になった。

……直撃させないように手前の地面狙って投げたのに、あんなところにいきなり割り込むから……

しかし何か効いてない様子だったので、ちよつとおかしいなと思いつつ緑谷に合流。もちろん、その途中で相澤先生を回収してくれるのも忘れない。

「尾白君、栄陽院さん……無事だったんだ……」

「いやそれこっちのセリフだぞ緑谷!! お前こそ大丈夫か?」

「大、丈夫……ちよつとまだ息しづらいけど、すぐ治ると思う」

「だといいがな……蛙吹、峰田、2人はケガとかは?」

「ないわ。でも、相澤先生が……」

「早く手当しないとやべえよ! あの黒いのにボロボロにされて……それでも最後まで戦ってくれて……!」

峰田の言葉を聞きながら、その『黒いの』に目をやると、驚くべき光景があった。

火が消えているのはいい。転がるなり払うなりすれば消えるかもしれないし。

けど問題は……その火傷の後がぐじゅぐじゅ蠢いて、急速に治って

いつてる点だ。こいつ、再生系の個性持ちなのか？

いや、それは今はいい……どっちみち油断なんてできない状況だ、なら……

「蛙吹、峰田、相澤先生頼む。手当てが必要だから、13号先生たちの所へ。ここよりは安全だ」

「そうか……あの黒い霧みたいな敵がここにいてるってことは、あつちにはめぼしい敵もないかもしれないのか。生徒が逃げたって聞いた途端に逃げの一手だったし……」

「尾白、念のために2人についてっくれ。確実に何も邪魔者がいないとも限らないし……ああ、一応コレ持ってって」

言いながら私は、ポーチから牛乳（エネルギー充填済み）の小瓶を取り出して渡す。

「1本は相澤先生に。傷の治療は大してしないけど、多少なり体力は回復するはず。残り2本は予備用。尾白が使ってもいいし、誰かにあげてもいい。上手く使え」

「……わかった。栄陽院さん、緑谷……気を付けて」
そう言い残して、峰田と蛙吹と共に相澤先生を避難させる。

残りの牛乳の小瓶は緑谷に渡してしまう。

毎日似たようなのを飲んでるからか、緑谷は何か言う前にすぐにその使い道を把握し、ぐいっと一気に飲んだ。わずかに顔色がよくなった……気がする。

「……何だよそれ、回復アイテムか？ 学ラン女……お前回復キャラかよ」

すると、黒いのの陰に隠れていた手野郎が、首のあたりをがりがりとかきむしりながら、ブツブツと呟くように、

「ずるいなあ、全く……あんたみたいなの。こっちは回復キャラなんて便利な奴いないのにさ……ああ、ホントクソゲーだよ、ヒーローばっかりひいきされて、こっちは火傷するし喉も痛いし」

まるで癩癩を起した子供みたいにとりとめのないことをブツブツと……

しかし次の瞬間、そいつはカツと目を見開いて、

「脳無、やれ！」

号令と共に、反射的に私と緑谷は地面を蹴って横に跳び……それほどほぼ同タイミングで黒い敵が、私達が一瞬前までいたところに拳をめり込ませていた。

相澤先生じゃなくてこつちを狙って来たか……むしろその方が助かるけど……何、回復キャラからつぶしに来たとしても？

つか、今のほとんど見えなかった……移動も攻撃も超速い！

しかし、攻撃を回避した今はチャンスでもある。

「エネルギーチャージ……許容上限500%！らあああああ！」

今、私が腕に込められるエネルギーの限界量を充填し、腕力を最強まで強化して、黒い敵の鳩尾に拳を叩き込んだが……何だ？ 殴った瞬間、妙な感覚が……

しかも……効いてない……?! 私の、自分で言うのもなんだけど、割と渾身の一撃が!?

今のまさか……殴った瞬間に、殴ったはずなのに手ごたえがないような、あのおかしい感触と関係ある……のか？

「すげー音がしたな……パワー系でもあるのかお前、ホント滅茶苦茶だな……けど残念だったな、そんな攻撃じゃ脳無には通用しない。何せそいつは……」

「対オールマイトの秘密兵器、なんだってな」

その瞬間、私が飛び退ると同時に……冷気が私の横を駆け抜けていき、脳無、とか呼ばれた黒い敵の半身を、パキーン、という乾いた音と共に氷漬けにした。

こんなことができる奴は……

「轟君！」

「悪い、遅くなった。それと……」

「隙アリだこの黒モヤ野郎！」

——ドゴオオオン!!

「ぐう!?!」

「かつちゃん！」

轟に続き、横合いから飛び込んできた爆豪が黒い霧の奴を殴り飛ば

し(アレ殴れたのか?)、そのまま組み伏せるように地面に押さえつけた。

さらに、爆豪と一緒にタイミングで戻ってきたらしい切島もこっちに合流する。

「つ……次から次へと……何なんだよこのガキ共は……俺はガキが嫌いだつてのにさあ、さつきからいちいち邪魔ばかりしやがって……」
「学校にカチコミに来てんだからそりやガキがいるのは当たり前だろうに」

「ついでに言うなら邪魔されるようなことするからだ。平和の象徴は、お前らごときにやらせねーよ」

緑谷に、爆豪、轟、切島、そして私・栄陽院。

着々とこっちの戦力が揃っていく。もちろん、だからって油断なんてしていい相手じゃないのはわかってるが……少なくとも、仕切り直しするには足りそうで何よりだ。

第15話 TS少女と割とガチの死闘

S i d e . 三人称

現状は、パツと見た限りでは、勝勢は1―Aの生徒たちに傾いたと言つてよかつた。

緑谷と永久に加え、爆豪、切島、轟が合流。人数の面でも上回っている上、敵の戦力の1人である脳無を轟が凍らせて拘束している。

無論、残る死柄木と黒霧も決して油断していい相手ではないのは確かだが、それでもアドバンテージは生徒側にあると言えた。

氷、爆破、硬化、そして増強型が2人。豊富とは言えないまでも個性のバリエーションもあり、様々な状況に対応できるはずだ。

しかし、不利な状況に追い込まれている……と思われる側である死柄木は、焦るよりも露骨に不機嫌さを表に出すばかり。がりがりと首元をかいて悪態をつく。

「はあ……全くどいつもこいつも……まあ、とりあえず脱出口が抑えられてるのはまずいか。脳無、爆発の小僧をやっつけろ、黒霧を取り戻す」

そう、手短かに告げると、氷で拘束されて動けないはずの脳無が、ぐつと体に力を入れて動く。

途端、ばきんという音と共に……脳無の体の凍っていた部分が砕けた。しかし、脳無は先程炎に焙られた時と同じように、全く動揺どころか痛がる素振りも見せない。

驚く轟達の目の前で、脳無の体、割れて欠損した傷口から、びきびきと赤黒い肉が盛り上がっていき……見る見るうちに元通りに『再生』した。

その衝撃的かつグロテスクな光景を見て、驚きのあまり反応が遅れた爆豪。次の瞬間、死柄木の命令通りに、爆豪目掛けて脳無の拳が迫る。

——ビツ！ ゴウツ！！

直撃すれば爆豪の首から上を爆散させていたであろうその拳は、しかし彼に当たることとはなく……およそ人体が立てる音とは思えない、

風を切る轟音と共に空振りしていた。

しかし、全く何にも当たらなかつたというわけではなく……

「……あつ、ぶなー！」

「てめっ……何してやがるデカ女！」

脳無の拳が振るわれる直前、爆豪を横から突き飛ばすようにしてかばい、自身も大きく上体を反らせて間一髪その拳を回避した……永久にかすっていた。

その腹部から胸の部分をわずかにかすっただけで、頑強な素材で作られた永久のコルセット型スーツは千切れ飛んでいた。胸元を抑えるものがなくなり、永久の豊かなバストがぶるん、とこぼれ出て露わになる。

「っ……おい、大丈夫かよ爆豪！ 栄陽院！」

「るっせえ大丈夫に決まってるクソ髪！」

「私も大丈夫！ けど、かすっただけでコレって……風圧、っていうか威力ヤバイ。おっぱい千切れるかと思った」

「……軽口が叩けりや大丈夫か」

「け、怪我無いのはよかったけど、栄陽院さんその、胸！ 胸出てるから！ いったん下がってしまっ……」

「いいよ別に、見られても減るもんでもないし……裸よりも隙見せる方がまずいでしょ、こいつらには。おっぱいやコルセットじゃなくて、今度は首から上が吹っ飛ぶよ下手したら」

そう言いながらも、永久は一応、学ラン型の上着のボタンを留めて前を閉じ、とりあえずトップレス状態になっている上半身を隠す。

それを確認してほっとする緑谷だが、依然として危機的状況は継続している。

死柄木は変わらず健在なのに加え、黒霧は爆豪から解放され、氷で拘束していた脳無も、再生を完了している。相変わらず表情、どころか感情と呼べるものを感じられない、不気味な沈黙を保っていた。

その脳無のたたずまいを見ながら……緑谷は高速で頭を回転させていた。

状況はかなりまずい。先程から一変して、こちらが不利になってし

まっている。黒霧が解放された上に、脳無も五体満足のまま自由になり、今しがたその圧倒的な戦闘能力を見せつけたばかりだ。

この場にいる誰よりも優れているであろうスピードとパワー、こちらの攻撃による負傷をもともしない再生力。その動きを見ている限り、痛覚を覚えていないようにすら見え……一発一発が必殺の威力を誇る攻撃が、一切の躊躇なくこちらに振るわれるのだ。

まだ未熟も未熟な自分達では、この敵達にどう立ち向かえばいいのかわからない。しかしだからと言って思考を止めてしまえばそれこそ終わりだ。ゆえに、緑谷は必死で考える。

（一番ヤバイのはあの脳無とかいう敵だ……四肢を欠損してもすぐに再生するデタラメな再生力に、かすただけで特殊素材のスーツを引きちぎるほどのパワー、動くのが見えないほどのスピード、そして全力の栄陽院さんの攻撃でもびくともしないタフネス……どれか一つとっても厄介どころじゃない。まるでオールマイトみたいなの……そういうえば轟君が、あいつは敵達の対オールマイト用の秘密兵器だって……そもそも彼らはオールマイトを殺すつもりでここへ来た。蛙吹さんも『殺せる算段がついてるから来たんじゃないか』って言ってたし、だとしたら少なくとも、敵側はあの脳無ってのがオールマイトに勝てるくらいに強いと確信してる？ いや、というより……）

そこまで考えて、ふと緑谷は、先程までの戦いのシーンのいくつかを思いだす。

同時に、ふとある疑問に思い至った。

「……オールマイトにも勝てる……というより、オールマイト『には』勝てる敵……？」

ぼそつと呟くように言ったその言葉は、ちょうど近くにいた轟と爆豪、永久には聞こえていた。

（こいつは決して、こっちの攻撃が何も全く通じないわけじゃない。轟君の氷結攻撃は通じてたし、再生されてしまったとはいえ、それで一度は手足を奪うこともできていた。栄陽院さんが火炎放射器を投げつけて攻撃した時も、燃えて火傷してたし、爆発した時の金属の破片とかが刺さったり食い込んだりしてた。血も流れてたようだった

し、細かい傷も体中に……するとおかしいぞ、『細かい傷』ができるような金属片の衝突、そんなのよりも栄陽院さんの拳の方が何倍も威力があるはず。にも関わらず、後者は全く効かず、前者は……効いたかはともかく傷つけることができていた。この差は何だ？ 単純な威力じゃないとすると……攻撃の種類？ 熱や冷気、そして、刺さったり食い込むような鋭利な攻撃が効くってことは……」

「ひよつとしてあの脳無って奴……『個性』か何かで、打撃が効かないんじゃない……？」

「おつ、何だよよくわかったなぼさぼさ頭君。その通り……こいつの名は『脳無』。さつきそこの氷のガキが言ってた通り、対オールマイトの秘密兵器さ。さつきお前らも見たい『超再生』と、相手の攻撃を無効化する『シヨック吸収』の個性を持つてる。それでいてパワーはオールマイトと殴り合いができるレベルになってる、超高性能のサンドバッグさ。お前達はもちろん、オールマイト本人だってこいつには勝てないよ」

「こ、個性を2つ持つてるって？ しかも、オールマイト級のパワー!? 冗談だろ!？」

切島は驚きのあまり、悲鳴じみた声を上げるが、残りの4人はむしろ『なるほど』と、今の死柄木の説明に納得していた。

この脳無という敵はいわば、オールマイト相手でこそその真価を發揮できる存在なのだ。

非常に強力な打撃によって戦うオールマイトを完全に封殺するため、真正面から殴り合いできるだけのパワーと、それにおあつらえ向きの『個性』を持った、いわば天敵のような存在。

気になるのは、まるでそうなるように狙ってこの敵を『作った』かのように話す死柄木の喋り方だったが、それはともかくとして、4人の頭の中に1つの考えが浮かんだ。

『コイツをオールマイトと戦わせるのは、まずい』

無敵のNo.1ヒーローを信じていないとは言わない。しかし、明らかにオールマイトを本気で殺すつもりでこうして行動を起こし、それに見合うだけの性能の手駒をこうして見せつけている。

さらに、黒霧や死柄木の個性もまた、厄介で強力なものだ。脳無だけを戦わせて自分達は見ているだけでも思えない以上、最初から全てを見据えて行動している彼らを放置するのは危険。

かといって、自分達に何かができるとも思えない。

対打撃、対オールマイトの兵器だとは言つても、そもそもの戦闘スベックからして異常なレベルなのだ。ダメージの通る攻撃手段があったとして、未熟な自分達では勝つのは難しい。

緑谷も、永久も、轟も、爆豪すらも、それをわかっていた。

しかし、誰一人として——もちろん、切島も含めて——諦めようとはしなかった。

何か手はないか、どうすればいい、と皆が逡巡する中、

「……皆、話があるんだ。そのまま聞いて」

この場にいる中で最も気が弱い、しかし、誰よりも『ヒーローらしい』と言われる1人の少年が、敵達に感づかれないように、4人どうにか聞こえるように……口を開いた。

にらみ合いと言うか、膠着状態と言うべきか、

現実の所には、圧倒的な力を前にどうしていいかわからず、蛇に睨まれた蛙のような状態……脳無を前にして動けないでいる雄英生の現状を、死柄木はそのように解釈して、手の形をしたマスクの向こうで歪んだ笑みを浮かべていた。ヒーローたちが手も足も出さず、立ち尽くすしかない無様さを、心の中であざ笑っていた。

しかしそれにも飽きてしまい、さつさと殺してしまおうかと脳無に指示を出そうとした……その時だった。

動かない、動けないと思っていた雄英生達が、突然弾かれたように動き出したのは。

爆豪が黒霧と死柄木を睨みながら側面に回り込み、永久は正面から脳無に突っ込んでいく。ここだけ見るとただの自殺行為だが、その後で轟が周囲に氷塊を出現させているのを見ると、何か企んでいるのだろうかとも考えられた。

しかし、小細工など圧倒的なパワーで引きちぎればいいと一笑に付

す死柄木は、改めて脳無にゴーサインを出そうとして……

突然、永久がとめていた学ランの前部分のボタンを外す。

走っている勢い、ないし正面からの風圧で、学ランがマントのように大きくばさつと目の前に広がった。

必然的に、閉じて抑えていた……というか、隠していたその下が、何も纏っていない永久の裸の上半身がまたあらわになる。

目の前で突如敵が露出行為に及んで唾然とする死柄木の目の前で、形のいい、大きな2つの乳房が、たゆん、と揺れた。

しかし、そんなサービスシーンを前に、死柄木たちが、常の緑谷や尾白のように取り乱すかと言われれば……残念ながら否と言う他なく、

「はあ？ お前……何だそれ、色仕掛けで隙でも作るつもりだったのかよ、くつだらねえ……」

「浅はかな。全く、天下の雄英生もこれでは程度が知れますね……考えの稚拙さもそうですが、はしたないを通り越して下品というものだ」

「こんの……10代の乙女の玉の肌を見て好き勝手言いやがって！ まあ別にいいけどね……本命は私じゃないしい？」

「！」

その瞬間、大きく広げられた学ランと、轟が展開していた氷の塊に隠れて走り出していた緑谷が、爆豪とは反対側から飛び出し、急カーブして死柄木の眼前に迫ってきていた。拳を握った腕を振りかぶって。

「ふん……だからどうした。遅すぎて奇襲になってないんだよ」

緑谷の動きは、脳無を使わなくても、死柄木個人の戦闘能力でも十分対応可能なレベルだ。

常人よりは確かに速いし力もあるが、動きは素人。攻撃を見切るくらいわけではないのは、死柄木が自分で経験して知っていた。

しかし死柄木は、たっぷり余裕をもって、先程と同じように緑谷の攻撃を受け止めて、自分の『崩壊』の個性でカウンターを叩き込むべく身構える。拳が来ようと、フェイントで肘が来ようと足が来ようと

と、その手でつかんで五指で触れることで、崩して塵にしてしまえるように。

(よし……今だ!)

だが、緑谷はそのまま殴るモーションに入ることはなかった。かといって、フェイントで蹴りや肘を放つこともなく……彼が移ったのは、投球のモーション。

叩きつけると思っていた手に握っていた何かを、死柄木の足元に投げつけ……直後、それが炸裂して周囲に強烈な光と音をまき散らす。

「なっ……スタングレネード!」

「おのれっ、小癩な真似を……光に紛れて攻撃するつもりか!」

「てめえらにじゃねえけどな!」

直後、手のひらで起こした爆発で加速して飛び込んできた爆豪。

その標的は、死柄木でも黒霧でもなく……閃光の中でも変わらさず棒立ちになっている脳無だ。

その顔を左右からガシツと両手でつかみ……爆破する。それを終えると、すぐさまその場から飛びのき……そこに轟の冷気が届いて、今度は先程よりも大きい範囲を氷漬けにする。

光と音が収まった時、脳無は頭の両脇から血を流し、肘から下を氷漬けにされ、しかしやはり全く反応を示さずに棒立ちしていた。

攻撃を警戒して飛び退った死柄木と黒霧は、またしても脳無と引き離されてしまった形だ。

「チツ……目くらましと同時にうまくやったつもりだろうが、意味ねえってわかんねえのかよ。脳無、さっさとガキを殺せ!」

傷つこうが凍らされようが、『超再生』を持つ脳無には関係ないことだ。子供がどれだけ抵抗したところで痛打にはなりえず、圧倒的な力でねじ伏せる。

そして、自分だけが脳無にその力を振るう命令を出すことができない。

そう信じて疑わない死柄木は、また脳無が拘束を引きちぎって再生した後、絶望に顔を歪ませる雄英の生徒たちを一人ずつ木っ端みじん

にして行く光景を心待ちにして見守った。

しかし、数秒待っておかしいと気づく。

自分は命令を下した。殺せと。

しかし……脳無が動く気配がない。

「脳無！ おい、何をぼさつとしてる！ 早く抜け出てガキを殺せ……おい、脳無!？」

呼べども怒鳴れども反応がない。絶対服従のはずの自分の命令に、応えない。

一転して自分が困惑している死柄木の耳に、落ち着いた声音の言葉が届いた。

「おかしいと思ってたんだ……攻撃が効かない、超再生ですぐに治るのはいいとしても、お前の命令があつた時以外で、あまりにもこいつは動かなすぎる。それこそ、自分の体が燃やされても、氷漬けにされても、身をよじったり火を消そうとする素振りすらなかった。それで思ったんだ……こいつは、どういう理由でそうなのかは知らないけど、お前の命令なしじゃそもそも動かないんじゃないかって。今、あるいはあらかじめ命令されたことかしらないんじゃないかって」

スタングレネードを投げた直後、爆豪の突撃と轟の冷氣に巻き込まれないよう、永久（学ランはまた閉じている）の隣に飛び退って戻った、緑谷の声だった。

『個性』の関係でそうなってるのか、それともお前らが何かしたのかはわからない。けど……こいつは多分、自分で考えて動くことができる。なら、お前の命令を届かなくてできれば、こいつは何もしないただのウドの大木になる！ だから目つぶして隙を作って、かつちやんにそいつの鼓膜を爆破して耳を聞こえなくしてもらった!」

「バカな……だとしても脳無には『超再生』がある！ そんなもんあつという間に復元して……」

死柄木が反論を終える前に、爆豪の両の手のひらから、ぱらぱらと何か零れ落ちて床に当たり、カチャカチャと音を立てる。

死柄木がとっさにそれを目で追って見ると、それらは……小さな金属片。それも、爆発でひしゃげたような形をしていたり、焦げて煤が

ついているもの。

それを見て、死柄木よりも黒霧が先に、その意味に気づいた。

「成程……鼓膜を爆破するのと同時に、細かい金属片を脳無の耳の中に叩き込んだわけですか」

「再生するつつつても、再生すべき所に邪魔なものがあつたらそれもできねえわなあ？　今そいつの耳の中は鉄くずでいっぱい、鼓膜が復活するスペースなんかねえよ！」

「この、ガキッ……ふぎけた真似しやがって……！　なんてことしてくれてんだよ、せつかくオールマイトを殺すために作った脳無なのに
よお……！！」

ガリガリガリガリと、苛立ちに任せて首元や腕をかきむしる死柄木。

その様子も、脳無に声が届かなくなってしまった今、駄々をこねる聞き分けの悪い子供、程度にしか映らない。痾癩に任せて喚く姿は失笑すら誘う。

しかしそれとは逆に、あくまで冷静さを保っている者がもう1人残っている以上、安心することはできなかった。

「なかなかどうしてよく考えるものだ……認めましょう死柄木弔、彼らは私達の想定の上を行った」

「何をしれつと言つてんだよ黒霧……さつさと脳無を回収しろ！　耳から鉄くずを取り出せばまた使えるようになるだろうが！」

「承知しました。やれやれ、人使いの荒い……」

「させねえつつんだよ、黒モブが！」

黒霧が動く素振りを見せた途端、横合いから爆豪が突っ込んで殴り飛ばそうとするが、それよりも早く黒霧の手の靄が渦を巻いてその前にあふれ出した。

「二度同じ手を通じると思っているあたりはまだまだ子供のようですね。あなたも………彼女も」

「あ……？」

何のことだ、と苛立つ爆豪は、素早く自分と仲間達の周囲を確認して、黒い靄が出ていない……すなわちまだゲートが開いていないこと

を確認する。無論、自分の周囲にも。

ゲートが開いていないのなら、爆発の衝撃をどこかに逃がされる恐れもない。13号がそうされたように、自分にカウンターで返される心配もない。

ならば靄ごと吹き飛ばせとばかりに、爆豪は両手を前に突き出して……しかし、その瞬間、

「……けろっ?」

「っ!」

「っ……蛙吹さん!」

黒霧が展開した靄の中から、爆豪の目の前に……見知った顔のクラスメイトが吐き出された。

爆豪は気づいていなかった。その場にいた、緑谷、切島、轟、永久、そして爆豪自身以外に……この近くに潜んでいた、蛙吹の存在に。

峰田、尾白と協力して相澤を運んだ後、様子を見るためにここに戻ってきて、先程までと同じように水の中から様子をうかがっていたことに。

先程もそうしていた蛙吹を、死柄木も黒霧も発見していた。ゆえに、同じように隠れていたのを黒霧は即座に見つけていた。そして、遠く離れていようと正確な場所さえわかれば引き込めるワープの個性で、手元に盾として呼び出したのだ。

蛙吹の登場に、1秒後の悲劇を幻視して悲鳴を上げる緑谷。

既に爆破のモーションに入ってしまったっている爆豪は、せめてどうかして射線をずらすようにするが、無情にも蛙吹の顔面目掛けて、爆豪の渾身の爆破が放たれ……

——ドゴオオオン!!

「っ、ぐあああああ!!」

間一髪、その間に飛び込んで自分を盾にした、永久の背中を直撃した。

「っ、デカ女、お前……！」

「……永久、ちゃん……？」

「栄陽院さんツツ！」

特殊素材の学ラン越しとはいえ、至近距離での両手爆破。衝撃は背中から内臓にまで届いて、流石の永久もたまらずその場に崩れ落ちる。激痛が走る背中をかばって横向きに倒れ、口からは激しくえずいていた。

「え、栄陽院っ!？」

「おい、大丈夫か！」

「っ……バっ、カ野郎、轟！ そいつから、目離すな！」

苦しみながらも怒号を飛ばした永久の言葉にはっとする轟だが、時すでに遅く、黒霧は体を覆う氷塊ごと脳無を回収し、死柄木の眼前にどしゃつと落としたところだった。

素早く死柄木は脳無の頭、その左右両側に一瞬だけ触れる。脳無の頭の、耳のあたりなのであろう一部分がぱきり、と崩れて塵になり、中から鉄くずが、同じように塵になって崩れ出て来た。

しかし、触れたのが一瞬だったからか、イレイザーヘッドの時と同じように体全体が崩れることはなく、すぐにその部分で再生が始まり……

「させるかああああ!!」

そこに飛び込んでいく緑谷と目があつた。

今度はフェイントでもなければスタングレネードを握るでもなく、本気で死柄木を殴り飛ばそうと地面を蹴ったところだった。

「だから遅いって……ッ!？」

三たび死柄木は、緑谷の拳を受け止めようと手のひらを突き出すが、突如その視界が黒に覆われる。

緑谷の呐喊を目にした瞬間、痛みをこらえて立ち上がった永久が、着ていた学ランを脱いで投げつけ、『崩壊』の力を持つ手もろともかぶせて動きと視界を封じていたのだ。

当然、特殊素材の学ランとはいえ、死柄木の『崩壊』には耐えきれない。少しの間遮蔽物としての役割を果たした後、ボロボロと塵に

なつて崩れ去る。

しかし、その一瞬の間を置いて再び前を見た死柄木は……目の前で、今までの何倍も大きな火花を腕にまとっている緑谷の拳が、今まさに顔面に迫っている光景を目にしていた。

友達を傷つけられ、恩師を傷つけられ、平穏で楽しい時間を台無しにされ、まるでゲームか何かのように命を踏みにじられそうになった。

そんな卑劣な輩に負けてなるものか、許してなるものか、これ以上何も奪わせてなるものか。

友を思い、正義に燃える、緑谷出久のヒーローとしての心が、今この瞬間、また一つ『ワン・フォー・オール』の壁を越えて力を顕現させた。

「黒霧！　n——」

「デトロイトオ……スマアアツシユ!!」

振りぬかれた拳が死柄木の顔面を捉え、さらにその向こうにいた黒霧をも巻き込んで、爆風、というよりも衝撃波とすら言えるレベルのそれを伴って吹き飛ばす。

中央エリアを横断し、2人は施設の反対側の壁にまで吹き飛ばされて激突した。

誰よりも優しく、誰よりも地味で、誰よりも気弱であったはずの緑谷が、この瞬間、目の前で振りぬいてみせた必殺の拳の威力に、そこに居た全員が啞然としていた。

「デク、てめえ……」

「これが、緑谷の……」

「マジかよ……直接見ると半端ねえ……!」

「ける……」

爆豪が、轟が、切島が、蛙吹が、驚愕を隠せずにいる。

そして……

(……緑谷……　やっぱり、お前は……ッ!)

「驚きの中にも歓喜を隠しきれない様子の永久が、その潜在能力の片鱗を見せた緑谷を前に、必死で顔がにやけそうになるのをこらえていた。」

「ハア——……ハア——……ハア——……ツ、ツ……！」

その当の緑谷は、振りぬいた拳に、いや腕全体に、遅れて返ってきた反動の激痛に、歯を食いしばって耐えている所だった。

（折れ……ては、いない。多分……でも、痛いし、熱い……とても動かせない……！ 前よりは、マシ、かもしれないけど……とても、制御できたとは……っ……）

「がくん、と膝から崩れ落ちる緑谷。」

それを見て、やはり反動が大きいのだと悟った切島と、一拍遅れて永久も駆け寄るが……

「この……クソガキ……！」

吹き飛ばした先、土埃の向こうから届いたその声が……今の一瞬の気のゆるみが、致命的なものだったことをその場の全員に知らせた。

土煙の中から立ち上がった死柄木は、顔を覆っていた手の形のマスクを取り落としていた。その下に隠れていた、ぎよろりとした目と……憤怒の形相が、先程よりもよく見えた。

顔の左半分は、今の緑谷の拳を受けてだろう、大きく腫れ上がり……よく見ると歯も一部欠けている。今で切ったのか、鼻と口からは血が流れていて……上手くしゃべれないのか、声は先程より少し聞き取りづらかった。

「脳無！ 殺せ！」

続いて響いたその呼び声に応え……耳を、鼓膜を再生させた脳無が、視界の端の土埃の中から飛び出し、拳を振りかぶって緑谷に迫る。

「緑谷アツ！」

「う、うおおおおおつ、来てみやがれエエツ!!」

動けない緑谷をとっさに永久がその胸に抱き抱えてかばい、自分を犠牲にしても緑谷を守らんと、まるで母が子を守るように、その身

を盾にする。

それをさらにかばって、脳無の前に立ちはだかる形で、切島が全身を硬化させ、拳の一撃を受け止めんと構える。恐怖を、不安を打ち消さんと、裂帛の気合をこめた咆哮で己を奮い立たせる。

しかし、そんなものでは到底あの一撃は防げない。このままでは、切島も永久も死ぬ。

それを悟った緑谷は、逃げてくれ、と声を上げようとして……………聞いた。

「よく頑張った、少年少女」

このピンチに待ち焦がれた、その声を。

「遅くなってしまったが……………後は、私に任せろ」

そして見た。

そのすぐ横を、風のような速度で駆け抜けて、切島の前に飛び出した、No. 1ヒーローの姿を。

「アトロイトオオオオオ……………スマアアアアアツシュ!!」

振りぬかれたオールマイトの拳は、緑谷の一撃とは比べ物にならないほどの威力で……………周囲に凄まじい衝撃波をまき散らし、殴りつけた脳無を、たったの一撃で、建物の天井を突き破って、空のかなたに吹き飛ばした。

流星は本家本元と言うべきか、先程に倍して衝撃的な光景に言葉を失う皆の目の前で、彼は、言った。

「もう大丈夫。なぜなら……………」

私が来た」

第16話 TS少女と次なる目的

「オールマイト先生が来てからは、早かった。

あつという間に事態が収束した。

何か、あいつらが『対オールマイトの秘密兵器』とか言ってたあの黒い敵は、私達を絶体絶命の所まで追い込みこそのしたもの、間一髪間に合ったオールマイト先生の必殺のパンチ、そのたった1発で星になった。

マンガみたいに、空のかなたに飛んでいった。ドーム型の屋根を突き破って。

その後、流石にもう分が悪い……どころじゃなく、逆転の目がないと悟ったのか、死柄木と黒霧の2名は退却を図り……しかし、同時に駆けつけていたスナイプ先生の銃弾に両手両足を撃ち抜かれていた。

さらに、13号先生が負傷を押しして『ブラックホール』で吸い込んで拘束しようとしてたが、さすがに距離がありすぎたためか、吸い寄せる前に逃げられてしまった。ワープで。

その後は、オールマイト先生を含めた先生方が迅速に動いた。

その時改めて見て知ったんだけど、スナイプ先生だけじゃなく、プロヒーローの先生方が何人も駆けつけていた。校長先生曰く、動ける先生を片っ端から集めたとか。

そういや、生徒一人逃げられて応援呼びに行かれた、って話してたって緑谷が言ってたな。なるほどこのことだったか。

そして、呼びに行ってたのは……飯田か。早いはずだ。

プレゼント・マイク先生にブラドキング先生、エクトプラズム先生にパワーローダー先生、他にも名前がまだわからない先生も含めて、何人も。

先生方はそれぞれ散らばって、まだ行方が分からないクラスメイト達の捜索や、周囲の状況確認、ヴィラン残党の制圧に向かっていった。

で、そのうちの1人であるミッドナイト先生が……他の先生方に目配せしてから、こっちに跳んでやってきた。

彼女が目の前に降り立つと同時に、私とミッドナイト先生の周囲を

囲んで隠すように、地面が盛り上がりつつ壁が出来上がった。床がコンクリだから……セメントス先生だな、これは。

そして、『隠している』というこの状況から、女性であるミッドナイト先生が私の所に来た理由をようやく理解した。

ついでに、私がまたトップレスになっていたことも思いだした。

あー……コルセット吹っ飛んだ上に、緑谷守るために学ラン投げつけて、死柄木とかいう手だらけマンに塵にされちゃったからな……上半身の衣服が、ない。

敵との戦いの後、女である私がここにこうして半裸でいる。この状況は、事情を知らない大人が見れば……あまりよくない予想をしてしまってもおかしくないだろう。

「栄陽院さん、大丈夫？ 怪我はそこまでないようだけど……ひどいこと、されなかった？」

そう、心配そうに言ってくるミッドナイト先生。最悪の事態も想定して、私を精一杯気遣ってくれているのがわかった。純粹に嬉しい。

……真剣な態度と、モロ女王様なコスチュームとのギャップが激しいとか思っではいけない。

「大丈夫です。これはその……そういうことされたとかじゃなく、戦闘の余波というか、結果でこうなっただけなので。攻撃をかわしきれなくて、コスチュームが吹っ飛びまして」

「そう……ならいいのだけど。無理はしないでね、まだあなたは……って、あら？ その、抱き抱えてるのって……」

と、そこでミッドナイト先生、私が胸に抱き抱えている緑谷の存在に今頃気付く。

包むものなく丸出しになっている胸に、顔をうずめるようにしている緑谷。顔は真っ赤である。

そう言えばさつき、とつさにかばって抱きしめて……そのままぎゅっと抱きしめっぱなしだったっけな。いっけね。

「え、ええっと……ふ、二人はそういう関係、かしら？」

「ぶはっ!? い、いいいえ違がが違いますミッドナイト先生！ コレはその、えっと不可抗力と言うか気が付いたらこうなっていてっ

「どうか栄陽院さん！ は、早く前隠して！」

「あはははは……ごめん緑谷。えっと、さつきとつきに敵の攻撃から緑谷を……あー、大技の反動で動けなくなってる、回避が難しそうだったので、抱き抱えてかばったんですよ。それだけです」

「あ、そうなの。しかし、コスチュームなくしてるつてのにためらいなくそんな……体張るわねえあなた……。というか、そのまま困っちゃって何だけど……男子に思いつき見られてるつて言うか、そんな風に抱きしめてたのに、恥ずかしくないの？ 大丈夫？」

「あーまあ別に、減るもんじゃありませんし……ガチの非常事態でもありましたから、仕方ないというか……気にしませんよこのくらいは」

「ごらごら、女の子がそういうこと言っちゃダメよ、栄陽院さん。あなた可愛いんだから……無防備だとか不用心だつてたまに聞いてたけど、こういうことだったのね」

ちよつと呆れたような感じのため息をつくミッドナイト先生に、私が苦笑いを返していると、

「あ、ああああああの！ え、栄陽院さん……き、着るものないならほら、コレ！ コレ貸すから着て！ 隠して！」

そう言つて、緑谷が自分が来ていたジャージの上を差し出してきた。

自分は見ないように、硬く目をつぶった上で顔を反らしながら。

正直どうしようかと思つてたところだったので（今更）助かる。お言葉に甘えて、ちよつと貸してもらうことにした。

「ありがと緑谷、今度洗つて返すから……んしよ、つと」

「い、いえ、どういたしまして……えっと、もういい？」

「うん。もう着た」

「そつか、ならよかつ……うわあ」

ほつとして私の姿を改めて見た緑谷だが、再び顔を赤くして絶句していた。

緑谷のジャージ、ありがたく着させてもらつたはいいものの……かなり無理して胸を中に収めたので、その……胸の部分がつつんぱつ

つんなのだ。激しく動いたらはちきれそう。

加えて、緑谷のジャージってMかLサイズ（多分）だけど、私の体格、というか身長だと最低でもXLとかないとだから……丈が足りなくて腹出しルックみたくなくなっちゃってる。

まあでも、折角貸してもらった服に文句言っちゃいけないよね。

「いやーありがと緑谷。さすがに私もアレで帰れって言われたら恥ずかしかつたからさー……最悪、さきつちよに絆創膏貼ってそこだけでも隠そうかとか考えてたから、いや、助かった」

「さきツ……絆創、膏……！」

「あなたねえ……自分のことに無頓着にも程があるわよ。女の子なんだからもうちよつと……」

『まったくこの子は……』みたいな顔で見えてくるミッドナイト先生に呆れられていると、外からセメントス先生が『個性』で壁状の囲いを解除したので、その指示に従って入り口付近に集合することに。怪我人の把握とかしたいらしい。

そつちに目をやると、既に私達以外のクラスメイト達は全員そこに集まっている様子。あそこで状態を確認して、

軽い傷を負っている者はあちこちにいれど、1人もかけることなく、クラス20人全員がこうしてそろっている。

それを確認して、私は改めてよかつた、と感じ……同時に、この騒動はようやく終わったんだな、という実感を改めて持つことができた。

「あーじゃあ緑谷早く行ったほうがいいかもね。個性の反動とはいえ、結構腕きついでしょ？ 一時は動けなくなってたくらいだし」
「それを言ったら栄陽院さんだつて、背中にきつい食らってしばらくうずくまってたじゃない」

「ちよつと待ちなさい、あなた達そんな怪我してたの？ 聞いてないわよ全くもう……はいさっさと行く！ バカ話してる場合じゃなかったんじゃないの」

ミッドナイト先生にぴしゃりと言われて、私と緑谷は駆け足で集合場所に向かった。

……ただ、私が食らったのは敵じゃなくて爆豪の攻撃だったんだが……まあ、言わぬが花か。

☆☆☆

USJから学校に戻り、制服に着替えてようやく一息ついた私。いやー、疲れた疲れた。

リカバリーガールから『チュ——!!』してもらったおかげで、傷はすっかり治っている。

それでも流石にというか、今日は大事を取って、学校もう終わり、1—A帰宅ってことになったので、ご厚意に甘えてゆっくり休もうかな、今日くらいは。

家に戻り、部屋のベッドにごろんと横になったところで、今日のことを思い返す。

さっきの事情聴取の中で、追加で聞かされた内容も含めて。

今日襲って来たあの謎な集団は、『敵^{ワイラン}連合』と名乗った。目的は、『平和の象徴』であるオールマイト先生の殺害。それと、ついでとばかりに生徒たちの殺害も。

もつとも、どちらもこつぴどく失敗に終わったけど。

オールマイト先生はさすがの強さというか、『秘密兵器(キリッ』とか言ってたあの黒い奴……脳無とかいう奴も、たったの一撃で吹き飛ばしてたし、残った主犯格である、死柄木弔と黒霧の2人も、その後何もできずに逃げ帰った。両手両足にスナイプ先生の銃弾食らって。

生徒たちを殺すために散らばらせて待機させていたらしい敵達は——といっても、こっちは全然死柄木とかより大したことない、チンピラ程度だったが——ことごとく生徒が自分達で撃退。

取り残した者達も、駆けつけた先生方が捕縛していた。

終わってみれば呆気ないものだと思っただが、それでも本物の敵が相手だった以上、何か一歩間違えば、私達の身に悲劇が起こってたかもしれないんだ。そのへんは注意しよう。

あつけないと言えば、あの、一撃で敗れた『秘密兵器』……脳無に

ついても聞いた。

あの後、施設外の雑木林で脳無を発見、拘束して連行したらしいんだが……その際に軽く調べたことで、あれほどあっけなく脳無が吹き飛ばされた理由がわかったとのことだった。

アレがホントにオールマイト級の力を持っているのかどうかはともかくとしてだが……脳無はあの時、死柄木に崩壊させられた耳がまだ治り切っていないかった上、奥の方に金属片が残っていた。

そのせいで、鼓膜はともかく、平衡感覚をつかさどる三半規管その他の再生が不完全だった。

ゆえに、平衡感覚に異常をきたしてふらふらの状態で、死柄木の命令は聞こえても、殴るために踏ん張ることも何もできていなかった。そんな状態で、生徒に手を出されて怒り心頭のオールマイト先生の一撃をもらったものだから、全く相手にならずに吹っ飛んだというわけだ。

ぐるぐるバットとかの直後の『目が回っている』状態を思い浮かべればよさそうだ……あんな状態で最強ヒーローのパンチくらったら、そりゃいくらショック吸収持っても吹っ飛ぶわな。壊れないってだけで、踏ん張れないんだし。

なお、その件に関して私達は『ちよつとやりすぎ』と、軽くだけど注意されてしまった。

着眼点はよかったけど、この作戦は下手したら相手を……捕獲するべき敵を殺してしまうかもしれないものだったって。耳から金属片を叩き込んで、延髄や脳に届いたら、って。

緑谷は爆豪の細かな調整力とセンスを信じて鼓膜の破壊と異物の混入を任せたんだろうけど……まあ、そこだけ聞いたら確かに無茶苦茶な作戦に聞こえても仕方ないかな。

相澤先生と13号先生についても聞かされたが、命に別状はないとのこと。それはよかった。

これ以上は色々と捜査情報になるので明かさなかったが、とりあえず雄英は、明日は臨時休校になるらしいので、ゆっくり心と体を休めることができそうだ……

……と、普通ならなるんだろうが、私はちよつとそれは無理そうだ。

ベッドに横になったのはいいし、疲れてるのもそうなんだけど……同時に、今からもう既に動きたいというか、『準備』に取り掛かりたいことがあるので、私はスマホを手に、電話をかけている。

相手は……私の母だ。

「そういうわけで母さん。近々必要になると思うから、あそこにある訓練施設と……併設の諸々の用意したいんだけど。あと……」

『そう、そう……ええ、わかったわ、手配しておくわね。それにしても……ふふふ』

「? 何、母さん?」

『ようやく見つかつたんだな、と思つてね。あなたにも……支えるべき人が、ね』

「……うん、もう決まつた。間違いない。あの人しか……いない」
『そう……なら、私も応援するわ』

暫く話して、細かいことを確認してから、切る。

電話の向こうで、『榮陽院』の本家にいる母さんは、そう言つて私の出会いと決意を祝福してくれた。同時に、全面的に私のやりたいことを応援すると言つてくれた。

私の、『緑谷出久育成計画』……その、本格稼働を。

今もこうして目を閉じると、あの瞬間、土壇場で個性のさらなる制御に成功し、死柄木を黒霧ごとドームの反対側まで殴り飛ばしたあの光景がよみがえる。

舞い散る火花、迸るエネルギー、そして、それでもなお底を見せない、緑谷の持つ『可能性』。

目に映つたそれらを反芻するだけで、胸が高鳴る。顔がにやける。あの時の出力は、明らかに『フルカウル』で制御可能だった最大値、2%を超えていた。

一体どのくらいだつたんだろう? 3%? 5%? いやひよつとして、8とか10かな?

いずれにせよ、アレは力の片鱗であり、未来への可能性だ。

だったら……それを引つ張り出してあげることこそ、私の役目。

丁寧に畳んで持ち帰ってきた緑谷のジャージ……洗うのもつたい
ないな、ちよつと。でも、返さないわけにはいかないから仕方ない。

焦るな、落ち着け……確かにお宝を返しちゃうのは残念だけど、そ
のくらい、いくらでも取り返せるだろう。シーズンに入つて、彼をう
まく誘えば、一石二鳥で……ふふふ。

あー……それにしても……

(クラスとかで普段は、男子相手にもボーイッシュでフランク、無防備
で不用心な天然女子で通ってるけど……いや、別にあれも演技とか
じゃなくてホントに素なわけだけどき……一旦こんな風にスイッチ
入ると、なかなかに変態的な思考が抑えられずあふれ出てくるな……
でも、仕方ないよね。コレはもう、アレだから、宿命だから、『幾瀬
の血の』)

とりあえず、目下迫ってきている『雄英体育祭』だ。

コレに向けて、緑谷を育てよう……というか、一緒に強くなろう。

今回の一件では、少なからず私自身にも、改善して鍛えるべき点が
見つかったから。

今日はまあ、休んで食べて回復に努めるとして、明日から色々準備
だな……

「……………ふひひ」

まあ、苦にはならないが。

第2章 TS少女と体育祭

第17話 TS少女と体育祭

『雄英体育祭が迫ってる』

USJ襲撃事件のおかげで臨時休校になったさらにその翌日。全身包帯だらけのミイラと化した相澤先生が告げたその言葉が、私達1-Aの次なる目標を告げた。

正直ちよつとどころじゃなく痛々しいので寝ててほしいっていうか、ここまでなったら代理の先生立てるくらいするだろというか、雄英ってもしかして割とブラックなのかとか色々思ってしまったって、半分くらい聞き流してしまっただけど、要するに体育祭頑張れってことだ。

ていうか、相澤先生リカバリーガールに頼んで治癒してもらわなかったのかと不思議に思ったんだが、ホームルームの後にこっそり聞いたら、色々理由があつて一気に治癒しないほうがいいんだそうだ。

一言に治癒と言っても、治癒能力を活性化させれば全てがすぐに解決するわけじゃない。ゲームじゃあるまいし。

相澤先生の場合、腕と顔がかなり複雑な、酷いところでは粉碎骨折に近い状態になっていたので、いびつな形に骨がつながったり、砕けた骨が関節とか神経、血管の近くに入らないように、外科的手術とかもしたらしいから、その経過観察のためにも自然治癒に留めてるんだとか。

体力が足りないとかの理由なら、私がちよつとおすそ分けしてもよかつたんだが……世の中うまいこといかないもんだな。

それはともかく体育祭だ。

この世界において、『個性』という超常の能力が一般的なものとなつて以来、人種やら何やらの差はあれど、基本的に同じ人間が平等な条件の下、自分の才能と努力を競う『スポーツ』……特に『オリンピック』やらは衰退の一途をたどった。

そりやそうだな……競技に有利な個性を持つてる奴が、どう考えたって圧勝するに決まつてるし……それを盛り込んで『平等になるよ

うに』競技ルールを作るのは大変、いや不可能だろう。

そのオリンピックピックに代わる行事として今最も注目されている1つが、この体育祭なのだ。

まあ、ただの高校の体育祭と言って片づけられるようなもんじゃないからな……何せ、偏差値79、倍率300倍の狭き門を潜り抜けた生徒たちが、『個性』を思いつきり使って競う場だ。そりゃ見どころ満載だろう。

万が一不測の事態が起こっても、それを抑えられる優秀かつ強力な教師陣がいるからこそ可能なイベントだよな……改めて思うけど、教師のほとんどがプロヒーローってすごいよ、うん。当日はそれに加えて警備にヒーロー雇うんだしね。

私も何度かテレビで見たことあるが、テニスの王〇様やイナ〇マイレブン、少林〇ツカーがかすむくらいのだ派手な戦いだっ……CGでも何でもなく、しかも生放送であんだけの戦いが繰り広げられてるのを見るのは、手に汗握るところじゃない興奮だった。

……まあ、生放送な分、時には放送事故みたいなのも起きちゃうんだけども……

去年、一昨年と、競技中に突如全裸になっていた謎の男子がいたっけな……多分『個性』の関係だとは思いますが、アレは一体何だったのか……

私は元・男なのでせいぜいびつくりしたくらいで済んだが、横にいて一緒に観戦していた女友達が絶叫していたのをよく覚えてる。一瞬とはいえモロに映ったからな、テレビ画面に……本来はモザイクなしじゃ映しちやいけないモノが無修正で……

で、だ。その体育祭に私は今年、出る側になったんだよなあ……全国生放送で無様な姿は見せられない。きっちり特訓して動けるようになっておかないと。

それに、体育祭は生徒たちにとっては、1つのチャンスの場でもある。

体育祭が注目されるのは、何も娯楽目的だけじゃなく、プロヒーローやその関係者が『スカウト』目的で見るといって側面もある。

卒業後の進路としてヒーローになることを目指している私達は、自分の能力をアピールして多くのプロに注目してもらうために、この体育祭を最大限活用しなければならぬというわけだ。

好成績を残し、強く印象に残るほど、自分にとって有利になるというわけ。

そういう話になれば、燃えざるを得ない。ヒーローの卵として当然の反応だろう。

だからこそ……彼が放課後に何を言ってくるか、大体予想できるつてもものだった。

☆☆☆

Side・緑谷出久

授業の中で相澤先生に発破をかけられ、

昼休みに麗日さんに、彼女がヒーローを目指す動機を聞かされ、

そして同じく昼休み（後半）、オールマイトと仮眠室で話した。

オールマイトは、僕がUSJで戦った時のことをある程度聞いていたようで、わずかな期間でここまで使いこなせるようになるとは、つて褒めてくれた。

僕としては……まあ、確かに成長した自覚はあるけど、まだまだだと思っっている。『フルカウル』で安定して使えている力も、せいぜい全力状態の2〜3%がいいとこだ。

そしてその上で、オールマイトからも、今度の体育祭はチャンスだと言われた。日本全国が注目する中で、平和の象徴の後継者として、『僕が来た』ってことを示す最大のチャンスだと。

オールマイトも期待してくれている。なら……ここで何としても結果を残さなきゃ！

立て続けに起こった出来事で、僕の心に灯っていた炎が、より大きく燃え上がるのを感じた。

それと、その昼休みにオールマイトと話した時に……いい機会だから、僕が『フルカウル』を……というか、『ワン・フォー・オール』の

制御をここまで習得することができた経緯を報告した。

経緯というか、そのまんま……彼女と行っている、放課後の特訓のおかげだと。

「栄陽院少女と？」

「はい、放課後に訓練施設を借りて、パワー制御の訓練を手伝ってもらって……あ、もちろん『ワン・フォー・オール』のことや、オールマイトのことは何も話してないですから」

「そうか、それならいいんだ。しかし……成程、急激なパワーアップの陰にはそんな秘密があつたわけか」

「はあ……その……僕一人じゃどうしても要領をつかめなくて……すいません」

「いやいや、何も謝ることはないさ。度が過ぎれば別だが、誰かの力を借りてきつかけをつかむというのも立派な道筋の1つだ。……本当は私が修行を見てあげられればいいのだろうけど、すまないね、時間がなかなか取れなくて。君に任せきりにしてしまっていることこそ申し訳ないよ」

「い、いえいえいえそんな！ オールマイトも教職になって忙しいでしょうし！ それにその……栄陽院さんの教え方、本当にわかりやすいんです。同じ増強型の個性で、力を籠めすぎると逆にこっちの体が壊れて危険、つていう所まで似てるから……彼女も昔それで苦労したみたいで」

「ほう……」

ごく簡単にはあるけど、彼女との特訓で何をやっているか、その中でどんな風に力の使い方を学んでいたかについても話した。

……ちよつと恥ずかしいシーンというか訓練法については、割愛したりぼかさせてもらったけど……すいませんオールマイト、流石に勘弁してください。

オールマイトは黙って、しかし興味深そうに相槌を打ちながらその話を聞いていた。

「あえて0%から、というか真正正銘の『ゼロ』からじっくりと制御を学び、焦らずゆつくりと……『積み重ね』か……成程、盲点だったな。

私の時は、最初からある程度使えてしまったから」

あ、やっぱりそうだったんだ……オールマイト、やっぱりすごい！でも、それが問題だって栄陽院さん、ダメ出ししてたっけなあ……天才型は努力型の教育者には絶望的に向かないって。……言わないけど。

「彼女とクラスメイトになれて、しかも一緒に訓練できるくらいに仲良くなれたことは、間違いなく君にとって幸運だったことだね。体育祭に向けたトレーニングも、一緒にやるつもりかい？」

「はい、今日から早速！ あーでも、最近お世話になりっぱなしだから、何かお礼考えないと……」

訓練見てもらってるのもそうだけど、この間のUSJでも……危ないところを助けてもらっちゃったし。脳無に拘束された時とか。

最後なんか、敵の攻撃から身を挺して守ってくれようとして……あ、そ、そう言えばあの時僕、栄陽院さんにその……だ、抱きしめられて、も、モロに見ちゃっつ、どころか触れ……

え、ええとあれは……女性のあんなところにあんな風にしちやつたんだから、お礼と言うかお詫びと言うか、用意したほうがいいのかな？ でも本人もとっさのことだって言ってたし、全然気にしてない様子だったけど……逆に迷惑になるかな？ っていうかあんなことその後、『お礼』って変な意味で受け取られない？ ああああ、考えてたらどんどん思いたして来ちゃって顔が熱く……

「……？ どうかしたの、緑谷少年？ 顔、赤いけど……部屋、暑い？」
「へあつ!? あ、いえ、はい、あつたかくて柔らかかったです！」
「はっ？」

しまった、正直な感想が口をついて出た！

その場はどうかごまかしたわけだが……放課後。

いつもの訓練室で、僕はまた、栄陽院さんと2人になっていた。

ひ、昼休みに変なこと思いたしちやつたから、中々彼女の顔を直視できない……い、いや冷静になれ僕！ 彼女はあくまで僕と特訓のためにかこうしてきてくれてるんだ、自分の貴重な時間を使ってまで……

それなのに僕が、そんな邪な気持ちを持ってちゃいけない！ 栄陽院さんに失礼だ！

……っていうか正味な話、彼女だって体育祭に向けて特訓とかしたんだろうに……それを僕のために時間を潰させちゃってるのは、申し訳ないと思う。

もつと僕に、1人でも力をつけられるだけの知識とかノウハウがあれば……

「いいんだよ、私がやりたくてやってることなんだから」

「うえ!？」

いきなり心の声にドンピシャなことを言われて、驚いて変な声が出た。

こ、声に出してなかったはずなのに!? こ、心読まれた!?

「顔に出てる。緑谷、結構わかりやすいって言うか、表情がうるさいからすぐわかるよ?」

「あ、そ、そう……」

ひよ、表情がうるさいって……初めて言われた種類の表現なんだけど……そこまでかなあ?」

「あーそれと、はいコレ」

と、ふいにそう言っただけ栄陽院さんは、鞆から何かを取り出して僕に渡してくる。

何だろコレ……って、ああ、貸してた体操服か。

丁寧に包んでビニールに包まれてる……ひよつとしてわざわざクリーニングか何かに出してくれたのかな? そんな、そこまでしないでよかったのに……

ちなみに、今僕が着ている体操服は予備の奴だ。2着買つといたから。

……小・中学校と、かつちゃんから服爆破されて着られなくなることも多くて……予備の奴を絶対に用意しておくのが習慣になってたからなあ(遠い目)。

「教室で渡せばよかったんだけど、忘れててさ。とりあえず業者に頼んだから奇麗にはなってるよ。……峰田の奴は『洗わないで返すべ

きだ!』とかアホなこと言ってたけど」

「ははは……峰田君……」

この短い間に、すっかり『女好き』でキャラクターが知れ渡ってしまっているクラスメイトの顔を思いだす。熱弁する姿が簡単に想像できてしまった。

……しかし、この服を栄陽院さんが着てたんだよなあ……大きくてあつたかくて柔らかかったあれを、これが、じかに包んで……

「……緑谷? えっと……洗わない方がよかった?」

「うえ!? ち、ちちち違つ……そういうんじゃないで、その、あ、ありがと! わざわざクリーニングにまで出してもらって……お金がかつたでしょ?」

「いや、そんなん全然いいって。あの時は私も結構激しく動いて汗けっこうびっしりで、匂いもしみついちゃってただろうし、洗濯機だけじゃ残りそうで不安だったんだよ」

だからこの人は……こないだの訓練の時といい、どうしてこういう絶妙なタイミングでそういう想像を掻き立てられるようなことを……ああ、訓練の時に幾度となくかいだ、ちよつと汗の匂いの混じった栄陽院さんの匂いがフラッシュバックしてええい消えろ邪念!

こないだからちよいちよいこういうことが増えてきてる気がする……たるんでるぞ緑谷出久! こんなことで、協力してくれている彼女に申し訳ないじゃないか!

「よし、じゃあ栄陽院さん、さっそく始めよう! 体育祭までそんなに時間も無いしね!」

「ん? おー、了解緑谷。なんか気合入ってるね」

「うん! 相澤先生達も言ってたように、ヒーローになるためには避けては通れない一大イベントだからね!」

そうでもしないと色々意識、ないし想像しちゃうから……:というのが本音ではあるが、今言ったことも決して嘘じゃない。

オールマイトの期待に応えるためにも、もつともつと力をつけて、

いい結果を出さない！」

そのための訓練方法は……また栄陽院さんに頼ることになっちゃうってのは、情けないんだけど………ホントいつか何かの形でお礼しないとだなあ……。

それに、いつまでも彼女に甘えてるわけにはいかない。自分でも鍛え方というか、トレーニングメニューを考えて実行できるように、勉強進めないと。

そんなことを考えていると、

「あー、その前にちよつと話があるんだけどさ。緑谷、その……今週の週末とか空いてる？」

「え、週末？」

「そうそう、土日。ほら、体育祭前だからって連休になったじゃん？ その、あーできれば金・土・日って時間あれば一番いいんだけど」

昨今の学校教育の現場では、週休二日制……すなわち、月々金の平日が登校日で、土日は休み、っていうのが一般的だ。部活とかはともかく。

しかし雄英高校は、3年間という短い期間の中に、卒業後にプロヒーローとしてやっていけるだけの教育課程を詰め込んでいるためか、土曜日にも普通に授業がある。休みは日曜日の1日のみだ。

ヒーローを目指すならそのくらいは当然だと思うから、それに不満はない。甘い世界じゃないからね……他の皆もそうだろう。

ただ今回の土日は、体育祭前で自主トレに打ち込む生徒も多いだろうってことで、土日丸々休みになったのだ。すなわち、金曜日の放課後から、授業とは切り離されたフリーな時間が始まる。

ほとんどの生徒は、体育祭に向けてトレーニングに打ち込むんだろうし、僕もそのつもりだった。何なら、この後にも栄陽院さんを誘おうと思ってたし。

「予定は空いてるけど……どうして？」

「そっか、そりゃよかった。じゃあさ緑谷……」

……週末、うちに泊まりに来なよ？」

第18話 TS少女とトレーニングジム

S i d e . 緑谷出久

『雄英体育祭』まで残り2週間を切った週末。具体的に言うと、金曜日の放課後。

学校が終わって僕は、しかし家には帰らず……そこにやってきていた。

「……お、大つきい……」

雄英高校から電車で1本で行けて、駅に近く、最寄りにコンビニはもちろん、様々な飲食店やサービス業の入った商業ビルなんかが揃っている、超のつく好立地。

そのど真ん中に立っている、30階建て、これまた超のつく高級タワーマンション。

教えられた住所に建っているここが……栄陽院さんの家だ。見上げている首が痛い。

特訓のため、そうあくまで特訓のため、『週末泊まりに来なよ』と誘われて……あんまり緊張しないで普段着で来ればいい、と言われてきたけど、無理だよ既に。

どこからどう見ても普通の一般市民でしかない恰好の僕に対して、このマンションから出入りしてる人、完全にもうなんか、裕福そうなオーラ全開の人たちばかりだし……。

着替えその他の入ったボストンバッグを手に、Tシャツ姿で棒立ちしている僕の間違い感……。

け、けどここまでできて引き返すわけにもいかない。

意を決して、玄関の所にある機械（名前知らない）を操作し、聞いていた部屋番を入力して……

「はいもしもしー、栄陽院ですけど？」

「あ、あの……え、栄陽院さん？ み、緑谷だけど……」

「あー待ってたよ緑谷！ よし、開けるから入ってー」

そう聞こえて、通話が切れると同時に……出入口の自動ドアが開いた。よ、よし……行こう。

長いエレベーターが目的の階に到着するのを待っている間、僕はと
りあえず、ここに至った経緯を思いだしていた。

僕と栄陽院さんは、毎日ではないけど、互いに都合がついた＋訓練
室が空いていた日に、2人で『個性』を鍛えるための訓練をしている。
というか、ほぼ一方的に僕が面倒を見てもらってるような状態なんだ
けどね……今のところは。

そんなある日の特訓の場で、さつき言った通り、僕は『お泊まり』の
誘いを受けた。

もちろん何かいかがわしい意味があるわけもなく、あくまでこれは
特訓のためだ。

どうやら栄陽院さんの家には、こういう時に役に立つトレーニング
関係の器具が多くあり、また近くにいくつも、『個性』使用可のジムを
始めとした訓練関係の施設があるらしい。

要するに、何もなくてで人力だけを道具に訓練をするのにも限
界が見え始めてるし、ましてや体育祭前の一番大事な時期だから、設
備のいくらでも整ったところで効率のいい訓練を積むべきだ、という
理屈らしい。その会場として白羽の矢が立ったのが、彼女の家だった
と。

と、年頃の女の子が、同級生の男子を家に招くのはいくらなんでも
……とは思ったんだけど、例によってあんまり深く考えてないんだろ
うなあ栄陽院さんの場合……！ 僕だけが慌てたように言い返して
も、それはそれで変な風に考えてるんじゃないかって悟られる可能性
が……

それに、流石に彼女も外聞とかその辺については承知していたらし
く……教室では話題に出さないように徹底していた上、カモフラ―
ージュや家のお母さんたちの説得に必要な小道具までくれた。

もらったのは、超高級な会員制トレーニングジムの優待チケット。
それも、『めざせプロヒーロー！ 個性訓練泊りがけコース』ってい
う、外泊を前提としたそれだ。

『余ってるからって友達からもらったんだ。折角だから行ってみよ

うと思つて』……以上が、僕が今日の『お泊まり』をお母さんに説明して外泊の許可を出してもらうに際しての、カモフラージュ的な理由付けである。さすがに高校生が理由もなく外泊するのは怪しまれるよね。

そんなことを思いだしてる間に、部屋についた。

「ようこそ緑谷、借り物だけど……我が家へ。ささ、入って入って。荷物は適当なところに置いて」

「お、お邪魔します……」

すごいな……やつぱり部屋も広い。つてか、そもそも部屋がいつぱいある。

さすがセレブ御用達の超高級マンション……家具も何もかも、高級だつて一目で見てわかるものばかりだ……

けど……ざつと見渡してみた感じ、セレブっぽい優雅な生活を送るための器具はあちこちにあるけど、トレーニングに使えるような器具はほとんどなかった気がする。

どこで、どうやってトレーニングするんだろう？　と思つてたら、動きやすそうな服に着替えた栄陽院さんが、片手で持てるサイズの小さなバッグを持ってきて、そこにいた。

「よし、じゃあ緑谷、移動しようか、特訓する場所に」

「え!?!　その……ここつていうか、栄陽院さんの家でやるんじや?」

「寝泊りするのとかはここだけど、設備は別の場所にあるんだよ。着替え……つていうか、訓練用のユニフォームも用意したから、ほら行こ!」

「う、うん……」

着いたと思つたらまた慌ただしく移動して、僕は最終的に、併設されているトレーニングジムに来ていた。このマンションの地下から連絡通路が繋がつてて、外に出ずに行けるんだつて。

通るにはマンションの住人しか持つてない通行証が必要だから、栄陽院さんと一緒に行った。

やはりというかすごく広い上、さっきの部屋とは打って変わって、最新式のハイテクトレーニング器具があちこちにある。大半が……

見たことも無いから使い方もわからないものばかりだ。

そしてそこを訪れた僕と栄陽院さんは、彼女が用意してくれていた、特製のトレーニングウェアに着替えていた。

見た目は単なるジャージ——単なる、といってもかなりスタイリッシュな見た目の、高級なブランド品である——だけど、着るだけでトレーニングになるようになっていて、服自体も重い上に体の各部にウェイトが仕込まれている。さらに、体を鍛えつつも、関節とかに過度な負担がかからないように、各部を保護するサポーターとしても働くように作られているときた。

明らかに、ヒーローのコスチュームを作るようなサポート会社が手掛けるレベルの品だ。

僕と栄陽院さんで、サイズ以外はおそろいのそのウェアを身に付けてやってきたのは、このジムの中でも、特に選ばれた会員か、その紹介でしか使えないようなエリアだそうで……さ、さつきから世界が違いすぎる場所に案内され続けてる……。

こんな機会がなかったら、僕には一生縁も何もなかったはずの場所だよ、ここ……。

まあそれはこの際、もう考えないようにして、特訓に集中することにする。うん、それがいい。

それはそうと、ここはどういう訓練施設なんだろう？

一言で言うと、屋内に設置された陸上競技用のトラックのようだが、しかし、ただ走るだけの平坦な作りにはなっておらず……コース上に様々な機械、というかギミックが用意されている。

障害物競走？ いや、どつちかつていうとコレは……アスレチック？

「お、鋭いじゃん緑谷。それじゃ……ぼちぼち始めようか？」

そしていよいよ始まった、『フルカウル』をより使いこなせるようになるための特訓。

僕は今、この屋内ハイテクアスレチックコースを、『フルカウル』状態でひたすら周回している。

やることは簡単。コース上に設置されたギミックを、その場その場のやり方で突破していきながらひたすら走るだけのシンプルなもの。例えば今ちようど差し掛かった、コースを塞いで配置されている『雲梯』。

公園とかにもよくある、梯子にぶら下がって腕の力だけで前に進んでいく遊具だ。

僕はそれに飛びついて、腕の力だけで鉄棒をつかみ、ひたすら腕を動かして前に進んで、一番端まで行ったら飛び降りてコースに復帰し、また走っていく。

そうすると次は平均台が用意されているので、これも端から乗ってバランスを取って進む。クリアしたらまたコースを走るのに戻る。

今度はボルダリングっぽい壁が用意されているので、両手両足を使って素早く登る。登り切ったところに今度は下に降りるための滑り棒（消防署とかにある、掴まって一気に下に降りるアレ）があるので、それに掴まって下に降りて、コースに復帰したらまた走り出す。

こんな感じで、エンドレスな障害物競走みたいな感じで、ひたすらこれを周回する。

ただの体力づくり、あるいは遊んでるだけに見えるかもしれないが、全然違う。

特製ウェイトスーツのおかげで、身体能力が上がる『フルカウル』の状態でも、運動がいい感じの負荷になって鍛えられるし……それ以上にこの訓練の本質は、持久力とか基礎体力以上に、『体の動かし方の訓練だ』。

わかりやすく言うと、僕がまだ『ワン・フォー・オール』を受け継ぐ前、あの海浜公園でやっていた、清掃活動を兼ねたトレーニングに近い。

どんな形、どんな大きさの、どのゴミをどう運ぶかで、使う筋肉が全然違うから、色々な部分の筋肉がまんべんなく鍛えられる……というものだった。また、その過程で効率のいい体の動かし方なんかも学ぶことができ、それにより効率も徐々に上がっていった。

奇しくも今回のこの『ハイテクアスレチック with ウェイトスー

ツ』は、その強化版だ。負荷もでかけりや動きも激しい。闇雲に走り回ってるだけじゃあつという間にばててしまう。

雲梯1つ進むにしても、ただ腕を動かせばいいだけじゃない。

腕を動かす方向、角度、込める力、指のどの部分でどう握るか、ぶら下がっている体の動き、足の動き、呼吸のタイミングから重心の取り方に至るまで、一旦意識さえしてしまえば、改善すべき点はいくらでも出てくる。

細かい点かもしれないが、疎かにすればそれだけ体力をロスする。逆に、これらを1つでも多く改善することで、最小限の力で最大限のパフォーマンスができるようになる。

体中、あらゆる動きの中でコレを実践し、徹底的に『正しい動き方』を体で覚える。

それが、このトレーニングの目的だ。

それからしばらくして。

「——およそ30分か。まあまあ、つてところかな」

「ぜえ……ぜえ……ぜえ、つ、はあ……はあ……!!」

今、栄陽院さんが言った通り……走り始めてから、およそ30分後。ものの見事に体力を使い果たした僕は、走っている途中で動けなくなり、その場にうずくまって激しく息を切らしていた。

こうなることを見越していたのか、栄陽院さんがあらかじめ用意していた酸素ボンベを吸引させてくれて、同時に直接『エネルギー』も少し流し込んでくれたので、すぐに楽にはなったけど。

「初回だし、まあこんなもんか。思ったよりいい線行った方かもね。まあ、ランナーズハイになってたのに気づかなくて、加減できずに体ほほとんど吐き出しつくしちゃったようだけど。その分、疲れとか各部の痛みとかが今一気に来てるんだ」

「そ、そっか、それでこんなに、きつ……うえっ……ぶ」

「ちよちよちよ、吐くなよ緑谷？　ほら、飲める？　水分と体力補給しときな」

そう言っつて差し出してくれたスポーツドリンクをありがたく貰う。

いつの間にか汗びっしりになって、着ているウェアもそれを吸って余計に重くなっていた。

これだけ汗かいたからだろうな……スポーツドリンクがすごく美味い。500mを一気飲みしたけど、まだ足りない感じがする。

けど、ドリンクの中には、栄陽院さんが『エネルギー』を溶かしておいてくれたんだろう。急速に疲労が楽になっていくのが分かった。呼吸も元のペースに戻っていき、気持ちに余裕が出る。

僕がある程度落ち着いたのを確認して、栄陽院さんは言った。

「今日のである程度、このトレーニングのやり方とかコツみたいなものはつかめたと思う。明日と明後日はひたすらコレを、『条件』を様々変えて調整しながら繰り返し返す。そして適宜、応用になる別な訓練を入れていく形にするからね。多分、それが一番効率がいい」

「なるほど……でも、応用の、別な訓練って？」

「それは明日のお楽しみ。さ、今日はここまで！ 動けるようになってたら、家、帰るよ」

栄陽院さんはそう言っ、使っていた器具の後始末を含めた帰り支度を始める。

僕の分の荷物とかまとめるのもやってくれてるみたいだ。申し訳ない……

けど、今は僕、ちよつと真面目にゆっくり休みたいから……ご厚意に甘えさせてもらおう……。予想以上にキクなあ、この訓練……！

やってるうちに、少しずつ自分で動きを調整していき、それが徐々に負担の軽減につながってるのを確かめるのは楽しかった。それはそのまま、動きと力の『最適化』の重要さを物語ってる。

無駄な動きをせず、無駄な力を込めず……常に最適な動きを心がける。

いや、いちいち戦闘中なんかそんなことを考える余裕はない。ゆくゆくは、考えるまでもなくそういうことができるようにならなくちゃいけないはずだ。

(考えてやってもそれができない……こうしてバテて動けなくなる……こんなじゃまだまだだ。先は長い、けど時間はない……あらた

めて気合入れないと)

「でも……今日はもう、無理だなあ……」

ははは、と乾いた笑いが口から洩れる。

今日はもう終わり。もうできない。明日また頑張れるように、しっかり休むことにしよう……

この時の僕は、まだ知らなかった。

何も、わかっていなかった。

まだ、試練の時は終わっていなかったのだということ。

いや、ある意味……むしろこれからの時間こそが、僕にとっては『試練』と呼べるものであり、想像を絶する出来事が待ち受けていたのだということ……！！

第19話 TS少女とマッサージ

S i d e . 緑谷出久

(どうして……どうしてこうなった!?)

依然としてパニック状態の頭は、冷静に何かを考えると許してはくれない。

とうかそもそも落ち着ける気がしない。こんな状況で落ち着くことができたとしたら、それはむしろそっちの方がまともな神経かどうかを疑う。

どうにかしてこの状況を打破しなければならぬ。さもないと大変なことになる。

それはわかっているが、この状況はのために僕が動くことすら容易には許してくれないものだ。動けばそれだけで取り返しのつかないことになる可能性すらあり、しかしこのまま黙ってなすがままになっていていいはずがない。

たとえこの状況が、見た目のみならず実際にとても心地よく、ともすればこのまま待っていれば、自分を目くるめく快楽の縁へ連れて行ってくれるものかもしれないとしても……譲れない一線がある。

ヒーローとして、男として、それだけは、それだけは許容できない！

「ああ、ほら緑谷動かないで。オイル塗るから」

「ひゃうん!?!」

と、覚悟を決めた瞬間に、背中から栄陽院さんに抑え込まれて……同時に、むき出しの背中にとろつとした感触が触れる。今言ってたことからは、彼女が手でオイルを塗ってくれているんだろう。

……白状してしまうと、今僕は、彼女の部屋のリビングで……床に敷いたタオルマットの上に、ごろんとうつぶせの姿勢で横になっている。

しかも、半裸で。

裸で、腰にタオルを巻いただけの姿で。

その状態で僕は、今から栄陽院さんにマッサージしてもらおう……

という状況だ。

……本当に、どうしてこうなった……!?

☆☆☆

時は少しさかのぼり、僕が栄陽院さんと一緒に、トレーニングジムを出て、栄陽院さんの部屋に戻ってきたところまでさかのぼる。

2人共ジムのシャワー室で汗を流して、もってきておいた部屋着に着替えていたので、そのまま部屋でしばしゆっくりくつろいだ。

体を休めるついでに、持ち込んだ学校の課題をやったりして。

途中で栄陽院さんがジュース持ってきてくれたんだけど、すごい美味しかったな……汗いっぱいかいたから、つい飲みすぎちゃったかも。

その直後あたりで、ジュースのビンのラベル部分に書いてあった値段が5ケタだったことに気づいて青ざめたけど、栄陽院さんは全く気にせず飲んでいた。

ていうか、1万円超える値段のジュースなんてあるんだ……初めて知った。

聞けば、ドイツ産の輸入品目なんだそうだ。昔知り合いに貰って飲んでからお気に入り、割とよく買って飲んでるんだって。

せ、せれぶりてい……。っていうか栄陽院さん、ドイツに知り合いいるのか？

その後、栄陽院さんがキッチンで夕食を作ってくれた。

手伝おうかって言ったんだけど、1人で作る方が慣れてるし、疲れてるだろうからゆっくりしてくれって言われて……せめて、食器とかテーブルの用意はさせてもらった。

している間も、正直ちよつとドキドキが止まらなかつた。だ、だって、女子が手作りしてくれた料理を食べる機会があるなんて……我が世の春って奴だろうか。

そんなに長くない髪を頭の後ろで縛り、エプロン装備で手際よく料理を作っている栄陽院さんが、すごく輝いて見える。あまり見慣れない

い普段着姿は、予想通りと言えばその通りのズボンスタイルだけど、長い手足の彼女にはかえって、すごく映えると思えた。

キッチンに立つ女の人って、こんなにも魅力的に見えるものだっただろうか。最近はずまみ食いを繰り返しながらご飯を作るお母さんしか見てないからちよつと忘れかけていたよ。

のんびりリビングのソファでくつろぎながら、僕のために食事を作ってくれる女の子をぼーっと見ている。……なんかいいなあ……こういう時間。

……ただ、その手元に目をやると若干の、いや割と強烈な違和感が襲ってくるけど。

……話に聞いてはいたが、デカイ。

何がって？ 調理器具が。

クラスでも噂になってたし、実際に彼女の弁当箱を見たこともあるから知ってはいたけど、栄陽院さんは『個性』の関係もあってかなりの健啖家らしく、弁当も普段の食事も、大量に料理を作って食べるんだそうだ。

それを効率よく、というか一気に作るためだろう。フライパンも鍋も、まな板も包丁も、どれもこれもかなり大きい。大人数用のパーティーメニューでも作るのにかけてくらしいのサイズだ。

それを調理するコンロとかの設備も大きい。特注品じゃないかなアレ？ わざわざ設置したのか？ こだわってるなあ……何人前の料理が出来上がるんだろう。

まあ、ここには2人しかいないし、そもそも普段は彼女は1人で作って食べてるわけだが。

しかし、調理工程はかなり豪快ではあるものの、出来上がる料理はどれもおいしそうなものばかり。いい匂いもしてくるし……気が付けば僕は、リビングからお腹を鳴らしてキッチンの栄陽院さんをガン見してしまっていた。

そうしたら苦笑しながら『もうちよつとかかるから待ってて』って……ああ、やっぱいい、この若奥様感……。

ほどなくしてできた料理は……やはりというか多かった。

炊飯器に炊きあげられた白米のほかほかご飯に、肉じゃが、豚のシヨウガ焼きに青椒肉絲に麻婆春雨……デザートの果物類はともかく、ガッツリ系の料理がこれでもかと。何人分だろこれ……。

しかし、残ることはないんだろう。見てる端から彼女の口の中、ひいてはお腹の中に消えていつてるから。

もちろん、僕もいただいている。いろんな料理を少しずつ感じて、何かこう……レストランのバイキングとかにいるみたいな感じだ。楽しい食卓である。

もちろん味も美味しい……出来たてだからどれもあつたかくてなお美味しい。

つつい行儀悪くかきこんで食べちゃったりしたけど、栄陽院さんは咎めることもなく苦笑して『誰もとらないからゆつくり食べなよ』って言うてくれた。

ただし自分も食べる+食べるの早いからもたまたしてるとなくなることはあり得る、とも言ってた。

いやそれあんまりゆつくりできないんじゃないじゃ……何、最終的には任せろ？ あっそう。

栄陽院さん曰く、きちんと栄養バランスとかも考えて作ってくれたらしいので、心置きなく、遠慮なくたくさん食べていいとのこと。明日から本格的に特訓なんだし、力をつけておけつて。いくらでもあるからじゃんじゃんお代わりしていいつて。

実際にすごい量を作つてあるのは見てわかるし、まさにいくらでも食べたくなるほどにどれも美味しいので、お言葉に甘えてお腹いっぱい食べさせてもらった。

あー、幸せ……なんて言うんだろうコレ、感動的な満腹感だ。体中の細胞という細胞が、食べて体の中に入つてきた栄養にじんわり浸つてる感じ……

いっぱい運動したあとだから余計にそう感じるのかな。もうなんか、このまま寝たいかも……

けど、ここままでしてもらつてホントにだらけてるだけなんて流石にまずいと思い、せめて皿洗いくらいはしようと思つただけど、『食器

洗い機あるから』と言われて撃沈。

そしてその直後、『先にお風呂入ってきなよ』と言われた。心臓止まるかと思った。

い、いや、何もおかしなこと言われてるわけじゃないのはわかるんだけど、ほら、今の今まで美味しい料理とかで頭から抜けかけてたけど、ここ女子の部屋なわけで……僕は男子なわけで。

そこで、お風呂どうぞとか言われたら、例え彼女に他意が何もなからうと、そりゃ緊張しない方が嘘つてもものじゃないですかわかりますわかるよねわかってください反論は認めない。

ここままでしてもらって一番風呂なんて、とは言ったが、『いいからいいから』と押し切られて、あれよあれよという間に、使い方を簡単に説明されて脱衣場に放り込まれた。

観念して、なるべく無心でさっさと入ってしまおうと心に決め、先に失礼することにした。

……広いな、お風呂……僕の部屋とかより全然広い。湯舟は足をのばせるどころか、横になってしまえるくらいの大きさだし、ジャグジーまでついてるし……置いてあるシャンプーやボディソープがすごくいい匂い……。

……ここで毎日、栄陽院さんも……か、考えるな、深みにはまる！あの彼女の玉の肌がここで毎日磨かれてるのかとか、あのいい匂いや柔らかい感触はこれらのシャンプーやボディソープによつて保たれてるのかとか、自分は今彼女がいつも使っている湯舟に裸で身を預けてるんだとかあああああ考えるな緑谷出久う！

肉体的な疲労はとれたけど、精神的な癒しと疲弊がプラマイゼロくらいになった気がする入浴の時間を終えて、早いところ着替えて戻ろうと思った僕だったが……脱衣場に戻って、着替えがなくなっていることに気づく。

え、どういうこと？ 忘れてきた？

い、いや確かにここに持ってきたはず……きちんと畳んで、替えの

シャツとパンツと、部屋着の上下をここに置いておいたはず。何でなの？

いま、僕は全裸だ。このままじゃ外に出られない。

なので、一旦タオルを腰に巻いて……恥ずかしいのは我慢して栄陽院さんに声をかける。

タオル一枚の半裸姿で女子を呼ぶとか女子の前に出るとか、普通に考えれば悲鳴上げられて通報されても文句言えない暴挙だけど……これまでのことを鑑みるに、多分栄陽院さんなら気にしないだろう。普通に『どしたの?』とか聞いてくる気がする。

きちんと事情を説明すれば、『ドジだなー』とか言って笑って許してくれると思う。こういう時には彼女の男っぽい感性がありがたい……いや、こんな状況そうそうないだろうけど。

ともかく、意を決して脱衣場の扉を開け、恐る恐る栄陽院さんを呼んだら、すぐにやってきた。

しかし、その後の彼女の反応は、驚かれるでも普通にされるでもなく……『こつち来て』と突然僕の手を取ってリビングに引っ張っていかれた。ちよ、ちよっと!? 僕、お風呂上がりで裸……

そしてリビングに来ると、そこにはフローリングの床に、厚手でふかふかのタオル地でできているらしいマットが置いてあって、僕はそこにうつぶせに寝かされて……

……で、冒頭に至る。

「え、えええ栄陽院さん!? ま、マッサージってそんな、何でいきなり……い、いいよ別にそんなことしなくても!」

「そんな遠慮しなくていいって、私こういうの結構得意だし、疲労回復にも効果あるからさ」

「い、いや、疲れくらい寝ればとれるし……そ、そもそも何でわざわざ裸でやるの!? 今のでなんとなくなかったけど、脱衣場から僕の着替え持ってたの栄陽院さんだよな?」

「正解。服着ちゃったら脱がなきゃいけない分手間でしょ? だからお風呂あがったら直行してもらおうと思って」

「いやだからそもそも……百歩譲ってマツサージはいいとしても、だから何で裸なのさあ!？」

せめて、せめて服を着させてよ!

今ホントに僕、体を隠してるのこの薄い布のバスタオル一枚だけなんだけど!?! この下何も着てないんだけど!?! 取れたりめくれたりしたら見えちゃうんだけど!

その上さらに、なんか栄陽院さんも妙に薄着になってるし! なんそんな薄手のシャツ?と、下なんてスパッツだけじゃないのそれ!?!ズボンとかちゃんとはいてよ!?!

いつの間にか……おそらく僕が風呂に入っている間にだろうが、彼女は着替えていた。

上も下もぴったり体に密着する、体の線が出まくりの超薄着(物理的に)で……下はさつき言った通りスパッツだし、上は……さつきはシャツって言ったけど、これレオタード系か?

「いいじゃん自分の部屋の中なんだから」

「自分の部屋はいいけど栄陽院さん以外の人がいたらそりやダメでしょ! はしたないって言われても仕方ないよ!?! いくら中にきちんとして下着着てるとはいえ、分類的にはスパッツだって下着なんだから!」

スパッツの下にうつすら下着の線が見えるから、ノーパンスパッツっていう最悪の可能性はつぶれたのがせめてもの救いだ。いや全然事態そのものは好転も何もしてないんだけどさ。

「そんなこと言ったら、オイルマツサージするんだから服着てたらできないし、塗ってあげるこっちもあんまりダボついた服だとオイルが服についちやうじゃん」

「そもそもオイルマツサージである必要性は!?!」

「問題です緑谷。この今塗ってるオイルはマツサージ用のものだけど、オイル、つまり油つてのは料理においてカロリーが高くなる要因だと言われることが多い食品です。さて、それはつまり何を意味しているでしょう?」

え、いきなり何このクイズ?

オイル……食品、油……カロリーが高い………あつ

「ひよつとして、そのオイルにも栄陽院さんの『個性』を……」

「あたり。『エネルギー』を溶かし込んで。これを使ってマッサージすると、疲労回復効果半端ないらしいんだよね………残業に次ぐ残業、休日出勤に次ぐ休日出勤でたまった疲れも吹き飛んで、次の日から気持ちよく会社に行けたって前にやった人は言ってた」

「そんなブラック企業勤めみたいな人が知り合いにいるの!? いやそれはともかく……いや別に僕はそこまでされなくても……あのホント勘弁して!? 僕きちんと毎日寝てるし食べてるし、疲れもたまつたりしてないから普通に休めればそれで……」

裸で女の子にオイルマッサージとか、それは流石にシチュエーションが刺激的過ぎるよ……

「つていうかももう一部手遅れだ。この状況に加えて、やる気満々で着替えた栄陽院さんの服装が刺激強すぎるせいで、僕の体の……どことは言わないが、僕自身の意思でどうにもならない一部分が変形してしまっている。」

「なので、今から彼女を説得してマッサージを止めてもらえたとしても、起き上がって着替えに行くのはもうちよつと待つて欲しい。遮るものがバスタオル一枚しかないから、確実にばれる……」

「……前に彼女には、『フルカウル』の訓練の時に、もう同じ現象を見られて……というか、彼女に押し付けるまでしてしまっているけど。その時の実績から、恐らくばれても気にしないのはわかっているとはいえ、これはもう男としての矜持の問題でして……」

「そんなことを考えていた僕に、手を止めずオイルを背中に塗り続けている栄陽院さんは、」

「ダメダメ、気付いてるかどうかはわかんないけど………緑谷、きつちり疲れたまってるんだから」

「いや、そんなことは………毎朝気持ちよく起きれてるよ? むしろここ最近、栄陽院さんのおかげでいい感じに運動できてるから、ぐっすり寝てスッキリ起きれてるし」

「これは本当だ。毎日ではないが、例の放課後の特訓や、その時に彼

女からアドバイスしてもらった色々な自主トレをこなしている最近
は、ぐっすり寝られる。

質のいい疲労、つていうのかな？ 疲れた分はしっかり身になって
るけど、後には残らない。

だから、疲れが抜けなくて朝辛いとか、そういう思いをした覚えは
ここ最近はない。

けど、返ってきた栄陽院さんの答えは……僕の予想の斜め上だっ
た。

「そうじゃなくて、私が言ってるのは……緑谷の体に慢性的にとい
うか、抜けきらずに蓄積されてる疲労のことを言ってるの。ずっとずつ
と長い時間、ないし期間をかけて蓄えられた、ね」

「……？ えつと、どういう……」

「これは私の予想なんだけど、緑谷、あんたさあ……多分、雄英入学す
る前の1年間くらいかな？ 相当無茶苦茶なやり方で体鍛えてた時
期とかなかった？」

「……………」

思わず息をのんだ。

まさにその通りだったから。僕が、オールナイトに後継者として認
められてから、雄英入学試験までの10か月間……あの海浜公園での
ゴミ拾いをメインに、食事制限や睡眠時間に至るまで、全てを費やし
てトレーニングに明け暮れた日々。

確かに、超がつくくらいのハードな時期だったし、毎日尋常じゃな
いくらいに疲れていた。

「おそらくそれか、あるいはそれに近い状況でだと思っただけ……
確かにその時、体は一応鍛えられたんだと思う。けどその時に同時
に、長期間過剰な負荷をかけ続けたことよってできた疲労が、化石
みたいにこびりついて頑固に残ってるんだよ。これは疲労感とか
じゃなくて、筋肉が固まってほぐれにくくなったとか、そういう形で
固化しちやってる。だから、普通に生活してる分には『疲労』として
認識できないし、普通に休んだだけじゃ取れない」

……あの時の、まだ『無個性』だった僕は、人の何倍も努力しなきゃ

いけないと……それこそ、オールマイトの期待以上に努力しないといけないって、完全にオーバーワークなレベルの訓練をしてまで体を鍛え続けてた。

その後トレーニングプランを調整してもらったけど、オーバーワークは逆効果だってオールマイトにも言われたっけな。

それもどうにか乗り越えられたと思ったけど……乗り越えられなかった、のか……？

僕はもちろん、オールマイトも気づけていなかった形で、その時の無茶の影響が体に……

「その様子だと凶星だね？ もともと緑谷の肉体は、鍛えられてはいるけど、個性と同じで、急造というか、突貫工事で仕上げられた感じが否めなかった。本来何年もかけて作るべき体を、短期間で無理やり形になるまでに仕上げた結果、どうしても無理が生じてしまった。そうだな……ゲーム風に例えるなら、レベル上げに必要な期間は短く済んだ代わりに、能力の上昇にマイナス補正がかかった、みたいな状況かな。わかる？」

「うん、なんとなく……でも、そんなのどうしてわかったの？」

「伊達に毎度毎度、寝技訓練とか人間ギプスで体を合わせてるわけじゃないよ。緑谷の体ならこう動くはずだと思って技をかけてた私の予想と、実際の緑谷の動きや力が微妙に異なる場面が多かったから、それで違和感を覚えた感じ。ああ、これは体そのものにちよつと問題がある、って」

正直に言えば……それを聞いて、少しだけショックだった。

オールマイトに指導してもらって作り上げたこの体に、けちがついたみたいで……いや、栄陽院さんが本当に善意で言ってくれているのも、真正正銘の事実を的確に指摘しているのもわかるんだけど……

でも、今の言い方だと、ひよつとして栄陽院さん、その僕の、化石みたいにたまった疲労、ないし、体にため込まれてしまった『マイナス補正』を……？

「もともとこのお泊り特訓の目的の半分はそれだったんだ。『体の動かし方を知る』のと……『緑谷の体を真の意味で万全の状態に戻す』。

上を目指すために、避けては通れない道だよ」

「な……治せるの？」

「治せる、つか治す。明日から本格的に訓練に入るんだから、その前になんとしてもね。最低でも改善まではもっていく。そのためには当然、ただご飯食べて風呂入って寝るだけじゃダメ。私の『個性』を全力で使ったマッサージで、筋繊維の凝結を解きほぐして最善の状態にする。現状の状態を壊すわけだから、多少体組織に負担と言うかダメージがあるけど、それを自己治癒力でカバーして余りあるだけのエネルギーを体に入れてあるから問題ない。……さて、欲しがってた事前説明はこんなもんでいいかな？」

話してる間に、下準備なのであろうオイル塗りは終わっていた。背中というか、うつぶせの状態に触れられる部分全体に、しつとりとした感触がある。

ここまで説明されれば……僕がこの後何をすべきか、何をしてもらうべきかは……明らかだった。

栄陽院さんは、こういうことで嘘を言うような人じゃない。だとすれば、僕の体に残っているという、目には見えない『疲労の化石』は、上に行く以上は無視しちやいけないものであり……彼女はそれを解きほぐして改善することができらるだろう。

なら答えは決まっている。僕は、オールマイトの期待に応えるために、『ワン・フォー・オール』の継承者にふさわしいだけの成長をするために……できることを全部やると決めただから。

ちよつと恥ずかしいくらいなんだ。むしろ、真剣に僕のことを考えてくれる栄陽院さんに失礼だと思わなきゃ。

うつぶせのまま、僕は首と目だけを少し動かし、見下ろしている栄陽院さんに言った。

「……よろしく、お願いします」

「はい、お願いされました」

そうして始まったマッサージだけど……やばい。正直舐めてた。

歪んだ体を元に戻すんだから、整体みたくに、痛みをこらえてやるもんだと勝手に思ってたけど……全然違った。むしろ……

「ふにゃああああ……」

(ひ、ひたすら気持ちいい……！ 変な声が口からもれるう……！)

正にさっき言った言葉のまま感じて。肩や背中凝り固まった筋肉が、栄陽院さんの手でもみほぐされてほどけていき、あるべき姿に戻るかのよう……そこに意味なくかかっていた力が消え、自然な形で僕の体全てに還元されるような、不思議な感覚。

今までの体とは違ってしまっているとわかるのに、あたたかくて、心地よくて……どうしてか、これが本来の、正しい姿だってわかってしまうような……

最初は緊張して、多少なり硬かった僕の体は、すっかりタオルマットに全てを預けて脱力してしまっている。

け、けどこれ以上は……隙だらけな姿を見せるわけにはいかない！ 多少なり緊張感は保った上で、感謝しつつマッサージをふわあ
あああ……

(こ、このままじゃ寝ちやいそう……が、頑張れ僕……負けるな……ここで寝るのは流石に恥ずかしいぞ！ ちよつと忘れそうになってるけど、僕今バスタオル一枚だぞ！)

「あー、別に寝ててもいいよ？ 自分で言うのもなんだけど、気持ちよくて眠くなるでしょ？ 起きた時には、前側も含めて全部終わらせておくから、疲れもとらなきゃだし無理しなさんな」

……待つて。今聞き捨てならないことが聞こえた。

え、前もやるの？ うつぶせだけじゃなくてひっくり返して前もやるの？

そ、そりや全身解きほぐすって言ってたし、だったら腹筋とかそのへんも範囲なのかなってはこちらっと思っただけど……こ、この格好で仰向けになるのは今の10倍ぐらい抵抗があるよ!?

主に、実際にさっきまで大変なことになっていた『変形』の関係で。

バスタオル一枚のこの状況じゃ100%隠せないし。何より男は朝とか、寝て起きた時にほぼほぼそうなるんだよ!?

こ、これは絶対に寝るわけには……! いや、寝なかったからって大丈夫とも限らないけど……いくら強くなるためだからと言っても、その一線だけは死守しなければ!

大丈夫、僕ならできるはず! 耐えようと思うな! 申し訳ないと思え! 僕のためにここまでしてくれている彼女を放って自分だけ寝るなんて失礼だという気持ちを持つんだ! 頑張れ緑谷出久!

僕は……僕は、マツサージなんかには負けない!

……マツサージには勝てなかったよ……!

目が覚めると、そこはどこかのベッドの上だった。

パジャマに着替えさせられて、布団をちゃんとかけられて、そこに寝かされていた。

僕用の寝室に、客間の1つを貸してくれるって言ってたから、多分それだ。

どうやらそこに、意識を失った……というか、耐えきれずに眠ってしまった僕を運んで寝かせてくれたらしい。きちんとパジャマに着替えさせたうえで。

……もう一度言おう。

きちんと、パジャマに、着替えさせたうえで。

「……………」

マッサージのために、脱衣場からこれらの服を持ち去ったのは彼女だ。だから、彼女がこの服を用意できたことは、いい。

……問題は、僕は、マッサージされてた当時、バスタオル一枚だったという点だ。

確認してみるが、今僕はシャツも着ているしパンツも穿いている。その上でパジャマを着ている。

そして、これらの肌着を身に着けるためには、バスタオルを外してから身に着ける必要がある。

つまりはそういうことだ。

「緑谷ー？ 起き……あ、ちようど起きてたか」

計ったかのようなタイムリングで栄陽院さんは現れた。

どうやら様子を見に来たようだ。壁の時計ふと見れば、僕がお風呂に入ってから2時間くらいしか経っていない。まだ全然、日付が変わる前だ。

聞くのが怖い。けど……聞かないわけにはいかない。

「気持ちよさそうに寝てたし、こりや朝までかなーと思ったんだけど。

あ、何か飲む？」

「いや、いい。あの……栄陽院さん？」

「うん、何？」

「これ、着替えさせてくれたの……栄陽院さんだよな？」

「うん、そうだけど……あのまま放置は流石に、あったかくしてても湯冷めとか心配だったし」

「その……見た？」

「……………」

「……………」

「……………見ないように努力はした」

「……………でも、見た？」

「……………ごめん、せめて正直に言うわ。最初だけちよつとガン見した。残りは見ないようにして頑張って着替えさせたから許して」

「何でガン見!? ちらつと見られちゃったくらいは覚悟できてたけど

ガン見って何!？」

「いや、その……生で見たの初めてだったから、つい。……USJで緑谷には私、不可抗力とはいえおっぱい見られてるし、このくらいは許されるかなーって」

「うわああああん！」

普通にシヨックなのに加えて微妙にこっちも反論に困ることを！

何だよ許されると思ったって……でも実際こっちも見ちゃってる(その上触ってるし嗅いでる)から強くは言えない！

そのまま、半分ふて寝みたくしてその日はもう就寝することにした。

幸いと言っているのか、マッサージで温まっていた体は、引き続きの休養を欲していたようだったので、自分でも拍子抜けするくらいにすくと眠りに落ちることができた。

……ぐすん。明日から頑張ろう……zzz……

☆☆☆

……今日のは反省だなー……いくら何でも、緑谷には色々失礼だったかも。

トレーニング終了後、家に帰って食事を作って食べさせてあげて、美味しそうに食べるもんだから、見てるこっちも嬉しくなった。

作った食事を美味しく食べてくれる人がいるのって、なんかいいなあ……。世のお母さん達が、仕事で疲れて帰ってきてても、子供のために食事を頑張って作る気持ちが分かった気がする。

人によるだろって？ そういうこと言わないの。

その後緑谷を風呂に入れて、入っている間に……こっさり着替えを失敬しておく。

こうすればバスタオルで出てくるしなくなるからね。かといって風呂の前に事前に伝えたら渋るだろうし……ごめんなさい出来心だったんです。

まあ、先に風呂に入ってもらったのはその他に、理由というか私の

都合もあつたからだが……今はそれはおいとく。

その後、恥ずかしくて死にそうになっている緑谷を、あらかじめ用意していたふかふかのタオルマットの上に寝かせて、私の『個性』を使つてのオイルマッサージ。

悪戯心はあつたが、緑谷に説明したことは1から10まで本当だ。今日ここで、緑谷の成長を妨げている『疲労の化石』を全撤去する。そのつもりで張り切って施術した。

最初は緊張とその他色々な感情で強張っていた緑谷だが、マッサージを始めるとすぐにそれも緩んでいき、あつという間にとろんとろんになった。寝る一步手前、隙だらけを通り越して隙しかない感じにまで追い込まれ、口からはよだれがたらーつと垂れている。気づいてなさそうだけど。

そこからもう少し踏ん張っていたようだが、ほどなくして陥落したので、寝ている緑谷を適宜動かしつつさっさと済ませてしまう。

肩、背中、腰、横腹、ふくらはぎ、足裏、腕、手、首元……このへんでバスタオルが邪魔になつてきたのではぎ取つて、太ももとお尻。もっかい腰。

ひっくり返して、腹筋、胸筋、もっかい腕、太もも、ふくらはぎ、足……

各部位、刺激が強くなりすぎないように注意しつつ、オイルに込めたエネルギーと、食事で消化・吸収させた、栄養素としてのエネルギーを、それぞれ体の内外から上手く使つて疲労をほぐす。

必要に応じて内臓系やその周囲の筋肉にも効果が届くように調整し、たまつた疲労をエネルギーと相殺させる感じで消していく。

ちなみに、バスタオルが取れたことによつて見えるようになった部位は、女性としての感性がちよつとドキツと刺激されたものの、元・男の記憶を引っ張り起こせば見慣れた部位でもある。そこまで動揺はしなかったし、さらつと流して、終わつたらそのまま着替えさせた。それでもちよつと緊張してしまつたあたり、私は今は女なんだな、つて実感した。

……あと、自分が以前持っていたものよりも、緑谷のがかなり立派

だったのには少しへこんだ。

そのまま無事に施術を終え、緑谷を客間に寝かせて……そしたらほどなくして起きたので、今日はそのまま寝てもいいってことと、喉乾いたなら飲み物あるよ、って伝えようとして……何が起こったのか既に把握していた緑谷に事実を告げることになり、シヨックでふて寝……って感じた。

あー……今何か下手なことと言うと逆効果だと思うから、後で……そうだな、明日の朝、謝ろう。

そんな感じで、私もその日はさっさと風呂に入って眠り……明けて翌日。

いつも通り、目覚ましを止めて起きて来た私は、残る眠気を飛ばすためにばしやばしやと冷水で顔を洗っている……背後に気配。緑谷が起きたみたいだ。

私の目覚ましとか、物音を聞いて目が覚めたのか、はたまたいつもこのくらいの時間に目が覚めるのかはわからないけど、とりあえず朝の挨拶。

「おはよう緑谷、早いね」

「おはよう、栄陽院さあああ、あ、ああああああ!?!」

突如として響く絶叫。え、な、何!?!

洗面所に入ってきた緑谷が、『ずぎぎぎぎっ!!』とか効果音がつきそうなすごい勢いで後ずさりして、後ろの壁に激突したんだけど!? ほわっつ!?! どうした!?!

「ど、どしたの緑谷!?!」

「え、ええええ栄陽院さん!?! な、なななななんなん……」

……あ、コレはもしかして、お泊りしてたの忘れちゃってた口か?

『ここはどこ!?! 何で僕は栄陽院さんと一緒に部屋で泊まつたりなんか!?!』的な。

ちよつと下世話な例えをすると、酔っぱらって気が付いたら同僚の女とホテルに泊まつた的な、スキヤンダラスなシチュエーションに見えてるといふか、勘違いしてる? 顔真っ赤だし。

「大丈夫、落ち着け緑谷。ほら、特訓で昨日から私んちに泊まってるじゃん。覚えてる？」

「違う！ そうじゃない！」

え、違うん？ じゃあ何で……

「ふ、服！ 裸！ 栄陽院さん何で何も着てないの!？」

「……………あ……………」

そつちかー。ごめん、いつものことだから忘れてたって言うか、思い至らなかった。

私ほら、寝る時基本全裸だからさー。

昨日、緑谷に先に風呂入ってもらったのも、私割と、風呂入ってからそのまま直行でベッド行って寝る場合が多いからだし。疲れてる日は特に。

昨日もついそうしちゃったよ……………緑谷がいるのは忘れてなかったけど、服着なきやいけないうっていう考えが頭から抜け落ちてた。

まあ、自分ちで好きな恰好でいるのは自然なことだし、仕方ないよね！

「仕方なくないよ！ 何から何まで色々お世話になっておいてこんなこと言うのアレだけどさ……………栄陽院さんホントもうちよつと危機感持って！ 自分を大切にしよう!?! 襲われるよそのうち!?!」

「……………襲ってみる?」

「そういうとこ！」

第20話 TS少女と続・トレーニングジム

朝っぱらからひと騒動あったけど、それはそれとして今日も楽しくトレーニングだ。

朝食は1日の活力源。目いっぱい動けるように、ガッツリ食べて張りましょう。

今日の朝食はパンをメインにした洋風ブレックファーストにしてみました。

バターを塗ったものとチーズを載つけたものを半々ずつ用意したトーストに、ハムエッグとベーコンポテト、ウインナーソーセージとスクランブルエッグ。葉物野菜のサラダはレタスとほうれん草がメインのものをそれぞれ用意した。甘くてとろりなコーンポタージュにクルトンを浮かべ、デザートはバナナinヨーグルトでフィニッシュ。なお、飲み物は牛乳とオレンジジュース。

肉や卵料理がやたら多いと思ったかもしれないが、わざとだ。タンパク質に加え、パンやジャガイモで炭水化物もガッツリ取ってもらって、エネルギー源にすると同時に体を作る材料にする。

特に前者は、今の緑谷には特に必要な栄養素だろうからな。

さ、熱いうちに召し上がれ。

予想通り、緑谷は朝食をガッツリ……恐らくは、本人もびっくりするくらいたくさん食べた。

これは、昨日のマッサージに加えて、睡眠（休養）を十分とったことで体が一気に活性化している証拠だ。昨日の夕食で摂ったエネルギーをほぼ使い果たし、もつとエネルギーを欲した体が、それを空腹感に変えて緑谷の体に伝えていたからだ。

朝のあの一件のせいで、食卓に着いてからも少しの間気まずそうにしていた緑谷だったが、スクランブルエッグを一口口に入れた時点で火がついて、そこからはひたすら料理を口の中に運んでいっていた。

美味しい料理を一口食べたことで空腹を自覚したか、はたまた栄養を察知した体が全力で『食え！』って信号を脳から発したか……何に

せよ、緑谷は自分の体に必要な栄養をどんどん噛み砕いて飲み込んで、胃袋に収めていた。

それを見ながら、いっぱい食べる男の子ってなんかいいなあ……なんて思う私。

たつぷり作った朝食を、私7、緑谷3くらいの比率で全て胃袋に収めた後、私達は昨日と同じように、地下通路を通ってトレーニングジムへ行き、昨日と同じハイテクアスレチックルームで、体育祭に向けての特訓を始める。

無論、昨日と同じように服はトレーニング用のウェイトスーツだが……今日はそれに加えて、いくつも新しい機能を使ってさらに鍛える。

『ハイテク』トレーニングルームの本領発揮だ。今日からの訓練で、さらに上のステージへ向けて歩みを進めることにしよう。

緑谷も……私もね。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

朝から眠気が吹っ飛ぶほどのTOLoverに遭遇してしまったのには正直焦ったけど、それはそれとして今日も頑張らないと！ 栄陽院さんが言うには、むしろ今日からが特訓本番らしいし。

それを裏付けるように、と言えいいのか、今日は朝から驚くことが多かった。

TOLoverもそうだが、それ以上に……頭が働くようになってきて気づいたんだけど、僕の体が……なんか、今までと変わった。

見た目が何か劇的に変わったとかじゃない。いつも鏡の前で見る、普通の僕のままで。

けど、微妙に体が……少し丸くなったかな？ っていう気がする。いや、太ったっていう意味じゃなくて……筋肉そのものがふんわり丸みを帯びたというか、ソフトになったというか。硬くて筋張ってるばかりじゃなく、しなやかさが備わった……とでも言うのかな……？

最初に言った通り、よく見るとわかる程度にしか違わないんだけどね。

しかし、中身はもう明らかかな程に違つてて……体の柔らかさに加え、なんか動きがすごく軽快になった気がする。関節はより大きく、よりスムーズに動くようになって、今までちよつと張つてた部分もすっかり柔らかくなつて……気のせいかな、呼吸もより大きく、深くできるよつになつた気がする。筋肉だけじゃなく、内臓まで改善した……のか？

そしてその変化に伴つてか、すごくお腹がすいていた。

いや、それに気づいたのは朝食を食べ始めてからなだけど……直感的にわかる。この体の変化に使われた分のエネルギーを、補充しろつて僕の体が言つてるんだと。

いや、ひよつとしたらそれだけじゃなく……より高性能になつたがゆえに、より多くの栄養を僕の体は欲しがるようになつていゝのかもしれない。

アスリートは筋肉の比率が多い分、基礎代謝……何もなくても消費するエネルギーも多いつて聞く。上質な肉体は、それだけ多くのエネルギーを必要とするつてことだ。

それを踏まえて、さらに体の変化に多くのエネルギーを使ったであろうことを鑑みれば、今日の僕のこの食欲も納得つてものか。

10人分くらいありそうな朝食(パンは4斤分だしベーコンは塊を丸々一つ使つてたし卵は30個くらい使つてたしコーンポタージュは大鍋にたつぷりetc)を、結構な比率で僕も食べちやつたからなあ……昨日に続いて感動的な満腹感だつた。

そうして少しの間時間を潰し、大体腹もこなれたところで、僕らは再びジムに移動してトレニングを開始した。

今日もまたやることは同じ。ウエイトスーツを着てハイテクアスレチックだ。

ただ、昨日とは何もかもが違う。

まず、体が違う。

栄陽院さんの言う通りに、どうやら僕の体からは、10ヶ月の『目

指せ合格アメリカンドリームプラン』の中でたまっていた疲労がきれいに取り除かれたようだった。

それに加えて……いや、その結果としてなのかもしれないが、よりスペック高く成長した僕の体は、昨日までに増していい動きができるようになった。

腕も足も驚くほどしなやかで軽やかに、そして思い通りに動く。力強く踏み出せる。動いても中々疲れない、息も切れない。疲れてもすぐそれが抜けて回復も早い。

動くたびに『もつとこう動いた方がいい気がする』と体が、感触が教えてくれる。その通りに動きを工夫すると、もつと動きやすくなる。本当に……すごい。

けど……

(これは逆に……危険だ)

容易く自覚できるほどのスペック差。栄陽院さんに言わせれば、このスペックは『もともと器は出来上がっていたからこそその変化』であり、僕がきちんと真つ当な努力をしていた場合の肉体に追いついた、あるいは近づいた、というのが最も確な言い方らしい。

そもそも、栄陽院さんいわく、これでもまだ『改善できたのはごく一部』らしい。

凝り固まってしまった部分を『ほぐす』『リセットする』のは昨日できた。けど、あくまでそこまでだ。

これから時間をかけて、鍛錬の中で体を作り直して、磨き上げていくんだって。最高効率で稼働する、最善の肉体を作り出すには、まだまだかかるって。

それにしたって、ここまで一気に強化されてしまうと……いや、嬉しいし頼もしいのはそうなんだけど……気を、意思を強く持たないと、調子に乗ってしまいそうだと。

今までの自分とは違うんだという、いわば『かりそめの万能感』。力を過信し、浮かれて考えなしのバカな行動をとってしまうと、その先には手痛いしっぺ返しが待っている。

オールマイトに『ワン・フォー・オール』を譲渡され、初めて迂闊

にそれを使って自爆してしまったあの時のように。何もわかっていないまま力を振るうことの危険さを忘れてはいけない。

今回は、なまじ力の使い方をわかっている分、あの時より危険かもな……

もちろん、頭ではきちんと分かっている。それほど劇的に変わったわけじゃないのは。まだまだここからなのは。

傍から見れば『少し動きがよくなったかな?』っていう程度の差だし、僕自身、たった1日で大きく変わったからこそ、それによる驚き込みで『劇的』だと認識している部分もあるだろう。

何より、僕自身の絶対値的なレベルはそこまでとは言えない。今までが低かった分一気に上がったようなものだ。

ゲームで例えれば、今までレベル1だった僕が、一気に10とか20になったから『すごい、めっちゃ強くなった!』って、あくまで比較で思ってるようなもん。

調子に乗っていると、レベル30の敵を相手にあっさりやられるし、今までずっと努力を続けて来たかつちゃんや轟君なんかは、40とか50とかそのへんにいるんだろうと思うし。

オールマイト? ……999とか? いやもったかな。

けど逆に、これは本来は『たった1日』で起こるような変化じゃないのは確かだし、ここまで体を改良しようとしたら……それこそ、数週間、もしかしたら数か月単位での肉体改造が必要だろう。

栄陽院さんの『個性』による力が大きいとはいえ、自分の中にこれだけの可能性が眠っていたんだということを見ると……どう受け止めればいいのか、って感じだな。

過信せず、調子に乗らず……しかし現状をきちんと正確に把握して、か。案外難しい課題だ……

けど、頼もしい僕のトレーナー（同級生だけど）は、きちんとそのあたりもわかっていて……僕がこの力を確実に制御し、使いこなせるようになれるように、きちんとメニューを考えてくれていた。本当、頭が上がらない。

で、ここからがまた別な『昨日とは違う』点なんだけど……アスレ

チックを5周くらいして、この体のスペックを大体理解できたあたりになって、彼女はここが『ハイテクアスレチック』と呼ばれる所以を僕に見せてくれた。

その結果として、今僕は……今の強化された身体能力でどうにかこなせるレベルのハードトレーニングに身を置いている。

単純なことだ。調子に乗る暇がないくらいトレーニングさせて、迂闊なことをする前にきちんと実力を把握させる。彼女の方針はたったそれだけのものだった。

「なるほどね、確かにこれは、ハイテク……っていうよりはただ単に、豪華と言うか大掛かりと言うか！」

「それは否めないけど、いいトレーニングになるだろ？ 肉体的な負荷はもちろん、集中力とかそのへん切らさないようにする訓練にもなるし」

「それは、確かに……っ！」

言いながらも僕は、昨日と同じ平均台を駆け足で渡っている。

その走っていく先の道が、突如として、ウイーン……という機械音とともに傾いていき、傾斜のある道に変わった。即座に僕はそれを認識して足の動かし方を変え、上り坂と化した平均台を落ちないようにバランスを取って走り抜ける。

それを抜けると今度は雲梯があるが、こちらも途中まで進んだところで、今度は下り坂っぽく傾斜がついて、勝手が違うものになってしまふ。

すぐさま頭を切り替えて、パニックにならないように対応……平坦な時と同じようにやると、勢いがつきすぎて腕の負担が増える。ペースを落としても、負担を最小限に……

かと思えばその途中でさらに変化して今度は上り坂調に……やっばい、こっちは勢いはあつて困ることはないけど、体を持ちあげて進む形になるから純粋に腕にくる……

それでもどうにか雲梯を越えて、また更に違う障害物を……と言う形でアスレチックを渡っていく。そしてその障害物たちは、もうわかっているとかが……ランダムで様々に形を変え、一定の形を保たな

い。走っている僕に『慣れる』『覚える』ということを許さず、その場その場での確に体の動かし方を判断して対応することを求められる。

ある時は道に傾斜がつく。ある時は道が蛇行する。ある時は雲梯のバーの幅が変わり、ある時は……そんな感じで、思考を停止させることのできない絶妙な『変化』を繰り返すアスレチックを相手に、僕はぶっ続けで走って戦っていた。

(昨日と変わらず、どこをどう進むかで、体のどこをどう使うかが……しかも今日はさらに、同じアスレチックを通るたびにそれが変わる！気が抜けないし慣れられない……けど、まさに今の僕に必要な経験だっ！)

体育祭までの期間は決して長くはない。その限られた期間に、パワーアップした体を万全に使いこなせるようにならなくちゃ！

決意を新たにしながらも、僕はふと、平坦な道を走るわずかな間を利用して、ちらりと横を見る。

僕と同じように、このアスレチックを……僕よりも早いペースで走っている栄陽院さんを。

同じようにウェイトスーツを着ているのに加え、彼女は顔に見慣れないマスクをつけている。口の部分が機械調であるのに加え、目を保護するゴーグルがついた、ガスマスクみたいな見た目。

あれは、呼吸を制限したり、目に届く光を不安定にしたりすることで、低酸素環境や暗所を再現できるものらしい。よりレベルの高いトレーニングができるわけだ。

もっと動けるようになったら、僕にも同じものを貸してくれるって言うってた。

加えて、彼女が着ているスーツは、僕が着ているものより負荷が大きく設定されている。消費する体力も大きいし、細かく重心とかを調整しないといけないそうだ。

それらを装備した栄陽院さんだが、彼女はなんと今『準備運動』中だ。

すなわち、ウォーミングアップとしてこのアスレチックを使っている。マスクまでつけて。

それはつまり、彼女はこの運動よりもさらに大きな負荷の訓練を予定してることだろう。

やはり、まだまだ先にいるんだなあ……と、思ってしまった。わかってたことではあるけどね。

午前中の半分ほど、休憩と水分補給を繰り返しつつ『ハイテクアスレチック』を使用して体の動かし方を学んだ僕は、休憩をはさみつつ次の訓練内容に移った。

そこで今度は僕は、『アスレチック』以外のトレーニングも体験することになる。アスレチック用の部屋ではなく、ゲームセンターみたいに、色々な機材——筋トレ器具っぽいものからわけのわからないもので——が並んでいる。そのうちの1つの前に、僕は連れてこられた。その見た目は……一言で言えば、『箱』というか、殺風景な小部屋とどうか……そのまんま、縦横が10mほど、高さ3mほどの直方体の部屋だ。壁や天井は、金属のようなプラスチックのような、よくわからない不思議な素材で覆われている。

入り口の扉を閉めると、まさに『箱』って感じで密室になるその小部屋の、真ん中より少し奥に行ったくらいの位置に、サンドバッグが1つ設置されていた。

「さてそれじゃ、ここまでやってたのが『体の動かし方』をつかむトレーニングなのに対して、今からやるのはもう1歩先、『狙った力を出す』訓練に移る」

「狙った……力」

「そ。読んで字のごとく、どのくらいの威力で攻撃その他をするかの訓練だね。緑谷、ゲームセンターとかにある、パンチングマシンって知ってる？ あるいは、やったことある？」

「知ってるけどやったことはない……かな。こう、そのまんま……パンチの威力を点数にして記録を競うゲーム、だよな？」

「そう。この部屋はまさにそんな感じのトレーニング施設だよ。このサンドバッグを殴ると……」

言いながらおもむろに栄陽院さんは、部屋の真ん中にあつたサンド

バックの前に歩いていき……腕を振りかぶって、ずどん、と結構な威力で殴った。

その直後、サンドバッグの真上に、ホログラムで『489』という数字が浮かび上がる。

「こんな感じで数値にした威力が出る。これで、狙った威力を素早く出せるようになるのが目標。私達みたいな増強系個性の人間にとって、これは戦闘に限らず、ヒーロー活動の全てにおいて重要視される基本的な能力と言えるの。敵を殴って制圧する時に、強すぎれば不必要な重傷を負わせ、最悪は殺してしまう。逆に弱すぎれば制圧し損なって逃走を許したり、被害を拡大させてしまう。他にも、建造物の被害を拡大させないためとか、自分の体の負担を考えてとか、重要視される理由が多い。必要な時に、必要な力を、必要な速さで発揮する。それが基本にして極意」

そう言って今度は、サンドバッグを素早く10回殴った。

殴るたびに数値が表示され、下から更新されるようにホログラムが立て続けに表示されるんだけど……それがすごくて、1回目が104、2回目が203、3回目が300ジャスト、402、506……という感じで、ほぼ100ずつ刻みで成功させてみせた。しかも、そのパンチ10発を打つのかかった時間は、ほんの5秒ちよつとだ。1発あたり約0.5秒。そのわずかな時間で、狙ったパンチ力を出すために、必要なだけの力を腕に、拳に込めて正確にヒットさせていたってことになる。

驚いている僕の目の前で、さらに続ける栄陽院さん。

「で、この部屋にはもう1つ特徴があって……」

言いながら今度は、だん、とその場で強く足踏みをした。

すると、なんとさつきサンドバッグを殴った時と同じように、彼女が踏みつけた床に『550』という数字がホログラムで表示された。

今度は壁を殴る。同じように数字が表示された。

天井。同じように以下略。

「この部屋はどこをどう殴っても、こういう風に威力を測定して数値

化してくれるようになってる。ま、ある程度以上の威力でないと出ないけどね……歩いたり、ちよつと跳ねたりしたくらいじゃ。これを利用して、踏み込みの強さとかを数値化して、どの程度の力を込めて地面を蹴れば、どのくらい速く動けるか、どのくらいの勢いが出るかっていうのも測れる」

「それも、力の調整のため、つてこと？」

「そう。強力な増強系の使い手になると、踏み込みの威力で道路のアスファルトが砕けたりとか、割とあるからね。それに緑谷の場合もそうでしょ？ 地面もそうだけど……入試の時とか、反動で足バツキバキになってたし。そうならないように、自分にも地面にも被害なく出せる最大限を知っておくことや、もつと言えば、そうならないような踏み出し方を練習するのも使える」

「そうならない、ような……う？」

「強く、素早く踏み出したり跳躍したりするためには、ただ闇雲に足に力を込めればいいわけじゃないってこと。例えば、緑谷が大好きなオールマイト……先生だけど、動画とか見てて、目にも留まらない速さで移動したり、ジャンプでビルとか飛び越えたりしてるでしょ？

その時……全くじゃないにしても、毎度毎度地面とか踏み砕いてる？」

そう言われてはつとした。

確かにそうだ。僕はオールマイトの戦闘シーンその他の動画は、数えきれないほど見て来たけど……その中では、よっぽど規模の大きい戦いとかでもない限り、オールマイトはどんなに早く動いても、どんなに高く跳んでも、地面を……守るべき町を壊したりすることはなかった。

それこそ、僕が初めて彼に出会ったあの日に見せた、天候を変ええるほどのパンチですら、爆風は引き起こしても道路その他への被害は皆無だった。あれら、力そのもののセーブはもちろん、その力をきちんと周囲に被害がいかないように使っていたからなんだろう。

100の速さで動くためには、相応の……100の力を足に込める必要がある。けどそれをそのまま闇雲に振るえば、地面や自分にも1

00の反動……ダメージがいく。

そうならないように、技術を駆使して、100の力を使って100の速度を出しながらも、地面や自分への反動を5とか10に抑える。

改めてオールマイトのすごさを実感すると同時に、この技能の重要さを思い知った。

強い力をそのまま振るうだけじゃなく、狙った相手にだけ、狙ったように使う。それができなければ、敵のみならず、自分や周囲に無駄な被害が及ぶだけなんだ。

「この特訓の重要性は理解できたみたいだね。じゃ、始めようか。ここからは……ちよいちよい私も緑谷と一緒に訓練させてもらうからね?」

「栄陽院さんも?」

「うん、人を相手にした、格闘の中での動きでそれを使えるようにするのも課題だから……緑谷にとっても、私にとってもね。ただサンドバッグを殴ったり蹴ったり、床を踏み込んだりするのや、アスレチックで飛んだり跳ねたりするのはまた動きが違うでしょ? 加えて、相手の動きや四肢に込められた力を察知して、こつちも必要な力を素早く籠める練習にもなる。緑谷の『フルカウル』と私の『エネルギーチャージ』はよく似てるから、お互いのために時間になると思う。実は私も……戦闘の中でエネルギーを素早く運用するの、そこまで器用じゃないし」

「え!? でも、戦闘訓練でもUSJでも、アレだけ見事に動けてたのに……」

「いや……アレよく見るとわかるんだけど、派手に殴ったり物を壊したり、その威力から来る威圧やら何やらでごまかしてる部分多いけど、動き自体は単純だし直線的なのが多いんだよ……多分、オールマイト先生は気づいてたと思うよ? もっと柔軟で複雑な動きの中でも、的確にエネルギーの運用ができるようになりたいとは常々思ってたんだ。それで、緑谷に目を付けた」

「僕?」

「そう。正直に言えば、緑谷の面倒を見始めた時から、こうなれること

を待ってたというか、狙ってた。前にちらつと言ったよね、緑谷が成長することで、私にもリターンがあるって。その1つがコレ。緑谷との相手とかの中で、私ももつと強くなる予定だから……これからよろしくな？」

「うん！ よろしく、栄陽院さん！」

『体の動かし方』と『力のコントロール』。今まで僕が、感覚でしかやれていなかったことを、こういう場所で、整った設備で学ぶことができるという恵まれた環境。

そしてそれを指導してくれる、優秀なコーチの存在。

最初に彼女に『個性を扱うコツを教えて欲しい』と頼んだ時には、正直、ここまでよくしてもらえるというか、徹底的に面倒を見てもらえるとは思ってなかった僕は、彼女に出会うことができたこの幸運を噛みしめていた。

今の僕に足りていない要素を的確に見抜き、それを補うのに効果的な訓練を提示し、そのためのメニューをその設備ごと提供してくれるんだもんな……本当、頭が上がらないや。

ここまでしてくれる彼女に報いるためにも、絶対に力の制御をものにしてみせる、と、心に決めた。

そして何より……ここに来て、僕から彼女に対しても役に立てるようになってきたっていうのが嬉しい。世話になりっぱなしだった分、その恩を少しでも返せると思うと、本当に。

体育祭まで……残り2週間弱。

その間毎日ここを使えるわけじゃないけど……少なくとも、今日明日の『お泊り』の間は使えるし、その後も、時間があれば来ていいって言ってくれた。

僕達2人でどこまで行けるか、なんだか楽しみになってきたよ！

第21話 TS少女と開会式

2週間という時間は、あっという間に過ぎた。

その間に、USJ事件のことを聞きつけた他のクラスが敵情視察に来て、喧嘩を売ったり売られたり（主に爆豪が）したり、大きさまぎまに出来事はあったものの、それぞれが来る一大イベントに向けて特訓を重ねていた。

普通科だつていうあの紫色の寝不足（？）の生徒や、なんか暑苦しい感じがしたB組の生徒を見てもわかったことだけど、どこも体育祭に向けてガチだつてことだな。

飯田は広い敷地に設けられたランニングコースをひたすら走つてのをよく見たし、図書室で八百万が読書にいそしんでいる場面も見えた。彼女の『個性』は知識量が力量に直結するからな。

プールとか水場で泳いでる蛙吹、
木々の間を軽やかに飛び回る尾白や瀬呂、

トレーニングルームでは砂藤や障子が筋トレをしたり、切島がサンドバッグを叩いていたり、基礎体力をつけるために麗日がランニングマシンで走っていたり。

もちろん私と緑谷も、お泊り特訓の日からずっと自分を磨き続けた。

基礎体力と身体操作を、障害が常に変化する『アスレチック』で鍛え、力の操作を『サンドバッグルーム』で覚え、それらを総合的に扱う訓練を『組手』で行った。

組手は特に、どの程度の力と速さで行うかを合わせた上でやるとか、色々工夫した。

もちろん、これまでと同じように、毎日一緒に訓練できるわけではないので、基本的には使える時間を上手く使ってそれぞれが訓練をする形になったけどね。

もつとも、体育祭の形式はいわゆる『学年別総当たり』だ。言ってしまうえば、クラスメイト達も含めて全員が競う相手……敵、ということになる。（ヴィランとは読まない）

だからだろう、他者と協力して修行してるような人はほとんど見なかった。私と緑谷みたいなのは、少数派ってことだろうな。手の内を隠しておく意味も含めて。

私達もきちんと、本番当日はお互いが敵同士になる旨を理解した上で、それまでに可能な限り相互にレベルアップする目的で一緒にやってるっていうのは、わかった上でやってたし。

……まあ、前からそうしてたからなし崩しにそうした部分も強いけど。

それはともかく、そんな感じだから……他者の動向を注視することは多くても、そこまで深くかわわる機会はないわけだ。だからこそ、その変化に気づく者は少なかった。

緑谷の動きが、ここ数日で格段によくなってきたっていうことに。

例外的に多少なり察しているのは、幼馴染だっという爆豪や、仲がよくてよく一緒にいる飯田と麗日、

そして……なぜかここ最近緑谷を見ていることが多い轟、くらいか？

最後の1人は……どうしたんだろうな？　今までそんな素振りなかったのに。

まあそれはいいとして、

あつという間に、それこそ某紅色の王ばりに時は吹っ飛んで過ぎ……

体育祭、当日！

☆☆☆

開会式直前、1―A控室。

公平を期すために、生徒は全員、コスチュームではなく体操服着用だ。

各々が同じ服装でその時を待っている中、こんな一コマがあった。
「お前……オールマイトに目エ掛けられてるよな」

控室で、そう呟くように静かに、しかし緑谷の目を見てはつきり言った轟。

そんなことを口にすれば、どうしたって視線は集中するつてもんだ。

ていうか、その辺はクラスの大半がここ最近気になってるところだろうな。

確かに緑谷って、オールマイトから呼び出されたり、色々話してる場面が多いって……入学してから今までの間に、クラスメイト達の間では割と知られてるし。

麗日の話では、昼休みに『ご飯、一緒に食べよ?』ってお弁当持参で誘いに来たこともあったとか。マジかよ……想像できねえ。

もつとも、それを深く聞くつもりはないし……緑谷も話したくなさそうにしてるからね。

「別にそこ詮索するつもりはねえが……お前には勝つぞ」

そう、轟は緑谷に言った。

それを見て、上鳴が『クラス最強が宣戦布告か!?!』って言った。

轟を『クラス最強』と言ったことで、隣にいた爆豪の機嫌が悪くなつたことには気づいていない。……開会式前に不幸な事故が起こらないといいが。

「僕も本気で……獲りに行く!」

少し緊張しながらも、こちら目を見てはつきり言った緑谷のセリフがコレ（一部略）。

嬉しくなるね、あんな風に強気というか、心を強く持って勝利宣言(?)をかましてもらえると……彼の指導に注力させてもらった身としては。

ここで緑谷が、どれほどに『魅せて』くれるのか楽しみだ。

入学以来の、パワーに耐えきれず自爆してるところしか見たことない彼ら（一部例外アリ）が、どれだけ驚いてくれるかね。USJで、爆豪や轟、切島なんかはその片鱗を見ているが……ああ、もしかして

轟って、それでここ最近緑谷のこと注視してたのかも？ 施設の反対側の壁まで、あの死柄木とかいう敵を殴り飛ばしたからな。

まあ何はともあれ……時は来た。

委員長・飯田の号令で、私達は控室から戦場へ赴く。

『群がれマスメディア！ 今年もお前らが大好きな高校生たちの青春暴れ馬……雄英体育祭が始まディエビバディアアユウレディイ!!?』
(生き生きしてんなー、マイク先生)

最後の方、崩しすぎて何言ってるのか分かんないぞ英語教師。

『どうせてめーらアレだろ!? 入学早々『敵』の襲撃を受けたにもかかわらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星！ ヒーロー科！ 1年！

A組だろお!』

いや『どうせ』ってあんた、もつと言い方……というツツコミは心の中にしまい込んで入場。

しかし、控室出た瞬間から既に聞こえてきた大歓声から察してはいたけど……スタジアムの規模も、そこを埋め尽くす観客もすげーなこれ……覚悟はしてたけど、大分緊張するわ流石に。

あらためて思うけど、高校の体育祭に向けられる熱狂じゃないな。日本にとつてとはいえ、かつてのオリンピックに変わる一大行事つてのは伊達じゃないらしい。

今年は特に、1年生が注目されるからこうなってるってのもあるかもだが。

飯田曰く、この大人数に見られる中でも最大限のパフォーマンスを発揮できるかっところも、ヒーローの卵として評価されるポイントなんだろう、とのこと。なるほど、ありそうな話だ。

A組に続いて、B組、普通科、サポート科、経営科も入場し、主審であるらしいミッドナイト先生が開会式を進行する。

なお、この体育祭は1年、2年、3年が別々の会場になる。開会式とか閉会式も全部別々だ。

校長先生は毎年3年生の会場に行っているらしいので、1年の開会式には出ない。なので、この会場における進行やら何やらを担う『顔』

役は、今年はほぼ全部ミッドナイト先生がこなすわけだ。

「今更だが……18禁ヒーローなのに高校にいていいのか」

「うん」

常闇の疑問と、それに力強く反応する峰田はいいとして。

しかし改めて思うけど、この学校はイベントまでホント独特だな。

入場するタイミングそろえるだけで、縦横揃つての入場行進とかはなし。プラカードもなし。

こうして開会式が始まって、整列はせず、クラスごとある程度固まって好きなように立ってるだけ。あっちこっちで私語もしてるし、スマホ弄ってる奴すらいる。

会場準備とか飾りつけも、業者に依頼してイベントとして本格的な感じになってるし……観客席とかには、いろんな企業のコマーション看板がある。まんまオリンピックとかのスポーツイベントだ。おそらく広告料とかも取ってると思われる。学校つぼさが体操服くらいしかない。

まあ、生徒は競技に全力を注ぎって意味なのかもしれない……肩凝らなくていい。

で、続いてはこういうイベントではお決まりの、選手宣誓のお時間。呼ばれたのは……

「1—A、爆豪勝己！」

おい、大丈夫か。

A組の心の声が一致したのは多分気のせいじゃないだろう。

いや、あいつたしかに入試主席だけでも……人選……。

嫌な予感がバリバリ頭をよぎる前で、爆豪は気だるげに『せんせー』と、ミッドナイト先生の前で、

「俺が一位になる」

「絶対やると思った！」

「ここ最近爆豪のツツコミ役……もとい、理解者じみた立場についてきている切島のツツコミは、私達全員の心の声を代弁したものであると言えた。」

その後、ブーイングの嵐が巻き起こっている生徒達の方を振り返り、『せめて跳ねのいい踏み台になってくれ』と、首をかき切る動作で挑発する爆豪。

おいやめろお前どこまで行く気だ。私の周囲、ため息の大合唱だよ……ヘイトが集まる集まる。

「違う……ただ自信過剰なだけでも、挑発してるだけでもない。以前までのかつちゃんなら、ああいうのは笑って言う……自分を追い込んでいるんだ」

「一緒にクラスメイト全員追い込まれとるんやけど」

「けろっ。B組や普通科からの視線が殺気立って来てるわ」

「それはもうかつちゃんだからとしか」

麗日と蛙吹の指摘に、こころなしか申し訳なさそうに言う緑谷。

別に責任感じることはないだろうが……アレの幼馴染って損なポジションだよな……。

『さあ、早速第一種目行きましょう！ いわゆる予選よ！ 毎年ここで多くの者が涙を飲むわ……運命の第一種目は……コレ！ 『障害物競走』！』

A～Kまで1ークラス総当たりレース、スタジアムの外周約4kmを使用した障害物競走……ね。何が待っているかはまだわからないけど、楽なコースじゃあないのは確かだ。

そして、コースさえ守れば何をしたらってかまわないとのこと。ふん……

開会式の会場の一部が変形し、スタートゲートに姿を変える。

『さあさあ位置につきまくりなさい……！』

つきまぐるって何だ。

あと、発表即開始ってホント雄英何でもいきなりだな……テンポよくて退屈しないけど。

しかしあのゲート、そしてこの人数……なるほど、相変わらずこの学校は意地が悪い。

こりや恐らく、単純に走るだけじゃダメだな、頭を使う場面が絶対にあるぞ。

さて、どうするかね……と、周囲を見回していた時、ふと、ゲートに向けて走っていく緑谷と目があつた。

その一瞬の間に、私と緑谷は互いにニヤリと笑つた。

別に何らかの意思疎通があつたわけじゃないが……単にさ、こう……嬉しくなつたというか、やる気が出て来たというかね。

この日のために、2人で協力して成長してきたんだ。その成果を思う存分、みんなに、日本全国に、そしてお互いに見せられると思うとさ。

こつから先は敵同士でも、こうなつちやうよねつて話だ。

ゲート上のランプ。最初3つ点灯していたそれが、ミッドナイト先生のカウントダウンと共に、1つ消え、2つ消え、

そして3つ目が消えたその瞬間……

『スタ——ト!!!』

この瞬間、雄英体育祭……その激戦の幕が、切つて落とされた。

第22話 TS少女と障害物競走（前編）

「雄英体育祭、予選を兼ねた第1種目。」

200人を優に超える参加者たちを振るい落とす目的で行われるその種目名は、今年は『障害物競走』であり……その『障害』には、他ならぬスタートゲートそのものすら含まれていた。

横並びに10人通れるかどうかというそのゲートを、一度に200人が通ろうとすれば、朝のラッシュアワーのごとき状態になるのは自明の理。すでに生徒たちは、最初の篩にかけられていた。

『さーて実況始めるぜ、解説アユーレディ、ミイラマン？』

『無理矢理呼んだんだろが』

『おーっとゲート前に団子になつてる選手たち、早くも状況が動こうとしてるぞおー！』

『聞けよ』

解説席の若干不毛なやり取りをよそに、事態は進む。最初のふるいにかけられた選手たちに、さらなる追い打ちが降りかかろうとしていた。

先頭に飛び出した1-A推薦入学者の1人、轟焦凍。彼が放った冷気が地面を凍らせ、ゲート通過直後でもたついていた者達の足元を一気に凍らせて動けなくしていく。

ここで動けなくなつて勝負を諦め、教師たちによる救助を待つ者達も少なくないだろう。戦闘になれていない普通科の生徒などには、特に。

しかし、戦闘行為がそもそもカリキュラムの1つとして組み込まれているヒーロー科、特に話題のA組は、それを軽々と回避して飛び越えていく。

爆風で空を飛び爆豪を筆頭に、『創造』した棒で棒高跳びの要領で人垣ごと飛び越える八百万、尻尾をうまく使つて飛び跳ねる尾白、氷を酸で溶かす芦戸など、各々の技を駆使して妨害をものともしない。もつとも、轟もクラスメイト達をコレで止められるとは思っていない。

かったようだが。

先頭を走る轟は、早くも最初の障害物ゾーンに差し掛かる。

『さあいきなり来たぜ障害物！　まずは手始め……第一関門『ロボ・インフェルノ』!!』

現れたのは、一般入試試験の時に現れたロボットの仮想敵達。無数の1、2、3ポイントのそれに加え、各会場に1体しかいなかった0ポイントの巨大敵も、何体も配置されている。

その数と大きさと完全にコースがふさがれ、通過するためには戦闘は避けられない状況だ。

普通科の生徒、特に戦闘能力に乏しい者の中には、絶望的な状況に早くも攻略を諦めている者もいる中、轟は右半身から発した冷気で即座に巨大ロボットの氷漬けにし、その場を突破した。

「せっかくならもつとすげえもん出してほしいもんだな……親父が見てんだからよ」

『A組轟、あつという間に突破ア——!!　すげえな一抜けだ！　何かもうアレだな、ずりいな!』

しかもそれに加えて、わざと不安定な体勢の時に凍らせたため、そのままOPtが転倒し、後続を妨害する。

それに巻き込まれて潰された生徒がいたが、下敷きになった2人……切島と、B組の鉄哲は、共に体を硬質化させる『個性』で乗り切っていた。彼らでなかったら怪我では済まなかった可能性は高い。

そこに突如響く爆発音。爆豪が手のひらを爆発させた反動で空中に飛びあがり、巨大敵よりも高い位置をとっていた。

『おーっとーA爆豪、下がダメなら頭上かよ、クレバー！　同じくA組、瀬呂と常闇もそれに続く！　身軽な個性持ちは有利だな！　ツとお——んなこと言ったら地上にもやべえのがいるぜエ！　リスナー諸君、巨大ロボの隙間をルウウウック!』

巨大なロボットの地上に暗い影を落とす中、その闇を切り裂いて緑色のスパークが飛んでいた。いや……跳んでいた。

襲い掛かってきたIPtの敵を拳で砕いて瞬殺し、次が来る前に地面を蹴って飛び上がる。そのまま、まるでパルクールのような動きで

敵ロボットたちの間を、緑谷は跳ねて高速で移動していく。

まだまだ低出力とはいえ、制御自体は完全にものにした『フルカウル』の特徴である緑色のスパークが、その動きの速さゆえに空間に尾を引き、まるで流星のように見える。ロボットの動きでは彼を捉えることは到底できず、単なる足場にしかなくなっていない。

「うそ、マジで!? 緑谷何あの動き!?!」

「骨折克服かよ……っっていうか、速ッ!?!」

「しかも光っててキレイ! 派手!」

訓練という訓練で『自爆』していた彼しか知らないクラスメイト達は、その激変に驚く。

(っ、よし……思った通りに体が動く……敵の動きもよく見える。特訓の成果出てる! 入試の時は怖かったこいつらが、全然怖くない! でも油断せず……いける……いけるぞ!)

動きながらも考えを止めず。確かな手ごたえを感じた緑谷は、この2週間の特訓でさらに鍛え上げられた身体能力に加え、変動していく周囲の状況に対する洞察力と対応力をフルに働かせ、一瞬たりとも足を止めずに走り、跳ぶ。重力の影響すら無視せんばかりの動きで。

『跳ねる跳ねる跳ねる! A組緑谷、まるでスーパーボールのごとく跳ね回って敵の密集地帯を駆け抜ける! 何か光ってるしA組は派手なのが多いぜ、見てて楽しいなおい!』

『別に楽しませる意図はないだろうがな。……ここ最近急成長しているとは思っていたが……地上の敵も瞬殺していたし、今大会台風の目になり得る生徒の1人かもな……ああ、目じゃなくて台風そのものになりかねないのが今来たか』

『あん? つと、アレは……』

実況コンビの視線の先で、生徒たちの中でもひとときわ大きな影が、ダン! と力強く地面を蹴って……

「全・力・全・開! 500%キイイイック!!」

——ガゴオオオオン!!

『おあ——何じゃありやあ!?! A組栄陽院のドロップキックが巨大敵に炸裂! なんつう威力だよ、そのままバランス崩して倒れ……あ

——その後ろにいたのも巻き込まれた!?　なんてこつたい、OP tが
将棋倒しで大量スクラップだ!』

『計算してやったのか、はたまた偶然か……どっちにせよ豪快なこつ
た』

「マジかよあの女子すげえ……つかA組どいつもこいつも半端ねえ
な」

「パワーとんでもねえ……背も高いし美人だしおっぱいもデカッ!」

「駆動音うるさいしうつとおしいし邪魔! ……ん?」

将棋倒しになったロボの上をかけていく永久。しかしその前方で、
ガシャアン!　という音と共に、ロボットの装甲の一部がはじけ飛ん
で……

「またかよチキシヨーがあ!　何だつて俺1日に2回も潰されてんだ
!　オラア!」

「だーかーら俺達じゃなかったらコレ死んでたつってんだろーがア
!　A組イ!」

『A組切島、B組鉄哲、また潰されてたー!　運悪すぎだろ、ウケル!』
「うえっ!?!　ご、ごめん2人共……ロボの陰になつてて見えなくて

……大丈夫?　ほんとごめん」

「許す!」

『許すのかよ!　あんなに怒つてたのに!』

慌てて謝った永久を、切島と鉄哲は簡単に、あっさりと許した。そ
れこそ思わず実況のマイクがツッコミを入れるほどだが、2人は『何
言つてんだ』とばかりに顔を見合わせ、

「いやだつてちゃんと謝つてくれたしなあ?　わざとじゃなかったつ
ぽいし」

「おう、それに元々こりや尋常の勝負つて奴だからな。ちゃんと謝つ
てくれたしよ」

『なんだなんだ2人とも地味に優しさと男気まで駄々被りつてか!』

そして『ちゃんと謝つて』つてところでさりげなしに轟デイスられて
んぞH A H A H A おもしろー、よかつたな栄陽院!』

「そ、そっかありがと……つて、ああ!」

「けろ、お取込み中の所悪いけど……」

「永久ちゃん、これも勝負やから！ お先にっ！」

漫才を展開している3人をよそに、軽快な動きで駆け上がった蛙吹と、運よくちょうどいい位置にいた麗日が、同じようにロボットの上を走って追い抜いていく。将棋倒しのロボットは、悪路ではあるがちょうどいい道になっていた。

そしてそのさらに後方では、大砲を『創造』した八百万が、OPtを粉碎していた。

「チョロイですわ！」

『A組蛙吹、麗日も突破！ さらに八百万がまたまたOPtをクラッシュ！ その後ろでは芦戸や耳郎、B組の拳藤や塩崎も敵ロボットをものともしねえ！ おいおい今年の女子は強くて華が多いな、テレビ映りもこりや抜群だぜ！ ヘイ、マスコミ共レンズ磨いとけ、数字取れんぞオ！』

『何を宣伝してんだ』

『っーか第一関門チョロイってよ！ じゃあお次はどうだ？ 第二関門、落ちたら終わり！ それが嫌なら這いずりな！ 『ザ・フオール』！』

先頭の轟が早くも第二関門……底が見えないほど深いエリアにくつかの柱上の足場が立ち、それらがロープで結ばれている障害物に到達した頃、

実況席が注目していない場所で、事態が動いていた。

「ん、っ!？」

突然、腰から太もものあたりにかけて、軽い衝撃……というか、何かがかくつついたような感触を覚えた永久。

ロボット敵から攻撃を受けた……にしては衝撃は軽いし、モーター音もしない。

振り返って見て見ると……

「うへへへ……一石二鳥よ、オイラ天才！」

「えええ……何してんのお前？」

丁度自分のお尻のあたりに、『個性』である『もぎもぎ』を駆使してくつついている峰田がいた。

どうやら、足が速く力も強い、突破力のある永久に寄生するかのようにしてこの先を楽しもうと考えているようだが……その主目的は、既に女子の間で評判になつている（悪い意味で）峰田の性格を考えれば、そしてこのにやけ面、息の荒い様子を見れば一目瞭然だ。

比較的こういったトラブルに耐性のある、というか気にしない場面が多い永久でも、流石にここまで露骨にやられると顔をしかめていた。

それでも、手は出さずに口頭での注意から入る辺りは寛容であると言える。

「ちよつと峰田、離れろつて……邪魔だし、このままだとあんた、セクハラシーンを全国生放送されるぞ?」

「へん! テレビが怖くて女体に触れるか! 何をされてもオイラはここを離れねえぞ! ほら、走らないとどんどん遅れるぞ? 予選突破したけりや休んでる暇はないぜ栄陽院!」

「ホントにヒーロー志望なのかコイツ」

一旦立ち止まって説得を試みている永久の隣を、何人か男女入り混じった生徒が抜き去っていくが、そのいずれもが峰田に向けてゴミを見るような視線を向けていた。

峰田はそれに気づいていないのか、はたまた気づいた上で無視しているのかはわからない。

「これ訴えたら勝てるんじゃないのか? いやでも外聞が悪いから、流石に同じクラスから逮捕者が出るのは勘弁してほしいんだが……」

「それでもオイラはやってない!」

「いややってるわ今まさに、思いつきり」

一昔前の痴漢冤罪をテーマにした映画のタイトルを彷彿とさせる言葉で反論する峰田だが、むしろ現行犯で真っ黒である。

どうにかしたいと考える永久だが、峰田の『もぎもぎ』の吸着力は生半可な力では引きはがせるものではなく、確実に切り離れたければズボンごと脱いで捨てるか、『もぎもぎ』がくつついている部分を破つ

て捨てるくらいしかない。

さすがにそれはどうかと思うが……それしかなくなればやりかねないのがこの少女だ。

もう一つの方法として、峰田が自分の意思ではがすこともできるが、この様子だとそれは期待できそうにない。気絶させてもこのまま離れないのでは、峰田の言う通り無視して走るのが、現状一番の方法ではあるが……。

(芦戸がいてくれれば酸でこの『もぎもぎ』溶かせたかもしれないけど……ん?)

その時、永久の耳に飛び込んできたのは、第2関門『ザ・フオール』について説明するマイクの声。その内容から、そしてそれに対する轟達の動きから、この先どんな難所が待ち受けているかを永久は大雑把に把握し、頭の中に思い描いた。

それを踏まえて、1つの考えにたどり着く。

「なあ峰田、ちよつと離れて?」

「へ? お、おう……つてうおお危ねえ! あんまりにも普通に言われちまったから危うく普通に離れるところだったぜ! へへへ、その手は食わねえぞ、この男・峰田! 血の海に沈もうとここから一歩も……」

「いや、そういうんじゃない……あー回りくどいのもアレだし普通に言うわ」

永久は、本当に何も考えていないかのような、普通というか平坦な口調で、

「あのさ……この競技の間だけ、私と組まないか?」
「へっ?」

☆☆☆

各所の柱状の足場を軸に、幾筋にも枝分かれした綱渡りになっている『ザ・フオール』。

『蛙』の特性と身体能力で容易く綱を渡っていく蛙吹に加え、サポー

トアイテムを駆使して突破していく、サポート科の発目明（サポート科は自分が作ったものに限り、申請すれば競技での使用が認められる）、その他、力技で堅実に突破していく者達も数多。

そんな中、ダン！ という轟音が突如として響き、そちらに注目が集まる。

『んん？ 何だ今の音……つとお!! A組栄陽院、大ジャンプで縄も使わず一気に別の足場に飛び移ってやがるぜ！ こいつはシ……………あん？ 何だありや？』

『肩にくつついてるのは……峰田か？ どういう状況だ？』

実況の二人が疑問に思っ言葉にした通り、そこには奇妙な光景が広がっていた。

脚力にものを言わせた跳躍で奈落を飛び越える永久。その肩に、彼女の半分ほどしか身長のない峰田が『もぎもぎ』でくつついていた。彼女はそれを別に鬱陶しがるでもなく、気にせず足場にだけ集中して跳んでいる。

「峰田？ アイツ何やってんだ？」

「あいつ……きつとセクハラ目的で永久にくつついたんだ」

「くつついてれば楽できるっていう打算もあるかもだけどね」

「峰田サイテー」

「峰田マジゴミ田」

「うるせー！ 見当はずれなこと言ってんじゃねーよ！ ちゃんとした協力関係だバーカ！」

「お前それ3分前に言われてたら反論できなかつたからな？ つと、そろそろか……」

何度目かの大ジャンプの後、柱状の足場に着地した永久は、何かを探すようにキョロキョロとあたりを見まわしたあと、1本のロープが固定されている器具に近づき、ガシャン、と蹴飛ばして壊した。

『え、何してんだアイツ!! ロープの固定具壊したぞ!!』

『後続の妨害か?』

片方の固定が外れて宙ぶらりんになり、落ちていくロープ。

永久はその後、少し遠回りして、他の柱の足場を経由し、今しがた

落としたロープのもう片方の端がある柱に来ると、そのもう片方の固定具も壊したうえで、ロープを引つ張り上げて回収した。固定具は引きはがした上で、握力でぐにやぐにやに折り曲げて、ロープの端に括り付けている。

「やっぱこれがこのあたりのロープではいつちゃん長いな。よし、出番だ峰田、スタンバイ」

「おうよー」

すると峰田が永久の肩から降りて、今度はその小さな体を、『もぎもぎ』を使って永久の左手に固定した。まるで盾のように。

加えて、峰田はさらに頭から『もぎもぎ』をいくつか取ると、今しがた永久が回収したロープの片方の端にそれをくつつけた。がんばりがらめに固定した固定具(だったもの)の周りに。

「よし、準備完了！ 行けるぜ栄陽院！」

『さつきからあいつら何やってんだ？ 栄陽院の奴、峰田を左腕に装備したぞ』

『ロープ……固定具……重り……峰田の『個性』……まさか』

何かを察したように相澤がつぶやいた瞬間、永久は手に持っていたロープを勢いよく振り回し……びゅんツ、と空を切る音を響かせて、向こうの足場に投げた。

さながらカウボーイの投げ縄を思わせる勢いで飛び、着弾したロープの端。そこにくつついていた峰田の『もぎもぎ』が、ぴたっと地面に吸着した。

「手ごたえ、よし！ 行ける！ よし行くぞ峰田、舌噛むなよー」

その直後、永久は跳躍と共に勢いよくロープを引つ張る。強化度合いによつてはA組最強の膂力を誇るその腕で引つ張られたロープは、一瞬『ビイーン!!』と弾かれたような音を響かせて真っ直ぐに伸びると、その反作用で永久の体(with 峰田)は勢いよく前に飛んでいく。

着弾した先の柱まで飛んだ2人は、だん、とそこに着地すると、

「よし、やれ、ガントレット峰田！」

「リングネーム!? いやなんか地味にかっこいいような……まあいい

や。オイラの仕事だな！」

永久が峰田を装備した左腕を、投げ縄の端が着弾した個所に突き出す。それを峰田はつかんでべりつと引きはがした。

それを再びぶんぶん振り回し、今度は投げずに助走をつけて、さつきまでと同じように大ジャンプする永久。そして空中でロープを思い切り投げ、はるか遠くの足場に着弾させた。

そして同じようにして引張ることその足場まで一気に飛ぶ。

着地するとまた峰田にもぎもぎをはがさせ、跳んで、投げて、引張って着地。その繰り返し。

『おいおい何だありゃあ?! A組栄陽院・峰田コンビ、とんでもない力技で一気にショートカットしまくってんぞ?! カウガールかよ!?!』

『ロープと峰田の『個性』を上手く使ってるな……固定具と一緒に結びつけたのは、先端を重くして投げやすくするため。そして、峰田にはがさせれば吸着剤代わりの玉は何度でも使える。そこにさらに自身の跳躍力と腕力を組み合わせたか……豪快な戦略だ』

『A組最大最小コンビ、足場を2つ3つ飛ばしで超ショートカットオ! 途中でダンゴ状態の集団を抜き去って、あつという間に『ザ・フオール』をクリアしちゃったぜえ!』

その途中、永久は、アスレチックで培ったバランス感覚を上手く使って綱をわたっている緑谷と、すれ違いざまに目があった。

さすがにこの足場の悪さでは、超身体能力もそれを生かしきれないようだ。

馬力自体は（自爆覚悟を除けば、だが）永久には及ばない彼は、足場から足場へ飛び移るレベルの大ジャンプは流石にできない。

彼を抜き去ったその瞬間、永久は開会式の時と同じように笑顔を向けるが……

（……アレ、睨まれた?）

なぜか、緑谷から返ってきたのは、面白くなさそうな表情。抜かれてしまったことに対する苦笑いでもなく、むしろ……憎たらしい、というような思いが乗っているように見えた。

(……?) 緑谷って、こういう競争ごとで出し抜かれたからって露骨に嫌な顔するような性格じゃなかったと思うけど……どしたんだろ? 私、何かしちやっただかな?)

「へへへ……緑谷、悔しそうだったな。俺達の見事な作戦に嫉妬したんだらうぜ」

「そーかなあ……まあいいや。よし、次行くぞ、腕振って走りたいから背中か肩に移れ」

「腰の辺りじゃダメか?」

「真正面からそういうこと聞けるお前のメンタル何なの……走りづらからパス。背中にしろ。……多少のラツキースケベには目をつむるから」

「マジかやった! ぐへへ……落ちないようにしがみついたら、うっかり胸触っちゃっても仕方ないよなア!」

「あ、それはやめて。胸触られて中途半端にブラがたわんだりすると逆に壊れやすくなるから。今着けてるの丈夫で値段高い奴でお気に入りだから壊したくない」

「触られるのが嫌だからって理由じゃないあたりが栄陽院クオリティだよな……ちなみにおいくら? 弁償したら触っていい?」

「いくらだっけな? 特注品の上、輸入品目だから……たしか、税別手数料抜きでも、6ヶタ台は思ったとは思うけど」

「……………やめとく」

「葛藤長かったな。そもそも、あんたのもぎもぎなら落ちることも無いだろ」

女子としての羞恥心が決定的に欠落した、ピントのずれた会話を交わしながら走り出す2人は、未だに向けられ続けている、緑谷の面白くなさそうな視線の意味には気づけていなかった。

その視線が、永久ではなく……峰田に向いていたことに関しても。

緑谷の視線の意味を、永久が理解することになるのは……もう少し先の話だ。

第23話 TS少女と障害物競争（後編）

『さあとうとう来たぞ最終関門！ 一面地雷原！ 『怒りのアフガン』だ！ 地雷の位置はよく見りやわかるようになってんぞ！ 目と脚酷使しろ！ ちなみに地雷は威力は大したことねえが、見た目と音は派手だから失禁必至だぜ！ パンツの替えの用意はいいか!?』
『人によるだろ』

相も変わらず高校の体育祭とは思えない内容の障害物を持つてくる運営サイドに呆れつつ、『ザ・フォー』を突破して走っていた永久と峰田は、先頭集団が既にさしかかる最終関門に到着したところだ。
「栄陽院は背高くていいよな……足が長くて歩幅広いから走るの速いし」

「背高いのもいいことばかりじゃないよ。私、映画見る時に子供料金ですって言っただけ信じてもらえた試しがないよ？ 生徒手帳見せれば偽造だと思われるし、学校に確認まで取られてさ……わかるかこの気持ち？ 峰田こそ、子供料金で映画館とか入れそうじゃない？」

「オイラは地元ではもうすっかり有名になっちゃったからな……映画館も美術館も女湯も入れなくなっちゃってるよ」

「最後の、おい」

緊張感のない会話をしながら、この2人、190cmオーバーと108cmのA組最大最小コンビは、なぜか地雷原を前にして突入しようとはせず、周囲をきよろきよろと見回していた。

「つか美術館とか行くんだ？ 言っちゃなんだけどそういうの興味なさそうなのに、意外」

「ふとした拍子に見たくなるんだよ。裸婦画、裸婦像、あと昔の外国のやたら肌色面積の多い美術作品とかさ……エロじゃない、芸術だつて胸張って言える抜けど道的な作品を、よ……ふふつ、小学校の時の美術とか図画工作の教科書、保健体育と同じくらい読み込んだもんだぜ」
「芸術に人生をかけてそれらの作品を作り上げたいろんな人に謝れ」
「つかさつきから栄陽院何やってんだ？ 行かねえの？」

「無策で行ってもアレだからな。割と前の方にいれて余裕あるし……」

お、アレいいな」

「？」

すると何かを見つけた永久は、すたすたと駆け足である場所を目指して走る。

そこにあつたのは、ドクロマークと共に『DANGER!! MINES!! (危険!! 地雷原!!)』と書かれている、大きな看板。装飾設備の1つであろうそれを、永久は根元から引っこ抜き、金属製のはずの足の部分をいとも簡単にへし折る。

やや短めの鉄の棒を手に入れた永久は、峰田に『もぎもぎ』を提供させて棒の先端につけ、それを巻き込むように、第二関門『ザ・フォー』から持つてきていたロープをぎっちり巻き付けて固定。さらに、長すぎると判断したのか半ば程からロープを素手で引きちぎり、残りを捨てる。

出来上がったその形状は……

「鞭？ え、それ鞭か、栄陽院？」

「ああ。よし、峰田お前今度は籠手じゃなくてナツプザツクな」

「背中に張り付けばいいのか？」

「そういうこと。あと作戦だが、いいか、お前は……」

言葉通り背中に張り付いた峰田。その後、ひゅんひゅんと軽く振るって手作りの鞭の感触を確かめた後、いよいよと言うべきか、永久は地雷原に足を向ける。

『ここで先頭が入れ替わったア——！ A組爆豪猛追！ 轟を抜き去ったが、負けじと轟も食い下がるデッドヒートだア！ 後続も続々来て……って、アレは何やってんだ？』

『爆豪は汗を爆発させるから、体が温まれば温まるほど火力が上がるスロースターターだ。それはそうと……後方にいるあいつらはまた何か企んでるな。』

実況の2人も、ここで注目を永久達に移す。

何をやる気なのかと周囲が注目する中、永久は狙いを定め、長い腕を大きくしならせて思いつき鞭を振るい、先端がぶれるほどの速度で動くそれを、前方の地面にかすらせた……次の瞬間、

——ドゴオオオン!!

その周囲の地面に埋まっていたであろう地雷が、まとめて爆発した。

あんぐりと口を開けて驚く周囲の面々。

それに構わず、爆発して安全になった地点……決して広くはないが、足場にするには十分な面積のその場所目掛けて永久は跳ぶ。そしてまた前方の地面に鞭を振るう。

『おーつとお!? またまた何かやらかしてんなあの大小コンビ! 今度は何だ!? 鞭でぶっ叩いて地雷を誘爆させたのかア!』

『いや……違うな。そうか、考えたな栄陽院の奴』

『何かわかったのか、解説席のイレイザー!』

『今のはおそらく、鞭を振ったことで衝撃波を生み出して、周囲にあった地雷をまとめて誘爆させたんだ。そのせいであの一带が安全地帯になり、あいつらは悠々とそこに飛び込んだ』

『マジかよすげえなおい……っていうか、声で衝撃波出せる俺が言うのも何だが、衝撃波ってそんなに簡単に任せちゃうわけ? 増強系個性の奴の一部は、そういうの力づくでやるけどよ』

『簡単には無理だろ、あいつはそのために鞭を作ったんだ。鞭を振るった時、パアン、って音が鳴るだろ? あれはただ鞭がしなったから音が出るんじゃない、高速でしなった鞭の先端が音速を突破し、空気の壁を越えたことで衝撃波が発生したことによって起こってるんだ。技量は必要だろうが、それさえどうにかなれば……栄陽院の腕力なら、周囲の狭い範囲で地雷を誘爆させる程度の衝撃波を起こす程度は、そう難しくはないってことだ』

『解説センキュー! 鞭を使って力づくで安全地帯を作りながら、お得意のショートカットを繰り返す……だが、ちよつとばかりコレは失敗だったんじゃないか? 後ろが勢いづいちゃってるぜ!』

実況のマイクの言う通り、永久が作った安全地帯を利用して、その後ろに続く者達が加速して迫ってきていた。安全地帯は飛び飛びで

しかも狭いが、長距離を跳躍できる『個性』を持つ者には格好の足場だし、そうでなくとも確実に安全な場所があるというのは動きやすさにつながる。

後続に道を作ってしまったと、実況も観客も誰もが思ったが、それを受けて永久は、そして背中中の峰田はニヤリと笑う。

「計算通り……ッ！ ナツプザツク峰田、やれ！」

「だからリンググネーム！ まあいいや……おりやあああ！ グレープラッシュユ！」

『グレープってブドウ？』と内心で永久は思ったりしたが、峰田は頭から『もぎもぎ』をいくつもとると、今まで自分達が作って使ってきた『安全地帯』にそれを投げつけた。

勢いづいてそこに飛び込んできた他の生徒は、それを踏んづけてしま……

「あつ、え、ちょ、何だコレ動けな……やば、バランスが！」

「お、おい押すな、掴まるな！ あつちよつと待ってお前らダメだ来るなあああああ!!」

転倒、そして爆発。

『こいつはシヴィ——!! 大小コンビ、峰田のボールで足場を潰して使えなくしやがった！ なんだきつちり考えてたんだなあ、クレバー！』

『そんなに広くない足場だからな、ああして塞ぐのも容易つてことだ。加えてあいつら、わざとある程度地雷原を進んでからあの罠を発動させたな……?』

『? ってーと?』

『中途半端な所まで』進めてしまった』せいで、後続の連中が行き場を失って地雷原のど真ん中で孤立した。後ろからはどんどん人が来て戻れない。かといって急に動けば地雷を踏むから動けない。しかし続々とする後続はそれを待つてはくれず……あーあー、やっぱりな』
立て続けに爆発が起こる。

『もぎもぎ』で潰された足場はもちろん、それに飛び移りたくなくて手前の足場で棒立ちになっていた者達が、後ろの足場から跳んできて

しまった者達に追突され、もろともに地雷原に落下。

そんな悲劇があちこちで起こっている。

むろん、永久の計算通りだ。

『おいおいおいおいマジかよイレイザー、お前の担当してる生徒コエーな、あの短時間でこんな血も涙もない作戦考えたってドSもいとこだろ……っていかさつきから思ってたんだが、ドSに加えて鞭を振るう姿も様になってるしスタイルいいし、なんかミッドナイト思いうすなコイツ？　へい、聞こえてるか会場のミッドナイト!?　コイツお前の弟子とかにいんじゃないかね?』

『私もちよつとそう思い始めてたところよ。見込みアリだし、後で声かけてみるわ』

『おいおいおい見込みありだつてよ！　どうするイレイザー、お前のクラスから第二の18禁ヒーローが生まれちゃうかもしれないぞ!』
『うちのクラスの生徒を変な道に勧誘しないでもらえませんかね……』

『何よ!?　いいじゃない18禁ヒーロー！　世の男どもに夢を与えつつ健全な社会へ導くのよ！　私達は洒落や悪ふざけでやってるんじゃないの、バカにしないでくれるかしら?』

『バカにはしてませんよ……ってか、『達』ってあなた以外にその立ち位置誰がいるんですか。というか……洒落になってないからこそ言ってますよ、こと、栄陽院に関しては……』

『?』 どういう意味?』

『知らなくていい』

『おい、栄陽院お前スゲーこと言われてるぞ！　がんばれ、俺応援してるよ、なつちまえよ18禁ヒーロー!』

『いや、別に目指したいと思わないからいい』

会場やテレビの向こうの観客たちの声に、若干黄色いものが混じってきて、栄陽院永久という生徒に注目する男の視線が増えて来た中……それは起きた。

——ドツゴオオオオン!!

「ん!？」

「な、何だあ!？」

後方で途轍もない爆発音が響いたのにぎよつとして振り向く永久と峰田。

さっきのように、もぎもぎトラップで安全地帯からまとめて転落した……にしても、爆発が大きすぎる気がした。そんな違和感の中、爆風による土煙を突き抜けて飛び出した者がいた。

「あれは……緑谷!？」

大きな板状の何かに乗って立ち、まるでスノーボードか何かのように空中を颯爽と滑空する緑谷の姿。今の爆風に乗り、地雷原を飛び越えかねない勢いで飛んでいく。

爆風に煽られながらもバランスを崩すことなく、むしろそれを捉えて『乗っている』。

「おおー……やばい、かつこいいじゃん緑谷！ 見とれそ……つていうか乗ってるアレって、私がぶっ壊した看板の板の部分か！ あー、上手く使われたなあ……さっきの爆音は、さては地雷何個もまとめて爆発させて逆利用したってどこか?」

「マジかよ緑谷……おいどうする栄陽院、めっちゃ抜かれたぞ!」
「もともと一位じゃなかったとはいええ、やられっぱなしも面白くないな……」

それに加えて、緑谷が一瞬こちらに視線を向け、勝ち誇ったような視線と笑みを向けて来たのもある。それを見て、永久にも火がついた。

緑谷が活躍してくれるのは嬉しいが、それはそれとして永久自身も負けず嫌いではあるし、勝負事で手は抜かない性格なのだ。

(予想以上に成長してくれて嬉しいよ、緑谷……けど、それなら私もガチで行く!)

『A組緑谷、爆風で猛追! つーか何だアレ、爆風を波代わりにサーフィンか!? 顔は地味だが魅せてくれるじゃねえかよエンターテイナー!』

『何で顔ティスったお前。まあ見た目の派手さもそうだが、あの状態で体勢を崩すことなく爆風を全て推進力に変えてられるってのは、バランス感覚と体幹の鍛え、そして本人の度胸が相当なってるなきやできない芸当だ、本当に大化けしたなアイツ。ボードの面積が広いから空気抵抗が大きく、滞空時間も長い……こりゃ一気に前に出るぞ』

『緑谷、華麗なボード捌きで前に出るウ！ おいイレイザー、俺テンション上がってきちまった、ボードつながりで見た目は子供、頭脳は大人のアニメのテーマソングBGMかけてえんだけどいいかな？』

『音楽関係は権利関係めんどくせーからやめとけ。それよか、後続にも動きがあつたぞ』

『ん？ おーつとマジだ、今度は大小コンビ……何だありやあ!? 滅茶苦茶に鞭を振り回して地雷を片っ端から誘爆させて全力疾走か!』

マイクの実況通り、永久は手にした鞭を前方広範囲に激しく振り回して片っ端から地雷を爆発させ、それでできた安全地帯を猛スピードで駆け抜けていた。背中には、振り落とされないように峰田がしがみついている。

こんなことができるなら、なぜ今までやらなかったのか、手を抜いていたのか。

見ている誰もがそう思ったが、すぐにその理由は明らかになる。

後続に道を作ることになるのもそうだが、それ以上に……

「え、栄陽院、やべーって！ 爆風が収まりきらねーうちから走って突っ込むから、爆風自体もそうだけど、巻き上がった砂利とかめっちゃ当たってるぞ!」

「大丈夫だ、このくらいの痛みへでもない、傷もすぐ治る！ 峰田、お前は爆風が当たらないように背中に隠れてろ！ 危ないから顔出すなよ！」

地雷の誘爆による爆風。それによって巻き上がる砂利。その他諸々。

この強行突破は、永久の馬力とタフネスに無理を言わせる手段だ。ゆえに、無傷では済まない。

マイクの言っていた通り、威力は大したことはないが、かといって

連続でそれを食らって……火薬が使われている以上、無事で済むようなものでもない、ということだ。

前方から暴風雨のように襲い来るそれらの前に、細かい傷が増えていく。

だがだとしても、自分の予想をはるかに超えた成長を見せた緑谷を前にして、加減した手段を取るという選択肢は、彼女の中には最早……ない。

「っ……栄陽院、さつき第二関門の前でセクハラしてごめん！ オイラが悪かった！」

「いいさ、そんな昔のこと今更気にするもんかよ。仕方ないさ……男の子だもんな！」

感極まった峰田の謝罪を、永久はいい意味で笑い飛ばす。

爆風で起こる砂煙が大蛇のように、先頭を走る2人……轟と爆豪に迫る。しかしそれとほぼ同時に、上空からようやく失速した緑谷が飛来し……

『ここでどうとう先頭の2人を、陸と空から猛追してきた2人、あ、いや、3人が捉える……っつかまだ飛ぶA組緑谷……抜いたアあ!! ここに来て再び順位入れ替わりだア!!』

「うそ！ まさか……利用された!？」

着地直前、なんと永久が起こした爆風に乗った緑谷のボードがさらに加速し、さらに飛距離を伸ばした。驚く永久をよそに、緑谷は一気に先頭の2人を抜き去り、一番手に躍り出る。

「デクア！ 俺の前に出るんじゃねえエエ!!」

「っ……後続に道作っちまうが……仕方ねえか。栄陽院がバカスカやってるし今更だ」

爆発を起こしてさらに加速する爆豪、地雷原を凍らせて走れる道を作る轟、

そこにさらに、鞭を振り回して攻撃しながら迫る永久と、それにくっついていく峰田。

トップ5人が固まった以上……単なる競争では済まないだろう。

爆豪の『爆破』が、轟の『氷』が、永久の『力』が、峰田の『もぎ

もぎ』が、先頭に行く緑谷はもちろん、互いの足を止めて自分が前に出るために、それぞれの力が振るわれようとして……

それよりも一拍早く、その腕が、拳が振るわれた。

「ニューハンプシャー……スマッシュ!!」

上方向に突き出された、緑谷の拳。それによって起こった風による反動。

その勢いで、緑谷のボードが、どの攻撃よりも一瞬早く地面に着地、ないし着弾し……『カチカチカチカチ!!』と不吉な音が立て続けに響いた。

そして、一気に爆発。

再び爆風に乗る緑谷。それを受けて、吹き飛ばされる他の4人。

『緑谷、間髪入れず後続妨害!! 一気にトップに躍り出……っておいおいおいおい! この上さらにまだ何か見せてくれるのか!』

緑谷はさらに、ボードを蹴飛ばして捨てることでさらに加速し、身一つで跳躍……地雷原を抜けた先の地面に着地して、そのまま減速することなく走り出した。

「つく、緑谷……!」

「デクウウウウ! てめごべあつ!」

そして不運にもそのボードに当たった爆豪。なお、別に緑谷は狙っていない。偶然である。

そして残る二人は……爆風で横に飛ばされ、鞭を失った上に、コースロープを兼ねた鉄線に叩きつけられていた。背中を預けてうずくまる姿が痛々しく映る。

だが、直接叩きつけられたわけではなく……

「ぐ……『グレープバックラー』! オイラのもぎもぎは、オイラにはくつつかせずに弾くこともできる! つつて、投げつけようと思ってたもぎもぎをとっさに盾にしなければただけだな!」

背中に張り付いていた峰田が、手にしていた『もぎもぎ』をクッションにして、激突の衝撃から自分と永久を守っていた。

「ぎ、サンキュー峰田、割とマジで助かった……けど、ヤバいなコレ、動けないぞ」

「もぎもぎなら大丈夫だ、俺が取ってや……げっ!」

峰田はその時、永久が『動けない』と言った理由を、大量のもぎもぎが付着したためだと思っていたが……それだけではないことに気づく。

激突の瞬間、全ての面をもぎもぎで守れたわけではなかったため、永久の上着のジャージが鉄線にあちこち引つかかかってしまっていたのだ。尖った部分が食い込んでしまっているため、簡単には取れそうにない。

1つ1つ取っ取っているのは時間を食うと判断した永久は、いつも通りに割と女を捨てた思考回路を働かせて決心する。

「しゃーない……コレいらん!」

——ジイイイ……ガバツ!

「うええええええ!? え、栄陽院ん!」

前のジツパーを降ろして上着を脱ぎ捨て、中に着ている下着だけの姿になって、峰田をひつつかんで脇に抱えて走り出した。

「おいおいおいちよつと待てよ栄陽院! お前おっぱいやばいつてこれ胸が下着でおっぱ、いくらあとちよつとおっぱいでゴールだからっておっぱコレ全国生おっぱい放送だぞ!」

脇に抱えられ、時折その豊満な胸が当たっている、希望通りのラッキースケベに見舞われている峰田だが、それに意識が割かれている様子はなく、発言内容はおおよそ永久を心配して言うものばかりだった。

それが精神的な成長なのか、はたまたテンパっているだけなのかは誰にもわからない。

……言葉の端々に欲望がどうしてもにじみ出ているあたり、後者である可能性が高いが。

そして、そんな言葉はやはり、覚悟完了したこの娘には届かない。「私はッ、一向にかまわんッ! 別に何か減るもんじゃないし! あと峰田、地雷原っていうか最終関門抜けたから、このラストの直線か

ら別々な！ 今までありがとうがんばれよ！」

「えーつとえーつと、あーわかったよお前も頑張れよ！ ちくしょー
こうなりややつてやらー！」

そうして、最後の直線を走り出す2人。

『おつとここでふっ飛ばされた4人も復帰か!? 轟、爆豪に……つて
おいおいおいおい!? ちよつとコレ流石にまずいんじやねーのかお
い!? どーしたA組栄陽院!? 何で上……あーボロボロになった上
に引つかかったから捨てたのか!? コイツはえれえハプニング！

思わぬセクシーショットにマスコミと男性陣は大喜びだファイ——
バ——!!』

『栄陽院、お前はまた……これを危惧してたんだよ俺は……』

「うおおお!? マジか、先頭集団のA組女子脱いでる!？」

「どんな状況でそうなったんだよ……つてかやべえ、おっぱい大きい
！ 揺れそう！」

「くっ……上手く走れねえ……鎮まれもう1人の俺……!」

「俺も人のこと言えねえけど。前かがみになつてる男子多すぎだろ
……狙ってんのかあの女子？」

「うるせえええええ！ コイツは全力で戦った結果こうなつてんだよ
！ バカなこと言ってる暇あつたらためーらもこのくらいの覚悟見
せてみる！ 盛つてねーで真面目に走れやア！」

思い思いに好きなことを言つて、ある意味男らしい目で永久を見る
後続の男子たちに、その少し後ろを走っている峰田の怒号が響く。
それを見て、後続の生徒たち……特に、峰田という男を知っている
生徒達の間には、驚きのあまり静寂が広がった。

彼ら、彼女らは、目の前の光景が信じられなかった。

あの峰田が、人目もはばからぬ性欲の権化が、今何を言ったのかと。
半裸の永久の女体に飛びつくどころか見ることすらせず、あまつさ
えそれを見て騒ぐ者達を一喝するなど、これは現実なのかと。

「み、峰田、お前いつからそんなに熱く……」

「え、峰田か？ お前本当に峰田か？ 敵が化けてるとかじゃねーよな……？」

「み、峰田さん、何か悪いものでもお食べに……」

「っ……誰だ!? 誰かが『個性』で幻覚を見せているぞ、気をつけるんだ皆！」

「ける……けるろけるろ!? けるろりろけるろ!」

「あかん、驚きのあまり梅雨ちゃんが人の言語を失ってもーた!」

後続が混沌極まる中、レース先頭はついに決着の時を迎えようとしていた。

『フルカウル』全開で加速し走り続ける緑谷、

地面を凍らせて高速滑走する轟、

十分に温まった全力の爆速ターボで飛翔する爆豪、

3人のデッドヒートになるかと思われた戦いだ……

「追いつけねえ……だとオ……!」

「緑谷……ここまで、とは……!」

「もつと……もつと……もつと速く!!」

ほぼ地面と水平ではないかと思うほどの前傾姿勢を取り、弾丸のごとき速さで最後の数百mを駆け抜ける緑谷。スパークを身にまとい、残像にその色を残し、全てを置き去りにして走る。

『轟、爆豪もすげえ勢いで猛追するが……それすら突き放して緑谷が独走！ 速エエ——ツ!! スピード特化の『個性』でもねーのに何だありや!? しかもまだ加速してねえか!』

『……走り方だな。緑谷はただ普通に地面を蹴って走るんじゃない、蹴飛ばして』走ってる。瞬発力に加えて、『個性』が生む馬鹿でかい力をそこに加えて速度を増してんだ。今の緑谷は、平面を『横に駆け上がってる』あるいは『地面を横に蹴飛ばしている』状態……説明が難しいな』

『つまりアレだろ!? 今の緑谷はパワーとスピードとバランス感覚を極限まで使った達人レベルの加速術で走ってるってことだろ!? 一歩間違えりゃ転倒して大クラッシュだってのは見てわかるしな!』

『……まあ、割と間違ってる』

『YEAH!! 大体あつてりやOKさ! さあさあこのまま緑谷逃げきるか!』

『だが、このままの速度を保つのは難しいだろう……ここからはほぼ直線だが、最後は曲がり角だから』

『おーっとそうだった! このスタジアムの外周4kmを走るこの障害物競走、最後は当然、入り口に使ったゲートから戻ることになる! コースから見れば横に90度のカーブだ、そりやこのままの速度で行くのは難しいわな!』

1年生は皆、このスタジアムを出た後、コースに沿ってすぐ左方向に走り出した。外周がコースになっているのだから、当然と言えば当然だ。

そしてそこからまた戻るということは、当然同じくカーブして中に入らなければならない。

さらに、スタートゲートとその通路の広さは決して広くない。

普通に走って通り抜けるだけなら何の問題もないだろうが、ここまで加速している状態の者には……超のつく急カーブに等しい。

ゆえに、緑谷もここを曲がるには、ある程度前から減速し、ペースを調整せざるを得ない。

轟と爆豪が逆転できるとすればそのわずかな間だと、マイクの説明を聞いて一様に思った。

……しかし、

『……ッ!? A組緑谷、減速する気配なし! どころかささらに加速……おいおいおいマジか、曲がり切れねえぞあのスピードじゃあ!』
『……何を考えてる……?』

減速どころか加速し、トップスピードのままゲート近くまで到達する緑谷。

このままでは通り過ぎてしまう。誰もがそう思い、緑谷がとうとうゲート前に差し掛かった瞬間……

「オクラホマ……スマッシュユ!!」

その場で急速に回転し、その一瞬のエネルギーで無理やり、速度を保ったまま90度方向転換。一気にスタジアムに飛び込んだ。

『うおおおおおマジかアアアアア!! やべーこんなん初めて見たぜ俺! 緑谷、あのスピードを全くと言っていいほど減速させずに急カーブに成功!! そのまま突っ込んで……今フィニッシュ!! 二転三転した戦いではあったが、だとしても一体誰が予想できた!? 熾烈な戦いを制し、一番でここに帰ってきたこの男、緑谷出久の、この堂々たるウイニングランをオ——!!』

定点カメラが映せないほどの速さで飛び込んできた緑谷は、稲妻のようにスパークの軌跡を残して走り抜け……ようやく急ブレーキをかける。

踵を使い、足の裏全体を使って急減速し、それでもズザザア——ッ!! と勢いのままに会場の中、陸上競技用コートの中まで突き抜けた。

その軌道上は摩擦のあまり、制動に要した摩擦エネルギーのすさまじさを示すように、スパークとは違った火花が散り、一瞬とは言え自然発火すら巻き起こった。その後には、競技場に切り込みを入れるかのような、堂々たる黒い焦げ跡が残った。

速さといい、派手な演出といい(半分くらいは狙って出したものではないが)、何より最後のあの、プレゼント・マイクが絶賛していたあの急カーブの動き。

圧巻のパフォーマンスを見せ、ダイナミックかつ繊細な力技で不可能を可能にしてみせた緑谷に対し……観客の誰かが、こうつぶやいた。

声は幼かった。恐らく小さな子が、率直に思いついたことを言ったのだろう。

「……まるで、オールマイイトみたい!」

その声が聞こえたかどうかはわからない。

しかしまさにそうだと言わんばかりに、緑谷は観客たちの視線が集中する中、仁王立ちのまま、拳を握った左腕を天高く掲げて見せた。敬愛する、かのヒーローのごとく。

観客達に、そして、このどこかで自分を見ているであろうその人に、『僕が来た』と示すべく。

次の瞬間、割れんばかりの大歓声と拍手が、第一種目の覇者・緑谷出久に浴びせられた。

第24話 TS少女とチーム交渉

雄英体育祭第一種目『障害物競走』。

一番で会場に戻り、その力を見せつけた緑谷は、腕を突き上げたウイニングポーズのまま、続いて到着した轟と爆豪を出迎える形になった。

2人も決して遅くはない、むしろ他の追隨を許さない圧倒的な走りではあったが、2位、3位という順位ではどうしても一步劣って映ってしまう。

「……………油断してたつもりはなかったが、それでも甘かったか」「また、デクに……………紅白野郎にも……………くそがっ……………!」

しかし、結果は結果、自分達は敗者。反省しても、悪態はついても、緑谷に敗れたことには変わらない……………それを、2人ともわかつている。

ゆえに、緑谷、轟、爆豪の3者の間で交わされた視線は、何も言わず目に見えない火花を静かに散らすにとどまっていた。

大歓声の中、3人は静かに、ここから先さらに熾烈な争いと繰り広げるであろう相手とにらみ合う。張り詰めた空気は、まさに戦う者達が纏うそれ。

しかしその空気は……………数秒後、緑谷が突然『へあ!?!』という間の抜けた声と共に、驚いた表な表情に変わったことであっさりと霧散した。

何を見たのかと、轟と爆豪も振り返って後ろを……………今しがた自分達がぐぐってきたゲートを見る。

そこに居たのは……………

「あ……………疲れた。ベスト3には一步及ばずか……………皆早いなホント」

一体どうしてそうなったのか(走るのに必死で3人共放送を聞いていなかった)、上半身のジャージを喪失し、下着姿になって駆けてきた永久だった。

走り終えて汗をかき、息を乱した半裸の美少女。画面に大映しにな

るその姿に、スタジアムの大歓声……の中でも、心なしか男性のそれが増したように思えた。

「お前それ……またかよ」

「好きでこーなったんじゃないやい。ったく……予備のジャージ取ってこなきや……このパターンだと多分2回戦もソツコー始まるよな、時間あんまりないか。ミッドナイト先生ー！」

「はいはい、って、あーあーまたセクシーなことになっちゃって……ちよつと大丈夫？ 全国生放送だけど……恥ずかしいでしょそれじゃ」

「多少は、でもまあ減るもんじゃ……ってそれはいいとして。第2種目始まる前に、ジャージの予備取りに行ってきたもいいですか？ 会場出るんで、一応許可欲しくて」

「もちろんいいけど……あなたそのカツコで行くつもり？ めっちゃ見られるわよ？」

「それは……まあ、仕方ないじゃないですか。服他に持ってきてないし……」

「あ、あああの栄陽院さん！ こ、コレ使って！」

すると、駆け寄ってきた緑谷が自分のジャージの上を脱いで永久に手渡した。ミッドナイトはそれを見て、奇しくもUSJの時を彷彿とさせる光景だ、と思います。

「いいの？ ありがと緑谷、じゃ遠慮なく……じゃ、ミッドナイト先生、失礼します」

「はいはいー、急ぎなさいな、そんなに時間ないわよ。それにしても、ふふふ、いいわねーこういうの、青春っぽくて………ん？」

しかし、ふと何か違和感を覚えるミッドナイト。

今の一連の流れの中で、何かが引つかかった。先程も思った通り、USJと同じような流れだった。

ハプニングで肌を見せてしまった女子に、男子が自分の服を渡してやるという、熱血とは別な、恋が始まりそうなという意味で王道の青春展開。

渡した男子と貰った女子、男女の恥じらいが一層の……と、そこま

で考えて、はっとする。

(あれ? 今緑谷君、半裸の栄陽院さんのこと、赤くなってたとはいえ、普通に正面から見ながらジャージ渡してた……? 前は目をつむって渡してたのに……。まあでも前回はトップレスで、今は下着アリだからかも……。いや、違うっぽいわね?)

その緑谷が、今しがたゴールして駆け寄ってきた麗日に『すごいねえ!』と褒められながら、顔を赤くし……。両手どころか両腕を使って顔を隠している光景が目の前にある。

おそらく麗日の顔が近くにあるからだと思われるが、先程まで栄陽院の下着姿を見て平気だった男の反応とは思えない。

(……麗日さんは服着てても、間近に来られると緊張する。でも、栄陽院さんは緊張しない……。? やだ、不思議な謎……。何かありそう!)
じゅるり。

そんな音が聞こえてきそうな視線で緑谷を見るミッドナイト。何かを感じ取ったのか、緑谷はぶるるっ! と身を震わせた。

その一方で、緑谷のジャージを着て駆け足で自分のロッカーを目指す永久。

サイズ差ゆえに、前回同様胸の部分がぱっつんぱっつんになり、それに目がいく男性陣の視線を結局集めてしまっていたが、気にせず走る。

走りながら……。考えていた。思いだしていた。

ゲートを潜り抜ける直前、その向こうに見えた……。拳を高くつきあげて堂々とスタジアムに立つ、緑谷の姿を。

彼に借りたジャージを、ぎゅっつと握りしめる。運動後なのだから当然だが、しつとりと汗で湿っていて、息を吸うと、ふわりとその匂いが鼻に入ってきた。

脳裏をよぎるウイニングポーズと合わさって……。ぞくり、と永久の背筋に震えが走る。

自分が選んだ男の雄姿を前に、永久の脳内では……。久々に『個性』と『本能』が暴走していた。

(やばい、やばいやばいやばい……緑谷強くなりすぎ！ かつこよかった！ あんなん惚れるわ！ あゝ……超にやけるとこだった！ いい匂い……このジャージ返したくない！ ちくしょー鎮まれ私の煩惱！ 情欲は男子だけのものじゃないってんだよお！ 私元・男子だけどお！)

☆☆☆

さて、ジャージも取ってきて着替えたし……できれば借りた方のジャージ返したくなかったけど……次、次！

障害物競争を勝ち抜いた生徒、総勢42人。おおよそ5分の1以下にまで減らされたこの人数で挑む、次なる種目は……ミッドナイト先生の発表によれば、『騎馬戦』。

最大4人1組でチームを作り、騎手がハチマキを装備して、それを取り合うチーム戦……へえ、個人戦じゃないんだ？

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
あるのがヒーローだって緑谷が言ってたつけ……：～今回のコレもそんな趣旨なのかな？ 個人戦と言いつつ、急にこういう課題を出して、不本意かもしれないけども他者と協力して勝負に臨めるかどうか見るとか。ありそうだ。

で、この騎馬戦だが、『個性』使用が自由なのはもちろん、大きな特徴が2つ。

1つ目、騎馬が崩れようがハチマキが取られようが、途中で失格になることはない。ハチマキがなくなっても動けるし戦えるから、制限時間内なら『奪い返す』っていう選択肢がある。

ただし、悪質な騎馬に向けての崩し目的の攻撃なんかはNG。一発で失格。

そしてもう1つ。この騎馬戦は、ただ単にハチマキの数で競うものじゃない。ハチマキに点数がつく。試合終了時に持っているハチマキの合計点で競う、という形だ。

そしてその点数は、障害物競争の順位に応じて、個人個人に与えら

れる。チームメンバーの点数合計が、そのチームのハチマキの点数だ
(人数分もらえるとかではなく、1本にまとめられる)。

障害物競争、予選突破最下位42位を5Ptとして、順位が上がる
ごとに5ずつ上昇。

41位10Pt、40位15Ptとして……ってことは、計算式は
……自分の順位をxとして……私4位だから……

(ええと、 $(42-x) \times 5 + 5 = 195$ 。私の持ち点は195点って
ことね)

「ただしこれは2位までの基準！ 障害物競走1位に与えられるPt
は……」

うん？ 1位だけ違うのか……ボーナス的なアレかな？ 得した
な緑谷。

「——1000万Pt!!」

ボーナスじゃなくて罰ゲームだった。

何、1000万って。クイズ番組の最終問題でもポイント配分もう
ちよつと大人しいぞ。

超狙われるじゃん……と思いつつながら緑谷を見たら、そこには、無数
の視線にさらされながらも、目をつむつて腕を組み、揺るがぬ堂々と
した態度で話を聞いている緑谷の姿が。

衝撃的にも程がある宣告を受けながらも、動揺した様子のない緑谷
の態度に、ある者は驚き、ある者は感心し、ある者は警戒心を強め、あ
る者は舌打ちしながら『ぶっ殺す……』と呟き……おい爆豪だろ最後
の。わっかかりやす。

十人十色の反応なれど、ほとんど全員が緑谷という男が動じていな
いものと思っているだろう。

が、私は知っている、そんなんじゃないことを。

なぜならあの態度は……開会式前に、私がちよつとした冗談で、緊
張をほぐすために言った言葉に起因しているからだ。

『テンパったり緊張してやばくなったら、腕組んで目つむってじつと動かないで落ち着くの待つてるとかすれば悟られないし大物感出ていいよ？ まあ場面にもよるけど』

(やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいえちよつと待つて1000万ポイントって何何でそんな僕だけ桁が5つも違うの2位の轟君だつて205ポイントなのにどうしようコレっていうか騎馬戦つてことはチーム戦だよ誰かとチーム組まなきゃいけないんだよねそれなのにこの点数ちよつと待つて勘弁してこんなんすごい狙われるじゃん誰も組んでくれないんじゃないよああああどうすれば!?)

心の声が聞こえてくるようだ。

ともあれ、今から15分間の交渉タイム。さー私もチーム決めないと。

……コレ、最後まで1人とかでチーム決まらなかったらどうすんだろ？ 1人で参加すんの？ それとも失格？ ……相澤先生的に考えれば後者ありそうだなー……ヒーローに必要な積極性と協調性が欠落してるとか言つて。

まあ、協調性とか関係なく組みそうなものいるけど。

例えば、前々から話を合わせてたり、普段から仲がよかつたり……あるいは……

……そういうのに便利な『個性』を持つてたり、ね。

「なあ、ちよつといいか？ 4位の……色々でっかい人？」

そら来た。

私の背後からかかってきたその声は……私がこの体育祭で、ある意味最も警戒している人間のものだった。

振り返ると、そこに立っていたのは……見覚えのある紫色の髪と、隈がすんごい目の男子。

不敵な笑みを浮かべているそいつに、私は……返事はしない。

「……おいおい、無視は酷いだろ？ 何か言ってくれよ、A組の人……名前わからないのは謝るからさ」

返事はしない。

代わりに、手話で返しておく。ただし手話なんか知らないから適当
だけど。

きっかけは、本当に偶然。第一種目のスタート直後に、そいつを見
つけた時。

しかし、こちらに返事をする意思がないというのはわかつたらし
く、はっとしていた。

「……………あんた、気付いて……………」

途端に苦々しげな顔になるその男子。

とうかその背後、よく見ると、ぼーつとして突っ立っている尾白
がいるんだが……………ははあん？ やられたな？

叩いたら治るかな？ 試してみよう。

「……………はっ？ あ、あれ……………俺、何を……………え、栄陽院？」

「お、戻ってきた」

「……………ちっ！」

きっかけは、本当に偶然だった。

障害物競走のスタート直後、私はそいつを『あ、こないだクラスに
来た奴だ』という程度の理由で見えていたんだが……………そいつが他の普通
科（多分）の生徒に声をかけて、生徒が返事をした途端……………まるで魂
を抜かれたようにかくん、と力なくその場にうなだれたのだ。

まるで、糸の切れた操り人形か何かのような、あるいはマックスな
ハザードにでも入ったのか……………って感じの、いびつな沈黙。流石に
ぎよつとした。

そしてそれ以降、かくんが行った生徒達は彼の操り人形になってい
た。

ピンときた。コイツの『個性』は、人を操る。恐らくは、受け答え
した相手を……………とか、そういう条件だろうと。『洗脳』とでも言え
ばいいのか。

見抜かれた上に、既に洗脳していた尾白を開放されて悪態をついた
彼は、踵を返してその場から離れようとするが……………

「まあ待ちなつて。えーと……………名前わかんないけど」

「あ？……………まだ何か用かよ？」

「……………」

「……操らないから言えよ、さつさと」

「そっか、そりやよかった。ええとね……アレだ、別にわざわざ操らなくてもさあ、組まないとは言ってないだろ？」

「はっ」

コイツは何を言ってるんだ、と言わんばかりの隈男子。まあそれも当然だろうな……今まさに、操ろうと画策して失敗した上に見抜かれた相手から、『組む？』なんて言われてるんだから。

一体何を考えてるのかって、ありがたさより先に警戒が来て当たり前だ。

けど私からすれば、操られるのは勘弁だが……平和的というか、普通に手を組めるなら手に入れたカードなのである。

……と言うよりは、敵に回ったらヤバいという懸念の方が強いが、まあそれはご愛敬。

「正気かあんた？ 今まさに洗脳しようとしたばかりの俺と組むって……気は確かかよ？」

「気持ちかわからなくてもないけど、デイスリすぎでしょ……何、あんた組みたくないの？」

「操る？ 洗脳？ え、ちよつと何話してんの栄陽院、説明……」
「後でね？」

こうしている間にも、周囲では続々チームが決まっていつている。

轟はめっちゃ早く3人確保したのが見えてたし、B組連中は何やらあらかじめ示し合わせてたのか、早々と同じ組同士で固まっている。爆豪の周りは争奪戦になっていて人が集中してたけど、切島を皮切りにさくつと決まった。その余りが集まって葉隠がチームを決め……緑谷も無事にチームを決めた。麗日と、常闇と……誰だアレ？

残っている人員はほとんどいない。が、運よくこの場には……『4人』いる。

最悪は3人でもよかったんだけど、折角だし手を組みたいじゃないか。正直、残り物感否めないとはいえ……案外悪い組み合わせでもなさそうだし？

少しの間、紫色の彼（そろそろ名前聞くべきか）は黙考していたが、後悔すんなよ、俺みたいな、何のとりえもない普通科と組むなんて、物好きな選択をして……」

「しないし、させない。あと、その言い方は謙遜が過ぎるってもんだ」「あの、そろそろ説明……」

あ、尾白放置してたっけ。じゃ、私はこっちに説明するから……

「あんたはそっちの金属君に説明よろしく」

「……こいつの洗脳も解くのかよ？」

「1人だけ頭空っぽでも足並みそろわないでしょ？ 頭はたいたくらいで解けるなら、途中で正気に戻って混乱するのもアレだし……何より、話せばわかる奴だから大丈夫だって」

そして15分が経過し、

『さア上げてけ鬨の声!! 始まるぜ血を洗う争奪戦!!』

「始まるってよ。用意はいいか……尾白、心操……鉄哲！」

「おう！」

「……ああ！」

「ツしゃあ！」

私が前になり、後ろに尾白と鉄哲、そして騎手に心操。

尾白150Pt、鉄哲155Pt、心操80Pt、そして私195Pt。合計580Ptが私達の持ち点だ。コレを守り抜くのはもちろん……他のも取って確実に最終種目に行く。

なお、鉄哲がこの組に参加してるのは、私に声をかけた時点で既に心操が『洗脳』して引き連れていたからだ。ボーっとしてる間に、他のBクラスの面々が全員組んでしまっていて、相手がいなかったこともあって、話に乗ってくれた。

何より……

「……その……すまん、最初、騙して利用するような真似しちまって」「気にするな、ってのも違うけど……俺達が無警戒だった部分もあるからな、いいさ。それよりも今は、勝つことに全力を尽くそう……味方だと考えれば、君の『個性』は頼もしいし」

「おう！　こそこそやってたのはアレだが、きちんと謝って、その上で正面切って頼んできてるのは嫌いじゃねえぜ！　それにA組でもお前のことはそんなに嫌いじゃねーしな、栄陽院！」

「そりゃあんがと……っと、カウントダウン始まつてるな。よおし、行くぞ野郎共！」

「応!!」

「……少し、わかった気がするよ。あんたたちヒーロー科と、俺みたい
に、うじうじしてくすぶってるような奴との差って奴がさ」

……？　心操何か言……つてそんな間に！

『3、2、1……スタートオ!!』

始まった！　A組、B組、C組（普通科）混成軍、いっちよ行きま
すかあ！

第25話 TS少女と騎馬戦（前編）

「実質……1000万の争奪戦です！」

「はっはっはー！ いったくよー緑谷君！」

大方の予想通りと言えいいのか、大体の騎馬は、1000万Ptを有する緑谷に殺到し、緑谷はそれを、麗日の『無重力』と、サポート課・発目のサポートアイテムの数々、そして常闇の『黒影』を駆使して防いでいく。

もちろん、緑谷自身が何もしていないわけではないが……飛び道具や射程距離のある武器に乏しいと言わざるを得ない緑谷では、さらに不安定な騎馬の上でできることは限られる。

（麗日さんに軽くしてもらってる以上、あまり勢いをつけて攻撃すると反動でこつちが飛ぶ……けど、僕の場合はPtさえ死守すれば奪る必要はない……むしろ、常闇君と一緒に防御に徹していればいい！それなら……ここ数日の訓練でたっぷりやった！）

サポートアイテムの噴射で空を飛ぶ緑谷。その着地際を狙って、二郎のイヤホンジャックが飛んでくるが、素早く動いた『黒影』がそれを弾く。

が、反対方向から大量の茨のようなものが伸びてくる。

「っ……B組の！ 発目さん、ちよつと飛ぶ！」

「了解です、私のベイビー……マジックハンドをどうぞー！」

発目が伸ばした、その名の通りのマジックハンド……ロボットアームのようなそれに手をつけて、緑谷はあえてその茨の前に身を晒し、「セントルイス……スマッシュ!!」

横一線に振りぬいた蹴りの威力で、茨を薙ぎ払って断ち切ってしまった。

『おおい!? マジかよ緑谷、B組塩崎の茨を蹴りで斬っちゃったぞ!? この競技でも魅せるなーおいアイツはよー!』

『斬った、というよりは、力づくでちぎった、という感じの断面だが……どちらにせよ、あの不安定な体勢でそれだけの威力を出せるコントロールは評価だな』

その緑谷を、空中から発目がマジックハンドで回収し、再び騎馬に乗せる。

直後、はつとして振り向いた緑谷は、左腕を突き出すようにして構え……『デコピン』の要領で指を弾く。

「デラウエア……スマッシュユ!!」

弾いたところから空気の弾丸が飛び、迫ってきていた黒いボールのようなものを叩き落した。

「っ……峰田君のか!」

「あー惜しいッ! もうちよつとで当たるところだったのによ!」

障子の背中に、閉じた触腕の中に格納されているらしい峰田が悔しそうに叫んでいるのが、緑谷の所からもわずかに見えた。

「危なかったな……今の食らってたら、動けなかった」

「デク君すごいね! ほとんど後ろからの攻撃だったのによくわかったやん!」

「ああ、うん……視野を広く持つのは大事だって、色々あって思い知ってるから」

『じゃあ緑谷、今日のトレーニングもいつも通りアスレチックな。ただし、時々私がコレで撃つから、常に警戒しつつ、よけるなり受け止めるなりして当たらないように』

『え? 撃つって……え!! 何それ、拳銃?!』

『訓練用の模造銃だよ、弾も実弾じゃなくゴム弾入り』

『いや十分危険だよねそれ!! 当たると痛いでしょ!?!』

『そりゃあんた、痛くなきゃ覚えないうて。あ、コレに慣れたら次はレーザー銃使うから』

『レーザーア!?!』

『つつても攻撃力のあるビームが出てくるわけじゃなく、ほら、リモコンとかと同じ赤外線みたいなのを飛ばす奴だよ。こっちは当たっても痛くもなんともないし、というか気づかない。ただし、当たったかどうかはこっちで記録して点数で管理できる。防御不可能扱いだから、これに関しては絶対に銃口を向けられない、射線から逃れる訓練

だね。被弾が一定回数超えたら罰ゲーム」

『ば、罰ゲームって……ちなみにどんな？』

『そうだね……その時のお楽しみってことで』

「ゴム弾は散々被弾したけどそのおかげで視野を広く持つ訓練はできた。レーザー銃は、どうにか避けまくって結局罰ゲームは回避したけど、もしアウトだったら何させられてたのか……」

「デク君？」

「え、ああいや、何でもないよ、大丈夫」

「戦場を見渡す天の目を持っていたか……流石だ緑谷」

『俺ノ出番滅ルジヤネーカヨ』

「あのーすいません、今黒い方が言ってたことの言い回しというか意味がちよつとよくわからなかったんですが、どなたか解説を……」

「ごめんしてる暇なさそうだ発目さん、次が来る！」

「そうですか、ではまたの機会にということですね！」

発目はそう言っただけその場は納得したが、説明するとなると色々な意味で難しいのでできればそのまま忘れてほしいと願う緑谷だった。

一方、それまで動きのなかった場所にも、戦いの波が及ぼうとしていた。

「……おいでなすったか」

「やっとかよ、作戦とはいえ待ちくたびれたぜ！」

永久が中核となって結成された『心操チーム』（騎手が心操のためそういう呼ばれ方になる）に迫るのは、B組の女子ばかりで構成された騎馬だった。騎手になっているのは、サイドテールの活動的そうな雰囲気の子だ。

「鉄哲！ 悪いけどこれも勝負だ……恨みっこなしだよ！」

「おうよ、もちろんだぜ拳藤！ かかってこいやあ！」

「というか、鉄哲は何であんなチームにいるノコ？」

「色々あったんだよ！ ともかく遠慮は無用って奴だぜ！」

「あんま挑発しねーでくれ、一番危険なの騎手の俺なんだから……」

若干腰が引けている心操だが、果たしてその言葉は鉄哲に届いてい

るのやら。

B組の委員長、拳藤が率いるチームは、心操チームの騎馬に近づくと、シンプルに正面から襲い掛かってくる。突如として目の前で手を巨大化させて掴みかかってきた。

しかしそれは、尾白が伸ばした尻尾に阻まれて止まる。その間に、だあん！ と轟音を立てて勢いよく地面を蹴り、騎馬ごと永久が後ろに飛び退った。

心操はもちろん、鉄哲、尾白もそれに体重を預けるようにして一緒に飛ぶ。

「っ……ちよつとアレ、ほとんど一人で飛んでない!? どんだけパワーあるのよ!?!」

「いや、そういう君の腕力も結構なもんだったけどね、ちよつと尻尾痺れたし……A組もB組も、今年はパワフルな女子が多いなあ……自信無くすよ」

「ちよつとそこの男子、あんまりデリカシーないこと言わないでくれるっ!」

「そうノコ! 拳藤はパワーも度胸も色々あつて男子より頼りになるせいで、姉御肌扱いされてるけど、こう見えて心は乙女だからそういうのちよつと気にしてるノコ痛い!」

「いらんこと言わなくていい!」

「心は乙女ねえ……私にはわからん世界だ」

「いや、貴方女でしょ……」

「そうだけど、あいにくそういうのとは無縁の神経持つてるみたいでさあ……何か昔、『お前はサバンナかジャングルでも生まれ育ったのか』って言われたくらいだし」

「意味も何もかんもわからん!? どんな状況で何したらそんな比喻表現されるわけ!?!」

「何だっけなあ……忘れた」

「第一種目の時も見ててちらつと思っただけど、女捨ててる……?」

「むしろ割と最初から構成成分少ないとか、持ってない……かも」

「何ちゆう会話だ……」

「何だよさつきから、いいじゃねえかジャングルとかサバンナとか強
そうで、お前すげえな栄陽院！ 拳藤も、パワフルとか姉御肌って褒
められてんだろ？ 何が不満なんだよ？」

「鉄哲！ あんたもホントデリカシーつてもんが……そんなだから
脳みそまで金属とか言われるんでしょ！」

「脳みそまで金属だあ!! いいじゃねえか強そうで！」

「そういうところコ……」

「皮肉すら通じないとは……」

「おい、いつまで続くんだこの漫才……つておわ!!」

その途中、突如として先程と同様に跳躍する永久。しかも今度はよ
り勢いよく、横に。

何事かと驚く心操だが、背後に迫っていたものを見て驚愕する。

「う……腕!!」

「ちっ……ばれてたか。ごめん皆、しくった！」

「ドンマイ切奈、次がある！」

B組の1人、取陰切奈が切り離して放った腕が、心操のすぐ後ろに
回り込んでいた。騎馬を支えている彼女本体の方には、よくよく見れ
ば腕が半ばほどから……ない。

「何だあれ!! 手を切り離して飛ばせる『個性』!」

「いや違う、取陰は……おい、アブねえぞ!!」

鉄哲の声に、今度は尾白が尻尾を振るって、横合いから飛んできた
何かをはじき返す。

「痛っ、ちよつと刺さった? ……何だ!! 角?」

「Oh……Sorry、でも勝負なので、許して下され候」

「角取か!」

「何か微妙に日本語変なの来た!! あの子もB組か?」

「みたいだな……遠距離攻撃とは、ちと相性が悪いなこりゃ」

角を飛ばして攻撃に援護に使用できる『個性』を持つ、B組の女子。
彼女を有する騎馬が新たに参戦してきたのを確認し、警戒心を跳ね上
げる永久達。

「轟や緑谷にかかずらつてたと思っただが……そろつてこつちに狙

いを変えたか？」

「1000万が予想以上に動くもんで狙いにくくてよ……おまけに氷野郎まで参戦してくるから、無駄に時間食うより二手に分かれようってことになったんだ。とか思ってたらあっちはあんなことになっちゃうし……」

そう言われて尾白がちらりと向こうを見ると、ちょうど緑谷と轟が激しい攻防を繰り広げている所だった。

周囲には、障子達のそれを含めたいくつかの騎馬が氷漬けになって足止めされている。轟の騎馬を狙おうとして返り討ちにされたのだろう。あれではもう動けない。

氷漬けにして足を止めようとする轟だが、緑谷チームは軽快な動きでそれをかわす。

麗日の『無重力』と発目のサポートアイテムの合わせ技なのは明らかだが、よく見ると、緑谷が適宜『ニューハンブシャースマッシュ』を打って、拳の反動で動いている。バックパックのガスは有限、少しでも節約するつもりなのだろう。

迫ってくる氷は緑谷の空気弾と常闇の『黒影』が迎撃し、常に移動してのを絞らせない。上手く立ち回っているな、と感心した。

(しかしこうなると、こいつらはもうあっちには行ってくれないだろう……あっちで点取り合戦をしている緑谷と轟、どっちが勝つにせよ、残る枠の争いは……こっちに限られた。つまり……)

「あっちで戦ってる2チームに邪魔が入らない以上、主戦場はこっちに移ったってことか」

「その通り。あっちの1000万争い、轟のチームが1000万を奪えば、緑谷のチームはOPTで脱落だ。仮に緑谷チームが守り切っても、恐らく試合終了間際、こっちに手を伸ばしてくることはない。ポイントからして轟も最終種目に進んじまうだろうが、それでも残り2チームの枠がある。だったらそこに滑り込めばいいだけだ……お前らの騎馬は、あいつらより断然やりやすいしな！」

その途端、永久の足元にどばっと白くねばついた液体が降りかかる。

即座に固まって硬くなったそれは、永久を拘束して動け無くしてしまつた。

「栄陽院、足が!」

「よし、凡戸ナイス!」

「悪いね、貰うよ!」

そこに、再び突つ込んでくる拳藤の騎馬だが、

「こんなもんで……私が止まるか!」

バキイ、と轟音を響かせて、力づくで拘束を引きちぎる永久。そのまま横に移動して拳藤の攻撃をかわし、同時に迫ってきていた別の騎馬を尾白の尻尾がけん制する。

「うっそお!?! 凡戸の拘束を……アレめっちゃ硬くなるのに、力づくで!?!」

「なんて力だよ……ホントに女子か!?!」

「あつぶな……どうにかなつたか、サンキュー尾白」

「どういたしまして。それより気づいたか栄陽院、この戦い、てつきり残りの2〜3枠をかけた乱戦になると思ってたんだが……」

「ああ……やっぱりな。そうじゃない、これは……袋叩きだ」

周囲を取り囲むように立つ、いくつものB組の騎馬を見回して言う永久。

「なんだ、原始人みたいに野蛮な戦い方な割に、物分かりはいいんだね、そこの君」

と、バカにしたような口調の言葉が背後から投げかけられ、尾白がその声をした方に視線を向けると……そこには、何本ものハチマキを首にかけた、金髪の見慣れない男子がいた。

恐らくはB組の者だろう。そして、見せびらかすように手にもつてくるくると回しているそれは……爆豪のハチマキだ。

「なるほどね、最初からクラス対抗のつもりだったってわけか……」

「卑怯なんて言わないでくれよ? 君達がただバカみたいに前しか見ずに突っ走ってる間に、より効率的に戦える方法を使って考えただけさ。拳藤、こっちはもう終わったよ、あと1枠か2枠、誰でもいいが、そいつを討ち取れば確保できるだろう?」

「物間……あんた何度も言うけど、必要以上に他人を挑発するのやめな。戦略上必要なものならともかく、こつちも気分良くはないんだから？」

「挑発？　ははは、何言ってるんだい、本当のことしか言っていないだろう？　眼前の敵を倒すことしか考えてない、まるで獣……おいおい鉄哲、睨まないでくれよ、クラスメイトだろう？」

「俺はなあ……最初からこの作戦反対だったんだよ……A組の奴らは確かにいけすかねえのが多いけど、それでもあいつら、正面から逃げも隠れもしねえで戦ってた……」

ギリギリ、と奥歯を噛みしめて唸る鉄哲。

それをバカにするわけではないようだが、物間自身も自分の考えや行ったことを撤回するつもりはないようだった。他の騎馬の者達も含め、ただ、黙って聞いている。

「A組だけじゃねえ、サポート科や、普通科の奴だってそうしてる！　だから俺達だけ、狡い真似して正々堂々やらねえなんて嫌だったんだよ……作戦だつてわかってても、全力で来る相手にこつちも全力でぶつかりたかつたんだよ！　そのせいで俺がお前らに迷惑かけたのは知ってるし、あまつさえこのチームでも迷惑かけちゃってる！　でもな……でもなあ……」

「ストップ鉄哲、それ以上言わなくていい」

絞り出すような声を、永久は制して止める。

見渡せば、B組の騎馬の中には、気まずそうな顔をしている者も何人かいた。鉄哲の気持ちが変わる、あるいは自分もまた、作戦に賛同せずに全力でやりたい、やるべきだと思っていた者達だろう。

障害物競走の順位を思い返せば、B組は上位と下位にかなり分かれて到着していたように見えた。恐らく、物間の策略に乗っていた者達が下位に集中し、上位にちらほらいた者達は、それを良しとせず全力で戦った者達なのだろう。そう、尾白達はあたりをつけた。

その『上位にいた者達』の1人である鉄哲をなだめて、永久は語る。

「あんたホントいい奴だよね……私や心操がバカやった時も許してくれただけでなく、この競技が始まる前にさ……同じ騎馬として協力は

するけど、B組の奴らを裏切るようなこともしたくない、って、クラスメイトの個性も話さなかったし、今物間が言ってたB組の『作戦』も、自分が反対の立場だったってのに何も話さなかったもんね。『教えられない、すまねえ!』って私達に律儀に頭まで下げて……こつちが恐縮しちゃったわ。ホント漢って奴だよ、あんた……」

「鉄哲……あんた……」

「そういうあんただから、急造で組んだチームであつても、私達も全力で信頼して頑張ろう!　って気になれたんだっけね……そこでも、それでも苦惱させちゃつたのはむしろこつちが申し訳ないと思うよ。代わりと言つちやなんだけど……ここから先は、徹頭徹尾あんた好みの戦い方になるから、せめてそつちでストレス発散してくれ。相手がB組クラスメイト達で悪いけどね」

「……ああ……ありがとよ。ってことは……やるのか?」

「ああ。尾白、心操……覚悟決めなよ。ここから本番だ」

「っ……了解!」

「マジでやるのか……いや、俺が一番楽な立場だけどき?」

「……皆、警戒しな!　何かくるよ!」

「あーはいはい、今までは本気じゃなかったアピールね。そういうの逆に安っぽく見えるからやめたほうがいいよ?　まあ、もしかしたらホントに本気じゃなかったのかもかもしれないけど、それはそれで、この体育祭の大舞台でそれはどうかと思うなあ……勝負事に真剣に取り組む姿勢がなつてないんじゃないの?」

「策略めぐらしたあんたが言つていいセリフじゃないでしょ……」

「いいのさ、僕のは勝つために必要だと判断した最善手だから——」

『物真似野郎オオオオ!!』

爆発音と共に、咆哮のごとき大声が近づいてくるのに、そこに居た全員が気づいた。

「あー……もう抜け出してきたのか。拳藤、僕はこれで失礼するよ、あの獣から逃げなきゃいけないからね……あーやだやだ、あんな風に凶

暴な上にしつこい奴に付きまとわれるなんて災難だ」

「一から十まで自業自得だろ。ここにいと爆豪もこつちに来る可能性高いからはよいけ」

「つれないなあ……まあいいか。それにしてもA組の連中って、考えなしに暴れる奴が多くて困るよ。本気じゃないプレイでここで包囲網に捕まった4位の君もそうだし、やたら突っかかってくるあつちの爆発君も……あつちでバカスカやってる2位と1位もそうだね。ちよつと視野が狭いつて言うか、考えが足りてないとしか言えないな。僕らB組より一足先に『敵』ヴァイランを相手にした分先に行つてるとか言われてたけど、何かかえつて損しちゃつてるんじゃないかい？」

「……………何だつて？」

その瞬間、ぴくつ、と反応した者が2人。

永久と、尾白。他ならぬ、A組の2人。

様子が変わったことに気づいたのは、近くにいた拳藤ら数人だけ。その場を離れかけていた物間達はそれに気づかず……それゆえに、置き土産気味に言ってしまう。

「だつてそうだろ？ 僕らは堅実に、1つずつ、順序良く学んでいったからこそこうして協力して結果を出せているんじゃないか。つまり、一足飛びにカリキュラムをこなしてもいいことないし、いばれることじゃないんだよ。そうするとあつちの彼なんか、ヘドロ事件と合わせて2回もそんな感じになつちやつてるんだ。そんな考えたららずでよく誰も死ななかつたよねえ……運だけはよかつたつてことかな、折角の実践を教訓に生かすこともできず、ただただご苦労様だなあ」

「つ……………おい物間、いい加減に……………」

「……………1つ、アドバイスしといてやるよ、B組物間」

やけに静かな、しかし妙な威圧感を含んだ声が、あたりに響いた。

「挑発するにせよ……………言葉は選べ」

「……………？ どういう意味だい？」

「お気楽なもんだよねえ……………あの事件をそんな風に、面白おかしく話

して挑発のネタにする余裕があるって時点でき……うん、その通りだ。あんまりこういうこと言いたかないけど、この時点であんたらB組と私らA組は違うよ」

静かに淡々と話す永久。

だが、明らかにさつきまでと空気が違っていることに、徐々に気づく者が増えていった。

「ホントに、マジに、ガチでき……命かかってたんだよあの事件は。どこかで誰かが、何か1つでもミスってたらさ……誰かいなくなってたんだよ。A組20人じゃなくなってたんだよ。それを皆わかっている。だから、私達は反省や教訓としてあの事件を振り返ることはあっても……それ自体を面白おかしく茶化してからかうなんてことは、誰もしない」

「そうだね……先生達が必死で戦ってくれて、何度も俺達の鼻先を死がすすめて、プロヒーロー達が戦っている世界というものを実感したあの事件を、俺達は決して、笑うことはあっても、嗤うことはない……皆が必死になって、全力で戦って勝ち取って、迎えることができた、1年A組20人、この今を……絶対にバカにしてネタにするようなことはない」

「つーかさつきから聞いてりや、サイラン 敵事件に遭遇したこと自体をネタにとつて、よくもまー言ってくれるもんだわ……。周りが言っているのかも知んないけどさ、なに、私達が『会敵』したのをステータスか何かとも思っているの？ あの必死の数十分が、参加したことに意義がある記念受験みたいな扱いで本気で考えてるの？ そんなんで威張るなつてこと？ 調子に乗るなつてこと？ 威張つてないし調子に乗つてないし、そんな気にもならないよ。あんたらが勝手に言っているだけじゃん、私ら何も言っていないじゃん」

永久と尾白の、つらつらと紡がれる言葉。

戦いの場においてはいささか長すぎる独白。しかし、不思議と誰も邪魔をする気になれない。

「長々話したけどさ、言いたいことは単純なんだよ。所詮は部外者だったあんたらB組が、あの時のあたしらの心情を理解するなんて難

しいだろうけどさ、それにしたってねえ……こんな『敵』に対して言うようなこと、同学年のヒーロー科の奴に言うことになるとは思わなかったけどさあ……」

——人の命を、それがかった戦いを、何だと思ってるんだ？

「……物間……後でいい、ちゃんと頭下げて謝んな。あんた……言っちゃいけないこと言った。やっちゃいけない怒らせ方したよ」「みたいだね……けど残念ながら、一度言ったことは飲み込めない。対応は後で考えてどうにでもするから、この場は……」
「安心していいよ、怒ってないから別に……ただ……」

……火が点いただけだ」

第26話 TS少女と騎馬戦（後編）

『緑谷チームVS轟チーム、両者一步も引かねえ戦い！ 轟が作った氷のリングの中を縦横無尽に動き回る！ まさに高火力対高機動の戦い……一瞬たりとも油断できねえハイスピードバトルだ息つく暇もねえ——つとお!? 一対一の戦いに注目してる間に、そのリングの外もとんでもねえことになってるじゃねーか!? 何が……つてまた栄陽院かよ、何だありやあ!?』

『爆豪も飛び回ってるが……周りを取り囲んでるのはB組の連中だな。まあ、やろうとしたであろうことは想像がつくが……にしてても、本当にありや何だ。この種目騎馬戦だろうが……どっからどう見ても騎馬じゃねーのが1コ混じってんぞ』

実況の2人が驚き（と、若干の呆れ）と共に目を向ける先では……言葉通り、A組が主体になっている2騎の騎馬が猛威を振るっていた。

1つ目は、爆豪の騎馬……というか爆豪個人というか。

持ち前の『爆破』で騎馬を離れて飛び回りながら、先程から散々自分を煽ってくれた物間の騎馬に集中攻撃をかけ、そのついでとばかりに周囲にいるB組の他の騎馬にも攻撃している。

攻撃後は瀬呂がテープで回収して騎馬に寄せ、その合間合間の攻防を、芦戸と切島がフォローしている。

そしてもう1つは……栄陽院永久の騎馬である。騎手は心操なので、チーム名は『心操チーム』だが、この鬪いを見ても、中核となっているのはだれかと聞けば、ほぼ全員が永久だと答えるだろう。それほどまでに……その姿は異常だった。

何を隠そう、イレイザーヘッドが言った『どう見ても騎馬じゃねーの』とは、彼女達のチームのことだからだ。

通常、騎馬戦における『騎馬』とは、前に1人、後ろに2人の人間が腕を交差させるようにつかんで組み、足を置いて立てる形にして……そこに騎手が乗って競うものだ。4人の人間が、三角錐のような形で立体的に組み上げるものだということができる。

だが、今の永久達のチームは……先程まではそうだったにも関わらず、今は全く違う形になっている。

『いやマジで何あれ!? 騎馬じゃねーじゃん! 新手のクリーチャーか何かみたいになってんじゃん! 俺ああいうの前にアニメで見たことあんだけど、タイ○ントとかオ○ガモンみたくなってるじゃねーか!! いいのかミッドナイト、ルー尔的に!』

「認めます! テクニカルなので!」

『認めちまったー! あつちで飛んでる爆豪といい、騎馬戦とは一体何だったのか!』

「バケモンかよっ……どんなパワーしてんだあの女子!」

「滅茶苦茶だ……絶対騎馬戦じゃねえこれ!」

「あーもう、物間が失礼なこと言つて怒らせるからあ!」

「あははははあ——、責任転嫁はよくないんじゃないかなあ皆?! 僕はただおつとちよつとくらい喋る時間をくれても『BOMB!!』うわつと……っ、本気でまづいかそろそろ……!」

B組の騎馬各騎が悲鳴に近い掛け声を上げて見る先に、永久は立っていた。

永久の騎馬がというか、『永久が』立っていた。

今現在、2本の足で地面に立っているのは永久だけなのだ。

その右腕には鉄哲が足でしがみつくようにして、永久も鉄哲の足をつかんで『装備』している。

左腕には同じようにして尾白が、しかしこちらは尻尾をうまく使つて巻き付いて『装備』。

そして、肩車する形で心操が頭上に『装備』あるいは『騎乗』していた。

明らかに、『騎馬』の影も形もない。両腕と肩車でそれぞれ男子を1人ずつ装備した栄陽院永久がそこに立っているだけだ。

そんな、遊園地で子供たちに抱き着かれまくっているお父さんのような状態で、まともに動けるはずがないと普通は思うだろうが……その『抱き着かせて』いるのは、フルパワー時の緑谷を除けばA組随一の膂力を持つ永久である。

——ドン!!

地面を力強く蹴って急加速し、逃げようとしていたB組の騎馬の1つに急接近する永久。

「来たあああ!?!」

「くっ……角取! 角でけん制を……」

「OK、任せて下サーイ!」

B組、角取ポニーの放った、遠隔操作できる角が飛んできて、男子3人乗せているとは思えない速度で迫りくるが、それを見た永久は……右腕に力を籠め、

「鉄哲、行くよ!」

「おう、任せろや!」

「よし……250%……アイアンクローオオオオ!!」

装備した鉄哲を一気に振りぬいて、さらに鉄哲がその勢いに乗せて拳を横殴りに放ち、ガギイン! という轟音と共に角取の角を大きく弾き飛ばした。

そのまま勢いを止めずに突撃する永久は、射程圏内に迫ったところで、今度は左を動かす。

「尾白、出番!」

「よし来た……ッ!」

今度は突き出された左腕に、尾白が尻尾だけで掴まり、その分の長さを一気に跳んで伸びて、まだ遠くだと油断していたB組の騎馬に一気に接近し、ハチマキを奪い取る。まるで投げ縄だ。

『しまった?!』と狼狽している騎手らを後目に、永久が腕を引き戻し、尾白も尻尾を縮めるようにして、もといた永久の左腕に帰還、肩から二の腕のあたりに乗るようにして再び『装備』された。

回収した直後、再びドン! と地を蹴ってその場を離れる永久。ダイナミックかつスピーディに動き、B組に捕捉させず、標的を決めれば超攻撃的に動いてハチマキを奪取……これを繰り返し、暴れまわっていた。

『おいおいおいおいやべーなああのチーム! 見た目滅茶苦茶だけど強えーぞ?! 見た目だけじゃなくやってることも滅茶苦茶だけど!』

『相変わらずしれつととんでもねえことやりがる……だが、悔しいことに理には適ってるな』

『ホワツツ？ どういうことだそりゃ？』

『少し前まで峰田のチームがそうしてたように、機動力や防御力といった条件を高水準で用意できるなら、変則的な騎馬を作ることは悪い選択肢じゃない。騎馬つてのは、足になる3人が足並み揃えて動くのがかなり難しい分、機動力がどうしても下がる。それを、騎手になってる連中を抱えて1人で動けるならそれはそれでアリってことだ。それに、決してアレは栄陽院が全部1人でやってるわけじゃないしな』

『つてーと？』

『尾白の機動力や鉄哲の防御力もきっちり使ってるし……気づいてるか？ 栄陽院が腕を思い切り伸ばして攻撃する時、肩にいる心操が思い切り逆方向に体を倒してバランスを取ってる。重心がぶれずに前後左右にダイナミックに動ける要因の一つになってんだ。おまけに同じ方向を向く必要がなくなった分、全員が全方位を常に警戒してるから、協調性なしのワンマンプレイになってるわけでもない。きちんと1つの騎馬としてチームプレイできてるってことだ』

『なるほどな……それにアレ、狙ってるかはわからねーけど、視覚的な効果もあるんじゃないか？ 何度も言うけど、見た目かなり滅茶苦茶だが、その分おっかなくてB組の連中びびっちゃってるし』

『それもあるかもな。表面上知ってはいたが、大の男3人を抱えてあそこまでダイナミックに動く栄陽院のパワーや、それが突っ込んでくるっていう光景は、相対してる連中にはプレッシャー大きいだろうさ……直前までの会話もあるしな（ぼそっ）』

その永久は、また別な騎馬に突っ込むと見せかけて、急に方向転換して明後日の方向に走っていく。行く先に軟化させた地面のトラップを用意していたB組の骨抜が『えっ!?!』と驚いた顔になっていた。

永久が走る先には……

「っ……円場！ 防御！」

「おうっ！ へへ……空気の壁だ、ざまあみろ！ そのまま……お

わあ!?! 物間あぶつ……」

騎馬の生徒達の個性と、自分の『コピー』の個性を駆使して爆豪の猛攻をしのいでいる物間チームがいた。円場の空気凝固の個性で爆豪の突進を防いだはいいが、その瞬間真後ろから襲い掛かってきた永久を見つけて顔が青くなる。

とつさに物間は自分がコピーして『空気凝固』を使って壁を作るが、それを見抜いていた永久はまたしても直前で急カーブして横にすり抜け、同時に尾白の尻尾を伸ばす。

物間はさらに切島の『硬化』で防御しようとするが、跳躍した尾白はそのすぐ横をすり抜けていってしまい、防御する側が空振りをするという珍しい事態に――

――なったのは一瞬で、直後に永久がそれを引き戻したことで、一瞬にして後ろに回り込んだ形になっている尾白が、後ろから物間のハチマキを奪取する。

「物間!?! ハチマキ取られ……」

――ボゴオン!!

「……っしやああ! 瀬呂オ、戻せ!」

「応よっ!」

尾白に続いて、空気の壁を力づくで突破してきた爆豪にもハチマキを1つ奪われ、防戦一方どころか完全に攻め崩されている。爆豪は瀬呂のテープで一瞬で騎馬に戻り、尾白は永久の騎馬(?)に戻った直後に脚力に物を言わせて永久が距離を取った。

そのまま永久は離れていき、別な騎馬を攻め立てる。爆豪は引き続き自分達を狙ってくるようだ……最後に物間の首に残った、爆豪のハチマキを狙って。

「あっちからもこっちからも乱暴なことだよ……そんなんじや人気でないだろうね? もうちよつとヒーローとしての……」

「物間ア!?! 後ろ!」

「!?!」

「口より手エ動かしたらどうなんだ物間アアアアア!!」

離れていったと思っていた永久がまた帰って来ていて、今度はより

遠くから……なんと、左腕に尾白を掴まらせ、さらにその尾白が鉄哲をつかむ形でよりリーチを伸ばして攻撃を仕掛けてきていた。反対側には心操が掴まり、必死で体を傾けて重さのバランスを取っている。

とつさに物間は切島の『硬化』で構えるが、鉄哲は腕をクロスさせてがっちり固めていた。永久の腕力に遠心力をプラスした鋼の塊である鉄哲は、いわば鎖付き鉄球に等しい凶器だ。いくら物間が防御力を上げていても、衝突には耐えきれない……と思われたが、鉄哲は後少しの所で届かず、直撃はしなかった。

身構えていた物間は虚を突かれ、その隙に鉄哲は曲げていた手を伸ばして首元のハチマキを狙う。

だが、間一髪で円場の『空気凝固』が間に合い、鉄哲の手を弾く。その直後に永久は、潔く鉄哲と尾白を引き戻す。どうにか凌いだことに、物間とその騎馬のメンバーは安堵した。してしまった。

その一瞬の隙に……背後に迫っていた爆豪達の騎馬に気づかずにはつとして振り向いた時にはもう遅い。

瀬呂がテープを伸ばして物間達の騎馬の横の地面に張り付け、芦戸が弱めの酸で正面の地面を溶かして濡らしていた。そして、瀬呂がテープを巻き取る勢いで急加速した騎馬が迫り……すれ違う一瞬で物間の首から爆豪がハチマキを奪い取った。

『爆豪、執念の猛追がついに結実ウ！ 容赦のない攻撃で、B組物間からハチマキ全部剥ぎ取りやがったぜおっかねエ——！ 絶対怒らせちゃいけないタイプだなおい！ 年中怒ってるけどな！』

『上手い』と言ったつもりかお前。というか年中って、あいつまだ入学して間もないだろが』

そんな茶化すような実況には耳を貸さず、爆豪は永久に向けて怒鳴る。

「くそがア！ 何のつもりだデカ女ア!! 氣イ引いて隙作って……恩でも売ったつもりか！」

「そんな暇じゃないよ、マジで取る気で鉄哲と尾白飛ばしたつちゅーの！ まあでもいいよ別に……あんたがそれ取ったんならさ……」

ニコツと笑い、

「後であんたから奪い取るから、首洗って待つてな！」

「……………上等だコラア!!」

それぞれ獰猛に笑い、別な獲物を狙って離れていく爆豪チームと栄陽院チーム……………ではなく、心操チーム。わかつてはいたが、栄陽院の存在感が完全に騎手の心操を食っている。

「……………すでに僕らは眼中になしか。その余裕と油断、後で後悔させてやるよ」

「ハイ戻ってきましたよっ！ 待たせたねえつとB組の……………拳藤だっけ？」

「いや別に待つてないけど……………まあいいや」

物間を完膚なきまでに叩きのめした（爆豪が）後、続いて永久達が選んだ獲物は拳藤だった。異形と化した永久達の騎馬（？）を前に、拳藤チームの者達は、先程までよりも若干腰が引けているのは仕方ないだろう。

だが、戦意を失っているわけではないようで、ぱんぱん、と頬を軽くたたいて気合を入れ、真正面から睨み合う。

「よっし、覚悟決めた！ それと栄陽院……………さっきのは本当にうちの物間がアホなこと言った。謝るよ……………ごめん」

「別にいいって……………何も間違ったことは言っていないんだから。ただ……………私らの意地の問題」

「それでもだよ……………でも、この競技の間は戦わなきゃいけない。私達B組だって、ヒーローになりたいとここにいるんだからね！」

「その意気やよし！ いざ尋常に……………」

「勝負！」

騎手の実力で言えば、心操は現時点では拳藤の『大拳』には遠く及ばない。しかし、そもそも騎手が戦うという前提で動いていない永久は、右に左に自ら動き、ダイナミックに尾白と鉄哲を動かして拳藤を翻弄する。

それでも、堅実に攻めと守りを繰り返す拳藤からハチマキを奪うの

は簡単ではなく……その間に、他の騎馬が集結を始めていた。

「っ……栄陽院、他のB組のが集まってきた!」

「時間かけすぎたか! 袋叩き再来ってか……」

「悪いね栄陽院。別に作戦だったわけじゃないけど……これも勝負だから!」

「いーって別に! むしろちよつとワクワクしてる私!」

「ワクワクって……どゆこと? 何、あんたバトルジャンキーの気でもあんの?」

「そうじゃないけど、いつペンリアル無双乱舞つてのやってみたいと思ってたんだよね!」

「あんたさつきからちよいちよい発想が物騒だよね!」

なお、その場合の武器は自分達になるのだろうかと尾白と鉄哲が密かに戦慄していたが……その瞬間、

「後ろがお留守だよ、普通科の兄ちゃん?」

「……っ!?!」

突然、心操の後ろから声が聞こえ、ぱつと勢いよく振り向いた。

しかし、そこには誰もおらず、あつたのは……

「口だけ……!?!」

「あ……取陰かあ!?!」

「え、何それ怖つ!?! あ、さつきのバラバラ人間の『個性』!?! そんなこともできんの!?!」

手のみならず、体のパーツを全て自在に切り離して動かせる『トカゲの尻尾切り』を持つ取陰切奈の『個性』によって、口だけが切り離されて心操の注意を引いていた。

そして、そのわずかに生まれた隙を見逃さず、見覚えのある白い液体がどばつと飛来する。

が、一瞬早くそれに気づいた永久は、あえて足を振り上げてそれを、まるでサッカーボールを蹴るように受け止める。必然、足にべつとりとボンドが付着するが……

「2度、同じ技を……食らうかつ!」

——びゅん、べちよおつ!!

「もがあ——!?!」

「っ、角取いー!?!」

ボンドが乾く前に渾身の回し蹴りを放ち、その勢いで付着したボンドの一部を飛ばして、斜め前方にいた……今まさに角を飛ばそうとしていた角取ポニーの顔面に激突させる。またたく間に硬化したボンドは、彼女の頭の角を飛ばせないように固定してしまった。

そして、狙ったわけではないだろうが……形状が粘液で色が白いため、見た目的にも色々と危ない状態になっていた。

とつさにマイクは実況でそれに触れるのをやめ、カメラも一瞬だけ映してすぐにアングルを変えた。

「オーマイガーー！ 顔が、髪が、角がー！」

「うわああああ、大惨事だー！」

「A組……血も涙もねえ……」

「大げさな……呼吸できなくなったわけでもないんだから、大したことないでしょうにッ！」

残るボンドが硬化した足を地面に叩きつけて砕く永久。

彼女の辞書に、恐らく『髪は女の命』という言葉はないのだろう。ゆえに、洗えば落ちるじゃん、という発想しか出てこない。ボンドを落とすには特殊な洗剤が必要かもしれないが、落ちるなら問題ないというのが彼女の認識だ。

だがその時、また別な刺客が迫ってきていた。

角取の攻撃阻止とボンドの処理に使った一瞬の時間の隙に、地を這って近づいてきていた何本もの茨が襲い掛かり、彼女を縛り上げた。

「今度は何っ……蔦?! ってか、茨?! 痛い！」

その元をたどると、髪の毛が茨になってる女子が——どこかで見たような、と永久は既視感に襲われた——それを伸ばして永久を拘束していた。

「これも主が与えたもうた試練……争いごとの末に勝利をつかむのは空しいですが、英雄に至らんがための道なれば……! お覚悟ください、A組の方」

「何かまた言動が独特な奴来た!? さっきの角女子といいB組こんなばっつかか!」

「うるせえな、A組にも似たようなのいんだろが!? カラスみたいな黒いのとか、あの爆発とか!」

「常闇はアレちよつと10年後とかに後悔するかもしれない部分だから触れないであげて!? あと爆豪はナチュラルボーンあんな感じだから手遅れ!」

遠くから『何つったコラア!?!』という怒号が聞こえた気がした中、しゆるしゆると茨の拘束は進む。永久は移動しながら力任せに引きちぎろうとするが、茨は彼女の動きに合わせて、あえて引つ張らずに伸びて追ってきた。

「あなたの力を相手に引つ張り合いをしても勝てそうにはありません……ならば、巻き付かせて動きそのものを封じることが優先させていただきます!」

「ごんのつ、頭使ってくれる……なら、鉄哲、剣になれ!」

鉄哲が腕を伸ばして体を硬質化させ、それを振りかぶる永久。

しかしそれを剣として振り下ろして茨を断ち切らんとする直前……ふと何か思いついた表情になった永久は、

(あ、そうだこのシチュエーション、折角だから茨斬る前に……) とつさに頭の中に思いついた、あるセリフを言ってみることにした。

茨で拘束され、否が応でもボディラインが現れつつある永久に、男入り乱れたB組の騎馬が隙を突こうと殺到するその中心で……永久はわざと大仰に体をひねって体の線を余計に出し、苦しそうに表情まで作った上で……

「くっ、殺せ!」

「「ブフオツ!?!」」

あまりにも有名なセリフを、あまりにもピッタリなシチュエーション

ンで発した永久の爆弾発言に、驚いてそこにいた男性陣ほぼ全員が噴き出した。

『あ——つとおここで状況を利用した栄陽院の精神攻撃が炸裂ウー！何て場面で何てもんぶち込んでくんだよ相変わらずやべーな！』

B組男性陣、突然の往年の名台詞を、臨場感バツチリで生で聞いたまったア!! 前屈みになつてる奴が続出してんのは映さないでやってくれマスコミ諸君!』

マイクの実況の通り、B組の騎馬は不自然な形に歪んでいる者が多く発生していた。

主に前傾姿勢の者が多くいたり、意味ありげにポケットに深く手を入れていたりする者が続出。

その隙に永久は鉄哲ソードを振り下ろして茨を断ち切り、移動しながらも追撃を警戒するが、

「い、いけませんそのようなことを言つては！ いかな厳しい状況でも命を諦めずに戦い続けることこそ……ああしかしそもそもそのような責め苦を与えてしまったのは私……おお、お許してください、何と私は罪深いことを……」

『そういう文化』に疎い塩崎は、そのままの意味で受け取っていた。

それを好機と受け取った永久達は、動きの悪くなったB組の騎馬（男性陣が入っているもの中心）に攻撃を仕掛けてハチマキをはぎ取っていく。B組は抵抗するが、全国ネットで『反応してしまった』様を流されないために必死でズボンの前をかばっている結果、ろくに抵抗できていない。

「しかし……純粹なんだなあの子。このネタを知らないとは」

「そういうあんたはきつちり反応した口か、尾白さんよ」

「……否定はしないけど、お前もだろ心操」

「まあな。でも……」

「おい、殺せなんてそんなこと言うもんじゃねーぞ栄陽院！ これは単なる模擬戦みてーなイベントだし、何より失敗しようが辛いことがあるうが、生きてりや何とかなるしやりなおせるだろ！」

「「ここにもいたか」」

漢・鉄哲。彼もまたそういう文化を知らなかったようだ。そしてそこに、さらなる混沌をもたらす者が迫りくる。

「上等だコラア、そんなに死にたきや今すぐ殺ツたらア——!!」

「と思つてたらガチで殺しに来る奴来た——!?!」

飛来する爆豪。ついでとばかりにその直線上にいたB組の騎馬からハチマキを強奪した上で、満を持して永久達のチームに襲い掛かってきた。

それを迎え撃とうと構えるが、反対側からは『あーもう!』と声が聞こえた!

「無理もないとはいえ男連中が戦えなくなるとは……栄陽院、恐ろしいことを。ええいなら私達がやるしかない! 行くよ皆!」

飛んでくる爆豪を鉄哲の盾で迎撃しつつ、今度は背後から迫りくる拳藤のチームを迎撃しようとした永久達だが……そこにさらに3組目の刺客が迫っていた。

「隙だらけだよ、A組の女クリーチャーさん」

そんな声が聞こえた次の瞬間、B組、骨抜の『個性』……を、コピーした物間の仕業により、永久達の足元が柔らかくなって沈みこんでしまう。そこを狙って物間チーム、そして拳藤チームも迫る。爆豪は一旦瀬呂に回収されたところだった。

踏ん張りがきかなければ、永久の脚力も生かせない。尾白の尻尾で脱出するにも、間に合わない。

状況を見て永久は……これしかない、素早く決断を下す。

小声で、このチームの最終兵器の発動を決定した。

「心操……出番だ」

「了解……おい、お前ら卑怯だぞ! こんな手を使って……さっきの下卑た挑発といい、それでもヒーロー志望かよ!?!」

「あはははっ、何を甘っちょろいことを——」

「っ、それは悪かったけど、コレは勝負——」

「——え？」

拳藤と、物間。2人が気が付いた時には……全てのハチマキは失われ、永久達のチームの姿は、眼前から忽然と消え失せていた。
そして、

『タイムア——ツプ!!』

実況のプレゼント・マイクが、無慈悲な宣告を響かせた。

第27話 TS少女と昼休み

『……無差別放電、130万ボルト!!』

『ぐっ……まだだ! 皆、動けるね!』

『大丈夫やけど……デク君バックパック! 黒い煙出とるよ!』

『なぬっ!? ベイビー改良の余地ありますか!』

『だめだ、浅かった……くそ、気取られて距離を取られたか! 上鳴は

……こつちもだめか』

『ウエ……ウエイ』

『トルクオーバー……レシプロバー、ス、トツ!』

『デラウエアスマツシユ……シヨツトガン!!』

『飯田さん!? つ、また緑谷さんですか……』

『すまん……流石に届かない、奪れなかった』

『敵の殺気を見抜く慧眼……見事だ緑谷』

『すまん、エンジンが今ので……暫くろくに動けん……!』

「あ……緑谷やつぱかっけ……」

只今、昼休憩。

第2種目『騎馬戦』が終わり、午後からあるレクリエーションと第3種目を前に、昼食を兼ねたしばしの休息の時間だ……ってマイク先生が言ってた。

私は今、誰もいない1-Aの教室で、1人で昼食を取っている。

何で皆と一緒に食べないのかって? 理由は2つある。

1つは、持ってきている弁当の量だ。

普段の弁当がすでにイベントサイズな私だが、今日はその3倍近い量を持ってきている。エネルギーが大量に必要なであろうことを見越してだ。

それを食べようとする、広げるだけでもスペースを食うので、盛大に他の人の邪魔になる。ブルーシート1つ分くらいの広さを私の食事スペースとして占有してしまうだろう……加えて、目立ってし

まっつて見られまくるのが目に見えているので、食べにくい。落ち着いてさっさと食べたい。

なお、他のみんなと一緒に食堂で食べるという選択肢はない。

食堂で私が満足いく量の食事を食べようとする、ランチラツシユのタスクが9割方そっちにとられることになるだろうから、大迷惑だ。

昼時の立ち食いそば屋（修羅場）で、仕事の合間にささつと食事を済ませようとするサラリーマン達に交じって、ユー○ユーバーが『全部注文してみた』とかやってたらどうする？ キレルだろ？

そしてもう1つの理由だが……この動画を見るためである。

既にいくつかの動画サイトには、さっきの騎馬戦の様子が映像でアップされている。そこには当然……轟チームを始めとした、1000万Ptを狙って襲って来た敵達を相手に激闘を繰り広げる緑谷達の雄姿も収められていた。

私達のチームはさっきの試合、開始後数分は激戦区から離れて様子を見て、拳藤チームが襲ってきて以降の後半になってから暴れていた。そしてその間、緑谷チームの方には一切近づいていない。

ぶっちゃけ、騎馬戦の会場は、激戦区が2つに分かれて展開されていた、と言ってもいいような状態になっていたのだ。緑谷・轟両チームが激突したエリアと、心操・爆豪両チームが激突……してはいないけど、B組の大群を相手に大暴れしてたエリアの2つに。

最初から最後までそんな感じだったので、私達は緑谷たちのエリアの戦いを、全くと言っていいほど見れていなかった。

特に後半は、轟が緑谷達を逃がさないように、周囲を氷の壁で覆っちゃってたからな。

ゆえに、その壁と距離、そしてB組との死闘に阻まれて見ることができなかつた向こう側の戦いを、個性の使い方なんかを含めて観察し、この後の最終種目の戦略を練る助けにするためと……あとぶっちゃけ緑谷がカッコよく戦ってるところをゆっくり見たかったので動画を見ている。

てかホントに緑谷やばいんだけど。かつこよすぎ。強くなりすぎ。

特訓の成果ばっちり出てるな……常闇の『黒影』に頼り過ぎず、常に自分でも周囲を……特に正面の轟の騎馬の動きそのものを警戒して、厄介な攻撃を即座に察知して回避、あるいは初動を潰してことごとく防衛に成功している。

サポート科の女の子のアイテムに加えて、麗日の個性十拳の反動を利用した空中移動『ニューハンプシャー』で機動力を高く保ち、立体的に動いて的を絞らせない。

轟の氷や八百万の『創造』による攻撃は、回避が難しい場合は常闇の『黒影』で迎撃、それでも難しければ、デコピンで空気の弾丸を飛ばす『デラウエアスマッシュ』で迎撃して防御していた。

特に、終盤に飯田が、奥の手と思しき超加速技を使ってきた際のシーンは驚いた。それを直前で察知……あるいははずつと警戒してたのかもしれないが、発動直前を狙って『デラウエア』を散弾銃のように飯田の顔面を集中的に狙って放っていた。

威力は限りなく弱く、狙いもつけづらい代わりに、数が多い空気弾が顔にぶつかったために目をつぶってしまった飯田は、加速に任せて真っ直ぐ進むしかなくなり……発射と同時に横に思い切り飛んだ緑谷に、悠々とその奇襲を回避されてしまった。飯田の足はエンストを起こした様子で、クールタイムが足りなかったのか、同じ加速技は結局競技中は二度と使ってこなかった。

最後の最後に轟がかなり大きな氷塊を出して……恐らくは、『悪質な崩し狙いの攻撃』にならない程度を見極めて攻撃していたが、騎馬を跳躍させると同時に緑谷が放った『テキサス』……拳を振りぬいた衝撃波で止められていた。その反動と、最後だからと全力でのエアソール（麗日が履いてる噴射靴）を噴かした勢いで、緑谷のチームは轟が作っていた壁の向こうに消えた。

氷塊を砕き、押し返して余りある威力の衝撃波が轟達の騎馬に届く直前、轟が左腕から熱……というか、炎を出してたように見えたのが少し気になった。

使えるの自体は知ってたが……戦闘中に使ったのを見たのは初めてかもしれない。

恐らく、自分の方に跳ね返ってきた氷のつぶてを防御するためにつきにつかっただと思うが……その直後から、轟はしばらく呆然として動かなくなり……再起動より前に、制限時間が来た。

結局そのままタイムアップとなり、完全防衛に成功した緑谷チームは1位で第2種目を通過。まあ、1000万持ってたんだから当たり前だが。

2位が爆豪チーム、3位が轟チーム、そして4位が私達、心操チームだ。

全体通して暴れまくってたこの4組が、5位以下を大きく突き放して勝ち進んだ。

……最終種目の出場メンバー、ほぼほぼ1―Aで埋まったな……他はB組の鉄哲、普通科の心操、サポート科の発目って子が入ってるだけだ。

誇らしくはあるが……テレビ的にこれっていいものか……いや、尋常な勝負の結果としてこうなったんだ、何も言うまい。

ああ、尋常な勝負と言えば……騎馬戦の後、物間の奴がやってきて……意外にもきちんと謝ってくれた。挑発と本音半々だったけど、命のかかった戦いをバカにして悪かったって、頭下げて。

本音が半分混じってるあたり、性格はやはりアレなようだが、きちんと根つこのところにスジは通ってるっぽいな。後々まで禍根を残すのはやめにしよう。

まあ、その後あっさり切り替えてまた煽ってきて、拳藤に当身食らって気絶させられてたけど。総合的にはやっぱしよくわからん奴だったな……。

物間やB組の連中のことはまあこの辺にして……あー、やっぱり緑谷かっさいい。

かっさいい緑谷を見ながら食べる昼飯が美味しい……なんて考えたその時、

「メシの時間にメスの顔してるわねー、永久」

「ほぎやあぁ?」

突如、耳元でそんなことを囁くように言われて飛び上がってしまった。な、何!? 誰!?

とつぎの判断で、持ってた弁当（巨大サンドイッチ）を落とすことは阻止したけど、誰もいなかったはずの教室で突如聞こえた声に、私の心臓は破裂寸前だ。

一体誰だと思って振り向くと、そこには……最近見てないけど、よく見知っている顔が。

やり手のキャリアウーマンのようにびしつと着こなしたビジネススーツ。小脇に挟んでいるバインダーと、胸ポケットのボールペンがOL感をさらに増幅させている。

体つきは、俗っぽく言って『ボンキュッボン』である。スーツの上からでもわかるくらいに自己主張が激しく、女性として魅力的な体。身長は女性としては高めの、170代前半ってとこ。

『キレイ』と『かわいい』が程よく同居している顔には、黒ぶちのメガネが、やや地味だがよく似合っている。肌のハリはみずみずしく、総合してどこからどう見ても20代くらいにしか見えない。なんなら女子大生でも行けるであろうくらいには若々しい。

が、私はこの人の実年齢が、それプラス15歳くらいであることを知っている。

何せ……私を生んで育てた人なのだから。

「か……母さん!? 何でここに!?!」

「何でって……娘の運動会を親が見に来るのは別に何も変じゃないでしょ?」

「いや、運動会じゃないし体育祭だし……っていうか、他の普通の高校のそれならともかく、雄英の体育祭に限ってはそれは違うでしょ」

前にも話になったが、『雄英体育祭』は日本において、かつてのオリピックに代わる一大イベントだ。当然、それを観戦する座席チケットはもれなくプラチナチケット。

いかに生徒の保護者や知人であっても、コネで手に入れるなんてことはできないし、チケットがなければ当然観戦もできない。TVやP

Cの前で中継を見るのみだ。

だというのに、そんなルールをこの目の前にいる女性は……私の母・栄陽院叶恵えいよういんかなえはあつさりぶつちぎってここにいる。なぜだ。

というかここは一般に開放されていない教室で、それこそチケット持ってても部外者は入れないはずなのに……

「部外者じゃないもの。ほら」

そう言つて母さんは、私より若干小ぶりだが形のいい胸をえっへん、と張るようにした。

その立派なモノの上に乗つかるように、部外者が学校内に入る時に必要な（これがないと通称『雄英バリアー』に弾かれる）ゲスト用の通行パスが首からかけられている……

……ん？ 違うコレ、ゲスト用じゃないぞ……体育祭協力者のプロヒーロー用!? 警備に雇った人達とかに配られる奴……何で!?

「何つてそりやお仕事のためよ。永久、あなた私が何て呼ばれてたか忘れたの?」

「……ああ、そつか。母さんまだプロヒーローの資格持つてたんだっけ。でも、ほぼほぼ引退状態で、それ系の仕事とかはほとんどしてなかったはずじゃないの?」

「だったんだけどね、今回ちよつと声かかっちゃったのよ。今年の雄英、開幕早々に新入生が敵に襲サイランわれるなんて事件が起きたから、かなり気合入つてるみたいね。警備の数を例年の5倍に増やした上、こんなロートルまで呼び出して……本気であなた達のこと鍛えるつもりなのが目に見えてるわ」

「戦闘が得意じゃない母さん呼び出したのはそのためか……ひよつとしてヒーロースーツじゃなくてそんなカツコしてるのも、裏方として動かため?」

「そうよ。フアンの子やマスコミに注目されるのは嫌いじゃないけど、お仕事に差し障っちゃいけないしね。午前の部が終わってひと段落したから、ちよつとあなたに声かけに来てみたの。そしたらふふふ……かわいいことしてるじゃない? お母さんびつくりしちゃったわよ?」

「う……」

どうやらさつき、ニヤニヤしながら緑谷の動画を見てたのをばつちり見られてたようだ。

この母にこの手の隠し事が不可能に近いのは身に染みて知ってる……コイバナに対しての葉隠や芦戸の嗅覚なんて目じやないレベルの洞察力だから。しらばつくれても無駄だろう。

まあ別にいいか……里帰りした時には気づかれるくらいの覚悟は元々あったし。

「緑谷出久……第一、第二種目共に大活躍してた子ね。その子が、あなたの見込んだ『ご主人様』かしら？」

「……そうだよ。一目見てビビッと来て、その後何度か戦ってる姿を見て……まあ、決めた感じ。あるんだなあ、ああいう、その……本能で『この人だ！』って思うのとか。漫画の中だけだと思ってた」

「やだわこの子ったら、中々運命的で素敵な出会い方してる！ まーかくいう私も、観察してる間にビビッと来た1人ではあるんだけどねえ、この子。我が娘ながらいいのに目つけたわ」

「……横から取らないですよ？」

「そこまで飢えちゃいないっての。もー私も若くはありませんからねー」

「ならいいんだけどさ……ついでに、母さんから見て緑谷の評価はどんな感じ？」

「詳細なところは『お仕事』のうちだから話せません。けど、概ね高評価……特に、将来性に大いに期待できる、とは言っておくわ。聞いた話だと、入学当初全然だったのが急成長したらしいじゃない……あなた^{ひと}の仕業でしょ？ 上手く育てたわね、永久……流石私の娘」

「ノウハウは思いつきり叩き込まれてるからね。いずれ出会う大切な主^{ひと}のためにとって……その人を支え、育てる術を、徹底的に。それが……」

「そ、『幾瀬』の使命にして、宿命……ま、今は私達『栄陽院』だけだね。さて、そろそろ私行くから。午後の部も頑張つてねー、娘だからって『評価』の手は緩めないから、そのつもりで！」

「わかってるって……『育てる』時の母さんは妥協絶対しないからね。そっちもお仕事しつかりね……トレーナーヒーロー『アナライジユ』」後ろ手に手を振って、私服警官みたいに会場に潜んで『仕事』を行っている女ヒーローは、仕事の続きをするために教室から出ていって……それとほぼ入れ違いくらいのタイミングで、八百万が入ってきた。

? どうしたんだろ……え? 連絡事項? 私を探してた?
ああごめん、携帯で動画見てたから通信切ってた……何?
……レクリエーション? ……チア? は? なぜ!?

☆☆☆

そして数十分後。

『どーしたA組!』

チア衣装に着替えて会場に集合した私達A組女子を前にした、マイク先生の一言である。

「峰田さん、上鳴さん、騙しましたわね!」

……どうやらあの2人が主犯のようだ。

八百万に『女子は午後のレクリエーションをチアコスで応援しなきゃダメ』という大ウソを吹き込んで、見事にA組女子の衣装をチアにすることに成功したと……何でこういう時だけあいつらは抜群の頭の回転と弁舌能力を發揮するんだか。

つか峰田、障害物競走の時最後の方、割と性欲から脱却してまともな感じになってたと思うんだが……元に戻っちゃったのか?

「騎馬戦のチーム決める時にはもう戻ってたと思うわ。視線に欲望が乗ってたから」

「短い間だったな、そりゃ」

劇場版のジャ○アンと同じで、一時的なアレだったようだ。さらば、キレイな峰田。

でもまあ、最初こそ全員表情死んでたものの……皆割と、呆れ気味ながらも何だかんだで『やってやるか』って乗り気のようだ。

特に葉隠。こういうの元々好きだもんな。

……私もいつちよやってやるかな。腹ごなしの運動にもなるし。前世のことは忘れて踊るか。

……と、その前に、最終種目についての発表があった。

最終種目は、トーナメント戦。騎馬戦を勝ち抜いた上位4チーム16人で行われる、一対一のガチバトルだそうだ。

抽選の結果、組み合わせは以下の通りに決まった。

- 第1試合 緑谷VS心操
- 第2試合 飯田VS尾白
- 第3試合 発目VS芦戸
- 第4試合 瀬呂VS轟
- 第5試合 常闇VS八百万
- 第6試合 上鳴VS栄陽院
- 第7試合 切島VS鉄哲
- 第8試合 麗日VS爆豪

……なるほど、初戦は上鳴か。

他にも、色々と波乱がありそうな組み合わせだな……この闘い、どう転ぶやら。

第28話 TS少女とトーナメント① 緑谷VS心操ほか

さて、レクリエーションも何事もなく終わった。

レクっていうか、借り物競争とか大玉転がしとか、普通の運動会みたいな奴ばかりだったな。

いや、体育祭って普通こういうのがあるものであって、雄英のそれがぶっ飛んでるだけだったのはわかってるんだが、それでも雄英レベルになれてしまってる私らには『平和な競技』あるいは『ぬるい競技』という印象が強くて……。

なお、借り物競争するにあたって、『八百万の『個性』で出したものは不可』という縛りが最初に発表されたのはナイス判断だったと思う。何でも彼女に頼めば出てくるからな……。

まあ、このレクリエーションは自由参加だし、私達女子勢はチアつてたもんで、見てる側だったが。

最終的に、耳郎と八百万以外は結構ノリノリで応援してたし……最後の方では八百万もおっかなびっくりボンボン振ってたな。

それにしても、なんだか雄英はレクリエーションまで変な感じになってる部分が多かったな。

借り物競争のお題とか最たるもので、『文庫本』とか『携帯の充電器』とか、普通のものもあつたけど……『冬用タイヤ』とか『青色発光ダイオード』とか『ギャルのパンティ』とか……持ってこさせる気ないだろうってものもいっぱいあつたし。最後のは特に持ってきたらまずいだろ、逆に。

峰田なんか『背脂』なんていう、どう考えてもラーメンのスープの上とかにしかなさそうなもんを引いて啞然としてたしな……誰だよお題書いたの。

私が保温水筒に入れてラーメン持ってきてた残りのスープを水筒ごと貸してやって、それ持ってたなら仰天されつつクリア認定貰ってたが。やっぱクリアできるとは思ってなかったんだな。

そんなこんなでレクは終わり、いよいよ最終種目、ガチバトルトーナメントが始まった。

セメントス先生が即席で作った、武舞台っぽいステージで戦うんだが……ルールは簡単。

何でもありの対一で戦い、相手を気絶、場外、行動不能のいずれかにすることで勝利。後は、審判のドクターストップとかが入る可能性もあるにはあるが。

もちろん『個性』も使えるが、アイテム等の持ち込みは不可。ただしサポート科や、『個性』使用に支障をきたすなどの理由で事前に申請していた人などは、一部可。

そんな感じのトーナメント。満員の観客が見守る中、いよいよ始まった。

まず行われたのは第1試合、緑谷VS心操。

緑谷がちよつと危ない所まで行った……ステージの上で、何話したのかは分かんないけど、心操の言葉に反応しちやつて、そのまま洗脳されて場外になるところだった。

まあ、不安ではあったんだよ……心操の個性、初見殺しだし……コレは、戦闘能力で言えば上をいつているであろう緑谷もまずいんじゃないか、つて。不用心に返事をしてしまえば、そのまま無抵抗でやられる可能性もあった。騎馬戦の時のB組みみたいに。

しかし、場外に出してしまう直前になって、何か指をバキツと折つて（その際に衝撃波出た）その痛みで正気に返ったようだった。アレつて、精神力強いと、レジストというか、洗脳に抵抗したりとかできるとかな……？

そして、その1回で緑谷は『受け答えするとヤバイ』つてことに気づいて、そのまま口をつぐんで心操を投げ飛ばして勝利。

負けた心操は悔しかったけど、それでもどこかやり切った顔をしてた通り、ヒーローになる夢を諦めずに頑張るんだろう。彼がどんなヒーローになるのかつて言うのも、少し楽しみではあるな。

……それはそれとして、緑谷の方はちよつとメンタル面も鍛えた方がいい気がしてきた。

心操が『洗脳』を解かれた直後、もっかい緑谷を『洗脳』しようとして色々挑発してただけ（今度は結構大声だったので聞こえた）、緑谷、あからさまな悪口とかにも結構動揺してたし……

「変な髪型しやがってこのオタクヤロー！ クラスの女子がキモイって噂してたぞー！」

「……………ツ!?」 ↑泣きそうな顔でこつちを振り返る緑谷

「言ってる言っていない！」

「戦いに集中して！」

つて麗日と耳郎が必死で慰めて集中するよう慌てて言っていたり、

「第一種目の時からブツブツブツブツ独り言ばっか言いやがって！」

そんなんだから『アイツ絶対リアルでは無口だけどネットの掲示板とかだと饒舌になるタイプだ』って気持ち悪がらんだよー！」

「……………つ!?」 ↑嗚咽をこらえて悲し気な目を向けてくる緑谷

「だから大丈夫だって言っていないそんなことー！」

「けろ、緑谷ちゃんいちいち耳を貸しちゃダメよ」

芦戸が否定して、蛙吹が落ち着くように論じて言っていたり、

「どうせお前アレだろ!? 好きなアイドルバカにされるとマジ切れしたり、雑誌とかマンガとか、読書用・布教用・保存用で3冊買って用意してたりするんだろ!?」

「……………ぐう……………」 ↑膝をつく緑谷

「あれ、崩れ落ちた!? 何で!?」

「……………ひよつとして、当たってた、とか……………!?」

「え、マジで!?」

「……………アイドルはともかく、ヒーローものの漫画や雑誌はそうだったな。まだやってんのかクソが」

「爆豪!? え、何であんた知って……………あ、そうか幼馴染……………やばい、裏

取れちやつた」

「けろ？　麗日ちゃんどうしたの？　顔が青いわ」

（い、言えへん……受験で初めて会った時、ちよっと既にそんな感じの印象だったなんて……）

そんな感じで、緑谷の精神的な課題が浮き彫りになった一戦だった。

あと、余計な個人情報も無駄に浮き彫りになった。

さて、次は第2試合だ。

☆☆☆

Side・緑谷出久

心操君との試合……どうにか勝つことができた。

迂闊に話しかけて——と言っても、あの『個性』は条件を知らない状態で警戒しろって方が無茶なものだったけど——『洗脳』にかかってしまった時は、頭に霧がかかった状態で、体が言うことを聞いてくれないくて、もうだめかと思っただけど……場外に出る直前、不思議なことが起こった。

僕の目の前に、何なのかはわからないけど、いくつもの不思議な人影が現れて……そのおかげで、一瞬だけ『洗脳』を振り切って動くことができた。

その一瞬に指を弾いて、それで骨折した痛みでどうにか覚醒できたのだ。

危なかった……本当に、もう少しで負けるところだった。

言っただけけど、心操君が相手なら、僕は身体能力……というか、戦闘能力で言えばまず負ける気はしない。

けど、こんな風に『個性』でいくらでも逆転されてしまう可能性があるところが、この超人社会の怖いところであり……プロヒーローが当たり前のように戦っていくべき世界なんだ。

それを知ることができて、よかったと思う。慢心というものの怖さ

を、身をもつて知ることができた。

ちなみに、例の不思議な現象について、リカバリーガールのいる医務室で、オールマイトも交えて話したんだけど……どうやらあのビジョンは、僕の予想通り、『ワン・フォー・オール』を受け継ぐ者にだけ時折見える……『個性』に刻み込まれた幻影、ないし面影のようなものらしい。

やっぱり……それで、その影の中に、オールマイトみたいなイメージもあつたんだな。

……歴代の継承者が見守ってくれているみたいで、ちよつと心強いかも。まあちよつと怖くもあるけど……とりあえず、その先輩方に恥じない戦いをできるように、ここからも頑張ろう。

指も治してもらつたし……次の試合、もう始まつてるかな？ 急いでいこう。

☆☆☆

緑谷が去つた後の医務室で、リカバリーガールとオールマイトは、何とも言えない空気の中で話していた。

「あんたもいたつてね……幻影の中に」

「……いいことです。緑谷少年は、順調に歩みを進めている……彼が大成する時は、私が予想しているより、もっとずっと早いのもかもしれません」

「だから自分はもう、背中を見せる必要はないってかい？ そんな甘つちよろい気持ちは、この部屋に置いて行きな。人を導く職に就いたもんが、半端な気持ちで教壇に立つんじゃないよ」

呆れと怒り、そして……少しの悲しみと慈しみがこもった声で、ぴしやりと叱るリカバリーガール。オールマイトはそれを黙って聞いていたが、リカバリーガールがさらに口を開く。

「ところでちよいと気になつてるんだがね？ あんたがあの子に譲つた『個性』だが……前にあんたが言つていた話じゃ、あんたが『8代目』で、あの子は『9代目』じゃなかったかい？」

「ええ……そのはずです。私のお師匠が『7代目』……『初代』を含めて数えて、その数字に間違いはなかったはず。実際、私が見た幻影は……お師匠らしきものを含めて、7人だった」

そう答えるオールマイトは、リカバリーガールが言おうとしていることに……先程の緑谷の話の中で、ふと彼も引つかかった部分について思い当たっていた。

ちよつとしたお茶目なジョークで、その幻影について心当たりがないかのように『怖あ……何ソレ?』と、緑谷を脅かして言ったのだが……直後に、しれつと緑谷が付け足した情報だったので、リアクションも指摘もできずに流してしまったことがあったのだ。

その予想が正しかったことは、次にリカバリーガールが言った内容で示された。

「そうかい、じゃあ何で……あの坊やには、『10人以上の』幻影が見えたんだろうね?」

「……私にも、何とも……」

明らかに自分が経験したことのない事態。説明できようはずもなかった。

ともすれば、『ワン・フォー・オール』に何か異変が起こっているのかもしれないと、少しオールマイトは不安に思うのだった。

☆☆☆

第2回戦だが、飯田と尾白の戦いは結構な接戦だった。

飯田は圧倒的なスピードで尾白を翻弄したものの、尾白も格闘技経験者として、様々な相手を想定したトレーニングを積んでいた。追いつけはしなくとも、隙を見せない防御と反撃を繰り返し、一進一退の攻防。

言ってみれば、『動』と『静』の戦い……だったのかもしれない。どちらも真面目で堅実なタイプだからこそ、って感じのそれだったけど……決着は突然訪れた。

飯田が脚力、というか『エンジン』の個性が限界に達したのか、ほ

んの一瞬、飯田の動きがガクツと悪くなって……それを見逃さなかった尾白が、即座に攻撃に転じた。

しかし、実はその『ほんの一瞬』は飯田のフェイントだった。攻撃に出た尾白がその勢いを利用して場外に蹴りだされてしまい、舞台に踏ん張ろうとしたけど、飯田の追撃に耐えきれずに体の一部が外に出て、決着となった。

互いに一瞬たりとも油断しなかったからこそ起こった決着の仕方。相澤先生も『派手さはないが自分に出せる力を見極め、振り絞った試合は見事だった』って褒めてた。

なお、途中で緑谷が治療を終えて帰ってきた。指一本だから早かったな。

続く第3試合。

今度は芦戸と、第2種目で緑谷チームに入っていたサポート科の少女・発目明との試合だったんだけど……これは、ちよつと……

「ねえ……コレ、試合なん？ ていうか、勝負なん？」

「さー……ウチとしては、なんか通販番組見てる見てる気分になってるわ」

「それな」

「けろ、マイク先生と相澤先生もコメントに困ってるわ」

『皆様ご覧いただけていますでしょうか!? 私がご用意したこのベイビー、超多用途防護シートの性能を！ 軽くて薄型ながら耐衝撃、防弾、防刃、防電などの性質を持ち、さらには御覧の通り酸や毒物等に對しても高い抵抗力を有します！ また防水の上保温性・保湿性も高いため、災害時などに暖を取る寝具としても使用可能な優れものですよ！』

恐らくだが……彼女はこのトーナメントの場を、自分の研究成果を、観戦している大企業の関係者とかに見せるプレゼンの場として利用するつもりだったんだろう。最初から。

例えば、第1、第2種目でもそんな感じでやってたから……ブレないというか、ある意味で理想的な職人気質なのかもしれない。

ただ、おそらく彼女にとっても予想外だったろう事実が1つ。

『えーすごいすごい！ 私はこの酸、コンクリートくらいなら簡単に溶かしちゃうのに、ちよつとだけ表面がツルツルになってるだけだよ!? こんなに薄くて軽いのにすごいねえ……しかも、今はこんなに柔らかいのに、さつき殴った時はすごく硬く感じて、その向こうにいた発目ちゃんに届いた手ごたえが全然なかったよ!? ふわふわの布なのにホントに衝撃にも強いんだ!? どうして!?!』

『ふふん、当然ですとも。この防護シートは、中身こそ企業秘密ですが、『クロコダイラタン装甲』という、特殊部隊の戦闘用スーツにも用いられている技術を応用しているのです。普段はこの通り天日干しした布団のような柔らかさですが、衝撃が加わった時だけ瞬時に硬化、計算上は短機関銃の乱射でさえ内側に衝撃をほとんど通さない防御力を有します！ それでいて寝具として用いただければ、低反発で朝までぐっすりな寝心地を約束します!』

なんか、芦戸がノッチャってるのだ。

ノリノリで受け答えして、アピールを手伝ってるのだ。しかも、多分天然で。

そのため、単なるプレゼンじゃなくてテレビショッピングみたいになってる。深夜にチャンネル回すとたまに映ってる、外国人同士が『やあジェニファー、今日はすごいものを紹介しちゃうぜ?』『まあ、何かしらトム、楽しみだわ!』ってな感じのアレになってるのである。

『やーんちよつとコレすごい、割とマジで欲しい! でもこんなにすごい商品だと、やっぱりお高いんでしょう?』

『ご安心ください! 企業努力により極限までコストカットし、競合他社に徹底対抗した結果、本商品のお値段はざっと見積りでこちらとなっております!』

『うっそお!? 特殊部隊用の装備つてめっちゃめっちゃ高いって聞くのに、え、これだったらちよつとがんばれば普通の家庭のお父さんとかでも買えちゃうんじゃない!? 防災用品にいいかも』

『もちろんサイズやオプション等によって変動しますので目安ですが、決して嘘などは言っておりません! さらに! 今ならもう1

つ、同様の素材でできており、外付けハードディスク等の精密機械の保護・保管に使用できる防御力を持ちながら、低反発枕としても使用可能なケースを……』

「……これ、ひよつとして時間いっぱい続くのでしょうか……？」
「多分な」

とまあ、八百万の予想通り、発目プレゼンツ雄英体育祭生放送テレビショッピング（実際に売るわけじゃないだろうが）は時間いっぱい続いていくつもの『ベイビー』を紹介。

芦戸は一応『戦闘』を行いはしたものの、そのことごとくをプレゼンに利用され、そしてその都度、打ち合わせでもしたのかというくらいの見事な合いの手やコメントで対応。

制限時間間際になって、『もう思い残すことはありません……！』と、やり切った顔で発目が自ら場外に出て敗退、芦戸が『楽しかったよ、ありがとー！』と2回戦進出。いいのかコレ……。

第4試合だが……初手から轟が、スタジアムの全高を超えるほどの大きさの大氷塊を出して瀬呂の動きを封じ、瞬殺。

周囲から『どーんまい』『どーんまい』というコールが響く中、轟は……なぜか、勝ったというのに悲しげな顔で、瀬呂の氷を溶かしていた。

それに、試合開始前から攻撃の瞬間まで、何かイライラしてたっばいし……

そしてそれを、同じくなぜか悲しげな顔で緑谷が見ていたのが気になつた。

……何かあったのかな？ この2人の間に……第2種目の時とも違う、何かこう、距離みたいなのを、横で見ているだけで感じるんだだけでも……

昼休みの間に、何か話した、とかだろうか？ 聞くのはちよつとためらわれるかな……

1回戦も後半となる第5試合は、常闇と八百万の試合。

これは、八百万が作ったものを使う暇を与えない速攻で常闇が勝利した。

常闇の個性『黒影』ダークシャドウの強さが際立った一戦だったが、それを差し引いても……なんか八百万、動きにキレがなかったような……調子でも悪かったのかな？

気にはなったが、終わったことをいつまでも気にしていても仕方ない。

それよりも……

第6試合 上鳴電気 VS 栄陽院永久

出番だ、準備しないと。

第29話 TS少女とトーナメント② 永久VS上
鳴ほか

『続いて第6試合だ！ スパーキングキリングボーイ！ ヒーロー科、上鳴電気！ 対するは、A組最長身のパワーファイター！ ヒーロー科、栄陽院永久！』

実況のプレゼント・マイクの紹介を受け、次の試合の出場者である2人は壇上に上がる。

向かい合って立つ2人。上鳴も決して小柄と言うわけではないが、身長190cmを超え、30cm近い身長差がある永久とこうして並び立つと、その差が如実に表れる。見た目から判断すれば、明らかにフィジカルで不利なのは明らかだった。

加えて、永久の『個性』は単純な増強型であるというのは、第1、第2種目で知れ渡っている。体格差から来る不利は、周囲はもちろん上鳴自身がよくわかっていた。

しかし、戦いは体格で決まるものではない。決して油断できる相手ではないが、油断さえしなければ戦いようはある。

『上鳴の電撃は第1種目のロボはもちろん、第2種目でも轟チームで猛威を振るったのは記憶に新しいな！ 何か壁になるものがないや、近づいたが最後、問答無用で痺れさせてくる！ 対する栄陽院は純粋な増強型！ 『個性』じゃちと相性が悪いかもしれねえが、それでも圧倒的なパワーと、特にこいつには何してくるかかわからねえおっかなさがあるからこつちも注目だぜ！』

生身の人間に決まれば、それがたとえ格上だろうとショックで数秒は動きを止めるだけの威力がある上鳴の電撃。リスクもあるため乱発はできないが、永久のように、遠距離攻撃の手段を持たないパワー型にとってはかなり相性が悪い相手なのだ。

フィジカルと『個性』、それぞれの有利・不利が交錯しているという、ある意味で理想的な対戦カード。相手の手を読み、どのような戦略で

攻めるかという点にも注目されることだろう。

(OPtのロボを生身でつつーんだから、下手したら破壊力は緑谷レベルなんだよなー、栄陽院……最悪、一発まともに当てられたら終わり、つて考えたほうがいいか。電撃が当たる距離に近づいてきた瞬間に、あるいは攻撃を避けてから放電して、そのまま気絶してくれればラッキー。無理なら……痺れてる間に場外に出すくらいしかねーかな……)

(……という感じで考えてるだろうから、迂闊に近づくのは危険なんだよなあ。遠距離で攻撃する手段がないのはマジだし……緑谷の『テキサスマツシュ』みたく拳圧を飛ばせないことも無いが、隙もモーションもデカいからよけれそうだ。それにいくら体を強化しても、電撃食らえば数秒間は硬直しちゃうから……動けなくなるのは流石にまず、い……まてよ?)

ふと何かに気づいた様子で、顎に手を当てて素早く頭を回転させる永久。

『ちなみに栄陽院、第1種目で見せたパッションと第2種目での大音量『くっ殺』で大注目！ ミッドナイトも期待する未来の18禁ヒーロー候補だぜ！』

『人の生徒に妙な前評判をつけようとするな』

『さつき馴染みのADから入った情報によると、第1、第2種目で立て続けに男子垂涎のセクシーショットを披露した栄陽院だが、そのおかげでネット配信の視聴率爆上がりしてるそうだ！ ハイ業界関係者！ アイツは数字持ってんで、拝んどけ！』

『前々から言おうとは思ってたんだがお前は今日、今、教育関係者である立場であることをもつと自覚しろエセDJ』

『こいつはシヴィー——!! つと、ミッドナイトから合図だ、両者位置について準備はできたようだな！ それじゃあ、1回戦第6試合、上鳴VS栄陽院……開始だア！』

今まさに、戦いの幕が切つて落とされたその瞬間、

「——ふっ!!」

——ズドガアアアアン!!

永久がいきなり繰り出した強烈な踏み込み……震脚で、コンクリート製のステージにびっしりとひびが入り、地震かと思うような揺れが、
一帯を襲った。

「う、おおおお!!? んな無茶苦茶なぐふっ?!」

余りにも予想外な永久の初撃に、ダメージこそないものの、大きく動揺し、物理的にもふらついてしまう上鳴。開始直後で割と近い位置に立っていたため、振動の大きさをバランスが崩れそうになったが、持ち前の運動神経でどうにか転ばないように姿勢を保った。

が、その瞬間、上鳴は下腹部に衝撃を感じると同時に、『捕まった』という感触を覚えた。

上鳴がふらついた瞬間の隙に、まるでレスリングのタツクルのように、低空で永久が突っ込んできて、上鳴に体当たりを食らわせ、そのまま抱き着いて……抱え上げたのだ。

「お、おおおおお!!?」

自分の身に降りかかった急展開に、思わず変な声を出して驚く上鳴。

『んだコリャアア!? 栄陽院、開幕でいきなりステージ破壊しやがったばかりか、そのままぶちかまして上鳴をホールドオ!! 急展開について行けずに上鳴、なすすべなく捕まっちゃったぞ!』

『確かに『何してくるかわからない』な。こんな手で来るとは思ってたなかったがために反応が遅れ、結果として完全に初手を取られてペースを握られたか』

『いやそりゃこんなことしてくるなんて予想しろって方が無理だろオ!?! まあ轟とか、ステージごと凍らせてきたやべーのはいたけどよ!?!』

つか上鳴、大ピンチなのはそうだが……それはそれとして、よく見るとお前ちよっとうらやましくもある状況になってんじゃね!?!』

(それは……俺も思ったツツツ!)

上鳴、心の声で歓喜。

今現在、抱えあげられて身動きが取れない上鳴だが……抱えられて

いるということとは、当然永久と密着しているということだ。

そして、腹部のあたりに手を回されているため、必然的に……その腹のあたりに、永久の胸部装甲が押し付けられている。それも、逃がさないためなのではあろうが……変形するほど強く押し付けられている。

会場にいる者達の中には、それに気づいて『うらやましいぞ!』『上鳴コノヤロー!』などとヤジを飛ばしてくる者もいたが、上鳴の頭は、状況を喜びつつも冷静だ。

感触は素晴らしいので思わず舞い上がりそうではあるが、今この状況が、ピンチであると同時に……千載一遇のチャンスであるということをはっきりと認識していた。

『さあ果たしてこのまま場外に運ばれるのか、それとも鯖折りか?!』しかしこの状況、実は栄陽院にとっても非常にヤベーんじゃないかって今になって俺もわかったぜ!? さあどうなる!?!』

と、実況で早々に触れられてしまった上鳴は、永久が手を放す前に勝負に出る。

「ありがとよ、栄陽院……自分からわざわざ近づいてきてくれて! サービスの分もまとめてきっちりお礼するぜ……無差別放電・130万ボルト!!」

その瞬間、上鳴を中心にすさまじい電撃が迸り……はじけるような音を響かせ、火花と光をまき散らしながら、ステージ上の空気を激しく震わせる。

当然ながら、密着している永久はそれをモロに食らって感電していた。

捕まったと思ったところからの反撃。形勢逆転かと、会場内がさらに沸き上がる。

『決まったア——! 上鳴の必殺技、情け無用の無差別放電! 騎馬戦で多くの騎馬を行動不能にせしめた大技が、なんとゼロ距離で炸裂! コレは流石にやばくねえか栄陽院!』

爆音と電光の中心で、上鳴を抱き抱える永久は……

……倒れない。

そして、放さない。

ニヤリ、とその口元に笑みが浮かぶ。

「…………いや、こちらこそありがとよ上鳴。たらふく弁当食べた後で、血が胃に行って眠くなつてたところでさあ…………ちようどいい気つけになつて、目が覚めたわ」

「…………そりゃ、どういたしまして…………」

対照的にひきつる上鳴の笑み。

『おいおいおいおい!? マジかよ栄陽院!? 今の上鳴の渾身の大放電にも全く動じず仁王立ちだぜエ!? 上鳴、変わらず拘束状態継続中だー! 電撃が効かなかったのか!』

実況しながらも困惑するプレゼント・マイクに、横でジツと見ていた相澤が口をはさむ。

『いや、筋肉の…………体の微妙な強張り具合から見ても、効かなかったわけじゃなさそう。あれだけの電撃を食らえば、いくら強化してたって動けなくなる。が…………』

『が?』

『動けなくなつても構わない、と考えていたとしたら?』

その言葉に、マイクに加え、未だホールドされている上鳴もまた、永久がとつた行動の意味に、そして狙いに気づいた。気づいてなお、『マジかよ』と顔にかかれてはいるが。

「そーいうこと。私が一番怖かったのは、あんたに攻撃が届く前に、あるいは攻撃をよけられてから放電で痺れさせられることだった。そうしたら、動けない間に場外に運び出されちゃうと思つたから…………まあ、この通り私、デカくて重いから大変だろうけどね、それも」

「女の子が、デカいとか重いとか言うもんじゃねーよ…………」

「自分で言つてる分にはいいじゃんか。で、それならどうするかと思つて考え付いた案は2つ。1つ目は、痺れさせる前に殴り飛ばす。でもこれはかわされるのがやっぱり怖かった。あんた結構すばしいから。そしてもう1つ…………動けなくなつても構わない状況に持つてくこと」

「だからって、抱き着いて放電食らうの確定な状況に持つてくか!」

「一旦こうしちまえば、私が動けなかりと、放しさえしなければあんたも逃げられないからね！ そんじやそろそろ……こつちも決めさせてもらいますかね、つと」

言いながら、永久は上鳴の体を抱えたまま素早く半回転させ、背中側から抱き着いている形に。

当然今度は上鳴の背中から腰のあたりにたわわに実った感触があるが……上鳴は今の状況に、少しの幸福感と……限りなく大きな不安感しか感じられていない。

後ろから抱き抱えられて拘束されている。この状況からもし自分が攻撃されるとしたら、どういう形になるか。それを考えて……結論が出てしまっていた。

「あの、ちよつと栄陽院!? 栄陽院さん!? 栄陽院様ア!? そこまでしなくても、アレだほら、もうちよつと優しく……お願いします命ばかりは」

そんな悲鳴にも近い上鳴の懇願をさらりと聞き流し、永久は『せーの……』と小声でつぶやきながら——それが余計に恐怖を煽る——しだけ前かがみになって構え……そして次の瞬間、

「そおいー!」

——ズゴオン!!

思いつきり体を後ろに反らせて……その勢いで、上鳴を後頭部から地面に叩きつけた。

『決まったア——見るからに強オオ烈なバックドロ——ツプ!! 脳天から落下のクリーンヒットで上鳴、まさに天国から地獄! おいコレ生きてんだらうな!?』

「……気絶してるだけね、大丈夫。上鳴君、戦闘不能! 栄陽院さんの勝ちで2回戦進出よ!」

駆け寄って状態を確認した主審・ミッドナイトの言葉に、マイクも何気にはつとつ、すぐさま実況の仕事を再開する。

「栄陽院、驚異のパワーとタフネス、そして豪快なプロレス技で上鳴を撃破ア！ 全くホントに何するかわかんねーなコイツはよ！ ここまで来たら次も大暴れに期待しようじゃねーか、ひとまず健闘をたたえてクラップユアハンズ!! 拍手頼むぜ！」

大歓声と拍手が鳴り響く中、永久は無事に上鳴がハンソーロボに運ばれていくのを見届けると、自身も一礼してステージを後にした。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

「む、無茶苦茶だな……」

「前々から思ってたんだけど、栄陽院って脳筋っぷりがオールマイイトに近くね？ 頭を使うことも結構あるけど、大抵それも結局は力技で解決してくし……」

「思い返せば、体育祭も結構そんな感じだよな……緑谷とはまた別な意味でオールマイイトっぽい」

飯田君に瀬呂君、峰田君の順に、今しがた栄陽院さんが見せたパワーファイターっぷりを好きなように評している中、僕は……舞台を降りて出入り口に消えていく彼女を、不思議な気持ちで見送っていた。

この日のために一緒に修行してきた彼女の活躍は、もちろん嬉しい。しかし、その一方で……何だか、よくわからない気持ちが湧き出てくる時が……ちよくちよくある。

「……………」

「…………？ デク君、どうしたん？ 何か怖い顔して」

「あ、麗日さん。いや、何でもない……やっぱその、栄陽院さん、強いなって思ってた。パワーもそうだけど、動かないようにしてたとはいえ、上鳴君の電撃くらって微動だにしないって……」

「確かに……打たれ強さも一級品やね」

「うん。並のフィジカルじゃ……ううん、個性による『攻撃』であつても、半端な威力じゃ痛打にはならないと思う。隙だらけの所に直撃で

もすれば別だけど、彼女、勘も鋭いから。栄陽院さんに攻撃がまともに通る前に、カウンターで強烈なのを食らって吹き飛ばされる」
「今の上鳴くんみたいに、やね」

トーナメントの構成上、僕と栄陽院さんが戦うとすれば、それは決勝だ。

いや、もちろんそうなるとは限らないんだけどね……トーナメントの途中では、僕は轟君や飯田君とも当たるし、彼女もかっちゃんや常闇君といった強敵がいる。もちろん、麗日さんだって……って、そう言えばそろそろ……

「んしょ、つと……それじゃデク君、私そろそろ準備せなあかんし、行くね?」

「そっか……頑張つてね、麗日さん。かっちゃん、その……強いから」「あはははは、知つとるよ。それでも……私も同じやから。デク君と?」

「開会式の前、控室でゆーとつたやん? 『本気で獲りにいく』って」「あ………うん、頑張つて!」

ぐつ、とサムズアップして、駆け足で観戦席から出ていった麗日さん。

少し笑顔が引きつってたのは……流石に仕方ないだろう。相手はあのかっちゃんだ。

それでも、彼女はあきらめないで挑戦する、って宣言したんだ……僕はそれを信じて、応援してあげようと思う。

え、かっちゃんの応援はしないのかって? えーつと……応援するまでもなさそうというか、応援なんかしたら逆に怒られそうというか……

とか考えてたら、ほとんど麗日さんとすれ違いみたいなタイミングで、さっきの試合終わってすぐの栄陽院さんが戻ってきた。

「お……間に合ったか、まだやってるな、第7試合」

「お! お疲れー永久ちゃん。そーだよ、今、切島、絶賛殴り合い中」「けろ、さっき永久ちゃんが派手にステージを壊したから、セメントス先生念入りに修理してたわ」

「それで少し試合開始がずれ込んだんですの。でも、それにしても戻りがお早いですね、栄陽院さん……リカバリーガールの診察はお受けに？」

「電撃で多少火傷してすすけたくらいだったからすぐ治ったよ。私の場合、体力は『エネルギー』で大量にストックがあるから、リカバリーガールの治癒強化と相性がいいから、すぐ治る。しかし……殴り合いとは思えない硬質な音が聞こえるな。やり合ってるのがあの2人だから納得だけど」

「似たような『個性』どうしだから、余計長引いちやっつてんの。そういや永久、あの相手の鉄哲って奴と騎馬戦で一緒だったよね？ ホラ、尾白と一緒にコアラみたいに腕にしがみついていたし」

「コアラって……いや、確かにしがみついていたけどさ……」

そんな軽い会話を交わしながら、栄陽院さんは観客席の一番前、手すりがあるとところまで行き、切島君と、B組の鉄哲君の試合を見始めた。

見始めて少ししたところで、ダブルノックアウトで引き分けに終わった。決着は2人が回復してから、何か簡単な勝負方法でつけるらしい。

……それはそうと、途中で脱線しちゃったけど……今、耳郎さんの話で、鉄哲君や尾白君が騎馬戦で彼女と一緒にだったって聞いた時にも、ほんのわずかだけど、なんだか変な気分になった。

コレ、何なんだろう……？

……いや、まあそれは今はいいことにしよう。

それよりも……次の試合だ。

☆☆☆

途中から観戦できた切島VS鉄哲の試合の後、1回戦最後の試合である、第8試合……麗日VS爆豪の試合になった。

正直、このトーナメントで一番不安というか、見るのが怖い対戦カードだった。

予想通り、と言えはいいのか……懸命に挑む麗日に対して、爆豪は何度も爆破で吹き飛ばす。

それが、あきらめず麗日が突っ込み続けるせいで延々繰り返される痛々しい試合で、観客席からはブーイングまで飛んでいた。

もつともそれも、相澤先生の静かな一喝のせいですぐに収まって、空気が引き締まったけど。

爆豪は、嗜虐心から麗日をいたぶって遊んでいるわけじゃない。力を認めてるからこそ、本気で戦ってるんだって。

最終盤、麗日が今までの爆豪の爆破でできた瓦礫を大量に上空に浮かして放った『流星群』で勝負に出たものの、爆豪はそれを一掃するほどの威力の爆破で正面から粉碎。

その直後、乾坤一擲の策が破られた精神的な疲弊もあつてか、キヤパオーバーで麗日は気絶。爆豪の2回戦進出となった。

……ま、勝負だからな。どっちかが勝てば、どっちかが負ける。

その繰り返しで、最終的には1人を除いて皆が負ける。それがトーナメントだ。こういうもんだ。

そしてその後さらに、切島と鉄哲の決着もついた。

腕相撲で切島が勝利。2回戦進出を決めた。

そんなわけで、少しのインターバルを挟んで、2回戦が始まる……私も早めに準備しよう。

第30話 TS少女とトーナメント③ 緑谷VS飯田ほか

インターバルを挟んでの2回戦第1試合。緑谷VS飯田。

試合時間ものの1分たらずで終わってしまったこの闘いは、凄まじいスピード同士がぶつかる超高速戦闘だったと同時に、相手がどう出るかを2手3手先まで読み合う頭脳戦でもあったと思う。

試合開始直後に速攻で斬りこむ、という予想が多かった飯田だが、予想に反して飯田は、高速移動で緑谷を翻弄しようとステージ上を縦横無尽に走り回り、すぐには攻撃しようとしなかった。根競べのように、じつと緑谷が隙を見せる瞬間を待ち続けた。

恐らく、緑谷の反応速度を警戒してだろう。

第2種目の動画で見た、飯田の必殺技らしきそれを……緑谷はほぼ直感ではいえ、初見で対応して回避してみせた。

ならば、超加速技があるとすでに知られている以上、馬鹿正直に使っても防がれる可能性が高い……と、そう思ったんだろう。

しかし、死角に回り込みつつ立ち向かっていった飯田にとって、そして多くの観客にとっても予想外だったことが起こった。

それは……飯田だけでなく、緑谷までもが、蹴り技を主体にして戦っていたことだ。

足は腕の3倍のパワーがあるというのは、一般的にもよく言われていることだ。個人差があり、また『個性』の存在により、決して一律には言えることではないが。

当然、緑谷の身体能力で足を使った攻撃を繰り返せば、相応の威力が叩き出せるであろうことは想像に難くない。

現に、第2種目の時に緑谷は『セントルイススマッシュ』という蹴り技を放ち、その爆風でB組塩崎が放ったツルによる拘束を防ぐ……どころか、迫ってきていたツルを切り裂いていた。

が、同時にそれは諸刃の剣でもある。なぜなら、傍目から見ても

……緑谷は、足を使って戦うことに慣れていない。腕、ないし拳で放つ攻撃に比べて、どう見てもキレが悪かった。

そしてそれは、直接ステージで戦っていた飯田ならば、より強く感じたことだろう。

(戦闘において、それもぶつつけ本番で慣れていない技を使うことがどれだけ危険か、それを緑谷君が理解していないはずもない……俺を試金石にしている？ それも恐らくないだろう……やはり、何かの罠？ それは定かではないが……それでも、これが隙であることには変わりない。狙うにしても迂闊だぞ、緑谷君……足技というのは、常に重心と軸足の踏ん張りを意識しなければ、バランスが崩れる瞬間が必ず来る。そしてそれは、いかに君の力が強くても対応できるものではない！)

食らえばただでは済まないが、隙も大きく、何より足を使った格闘になれている飯田であれば、それによって生じる致命的な隙……そのタイミングというものに対して敏感に反応することは決して難しいことじゃない。

罠であることを警戒しつつも、しばらくの間、足技の応酬で戦い続けた飯田は、数合の後に訪れたそのタイミング……蹴りの直後、緑谷がバランスを保ち損ねてふらついた一瞬の隙に勝負をかけて急加速、『レシプロバースト』で突っ込んだ。

……しかし、やはりそれは罠だった。

勝負は……ほんの一瞬だった。

「トルクオーバー……『レシプロバースト』ッ!!」

「……ここだ! 『オクラホマスマッシュ』!!」

超加速からの最高速度で突っ込んできた飯田を、緑谷は、第一種目の『障害物競走』の最後——どう考えても不可能なほどの急カーブで最高速度のままスタジアムに帰ってきた——で見せた、超高速回転攻撃を繰り出し、突っ込んできた飯田を、そのままの勢いで場外に弾き出した。まるでベーゴマみたいに。

突っ込んできた飯田の速度すら利用したその一撃により、放物線を描いて飯田は放り出され……しかし諦めず、ふくらはぎのエンジンの

噴射の勢いを利用してステージに戻ろうとする。

が、そこに緑谷が追撃というか、トドメの一撃を放つ。

『セントルイススマッシュ!!』

「なっ、跳ん……ぐああああ!!」

なんと、緑谷が同時に場外にまで跳躍して、飯田に蹴りを入れて地面に叩き落としたのだ。

そして、自分はその反動を利用してステージにギリギリ舞い戻ってみせた。

鮮やかな空中でのトドメの一撃に観客は沸き立ち、マイク先生はノリノリで緑谷の勝利をアナウンスした。

場外に転がった飯田は少しの間、今のわずかな間に起こったことがいまいち飲み込めていないようだったが、やがて、すつきりしたような笑みと共に起き上がった。

「負けたよ、緑谷君……完敗だ。まさか、あの速さにまで対応されるとは思わなかった」

「こつちも賭けだったけどね。スピードで負けている飯田君を捕らえようと思ったら、飯田君が明確に『チャンスだ』って認識して突っ込んできてくれたところを狙うしかないと思って。体勢を崩したのは本当だったんだけど、腕と腰の回転で無理やり勢いを出したんだ。あたた……」

「おいおい、無茶するな君は……負けておいてなんだが、大丈夫かい？

しかし、やはり罨だったわけだな……それでもかいくぐれると思って勝負に出たんだが、俺も未熟だったということか。いや、いい勝負だったよ緑谷君、ありがとう!」

「こちらこそ、ありがとう!」

最後は、正々堂々勝負した後のスポーツマンっぽい感じで、握手と共にすがすがしく終わった。

次、第2試合。芦戸VS轟だが……これはまあ、相手が悪かったとしか。

いくら芦戸の酸が強力でも、轟はそれごと全部凍らせる勢いで冷氣

を放出し……さっきの瀬呂戦ほどじゃないものの、一気に広範囲を氷結させた。

ステージの大部分がアイススケートリンクみたいになつとる……戦闘訓練の時を思い出す、えげつないレベルの範囲攻撃だ。

1回戦の瀬呂の時のを見てたから、芦戸は足を止めないようになつて、完全に凍らされて止められないようにしてたもの、走っていく先にも氷があるから徐々に足が凍っていき、それでも酸で溶かして動き回っていた。

しかし、凍ってる上に酸なんて使えば当然滑りやすくなつてしまう。芦戸の運動神経でも流石に一瞬、足を取られて滑ってしまい……その瞬間、ピンポイントで轟が強烈な冷気を放って凍らせたことで、芦戸は行動不能に。

『くやしー!』と表情も仕草もぎやかに芦戸が悔しがる一方で、相変わらずの仏頂面のまま、轟が2回戦を勝ち上がった。

そしてこの瞬間、次の戦い……準決勝の対戦カードは、緑谷と轟に決まった。

……さ、次、私が出番だな。相手は常闇か。

轟の対戦カードの後の試合だと、ステージの氷解かして整備する時間がいるから、割とゆっくり試合見てられるのは助かる。

控室行く途中の通路で、なんかオールマイトと、顔から物理的に炎を出して燃えてる中年男性が話してたのをちらっと見ながら……しかし何か雰囲気アレだったのでスルーして部屋に向かった。

遠目からだけど、あの体格に炎つて……轟の親父さんのNo. 2ヒーロー『エンデヴァー』か? 息子の応援にでも来たのかな……? しかし、につこり笑ってるオールマイトと、シリアス目な雰囲気のエンデヴァーの温度差が激しかったな……聞き間違いないかなければ、オールマイト『お茶しよ?』とか言ってた気が……緑谷をランチタイムに誘ってることといい、なんか女子っぽい軽いノリ多くね?

☆☆☆

S i d e . 瀬呂範太

え、何でいきなり俺？

こういう視点変更って、大抵緑谷とか三人称の視点で進むんじや……あつはいまじめにやります。メタネタはここまでにします。

……あんまり実況上手くないのは許せよ？　こういうの慣れてねーんだから。

あー、そんなわけで次は、常闇と栄陽院の試合だ。

どっちも1―Aの中でも実力派で知られてるが、常闇はスピードとトリッキーな動きで、栄陽院はパワーとタフネスで戦うスタイルっていう違いがあり、それがこの試合運びにどう関わってくるか、俺はもちろん皆注目している。

轟みたいに大規模な範囲攻撃を持っているわけでもない2人の戦いは、主に接近戦になるだろう……常闇の『黒影』を伸ばして戦うのが『接近戦』にカテゴライズされるかは微妙だが。

ちよいと耳を傾けてみれば、あちこちで予想が飛び交っている。

「俺はやっぱり栄陽院だと思っうな……常闇の黒影も強いけど、真つ向勝負にはパワー不足じゃね？」

「上鳴ちゃん、1回戦で当たってるだけあつて流石によくわかつてるわね」

「悪かったな、一撃でノックダウンされてよ……でも実際、O P t の口ポをドロップキックでひっくり返すパワーだぜ？　真正面から殴り合うんなら、それこそ緑谷級のパワーが要るだろ。八百万も大砲で同じようなことしてたけど……つまり一撃が大砲レベルってことで……」

「エネルギーを特に多く込めた一撃だったんだとしても、そういうのがあるってだけで脅威だね。しかも、緑谷君と違ってその後で行動不能になったりはしないわけだし……」

「でも、殴り合うだけが勝負じゃないでしょ？　どんな攻撃も当たらないきや意味ないんだから……その点常闇の『個性』は、素早い上に中距離で距離取って戦えるから、隙をつきやすいかも」

上鳴は栄陽院が勝つと予想してるらしいが、反対に常闇を推すのは耳郎だ。

どっちの言い分も一理あるから正しく聞こえるな……と思つてたら、さらに峰田が参戦。

「でもよー、場外に出すにしろ何にしろ、結局パワーがないと無理だぜ？俺、障害物競走でアイツと組んで間近で見たからわかるけど、あいつパワーはもちろんテクニクも反射神経もあるから、ちよつとやそつと隙突いたくらいじゃ、すぐ体勢立て直されてむしろ反撃されるぞ」

「恵まれた体格から来るフィジカルの差も大きいな……けど、身長が大きいって、武術の上ではバランスが崩れやすいつていう欠点もあるから、動きの端々で重心が動くタイミングを狙つて、柔道みたいに崩せば……ダウンまでは持つていけるかもしれない」

かと思えば尾白。なるほど、武術経験者の意見はためになるな……結局、常闇と栄陽院はなまじタイプが違いすぎるせいで、『これだ』つていう結論は出ないまま、試合開始の時を迎えることになった。

前の試合だった芦戸も戻ってきて、他の女子たちと一緒に座つて観戦の姿勢だ。

その向こう側には、麗日と並んで座つてる緑谷が……あー、ブツブツモードになってやがる。クラスの連中の話に触発されたかな、ありや当分帰つてこねー……隣で麗日が引いてんぞ。

……轟は……いねーな。控室かどこかか？

なんか今日、特にトーナメント始まってからは妙に苛立つてる感じがしたし……それで俺も……やべ、あの時の感触思ひだして寒くなつてきちまったかも。

とか言つてるうちに、常闇と栄陽院がステージに上がってきた。

……さっきの上鳴の時より身長差あるな……常闇、たしか150cm台だっけか？

『待たせたなりスナー！水も解けて準備万端、2回戦第3試合、もう間もなく開始だぜ！対戦カードは、己の足元に闇の獣を従えしシャドーファイター、常闇踏影！対するは、パワフル&ダイナミックな

女子力（物理）の戦乙女、栄陽院永久！』

色々ツツコミどころ（つーか若干の悪意）がある紹介。

……視界の端、何人か他のクラスの男子達が胸を抑えたり、頭を抱えているのが見えた。常闇の紹介文が、己の中の中学二年生に効いちまってるのかもしれないねえ。

もつとも、当の常闇は高校一年生になってもその只中に……いや、今はよそう、考えるの。

「さあ、準決勝に歩みを進めるのはどっちだ!? レディー……ファイツ!!」

って考えてるうちにゴングが鳴った!

やめだやめ、今は考えるのやめ! 今は折角の試合を存分に見て研究して、同時に楽しませてもらうおうじやねーの! もう俺は負けちまって出番ねーからな、気楽なもんだ!

……この時の俺は、そんな風に軽く考えていた。

常闇と栄陽院の試合を、上級者同士の手に汗握る戦いになるのだろうと、それを見て俺もより一層強くなれるよう研究しようと、そう思っていた。

だからまさか、あんなことになるなんて……考えもしてなかったんだ……!

第31話 TS少女とトーナメント④ 永久VS常闇

S i d e . 瀬呂範太

はい、と言うわけで前回に引き続きなぜか実況の瀬呂くんですよ、つと。

大方の予想通り、開始早々、常闇は『黒^{ダークシャドウ}影』をけしかけて先手必勝とばかりに猛攻を加えさせる。

伸縮自在の影のモンスターは、地を這うような動きで迫ったり、かと思えば大きく弧を描いて空中から襲い掛かったり、縦横無尽に動いて栄陽院を襲う。

しかしクロスレンジで強いのは栄陽院も同じ……いかに予測不能な動きでも、栄陽院は見てからそれに反応して攻撃を叩き落す。

正面から来れば拳、側面から来れば裏拳や肘、背面から来れば後ろ回し蹴り、下から来るならローキック……多彩な動きに惑わされない安定した迎撃だ。

それでもこつちから攻撃に移ることはできていないあたり、『黒影』はやはり攻守に優れた強個性だつてことになるんだらうかな……

それに今思えば、この組み合わせって『戦闘訓練』の時にも見たやつだ。

お互いの手の内、戦い方を多少なり知ってるから、つてのもありそうだな。一度戦った者同士、それぞれの力はより一層研究して、警戒してるだらうし。

だが、さつきちらつと話題にも上がった通り、『黒影』は栄陽院を相手にするにはいささか火力不足なところがあるようだ。さつきから何発かは栄陽院のガードをすり抜けてヒットしてるはずなんだが、さして堪えてないように見える。

「……くっ!？」

今も、細身の体を生かして素早く身をひるがえし、栄陽院の迎撃をすり抜けて爪を振るう。

栄陽院は上体を反らしてかわそうとするがかわしきれず、チツ、とそれが栄陽院の胸元をかすめる。おいおい、何ラツキースケベみたいなのやってんだよコラ。

その直後に、物理法則上ちよつと無理がありそうな動きで急旋回、足を払おうと低空で突っ込んでいったが、素早く反応して足をずらし、浮かした栄陽院の股下ギリギリをすぎざー……つと通り抜けるだけにとどまった。

その後数合打ち合った後、一瞬のスキをついて黒影が体当たり……というか、頭から突っ込んだから頭突きか？　それが栄陽院にクリーンヒットした気がしたんだが、やはり鍛えてるからか痛打にはなっていない様子だ。

直撃してもほとんどダメージがないとなると、気絶や行動不能で勝ちを狙うのは厳しいか……当たった場所が胸部装甲のど真ん中でクッションになってたことを差し引いても……つて、ちよつと待て？　「……ねえ、何かさつきから……」

「うん、だよね。やけに永久ちゃんの……」

視界の端で、ごによごによと女子たちが話し始めているのが見えた。小声だからほとんど聞こえないが……ぶっちゃけ、話しているであろうことはわかる。俺も同じこと思ってるからな多分。

……うん、何か……気のせいじゃなければなんだが……うん……
……何かさつきから、ハプニングというか、ラツキースケベ的な攻撃がヒットする回数多くね？

胸にかすつたり、股下くぐつたり、胸に直撃したり……やってんのは黒影だけどき。

いやでも、あの常闇のことだし……ちよつと中学二年生が長引いてるけど、それもあってかえって真面目で誠実なあいつのことだし、わざとじゃないだろう。

これが上鳴ならかなり疑わしくて、峰田なら弁明の余地なくアウトだったろうが、常闇だしな。

それでも何というか……それに気づき始めている面々の目が、どことなく『じとおっ』とした感じになり始めてるのは……仕方のないこ

となのかもしれないねえ。

ミッドナイト先生も気づいてるようで微妙な目つきになつとる。

実況のマイク先生と相澤先生も同様だろうが、あれは……意図して触れないようにしてんのか？ 普通に試合内容の実況だけに集中してるようだ。

自覚はあるんだろう、よく見ないとわからねえが、常闇もちよつと気まずそうだ。

「……ふう、流石に隙がないな……それと、たびたびその、すまん栄陽院。わざとではない」

「うん？ ……あーあーあー、そういうことね。いーっていーって、クロスレンジで戦ったりすればこういうこともあるだろ。いちいち気にするもんじゃないよ」

対する栄陽院はこんな感じだけどなー。まあ、いつものことと言えどばそうなんだが。

毎度のことながら、栄陽院は見た目がハイレベルな割に、無防備とゆうか不用心とゆうか……時に男っぽいとすら言えるほどに、自分の容姿に無頓着で、異性からの目に対して警戒心がない。

これが他の女子なら、白い目で見られたり悲鳴が上がっても文句は言えないだろうに……

コレのせいでたびたび目の保養ができてたりする場面もあつたりする。マジで栄陽院、下着見られたくらいじゃ——わざと覗いたりするのはアウトだが、不可抗力で見えてしまったとか戦闘中に服が破れたとかの場合は特に——『別に減るもんじゃないし』って気にしないんだよね……。

今日なんて、障害物競走の後、全国ネットでそうなつてただろうに……けろつとしてんだもの。

女子からは『もつと警戒心持つて！』とかたびたび注意されている光景もよく見る。

しかし……こういう時はその豪快さに救われるな。常闇も、反省はしつつも気に病むことなく、勝負に戻れそうさ。

小さく一礼して、常闇は再び『黒影』をけしかけて攻撃させる。

ちよつとやさつと攻撃を当てただけじゃ痛打にはならないのはわかつたようで、その狙いは変わっていた。

さつき尾白が言つてたように、バランスを崩すためだろうか。下半身狙いに切り替えたようだ。

……さつきの話の後で『下半身』とかいうと邪な想像がでてきちまいそうだが、断じて違う。

足を薙ぐような動きで攻撃を繰り返し、転ばせて隙を作り出そうとしている。

栄陽院はそれを見極め、的確なタイミングでステップを踏んだりして回避してるが……何度目かの回避の瞬間、突如として『黒影』が登り龍のように急上昇。それに驚いて栄陽院がのけぞつて……上手い！ これでとつさの動きでバランスが崩れ……

——ずぼおっ!!

早く登り過ぎたのか、『黒影』が栄陽院のジャージの上の裾から中に突っ込んで服の中に潜り……あろうことか、その豊かな胸元から外に飛び出してきた。

「うわ!?!」

『……アリ?』

「……………」

……つて、おいイイイ!? 流石にまずいだろそれは!? 何お前裏山

……じゃなくて、何完全にセクハラにしか見えねえ攻撃しちまってんだよ常闇! つか黒影!

常闇……ああ、いかにも『やばい!』つて感じの顔になつてる。

ポーカーフェイスだけどそこそこ長い付き合いの俺達にはわかる。めっちゃ冷汗かいてる。

スタジアムの中の観客が向ける目が、大分白眼視の割合が多くなつた気がした。

しかし、そんな中でも気にしない奴が1人。

「ラツキーー! 捕まえた……つて、なっ!?! つ、つかみにくツ!?!」

服の内側から胸元を侵されているこの状況を『ラッキー』とのたまった、相変わらず女子としてどっかずれている栄陽院は、超クロスレンジに頭から突っ込んできた『黒影』を捕縛しようとしたらしいが、形から何から変幻自在の『黒影』を上手く捕らえられない。ウナギが上手くつかめなくてぬるぬる滑るみたいになつてる……滑るのか？
アイツの表面。

……ぬるぬる……服の中で、栄陽院の胸元でぬるぬる……いかん考えるな。

「……ふっ、我が半身『黒影』……懐に飛び込んだとて容易くは捕まらない。戻れ、我がもとへ！」

『アイヨッ！』

おつと常闇、一番の当事者の栄陽院が全く気にしてない流れを上手く使つて『黒影』を回収！

いやあ、上手くやったなー……まあ、後で謝罪は必要だろうか……
……つて、ん？

何だアレ……？ 戻つてきた黒影に、何か……

「……む？ 『黒影』、何だそれは？」

『ン？ アー……戻ッテ来ル時ニ、何カ引ツカカツチマツタミタイダナ』

『黒影』の口のあたりに、よく見えないが……布切れみたいなものが引つかかっていた。

ふと見ると、栄陽院の方も『ん？』つて感じで、体をぼんぼんとさわっている。

おいおい、もしかしてシャツか何か引つかかつて破いちまったのか？
せつかくいい感じでごまかせそうだったのに……

いやでも、障害物競走の時の様子から察するに、栄陽院つてジャージの下にシャツとかは着てなかった気が……マテ、何か嫌な予感がしてきた。

そこに思い至らない常闇は、『全く……』という感じで不用心に『黒影』の口からそれを受け取り……その直後、はらりとその『布』が広がって、その形状が舞台の上で明らかになった。

それは……女性の服の下で、大きく実った2つの果実を優しく包んで守るための神秘の防具……

……ブラジャーという名の下着だった。

余りにも痛い沈黙。

そしてその直後にスタジアムの野郎連中が上げる大歓声。気持ちわかる。

やっちまつたなー……どうすんだコレ……

うわあ、常闇、気まずさと罪悪感でだろうな……ふるふる震えちまつてる……。さすがにこの事態には、栄陽院も胸元抑えてちよつと恥ずかしそうにしてるし……

つかコレ、全国生放送なんだが……実況からぱったり声が聞こえなくなってるのが逆に怖エ。相澤先生キレそうになってねえよな……？

「栄陽院……」

「う、うん？」

「すまない……いや、謝ってすむことではないのはわかっている。後でいかようにでも詫びはするゆえ……今しばし、この戦いを続けさせてはもらえないだろうか……!?!」

それでも、この雄英体育祭という大舞台をふいにしたくない常闇は、恥を承知で栄陽院に頼み込んでいた。

これが普通の女子なら、罵詈雑言を叩きつけられたうえで言語道断と突っぱねられても、最悪この場で泣きだされてもおかしくないが……

「あー……うん、まあ、しゃーないか。ガチバトルなんだし、こういうこともあるだろ」

うっそだろおい。今のを『こういうこともある』で済ますの？

栄陽院、懐深すぎねえ？ 聖人君子かよ。

「あ、でも一応それは返してくれると……」

「もちろんだ」

そう言つて、今しがた奪つてしまつたそれを手渡しで返す常闇。

栄陽院はそれをジャージのポケットにしまつた。まあ、流石に今こ
こでつけ直す〓生着替えを披露するわけにはいかないからな……

そして、深く、深あく頭を下げる。その後、少し離れ……戦闘態勢
に戻つた。

主審のミッドナイト先生も、実況と解説の2人も何も言わない。ど
うやらそれでいいらしい。

『あー……つと！ 2回戦第3試合、開幕から大小のハプニングが続
出でこつちもハラハラドキドキの連続だぜ！ いや、うん、ホントに、
マジで……どうなつちまうのか全く予想がつかねえなおい！ リス
ナー諸君、何が起こつても見逃さないように目ん玉皿にしてよく見と
け！』

『ただし時と場合に依じて目を閉じる優しさがあるということを皆さ
ん頭の片隅にでも置いておいていただきたい。今ステージの上で
戦っているのは、まだ高校生になつたばかりの少女です。未来ある彼
女に皆さんのほんの少しの大人の余裕と優しさをどうか向けてあげ
ていただきたいと、彼女の担任として密かにですが期待させていただ
きます』

相澤先生の意味ありげな丁寧語やベエ、なんか怖エ。

いや、わかるけども。栄陽院、第一種目からあんな感じだったから、
何かが起こつちまうんじゃないかねえかつて危惧する気持ちはわかるけど
も。

……ただ、野郎連中の大半はそれを半ば期待しちまつてる奴も多い
んだらうなあ……俺も含めて。

……悪イかよ、俺だつて男だよ。可愛い女の子のあられもない姿は
好きだよ。

ただ、俺らの横で鼻息荒くしてスマホを構え、録画機能をいつでも
使えるようにスタンバイしている峰田ほどアレじゃねーとは思うが
………あ、耳郎に没収されとる。あ、イヤホンジャックからの心音
コンボで強制的に黙らされた。

「しかしあれだな……流石にこうなつちまうと、恥ずかしいのもある

けど、何よりあんまり激しく動けなくなっちゃったな」

「? そうなのか?」

「ああ。アレがないとこすれてちよつと痛いし、何より揺れるから痛いわ動きづらいわでさあ……格闘戦には割と必須アイテムなんだよ、アレ」

うおおお……何でもない顔ですげえ生々しいこと話してる……! 逆にエロい……!」

「確かに……つけていない状態で激しく動くのは疲れますからね。この鬨い、栄陽院さんは半ば、激しい動きを封じられてしまったようなものかもしれませんわ」

「けろ、すると、意図してはいないにせよ常闇ちゃん有利かしら?」

「でも、ヤオモモもコスチュームはブラ付けないタイプだよな?」

「そうそう、思いツきり前開いてるし」

「私のアレは、その分布でしつかり固定できるようにデザインと素材を厳選していますから平気なのです。ただ、今現在、栄陽院さんの唯一の砦となつている雄英のジャージは、動きやすい分そういった機能は望むべくもありませんし……」

「地味に不利になつとるんやね、永久ちゃん……」

こつちはこつちで女子の会話生々しい……あんまりそういう意図とか別にねーんだらうけど、揺れるとか痛いとか唯一の砦とか……! なお、この話題だからか知らないが、耳郎が1度も会話に参加しないようにしていた。

理由は……知らん。

「まんまと激しい動きができないように制限されたってわけね。やりおる」

「む……先程の繰り返しになるが、わざとでは……」

「わかつてるって。動きは極力大人しく抑えて、その上でお前も『黒影』も無力化できるように上手くやって見せ——」

と、言い終わるより先に、すさまじい勢いで地面を蹴って栄陽院が飛び出した。

突然のことに慌てる常闇だが、それに構わず栄陽院は……『黒影』の

横をすり抜けて直接常闇に襲い掛かっていった!? まずい! 常闇は『黒影』は強力だが、常闇本人の戦闘能力は決して高くない……『黒影』を無視して狙われるとヤベェ!

突然のことに驚く俺らの目の前で、長い脚を鞭みたいにしならせてハイキック……うおお、常闇間一髪かわした! あぶねー!

今の当たってたら即KOもありえたんじゃないか……ゴウツ、つてすごい音立てて空気を切り裂いてたぞ?

栄陽院、そのまま蹴り主体で縦横無尽に動く動く! 時にはさらに近づいて拳や肘で……

あつ、後ろから『黒影』が常闇を守るために戻ってきた。奇襲もかねて背後から……うおおお! 栄陽院の奴、バク転からのハンドスプリングでよけながら距離を取ったあ!!

つーか何だよアレ!! 激しく動けないとか言っついて、滅茶苦茶アクロバティックじゃねーか! 不意打ちのためのブラフだったのか!

「……言葉一つに至るまで戦のうち、ということか」

「そういうこと。卑怯などとは言うまいね?」

「まさか……わかっているとも、勝負の世界に、それも敵相手の試練の場だ……何が起こってもおかしくないだろうと……な!」

常闇の『黒影』が反撃! しかし栄陽院、軽々とコレを迎撃……うおお!? 今度は飛び後ろ回し蹴り!! 一発でも食らったら即座にKOってレベルの攻撃が、台風みたいに何度も何度も……常闇は『黒影』の援護と、小柄な体を生かして上手く、すばしっこく立ち回る……! 近くにまで接近される事態への対策も一応考えてはいたってことか、さすがだぜ常闇!

けど栄陽院の舞うような格闘技の数々もすげえ……今更だが、背が高くて手足が長いからすごい迫力だし、まるで刃のような鋭さで拳足が振るわれるのってそれだけで迫力が……うわ! 今拳の風圧でステージ上の土埃全部吹き飛ばさなかったか!?

まあ、接近戦になつてるのは距離を取る暇がないからかもしれないが、それでも拳が、蹴りが飛び交うまともな戦いに……

ビツ！ ↑ 『黒影』の攻撃で栄陽院のジャージの胸から腹にかけて切れ込みが入る

互いの技と技が交差しぶつかり合うまともな戦いに……

ぱりっ！ ↑ 常闇のくちばしがかすってジャージの胸元が大きく裂けて谷間が見える

まともな戦いに……

びりりりい！ ↑ ジャージのズボンが『黒影』に引っかかって大きく縦に裂ける

ま、まともな……

ぱりりりい！ ↑ 常闇のくちばしと『黒影』の爪に引っかかってジャージの下半分が……

いやちよつと待ててっておiiiiい！

破れすぎだろ！ さっきから栄陽院のジャージ破れすぎだろ！
どれもこれもきわどい感じで！

胸元は谷間が見えるくらいに開けちまつてるし、下の方にもかなり危ない切れ込み入っちゃまって……つか、ジャージの下半分がないせいで下乳が！ 下乳が……！

ズボンの方は……何だアレは、横の縫い目でもほつれたのか？ 左足、横から足が太ももまで丸見えで、チャイナドレスみたいになっ
てんじゃねーか！

いつの間にか布面積3分の1くらい失われて……

「……………！ コレ動きにくい！」

——びりっ!!

ああっ!? ただでさえ露出増えてんのにさらに自分でズボン破いちまった!? ひらひらになつてた裾の部分捨てて……

確かに動きづらそうだったけど、今ので生足が丸見えに……最初の状態から肌色の面積大分増えちまつてるよ!

そしてそれに比例して沸きあがる大歓声! 男として気持ちはわかるけどクラスメイトとして、ヒーローの卵としては複雑!

クラスの女子たちも『コレは流石にまずいんじゃない?』ってあたまたし始めてるし……峰田と上鳴は食い入るように見つめてるし……

他のクラスの連中に、一般の観客たちも、目のやりどころに困つてる奴もいれば、ガン見してる奴もいる。むしろ後者の方が多いかもしれねえ……無理もねえが。

後やべえのが、さつきブラフで栄陽院が言つてたことの『一部』が事実だったことだ……。

どういう意味かって? 揺れるんだよ! 胸が!

下着で抑えてないからだろうな……ダイナミックな動きに合わせて、上下左右にばるんばるん揺れるんだよ! 千切れるんじゃないやねえかってくらいに! 体力テストの時以上にもう暴れる暴れる!

『おいおいおいコレ流石にやべえんじゃないか?! 1—A栄陽院、体力以上に被服面積が急激に削られちまつてんぞ?! うちの学校のジャージ、授業で個性使うこともあるから相当頑丈なはずだつてのになどなつてんだよ!』

『……破れ方を見るに、繊維が硬くなって脆くなつてたように見えるな。前の試合の上鳴の電熱が繊維質へのダメージになつてたのか?』

あー……本当にまずいと判断した場合は流石に主審から介入があるからな、常闇、栄陽院、お前らもそれには従うように!』

……クラスの女子達の責めるような視線が『いや違つて!? わざとじゃないって、狙つてないって!』と必死に自己弁護する上鳴に集中する。

いや、そりやまあわかるけど……実際にこういうことが起こつちまつてる以上……まあ、多少そう言う目で見られるくらいは仕方ねえと思う。

隣で峰田がすげえいい笑顔で、サムズアップして悪友のファインプレーをたたえてるから余計に視線が冷たいな……。

ともあれ、マイク先生と相澤先生のそんな言葉が実況に乗ったことで、会場中の視線が一旦ステージ上の2人を離れてミッドナイト先生に注がれる。

こっちはこっちできわどい衣装だが……そんな先生は少し考えた後に、鞭をピシヤアン！ と振るって、

「試合は続行します！ ヒーローたるもの、卑劣なヴィランの攻撃によつて衣服を削られた状態で戦うことを強要される状況もないとは言えないわ、その時になって『恥ずかしいから戦えない』なんて言葉は通用しない。もちろんテレビ放送もされている関係上、イレイザーの言うように本当にヤバいと思つたら止めるけど、尋常な戦いの中でこうなった以上は起こり得る事象と判断します！」

ミッドナイト先生の判断（英断？）に、またもスタジアムを包む大歓声（男のもののみ？）。

とことんガチだな雄英……実践主義というか、リアル思考というか……こんな所でも生徒に試練を与え続ける姿勢か。

まあ、当の栄陽院はあんまり堪えてないようだけど……いや、流石にちよつと顔赤いか？

あと、今の言い方だと常闇が『卑劣なヴィラン』と同じ扱いされちまってるんだが……いや、その後に尋常の勝負の結果つってるし、言葉の綾だらうけどさ。

その常闇は……

——ガンガンガンガンガン!!

なんかステージにめっちゃ頭を打ち付けとるう!?

何してんだ常闇!?! そんなお前キツツキみたいな……いや打ち付けてんのはくちばしじゃなく額だけど。てか、めっちゃ血いでてんぞ!

「重ね重ね、すまない、栄陽院……いや、もうどう詫びたところで許さ

れるようなことではないのはわかっている。後でいかなる罰も受けよう……それでもせめて……この血に免じて、この闘いを最後まで続けさせてくれまいか……!」

「わ、わかったから常闇! わかったから、自傷行為やめて、ホント怖い。気にしてないから私、ちゃんとわかってるから、勝負の中のことだって。な? ホラ立てよ、じゃないとあんた、その出血で立てなくなりそうで怖い」

「感謝、する……!」

『I—A常闇、バトルとは関係ねえ傷が心身に増えていく! そしてここに至ってもなお『気にしてない』って聖人君子かよ栄陽院! わざとじやなきや何でもアリにしそうで先生逆に心配だぜ!』

『ミッドナイト先生の判断もある。もうこうなったら俺からは何も言わんが、お前ら放送事故だけは起こすなよ。セメントス、念のためにスタンバイ頼む』

実況から再度の注意が入った後、2人は改めて構えて相對する。

……片方の装束がセクシー系の映画でもなかなかないほどに際どい……まともに試合見れつかなここから……ていうか、ホントにこれ以上何も起こらないで終わるのか……?

「行け、『黒影』!」

『イイ声デ鳴ケヨオ!』

「黙って行け!」

三たび『黒影』が襲い掛かる。

しかし、栄陽院の反応が鈍い……!? そのままよけきれずに足元から絡みつかれて……

左足に巻き付いて、股の間をかすめて、腹に巻き付いて、服の中に入って、胸の谷間を通って、首と肩を締め上げながらそのまま縛り上げて宙づりにしたア——!?!

「ふあっ……ん……あんツ!」

「戻ってこい『黒影』——ツ!!」

『何ダヨ、折角拘束シタノニ』

やっべえ、今の絵面と栄陽院の声はさすがにやべえ……!

相澤先生、セメントス先生にゴーサイン出しかけてた……舞台袖でスタンバイしてたセメントス先生が強制終了して2人の姿を隠すとこだった……

解放されたものの、息が荒くて汗かいてる栄陽院の色気がヤバい。視界の中に前かがみになってる男子がだいぶいる……下手したら年齢制限かかりそうなバトルだ……

あと、攻撃仕掛けた常闇の方も何気にヤバい。精神状態が。

コレ終わったら切腹とかしねえだろうな。何か覚悟決めた目になつてんぞ。

さすがに今のは恥ずかしかったのか、栄陽院も屈み込んで胸の辺り押さえてもぞもぞしてるし……あ、ミッドナイト先生が試合続行するかどうか確認に行った。

……あ、離れた。マジか、続けんの？

「ていうか、生放送されてんだよな……苦情くるんじゃない？」

「来るだろ間違いなく……主に小さい子が見てる家から」

「コレ動画サイトとかで配信できんのか……？　ここからの展開にもよるけど、下手したら視聴に年齢制限かかるぞ」

「それ以前にオイラはこのバトルそのものがある種の企画モノに見えるて来たぜ……へへへ……」

「ヤバいつてほんと。永久が別な意味で有名になつちゃうよ……」

「うん……つていうか、さっきから永久ちゃんの動き、がくつと悪くなつてない？　今も常闇君の『黒影』に簡単に捕まっちゃったし……」

「……おそらく、先程はブラフで『激しく動けない』と言っていたのが、本当に動けなくなったからでしょう。今のあの服の状態で激しく動きなだすれば、間違いなく、その……」

「あかん、あかんよ！　ブラも着けてへんのに……そんなの『ポロリもあるよ』になつてまうやん！」

今の女子たちの考察を受けて、その場にいた俺達にも納得がいった。

確かにそうだ。あの服で今まで通りに動いたりすれば、間違いなく……こぼれる……！　何がとは言わないが！

「栄陽院——！ 負けるなア——！ 失敗を恐れるな、全て（の服）を捨てても勝利に向けて突き進め、お前の全力を世界に見せてやれ、Plus Ultraだア——!!」

そしてこんな時でもブレない峰田。魂胆をもう隠す気もねえな……いつそ清々しい。

女子たちからの視線は大変なことになってるが。果たして明日の朝日は拝めるんだろうか。

しかしその瞬間、ステージから信じられない言葉が聞こえて来た。

「そうだな峰田……失敗を恐れてちゃ、何もできないよな……!」

『ウソだろ!?!』

耳を疑うセリフに、峰田を含む1—A男女全員の声が揃った。

待て待て待て待て!?! 何する気だ栄陽院!?! おま、まさか本当についてうか、本気で……

『だめだよ永久!』『もつと自分を大事になさってください!』『これ以上服がなくなるのはヤバイよ! 私じゃないんだから!』『時には失敗を恐れることも必要よ』『あかん、あかんよ永久ちゃん!』『死ぬ峰田!』A組女子勢が必死で止め、耳郎がイヤホンジャックで本日何度目かになる制裁を峰田に叩き込む前でしかし……とうとう事態は動く。

またしても『黒影』がせまり、栄陽院の足元から巻き付いて拘束していく……しかし次の瞬間、最大限に身体能力を強化したと思しき栄陽院が、目にもとまらぬ速さで前に飛び出した。『黒影』による拘束を、力に任せて強引に振り切って。

しかし、逃がしてたまるかと『黒影』の手が突き出された。

その爪がジャージの背中に引っかかり……ぱりっ、という、不吉すぎる音と共に……

栄陽院のジャージの上が、完全に破れて宙に舞った……

誰もが思った。

『終わった……！』（社会的に）と

ジャージの下にかろうじて隠されていた花園が、禁断の2つの果実が、今露わにな………

………ってない!?

『あ——放送事故………ってねえ!? アレ、あいつ………何だありや? 下にもう一枚着て……いや、巻いてんのか? ああ、アレってそうか! さつき自分で破ったズボンの裾か!』

『こうなった時に備えて巻いておいたらしいな……まあ、面積はアレだが、事故が起こらなくて何よりだ……いや本当に。心から』

マイク先生の言った通り、栄陽院の胸には………さつき栄陽院が『動きにくい!』と言つて自分で捨てていたズボンの裾の部分の布が、サラシみたいに巻き付けられて肝心な部分を隠していた。相当がっちり結ばれているのか、激しく動いてもほどける様子は………ない!

いつの間にあんなもの………あ、さつきのエロ攻撃………もとい、拘束攻撃直後でうずくまっていた時か!

結び目も前側にあるみたいだし………間違い無さそうだ。あ、あの極限状況でなお勝つたために策を打つてたつてたのか………どんだけだよ!?

相澤先生の言った通り、隠せてる面積は大したことないが、0と1とは大きな違いだ! これで最悪の事態は免れた!

『そしてエ栄陽院、個性の『黒影』を振り切つて常闇本人目掛けて猛突進………こ、この動きはア——! ドロップキックだア——!!』

その速さ、その勢いのままに跳躍した栄陽院は、矢のように空を飛び、離れたところに立っていた常闇目掛けて、OPtのロボットヴィランを粉碎した必殺のドロップキックを叩き込む!

避けることができず、常闇の鳩尾に直撃。

幸い、あの時みたいなたタラメな威力は込められていなかったようだが………それでも勢いは相当なもので、常闇は『黒影』もろとも一気に場外まではじき出され、スタジアムの壁に激突して墜落………そのまま気絶したらしく、動かなくなった。

……その間際、『これが……報いか……』って聞こえた気がした。

「常闇君、場外！ 勝者、栄陽院さん、準決勝進出よ！」

その瞬間、今しが破れ飛んだボロボロのジャージを一応羽織るよう
にして着たところだった栄陽院は、全方向から叩きつけるような勢い
で押し寄せる大歓声（絶対意味が違うのが混じってるが）に、天高く
拳を握った左腕を突き出すことで応え、一礼してステージを後にし
た。

去り際に、何かミッドナイト先生と話してたみたいだったが……よ
く聞こえなかったな。

……なんつーか、濃い試合だったな……見ててどつと疲れた
……！

あと、横目で見てて……試合終了後にトイレに行く奴が……多い。
……理由はあんまり考えないでおこう。

ええと、次は確か……爆豪と切島か……間に休憩挟んでくんねー
かな……

第32話 TS少女とトーナメント⑤ 休憩時間ほか

常闇との試合、どうにか勝利できたはいいもの……かつてないくらいにジャージがボロボロになってしまった。これもう着衣としての機能を有してないな……着替えないと。

流石にこのカツコで次の試合に出ることはできない。つか、観客席に戻るにもどうかと思う。

上も下も着ているにも拘らず、被覆面積が5割を切ってるんじゃないかってくらいになった自分の体を見下ろして、そんなことを思う。マイク先生も言ってたが、放送事故にならなくてよかった。

ステージから降りてすぐ、すぐそこにいたミッドナイト先生に相談する。

「先生、ちょっと相談なんですけど……午前中の障害物競走と今の試合とで、予備含めてジャージが両方使い物にならなくなっちゃったんですが……今日って、購買とか開いてませんかよ……？」

「さすがに開いてないけど、その必要はないわ。クラスごとに割り振られてる控室の隅に、鍵のかかったロッカーがあったでしょ？ あそこに色々なサイズのジャージの予備が入ってるから、適当に見繕って持ってきてちやいなさい。鍵は事務室にいるエクトプラズム先生から借りれるわ」

とのこと。マジか、そんなのも用意されてたんだ……周到だな。しかし助かる。

「それは……すいません、助かります。ありがとうございます。代金の支払いとかは？」

「ないわ、無料。プレゼント」

マジか。気前いいな……

「実を言うと、体育祭ではこういうこと割とあるの。『個性』によっては服が燃えたり破れたりする生徒もいるからね、毎年。こちらでも電波に乗せて色々やってることだし、このくらいは必要経費扱いってわ

け。……去年は、燃えても破れてもいないのに全裸になった生徒もいたけどね……」

いらん情報を思いだしてしまったミッドナイト先生が、頭痛をこらえるようにこめかみを抑えているのに苦笑しつつ、私はもう一度お礼を言つてその場を後にした。

そうして、サイズの合うジャージを頂戴して無事に着替えた後、観客席に戻つて来た私は……

「いいですか栄陽院さん。前々から言おうとは思つていたのですが、あなたは自分が女性であり、他者から見ても魅力的な容姿をしているという自覚に著しくかけている部分があります。自分のお体が、肌が、決してみだりに他人に見られて平気なものではないのだということを確認なさってください。私や葉隠さんのように『個性』の都合上ということもなく、無警戒というだけで……」

八百万から割とガチトーンのお説教を食らっていた。

『怒る』という感じではなく、あくまで『諭す』という感じで語りかけられるうえ、正論のみで構成され、理詰めで延々と続くお説教は、ただ怒鳴られるだけのそれよりも、個人的にはずっとつらい。聞いていてすごくつらくなつてくる……しかも長い……。

ちらりとクラスメイト達に助けを求めるも、誰一人乗ってきてはくれなかった。ガツテム。

「永久、いい機会だからあんたちよつと考え方つてもんを見直しな。このままいくとどこかで取り返しのつかないことやらかしそうで心配だよウチら」

「けろ、そうね。まさか服があんなことになつても戦い続けるなんて思わなかつたわ……何があつても動じないのはヒーローとして精神的に優秀なのかもしれないけど、それでも動じなすぎよ」

「というか、なんで永久ちゃんつてこんなにも女の子らしい感性つてものを捨てとるん？ 言い方ちよつとアレやけど……どないな育ち方したらこうなるんやろ……？」

そりやまあ、最近の思ひだすことも最早少なくなつてきたけど、元・

男だからねえ……人格形成の段階で、その辺の価値観がそもそも混入して混ざってできちやっただろうさ。

「つていうか、私は早くも次の試合が心配かも……相手、爆豪か切島だよ？」

「わー、そうだった！ 切島君ならまだしも、爆豪君だったら……ヤバいよー、爆発だよー……色々はじけ飛ぶ予感しかないよー！ 今どきの漫画のお色気シーンみたいに！」

「それだったらむしろ大丈夫そうだけどね、アレらは肝心なところは破けないように謎の力に守られてるし」

「いや、最近のは結構過激だから、むしろ靴下だけ残して全部吹き飛ばんじやったりとかあるよ？」

「芦戸、葉隠、そのへんにしな。男共の耳に毒だから」

結局八百万のお説教が終わらないうちに、爆豪と切島の試合は始まってしまった。まあ、途中から観戦することはできたからいいけど。

どうやら、『硬化』によって爆豪の『爆破』から身を守ることができている切島が押しているようだ。なるほど、このへんも『個性』の相性ってわけか。

芦戸に聞いた話だと、騎馬戦では『爆豪の無茶苦茶な戦い方にもついていける、絶対に崩れない騎馬』つてことで、よき相棒だったようだが……一転して天敵だ。こりゃ、どっちが勝つかわかんないか？

そんなことを考えながら、私は客席に座った。ちようど、緑谷の隣が空いてたから、そこに。

「あ、栄陽院さん……その、大丈夫だった？」

私に気づいた緑谷は……気のせいかな、若干沈んだというか、重いトーンで声をかけて来た。どうしたんだろ、何か伏し目がちだし……疲れたのかな？

「ああ、大丈夫大丈夫。平気平気。ダメージはほとんど皆無に近かったから。動いてちよつと疲れただけ。緑谷こそ大丈夫か？ この後試合で、しかも相手轟だろ？ なんか、調子悪そうに見えるけど……」

「いや、僕は大丈夫。うん……いいんだ、君が大丈夫なら」

答えると、少し緑谷は元気になったようだけど、やっぱりまだちょっと調子悪そうな……

「あ、あの……でもさ……」

「うん？」

でも？と聞き返そうとした時だった。

——ぼん

「……………う？」

「その、さ……やっぱり栄陽院さん、もうちょっとその……気を付けて、じゃないけど、ちゃんとした方がいいっていうか……や、もちろんあの戦いで手を抜いてたとかは思わないけど、もつと自分がどう見えるか考えてさ……」

何だか緑谷は、ぐつと何か、感情を押し殺すようにしながら、つて感じで、歯切れ悪くそう言ってくる。

言いたいことはあるけど、上手く言えないというか……ストレートな言い方でなく、他の言い方を模索しながらというか……そんな感じだ。

……いや、私も上手く言えてないのはわかってるけども。

具合が悪そう、って感じじゃないが、やっぱりどこか調子かという……少なくとも、機嫌はよくなさそうな……のかな？ 何だろ、表現しづらい。こんな緑谷初めて……

(……いや、初めて……でもない、か？ こんな感じの、前にも確か……)

「こ、こないだも言ったけど、もうちょっとこう自分のこと、僕以外の人の目とか……その、気を付けてほしいです……うん」

そんな、八百万みたいに私を心配する感じのことを言ってくれる。やだ、嬉しい。

「あー、うん、わかった……気を付けるよ。なるべく」

「なるべく……うん、まあ……今はそれで……えっ？」

と、そこで緑谷は、はっとしたように、手すりのところに置かれている自分の手を見る。

同じ場所に置かれている、私の手も一緒に見る。

すなわち、今緑谷の手は、私の手に重ねるように乗つけて置かれて
いるわけだが……どうやら、今初めてそうしていたことに気づいたよ
うで、一瞬で顔が真っ赤になった。

え、さつき私に話しかけながら、すっごい自然な動きで『ぽん』つ
て乗せて来たのに……無意識だったんアレ？

「あ、あああああああのあのあの違違違ちがちがちががこれは
えっとそういうんじゃないかと……」

「落ち着け、落ち着け緑谷、深呼吸、ゆっくり息しろ」

気付くとそこからはもうなんかいつもの緑谷だ。あの朝と同じよ
うに、顔が真っ赤になって、頭の上に湯気が見える。

あー、何かこの、いつも通りのかわいい反応見て安心してしまう自
分がいる。

……けど不思議と、ちよつと残念な気もする。何でだろう？

『テンパる』を絵にかいたような有様になっている緑谷をどうにか
落ち着かせようとするが、緑谷の容体は悪化するばかり。まるで、今
まで押し殺していた（ように見えた）感情が一気に決壊してあふれ出
たかのような。何がせき止められてたのかはわからんけど。

真っ赤な顔で、自分の手（on私の手）を交互に見る緑谷だが、手
は放そうとしない。

いや、なんかむしろ……放したいけど手が言うことを聞かない？み
たいな感じに見える。

……思えば緑谷、今日なんかおかしいよな……今まで見た緑谷と違
う場面が多いというか、何というか。

さつきの違和感についても思い出したわ。機嫌の悪い緑谷。見た
のアレだ、障害物競走の時だ。私が緑谷を追い抜いた時、なぜからし
くない敵意のこもった視線が……

そんなことを思いだしながら、私は重ねられている手を見る。

本体はテンパってるのに、手の方はやけに優しく、添えるように置
かれている。

ただその手は、少しだけ……だが明らかに、私の手を握るような形
になっていた。

力とかはほぼ感じないけど、不思議と『放さない』っていう意思是感じられる。

例えば難しいけど……そうだな、まるで、雑踏の中、親が子の手をつかんで、はぐれまい、どこにも行かせまいとしているような……いやまあ、私は私で何を言ってるんだっていう……

その時、ふと、あることを思いだした。

さつき緑谷が言っていた言葉の中……そこにさりげなく紛れ込んでいた、よく考えるとちよつと不自然というか、これもまた『緑谷らしくない』フレーズに。

『こ、こないだも言ったけど、もうちよつとこう自分のこと、僕以外の人の目とか……その、気を付けてほしいです……うん』

……緑谷以外の人の、目？

緑谷のは、いい？ それ以外は、ダメ？

……そう言えば、最初に睨まれたあの時、私は誰に注目……というより、峰田と一緒にいたっけ。

そして今は、常闇戦でちよつとアレな状態になって、観客の前でまーその……サービスシーンの戦いをしてしまった。八百万にガチトーンで怒られるくらいに。

それらが緑谷は気に食わなかった……峰田や、常闇や、他の人の目……

そしてさつきふと思いついた、『僕以外の目』……『放すまいとするような手』……んんん？

……アレ？ もしかして緑谷、しっ……

——ドゴオオオオン!!!

「ツ!？」

その瞬間、ひととき大きな爆発音が響いて……私達ははっとして前を……試合場の方を見た。

とつさのことに、驚いて緑谷もぱつと手を放してしまつて。

見ると……切島が横腹を抑えて苦しそうにしている……対する爆豪は、最早見慣れた凶悪なヴィランスマイルを浮かべている。

あー、これは……形勢逆転した感じか？

「テメエ、さつきから全身気張り続けてんだろ？ ずっとそうし続けてりや、いずれどつかほころぶわ……『硬化』させた部分と動きが違げえから、見りやすぐわかんだよ！」

その咆哮を反撃の狼煙に、爆豪はさつきまでの劣勢のうつ憤を晴らすかのように、両手の爆発フルスロットルで切島に襲い掛かり……怒涛の絨毯爆撃で切島は一気に吹き飛ばされて、そのまま押し切られて決着した。

勝者、爆豪。つまりは……私の次の相手つてことだ。またやばいのが来たな……

なお、さつきの爆音の驚きのせいで、なんか緑谷との会話は中途半端な感じで終わってしまったというか、その瞬間の思考ごと吹っ飛んだというか……

あの時に何か、重大というかすごいいいことに気づきかけた気がしたんだが……うーん……

緑谷は……ああ、逆隣の麗日と飯田と、『すごかったね！』つて今の試合の感想談義に入っちゃったな。

……まあ、いいや。そのうち思い出すだろ。

『OKリスナー！ ここで少し長めに休憩をとるぜ！ 例によってステージの修繕も必要だからな、次の試合は20分後、いよいよ準決勝だ！ 見逃せねえ場面が来ること間違いなしだ、今のうちにトイレ行っとけよ！ そしてここで今一度、ベスト4に残った連中を紹介させてもらうぜ！

第1、第2種目共にトップで通過！ スパーク迸る今大会の台風の目！ 緑谷出久！

トップヒーローの血を引くA組の推薦入試枠！ 放つ冷気で全て

を凍らせる！ 轟焦凍！

ダイナミックな戦いと、何が起きても動じない不動の心で魅せる紅一点！ 栄陽院永久！

圧倒的な戦闘センスと文字通り爆発的な火力！ 全てを粉碎する破壊神！ 爆豪勝己！

果たして表彰台のてっぺんに立つのはこの中のどいつだ？ 見逃すんじゃねーぞリスナー諸君！ それでは準決勝第一試合まで、センキューー！』

☆☆☆

そんな感じで一旦休憩時間に入ったので、今のうちに少しでも体を休めることにした。

ついでにエネルギーの補給も。ちょうどいいのがそこで手に入っ
たし。

「えー……お前何してんの、栄陽院……」

と、いつの間にか医務室から戻ってきていた切島が、何かこつちを見ながら言ってくるんだが。『マジかよ』って表情になって。

「……つぶは。何さ、そんな理解できないようなもんでも見るような顔して？」

「や、そりやだってそんな……運動前にそんなことしてる奴見たら誰だっかってこうなるだろ」

私？ 今、500mlのコーラ一気飲みしたところだけ。ただし、よく振って炭酸ぬいた奴を。

空になったペットボトルを、後でまとめて捨てるため、今までに空けた4本が入ってるゴミ袋に放って入れる。その上で、6本目を開けて口をつける。

視界の端で上鳴と峰田が『おいおいおい』『死ぬわアイツ』ってどつかで聞いたようなセリフを言ってるのが見えたけど、なるほど切島も同じ感じのこと考えてるのかね。

間に1試合挟むとはいえ、何をそんなお腹がたぶんたぶんになるほ

ど飲んでるのかって。

と、思ったら、またしても何か聞いたことあるセリフが意外な角度から。

「ほー……炭酸抜きコーラか。考えたなっつーか、大したもんだ」

「砂藤？ お前何か知ってるの？」

「知ってるっつーか何っつーか……炭酸を抜いたコーラってのは、エネルギーの効率が極めていい、って話は聞いたことがある。一昔前のアスリートなんかは、競技直前に愛飲してた者もいるらしい」

「もちろん、そういったものよりも、専用に調整されたドリンクなどの方が吸収効率がいいのでしようが、手軽に手に入ってすぐに飲めるという点では評価できるものでしよう。もっとも、それを余すことなくエネルギーに変換でき、大量摂取を苦としない消化能力があつてこそです」

八百万まで加わって解説をどうも。ふー……6本目、これで3リットル。

カロリーにして1500キロカロリーくらいか？ 飲み物系は消化吸収は早いけど、固形物に比べてエネルギーの補給効率は悪いんだよな。

「じゃあつまり今、栄陽院は……エネルギーの補給中つてことか？」

「次の試合に向けてな。相手が相手だ、どれだけ蓄えても……安心つてことはない」

「確かになあ……」

自分がついさつき戦った男の強さ、そして容赦のなさを思いだしてだろうか。ある程度納得したようにそんなことを言っていた。

……にしても、やっぱ水っぱいもんばかり食べてると腹の調子が変わになるな……ちよつと固形物もいれるか。

ちよつどいいところに、経営科の生徒が売り子しながら歩いてたので、呼び止める。

雄英には『ヒーロー科』『普通科』『サポート科』『経営科』の4つがある。

『ヒーロー科』は言わずもがな、自分の能力をアピールしてプロへの

覚えをめでたくするため、『普通科』は優秀な成績を残してヒーロー科に編入するため、『サポート科』は自分の発明や研究成果を外部の企業などにアピールするためと言った風に、体育祭に臨むメインの理由がある。

ただし、『経営科』は基本的に体育祭に参加するメリットはない。彼らは例えば、ヒーローが事務所を立ち上げた時なんかには、事務所経営を請け負ったり、裏方としての商売の手管を学ぶ立場だ。商業系の専門学校や、大学の経済学部みたいなもんだらうか？

ゆえに今は、体育祭で活躍した選手を材料に、『〇〇の事務所経営を請け負ったとして売り出しの方法は……』みたいな感じでシミュレーションしたり、売り子として軽食やらドリンクを販売したりして、商人としての勘を磨く場としている。

そのへんあちこちを歩いてるので、声をかければ捕まる。おーい、何かつまめるもんじゃない？

「はいよー！ おー、A組の栄陽院さんか、お疲れさん。何にする？」
「炭水化物が食べたい。焼きそばパン……2つかな。ええと、財布財布……」

ボストンバッグの中をまさぐって財布を探す、これかな、よいしよつと。

——ずぼつ ↑ さつき着替えた時に突っ込んだブラジャー（破損）

あ、違った。えーと……

「緑谷、コレ持ってた」

「え？ うん……うん!？」

反射的に返事をしたものの、自分がいま手渡されたものが何なのかをよく見て理解した途端、手の中にあつたブラジャーを二度見した緑谷。

しかしそんな彼に構わず、私はもういちどバッグの中を探し……あつたあつた。

はいお金。はい商品ね、ありがと。

こんな状況でも営業スマイルを崩さない経営科の彼にプロ根性を感じつつ、お金を払ってお目あての焼きそばパンを2つ手に入れた私は、財布と、今緑谷にもつてもらったブラジャーを中に戻そうとして……

……あの、緑谷？ そんなに力いっぱい握りしめられると、取れないんですが。

や、まあ……どっちみちもう壊れてるから捨てるしかないんですけどさ。

「え、壊れてもうたん？」

「第1種目から動きまくって無理させてきたからなあ……常闇戦でダメになった。予備持ってきてたからよかったけど、修理コレ難しいかもなあ……つていうか、緑谷ー？ 聞こえてる？ おーい？」

握りしめて放そうとしない緑谷の顔の前で手をぷらぷら降ると、放心状態からはつとしたように意識を取り戻した。

そしてすぐに、手を開いてブラジャーを放したけど……

「……欲しいの？」

「え！？ いい、いやいやいや違います別になんかなくて！ びっくりして固まってただけだから……」

大慌てで首と手をぶんぶん振って否定してくる緑谷。まあ、だろうとは思ってたけど。

それに、どっちみち壊れてるんだからあげたところで使えないだろうしね。……いや、それ以前に男子がブラジャーなんか貰っても使えない道無くて困るだけか。まあ、当たり前だな考えてみれば。

……だというのに、視界の端で、食い入るように見つめてくる峰田と上鳴は何なの？

峰田に至っては手が、委員長決めの時の飯田ばりにめっちゃ拳手してそびえたってるし。

女子たちの白眼視にも負けず、この場のアレな空気にも負けず、彼らの視線は私が持っているブラジャーに注がれている。……いや、あげないよ？ たとえもう捨てるだけだとしても。

「3,000円！」

「5,000円!」

何で値段付けた。買おうとするな、売りもんじやないから。

周囲の女子たちの視線がさらにアレなことになっているが、気付いていないのか、気付いていて気にしていないのか……。

「6,000円!」

「7,000円!」

「8,500円!」

だからそんな値段上げても……おいちよつと待った、何か声が増える気がするんだけど?

よく見ると、A組じゃない男子も何かせり(?)に参加してるみたいだし……B組と……見覚えのないのも何人かいるな……ひよつとして普通科も交じってる感じ?

なんか知らんが私の下着が大人気だ。そんなに欲しいのか、壊れるのに。

値段は1万円の大台を超えてなお上がっている。何コレ、不思議な気分だ……

本人の意向そっちのけでオークションが始まっているんだが……これだけ評価されて欲しがられてるのを喜ぶべきなのか、私は?

っていうか、別に売る気なかつただけど、コレ出品しなきゃいけない流れ?

「いや、喜んでどうする、むしろ怒れこんなん」

「せんでええよ、出品。普通に捨てよ? 普通に」

ツツコミ気味に耳郎と麗日がそう言った。だよね……

そんな、なんかどうしようもない空気の中、

「え、えつと……それじゃあ僕、次試合だから……そろそろ行くね」

緑谷はそう言って、おずおずとその場を後にして行った。

ちなみに私の下着オークションに参加してた連中のうち、B組からの参加者は拳藤が全員連れて帰った。物間でおなじみの当身で気絶させて。

普通科の連中は心操が『洗脳』して連れて帰った。『騒がせてすま

ん』って一言頭まで下げて。いやいやこちらこそ手間取らせてごめん。

なお、上鳴と峰田はイヤホンジャックの一撃で散った。今日何度目だ……南無。

第33話 TS少女とトーナメント⑥ 緑谷VS轟

「君の、力じゃないか！」

スタジアムに響く緑谷の声。

相對している轟に向けて、心の底からの叫びをぶつけるその姿は……彼ら2人の間に一体何があったのかを知らない私でも、心を震わされるものがあつた。

それを真正面から受け止めている轟の心中は、いかほどなものか。驚愕やら困惑やら何やら、色んな感情を浮かべて、私を含む観客席のクラスメイト達が……いや、全ての観客が見守る中で……ステージの上に変化が起こる。

今までは寒々しい白が埋め尽くしていた空間に……赤とオレンジの混ざつた、暖かい色が迸つた。

ちよつと時を巻き戻す。

『第一、第二種目からともに注目度抜群の2人！ ここまで来たら多くを語る必要はねえよな!? 緑谷出久VS轟焦凍、スタートオ!!』

マイク先生の合図と共に始まつた緑谷と轟の試合は、やはり開始早々に轟が氷結を放つて緑谷の動きを封じようとした。

しかし、それを読んでいた緑谷は、『デラウエアスマッシュ』で衝撃波を放つてそれを粉碎。

直後、また別な方向から迫ってくる轟の氷を、また緑谷が砕く……しばらくこれが繰り返された。

轟の冷気のコントロールはかなり繊細で正確だ。いろんなルートで、時には蛇行させるようにして凍らせてくるし、短いスパンで連続して放ってきたりする。

緑谷が、拳を振つて使う『テキサスマッシュ』じゃなく、指ではじく『デラウエアスマッシュ』をメインで使つてるのは、そのあたりが理由だろう。威力は弱いが連射も小回りも利くし、両手連射なら

よっぽど大規模な氷結でない限り打ち消せる。

それでも対応できない規模の奴が来た時だけ、『テキサスマッシュ』。氷を砕いて余りある威力で、その向こうの轟にまで爆風を響かせている。

が、轟は背後に大きめの氷壁を作って、リングアウトにならないようにしている。

「轟はやっぱ、緑谷を近づけさせないで戦うつもりみたいだな」

「それはまあ……緑谷くんのパワーは、下手をすれば一撃当てれば勝負を決めてしまえるレベルだからな。警戒は当然だろう……だが同時に、緑谷君も恐らくは轟君に接近するつもりはない。だからこそああして中距離で戦っているんだろう」

「? どうして? デクくんやったら一気に近づいて戦った方が有利やのに」

「近づくとすることは、それだけ近くで轟さんの冷気にさらされるということです。氷結の規模によっては、攻撃する暇もなく一瞬で行動不能にさせられる可能性もありますわ」

膠着状態の戦況を、各々分析しながら見ている中、ふと切島がこんなことを言った。

「けど爆豪といい轟といい、強烈な範囲攻撃ポンポン使ってくるよな……俺らみたいな、そういうの持ってねえ奴はそれだけで不利だ」

「緑谷はそれ、力づくでかき消してるけどな」

「ポンポンじゃねえよ、バカ。『個性』ってのはあくまで身体機能の1つだ……筋肉酷使すりゃ筋繊維が切れるし、走り続けりゃ息が切れる。同じように、『個性』にも何らかの『限度』はある」

と、爆豪。頭は意外とクレバーなんだよな、こいつ。

「その理屈で行くと、轟にも何らの『限界』があるってことか? もしかして緑谷は……」

「それを見極めるのめかねて、『中距離』で戦っているのかもしれないわね」

……だんだんと、クラスの皆が真実に近づきつつあるな。

今迄の試合、そのほとんどをことごとく瞬殺と言っていいほどの短

期決戦で決めてきた……それゆえに誰も気づかなかった、轟の弱点に。

「飯田、ちょっと聞きたい、っていうか確認したいんだけどさ……」

「ん？ 何だい、栄陽院君？」

「第2種目の騎馬戦、轟と組んでただろ？ その時さ……轟の体に触ってて、どうだった？」

視界の端で、今の会話の一部分に反応したらしい峰田がぐるん、と首を回してこつちを振り向いて来たが、気にしないようにして……つか、今の一瞬で何を想像した？

「冷たくなかったか？ 轟の手とか足、特に左側」

そして問いかけには、飯田のみならず、同じくチームだった上鳴と八百万も答えてくる。

「え？ そりゃあ……氷使ってるんだし……結構冷たかったぜ？ ていうか、寒かった」

「ええ、そうですね……事前の作戦会議の時も、もし予想以上に冷えるなら、防寒対策の手袋が何か使ってくれ、と言われました」

「え、マジで？ 俺言われてねえんだけど……」

「轟君の冷気は主に体の右側から出るからじゃないか？ 上鳴君が支えていたのは左側だから、そこまで強くは届かないと思っただろう。実際、今の試合を見てもわかるが……彼の冷気のコントロールはとても精密だしな」

「あーそうか。それで……あれ、でも……」

その時、ふと上鳴が何かに気づいたような、あるいは何か思いだしたような仕草をした。

「どうしたの、上鳴ちゃん？」

「え、ああ梅雨ちゃん。大したことねえんだどさ……ラストの方、一瞬だけ熱くなった場面があったなーって。ホラ、最後の最後、緑谷の反撃を防御するために、轟の奴左側の炎使っただろ？ その時はさつきまでと違って手が熱くなってさ……ちよつとびっくりしたの覚えてる」

「その時あんたウェイってたらしいのによく覚えてるね」

「ウェイってたつてゆーな！ てか耳郎なんで笑うの!？」

ぶくくく……と、思い出し笑いなのに微妙にツボったらしい耳郎に上鳴が反論する中、私は『やっぱりな』と、自分の中の仮説をほぼ確定したものにしていった。

同時に今の話を聞いて、八百万と飯田もはっとしたようだ。

「ま、まあ、熱使つてんだから熱くなるのは当たり前なんだけど……八百万も熱かっただろ？」

「……いいえ、冷気に阻まれたのか、私の所にまでそのような熱は届きませんでした。しかし言われてみれば……あの瞬間より後、手元から感じる冷たさが少し和らいでいたような気が……」

「僕も思いました。というか、そういうものだと思うって今まで違和感に思っていなかったのだが……僕は前側の騎馬として、両手で轟君に触れていたんだが……今になって思えば、彼は、左右で体温がそこまで大きく違わなかった。無論、冷気を使っている右側が『寒い』『冷たい』とは思ったんだが、『冷たい』はむしろ、程度は違えど両足に共通して感じていた。そして……最後に熱を使った瞬間、どちらの体温も少しだけ温まっていた」

それらの話を聞いて、クラスの中にも何人か、『それ』に気づく者が始まる。

「どーいうこと？ 轟の氷つて右からしか出ないから、右側が冷えるならむしろわかるけど……上鳴が触つてた左側も同じように冷えてたつてことだよな？」

「しかも、左から熱を放つと、八百万が触つてた右側も温まった……そして、飯田曰く、轟の『体温』は、冷たいって点では共通していたが、左右でそこまで変わらない……」

「それつてつまり……轟の奴、冷気を使うと体が冷えて、体温下がるのか？ しかも、右側だけじゃなくて、全身」

「直接触れてた飯田がそう感じたつてことはそうなんだろう。それにその予想、どうやら正しいみたいだ……。見てみ、轟の奴……右側だけじゃなくて、左側にも体にだんだん霜が降りてきてる。それに、動きもだんだん悪くなってきてる」

そう言った私が見ている先に、皆注目し直す。

試合開始直後と比べて、轟は動きがどこかぎこちない。もともとあんまり動かないスタイルではあったが、よく見ると体が震えているし、氷結攻撃自体のキレも悪くなってきた。凍らせるスピードが遅いし、威力も弱いようだ。緑谷の『デラウェアスマッシュ』で、より大きく砕けている。

「人は体温が下がった状態では、筋肉の柔軟性も、関節の可動域も大きく落ちる。最高のパフォーマンズには程遠い動きしかできなくなる……一流のアスリートやらスポーツマンほど、入念にウォーミングアップをするのはそのためだ。爆豪とは逆で、勝負に時間がかかれればかかるほど、轟は自分の冷気で追い詰められる……言わば、尻すぼみ型ってことか」

今までの試合は、どれも瞬殺だった。だから誤魔化した。

さらに言えば、第1種目は走ることである程度体が温まるから、第2種目は轟は『騎手』で、自分で動く場面が少なかったから気づけなかった。

それがここに来て……瞬殺できない力量を持つ緑谷と当たって長期戦になってしまったことで、それが初めて露呈している。轟の、弱点が。

……そして同時に、それが本来は『弱点』たりえないはずだということも。

「でもさ、上鳴が言ったことがホントなら、轟って左側の炎を使えば、逆に体温上がるんだろ？ 左右どっちもバランスよく使ったら、それ弱点じゃねえじゃん……何で使わないんだ？」

「……『戦闘において、左は絶対に使わない』……騎馬戦の直前、彼はそう言っていた」

飯田の言葉に、クラスメイト達のほぼ全員が『どうして』という、疑問を持った顔になった。

何か理由があるんだろう、とは思っている。でも、それが何なのかはわからない。そんな顔。

そして、恐らくその理由を知っていると思われるのは……今まさ

に、何か覚悟を決めたような顔で、ステージ上で轟と相対している……

（緑谷だけか……やっぱりアイツ、何か狙ってる……というか、轟に『何かしようとしてる』な？）

恐らく、彼お得意の『お節介』の類だろうとは思う。

けど、かなり厳しいな……何せ………緑谷だって、もうあんまり余裕はないはずだ。

☆☆☆

「……指、動きが悪くなってきてるな」

「……！」

ステージの上で、もう何十回目になるか、氷結攻撃を砕かれた轟が、呟くように緑谷に言った。わずかに強張った緑谷の表情を見て、轟は続ける。

「入学してすぐの頃に比べて、お前の動きは確かに恐ろしくよくなった。ペースを考えれば異常なほどに早くな……でも、どうやら攻撃に力を使うのに。まだ完全には慣れてないな？ お前が当初から散々悩まされてた『反動』……それをまだ、克服できてねえ」

「……！」

「腕や足、拳はまだいい。体の中でもある程度大きく大きい部位だから、力を制御できてれば十分に耐えられるらしいな。だが、それよりも細くて脆い『指』は……その空気弾を多用すると、殺しきれない反動が蓄積してダメージが無視できないものになる。さつきから左右の手で、色んな指で代わる代わる放ってるのはそのためだろ？ どれか一本だけ酷使すると寿命縮まるんだろうな」

見抜かれている。緑谷はそう感じた。

永久との特訓の中で、確かに自分は反動なしで戦う術を身に着けた。

しかし、『動く』ことを優先的に鍛えていたために、たった2週間でどうしても時間が足りず、轟の言うように、指で力を使うところま

で完全に、繊細に制御することはできなかつたのだ。

永久曰く、『あと10日、いや1週間あればどうにかなるのに』とのことだったが、ないものねだりをしていても仕方ない。

むしろ、この2週間……いや、永久と修業を始めた期間の進歩はそもそもが破格だ。

それがなければ、自分はまだ1発1発の攻撃で自分の体を壊してしまふような、実戦には程遠いコントロールのままだっただろう。緑谷はそう直感していた。

(今ある手札で何とかするしかないのはわかつてたことだ、見抜かれたって関係ない。それに……)

「それは君も同じだろ、轟君……震えてるよ」

「……！」

『個性』の反動は自分に限った弱点ではない。ここまでの戦いで、緑谷もそれに気づいていた。

轟の……冷気を使えば体が冷えるという弱点に。

それに加えて、轟が、それを解消できる『左側』を使わない理由も……緑谷は、昼休みの間に、他ならぬ轟本人から聞かされたことでそれを知っていた。

……本当は爆豪もそれを陰で聞いて知っているのだが、口にはしない。観客席から腹立たしそうな眼付きで睨んでくるだけだ。

父親であるNo.2ヒーロー『エンデヴァー』との確執。

強い『個性』を持って生まれたがために、他の兄妹と離されて育つた孤独。幼い頃からの虐待に近い過酷な訓練。それをかばって徐々に病んでいき、自分に煮え湯をかけるまでに憔悴して病院に隔離された母。それら全ての根源である、父への憎悪。

だから、炎を使わず、氷だけで、母の力だけで戦い抜くと決めて……

——ドゴオツ!!

「がっ……!?!」

『おーっと強烈なの入ったア——! 緑谷、ここに来て攻勢! 轟の氷結を振り切って、右の拳が炸裂! 得意のインファイトでここから一気に攻め始めるかア!?!』

氷結が弱まったことで、緑谷を一気に捕らえるだけの力を出せなくなった轟は、警戒していた接近戦に持ち込まれて一気に不利になる。けん制のために氷を放つも、それも迎撃ではなく回避で対応されてしまう規模に留まる。

「僕は君じゃない！ だから、君の過去を聞かされたって、君の気持ちはわからない！ でも、だからって全力を出さずに一番になるうだなんで、いくらなんでもふざけるなって、今は思ってる！」

消耗は互いに同じ、しかし、流れは確実に変わってしまった。緑谷を捕らえられるほどの冷気を出せない轟に、1発、また1発と拳が突き刺さる。

「皆、本気でやってる！ 目標に、理想に少しでも近づくために！ 期待に応えるため……誰にも負けないため……誰かを支えるため……人それぞれ目指すものは違ってても、そこだけは絶対に変わらない！ 僕だってそうだ！ 半分の力で勝つ？ 全否定する？ 君の理想は、そんなものの先にあるのか!? そんなやり方で本当に手に入るものなのか!? 一体君は何になりたいんだよ！」

そしてそれ以上に、言葉が突き刺さる。
「それでも、俺は左を……俺は、親父を……！」

「君の、力じゃないか！」

そして、場面は冒頭に戻る。

「使った……！」

観客席で、飯田はそれを驚きと共に呟いていた。

目の前で、轟の左半身から炎が吹き上がっている光景を見て。

「俺だって……ヒーローに……！」

轟の周囲にある氷が、その熱気で溶けていく。

しかし、右半身が生み出す冷気そのものはむしろ上がっていく……というよりもむしろ、本来の勢いを取り戻していくようで、作り出される氷は、炎に負けずに大きく育っていった。

『焦凍オオオオ!!』

驚くクラスメイト達の耳に、突如そんな声が聞こえた。

いや、スタジアム全体にとどろくような音量で、その声は響き渡っていた。

『いいぞ、やっと己を受け入れたか！ それでいい、俺の血をもって俺を超えていけ！ 俺の野望をお前が果たせ！』

見ると、離れた場所で観戦していた轟の父親……エンデヴァーが絶叫していた。

実況のプレゼント・マイクは『親バカ』とぼそつと言っていたが、そんなことを気にすることもなく、上機嫌で、狂喜とすら言えそうな笑みを浮かべている。

しかし、轟はそれを一瞥すらせず、目の前の緑谷だけを見ていた。

その直後から、轟の左右に冷気と熱気が吹き荒れる。

目には見えなくても、その周りに湧きあがる氷と、燃え盛る炎がそれを示している。今までと比較してなお別格のエネルギーが周囲を席卷する。

「敵に塩を送ったんだ……情けねえ負け方すんじゃないぞ、お前も本気出せ！」

「もちろんだよ……行くぞ！」

「来い！」

その瞬間、轟はステージ全体に……瀬呂戦でみせたものを、低く、その分より広く凍らせるような大水結を放ち、それをもって津波のように緑谷を飲み込もうとした。

しかし緑谷は、初戦で永久が見せたような踏み込みによる衝撃で、自分に届かんとする氷を砕いてそれを防ぐ。

が、そこで轟の攻撃は終わらない。

緑谷のいるところを避けてできた氷を、そのまま成長させて、ステージのほぼ全体を凍らせ……その状態で、左側を過熱していく。

ボボボボボ……と、短く爆ぜるような音を立てて燃え上がっていく左腕。

それを、そしてこの状況を見て、緑谷は轟の意図を悟った。

もともと緑谷は、生粋のヒーローオタクであり、様々なヒーローについて調べ、研究してきた。最早習性とすら言えるそれは、当然、クラスメイト達にまで及んでいる。自分が知っている限りのクラスメイト達のデータをノートに書き連ね、分析している上……それぞれの『個性』を使って、どんな戦い方ができるか、どんな必殺技が出せるかというところまで考えていた。

そんな緑谷だからこそ、この後に起こることを予想でき……理解した瞬間、彼は、今までつけていたりミッターを外すことを決断した。(轟君の背面の氷壁、これだけ冷やされた冷気、そして、一瞬だけけど間近で感じたあの熱量……っ……これしかないか。……久々にリカバリーガールに怒られるな……！)

全身を覆うスパークがさらに増し……特に、右腕に力が集中している。拳を握り、大きくそれを後ろに振りかぶる。

その光景を見て、轟もまた緑谷の意図を悟った。今まで何度も目にしてきた彼の力の中でも、特に鮮烈で印象深い記憶となっている……拳の一撃。アレが今、自分に向けられようとしている……

それでも怯むことなく、轟は左腕を突き出して、全力で炎を、熱を放つ。

同時に緑谷は、こちらも全力で拳を前に突き出す。

いつものように、振りぬくと同時に、喉の奥、腹の底から声を張る……その瞬間、

迫りくる熱波、ぶつかり合う衝撃の向こうに……緑谷は、確かにその声を聞いた。

「——緑谷……ありがとうな」

その瞬間、すさまじいまでの爆風が吹き荒れ……観客戦全体が暴風に襲われて、ものが、人が飛ぶまでの事態が起こった。

『何コレえええええ!!』

A組の観客席……のみならず、スタジアム中でそんな声が響き、小柄な者（峰田など）が吹き飛ばされて席から転げ落ちていた光景もちらほらあった。

微動だにせず立っていられたのは、エンデヴァーなど、一部の体格のいい者だけだった。

とつさにセメントスガ、ステージの周囲……特に、爆心地となったステージ中心付近を壁で覆っていなければ、もつとひどいことが起こっていただろう。

『何今の……お前のクラスマジ何なの?』

『轟が凍らせるだけでなく、そのたびに緑谷が砕いて、空気中に氷の粒が舞って……延々その繰り返しで散々冷やされた空気が、瞬間的に熱されて膨張したんだろう。それが、緑谷の全力の一撃と真っ向からぶつかって……まあ、御覧の有様だな』

『だな』じゃねーよ! それでこの爆風って、どんだけ高熱だったの! それと張り合う緑谷も、どっちもとんでもねーな……何も見えねーや。おいどーなったア!? 勝負は……』

煙が徐々に晴れる。ステージが、見えるようになる。

皆が最初に注目した、盛大に崩壊したステージの中心には……誰もいない。

ステージの端を見て見ると……両足をくるぶしのあたりまでめり込ませ、場外ギリギリのラインで踏みとどまっている、緑谷の姿があった。拳を振りぬいた、その姿勢のまま。

全力で踏ん張った結果がコレなのだろう。ステージの中心あたりから、それを示す軌跡がコンクリの地面に深々と刻まれていた。

腕は内出血で真っ赤に腫れ上がっている。A組の者達にとっては、何度か見たことのある姿だ。

その反対側で……叩きつけられたのか、壁にもたれかかって、眠るように気を失っている轟の姿があった。右半身に降りた霜と、左半身から上がっていた炎は、どちらも消し飛んでしまっている。

勝敗は決した。それを確認した主審のミッドナイトが声を上げよ

うとしたその瞬間……

——ぼつり

「……雨？」

気付いた誰かが言った。

空には雲一つない……とまでは言わないが、どう見ても雨など降りそうにない好天だ。だというのに、次々と降ってくる雨粒。崩壊したステージを濡らすそれを前に、啞然とする観客たち。

彼らの中には、およそ1年前……あの現場に居合わせた者もいた。

「あの野郎……っ……いー」

その時のことを、思いだす者もいた。

『ヘドロ事件』。

その時に巻き込まれた中学生と、飛び出した中学生。そのどちらもが、この会場にいる。そのうちの1人が……あの時と同じように、大衆の目が向けられる中で、ささやかな雨に打たれていた。

『何だコレ、天気雨？ 狐のウエディング？』

『天候そのものが変わったわけじゃない。衝撃で粉々になった氷の粒が爆風で上に吹き飛んで……上空で溶けて水になって落ちて来た……ってどこか。その証拠に、固形物が混じってるし……ほらな、すぐ降りやんだ』

『もう俺今日は何がもう起こっても驚かねえ自信ある。まあ、ともあれ……』

「轟君、場外！ 勝者、緑谷君……決勝進出！」

その瞬間、巻き起こる大歓声の中、緑谷出久は……憧れのヒーローと同じように、左の拳を握り、天高く突き上げていた。

第34話 TS少女とトーナメント⑦ 永久VS爆豪

『大 ☆ 崩 ☆ 壊したステージの修復もようやく終了！ 準決勝第2試合、ようやく始まるぜ！』

アナウンズと共に、私と爆豪はステージに上がる。

言葉は交わさない。互いに無言のままだ。

『今度の対戦カードは、どちらも今大会、別な意味で波乱を巻き起こしてきた2人！ R18限界ギリギリに行くジャイアントヴァルキリー、栄陽院永久！ 対！ R18—Gの限界ギリギリを吹っ飛ばすデンジャラスボンバー、爆豪勝己！』

……今の紹介文は流石に私もちよつと一言モノ申したいんだが……

まださっきの戦いの興奮冷めやらぬ会場は、次なる試合にもさぞかし期待していることだろう。……荷が重いんだけどな……正直、あそこまですごいのの後とかになると。

もつとも、それで余計に爆豪が火イついてる可能性は高いけど。

さつきから視線がもうなんか……人殺す直前の凶悪犯って感じた。

緑谷への苛立ちも乗つけてきてるんじゃないかって思うくらいに。

恐らくそれがそのまま攻撃性に反映される。

かといってコイツは、それで周りが見えなくなるような奴でもない。

戦いに関しては本当に天才の領域にいるのだ。

……それにしても、この歓声……

——爆豪！ 爆豪！ 爆豪！

——爆豪！ 爆豪！ 爆豪！

さつきまでヒール役全開だった爆豪にこの声援……まあ、何を期待してるのかはわかりやすいが。

『つーか俺今からこの2人の試合心配なんだけど！ 毎回必ず何かしらハプニングを起こす栄陽院と、何が起ころうと一切遠慮しねえ爆豪のコンボだぞ!? おまけに会場中に爆豪コールが溢れかえってるし、

これ以上ないってくらいに何を期待してんのかわかりやすいなおい！』

そんな雑音にも一切耳を貸さず——こいつの場合声援すら含めて雑音だと思っても驚かないな私は——ステージ上でぎろりとらみを利かせる。

「剥かれるのがこえーならさっさと降参しろ。俺の目の前に立つ以上、中途半端な覚悟で戦るのは許さねえ」

「相変わらずそーいうとこまじめだね、あんた。セリフが完全に悪役だけど……ここまで来た以上、こつちも中途半端で終わるつもりはないよ。安心しな、マイク先生はああいってるけど、私は何が起ころうが戦いの中のことを恨んだりする気はないから」

「そうかよ……じゃあそつちも安心しろ。途中でマップになろうが止まらねえぞ、完膚なきまでに爆破してぶっ殺して勝つ」

——うおおおおお!!

——爆豪！ 爆豪！ 爆豪！ 爆豪！

『戦闘前会話が既に不穏だー！ おいリスナー共、男として気持ちはわかるが歓声上げんな！ ヘイ、ミッドナイト！ セメントス！ 万が一の時は頼むぜマジで！』

「両者、審判による停止宣告には絶対に従うこと。いいわね？ では……」

『レディー………スタート!!』

——ドゴオオン!!

開幕と同時に顔面目掛けて手のひら爆破が叩きつけられてきた!?

慌ててのけぞって避けるが、その余波でジャージが……くっ、またかよ！

しかもまた容赦なしに、もう片方の手で私の肩をつかんで逃げられなくし、さつきと同じように顔面目掛けて爆破を……

食らうとさすがにまずそうなので、大きく体をひねって拘束を無理やりほぐく。

同時に爆破の打点もずらして、側転の要領で横に抜けて距離を取る。あつぶな……ホントにあつぶな！ 開幕から決められるとこ

だった！

わかっちゃいたがホントに躊躇も容赦もないな！

『いきなり来たー!? 爆豪ガチで容赦なし！ 開幕の一撃が顔面狙いってクレイジーすぎだろ！ そしてやっぱりこうなるのか!? 栄陽院のジャージが肩出しドレスみたいになっちゃまったぜ！ 俺ってばこの後が怖くてたまらねえ！ 頼むからこれ全国生放送だってお前ら忘れな……』

「全部吹き飛ばしたらああああ!!」

「やれるもんなら……やってみろお!!」

『聞いてエ——!!』

☆☆☆

Side. 緑谷出久

腕1本治さなきゃだったから時間かかった……リカバリーガールのお説教も聞いて、その後『買い物』もしてたから遅くなっちゃった。もう準決勝第二試合、始まつてるよね？ 急がないと。

「あ、デク君!」

「麗日さん、試合どう?」

「はじまつてちよつと経ったとこ! ……つてデク君それ、永久ちゃんの真似?」

「え? あ、うん……試合大変だった上に、『治癒』もしたから疲れてさ、少しでもエネルギー補充したいと思って、さっき聞いたの試してみようかと」

すぐそこで売り子の人から買ったコーラのボトルを握りしめた僕を見て、麗日さんはさっきの栄陽院さんのがぶ飲みシーンを思い出したみたいだった。

もちろんこのコーラは、来る途中で水飲み場で既に炭酸は抜いてある。まあ、だからって栄陽院さんみたいに何本も飲めないけど……もう1試合あるし、1本がせいぜいだ。

その相手が決まる戦いを見なきゃと思いつつ、僕も、ちょうど空い

ている麗日さんの隣に腰かけて、会場に目を……

「……うわああ……」

「うん……そうなるやんな……この試合みたら」

「すげえよな、色々……」

そこでは……すごい戦いが繰り広げられていた。

絶え間なく響く爆発音。その合間合間に、薙ぎ払うような風切り音。

コンクリートの、直したばかりのはずのステージが割られ、砕かれ、挟まれ、吹き飛ぶ。

その中心で、ものすごいスピードで交錯しながら、一切止まらずに戦い続けるかつちゃんと栄陽院さんがいた。

爆破による推進力で縦横無尽に、立体的に動き回るかつちゃんは、麗日さんや切島君の時の戦いを遥かに超える、鬼気迫る感じで攻撃を続けていた。懐に飛び込んだり、後ろに回り込んで近づいて爆破する。単純だけどその素早さと1発1発の威力は驚異的と言う他ない。

それらを避けて、あるいは拳で爆風を撃ち抜いて反撃する栄陽院さん。長い手足をフルに使ってかつちゃん目掛けて刃のように振るう、あるいは叩きつける。さつきから聞こえる風切り音の方はこつちだったか。

力強く、しかし軽快な動きで……踏み込みや流れ弾でコンクリートのステージが砕けてるところを見ても、栄陽院さんの攻撃は1発1発がかなりの威力を持つてる。

それでもなきや、かつちゃんの爆破を拳でぶち抜くなんてできないもんな。

けど、当たらなければ意味がない。

かつちゃんはそのほとんどを、その反射神経で見てからかわして、カウンターを狙って爆破を叩き込んでいるし、食らったとしても直前で後ろに飛んだりして威力を受け流してる。

被弾数では……栄陽院さんが多い。

けど、1発1発のダメージは互角か、フィジカルで勝る栄陽院さん

が強いから、かつちゃんの方が深刻と言っているように。

黒髪を振り乱し、長い手足をしながら攻撃する流麗な戦いと、轟音を伴った爆破によって移動と攻撃を同時に行う豪快な戦い。激しい動きの中なのに、2人の戦いは対照的なものに見えた。

……そして何より、目が行くのが……行ってしまうのが……！

「服が……!!」

隣の麗日さんもちょうどそう思っていたらしい。声が揃った。

栄陽院さん……また服が大変なことに！ ボロボロであちこち穴開いて、袖とか両方吹き飛んでほぼノースリーブになってるし、肩も出でて……ズボンも、右足は膝から下が、左足は太ももから下が全部なくなってる……！

こ、このままじゃホントにまずいことに……さっきの試合と同じく、全国生放送で大変な映像が流れてしまう可能性が……っ……！

そんなことを考えながらも、この超ハイスピードな戦いから目が離せな……ん？

何だろう、コレ……？

さつきから見続けて、なんだか……かつちゃんの動きに、違和感を感じる。

どれもこれも、すごい速さと威力を伴った攻撃だ。かつちゃんはロースターターだから、時間をかけて体が温まってくるほどに、攻撃の威力も移動速度も上がっていくから、栄陽院さんはどんどん追い込まれていっているようだ。

けど、何だかかつちゃん……さつきから、繰り返し同じ位置ばかり狙ってるような気が……？

けん制目的で爆破を繰り返してる様子でもあるけど、メインで狙ってるのは……顔、お腹、両足の膝のあたり、大体この3つだ。

えげつないか思っているはいけない。かつちゃんのやることだし、このくらいは予想できてた。

……それにしても、狙いすぎじゃないか？ 別の個所を狙えばより効率よくダメージを与えられそうな時にまで、無理やりそこを狙ってる……おかげで上手いこと躲かれたり、ふせがれたりしてるとは思えない

か。

かつちゃんは、意味もなくそんなことをする奴じゃない。だから、何か意図があるはず……

「……そろそろか……？」

ふいに、かつちゃんはそんな言葉を呟いて……また栄陽院さんの顔
面目掛けて爆破を放つ。

栄陽院さんはそれを、横に跳んで回避しようとして……

——かくん

「っ!？」

……できなかった!? 力を入れようとした瞬間に、何か、足が……
上手く踏ん張れなかったみたい……

とつさに顔の前で腕をクロスさせ、爆風から身を守るものの、その
勢いで後ろに飛ばされてしまい……ゴロゴロとステージに転がる。

それをかつちゃんは追撃……しない!?

あえて手と足を止め、注意深く栄陽院さんを観察してるように見え
る……

『あーっとコレはきつついの食らったかあ!? かわしていなして舞う
ようにここまで戦い続けて来た栄陽院、ダウンを取られた! ガード
はしたようだが、ダメージでかかったか!? しかし爆豪、同じくここ
までノンストップで攻め続けて来た手をあえて止めた? これはど
ういうことだ?』

かつちゃんが見ている前で、栄陽院さんは素早く……とは言いづら
い動きで立ち上がる。

また構えなおすが、どうやら息も上がっているようだ。肩で息をし
て、呼吸も荒い……

……? 息が、上がってる? 栄陽院さんが?

「まさか……」

「え、デク君どうしたん? 何かわかった?」

もしかしたらわかったかもしれない予想を、麗日さんに話そうとす
るより前に、ステージに立っているかつちゃんが凶悪な笑みを浮かべ
て言った。

「やっぱりな……デカ女、テメエ……」

……もうほとんど『エネルギー』残ってねえな?」

その言葉に、クラスメイト達のほとんどが驚いたような顔をする。麗日さんも同じだ。

そして……僕も今、かつちゃんと同じことを言おうと思っていた。栄陽院さん、もうエネルギーの蓄えがなくなってるんじゃないかって。

「え、エネルギーって……永久ちゃんが食事するたびに補充して蓄えられるアレのことだよな? たしか、それ使って体の強化とかしたりするんでしょ?」

「ええ……そして、それが続く限りはスタミナは無尽蔵。しかし言われてみれば、栄陽院さん、先程から肩で息をしていますわ……まさか、本当に……」

「かなり汗もかいているし、呼吸も早い……どうやら、その通りのようだ」

芦戸さんの困惑したような問いに、八百万さんと障子君がそう答える。

「で、でもよ、栄陽院の奴、あんだだけ飲んだり食べたりしてたんだぜ!! コーラ6本に焼きそばパン2個、それに八百万が言ってた話だと、昼休みも教室でめっちゃ大量に弁当食べてたって話だし……何千キロカロリー食ったかも分かんねえよ! それなのにエネルギー切れって……」

「逆だ……エネルギーがないからこそ、大量に食べて補充してたんだ……!」

思わず言ってしまった僕に、皆の視線が集中する。

「多分だけど、障害物競争と騎馬戦で使ったエネルギーが想定よりだいぶ多かったんだ。身体能力を強化したり、スタミナの肩代わり、さらにはリカバリーガールによる治癒の際にも……加えて、強化の幅が大きければ大きいほど消耗も早くて、1秒ごとにガンガンエネルギー

が削られていく」

「つまり、消耗も早い、つてことか……でも、普段から栄陽院つてめっちゃ食べてるだろ？ ちょっとやそつとじゃどうにもならねえエネルギー量が蓄えられてもおおしくねえんじやねえか？」

「それは俺も思う。弁当とか、成人男性何人分だよつてくらいペロツと食うからな」

「それは確かにそうだと思うけど……この2週間、皆もそうだったと思うけど、『個性』絡みの訓練ずっと続けてたでしょ？ そこで妥協なんかしてたら本番までに十分鍛えられないし、栄陽院さんもきちんとして『個性』の訓練はしてたはず。そこで消費するエネルギーのことを考える……」

「日々の貯蓄も切り崩してたつてことか……？ や、そうするとむしろ栄陽院の『個性』つて……普段から力を溜め続けて、ここぞつて時に出す、つていう形がデフォルトなのかもしれねえな」

そして……コレは僕以外知らないことだけど、栄陽院さんのエネルギーの貯蔵量は、計り知れないほど多い……ということは、実はない。それはなぜかという……彼女の個性『無限エネルギー』には、ある弱点が存在するからだ。

もちろんそれは、エネルギーが切れると戦えなくなるとか、そういう部分ではない（それも確かに弱点ではあるが）。

栄陽院さんは……エネルギーを蓄えすぎると、その『吸収効率』が悪くなるのだ。

以前それについて雑談の中で聞いた時、『少し恥ずかしい話だから、人には言わないでくれ』つて言われて聞かされたんだけど……彼女は、ほとんどトイレに行かない。普通の人なら、消化吸収しきれずにトイレで排出してしまう分のエネルギーすら、彼女はほぼ吸収してしまえるからだ。

しかし、あまりに大量にエネルギーを蓄え続けると、徐々にではあるが、吸収できるエネルギーの割合が、効率が下がっていく。同じ量の食べ物を食べても、吸収して蓄積に回せる量が違ってきってしまう。最良の状態をほぼ100%とすると、99%、98%と徐々に下がっ

ていき、その分を、トイレの回数を増やして『出して』しまうようになる。

ちょうど、人間の体が『満腹感』を覚えるのと同じように。十分に食事を、栄養を取れたと判断した脳は、『これ以上食べたくない』という信号を出す。同じように、エネルギーを蓄えすぎた状態の栄陽院さんの体は、拒みこそしなければ、徐々に『吸収』と『蓄積』に消極的になってしまう。

これを防ぐには、訓練の際に『個性』を積極的に使うなどして、普段の生活の中でエネルギーを消費していき、『ため込む』一方にならないようにすればいい。別に、食べたもの全部出す必要はない……運動して、きちんとエネルギーを、少しずつでも『循環』させる形にできていればいい。

普通の人が、一度満腹になっても、そのあと空腹になったらまた食欲が出てくるように。あるいは、脂肪が蓄積して太るのを防ぐために、適度に運動するのと同じように。

そうすれば、限度はあるが、何もしないでいるよりもずっと多くの量のエネルギーを、蓄えた状態で維持しておくことができるそうだ。『効率』を落とさずに。

そして、一旦下がってしまった『効率』を元に戻すには、酷く時間も手間もかかるらしい。

前に一度、調子に乗って暴飲暴食を続け、エネルギーを大量にため込んだはいいものの、かなり『効率』を下げってしまったことがあるらしいが、その時は、暴飲暴食してたのと同じかそれ以上の期間を、厳しいトレーニングと食事コントロールの元で過ごして、ようやく治すことができたらしい。太っちゃって体質改善と痩せるためにダイエットするみたいな話だな、と思った。

『アレは地獄だった、二度としたくない』と、遠い目をしながら語ってくれた。

だから彼女は、その気になれば大量にため込むことはできるが、それは自分が最高のコストパフォーマンスで動けるということとイコールにはならないため、『効率』を保てる上での最大限を目安に、そ

これから大きく逸脱しないようにエネルギー量を管理している。

だから、それが彼女の実質的な『上限』なのだ。

彼女が自分の『個性』を、『名前負け』という、大きな理由のひとつである。

もつとも、それでも相当に多い量だから、一度に大量のエネルギーを『譲渡』したり、ハードなスポーツや戦いを長時間ぶっ続けでやるとかでもしない限りは全く問題ないんだけど……さつきから話しているように、ここんどこずつとハードなトレーニングを続けていたおかげで——その上僕にその都度『譲渡』までしてくれていたから——貯蓄量は徐々に削れてきていたのだ。本人曰く、僕に分け与える量なんて、自分の消費量に比べたら誤差の範囲、微々たるもの、だそうだが。

その分補給することはできなかったのか、と思うかもしれない。

けど、それも難しいというか……限界があつたのだ。なぜなら……「それに永久ちゃんは、確かにいくらでもエネルギーを溜められる。けど、『一度に』いくらでも補充できるわけじゃないはずよ。消化器官の機能つてもものにも限度があるもの」

と、今まさに考えていたことを、蛙吹さんが口にしたので、そつちに意識が向く。

「え、どういふこと梅雨ちゃん？」

「食べた後に働く胃腸を何だと思ってるの、つてことよ。一度に食べ物を食べ過ぎれば当然、消化吸収の限度を超えてお腹を壊すわ。永久ちゃんはもともとがフードファイター顔負けの大食いだからわかりづらいけど、その限界は確かにある。だからあんな方法で補充してたんでしょうね」

「あんな方法……っ！ そつか、コーラー！」

「いつでもいくらでも食べられるなら、それこそエネルギー量が多いもの……炭水化物やたんぱく質、脂質なんかを取れば、急激にエネルギーを取ることとは可能のはずよ。その辺で売ってる、いかにもカロリー高そうな総菜パンとかね」

「けど、そうしなかったのは……今食べても、試合までに吸収しきれな

いから？　だから、エネルギー効率がいい炭酸抜きコーラでどうにか補充しようとしてた？」

「あるいは、持ってきて食べたお弁当が既に消化吸収の許容量だったのかもしれない。これ以上お腹にものを下手に入れられない、もたれて逆に悪影響になると思ったとしたら……」

皆が考察しているのを聞きながら下を見れば、かつちゃんは既に勝ち誇ったような顔で、威嚇するように手のひらを爆発させ続けている。

「ごまかすのが下手つてもんだぜデカ女……間抜け面の時も影野郎の時も、テメエはずつとこうなることを危惧しながら、なるべくエネルギーを節約しながら戦ってたな？　それを悟らせねえように、わざとステージを踏み砕いたり、いきなり激しく動いたりするパフォーマンスまで交ぜ込んでよ……けど、それ以外はテメエは基本、動きを抑えてカウンターがメインだった。服ビリッビりにされた影野郎の時、既にタンクの底が見えてたな？　その後のコーラのがぶ飲みで確信したぜ」

「そういうところ気が付く辺りはホントにお前唸いんだよなあ……まさかとは思ってたけど、さつきから私の急所ばかり不自然に狙ってたのは、強制的に動かせてエネルギーを使わせるためか？」

「顔や腹、そして機動力に直結する足を狙われたら、しかもそこに叩き込まれるのが俺の爆破なら……食らって耐えるって選択肢は出ねえよなあ？　もちろんこうなる前に隙ができれば即座にぶっ殺すつもりだったが、まあ……よくもった方じゃねーのか!!」

その瞬間、かつちゃんは爆速ターボで一気に距離を詰め、猛攻を再開させる。

しかし、栄陽院さんはさつきまでの動きのキレを失っていて、どうにか避けるので精いっぱいって感じだ。

もちろん、基礎的な身体能力そのものは高いから、それなりの動きはできてるんだけど……あまりにも相手が悪い。ここまでの戦いで体が十分に温まったかつちゃんは、フルスロットルの栄陽院さんでも相手をするのは難しいはずだ。

思うように体が動かないのか、服がはじけ飛んで傷が増えていく。「それでもこちらの奴よりは速えか！ 大したもんだな……だが……

『エネルギー』がねえテメエなんざ……『無個性』と同じだ！

『閃光弾』!!」

瞬間、かつちゃんは両手の平を合わせて……すごい光をそこからあふれさせた!?

何だアレ……新技!? 光で目つぶしか!?

思わず手で目をかばった栄陽院さんの懐に飛び込んで、かつちゃんは手のひらを突き出し……しかし、すんでのところで見極めた栄陽院さんは、その手をつかんで大きく逸らして防ぎ……

「手を警戒しすぎだバカが!!」

「っ……ぐはっ!」

鳩尾に膝蹴りを叩き込まれて、息が詰まって後ろに転がされ……そこに、もう片方の手で爆破を叩き込まれて、大きく吹き飛ばされた。

今のは流石に大きなダメージになったみたいだ……意識はあるみたいだけど、ほとんど動かない。ステージの端で、ミッドナイト先生が、続けられるかどうか注意深く見始めた。

けどかつちゃんはそれを待つ素振りすらなく、一気に勝負を決めるために突撃していく。

麗日さんの時と同じだ。ここまで来た実力を認めてるからこそ、警戒してるからこそ……かつちゃんは手加減しない!

何人かの息をのむ音が聞こえる中、射程距離にとらえた栄陽院さんに、突き出した手からのとどめの一撃を浴びせようとして……

「……発、動!」

その瞬間立ち上がり、地を蹴って懐に飛び込んだ栄陽院さんが……渾身のボディブローを叩き込んでかつちゃんを吹き飛ばした!?

「な、あ、っ……!」

驚愕を顔に張り付けながら、殴り飛ばされてかつちゃんはステージ上を転がる。今のはモロに入った……暫く呼吸もろくにできないレ

ベル!

けど間違いなく今は……『エネルギー』なしで撃てる威力じゃなかったぞ? 栄陽院さん、まだ力が……

『あーつとお、ジャージ以上に絶体絶命に思われた栄陽院、ここに来て再起動だとオ!? もう力は残ってねえと思ってたが、アレか? ひと芝居打ちやがったのか!?!』

「テメエ……騙しやがったのかよ、俺を……!?!」

「……残念だが、私はそこまで芸達者じゃないよ……。あんたの言う通り、とつくに私のタンクはすつからかんだ。動くだけならともかく、『個性』は使えない」

「じゃあ何だ今の威力はよ……テメエの全力には程遠いが、明らかに『個性』なしじゃ出せねえ威力だろうが……ツ!」

「……『自食作用』って知ってるか、爆豪?」

「……………ツ!? ……はっ、なるほどな!」

はつとした表情になるかつちゃん。

それと同時に、僕や八百万さんなど、その言葉を知っている者達の顔色も変わる。

『自食作用』……ですって!?!』

「知っているのかヤオモモ!?!」

葉隠さんのその問いかけに、こくりと頷いて八百万さんが説明する。続けて、僕も。

『自食作用』とは、栄養飢餓状態に陥った生物が引き起こす、自己防衛機能の一種ですわ。自らの細胞内のたんぱく質をアミノ酸に分解し、一時的にエネルギーを得る……おそらくはそれと同じ仕組みで、栄陽院さんは一時的に『個性』を発動させたのでしよう」

「でも……まずいよ。ざっくり言えば、今の栄陽院さんは『自分の体を食べて』エネルギーを得ているのと同じことなんだ。カルシウムが足りなくなった時、人体は骨を分解してカルシウムを得るけど、その分骨がもろくなる……エネルギーも同じだ。八百万さんの説明の通りに、彼女の体がタンパク質を分解しているとしたら……あれも長くは持たない。それどころか……」

「正真正銘の『最後のあがき』ですから……少し前までの緑谷さんの自爆と同じか、それ以上に危険かもしれません。下手をすれば、ドクターストップがかかってもおかしくは……」

しかし、八百万さんがそれを言い終わる前に、2人は動いた。

2人共わかつてるんだろう。今の栄陽院さんの状態が長く続かないことも……下手をしたら、このばでミッドナイト先生がドクターストップをかけるかもしれないことも。

そして、そんな結末になる前に全てを終わらせようと……動き出した。

かっちゃんの爆破が正面から決まる。栄陽院さんは腕をクロスさせてそれを防いだ。

もう一発の爆破。しかし今度は、真正面から拳でぶち抜いてかっちゃんの顔を狙う。

拳も無事じゃないし、かっちゃんの持ち前の反応速度で避けられるが……少しかすって、頬が斬れて……血が出た。

もうさらに1歩踏み込んで、かっちゃんの腹に拳を一撃……と見せかけて、フェイントの肘を上からたたきつけて、かっちゃんを地面に叩き落とした。

そのままそれを踏みつけようとするけど、かっちゃんはその場で手を連続で爆破させ……ブレイクダンスかカポエラ、あるいはねずみ花火みたいな動きで、高速回転しながら移動してかわす。

回転しながら低空を……膝のあたりを蹴りつけて怯ませた。

よろけた栄陽院さんに両手を向けるが、その瞬間栄陽院さんは、引きちぎるようにして上のジャージを脱いだ。そして、爆破が起こる前に、それを、突き出されたかっちゃんの腕に……

「縛った!?! 捕縛術!?!」

「上手い……これで爆豪の腕を封じた! 爆破使えなくなつたぞ!」

「でも、あんなボロボロのジャージじゃいつまでも抑えてられへんよ? 第一、結ぶことも……」

麗日さんがそう言った直後、栄陽院さんはその縛った服の端を……結ぶ時間がないからだろう、持ったまま放さないようにしながら、

かつちゃんの後ろに回り込み、がしつと両腕で……その首を締め上げた！

『おおーつとここで栄陽院、爆豪の両腕を封じた上に、その後ろに回り込んでスリーパーホールドだあア——ツ!! 胸部装甲が爆豪の背中に押し付けられてるが、果たして爆豪にそれを堪能する余裕があるようには見えねえ!? コイツは決まったかあ!! 奇跡の大逆転かあ!』
『どうだろうな……スリーパーホールドは本来、腕を上手く食い込ませて血管を押さえることで脳への血流を減らし、それによって意識を刈り取る技だ。上手く決まれば数秒で、あまり苦しむこともなく落ちるんだが……ありや失敗してるな。気道を締めちまつてる。意識が飛ぶまでに数十秒はかかる上に、かけられてる方は地獄の苦しみだ。となれば当然……』

「つ、があああああああああああ!!」

栄陽院さんに首を抑えられながら、かつちゃんは激しく暴れて身をよじらせ、どうにか拘束から逃れようとする。

『暴れるわな、あんな風に』

『こいつは……栄陽院のジャージが千切れて爆豪の腕が自由になるのが先か、爆豪の意識が飛ぶのが先か……』

会場中がかたずをのんで見守る中、時間は過ぎていき……ヘドバンみたいに頭を暴れさせる上、締め上げる腕に噛みついてまでかつちゃんは暴れるが、栄陽院さんは意地でもそれを解こうとしない。巻き付けているジャージも、ギリギリで持ちこたえている。

このまま耐えきるか、と思った瞬間、かつちゃんの手元で爆発が……自分の体をも巻き込む形で起こり、ジャージの一部がはじけ飛んだ。

それにより、まだ腕は動かないし、文字通りの自爆でダメージを受けたが、かつちゃんの手のひらは自由になった。

かつちゃんはそれを地面に向けて……思い切り連続で爆発させて、締め上げている栄陽院さんごと空中に飛びあがる。

残り少ないであろう意識の中で、滅茶苦茶な軌道で飛ぶ。まるで、空気をパンパンに詰めた風船の口を離して、空気が吐き出されるその

勢いで風船がふっ飛ぶように。

上下左右に本当に滅茶苦茶に、洗濯機の中でシェイクされるより酷い動きで飛び回った後……すごい勢いでそのまま落下して、轟音と共に、2人はステージを外れた場外に叩きつけられた。

立ち込める土煙が晴れた時、そこには……折り重なって倒れている2人の姿があった。

かつちゃんは意識があるようで、身をよじっているが……その下になっっている栄陽院さんは、動かない。

ミッドナイト先生が駆け寄って、2人の様子を確認する。

数秒後、すつくと立ちあがって……

「落下時の状況から、先に体が場外の地面に落ちたのは……栄陽院さんの方！ よって、勝者……爆豪君！ 決勝進出！」

歓声の中、かつちゃんはゆつくりと起き上がり……自分の足で歩いて、出入り口の方に歩いていく。

腕を拘束してたジャージは、解いて……投げつけるようにして、気絶している栄陽院さんにかけてやっていた。優しいんだか乱暴なんだか……。

……その、歩いて退出する直前、僕と目が合った。

ただそれだけで、別に何も言葉をかわしたりはしなかったけど……僕はその一瞬で、心に1つの事実を突きつけられた気分だった。

それは、次の瞬間聞こえたマイク先生のアナウンスで、より鮮明に形になった。

『両者の健闘をたたえてクラップユアハンズ！ さあ、小休止を挟んでその後は……いよいよ今日最後の戦いが始まるぜ！ 雄英体育祭、1年の部を締めくくる決勝戦！ 対戦カードは、緑谷出久VS爆豪勝己に決定だア！ お前ら、この一大決戦見逃すんじゃねーぞオー！』

……相手は、かつちゃん。

僕がずっとその背中を追って来た、一番身近で、一番強かった……ずっと、敵わないと思っていた相手。

ずっといじめられていた相手で……それでも、僕のあこがれだった、すごい奴。

戦闘訓練の時みたいに、油断なんてもうしてくれないだろう。けど、望むところだ。

真っ向勝負で……今度こそ、君に、勝つ！

第35話 TS少女とトーナメント⑧ 保健室にて

「……知らない天井だ」

「やれやれ……ようやく起きなすったかい、このじやじや馬は」

定番のセリフがとつきに口をついて出たかと思つた直後、横の方から聞こえて来たそんな声。

やたらと体が重い。そしてどうやら、ベッドか何かに横になつているようだ。

どうにか首を動かして横を向くと……自分の腕に刺さつてる点滴のチューブと、その向こうにいる小柄な老人……あ、リカバリーガールか。彼女の姿が目に入った。

そして思いだした。自分は確か、爆豪との試合で……ここにいるつてことは、負けたか。

最後の最後、『自食作用』によるエネルギーもほぼ使い果たして、もうほぼ気合だけで爆豪の首を締め上げてただけだった中、突然押し上げられるような浮遊感があつたところまでは覚えてる。それで息が詰まつて、しかもよくわかんないけどその後、洗濯機の中でシエイクされまくつたような感覚があつて……そこから覚えてないな。アレ何が起こつたんだろ？

つて感じのことを、リカバリーガールに聞かれて説明した。そしてら、呆れられた。

「つてことは、落下の瞬間までほぼ無意識だった……気合と本能だけでしがみついたつてわけかい……やれやれ、緑谷つて子がちよつとはマシになつたかと思つたら、女子の方にも無茶苦茶やる子がいたもんだ」

「今年は粒ぞろいですねえ、うちのクラス」

「自分で何言つてんだい。ハア……とりあえずあんた、そこ動くんじゃないよ？ その点滴全部入るまでは絶対安静だからね」

「……あの、結局、どんな感じでここにいるのか聞いてもいいですか？」
「信じられないことに『栄養失調』だよ、軽度のだけどね」

そこから試合の結果も含めて聞くことができた。

どうやら私は、爆豪との試合で負けた……つてのは予想通りとして、そこからこの『リカバリーガールの出張保健室』に担ぎ込まれ、さっきの診断を受けたそうだ。

『個性』による貯蓄に加えて、『自食作用』により体の各部に蓄えられてたエネルギーも根こそぎ使い……人体最後のエネルギー貯蔵庫である、肝臓のグリコーゲンすらも底をついていた……とは言わなかったが、とにかく栄養が足りていなかった。

そのせいで『治癒』もろくにできず、点滴で体力の回復を待つしかない状態だったらしい。彼女の『治癒』は、対象者の体力を使うからな……それが底をついてりや、普通の治療法しか選択肢もないか。

「本当にねえ……今年の一年は粒ぞろいだよ。色々な意味でね……しかし、そろいもそろって危なっかしいってのはどうにかならないもんか。頑張りはとつくに認めてるけど、素直に褒められないってのはこっちも割かし辛いんだよ？」

「すいません……どーにも熱くなると歯止めがきかないもんで」

「ま、若いうちは無理してなんぼつてもホントだしね……限度が過ぎなきゃきちつと大人が面倒見てやるとも。……ただお嬢ちゃん、あなたは別な意味でも自分のこと大事にしなよ？」

「はい？」

「今の自分の恰好、よく見てみな」

そう言われて、布団の下になってる自分の体を、布団をめくって見ると……なんて言うんだろ、コレ？ 病人着、でいいのかな？

入院患者とかが着てるようなの……

……でもその下に何も無い。ノーブラだ。かろうじてパンツはあるが。

「……あれ、私の服は？」

「ジャージはあんたが脱ぎ捨てて拘束に使ってたろ？ 下のズボンもボロボロで、治療の邪魔だったから脱がしたよ。それで、上の下着は着弾の瞬間にぶっ壊れてた」

あ、そうなんだ……その『着弾』つての私覚えてないけど……え、しかしそれだと……

「……放送、事故？」

「……痛めつけられた相手ではあるけど、あの爆豪って奴に感謝しときなよ。壊れたブラが外れて取れる前に、ボロボロのジャージかぶせて体ごと隠してくれてたからね。その後にミッドナイトもそれに気づいて、ハンソーロボに任せると万が一があるから、自分で抱えてここまで運んで来たんだ、ジャージが取れて見えないようにさ……その光景自体のせいで別な歓声が上がってたけどね」

セーフ！ セー——フ！！

「どうやら私はポロリしないで済んだらしい……よかった……マジでよかった。」

「羞恥心もそうだけど、それ以上に相澤先生にキレられるとこだ……公共放送にトップレス晒したせいで説教……あるいは処罰とか情けなさすぎる。」

しかし、安心したら……

——ぐうううううう……

「……腹が減った」

「おやまあ女の子がはしたない……けど、そんな音が鳴るってことは、少なくとも胃腸が弱ってるってことはなさそうだね。ま、栄養失調とはいえ、過程がかなり特殊だからそんなもんか……点滴終わったら普通に食事しても問題ないだろう。それまでは大人しく寝ときな」

「そうですね、そうしま……」

……あれ、でも待てよ？

「私が爆豪に負けた。それはいい……悔しいけど、あいつの方が強かったってことだ。」

でもだとすると、あいつは……っていうか、この後は……！

「り、リカバリーガール!? トーナメントは!? 試合は!? 決勝戦は!? 次ですよね!?!」

「あん? ……そうだね、舞台の修繕もあるから少し長めに休むって言うってたから……もうそろそろ始まるんじゃないかね」

やっぱー！ 寝てる場合じゃねー！

次決勝戦じゃん！ しかも、緑谷と爆豪じゃん！ 見逃せるわけないだろこんなカード！

「リカバリーガールすいません退院しますお世話になりました！」

「何言ってるんだい、あんたここから動かせるわけないだろうこのバカちんが！ 栄養足りてない上にろくに治療できなくて全身ボロボロだってるんだよ！ しばらく寝ときな！」

「そんな殺生な!? あの2人の試合見るなってんですか!? 栄養補給なら見ながらやりますから……この点滴持つてけばいいでしょう？ よくあるじゃないですか、病院で点滴持つて、適度な運動とかのために病院の廊下歩いてる入院患者！」

「殺生も閃白もあるかい！ あんたなぜかやけに元気だけど、本来なら点滴全部入った後『治療』してようやく動けるかって程なんだ、それまで一歩もベッドから出さないよ。試合どころか表彰式だって無理だよ、そこにあるテレビで映像だけなら見られるからそれで我慢おし！」

「あああんまりだあああああ!!」

「(ガチャ) あら、何よ思ったより元気ね」

突如、保健室の扉が開いて誰かが入ってきた。

と思ったら……あ、昼休みぶりの見知った顔。

「あん？ 今面会謝絶……って、あんたは……何でこんなところにいるんだい？」

「ご無沙汰してますーリカバリーガール。あ、仕事がてらうちの子の様子見に来ました」

「母、さん……う？」

「……ああ、そうか、そういやあんた達親子だったねえ……。妙に納得しちまったよ……方向性は微妙に違うが、無茶苦茶っぷりがそっくりだ」

そこに居たのは、うちの母だった。キャリアアウーマンスタイルで、

につこり笑って、横にいる保健室の主に挨拶している。

何か、知り合いつばいけど……あ、そうか、母さん雄英OGじゃん。リカバリーガールはもうだいぶ長いこと雄英に勤めてるって話だから、なるほど知ってるのか。

「もう決勝戦始まるっていうのに、永久つたら中々こないんだもの。見逃しちやかわいそうだと思って呼びに来たのよ……その様子だと、リカバリーガールにお止めしていただいていた感じですか?」

「当たり前だろ、まだこの子は動かせるような状態じゃないんだからね。あんたも親なら、バカなこと言ってる娘にきちつと言つてきかせな」

「それはまあ、親としてはそれが正しいんでしようけど……『女』としては、娘を応援したくなっちゃうんですよねえ」

「あん? どういう意味だい?」
ちよつと顔を赤らめてそんなことを言う母さん。ニヤニヤ笑ってこつちを見ながら。

待て、いきなり何を言……そうか! 昼休みに母さんには、私は緑谷の動画見てニヤついてたの見られて……つてか、緑谷のこと知られてたんだった。

「ちよつと母さん!? あ、あの、あんまりそういうことは……いや、味方してくれるってんならそれはありがたいけど、でも……い、一応私それオープンにしてるわけじゃなくてね!」

「うふふ、若いっていいわね……そんなわけでリカバリーガール、どうにかこの子に決勝戦、見せてあげられませんか? 見れなかつたら多分、そつちの方がストレスになっちゃいますし……私も手伝いますから」

「……何を通じ合ってるのかいまいちわからないけど、あんたねえ……だからこの子は栄養が……いや、なるほど……あんたがいれば話は別、か」

「そういうことです。よいしょ」

「わふふ!」

ベッドのそばまで来た母さんは、私の頭を抱えて……その胸に押し

付けるようにして抱いた。ふによん、と柔らかい、極上のウォータークッションのような感触が心地よく当たる。そして……

「覚えていらっしやるでしょう？ 私の『個性』も……この子と同じ

『無限エネルギー』だって」

それと同時に……『エネルギー』がどんどん私の体に流れ込んでくる。

見る見るうちに肌の色がよくなり、血色を取り戻す。疲れも吹き飛んで、痛みも和らいできた。

ものの数十秒ほどで、点滴の必要が全くない程度には回復できたはずだ。それを確認して、やれやれ、とため息をつきながら、リカバリーガールは点滴の針を抜いてくれた。

「相変わらずの人間点滴だね。ま、保健委員にはうってつけの能力だったのは確かだが」

「母さん保健委員だったの？」

「ええ、最後の1年は委員長もやったわよ？ 思いだすなあ……あの頃もこうやって、色んな子にエネルギーを分けてあげて、それとリカバリーガールの『治療』のコンビで、どんな怪我でもすぐにすっかり治してあげてましたっけね」

「それと同時に、あんたに対して勘違いする男子が続出したかわいそうな年でもあったけどね……在校生の3分の1が在学中1度はあんなに惚れてて、そのうちの半分がアタックして玉砕したっていう悲劇だらけの3年間だったよ。あんたの当時の仇名覚えてるかい、『魔性の抱き着き魔』だよ？ あんたまさか、いい年してまだその抱き着き癖直ってないなんてことないだろうね？」

「まっさかあ、もうこの通りのおばさんですし、旦那もいるんですからそこまでしませんよお」

何ちゆう青春時代を過ごしてたんだ、この人……

ひよっとして、プロヒーローの間で、母さんの……『アナライジユ』の存在がほとんど語られることのない背景には……

「その過去に触れてほしくない奴が多すぎるってのもあるだろうさ……全くほら、手をお出し、動ける程度にまでは『治療』してあげる

よ」

「ありがとうございますー！」

「ふふふ、よかったわね永久。それじゃ、私は最後のお仕事しなきゃいけないからここで失礼するわ……緑谷君、勝つといいわね？」

そう言い残して、にこにこ機嫌よさそうに笑いながら、母さんは帰っていった。

私はその後、リカバリーガールに『治癒』してもらって、問題なく動けるまでに回復してから……母さんが持ってきてくれていたジャージ+下着に着替え、1-Aの皆が最後の試合を見るために集結しているであろう観客席へ、急いで戻っていった。

第36話 TS少女とトーナメント⑨ 緑谷VS爆豪（前編）

『さあさあ泣いても笑ってもこれが最後！ 雄英一年の頂点がここで決まる！ これまで繰り広げられた幾多の大勝負、例年だったらそれ1つ1つがベストバウトに選ばれても文句のねーレベルの死闘の数々！ リスナー共を沸かせ、画面の向こうに歓声を響かせ、ステージ修復係のセメントスに過重労働を強いた末に勝ち残った2人の頂上決戦が今、始まるうとしていたア！』

マイク先生のアナウンスからして、ギリギリ間に合ったっばいな。1-Aの皆が集まっている観客席に行くと、端っこに座ってた麗日の隣がちようど空いてた。……ああ、そういやここさつきまで緑谷が座ってた席か。

「あ、永久ちゃん！ もう大丈夫なん？」

「復活早いな!? 栄養失調で面会謝絶って聞いてたのに……もう回復したのか？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

あれ、そう答えた途端、何か何人かが『ホントにか!?』みたいな感じっていうか表情になった。なぜ？ ……まあいいや。

「でも、ちゃんと顔色よさそうやね、よかった……って、何その大量のホットドッグとコーラ!？」

と、麗日は私がビニール袋いっぱいを買ってきた食料を見てぎよっとしていた。

「腹減ってしやーないから経営課の奴から買い占めて来た。もう試合ないからがつついてても問題ないし……飲み食いしながらゆつくり見学するよ。つか、もう何か今まさに始まる感じ?」

「はっ、そやった!」

ぱっと振り向く麗日の視線を追う形でステージに目を向ける。

そこには……真正面から向かい合って立つ、緑谷と爆豪の姿。

相変わらずヴィランも逃げ出しそうな眼力で睨みつけてくる爆豪

だが……少し前までは委縮してしまっていたであろう緑谷は、それを正面から受け止めて睨み返している。完全に冷静、つてわけじゃないかもしれないが……少なくとも、恐れていない。

それが面白くないのか、爆豪がちつ、と舌打ちをしたのがここからでもわかった。

一触即発の雰囲気。普段の彼らを知っているからこそ、これから始まるのは壮絶な戦いになるだろうとクラスメイト全員、固唾をのんで……あれ？

なんか、人、足りないような……？

えっと……さつき緑谷と戦って怪我してたであろう轟……ちやんと治って、いる。

体が小さいから時々ガチで気づけない峰田……いる。上鳴の隣に。

透明だからたまに見逃しそうになる葉隠（特に戦闘時）……いる。

色々気まずいからか私からめっちゃ遠くに座ってる常闇……いる。

他にも、男子も女子もみんな揃ってるように見えるけど、数が……

ああ、わかった。

「麗日……飯田、いなくないか？ トイレか何か？」

「あ、そっか永久ちゃん知らんのか。なんかね、家の都合とかで……早退してしもてん」

「……はあ？」

何じゃそりや？ と、言うより先に……

『決勝戦！ 緑谷VS爆豪！ スタートオ!!!』

☆☆☆

スタートの瞬間、2人は激突していた。

「死ねエ!!」

ほぼ同時に地面を蹴る2人。緑谷は持ち前の身体能力で、爆豪は爆破による加速で、ほぼステージの中心で交差し……一瞬2人の姿がぶれて見えた。

その直後、2人はすれ違うように動き……爆豪がやや強引な姿勢

で、緑谷を背中から蹴飛ばして転がしていた。

『先手を取ったのは爆豪オ！つか今のわかったかイレイザー!? サングラスでちと見えづらかったし、見てたリスナーたちの中でも気づいた奴は少なかったかもだが……あいつら今、何回フェイント入れた?』

『双方2〜3回ずつつてとこだな。厳密にはフェイントじゃねえのも混ぜてるが。ざつと言うと……爆豪の『開幕右』の爆破を警戒した緑谷がカウンターを用意し、しかしそれを読んで爆豪が軌道を変えて側面から攻撃、だがそれを察知した緑谷がかわして懐に飛び込もうとしたところを、さらに読んだ爆豪がすり抜けてかわして、多少無理な姿勢になっちゃったが蹴っ飛ばして……今の状況だ。だいたい0.5秒くらいの間ここまでの読み合いがあった』

イレイザーの解説を聞いて驚く観客席の面々。初手から高度すぎるやり取りが行われたことに、あらためてこの試合のレベルの高さを感じ知ることとなるが……そんな彼らが落ち着くのを待たず、状況はどンドンと動いていく。

素早く起き上がった緑谷が、飛び込んで追撃を放ってきた爆豪の一撃を回避し、カウンターの要領で蹴りを叩き込む。ガードしたものの、空中で勢いを殺しきれなかった爆豪が墜落、今度は緑谷が追撃をかける。

それを近寄らせんと爆豪が、麗日戦でもそうしたように、爆風を防壁のように使ってけん制するが、緑谷は一切減速せずにそこに飛び込み……

「ミズーリー……スマッシュユ!!」

——ズバァン!!

左手を手刀の形にして横一線に振りぬき、爆風を切り裂いた。

驚く爆豪の前で、距離を詰めた緑谷は本命の右腕を振りかぶるが……爆豪はなんとあえてそこに飛び込み、体当たりするようにして緑谷に正面から激突した。

腕が伸び切る前に『当たられて』しまったことで大幅に威力を殺された。さらに至近距離で両手での爆破を叩きつけられ、手痛い反撃を

受けた形になった緑谷がステージに転がる。

しかし爆豪も無傷とは言えない。自分から攻撃に当たりに行った上に、体勢も少々無理があつたため、肺の空気が少々抜けて息を整えていた。

が、どちらもやはりすぐに体勢を立て直して……

「やああああああああああつ!!」

「オラアアアアアアアアアアツ!!」

跳躍、衝突、交差、

衝撃、爆発、転倒、

移動、追撃、回避、

ステージごと相手を砕く爆破、

爆風を貫く拳、

空を切る爆豪の膝蹴り、

それを迎撃する緑谷のハイキック、

退く緑谷、

追う爆豪、

殴る、

爆ぜる、

蹴る、

払う、

跳ぶ、

飛ぶ、

薙ぐ、

押し戻す、

繰り返される、目にも留まらぬ攻防。

緑谷は『フルカウル』で爆発的に上がっている身体能力を上手く使い、回避を主体にしつつ、

爆豪は爆発の推進力に加え、見てからで間に合う抜群の反射神経で隙を見つけて強引に道を作り、

全てが凄まじい速さで、勢いで繰り返され、緑谷と爆豪は縦横無尽に動き、ステージ全体を走り回って戦い続ける。ほとんど手も足も止

めることなく、常にどこかで衝撃音と爆発音が響く。

大地をかける緑色のスパークと、空を彩る赤い爆炎がどこかで閃くたびに、見る者を圧倒する力と力のぶつかり合いが起こる。

同じことの繰り返しと言えども、文字通り全身全霊を注ぎ込んでぶつかる2人を前に、見ている側が飽きるなどということが起こるはずもなく、皆固唾をのんで、一時も目を離さず見守り続ける。ここまで幾多の激戦を乗り越え、疲労もダメージもたまっているであろうとは思えないほどの、まさしく頂上決戦にふさわしい戦いがそこにはあった。

『速い速い速い、動く動く動く！ 技と技が、拳と爆風が、とんでもねえ速さと気迫でぶつかり合う！ ガチだから仕方ねえとはいえよお、一般人には色んな意味で、ちと目に優しくねえバトルになつてんなア……オイ目で追えてっかかりスナー諸君よオ!?!』

『むやみやたら、手放しに何でもかんでもほめるのは俺の主義じゃないが……これに関しては見事と言う他ない。もつともこの場合……『こいつら2人』の戦いだからこそブーストかかっている部分も少なかねえだろうがな』

『そーいや幼馴染だったなこいつら！アレか、幼い頃から互いに研ぎ澄まし合って来た宿命のライバル的な奴か?』

『いや、全然全くそーい感じとは程遠かったはずだな。むしろ教育現場の暗部に切り込みかねない過去しよつてるとかそんな関係だった気がする』

『こいつはシヴィー！ 現実つてのはドラマみてえにはいかねえか！しかし過去がどうあれ、今ここでこいつらはこうして全力で、一歩も引かずにぶつかり合っているのは紛れもねえ事実だ！ 担任としちゃ教師冥利に尽きる感動のワンシーンじゃねえか?』

『ガチで血みどろになりそうな死闘で感動していいのかは人によると思うが……根柢がどうあれ、このコンマ1秒が勝敗に響くレベルの戦いの中で、双方一瞬たりとも集中力を切らさずに動き続けるってのは……並大抵の覚悟や執念でできるもんじゃねえ。最早本能のレベルだ。つたく……1年のこの時期からこれって、卒業するまで俺はどれ

だけ苦勞させられんだって話だよ』

『ハイツンデレ発言いただきましたあー！ おい聞いたかお前ら！

1—A全員、イレイザーが卒業まで責任もって面倒見てくれるってよわあまた肘っ！』

『いらんことを公共の電波に乗せて流すな……つか、さつさと実況まじめにやれ。俺の予想じゃ……そろそろ動きがある頃だ』

『あん？ そりやどういう……』

——ドツゴオオオオン!!

響く爆発音。

ステージの中央にもうもうと立ち込める黒煙。

その両側から、弾かれるようにして……互いに距離を取るようになって来た緑谷と爆豪。

睨み合う2人のいずれもが、まだ微塵も闘志は衰えていないようではあるが……肩で息をして、汗を滝のように流している。心なしか、動き自体もわずかに精彩を欠いているように見えた。

(まだ未成熟な肉体……あれほどの動きで、集中力で動き続けて……スタミナも集中力も持つはずがねえ。それでもここまでもつたのは驚異的ではある。だが……それが続かなくなつてからがむしろ本番。互いに条件が同じ中……勝つために何ができるか)

「食い下がって……くれんじゃねえかよ、よくもまあ……!」

ステージの上で、威嚇や咆哮以外で声を発することのなかった2人。

その奇妙な沈黙が、会話という形で初めて破られる。

「何だア……そんなに嬉しいかよ、俺に、食い下がってるのがよ……!?!」

爆豪の目の前で、緑谷は……笑っていた。

痛みと苦しみをこらえながらの、少し無理やりなそれではあるが……口角を吊り上げて、歯を見せて、はつきりと笑みを浮かべていた。

「ヒーローってのは……」

「あん？」

「ヒーローってのは、辛くても、苦しくても……いつも、笑ってるものだから……！ 皆を、助ける人を安心させるのが、笑顔にするのが、ヒーローの役目だから……どんな時でも笑ってるんだって、教えてもらった……！……ごめんかつちゃん、嘘、今のなし」

「あ、あ!? んだそりや、どういう意味だデク!？」

唐突に言われたそんな言葉に、爆豪はおちよくられたのかと、自分も浮かべていた凶悪な笑みを引っ込めて、苛立ちを露わにするが……緑谷は笑みを崩さないまま、続ける。

「ヒーローは笑ってるもの……それも、僕が大切にしてる、尊敬する人からの教えだ……でもさ、今こうしてここで笑ってるのは……正直に言う。確かに……」

一拍、

「かつちゃんとかこうしてここで、戦えてるからだ」

そう、笑って、胸を張って言い切った。

「……どういう意味だ？」

「そのまんまの意味だよ……っていうか、戦闘訓練の時にも、多分言った」

その言葉に、無線ごしにそれを聞いていた麗日が……そして、観客席で、トゥルーフフォームで見守っているオールマイトが、当時のことを思い出していた。

あの時の緑谷が口にした、腹の底からの叫び。爆豪に初めてぶつけたであろう、心からの本音。

『君がすごい人だから！ 勝ちたいんじゃないか！』

『勝って!! 超えたいんじゃないかバカヤロー!!』

恐らく爆豪もそれを思いだしたのだろう、表情が変わっていく。

しかしそれは、怒りや苛立ちを前面に押し出したものではなく……抑え込んでふたをしたような形に見えた。

「ずっと、君の後ろだった」

ぽつりぽつりと話す緑谷。

「ずっと僕は、何もできなくて……君の背中だけ見てた」

何も言わず、聞いている爆豪。

「かつちゃんはすごくて、僕はダメなんだって。かつちゃんは何でもできて、僕には何もできないって……かつちゃんにも、周りの皆にも、言われ続けて……とつくに、頭ではわかって……それでも心のどこかで、諦めきれなかった……!」

「覚えてたから……! 君と僕は、同じ人にあこがれて、同じ夢を持っていたんだって、確かに覚えてたから! 追いつきたいって! 勝ちたいって! 君の背中じゃなくて、いつか君と同じものをこの目で見るようになるかって、ずっと思ってた!」

「だから今、こうして僕は……僕が、かつちゃんとこの舞台で戦ってるってことが嬉しいんだ! どうしようもなく! かつちゃんは……かつちゃんは僕にとつとぐぼふあ!」

「^{なげ}長えわ!!」

緑谷の顔面に突き刺さる爆豪の拳。

しかし、別に腰も何も入っておらず、爆破を推進力にしたわけでもない形だけのパンチ。

それでも、頬にクリーンヒットして緑谷が盛大に吹き飛ぶ光景を見て……観客の心は、だいたい1つに揃っていた。

((ええ……この空気で?))

恐らくは『かつちゃんは僕にとって○○○なんだ!』という、いかにも熱血なセリフ展開を期待していたであろう観客たちは、あんまりにもあんまりなタイミングでの爆豪の拳^{ツッコミ}を、啞然として見ていた。

しかし爆豪は、起き上がった緑谷に向け……イラついた表情で、構わず話し始める。

まるで、話す順番は自分に移ったとでも言うように。

「テメエ……あんだけ言ってまだわかってねえのか……いつまであの時と同じような、すつとロイ考え方してやがる……!」

「え……!?!」

「背中だあ!?! 同じ夢だあ!?! 相変わらずわけわかんねえことばっか

りくつちやべって……誰がんなこと聞いた!? 誰がわざわざ過去語れつつった!? 別に何も興味ねんだよそんなことは!! 第一……思い出話する前に、感傷に浸る前に……てめえが一番目の前のもん見てねえだろうが!」

きよとんとしている緑谷に向けて、吼えるように言葉を浴びせる爆豪。

「言ったよな俺アよ!? 俺がいつどこで誰と戦って、そんで勝とうが負けようが、それはそれだけの話だつて! それより前に何があつたとか、それがあつて後がどうなったとか、関係ねえんだよそんなもんは! テメエが一年前まで、どんだけ弱くてどんくさくて、視界に入れるのも虫唾が走るようなクソナードだったからつて、それが今ここでの戦いに、何が関係あると思つてんだ!」

「ちよつと前まで俺の背中を見てたから何だ!? 俺と同じものが見たくて見れなくて、それがどうしたつてんだ!? んなこと思ひだしてる暇があつたら、テメエが今何でここに立つて、何をしてるのかだけさつさと思ひだしてろ! 半分野郎の時に偉そうに啖呵切つといて、テメエでそれを実践しねえつもりかこのボケ! 目ん玉皿にしてよく見やがれ、今テメエの前にいるのは——

——この! 俺だろうが!!」

「……………」

「一年前のクソナードも関係ねえ! 10年前とかもつと関係ねえ! 『今のテメエ』が今ここに立つてんだ! 見えてもいねえもの見るなんて、無駄に器用な真似してんじゃねえぞ! 俺の前に立つ以上、俺以外を見るのは許さねえ……それが例え、過去の俺でもだ! わかつたかデク!」

その瞬間、緑谷の体から……先程までに倍するスパークがあふれ出す。

バチバチバチバチ……と、爆豪の爆発とは違う、爆ぜる音が響き始め……まるで周囲の空気が震えているかのよう、あたりを包む空気

が一変していく。

(そうだ……それでいい！ 全力のテーマに勝たなきゃ意味がねえ！)

それを感じ取って、爆豪は満足そうに……そして、さっきまで以上に凶悪な笑みを浮かべる。

(俺がとるのは、お情けの1位や、なあなああの1位じゃねえ。誰も文句ひとつ言えねえような……完膚なきまでの1位だ！ 本当の意味でのトップだ！)

迸る『フルカウル』のスパークの中で、緑谷はぼそりと呟くように言った。

「……1つ、わかった。っていうか、思いだしたことがある」

「……へえ、何をだ？」

「かつちゃんは、やっぱりすごいってこと。うん、この一言に全部纏まる」

「そうかよ……で？」

「うん、それで……」

刮目。

カツと見開かれた緑谷の目は……目の前にいる爆豪だけを映していた。

小さい頃から憧れた爆豪でもない、いじめられ続けて恐れた爆豪でもない、

今こうして、目の前で獰猛に笑っている……雄英高1年A組、出席番号17番、雄英体育祭決勝戦進出者にして、同じく決勝戦進出者である自分の対戦相手である、この爆豪をだ。

それを前に……ただ、一言。

「行くぞ!!」

「来い!!」

(そうだ、それでいい！ 俺の前に、ここに立つ以上！ 勝つためだけ

に頭回しやがれ!! 全力を出して、全力を超えて……俺を倒すためだけに動け!! それをねじ伏せて……俺がトップだ!!」
(今でも本音は変わらない! 僕にとつてかっちゃんは……一番身近にいた一番すごい奴だった! いや、今でもすごいと思ってるし、なんだったら憧れてすらいる! そのかっちゃんとうこうして、決勝戦っていうすごい舞台に立っていられることが、嬉しくないはずない! 背中じゃなくて、かっちゃんを正面から見れてることが、かっちゃんと戦えていることが、嬉しいし誇らしい!

——けど、それだけだ!!

そこで止まっているはずない! 満足していいはずがない! 僕に期待してくれたオールマイトのため! ずっと支えてくれた母さんのため! 初めての戦闘訓練と一緒に戦った麗日さんの……準決勝で全力でぶつかり合った轟君の……ここまで強くなる道筋を示してくれた栄陽院さんの……クラスのみんなの! 今までお世話になつて助けられた全ての人たちのため! そして何より……今ここのうして、僕を全力で倒そうとしてくれるかっちゃんのためにも!)

「デメエに——」

「君に——」

「勝つ!!」

第37話 TS少女とトーナメント⑩ 緑谷VS爆豪（後編）

「テメエに——」

「君に——」

「勝つ!!」

瞬間、再び2人は激突し、大威力の拳と爆発がぶつかり合って衝撃波をあたりにまき散らす。

『やや長めの語り合いを経て今、戦闘再開！ 時間的にも残りの体力的にも、こいつがラストイニングと見てよさそうだ！ お前ら一瞬も目エ離すなよ！ やる気全開150%OVERのぶつかり合いだ、目に焼き付けろオ!!』

弾かれるように離れる2人。しかしまた距離を詰めてぶつかり合う。そして離れる。

先程までのような動きの速さや激しさはない。しかし、振りぬかれる拳の、はじけ飛ぶ爆破の1発1発に、勝利への執念が乗っていた。むしろ、観客達にも目で追える速さになったからこそ、その激しさはかえって伝わりやすくなり……そして同時に、決着の時が近いことを思わせた。

何度目かの交錯を経て、また距離を開けた2人。

しかし、また地を蹴って駆け寄ろうとした緑谷は、先程までと違って動き出さず、両掌をこちらに向ける爆豪を見て、顔色を変える。

（両手……デカいのが来る！ 正面から行ったら吹き飛ばされる……けど、回避するには時間が足りない！ だったら……『アレ』で！）

その瞬間、爆豪の手のひらから、前方を広範囲に薙ぎ払う大爆発が放たれ——

——るよりも早く、一瞬でその間にあった距離をゼロにした緑谷

が、爆豪を殴り飛ばした。

『な……何が起きたあ!? 爆豪がデカいのを一発ぶちかまそうとしてたのは見えたが……まるで瞬間移動したみてえに緑谷がそれを殴り飛ばしたあ!? おいマジか! アイツあんなに速く動けたのかよイレイザー!?!』

『……足ぶつ壊すのと引き換えのバカ力で加速すりやな。だが、今回は違うようだ……緑谷がさっきまでいた場所、見てみる』

『あん? 何だありや……爆豪がゼロ距離爆破でもしたのかつてくらいにステージボロボロになってんぞ。蜘蛛の巣状って言やいいのか、あのえげつないヒビは』

殴り飛ばされつつも、どうにか場外にはならず済んでいた爆豪の目にも、それは見えていた。

まだこんな奥の手を隠していたのか、と沸騰しかけるも、爆豪は今殴られたきりで追撃が来ないことを不自然に思う。緑谷に目を戻して注意深く観察すると……足が震えているのが分かった。

「特訓で、習得した技の1つ……いや、『習得した』なんて口が裂けても言えない……! 全然反動を制御できてなくて、足がボロボロになるから……使えなかった……。それでも……今、使う……! 君に、勝ちたいから……!」

『『障害物競走』で出したようなスピードを出すには、助走をつけないきやいけない……でも、勝負してる最中にそんな暇があるわけがない。だから、助走の分の勢い付けを一瞬で済ませるために……一瞬で何回も地面を蹴って無理やり加速する!』

再び、蹴り砕く勢いで地を蹴って急加速する緑谷。

ドン! と、爆発音にも似た音が響くと同時に、またしても爆豪は殴り飛ばされる。

(見えなくはねえ……だが、回避が間に合わねえ! だが、アレはデク
の足も……)

(やつぱり、ふくらはぎから足首にかけての負担がすごい……でも、折れるほどじゃない! 痛いくらい何だ、乗り越えろ!)

「あああああああ！」

『緑谷、ここに来て切り札を切ったか!? 超加速技で爆豪に反撃の隙を与えずに攻める攻める!』

『足への負担も大きいようだが……1回で骨折してた頃からすりや十分な改良か。爆豪は、反応できないわけじゃなさそうだが、流石に防戦一方か……しかしあの加速、まるで飯田のレシプロだな』

その相澤の言葉を聞いたクラスメイト達は、確かに、と思った。

大きな反動と引き換えに超加速を得る……それが『足技』であるということも相まって、飯田の俊足に慣れ親しんでいるクラスメイト達には、それを連想する者も多かった。

そして実際に……それは、間違っていない。緑谷がこれを思いついたのは、1速、2速、3速と段階を踏んで徐々に加速していく飯田の個性『エンジン』を参考にしたからだ。

さらにはその過程で、無理やりエンジンをふかして瞬間的に急加速できるのではないか、という可能性にも思い至ったがために、彼の『レシプロバースト』を警戒できたという背景もある。

ちなみにその修行中、『一瞬で何回も地面を蹴る』という原理を聞いた栄陽院が、ある諜報部隊の高速移動技を思い起こしていたことは、緑谷は知らない。

急加速についていけない爆豪は、最早なすすべなく撃たれるだけかと思われたが……

——ドオオオオン!!

「んなっ!？」

彼らしい力技で、それは破られる。それは……

「これ……麗日さんの……!」

『あーっと爆豪! よけきれねえ緑谷の超高速移動を、両手爆破でステージを砕いて、瓦礫を散弾みてーに吹き飛ばした面攻撃で迎え撃つて防御した! しかもその後、上に吹っ飛んだ奴が降ってきて妨害する二段構えだ! つつーかコレ、麗日の『流星群』じゃねえかい見

覚えあんぞー!」

「誰がパクるかボケエ! 今自分で思いついたっつーの!!」

まるで暴風雨のような勢いで、爆風と無数の瓦礫が飛んでくる状況。まさに、麗日が爆豪戦で使った『流星群』……それを、横から叩きつけるかのごとき攻撃。

さすがに緑谷も強行突破はできず、さらにはその場で止まっていると、時間差で上からも瓦礫が降ってくる。たまたら後方に抜けた緑谷だが、これで迂闊に超高速は使えなくなった。

その一瞬の迷いを見逃さず、加速を使う暇すら与えずに……

「つて、かつちゃんは来るの!?!」

「あたりめえだバカが! 瓦礫に当たらずに飛べるルートぐれえ計算してるわ!」

意図的に作り出した瓦礫の中の死角を、爆豪は一気にすり抜けて自分だけは攻撃に移る。

何でもないことのように言っているが、あの一瞬、たった1発(両手なので厳密には2発だが)の爆破でそれを成し遂げているあたり、改めて戦闘におけるセンスは、そして『個性』そのもののコントロールが規格外だと、見ている者達は一様に戦慄した。

形勢逆転とばかりに食らいついて、距離を取られないようにインファイトを挑んでくる爆豪。

だが元々インファイトは緑谷も得意な分野である。一步も引かずに殴り合う。

「くっ……『セントルイス……』」

「アホかテメエはア!!」

ガキイ!! と、緑谷が繰り出そうとした足技を、出がけを潰す形で爆豪は同じく足技……膝蹴りで潰した。

「……っ……あゝっ……!?!」

しかし、それにしても異様なまでに強烈な痛みにも、緑谷は顔をしかめて膝をつく……より前に、爆豪に蹴飛ばされて吹き飛んだ。

「超加速で負担かかっている足で蹴りなんか出そうとすつからだ……痛み箇所をかばっているおかげで力みが足りてねえ、不自然に脱力してほ

ころんでる場所が弱点だつて丸わかりだ……!」

「力み……ほころび……?」

(切島君の時も、そんなこと言つてた……『硬化』し続けて、力みがほころんだ部分をついて『爆破』を叩き込んで……やっぱりかつちゃん、観察眼もすごい……!)

折れてはいない。が、激痛に否応なしに動きが鈍る。

足を潰され、完全に機動力がそがれた緑谷目掛け、爆風を叩きつける構えを取る爆豪。

避けるのは不可能、防いでも片足では踏ん張りが足りず、高確率で場外まで吹き飛ばされる。

そう判断した緑谷は、一瞬後ろに視線を向けて……

(……っ……あそこだ!)

視界に映つたある場所目掛けて、空中から踏みつけるように、無事な足を突き出した。

その蹴りがなぜかステージの一角に叩き込まれるのと、爆豪のはなつた爆風が緑谷を襲うのがほぼ同時。リングアウトほぼ確実の威力が緑谷の体を煽り……

その瞬間、緑谷の蹴りでめくれ上がった、石畳のような形の瓦礫が、その背後で『壁』になり……そこにぶつかることで、緑谷は強引にリングアウトを阻止した。

「ハア!？」

「痛っ、だ……でも、セーフ!」

『何じやありやあ!? 緑谷の背後に瓦礫の壁が……あ、さっきの蹴りか!? つか、今度はアレ轟戦のリングアウト防止の氷壁戦術じゃねーか!』

その『壁』を、両足での『超加速』で蹴つて……蹴り碎く勢いで緑谷は跳ぶ。突然の『壁』に驚いた爆豪はそれに反応できず、『流星群』を発動するタイミングを逃してしまい……

「うらああああ!!」

——ズドン!!

そこに、空中で両足をそろえた緑谷の、加速の勢いそのままのド

ロップキックが突き刺さる。一気に爆豪をステージ中央付近まで押し戻す。

だがやられてもただでは終わらない爆豪。爆破の勢いで体勢を変え、攻撃直後ですぐには動けない緑谷を後ろから片手で襟首をガシツと捕まえ……

「ん、だ、らあああああ!!」

——ガゴオン!!

大きく後ろに反り返り、さらにもう片方の手の爆破の勢いを乗せて、ステージに叩きつけた。

『つどああ——ここに来て猛攻の応酬!　つか今の緑谷のドロップキックと、爆豪の爆破加速バックドロップ、今度はどっちも栄陽院の技か!?　さつきから俺、この大会のハイライト見せられてる気分になつてんぜ!?　まさしく集大成の戦いつて奴だ!』

「だ・か・らパクってねえって言つてんだろうがア!!」

「んっ、ぐうう……と、咄嗟に……!」

吼える爆豪、起き上がる緑谷。

どちらももう相当にボロボロになっている2人を見ながら……相澤は、真剣な表情で彼らの一挙手一投足を見守っていた。

(元々使えた切り札だったらしい『超加速』はともかく……緑谷も爆豪も、ここに来て今まで目にしたことのある戦術を『咄嗟に』思いついて使っている。それは確かに『パクリ』ではないが……今まで見てきた、経験してきた戦いが、間違いなく身に、血肉になっている証明でもある。体育祭……互いに競い合い、刺激し合い、向上心にさらに火をつける目的で行われるイベントなわけだが……これは今年は、見る側にも出てる側にも期待以上の効果が望めそうだな)

ふと観客席に目をやれば、食い入るように見つめ、応援する1—Aの生徒達の姿。

少し離れた位置の1—Bの生徒たちが集まる区域でも、この闘いを見逃すまいと目を皿にしている生徒たちは数多くいた。

トーナメント出場枠のほとんどをA組が占めてしまったことを悔しく思い、ここから先、一層の飛躍を誓っている者も少なくはないだ

ろう。

心操を筆頭に、ヒーロー科への昇格に意欲を高ぶらせる普通科、
発目同様、彼らを支え、さらに飛躍させるアイテムを作る意欲に燃
えるサポート科、

戦闘力ではどうにもならない範囲でヒーローと共に歩むビジョン
を見据える経営科、

それぞれ形は違うだろうが、間違いなくこの闘いを見て、この大会
を通して、己の心を燃やしているはず。

鉄は熱いうちに打て、という格言もある。彼らのこの熱気が冷めな
いうちに、一層力を伸ばせるように叩いてやるのが自分達教員の役
目。カリキュラムを一部組み直す必要があるかもしれない。

教職員席に目をやった瞬間、同時にこちらを見ていたらしいI―B
担任、ブラドキングと目が合った。どうやら同じことを考えていたら
しい。牙を見せてニヤリと笑う筋骨隆々の同僚を見て、相澤も密か
に、この先の学校生活に気合を入れ直していた。

そして、彼ら彼女ら全ての視線が集中する先で……緑谷と爆豪は睨
み合う。

互いに既に体はボロボロ。限界ギリギリだ。

何度も殴られ、蹴られ、爆破され、叩きつけられ……全身傷だらけ
の満身創痍。どうして倒れていないのか不思議とすら言われそうな
ほどの風体で立ち会っている2人。

がくがくと足が震え、最早動くこともできないのではないかという
状態で……先に沈黙を破ったのは、爆豪の覚悟の咆哮だった。

「オオオオオオオオオオオ!!」

雄たけびと共に、両手を地面に向けて爆発させて飛びあがった爆
豪。

そのまま、上空高く舞い上がっていく姿に、緑谷も観客達も何事か
と彼を目で追う。

空高く飛びあがった爆豪は、体を反転させて緑谷の方を向くと……
またしても連続で爆発を起こし……それによって超高速で落下を始
める。さらには回転まで加わっている。

緑谷は直感した。アレは、間違いなく最後の……とどめの一撃だと。

(避ける……無理！ もう足がろくに動かないし、かつちゃんなら追尾してくる！ 防御？ 無理！ 爆発の威力に位置エネルギー、回転による爆風の収束……どう考えても今までで一番ヤバい威力になる！ 避けるのも防ぐのも無理なら……こつちも全力をぶつける!!)

「はああああああああ!!」

緑谷の体から、今日一番の勢いでスパークがあふれ出す。その輝きは周囲を照らし、彼の髪が鮮やかなライトグリーンに見えるまでになっていた。

爪が皮膚を突き破り、指の骨が折れるかと思うほど力いっぱい拳を握り、右腕に全力で力を籠める。だが……それだけではない。

(今までの戦いで酷使しすぎて……かつちゃんの爆破に打たれすぎて、右腕に思うように力が入らない……『100%』を、十分に力を乗せて打てない……このままじゃきつと押し負ける。だったら……思い出せ、強くなるために、一番最初に栄陽院さんから教わったこと!)

すると、緑谷の体が更に輝きを増す。

迸るその光が、まるで右腕に力を集中させるように流動して見える。

(『フルカウル』と同じ……右腕だけじゃなく……右肩……背中……腰……両足……腕と繋がってる体全部を使って、威力を上げる！ どこもかしこもボロボロだけど……これなら!!)

今日一番の凄まじい威圧感を放つその姿に、爆豪も、次で全てが決まると悟る。

自身の出し得る最強の一撃、それをぶつけるにふさわしい緑谷の気迫。

最早、彼の頭の中にあるのは、目の前の敵を打ち砕くことのみ。

彼が少し前まで、自分が見下していた『無個性』の『クソナード』であったことなど吹き飛んでいる。一時的なものであろうが、それが焦

りも迷いもなくし、ただ一撃に全霊を集中させた。

流星のごとく降ってくる爆炎の砲弾を、恒星のごとく輝く緑色の拳が待ち受ける。

その二つはしかし、お互いを『射程圏内』に収めた瞬間……ぶつかり合うより前に炸裂した。

大気圏で燃え上がり、炎に包まれる隕石のように。その最大の輝きを、

全く同時のタイミングで……交差させる。

「ハウザアアアアア……インパクトオオオオオオ!!!」

「デトロイトオオオオオ……スマアアアアアアツツシュ!!!」

その瞬間——世界から、音が消えた。

2つの極大の一撃がぶつかり合い、ステージが崩壊するほどの大爆発に変わる。

爆発の規模自体は轟の空気膨張ほどではないが、全てを込めて放たれた互いの一撃は、局地的には本当に破滅的な威力の爆風を発生させており、ステージの上にはクレーターができ、ステージ自体も鏡開きをした後のように、中心から亀裂が入って粉碎されていた。

吹き飛ばされそうになりつつも、どうにか踏みとどまったミッドナイトが確認すると……その上には、誰の姿もない。

左右に目を走らせると、完全に場外……というよりも、どちらもスタジアムの壁に叩きつけられてずり落ちたと思えない位置に、緑谷と爆豪が倒れていた。

すぐさま、セメントストと2人でそれぞれ駆け寄って確認する。ピクリともしないし、全身ボロボロだが、少なくとも息はある。すぐに命に関わるようなこともなさそうだった。

そのことにほっと一息つきつつ……ミッドナイトは声を張る。

「緑谷君、爆豪君共に場外！ よってこの勝負引き分け！ 決着は双方の回復を待ってつけることとします！ 医務室へ！」

☆☆☆

「……すごかったな」

「ああ……マジですごかった」

「うん、すごかったねー……」

「すごかった、つか、すごすぎだろ……あいつら2人共……」

「あははは、皆さつきからそれしか言っていないよー」

「それしか言えねえんだよ」

「なんだか全員、言語中枢がしばらく開店休業してそんな雰囲気のみ
—A観覧席である。

別に、全力放電後の上鳴ウエイみたくなってるわけではなく、ただ単に……今日の前で見せられた決勝戦のインパクトが強すぎて、言葉が出てこない感じだ。

舞台の上で交わされた言葉も含めて、まー色々と考えさせられる試合だった。

もちろん、緑谷の雄姿を見れて私も大満足、試合中に雌の顔になつてなかったか自分で心配になるくらいなの、幸せな時間を過ごせたのだ……それ以上に、皆と同じように……ヒーローの卵として、『火がつく』試合だったな、って思った。

「……落ち着くまで時間が要りそうだよな、コレ……なんか、映画一本見終わった後みたいなの、満足感というか燃え尽き感というか……」

「あ、その表現ぴったりや。ナイス永久ちゃん」

「なんかウチ、今日からもっとトレーニングとか頑張れそうな気がする」

「あーわかる。何か熱がこもってるよね……胸の奥あたりに」

「というかむしろ今からでも走りに行きてえ……つか体動かしてえ」

「切島熱血う。けど気持ちわかるな……何でもいいからとにかく頑張らなきゃって気持ちになった……燃え尽きたってより、むしろエンジンに火が入った感じはする」

「そんな周りの声を聴いていると、つくづく今の試合ってすごかったなと実感した。」

全力同士のぶつかり合い……あの『戦闘訓練』の時より、何倍も激しく……そして、恨みも焦りも何もなく、ただ闘志だけを胸に、お互いの本当に全身全霊をぶつけあった一戦。

恐らくは、ヒーロー科もそれ以外も関係なく、何かを考えさせられる試合になったと思う。コレで、見る前と後で何も変わらないって奴がいたら……ちよつとどうかってレベル。

まあ、既に全力で突き進んでいるような人だったらわからんが……少なくとも、見える範囲にいる奴らは、何かしら変わりそうな気配はある。

ふと、観客席入り口付近に……キャリアウーマン姿で、手に持ったバインダーにカリカリと何やら書き込んでいる母さんが見えた。

すぐにペンは止まり……ふとこつちを見て、にっこり笑ったかと思うと、そのまま出ていったが。

(……母さんの仕事の成果も、この分なら十分に生かせそうだな……今年の1年A組は、いやきつとB組もだ、皆ガッツリ強くなる。緑谷や爆豪に負けてたまるかって感じで……。それを考えれば、今日この場に母さんを……『アナライジユ』を呼んだのは、英断そのものだったと言っている。親だっというひいき目なしに……あの人は、こういう火をさらに燃え上がらせるのには最強のやり手だ)

そんなことを考えていると、ふと横からこんな声が聞こえて来た。「それにしても……遅いな、アナウンス。緑谷と爆豪が搬送されて結構経つのに」

時計を見ながら、ふと尾白がそんなことを。

しかし、確かに遅いので、皆それに『そう言えば』と乗っかっていく。

「切島と鉄哲の時は、もつと早く発表されたよね、決着方法」

「まあ……俺らはどっちも防御力高くて、傷自体は大したことなかったからな……リカバリーガールの『治療』もちよつとで回復して、体力もほとんど消耗無かったし」

「2人、結構酷かったもんね……特に最後のヤバかったし、骨とかイってたんじゃない？」

「……そうなると少し不安ですわね。お2人共、特に準決勝からこちら、相当な激戦を経てあそこに立っていました。ケガの度合いにもよるでしょうが、『治療』に必要な体力は果たして残っているかどうか……そもそも、あの傷では意識が戻っているかも怪しいですわ」

「えーそれ大変じゃない？ 2人共この後、何かして決着つけなきゃいけないんだしさ」

「というか、何で決着つけることになると思う？ あの戦いの後で、変なゲームとかで決着なんか付けるようなことになったら、しらけるっつーか……そういうこととしてほしくねえんだけど」

「俺もそれは思った。けど、想像もつかねえな……それに決着つけねえってわけにも……」

(……決着……っけない……?)

と、瀬呂の言葉に私がふいにあることを思いついた瞬間、

『レディース・アンド・ジェントルメェン!! 大変長らくお待たせいたしましたア！ 今さっき審判団による協議の結果が出たっつーことだ！ よく聞きなりスナー!』

実況席から聞こえて来たプレゼント・マイクの声に、全員の興味がそっちに移った。

『さて！ 緑谷と爆豪の決着をどうやってつけるのか！ そしてそれはいつ始まるのか！ 皆聞きたくてうずうずしてる……と思うが、ひとまずそれは待ってくれ、先に報告することがある』

「報告……?」

何か心配そうな表情で麗日が呟く。

『緑谷と爆豪の容体についてだが……知っての通りうちの学校にはパーフェクトなドクターがいる。だから怪我については問題ねえ、深刻なアレもなくきちんと回復するって見立てだ』

それを聞いてほっとする者が多く出たが、さらに続けるマイク先生。

「だが残念ながら、2人共『今日中に』は難しいってよ。今日1日で蓄積しすぎた疲労が多すぎて体力が足らず、勝負できるようになるまでの治療は難しい……簡単に言えば、2人そろってドクターストップだ

そうだ……このあとやる予定だった、何かしらの『勝負』も含めてな
今度は『ええ〜〜つ!!』という言葉の大合唱だ。

その困惑は当然、1―Aの観覧席にも伝わって、というか湧きあ
がっている。

「えっ!? それって……決着つけらんねえってことだよな? どうな
るんだ勝負?」

「まさか……無効試合とかに……ならないよね?」

「あの試合を見せられた後でそんなことになったら、ブーイング殺到
だろうし、ないとは思うが……しかしそうすると……」

『さて、リスナー諸君はこう考えていることだろう。ならこの今の勝
負、一体どうやって決着をつけるのか、と。……そこでだリスナー諸
君、ちよいと尋ねるぜ……どーしても、決めなきやダメか?』
((は?))

『確かにこれは体育祭! 競い合い、優劣を決めて最後の最後、最高成
績を取った者を皆で称えるのが正しい形で、今までずっとそうしてき
た。けどなお前ら……今の試合を見てどう思った? 心の中に燃え
上がるもんがなかったか? リスナー諸君、アレ見て火がついたりし
なかったか!』

(おいおい、まさか本当に……)

『てっぺん決めるのも確かに大切さ! だがそもそもヒーローのてっ
ぺんってのは、人々に安心と未来への希望を、社会に平和を与える役
目を担う存在だ! オールマイトみたいにな! そして……平和は
ともかくとしてだ、今の戦いを見て、お前らの中に心を動かされな
かった奴がいたか? そしてあいつらが戦ってる最中に……ほとん
どの人が思ったんじゃないか。どっちが勝ってもおかしくないって
よ……だったらよ、一字違いでこうなっちまったらおかしいか?』

——どっち『も』勝っても、おかしくない

『もうどういふことか予想ついてきた奴もいるかもしれないなあ……
! あれだけ見事に人々の心をに火をつけた、卵とはいえ最ツ高に熱

いヒーローを、どっちか排斥するようなことがあっていいと思うかよ!? 奇麗事!? 上等じゃねーか、こちとら命張って奇麗事実践するのがお仕事だ!」

「おい、それって……」

「マジかよ……まさか……!」

『繰り返して言うが、あの時のステージ上でのあの2人は紛れもなく『ヒーロー』だった! 己の行動で人々の心を動かし、前へと進む炎を燃やした2人が、ヒーローじゃなきゃ何だっただ!? いいかりスナー諸君、これは、これが、うちの運営本部が校長まで巻き込んで話して決めた最終決定だ! それが例え、雄英史上一度もなかったような『暴拳』だとしてもな! つーわけで……』

一拍。

『結果発表! 今年度の雄英体育祭、1年の部優勝は……緑谷出久と爆豪勝己の2名! こいつら両方が同時優勝だ! ルールと枠組みすら覆し、審判団にカツ飛んだ決定をさせたスーパールーキー2名をどうか盛大に祝福してやってくれリスナー! Congratulation Heroes!!』

——うおおおおおおおおおつ!!

『マジかよ!?』『そんなのアリ!?』『いやアレは確かにそうなるかもしれないって!』『鳥肌立った……』『やべえすげえ試合見ちゃった』『聞いたことねえこんなの! でも熱い!』『どっちもおめでとー!』大歓声が響き渡るスタジアムはしかし、一様にこの『暴拳』を歓迎し、祝福していた。

彼ら一般客よりも、緑谷と爆豪に近い位置にいる私達1-Aは、しばし唾然としているしかなかったが……じきに再起動するだろう。したらしたで大騒ぎになるだろうが。

『なお、表彰式はこの後少し時間をもらってから開催するぜ! 何せこの結果だ、表彰台もちとデザイン変えなきゃいけねえからよ! そ

れと緑谷と爆豪だが、特別な点滴とうちの養護教諭の治療で、どうか動けるようになるまでもう少しかかるからそれも待ちだな！ それまでレンズ磨いて準備しとけやマスメディア！ あとそれから準備した残り2人……轟と栄陽院！ お前らも出番来るから準備しろよ！』

マイク先生の言う『特別な点滴』ってのの正体には大体予想はついたが……その後に続いた言葉ではっとした。

やば、普通に表彰式見るつもりでゆっくりここに座ってたわ……私出るじゃん。とりあえず控室行つとけばいいかな……

しかし、ホントすごいことになっちゃったな、今回の体育祭……。まさか、同時優勝なんてことになるとは、読めなかった……。この私の目をもつてしても。

(まあ何ていうか、予想とはだいぶ違う形になっちゃったけど……。おめでと、緑谷)

後で直接言つてやろうと思いつつ、私は轟と一緒に、準備のために控室へ向かうことにした。

あんたその謎言語解読できてんの？ てか今私爆豪に何言われたん？ 結構気になる。つかむしろ通訳して」

緑谷が顔色変えて止めてたところからして、放送禁止用語や差別用語でも飛び出してたんだろうか。

あと、悪気はなくても敵意だの殺意だのがあるってそれ十分に問題だと思っただけです。

しかし、その話が先に進むより早く、主審のミッドナイト先生の声が響いた。

「さあ、それじゃあいよいよ表彰式を始めちゃうわよ！ 今回メダルを授与してくれるのは……もちろん、この人！」

その瞬間、スタジアムの屋根から、大柄で筋骨隆々な人影……オールライトが飛び降り、表彰台の前に着地して現れた。

「私が！ メダルを持ってき——」

「我らがヒーロー、オールライト!!」

——きた、のに……」

そして、打ち合わせ不足だったのだろうか、とても悲しいことになってしまった。

雄英高校、何でもかんでも行き当たりばったり、勢いで行動し過ぎると思うんだよなあ……入学式バックレさせて体力テストさせる担任とかいるし、オールライトも通勤途中とか人助けしてて、しよっちゆう授業遅れてくるし。

手を合わせて、軽い感じで『カブった、めんご！』みたいに謝罪するミッドナイト先生。

それに何か言いたげではあったものの、気を取り直してオールマイトはメダル授与に移る。介添え——メダルとか賞品乗つけたお盆持つ係の人——はミッドナイト先生がするようだ。

……しかし、きっちり金メダル2つ用意されてる。予備でもあったのかな？

「轟少年、おめでとー！」

まず、3位の轟から。

表彰台より少し低い位置に立っていないながら、それでも轟を見下ろす体格のオールマイトに、頭を下げてメダルをかけてもらう轟。

その際に、『顔が以前と全然違う』とか、『清算しなきゃいけないものがまだある』『俺もあなたのようなヒーローになりたいと思った』とか、いくつか話していたのが聞こえた。

あまり要領を得なかったのでよくわからなかったが、何やら緑谷との戦いの中で、色々と考えさせられるものがあつたようだ。

オールマイトも『深くは聞かない』と言っていたので……気にはなるが、少なくとも心配することはなさそうだ。

ハグして祝福される、憑き物が落ちたような表情の轟を見て、気付けば緑谷も笑っていた。

続いて、同じく3位の……私だ。

「おめでとう、栄陽院少女！」

「ありがとうございます！」

「ははっ、元気がいいな！……しかし、今言うことじゃないかもだが、君は本当に背が高いな……私が見下ろせない女子ってなかなかいないから少し新鮮だ」

オールマイト220 cmに対し、私192 cm（確か）。まあ30 cm差はあるが、確かにあまり見ない身長だろうなあ……表彰台の分と合わせると、ほとんど目線の高さ合っちゃってるもんな。

私自身、異形型以外で私より背が高い女の子には会ったことないし。

「恵まれたフィジカルに頼りきりにならず、テクニクに洞察力、そして最後まであきらめないガッツ！『個性』も含め、君の並々ならぬ努力の積み重ねを見た気がするよ。ただもうちょっと、慎みを持つとうか、自分の容姿に無頓着なところは直したほうがいいかな、H A H A H A」

「ははは……よく言われます。幸いクラスには私より女の子らしい子がいっぱいいるので、これから課題として学んでいこうかなど。……女なのにそれを学ばなきゃいけないあたり、すでにどうかと思うとこ

ろですけど」

「そんなことはないさ！ 君の成長を楽しみにしているよ！」

ハグするのは少し恥ずかしい……かと思っただが、そんなことはなかった。

むしろ、ぽんぽん、と背中を軽くたたかれるその感じに、安心するとうか……まるで、父親のようなぬくもりを感じた。

……私の『今の』父親は、いい人だけど、そういうイメージとは大きく違うから……どこか懐かしく思いつつも、新鮮な感じだった。

続いて……

「さあ、緑谷少ねうおおおい!? 泣くな泣くな！ これからだってのにー！」

「はいっ、っ、オールマイイト!!」

メダル掛けられそうになって感極まって泣く緑谷の囃。

人間の涙腺の限界を明らかに突破しまくっている勢いで溢れ出している涙。コレで『個性』とかじゃないってそっちの方がすごい気が……ていうか、割と本気で脱水症状を心配する量だ……オールマイイトもちよつとびくつとしてたぞ。

下の方からは『しまらねえなあ……』『決勝戦での熱さはどこへ……』『ええやん、いつものデク君で安心する』なんて声が聞こえる中、H A H A H Aと笑ってオールマイイトはメダルをかける。

「体育祭を通して見せてもらったよ。君の力も、成長も、そして何より……戦いの中にあつてなお輝く、君のヒーローとしての在り方を！ それを眩く思ったのは、決して私だけではないはずだ！」

ガッツポーズと共にオールマイイトの口からそう言い放たれた瞬間、緑谷の横で、爆豪と轟がぴくりと反応したのは……気のせいじゃあるまい。

緑谷は、黙って聞いている、とうか……感激で上手く言葉が出ないようにも見える。

「あえて多くは語るまい！ ただ、これからも君の目に映っている未来へのビジョンを手にするためにがんばってくれたまえ！ いつの日か、私もこの目でその世界を見ることが出来る日を、楽しみに待つ

ことにしよう！ あらためておめでとう、緑谷少年、君が優勝だ！」
「……………はい！ ありがとうございます、オールマイト!!」

首元に光輝く金メダルの重みを感じながらだろう、緑谷は、今度こそは涙をこらえて、笑顔でオールマイトの祝福とハグを受けとめていた。

……………そしてとうとう、順番は最後……………もう1人の優勝者に移る。

「さて爆豪少年……………つと、こりやあんまりだな」

流石にメダル授与の時になってまで拘束具はあんまりだと思ったのか、カポツとそれを外すオールマイト。ようやく爆豪の口元、というか顔全体がカメラに映ったことだろう。

「伏線回収見事だったな、優勝おめでとう！」

「いらねえ!!」

突如叫ぶ爆豪。しかし半ば予想してたのか、オールマイトに動揺はない。

「意味ねえんだよ、オールマイト……………こんなあなああの形での、決着にすらなっていない1位なんて……………！ 誰にも何一つ文句言わせねえ、俺が満足いく1位じゃなきゃだめなんだよ……………！」

……………顔すげえ……………。

歯をむいて、眼がありえないくらいに（角度的に、顔の輪郭的に）吊り上がってる。正直怖い。大丈夫だろうかテレビ映り……………子供泣くぞコレ。

『爆豪って異形型だっけ？』『緑谷と同じで遅咲きの個性が今……………？』『んなアホな』……………下の方から聞こえる会話。もつともな感想だと言わざるを得ないが。

「大したものだ。常に相対評価にさらされるこの世界、不変の絶対評価を己の心に持ち続けられる者はそう多くない……………だが1つ訂正しとくぞ爆豪少年。あの見事な試合を見て、『なあなあ』なんて言葉が出てくる奴はいないさ！」

そこでオールマイトは、一瞬ちらつと緑谷を見て、

「君と緑谷少年、その魂のぶつかり合いは、加減も横着もない、正真正銘の全力同士の戦いだっただ」

……それは、戦っていた君が一番よくわかっていたはずだ。君にとつては、どちらか1人に勝者が決まらないなんて中途半端に思えるかもしれないが、燃え尽きんばかりに戦った君達『2人』に、このメダルがふさわしいと思われたからこそ、こんな形の表彰台が今あるんだよ。なあなあなんかじゃない、今日1番輝いていたのが、本当にあるの時、あの場での君達2人だったんだ！ 君がそう思うなら、傷としてでも構わないさ、次へつなげるために……受け取つとけよ爆豪少年！」

そう言つてメダルをかけようとするオールマイトだが、あくまで爆豪は『いらねえつつつてんだろが！』と、めっちゃのけぞるような形で、首にメダルをかけられまいと抵抗した。

仕方ないな、とため息をついて、オールマイトは爆豪の後ろのコンクリの柱を……拳でちよつと小突いて真つ二つに割り、それでできたスペースを使つてメダルをかけてしまった。やだ、豪快。

そのままハグまで決めて……それを見ていた皆が『マジかよ』つて表情になつているまま、最後に、正面のカメラに向き直る。

「さあ皆さん、今回は彼らだった！ しかし！ この場の誰もが、ここに立つ可能性を持っていた！ ご覧いただいた通りだ……競い、高め合い、さらに先へと昇つていくその姿！ 次代のヒーロー達は、確実にその芽を伸ばしている！」

気負うことなく、言葉を素直に受け止めて前を見る私達4人。眼下にいるクラスメイト達もそうしているようだ。

表彰台のてっぺんに立つ2人……緑谷も、涙を拭いて覚悟の炎が燃える目で。

爆豪も、今は不本意だろうが、次こそは絶対に完膚なきまでに勝つという、という決意の目で。

どつちにしても……未来を見据えたい目じゃないの。
うん、いいじゃん！ こういう終わり方もさ！

「てな感じで最後に一言！ それではみなさん、ご唱和ください……」

「Plus Uー「お疲れ様でした!!」」

……あーあ。だからさあ……

「そこは『Plus Ultra』でしょオールマイト！」

「あ、いや……疲れただろうなーと思って……」

本日の教訓。

何事もリハと段取りは大事。

その後、折角だからってクラスの皆で記念写真撮ったりした。

1—Aで表彰台独占したお祝いみたいなのもかねて、まず入賞した4人で。

爆豪がさつきと帰ろうとしたけど、力づくで参加させて。体力足りてないから楽だった。

一番体が大きい私が爆豪の肩をつかんで抑えながら、恥ずかしそうにする緑谷を抱き上げて、ちよつとどうしたらいいかわからなさげな轟も引き寄せて、なんか家族写真みたいになった。でも、あつたかいドタバタ感があつて割と好きな感じに撮れた。

その後クラス全員で記念写真。まさかの相澤先生も参加。マイク先生が連れてきてくれた。

嫌そうにしながらも、どうにか言いくるめて……セメントス先生にも協力してもらってひな壇作って写真撮った。なぜか横から、マイク先生とミッドナイト先生も飛び入り参加してきたが。

……撮る時になって気づいたんだが……飯田、早退したせいで一緒に写れなかったな……残念だ。家の用事だつて言つてたらしいが、真面目なあいつが体育祭途中ですっぽ抜けて行くなんて……一体どんな用事だったんだろうか。

そのあと教室に戻り、相澤先生から今後の予定について連絡を受けた。

明日・明後日は休校。

加えて、体育祭の話が聞かされた時に一緒に言つてた、『プロからの指名』についても、学校側がまとめて、休み明けには発表されるとの

こと。

休みが明けたら、また新たな課題へのチャレンジが私達を待っているようだ。

それまでは言われた通り、ドキドキしながらゆっくり休むこととしてしよう……………

——♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

——着信

f r o m 『栄陽院 豊（父）』

…………と、言いたいところだが、この休日2日間も…………色々やることありそうなんだなあ。

はいもしもし…………はい、はい、わかりました、明日…………本家で。

それと1つお願いが。明後日とかなんですが…………ええ、はい…………ありがとうございます。

でわ。

電話を切り、クラスの皆が解散していなくなってしまう前に…………お目当ての人物の所へ行き、こっそり耳元で用件を伝える。

「緑谷」

「え？ あ、栄陽院さん…………何？」

「明後日の昼からなんだけどさ…………空いてるかな？」

…………体育祭、優勝したご褒美…………欲しくない？」

「…………ふえっ!？」

第39話 TS少女と『栄陽院』の一族

体育祭翌日、私は、普段はまずしないような堅苦しい服装——よそ行き用のレディース程度ではあるが——に身を包み、朝こつ早くから電車に乗っていた。

まだ通勤ラッシュ前で人のまばらな駅のホームから、新幹線のグリーン車で首都・東京へ向かう。

その際、母さんからのアドバイスに従って、ウィッグとメガネ、それに帽子とかを使って、簡単にはあるが変装しておいてよかった。

自分で言うのもなんだけど、体育祭で目立ちまくったせいで私も一躍有名人だ。昨日の時点でニュースとかにばっちり顔出てたし、ネットニュースなんて雄英体育祭関係のページが乱立状態。普段のままの恰好で外に出たら、あつという間に動けなくなるところだったかも。つくづく、そのへんを事前に忠告してくれ、変装キットまでプレゼントしてくれた母さんには感謝するしかない。

……もつとも……それが必要になる理由が、今日、すなわち体育祭翌日に、私が否応なしに出かけなきゃいけないことになるってことがわかってたからだったのは……ちよつと素直に感謝できないというか、色々複雑な思いにとらわれる部分ではあるんだが……

ともあれ、私が乗ったのはグリーン車、しかも特別個室。乗る前後はともかく、この室内にいる間は変装を解いても大丈夫だし、食事もここでとれる。

このチケットも母さんが手配してくれていたものだ。これを使って東京までこい、って。そうすれば、少しは道中も楽だって。

そこまでして私が東京へ行く理由はと言えば……呼び出されたからだ。

私の『今の』実家……『栄陽院』の本家に。

あえて大きなハブステーションを避け、人の出入りが比較的マシな駅で新幹線を降りた私は、駅を出てすぐの所に待っていた迎えの車に

乗ることができた。

そこまでくる間に、流石に何人かに気づかれそうになったものの、どうにかやり過ぎず、あるいは手短に、失礼にならないように切り抜けることに成功したのは幸いだっただけ……。

もう1〜2本電車ずれてたら危なかったかもな……暫くこんな感じの緊張続くんだろうか。

ともあれ、送迎の車に乗りさえすれば後は楽なもんだ。しばらくボーっとして待っている間に、しばらく訪れることのなかった『栄陽院家』の本邸に到着。

相変わらず、アホみたいに広い敷地と、凄まじくでかい豪邸の組み合わせには、これぞ金持ちの家……っていう感想を抱くことしかできない。

この家に暮らしていた期間は、長くはなくとも短くもなかったんだが……後妻の連れ子っていう立場ゆえの疎外感もあって、結局ここでの暮らしに慣れることはなかったな。

中学に入って、タワマンで1人暮らしするようになってからの方が楽だった。

あまり楽しい思い出はあるわけでもなく、どちらかと言えば来たくない家だ。

そんな家にどうして私が来たのかと言えば、呼ばれたからであり……なぜ呼ばれたのかと言えば、結局はこれも『体育祭』に端を発する。

今や『雄英体育祭』は、日本において『かつてのオリンピック』に代わる行事。そこで活躍した選手は、一躍超有名人となる。

『かつてのオリンピック』が全盛だった時代、そこで結果を残した選手は、様々なメディアから引っぱりだこになり、TV番組や各種イベントへの出演依頼、雑誌の特集記事、自伝本の出版、関連商品の発売申し入れなど、列島を席卷する話題の中心になっていた。

もちろん、時がたてばその熱も収まるとはいえ、一時はお茶の間やネット上の話題を搔っ攫うことになり、プロヒーロー達からの注目も集まり、1つの全国区のステータスとして扱われることに間違いはな

いのだ。

そして、身内からそんな有名人が出たつてことで……流石に一回挨拶に来い、って本家に呼ばれた、というのが、今回私がここに来た理由である。

前にもちらつと言った気がするが、本家には今も、後妻の連れ子である私のことをあまりよく思っていない古株が多い。この『栄陽院』の家にふさわしくない、という扱いだつたから。

けどそれも、『栄陽院の家にとって有益』ということになればまた別な様子。

私が雄英高校に入学が決まった時でも、お祝いのメッセージくらいは寄こしつつ、それ以上は干渉して来なかつた本家の連中も、『雄英体育祭』で上位入賞したというステータスは流石に無視するものではなかつたようだ。こうして電話一本で呼びつけられ、片手の指の数くらいしか会つたことも無い本家の老人達から、張り付けたようなよそ行き笑顔でお褒めの言葉をいただくくらいには。

……つか、ホントに用事それだけだつたんだけど。

この十数分のためだけに、片道一時間半の時間かけて私はここに呼ばれたわけ？ これこそ電話や電報で済むだろうに……

……まあ、こんなもんで済んでよかつたと思わなくもないけどさ。例えば、本家の老人達が今更私を『使える』と思つてしまつたせいで、正式に『栄陽院』の家の者として扱われるようになり、色んな行事に引つ張り出されたり、事業のポストを押し付けられることになったり、最悪政略結婚的なことに使われたりとか……うん、死ぬる。

「アツハツハツハ！ 何だ、あんたそんな心配してたの永久？」

「いや、笑わないでよ成実義姉さん。育乃義姉さんも……割と真面目に不安だつたんだから」

「ごめんなさいね？ でも、相変わらずあなたとききたら……他人を観察するのは得意なのに、自分のことになると想定がもう、昔からことごとく的外れなものだから」

偉い人達へのご挨拶が終わり、私室に戻つた私は、ほぼ同時にそこ

に遊びに来た2人の義姉達をもてなしているところだ。お土産に適当に買ってきたお菓子だが。

雄英体育祭限定の『UA饅頭』……まあ、美味しい、と思う。私の舌がバカでなければ。

この2人の義姉も、高級品しか認めない、みたいなアレな感覚は、私の知る限り持っていないはずだから、大丈夫だとは思うが……それよりも2人そろって、人が割とマジで心配してたことを、普通に笑い話のネタにしてくれて……

私から見て右側に座っている、長いストレートの黒髪に、金色の瞳が特徴的な女性。清楚でおしとやか、知的な雰囲気は漂う大和撫子っ感じの女性。シミ一つない色白の肌を持ち、一目で高級品とわかるワンピースタイプの服にストールを羽織っている。

その逆側、左手の椅子に座っているのは、こちらも長い黒髪だが、ややウェーブがかかっている、肌も少しだけ色味が強いかな、って感じの女性。服装も対照的で、ジャケットにジーンズという、ラフで動きやすそうな感じの組み合わせだ。もつとも、こちらも品物自体は高級なそれだが。

順に、えいよういんいくの栄陽院育乃と、えいよういんなるみ栄陽院成実。私の、2人の義理の姉である。つまりは、父親側の連れ子ってわけだ。

2人は私と違って、生まれた時からこの『栄陽院』の一員なので、煙たがられることもなくこの家にずっといることができているし、今は2人共、父の会社『栄陽院コーポレーション』で重要なポストについているはずだ。

それも、決して血筋だけを理由にそこに居付いたわけではなく、きちんと色々なことを勉強した末に自分の実力で持って勝ち取った地位であり、辣腕を振るっているとのこと。

そんな2人でさえ、古臭い考え方を引きずる者が多い本家では、『女である』というだけの理由で跡取りとは見られておらず、いずれ優秀な婿を取って家に貢献することを期待されているらしい。

そういうところにうんざりしていた、っていう共通点もあって、私達義姉妹3人の仲はすこぶる良好だ。今日も2人共、私が本家に帰って

くるのを知って、お祝いを言いに行きつけてくれた。

その後、雑談の中で私が『正直心配してたこと』ってことでさっきの話をして……まあ、あの反応ってわけだ。

「ごめんごめん。でもまあ、あんたにそういう役目を押し付ける心配はないと思うわよ？　あくまで本家の連中は、『縁のある他人』としかあんたのことを見てないからねー……政略結婚の道具として見るってことは、仮にでもあんたを『本家の人間』……つまりは真正銘の身内として認めることになるわけだから、神経質な連中が反対するでしょ」

「それに加えて……あなた、確かに有名にはなったけど、その『なり方』がね……。前々から自分のことに無頓着な子だとは思ってたけど、あなたね、あんなふうには衆目のある前で肌を出して……流石にちよつと顔を覆ったわよ……？」

「あれ、コレもしかして……義姉さんたちからお説教的な流れですか？」

「いや、姉さんはともかく、別に私はそこまで気にはしないけどさ？　まあ、永久が活発な娘だっことは前々から知ってたし、ヒーロー科に行くくらいだから荒事だっやるんだろうしねえ。ただ、ああいうメディア露出の仕方は、人気は出ても、古臭い老人共は好きじゃないってことよ」

「それとなく聞いてみたけど、知名度や成績はそこそこ褒められるものの、全体的に『はしたない』っていう評価にまとまったわね……素直に褒めることはできないでしょう」

あー……まあ、古風な考え方の人ってそういうの特に気にするよね。

男が働きに出る間、女は家を守るものだとか、家長を立てて一歩引いてついて行き、玄関で三つ指ついて出迎えて……古くからの名家つてのはその辺が面倒で困るわ、相変わらず。

まあ、私としてもちよつと刺激的過ぎたかもしれないな、とは思ってるけど……それを理由に関わり合いを持ちたくない、とまで言われるとは。戸籍上は間違いなく家族だつてのに。

ま、こつちも別に、今以上に本家とつながりを持ちたいとか思ってるわけでもないし、特にどうでもいいんだけどね？

「ところでさあ、永久？ さっきの言い方だと……あなた、そういう『許嫁』的な使われ方をしなくてよくなって、安心したのよね？ ひよつとしてえ……気になる子でもできた？」

「うん、まあ」

「あれ!? 思ったよりあっさり認められた!？」

どうやら成実義姉さん、私の反応を見てからかおうとしてたらしく、肩すかしを食らったような反応……さらに加えて、『ホントにそういう相手いたんだ!』という驚愕も混じっていた。

対する育乃義姉さんは……驚いてはいるようだけど、『あら』くらいのリアクションにとどめている。実際にどの程度驚いているのかは……わからない。この人、感情抑制上手いからなあ。表情筋をほぼ100%制御下に置いてるんじゃないかって、個人的には思っている。「ちよつと予想とは外れたけど、別の意味でびっくりさせられたわね……何よ、高校入って速攻でそんな相手作っちゃうなんて、隅に置けないじゃない永久も？ このこの!」

「いや、別に今もってそういう関係ってわけじゃ……っていうか、2人ともてつきり母さんあたりに聞いているもんだとんばかり……」

「お義母様に？ いいえ、何も聞いていないけど……でも、正直安心したわ。私、あなたがいつまでたっても女の子らしさってものを覚えなから、将来をちよつと心配してたのよ」

「あーそういうえば、姉さん永久のこと、きちんとお婿が見つかるのかしら、っていつつも言ってたもんねえ」

うーん……なんか勝手に心配されて納得されて安心されて……私の今言った『気になる人』ってのはもちろん緑谷のことで、姉2人が期待してるような関係になるかどうかは正直微妙なんだが……

何せ、私のこの気持ちは、恋心じゃない。

全く別のものだ、とまでは言わない。似たような感情は抱いているし、そういう関係になれたら嬉しいとも思う。

けど、最終的に私が見据えている、緑谷と私の関係は……私が彼に

とってどうありたいか、つていう形は……あんまり、普通の女の子っぽくないものだからなあ……。

同じ『個性』を持ち、同じ『幾瀬』の女だった母さんなら理解してくれるだろうが……ひよつとしたら、義姉さんたちには怒られてしまうかもしれない。そんな気すらするものだ。

それでも、自分の気持ちに嘘はつけない。

たとえばそれが、半ば『個性』の性質によってもたらされた、本能的な感情だとしても……これが今の私の本音であり、真の望みであることには変わらないのだ。

……というかそんな小難しいこと考える以前に、私が彼を、緑谷を、どんな形であれ慕っているのは事実なんだから、深く考えずに自分のやりたいようにやろうと思います、まる。

「それはさておき……ぶつちやけ義姉さんたちが来てくれたたの、ちようどよかったかも。実は、ちよつと相談したいことがあったんだよね」

「相談？ 何何、恋愛相談ならこの私が……」

「ううん、そういうのも……なくはないけど、どつちかっていうと……姉さんたちの仕事絡み」

そう言った途端、2人が纏っている空気が変わったのが分かった。

まるで、『カチツ』と何かのスイッチが入ったように……表情や姿勢は一切変わっていないのに、纏っている雰囲気はまるで違うものに……お仕事モードになっている。

義姉さん達2人は優しい。後妻の連れ子である私にも……時間をかけて仲良くなったとはいえ、分け隔てなく仲良くしてくれる。

しかしだからこそ、甘やかしてくれるということもない。

具体的に言うと、この2人に公私混同は基本、ない。

仕事絡み……すなわち、公私の『公』であるとカテゴライズした事柄に関しては、きっぱりと線を引き、私情を排して対応する。

まあ、やっても問題ない範囲であればその限りではないが、最初からそういうのを期待できるようなことはまずなく……こうして仕事絡んでくるとわかった時点で、2人の立場は『私の義姉』から『栄

陽院コーポレーションの『社員』に変わり、その立場で向き合ってくる。

「仕事、ね。具体的には、どういうこと？」

「義姉さん達がやってる事業の中に、ヒーロー支援関係の奴がいくつあるでしょ？　その資料とかもらえないかなーって。ああもちろん、一般の希望者に普通に配布してるような奴でいいから」

「それらの事業を利用したい、ということかしら？　永久が？」

「私も使うかもだけど……友達と言うか知り合いと言うか……あー正直に言うと、その私が気になってる相手に紹介するかもしれない。独力でのトレーニングにも限界はあるし……」

「なるほどね。何にせよ、顧客として紹介するってんなら何も問題はないけど……うちでやってるヒーロー支援事業は、ほとんどが最低でも、仮免取得済みが前提、ヒーローインターン以降の運用を想定して設計されてるわよ？　今の永久やお友達が使えそうなの、あったかしら……？」

「！　あー、そうか……校外活動にカテゴリーズされるってことは、最低限、自己判断で『個性』使用が可能になってないといけないのか……頭から抜けてたな……」

「あんたらしくないわねえ、そんなとこ見落とすなんて。何か焦ってる？」

「焦ってはない、つもりだけど……そんなに悠長にしてられないかも、とは思ってたかも」

ここで、成実義姉さんに加えて、育乃義姉さんも、

「それを焦っている、と言うのだと思うけど……なぜそんなに急ぐの？　永久はもちろん、あなたの学友達だって……これから雄英の、決して優しいとは言えないカリキュラムの中で、ヒーローになるための訓練を、順序立てて積んでいくのだと思うけど。加えて今回は……あなたももう知っていると思うけど、お義母様が『アナライジユ』として動いてるわ。間違いなく、例年よりも効率的で、恐らくはよりハードなカリキュラムが用意されるわよ？　それに専念する形でも十分に……」

「うん、それは私もわかってる。けど……」

育乃義姉さんの言葉を遮るような形で、私は言った。

「それを考えてもなお……まあ確かに、ひよつとしたら、ではあるんだけど……『足りない』あるいは『合わない』可能性があるんじゃないか、って思えてき」

「義母さんの解析でも手に負えないってこと？ その彼氏が？」

「彼氏ではないけど……緑谷の場合、なんか妙にちぐはぐなんだよ。『個性』自体がすでにとんでもなく強力になってる割に、自分の体はそれに応じた成長をできていない。かと思えば、修行方法が上手くかみ合った途端、すごい勢いで成長してこちらの想定をあっという間に置き去りにする……鍛えれば鍛えるほど、どんどん『個性』を使えるようになっていくから、その分さらに課題が出てきて……って感じなんだ。だから、いくらでも先を見据えてプランを作っておくべきだと思う」

……って、あ、ついナチュラルに緑谷の名前出しちゃったけど……まあ、どの道相談するつもりだったわけだし、それは別に問題ないか。緑谷……今回の体育祭で、『同時優勝』した子2人の片割れだったわね？」

「じゃあ、その子が永久のお気に入りってわけだ……っていうか、永久が3位でその子が1位ってことは、永久より強い？」

「どうかしらね。永久の場合、相手との相性や『エネルギー』の貯蓄量によって勝負の行方が変わってくるだろうから……けれど確かに、彼の実力は、年齢を考えれば破格のものだったわ。それも、永久の話を聞く限り……あなたが面倒を見て、短期間で大きく実力を伸ばしたそうだし……成程、あなたの言いたいことも、あながち的外れではないのかもね」

そのまま少し考えこむようにした後、それなら、と育乃義姉さんは続ける。

「とりあえず資料は用意してあげるから、もっていきなさい。それと……流石に資格の有無が絡んでくる問題はどうにもならないけれど……彼が将来有望な『金の卵』であるというのは確かなようね。なら

……私にいくつか考えがあるわ」

「考え、って？」

その問いにそのまま答えることはせず、育乃義姉さんはニヤリと笑って、

「明日……ちようどそのコに会うんでしよう？ その時、私も一枚噛ませなさい」

「……………!？」

うげ……ばれてる。何で？

「傘下企業をメインに、高級ホテルやらレストランやら……色々と急に手配し始めたら、そりゃ何かあると勘ぐるわよ。私はてつきり、学校のお友達と祝勝会でもするのかと思っただけど、それにしても規格的にささやかだったから気になってたのよね……さっきの話を聞いて、明日のそれらの手配は、意中の彼のための『ご褒美』だな、って思っただのよ」

「あーあーあー……そういうことね。なるほど……じゃ、明日来るんだ？ よし、私も行く」

ここで、成実義姉さんもニヤリと笑う。理解したらしい。しかも来るって……

ええと……何だろうコレ？

悪いことにはならなそう、だけど……思ってたのと何か違う展開になってきつつある。2人共、明日緑谷に会って、その……何する気かな？

そう尋ねたら、2人は声をそろえるようにして、

「それは……ねえ？」

「ええ、もちろん……」

「ビジネス仕事よ」

第40話 TS少女と『デウス・ロ・ウルト』

S i d e . 緑谷出久

雄英体育祭。

それは、『かつてのオリンピック』に代わる日本の一大イベントだ。『個性』を使って競われる様々な種目、そこで見せられるド派手なバトル、エンターテイメント。

テレビの、あるいはPCの前の視聴者を熱狂させ、またそれを生で観戦するチケットはプラチナ級の希少価値として取り扱われる。

当然ながら視聴率もすごいレベルであり、放送時間中のテレビCMの放送権は巨額で取引され、また実際にそこでCMを流すことに成功した場合の経済効果は、ゴールデンタイムで放映するその数十倍とも言われている。

そして、そこで活躍した選手ともなれば、一時ではあれど超がつく有名人扱いだ。

お茶の間の話題を搔つ攫い、電車やらバスに乗れば声をかけられることになる。話題性の強さによっては、ネット上で何日も取り上げられたり、プロヒーローのようにファンがつくこともある。

けれどそれは、あくまで一時的なものだ。1つのステータスとして残ることはあれど、基本的にそういうお祭り騒ぎも、やがて収まってしまう。

なぜかってそりや簡単な話だ。一時の、それも限られた空間での活躍になる『雄英体育祭』よりも、今まさに現役で戦い続け、様々な『敵』を倒して活躍する現役のプロヒーローの方が、話題性に事欠かないからだ。

不動のNo.1『オールマイト』を筆頭に、事件解決数最多の『エンデヴァー』、若者たちのトレンドの最先端としても人気根強い『ベストジーニスト』など、彼らは日々のヒーロー活動で、長年のキャリアで、一時の話題なんかじゃびくともしないほどの人気を誇っている。それから比べれば……まあ、自虐的になるつもりはないけど、『雄英体育祭』の上位入賞なんて些細なものだ。

……そう、だから……こんなことになって、なるはずないんだけどなあ……!?

そこは、どう見ても庶民が利用するようなレベルじゃない、一泊何万とか十何万するような超高級ホテル。

あらかじめ用意させられていた、ドレスコードに合致する正装に着替えさせられ、見るからにセレブリティな人々が行きかう中を、完全なVIP待遇で案内され、連れてこられたのは、窓から絶景が見える展望カフェ……的どころ。

壁際に何人ものメイドさんが、当然のように完璧な礼儀作法で待機しており、ちらりとメニューを見た限りでは、コーヒーマスター杯に4桁の値段が普通についている……そんな場所に案内された。

極めつけに、僕の目の前の席には……黒髪のすごい美人なお姉さんが、優しい微笑みを浮かべて座っていて……

「緑谷出久様、このたびは栄陽院コーポレーション企画テストプロジェクト『次世代ヒーロー育成総合支援事業『デウス・ロ・ウルト』超特設クラス』の説明会にお越しいただきありがとうございます。私は、本日の事業説明を担当させていただきます、栄陽院コーポレーション本社企画開発部長を務めております、栄陽院育乃と申します。緑谷様におかれましては、日頃より愚妹がお世話になっていられること……永久の姉としてもここでご挨拶させていただきますね」

「栄陽院さああん!? 何コレ!? 何コレ!? お願いだから説明ください! 僕今の状況何一つ理解できてないよ!」

失礼だとは思いつつも、僕は目の前にお姉さん——栄陽院さんのお姉さん! ——から視線を外し、僕の横、隣の席で気まずそうにしている彼女に助けを求めた。

ちよつと時を巻き戻す。

「緑谷出久様ですね、お迎えに上がりました。どうぞお乗りください

ませ」

「え、ええと……ひ、人違いでは……ない、ですか？」

「……？ 緑谷出久様ではいらっしやいませんでしたか？」

「い、いえ、僕は確かに緑谷出久ですけど……なんで、僕の家にも、こんな立派な車……」

「では問題ございません。永久お嬢様の指示によりお迎えに上がりました、どうぞこちらへ」

一瞬『トワオ・ジョーサマ』って誰だろ、って思ってしまった。いつも会ってる栄陽院さんの、その……親しみやすく、どっちかと言えば豪快？なイメージが強くて……それでいつも忘れてるけど、そうだった。彼女、『栄陽院家』っていうすごい名家の出身だったんだっけ。

いつもお邪魔してるマンションだっけってすごい豪邸で、使わせてもらってるトレーニング設備もすごく豪華な……それこそ、庶民の僕には一生縁がないものだって、初めて見た時にも思ったものだったはずなのに……もう忘れかけて、っていうか慣れかけてたんだろうか。

そんなことを考えながら、僕はその……恐らくはリムジンとかそういうアレなんであろう（車あんまり詳しくないから知らない）、黒塗りの高級車に乗った。

……床が柔らかい!? 広い!? 座席がソファみたいにくかふか!?
何コレ、本当に車の中!?

え、飲み物?! 飲み物出るんですか……メニューあるんですか!?

うわ、種類もめっちゃ多い!?

ええと……とりあえずジュースか何か……あつはいそれでいいです。

そうして車に揺られることしばし。僕が連れてこられたのは、県外の都市部にある超のつく高級ホテルだった。普通に暮らしていたなら絶対に縁なんてなかったであろう場所、そこにこれから入るんだと思うと、口の中が乾いてカラカラになるほど緊張する。

……今一度思いだしてみるけど、今日の僕の用事は……栄陽院さんからの呼び出しだ。

体育祭の閉会式と、そしてその後のホームルームも終わったその直後、栄陽院さんに『明後日、時間ある？』って聞かれた。

なんでも、その……体育祭優勝したご褒美、ないしお祝いしたいから来てくれて言われて……けど、呼ばれた場所はいつもの彼女の家じゃなくて。迎えを寄こすからそれに乗って来てくれて……それが、さっきの黒塗りの高級車だった。

やるとなったら豪快な栄陽院さんのことだ。またドツキりばりに突然とんでもないところに……高級レストランとかに連れていかれるんじゃないかって、心配しつつも、ちよつと楽しみにしてたところもあった。厚かましいのは承知だけど、うん、どうしても期待しちゃったというか。

……レベルが違った。何この住む世界が違う空間。落ち着かない。帰りたい。お腹痛い。

しかしそんなことをできるはずもなく、周到にも用意されていた正装に着替えさせられた。このホテル、入るのにドレスコードあるんだって……。初めてだよそんな場所……なんならフィクションの中だけの存在だと思ってたことすらあるよ……。

その中に入ると、ロビーに待っていた栄陽院さんが出迎えてくれた。

そこでまた驚かされた。

いつもの彼女は、制服こそ女子のそれではあれど、ジャージしかり戦闘服しかり、すごく活発で男勝りな感じの服装が多かった。彼女自身のイメージもそんな感じだったから、自然と私服とかもそう言う感じなんだろうな、と思ってた。というか、部屋着はそうだったし。

けど、案内されたホテルの展望カフェで待っていた彼女は……ドレス姿だった。

ロングスカートのワンピースみたいな形で、袖が肩までなくて腕が全部出てるタイプ。そこに、派手すぎない程度にネックレスなんかのアクセサリーをあしらって身に着けている。

普段と印象の違う彼女に驚く僕を、けど彼女は『よっ！』って、普段通りの感じで出迎えてくれて……それはすごく安心した気がした。

けどやっぱり、その姿はその……新鮮で、そして綺麗で……しばしの間ぼけーつとして見てしまった。

しかしその直後に『あれ?』と気づくことになる。

彼女の隣に、もう1人……ロングの黒髪の女性が座っていて、その人もまた、僕の方を見ていたのだ。……こっちは人は、多分、いや間違ひなく見覚えはない。

栄陽院さんの家族かな、って思ったけど、あんまり似てないなあ。

そんな感じできよとんとした僕を、栄陽院さんが手招きして席に座らせ……そして、冒頭に戻る。

「ごめんな、緑谷……ホントは今日は、あくまで体育祭優勝と3位入賞の祝勝会みたいに考えてただけけど、緑谷が来るって知った義姉さん達に目つけられちゃってさ……」

と、ぼつが悪そうにする栄陽院さん。

彼女曰く、本当は今日は、あくまで僕と2人でささやかにお祝いをする予定で……ちよつと贅沢して食事とか色々しよう、みたいに考えてただけだったんだそうだ。

このホテルを含め、この周辺施設はほとんどが『栄陽院コーポレーション』の傘下で……つまりは、彼女の実家が経営しているらしいので、色々融通利くから、僕を招待して色々遊ぼうって。

うん、まあ、この時点で既に『ささやか』でもなければ『ちよつと贅沢』なんてレベルでも絶対じゃないと思っただけ……彼女からすれば、ちよつと奮発して友達にご馳走する、くらいなものなんだろうな……八百万さんもそうだけど、お金持ちの金銭感覚すごい……。

けど、それはまあ仕方ないから一旦さておいて……さつきお姉さんの、育乃さんだっけ? が言ってた……すごく長い名前の、ヒーロー育成支援何とかって、一体何のことだろう。そもそも栄陽院さんのお姉さん、一体僕に何の用事があったって会いに来たんだ?

「そうね、まずはそこからきちんと順序良く話していくべきことだったわね……永久の言った通り、今日は私……と、もう1人後から合流する予定なのだけれど……」

「ごめん、会議長引いちゃって！ 待ったー？ あ、やっぱもう来るかー」

「……今来たようだけど、私達は、永久が会う相手が君だということを知って、ぜひとも紹介してほしいって無理を言っただけで同席させてもらったの。だから、永久を責めないであげてね？」

「そうそう、そんな感じ。ごめんねー、いきなりこんな話持ってきたら、で、姉さんもうどこまで話した？」

「まだ来たばかりだからこれからよ。はあ……ごめんなさいね、重ね重ね。どちらも騒がしい妹で」

なんか増えた。

僕と栄陽院さんの到着に少し遅れる形で、同じく黒髪の、少しウエーブがかかった女の人がカフェに入ってきて、お姉さんの隣に座った。話の内容からして……こちらも栄陽院さんのお姉さん？ おしとやかそうなこっちの人とは違って、活発そうな感じだ。

これで、4人掛けの席のうちの3つが、モデルや女優も顔負けの美人姉妹3人で埋められちゃってる形になった。残る1つに座ってるのが僕って……す、すごい場違い感……。

さつきから一向に緊張が収まってくれない中、運ばれてきたカフェオレでカラカラの口の中をどうにか潤しながら（めっちゃ美味しい。さすがお値段4桁）、僕は話を聞く姿勢に入った。

話を聞くことしばし。

僕は、さつきまでとは別な意味で驚かされていた。

「プロヒーローではなく、まだ学生の、ヒーローの卵と呼ばれているうちから適用可能な支援事業……？ 各種資格取得に必要な講座の開設、住居の紹介、サポートアイテム等の独自支援、他にも個人個人に合わせた育成カリキュラムの設定から訓練施設の手配・連絡調整……」

「そう。それが、弊社『栄陽院コーポレーション』が企画する、次世代ヒーロー育成総合支援事業『デウス・ロ・ウルト』よ。言葉の意味は、『神がそれを望まれる』」

「神……ですか？」

「大仰なタイトルでしょう？ もつとも、まだ仮のタイトルなのだけどね……でも、やろうとしていることは……多少の皮肉込みで、その言葉に沿っているようなものだっていう意見もあって、暫定的にその名前を使っているの。今のこの社会に本当に必要な、しかしそれを成すことができない社会体勢、世論の流れに一石を投じるというのが、この制度のコンセプトだから」

栄陽院さんのお姉さん……育乃さん曰く、この制度は、聞かせてもらった印象ほとんどそのままではあるが……現在いる優秀なヒーローの卵の中でも、特に優秀な者にスポットを当てて、集中的かつ極限まで効率化した教育を受けさせることにより、次代のトップヒーローを育てる、というのを目的にしているらしい。

それだけなら、雄英のヒーロー科……いや、それのみならず、各高校や大学にある『ヒーロー科』と名のつくところなら、多少なりどこもやっていることだ。成績優秀者を特別な講座なんかに参加させて、さらに上を目指させたり、なんてのは。

けど、『栄陽院コーポレーション』が企画しているこの事業は、規模が違う。普通なら、その学校の中、あるいはそのこと提携している事業所や、協力関係にあるヒーロー事務所までで完結してしまうそれを、国内にある無数の関係機関に加え、海外にまで手を伸ばして行おうという試みだ。

カリキュラムの難易度・完成度自体も半端じゃない。何せこの事業……その中でも『超特設クラス』の説明については、これは『雄英ヒーロー科』に在籍し、そのカリキュラムについてこれる能力がある生徒を対象に行うことを前提に組まれている。

足りない能力を補い、今ある能力を伸ばす……簡単にそう言ってしまう内容であつても、そのレベルがそもそも段違いなのだ。

『クラス』が違えばその限りではないが、全体としてこの事業は、それさえできればもう十分、と言われるようなレベルのヒーロー、あるいはその卵を、さらに成長させるコンセプトだ。

一流を超一流へ、超一流を超々一流へ、プロヒーローをトップヒー

ローへ、そしてトップヒーローを……それこそ、真正正銘の『頂点』へと連れていくのを見据えたプラン。

今のこの社会は、『ヒーロー飽和社会』なんて言われるくらいに、玉石混交ながらヒーローの数は多く、大小合わせて全国に数千・数万の事務所が存在する。彼らは時に他人を蹴落としてでも注目を集め、実績を出して生き残っていく……『生存競争』がそこでは起こっている。皮肉にも、だからこそその中で生き残ってきたヒーローには、社会でやっていけるだけの何らかの『力がある』ということにもなるんだが……逆に言えば、そこで満足されてしまう傾向が強い、という見方もできる。

『生き残った奴は、やり遂げた奴は強い』そして、『強い奴は放っておいても十分強くなる』。そんな考え方が、どこかで主流になってしまっていた。

『夢破れて去る』『ついに行けず振り落とされる』者達にまでは流石に手は回らないし、そのあたりはむしろ、彼ら彼女らが所属する学校や塾の仕事だ。

だから『栄陽院コーポレーション』が目をつけたのは、むしろその『生き残った』方。

生存競争を勝ち抜き、勝者となった者達を……そこで満足させず、さらに上のステージへ連れていくことで、より強力なヒーローを育て上げ、社会に解き放つ、というもの。

高校や大学のヒーロー科や、ヒーロー事務所だけでは手が届かない部分に、企業や政財界といった角度からより強力かつ的確な支援を行うことで、伸びる者をさらに伸ばす。

社会が今すでに認めていても、他人がそれ以上を求めなくとも、関係ない。本人にまだ成長する余地がある限り、それを本人が求める限り……さらなる成長の機会を、さらなる飛躍を。

誰が望まなくとも、誰が考えなくとも、さらにその先へ至る道を用意する。

ゆえに、『神がそれを望まれる』。

「その事業の話を……どうして僕に？」

「もちろん、君にそのテストケースとして参加してもらいたいからよ、緑谷出久君」

そう言っつて、長女の方のお姉さん……育乃さんは、僕の前にさらに資料を広げた。

「さっきも言っつたように、この事業はあくまでまだ企画段階。様々なデータを集めて検証を重ね、1つの事業として形にするまでにはまだまだ時間がかかるし、データも、そして実績も足りてない。私達は今、それに協力してくれるテスターを求めているの」

続けて、もう1人のお姉さん……次女だという、成実さんも。

「現在、過去の様々なデータからできる分に関しては、この事業で行う支援の内容を私達は作り、案として固めてあるわ。それを実際に『ヒーローの卵』に実践してもらい、どの程度の効果を発揮するか……それを検証する段階に来ているの。対象者のレベルに合わせて、『普通』『特設』『超特設』の3つのクラスに分けて、ね」

『普通』クラスと『特設』クラスにおいては、関係企業とのコネクションを使って、ごく少数ながらテスターを既に選定して、すでにテストを始めているわ。けど、『超特設』についてのみ……まだテスターが見つかっていないかったのよ」

『普通』クラスは、一般的な高校のヒーロー科生徒……の中でも、最上位と言えるくらいの者達を対象にしたレベル。より上を目指すための力を会得するためのプラン。ゆくゆくは『ヒーロービルボードチャート』上位に食い込むレベルにまで育てるのが目標だそうだ。『普通』でコレか。

『特設』クラスはさらにその上。国内でも有数のレベルのヒーロー科の、やはり最上位レベルの生徒を対象とする。それらをさらに上へと押し上げ、トップヒーローの育成を目指す。

そして『超特設』クラスは、まさに最上位の中の最上位。国内最高峰である雄英高校のレベルを前提に置き、そこからさらに優秀な生徒を育て……見据える目標はトップの中のトップ。

それこそ……トップ10や、冗談抜きにNo.1ヒーローすら見据えていく、天井知らずのプランを考えているらしい。

「考え得る限り全ての手を尽くして、1つの金の卵を徹底的に磨き上げる。大真面目に『頂点』に至るためのプランよ。コレはもはや、商売であつても、ただの商売ではない、と考えているわ」

「商売であつても、ただの商売じゃない……」

「現状、日本の犯罪発生率が6%に抑えられている理由……知っているわよね？」

その言葉に、僕は思わずびくつと反応してしまいつつも、どうにか返事をする。

「オールマイトが……平和の象徴がいるから、ですよね」

「そう……1時間に3件のペースで事件を解決しているとか言われ、ファンサービスも欠かさない大衆受けするユーモラスさも併せ持ち、何よりその圧倒的な実力により、20年以上不動のNo. 1として君臨する最強のヒーロー『オールマイト』。彼の存在そのものが抑止力となり、日本はこの数字を保っている……けど、私はそれだけではないかと思っている」

「！」

「オールマイトだけに全てを背負わせてはいけない。次の世代、そのさらに次の世代にもこの平和を残していくためには、今のこの安寧に甘んじてはいけないの」

育乃さんの言葉は……もう既に、オールマイトの残された力が少ないと知っている僕だからこそ、差し迫ったリアルな問題として、それを受け止めることができた。

平和の象徴が……徐々にその輝きを失っていると、知っているからこそ。

今のオールマイトが『全盛期には及ばない』というのは、あちこちのテレビで本人が公言していることだ。もつとも、半ばジョークとして受け取られている部分もあるし、年を取れば肉体が衰えるというのは、人としてごく自然なことだから、仕方のないことだっという意見もあちこちにある。

何より、衰えているとしてもその力は依然、全ヒーローの頂点に立っている。だから、大まじめに問題視する人は少ない。

でも、僕やりカバリーガールのように、オールマイトの『事情』を知っているわけでもなく、現状を問題視している人っていうのは……僕が知る限りすごく少ない。このままじゃダメだと思っていて、それを実行に移そうとしている人を、僕は知らなかった。

何だかんだで皆、安心してしまっているのだ。オールマイトは最強で、無敵で、彼がいる限りは安心だと。

それが、オールマイト本人が『平和の象徴』として望んだありかたであつても……少しずつ、それが変わらなきゃいけない局面に来ている。それを、核心の部分の知識は何一つなしに、この人は察しているんだ。

だからこそ、自分ができる『商売』という形で、それに貢献しようとしている。

ゆえに、『ただの商売じゃない』。

「むしろ私が進めたいと考えていたのは、この『超特設』クラスのテストなの。持てる全てを注ぎ込み、それが汎用性のないワンオフとしてのやり方であつても、第2、第3のオールマイトをいつか育て上げるために。もちろん、今のオールマイトと同じやり方、あり方で社会を支えてほしいなんて言うつもりはないけど……彼に代わる『平和の象徴』は、いつかきつと必要になる」

「……………」

「今日初めて出会った君に、とんでもないことを話しているのはわかってるわ。でも、なぜかしらね……あなたにこそ協力してもらいたい、つて、私、心のどこかで思っているの。『雄英体育祭』で輝かしい成績を残し、日本中にその存在を知らしめた……そして、永久や、お義母様までが一目置いている存在。それだけでなく……こうして直接会つて、何か直感するものがあつた気がする」

「姉さんのこういう時の勘は鋭いからね……かくいう私もあらゆる条件と照らしたうえで、こうして実際に会つて話してみても……いいんじゃないか、つて思ってるわ。まあ、永久や義母さんの人を見る目が確かなのは知ってるし、そこは別に心配してなかったんだけどね」

成実さんがそう付け足した後、育乃さんは改めて、僕の目を真正面

から見て、

「実力、意思、将来性……君はこちらの望む、全ての条件を満たしている。どうかしら、緑谷出久くん。あなたさえよければ……私達『栄陽院コーポレーション』と共に……」

本気で、No. 1ヒーローを……『平和の象徴』を目指してみない？」

……この人達は、僕の『事情』を知らない。

僕がオールマイトに見初めてもらって、力を……『ワン・フォー・オール』を受け継いだことも。

オールマイトから、後継者として期待してもらっていることも……何なら今すでもう、新たなオールマイトに、次の『平和の象徴』になるべく頑張るつもりでいるということも。

それでも、そんな風に言われたら……僕のことを認めてくれて、期待して、後押ししてくれるのであれば……こう返すしか、ないじゃないか。

「……お願い、します！」

第41話 TS少女と優勝祝い

S i d e . 緑谷出久

「ごめんな緑谷、今日はホントにお祝いだけのつもりだったのに、あんな話に付き合わせてさ」

「そんな！むしろ僕の方が感謝したいよ……僕なんかを、あんなすごいプロジェクトのテスターに選んでくれて……ヒーローとして強くなるために必要なこと、全面的にバックアップまでしてくるって言ってもらえたんだからさ……むしろ、普段からお世話になり過ぎっていうか……」

「あーだからそれに関しては何も気にしないでいいって……いや、まあ、緑谷が喜んでくれるのであれば、私としてもありがたいというか、嬉しいけどもさ……元々そのためにうちの事業を使うことを検討してたわけだし（ぼそっ）」

展望カフェで聞かされた、ヒーロー強化プラン『デウス・ロ・ウルト』。

そのテスターとしての勧誘を、僕はその場で受けることに決めた。強くなるために、貪欲に、出来ることは全部やったほうがいい。いや、やりたい。

育乃さんの口から『オールマイイトに代わる、次代の英雄の必要性』を説かれて……改めて僕は、僕が背負うべきものの大きさを、そしてそれが差し迫っていることを再認識した。

だからこそ、一日でも早くそこに、求められている強さに至るために……全力で鍛えなきゃ。

よく知りもしない他人が突然持ってきた話なら、こんなうまい話があるはずないって疑ったところだっただろうけど……栄陽院さんのお姉さんなら信用できる。

それに、『栄陽院コーポレーション』自体も、様々な事業で知られる有名企業だ。それ自体への信用も、実績もある。だから、そこが主導でやってくれるバックアップなら、むしろ心強い。

ただ、その場で契約とかそういうのをするわけじゃなく……一旦持

ち帰って考えてくれていい、って言っていた。そのために必要な資料とか色々渡してくれて、ゆつくり家で読んでくれって。

なんでも、昨日急に僕に会うことを決めた関係で、あつちも色々準備する書類とか足りてないらしくて……そんな急に決めたのか。フットワーク軽いな、大企業の重役なのに。

なので、今日はこの説明だけして一旦解散。

これ以上のことは、しばらく準備に時間かかるから、日を改めて話を進めようってことになった。その際の話し合いの場所には、栄陽院さんの家、というか部屋を使うって。

僕自身も、こういう事業に参加すること、オールナイトや相澤先生なんか相談した方がいいだろうしね。

そういうわけで、彼女のお姉さん達——厳密には『お義姉さん達』だそうだけど……色々複雑な事情があるらしい——2人との話はこれで終わり、ということになった。

そして、その別れ際、

『今日は突然、こんな話を持ってきてしまつて、驚かせてごめんなさいね？ お詫びと言つては何だけど……この後、体育祭優勝の『ご褒美』、たっぷり楽しんでちょうだい』

『私達も、ちよつと色々内容に協力させてもらったから、満足してもらえと思うわ。そんじや、心行くまでごゆつくり♪』

そんなことを言い残して、2人は僕が乗せられてきたのと同じ形の、黒塗りの高級車に乗って、ホテルを後にしていた。

その時になつて僕は、ようやくと言うか今更と言うか、今日は僕は、栄陽院さんプレゼンツの『ご褒美』のために呼び出されたんだつた、と思ひだして……今更ながら別な緊張がよみがえってきたのだつた。

そこからの半日、僕は栄陽院さん（と、彼女のお義姉さん達）が用意してくれた、いろんな施設で、めくるめくひと時を過ごした。

こんな、こんな、夢のような素晴らしいひと時を過ごせるなんて……生まれて初めてかもしれない、こんな『贅沢』なひと時を過ごさせてもらったのは……心身ともに満たされた感じだ……

前のマツサージみたいに、ひよつとしたらちよつとどころじやなく刺激的な世界に連れ込まれるんじゃないかとか、警戒してた、邪な考えを持っていた僕を殴りたい……。

帰りのリムジンの中で、僕は心地よい満足感に包まれて……来るときは緊張しかしていなかったふかふかのソファで、ゆつくりリラックスして座っていた。すばらしいこの日を、思い返しながら。

昼食は、ホテルの近くのレストランでとった。

個室だからあんまりテーブルマナーとか気にしなくていいし、好きなように食べていい、って。依然としてドレスコードはあるけど。

こういうレストランって、なんかこう……細工物みたいに奇麗に整えられた、けど量が少ない料理とかがでてくるイメージだったんだけど、そんなことはなく、普通の料理だった。

というか、こういうレストランで、僕の好物の『カツ丼』が出てくるとは思わなかったんだけど。

ただのカツ丼じゃなくて、なんとかっていう高級な食材を使って、一流の料理人が作った『高級料理としてのカツ丼』だそうで（聞いたことないフレーズである）……すごくこう、事前説明通りの、むしろそれ以上の美味しさだった。

外側の衣はサクツと快音を響かせ、中の肉は歯ごたえは残しつつも、舌の上でトロツと崩れてとろけて……よく絡んだふわとろの卵や、甘く煮込まれつつも歯ごたえのある玉ねぎとのハーモニーが……。ご飯はふわふわで、肉や卵との相性も抜群。

何だコレ、カツ丼にこんな領域があったのか、ってくらいに感動的だった。というか、これはホントにカツ丼なのかと思ってしまいそうなほどだ。

付け合わせの漬物やみそ汁も、本来はそのへんの定食屋とかで食べるような料理のはずなのに、どうやってこんなハイクオリティに仕上げてるのか……食材から厳選してるからだろうけど、ぶっちゃけ、食堂のランチラッシュ以上のそれじゃないかっていう美味しさだった。

そんな風に感動しながら食べる僕の隣で、にこやかに笑いかけなが

ら、ドレス装備の栄陽院さんは、お嬢様らしく上品に食事を……なんてことはなく、僕と同じように、普通に自由に食べていた。

彼女の方は、山盛りの……オムライス？ デミグラスソースかかっている奴。

卵何個、ご飯何合使ったんだってくらいなの。まごうことなきデカ盛り。付け合わせにソーセージとかポテトフライとかこれでもかかってほど盛りだてる。

それを、大きなスプーンで美味しそうに食べている。テーブルマナーとか特に気にせずに。

大分量に差があったように見えたのに、僕と彼女が食べ終わったのはほとんど同時だった。

「この料理、美味かったろ、緑谷？ ここ、私の数少ないお気に入り的高级レストランなんだ。量も多いし、普通の庶民派的な料理やB級グルメも扱ってるし、個室だから堅苦しいテーブルマナーとかも気にしないでいいからさ」

「ああ、そういうことだったんだ……いや、ホント美味しかった。ありがとう、栄陽院さん、こんな美味しい店で食べさせてくれて。正直、食堂で食べるランチラッシュのご飯よりも美味しかったかも……」

「ふふふ、まあ、そうだろうねえ……今日は、特にね」
「え？」

ふと見ると、なぜか栄陽院さんは……頬杖をついてニヤニヤと笑ってこっちを見ていた。え、何だろ……僕、何か変なこと言ったかな？

ええと、『ランチラッシュより美味しい』って言つて、『そうだろうねえ』って……どういうことだ？ この料理が、ランチラッシュの料理より美味しいのは当たり前だ、とでも言いたそうな……というか、何か今まさにいたずらに成功した子供みたいな顔になってる気が……

なんてことを考えていたら、向こうの方の……恐らくは調理場から、誰かがこっちにやってくるのが見えた。えつと……なんか、小さなシルエットの、お婆さんみたいなの……え？

え！？ ええええええええええ！！？

「あ、あなたは……」

「ごちそうさまー、今日も美味しかったよセツ婆ー」

「はいはい、お粗末様。毎度残さずきれいに食べてくれるのう、永久ちゃんは」

「セツ婆、って……や、やっぱり!? クックヒーロー『せつのん』!? もうずいぶん前に引退したって聞いてたのに……何でここに……?」

ピンク色の髪に、曲がった腰、温和そうな顔つき、間違いない!

ランチラッシュ以前から、何十年もクックヒーロー界のトップに君臨し続けた伝説のコックだ! ホント、何でここに!? 引退後ここに勤めてたの!?

「話すと長いんだけど、『栄陽院』とは色々縁があつてき、時々こうして系列のレストランやホテルで料理の講習とかやつてもらつてるんだ。今日、ちょうどいいタイミングだったからお邪魔したつてわけ。セツ婆の料理食べられる機会なんて滅多にないから、はは、ラッキーだった」

「やれやれ、ちやつかりしおつて。まあでも、子供の頃から知つとる永久ちゃんにいい人ができた記念とでも考えれば、いい機会だったかもしれない」

「そうなの!? すごい! 伝説のコックが作った料理なんて、道理で美味しかったはずだよ……感動的!

余りの喜びに、なんか今ツツコミどころがあつた気がするけどスルーしちゃう!

「っていうか、栄陽院さん! それならそうと教えてよ!? そしたらもっと味わつて食べたのに!」

「いや、事前に教えてたら緑谷の場合、緊張で味がろくにわからなくなつてた可能性の方が高い」

「そ、それは確かにそうかもしれないけど……でも、『国宝級』とまで言われた料理を、あんな普通な感じで……もつたない……」

「これこれ、若い。そんな風に考えずともよい。料理人は、作った料理を美味しく食べてもらつて、笑顔で『美味しい』と言つてもらえるのが一番うれしいんじゃないよ。それだけで十分じゃない」

そう言つて、柔和な微笑みを向けてくれる節乃さん。おお……すごい説得力というか、言葉の重みみたいなのが……けど、すごく安心でききる、優しい雰囲気だ。

「ふふふ……それに、国宝だの伝説だの、そんな堅苦しくせんでよいぞ、普通に『せつのん』で」

「あ、ありがとうございます……で、でも、いくらヒーローネームとはいえ、そんな同級生みたいな呼び方って少しその……」

「誰が同級生じゃクラア馴れ馴れしい！」

そこはダメなの!? 沸点わかりづらい!

そのまま少し話した後、『2人共英雄じゃろ? リカバリーガールの奴によろしくの』って言い残して、せつのん（やっぱ呼び方違和感……）は厨房に引つ込んでいった。昔馴染みなんだって。

び、びつくりした……いきなりすごい、引退したとはいえ大物ヒーローに会っちゃった……。

やっぱり、さつきの栄陽院さんのニヤニヤ笑いはそういうことだったんだな……っていうか、ちよつと待つて? ひよつとして栄陽院さん、今日……

「普通にお金使うだけの『贅沢』よりもさあ……緑谷へのお祝いは、こういう形でやった方が喜ばれるんじゃないかな、って思つてたんだよ。どうやら、あたりだったっぽいね」

「じゃ、じゃあやっぱり、これから……」

「そういうこと。今日これから行く先々、元含め、色んなプロヒーローがいるとこで贅沢な時間を過ごさせてあげるから……たつたの半日だけど、じつくり堪能しなよ、緑谷?」

「~~~~~!!!（声にならない声）」

食事の後は、生まれて初めて……『エステサロン』というものを体験することになった。

男の僕が、こんな場所に来ることになろうとは……夢にも思わなかった。

マツサージとかする関係で、前みたいになまた薄着で……従業員だつ

という若いお姉さんたちに囲まれているのは、ちよつとどころじやなく緊張してしまった。

しかも、今度は栄陽院さんも一緒に、彼女も当然ながら、下着みたいに薄くて頼りない服装で同じ空間にいるもんだから、もう色々ヤバかったんだけど……その少し後、『彼女』が来てからは、別な意味で興奮がどうしようもなくなくなってしまった。

「ごめんごめん、遅くなっちゃった！ いやー、久しぶりね永久ちゃん！」

「お久しぶりです、ビスケさん、今日はよろしくお願いします！」

「はいはい、よろしくしちゃうわさ！ つと……こっちは永久ちゃんと言つてたお客さんつてわけね。雄英体育祭、今年の1年の覇者、緑谷出久君ね？」

「は、はい!?! あ、あの……美容ヒーロー『ビューティービスケット』ですよ？！」

ピンクのゴスロリっぽいファッションに身を包み、頭の後ろで金色の髪をまとめた……見た目は中学生くらいにしか見えない、小さな女の子。

しかしその正体はプロヒーローであり、このエステサロンのオーナーだ。

「あら、よく知ってるわねえ、あたしみたいなのことまで……聞いてた通りのヒーロー好きつてわけだ。ふんふん……んん、よく鍛えられてるわね、これはやりがいがあるわさ」

ぺたぺたと僕の体を触つて、筋肉やら何やらのつき方を確認してくビューティービスケット。

プロヒーローにして、美容健康業界の第一人者でもある彼女のエステの腕は超一流。さらに普通のエステのみならず、整体や接骨治療、栄養指導まで、美容と健康にかかわることならなんでもござれの知識と技術を持つ。弟子入りを志願する人が後を絶たないという話だ。

そんな人の施術を受けられるなんて……光荣だし夢みたいだ。邪な気持ちなんて吹っ飛んだ。

「ふふふ……若い子の体、引き締まった筋肉……いいわね(じゆるり)」

……ちよつと不穏な空気を感じないでもないけど……

「でも、私以前に手が加えられた形跡が少しだけあるわねえ……コレ、永久ちゃんでしょ」

「あ、わかります？」

「わからないでか。あなたにマッサージ仕込んだのは誰だと思いい？」

「え!?! 栄陽院さんのマッサージって、ビューティービスケットが指導したんですか!?!」

「んー、まあ、基本的なところは母さんから教わったんだけどさ……その母さんも、ビスケさんの指導で覚えて使えるようになったって言ったから……親子二代にわたって弟子、みたいなの？」

「そ、そうだったんだ……すごい……」

道理であんな見事な、とろつとろになるほどのマッサージができたわけだ。

個性使つてとはいえ、僕の体がここまで動くようになるほどに……「ま、私に言わせりゃあんたら親子そろってまだまだだけどねえ……免許皆伝には程遠いわさ。卒業したらうち来ればいいのに、そしたら1から100まで美容と健康の髓を叩き込んでやるわよ？」

「あははは……ありがたいですけど、私が目指すルートとはちよつと違うかなって」

「見込みあるのにつれないわねえ……なんならインターンとか、今度の『職場体験』でもいいから、ちよつとこういう現場の空気に触れるくらい考えてもらえないかなー。指名出しといたから」

……? インターンに、職場体験って……何だろう？

聞こうかと思っただけど、それより前にビューティービスケットの手が、うつぶせに寝ている僕の背中あたりにぼん、と触れたので、どきつとして口を閉じてしまった。

「さ、それじゃ始めるわよ……リラックスして、私に全て委ねてくれていればいいわさ。ビスケちゃんのマジカルエステ、ご堪能あれ……」

♪

この後、2人そろって滅茶苦茶とろつとろにされた。

イキノコ』や、Mt.レディ生産協力の牧場牛乳ほか乳製品、スイーツヒーローチーム『キラキラ☆アラモード』のスイーツ詰め合わせなんかを買ってお土産に。

さらには信じられないことに、あの有名なグルメリポートヒーロー『ロンリー・ゴロー』監修の駅弁まで売られてた！ 彼が食べてりポートした店は、評価にもよるけど売り上げが数倍から数百倍に跳ね上がるとまで言われている美食の第一人者だ！

これは流石に栄陽院さんも予想外だったのか、驚きつつも反射的に駆け出して、ラスト数個しかなかった弁当を、僕の方と、母さんへのお土産も含めて3個買って確保してくれた。感謝しかない！

せっかくなので、移動中のリムジンの車内で食べることにした。

どうせなら電車で食べた方が、とも思ってたけど、僕らが電車に乗ろうとして駅なんかに行ったら……自分で言うのもなんだけど、今有名になってるからなあ……困まれちゃうかもだし。

そんな感じで、いろんな場所でいろんなヒーローに、あるいはそのゆかりの品々に触れながら……僕は、夢のような1日を過ごしたんだ。

帰り道、弁当も食べ終わり、夢見心地でリムジンに揺られていた僕は、ふと、隣に座る栄陽院さんのにこにことした顔を見て、ずっと聞きたかったことを……なんとなく、今、聞く気になった。

「あのさ……栄陽院さん。前から気になってた……というか、聞きたかったんだけど」

「うん？ 何、緑谷？」

「……ひょっとしたら、こんなこと聞くの、失礼なのかもしれないんだけどさ……どうして、僕にここまでよくしてくれるの？」

毎度毎度流されてしまう僕だが……ずっとコレは思っていた。

1つ1つ、思い返せば……彼女が僕にしてくれていることは、単なる仲のいい同級生に対するお節介や世話焼きなんかのレベルを、どう考えても超えていると思うんだ。

自分なんかより全然弱い——少なくとも、あの訓練を始めた頃の

は——僕につきつきり個性の指導をしてくれた。

USJでは、恥ずかしい場面もあるだろうに僕の作戦に乗ってくれて、その後、ピンチになった僕を身を挺してかばってくれまでした。

その後、体育祭に向けた特訓では、家に招待された上に、すごく豪華なジムでのトレーニングを指導してもらって、体を解きほぐすマッサージまでしてもらって、家に宿泊までさせてもらった。

そして、今回のこの『ご褒美』ないし『お祝い』だ。

それこそ、彼女が男っぽい性格で、僕とのスキンシップ染みたふれあいを気にしないという面も含めて考えてみれば……決して不満があるとか、文句をつけるわけじゃないんだけど、それでも……単なる友達にすることじゃないように思えてしまう。

ここまで時間も、手間も、お金も、『個性』も費やしてくれるなんて……それこそ、身内だったとしても shouldn't じゃないか。あまつさえ、異性を家に泊めたり、肌と肌を触れさせたり……

一体彼女は、僕をどんなふうに見てるんだろう？ それを、聞かなくやいけない気がした。

もしかしたら、ひどく自己中心的……ないし、自意識過剰なもの言いかもしれないんだけど……栄陽院さんは僕のことを好きで、それでこんな風に、尽くすようにして気を引こうとしてくれてるのかな……って思ったことは、何度かある。

もしそうなら、僕は……正直、嬉しい。彼女みたいに奇麗で、強くて、そして優しい人に、そんな風に思ってもらえるなんて。

けど、こんな風に僕のために、時間もお金も、何もかもいっぱい使わせるようなことを……そのままでもいいのか、とも思ってしまう。たとえそれが、彼女の好意からくるものだとしても。

もちろん、それに今まで散々甘えて来た僕が、そんな生意気なこと言うのなんて……今までの彼女の厚意を否定するような気持ちすらして、怒られても文句言えないかもしれないけど……それでも、例えここで怒られても嫌われても、言わなくやいけないと思った。今言わなくや、これからもずるずると彼女に甘えていってしまおう……！

そんな感じのことを、走っているとは思えないほど静かで、揺れも少ないリムジンの車内で、黙って聞いてくれていた栄陽院さんに話した。

全て話し終えてから……自分で話しておいて、僕がびくびくしながら待っている、しばらく黙って考えていた風だった栄陽院さんは……ふいに、いつもと同じ笑顔でにっこり笑って、

「いつもながら、真面目でいい奴だねー、緑谷は」

そんな風に言っ……まるで、年下の小さな子にやるように、僕の頭をぽんぽんと叩いた。

きよとんとする僕の目の前で、栄陽院さんは椅子に深く座り直し、背もたれに体を預けてぐぐーっと体を伸ばすようにして脱力した。そして、ふう、と息をついたところで口を開く。

「えーっとねえ……何だっけ？ 私が緑谷を好きなのかどうか？ 一体何考えてこんな風に緑谷を……甘やかすみたいにしてるかってかい？ んー、直球ですんごいこと聞いてくるよね、緑谷。轟の時もそうだったけど、結構遠慮なくずかずか他人の心とか入ってくるっていうかさ」

「……っ!? ご、ごめん……でもその……」

「でも、それがあんたのいいところでもあるからね……けどそうだなー……何と言うか、一言でさくつと答えるのが難しい問いだな」

栄陽院さんはそのまま、リムジンの天井あたりを睨みながら少し考えて、

「好きかどうかで言ったら……そりゃ私は好きだよ？ 緑谷のこと」

「……っ……!?」

「でもさ、どう好きか、って言おうとすると……上手く言えないんだコレが」

「……っ？ どういうこと？ どう好き、って……」

『好き』にも色々あるだろ？ 友達としての『好き』、人間として『好き』、尊敬する意味での『好き』、家族に向けるような『好き』……それらで言うと、一体どういう風に、私から緑谷への『好き』を表現しているかわからないんだ。だから……今ここで、上手くは言えない」

……その言い方だとつまり、少なくとも栄陽院さんは……僕に対して、男女というか、恋人同士の意味での『好き』な感情を抱いてる……ってわけじゃなさそう、だな。

ほっとしたような、残念なような……複雑な気分だ。

けど、だとしたらどういいうことなんだろう？ 色んな形での『好き』があるのは確かにわかる……僕だって、母さんに対しての『好き』や、オールマイトに対しての『好き』、かつちゃんや麗日さん、飯田君達クラスメイトに対しての『好き』、その他色々なヒーローに対しての『好き』……そして、栄陽院さんに対しての『好き』……まさに、色々ある。

今の所、僕はどれも……恋人的な意味での『好き』には至ってない……と、思う。

いや、あえて言うなら、一番交流する機会の多い、栄陽院さんが一番それに近かったりするのかもしれないけど……はつきり『そうだ』って言い切るまでにはない、かも、だし……。

「……まあ、多分だけどさ……緑谷が今ここで私に対して愛の告白でもしたら、私は……OKとか出すと思うよ？」

「え!?! そ、そういう意味での『好き』じゃないんじゃないの?」「私からはそうじゃなくても、そのくらいの好感度は緑谷に対してある、ってこと。異性からアプローチを受けることでその人を意識する、なんてのはよくあることだしさ。っていうか……緑谷にそういうレベルでの好意を抱いてそうな女子なら……私、1人か2人知ってるかもだし」

うつそ?!? そんな子いるの!?! 誰!?! ……あ、教えてはくれないのね、そうですか……

い、いや信じられないんだけどね? ぶっちゃけ……僕に異性として気がある女子がいるなんて……一番ありそうだと思ってた栄陽院さんが違ったのなら、余計に。やばい、どうしよう気になる。

け、けど今は栄陽院さんの話だ。何か今もどうにかして僕に、わかりやすく説明しようとしてくれてるようだし……

「もつと正確に、正直に言えば……私がどういう風に緑谷のことを『好

き』なのか、無理すれば、どうにか言葉にして伝えられるかもしれない。けど……今はまだ、やりたくない」

「何で……?」

「……引かれるから」

「………はい?」

「……え、何その理由!」

『引かれる』って……引かれるような変な理由なの!」

「うん……一般常識的に考えれば、ちよつとどうかなって感じのそれになりそうだなー、と思う。私個人の価値観とか、恋愛観、男女観も含めて考えれば……多分……いや、確実にどん引かれる。下手したら嫌われる……私に、今、そこまでの覚悟はない」

だから許して、と言ってくる栄陽院さん。

よ、余計に気になる……いい、一体僕、どんなふうに使われてるんだ、彼女に!」

「いつか、上手い感じの言い方が見定まったら……あるいは、私の覚悟が決まったら説明するよ。それは約束する、だから……今は許して。それでももし、どうしても聞きたいって言うなら……」

「いい、言うなら……?」

すると栄陽院さんは、僕の方にずい、と身を乗り出して、真正面の、しかも至近距離から僕の顔を覗き込むようにして……にやりと、いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「私のこと、貰ってくれるって約束するなら……教えるけど?」

「………うえええ!」

☆☆☆

結局その後、僕は自宅の前で降ろされて……栄陽院さんは、そのままリムジンで去っていった。多分だけど、彼女の自宅であるあのマンションに向かうんだろう。

最後のあの言葉……彼女は、結局、訂正も撤回もしなかった。

てつきりすぐに『冗談だよ、ははは』くらいに言ってくるかと思っ
てただけど……

そう言うまでもない、と思ったのか……あるいは、本気でそうだっ
たのか。

『約束』したら、彼女は本当に僕に、それを教えてくれたんだろうか。
……それに、さつきからずっと考えてるけど……やっぱり、わから
ない。

時間も手間も、お金も『個性』も惜しみなく使ってくれて、プライ
ベートな空間にも躊躇なく迎え入れてくれて、肌を見られてもスキン
シップを超えて触れ合っても受け入れてくれて、家族にも紹介するわ
あけすけな話もするわ、パーソナルスペースにすら僕を立ち入らせる
ことに何の抵抗もない……まるで僕を、他人として見ていない、警戒
心を向けてないかのような対応……。

感情的には『好き』にカテゴライズされて、しかし恋愛感情や友愛、
親愛の類とはどれも違って……それでいて、詳しく説明しようとした
ら僕にドン引きされるような、それでも『貰ってくれる』と約束する
なら説明してもいいような、そんな感情……

……だめだ、さっぱりわからない。僕は彼女に、どう思われてるん
だ？

「……あら出久、帰ってきたの？ どうしたの、そんなところでボーツ
として……っていうか両手に持つてるの何それ!? 全部お土産か何
か!？」

「あつ、母さん……ごめん、すぐ家入るから」

結局、その日……いくら考えても、納得のいく結論は思いつかな
かった。

僕は、最高の半日となった休日2日目を、95%の満足感と、5%
ほどのモヤモヤ感の中で終えることになった。

……まあ、結局今まで通りなんだな、と言ってしまえばそうなんだ
けど。

せめて明日からの学校では、いつも通り栄陽院さんと接するように
したほうがいいのかな……ちよっと色々意識しちやいそうで、難しい

かもだけど……。

第3章 TS少女と職場体験

第42話 TS少女とヒーロー名

「超声かけられたよ来る途中!」

「私もじろじろ見られて何か恥ずかしかったー!」

「俺も!」

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ……」

「「ドンマイ」」

休み明けの1—Aの教室。話題はまあ、予想通りと言うかなんというか……いわゆる『体育祭効果』ってやつでもちきりだった。

前にもちらつと言った通り、『雄英体育祭』で有名になった面々は、しばらくの間超有名人扱いになるからなあ……登校途中、声かけられたり、握手を求められたり、写真撮ってって言われたりすることが毎年あるそうだ。

特に、最終種目に勝ち残って、さらにそこで上位に行った奴なんかはね……私とか。

教室に入ると、さつきまでそんな風に話してた、芦戸や葉隠、切島や瀬呂なんかが、『おはよ!』って挨拶すると同時に、どうだったって聞いてくる。

「永久とかすごかったんじゃない? 何せ、トーナメント3位だもんね!」

「それに、色々っていうか、一番名場面が多いのも栄陽院だろうからな」

と、上鳴が言う通り……まあ私の場合、第1種目から続けて『名場面』が多かったからなあ……ネット配信のオンデマンドとかは、割と真面目に、視聴に年齢制限をかけるかどうか議論になったそうだし。

そういう意味では、単に強さだけよりも注目されたからなあ……身をもって知ってる。

「……怖いもの見たさで電車とか使うんじゃないかなかったってめっちゃ後悔したよ……超目立った」

「あー、やっぱりねー」

もともと背が高くて目立つからつてのもあつて、速攻気付かれて囲まれて……まあ、これもある種の有名税だと思つて黙つて応対してた。……超面倒だったし、時間食われたけど。

そして何より、乗つてる間に感じる無遠慮な視線が、多いこと多いこと……

いや、もう目立つのは諦めてるしいいんだけどさ……遠巻きに見てる視線の、そのほとんどがその……私のね、胸とかお尻とか、その辺に向いてるわけよ。

まあ、育乃義姉さんに『はしたない』とか言われちゃう目立ち方したわけだから、ある程度は仕方ないっていうか、覚悟はしてたけど……いい気分じゃなかったなあ。

少し最近までは、心の中の男の部分が『まあ仕方ない』とか考えて、精神的な自己防衛が上手く機能してた気もするんだけど……昨日の緑谷との会話で、また一気に女に傾いた感触がある。

……私が自分のことを、『TS転生者』なんて認識してられる時間は……もう多分、そこまで長いことないだろうな、と思う。

……いやでも、緑谷とのあのひと時を思い出すと……やば、顔がにやけて……

「あれれ〜？ 何々、永久も笑つてるじゃん！ やっぱ声かけられたの嬉しかったの？」

「え!? あ、いや……まあ、多少はね」

「あつはつはつは、だよねー！ 何か一気に有名人になっちゃったもんねー！」

「たった1日だな。やっぱ雄英つてすげーよ！」

「……まあ、望まない形で有名になった奴もいるけどな……俺とか」
若干ダウントーンの瀬呂。まあ……トーナメントで轟に瞬殺されて、会場中を埋め尽くした『ドンマイコール』が逆にすっかり流行っちゃったみたいだしな……

けど、瀬呂以上に望まない知名度を得てしまったのは……間違いない常闇だろう。

他でもない、私との試合で……あんだけのことになってしまったわけだから。

攻撃という攻撃で私の体の衣服をはぎ取り、年齢制限すれすれの光景を作り出してしまった彼は……ネット上で、総じて『わざとじやないんだろうけど、それでもちよつとどうなの』という感じの評価になっていた。

また、一部男性陣からは熱狂的なまでに支持されていたりする上（嬉しくはないというか、素直に喜べないだろうが）、ここ数日のネット検索におけるホットワードの1つに……『黒い淫獣』なるワードが浮上して……。

他にも検索してみると、『洋服の破壊者』『さらけ出さず者』なんて呼び名も……うん、これ以上言うのも触れるのもやめよう。常闇の精神的な平和を保つために。

……検索で思いだした。

私は、直接は聞かされたりすることはなかったが……後からネットニュースを見て、知った。

体育祭ラストで、突然帰ってしまった飯田。

その家族に……兄に、一体何が起こったのかということ。

『保須市』に現れたという、強力なネームドヴィラン『ステイン』……通称『ヒーロー殺し』。

そいつに遭遇した、飯田の兄……ターボヒーロー『インゲンウム』が、重傷を負って今、入院中なんだとか。

教室にいる飯田は、その様子を表に出す様子はないけど……平気なはずないよなあ、身内がそんなことになって。

しかし、自分から何も言いださないうことを、こっちから聞くのもアレだし……

そんな感じのことを考えつつ、わいわいがやがや騒いでいる教室をぼーっと眺め……

——ガラッ

「おはよう」

ぴたっ、と一瞬にして静かになり、全員速やかに席につく。

無論、私も例外じゃない。相澤先生が教室に入ってきたその瞬間に、私語をやめて背筋をのばしてきちんと話を聞く姿勢になっていた。

なんかもうこの辺は、芸かっつくくらいに見事に揃うようになってるな……このクラス。

そしてその相澤先生——包帯取れてる。よかった——によれば、今日の『ヒーロー基礎学』はちよつと特別だとのこと。

それを聞いて、上鳴や切島あたりは、抜き打ちテストや新しい学習範囲を告げられるのを警戒してるようだが……続く形で相澤先生が言ったのは、

「『コードネーム』……ヒーロー名の考案だ」

「『胸ふくらむヤツ来たああああ!!』」

ヒーロー名。読んで字のごとく、ヒーローとして自分が名乗るべき名前。

自分がやがてプロヒーローとなった時に、世間に広く知られることとなるその名前を、ついに、今、考えるとなれば……まあ、そりや盛り上がるうってもんだ。

かくいう私も、テンションはそこそこ上がっている。ぶつちやけ楽しみにしてた。

当然のごとく騒がしくなる教室。スタンディングオベーション。うるさし。

その直後、髪をザワツと、目をキュピーンとやって再び教室を静かにした先生曰く、どうやらこないだ聞かされた、プロからの『ドラフト指名』に関わってくる話のようで……大きな山場である『体育祭』を終え、現在集まっている指名を昨日までに集計した結果が、既に出ているそうさ。

もつとも、指名が本格化してくるのは、経験を積んで即戦力として期待されるようになる2年以降だ。今回ののはあくまで『興味』に近いらしい。

だとしても……まだ未熟な私らに興味を持ってくれたってだけでも御の字だ。これが、社会に出る第一歩になるのには変わりない、軽んずるわけにはいかないだろうな。

で、その指名結果つてのがが、こちら。

○A組指名件数

緑谷	3069
栄陽院	2849
轟	2798
爆豪	2552
常闇	294
飯田	227
上鳴	199
八百万	108
切島	65
尾白	47
麗日	20
瀬呂	14

「例年はもつとばらけるんだが……今年はトーナメント上位4名に集中した形だな」

緑谷はさすがというか、『体育祭優勝』の話題性はすごいってことだな。

ネットとかでもすごい話題になってて、色々取り上げられてたからなあ……『大型新人現る!』とか、『彼は単なるフォロワーか、それとも新たな『平和の象徴』足りうるか』とか……。

体育祭を通して使ってた技が、オールマイトリスペクトのそれだったことや、オールマイトと似た超人的な身体能力が『個性』だったこともあって、いろんな雑誌や新聞で格好の話題になってた。一躍時の人だ。

その本人、自分のまさかの指名数に口をあんどり開けて驚きまくっ

てるけども。ただ1人3000件超えだもんなー……

もちろん、同じく『優勝』したもう1人の方も相当なもん、ではあるが……

「なんか順位一部逆転してね？ 誰とは言わねーけど」

「まあ……表彰台で拘束された奴とかビビるもんな」

「ビビってんじゃねーよプロが！」

吼える爆豪。……ビビったんじゃなくて単に避けられただけじゃなかるか。それでこれだけの件数だと考えれば逆にすごいかもだが……

しかし、私も轟も多いな……。

そして、そのトップ4より下の順位の間中は大きく差が開いた形になってる。そのことを悔しがる者もいれば、単純に指名をもらったことだけでも嬉しくて騒いでる奴もいる。

「わあああああー！」

「う、うむ」

めつちや興奮して、前の席の飯田の肩をなぜかゆすりまくってる麗日とか。

対して、轟や八百万なんかは静かなもんだが……それでも、八百万からみて、文字通り桁違いの指名数を獲得している轟は尊敬の対象になるようで、

「流石ですわね……轟さんも、栄陽院さんも」

「俺のはほとんど親の話題ありきだろ……それより、栄陽院のが上じゃねえか、大したもんだ」

「どうだかなあ……まあ、数は普通にうれしいけど……私の場合、目立ち方が目立ち方だったから……どんなところから来てるかってのを確認するまでは素直に安心しづらい……」

「ああ……」

過去にも、テレビや劇団関係者のヒーローから、お色気枠とかで指名が来た例があったそうだし……そういうのじゃなくて、普通にヒーローやれるようなのがいいな。

まあ、今更祈ったってどうしようもないことではあるが。

そして相澤先生曰く、この結果を踏まえ、指名の有無に関係なく『職場体験』に行くことになるそうだ。現場で実際にヒーローの仕事を体験することで、より実りある訓練をすると。

なるほど、その時に使うことになるから『ヒーロー名』か。

「まあ、あくまで現段階で『仮に』考えるものではあるが、適当なものは……」

「つけたら地獄を見ちゃうよ!」

そんな言葉と共に、教室の扉を開けて乱入してきたのは……ミッドナイト先生である。

今日も相変わらず、ボンテージに極薄タイツというギリギリファツションの18禁ヒーロー（担当科目：倫理）は、相澤先生とは真逆のテンションで教卓の脇に立った。

そしてその隣で寝袋を取り出し始める相澤先生。あ、コレ全投げして寝る気だなこれから。

「この時の名前が世に認知されて、そのままプロ名になってる人多いからね!」

「ま、そういうことだ……そのへんのセンスをミッドナイト先生に査定してもらおう。俺はそういうのできん。ただあえて言わせてもらえば……将来自分がどうなるのか、どうなりたいのか……名前を付けることでイメージが固まり、そこに近づいていく……それを意識しろ。『名は体を表す』って奴だ……『オールナイト』とか、まさにそんな感じだな。よく考えて決めろ」

相澤先生がそう説明している間に、ミッドナイト先生は……何だろアレ？ テレビのクイズ番組とかで見るフリップ（ペン付属）みたいなのを、1人1枚いきわたるように前から配っていた。

「基本的にヒーロー名だけでもいいけど、『○○ヒーロー』っていう前書き部分がある人はそれ添えてもよし。任せる。考えた人からコレに書いて、前に出てきて発表すること」

「発表形式すか!？」

「あつたり前でしようが。仮にとはいえ社会に出て名乗る名前だつてのに、こんな教室で名乗るの恥ずかしがるようではどうするの」

なるほど、そりやもつともだ。

それからしばらくの間、シンキングタイムになって……10分位した頃から、ポツリポツリと発表が始まっていった。

最初、何を思ったか芦戸が『エイリアンクイーン』とかいう、強酸性の血をイメージしたのかっていうネーミングをかまして、先生から『やめときな！』とダメだしを食らっていた。

……そんなにアレだったかな？ 実は私、ちよつといいんじやないかって思っちゃったんだが。

そのせいで若干大喜利みたいな雰囲気になりかけたが……続いて梅雨ちゃんが『フロツピー』という可愛くて親しみやすい名前を発表したことで、無事に軌道修正。

ミッドナイト先生からも『みんなから愛されるお手本のような名前』と絶賛。

その後は、思いついた者からどんどん発表していく流れになった。なお、別に出席番号順ではない。1番と2番の芦戸と梅雨ちゃんが最初に発表したのは、まあ、単なる偶然と言うか、思いついた十物怖じや緊張をしづらい2人だったってことだろう。

切島は『烈怒頼雄斗』レッドライオット。昔の尊敬するヒーローのリスpektネームらしい。憧れの名を背負う重圧についてミッドナイト先生に諭されつつも、覚悟の上だ、とのこと。

耳郎は『イヤホンジャック』。個性名そのままだが、わかりやすく正しい。

尾白は『テイルマン』。まあ、シンプルイズベストってことだろうか。

さらに砂藤が『シュガーマン』で、コンセプトが被ったってちよつと気にしてた。

芦戸第2弾『ピンキー』……色？

上鳴は『ジャミングウェイ』。由来は言わずもがな、ウエ……

「違うー、『チャージズマ』！ それ耳郎がふざけてつけた奴だから！ 間違えて覚えなさいで！」

……だつてさ。

麗日は『ウラビティ』。なるほど、洒落てる。

その後も、轟が名前そのまんま『シヨート』っていうのにしたり、爆豪が『爆殺王』っていうアレな名前でボツ食らってたり、峰田が『グレープジュース』っていう意外とポップでセンスある感じで褒められてたりした。

……ここまで相澤先生は寝っぱなしなんだが、後から書面で確認とかでもするんだろうか？

さて、残ってるのは、再考の爆豪と……飯田、緑谷、そして私か。

「うん。思ってたよりずっとスムーズね。次、誰がいる？」

「あ、じゃあ私が」

他に誰も上がらなかったの、私が挙手して前に出る。

フリップを見せて発表……する前に、ちよつとミッドナイト先生に確認。

「先生。やっぱこういうのって、自分で好きな名前を優先してつけた方がいいんですね？」

「うん？ どういう意味？」

「何ていうかほら……体育祭、私あんな目立ち方しといてアレなんですけど、別にそのへんで期待されてるような名前にしなくてもいいんですよね？ その……セクシー路線とか、そういう系じゃなくても」

そう言うと、クラスの皆が『ああ……』みたいな顔になった。ミッドナイト先生も。

ネット上での評判も、私の場合、『個性』の利便性や体術での戦闘よりも、第1種目からずっとやらかしてきたお色気ハプニングとか関連がメインな感じになっちゃってるから……。

特に掲示板とかそうなんだけど、ヒーローとしての路線やヒーローネーム、コスチュームなんかも、そういったセクシー路線を期待する声がかかなり多い。ミッドナイト先生と同じ『18禁ヒーロー』を期待する声すら、結構な数あるようだ。

……最後のは割と、マイク先生が戦犯だと思う。障害物競争の時のあのアナウンスが……

私としては考えてた、ないし今色々考えてる方針があるんだけど、

一応こういうネットの声って奴も気にした方がいいのかと……ちよつと不安だっただけ。

説明すると、『なるほどね』とミッドナイト先生は少し考えて、「確かに、そういうのもたまにあるのよね……活躍した時の印象がネットで根強く定着しちゃうようなパターン。でも、基本的にはそういうの気にしないで、自分がつけたいようにつければいいわ」とのこと。そのころは？

「確かにそのへんを意識すれば知名度なんかは上がりやすくなるけど、自分が好きになれない名前を名乗るようなことになったら本末転倒よ。ヒーロー活動自体も、楽しくなくなっちゃうでしょ？ だから、自分が名乗って恥ずかしくない、これだ、って思うフレーズを素直に使いなさい」

「……！」

それを聞いて、視界の端でなぜか、緑谷と飯田が反応したように見えた。

緑谷は何かはつとしたような感じで……飯田は、どこか苦しそうな、悩むような……あ、フリップにかかれた文字消した。何だったんだ。

まあいいや……なるほど、ミッドナイト先生の言う通りだな。

「まあちなみに、私はあなたが私の後についてきてくれるなら実は大歓迎だけどね？ ……真面目にどう、目指しちゃう？ 18禁ヒーロー」

「いや、やめときます……きちんと私なりの考えがあるんで」

本気かどうかよくわかんない申し出だったけど……きっぱりそう言っておいた。

なお、主に男子の声で、なんか『なーんだ』とか『もったいねー』とか『諦めんよオ！』とか聞こえた気がしたが気にしないでおく。最後の峰田だったということははっきりわかった。叫びが力強すぎて。そんなに残念かお前ら……期待してくれてどうも。

ミッドナイト先生は『そっかー』と残念そうに言ったものの、トー

ンは軽い感じだったので、別に気にしてはいないんだろう。

促され、私は今度こそフリップを前に向ける。

「はい、どーん！ エネルギーヒーロー『ダイナージャ』！ 私、これに決めました」

「ほうほう……ちなみに由来は？」

「色々かかっています。頭の部分は、『ダイナミック』とか『ダイナマイト』あと、発電機を現す『ダイナモ』とかですね。後ろの部分は……インドだったかの神話に出てくる蛇の女王に『ナーガラージャ』つてのがいます、それが『無限』を意味する存在なんだそうです。私の個性が『無限エネルギー』なので、ちょうどいいかなと。で、合わせて『ダイナージャ』」

神話云々のあたりで、常闇がぴくつと反応したのが見えた。好きそうだもんねそういうの。

ちなみに、『ダイナミック』や『ダイナマイト』は、戦い方や攻撃の威力のイメージ。目標的な意味合いも入ってる。

そして『ダイナモ』の方は……私ホラ、エネルギー使って人間点滴みたいに、他人の体力を充電するような真似とかできるし、その他にも応用範囲広いから、そのへんのイメージだ。

「うんうん、そのあたりもしっかりしてるし、語感も呼びやすくっていい感じね！」

こうして、ミッドナイト先生にもOKをもらい、私のヒーロー名は『ダイナージャ』になった。

なお、後ろの方で峰田が、

「なるほど……まさにダイナマイト……！」
とか呟いてた。私の胸に視線を固定して。

……うん。そういう意味じゃねーから。

まあでも……いつか別に、実害なければ、妄想くらいは自由にさせていても。

その後、飯田がこちらも『天哉』という、名前そのままのヒーローネームを発表。

しかも……なぜか、苦しそうに、辛そうにそれを掲げてたように見

えたのが気になった。

途中で書き直してたのに関係あるんだろうか? ……位置が悪くて、最初あいつ何書いてたのか見えなかったんだよなあ。

そして最後、緑谷のヒーロー名は……

「ええ!? 緑谷お前、いいのかそれ!」

「うん……今までずっと好きじゃなかった。けど、ある人に意味を変えられて……僕には結構な衝撃で……嬉しかったんだ。だから……これが、僕のヒーロー名です」

そう、『デク』と書かれたフリップを、誇らしげに皆に見せていた。それを見て、爆豪が面白くなさそうな顔になったのと同時に……一瞬、緑谷の視線が別な方向を向いたのに気づいた。

その先には……これまた、なんだか嬉しそうにして、にっこり笑っている麗日が。

………ほお、なるほど………そういう感じか?

☆☆☆

結局今日は、爆豪以外全員が、仮にとはいえヒーロー名を決めた。爆豪は後日再考になった。

それはいいとして私は、トイレに行くために、休み時間に入った教室を後にしながら……さつき見た光景を思い出していた。

一瞬交錯した視線。それだけで、2人は……緑谷と麗日はわかり合ったようだった。

多分だけど、その意味を変えた『ある人』つてのが麗日なんだろうが……それはいい。

問題は……今の光景を、緑谷が麗日と通じ合っていたと言ってもいい光景を見て……私の心に生まれた、この感情のことだ。表情には出さないようにしつつ、私はそれと向き合う。

緑谷が……他の女の子と笑い合っていた。

麗日も、その視線に嬉しそうに応えていた。

さらに言えば、今回のみならず、麗日は普段から緑谷と仲もいいし

……距離も近い。多分だけど……そういう感じで意識している部分も、多少なりあるんだろうと思う。

体育祭の時とか、よく見てるとわかったんだが……第2種目で、緑谷が発目と即で気が合って話してたり、発目のベイビーを褒めたりしてた時とか、面白くなさそうにしてたし。

そう考えると私は……緑谷の傍に、油断ならない女子がいると思うと、私は……胸の中に何か、黒い感情が渦巻いて、心がキリキリと痛むのを感じた——

——なんてことは全然なく、むしろ喜びでいっぱいである。

(あつはつは、つくづく自覚するわあ……色々歪んでんなあ、私)

考えれば考えるほどに、それを自覚する。

恋敵(って言っつていいものかどうか)がいるかもしれないのに、ライバル意識を燃やしたり、疎ましく思ったり、友情と愛情の板挟みに悩むでもなく……こんな風に感じるってのが、私が普通とは違うっていう何よりの証拠だよなあ……。

それこそ、TS転生とかそういうのすら関係ない、私の中の『ある価値観』あるいは『性癖』が……今まさに鎌首をもたげている。

中学の時、この価値観をクラスの女子にカミングアウトした時に、『雌ライオンかあんたは』とか『野生動物の考え方だよそれ』とか言われたのも、そしてやっぱりドン引きされたのも……そりゃ仕方ないってもんだよなあ。こんな願望……。

「さーて、これからどうなりますかねっつ……ふふふ、えらいこと楽しみにしてるな私。でも、やっぱり幸せになりたいよねえ——

——みんなであっ♪」

第43話 TS少女と指名リスト

さて、『職場体験』に行く先についてだが、当然ながら自分に指名のあった全国のヒーロー事務所の中から選ぶことになる。

指名がなかった者については、学校側がオフアードした40あるヒーロー事務所の中から選んでいくことになるそうさ。

そしてヒーロー事務所と一口に言っても、その傾向とか得意分野みたいなものは様々だ。対凶悪犯罪専門だったり、レスキュー専門、地域協力や後進育成に力を入れているなんてのもある。

そしてそれは、私達が『どんなヒーローになりたいか』と考えている点についても同じだ。

どこの事務所がどういう方針を掲げていて、どんな人材を求めているのか、どんな能力・働きを期待されているのか……それを考慮した上で、職場体験先は選ばなきゃいけないってことだな。

「オイラはMt.レディー！」

そしてこいつはそのへん絶対考慮してねーな。

梅雨ちゃんも指摘してたが、十中八九本能とか欲望に正直に選んだんだろう。

Mt.レディーってヒーローは私も知ってる。最近有名になってきているヒーローで、素肌の露出こそ少ないものの、伸縮性のかかなり高いスーツを身にまどって体の線がかなりくつきり出ている……結構なお色気枠のヒーローだった気がする。

峰田という生き物がそんなところを志望する理由なんて、最早考えるまでもないと言える。本人は否定してたが……いや、そんな無理すんなって。皆わかってるって。

しかもなんか今週末までに提出しなきゃいけないって……瀬呂も言ってたけど、あと2日しかねーの？ この件数、目通すだけでそんなくらいかかりそうなんだが……いや、泣き言言ってる時間もないか。

……実際問題、1つ1つ目を通して調べて、とかやってたらとても時間が足りない。詳しく調べるのは最低限にして、私の目的に合っついそうなヒーローを……やはり、1つ1つ調べてたんじゃとても無理

だ。

となれば……

「まずはこの指名が来てるヒーローらの得意な活動条件を調べて系統別に分けた後事件事故解決件数をデビューから現在の帰還まででピックアップしてたらとても時間が足りないから残念だけど期間を絞るか分野を絞るかして僕が今最も必要としている要素を備えている人を割り出さないといけないな……こういうのはただランキングが上ならいいってもんじゃないけどかといって実績に乏しいという意味でランク下位にいる人を選んでもいいわけもないしそもそもこんな貴重な経験そうそうないんだし例のプランの試金石やそれに先んじて経験を積むっていう意味でも有効活用しなきゃそもそも事件がない時の過ごし方なんかも参考にしないといけないなああ忙しくなるぞうひょー」

あっちの方でブツブツブツブツ独り言言いまくって……近くにいろクラスメイト達から『芸かよ』って感じの生暖かい視線をもらっている、クラス屈指のヒーローオタクに協力を仰ぐか。

色々話したいこととかもあるしな。

……とか思ってたなら、声かけようとした昼休みに、

「わわ私が独特の姿勢で来た！」

とか何とか言って来襲したオールマイトに連れられて、例のごく去っていった。確かに、腰を90度に曲げて、その……独特、としか言いようがない姿勢だったな……なぜあんな感じに？

……しようがない、ま、どうせ今日も訓練する予定だったし……放課後にしよう。

で、その放課後。

私と緑谷は、部屋とジム……ではなく、学校のトレーニング施設を借りて、私達は組み手主体の戦闘訓練を行った。

というのも、修理に出してた私と緑谷のコスチュームが返ってきて

たつて教えられたからだ。

基本的に、雄英の敷地内にあるトレーニング施設であれば、合わせて申請すれば、コスチュームを着用して訓練を行うこともできるのだ。

まあ、そりゃ……自主トレとはいえ、コスチューム使わずにやったら、コスチュームを使って戦う訓練にならないからな。授業時間だけじゃ。さすがに足りないだろう。

加えて、『個性』の種類によっては、そもそもコスチュームを使わなければ訓練自体が難しい場合もあるし。轟の、特に『左側』とかその典型例だな。ジャージとか普通の服じゃ、発動した時点で燃えるし……最低でも、耐熱性能のある特殊な服を着なきゃ、訓練もできない。ただし、訓練の内容やコスチュームの仕様によっては、教員の付き添いが必要だったり、そもそも許可が降りなかったり……っていう場合もあるが。

爆豪の籠手とかが多分それにあたる。訓練中にあの大爆発ぶつ放されたりしたら大変だからな。

そういう時は、今言った通り教員が立ち会ったり、コスチュームのうち一部だけを着用許可が下りたりする。『籠手以外許可』とか。

幸いにして、私らのコスチュームは単なる防護服ってだけのものなので、普通に全部許可が下りたが……緑谷のコスチューム、なんか前とデザイン変わってるな？

……え、何？ 制作会社が独断と偏見で材質とか見た目変えたの？

えー……そんなのあんの？

まあ確かに、すごく性能上がってるっぽかったけどさ。

緑谷は、これまでのコスチュームにも愛着とか色々あった風ではあったんだが、『まあ仕方ない』って使うことに決めたようだった。修正要望は出さないそうだ。

で、それを使って戦ってみたわけだが……やっぱり緑谷、とんでもなく強くなったな、と実感した。もう私でも、楽に勝つことはできないレベルだ。

10回やって3回は取られた。残り7回もかなりギリギリだった。

半分は馬力とタフネスでのごり押しで勝ったようなもんだし、クリーンヒット食らったら一撃で意識持っていかれたからな……。

それに加えて……私相手じゃ、緑谷はまだ踏ん切りがつけられないというか、無意識に実力を出しきれていない感じもする。徹頭徹尾、顔は殴ろうとも蹴ろうともしてこなかったし。

それに、この組み手は私が十分にエネルギーを補充した状態でのもの。残量次第では勝率は0になるだろうし……それでも勝率7割ってことは、この先どんどん私は勝てなくなる。

こと、義姉さん達のプラン『デウス・ロ・ウルト』が始まれば……今までに増して緑谷は飛躍的に強化されるだろう。

そうならもう……私は置いて行かれるな。

姉さんに話して、『デウス・ロ・ウルト』のテストには、緑谷と私の両方が参加することになったけど……成長速度という点において、緑谷は異常なまでに優れている。鍛えれば鍛えるほど、どんどん底知れない可能性が見えてくるんだよ。

何だかなあ……嬉しいような、さみしいような。先生役でいられたのも、短い期間だったかも。

でも、これでいい。これで緑谷は、もっともつと強くなる……

そうした先にこそ、私が本当に望むものがある。

……ま、それはいいとして……汗かいたから、後はシャワー浴びて着替えて帰る、って段階になったんだが、その前の整理体操中の雑談の時のこと。

「え、緑谷もう職場体験先決めたの!？」

「あ、うん……色々考えて、っていうか事情があつてなんだけど……指名があつたうちの1つで、『グラントリノ』っていうヒーローの所に行くことになったんだ」

「……グラン、トリノ?」

聞いたことない名前だな……少なくとも、有名どころじゃない気がするが。

ちよつと見せてもらった限りだと、緑谷の所に来てたりリストには、

相当上のランクからの指名もあった。それこそ、ビルボードチャート10位以内の事務所すら。

トップ10圏内やその周囲だと……ミルコにギャングオルカ、ヨロイムシヤにクラスト……そうそうたるメンツが並んでるな。この中から選んでもよさそうなもんだが……あえて、全然知られてないような知名度のヒーローを選んだからには、何か理由があるんだろう。

……それも、何かはぐらかしたそうにしてるから、深くは聞かないが……。

……昼休み、突然現れたオールマイトに関係してる、なんてことは……ううむ……

まあ、何が判断基準になったのかは知らないけど、納得して決められたならそれでいいんじゃないかな。あの件数の中からは、普通に選ぶには、情報収集だけでも大変だっただろうし。

「しかしまいったな……緑谷と一緒に相談したりして体験先決めようかな、って思ってたのに……こっただけが一方的にアドバイスしてもらうわけにも……当てが外れたかな？」

「あ、栄陽院さんはまだ行き先決まってるんだね。もし僕が役に立てることなら手伝うよ？ 日ごろからその……お世話になりまくってる恩返しもしたいし」

「恩返しなんていいんだけど……いやでも、正直助けてもらいたいのはその通りなんだ。ぶっちゃけ、どのヒーローがどんな感じの奴なのか、私あんまり知らなくて……」

「それだったら……流石にあんまり細かいデータは無理だけど、ビルボードチャート上位100位圏内くらいのヒーローなら僕、大まかになら知ってると思うよ？」

「マジで!? すごいな相変わらず、知識量……じゃあ、ちよつと付き合ってくれる？ あ、晩御飯ご馳走するから」

「いやいや、そんなのいいって……ええと、自習室とか行く？」

「いや、PC使いたいし。無難に……いつも通り、うちに来なよ」

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

『無難に……いつも通り、うちに来なよ』

そんな風に言われて、僕も『そうだね』ってついて行ってしまったが……よくよく考えたら、女子の家にお邪魔するなんて、少し前までの僕からしたら、無難どころか大事件だったのにな、なんて思っ、不思議な感じがした。

体育祭に向けて一緒に修行して、その際によく立ち寄ってたからか……この部屋に来て、前程緊張することはなくなつた。全くしないわけじゃないが、『ゆっくり待って』って言われて、『うん』って返せるくらいには、そのままソファでくつろぎながら軽食が出てくるのを待てるくらいにはなつてゐる。

なんだか……栄陽院さんと過ごす時間が、自分の日常の一部になりつつあるような気がする。

というか何なら、彼女自身ももう……

それゆえなのか……何だか最近、以前なら彼女に対して、あまり考えもしなかつたようなことを考えたり、よくわからない感情が湧きあがってきたり……することがある。

障害物競走で、峰田君と一緒にいた時、

騎馬戦で、尾白君や鉄哲君、心操君と組んでるのを見た時、

トーナメントで、上鳴君や、常闇君、かつちゃんと戦ってボロボロになつてゐる彼女を見た時、

そしてそれは……今日もだった。

彼女の職場体験先を決めるにあたって、リストを見せてもらった。

予想通り、ランキング上位の事務所からもたくさん指名が来てる。多分だけ……ビルボードの順位でラインを引いて、この中から選ぶ感じでいいんじゃないかな。

僕みたいに、『ワン・フォー・オール』の調整のために、オールマイトからその恩師——グラントリノっていう、隠居済みだった人を紹介されるとか、そういう特殊な事情がない限りは。

「あ……そうだ栄陽院さん、こないだ育乃さんに聞かせてもらった感じだと……栄陽院さんの家って、少なからずプロヒーローとも色々コネクションがあるんだよね？　そこで知り合いになってるヒーローを選んだりとかするのもいいんじゃないかな？」

実際、彼女は個人的にも、この間の『優勝祝い』の時に会えた、ビューティービスケットなんかのプロヒーローとも知り合いだったようだし、それも手だと思っただけ……そう言うのと、なぜか彼女は『あ……』みたいな、ちよつと気まずそうな表情になった。

「それも手ではあるかもだけど……私が知り合いのヒーローってそんなに多くないんだよね。あくまで実家を通して知り合う機会があった人達だけで……その実家自体、私はあんまり関われない立ち位置にいるもんだから？」

「え、そうなの……ってか、『関われない』？」
「うん。……そういや、話したことなかったな、緑谷には」

そう言っただけで彼女が聞かせてくれたのは、彼女の出自だった。

彼女は『栄陽院家』に生まれ育ったのではなく、その当主の後妻の連れ子として家に入ったため、どちらかと言えば冷遇されているんだそうだ。大っぴらに非難されたり、危害を加えられることこそないけど、真の意味で『栄陽院家』の一員としては、認められていないんだって。

それでも、お母さんや、再婚したお義父さん……つまりは、家の当主の人。

そして、その連れ子である2人の義姉……この間会った、育乃さんと成実さんとも、仲は良いらしいし、特段寂しく感じてはいないらしいのは幸い、なのかな。

いきなりのカミングアウトに、ちよつと空気がしんみりしかけたものの……『別に今更気にしてることもないし』って、彼女自身はポジティブなままだったので、僕も深くは考えないことにした。彼女が気にしてないのに、僕だけ暗くなっても……かえって迷惑かもだしね。

それに、僕にそういう事情をこうして話してくれたのは……信

頼してくれている証拠みたいな感じもして、嬉しいし。

「そういうことなら、普通にランキング上位のところからとかで選んでいいかもね。にしても……」

そこまで言って……なんというか、一覧表を見ているうちに、どうにも無視できなくなってきた部分に目をやる。

リストが五十音順だから、僕が知ってる限りではあるけど、ヒーロー事務所を系統別に分けてみる作業をしたんだが……

なんというか、こちらもある意味『予想通り』と言えいいのか……「その……いろんなところから来てるね」

「それは私もパツと見で思った。まあ、ある意味想定できたことではあるし……うん。体育祭がアレだったからなあ……自分で言うのもなんだけどさ」

彼女に対しての指名先は……大きく分けて、3つの傾向から集まっている。

1つ目は、体育祭4位という、その戦闘能力に着目したと思しき、戦闘専門、あるいはそれ重視の事務所からの指名。

2つ目は、体育祭の実況の中で語られた、彼女の個性の便利さを見据えた先からの指名。災害時の人命救助や、医療機関なんかに関わりのある事務所から主に来ているようだ。

そして3つ目……彼女のそのルックスや、すらりとした綺麗なモデル体型、そして体育祭を通して散々見せつけた(そんな意図はなしに、だが)セクシーなシーンを魅力として見た指名だ。

特に3つ目が……すごい。

テレビCMやドラマ出演なんかで露出の多い、タレント的な副業を持っているヒーローの事務所や、まさに昨日見に行った劇場とかで活躍するような、名だたるアクトヒーロー・アクトレスヒーローから指名が集中している。

うわ……宝塚ヒーロー『トゥルーウイング』に、女形ヒーロー『フロンテリアルト』、登竜門ヒーロー『ジェノンボーイ』、昨日会った『アマイマスク』や『パンドラズ・アクター』とかからも……確かに栄陽院さん、華がある、つて言える見た目してるからなあ。舞台役者の男

聞いた時、ちよつと意外で……『そういう方向だったの?』って、少し驚いちゃったよ。栄陽院さん、勝手なイメージだけど、てつきり戦鬪系とかを見据えてるもんだと思ってたから……。

そして同時に……彼女がそういう、タレント系やセクシー系の路線で行くつもりはなく、また職場体験先にも選ぶつもりはない、と知つて……僕は、ほつとしてしまっている自分に気づいた。

同時に、そういう可能性を少しでも考えてしまっていた今まで、どこか不安や苛立ちを覚えていたことにも。落ち着いた今になって気づけた。

何か、どうしちやっただら、僕……何なんだろう、この感じ……？

この間は、彼女は僕をどう思ってるんだろう、と考えた。

けどよく考えたら、その逆はどうなんだ? 今まで、考える機会がなかったんじゃないか?

……僕は、彼女を……栄陽院さんを、どう思ってるんだろう?

彼女を見ると、ドキドキする。

彼女が喜ぶと、僕も嬉しい。悲しそうにしていると、僕も悲しい。

彼女が苦しんでいれば、それを何とかしてあげたいと思う。

彼女が僕以外と仲良くしてるのを見ると……何だか、面白くない。

……これって、いわゆる……芦戸さんや葉隠さんが大好きな、恋愛的な感情、なんだろうか?

僕は……栄陽院さんのことが、好き、なのか?

……それとも……

第44話 TS少女と体験先

緑谷のヒーロー知識を思いっきりあてにした末に、どうにかこうにかその日のうちに職場体験先を決めることに成功した私は、次の日の朝、普通に登校していた。

教室に行く前に職員室によって、先生に申し込み用紙を提出する予定である。

そしたら、校門からちよつと入ったところで、今日も元気に機嫌悪そうな爆豪が緑谷に突っかかっているのが見えたので、2人共ひよいと、肩に担ぐように抱え上げてさっさと正面玄関に向かう。

「てめっ……何しやがるデカ女コラア！ 降ろせボケ！ 放せバカ力！」

「通行の迷惑だったの。出入口の前で止まってるなよ」

「うわわわわ!? え、栄陽院さん、ちよ、近、あたって……!!」

「はいはい、もうちよつといたら放すから……全く、顔合わせりや喧嘩すんだからあんた達は」

「永久ちゃん、なんかやんちゃ坊主の母親みたいなセリフやね」

「けろ、突っかかっているのは爆豪ちゃんだけなだけだね」

「おや、麗日と蛙吹も合流か。」

「よし、ここらへんでいいな……どっこいしょ。」

爆豪はさらに機嫌悪そうにしていたものの、チツ！ と舌打ちをし、
「……しかし。」

「……ああ?! ついてくんや、何なんだよテメーら全員!?!」

爆豪が歩いていく先に、私達も全員ついていく。

緑谷に私、それに麗日に蛙吹もだ。全員同じドアを開け、同じ曲がり角を同じように曲がって、一塊になつて歩いていくもんだから、うざったく思ったらしい爆豪がまた吼えることと相成った。

けど、仕方ないだろそれは……ホントにたまたま行き先が同じなんだから。

多分だけど、全員同じ理由で。

「え、ええ……でも僕、行き先こつちだから」

「私も。つか……全員そうなんじゃね？ 理由も含めてさ」

「ける。そうね……多分皆、あそこに用があるのよね」

蛙吹が指さした……じゃなくて、その長い舌で『舌さした』先にあるのは、『職員室』の表示。

うん、やっぱりね。皆、職場体験の希望表提出しに行くとした。家で考えて決めたのをプリントに書いてきたから、それを始業前に相澤先生に提出する、というわけ。

ホームルームの時でもいいのかもだけど、他にもそう考えてる奴いると思うから、かぶつて時間かかる事態にならないようにそうしたんだが……皆、同じ考えだったか。

結局最後まで団体行動をとる羽目になった爆豪は、けっ！ と大聲さな、つか絶対わざと大きく言っただろってくらいの音量で悪態をついて、職員室に向けて歩き出す。

その際、ポケットから提出物であろう紙を出して………うん？

——ぴっ

「あ！?! おい、テメエ何しやがんだデカ女!?!」

爆豪の提出用紙、そこにかかれた希望先が目に入った瞬間………ほぼ反射的に、私は爆豪が手にしていたその紙を、横から奪い取っていた。爆豪が反応するよりも早く、なおかつ、破けたりしないようにパツと一瞬で。

当然ながら憤慨する爆豪。加えて、『え、どしたの!?!』って視線を向けてくる緑谷達。

爆豪を『ちよつと待て』と手で制しつつ、紙に目を通して、見間違いないことを確認し………

「爆豪、お前どこ行くの?」

「ああ!?! だったら何だっただ返せさつさと!」

「……あのさ、コレは純粹に善意から言わせてもらうんだが………こつち、やめたほうがいいぞ?」

「……あ?」

割と真面目なトーンで私が言って来たことで、何かを察したらしい

爆豪が、持ち前の意外とクレバーな部分を發揮して、ぴたつと止まる。同時に、緑谷達も、突然の私のセリフに『え?』と少し驚いたようにしていた。蛙吹のは相変わらず表情的にわかりづらいが。

「……どういう意味だデカ女、そこ行くと何かあんのか?」

「緑谷、お前……ここ見てどう思う?」

「え、ぼ、僕? いや、どう思うって言われてもそんな、ていうかかつちやんどここに……あー、なるほど……」

ぴら、とその紙を見せた途端、納得したような表情になる緑谷。

同時に、爆豪の方を見て何とも言えない表情になったので、さらに爆豪の機嫌が悪くなる。

気になつたらしい麗日と蛙吹が、横から紙を覗き込んできた。

「ええと……『ジーニアス』? ここつて確か……」

「けろ。No. 4ヒーローの『ベストジーニスト』の事務所ね」

そう。若者たちのカリスマ的ファッションリーダーとしても知られる、ビルボードチャートNo. 4の若手超実力派。

テレビで見た感じだと、顔までジーンズ履いてるような独特なコスチュームで……気のせいじゃなければ、なんか天津飯とか自爆するガンダム乗りとかバビロンの戦士っぽい声だったあのんだ。

「こんなところから指名来てたなんてすごいわね、爆豪ちゃん……でも、この事務所がどうかしたの? やめたほうがいいって……緑谷ちゃんも、コレ見て何か納得してみたいだったけど」

「うん、もちろんその……ビルボードチャート4位だけあって、すごいヒーローだよ。戦闘能力も高いし、色んな事件解決に協力して貢献してて、実績もある。ただ……」

「ただ?」

「ベストジーニストつてさ……不良や乱暴者を更生、ないし矯正させることに力を注いでるヒーローとしても有名なんだよね……」

「あ、あ!?! なんだとテメエそりやどういう意味だデクウ!?!」

「そういう意味だろ。てか、もうちよつと離れよう、職員室の近くで騒ぐと先生方こえーから」

多少騒いでも大丈夫なところまで、少し移動してから続きを話す。

「つまりその……かつちゃんの体育祭での暴れっぷりとか、そういうのを見て、『矯正しよう』と思って指名してきた可能性が無きにしても非ず、つてことで……もちろん、断定はできないよ？ でも、もしその予想通りだった場合……かつちゃんが期待しているような活動はできない、と思う」

「……っ……!？」

「もちろん、職場体験として引き受ける以上は、色々と指導はしてくれるだろうし、身になる経験も積ませてくれるだろうとは思いますが……多分だけど、お前がランキング4位っていう肩書から想像したような派手な展開はない。むしろ、足踏みに近い時間を過ごすことになる可能性もあるな」

「いや、そこで教わるであろうことも、実際に大切なことなんだろうけどね？ ただ、さつきも言った通り、かつちゃんが期待してる時間の使い方と違うっていうか……勉強したくないと思ってることを徹底的に勉強し直す時間になっちゃうというか……」

「ける……なるほど、爆豪ちゃんには合っていない可能性が高いわね、確かに」

何一つ嘘は言っていない。淡々と、事実を述べているだけだ。

口調からそれを悟ったんであろう爆豪は、イライラしている様子を隠そうともせず……しかし、私達の忠告を聞き入れて、そのまま提出するのはやめたようだった。

用紙をポケットにしまい、一人まっすぐ教室の方へ歩いていく爆豪の背中を見送って、私達はあらためて職員室に向かい……そこで、相澤先生にプリントを渡した。

緑谷が、昨日聞いた通り『グラントリノ』とやらの事務所。

蛙吹が、海難事故や港湾関係の事件を専門に扱う『セルキー』の事務所。

麗日が……

「あれ、麗日提出しないの？」

「あーその……ごめん、ウチもう提出して……昨日のうちに。その……なんか、言いだすタイミング無くて」

「あ、そう……」

まあ……うん。あるある。

さて、で私だが……

「……………え？」

そしてそこで、私の用紙を見た麗日と蛙吹のセリフというか、反応がこれである。

「えっと……永久ちゃんの行く先、ここなん？」

「さつきはあんな風に言っただのに」

「そりゃ、真実を言っただまでですから。実際爆豪には合いそうにないでしょ？ まあでも……」

……………私が行かないとは誰も言っていない」

2人が『えー』って顔になり、唯一知っていた緑谷が苦笑する中……はい、提出。

そんなわけで私が行く職場体験先は……『ジーニアス』。

ヒーロービルボードチャート4位、ファイバーヒーロー『ベストジーニスト』の事務所だ。

☆☆☆

「そういうわけで、ほぼほぼ職場体験の希望はまとまりつつありますね……そちらにも参考までにお送りします。7日間の体験が終了したら、各ヒーローから報告が上がったその内容も」

『了解よ、それも含めて最終的な強化プランを策定するわ。現段階での情報は、一部その体験先のヒーローにも送付するのよね？』

「そうさせていただく予定です。しかしまあ……ものの2、3日でここまでデータをまとめて貰えるとは、感謝しますよ……流石は最高峰のトレーナーですね」

『ほめすぎよ。まだまだ仕事はこれから、ここからが本番。引き受けた以上は最高の形で終えてみせる、っていうのが私の信条ですから

ね。それじゃあね、イレイザーヘッド』

「ええ、アナライジユ」

かちや、と、デスクの受話器を置く相澤。

その視線はすぐに、電話から手元の資料に移る。

自らが担任する、1年A組の生徒達について、1人1人のデータを詳細にまとめられたそれは、今の段階でも極めて有用な教育資料として使えるものだった。

しかし今しがた話した電話口の相手……この資料の製作者は、それを『まだまだ未完成だ』と、さらりと言つてのけた。納得のいく出来に仕上げるには、もう少し情報と時間が要る、と。

生徒1人1人について、まるで彼ら・彼女らが成長する段階を目で追つて来たかのように、個々が持つ長所や伸ばすべき点、逆に改善すべき問題点や性格上の欠点、さらには一部の生徒については、『個性』ごとの特性や伸ばすべき点、伸ばし方の案や扱う上での注意点まで……信じられないほど事細かに。それでいて、判断根拠まで上げ連ねた説得力のある文面になっていた。

これがさらに昇華されると、はたして、改良カリキュラムが本格稼働する頃には、一体どんなことになるのだろうか、味方のことながら戦慄する相澤だった。

「現役でこれだけできて、何であの人隠居なんかしたんだ……つか、何で教員やってねえんだ？」

「それは僕も思う所だね！ よければ君の口からぜひとも聞いてほしいものさ！」

いつの間にか隣に来ていた校長・根津をちらりと一瞥し、相澤はため息をつく。

「それは無理でしょう……あの人は仕事は真面目にやるが、基本の所は自由人だ。やりたくないことはやらない……今回のコレを引き受けてくれただけで驚愕ものでしたよ」

「まあ、そうだろうね。実のところ、僕も何度か彼女には雄英に来ないかアプローチしているんだけど、そのたびに振られてしまっているのさ。まあ、無理強いはいえ……これだけの能力を遊ばせ

ていることを考えると、もったいないとしか言いようがないね」

相澤の手から資料を受け取り、ぱらぱらぱら……と流し見しただけで、根津はその内容全てを頭の中に叩き込んだ。

個性『ハイスペック』。人間を超えた頭脳を持つ彼だからこそできる、速読と理解のなせる業だ。

そんな根津ですら、相澤同様、トレーナー・ヒーロー・アナライジユには一目置いている。

彼女の持つ観察眼と解析能力、そしてそれらによって得たデータをもとに、対象者が今以上に強くなるための確かな道筋を組み上げ、それを示してみせる。

そして、苦しみながらもその道を征き、最終的に大成した者達を、根津は何人も知っている。その道を踏破できるかどうかまでは流石にその当人たち次第とはいえ、彼女の『育てる』力は当時から本物であり、今なお健在である。

しかもコレは彼女の純粹な知識と技能のなせる技であり、個性とは完全に別物なのだ。

そしてその『個性』もまた、人を育て、支える上で極めて有用で、応用範囲が広いものであることも、根津は理解していた。

だからこそ根津は、この力こそ次世代のヒーローを育てるために必要だと感じ、今まで何度もアナライジユ——栄陽院叶恵に、雄英で教鞭をとってくれまいかとアプローチしてきた。

しかし、そのことごとくを彼女は断った。失礼にならないようにやんわりと、しかし頑として首を縦に振ることはなく。

毎度、『昔のようにはもういきませんから』『隠居した過去のヒーローには荷が重いです』と、頑なに拒み続けた。

「しかしすると、今回に限ってなぜ仕事を受けてくれたのやら……：教職につくよりは気楽にできそうだと思っただのか……：それとも、対象のクラスに娘がいたからか……：」

「出席番号5番の栄陽院永久君だね。入学試験の資料で彼女の名を見た時は流石に僕も驚いたよ。その後の実技試験の映像を見てもっと驚いたけどね。ただ、僕個人的な意見を述べさせてもらおうなら……：そ

のどちらも、違うとまでは言わないが、本質の理由は別にあると思う」と、言いますと？」

「恐らくけど……彼女も察しているんじゃないかな？　これから先、もつと強いヒーローが必要とされる時が来るであろうことを。新学期早々に敵の襲撃サイランを受けるなんてことがあつたくらいだ。世間にもよくないニュースが多いし、次世代を育てることの重要性を、彼女は認識し始めたのかもしれないね」

「成程……それは結構なことだ。ついでに再就職も検討してほしいもんです」

「それはもつともだね！　なんだつたら、君のクラスの栄陽院君から、お母さんに掛け合ってもらうのはどうだい？　可愛い娘の頼みならワンチャンスあるかもしれないね！」

「……いや、無理でしょう。あいつも本質は母親と同じです。やりたいうようにやるタイプだ。母親がやりたくない、やるつもりがないと言っていることを勧めるようなことは想像できない」

もともと冗談のつもりだったのか、根津も『それもそうだね！』とすぐに諦めたように言ったものの、ふと気づいた、あるいは思いだしたように、

「そう言えばその栄陽院君だけど、最近、緑谷君と仲がいいようだね？」

「？　ええ……どうやら放課後によく、2人で訓練室を予約して一緒に訓練しているようです。2人共似た『増強系』個性ですからね、互いに高め合う目的だとは思っていたのですが……今思うと恐らく、緑谷の急激なパワーアップの陰には……」

「なるほど……彼女の『個性』ならざる力は、娘に受け継がれつつある、ということかな？」

「まだ一部でしょうが、色々と叩き込まれている可能性は高いかと。緑谷が急成長し始めた時期と、2人が合同で訓練を始めたと思しき時期が一致しています。緑谷に目をかけた理由というか、きつかけまではわかりませんが……」

「ふむ……何にせよ結構なことじゃないか。生徒同士が高め合って上

を目指していくのは素晴らしいことだと思うし、これをきっかけに栄陽院君も『指導』という面で力を発揮できるようになれば、ますます君のクラスにとってプラスになると思うしね！」

そう言い残して、今度こそ職員室を後にした校長。

しかし、ドアから出て校長室を目指す途中も……彼の『ハイスベツク』な脳髓は、回転を、思考を続けていた。

（『ワン・フォー・オール』を受け継いだ緑谷君の急成長……平和の象徴の限界という特大の課題を前にして足踏みせざるを得なかった現状を打開しつつあるとして、喜ばしく思っていたけど、少し気になってきたかもしれない。元々オールマイト君からの報告で、緑谷君と栄陽院君の関係は知っていたし、彼女が『ワン・フォー・オール』に関わる事情を知っているとは思えないが……栄陽院君はなぜ、緑谷君に目をかけて育て始めたのか……そしてこのタイミングでアナライジユが我々の要請を受けて生徒達の育成に手を貸してくれて……これは果たして偶然なのかな？ 結果だけ見れば喜ばしいことの連続と言えるけど……何か情報が、パズルを完成に導くための決定的なピースが足りていないような気がする……。恐らくは、彼女達だけが見て、知っている、何かがある……）

第45話 TS少女とベストジーニスト

「コスチューム持ったか？ 本来なら公共の場じやまだ着用厳禁の身だ、無くすなよ。くれぐれも職場体験先で失礼のないように。よし、行け」

『職場体験』出発直前。

他の事務所やら何やらを巻き込む形で行う行事だからだろうか、いつもは徹頭徹尾だるそうな相澤先生も、繰り返し私達に注意して言うて聞かせていた。

集合した駅から、各自の体験先の事務所までそれぞれ解散していくわけだが……その際、緑谷と麗日が、飯田のことを心配するようにして、『本当につらくなったら言つてね』と声をかけていた。

飯田はちゃんとそれに返事もしていたが……なんていうか、大丈夫そうには見えなかったんだよなあ……辛そうなのを我慢してる、つてももあるけど……もつと何か凝り固まったものを胸の、いや腹の中に抱えてそうな感じがして。

だって、あいつの職場体験先が……うん、嫌な予感しかしない。

だが、現時点で私に何かできることがあるわけでもなし……何事もなく、無事に済むことを祈ることしかできない。

……当の飯田は、それを望んでいないのかもしれないが。

コスチュームの入ったケースと、その他私物の入ったカバンを持って(かさばる)、電車で揺られることしばし。都心部に構えられたヒーロー事務所『ジーニアス』に到着。

好立地の土地に構えられたそこは、4〜5階建ての中規模のビル丸ごと1つが事務所になっていた。外観からしてスタイリッシュに整えられていて……何だろう、デザイン事務所とか芸能事務所みたいな感じにも見える。

もちろん、ここが間違いなくヒーロー事務所であり、私が勉強したいことを鑑みた結果として最善の選択先であることは調査済みなので、不安は……あんまりないが。

中に入ると、やはり内部も清潔感漂う作りになっている。受付に行って、職場体験で来た旨を伝えると、応接室に案内されて暫く待つよう言われた。

出されたお茶を飲みながら待っていると、さほど時間も経たずに、その人物はやってきた。

横向きになでつけたような金髪に、丸みがあるが不思議と鋭さ・眼力を感じさせる目。

下も上もデニム生地で形作られた、ちよつと特徴的過ぎやしないかというほどのコスチュームに身を包んでいるその人は、No. 4ヒーロー・ベストジーニストその人だった。

まさに名は体を表す……いやここまで行くと表し過ぎっていうか、キャラ設定にこだわり過ぎて気がしなくもない風貌である。襟元なんかジーンズの腰回りみたくなってるし。

ともあれ、入ってきた瞬間にソファから立ち上がって出迎える姿勢を取ると、『ほう』と感心したような声が聞こえた。口元は隠れてるけど。

「最近の若者にしては、きちんと礼節をわきまえた態度が取れるようだな……いや失礼、貶す意図で言ったわけではないんだが」

「いえ、恐縮です。本日から7日間、職場体験お世話になります、英雄高校ヒーロー科1年A組より参りました、栄陽院永久と申します。どうぞよろしくお願いします」

「うむ、結構。自己紹介の必要性はないかもしれないが……私がベストジーニストだ。今回、君を指名させてもらった。が……もう1人は来なかったか」

「少しだけ残念そうにするベストジーニスト。あ、これはやっぱり……」

「最近はいわゆる『いい子』な志望者ばかり多くてね、久しぶりにグツと来た、筋金入りの問題児を矯正できるかと楽しみにしていたんだが……まあ、仕方ないだろう」

「やっぱり爆豪、そういう感じで指名されてたのね。ギリギリセーフ……」

あいつは今頃……

☆☆☆

「今日から一週間、俺がお前達の面倒を見る。甘やかすつもりはないゆえ、心してかかれよ、焦凍、それに……爆豪」

「……………」

揃いも揃って愛想の悪い2人の生徒。

自らの息子と、もう1人、自分が指名していた爆豪を前に、N.O. 2 ヒーロー・エンデヴァーは、ふん、と鼻を鳴らした。

しかし、不機嫌そうな雰囲気ではなく……むしろ、2人の強気さを気に入っているかのように、その顔には不敵な笑みが浮かんでいる。爆豪の、決して目上の人物にするものではない、礼を失した態度も、全く気にしていないようだ。

「2人揃って肝の太巻きなことだ。仮にもN.O. 2である俺を前にして、頼もしい限りだな」

「最近 is 日常的にN.O. 1を見てるし……何より、褒められたような礼儀作法やらの教育を受けた覚えがねーもんでな」

轟の皮肉にぴくりと反応するエンデヴァーではあったが、すぐにそれも引つ込み、咳払いを一つして、改めて2人に向き直る。笑みを消し、1人のヒーローとしての顔になって。

「では、ショート……と、爆豪はまだヒーロー名がないのか？」

「ああ？ 考えたの全部ボツ食らって決まってねえんだよ……何でもいいからさっさと職場体験させろや」

「だそうだ」

「ふっ、そう焦るな……何事にも順序というものはある。覚えておいて損はないぞ」

その瞬間、ぎろり、と音がつきそうなすさまじい眼力が2人に向けられ……轟と爆豪は、その迫力に思わずたじろいでしまった。

そして、その時改めて認識する。自分達が目の前にしているのが、どんな人物であるのか。

轟にとつては、尊敬したいとも思えない、むしろ憎むべき父親。爆豪にとつては、自分がトップにのし上がるために利用できれば上々、という程度。

無論、自分達よりも（少なくとも今は）あらゆる意味で圧倒的に格上の人物であることは理解していた。していた、つもりだった。

だが、それでも不足であったのだということを、2人は今になって痛感していた。

万年N.O.2。それだけを聞くと想像しづらいかもしれないが……相手は間違いなく、強豪ひしめくこのヒーロー社会において、オールマイトに次ぐ力を見せつけ続けた1人の英雄なのだ。

「跳ねっ返りは大いに結構、こちらとしても鍛えがいがある。ようやく全ての力を使う気になった焦凍はもちろんだが……爆豪」

「……！」

「お前のような奴には、どうせ口で言ってもわからんからな。望み通り、色々と経験させてやる。自分の目で見て、頭で、そして魂で理解するがいい……我々が戦っているプロの世界を。自分達に今、足りないものを。そして……お前たちが目指すべき、頂点の領域というものをな」

「ぼしん、と膝を叩いて景気良く音を出し、エンデヴアーは椅子から立ち上がる。そして、2人についてくるように言った。

「見せることも、教えることも山ほどある。まずは地下の訓練室に行くぞ」

「訓練……？ パトロールとか、『敵』ぶっ潰しに行かねえのかよ？」
「それはこの事務所で幾通りものシフトを組んで日常業務として行っている。そこまで急いでお前達を参加させなければならん理由はない。それよりも今は、今のお前達の実力を正確に把握しておきたい。でなければ、安心して外に出すことなどできんからな」

「……ま、道理だな」

「ちっ」

「安心しろ、すぐに嫌というほど色々と『経験』させてやるとも。この俺の所に来たのだ……何も得るものもなく帰るなどむしろ許さん。

最初に言った通り、甘えは許さん……死ぬ気でついてこい」

(……上等だコラ……！)

先の体育祭でのふがいがない(と、本人は思っている)結果。そこで露呈した、実力不足。

この『職場体験』が、それを覆し得る機会であろうことに間違いはない。爆豪は、脅しと言われても違和感のないほどにエンデヴァーに強く言われようと、一切怯むことなく……むしろ、闘志を燃やしていた。

そしてそれも、そのぎらついた目から、エンデヴァーは読み取っていた。

(……いい目だ。間違いない、こいつの中にくすぶっている熱は、今の焦凍や……同じく体育祭の上位に入った、あの大柄な少女や、緑谷という少年よりもはるかに強い。焦凍の競合相手として、同じ優勝者であり、オールマイトリスペクトと思いきあの緑谷という少年と、どちらを選ぶか迷ったのだが……こいつを選んだ俺の目は正しかったようだな)

打てば響く。鍛えれば、鍛えただけ強くなる。

自らの手に転がり込んできた、まだ小さな2つの種火の将来性に、エンデヴァーは満足するようにならずいて、2人を先導する形で歩いていく。

☆☆☆

「……ふむ、それが君のコスチュームか」

簡単に日程なんかに関する説明を受けた後、私は再びベストジーニストの前に立っていた。

ただし今度は、更衣室で戦闘服に着替えた上で。

緑谷の奴と違って、こっちには勝手な改造は施されていない。戦闘訓練やUSJの時にも着た、改造学ラン型のそれを見にまとって、オフィスで待っていたベストジーニストの前に来たんだが……さつきから何だ、じろじろ見られてるな。上から下まで。

「はあ、そうですが……何か気になる点がありましたでしょうか」

「ああ、色々とな。何と言うか……随分と強気と言うか、威圧的なデザインだな。先程までの態度からは少し意外だったので驚いていた。デザインのコンセプトなどがあれば聞いても？」

「はい、もちろんです」

格闘戦が主体なので、何よりもまず頑丈さと動きやすさを重視していること。

学ランの丈はあえて長くして翻るようにし、初動その他の動きを見極めづらいようにしていること。

小物を入れられる程度のポーチ類なんかは、救急用品や、『個性』絡みで使える飲料水なんかを携帯しておくためのものであること。仲間との通信用の電子機器なんかもあるが、激しい動きをするので最低限にしていることや、普段は学帽に格納できるようにしていること。

そんな感じで機能面のコンセプトをまとめて説明し、その他の部分については私の趣味、ないし直感的に『こういうのよさそう』と思っただセンスによる形にしていることを説明したのだが。

「できるならば、変えたほうがいいな。それも全面的に」

バツサリいかれた。

えつと……私のコスチュームとかこだわり、全否定？ 何ゆえ？

「もちろん理由はある。まず見た目が……稚拙な言い方かもしれないが、あえてこう言おう。不良っぽくて、市民に対して威圧的・暴力的な印象を与える。単なる学生服ならまだしも、いわゆる長ランや、それを着崩したいでたち、サラシ巻きのように見えるインナーなどもそうだ。今の時代には最早絶滅危惧種となってしまうたが、かつての『ヤクザ』などを思い起こさせる」

「……かつこよく、ない、でしようか？」

「……矯正すべき点はあまりなさそうだと思っていたが、礼儀作法とはまた別な点が問題のようだな」

暗に『お前センスおかしい』って言われた。悲しい。

おほん、と咳払いを一つして、ベストジーニストは続ける。

「無論、君の趣味嗜好は尊重したいと思うし、私の主観が入っているこ

とも否定しない。さらに言えば、戦闘を生業に直結させるヒーローと言う職業上、多少なり物々しいでたちになってしまふことは仕方ないとも言える。バトルヒーロー『ガンヘッド』や、フレイムヒーロー『エンデヴァー』などはその典型例だな。彼らの服装は決して温容とは言えないが、同時にその力強さ、勇ましさによって市民に安心感を与え、犯罪者に対しては威圧感を見せて事件を抑制する効果を持つ」
ああ……麗日が行った先の事務所と、轟と爆豪が行った先の事務所だな、それぞれ。

爆豪も、何でNo. 2から指名来てんのに最初No. 4のここに行こうとしたのか気になって聞いたら……確実に轟と一緒にいるのが嫌だったからだって。納得。

「だが、君の場合……最終的なヒーローとしての展望は、必ずしもそういう形ではないのだろうか？」

ベストジーニストは、机に置いてあったバインダーを手に取り、そこに挟んである書類を私に見せて来た。そこには、雄英高校から送られた、私、栄陽院永久……ヒーロー名『ダイナージャ』に関する様々なデータが、簡単にではあるがまとめられている。

職場体験に行く先に送られる、これらのデータをもとに指導をお願いします、という感じの書類だったはずだ。

そしてここには……学校側がまとめたものの他、『あの人』が解析したそれも載っている。

「コスチュームを纏っている以上はこう呼ばせてもらうが……ダイナージャ、君が目指すヒーローは、対『敵』^{ライオン}、対凶悪犯罪といった戦闘専門ではなく、そういった現場で活躍するヒーローに対する後方支援や避難民の救助といった、サポート、ないしサイドキックのような役割だと記載されている。これに間違いはないかな？」

「はい。『個性』柄、そういったことの方が得意ですし、色々勉強して技能も修めていっていますので。もちろん、戦闘もこなせないわけではないですが……正直、それを専門に扱うには、私の個性は少々、いやかなりピーキーだと思っていますし」

コレは本音だ。というか、入学前からずっと考えていたことであ

る。

まあ、今も含めて、完全に方針を決定したわけじゃないが……少ないくとも、私自身が事務所を構えるなりなんなりして、最前線に立って戦っていく、っていうビジョンはない。

そういうのにあまり向いていないであろうことは、今回の体育祭で思い知ったしな。

私は、エネルギーが続くうちは強い。白兵戦技能を伸ばしていけば、今よりももっともつと強くなれるだろう。

けど、それが切れてしまえば……準決勝で爆豪が言った通り、『無個性』同然になる。

そして、私があのパワーを發揮するためには、決して少くないエネルギーが……その元となる食料がいる。ここが何気にネックなのだ。

平時であればいい。潤沢すぎる資金で大量に食料を買い込んで食べとけばいいだけの話だ。

けど、それが災害時の被災地とかであれば？ ただでさえ支援物資として食料が必要になるそこに、たくさん食べなければ力を發揮できないヒーローなんて、プラマイゼロどころじゃないだろう……そこまでの働きができるとも思えないし。

だとすればむしろ、この個性を『汎用性・即効性抜群のエネルギー供給源』として割り切って、ちよいちよい言われてるような『人間点滴』としての活躍に絞って使えばいい。

食事や、あるいは点滴すらできない人への栄養補給に使ってよし、前線で戦うヒーロー達への体力供給に使ってよし、治療時のリカバリーガールのお供に使えばなおよし。

私が代わりに食べて、栄養だけは渡します、みたいな感じになるわけだ。

何せこの個性、私以外にエネルギーを供給するのであれば、かなり省エネというか、効率いいから……食事1〜2食分（無論、普通の人の）のエネルギーがあれば、プロヒーロー1人の体力を全回復させることすら簡単にできるし。

それでいて、燃費は悪いが、いざつて時は前線で戦って守ることもできる、と。接近戦もできる回復キャラ、とでも言えばいいのかな。ゲーム的に言えば、修行僧モンクみたいな……あるいは、某国民的RPGで、『僧侶』から『武闘家』に転職したのが私みたいな感じになるのかも。え、わかりにくい？ ごめん。

……なんか色々長くなってしまったが、そういうわけで、私が目指す最終的なヒーロー像ってというのは、ベストジーニストの言う通り、戦闘専門じゃなくて、サポートサイドなわけだ。

そして、それを考慮した場合……私のこの服装はあまりふさわしくない。

「戦闘の場においてサポートするならその限りではないが、救助の現場などにおいてはな……そういった現場におけるヒーローの、最も重要な役割は何か知っているか？」

「災害救助ですから……個性を用いて救出作業に貢献することですか？」

「それも確かに重要だ。だがそれは消防や救急隊にもできる。彼らの中には、特に免許を持って、状況を限定した上で個性使用を認められている者も存在するからね。私としては、災害・救助現場におけるヒーローの仕事……その最たるものは、『安心』を与えることだと思っている」

ヒーローの仕事は、『敵』ライアンと戦うことばかりではない。

例えば、日々のパトロールによって犯罪を抑制しつつ、その姿を見せることで市民を安心させる。『自分達ヒーローがいる』と思わせることで、平和が保たれるし、もし何かが起こっても安全だとアピールすることで平和を保つのだ。

災害現場においてもそれは同じ。苦しい、もうだめだと心が折れそうになっている時に、頼もしいヒーローがそこに駆けつけることで、一気に安心感を与える。いや、それ以前に、『きっとヒーローが助けに来てくれる』という安心感によって、被災者の心を守る。

「それもまた、ヒーローにとって欠かしてはならない役割だ。その際、助けに来たのが、見るからにヒーロー然とした頼もしく清潔感のある

恰好をした者か、はたまたホツケーマスクをかぶって手にチェーンソーを持った者かでは、要救助者に与える印象は大きく違うだろう？」

「例えばものすごく極端な気がしますが、確かにそうですね」

「それは認めよう。だがそれでいいんだ……時にヒーローが救助に携わる現場というのは、そういう『極端』……むしろ『極限』的な状況下になる。そういう場において、少しでも市民の心的負担を軽くするように努めるといっても、ヒーローに求められる役割だと私は思う」

だからこそ、私の服装も……戦闘における機能性を損なわない範囲で、かつ私が抵抗ない範囲であれば、改良したほうがいいとベストジーニストは語る。

……なるほど、確かにその通りだ。

もともとこの『改造学ラン』っていうデザインも……私が『カツコよくて（主観）敵に対する威圧にもなれば』って思って気軽に考えたものだからなあ……

私のセンスやら何やらはともかくとして、それがヒーローとしての方向性に合っていないのなら、そこまで強固なこだわりがあるわけでもないし、変えることにも抵抗は少ない。

せいぜい、心情的にちよつと慣れるまで大変かな、くらいのもんだ。「ただそうなる……どういふ風に変更すればいいのかって問題になります……よね？」ぶっちゃけ今のお話で、私、自分のセンスに自信が持てなくなってきたんですけど……」

「……切実だな。しかし、それならば問題ない……自画自賛になるが、私も含め、この事務所にはそういった分野において一家言ある者達が揃っている。君さえよければ、新しいデザインの考案と……なんならコスチューム会社への手続きや、改良そのものもやってあげよう。うちが提携している業者は、業界でも1、2を争うやり手でね、大規模改修でも1〜2日で完璧に済ませてくれる」

「そ、そこまでよろしいんですか!? その……願ったりかなったりと言いますか、お願いできるならぜひお言葉に甘えたいですが……」

「決まりだ。ならば、今日明日は基礎トレと座学に注力して、明後日以

降コスチュームも使った……そうだな、戦闘訓練やパトロールへの同伴などを行うことにしよう。それでいいかな？」

「はい、よろしくお願いしますー！」

こうして、ちよつと予想ないし予定と違う形ではあるが……私の職場体験は幕を開けた。

第46話 TS少女とヒーローのお仕事

S i d e . 緑谷出久

「オ、ロ、ロ、ロ、ロ……」

しよ、初っ端から汚くてごめんなさい、緑谷出久です……

今僕は、高校時代、オールマイトの先生だったプロヒーロー『グラントリノ』の事務所に、職場体験でお邪魔しています……

流石はオールマイトの先生。会ってすぐの時は、ちよっとお惚けな感じで面食らっちゃったけど……強さや指導力は本物だった。まるで目で追えないほどに素早い動き、足の裏から空気を噴射することによる、速さと威力の備わった足技（『ジエツト』という個性らしい）。

体育祭で優勝し、少しは強くなれたんじゃないかと思っていた僕の鼻っ柱を、見事に叩き折ってくれたこの人から、今僕は……ひたすら実戦形式での稽古をつけてもらっている。

今は休憩中なので、もう吐くだけ吐いて（といってももう胃袋の中空だと思うが）口をゆすいで休んでるところだ。

グラントリノは、さつき自分で踏んづけて壊した電子レンジを椅子代わりに座って、何やらクリアファイルに挟んで入れてある資料に目を通していろいろようだ。

「なるほど……高校時代の俊典ほどじゃねえが、体はある程度出来上がってんだな。動きも悪くない。ただまあ……やはり経験が足りてねえな」

「は、はあ……すみません。何から何まで、ほとんど付け焼刃なもので……」

「何、先が長いのはわかってたことだ。むしろ、春に受け継いで今の時点でそんだけ使えれば上等な部類だろう……そーいやお前さん、トレーニングに関して、雄英の授業の他に、同級生の嬢ちゃんから世話になってんだって？」

「え？ あ、はい……それ、オールマイトから？」

「それもあるし、コレにも書いてある」

ペしペし、と手元の書類を叩いて示しながら言うグラントリノ。

気になって横からそれを見せてもらおうと……どうやらそれは、雄英から届いた、僕に関する資料みたいだった。恐らく、これを参考にして指導をお願いします、って意味なんだと……

「……え、コレ……!?」

普通にそう思つて、ペラペラめくられるそれを見ていた僕だが……すぐにそれがおかしいことに気づく。

だってこれ、書かれてる内容が……コレ……

「個性名、不明。系統としては単純な増強系と目されるが、単にパワーだけを強化しているのではなく、身体能力そのものを全体的に強化していると思われる。100%発揮時の威力はトップヒーローの必殺技にも匹敵するが、許容量を超過した威力を発揮するとその分が反動となつて自分の体を破壊してしまう。現状安定して行使可能な力は全体のごく一部、およそ10〜15%程度と目される。また、『個性』使用時に発揮される威力は本人の体術戦闘に対する理解及び経験値に密接に関係しているものと目され、前述の通り『身体能力』である関係上、単に体だけ鍛えても力を上手く使えるようになるとは考えにくい。本来は長期間の鍛錬を前提とし、一般的な増強系個性以上にピーキーかつ感覚的な制御が必要なもの。また、筋肉等の緊張や反応速度から見て……何ですかコレ!?」

「何つて、お前さんに関する資料だよ。学校から送られてきた」

それはわかる。でも……内容がコレ……どう考えても詳しくすぎる。

学校でやっている『ヒーロー基礎学』みたいな、関連科目の成績や、現状僕が抱えている、心身両面における課題、学校における人間関係・対人関係の傾向なんか……そのへんであれば、まだ理解できる。

けど、それ以外に書かれていること……特に、『個性』関連で書かれていることの詳しさが、どう考えてもおかしい。

僕は、オールマイトから受け継いだこの『個性』……『ワン・フォー・オール』について、誰にも話していない。この『個性』については、誰にも話しちゃいけないものだって、オールマイトにきつく言われてるから（かつちゃんにちよつとうつつすら話しちゃったけど）。

どんな個性であるのか、どのくらいの力があるのか……そのくらい

なら、授業や『体育祭』の映像を見ればわかるだろうし、学校側が資料としてまとめていてもおかしくない。必要だと判断したのであれば、職場体験先にそれを送るのもありだろう。

けどこの資料には、それだけじゃ絶対にわからないはずのことや、些細なことだからって、オールマイトにすら報告してないこと、さらには、僕自身気づいていなかったことまで、まるで説明書や解説書みたいに詳しく書いてある。そして、そのほとんど……いや、今見る限り全部が正解だ。

以前に似たような『個性』があつたから、それを参考にしてるならまだしも……ほとんどの人にその情報の多くを秘密にしてる『ワン・フォー・オール』について、ここまでの情報がまとまっているはずがない。一体この資料、誰がどうやって用意したんだ!?

「ゴイツはあんまり、生徒には話すなって学校側から言われてんだけどな……お前さんの場合は事情が異なるし、知つていたほうがいいだろう」

「……グラントリノ?」

「この資料はな、あるプロヒーローによって作られたもんだ。『アナライジユ』って知ってるか?」

「……? いえ、知らないです……」

アナライジユ……聞いたことない名前だ。

今現在現役で、あるいはここ数年くらいに引退したヒーローくらいなら、名前を聞けば、『個性』を含めてすぐにデータが出てくるくらいには知識はあるつもりなただけ……

まあ、僕だつて、どんなヒーローも知っているなんて口が裂けても言えないけど。

あまりにも昔に引退してしまったヒーローや、それこそグラントリノみたいに、積極的にヒーロー活動を行っているわけじゃないヒーローのことは流石に知らない。

多分だけど、その『アナライジユ』っていうヒーローも、そういうヒーローなんだと思う。

グラントリノ曰く、その『アナライジユ』っていうヒーローは、と

にかく他者を観察・解析すること、そしてそれによって得たデータを生かして『育てる』ことが得意なヒーローだったらしい。

グラントリノ同様、表立って色々活躍してるわけじゃないから、そこまで知名度はない。

また、もう10年以上前に引退してしまっている。当然ながらビルボードにも載っていない。

ただ、ヒーロー資格を返上しているわけじゃなかったから、今回雄英からお呼びがかかったんだそう。

その人の解析能力は驚異的の一言であり、時にはたった1回の戦闘訓練のVTRを見ただけで、単純な身体能力から『個性』に至るまでを丸裸にし、それをさらに強化するための効率的なプランを即座に導き出すことができたという。

しかもそれは、『個性』によるものではない。自身の膨大な知識と、優秀な頭脳によって導き出すものだということから、さらに驚かされる。

何でそんな人が、ほとんどその存在を知られてないんだ……あまつさえ、引退なんて……

「その辺は俺にもわからねえ。案外俺みてえに、何かの目的のためにヒーロー資格を取ろうと思って、それが終わったらもう興味ねえって感じだったのかもしれないな。ともあれ、その解析の達人に雄英は今回、新学期早々『敵』に襲われたお前達の『解析』と、それをより強くするためのプランの策定を依頼した。それで、今まで学校が集めたデータに加え、あの『体育祭』でそいつが直々にお前らを観察して得たデータがそれだそうだ」

「あの場において……見ていたんですか……？」
「そうらしいな」

だからって、たった1日、数時間僕らの動きを見ていただけでここまでのものを作り上げるなんて……体育祭での露出次第でデータの出来は当然違ってるだろうけど、それにしただって別格だ。

けれど、同時に頼もしくもある。これだけ、自分も学校もわかっていないところまで丸裸にしたデータがあれば、そしてこれを元にもっと強くなる手段を考えてくれるっていうんであれば……

(僕は、もつと、もつと先に行ける……！)

そんなことを考えて、自分の中にやる気が燃え上がるのを感じていた時、ふとグラントリノが思いだしたように、『ああ』と呟いた。

「ただ、俺よりは世間に出てた面もあるみてえだから、検索とかすりやヒットするかもしれないねえな……ほれ、何だった……今はやりの『ヤホー』とか何とかで」

「いえ、名前違いますし、ネタだとしても大分古……あ、じゃあ調べてみます」

丁度休憩中だしてことで、スマホを取り出して検索かけてみる。

……あ、少ないけどちゃんとヒットした。グラントリノよりは多いな。

ええと……『トレーナーヒーロー』アナライジユか……まさにつて感じの呼び名だな。

本名、幾瀬叶恵^{いくせかなえ}。年齢不詳……まあ、女性ヒーローにはよくある。

え、雄英OGなんだ？ あ、写真ある……うわ、すごい綺麗な人だ。

……？ でも何だろこの感じ、見覚えがある……というか、誰かに似てるような気が……

個性……うーん、載ってないな………ん？ 何だろコレ？

『芸能・ゴシップ』のジャンルでもヒットしてる。有名人と結婚でもしたのかな………つて……

「……え、!？」

「ん？ どうした小僧」

「い、いやあの……今ちよつと、件の『アナライジユ』のこと調べてたんですが……ちよつと衝撃的な事実というか、情報が……」

こ、この昔の週刊誌のバックナンバーっぽい記事、コレ……

どうやらあんまりメジャーじゃない雑誌らしくて、そんなに知られてないみたいだけど……『アナライジユ』が結婚した相手っていうのが……もしこれが本当なら……！

「〇〇年×月、栄陽院コーポレーション社長・栄陽院豊氏と結婚し、改姓……ということは、今は『栄陽院叶恵』で……つ、つまり、この人……！」

☆☆☆

「ああうん、そうだよ？ トレーナーヒーロー『アナライジユ』は、私の母さん」

『やっぱり!? え、どうして教えてくれなかったの栄陽院さん!?!』

「いやだって聞かれなかったし……それに、本人あんまりそういう感じで騒がれるの好きじゃないタイプだからさ」

『そ、そっか、ごめん……無遠慮だった。で、でもびつくりだよ、栄陽院さんのお母さんが、プロヒーローで雄英OGで、しかもあの体育祭に来てたなんて……』

「あり、そこまで知ってたんだ？ あーまあ、その通りだよ……なんか、私らもつと強くするために雄英から雇われて色々……アナライザー兼アドバイザーみたいなのやってんだって。これからもちよいちよい観察してデータ更新しつつ、サポートしてくれるみたい」

『そうなんだ……すごいな、そんなヒーローが面倒見てくれるなんて、心強いよ。ていうか、ひよつとして栄陽院さんがあれだけ教えるのが上手いのや、僕の体から『課題』を見つけ出すのが的確だったのって……』

「ご明察。母さんから色々叩き込まれてるんだ。そんなわけだから……その母さんが作ったデータ、思う存分活用しちゃって……あ、ごめん、もう休憩時間終わるわ。じゃあね」

『あ、うん。ありがとう栄陽院さん。それじゃ』

——ピツ（通話終了）

なんか、緑谷がどうやら母さん作成のデータについて、どういうわけか知ったらしい。さらにはそこから、私が母さんの……『トレーナーヒーロー・アナライジユ』の娘だったことも。

まあ、大つぴらに言うようなことじゃないとはいえ、そこまでぎちぎちに隠すつもりもない話だから、そのへんは別にばれてもいいんだけど……母アナライジユさんが作ったデータの話は、極力生徒には伏せてく方針だったはずなだけだ……アイツどこで知ったんだろ？

まあいつか、絶対隠さなきゃいけないことでもないし……最終的にはそれを伝えるかは現場のプロの判断にも任されてるしな。

ちなみに私は母親のことだから最初から知ってたが。

なんか、ヒーロー科（A組、B組両方）全員に加えて、個人的に伸びそうだと思うたそれ以外……普通科とかサポート科についても、何人か勝手に見て『解析』して報告してるとかなんとか……相変わらず自由な人だ。

私の方は、午前中に早速コスチュームの改善案について、そういう方面に明るいサイドキックの人達も一緒になって考えて……色々まとめたものを書類に起こして、あつという間に業者に申請してもらった。

その際、繊維を操るベストジーニストの個性『ファイバーマスター』の応用で、メジャーも何も使わずにあつという間に私の体のサイズを測ってしまったのはすごかったし、助かった。『個性』も色んな使い方があるんだな、ホント。

……似たようなことが出来る人を1人知ってるが……できればあのDS……げふんげふん、あの人のお世話にはなりたくないというか……ぶつちやけちよつと苦手というか……

で、その際、業者に私はコスチュームを預けてしまったので、事務所から貸し出される運動用の服を着て、その後の基礎トレに参加したんだが……もれなくデニム地なのね、やっぱ。

いや、着心地よかったし動きやすいし、いいんだけどさ。

なお、サイドキックの人達からは、『背が高いし足も長いから似合う』って絶賛された。

……うん、まあ……普通にうれしいかな。

で、ここでも『ファイバーマスター』大活躍で……私の動きで無駄が多い部分とか、ここはこうした方がいいっていう指摘なんかを、私の着てる体操服の繊維を操ってやってくれるんだよね。

実際に体を動かしてくれるから、すげーわかりやすい。ためになる。

教え方も無茶苦茶上手くてずっと頭に入ってくるし……流石、不良の矯正はもちろん、後進の指導全般に力を入れている実力派だけはあるな。

大げさじゃなく、今日一日でぐっと動きが改善された気がするよ。午前中はその、コスチューム関連と基礎トレで終了。

早めに昼休憩に入らせてもらって、事務所のシャワールームで汗を流した。その後はまた別なデニム地の服を貸してもらって（いっばいあるんだなやっぱ）、それに着替えた。

そして、その後に昼食もとった。事務所に食堂あるんだな……さすがトップランカー、シャワー室といいランドリースペースといい、設備もどれも豪華だなあ。

……オフィスに併設する形で、理容スペースまであるとは思わなかったけども。ここで髪切る人とかいるの？

で、食堂で昼食（ハンバーグカレー大盛り）を食べた後、昼休憩の残った時間で、午後の座学の準備をしてたら、緑谷から電話がかかってきたわけだ。

それで、それも終わったってことで、午後からは私は座学である。ヒーロー活動についての基礎知識や、実際の現場で必要となる事務的なスキルについても、この職場体験中に学ぶことになるのだ。

特に私は今回、そのあたりのノウハウを得ることに注力したいと思ってるので、座学には気合を入れて臨みたいと思う。

自分自身のヒーロー活動はもちろん……誰かを支えるためのスキルって奴を、特に。

後進指導に力を入れている事務所らしく、『講義室』なんてものもあり……大学の講堂とかを小規模にしたような感じの部屋だった。

そこで教壇に立つベストジーニスト。さすが、様になってるな。

「そもそも我々ヒーローという職業は、国から報酬を受け取っているため、分類上は『公務員』にカテゴライズされる。しかしその成り立ちゆえに、他に公務員とされている職業……市役所等における一般事務職や、警察官などとは全く違う体制になっているの言うまでもない」

本職の先生みたいに、ホワイトボードを適宜使って板書を行い、説明していくベストジーニスト。私もそれを、聞き逃さないようにしながら、適宜ノートにまとめていく。

「基本的にヒーローの行う実務というものは、犯罪者等の取り締まりが主だ。事務所ごとにスタイルは異なり、積極的にパトロール等を行う所もあれば、事務所に待機して電話等による通報があるのを待つて動き出す所もある。規模が大きくなるほど、普段から積極的に動いて犯罪抑制に乗り出す傾向があるが、一律というわけではない。売り出し中のヒーローなどは特に、積極的に街に出てパトロールを行い、事件を解決して顔売ろうとする場合も多いからな。ちなみに、この事務所はその複合型だ。事務所に常に一定の人員を置き、シフトを組んでパトロールを行っている」

ベストジーニスト自身も、事務所にいるよりは時間を見つけてパトロール等に出ており、積極的に市民に姿を見せて安心させるために動く方だそうだ。

さつきも言ってたもんな。市民の安心を守るのもヒーローの重要な仕事だって。

私もコスチュームが届いたら、パトロールに参加することになる。市民を安心させるのに、話題性があるヒーロー（の卵）が姿を見せることは意味を持つから、だそうです。

同時にそこで、市民に好かれるヒーローであることの意味、その重要性も学ぶようにと。

「ここまでがヒーロー独自の活動なわけだが、当然ながらヒーローは常に個々で動いているわけではない……必要に応じて他のヒーローとチームアップを行ったり、また要請があれば警察に協力して犯罪への対処に当たることもある。特に後者については重要つながりだな……世間では我々ヒーローは正義の花形のように言われているが、その実できないことは多い。『個性』を使った戦闘による犯罪者の制圧を許可されてはいるが、そこまでだ。それを逮捕し、取り調べを行い、起訴して刑罰を下すところは警察及び司法機関の領分だ。我々にそこまでの権限はなく、ゆえに他の公権力とは関係・協力を密にして

いかなければならない」

ふむふむ、確かに。

この超人社会、何も知らない人からは、警察とかは日陰者扱いされることも多いが、決して軽視していい存在じゃない。我々ヒーローにとっても、大切なパートナーってことだ。

「また、他の公務員と大きく異なる点として、我々ヒーローには『副業』が許されている。種類は様々あるが、例えば私の事務所では、雑誌やアパレルメーカーとのファッション関係の業務の他、タイアップ商品やプロデュース企画なども行っているな。その派生、ないし関係で、CMやTV出演などを行うこともある。君も一度くらいは見たことがあるかな？」

「あ、はい……CMは、ゴールデンタイムのTVなんかでも流れてますよね」

「うむ、ありがたいことにな。良くも悪くもタレント性のある職業のため、有名になればなるほど、多くのヒーローがこういった副業を持ち、メディアへの露出もその分増えていく傾向にある」

確かに、大体のヒーローってそういう感じで、いろいろグッズ出したり、CM出てたりするな。

オールマイトのそれなんて、数えるのも億劫になるくらいだし（緑谷だったら把握してるかもしれないが）……プレゼント・マイク先生はラジオのMCとか、音楽イベントではDJとかやってる。

八百万が行ってる先のスネークヒーロー・ウワバミは、化粧品とか整髪料とかのCMに出てたと思うし……っていうか、こないだ緑谷と言った直売会も、いろんなヒーローの副業による商売が一堂に会している場だよな、よく考えたら。

ファンサービスも一切しないと言われているエンデヴァーも、ブランクコーヒーとかのCMに出てるらしいし……こういうのは有名になればなるほど、切っても切れないもんなのかな。

全くのゼロなのは……相澤先生とか、アングラヒーローくらいか？「さて、ここまでヒーローの仕事について説明してきたが……こと君にとってはここからが本番、と言ってもいい部分に入るだろう。心し

て聞きたまえ」

と、ベストジャーニストが、何やら気を引き締めるように言う。

「今説明させてもらったものの他にも、細かく見れば様々な『仕事』がヒーローには存在するが、目に見えるそれだけを行っていけばいいものではない。表には出てこないような裏方の仕事……より具体的に言ってしまうえば、事務仕事のようなものも、ヒーローには当然存在する。というより……そういった仕事こそ、ヒーローの仕事からは切っても切り離せないものだと言える。先程私は、ヒーローには国から報酬が支払われると説明したが、その仕組みがここに関わってくる」

そう言っただけでベストジャーニストは、手に持っているバインダーから2枚の紙を出して、私の目の前に置いた。

その2枚のうちの1つは、どうやらヒーローが行った仕事について、色々な必要事項を記入して公的機関に提出するための書類の様式のようなものだ。ヒーロー名や事務所の名前、協力した事件の名称や概要、協力内容についてなどを記載する欄がある。

もう1つの方は、その様式に実際に事件への貢献等の報告内容を記載したものらしい。

過去にベストジャーニストが解決に貢献したらしい事件の内容や、そこでどういった活動をしたか、みたいなのが書かれて……あ、でも個人情報保護のためか、個人名とか施設名なんか黒塗りで消されているな。事務的というか、お役所仕事ちつくだ。

「何か事件に関わるごとに、内容を記録し、こういう書類を作成して逐一提出する必要があるわけだ。イメージと違う、地味な仕事だと思っただけかな？」

「いえ、大事なことだと思います。相応の権限を持たされているからこそ、こういうことこそ、省いたりせざるべきなんです思いますし」

「ふむ、最近の若者は、こういうことを軽視する傾向があるんだが……いい意識だな」

こくりと頷いて、ベストジャーニストはさらに何枚かの同じ用紙を置いて見せる。

「こういった書類を作成し提出・申告するところまでがヒーローの仕事。その後、専門機関による調査を経て貢献度が確定され、それに応じた給与が指定した口座に振り込まれる仕組みだ」

「歩合、つてことですね」

「そういうことだな。そして、報酬の請求に限らず……ヒーローの仕事には、何においてもこういった裏方の仕事がついて回る。事務所仕事である以上、会計処理や経費の精算、『副業』関連の打ち合わせ全般や契約業務などもそうだな。もちろん、ヒーロー事務所の経営自体も決して少ないとは言えない仕事量だ。時にそれらは、ヒーロー活動そのものを大きく超える労力を必要とする。さて……今ここに並べたこれらの資料を見て、何か気付いたことはないか、ダイナージャ？」

「そう言われて私は、机の上に並べられた、計5枚の資料と……ホワイトボードの板書を何度か見比べて、気付いたことを述べる。」

「……それぞれ筆跡が違いますね。ほとんどは印刷ですが、手書きの部分……これらの資料はどれも、ホワイトボードのベストジーニストの字とは筆跡がかなり違いますし……共通しているのは、書類の書き方そのものを除けば……末尾についている、署名と押印ですか？」

「その通り。これらの資料は、私のサイドキックで、報告事務を担当してもらっている者が書いたものだ。ヒーローは自分のヒーロー活動に専念し、こういう雑務はサイドキックや専用の事務員を雇って担当してもらおう……こういう運営形態は今やかなりポピュラーだな」

「ポピュラーというのと……そうでない事務所もある、ということでしょうか」

「もちろんだ。中には、仕事は1から10まで自分が担当しなければ気が済まない、安心できないという信条の持ち主や、駆け出しであるがゆえにそういう形態をとる財政的余裕がない者、各地を放浪し、一定の拠点を持たないフリーランスのヒーローなどもいるからな」

「はー、なるほど……個人個人で様々なのね。」

「基本的に書類仕事には特別な資格はいらないし……英雄高校でも、事務所経営などを専門に学ぶ『経営科』があるように、それを見据えて能力を磨く者も多いため、需要と供給は相互にある。まあ、一部例

外的に、ヒーロー資格やその他特別な資格を持たなければ扱えない書類や情報もあるが……そのくらいはヒーロー自身がやってもそこまで大きな負担にはならない。覚えておくといい」

そして、と続ける。

「この職場体験で君にメインで教え込むのは、こういった、ヒーロー及びその活動を支えるための裏方仕事の知識及びノウハウだ。それも、学校のヒーロー基礎学やヒーロー情報学で学ぶ内容とは重複しない、より実践的で、実際の現場に即した内容だ。自分のためにもなるのはもちろん、将来どこかの事務所のサイドキックとしてデビューした時にも、有用性をアピールする大きな武器になる。率直に言って、下手な荒事よりも余程ハードなメニューになるが……見事こなすことができるれば、今よりも大きくステップアップする未来を約束しよう。しつかり付いて来たまえ」

いいね……実りある7日間になりそうだ。

色々と学ばせてもらおう。将来、こういう仕事とかにおいても……
尽くしたい相手を支えることができるように。

その日はコスチュームがないこともあり、様々な座学で終了。

私には、事務所に内設されている客室の1つが貸し出される形となっていたので、この1週間はそこに寝泊まりする形だ。

夕食も食堂でいただいた後、そのまま解散になったので部屋に戻る。寝る前に簡単に今日教わったことの復習をしてから、寝心地のいいベッドで横になった。

ちなみに夕食はカルボナーラスパゲッティをこちらも大盛りで頼んだ。緑色が足りないと思ったからサラダもつけて。

昼もそうだったが、私の健啖家っぷりに驚いてる人が多かったな。

第47話 TS少女とパトロール

職場体験、二日目の朝。

今日も今日とて、私は……ベストジーニスト曰く『ピッチリ』気を引き締めて業務に励むことになるのだが、その職場での朝礼が終わった時のこと。

「ああ、それとダイナージャ、改良したコスチュームが届いている。本日的基础トレからそれを着て行うとしよう、この後更衣室で着替えて来たまえ」

「はい……はい!？」

早くね!? 修理に出したの昨日の午前中……つてか昼前くらいだよね!? まだ20時間くらいしかたつてないよ!？」

「業者も気合を入れたんだろう。私の所は元々得意先だったのに加え……依頼されてきたのは、今何かと話題になっている君のコスチュームだからな。時間を短縮するために中途半端な仕事をするような業者ではないのは保証するから、安心するといい」

「はあ……わかりました」

そういうことなら……まあ、びつくりはさせられたけど、性能がきちんと注文通りにまとまってるなら問題ない。早速着せてもらおう。

……慣れる時間も必要だからなあ……皆さんと調子に乗って、大分弄ったから。

で、それに着替えて基礎トレ用の訓練室に來ると、皆さん『おおー!』と感心するような声と、拍手で持って迎えてくれた。

「いいじゃんいいじゃん! すごく似合ってるよ!」

「うーん、凛々しい……これが男装の麗人ってやつか。女だけ惚れそう」

「かわいいしキレイだしカッコいい! カッコ綺麗!」

「ああ、よく似合っているな……デニムならさらに似合うと思うのだが、残念だ」

なんか、ここまでくると……すっごい褒められて照れる。

皆さんどうも……あ、最後のはベストジーニストさんですねわかります。

そんな、ちよつとこつちが恐縮してしまうような褒め言葉の嵐の中には、こんな言葉も。

「うんうん……やっぱこつちの方が似合うね。女軍人！ もしくは女騎士？」

「昨日のは『オラァ！』って感じだったけど、今日はコレ『凜ッ！』って感じだね！」

私のヒーローコスチューム、当初の改造学ランからかなり手直し……というか、ほとんど別物とっていいものに変更されている。もちろん、学校にも申請は提出・報告済みだ。

何から何まで、ベストジーニスト事務所の事務の人がやってくれた。感謝しかない。

で、その新しいデザインだが……今の人が言っていた通り、『軍服』である。

黒地に金色の縁取りをアクセントにした上着。学ランの生地を追加工することで形にしたらしいそれは、より重厚で、しかしよりスタイリッシュな仕上がりになっていた。見た目にも力強さを残しつつ、しかしながら『乱暴者』な感じは微塵もない。

丈は前に比べればかなり短く、足の付け根くらいまでしかないが、動きやすさという面ではプラスだ。

すらりと伸びる同色のズボンは……こちらは学ランの時とさほど大きな違いはない。戦闘時には格闘主体になる関係上、今回もスカートは避けた。

胸元からは相変わらず白いコルセットインナーが覗くが、デザインはワイシャツにより近づいている上、首元にはネクタイが見えている。これがより清潔感というか、整った感じを演出する。

無論こちらも性能はそのままかより向上しているので、防御力も高いし、胸が揺れるのを防いでくれるので動きやすい。

学帽は軍の制帽に変わったが、見た目的にあんまり変わりはない。

機能（無線やディスプレイバイザーなどを内臓）もそのままだ。腰回りにはポーチバッグも相変わらずある。

これらに加えて、追加装備として、トレンチコート型の装備が用意されている。

そのまま着れば防具兼防寒具になるし、肩の部分のアタッチメントを使うことで、マントみたいな形で、羽織るように装着することもできる。

丈も長いので、以前の長ランのように、翻して初動を見えなくするために使うもよし、防弾・防塵・耐熱の性能を生かして、敵陣に切り込むための盾として使うもよし、使い道は多い。

総合して、今までは不良っぽくて『オラオラア！』な感じだった私の服装は、凛としてスマートで、清潔感溢れる感じにまとまっていた。無論、動きやすさその他の性能はそのままか、むしろ改善されている。

これなら、力強さや頼もしさを与えることはあっても、威嚇するようないことはないだろう。

温容、とはまた違うかもしれないが、もともと私は背が高く、体型も細身だが女性にしてはがっしりしてる方なので、かわいい系の服はあまり似合わないんだよな。なので、可愛さより清潔感を重視した形だ。

たった一日でここまで劇的に変えられるとは……やはり本職、ないしこういった分野に一家言ある人達のセンスは違うな……。私じゃあ絶対に出てこなかった発想なものな。

着心地も微妙に違うから最初は違和感あったけど、あつという間に今まで通り動けるようになったし、ベストジーニストが指導してくれる、より無駄がなく上手く体を使った格闘術にも合う。

ただ一点特筆するなら、追加装備として発注し、これも見事に作ってもらったトレンチコート……これはあまり、ベストジーニストには好評じゃなかった。デザインじゃなく、用途が。

「防具・防寒具として使用するのには構わないだろう。だが、先に君が熱弁していた、攻撃の初動を読ませないためにあえて大きく翻して使う、という使い方は……あまり賛成しかねる。その点だけ見れば利点

足りうるが、衣装の一部がひらひらと大きく動くのは、弱点にもなりやすい」

「弱点、ですか……」

「例えば、近接格闘に慣れている者であれば、その部分をつかんで引つ張って体勢を崩してくることもあるだろう。せまい屋内での戦闘ではあちこち引つかかかってしまうだろうし……熱や冷気を使ってくる相手であれば、炎が燃え移ったり凍り付いてしまったりすることもある」

なるほど、もつともだ。

まあ、この衣装は耐熱とかもあるから、燃える心配はそこまで……いや、温度とか相手によるよな。あまり強力な熱とかにさらされたら、耐熱繊維でも耐えられないってことはあり得るから。

「君は折角向上心豊かなのだから、そういった面は今後、技術でカバーすることも学べばいい。限度はあるが、意外と小手先の技で何とかなるものも多いぞ」

そう言つて、正面から構えていたベストジーニストは、相対している私に向けて……突然、何の予備動作もなしに拳を放ってくる。

驚きつつもそれを受け止めようと、とっさに私は手を前に出して……しかし、その拳は当たることなく寸止めされていた。最初から当てるつもりはなかったようだが、それよりも今のは……

『無拍子』と呼ばれる技法だ。格闘術において、体の各部の動作から次の手を予測するのは基本的な技能だが、それを狂わせるのに役立つ。他にもフェイントなど、物理的に視界を遮らなくても、こんな風に技術で相手のテンポを崩すことができれば、様々に応用が利く。まあ、私は接近戦はそこまで得意ではないので、こんな風にまさしく『小手先だけ』の拳になってしまうがね」

ベストジーニストはしれつとそんなことを言うが……その『小手先』だけでも使えるヒーローがどれだけいることか。この人、本当に多芸だな……それでいて、自分の『個性』を鍛え上げ、誰にも負けな得意分野つてものをきちんと確立している。

「いわゆる喧嘩殺法とはいえ、君は最低限の接近戦技能は十分持つて

いる。ならば、無理に武術的な動きを覚え直すよりも、現状のそれから無駄な動きや力みをできるだけそぎ落とし、その上でできることを増やすのがいいだろう。そもそも君が最終的に目指すヒーロースタイルにおいて、前線において君に要求されるのは、直接的な戦闘よりも、いわゆる『衛生兵』のような役割だからね」

「単純に敵を倒す能力よりも、より上手く戦場を渡り歩いて、味方を援護したり、要救助者を回収するための技能を重要視して覚えたほうがいい、ということでしょうか？」

「理解が早くてよろしい。無論、だからと言って戦闘技能そのものを疎かにしていいわけではないし、そういった能力が伸びることでできるが増える場合もあるから、無理のない程度に食欲に力は欲していくべきだろう。そのあたりのつり合いの取り方なども、簡単にだが教えようと思う」

「はい、よろしくお願いします」

午前中は基礎トレと、新コスチュームの慣らしで半分ほど使い、もう半分は座学の時間だった。

そして午後は、職場体験らしくプロの現場に出ることになった。

といつても、パトロールに同行する程度だが。まあ、そりやそんなにあちこちで犯罪なんて起こったり、ましてや『敵』なんて出るものでもないしな。

町を歩いていると、流星はNo. 4ヒーローの人気ということなのか、あちらこちらでキャーキャー声が上がって、女子高生とかが遠巻きに見ていたり、手を振ってたりする。ベストジーニストも、適度に手を振り返したりしてそれに応えていた。

時にはサインを欲しがったり、話しかけてくる子もいたりするの、そういうのも適度に相手をしていた。邪険にはせず、かといつて仕事に支障もきたさない範囲で。

全体的には、遠巻きに見てる子の方が多い気がしたな。やっぱりあまりに有名で人気な人だと、近寄って話すよりも『見るだけで満足です』みたいな考え方になるんだろうか？ 緑谷とかなら、恐縮しつつ

も我慢できなくて思いつきり話しかけそうだけでも。

こうしたパトロールや、それに伴うファンサービスなんかは、犯罪の抑制に加えて、ヒーローの存在を市民に示すことで、その心を安心させる。座学の時にベストジーニストが言っていたことが、実際にこうして起こっているんだなって、目で見て理解できた。

で、それに加えて今日は私が一緒にいるということ、二度見するようには驚いてこっちを見てくる人も多かった。自分で言うのもアレだけど、何だかんだで私も有名人だしな、今んとこ。

まあ、自意識過剰かもしれないけど、一応覚悟はしてた。休み明けの電車がああだったから……サイン欲しがったり、写真撮りたがったりする人がいるかもしれないってのは。

……自意識過剰であってほしかったけど。

「写真一緒に取ってもらってもいいですか!?!」

「ずるい私も! いいですか!」

「え!? あ、はい、じゃあその、順番で……」

「ファンです! サインください!」

「わー、ヒーロー名もうあるんですね!」

『『ダイナージャ』っていうんだ! あ、僕にもサイン……』

「あ、はい、こっちも順番でお願いしますね?」

「コスチュームすごいですね! 軍服みたい、かっこいい!」

「男装の麗人ってやつ? 凛々しい! カッコ奇麗!」

「私女だけど……惚れそう」

「あはは……ありがとうございます」

「どうしてベストジーニストと一緒に? サイドキックになったんですか!?!」

「ずっとこの町にいるんですか!?!」

「いえ、職場体験です。1週間くらい……」

まだプロデビューどころか仮免すら持っていない有精卵にここまで喜んでももらえると。嬉しいような気恥ずかしいような。

まあ、応援してくれるのは嬉しいことなので、きちんと対応してさばいて……

「ごつち向いて決めポーズ取ってください！」

「背高けー……何センチあるんですか!？」

「何食べたらそんなに大きくなれますか!？」

「決め台詞お願いします!？」

「どんなヒーローになるんですか?」

「劇団に興味とかありますか?」

「18禁ヒーローになるって本当ですかツ!？」

「踏んでください!」

「冷たい目で罵ってもらっていいですか!」

「今日はサービスシーンあるんですか……ハアハア……」

(ン~~~~聖徳太子イ……!)

さばききれん。助けて。

てか決めポーズって何? 決め台詞って何? そんなもん持った

覚えないんだが……

もしかして……『くつころ』じゃない……よな?

あと最後の方ヤバいのが混じってませんかね。3人ほど。

最終的に、ベストジーニストが助け舟出してくれて『まだ仕事があるからこのへんで』って穏やかにファンの子達を遠ざけて、帰らせてくれた。

ちなみに、最後の方の変態は眼力で黙らせていた。さすがである。

黙らなかつたら通報も視野に入れていたそうだ。

「初日から大変な人気だな、将来有望なことだ。1人1人邪険にしないのも高評価だぞ」

「その代わりに割とがつつり時間もとられましたけど。ああいうファンとかマスコミのさばき方なんかも授業で教われればいいんですが……」

「それならもつと後の方のカリキュラムにあったはずだな。本来ならそのくらいのタイミングでも困らないんだが……体育祭上位入賞者はこういうことになることも多い」

授業で教わる前にマスコミやファン対応をすることになるわけね……思わぬ落とし穴だ。

「トップヒーローを目指すなら避けては通れない道だ。得難い経験として糧にするくらいに考えておくといい。さ、まだまだ回るところはある、パトロールを続けるぞ」

「はい、わかりました」

結局この日のパトロールは何事もなく終わった。

ただ、パトロールは終わったのでさあ帰ろうか、って時になって……予想外の出来事があった。

ベストジーニストが、事務所の皆にお土産を買って帰るからちよつと寄り道する、と言うので、近場にある大きなデパートに入ることになった。

マメでいい上司だな、なんて思いつつ、入り口の自動ドアをくぐった時のこと。

「べ、べべべべべベストジーニストオオオ!？」

あ、超聞き覚えのある声。

丁度死角になってたので、ちよつと横にずれて見て見ると……そこには、予想通りの人物が。

新しくなったコスチュームに身を包んだ緑谷が、まさしくヒーローを目の前にしたちっちゃな子供のように目を輝かせて立っていた。驚きと緊張のあまり硬直しているようだが。

「あん？ 何でえ、こんな大物が居たってんなら、やんちゃする連中が少ねえのも道理だな」

そしてこっちは聞き覚えのない声だ。

緑谷の隣にいた、ヒーローコスチュームと思しき服に身を包んだ、かなり小柄なおじいさんが、ベストジーニストを見てそうつぶやき、ため息をついていた。

その姿に見覚えはないが……ここで緑谷と一緒にいるってことは、この人が、緑谷の職場体験先のヒーロー『グラントリノ』か？ かなりお年を召した方のような。コスチュームを着てるってことは、一応現役なんだろうが。

「す、すごい、こんな場所で会えるなんて……さ、サイン貰っていいで

すか!？」

「おや、君は雄英体育祭の……ふむ、もちろん構わないとも。ただ、あまり大声で騒ぐと他のお客さんの迷惑になるかもしれないから、そこは注意するようにね」

「は、はい、すいません……」

注意されてしまったことにちよつと落ち込みつつも、差し出されたサインを宝物のように（彼にとっては宝物で間違いないだろうが）抱き抱える緑谷は、その直後、はつとしたように、

「あれ、栄陽院さんも！ そっか、職場体験先が……つてどうしたのそのコスチューム!? 前に見た時と全然違うけど……」

「ああ、うん。ちよつといじつてさ。前より性能上がってるし、使いやすくなってるよ」

「そ、そうなんだ……すごく似合ってるよ。かっこいいのとキレイなのがどっちもあって……うん」

「そう？ ありがとう。てか、緑谷は何でここに？ 確か、山梨の方に行ったんじゃないかなかったっけ？」

「あ、うん。ちよつと遠出することになって」

その後もう少し話したけど、どっちも用事の途中だったってことや、ベストジーニストに加え、体育祭1位と3位がひとところにいることもあって野次馬が集まってきそうだったので、さっさとその場は解散した。

その直前に聞いた話だと、あと何日かこの周辺に出張している予定らしい。

都市部の方が犯罪が多くて、そういうの相手の経験を積めるからだろうだ。

それであのおじいさん、ため息ついてたのか。ベストジーニストのパトロールのおかげで、このへんでいざこざさっぱり起こってなかったから、期待外れだったんだらうな。

そしてそのベストジーニストも、あのおじいさん……『グラントリノ』のことは知らなかった。

ただし彼曰く、『たたずまいや身のこなしからして只者ではない』と

のこと。何者なんだろう、ホントに……？

第48話 TS少女と事務仕事

「ダイナーじゃー！ 見て見てコレ！ すごい話題になってるよー！」
「そうそう、あちこちのニュースサイトや掲示板に写真とか上がってるし。あーどれもよく撮れてるなー！ またファンが増えるね！」

2日目の終わり、事務所に帰った後に、『ジーニアス』のサイドキックの人たちにそんなことを言われて、パソコンやスマホの画面を見せられた時の一コマである。

何かと見てみてみたら……私がベストジーニストとパトロールしている様子が、ネット上で話題になっていたのだ。まだ体育祭効果というか、熱が抜けてないから、こういうのも大きく取り上げられちゃうってことかね。

ただしそれは私に限った話ではない。

部屋に戻って、興味本位でエゴサと一緒に色々調べてみたら、雄英職場体験絡みの記事をあちこちに発見できた。

さつき見た私のそれもそうだし、パトロールの途中で会った緑谷の記事もあった。

どうやらあの後、チンピラ敵の小競り合いを鎮圧したらしく、『雄英体育祭優勝者のデビュー戦！』というタイトルで話題になっていた。突発的な事件だったらしいから、取材とかはなかったようだけど、警察に引き渡す時の緑谷、コッチコチに緊張してたな……あんなんでメディアの前に出たらどうなるやら。

さらに、轟と爆豪の2人についての記事もあった。

2人ともエンデヴァーの事務所に行ってたはずだな、と思ったんだが……なぜかそこに上がった記事は、『エンデヴァーが保須市に出張してる』というもの。それに付け加えられる形で、『体育祭で活躍した1位と3位のコンビ、職場体験でエンデヴァーと共にパトロール』というのが。

保須……なるほどね。

どういう理由でそこに行ってるのかは……なんとなくわかるな。

……飯田の奴も保須の事務所に行ってたっけな。

こっちはあまり評判にはなっていないようだが。

まあ、決して有名とは言えないヒーローの事務所だし……飯田のコスチューム、顔が隠れるからな。露出してる特徴が足のあのエンジン部分だけじゃ、わからなくても無理はない。

他の男子だと、峰田や切島、常闇がちよいちよい話題になってるな。

峰田は豪語してた通り『Mt. レディ』の、切島は確か……任侠ヒーロー『フォースカインド』って人の所に行ってたんだっけ？ っていうか、鉄哲と一緒にいるみたい。職場体験先まで被ったのかあの2人。

常闇は九州の方で、No. 3ヒーロー『ホークス』の事務所だったか……何か振り回されてるっぽいな。

麗日は『ガンヘッド』のところで、梅雨ちゃんは『セルキー』のところでそれぞれ頑張ってるみたいだ。クラスの女子が入ってるグループSNSで夜、色々話したりするので、その辺は調べなくてもよく知ってるんだよな。

耳郎なんか、今日はちよつとした事件の解決に貢献したようだ。

やったことは、『イヤホンジャック』を使つての索敵と、避難誘導くらいだったらしいけど、立派にヒーロー活動やってるじゃんね。

芦戸や葉隠も同じ感じだが……なんか八百万だけ、心なしか元気がない感じだったな。

いや、元気がないというより、『これでいいのか』的な戸惑いがあったような気がするとか……あいつが行ってたのって、スネークヒーロー・ウワバミの事務所だったな？ 何かあったんだろうか？

メディアにもよく出てる人だったと思うが……インタビューでも受けたか？

あと、当然のように私のコスチュームについても話題になってたな。

前の改造学ランを知ってる皆は『いつの間に変えたの!』って驚いてたけど、同時に似合っているとも言ってもらえたのでよかった。さすがアパレル関係のカリスマ監修のデザイン……素人の私が考えた不良チックなファッションよりよっぽど受けがいい。

けど……アレ、そんなに乱暴そうに見えたかなあ……？
ちよつとそういうワルっぽいところがあつた方がかつこいいん
じゃあないか、とか考えていたあの頃の私の価値観は、一般から外れ
ていたのかと、画面に並ぶ評判を見ながら少し落ち込んだ。

☆☆☆

職場体験3日目。

今日も今日とて職場体験。

昨日と違い、簡単な基礎トレを済ませた後、今日は午前中からベス
トジーニストとパトロールを行っていたんだが……こちらも昨日と
違って、今日は事件に出くわした。

最初に出くわしたのは、バイクを使った2人組のひつたくりだつ
た。

見つけた瞬間に私に手短に指示を出した後、ベストジーニストが
『ファイバーマスター』の個性でそいつの服をきゅつと締め上げて動
けなくし、その場で確保した。

自分が着てる服に締め上げられ、バイクに乗ったままの姿勢で空中
で固定されている2人の姿は中々滑稽だった。

何かの雑誌では『人が服を着ている限りは逃れられない超強力な個
性』とか言われていたが、まさにその通りだなんて、この光景を見る
と思う。

その後、乗り手を失ったバイクは、徐々に減速しながらではあるが
車道を暴走してしまっているのを、私がひよいとかんで持ちあげて
止めた。こういうパワー系の労働は得意である。

スピード？ 爆豪や緑谷の方が速かったし、楽勝。

もともと、まさにこれから加速するってところだったのか、そんな
に出てなかったしね。

被害者の女性にバッグを返し、『ありがとうございます！』ってお礼
を言われて一件落着………ではない。

むしろここからが仕事である。

チラツ、とベストジーニストから視線をもらって、私は帽子に仕込まれている通信機を起動させ、『ジーニアス』の事務室に通信をつなげる。

「こちらパトロール中のダイナージャ。ジーニアス事件情報担当へ報告です」

『こちら担当。情報承ります、どうぞ』

「午前9時41分、場所は〇〇区[×]……路上にてひったくり事件発生。犯人は2名。手口は1人が運転する2人乗りのバイクで走り、もう1人が後ろからバッグをひたたくって逃走するもの。すでにベストジーニストが確保済みです。警察にも通報済み。書類作成をお願いします」

『了解、いただいた情報をもとに作成します。帰還後にチェックをお願いします』

以上、通信終了。

ヒーローが活動した際にやったことや、事件解決への貢献度などを公的機関に申告し、それに応じて給与が支払われるというのは、初日に座学で教わった通りだ。今の通信は、その一環である。

事務所によって、ヒーローによってそのやり方は異なるようだが、ベストジーニストの事務所では、こんな風に事務担当にその場で事務所に報告する、というのがメインのやり方だ。

ベストジーニストが事件に遭遇、ないし解決した際、同行しているサイドキック——今回は私である——がその顛末を通信で事務の人に伝える。

すると担当者は、あらかじめ用意してあるひな形を使用し、通信で聞いた内容から必要事項を拾って簡単に書類を作っていく。

場所はどこ、時間は何時何分、犯人は何人、罪状や手口はどんなもの、犯行の際に『個性』を使ったかどうか……などなど、それらを事務的に書き連ねていくのだ。

そして、パトロールから戻ったベストジーニストや、同行していたサイドキックがその書類を確認し、ここは正確にはこうだった、こう直したほうがいい、という校正・手直しを経て、最終的にハンコを押

した正規の書類が出来上がって、初めて事件は終了、となるのである。なお、その書類は後で1日々数日分をまとめて、定期的に公的機関に提出される。

座学の中で教わった内容にはこういうのも含まれていたもので、今これ幸いと実践させてもらったのである。

職場体験とはいえ、ベストジーニストの事務所の一員として事件解決に寄与できたような気分になれて、少しうれしかった。

ちなみに、さつきも言ったが、こうした『報告書の作成』にかかる作業の形式は、事務所によって、ヒーローによって異なる。

事務所に帰ってから書類を作り始める人もいれば、同行しているサイドキックが1から10までそういう事務を一任されている事務所もあるそうだ。

後からそういう仕事が残っているのはわかっているので、忘れないように必要事項をメモしていると、ベストジーニストから『行くぞ』と声がかかった。パトロールの続きだ。

午前中のパトロールでは、さつきのひつたくり事件の他に、もう1件事件が起こった。

建築現場からの資材の窃盗だったんだけど、大型トラックで豪快に盗み出しやがったもんだから……その馬力やら何やらのせいで、近場にいたヒーローも手を出せないようだった。街中を結構なスピードで暴走してるもんだから、下手に事故れば二次災害の危険もある。

しかしここでも『ファイバーマスター』無双。

歩道橋の上で待ち受けていたベストジーニストは、トラックの屋根に飛び乗ると、運転してる奴の服の繊維を操り、ハンドルを固定した上でアクセルから足を外させ、ブレーキを踏ませて緩やかに、安全にトラックを停止させた。

その後は、追いついてきたヒーロー達も加わって犯人は全員拘束。

ただその際、スピード出しすぎたおかげで荷台から結構資材が、それも大型鉄パイプみたいな大きくて重いものまで転がり落ちてしまっていたので、報告後にその回収を手伝った。

力仕事は得意なので、何本かまとめて運んでいたら、1本運ぶのにも苦労している他のヒーローの皆さんが唾然としてて……ちよつと目立ったな。

まあ確かに、大の男でもちよつと苦労する重さではあったかもしれないが。

そんな感じで午前中のパトロールが終わった後、一旦事務所に戻る。

そして、昼休憩の前に座学の時間になった。内容はズバリ、さつきこの事件にかかる書類作成。

既にサイドキックの人が作っていた資料に目を通し、実際に現場を目で見ている私とベストジーニストが手直しを行うというわけである。まだ記憶が新しいうちに。

内容の正誤のみならず、文体や言葉遣いにも気を使って『ピッチリ』整った書類を作るやり方を教わった。

1件目の事件の書類で要領を教わり、2件目の書類は私1人でチェックした後、コレでいいかどうかベストジーニストに採点してもらったのだが……大分直された。

紙、赤ペン先生ばりに真っ赤だよ……文才ないのかな、私。

1つ1つ、どうして直したほうがいいのか指摘され、それ自体はまあ、理由としては納得できるものだったし、これも将来のためと思えば苦ではなかったが……正直に言うところ『そこまで細かく?』とは思ってしまった。微に入り細を穿つ、って表現がびつたりだと思っただけだったのだ。

そして、それはきっちり見抜かれていたらしい。

「まあ、君が言いたいこともわからないではない。多忙を極める業務の中、書類の表現1つにここまで気を使う必要があるのか、と思っても仕方ないだろう」

「はあ……その、すみません」

「確かに、ここまで細かく気を遣わなくとも、おおよその意味が伝われば書類というものは受理される……ここまでするのは、私のこだわりも含まれている。それは否定しない」

だが、と続ける。

『このくらいはいい』『この程度でもいい』……そういう、率直に言つて『甘え』になるような考え方は、どこかで気の緩みを招く。いつしか、完璧でなくてもいいという考えが常態になってしまいかねない。それは、普通にヒーローをやつていく上ではよくとも……上を目指す者にとつて、あるいはそれと共に歩む者にとつては、決して許容してはいけない『墮落』だ。そういう意味では……体育祭の時に見た彼……爆豪という少年は、そこだけは評価できる」

「爆豪……ですか？」

「正直、私は彼のことは好きではない。『矯正』する対象として魅力的に感じてはいるがね。ただ……彼の、一切の妥協を許さず、常に『一番』を目指す姿勢は好ましく思った」

ああ、確かに……あいつ、他の誰が納得していようが、自分が納得できない結果なら、勝利すら意味がないとまで言い切つてるからな。

言動からはちよつと想像できないが、意識高い系の完璧主義者なのは……間違いないか。

「これは受け売りのセリフだが……『常に一番たらんとする者と、そうでない者。この差は特に、社会に出てから大きく響く』。それは何も、勝負事に限ったことではない。事務仕事然り、訓練然り……常に100点満点を追い求めるか、99点、98点で満足しているかは、小さいようで大きい差だ。君が何を目指すにせよ、誰と共に歩みたいと思つているかにせよ……覚えておくといい」

そう締めくくつたところで、本日の午前の部は終了。昼休憩と昼食の時間に。

そして午後、ベストジーニストはまたパトロールに出かけた。

今度は私ではなく、別なサイドキックを連れて。

私は今度は、事務所で待機しつつ、通信で入る事件情報を受け取る側の訓練だそうだ。

ベストジーニストやサイドキックの人が事件に遭遇した場合、その情報を今度は私が受け取り、それを元に書類を作るわけだな。

一応、私に入った電話は、聞き逃しがないように別なサイドキック

の人も一緒に聞いてくれるらしいので、安心ではある。気負いすぎず、気を楽しにして……しかし、さつき言われた通り、きちんと『最善』を目指す気持ちは心に留め置いて……

——TRRRR!!

早えよ!?

「は、はい、こちらジーニアス、事件情報担当直通電話!」

『私だ。早速だが事件に遭遇した。既に解決済みだ。記録を頼む』

「は、はいベストジャーニスト! 報告をお願いします!」

覚悟を決める前に、さつそく実践の機会が巡ってきた。

いや、いいんだけどさあ……ホントに忙しいんだな、都心のヒーロー事務所。

そしてその日の夕方、私はベストジャーニストに連れられ、再度外出した。

もちろんパトロールのためではあるんだが、それと同時に、作った書類をどこにどんな風に提出するのかわつても体験させてもらえないことになったので、途中で警察署によって、事務所から持ってきたそれを担当課に提出した。

まあ、出すだけだからそんな別に他に何もなかったんだけど……なんか緊張した。

で、本来ならその後、残りのパトロールさえ終われば、事務所に帰るだけの予定だったんだが……パトロールの途中にベストジャーニストの携帯に連絡が入って、予定が変わった。

「すまないが、今から行きたいところがあった。急で悪いが、君にもついてきてもらえないか?」

「はい? ええ、大丈夫ですが……どちらへ? ヒーロー関係ですか?」

「そうでもあるが、どちらかという私用に近い。が、職場体験生を受け入れている以上、事務所待機でもしているのだから、原則として受け持ち先のヒーローと一緒にいなければならぬから……君だけここから1人で帰らせることは好ましくないんだ」

ああ、だから私も同行ってわけなのね。

「そして、一度事務所に帰っている時間はなさそうだね……面会時間が終わってしまう」

「……面会？ 病院とかですか？」

「ああ。知人の見舞いに行く……先程の事務所からの電話で、ようやく、身内以外の面会お断りが解除されたようだと思ってね。ただ、彼も有名なヒーローだから……明日以降になると、マスコミが嗅ぎつけて、押しかけたり騒ぎそうなんだ」

「なるほど、だから今日のうちに……それで、どちらへ？」

「ああ、場所は――」

――保須市総合病院。プロヒーロー『インゲニウム』がそこに入院しているんだ」

第49話 TS少女と保須市

S i d e . 緑谷出久

「ん？ おいおいおい、座りスマホか？ 全く近頃の若いのは！」

職場体験3日目の夕方。

新幹線で隣に座っているグラントリノからそんなことを言われながら、僕はスマホの画面を見ていた。

……座つてがダメならどうすりゃいいんだろ。運転中とか歩きながらが悪いのはわかるけども。

まあそれは置いて……今僕は、渋谷とかそのへんの町で敵退治の経験を積む……という方針から一転、山梨は甲府の、グラントリノの事務所へととんぼ返りしている最中だ。

なぜかという……グラントリノが、今日の夜、事務所に来客があるのを忘れていたから。

ほんの少し前に思いだし、慌てて『一回帰るぞ！』つてことになって……どうにか指定席のチケットを取れた新幹線で、急いで事務所に戻るところなのである。

「いやー参った参った、忘れてたわアイツが来るの……年は取りたくないもんだ」

「どなたと待ち合わせなんですか？」

「あー……すまん。お前さんには伝えるなって言われとるんだ。会うまで待つてくれ」

「え？ 何で僕にそんな……つていうか、それって、僕が職場体験でグラントリノのところに来ていることを知ってるつてことですか？」

「ああ、俊典か根津あたりから聞いたんだろうよ……俺も会うのは本当に久しぶりだが、約束忘れてすっぱかしてもしたら、どれだけネチネチ言われ続けるかわからんな……」

この言い方は……オールマイト関係者？ しかも、校長先生とも面識アリ……ネチネチ言われる……一体誰のことなのか全く思い浮かばない。

「というかそれ以前に、僕知ってる人かもわからないわけだけど……誰だろう？」

「久々に顔見せに来るなら手土産くらい持って来い、って冗談で言ったら『わかりました。『超神田寿司』の特上あたりでよろしいですね？』」つってたからまあ……晩飯はそれってことで期待しとけ」

特上寿司!? しかも『超神田寿司』……って確か、都内でもかなりの老舗で名店ですよね!? そんなとこの特上とかさらつと……ど、どんな人なんだ？

でも、そんなすごいお土産持ってきてくれるなら、確かに留守にしておいてすっぱかしくかまずいよね……。

「あとあいつのことだから寿司に大量のワサビとか仕込んでロシアンルーレット風にしてる可能性もあるから注意が必要だな」

本当にどんな人なんだ!?

折角の特上寿司をもつたと言えないのか、ユーモアがある人だと思えばいいのか……

本気で気になってきたんだけど、それ絶対帰るまで教えてもらえない感じですかね……?

(まあ、それはいいや……しかし、飯田君、返信くれないな……いつもなら、既読3分以内にはくれるのに……)

スマホの画面を見ながらそんな風に考えていた……その時だった。

——ドゴオオン!!

「……!?!」

高速で走っているはずの新幹線の壁を突き破り……獣のような異形、あるいはコスチュームの、ヒーローと思しき人影が車内に突っ込んできた。

そして、その穴からさらに……

(……!?!? 脳無!?)

☆☆☆

保須市総合病院に入院している、ターボヒーロー『インゲニウム』

……まあ、飯田の兄なわけだが、なんとベストジーニストの知人であるらしい。

私生活とかでも付き合いがあるほど特別仲がいいわけではないが、同じように都心に事務所を構え、多くのサイドキックを率いている者同士、似たような案件の捜査協力で顔を合わせたり、チームアップする機会もそこそこあったらしくて。

だからこそ今回、『ヒーロー殺し』に襲われたと知って心配していたそうさ。

病院へはタクシーで向かった。途中、生花店によつて、お見舞いに小さめの花かごを買って。

病室へお見舞いに入ったのはベストジーニスト一人だ。私は外の廊下で待機してた。

曰く、『礼儀正しい人だから、人が多いとその分気を使ってしまうかもしれない。初対面の人物で、弟のクラスメイトならなおのこと』だそうさ。それならまあ、こうした方がいいよね。

なので、ドアの向こうで彼らが何を話していたのかは知らないし……詮索するつもりもない。

病人の部屋に長居するのもアレだと思ったからだろう。数分ほどでベストジーニストは病室から出てきて……その時一瞬、部屋の中のインゲニウムらしき人が見えた。

ベッドに横になっていて、点滴とか医療器具がいくつも装着され病人着の隙間からのぞく肌の部分は、大部分が包帯に覆われた……痛々しい姿だった。

顔は……これも呼吸器でよく見えなかったけど、目元のあたりは飯田に似てたかも。

会釈程度に一礼して、そのまま立ち去った。

帰りのタクシーの中で、ベストジーニストはいつも以上に口数が少なかった。

それが、痛々しい友人の姿を見てショックだったからか、はたまた他に何か考えることがあったからかはわからない。けど、こつちから話しかける雰囲気でもないのは確かなので、このまま事務所につくま

で黙って乗っていいようと思った……その時だった。

私達が乗るタクシーが走っている道路。その上を通る、高架橋のようになっている線路の上を、新幹線が走っているのが、ふと見えた。この車がその下をくぐる時に、ちょうど上を通るくらいの位置かな、なんて思っていたら……

次の瞬間、走っているその新幹線の壁に、すごい勢いで何かが激突した。

「!?!」

とんでもない光景に、同時に目を大きく見開いた私とベストジーニスト。

その直後、その時に破損してまき散らされたらしい、新幹線の車体や窓、そしてその外部の防音壁やら高架橋のパーツやら、色んなものが一斉に道路に降り注いできた。

たまらず急ブレーキをかけるタクシー。

前の座席にぶつかりそうになるのを腕でガードしつつ、ベストジーニストは素早く外に出る。

「あ、お、お客さん!?! 危険ですよ!?!」

「すまない、非常時ゆえ外に出る。乗車賃の請求は後で事務所に送ってくれ。ダイナージャ」

「はい! あ、コレ事務所の電話番号とアドレスです」

運転手さんに事務所のアドレスを渡した後、私も同じように外に出たが、その瞬間、今度は新幹線の横穴から、何かがまたすごい勢いで飛んでいったのが見えた。

ただし高すぎて遠すぎて、おまけに薄暗くなってきてたせいで、よく見えなかったけど……大柄な人影のように見えた気が……。

「グラントリノお!?!」

……と思ったら滅茶苦茶聞き覚えのある声が聞こえた!?!

新幹線の横穴から……驚愕やら動揺やら、色んな感情が一緒くたになった表情で外を見渡しているそれは……紛れもなく、昨日の夕方

会ったばかりのあいっだった。

「あれ……緑谷?!」

「あれは……昨日会った雄英生か! ダイナージャ、行くぞ!」

「え、あ、はい……わっ!」

そう言つてベストジーニストは、『ファイバーマスター』で私と自分が着ている服の繊維を操り、そのまま空を飛んで高架橋の上、新幹線の横穴の部分にまで一気に移動した。

車掌さんと思しき人が、『いったん席に戻つて! 落ち着いて、ヒーローの到着を待つてください!』つて必死に乗客を落ち着かせようとしているところだったが……

「すみません、僕出ます!」

「ええ!? 君ちよつと危ないつて……」

「待て待て待て待て待て何してんのお前緑谷おい!」

いきなり穴から飛び出しそうになっていた緑谷の首根つこを反射的につかんで引き寄せる。『ぐえっ!』と鶏の首でも絞めたみたいな声と共に、胸元に抱きよせて逃げないように固定。

「え、ほっ……あ、え、栄陽院さんに……ベストジーニスト!」

「緑谷出久……いや、『デク』君だったね。何やら急いでいる所済まな
いが、この状況を……ん? 昨日のご老人がいないようだが……」

「あ、はい……グラントリノは、さつきその穴から飛んで出ていってしまつて……」

それを聞いて、私と、恐らくベストジーニストも、『さつき飛び出していったのはそれか?』と思ひ至つた。それにしても大きかったよな……あ、ひよつとして、突っ込んできた何かを押し出して自分も飛んでつたとか、そんな感じか?

しかしそうなると、緑谷、今職場体験中なのに、保護観察役のプロヒーローとはぐれちゃつたつてことか? えつと……どうするんだろこの場合……

私の目の前で、ベストジーニストはごくわずかな時間だけ思考を巡らせた後、ひとまず列車の中の乗客達を落ち着かせるため、車掌さんに拡声器と通信端末を借りて声を上げた。

「皆さん落ち着いて！　こちらはたったいま現着しました、プロヒーローのベストジーニストです！　状況が確認でき次第、ヒーロー及び警察が避難誘導を行いますのでそれに従ってください！　怪我人がいる場合は最寄りの乗務員もしくはヒーローに声をかけて、そうでない方は座席に座って待機を！　決してパニックにならず、落ち着いて行動してください！」

「やった、ヒーローが来てくれた！」

「ベストジーニストだって!?　No. 4ヒーローの……すごい、本物だ！」

「よかった……コレで安心ね」

「うん……皆、落ち着きましょう。ヒーローの邪魔をしちゃいけないわ」

「す、すごい……あつという間に落ち着いちゃった」

さつきまでパニック寸前だった乗客たちが、潮が引くようにその混乱を収めていくのを、緑谷は……いやもちろん私もだが、驚いた様子で見っていた。

ホントにね……トップヒーローのネームバリューが、いかに人々を安心させるか、心強い味方だと思われてるかがわかる光景だ。

「ひとまずはこれで良し……それでデク君、こうなった状況を詳しく説明できるかな？」

「は、はい……あ、でも僕行かないと！　グラントリノが……」

「待ちたまえ、君はそのグラントリノに、ついてこいと言われたのか？」

「それは……」

一瞬言いよんだ緑谷の様子から、即座に『違うんだな?』と読み取ったベストジーニストは、僅かに目つきを鋭いものにした。

「保護観察者に『ここで待て』と言われたのなら、君はここを動くべきではない。焦る気持ちはわかるが、プロを信じて待つこと、そして今の君にできることをやるべきだ」

「それはっ……わかってます。でも、僕！」

言い終わる前に、ベストジーニストは緑谷の肩をがしつとつかみ、

力を込める。

同時に、コスチュームの繊維を操ってきゅつと締め上げ、それ以上何も言わせなかった。

「ヒーローが市民の前で狼狽える姿を見せてはいけない。今この場において、我々は彼らの心の支えになっているということを理解しろ。我々の動揺はそのまま彼らの不安やパニックにつながる。君の尊敬するオールマイトが、いつもどうしているかを思いだしてみなさい」「っ……っ！」

この世で最も尊敬しているであろうヒーローの名前を出された緑谷は、何か言いたかったであろうことをどうにか飲み込んで……少ししてから、こくり、と無言で、しかし力強くうなづいた。

結構、とベストジーニストも満足したようにうなずくと、個性による拘束を解除する。

「手荒な真似をしてすまなかった。改めて、この状況を詳しく聞かせてほしい」

「わかりました。でも、ほんの一瞬のことだったので、そんなに多くはわかりませんが……」

そこから緑谷の話が始まったんだが……ちよつと何というか、予想以上に大変な事態になりそうな感じだった。緑谷がパニックになりかけてたのも——それとも、地の頭で助けに行こうとしたのかはわからないが——無理ないと思うほどに。

新幹線の壁をぶち破って、ヒーローと思しき誰かが突っ込んで来たこと。

その直後、穴からそれをやった犯人らしき奴が姿を見せたが、そいつは脳がむき出しになっていて……USJ事件の時に交戦した、『敵連合』の脳無に外見が酷似していたこと。

緑谷の保護者であるグラントリノは、緑谷に『座つてろ小僧！』と言いつつ、そいつと一緒に飛んでいってしまったこと。

座つてるとは言われたが、もしUSJの時のようなデタラメな戦闘能力を持っているなら、グラントリノどころかこの町が危ないと思いついて、居ても立つてもいられなくなつて飛び出そうとし……そこで私に

捕まったこと。

思いがけない敵の名前が出たことに、流石のベストジーニストも驚きを隠せなかったようだが、素早く動揺を収めて『なるほど』と呟き、考えをまとめ始める。

「状況は分かった。君が焦る理由もだ……だがそれならば猶更、君はここを動くべきではない。プロの監督がないところで無断で『個性』を使えばそれは規則違反だ」

「それは……」

「気持ちはわかる。だが、時には仲間を信じて待つことも必要だ……それにご老人、グラントリノなら、相手がいかな強敵であってもそうそう不覚を取ることはあるまい」

「？ ベストジーニスト……その、グラントリノっていう人のことを知っているんですか？」

「あの時は知らなかったが、どうにも只者ではないたはずまいだったのが気になってな……帰ってから調べてみた。プロヒーロー『グラントリノ』……かつて1年間だけ雄英高校に在籍し、教鞭をとっていた記録のある御仁……オールマイトの担任だった古強者だ」

「……はい!?!」

オールマイトの担任……あのNo.1ヒーローを鍛え上げた師匠ってことか!?! そんな超大物だったのかあの人!?!

ってか、そんな人から指名貰ってたなんて……緑谷お前、一体どういう……!?!

「ご高齢ながら、その実力はトップヒーローに勝るとも劣らないと聞く。であれば、そこらの敵に後れを取ることなどありえんし、万が一勝てないとしても引き際や判断を誤ることはないだろう」

「……っ……わかりました……。でもそれなら、もう1つお伝えしたいことが」

「聞こう。話してみなさい」

「よりにもよってここ……保須市であんなのを目撃したことが気になったんです。ここは、一番最近『ヒーロー殺し』による犯行があった町です。偶然ならいいんですが……」

「……『敵連合』と『ヒーロー殺し』がつながっている、と？」

「可能性はあるかもしれませんが。それに……あ、いえ、これはどつちかというと私情なんですが……友達が、この保須市の事務所に職場体験に来ていて、それも気になりました」

「……あ」

思わず言ってしまった私の声に、ベストジーニストはちらりと視線を一瞬こつちによこした。

「友達……同じ雄英生か」

「はい」

「横から補足しません。その生徒、私の友人でもあるんですが……名前は飯田天哉。プロヒーロー・インゲニウムの実弟です」

流石に予想外だったのか、驚いた様子のベストジーニスト。

今まさに、その兄に会いに行つてたところだもんな。

「……なるほど、それは確かに……不安だな。その弟君は、理性的な行動がとれるタイプかね？」

「そうですね。クラスの中でも、特に冷静に思考できるタイプだと思いますが……」

「はい……でもあれで結構飯田君、火がつくと突つ走るところがある気がします……」

「え、そうなの？」

「うん……割と。受験の時とか、体育祭の時とかもそうだった」

「……ひとまず順番に事態を解決していこう。もうそろそろ周辺の他のプロも現着する……乗客の避難誘導を行うから、2人もそれに協力してくれ。ダイナージャ、これまでに聞いた内容を通信で事務所に報告。警察にも通報し、非常事態として周辺市を巻き込んでヒーローを招集し、協力体制を構築するよう進言を。それとデク君、その弟君が職場体験に行っている事務所の名前は？」

「ノーマルヒーロー・マニュアルの事務所です」

「それも合わせて伝えてくれ。大丈夫だと信じたいが……感情でまざり行動に出ていないか、確認だけでもしておいたほうがいい気がする。インゲニウムも、アレで昔は割と無茶をする男だった……その彼

と似ているとすれば、大いに心配だ」

そうだったのか。意外。

「テク君、プロヒーローの権限で、一時的に君を私の指揮下に置く。乗客の避難誘導・安全確保を最優先に行い、完了後、他のヒーローにこの場を引きついで保須市に乗り出す。グラントリノとの合流もその際に行う。以上の行動中に必要と判断した場合、私の責任下で『個性』使用も許可する。ダイナージャ、無線を常にONにし、リアルタイムで情報のやり取りを頼む。以上、取りかかるぞ」

「はい！」

ヒーロー殺しが潜んでいるかもしれない町……保須市。

そこに現れた、敵連合とのつながりが疑われる、脳無らしき敵。

ヒーロー殺しを探してここに来てるかもしれない（というか多分そう）、飯田。

これら全部が一斉に問題化するなんてこと、あつてほしくないし……そもそもそうそうなきさそうなことではあるが……そういうのに限って起こる時は起こるんだよなあ。

第50話 TS少女と保須市炎上

ほどなくして他のプロも到着したので、彼ら・彼女らと協力して、私達は列車からの乗客の避難誘導を完了させることができた。

幸いにして、けが人はほとんどおらず、いても急ブレーキで前の座席に頭をぶつけたとかその程度。むしろ最初に車内に突っ込んできた例のプロとやらが一番重傷で……その人も普通に自力で動けるし、応急処置だけしたら、自分も避難誘導に加わってたから大丈夫そうだった。

思ってたよりずっと早く済んだその後のことを、普通の警察と鉄道警察、そして他のプロの人たちに任せ、私達は保須市に繰り出したんだが……

「何だ……コレ……!?!」

「1、2、3……おい、何人兄弟だよあの脳無つての」

高台から見た感じ……脳みそ丸出しのマツチヨモンスターがあちこちに……見える範囲で4体はいるぞ。そいつらが好き勝手暴れるもんだから、町は破壊され、ヒーローも振り回されて（物理的な意味でそうなる者すらいる）てんてこまいだ。

「緑谷、お前が電車を見た奴、どれ?」

「この中には……いない」

「マジか」

じゃ最低でも5匹いて暴れてんのかこの怪物ども。

形状的には、脳みそ丸出しの半裸マツチヨつてところ以外は似てるとこないな……

腕が4本ある奴、翼が生えてる奴、脳だけでなく頭蓋骨までむき出しっぽい奴、脳に直接下あごがついてるみたいな奴……こいつだけ体色黒いな? 凶体もデカいし、暴れ方もどことなく似てる気がする……USJで見た脳無が一番近い。

しかし、こうして見ると……

「フィクションでよく見る、悪の組織の改造人間みたいだな、まるで」「え?」

思わず私が呟いてしまったその言葉に、緑谷が聞き返してきた

「いやほら、よくあるじゃん。特に昔のヒーロードラマとかにさ、普通の人間が、悪の秘密結社に捕まって改造手術を施されて、異形の怪人にされてヒーローと戦う、みたいな話。そういうのって、共通のエンブレムが埋め込まれてたり、共通点ある見た目してるだろ？　なんかそれ思いました」

脳みそが丸出っつていう、まるで狙ったかのように強烈な特徴が共通していて……さらに名前は『脳無』。いや、脳あるけど……思考能力が存在しないがごとき暴れ方、って意味ではそうか？

……何となく言っちゃったことだけど……え、マジでそうだったりするコレ？

『敵連合』、改造人間作ってんの？　マッドサイエンティストとかいる？　死○博士的な。

おい、何か軽視できない気がして来たぞこの思い付き……見た感じ、あの時のアレと同じように、『個性』複数持つてるのがいくらか確認できるし……その改造手術のせいで、個性複数持つてたり、痛覚がないがごとき暴れまわったり、思考能力がそもそもないのも……

「推察は後だ。先程と同様に市民の避難誘導を行う。必要に応じて『個性』使用を許可する」

「脳無と戦う……つてことですか？」

「それはプロヒーローが主に担当する。君たちはあくまで警察と協力し、市民の誘導と護衛だ。敵が向かってきた場合の自衛や、避難にかかる障害の排除時などだ」

「グラントリノとの合流は?!」

「誘導中に合流できればそれでよし、遭遇出来なかった場合は、避難誘導が一区切りしてから改めて捜索して合流だ。以上、動け!」

ベストジーニストの指示に従い、引き続き市民の避難誘導に当たる私達。

しかし、この現場はさつきよりもずっと危険で……すぐ近くで脳無が暴れてるから、瓦礫とかヒーローとか脳無そのものとか色々飛んできくる。怪我人もわんさかだから、進みが遅いし。

しかも、どうやらこれらの脳無は見境なしに暴れてるようで、近くにあるものをとりあえず攻撃して殺傷しようとする。ヒーローだろうと一般人だろうと関係なく。そしてそのためにためらいなく町やら施設やら設備やらを破壊する。

緑谷も忙しく動き回っていた。機動力を生かして動けない怪我人を確保して連れてきたり、落ちて来そうな看板とか窓ガラスを『テキサスマツシュ』や『デラウエアスマツシュ』で撃ち落したり吹き飛ばして市民を守り、負傷したヒーローを回収したり。

私も……私は主に力仕事だったな。動くのは緑谷に任せて、倒れてくる信号機や落ちてくる看板なんかを受け止めて安全なところに置いたり、瓦礫で道がふさがってるのをどかしたり、戦闘に巻き込まれて引火・爆発しそうな位置にある車を動かしたり。

あと、時々脳無が襲ってくるのでその撃退もだな。

幸いと言うか、あの時ほど強い脳無はいなかったの（こっち来たのは白い脳無だけだったが。黒い脳無はもしかしたら強かったのかもだが、知らん）、比較的簡単に撃退できた。そうするとそのまま別なところに襲い掛かるんだが、大抵はそこはプロヒーローが引き受けてくれるのでどうにでもなった。あくまで私たちの仕事は、誘導と護衛だ。

なお、ベストジーニストはさつきまでとは段違いに忙しく動き回っているの、流石に常に私達を目の届くところに置いておく、ということではできていない。

ほどなくして、受け持った地区の避難誘導は大体終わったんだが……タイミング悪くベストジーニストがおらず、無事にひと段落付いたことに、私や緑谷、そして他のプロヒーローの人達がほっと一息ついてしまった……まさにその時。

私の通信に、その情報は入ってきた。

『ダイナージャ！ 近くにベストジーニストいる!』

「え？ いえ、今丁度いないんですが……何かありましたか？」

『さつき現場にいる別なサイドキックから情報入ったの、合流したら伝えて！ 例のインゲニウムの弟君……姿が見えなくなったって!』

「はい!? 飯田がいなくなった!?!」

「……!」

すぐ後ろで、緑谷が息をのんで驚いたのがわかったが、構わず私は通信を続けた。

……その時、振り返っておけばよかつたと、後になって後悔することになる。

具体的には……ほんの十数秒後だ。

「この騒ぎの中ですか? 移動中にはぐれたとか?」

『そこまではわからないの! 直前まであなた達と同じように、別な地区で避難誘導に参加してたのはわかってる。マニュアルも一緒にいたみたい。ただ、少し前から……ここ数分くらいだと思うけど、気付いたらいなくなってたんだって! 自分でいなくなったのか、別な脳無や『敵』に攫われたのかはわかんないけど……一応周囲注意して見てて!』

「わかりました! 緑谷、今連絡があつて、飯田……が……」

振り返ると、そこには……すでに、緑谷の姿はなかった。

一瞬、頭の中が真っ白になって……あいつの性格を失念していたことに気づく。

(……しまった……アイツこそ、こういう場面で我慢できるような奴じゃなかった!)

☆☆☆

「あいつをまず、助けろよ」

「……!?!」

避難誘導の最中、路地裏の奥に見つけてしまった……兄の仇。

反射的にそちらへ向かって走り出し、殺されかかっていた名も知らないプロヒーローを助ける形で戦闘に突入した飯田だったが……圧倒的な実力差に、なすすべなく地を這うこととなった。

傷だらけで倒れ伏しながらも、『殺してやる!』と怨嗟をぶつけた彼に返された言葉は……予想外にも程がある、あまりにも『真つ当』な

言葉だった。

「自らを顧みず他者を救い出せ。己のために力を振るうな。目先の憎しみに捕らわれ『私欲』を満たそうなど……ヒーローから最も遠い行いだ……ハア……」

そして、そのまま……飯田の命を刈り取る凶刃が振り下ろされようとした瞬間……

『SMASH!!』

緑色のスパークが、夜の闇を切り裂いて、ヒーロー殺しを殴り飛ばした。

「助けに来たよ……飯田君!」

「緑谷……君?! なぜ、ここに……?!」

☆☆☆

Side. 緑谷出久

あのまじめな飯田君が、ひと段落付いたところだとしても、現場を放り出していなくなるなんて絶対におかしい。

即座に僕の脳裏には、最悪の可能性が浮かんで……気が付いたら、体が動いていた。

飯田君は、『ヒーロー殺し』を見つけてしまったのかもしれない。

ワイドショーとかで見た情報をもとに、路地裏を片っ端から探して走った。

それだけじゃ範囲が広すぎるから、今ちように騒ぎが起こっていない場所で、なおかつ破壊されている痕跡がある場所……その周辺の路地裏を、しらみつぶしに。

結果は、的中。見事にと言っているかはわからないけど、倒れている飯田君と、別なプロヒーロー(多分)、そして……ニュースで流れた通りの風貌の『ヒーロー殺し』を発見。

飯田君は……これもワイドショーで見た推測通りだが、体が自由に

動かなくなっているらしい。恐らく、ヒーロー殺しの『個性』。

斬るのが発動条件なのか、それとも……

「……仲間が助けに来た。いいセリフじゃないか……だが、俺にはこいつらを殺す義務がある。ぶつかり合えば当然、弱い方が淘汰されるわけだが……さア……どうする？」

その瞬間向けられた、ヒーロー殺しの目は……冷たく、殺意に満ちていた。

しかしどこか、『熱』を感じさせるものでもあった。冷たいのに熱い……不思議な感じだ。

ふと、以前、オールマイトがこんなことを言っていたのを思いだした。

もう随分前のテレビのニュース、あるいはワイドショーだったかもしれない。

その時オールマイトは、過激思想が行き過ぎて『敵』^{ライアン}として扱われるようになった元ヒーローの『敵』を逮捕して、その時に応じたインタビューで言っていたんだ。

その時の『敵』は、『敵』を生け捕りにすることが前提の今の社会の在り方を『甘い』と批判していた。『敵』はヒーローを殺す気で、一般市民も巻き添えにすることに何のためらいもなく来るんだから、こちらにも相応の権限を持つべきだと。

凶悪な『敵』を殺す許可を、一部のヒーローにでも持たせるべきだと。

最終的にその『敵』はオールマイトに逮捕されたわけだが、その時のインタビューで、

『どんな『敵』かは、目を見ればわかります。一時の勢いや、口先だけの快樂犯罪者は、えてして薄ら暗い愉悦が目に浮かぶもの。逆に、今回の彼のように、形はどうあれ、自分の中に1つの信念を持っている、いわゆる思想犯の目は……静かに燃えている。それは殺意に満たされた冷たい眼光であり、同時に燃える炎のような熱をも感じさせる、強く、恐ろしい目なのです』

その後、『まあでも、そんなに近くで注意深く『敵』の目を観察する

のは危険ですから、市民のみなさんは敵を見たらすぐに通報して逃げてくださいね！ H A H A H A！』とジョークでお茶を濁していた気がするが……あの時言ってたことの意味が、今理解できた。

U S Jで戦った死柄木達とは違う。

これが、燃えるように熱く、氷のように冷たい……己の信念を持った殺人者の目。

インゲニウムを始め、合計40人ものプロヒーローを殺害、あるいは再起不能に追い込んでいる超凶悪ネームドヴィラン。オールマイト以降最多殺人数を誇る、前代未聞の殺人鬼。

ワイドショーでたびたび語られるそれらの煽り文句は、決して大きさでも何でもないものだったんだと、思い知る。

勢いでここまで走ってきてしまった浅慮を悔やむ。

根拠も何もないから仕方ないか思ってしまったけど、誰かプロを、多少無理やりにも説得して……あるいは、栄陽院さんに一声かけてから来るべきだった。

けど、今さらなものねだりをしてもし方ない……ならせめて、今できることを！

ヒーロー殺しに見えないように、スマホを操作。

複雑な操作はできない……位置情報だけを一齐送信。

そしてもう1つ……栄陽院さんに電話をかける。

『もしもし緑谷!! ちよっと今どこ?! てか、今送られてきたコレ何?!』

通話状態になったら、そのままそれをポーチに入れて放置。

彼女は、さっきのままなら……常に通信をONにして、ベストジーニストの事務所と連絡を取り合ってる。だから……

「飯田君……安心して。相手が脳無だろうが、ヒーロー殺しだろうが……僕が守るから!」

『はい!?! ヒーロー殺しって……あんたまた無茶苦茶なことやって……! 返事しないのはそういうわけか! そうなんだな!?! そんなでこのアドレス……ああもう、すぐ報告して応援送るから死なないですよ!?! あとそこに飯田もいるの!?!』

よし、伝わった！ 飯田君がここにいるってことも、ヒーロー殺しと遭遇したことも！

これで栄陽院さんから確実にプロに事態が伝わる……時間さえ稼げば応援も来る！

できれば、僕がここでヒーロー殺しを退けるのが最善だろうけど……

「何を言ってる……緑谷君！ 君には関係ないだろ！ コレは俺の問題なんだ……逃げろ！」

「そんなこと言ったら、ヒーローは何もできないじゃないか！」

飯田君は飯田君で、なんだか自棄になってるみたいな感じだし……彼との話は後だ。

言いたいことは色々あるけど……全部、後にする！

頭をよぎるのは、体育祭の時……治療中に、オールマイトにかかけられた言葉。

轟君との試合で、もつと早く楽に勝てたはずなのに、彼に『左』を使わせるために無理をして……最終的に右腕折っちゃうまでした時に、呆れつつも、こう言っただけでほめてくれた。

「オールマイトが言っただけ……余計なお世話は、ヒーローの本質なんだって！」

「……！ ハア……！」

なぜか、ヒーロー殺しの目に、喜色が浮かび、口角が上り上がって笑ったように見えた。

少しの疑問と、圧倒的な恐怖と緊張の中で……僕は、地を蹴った。栄陽院さんとの、そしてグラントリノとの修行を経てなお、圧倒的に今の僕より格上であるとわかる敵を前にして……それでも、逃げるわけにはいかないから。

第51話 TS少女とヒーロー殺し（前編）

緑谷から、とんでもない内容の通信が入って数分。

私は、ようやく合流できたベストジーニストと一緒に、指定された場所目指して走っていた。

「もう間もなく到着だ。確認するぞ……君は負傷者及び、いないとは思うが市民の避難誘導、あるいは担ぐなりなんなりして安全圏へ離脱することに注力。ヒーロー殺しの相手は私と、先行しているはずの私のサイドキック達を含む、プロヒーローが行う。いいな？」

「はい、お手数おかけします！」

「礼も謝罪も不要だ。まだ未熟な君達を守り導くのは、私達プロの役目なのだから……しかし運が悪かったな、『移動中に』『偶然』はぐれてしまったデク君が、ヒーロー殺しと接触するとは」

「はい……」

緑谷をかばうため、とつさにそう言ってしまったことだが……はたしてこんな安い嘘でごまかしているのやら。私、演技得意な方じゃないし……気づいていて、今はあえて指摘していないって方が納得できる。

だとしても今は、一刻も早く行かないと！ 怒られるなら後でまとめてってことで！

もうすぐそこ。その狭い路地裏から中に入ったところに、緑谷達がいる。

決して広くない道に続く曲がり角目指してかけていた私達だったが……その時、

——ドゴオオオオオン!!

爆音と共に、その路地から土埃やら何やらが噴き出してきて……それに続く形で、とにかくいろいろなものが飛び出してきた。

「っ……濟まない、緑谷君……俺は……！」

「そういうの全部後でって言ったよね飯田君!？」

肩に『お米様抱っこ』で飯田を担いで走る緑谷と、担がれて運ばれている飯田。

「クソア! あのカソボロ布に脳みそ野郎共……狭めえ路地でバカスカ暴れやがって、鬱陶しんだよ!」

「それ全部お前に返ってくんたら爆豪……!」

両手のひらを爆発させながら、文字通り飛び出してくる爆豪と、その爆風に当たらないように注意しながら、凍らせた地面を滑走して出てくる轟。

なお、左側の熱で、滑走した直後に氷を溶かしているのも、後続は滑る心配はない。

その後から、プロヒーローと思しき人らが数人……中には、仲間と思しきヒーローを担いだりして避難させている者もいる。

そのさらに後ろから、もう今日何体目だよって感じの脳無が1、2、

3……4体も出て来た。

全員凶体デカいのに加え……黒いの1匹いるんだけど。

で、さらにその後ろから、

「ハア……どいつもこいつも、邪魔ばかりする……。英雄の名を穢す者……いたずらに力を振りかざす者……間違った志を掲げる者……全て、粛清対象だ……!」

赤い巻物に加えて顔に包帯だか布を巻き、全身に刃物を装備した細身の男。

ニュースで伝えられている容姿そのままの……ヒーロー殺し。

ネームドヴィラン『ステイン』。

……うん。

「この狭い路地にどんだけ詰まってたんだよ!? 人口密度高すぎだろ!？」

「あ、栄陽院さん! と……ベストジーニスト!」

「あ!?! 遅っせえんだよ今頃来たのかデカ女ア!」

「No. 4の援軍か……よし、これなら、勢いはこっちに——」

「焦凍オオ!! 爆豪オオオ!! そこに居るのかア!？」

「——あーまあ、援軍としちや頼もしいか、アレも」

「あ? おい小僧、お前……座つてろつて言っただろうが!？」

「ひいつ!? すいませんグラントリノ!」

向こうの方から、顔面燃えてるおっさんと、空飛んでるおじいさんまでやってきて……しかも空からはもう1体脳無が飛んできて(羽生えてる)……何だコレ、この混沌とした状況……

プロヒーロー×3 + α (サイドキックの方々他)

職場体験生×5 (私含)

脳無×5 (内、黒1、白4)

ヒーロー殺し×1

……やばいな、これからこの道路、今日イチの地獄絵図になるんじゃないか。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

飯田君を守るためにヒーロー殺しに挑んだはいいものの、十数秒と持たずに、ヒーロー殺しの『個性』によって体の自由を奪われ、動けなくされた。

しかし、間一髪という所で……プロヒーローよりも先に、新たな援軍が来てくれた。

それは、僕の一斉送信を見て事情を察したのであろう……クラスメイト2人。

「悪い、遅くなった」

「あ? なんだ? コイツか、例のヒーロー殺しとかいうのは?」

「轟君……かつちゃん……!」

氷と炎、そして爆風と共に現れた2人。クラスでもトップクラスの破壊力・制圧力を誇るこの2人の参戦で、形勢は逆転するかと思われたが……それでもなお一步も引かないどころか、さらに攻める手を苛

烈にしてくるヒーロー殺し。

……それどころか、さつきまでと違って、その表情には苛立ちや怒りが浮かんでいて……

「上等じゃねーか！俺はいずれ、オールマイトすら超えて、No. 1になる男だ！テメーみてえなクソ敵に負けて恥かいてる暇なんざねんだよボケがア！」

終始こんな感じで、かつちゃん節が炸裂してたから、だったようだ。理由は。

「ハア……体育祭の映像を見ていた時から想像はついてた。地位を、名声を求めてヒーローを目指すか……貴様は、その2人とは違う。贗作……英雄の名を貶める、罪人だ……！」

「んだとコラ……誰がデクや紅白野郎より下だつたんだクソボロ布コラア!!」

かつちゃんの沸点が相変わらずなのはともかく、

さつき戦ってた時から、ちよくちよくそんな感じのことを言ってたから、もしかしたらとは思ってたけど……どうやらヒーロー殺しは、独自の判断基準で『ヒーローにふさわしいか否か』を見極め、それによって殺すかどうかを決めているらしかった。

それに照らすと、僕と轟君は『いい』。生かす価値がある。

かつちゃんや飯田君、そして、そこで殺されそうになってたプロの人（名前知らない）は……『贗作』とか『偽物』とか言われて、アウトだったらしい。すなわち、殺す対象。

そのあたりが、『思想犯』としてのヒーロー殺しの信念か、と悟ることができたけども……それとほぼ同時に、ふと体の感覚が戻り、動くようになった。

なんで、先に麻痺してた飯田君やプロの人より早く、僕の拘束が解けたのかはわからないけど、チャンスには違いない。2人と協力して、一気に勝負を決めようと動き出した。

しかし、さつきまでよりもさらに強力に……というより、まるで違う動きの鋭さで攻めてくるヒーロー殺しを前に、僕ら3人は防戦一方だった。

身軽に縦横無尽に飛び回り、大小の刃物で波状攻撃のように激しく攻め立ててくる。

特にかつちゃんに対しては容赦なく、殺す気満々で急所を狙ってくるし……轟君はその最中に何度も攻撃を受け、決して少くない量の血を流している。麻痺こそ食らっていないものの、長期戦はまずいと言わざるを得なかった。

僕だって、接近戦が主体になる以上。油断すれば一瞬でやられる。そんな緊張感の中、さらなる乱入者により、場がさらに混沌となる事態に。

栄陽院さんと轟君がしてくれた協力要請により、プロヒーローの応援が到着。ベストジーニストやエンデヴァアの事務所のサイドキック達、それに、手の空いた近場のプロヒーロー達だ。

これで助かる！　と思わず僕が破顔した瞬間……路地の上の方から、なんと何体もの脳無が降ってくる形で乱入。どうやら騒ぎすぎて、まだ残っている脳無たちの注目を集めてしまったらしい。

人口過密状態で始まった戦闘だったが、とてもそこで続けることなんてできるはずもなく……たまらず路地を抜け出して一旦離脱、追いかけて来た脳無やヒーロー殺しと、広い場所で仕切り直しにすることに。

そしたら、ちょうど到着したところだったエンデヴァア、ベストジーニスト、グラントリノ、そして栄陽院さんも合流して……あとなんか脳無ももう1体増えて……現在に至る。

そこからは……まあ、うん……すごい大変な戦いだった。

まあ、集まった面子が面子だから、仕方ないかもしれないけどさ。

まず、真っ先にベストジーニストが、一番に警戒すべきヒーロー殺しを『ファイバーマスター』で拘束しにかかった。きゅつと服の繊維に締め付けられ、その動きが止まる。

しかしその瞬間、ベストジーニスト目掛けて脳無の1匹……しかも寄りにもよって黒い奴が襲い掛かった。

ベストジーニストは同じく『ファイバーマスター』で脳無が履いて

いるズボンを操って拘束するが、それでも筋力に物を言わせて強引に歩いてこようとする脳無。

「赫灼熱拳・ジェットバーン!!」

そこに、エンデヴアーが凄まじい熱のこもった拳の一撃を叩き込んで脳無をなぎ倒す。そのまま2発目、3発目と打ち込み、脳無は力尽きてそのまま動かなくなった。

急所は避けているので、きちんと生きてはいるけど。

すると今度は翼を持った脳無が舞い降りてきてエンデヴアーを背後から襲おうとするが、目にも留まらぬ速さでそのさらに上空に飛びあがったグラントリノが、流星のように急降下しての蹴りの一撃で叩き落す。アスファルトを盛大に陥没させて、羽の脳無は沈黙した。

それと同時進行で、別な2体の脳無……どちらも白い体の、ゴリラみたいな腕の太い脳無と、ネコ科の肉食獣みたいに四足歩行の脳無がいた。そいつらは、ゴリラの方はプロヒーローの人たちに襲い掛かり、ネコ科の方はすごいスピードで、轟君とかっちゃんの方に突っ込んできた。

ゴリラの方の怪力に、プロヒーローの人たちは苦戦しているようだったが、直撃を食らってダウンした人が出た次の瞬間、すごい速さでそこに駆け寄った栄陽院さんがそれを回収し、あっという間に戦闘圏外の後方へ連れて退避した。

「この人オナシヤス！」

「え!? あ、ああ……うん、わかった」

そして、そこに居た別なプロヒーローの人に引き渡して手当を頼み、自分はまた戦場に戻る。

その間に、また1人攻撃を受けてリタイアした人が出たが……その人は、差し違えるように脳無に攻撃を加えていて、それは当たった瞬間に脳無はびくんつ!と体を震わせて、痙攣しながらその場に倒れ込んだ。あれって……上鳴君と同じ、電撃!?

「今だ、誰か拘束を……あ、ちよつと君、まだ俺に触らない方が……」
「大丈夫です、この手袋もコスチュームも電気抵抗それなりにあるんで!」

そして再び栄陽院さんが回収。まだ体に残る電気も何のその、プロヒーローの人を抱えて素早く戦線から運び出していった。

その間に、動けず倒れているゴリラ脳無は、残るプロヒーローたちが、サポートアイテムや『個性』を使って拘束していた。

もう1匹のネコ科の肉食獣……身のこなしからして豹みたいな脳無は、かつちゃんと轟君に襲い掛かろうとして、しかし爆破と炎に阻まれていた。

だが、その身のこなしは軽やかで素早く、轟君の氷に捕まる前に射程外へ離脱してしまい……

「済まない……皆、関係ないことで、迷惑をかけた……！」

それに追いつく速さで駆け抜けた飯田君が、その鳩尾目掛けて、『レシプロ』の勢いを乗せた蹴りを叩き込んでいた。

「だが、だからこそ……これ以上、誰の血も流させるわけにはいかない！」

そのまま、空中で一回転し……体をひねってからの飛び回し蹴りを叩き込んで、元来た方向へ豹脳無を蹴り返した。そして、そっちには……

「でかしたクソメガネ！」

かつちゃんが待ち構えていて……大上段からの、爆破で加速した蹴りで地面に叩き落とす。そこにさらに追撃で両手爆破を放って、そいつをアスファルトにめり込ませて固定した。

さらにそれを轟君が氷結で固定。これでいくら何でもリタイアだろう。

「まったく、褒めるのか罵倒するのかどちらかにしたらどうだ」

「うっせえわ、おらあともう1匹居r……メガネエ！」

何かに気づいたかつちゃんの怒号が響き渡ったその瞬間、横合いをすごい勢いで、残った最後の脳無が駆け抜けていった。

他の脳無がどれも筋肉質な中、そいつだけはでっぷり太った寸胴な体格だったが……しかし、その体格に見合わない素早さで駆け抜けて、飯田君目掛けて突っ込んでいく。

走ってる途中で、口を大きく開けた。そこには、ワニやサメのよう

に、奥行きのある鋭い牙がずらりと並んでいて……あれで何をしようとしているのかを察して、ぞつとした。

が、その牙が飯田君に突き立てられるより早く……

——ドゴツシヤアン!!

派手な破壊音と、鈍い打撃音が一緒くたになった音が響く。

栄陽院さんが、恐らくはその辺に倒れて落ちていたんであろう信号機を柱ごと持ちあげ、横からフルスイングして脳無を力づくでホームランしていた。いや、飛距離的には内野ゴロだけだ。

あ、相変わらず無茶苦茶やるなあ……

「赤信号だ、止まれボケ」

「……それ、上手いこと言ったつもりか？」

「上手い……ことは言えてないのは自分でもわかってる。けどなんか思いついたから言わずにはいれなかった」

「そうか」

轟君となんか力の抜けるやり取りをしつつ、光る部分が粉々に粉碎されて二度と光らなくなった信号機を投げ捨てる栄陽院さん。

竹刀とか金属バットでも扱うように軽々振り回したり投げたりしてるけど、あれ数百キロじゃきかない物体なんだよな……相変わらずパワーすごい。

しかし、いま栄陽院さんが吹き飛ばした脳無が……一瞬で素早く轟君が氷結で拘束したんだが、その場でびくんびくんと震え始め……ごぼごぼごぼ、と口から何かを吐き出した。

しかもそれが尋常じゃない量と勢いで……噴水みたいに噴き出して周囲にまき散らされていく。汚い上にどこかグロテスクさすら漂うその光景に、見ていた全員がぎよつとして後ずさりする。

「ああ!? んっだよ汚ねえ……っ……!!?」

しかしその瞬間、そいつに一番近い位置にいたかつちゃん、またしても何かに気づき……血相を変えた。

「エンデヴァー! 半分野郎! 火が消せ! 他の奴も火使う個性切

れ！ あとコレ吸うな、鼻と口塞げ、風上に移動しろ！」

「何……どうした爆豪!?!」

「コレただのゲロじゃねえ、気化してやがる！ 匂いからして、硫化水素みてえな……」

最後まで言い終える前に、その脳無がカチツ、と歯を打ち鳴らし……その衝撃で、火打石みたいに火花が散った。

そして、

——ドツゴオオオオオン!!

自分が今吐き出した、爆発物の吐瀉物……気化して周囲に充満し始めていたそれに引火して、大爆発を起こし……今戦っていた道路を崩落させた。

第52話 TS少女とヒーロー殺し（中編）

「えーととりあえず……どこだと思うよ、ここ？」

「地下街……にしちや、随分味気ねえな。かといって、地下鉄みてえな何か設備が敷かれてるようにも見えねえ」

「多分だけど……排水溝だと思う。関東平野は標高が低い場所も多くて、地域によつては水はけが悪いから水害が起こりやすいんだ。都市部では水の逃げ場がない分余計に……そういう時の排水用に、大規模な排水設備が都内各地の地下にあるって聞いたことがある」

「なるほど、恐らく緑谷君の予想であたりだろう。よく見れば、あちこちに水や泥の痕跡がある。明かりがついているのは……人を感知して自動で作動する仕組みなのか？」

「何でもいい、さっさと抜け出して外に戻んぞ……！ おい紅白野郎、テメーの氷結で足場作れ。落下しても大丈夫だったくれえの高さだ、そのくらいできんだろ」

あの太っちょ脳無の自爆……かどうかはわからないが、爆ゲロ引火からの大爆発で道路が崩落したと思ったら、私達は5人そろって、こんな地下空洞に落ちてきていた。

緑谷、飯田、爆豪、轟、そして私。あの爆発の周囲近くにいた者が巻き込まれた。

あと、名も知らぬプロの人が3人ほど一緒に落ちてきて……着地に失敗して足痛めたり骨折ったりしてるので、今さっき応急手当てしたとこ。

「ごめんね……私達、プロなのに……君達みたいな子供にこんなことさせちゃって」

「俺なんかさつきからいいとこなしだよ……ヒーロー殺しには殺されそうになるし、体が動かなくて戦闘にも加われなかった上、今度は物理的に動けなくなるとは」

「まあ、仕方ないですつて。状況が動くのが早すぎるし激しすぎますもん実際」

この空間が何なのかについての考察は今したところだが、崩落のせいでプロたちとはぐれた……垂直落下だから、そのまま上に上がれば戻れると思うが。上に穴、見えるし。

爆豪の言うように氷で道を作れば、ゆっくりペースでなら全員上に戻れるだろう。

だが……

「……今はやめたほうがいいかもな。厄介なのが一緒に落ちてきてやる」

「あ？ ちつ……」

轟のセリフを聞いて、私達は周囲を見渡して……既に囲まれている、と知る。

前後左右、あちこちに……さつきまでいなかった、あるいはいたことに気づけなかった、異形の化け物共が何体、何十体もうろついて、虚ろに濁った眼でこつちを睨みつけている。

普通の人間と同じか、少し大柄という程度の大きさ。形も大体人間のそれだ。手の指の先に鋭い爪がついているくらいか。

だが、どいつもこいつも脳みそが丸見えになっているその姿は、紛れもなく……

「の、脳無!? 何でこんなにいっぱい……」

「どれだけの数が投入されていたんだ!? それに、あの場にこれ程の数はいなかったはず……」

「……答えはアレだな」

と、私が偶然見つけたものを見てそうつぶやくと、警戒はそのままに全員の視線がそつちを……私と同じ方向を向く。

その先には、さつき爆発するゲロを吐き出したあの太つちよ脳無が、今度はゲロではなく、自分よりもっと小さな脳無を次々とげろげろ吐きだしていた。さつきの小さめの奴を。

何じゃありや……口から出産でもしてんのか？ SAN値が減りそうな光景だ……

「一緒に落ちてきてたのか……でも、着地失敗したっぽいな。足が変な風に曲がってる」

「ぶ、分身の類か……!? エクトプラズム先生が使うのと、同じような……」

「多分そうだな……あつち見てみる、少なくともあれらが真つ当な生きもんじゃねえってことはわかるぜ」

と、轟の言葉に従つて見ると……少し離れた位置で、その量産型脳無（仮称）の1匹の首がザシュツと斬り飛ばされて宙に舞った。

シヨツキングな光景だが、その直後、切り離された首と胴体の両方が爆発して粉々になり……肉片も残さず塵になった。

あの量産型、死ぬとああなつて消えるのか。爆風は大したことないな。

……そしてもう1つ、あまりありがたくない事実が明らかになったな……

今、あの脳無の首を、躊躇なく斬り落とした奴が……あの闇の中から、かつん、かつん、と歩いて出てきて、その姿を見せた。

ああ、うん……こいつも一緒に落ちてきてたのか、よりによって……

「ハア……何だか妙なことになってしまったが、拘束が解けたのは幸いか。ならば、俺は俺のなすべきことをするまでだ……!」

ベストジーニストが『ファイバーマスター』で拘束していた……ヒーロー殺し。

崩落で落ちて来たことよつて拘束を逃れ、こうして私達と同じ空間にいる状態、というわけだ……笑えないにも程があるぞこの事態。

こつちはエンデヴァーやベストジーニスト、そしてグラントリノといったトッププロとはぐれた状態。

加えて、現状は足手まといという他ない、ケガでろくに動けないプロが3人、お荷物状態。

おまけに周囲には何十体もの脳無。1体1体は大したことなさそうだが、数が……

とか言つて、泣き言言つても解決しないのもわかつてる。なら……できることをやるしかない。

「面倒くせえ……全員ぶつ殺せばいいんだな……!」

「いやかつちゃん殺しちゃだめだよ……いやでも、あの脳無は分身みたいだし、そこは問題ないか……でも、本体の脳無とヒーロー殺しはどうにかしないと!」

「ノルマは大体……1人10匹前後つてとこか? まあ、この面子ならなんとかなるだろ」

「簡単ではないだろうがな……分身体とはいえ、脳無だ。そこらの不良やチンピラよりは強いだろうし……負傷しているプロの方々を守りながら戦わねばならん」

「USJといい今回といい、何なんだ今年のこのクラス……誰か呪われてる奴いんじゃないのか。どうにかならないもんかね、このPluss Ultraを強要するがごとく試練の連続は」

誰が合図するでもなく、動けない3人のプロをかばう形で円形に展開した私達。

ここから中々の修羅場だな……気を引き締めていかないと!

☆☆☆

「ええい……鬱陶しい!」

エンデヴァアの苛立ちのこもった声と共に、噴き出す炎が黒い脳無の肌を焦がす。

しかし、恐らく痛覚も恐怖も何もないのであろう黒脳無は、体を焼き焦がしながらもその射線から逃れ、右腕に力を込めると、ビキビキと肥大させて振りぬいてくる。

鍛え上げたエンデヴァアの肉体であっても、人外の臂力を持つであろうことが一目見て明らかかなその拳を受けるのはまずいと、即座に直感する。

しかし、その筋力ゆえにスピードも相応のものになっている黒脳無の一撃を避けるのは、いくらエンデヴァアでも難しかった。

ただし、それはこの場にいるのが彼だけならばだ。

黒脳無が今まさに足を踏みだそうとした瞬間、逆側の足が……正確には、その部分を包んでいるズボンの繊維が、絶妙なタイミングで

引つ張られ、黒脳無は勢いを空回りさせて派手に転倒した。

ズシン、とアスファルトに亀裂が入る勢いで地面に激突したその脳無目掛け、エンデヴアーは追撃の拳を振り下ろすが……その瞬間、脳無の背中がぼりっ、と乾いた音を立てて裂ける。

その中から、今までの脳無よりもほんのわずか小さいと思われる脳無が出現し、勢いよくその場から飛び退った。エンデヴアーの拳は、抜け殻となった体を捕らえ、粉々に砕いて焼き尽くす。

「ちっ、またか……厄介な！」

個性によつて『脱皮』した脳無の体は、先程までの負傷は跡形もなく消え去っており、火傷の痕跡1つ残っていない。

これが、先程エンデヴアーが確かに再起不能にしたはずの、この黒脳無が復活し、今再び猛威を振るっているからくりだった。『超再生』ほどではないが、その回復力は十分驚異的だった。

欠点として、発動するたびに自分の体積がごくわずかに小さくなるようだが、もともとの体が大きいのであまり変わらない上に、パワーもほとんど変わらない。おまけに『個性』で力むとその分体が大きくなる。デメリットがあまりデメリットになっていない。

「ジーニスト、貴様の『個性』で捕縛できんのか？」

「先程から何度か試しているが、厳しいと言わざるをえない。パワーがパワーだ。デニムでも拘束力が不足しているし……そもそもあなたの能力とは相性が良くない」

『繊維』を使って拘束しても、その炎と熱で、あるいはその余波でそれを燃やされてしまうがために、拘束からの追撃には向いていない。

逆に、倒した後に拘束するのならば問題はない。『白い』脳無であれば、先程仕留めている者を見てもわかるように、繊維でがんじがらめにされて、街灯や電柱に括り付けられている。

「せめてもう少し弱らせるなりなんなりすれば……くっ、こっちは面倒を見ている職場体験生の様子も見に行かねばならんというのに！」

「それについては心配はいりませんよ……この後すぐに会えますから」

唐突に響いた、聞き覚えのない声に、エンデヴァーやベストジーニストはもちろん、グラントリノも含む、その場に残っていた全員が驚きと共に視線を向ける。

聞こえたその声は……今まで現場にいた、誰とも違う声だったのだ。

すわ、『敵』の加勢かと不安がる者もいたが……そこに立っていたのは、1人の男だった。

細身で長身、糊のきいたスーツをびしっと着こなし、かけているメガネをくいつと上げる動作をするその男は、見た目はいかにもサラリーマン然とした風貌だ。プロヒーローの何名かは、言動はともかくとして、その見た目から、迷い込んだ一般人か何かかと勘違いをしてしまう。

だが、その男の正体を知っている一部の者達とはいえば、『なぜこの男がここに』とぎよつとしていた。

特に……今日の夜、彼に事務所で会う予定をしていた、グラントリノは。

「あんだあ？ お前さん何でここにいんだ、事務所に来るんじゃないのか？」

「その予定でしたが、どうやら事務所に行っても会えなそうだったので予定を改めました。ネット上の動画投稿サイトは御覧になりましたか？ ほんのわずかですが……あなたが飛び回っているシーンが含まれていましたよ、グラントリノ」

「ああ、それでこつち来たのか……」

「ここは私が加勢しますので、飛行能力があるグラントリノは地下に彼らを探しに行くのがよいかと。皆様、それでよろしいですか？」

「成程……こちらに異論はない。エンデヴァー？」

「ふん……いいだろう。偉そうな口を叩くからには役に立つんだろうな？」

「足手まといにはなりませんよ」

くいつ、と再びメガネを押し上げる動作をすると同時に、懐から印

鑑型のサポートアイテムを取り出すと……背後から迫ってきていた豹のような脳無——さっきの爆発の際に拘束を抜け出したのだろう——目掛けて投げつける。

余りにも頼りない武器に思えた、というより武器にすら思えなかったそれは、直撃の瞬間、重量級の鈍器が直撃したような音を立てて脳無を跳ね飛ばし、転倒させる。

脳震盪を起こしたのかフラフラになっている脳無を、ベストジーニストが間髪入れず拘束した。

一連の流れを見ていたグラントリノが、ニヤリと機嫌よさそうに笑った。

「衰えちやいねえようだな、ナイトアイの坊主」

「お褒めいただききどうも。さて……残り1体ですね」

☆☆☆

緑谷の拳が振りぬかれる。

爆豪の手から爆炎が迸る。

轟が冷気で凍てつかせ、拘束し、炎で焼き尽くす。

飯田が加速からの蹴りで薙ぎ払う。

そして私も、殴って蹴って投げ飛ばして、周囲に群がる量産型脳無を蹴散らしていく。

どうやら飯田の見立て通り、この脳無たちはさっきの太っちょ脳無が生み出した『分身』のようであり、一定以上のダメージを与えるとその場で消えるようだ。

ただ消えるんじゃないやなく、ボウン！ と爆発するように、なんか派手な演出とともに消える。後には何も残らず、本当に跡形もなく消滅するわけだ。

そして、それを生み出す大本の太っちょ脳無なんだが……つい今しがた、ヒーロー殺しによって殺されたところである。

見捨てたわけではない。周囲の脳無たちが邪魔で駆けつけられなかったのだ。

何せ、ヒーロー3人がお荷物になってるからなあ……彼らを守りつつ、身を守るってことが頭になさそうな量産型脳無共の相手をするのは大変だった。基本的に特攻上等なスタイルで来る上に、味方のためらいなく巻き込んで攻撃してくるからなあ。

攻撃自体は普通の接近戦なのと、そんなに強くないのは幸いだけど。

なので、こいつらをまず全部片づけてからだ、ということになったのだ。

思考能力が低く、生物的な反応に乏しいこいつらの動きないし戦闘能力は、どこか入試や体育祭の時のロボ敵を想像させるものがあった。

さつきあは言ったけど、そのあたりに慣れば割と簡単に一掃できる。実際に違うんだから、こつちもこいつらのことは生き物と、人として思わなければいい。

ぶっ殺す……もとい、ぶっ壊すべきものとして見ればいい。

ヒーローとしてはそういうのはどうなのかと思わなくもないが、状況が状況だ。今だけは別ってことで。

生物相手、異形とはいえ人間相手（多分）ってことで頭のどこにかかっていたブレーキを振り切ってからは（爆豪なんかは割と早い段階でそうしてた気もする）早かった。

量産型脳無の攻撃を見切ってかわし、急所目掛けて攻撃を叩き込む。

あるいは、致命傷かそれに近いダメージ量の攻撃をぶつける。それで相手が怯もうが怯まいが、吹き飛んで消滅するまで一気に畳みかける。その繰り返し。

そして、
「……っしー！ ザコ脳無コレで全部だな。次はヒーロー殺し……っつてもう始まつてるし」

最後の脳無を粉碎した私が振り向くと、既に飯田と爆豪（狙われているコンビ）を狙ってヒーロー殺しが襲い掛かってきていた。それを加勢しつつ守る形で轟が応戦しているが、とんでもなく早くて正確な攻

撃を繰り出してくるヒーロー殺しを前に防戦一方だ。

ヒーロー殺し、あの3人を相手にして攻勢でいられるってやつぱやばいな……

それをそのまま見過ごすわけにもいかなないので、私と緑谷もそこに加わる。

それを鋭敏に察したヒーロー殺しは、流石に分が悪い、攻めきれないと判断したからか、いったん距離を取った。よし、こっから仕切り直しだ。

横一線に並び、ヒーロー殺しとプロヒーローの方々（依然としてお荷物）を隔てるように立つ私ら。

「5対1、か……ハア……流石にコレは、最早余裕はないな」

それでも戦意つてもんを失ってないあたりが怖いな……何がコイツをここまで駆り立てる。本気で厄介だわ、思想犯つてのは。

「皆……絶対に油断しないでね。こっちがいくら人数で有利でも、あいつに血液を舐められたら、それだけでアウトだから」

「誰に向かつてもの言つてんだデクテメエ、ヒーロー殺しの前にテメエからぶつ殺すぞ」

「何かあつたら相互にフオローし合えばいいさ。しかし、1人を5人で袋叩きとは……あまりヒーローらしい所業とは言えないが、背に腹は代えられないか」

「未熟な私らにはその辺で矜持を通すような贅沢なんぞ言う資格はないってね。ま、いいだろ別に……ヒーローが5人1チームで悪人倒すのは、ある意味伝統みたいなどこあるし」

「そうなのか？　あまり聞いたことねーが……」

轟は知らないみたいだが、世の中には戦隊モノというチーム戦制度があつてだな……つてよく考えたら今のこの状況、なんかそれを彷彿とさせるな？　コスチュームの色合い的にも。

爆豪：レッド

轟　：ブルー

緑谷：グリーン

飯田：ホワイト

私：ブラック

紅一点でありながらピンクでない点は申し訳ないが（麗日とか芦戸あたりいればよかったかも）、その手の色合いは私には似合わんので勘弁して。

さてそれじゃあ、量産型脳無という名のザコ戦闘員はもう一掃したことだし、メインの悪の怪人を倒すフェーズに入りましょうかね。

下手するところちが食われる凶悪な相手だ……気を引き締めて行こう。

第53話 TS少女とヒーロー殺し（後編）

ネームドヴィラン『ステイン』。

通称である『ヒーロー殺し』の方が広く知られている名前であろう。実力派として知られる『インゲニウム』を含む、40人のプロヒーローを殺害、もしくは再起不能に追い込んだ、オールマイイト登場以降、『ある例外』を除いて最多殺害数を記録した凶悪犯。

彼がそのような凶行に及んだ理由は、単なる愉快犯というわけでもなければ、怨恨を理由にした殺戮行脚でもない。無論、金をもらつての殺し屋としてでもない。

現代の社会にはびこる、『偽物』のヒーローへの憤りと憂いだった。かつてとある私立の高校のヒーロー科に在籍していた彼は、そこで目にした現代のヒーロー社会の現実に絶望。

自分が人気者となることや、金を稼ぐことしか頭になく、そのためにヒーローとして持つべき信念や矜持を当然のように投げ捨てている『贋作』達に憤った。最早この社会は『英雄』を、ちやほやされて金も稼げる割のいい職業、程度にしか考えていないのだと。

その後、高校を中退した彼は、紆余曲折を経て……その手を血に染める。

独学で習得した殺人術を用いて、痛みを、犠牲を持って社会を正すことを選んだ。

賞賛も何も与えられることはなく、むしろ全てを失って追われる身となりながらも、己の信じる『英雄』を守り、あるべき社会の姿を取り戻すために、『偽物』を刈り取り続けた。

今では最強クラスの凶悪『敵』に数えられる身となった彼は、名だたるプロヒーローに追われながらも、迷いも、恐れもない。己の信じるもののため、痛みを振り切り、命を懸け、死をも恐れず戦い続ける。その姿は……立場さえ違えば、まさしくヒーローとしてのそれだったのかもしれない。

それゆえに、こうして今、5対1という……普通の『敵』ならば絶

望的という他ないような状況であっても、彼は何の迷いもなく、戦火に身を晒していた。

『閃光弾』!!』
スタングレネード

『セントルイススマッシュ』!!』

爆豪の目眩ましからの攻撃と、その反対側から迫る緑谷の蹴撃。

それらを、腕を盾にして光を防ぎ、その後の攻撃を最低限の動きでかわすと、ヒーロー殺しはそれぞれに反撃を放つ。

後ろ蹴りの要領で緑谷を蹴り飛ばし、前にいた爆豪には、容赦なく急所狙いで刃を突き出す。

それを予測していた爆豪は体をひねって防御するが……それをさらに読まれていた。軌道を変更した刃の薙ぎ払いが迫る。

しかし、そこに割り込んだ永久がそれを腕で受け止める。

軍服に加え、普段は羽織るかしまうかしているトレンチコートにそでを通してある、軍服もコートもどちらも防刃・耐衝撃構造で、彼女自身の体の頑丈さも相まって攻撃はほとんど通らない。当たった瞬間、僅かに顔をしかめる程度にとどまった。

「テメー何勝手に前に出て俺をかばってんだコラ！」

「だったらかばわれないように上手く立ち回れ！」

きつちり爆豪を背中にかばいながら後ろに跳んで退避する永久。

追撃を（爆豪に）仕掛けようと踏み込むヒーロー殺しだが、その行く手に氷が割り込んできて物理的に道を遮断される。

即座に回り込もうとするが、その瞬間、氷壁が爆散してその破片が弾丸のように殺到する。その氷塊の弾幕の向こうには、拳を振りぬいた永久の姿があった。

かなり大きなそれも混じっていたために、痛打を避けるべくヒーロー殺しはその場から一旦飛び退って……そこに回り込んでいた緑谷の一撃をすんでのところで防御する。

その次の瞬間、トップスピードで突撃してきた飯田。

しかし、攻撃はしてこず、すれ違いざまに攻撃直後の緑谷の腕をつかんでそのまま回収して離れていった。

一瞬その姿を目で追ったヒーロー殺しだが、その瞬間逆側に気配を

感じ……左半身に炎を灯している轟を目撃する。

それが眼前に吹き付けられてきたが、ヒーロー殺しは跳んでそれを回避し、反撃とばかりにナイフを投げつける……が、横合いからバツ、と大仰に広げられたコートによってそれを防がれた。

そして、飛んだ先にいる爆豪。その両手が向けられていた。

すぐさま逆側に飛び退ろうとするが、あろうことか足が滑ってしまふ。轟が今のわずかな間に、炎に紛れて床面を凍らせていた。

「吹・き・飛・べ・やア!!」

至近距離、とは言わないまでも、十分に近くで両手爆破の爆風を受けたヒーロー殺しは、耐えきれず大きく吹き飛ばされる。今度ばかりは、さすがにその場ですぐに反撃の手を繰り出すこともできなかつた。

それに追撃をかけるべく、床を這って迫る轟の氷と、それに巻き込まれないコースで迫りくる緑谷。

しかしヒーロー殺しは、吹き飛ばされた先で受け身を取るように転がり、即座に立ち上がると、床を蹴って手近にあった柱に跳んだ。そのまま三角とびの要領で、忍者のような身軽さを発揮して一瞬で緑谷の後ろに回り込む。

しかしその反対側から、またしても飯田が迫り……

「やはり来たか」

緑谷にはあえて何もせずにいるヒーロー殺しは、たった今駆け寄ってきた飯田に狙いを定めて刀を振り上げた。その光景にぎよつとしながらも、飯田はスピードを緩めずに緑谷に駆け寄り、その腕をつかみ……そこ目掛けて、ヒーロー殺しの刃が振り下ろされる。

かと思いきや、かなり無理な姿勢で体をひねって……体を横に傾けた状態で空中回し蹴りを放つかのような、緑谷の蹴りの一撃がその刃を横から蹴飛ばした。軌道をずらされ、空しく空を切る刀は、斬り返される頃には飯田と緑谷はその場から離れていた。

「手え止めんなー。畳みかけろー」

距離を保ったまま炎を放って攻撃する轟。

それを回避した先に、あらかじめ轟が作っていたのであろう氷の塊

を剛速球のごとく投げつける永久。壁や地面に着弾すると、があん、という石でもぶつけたかのような、とても氷とは思えない硬質な音が響く。それも連続で。

それを全て回避した先には爆豪が待ち受け、しかしそれでとどまらずに、視界の端には緑谷と飯田が体勢を立て直してスタンバイしているのが、ヒーロー殺しの目には見えていた。

「ハア……個々のあり方はともかく、雄英の教育はきちんと身を結んではいるようだな。それぞれの役割をきちんと適切に割り振った上で、身の丈に合ったペースを守って戦っている……しかし、数の利点を潰すことはせず、絶え間なく攻めることで疲弊を誘う……優秀だ」
敵であるはずのヒーロー殺しからの賛辞。

誰一人それに顔色を変えることはない。ただ隙を見せることなく攻め続けている。

（攻撃役はあの爆発小僧。それを近距離と中距離から、緑の小僧と氷炎の小僧がそれぞれ支援しつつ攻撃。中距離の支援と、装備の防御力を生かして長身の娘が盾役を担い、白い小僧——インゲニウムの弟は、機動力を生かした遊撃と、味方の離脱役。よく考えられている）
だが、と心の中で続けながら、ヒーロー殺しは刃を握り直す。

（それでも、その先に育つ者が社会にとって癌足りうるのなら……それは粛清対象だ。育つべき、真にヒーロー足りうる者達のためにも……『英雄』を取り戻すためにも）

「誰かが、血に染まらねば……！」

冷たい決意を目にたぎらせて、刀を振りかざした。

そこから始まった戦いは、まさに死闘だった。

先程までよりも、恐らくは『本気度』とでも呼ぶべきものが違うのだろう。明らかに動きが速く鋭くなったヒーロー殺しの刃は、攻撃に防御に容赦なく牙を剥いた。

それまで突けた隙は無いも同然になり、防げていた攻撃は耐えるのが大変なレベルになり、そして……回避できていた攻撃が、そうはできなくなつた。

今までは手加減されていたのだと、嫌でも実感させられる。

特に緑谷は、今もなお、殺すつもりなら殺せているところを幾度も見逃されているとわかる戦いになっていった。攻撃の切り替えしの隙の一瞬に足を斬りつけられ、機動力を殺される。

その場からの離脱自体は永久と飯田の援護によってなされたが、恐れていたことが起こる。

ヒーロー殺しがこちらに向けて、永久と轟、緑谷に当たる軌道で、何本ものナイフを投げた。

しかし、緑谷はまだ体勢を立て直せていないがためにそれを回避できず、轟は……永久の体が邪魔になってそれが見えていない。

このままではまずいと判断した永久は、とつさにトレンチコートを脱いで、薙ぎ払うように振り回す。それによって、飛んできたナイフ全てを撃ち落とした。

しかし、それによって攻撃の手を止めてしまった隙に、レロ……と、ヒーロー殺しとその長い舌で刀をなぞるように舐めた。

その瞬間、緑谷の体に、十数分前に地上で体感したばかりの感触がよみがえった。体から力が抜け、動かなくなる。

「ごめん……やられた!」

「緑谷君!」

「っ……飯田、緑谷離脱させて。爆豪、轟……フォーメーション崩れるけど、ちつと耐えるよ」

「指図すんじゃないやねえ……デクなんざいなくたって元々……」

「言ってる暇ねえぞ爆豪。隙見せんな……終わるぞ、一瞬で」

右手に刀を、左手に軍用ナイフと思しき刃物を持ったヒーロー殺しを前に、3人に数を減らしたヒーローチームは、焦燥感を禁じ得ない状態で相對していた。訓練などとは違う、気を抜けば間違いなく死が待っている実戦で、ここからは先程までよりも不利な条件で戦わなければならぬ。

こちらの人数は減り、しかし向こうの本気度は上がったままだ。

ここから先、僅かでも呼吸を乱せば、喉笛が食いちぎられかねない。

そう理解して、先程までの勢いで攻めることができない彼らを、責めることはできないだろう。

そんな心中を知ってか知らずか、ヒーロー殺しは呼吸を整えつつ語る。

「エンデヴアーの息子……貴様は、いい……親の影響を過度に受けることなく、よくぞそうまで心を成長させた……。軍服の娘、お前もだ……雑念がないとは言わんが、躊躇なく他人を守るために身を投げ出せる気骨はなかなかないものだ……。だが、やはり貴様はダメだ、小僧……！」

心なしか一瞬前よりも暗く鋭いその目は、爆豪を見据えていた。

「デメエ、まだいうかこの……」

「強さがあるろうが、恐怖に屈しない精神を持つとうが、その果てに示す存在り方が歪んでいるのなら、それは『英雄』の名を穢す害悪にしかならない……貴様のような贗作が、オールマイトが打ち立てた英雄の定義を穢し、歪めるのだ……そのようなこと、あつてはならない……真の英雄が育つべきこれからの未来に、貴様のような贗作がいてはならない……」

それを聞いた瞬間、爆豪の方から『ぶちっ』と音が聞こえたような気がした。

……どうやら、今のヒーロー殺しのセリフが、彼の逆鱗に触れたようだった。無意識に手に爆破汗が染み出し、ボボボボボ、と音を立てるレベルで気が立っていた。

それも無理のないことだった。

爆豪の普段の言動からは想像もつかないだろうが……幼馴染である緑谷と同じく、彼にとつてのあこがれもまた、オールマイトなのだ。オールマイトが勝つ姿にあこがれた。

彼のように、敵に勝って、人を助けたいと思い、ヒーローを志した。途中で紆余曲折あり、また緑谷との関係ややり取りなどで余計にこじれている部分はあるが……彼にとつての根っここの部分は、今でもそれに違いはない。

それを否定された彼の憤りは、言葉にするのも難しいものだった。

「ぶっ殺す……！」

唸るようなつぶやきと共に、爆豪は加速して正面から突っ込んだ。

それを見て慌てる永久と轟。そして、落胆したようなため息をつく
ヒーロー殺し。

「ハア……やはり、論外だ。正しき社会のため、貴様はここで……殺す」

そして、刀を腰だめに構えて、恐ろしいほどの瞬発力で、こちらも正面から踏み込んできた。

正面から衝突するかと思われたが、その瞬間爆豪は、戦闘訓練の時に見せたような動きで上に飛びあがり、突っ込んできたヒーロー殺しの刃を回避する。

そして、そのまま突き抜けたヒーロー殺しの眼前に……

「……!?」

空中に放られている、手榴弾が姿を見せた。

爆豪の装備の1つで、彼の『個性』のニトロ汗を溜めて爆発させる武器だ。

轟と永久からは見えていたが、爆豪は回避する瞬間に、自分の体に隠して背中側にそれを投げていた。それも、爆破の煙で正面から見えづらく、また爆破そのものにも巻き込まれないように。

至近距離でそれを目にしたヒーロー殺しは、とっさに腕を前に出して顔をかばいつつ、しかし至近距離でその爆風にさらされることになった。

そして、その衝撃で動きが止まったところを、

「俺が……何だった?」

背後から今度こそ爆豪が迫る。

「この……クソボロボ布がア!!」

斜め上から叩きつけられた、両手爆破の爆風が、ヒーロー殺しを盛大に床にたたきつける。

(……ッ……逆上したわけでは、なかったか……だが……!)

全身に少くないダメージを負いながらも、その執念で起き上がり、爆豪がその後完全に離れる前に刃を振りぬく……と見せかけて、急いでその場から飛び退った爆豪の退避した軌道に、ナイフを投げた。

しかもそのナイフにはワイヤーがついていて、まるで鎖鎌のようにひゅん、と空を切って舞うように動き……爆豪の頬を浅く傷つける。

しかし、空中に飛び散ったわずかな血液目掛けてヒーロー殺しは舌を伸ばし……その瞬間、緑谷同様、爆豪の体から力が抜ける。

それを見て顔をゆがめ……しかし、轟と永久は、その後さらにはつとしたようになる。

「！　まずっ……」

「まさか……コイツ！」

「爆豪君！」

受け身もろくに取れずに墜落した爆豪目掛けて、刃を振り上げて迫るヒーロー殺し。

その前に爆豪を救わんと、エンジンをふかして最高速度で飯田が駆け寄る。

ヒーロー殺しもダメージを受けていて、万全ではない。この速さなら、それを追い越して爆豪を離脱させることもギリギリ可能だと見た飯田は、前傾姿勢になってさらに加速する。

……が、

「来るな飯田！　コイツの狙いは……」

轟の絶叫じみた声が聞こえた瞬間、

飯田の目の前で……ヒーロー殺しはほぼ180度と言っているくらいに急に方向転換し……

「お前だ！」

自分に刃を向けて構えた。勢いのついて止まれない、自分目掛けて。

急ブレーキをかけるも、間に合わない。

止まるよりも前に、ヒーロー殺し突き出した刃が、自分の喉元目掛けて突き立てられる。

加速があだとなり、またたく間に両者の距離は詰まる。もう1秒後には、自分の喉が貫かれているであろう光景を、飯田は幻視して……
「つつだああああ!!」

その直前、飯田目掛けて跳んだ永久が、その長い手足をフルに生かして無理やり距離をゼロにし……飯田のコスチュームの腰部分に指先を引っ掛けて、思い切り下に引っ張った。

がくつと大きく後ろに引っ張り倒され……その眼前を刃が通り過ぎていく。

下側をくぐるような形で、間一髪で串刺しの運命から逃れた飯田。

だが、完全に体勢を崩してしまったことには変わりなく、そこにトドメを指そうとヒーロー殺しは左手に持ったナイフを振りかざす。小ぶりの分、手の動きが速い。

が、視界の端にもっと危険なものが見えた永久は、とつさに飯田をかばうように上から覆いかぶさった。

「なっ!? 栄陽院く……」

こんな場面なので、いきなり上に乗つかられて赤面する、などということもなく。

むしろ顔を青くしていた。当然だろう、飯田からすれば、自分に振り下ろされる凶刃から身を挺して永久が飯田を守ろうとしているように見えただろうから。

だが、そこに飛んできたのは、ヒーロー殺しの攻撃ではなく……

「吹っ 飛べや!!」

倒れた姿勢をそのまま利用して、手のひらをこちらに向けた状態での、爆豪の両手爆破である。

恐らく最大威力レベルであろうそれは、完全に死角を突かれたヒーロー殺しと、飯田をかばった永久を同時に吹き飛ばした。

姿勢が無理やりだったため、威力が拡散して負傷するほどのそれではないが、大きく体勢を崩して転がる程度の爆風は巻き起こっていた。

そこを捕らえようと轟の氷結が迫るが、ヒーロー殺しは、本当にどこにそんな体力が残っているのかと思うほどにしぶとくそれを回避し、今度こそ飯田に凶刃を振り下ろそうとして……

その瞬間、体育祭で見せたような要領でタックルをぶちかます永久。

そのままヒーロー殺しの腰の所をがっしりと、左手ごとホールドして動きを封じる。

振り払おうと動くよりも先に……氷の壁を飛び越えて、全身に緑色のスパークをたぎらせて、緑谷が姿を現した。

（バカなの!? 早すぎる!?! O型とはいえ、まだ1分も経って……）

内心で驚愕しながらも、体に染みついた戦闘術はとっさにその身を動かした。

緑谷は見込みがある相手だ。殺すつもりはないだろうが、それでも自らの使命の邪魔をする以上、多少、いや大分手荒であっても排除するのにためらいはなかった。

手に持っていた刀を振りぬく先を変え、跳んでくる緑谷を切り払おうとして……

「レシプロ……エクステンド!!」

その瞬間、待っていたように跳びあがった飯田の蹴りの一撃が、その刃を叩き折った。

パキイン、と乾いた音を立てて、刃こぼれだらけの刃が半ばからへし折れ、空しく宙に舞い……それを叩きつけるはずだった少年が、氷壁を蹴飛ばした勢いで、連続空中前転しながら、その勢いを乗せて腕を振りかぶり……ヒーロー殺しの脳天に叩きつけた。

「カリフォルニアアアア……スマアアアアツシュ!!」

奇麗に頭頂部を打ち据えた緑谷の拳は、衝撃がヒーロー殺しの体を伝って床面にビシツ、とヒビを入れるレベルの威力だった。

ホールドして抑えていた永久にも『いだっ!?!』と少くない衝撃が行ったほどだ。

……にも関わらず、

「果たさな、ければ……。英雄、を、取り……。戻さなけ……。れば……。!」
「ただだけしづといんだ、こいつ……」

半分ほど意識は飛んでいるようであるが、なおもうわごとのように言い続けるヒーロー殺しの体を、永久は一旦放して自分も少し離れる。

しかし、その直後に前のめりに倒れそうになった時、それを背中側から抱え直して持ちあげ……

「いい加減に……寝ろ!!」

そのまま、思い切り床に背中から叩きつけるパワーボムの餌食にした。

緑谷の攻撃で入ったひびがさらに1周りほど大きくなり、今度こそ完全にヒーロー殺しは沈黙した。

第54話 TS少女と事件解決

時刻は午前10時ちよい過ぎ。

本日の天気は気持ちのいい快晴。しかし、カーテンは閉められているので外の景色は見えない。

まあ、今やつてることを考えれば、カーテン開けっ放しにしとくのはまずいのはわかるので、仕方ないけども。

私は今、ベッドの上で上半身裸になり——無論、ブラもつけていない。ガチのトップレスだ——前から後ろからじろじろと見られたり、手であちこち触って、具合、ないし感触を確かめられたりしているところだ。身動きは指示されたもの以外は許されず、なすがままにされている。

時折『ひゃ』とか『ん…』とか声が漏れそうになるけど、恥ずかしいのでどうにかこらえている。

今だけ我慢すればいい。この時間も、すぐに終わる…：もう少し耐えていれば、終わってくれる。私は、キレイな体で解放されるのだ。時間にして数分もなかったであろう、しかし妙に長く感じた、その試練の時は…：ようやく終わりを告げた。

「はい、ちゃんと全部、跡も残さずきちんと治ってるわね。今日の午後、もう退院していいわよ」

エロいことされてると思った？ 残念、単なる診察でした。

もちろん、見てくれたのはちゃんと女医の先生である。

きちんと私は『ありがとうございます』とお礼を言って、病人着にそでを通して着る。

きつちり前のひもを締めてからカーテンを開け、かなり高いところまで登ったおひさまの光を病室内にご招待。その上で、退室する先生と看護師さんを見送った。

☆☆☆

あの後起こったことを、かいつまんで説明しよう。

まず、気絶させたヒーロー殺しを拘束し、爆豪の当初の案通りに、轟に氷塊で階段を作ってもらい、それを上がって上に戻ろうとしたんだけど……なんか、崩れた後の穴が瓦礫でいい感じに埋まって、通れそうになかった。

道理で上の方に見える光、やけに小さいなと思った……。穴崩さないようにゆっくり瓦礫どかして、脱出経路確保から始めることになったよ。

それも数分で普通に終わったからいいんだが、その後にもまた一波乱……いや、二波乱？ いや、まだ起こってないものも含めれば三波乱かな？

まず、脱出した私達の目の前には、当然ながらさつきまで一緒に戦っていたプロヒーローの人達の姿があった。

エンデヴァー、ベストジーニスト、グラントリノ（飛んで私らを救出しに行こうとして通れないからどうすっかなーって考えてたらしい、下手に崩して崩落したらヤバいからって）、そしてその他何名か。しかし、なんか見覚えのない人たちが増えてたんだよね。2人ほど。

そのうちの1人は、どうやら飯田の職場体験先の事務所の人……ノーマルヒーロー・マニユアルさんであるらしかった。飯田、その場で叱られてた。

しかしもう1人は……身長2mくらいある、やせ型にメガネのサラリーマン然とした男性。

どこかで、あるいは何かの資料とかで見覚えがある顔だったので、どうにか思いだそうとしてたんだが……それより先に、緑谷がその正体を言い当てた。

その名は、プロヒーロー『サー・ナイトアイ』。

派手にメディアに出てくるタイプのヒーローではないが……かなり有名なヒーローだ。

かつてただ1人、オールマイトの相棒サイドキックを務めた男として。

何でこんな隠れた大物がここにいるんだときよつとしたが、どうやらグラントリノに用事があつて会う約束をしてたが、この事件が起こつたので加勢しにきたそうナ。

マジか、そんな偶然あるんだな……すごい人に会つちやつたよ……
……と、思つてたんだが……どうもその約束とやら、も1つ裏に何か事情があるらしいんだよなあ……聞く限り。ないし、観察する限り。

それはまあ置いて……波乱、2つ目へ行こう。

飯田が怒られたり、緑谷が怒られたり、轟が心配されつつ怒られたり、爆豪が怒られたり、色々あつたんだが……その直後、拘束したはずだった翼の脳無が復活して、逃げようとした。

で、その際、なぜか緑谷をつかんで飛び去ろうとした。とつきのことだったので、その場の誰もすぐには反応できなかった。

しかし、例によってベストジーニストが『ファイバーマスター』で脳無が履いてるズボンの繊維を操つて動きを制限し、その間にグラントリノかエンデヴァーあたりが撃ち落とすか……と思われたんだが、それよりも早く動いた者がいた。

飛び去る時に落とした脳無の血液が、その場にいた女性ヒーローの1人の頬にかかつてたんだが……それをすれ違いざまに舐め取つて、ヒーロー殺しが飛び出したのだ。

武器全部取り上げた上で拘束したはずだったんだが、どこに持つてたのか、折り畳みナイフでロープを切つて逃れたらしい。

女ヒーローの頬を長い舌でレロツ……と舐めた瞬間の絵面は、それはもう色んな意味でヤバかつた(タイミングよく? 悪く? 見ちゃつたんだよね私)んだが……それはさておき。

ヒーロー殺しの個性『凝血』によつて、脳無は動けなくなり墜落。緑谷も取り落とした。

緑谷はそのまま落下したと同時にそこを離れたものの……入れ違いに脳無に飛びかかったヒーロー殺しが、その頭部にナイフを突き立ててそれを殺害。その上で、私達に……というよりも、エンデヴァー

やバストジーニストといったプロヒーロー達に向き直った。

トップヒーロー2人、トップヒーロー相当2人というこの状況下で、なおも『逃げる』ということを選択せず、自分の信念の通りに『偽物』を殺そうとして。

直後にやはりバストジーニストが『個性』でその衣服を操って拘束していた。腕も足も動かせないように……さらにははためいているマフラーっぽい布まで操ってぎっちぎちに縛ってた。

それによって動けなくなっているというのに……その時私達は、奴から目を離せなかった。

『『贖物』……正さねば……』

『誰かが血に染まらねば……！』 『英雄』を取り戻さねば!!』

『来い……来てみる、贖物共……俺を殺していいのは、本物の英雄だけだ!!』

動けないとわかっているのに、その気迫だけで……その場にいる全員が気圧されていた。

その直後、ヒーロー殺しは……元々、体力やら何やら限界に達していたらしく、立ったまま気を失っていた。

それが分かった瞬間、私達のほとんどが、足腰から力が抜けて、道路にへたり込んでしまっていた。私達職場体験生から、プロヒーロー達まで。

エンデヴァーすら後ずさりするほどに凄まじい威圧感は……今こうして、どっかの誰かがネットにアップしてる動画を見ても思いません。

(どこの誰がこんな動画、あの場面で撮ってたんだか……あつちこつちの動画サイトに、UPされては削除されての繰り返し。こりやネット上から完全に消すの無理だろうな……あちこち荒れるぞ)

その後、ヒーロー殺しは逮捕され、私達もほとんどが結構な傷を負っていたので、詳しく検査したりするのもかねて、全員入院した。それが、昨日の夜のこと。

私は1人だけ女なので個室だが、男連中は4人同室だそうさ。

この後、遊びに行く予定である。あと、何か全員集めて話もあるらしいし。

その時に話されるであろう事柄こそが、3つ目の波乱なわけなんだが。

で、やってきました男病室。

私は病人着……ではなく、雄英の制服である。ベストジーニストの事務所の人が持ってきてくれた。

この後、このまま事務所に直帰して、職場体験に復帰する予定だからだ。私と爆豪は、ほとんどケガもなく、すぐにでも退院できる体だつてことが分かったからね。

私の場合だけど、昨日は体のあちこちにあった打撲痕とか色々も、既になくなって綺麗な体というか肌を取り戻してるから。斬られた傷もないし……なんだつたら、傷とかの半分くらいは、途中の避難誘導とかの時に、倒れて来た信号機受け止めた時とかの奴だし。

そんな感じなので、もう私はそろそろ退院できるわけだが、その前に全体で色々話すことがあるつてんで、男部屋に来たのである。

来てみると、緑谷と轟、飯田が病人着で、爆豪がもう、私と同じで退院するところつて感じだった。爆豪も、細かいのを除けば切り傷程度だしな。

部屋にあった椅子に座って適当にくつろいでいると、病室のドアがノックされ、グラントリノとマニユアル、それに……何かスーツ着た犬の異形型っぽい方が来訪。

その犬の人、面構さんというらしいが、なんと保須警察署の署長さんなんだとか。えらい大物来たな。

思わず立ち上がったって礼しようとしたところ、『そのままでもいいワ』って……気遣ってもらったのはありがたいけど、語尾……。

で、どういう話をしに来たかと思えば……なんか、職場体験中の無免許の学生が、担当のプロヒーローの許可なしに個性を使って戦闘、犯罪者とは言え、ヒーロー殺しその他に対して危害を加えたことが問

題になります、的なお説教だった。

それに対して、爆豪はまあ予想通りとして、轟も『じゃああそこでプロの人や飯田を見捨てればよかったのか!』ってけっこう切れたり、『結果オーライなら規則などやむやでいいとでも?』的な話になってヒートアップしそうになってた。

が、その話にはまだ続きがあり……これらの事実を公にすれば、皆処分は免れないものの、あくまで私達を『巻き込まれた被害者』とし、ヒーロー殺し確保やら何やらの功績はエンデヴァー達のものにしてしまうことで、まあ、言い方は悪いが隠蔽が可能だとのこと。

あの場にいたヒーロー達に口止めは既に完了しているので、あとは私達がきちんと口をつぐめば万事オーケーだそうだ。手早いな。

面構さん曰く、『前途ある若者の偉大なる過ちにケチをつけさせたくないんだワン』だとき。ありがたい。皆できちんとお礼言いました。

ただその後さらに詳しく聞いたら、そもそも今回の話、何が何でも処罰される対象になるのは(隠蔽しなければ)、実は飯田くらいのもらしい。次点で緑谷。

というのも、私は終始きちんとベストジーニストの指示に従って行動してたし、崩落に巻き込まれた後のことはそれこそ本当に事故だ。お互いにベストは尽くしていたので、非はない。

次に緑谷だが、彼はグラントリノの『座つてろ』という指示を無視しているものの、その後の行動……避難誘導の手伝いとか避難民の護衛とか、そのへんはこちらもベストジーニストの指示及び監視の元行われているので、無許可とか無監督で云々って部分はあまりない。

その後さらに『飯田がいなくなった』という連絡で行方くらましたのはアレだけでも。

爆豪と轟は、目を離れた扱いにはなっているものの、監督者であるエンデヴァーが『まあ大丈夫だろう』として認めた扱いにすれば、なかったこと、あるいは大丈夫なことにはできるらしい。

飯田だけは、自分からマニュアルさんから離れるわ、ヒーロー殺しに積極的に襲い掛かるわでツツコミどころ満載だけでも。

隠蔽のことも含めて、総じて皆『じゃ最初からそう言つてよ』的なことを皆思つたものの、本来ダメなことであることに変わりはない。きちんと話してきちんと反省してもらう必要があつたんだつて、ぴしやりと言われた。ごもつともです。

そんなわけで、ベストジーニスト以外の監督役のヒーロー達には、監督不行き届きでいくらかの罰則が科せられるそうだが、そんな大したものではないということだった。

調子のいいもの言いかもしれないが、よかつたよかつた。

こうして、私達が『ヒーロー殺しを捕縛した』という功績は、罰則なしと引き換えになかつたことになつたので、私達は回復し次第、それぞれ職場体験に戻ることになつた。

さつき言つた通り、私と爆豪はもう今日退院。

轟、飯田、緑谷はもうちよつと検査とか治療でかかるそうだ。

特に飯田は、左腕の傷が少々酷くて、軽い後遺症が残るらしい。手術すれば治る見込みもあるそうだが、何だか色々考えているようだ。まだ纏まらないっぽいが。

とりあえず、まだ入院する3人には、私特製の『エネルギー入りカフェオレ』を1人1本進呈しておいた。緑谷に『いつもの奴だから』つて言つたらすぐ分かつたようだ。説明とか任せる。

なお、材料は例によつて私の『エネルギー』と、病院の売店で買ったカフェオレだ。

ゆっくり休んで、元気になつてからまた頑張つてくれよ。無理はよくないからな。

こうして、波乱の『ヒーロー殺し』騒動は終わりを上げ……私達はそれぞれのタイミングで、残る日程の『職場体験』を全うするべく全力を尽くすこととなつたのだつた。

今日を入れて残り4日。頑張ろう！

……ああでも、1つ気になることがあるつちやあるな……

ズバリ、緑谷のことだ。

怪我が心配とかはまあいいとして……そろそろ緑谷が、恐らくは抱

えているんであろう、何らかの秘密って奴が気になってきた。

謎が多い『個性』のことを筆頭に、この職場体験中も気になった点がさらに増えたからな……

ごく最近『個性』が発現したっていう遅咲きっぷり。

技という技がオールマイトリスペクト。まあ、これはただ単に緑谷がヒーローオタクで、オールマイト大好きだからってことかもしれないが。

以前梅雨ちゃんが言ってた通り、オールマイトによく似た『個性』。体育祭の時に轟が言ってた通り、オールマイトに目をかけられ、たびたび個人的に呼び出されたりしている。

そして今回の職場体験。指名を受けた4000件以上の事務所の中から、オールマイトの恩師であるグラントリノを選択……というよりも、そのグラントリノから指名をもらっているっていう点の方を見るべきか。

挙句の果てには、メディアへの露出が決して多いとは言えない、オールマイトの元サイドキックであるサー・ナイトアイの来訪。

グラントリノに会いに来たって言ってたけど、それって果たしてグラントリノ『だけ』に会いに来たんだろうか……？

『遅咲き』を除くこれら全てに共通する事項……それは、『オールマイト』だ。

本人には目をかけられ、彼と関係のある人達とも関わりを持っていつている。一体何でもここまでのことが、緑谷の周囲では起こるんだ？

一体彼は……どんな秘密を抱えているのだろうか？

(……ま、気にはなるが……荒立てて詮索するつもりはないってことで。知るとしたらその時は……彼の方から話してくれた時だ。そんな日が来るかどうかは分かんないけど……気長に待とう)

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

体育祭で優勝した、っていう1つの事実は……どこか、僕をうぬぼれさせていたのかもしれない。

その後、栄陽院さんに貰った『ご褒美』や、登校途中に色んな人にちやほやされたのも含めて……もう僕は昔の僕じゃない、なんて、すこし傲慢に考えた気がした。

幸いと言っているのか、それについては、初日にグラントリノが叩きなおしてくれたし、色々経験も積ませてくれた。アドバイスも貰った。

前よりもさらに強くなれたであろう自覚はある……それでも慢心することは厳禁だけど。

それに、今回のヒーロー殺しとの一件で思い知らされたからな……僕、まだまだ未熟だって。

僕、かつちゃん、轟君、飯田君、栄陽院さんの5人でようやく戦えたんだから。

ヒーロー殺しがトップクラスの凶悪『敵』だったってことを差し引いても、僕が最終的に目指すものは……それくらい、あるいは笑ってそれを乗り越えられるだけの力だ。まだ足りない……オールマイトの期待に応えるには、『ワン・フォー・オール』を使いこなして、オールマイトの後継者になるには、まだまだ足りない。

極めつけは、あの日、全てが終わった時に会うことができた……『サー・ナイトアイ』の言葉。

どうやら、グラントリノが会う予定をしていたっていう人は、彼だったようだ。オールマイトの元・サイドキック。『ワン・フォー・オール』についても知っている1人だった。

その用事っていうのは他でもない……僕を見るためだったらしいのだ。オールマイトが後継者を選んだ少年が……当時中学生の、しかも無個性だったそれが、どんな男なのかと。

その彼から僕は、

『……及第点ではある。もっと正確に、もっと厳しく言えば、『どうか落第点ではない』というべきかもしれない』

『だが、今のままでは到底足りない……君のことを認めないわけではないが、正直に言おう……私は『ワン・フォー・オール』には、よりふさわしい人物が、後継者がいると思っている。その者に譲渡せよとまで言うつもりはないが……君がこの先もその力を使うならば、自身が『平和の象徴』足りうる存在であると、私程度納得させられなくては、どうする、といったところが正直な気持ちだな』

『オールマイトの限界は近い……その時、この国が必要とするのは、僅かな希望、かすかな光ではない……確かな希望と、まばゆい光だ。それだけの輝きを、君は示すことができるか？』

『口では言わなくていい。オールマイトからそれを受け取った以上……行動で示してもらいたい。私のような青二才に、文句一つ言わせない程度には……なってみせろ、緑谷出久』

厳しい……しかし、もつともな言葉だった。

オールマイトの後継者として『平和の象徴』になる。それはどう考えても、並の人間にできるようなことじゃない。

それこそ、トップヒーロー級の力があってもなお、万全と言っていかなんてわからない領域だ……今だに数えるほどしか実戦を経験していない僕には、夢のまた夢だ。

が、そんなこと言ってられる余裕はない。

というか、夢なんて言っちゃいけない。僕は、そこを目指さなきゃいけないんだ。

今はまだ、力を受け継いでから間もないから仕方ない、これから徐々に強くなっていくんだとしても……全然、今の力じゃ足りないのは、最低限明らかになった。

明らかになっただんなら、放置していいはずがない。もつともつと努力して、強くならなきゃ。

とりあえず、退院後にもつと強くなれるよう、グラントリノに相談するの……雄英の先生たちにも……そして何と言っても……

(『デウス・ロ・ウルト』……栄陽院さん達に紹介してもらった、本気でトップを狙う強化プログラム……！)

目指そう、もっともつと上を……

そのためにできることは、何だつてやる……やつて、乗り越えてみせる！

まずは少しでも早く傷を治すため、もらった『エネルギー』入りのカフェオレを一气飲みしながら、僕はそうして決意を新たにした。

第55話 TS少女とテレビ局

職場体験4日目、午後。

今日からさあまた勉強の時間だ……と思ってたんだけど、予想に反して今日は『ジーニアス』で、簡単に今後の予定の確認と、今までの復習をするくらいで終わった。基礎トレへの参加すらなく。

曰く、『昨日あれだけのことがあったんだから、療養も含めて今日くらいは休むといい』とのこと。

傷はすっかり治ってるんだが……せつかくのご厚意だし、甘えておくことにした。

ただ、それ以外に、いつもの仕事と違うことがあったな。

こういうかなり大きめの事件に関わった時にはままあるらしいんだが、事務所全体で、マスコミ関係者やら何やらに対して『どう対応するか』どこまで情報を公開するか』っていうのの意識ないし方針の統一を行っておく、というものだ。

それ自体は、資料を何枚か用意した、簡単な打ち合わせみたいなものだったけど、プロはやっぱりこういう部分にも気を遣うんだな、って実感した。

その後は、これまたいつもの仕事とは違って、事務所で委託しているカウンセラーから、何か精神面での問題がないかどうかカウンセリングを受けた。

これも、大きな仕事の後や、強くないし凶悪な『敵』との戦いの後なんかは実施してるんだそう。心に傷を負ったままでうやむやになったりしないように。

ベストジーニスト事務所……福利厚生も、公私両面のアフターケアも半端ない。勉強になる。

☆☆☆

職場体験5日目からは、いつもの感じに戻った。

午前中に基礎トレとパトロール、午後に事務作業実習を含めた座

学。

この日は、これといって特筆すべきこともない1日だった。

……あ、いや、そうでもなかったな。

例の『ヒーロー殺し』の一件を知ったクラスメイト達から、めっちゃ連絡来たから。

今日になって警察から公式に発表がされて、『エンゲヴァーとベストジーニストがヒーロー殺しを逮捕した』っていうニュースに加え、本人達による記者会見も行われた。

加えてそこで、私を含む雄英の職場体験生5名が、『不幸にも』それに巻き込まれてしまったことに関してでも触れられたので、確定情報としてそれを知った皆が連絡を寄こす寄こす……

麗日なんかの一部の友達は昨日のうちにくれてたけど、表ざたになつてより騒ぎが大きくなると、流星にどうか、学校で会うのを待てない人も多いようで。

女子メンバーからは全員。男子メンバーからも、仲いい奴からは結構連絡来た。主にお弁当仲間の砂藤と瀬呂、それ以外でも何かと縁のある尾白や常闇あたりから。

ちなみに耳郎からは『あんたまた変なハプニング起こしてないわよね?』って心配?された。

変な、つていうのは、多分アレだ……例によって脱げてないかとか、セクシー系の意味だろう。今回は珍しくそういうことはなかった、と言っておいた。

……いや、ホントのことだけださ……自分で珍しくとか言っちゃったよ。

もちろんいずれにも、詳しいことは……というか、隠蔽に関わることは話してないが。

そして6日目。今日はなんか、気分転換もかねていつもと違うことをすることに。

「テレビ局へ!?!」

「ああ。事務仕事に関しては、職場体験で教えられることについては

……復習も踏まえて、昨日までで大体終わった。だから今日は、メディアというものへの対応などについて学ぶ意味も込めて……私の取材についてきて欲しい」

なんでも、今日はどつかのテレビ局で依頼された仕事が2件入っているとのことで、その付き人代わりに私を連れていくとのこと。

内容は、インタビュー映像の撮影と、雑誌の取材。どちらも敵ワイランとは全く関わってこないし、私の出番もない。

あくまで私は、付き人ないしマネージャーとして、雑務を担当するためにベストジーニストに同行する形だ。その仕事だって、そこまで難しいことではない。

経験を積む機会でもあるので、それを承諾。

パトロールを兼ねて公共交通機関とタクシーを乗り継いでそこに向かった。

入り口の警備員に対して、ベストジーニストは顔パスで、私はきちり通行許可証（事前に貰っておいた）を確認された上で通る。

中に入ると、やはり有名ヒーローってことで一気に視線が集まるものの、すぐにそれもなくなつて、皆自分の仕事を続けていた。

基本的に報道関係者の仕事場だからな。そりゃ、駆け寄ってくるファンなんてのもいないか。

すれ違う関係者と思しき人達に『おはようございます！』と声をかけられつつ、こっちも『おはよう』『おはようございます！』と返して奥に進んでいく。勝手知つたる、ということなのか、案内板も特に見ずとも、ベストジーニストの足取りに迷いはない。

……しかし、こういうのの業界人の仕事場での挨拶って、何時だろうと関係なく『おはようございます』って言うんだっての、ホントなんだな。

そんなくならないことを考えつつ、控室を目指して歩いていた。

その途中の廊下で、今日はどの部屋が自分の控室か見る時にだけ、初めて掲示物の一覧表を見たベストジーニストだったが、それと同時に、向こうから歩いてくる陰に気づく。

それは、同じようになり有名な1人のヒーローだった。

「おや、偶然だな……ガンヘッド」

「うん、そうだねベストジーニスト。これから仕事？」

顔を覆うマスクに、拳銃のリボルバーを思わせる籠手を装備した、何とも言えない物々しい見た目の男。バトルヒーロー『ガンヘッド』がそこに居た。

テレビとかで見て知ってはいたが……外見に反して口調は割とかわいい。生で初めて見た。

で、その後ろに……

「あ、永久ちゃん！」

「！ お前も来てたのか、麗日」

私と同じように付き人としてか、あるいはただの付き添いか……ガンヘッドの事務所に職場体験に言っている麗日が、同時にこつちに気づいて手を振ってきた。

どうやら麗日とガンヘッドがこのテレビ局に来てたのは、ガンヘッドが参加してるテレビ企画で『素人から始める護身術入門』っていうコーナーに出演するためらしい。

麗日はそれに出るわけじゃないけど、単に付き添いとして。

その後、『積もる話もあるだろうから、ちよつと2人で話してくるといいよ』とのガンヘッドからのご厚意で、共有の休憩スペースで、私と麗日は飲み物を飲みながら話すことに。

ベストジーニストも、テレビ局の人との打ち合わせまでまだ時間あるからって。

私は例によってカフェオレ、麗日はお汁粉（白玉入り）を飲んで一息ついたところで、やっぱりというか話題になったのは、例の出来事だった。

麗日はその翌日のうちに連絡くれてたからな。緑谷にも連絡よこしてたみたいだし。

無意識にだろうが……事件のことを聞いている最中、特に緑谷のことを心配しているのが伝わってきた。他の4人を心配してないわけじゃなくね、特にというか……1つ1つ気になって、聞かずにはいら

れない感じというか。

まあ、全然かまわないんだけどね、話せる事実を話す分には。

「ほな、その……ほんまにもう心配ないんやね？ 皆……」

「そういうこと。私と爆豪は翌日、そのさらに翌日には残り3人も退院したから。まあ、後の3人に関しちや、全部傷が完治したわけじゃないようだけど……雄英と違ってリカバリーガールみたいな治療の個性持ちはいないからな。ま、ヒーロー活動に支障がなければ問題ないだろ」

「よかった……テレビでも有名な『敵』に遭遇したって聞いたから、心配だったんよ……。一昨日電話した時は、デク君まだ病院やったし、詳しくは聞けなくて」

「よかったな、安心できて。そーそー、その緑谷だけだな、また更に強くなってたぞ？ まあそれは他の連中もだけど……きつちり職場体験先のヒーローに扱かれてみたいだな。麗日は？」

「うん！ すごく……有意義な時間を過ごせてるよ……！」

……うん？ 何だ？

今なんか一瞬変な気配が……麗日から武人のような雰囲気というか、オーラが立ち上ったような感じがしたんだが……え、何？ 気のせいか？

呼吸音が一瞬『コオオオ……』って感じのそれになったように聞こえましたが……え？ もし気のせいじゃなかったとしたら……。

というか、よくよく見てたら麗日、微妙に動きに『軸』ができてるような……ガンヘッドのどこで何教えられてんの？

次の瞬間には普通の麗日に戻ってたので、気のせい、だと……。

「そっかー……デク君、また強くなったんや。うちも負けてられんな。いろいろ勉強して、ヒーローとして一人前になるために力つげんと」

……いつもの麗日だ、うん。
緑谷のことを考えて……自分で気づいているかどうかかわからないけど、ポツと頬を染めて楽しそう、ないし嬉しそうにしてるこの感じは、紛れもなくそうだ。

……まあいつか、気のせいってことにしよう。

気のせいじゃなくても、別に人格形成に悪影響があるわけでもなきや、問題ないだろうし……。

なんてことを考えてたら、はっとしたように麗日が、

「せや、もーコ聞きたかったんやけど……ヒーロー殺しの現場にあの……『脳無』ってのもおつたんよね？ ニュースとかでも言われとるけど、やっぱ、ヒーロー殺しって『敵連合』と……」

「……その辺はわかんないんだよな、まだ。脳無が暴れてたのは事実だけど、犯行声明とかその類は依然としてないし……USJの時の、死柄木や黒霧を見たって話も聞かない。それにむしろ、ヒーロー殺しは脳無とも戦ってたし……」

戦ってたっていうか、普通に殺してたしな。

あの量産型を除いても……少なくとも、羽付きと太つちよの2体を。

最終的に、今回確認された脳無は、死体含めて9体だったそうだな。それ以上のことは、私達には知らされなかった。

『脳無』が『敵連合』の戦力であることに疑いはないが、一体、何を考えてあんなもんを、あれだけの数放ってきたのやら……

そもそも、ヒーロー殺しと『敵連合』……特に死柄木の行動原理？ みたいなのは、てんで違いすぎる気がするしな……ホントに両者が繋がったのかすら疑問だ。

仮にも信念を持って動いていたヒーロー殺しに対して、死柄木はどう甘く見ても『力を持った子供』にしか見えなかったし。アレって案外、死柄木がヒーロー殺しを殺そうとして、ついでに騒ぎを起こして悦に浸ろうとして脳無をけしかけたとかじゃないのか？

結局、これに関してはいくら考えても結論出ないんだよな……。

はあ、とため息をついた瞬間、向こうの方に……見慣れた人影が見えた。

思わず『うん？』って表情が変わってしまったって、それを見た麗日も『何だろう？』と振り向いて……その先にいた、何やら考え込む様子で歩いている八百万に気づく。

その後ろには、もう1人若い女子が……あのサイドテール、B組の

拳藤か？ ヒーローコスチューム、あんな、なんか……チャイナドレスみたいな感じなんだな。

たしか八百万はスネークヒーロー・ウワバミの所に行つてたはず……何でここに？

というか、八百万も拳藤も……あんな風に、髪にウェーブがかつてたっけ？

「うん？ アレって……A組の、麗日と栄陽院か？」

「えっ!? ほ、本当に……お、お2人とも、なぜここに!?!」

と、向こうの2人もこつちに気づいて驚いていた。

その後、2人も交えて女子トークに花を咲かせた。さっきの微妙に暗くなつてしまつた話題からの転換もかねて。

結果的にだけど、八百万、ナイス。

その八百万（と、拳藤）だが、ウワバミの付き人的な立ち位置で、パトロールとかはもちろん、こういうテレビ局での仕事にもついてくらしい。けっこうメディアに出てるヒーローだからな。

そして2人が今日、ここにいた理由だが……なんと、ウワバミのCM撮影のためらしい。

しかも、それに2人も一緒に出てるっていうから驚きだ……TVデビューしたんか、あんたら。

なんでも、ヘアスプレーのCMなんだとか。それで髪そんななつてんのか。

そのCMいつ流れんの？ 1か月後くらい？ へー、そうなの。

え、恥ずかしいから見ないでくれって？ いや、そんなどのチャンネルでいつ流れるかもわからないもん、無茶言うなよ。

その場での会話は、八百万が提供してくれた話題のおかげで、明るい空気のまま終わることができた。

その後、ベストジーニストの取材に付き合つた私は、その場の空気とかマスコミのやり取りとか、見稽古的に色々と学ばせてもらったんだが……雑誌の取材の際、私の存在に気づいた記者が、『まだ話題熱い人物だし一緒に取材したい』って言って来たのにはちよつとびっくり

したが。

なんか、雑誌は雑誌でもファッション誌だったらしく……背が高くても長いから、ベストジーニスト同様ジーニストズ似合いそうだし、ルックスもいいから絵になるって。取材と写真撮影、スタジオ借りて何枚か取りたいって言ってきて。

余りに熱のこもったアプローチ（体育祭の時の発目って子を思いだす勢いだっただ）に困っていると、『彼女はまだヒーロー科にすら入ったばかりで勉強中です』『私が預かって責任もって面倒見ている最中ですの』って、ベストジーニストが間に入って守ってくれた。

ただ、あんまりに熱心だったのと、ベストジーニストも結構お世話になっているプロデューサーも乗り気だったこと、そして、ベストジーニスト自身も私にジーニストズが似合うと思っていたことで……ごく簡単にインタビューと写真だけ受けることになっちゃったけど。いいのコレ？

まあ、悪いってこたないんだろうけどさ……さっき聞いたばかりだけど、八百万なんてCM出てるわけだし。

撮影含めてもほんの30分ちよつとくらいでさつと終わったけど、緊張した……

当然ながら、写真は雑誌に乗るらしい。特集のページの端っこにちよつとだけ程度くらいだろうとは言ってたけど。一応、関係者つてことでゲラの写しを送ってくれるそうだし。欲しいような欲しくないような。

☆☆☆

どこかにある、とある建物の中。

バーのような空間になっているそこで……カウンター席に座っている死柄木甲は、黒霧がどこからか調達してきた、何種類もの新聞を代わる代わる見ていた。

しかし、どうやらどの新聞にも、彼が見たがっていた内容の記事は乗っていないかったようで……苛立ちを隠そうともせず、チツ、と舌打

ちして……くしゃくしゃに丸めると、5指を使って握りしめることで、塵にした。

それを見て、バーカウンターでグラスを磨いていた黒霧がハア、とため息をつく。

「せめて普通にゴミ箱に捨てませんか？ あなたの個性で塵にする、床の小さな隙間に入り込むので、掃除するのも手間なのですが……」

「うるさい……くそ、どうして思い通りにならない？ 先生が脳無を9体もくれたのに……どこもかしこもヒーロー殺しヒーロー殺し……俺達の方がおまけ扱いだ」

『機嫌が悪いようだね、弔』

何の前触れもなく、バーに設置されたテレビが点灯し、その向こうから声が聞こえてくる。映像は伴っていない。

それを聞いて、手の形のアクセサリーの向こうから、じろりと死柄杓は視線をそのテレビに向ける。

『報道は僕も耳にしているよ。残念ながら、彼の名前の方が大きく広まっているようだけど……それでも、『敵連合』の名前もまた大きく広まったのも事実だ。それは気に入らないのかい？』

「ヒーロー殺しのおまけとして、だろ？ こんな形で広まったところで喜べるかよ……気に入らない奴がより一層ちやほやされて、壊せてないし、なぜかあのガキどもまでいるし……なあ先生、脳無は後何体いるんだ？ 最近、なんかすごい早いペースで作ってるって聞いたけど」

『まだいくつかいるけど、調整と実働試験を終わらせて使える状態なのは、この間全て出してしまった。しばらくは生産に注力しないといけないね』

「ちっ……」

こちらでも当てが外れたのか、面白くなさそうにする死柄杓。

憂さを晴らすように、黒霧がコップに注いだドリンクをぐくり、と

一気に飲み干す。

「ふは……いつそのこと、あのガキ共の誰か……1人か2人攫って脳無の材料にしてみたらどうだ？ 『個性』だけ見れば悪くないのが揃ってるし、素体にできそうなものもいるだろ」

そう言つて死柄木は、雄英体育祭の映像から抜粋して印刷した、自分が特に気に入らない生徒の写真を卓上に並べる。その最右翼に来ているのは……USJの時、策を弄して脳無を一時的にとはいえ無力化した上、自分の顔を殴り飛ばした少年……緑谷出久のそれだった。

雄英体育祭では、2人同時とはいえ優勝の栄冠に輝き、今最も話題となつている1人。今回の騒動でも、報道はされていないが、級友達との共闘の末にヒーロー殺しを退けた。

日の当たる道を目指して堂々と歩き、進む……まさに自分とは対極の人物。

他にも、轟や爆豪、飯田などの写真が並ぶ中……ふと死柄木は、1枚の写真を手取る。

それは……栄陽院永久の写真だった。

USJ事件の時には、火炎放射器を投げつけてきたり……他ならぬ緑谷出久を、身を挺して脳無の攻撃から守っていたのを思い出す。

結局、その直後にオールマイトが駆けつけたせいでもなかったが、それがなければこの女は死んでいたはず。それを承知で、緑谷をかばった。実にヒーローらしい思考だと死柄木は思った。

「コイツなんかどうだ？ ガタイもいいし……『個性』も割といい。素体にしてよし、『個性』を奪つてよしじゃないのか？ うちには回復キャラとか、ちょうどいいことだしさ」

『ふむ、その子か……実は僕も、その子……というより、その子の『個性』には興味があつてね、ちよつと調べてみていたんだ』

「へえ？ で、どうする先生？ 攫つて奪うのか？」

少し期待するような死柄木の問いに対して、画面の向こうの『先生』の返答は……

『まさか。いらぬいさ、あんな欠陥『個性』。頼まれたってお断りだ』

「……？ 欠陥、ってどういうことだ？」

予想していなかった言葉に、死柄木はそう聞き返した。

特に機嫌が悪いわけではない。純粹に、今の言葉の真意を測りかねて、というもののようだ。

『その話は……少し長い上にややこしいから、いずれね』

「……あつそ」

答えが返ってこなかったことにむしろ少し苛立ったのか、死柄木はその場で写真を全て塵にする。

『いずれにせよ今は無理だ。材料にするにも向き不向きがあるし、雄英のセキュリティは堅固だ。軽々しくそこまでのことはできないだろう。ちまちま動いても敵の警戒心を上げるだけ、行動を起こすなら、タイミングを合わせて一気に、というのが望ましい。これは前に話しただろうか？』

「……わかつてるよ。さすがに今回は……少し考える。ちょうど、脳無も補充する時期みたいだしな……今までと同じようなペースで作るのか？」

『向こうが思ったより順調に『進んで』いるようだからね……加えて、『あの個性』の持ち主が手を貸しているというなら、こちらも相応の準備が必要だ。弔、これからしばらくは……ヒーロー殺しが広げた波紋が、社会に広がっていく時間になるだろう。君にとっては面白くないことかもしれないが……何、悪いようにはならないはずさ。傷を癒しながら、待つて、考えてみるといい』

その言葉を最後に、テレビは沈黙した。

「だと、いいが」

静寂が戻ったバーのカウンターで、死柄木は、いつの間にか黒霧が用意してくれていた新しいドリンクのグラスを持ち、今度は少しずつ味わって飲み始めた。

(……『あの個性』ってのは……何のことだ……?)

僅かな疑問を、胸に残したまま。

第56話 TS少女と報告会

「資料、確認しました。短い時間でここまでの仕事……お見事です、アナライジュ」

『お褒めの言葉、ありがとう、イレイザーヘッド。私の仕事の成果……まあ、まず一区切りといったところだけど、お役に立ちそうかしら？』
「ええ……少々カリキュラムを組みなおす必要はありそうですが、まさに今、あいつらに必要とされているものでしょう。……荒療治とは言わないまでも、中々にハードなものになりますね」

その日は、雄英高校1年ヒーロー科の生徒たちにとって、『職場体験』が終わった翌日だ。

雄英高校の職員室にて、1年A組担任、イレイザーヘッドこと相澤は、何度目かになる電話越しでの打ち合わせを行っていた。

相手はもちろん、今回、生徒達を育てるためのプラン立案を依頼している、隠居したところを引つ張り戻して協力してもらったプロヒーロー……『アナライジュ』だ。

昨日までの『職場体験』の様子について、各ヒーロー事務所から報告が上がってきている、生徒達の『仕上がり具合』についてのデータは、雄英高校経由でアナライジュに送られた。

それが、昨日の夜7時頃のこと。

そして、それを元にして、ヒーロー科40人全員分の『強化プラン』他を完成させたアナライジュが、その案を雄英に送ったのが、今朝6時。

今は昼前の時間だ。朝早くに学校に来て、既に届いていたデータにどうにか目を通した相澤は、それについて最終確認等の意味で電話をかけていた。

『それにしても、今年の1年生は……恵まれてはいるけど大変ね。ただでさえハードな雄英高校のカリキュラムに、例年がない特殊な課題が加わるんだもの。1学期から試練の連続だわ』

「彼らが必要とされる状況に置かれているのも事実です。既に、今年夏の『仮免』取得に向けて、様々なカリキュラムを前倒しで

実施するよう調整が進んでいる。それなら……どうせやるなら徹底的にやるべきでしょう。中途半端で終わるのが、一番時間も労力も無駄になる」

『それは同感だけれどね……まあ、そのあたりの調整は、実施する側のあなた達の手腕に期待させてもらうとするわ』

「じゃあ、以後引き続き……ひとまずこいつらが半人前のひよっこになるまでを目途に、よろしくお願いします」

『ええ。それじゃ……私、徹夜した分これから寝るから、失礼するわね』

「ご苦勞お掛けします」

受話器の向こうで電話が切れた音を聞いた相澤は、一息ついて、自分も受話器を置いた。

そして、今しがた話していた資料が表示されているパソコンの画面を見て、不足な点がないことを再度確認し……印刷ボタンをクリック。

視界の端で、プリンターが動き始めたのをちらつと見て確認した後、しばし印刷が終わるまで、背もたれに体重をかけて体を預け、リラククスして待つことにした。ドライアイ気味の目に、目薬をさして潤いを補充するのも忘れない。

これから行うこととなる、ある『追加カリキュラム』……それに関係する、生徒個々人の課題やらデータがびっしりと書き込まれた資料。決して少なくない枚数ゆえ、そこそこ時間もかかる。

じんわりと目を潤すと同時に、目薬の薬効が視神経の疲れを取っていくのを感じながら、相澤はこれからのスケジュールに思いをはせる。

(これから中間試験を挟んで、期末試験まではしばらく基礎固めの時期が続く……その間にある、わずかな『暇』すら『力』に変え、生徒個々人の経験を形作るのが今回のカリキュラムの目的だ。上手くやれば、林間合宿を待たずして生徒達の実力水準は大きく上がる。平時から言えば、やりすぎ、ないし詰め込みすぎと言えるであろうスケジュールだが……今回は、このレベルが必要だ)

暫く待つて、印刷の音が聞こえなくなると、相澤は目薬をティッシュでふき取りつつ、印刷された資料を持って机に戻り、あらかじめ用意していた封筒にそれを詰めていく。

封筒は全部で42枚。それぞれ、生徒たちの名前が書いてある。対応した資料を、1枚1枚、間違えないように。

半分はB組の担任……ブラドキングの受け持ちだ。後で渡すため、自分の受け持ち分とは分けて置いておく。

「リスクもなくはない。博打の要素も大きい。それでも、乗り越えさえすれば……あいつらは強くなる。初日に言った通りだ……試練を用意してやるのが、壁になってやるのが、雄英の役目」

それでも、彼の目に迷いはなかった。

準備をここまで進めて今更だということもあろうが、それ以上に……彼は、教え子たちを信じていた。

『Plus Ultra』の校訓の通り、困難を乗り越えて見せてくれるはずだと。

☆☆☆

職場体験、つつがなく終了。

その後振替休日を1日挟み、登校日となった今日、1-Aのクラスではそれぞれが学んだことの情報交換……というか、『こんなことがあったぜ！』的な報告兼バカ話が行われていた。

サイン 敵 退治や事件解決に協力したという耳郎や梅雨ちゃん（密入国者逮捕したつて）の話もそうだし、メディアに顔を出してTVCMデビューすることとなった八百万とか、職場体験を通じて他のクラスの奴と友好を深めた切島とか、注目を集める話題はあちこちに転がっていた。

かと思えば、期待していたような経験ができなかったと、やや落ち込んでいる者もいたし……中には、体験先で何があったのか心配になるような変化を遂げている奴もいた。

前者は主に常闇や尾白、後者は麗日や峰田あたりである。

常闇はたしか、No. 3 ヒーロー『ホークス』の事務所に行ったはずだが……なんか、振り回されっぱなしで、1人で全部やってしまう彼の仕事の後始末とかしかできなかったらしい。

尾白は……こう、何と言ったもんか……新宿二丁目界隈を仕切る『二丁目拳銃』とかいう、『男で女』な特殊な立場のヒーローの事務所にいたんだとか。

色々身になる経験もできたそうだが、気苦労も多かった様子で……麗日は……なんか、7日間いっぱいそこで経験を積んだ結果、『ゴオオオ……』って不思議な呼吸音と共に、腰の入った見事なスクリューパンチ繰り出すようになってた。……あの時感じた気配は気のせいじゃなかったか。

なんかオーラすら纏ってるように見える……何に目覚めたオイ？
で、峰田が……『女は元々みんな、悪魔のような本性を隠し持っているのさ！』って影のある表情でブツブツ呟くように言いながら爪を噛んで……怖い怖い。

性欲の権化であるこいつがこんなになるとは……Mt.レディの事務所で見えたんだ？

「けどやっぱ一番大変そうだったのは……お前ら5人だよな！」
「そうそう、ニュース見てびっくりしたぜ。『ヒーロー殺し！』」

そんな、上鳴と瀬呂の声で、皆の視線が一気にその当事者5人……緑谷、爆豪、轟、飯田、そして私に集中する。

そりやまあ……話題にもなるわな。ニュースでも連日報道される超凶悪犯だつてのに加えて、保須市の一件では、脳無……すなわち『敵連合』まで絡んできたんだし。

当然と言えば当然だが、皆は発表された方の『真実』……エンデヴァーやベストジーニストが、今回の事件解決の功労者で、私達は巻き込まれたに等しい立場だつて認識していた。

まあ、じゃなきゃ困るんだけど。色々グレーゾーンのもみ消しなしいし隠蔽したからね。

その話の中で、上鳴がヒーロー殺しのことを『ちよつとカツコよくね？』って言っちゃったんだが……それを気にするかもしれない危

惧された飯田は、そのことについても自分なりに既に心の整理をつけていた。

動揺した様子もなく、はきはきと自分の考えを口にする。

「確かに奴は、信念の男ではあった。好感を覚える者が出るのもわかる。だがその果てに奴が選んだ『肅清』という手段。どんな考えの元であつても、それだけは間違いなんだ。俺のような者を、これ以上もう出さないためにも……改めてヒーローへの道を俺は歩む！」

と、いつも通りのカクカクした動きでびしつと言いつつ切る飯田を見て……私を含め、クラスメイト達は『もう問題なさそうだな』と悟つていた。

うん、この無駄に元気かつ、よくわからない動きとテンションあつてこそ飯田だよな。

なお、軽率なことを言ってしまった上鳴は『なんかすいませんでした』と謝っていた。飯田、別に気にした様子はなかったけども。

「けろ、でも、皆無事だったのは本当によかったわ」

「そだね……それはそれとして、他はどうだったの、栄陽院？」

「？ 他って？」

耳郎の問いかけの意味が分からず、聞き返す私。

「ほら、『ヒーロー殺し』の件も大変だったろうけどさ……あんたが職場体験行った事務所って、N.O. 4のベストジーニストの事務所でしょ？ 轟と爆豪はN.O. 2の事務所だし……やっぱこう、普通とは一味違うエリート教育みたいなのあったのかなって」

ああ、そういうことね。

見れば、他の皆もそのへんは気になるらしく、聞きたそうにこつちを見ている。

「まあ……色々だな。私の場合は、戦闘よりも、ヒーローやってく上で必要そうなスキルを広く浅く教えてもらった感じだから……事務手続きとか、実務関係とかだよ。ためにはなったけど……聞いてて面白くはないと思うぞ？」

「けろ、そんなことないわ。学校では普通には学べないスキルであることに変わりはないもの」

「それに、あんたのは明らかに普通じゃできない経験もしてるじゃん」
「? 何が? 『ヒーロー殺し』云々じゃなくてでしょ?」

「コスチューム! ネットに上がってる画像見たよ、なんかいつの間にか女番長から女軍人になってたじゃん。すごい凛々しい感じの」
「そうそう! カッコよかったよ永久ちゃん! 女の子だってわかってるのにドキツとしちゃったもん、思わず」

「絶対ファン増えたよねーアレ! 女の子の! 宝塚みたいになったもんね!」

ああ、まあ……確かにアレはあそこだからこそできた経験ではあるな。

考案・発注からわずか1日以内にあんな完成度高いのが届くとは思わなかったし……性能もばっちりの出来だったから、大満足で今も使わせてもらってるし。

芦戸と葉隠に見せてもらった、ネット上での反応とかは、それでも少しびっくりしたけども。

なんか専用のスレッドとかも立ってるし……そこでは『壁ドンされたい』とか『お持ち帰りされたい』とか『リアル男装の麗人』とか『女だけ惚れた、結婚したい』とか書いてあるし……。

あと中には、『触手ヴィランはよ』『プリーズくっころ、ワンモア』『企画モノ全裸待機』とか、なんかヤバそうなコメントも……大部分は後で運営削除されてたが。

それに加えて、私が勉強した事務関係のスキルについても、話してみると意外と好評だった。

梅雨ちゃんが言った通り、普段の学校の授業や、手に入る資料なんかでは学べない、実際のヒーローの現場の仕事に関わる情報は、人にもよるが面白くて興味深いものだったようだ。

私が話すと、今度は皆の興味はエンデヴアー事務所に行った2人に移った……が、爆豪は聞いても答えてくれないだろうな、とみんなわかってたので、質問は必然的に轟に集中する。

「そうだな……基礎トレとして体を鍛えたりもしたが、事務所の地下にある訓練室を使って、炎や爆破の細かい制御なんかも教わってた

な。栄陽院のことと違って、こっちはかなり実戦向きというか、実力主義の現場主義で、とにかく見て、やって覚えることが多かったと思う」

「個性の訓練もやったの？ ってことは、やっぱ炎熱系用のトレーニングルームとかあったんだ？」

「事務所のボスがアレだからな。資産だけは無駄にある奴だし……ヒーロー活動そのものには真面目に取り組む奴だっただけは、今回の職場体験でわかった。その辺の投資感覚なんだろう」

「なるほど、やっぱ事務所によって違うんやねえ……ガンヘッドさんところには道場あったわ。畳とフローリングと、あと……なんかレスリングとかできそうなマットの床もあったし、ランニングに使える屋内レーンもあったな。色々な武術の勉強ができるように、ってことみたいやったな」

「さすがバトルヒーロー、修行スペース充実してんのな。こうして見ると、やっぱ事務所の設備も、どんなヒーローやってるかによって違うんだな」

「そのようですわね。ウワバミさんの事務所は……メイクに使える大鏡があったり、衣装や化粧品が充実していましたわ」

そんな風に再び職場体験談義に花が咲く中、ふと気づいたように耳郎が、

「ていうか、麗日、元に戻ったの？」

さつきまで『コオオオ……』な呼吸で武人になってた麗日が、いつものぼわぼわ女子に戻っていた。よかった、こっちの方がなんかやっぱ安心するわ……

「え、あ、うん……ごめん、ちょっとその、結構濃い7日間やったから、その……忘れないようイメトレしてたら、なんかフラッシュバックしてもうてた」

「え、大丈夫なのそれ？」

……まあ、訓練の成果が身にはなってる、ってことでいいんじゃない……かな？

第57話 TS少女と救助レース

S i d e . 緑谷出久

その日の一番の目玉は、『オールマイト、登場の挨拶ネタ切れ疑惑』で始まった『救助レース』だった。

工業地帯を模した運動場で行われたその訓練は、運動場の外からいかに早く要救助者の元にたどり着けるか、というのが課題で、いくつかのチームに分かれて、タイムを競う形で実施された。

入り組んだ複雑な構造ゆえに、立体的に動ける瀬呂君やかつちやん、常闇君あたりに特に有利だと思われたけど……これだけ建物が密集してて、しかも構造が入り組んでいるなら、足場があちこちにあるのと一緒だ。フィジカルを生かせる僕や栄陽院さん、砂藤くんなんかにも相性がいい。

その分、足場が不安定だったりするだろうから、落下事故なんかには注意が必要だったけど……最初の組だった僕は、この1週間の間にさらに上手く使えるようになった『フルカウル』のおかげで、瀬呂君に1分近くの差をつけてトップでゴールできた。落ちないように慎重にやってこれなら、かなり上達したって言えるんじゃないかな。

1位通過の証である、オールマイトお手製らしい『助けてくれてありがとう』のたすき(そのままくれるらしい。家宝決定)をかけて観客席に戻ると、麗日さんや切島君、栄陽院さん、八百万さんなんか『すごいねー』って褒めてくれたのは嬉しかったな……オールマイトにも褒められたし。

慢心するつもりはないけど、こういう空気の中にと、自分が多少なりとも上達したんだってことが実感できる。

褒められるためにやってるんじゃないとはいえ、やっぱうれしいな。

これをモチベーションに……もつと頑張ろう。繰り返しだけど、慢心だけはしないように。

(……中学時代じゃ、考えられないことだよな……あの頃は、『無個性』だったから、雄英のヒーロー科に行きたいって言っても笑われるだけ

だったし。まあ、気ばかり逸って、けど何も具体的に努力なんてできなかつた僕にも原因があるんだらうけど」

最近こういうことを考えると、ふと思ってしまうことがある。

あの頃も……例えば、『無個性』だって言われたことにもめげず、諦めずに、トレーニングとか続けてたら、僕の人生はもう少し違つたんだらうか？

クラスみんなや先生にも、僕の夢を一笑に付されたりすることはなかつたんだらうか？ 『君の努力はすごいと思うけど、現実を見たほうがいいよ、危ないよ』くらいにソフトに言ってくれる人がいたんだらうか。

かつちゃんも、何か態度を違く……する様子がちよつと想像できないけど……

……過ぎたことを今更悩んでも仕方ない。ここまでにしよう。

けど、この気持ちは忘れないようにしよう……もう、無駄に人生の時間を使うのはやめよう。できる努力をしないで、後になってから後悔したりするのは、もうたくさんだ。

幸いにして、僕は今、オールマイトと作った急造の肉体を、栄陽院さんの施術で最良に近い状態に調整してもらっている。足踏みしていた分の時間を、いくらかでも取り戻している。

だからここからは、使える時間をきちんと有効に使って、僕自身の努力で強くならないと。

「うん、もっと頑張ろうー！」

「もっと頑張るん？ デク君、やっぱ頑張り屋さんやねえ」

「えっ、うん、アレ……声に出てた？」

「あはは、うん。あ、ほら、次のレース始まるで？」

麗日さんの言葉に、ちよつと恥ずかしくて赤くなりつつ、モニターを見ると……ちよつと次の組のレースが始まるところだった。

メンバーは……かつちゃん、常闇君、栄陽院さん、梅雨ちゃん、葉隠さんか。

始まると同時に、かつちゃんは爆速ターボで加速……速ッ!?

「爆豪速ッ!?! え、何アレ、めつちやスピード出てねえ!?!」

「ロケットエンジンみてーだ……つか飛んでんじゃん普通に。小回りも聞いてるし」

「きちんと施設への被害も出さないようにしてるね」

切島君達も同じ感想を抱いたようで、啞然としている中、僕は轟君を見た。

彼なら、この光景を解説してくれそうな気がして。

「親父から、爆破を効率よく使った移動なんかについても聞いてたからな……ただ単に爆破を起こすだけじゃなく、どの方向にどう動きたいかにあわせて、爆破の規模はもちろん、形やスパン、それに圧縮と
いうか……密度を調整することで、より速く、より自由自在に空中を
動けるようにって」

「No. 2ヒーローの指導の成果か……そりゃ成長するわ」

「けど、No. 4ヒーローの方も負けてないみたいだよ？ ほら、永久ちゃん見てみ」

「え？ 栄陽院が何……うおおおお、何じゃありや!? 新体操!?!」

芦戸さんの声につられて別なモニターを見ると、栄陽院さんが、まるで体操の鉄棒か平行棒をやるみたいに、ダイナミックとかアクロバティックな動きで、壁から壁へ移動していた。

さっきまでの僕と同じように、フィジカルとテクニックに物を言わせた移動だけ……僕と違って手と足の長さ、そしてそこで生まれる遠心力なんかを存分に生かした飛び方だ。

すごいとは思うけど……僕が盗める、ないし参考にできる部分は少ないかもな。

「ふおお……ふつくしい……なんか、動き自体に鮮やかさを感じる」

「……9. 0」

「何の得点だ、峰田」

「ていうか、やっぱり軍服似合うよな……凛々しい」

「うん。手足も長いし、男性的な服装が映える……あれ、トレンチコート着てなかったかきさっき?」

「あ、私預かつとるよ? 激しく動くから邪魔んなるかもってゆーとってん」

あ、そう言えば栄陽院さん、黒の上下の軍服だけだな。まあ、どこかに引つかかったりすると悪いから、今回はコレつけないで行く選択にしたのか。麗日さんに預けて。

「ちなみに峰田、さっきの得点、残り1。0点って何よ?」

「胸が揺れねえ……あんなに激しく動いてんのに……くっ、色気はあるけど、フィットし過ぎってのもあれなんだよなあ! こうして見るとわかるぜ、軍服ってのはそれを脱がすところまで、そしてその際のリアクションや表情まで全部含めて初めてエロとして成立するんだよ!」

「そんな視点で見てるのはあんただけだよ」

み、峰田君はまた……。

耳郎さんの氷点下のツツコミや、皆のもの言いたげな視線もお構いなしに画面を凝視している。

しかし、そんな峰田君の煩惱に手を差し伸べる者が……意外なところにいる。

ゴールまでもう少しつてところで、道が交差する場所に出た栄陽院さんだったが……その行く手に、突如横の物陰から、常闇君と『黒影』が飛び出してきたのだ。

「えっ!?!」

「む!?!』『ア?』

——ガッ ン!!

「うわああ、ぶつかった!?!」

「い、痛そう……つてやべえ、落ちるぞ!?!」

クラッシュした直後、2人は空中に放り出されて……まずい、と思った次の瞬間、栄陽院さんがとっさに壁にズガン!と拳を突き刺して落下を止めた。

「常闇!」

「っ……すまん!」

そして、落ちそうになる常闇目掛けて手を伸ばす。

常闇は声を頼りに、振り向きざまに手を伸ばしてつかもうとして

……

——がしっ、ぶちぶちぶち！

腕をつかもうとしたみたいだけど失敗して……軍服の袖の部分をギリギリつかむにとどまった。

しかしそのせいで、小柄とはいえ男子、決して軽くはない体重をかけられた、彼女の袖の部分の布が引つ張られて……軍服のボタンが外れて（ちぎれてはいないようだ）、栄陽院さんの胸が大きくはだけて露わに……ッ！

「でかした常闇イ——!!」

一部の男子から歓声が上がる。誰かという説明は最早いらないと思う。

そんな状況下で、画面の中では……ちよつと表情を引くつかせている栄陽院さんが、動揺をどうにか押さえながら、語り掛けるようにして口を開き、

「……………あのさ、常闇」

「……………」

「お前が悪い奴じゃないのは知ってるんだ。こんなこと狙ってやる奴じゃないってこともさ。自我を持つ個性なんてそうそういるもんじゃないし、制御するのも大変なんだろうと思うよ、意思疎通……以心伝心っていうか、思考だけでできるもんでもなさそうだし。でもさ、体育祭の時といい、こつも続けてこういうことやられると、流石に私も怒った方がいいんじゃないかなって思っちゃうというか……クラスメイトをこんな風に思いたくはないんだけど、やっぱ限度つてもんが……」

「……………本当に、すまん……!」

結局このレース、中盤のハプニングが響いて、栄陽院さんは4位、常闇君が5位だった。

1位がかつちゃん、2位が梅雨ちゃんで、3位が葉隠さん。

葉隠さんは『私の順位は完全に棚ぼただけどねー』って複雑そうに

してた。

「……っていうか、葉隠がゴールしたとこ、誰か見てたか？」

「いや、見てなかったというか、見えなかったというか……まあ無理ないよな、葉隠だし」

「画面越しだと余計わかんないよね……あ、皆帰ってきた」

「お帰り常闇！ お前はやってくれると思ってたぜ！」

「ああ！ さすがだぜ『黒い淫獣』！ 心の友よ！」

「……………ぐふっ」

上鳴君と峰田君が常闇君をサムズアップで出迎えたが、セリフ的にトドメだったのか、常闇君は膝をついて倒れた。

「常闇が死んだ!？」

「この人でなし！」

「もうやめたげてくれ……メンタル結構来てるっばいから」

「被害者のあんたがかばって言うあたり違和感すごいけどね、栄陽院……まあ、あんたがいいなら、私達は常闇には何も言うことは……」

「栄陽院もお帰り！ 久々にやったな、それでこそ栄陽院だぜ！」

「ああ、栄陽院と言えばハプニングと肌色だよな！」

「……素直に喜べないんだけど、コレ褒められてるのか私？」

「無視してええと思うわ」

峰田君達の様子に呆れながら、栄陽院さんが麗日さんからトレンチコートを返してもらってる傍で、耳郎さんが上鳴君と峰田君にイヤホンジャックの制裁を与えていた。自業自得としか言えない。

そう言えば今日の栄陽院さん……少しだけだけど、常闇君を怒りそうになってたな……。

それに、上鳴君と峰田君にハプニングを褒められて、ちよつと嫌そうな顔というか……呆れた感じの表情をした。

いや、あんなことされたんだからそりや当然ではあるんだけど……今までの彼女なら、わざとでさえなければ『いーっていーって』『減るもんじやないし』とかいって笑い飛ばしてた気がするけど……今までと違う反応するようになったってことは……少し心に、あるいは価値

観に変化でも起こったのかな……？

……個人的には大歓迎だけど。良くも悪くもどこか危なっかしかったからな、今までの彼女は……

……そして、今日もまた（と言っていいのかどうか）栄陽院さんのハプニングシーンを前にして……というか、そういう姿の栄陽院さんが、皆に見られてるのを見て……

僕はやはりというか、久しぶりに……何だか、嫌な気分になっていた。

まただ……何なんだろう、この気持ち？

職場体験の前から、ちよくちよく感じるようになってきてたコレ……いい加減、はつきりさせた方がいい、のかな……？

第58話 TS少女と更衣室

S i d e . 緑谷出久

今現在、僕らは更衣室にいた。

救助レースの後、制服に着替えるところなんだけど……

「見ろよこの穴ショーシャンク！ 恐らく諸先輩方が頑張ったんだろう……隣はそう、わかるだろ!? 女子更衣室！」

「峰田君やめたまえ！ 覗きは立派な犯罪行為だ！」

「オイラのリトルミネタはもう立派なバンザイ行為なんだよオオ！」

どうやら壁に空いている覗き穴らしきものを見つけた峰田君がエキサイトしている。あの向こうにある光景を見たくて仕方ないんだろう……というか見る気満々だ。

「据え膳食わぬは男の恥って言うだろオ!? ここまで用意が整って、後は俺達に求められてるのは勇氣だけなんだよ！ 一歩踏み出す勇氣こそが夢をかなえる魔法なんだよ！」

「いい感じに言っても性犯罪だってば……そろそろホントに捕まるよ峰田君」

今にも覗き込みそうな峰田君を後ろから羽交い絞めにするように……というか、峰田君小さいから持ち上げるような形になって確保する。じたばた暴れるなあ……執念凄い。

「放せよ緑谷ア！ お前も男ならわかるだろ！ 何をしても見たいと思うだろ女子の柔肌をよオ!? 仕方ねえんだよ、男って生き物はそういう風にてきてんだよオ!? 無意識だろうと何だろうと欲望で体が動いて女という存在を見たいと、欲しいと思っちまうんだよオ！」

峰田君にそう言われて……僕の中で、何か、心がちくりとしたような感触があった。

いや、そりや僕だって男だし、興味なくはないけど……でもダメだよ、覗きは……

栄陽院さん……麗日さんや梅雨ちゃん、芦戸さんに八百万さん、耳郎さんに葉隠さん……約1名、肌は見えないのが混ざってるけど……それでも……

(そんなの、見るのも、他の人に見られるのも……っ……何だ、この感じ……また、心の中に、何か……!)

ちくつとした感じだけじゃない……何か、今峰田君が言ったことに、ひっかかるようなものがあつた気がする……。本当になんなんだ、僕、一体心の中で何をどう感じて、どう思ってるんだ!?

これって……この感触って……少なくとも、ヒーローが持つような……

(そうだ、今僕、飯田君みたいな、峰田君がいけないことをやろうとしてるのを止めようっていう気持ちよりも……この壁の向こうを見せたくないっていう気持ちの方がむしろ……!?)

なんてことを考えてたら、ため息交じりに瀬呂君の声が聞こえて、「……あのさ、その辺にしねえ?」峰田そろそろ黙れって……俺も男だからわからなくはないけどさ……さつきからちくちく常闇にダメージ入ってんだよ」

「……無意識に、欲望で、見たいと……違う、俺は、決してわざとでは……!」

「しつかりしろ常闇、わかってる、お前がそんな奴じゃないって皆わかってっから!」

うずくまる常闇君と、必死で励ます砂藤君のコンビを見て『えっ!』と驚いてしまった。なんか流れ弾が余計な被害を出してる!?

そして僕の方が緩んだその一瞬の隙間に、『隙ありい!』と峰田君が抜け出して壁の穴に駆け寄る。

「八百万のヤオヨロツパイ!」 芦戸の腰つき! 葉隠の浮かぶ下着!
栄陽院のダイナマイト! 麗日のうららかボディに、蛙吹の意外おっぱああアアア——」

そして、穴の向こうから飛来した耳郎さんのイヤホンジャックが峰田君の目に直撃。

そこからの爆音コンボで、彼はあえなく散った。

「あーあ、言わんこっちゃねえ……壁一枚しか間にねえんだから、そりゃ聞こえてるだろうよ」

「自業自得だな、峰田君!」

「……深淵を覗き込む時、深淵もまた自分を覗き込んでいるのだ」

最後の常闇君の言葉がまだちよつと苦しげだな、と思いつながら……僕は着替えに戻った。

……さつき、何をどこまで考えたっけか……わかんなくなっちゃったな。

☆☆☆

「全く、なんていやらしい……すぐに塞いでしましましょう」

「ホントに懲りないね、峰田の奴！」

「……ウチだけ、何も言われてなかったな……」

何か最後の耳郎のセリフに悲しい感情がこもってた気がしたけど、まあスルーして。

八百万が作り出した壁材を塗りたくって、簡易的に壁の穴をふさぐ。これ後で先生とかに報告したほうがいいよな……塞いだのを事後報告になっちゃうけど、やむを得まい。

「声聞こえて来た感じ……飯田と緑谷が止めてくれてたみたいだな。緑谷は物理的にも止めてたようだったし」

「2人とも真面目だもんね。緑谷は……単にへタレだから、そういうの自体する度胸がないのかもしれないけど」

「ああ、ちよつとわかる……失礼だけどわかつちやう」

覗かれる心配もなくなったので、そんな感じの軽口を交わしながら、着替えを再開。

なお、緑谷がへタレ云々の話になったところで、麗日がちよつとも言いたげな顔になっていたように見えたのを……私と、多分、梅雨ちゃんだけが見ていた。

その直前、緑谷が褒められてた時は、嬉しそうにしてたし……これはやっぱり……

「しっかし男って生き物は……覗きに痴漢に盗撮、毎度毎度、人生棒に振るリスク犯してまでそんなくだらんことやるなよって話だよ……」

元・男のTS女子である私がこういうこと言うとアレかもしれない

が……ぶつちやけもう精神的にはほぼ女なので、心からこう思ってます。見つかったら破滅だつてわかっているだろうに、わざわざ穴やカメラの向こうの肌色や下着の色に執着してみようとする神経がわからん。

勘だけど多分コレ……私が男だった頃にも思ってたんじゃないかな？ 性欲があるのは理解できるが、情熱の注ぎどころとして理解できないというか、そんな感覚がある。

「ける？ その言い方……ひよつとして永久ちゃん、そういうのに遭ったことあるの？」

「……割とね。自分で言うのもなんだけど、こんなのが2つ胸についてると……うん」

「うげ、大丈夫なのそれ？ 酷いことされたりとかなかった？」

梅雨ちゃんの指摘を肯定すると、耳郎や、他の女の子達もぎよつとしていた。あ、なんか心配してくれてるっぽいけど……ちよつと好奇心も混じってるな、ちよつとだけ。

前にもちらつと言った気がするけど、電車に乗れば割と頻繁にそういうのあるし。

すぐ降りるなら無視してもそれまでだけど、中にはエスカレーターして服の中に手、入れようとするようなものもあるから注意が必要。

「いや、そんななんでもないことみたい……だ、大丈夫なん!? それやられたことあんねやろ!？」

「うん、抵抗しないと見るや調子に乗ってね……流石にそういう、狙ってやっていると明らかにわかるようなのは、手首外して鉄警とかに引き渡してるけど」

「言い方が手馴れてる奴のそれだ……っていうか、手首外すの？」

「外す。正当防衛」

「ける、ちよつと過剰だと思うわ……女の敵ではあるから、同情はしないけど」

「こ、怖いものですわね、電車というのは……私、幸いにして、いつも車で送迎してもらっていますので、そういうのに遭ったことはないですが……」

「あー……ヤオモモのスタイルなら、狙ってくる奴いそうだよねえ」
葉隠の言葉に、ちよつと怖いことを想像したのか、八百万が『ひい!?!』と怯えていた。

多分だけど、今私が話した経験談であるところの、何も抵抗しないと調子に乗って服に手を入れてきたり、下着を抜き取ろうとしたり、硬いモノを押し付けてきたり、体ごと密着してこようとしたりするよ
うなのを想像してしまったんだと……

「待て待て待て、最初の以外聞いてないから！ そんなヤバい奴出く
わしたことあんの!?! 栄陽院ホント大丈夫だったのあんだ!?!」

「ヤオモモ、大丈夫、あくまで例えばの話！ え、ノンフィクションだ
ろうって？ そうだけど、そうそういるもんじゃないってそんなレベ
ルの高い変態！ ほら、ゆっくり息を吸って、吐いて……はい、落ち
着いて落ち着いて……」

「あかん、永久ちゃんの話、純粹培養のお嬢様には刺激強いわ」

「……そういうのに出くわした時の対処法とかも一緒に教えた方がよ
かった？」

「そういう問題ちゃう！ ……ちなみに、対処法って？」

「ええつと……大声出す、手首をひねり上げる、そのまま手首を外す、
関節技を決める、静脈を押さえて意識を落とす、手近に何か鈍器にな
りそんなものを探して……」

「3つ目あたりから雲行きが怪しくなつとる」

「ちなみに『証拠あるのかよ!』ってしらばつくれるケースが多いか
ら、事前にスマホとかで証拠映像撮った上で捕まえると後が楽。駅に
ついて逃げ出そうとする場合は、引っ張り倒して電車のドアのレーン
の所に首が来るように押さえつけて、耳元で『ドアが閉まりまーす』つ
て言ってやると泣いて許しを乞うて認める場合が多……」

「それは流石にあかんよ!?!」

「けろ、被害者と加害者が逆転してるわね」

☆☆☆

一方その頃、男子更衣室。

さつき耳郎にノックアウトされた峰田を含め、実はまだ何人かの男子が着替えが終わっておらず……壁の向こうから聞こえてくる話——主に永久の口から語られる、卑猥なシチュエーションやら痴漢の体験談やら——に、全員言葉を失っていた。

八百万だけでなく、思春期男子にとっても、彼女がその口で語るこれらの話は刺激が強かった。

「栄陽院……普段からハプニング体質なんだな」

「痴漢に襲われる栄陽院……怖くて抵抗できない八百万……やべえ、想像したら……」

「この向こうに……この壁の向こうに、まだ栄陽院と八百万が……理想郷の光景が……!」

「峰田、穴はもう塞がったんだからあきらめろ。というか次はホントに殺されるぞ」

そのほぼ全員が、ある一部分の変形が済むまで、座ってこの部屋で待っている最中なわけだが……緑谷出久も、その1人だった。

彼の場合、もう何度も栄陽院の肌を、ハプニングも含めて間近で見、なんなら触れてすらいるため、脳裏に浮かんだその光景は余計に生々しかった。

そしてしかし、興奮する以上に……心に浮かんできた感情は、どこか黒く淀んだものだった、ように感じられた。

ヒーローとして、不屈き者の痴漢に義憤を覚えるでもなく、思春期の男子らしく桃色の煩惱を覚えてしまうでもなく……一番に湧きあがってきたその感情に、緑谷は戸惑っていた。

(……これ、って……!)

さつきの救助レースと、今の壁越しの声。

それらを聞いて、前々から自分の中にあつたその感情を……立て続けに感じたことで、緑谷はその正体をようやく理解していた。

それは、かつて彼の心の中に、いつもあつたものだった。

むしろ彼にとっては、慣れ親しんだ感情だ。形が若干変わってしまったがために、今まで気づかなかつたが、これは……

(嫉妬……だ……！)

かつて、緑谷出久は『無個性』だった。

幼馴染や友人たち、学校の先生や、家で母親が……そして何より、テレビやパソコンの画面の向こうでヒーローが使う『個性』。

それが、自分にはない。

ずっと、うらやましかった。

ずっと、欲しいと思っていた。

今でこそ、『ワン・フォー・オール』という素晴らしい個性を受け継ぐことができたものの……それまでに感じてきた、最早どす黒いと言える領域にあったあの思いは、今でも忘れられない。

そして今、緑谷は、今自分の中にあるこの感情が……あの時感じていたそれと同じだと理解した。

ただし、今度自分が『うらやましい』『欲しい』と思っているのは、『個性』ではない。

今、自分が欲しているのは……いや、欲しいというより、他人に渡したくないと思っているのは……他人と仲がよさそうにしているだけで、他人が何かふしだらなことをしているのを見たり、そういう話を聞くだけで、不快感を覚えてしまうのは……

(僕は……『欲しい』と思ってるのか？ 栄陽院、さんを……)

これが、恋愛感情から来るものならいい。年頃の高校生にあって当然の、正常な感覚だ。

好きな女子が、自分以外の男子と仲よさそうにしていたり、ちやほやされたりしているのを見たら、面白くないし、不安になるだろう。他の誰かと付き合ってしまうんじゃないかと。

だが、もし……もしも、これが、もっと別な……後ろ暗い欲望から来ているのだとしたら。

そんなことはない。考えたこともない。ない……とは思うが……

もしも、そうだとしたら。

(そんなの、そんなの……ヒーローの考えることじゃ……!)

まだ、彼にその区別はつかない。そうするには、彼には、経験が少なすぎた。

緑谷は、思いがけず自分の中に見つけてしまったどす黒い感情『かもしれないもの』の存在に、怯えて震えそうになるのを必死でこらえながら、着替えて更衣室を後にした。

呼び出されていたオールマイトに会いに行くのは、教室で、少し気持ちいを落ち着けてからにしようと思った。

その後、教室に戻った緑谷は……『嫉妬』という感情自体にはもともと慣れていたのもあって、ある程度落ち着きを取り戻していた。

単に、それを向ける対象が……今まで自分が大切に思っていた、永久だったことに戸惑って、困惑が大きくなっていったのだ。

教室では、麗日など何人かの友人に、どこかオドオドしている印象を持たれたものの、もともとそういうところがある性格だったこともあって……緑谷の異変にはつきりと気付いた者は、結局いなかった。

生徒を見る目には確かなものを持っている相澤や、その後に仮眠室で会ったオールマイトさえも、『少し落ち込んでるな』くらいにしか思えなかった。

そしてそれは、過酷なカリキュラムをこなす雄英生にはよくあることだったため……少なくとも今すぐに、何か起こったと、誰も思いはしなかったのだ。

……ただ一人をのぞいて。

第59話 TS少女とカミングアウト

「緑谷の様子がおかしい?」

「うん。ここんところ、元気ないっていうか、普段からそうなの差し引いてもオドオドしてるみたいで……それで、永久ちゃんなら何か知ってるかも、って思ったんやけど……」

「その様子だと、君も何も知らないか……」

「……ああ、すまん。期待には答えられそうにないわ……」

中間テストも終わり、徐々に日本列島を梅雨前線が北上し始めつつある、ある日のこと。

私は、飯田と麗日から……そんな風に相談を受けていた。

聞けば、2人共……ここ最近、緑谷が何やら元気ないというか、不安そうに過ごしている場面が多く見られるのを気にしていたそうだ。

と言っても、何か致命的に不調とかいうわけじゃないし、勉強も実習（戦闘含む）もきちんとなしてはいる。日中、ぼーっと考え事してる場面が増えたとか、表情の端々に影みたいなものが見え隠れしてる気がするとか、その程度の差だ。

私もそれには少し気付いてたけど、緑谷って元々そういうところあるし、誤差の範囲かなと思ってた。もうしばらく待つて改善しないようなら、もうちょつと心配してたかもしれない。

ただ、特に緑谷と仲良くしているこの2人が心配しているとなると……もう少し注意して見ていた方がいいのかもしれない、と思った。それに、ここ最近なんか……私の家に来てくれなくなったしな。家で一緒にテスト勉強しなかったって誘っても『自分の家でやるよ』って、少しオドオドしながら断るし……いや、勉強だけならまだしも、ここ最近は何もトレーニングもしてないんだよな。

それも、家に——ジムに来ないってだけでなく、放課後の共同トレーニングも、ここ最近やってない。

それも、テスト勉強でやる時間がないってわけじゃなく……自主的なそれはしてるようなんだ。

ただ、勉強にせよトレーニングにせよ……私を避けてるような態度が、ここ最近目立つ。

ただその割に、授業中とか休み時間とか、私のことを見ている場面が多い気がする。

時々、ふいに緑谷の方に視線を向けたりすると、目が合うことが結構あるから。そしてその後、緑谷が慌てて目を反らすまではワンセット。

……どうしたんだろう、緑谷の奴……私、何かしちやっただかな？

……それとも……

☆☆☆

Side. 緑谷出久

この所、ずっと……暗い思いを抱えたまま、学校生活を続けている。それに気づいてしまった時ほど、困惑してはいない。

むしろ、この感情との付き合い方はわりと心得ているから……少し時間を置いて落ち着いた今は、普段通りの学校生活が送れている、とは思う。

中間試験も悪くない結果だったし、日々の学業に支障もきたしていない。

……ただ、最近、栄陽院さんとは……若干疎遠というか、あまり関われなくなってしまうけど。僕が、一方的に避けているせいで。

いやまあ、普通に考えて、交際してもいない男女が、部屋に招かれることなんてそうそうないわけだから……今のあり方が普通といえはそうなんだけど。

……もしかしたら、彼女は今のこの状況を、悲しく思ってくれていられるかもしれない。

自画自賛が少し入るけど、僕と彼女は、それなりに仲がいい関係だったと思うから。

けどあの日、僕が心の中に抱えているかもしれない思いに……もし

そうだとしたら、ヒーローが持つべきものとは程遠いそれに、僕はまだ心の整理をつけられていない。

(人を……彼女を、『欲しい』と思うなんて……それも、恋愛とかそういうのじゃなしに……そんなの……ヒーローどころか……！)

こんな気持ちを抱えている僕が、ヒーローになつていいのか、とまで、一時は思った。

けど、僕はもう……立ち止まってられない。

オールマイトに期待してもらつて、『ワン・フォー・オール』を継承して、そして……つい先日、彼が今まで隠してきた、ある『巨悪』の存在を打ち明けられた。

『オール・フォー・ワン』

オールマイトを半死半生に追い込むほどの傷を負わせ、その師匠だという、先代『ワン・フォー・オール』継承者を殺した……『個性を奪う個性』を持つ、最悪のヴィラン。

恐らくは、成長や老化を止める類の個性によつて、超常黎明期から裏社会に君臨し続けていた……最悪の存在。

オールマイトが倒した……手加減が到底できない戦闘の中で、死に至らしめたとまで確信していたそいつが、未だに生きていて……しかもそいつこそが、『敵連合』の親玉である可能性が高い。

そして、その『オール・フォー・ワン』が、『無個性』だった……と、思われていた、自分の弟に強制的に個性を与えた結果として生み出されたのが、『ワン・フォー・オール』。

その上で、こうも言われた。

『ワン・フォー・オール』は、『オール・フォー・ワン』を倒すための個性、といつてもいい。

この力を持つ者は、いつの日か、巨悪と戦う宿命を負う。

僕が知らなかった、この『個性』の起源を交えて説明されたその事実、僕は絶句した。

けれど、それを聞いて……逃げようとか、そんな風にも思えなかつた。

それが……悪と戦うことが宿命なら、望むところだ。

オールマイトがそれを僕に期待してくれるなら、猶更だ。

ヒーローは、悪と戦うもの。だから、それが運命なら……僕は、いつか……その『オール・フォー・ワン』とだって戦ってみせる。オールマイトの後をついで、今度こそ……そいつの魔の手から、世界を救って平和にしてみせる。

USJ襲撃や職場体験を経て、『敵』と戦うってことを実際に経験して学んだ僕が、その恐ろしさや危険を考えた上で——それでも、まだまだ経験が足りてない僕には、わかることができていないのかもしれないけど——それが、結論だ。

……だからこそ、こんな……邪とすら言えるかもしれない思いを抱えたまま、『卵』とはいえ、ヒーローとして戦い続けてもいいのだった……僕は……

でも、こんなこと……誰に言えるわけもない。僕自身すらよくわかっていないことで……けど、もしそうだとしたらと考えると、怖くて……誰にも言えない。

張本人である彼女はもちろん、友達である麗日さんや飯田君……相澤先生……お母さん……そして……オールマイトであつても。

(誰にどう相談したら……どうやって、コレを解決したらいいんだよ……！)

と、考えていた時だった。

「おい」

「……えっ？」

不意に、背後からかけられた声。

それは……僕が、昔からよく知っている声だった。

咄嗟に振り向くと……その瞬間、僕の目の前に……

自分が吐いた鼻息が感じ取れるくらいの距離に、手のひらがあつて

……はい!?

——BOMB!

「おわあ!？」

直後、反射的にのけぞった僕の顔が一瞬前までであった場所目掛けて……かつちゃんの『爆破』が炸裂した。え、ちよ……何?! 何で今僕、え、爆殺されかけた!?

「か、かつちゃん!?!」

「ちつ、よけんじゃねえつつの……」

「いや避けなかったら僕の顔吹き飛んでたから! っていうか、いきなり何……? ぼ、僕何か、かつちゃんを怒らせるようなことした、かな?」

「生きてる」

「無茶苦茶ツ!?!」

言外に『死ぬ』と言われてるも同然なその返事に、僕も目を見開いて絶句せざるを得ない。

な、なんかかつちゃん、いつもより理不尽……昔ほどじゃないけど、なんかちよつと前までの、何かにつけて目の敵にされてた頃みたいなの……いや、今もそうかもしれないけど……。

「……そりやテメエだろうが」

「え!?!」

うそ、口に出ってた!?! っていうか、僕って、何が……

「表情がわかりやすいんだよボケ。……つくづくテメエ、俺の神経逆なでして来やがるよな」

「……ごめん、その……僕、何かしたかな? ホントにわからないんだけど……」

そう正直に言うと、かつちゃんはまた、ちつ、と舌打ちして。

「朝、鏡見て顔洗ってんのかこのクソナード。テメエここ最近……ちつと前の、有言不実行のただのヒーローオタクだった頃と同じような顔になってんぞ」

「え……?」

そう言われて、言葉が出なくなった僕に構わず、かつちゃんは続ける。

「少し前まで……折寺中の教室で腐るほど見て来た顔だ。なりたいたい、こうありたい自分のイメージがすでにある。なのにそれになるため

に何をすればいいか、何をすべきか考えてねえ……考えればわかるはずの『答え』が目の中にあるのに、それを見ようとしてねえ。自分には何もできないってふさぎ込んでるだけ。そのくせ、否定されるとむきになって、しょぼい睨みに乗せて、恨みつらみだけはこっちに向けてくる。吼えることはできても噛みついてくる度胸のねえ、負け犬の顔だ」

「……………」

「何に悩んでんのか知らねえし、知りたくもねえ。だが、テメエどうせ、それを取っ払うために何が必要なのか……もう気づいてんだろが。その上で『できねえ』『わからねえ』って現実逃避して足踏みしてんだ。また誰かから何かもらうまでそのままにいる気か？」

「……………!?!」

「……………さっさと解決しろ、それで、テメエの何かつてーとビビッてオドオドするそのメンタル、少しでもマシにして……期末試験に來い」

かつちゃんは、大方言いたいことは言い終えたのか、つかつかと歩いて僕の傍を通りすぎる。今はもう放課後だから、このまま帰るんだろう。

「次の期末試験なら、実技科目も含めて、個人成績で否が応にも優劣つく……体育祭みたいな半端な結果はいらねえ、そこで完膚なきまでに差アつけて、テメエぶち殺してやる……！　だから……」

その先は言わないまま、かつちゃんは行ってしまった。

けど、聞く必要はない。何を言いたかったのか、わかるから。

（かつちゃんはホント、相変わらずだなあ……どんな時でもブレないっていうか……それに……）

僕なんかより、よっぽど人の心の一番痛いところを的確についてくる。

ああ、そうだ……僕はもう知ってる。

この気持ちを、誰にどう伝えればいいのか。どうすれば、『整理』することができるのか。

もちろん、『こうすればきちんと解決する』確信があるわけじゃない。

けど、1つのきつかけ、足掛かりになるであろうプロセスではあるはずだ。間違いなく。

ひよっとしたら、僕自身すらよくわかっていないこんな状態で、こんな話されても……彼女だって迷惑かもしれないし、そもそも話の内容が内容だ。怒られても……嫌われても文句言えない。

それでも……話そうと思った。

彼女……栄陽院さんに。

今まで心の中に押しとどめていたこの気持ち、素直に白状して……謝ろう。

☆☆☆

距離開けられてる、と思つてた緑谷から、久しぶりに（といってもほんの数日程度のもんだけど）家にお邪魔したい、って言われて……普通にうれしかったので、2つ返事で招き入れた。

何か大事な話かな、と思つて向かい合つてみたら……なんか、謝られた。

曰く、自分は今まで……いつからそうだったのかはわからないが、私のことを、褒められたものではない目で見ていたと。

自分によくしてくれる、恩人とすら言つていいクラスメイト、しかも女子に対して、『欲しい』などという感情を抱いていたと。しかもそれは、恋愛感情とか純粋なものじゃなくて……自分でもよくわからないような、仄暗い感情である気がするということ。

そんな感情を抱いている自分が、ヒーローにふさわしいとはとても言えない。それでも夢だから、大切な人との約束だから、ヒーローを目指させてほしい、ということ。

……うん、とりあえず……

「……あの、そんなこと私に相談されても、とりあえずポカンとさせられることしかできないんだけど……」

「えっ!? そ、その……ごめん……でも、伝えておきたくて……」

……例えが難しいけど、今の緑谷の懺悔? って……自分の脳内で

やってただけの妄想を『君をネタにして猥褻なことを考えてしまった、ごめん!』って言うてくるようなもんじゃ……?」

それと知ったらドン引きかもしれないけど、知らなくても、とかばらさなくても特には誰も不幸にならないよね?」

「う、うん……それはそうかもしれない。でも……一旦気づいちゃったら……そのままにしておくの、我慢できなくて」

「真面目だねえ、緑谷……」

「それに……それ以上に……そんな気持ちを抱えたままで、これからも栄陽院さんと一緒に過ごしていくのもどうなんだ、って思ってる……。もし栄陽院さんが、自分のことをそんな風に思ってる僕に対して、これ以上力を貸したいと思わないなら……それを聞くべきじゃないかとも……」

……わざわざ自分に不利な展開に今後なるかもしれないと承知の上で、私に事実を、自分の心の中をごまかしたまま今の関係が続けることに我慢できなくなったってか。

本当にこいつは、呆れるほどまっすぐで、正義感と向上心の塊で……徹底的にと言っていていくくらいに、自分より他人を大切にするんだもんなあ。

それが例え、ヒーローや、自分と同じ『有精卵』であっても。

どれだけ強くなっても、自分の力を決してひけらかしたりはしない。

きちんと自分の実力を把握して動き、引き際を見誤らない。『ヒーロー』という者に対しての、神聖視とすら言える価値観を持っていて、そのために、言わなければいけないような、そもそも言う必要がないであろうことまで。

ああ、ホントにコイツときたら………いいなあ。

「あのさ緑谷? 1つ確認したいんだけど……緑谷はそれで、いつもの私との生活に関しては……どう思ってくれてる?」

「? いつものって……一緒にやる訓練とかってこと?」

「それプラス、学校での……授業とかも含む、私との普通の付き合いは緑谷的にどう思ってるのかってこと。鬱陶しいと思ってるのか……」

それとも、楽しんでくれていたのか。」

そう聞くと、緑谷は胸を張って『後者だ』と答えた。

この胸の中の嫉妬の感情は問題だけど、そんなのは言ってしまったら、誰の心の中にもでもあるもんだ。それを制御しきれなくなった奴が、大体『敵』になるってだけで。

そしてその上で……そんな僕でも許してくれるなら、これからも一緒に訓練したり、もっともつと上を目指していきたい、と。

……そんなこと言われたら、私の答えなんて決まってるじゃんねえ……

けど、それを伝えるだけじゃもつたいないな……せつかくこうして、ここまで緑谷が真摯に私に向き合ってくれてるんだ。それに応えようと思つたら……私も、相応に『晒す』べきじゃないか？

というか、『カミングアウト』するには……状況的にはもちろん、定期的にそろそろ丁度いいんじゃないか？

色々と考えて……私も、覚悟って奴を決めることにした。

流石に緊張するので、ふう、と息を整えて……真正面から緑谷の目を見据える。

「あのさ緑谷、私が前に……そう、体育祭優勝の『ご褒美』の日に、帰りの車で言ったこと……覚えてる？」

「え？ えつと……た、たしか……ッ！」

思いだしたらしい。顔をボツ、と赤くして、しかしどうにか言葉にする。

「そ、その……僕のこと、好きだって……でも、どう『好き』なのかは秘密だって」

「他には？」

「どう『好き』なのか伝えたら引かれるから秘密なんだって言ってた。もし、自分にそれを言う覚悟ができたなら、僕に話してくれるって……そして……」

そこで、少し迷うようにして……

「ど、どうしても聞きたいなら……栄陽院さんをもらうって約束するなら教える、って」

はい、よくできました。

それじゃあ……こつからは私が。

「うん……緑谷、強くなったし……こんな風に、言わなくてもよかったであろうことまで私に話してくれるっていう、相変わらずのバカみたいな誠実さや正直さもいいと思うし……うん、そろそろ話してもいいんじゃないかと思った」

それを聞いて、緑谷の背筋が伸びる。

ホント真面目というか、態度に出るな、と思いつつも、私は続けて口を開く。

「これはさ、緑谷……私自身も、中々にぶつ飛んだ感情というか……むしろ『性癖』に入るよな、って思う上で……引かれるの半分覚悟しつつ、恐る恐るで言うんだけどな？」

(せ、性癖……!?)

一部分に反応して、さらに緊張した面持ちになる緑谷。

私はそんな緑谷の目の前で、リビングのソファに座っている姿勢からすつくと立ちあがる。

同じように立とうとする緑谷を手で制し、緑谷が座ってるソファの傍にまで歩いていくと……私は、緑谷の手を取る。

そしてそのまま……片膝をつく形で、跪いた。

まるで、おとぎ話の騎士か何かが、自分の主に、忠誠を誓って礼をするように。

……ああ、やっぱりこの姿勢、心地いい……

ずつと、こうしてみたかった。

でも、緑谷いきなりこんなことされて絶賛混乱中だろうから、説明、説明しないと。

「これが、私の望み。私の『好き』だ。あのさ、緑谷……もしよかったら、お前……

……私の『ご主人様』になつてくれないか？」

「……………へあ？」

第60話 TS少女：オリジン

「ご、ご主人様って……え、どういうこと？ ……そ、そういうプレイ、って奴？」

「そういう言葉がさらつと口をついて出るあたり、やや峰田に毒されてる節があるな、緑谷」

「そ、そうかな……でも、どっちにしろその、言ってる意味がよく……」
混乱している緑谷。まあ、当然の反応だな。

今まで普通にクラスメイト、ないし訓練仲間として接してきた私に對して、自分が後ろ暗い感情を、あるいは恋愛感情に成長しかねないものを向けているかどうかと思っただけで精神的にアレだったところに……明後日の方向もいいところな要素をぶち込んでこられたんだから。

立膝ついて、騎士や家臣っぽく緑谷にかしずいている私を見て、緑谷の頭の上には多分、『？』マークが5〜6個くらいは浮かんでいるだろう。

きちんと説明してあげないとな、順序立てて、1つ1つ。

まず、私がどうしてこんなことを言いだしたのか……その根っこの部分から話すのが一番いいか。

この姿勢、私気分いいんだけど、やっぱり緑谷が落ち着かなそうなので、ひとまず立ち上がって、緑谷の隣のソファに座り直す。

「よし、アレなこと言っただけで混乱させといてなんだけど、一旦落ち着こうか緑谷。落ち着いたら話、始めるから」

「あ、うん……」

その後、何回か深呼吸したあたりで、緑谷が『もう大丈夫』とGOサイン出してきたので、その待っている間に考えていた内容・順序で、1つ1つ話していくことにした。

「いいか緑谷。この世には、色んな性癖がある」

「すごい導入だね」

「自覚はあるから茶々は入れないように。例えば、年端もいかない幼

女が大好きな奴をロリコン……略さずに言うのとロリータ・コンプレックスと言う。同じように、小さい男の子が好きな奴をシヨタコンと言う。異性の汗なんかの匂いに興奮するなら匂いフェチと言ったりするし、おっぱいが好きならおっぱい星人なんて言ったりもする。濃いところでは、動物的な特徴に興奮するケモノや、苦痛や支配・被支配の関係がフアクタになるSMなんてものもある」

緑谷は何ていうか……『いきなり僕は何でこんな意味レベルの高い性教育みたいなのを聞かされてるんだろう』的な顔になってるが、構わず続ける。ここから本題だし。

「これらの性的趣向は、近年になって出て来たものもあれば、ずっと昔から人間の感情の発露と共にあったものもある。この『超人時代』が始まってからは、『個性』がそういう価値観と結びついて、ちよいと言葉にしづらいそれが誕生した例も少なくない。私の場合は、まさにそれに当たる」

「……!? 栄陽院さんの『個性』……『無限エネルギー』と関係があるってこと?」

その問いに、私は首肯することで答える。

「そもそもっていうか……私の『個性』の本当の名前は、『無限エネルギー』じゃないんだ」

「え!」

「騙してみたみたいでごめんなんだが……ただ、別にコレ嘘ついてたわけじゃないんだ。公的機関に申請して登録してある個性名はきちんと『無限エネルギー』だし……内容も嘘ついてない。名前が違うっていうのは、私の家に先祖代々伝わる、別な呼び名があるっていう感じのものでさ。言ってみれば、どっちも本当の名前だけど、もう1つの名前が特別な意味を持つてる、って感じなんだよ」

「な、なるほど……」

「この名前は、親から子へ口伝のみで受け継がれ、また自分が教えてもいいと判断した人にしか、伝えられることはない。で、今から私、お前にそれを伝えるわけだけ……」

「あ、うん。えっと、光栄だけ……いいの?」

「うん、いい。で……その、本当の名前は——

——『オール・フォー・ユー』……っていうんだ」

この名前について私が聞かされたのは……母さんに、別れた父さんについて聞いた時だ。

母さんは思い出話の中で、いつも楽しそうに、嬉しそうに父さんについて語っていた。にも関わらず、なぜ父さんと別れたのか……自分の全てを捧げて尽くした父さんが、なぜ他の女と一緒になることを許したのか。どうしてもわからなかったので、そう聞いた。

それに対して母さんは、『そうしたいと思っってしまったから仕方ない』と答えた。

母さんが、そして母さんの『個性』が、そう望んだからだと。

それが、『幾瀬家』に生まれた者の、また、『オール・フォー・ユー』を持って生まれた者の宿命なんだと。

『幾瀬』……って確か……？」

今しがた『オール・フォー・ユー』の名を告げた時、なぜだか一瞬びくん、と反応していたように見えた緑谷が、首をかしげていた。

「そう、私の旧姓。母さんが今の私の義父……栄陽院豊と結婚する前のね。だから私は、その時まで……『幾瀬永久』だった」

それに関しては、緑谷も知ってたはず。職場体験の時に電話で聞かれたからな。

けど、問題なのはここから。

『オール・フォー・ユー』は、代々『幾瀬家』に伝わってきた『個性』だ。男女関係なく発現するが、その使い手には……1人の例外もなく、ある共通点があった。

それは、自分が『主』として認めた、ないし定めた誰かに対し、献身的に尽くすということ。

ここからは、私の家に伝わる事実をもとに推測された内容を含む話になる。母さんから真剣に聞かされたことだから、私は真実だと思ってるが……証拠とか根拠資料があるわけじゃない。

『オール・フォー・ユー』の使い手は、強い力を持つ者、あるいは強い力そのもの、そして何より、これからさらに強くなれる者に対して、非常に敏感であるらしい。

そして、そういう者のうちで……自分と性格的・精神的に波長が合うというか……本質的に好みだと思うことができ、支えたいと思う者を、自分の全力をもって支えていくことに喜びを見出す。

それは恋人、ないし伴侶としてそうするに限らず、付き従う部下として、肩を並べて戦う仲間として、寄り添う一人の女として……その他、様々な形でもって成されてきた。

代々の使い手は、そうしたいと本気で思って、自分の『主』に全力で支え、支えて来たのだ。

母さんこと、トレーナーヒーロー・アナライジユはその最たるものの1つだ。

もともと母さんのあの分析・育成能力は、ヒーローとしての武器である以上に……たった一人、自分が支えたいと思った父さんだけのために身に着けたものだったらしい。

自分が支えたいと思った男を、トップヒーローの階を登るまでに育て上げるため。

その他の全ては、そのテストケース。もちろん、仕事である以上全て真面目にやっていたもの……他のヒーローの分析・育成によって得た膨大なデータは、全て父さんを支え、育てることにフィードバックして使われていたそうだ。……別れるまでは、だけど。

詳しくは教えてくれなかったけど、母さんは父さんに、自分が人生をかけてでも支えたいという思いを抱いた。そのために、己の全てをかけて彼を支え、育てた。

もちろん、『個性』もフルに使ってだ。効果的にトレーニングをこなすために体力を供給したり、運動後のマッサージュやら整体の際にも、『無限エネルギー』としての側面を使って支援し続けた。

疲労を短時間で劇的に回復させることができ、本人の技量次第で急速に肉体の改善すら行えるこの個性は、他者を支え、育てるといふことに対して、無類の適正を持つと言つていい。

だからこそ、この『個性』によって支えられた者は、形や程度は違えど、皆、一角の人物になって『大成する』未来に至ることができらしい。

そうして、自らの『主』が一人前、ないし超一流になって成功することこそが、『幾瀬』の名を持つ者の……『オール・フォー・ユー』を持って生まれた者、全てに共通する価値観なのだ。

そしてそれは……私も例外じゃない。

「ここまで言えば……もうわかるよな？」

「……！ 栄陽院さんが選んだのが、僕だった、ってこと？ その……

『個性』のせいでは？」

「そうかもしれないけど、『個性』のせいで無理やりそうなったなんて思ったことはないよ。私は、間違いなく自分の意思で……あんたの傍にいたい、あんたを支えたいと思ってるから」

始まりはあの日……雄英受験の会場で、一撃で巨大仮想敵ロボを粉砕した緑谷を見た時。

そのパワーはもちろんだが、危ない目にあっている一人の女の子を助けるために、躊躇なく危険に飛び込んだ誰よりもヒーローらしいその精神に、私は心奪われた。

その後、雄英で一緒に過ごすうちに……どんどん、緑谷に惹かれていった。

詳細はわからないが、底なしに強力な『個性』、どれ程強くなるのかわからない『将来性』。

そして、誰に何を言われ、どんな目に遭おうとも、あこがれの英雄の背中を追いかけて、自分もそこに至ろうと努力する不屈の心。どんな状況でも一点の曇りすら見せない、英雄の精神。

気が付けば、もう私の心には……緑谷を『主』とする以外の選択肢はなくなっていた。

「もともと雄英には、母さんの勧めで入ったんだ。母さんの母校だつて点や、ここでなら他のどんなヒーロー科のある高校よりも濃い経験ができる。その経験はきつと、私がいつか出会う、私の『主』を支える時に生かせる血肉になるから、ってね。ひよつとしたら、在籍中に

その『主』が見つかるかもとも思ってたけど……まさか、入学とほぼ同時に決まるとは。さすがに予想外だったな」

「お前と同じだよ、緑谷。私のコレは……とても、恋愛とか友情とか、そんな普通ないし一般的な感情からなる願望とは言えない。なんだったら、私個人の価値観で塗り固められた、一方的な押し付けにも思えるものだ。ぶっ飛んでるにも程があるだろ？ 『ご主人様になつてほしい』なんて。……それでもさ、自分の心に嘘はつけない。例えばお前に嫌われようとも、これが正直な私なんだ」

「私はお前が望むなら……望んでくれるなら……私の全てを捧げてお前に尽くす。心も、身体も、知識も、技も、『個性』も……私の全てをお前のために使う。お前が学生として学び高める道を行くなら、私は学友としてそれを支えたい。男として生きるお前を、女として支えたい。ヒーローとして戦うなら……『相棒』^{サイドキック}としてそれを支えたい。トレーナー、プロデューサー、スポンサー、ブレイン……緑谷がなりたい自分になるために、何だつてやってあげたい。私がお前に抱いているのは、そんな……人生をかけた、とてつもなく重い、はた迷惑な愛情だよ」

いやー、すつきりした。

結構長いこと心の中に抱えて隠してたもの、性癖込みで、洗いざらい全部ぶちまけて……もはや愛の告白とか通りこして変態性のカミングアウトになっちゃったけど、それもやむなし。

まあ、まだぶっちゃけてない性癖？ ーコあるけど……それは、その時が来たらつてことで。

矢継ぎ早に告げられたあんまりな内容に、さつきまで浮かんでた罪悪感とか不安が全部ふつとんで、緑谷、ぼーぜんとした顔になっちゃってるけど。

どのみち、いつかは告げなきゃいけないと思ってたことだ。

緑谷が、自分の心の中にしまったまま私と付き合ってもよかったものを、真正面からぶちまけてくれたんだ……私だつてこのくらいしなくてどうするって話だよ。

……依然として、この後、緑谷に何て言われるかは、少し怖いけどさ。

「……………えっと、ごめん……………」

しばらく間を置いて、緑谷は口を開く。

「その、こういうの初めてで……………どんな顔をしたらいいのかもわからない」

笑えばいいと思うよ、じゃなくて。

「ははは、無理しないでいーよ緑谷。そりゃ、突然こんなこと言われたら困るよな。表情筋も仕事できなくなるだろうさ……………ひとまず、落ち着くまで無表情でも百面相でも好きにしてくれ」

「う、うん……………す、少なくとも、心の方はもうちよつとしたら整理つけるから、ちよつと待って」

そのまま緑谷、顔面の筋肉をぐにぐにとマッサージするようにしたり、気持ちを落ち着けるために深呼吸したり、それでも落ち着かなくて頭を抱えたり、私の顔をちらつと見て、目が合った瞬間に目を反らしたりと、存分に挙動不審になっていた。

しかし、たつぷり5分くらいかけて、ようやくそれも収まったあたりで……………真正面から私を見た。今度は、目をそらさずに。

「……………その……………話してくれたところにごめん、先に確認しておきたいんだけど……………栄陽院さんは、僕が君を『欲しい』なんて失礼なことを思ってたことは、その……………怒ってないの?」

「うん、全然。むしろ嬉しかったよ、『欲しがって』くれて」

「じゃ、じゃあ……………これからも、一緒に特訓とか、勉強とか……………色々、してくれるの?」

「もちろん。ってか、むしろもつと色々できるぞ? カミングアウトも済んだし。……………そうだな、ちよつと俗っぽい言い方で言っちゃおうか。少し自画自賛入るけど」

そうやって私は、ちよつと席を外し、部屋からタブレットを持ってきた。

緑谷の座るソファの隣に腰を下ろして、並んで座るようにして……………緑谷に寄りかかる。触れた瞬間にびくん、と緑谷が反応したのが分

かったけど、まあ置いていて。

すいすいと指を滑らせていくつか操作し、画像が保存されているフォルダを呼び出して……と。

「……い、わ、何コレ……栄陽院さんだよな？ ジーンズ履いて……ひよつとして職場体験の時？」

「ああ。コスチュームの改造の間、基礎トレする服がなかったんで、事務所備え付けのウェア借りただけ……あの事務所、貸し出し用の服もきっちりデニムなのな」

「ははは、そうだったんだ……でも、似合ってるよ？ 栄陽院さん、足長いから、こういう服……あれ、別な写真もある。こっちもジーンズだけど……」

「こっちは、職場体験のラストの方で撮影した写真だな。発売近いから送ってもらえたんだ」

「発売……あ、そうか、雑誌の取材受けたんだっけ？ じゃあ、コレその時の写真？ うわあ……どうりでカッコよく撮れてるよ。すごくきれいだし……」

単純に記念撮影だった基礎トレの時と違って、こっちは真正銘のプロの撮影だしな。

フラッシュのたき方然り、撮影するタイミングや位置取り然り、見事なもんだ。

「ん？ コレ何？ やっぱり栄陽院さんなのはわかるけど……なんか、スーツみたいな服だけど」

「ああ、コレはこないだ、『栄陽院家』本家に呼び出された時の奴だな。……家に入るのおめかしなきゃいけないっていう、わけのわからないルールが敷かれてる家だよ……肩凝るんだよなあ」

レディースのよそ行き風の服に着替えて、襟元もきちつと占めて着て……少し疲れたというか、げんなりしてる様子の私の写真である。「そ、そうなんだ……結構似合ってるけど……その時に撮ったの？」

「私がこんな服着るのは珍しいどころじゃないからって、義姉さん達に撮られた。そんでその後、その義姉さん達に色々着せ替えさせられて……ああ、コレコレ」

「わあ……すごい、本当に色々だ……」

よそ行きの私に続けて、色々と着せ替え人形にされた写真が続く。義姉さん達ときたら、いつの間に、何を考えてあんな風に色々と私の服を買いそろえてたのか……まあ、何だかんだで私も割と楽しみながら着てたけど……私、実家（本家）に戻る予定ないのにな？

ゆったりした部屋着みたいな組み合わせから、カジジュアルな感じのコーデインート。

革ジャンやGジャンをメインにした、ワイルドな感じの組み合わせのものもある。

趣向を変えて、上下1体のツナギというか、バイクスーツみたいな。わざと胸元を開けてて、お色気的な雰囲気になってたり。女スパイみたい、って笑われた。

緑谷に見せたら、わかるかも、って言いながら笑ってた。ちよつと顔赤かったけど。

その後……ああ、うん、メイド服も着せられたんだった。死ぬほど似合っていない……背が高すぎて『可愛さ』の部分にちよつと欠落が見られる。緑谷は『そんなことない』って言うてくれたが……個人的には、その後着せられた執事服の方がかえって似合ってた気も……。

あと、完全にコスプレだけど、女ヒーローっぽいコスチュームやらスーツ着せられたりもしたな……ミッドナイトのタイツスーツとか、Mt.レディのボディスーツとか着せられた。

何を考えてあんなの用意してあったんだ……いやまあ、一時期18禁ヒーローの後継者扱いされたりしたけど……。

見せたら、案の定緑谷に顔真っ赤にされた。でも割と似合ってるって。ならよし。

その次はドレス姿。というか、これは緑谷もう見てるな。あの『ご褒美』の日に、ドレスコードのホテルで着てた奴だし。

その次にあったまた別なドレスを見たら、緑谷また顔真っ赤にしたけど。うん、まあ……背中丸見えの上、Vネックだかフロントなんかやらだかっていう、胸に布当てて隠してるだけのな……かなり露出多めのドレスだからな。八百万のヒーロースーツより露出多い。

さらにその後には水着も。これまた色々あってビキニだったり、モノキニだったり……スリングショツトとかいう、隠す気あるのかつてもので着せられた。さつきからずつと緑谷、顔赤い。

極めつけの写真が……

「ちよつ……何で裸っ!? 何も着てな……何コレ!?!」

「その後一緒に風呂入った時にさ、我が妹の成長記録だーとか何とか言っつて、悪ふざけで」

「家族内での悪ふざけでもコレは……っつていうか、部外者に見せたらダメでしょ!」

若干というか、数秒ほどガン見しちゃつてた後に、はつとしたように目を反らして緑谷はそう言っていた。いいのに、もう緑谷には色々見られちゃつてるし?

具体的には、お泊りの翌朝とかにドジつて。

そう指摘したら、『そうだけどそれは事故だったし……』と言いつつ、すっかりその時のことを思いだしてまた赤くなつてる緑谷。

さて、それではここらで……長々と色々見せてきたわけだが、緑谷には褒めてもらえたり、褒めるとかではないけど顔赤くしてもらつたりと、概ね好評だったようには思える。

その上でだけど……

「なあ緑谷?」

「……う、うん……?」

「緑谷が望めば、全部手に入るんだぜ?」

「……ッ……!?!」

色々な『私』の写真を見てもらつた。ゆつたりした服でリラックスした私、クールないしカジジュアルに決めた私、似合つてないけどメイドな私、ワールドに攻めた私。

もちろん、普段の学生服やジャージの私、ヒーローコスチュームの私も。

そして……全力でセクシー方向に走つた、ドレスや水着の私や……

何も着てない私ですらも。

緑谷が『見たい』ないし『欲しい』と望めば、全部手に入る。

「昔のゲームにあったみたいなの、『世界の半分をやるよ』とかいう、邪な感じの問いかけじゃない。きちんと私も同意の上で……というか、私もむしろ望んだ上でのそれだ。今までの写真を、そうだな……ぶつとんだ例えだけど、お見合い写真……いやむしろ、カタログだと思えばいい」

「か、カタログって……!?!」

「『欲しい』なら、お好きにご注文をどうぞ？ 普段通りの私が望みなら、勉強やトレーニングにも普通に付き合う。女の子らしい私が望みなら、カジュアルにまとめて食べ歩きや買い物にでも行こうか。水着の私をご所望なら、もう1ヶ月ちよいで夏になるし、海とかプールに行くのもいいな。ドレスの私は……他に比べりゃ出番少ないが、3つ星のレストランにでも行くか、ヒーロー関係のイベントあたりか？ あるいは、服はいららない、ってんなら……風呂かベッドにご一緒するよ?。」

言いながら私は、ゆっくりと緑谷を押し倒した。

顔を真っ赤にして、不整脈を起こしそうなくらいに心臓がどきどきしているであろう彼を、ソファに横にして……その上に覆いかぶさる。下腹部を、同じく下腹部でがちりホールドして。

そのまま、見つめ合うことしばし。

「……ふふっ、まあ……いきなりこんなこと言われても困るよな。はは、ごめんごめん」

そう言っただけで私は、緑谷の上からどいた。

まだ息が荒い緑谷は、少し動きづらそうにしながら、ゆっくりと起き上がった……今私が腰かけていた、というか乗っていたあたりを飛ばしながら？ 座り直す。

「ちよつと色々ぶつ飛んだことまで言っちゃったけど、私の気持ちは今言った通りだよ、緑谷。私は……お前に必要としてもらえてすごく嬉しい。だから、緑谷が今まで通り付き合っていていきたいって言うなら、喜んでそうさせてもらう。今までと同じように、いや、今まで以

上に、緑谷と一緒に強くなれるよう、私も努力していくから……うん、よろしくつてことで」

「そ、そうだね、よろしく……お願いします」

「はい、お願いされました」

「そ、それでも……その……緊張しちやつて、今まで通りに戻すにはちよつと苦勞するかもしれないけどね。ははは……いや、もちろんそんな風に言ってもらえて、うれしいんだけど……いきなりそういう風に付き合いを変えるのもアレだし、やっぱりひとまずはいつも通りがいいかなつていうか……むしろ僕も挙動不審にならないようにしないただけど……」

と、少々どもりながら言う緑谷。ははは、それは確かにそうだな。いきなり私らが付き合い方変えたら、色々勘繰られるし、騒ぎそうな奴らもいるもんな。

恋バナ大好きな芦戸や葉隠とか、嫉妬全開の峰田や上鳴とか。

……緑谷に好意を抱いてると思しき、あの子とかこの子とか、な。まあもちろん私は、緑谷さえそうしたいなら、そういう感じになるでも全然オーケーだけど……とりあえず今は現状維持希望つてんなら、そうさせてもらう。

すでに気持ちは伝えた。いつ、どんな風に返事をしてくれるかは——あるいは、言葉じゃなくて行動で示してくれても一向にかまわん——緑谷に一任する。

それに、だ……

「こんな風に話してなんてなんだけど……暫くはそれどころじゃないかもしれないしな」

「え？ どういうこと？」

不意の私の言葉に、緑谷はきよとんとした表情でそう問い返してくる。

職場体験はもちろん、中間試験も終わってるのに、近々何かあったかな、って感じの顔だ。

まあ、年間行事予定には載ってないからな……そりゃ、寝耳に水な話になるだろうが……

「詳しくはまだ言えないけど……多分明日か明後日あたり、相澤先生から発表あるよ。あー……私の母さん関連だと言っておく」

「？ 栄陽院さんのお母さん……『アナライジユ』……強化カリキュラム……あー……」

その言葉で色々察したらしい緑谷。グラントリノから色々聞いてたっばいからな。

詳細は……明日ってことで。

そしてそのまま、お互いにカミングアウトを終え、しこりなく今後も付き合えるようになった私達は、晴れ晴れとした気持ちでその日は分かれることとなった……

……と、言いたいところだが。

「あー緑谷。私これから、買い物行ってくるね？ 緑谷は、帰る前に

……お風呂入っていきなよ」

「え、お、おとおお風呂!? な、何で!? ぼ、僕もう帰ろうと……」

「いや、だって、そのまま帰るのもアレじゃん……『気持ち悪い』だろ？」

ぎよつとしてどもる……なんとなく、その先を言っただけでささそうな緑谷に、私は……ニヤニヤ笑みが浮かぶのをこらえられないままに、言う。

「遠慮しないで、洗い流してスッキリしてた方がいいって。洗濯機の使い方もわかるよね？ ……パンツも洗っていきな。私、今新しいの適当に買ってくるから」

「……………つゝゝ!!」

一気に真っ赤になる緑谷を部屋に置いて、私は、ほんの少しだが……特徴的な匂いが漂っているリビングを後にした。

閉じたドアの向こうから『うああああ……』と、絞り出すようなうめき声や、『ばれてた……』と、打ちひしがれるような声が聞こえた。

……ソファに押し倒して、上に乗った時、すでに変形してたし、服越しでもわかるくらいに熱くて硬かったし……その後、一瞬びくつてなったあの時だろうな。

うん、さすがに悪いことした。

あ、でも可愛かったから写真撮っとけばよかった（反省ゼロ）。

……あそこでもう1歩、いやなんならもう半歩、私の方から歩み寄るなり押し込めば、きっと私は緑谷と、望む関係になれただろう。

なんなら、男と女として、一線を越えることすらできたかもしれない。もうなんか、頭ショートして、流されるままだったしな、緑谷。けど、それはしない。私の方から『ご主人様』に、そんなことはできない。

だから……

（明確な一線、そして、最後の一線は……越えるなら、緑谷の方から、緑谷の意味で……ね）

だから、私は待とう。緑谷が……私のことを求めてくれる日を。自分のものにしてくれる日を。

鏡で見なくてもわかるくらいに、赤く、熱くなって、そしてにやけている自分の顔に手を当てて、その熱を感じながら……私は、緑谷を残して部屋を出た。

そして……適当に時間を潰してから、部屋に戻った。

？ パンツ買いに行かなかったのだったのか？

やだなあ、そんなの……もう用意してあるに決まってるじゃん。

いつ、何があってもいいように……体育祭前から揃え買っている

よ。パンツだけじゃなく、シャツも、適当な部屋着も。

どれも緑谷のサイズに合う奴を。『マツサージ』の時にそのへんは把握してたからね。

ああ言ったのは、部屋を出るためのただの口実。私が暫くない方が、緑谷も心を落ち着けやすいだろうし。

第4章 TS少女と育成計画

第61話 TS少女と2つの『新企画』

「はふー……あー、ちよつと長風呂しちゃったな……ん？」

緑谷との仲が一步前進した夜。

いつもより少し長めのお風呂を終えて、私が脱衣場で体をふいていると、ふいに……部屋の外に、人の気配を感じた。

しかし、別に焦ることはなかった。よく知ってる人の気配だったから。

その人は、この部屋の合いカギも持ってるので、勝手にはいれても不思議はない。……若干、間が悪いんじゃないかって気はしたものの。

遠慮するような相手でもないの、私はいつも通り、きっちり体をふいて水気を切ってから、薄手のバスローブを着て脱衣場の外に出る。

風呂出てすぐ寝るなら裸のままでもいいんだけど、これから色々やることあるから、湯冷めしないように一応、ね。

今そこにいる人と、話すことがあるかもしれないし。

で、その人こと、私の母さんは……リビングのソファに座って、首元のネクタイを緩めて、メガネまで外して、リラックスしてくつろいでいる所だった。

「あら、お風呂入ってたのね、永久。お邪魔してるわよ」

「来るなら来るって一言連絡くらいくれればいいのに……ゲストルームの掃除とかしてないよ？」

「いいわよ、そのくらい自分でするわ。それに、誰がいつ泊まってもいいように、こまめに掃除してるでしょ、あなた」

……まあ、それはね。

誰が、っていうか、彼が、だけど。いつトレーニングや勉強会を兼ねたお泊り会になってもいいように。

しかしどうやら、この母はその辺も全部お見通しのようだ。

こちらを見てニヤニヤ笑っているその目は、私がゲストルームに泊める相手が男性であることも、その男性がどこの誰であるかも、見透かされている圧を感じる。

それどころか……

「ふうん……一歩前進、ってどこかしら？」

「……何でわかんのか？」

「わからないでか。こちとらあなたの母親で、『オール・フォー・ユー』の大先輩だつてのよ」

……だそうだ。

必死こいて決意して告白（懺悔？）してくれた緑谷の思いを受け止め、そのお返しに私の思いを性癖込みでカミングアウトしたのが、僅か数時間前のこと。

まだ記憶に新しく、風呂の中でシャワー浴びながら鼻歌歌っちゃうくらいに私をご機嫌にしたその出来事を、たった一目見ただけで見抜くこの母の眼力は、やはり底知れない。

「機嫌もよさそう。きちんと受け入れてもらえた、ということかしら？」

「まあ、まだまだ壁がなくなつたところだけだね……女として意識はしてもらえてるみたいだし、きちんと私の……こう言っちゃなんだけど、体にも魅力は感じてもらえてるみたい」

「……ふうん……」

そう言つた途端、なぜか静かになる母さん。

さつきとほとんど同じ笑みを向けてくるが……なぜかその笑みは、どこか違う意味を含んでいるように思えた。気のせいかな、視線も何か……意味ありげな気が……。

こちらをじつと見ながら、半開きのジト目で、ニヤニヤ笑っているその様子は……嘲笑、って程じゃないが……どこか不敵な笑みに見える。

「まあ、私から見ても、エロい体に育つたとは思うけれどね。それでも……」

それでも？

「……永久、ちよつとあなた、服全部脱いでみて」

「は？」

何を言い出すんだ突然、と思いつつ聞き返してみるが、母さんは『いいから』というばかりで……自分はソファに座ったまま、手と目で私に促してくる。

正直、ちよつと困惑しているものの……一応言われた通り、私はその場でバスローブを脱いだ。

たわわに実った胸に少し引つかかるも、するりと滑るように脱げて、足元に落ちるバスローブ。

当然だが、その下から現れた私の姿は、生まれたままのそれである。

その姿をじつと見る母さん。何を言うでもなく。

時折、私に指示を出してくる。

「後ろむいて。回れ右」

「足、肩幅に開いてみて」

「腕、横に広げて水平に。体がよく見えるように」

……さつきから私は、何で生みの親の前でこんな……ストリップパーみたいなことをやらされてるんだ……？

流石に疑問を禁じ得ないんだが、一通り私の体を隅から隅まで見た後、母さんは『うん』と呟いたかと思うと、すつくと立ちあがって、私の傍に歩いてくる。

そして……

——むぎゆ！

「ふあ、っ!？」

突如、私の胸をわしづかみにした。痛くない程度にだけど、びっくりして思わず声が……！

「うんうん、私から見てもいい体というか、美味しそうに育ったわねえ……この体を好きにできる、未来のご主人様は幸せ者ね、間違いなく」

「ちよ、母さん……さつきから、一体何を……」

手を止めずムニムニと揉み続ける母さんに、あらためてそう問いかけるが……母さんは答えず、『でも』と私の言葉を遮るようにして

言う。

「まだまだだね」

「？」

「女としても、ヒーローとしても……雌としても……まだまだ荒削り。原石の域を出ない。好いた男に自分を『納品』するなら……もうちよつと体を作ってからにした方がいいわよ？」

そう言つてようやく胸を放した母さんは、その直後、私の顎のあたりを、つん、と指で軽くつつくようにした。

……そして、次の瞬間。

——びきっ

「……え……!？」

突如、私の体から一気に力が抜けて……私はそのまま、床にどさつと倒れ込んだ。

え、い、今、何が起こつたの？ ちよつと触られただけのはずなのに……いきなり手足が全く動かなくなつただけ!？」

まるで、ヒーロー殺しの『個性』を食らつたみたいに……いや、私実際にそれ食らつたことはないから、その感覚はわからないんだけど……全然、指一本ろくに動かせないっていう状況は、それに通じるもんがある……と思う。

「ま、それは育成の順序つてものを考えた結果でもあるから、仕方ないと言えばそうなんだけどね……それでも親としては、娘がいざご主人様にその身を捧げる時には、心も体もより完璧な状態でそうなつてほしいと思うわけなのよね？」

「母さん……、これ、何!? 今、何したの!？」

「心配しなくてもすぐに動けるようになるし、一体何をしたのかもきちんと教えてあげるわ。今週末から始まる『アレ』……あなたにもちゃんと、ぴつたりの強化プランを組ませてもらったから……ガッツリ頑張つて『貯めて』いらっしやいな」

「こ、今週末からって……『フレックスタイム』と『ワーキングホリデー』？ 私の行先……母さんのの？」

「ええ。ま、私だけじゃないけどね……それでも、私以上にあなたの『個性』を……『オール・フォー・ユー』を使える者も、教えられる者もないもの。当然でしょう？」

とん、と同じ個所をまたつつく母さん。

そうするとすぐに、私の体に自由が戻った。動けるようになった私は、上体を起こすと……服を着るのも忘れて、その場で、さつきまで全く動かなかった手足を、ぐーぱー開いたり閉じたりして感触を確かめていた。

何だったんだ、今の……母さんの話からすると、『オール・フォー・ユー』の……『無限エネルギー』としての能力の1つ、なのか？

アレは確かに、自分の体を強化したり、色々なエネルギーの代替にしたり、他者に譲渡して回復させたり、応用性はかなり広いけど……こんな使い方はなかったはずなのに……いや、ただ単に私が、教えられていなかっただけ……？

思わず母さんの方を見ると、母さんは私の傍にしゃがみこんで、くいと私の顎を指で引いて（顎クイって奴か）、目線を無理やり合わせるようにさせた。不適で、どこか妖艶さも感じさせるまなざしが、私の心の中まで見通すような感触を覚える。

「今までのあなたには、まだ早かったから。十分地力が育つてからじゃないと、この手の応用は変な癖や、頼った戦い方に育ちかねないからね……あえて教えてなかったのよ」

「それを今、話したってことは……今の私は、一応お眼鏡にかなった、と？」

「そう取ってもらって構わないわ。ま、それでも十分とはまだまだ言えないから……この機会に、どこに送り出しても恥ずかしくない、立派な『雌』になるように仕込んであげる」

「雌、て……」

「ふふ、間違っていないでしょう……？ 間に期末試験を挟んで、およそ2ヶ月……その間に、ご主人様に心も体も全部捧げて満足しても

て乗り越えられる道理など一つもない。1日1日を無駄にすることなく学べよお前ら……で、それに関連して、これだ」

言いながら何かのプリントを配る相澤先生。えーと何々……

『1年次カリキュラム構成一部変更のお知らせ』……?」

プリントを見た飯田が、疑問を孕んだ声でそうタイトルを読み上げる。

他の面々も『何だコレ?』って感じの顔になっていた。説明を求めするように、先生に視線が集中する。

配り終えて教壇に戻った先生はというと、

「きちんと説明するから落ち着け。まア……知つての通り、ここ最近『敵』 ^{villain} 犯罪の活発化、活性化が著しく、我々ヒーローにも、各方面からより一層の奮闘努力が期待されている所だ。そしてそれは、現在ヒーローの卵であるお前らも例外じゃない。それを踏まえ……より成長の機会を手に入れやすくなるように、一部授業の『仕組み』を変えようって試みだ」

今配った資料を見ながら聞け、というので、私を含め、生徒たちは手元のプリントに目を落としながら耳を傾ける。

「少しフライング気味に話すことも含まれてくるが……現状、雄英高校のカリキュラムは、1年次から3年次までで、その難易度や密度に差がある。授業内容の難易度自体もそうだが……これは、学年が進むほど、ヒーローとして学ぶことの割合が増えてくることに起因するところが大きい」

先生曰く、雄英高校では、1年生の時期が、授業の量、及び覚えることの量的には最も多く、忙しい部類に入るらしい。ただし、その難易度自体は比較的低い。

もつとも、あくまで『比較的』であって……偏差値79の超ハイレベル校らしく、他から比べれば十分難易度は高いんだが。

逆に、2年生や3年生になると、応用が増えるから難易度は高くなるものの、授業の量や覚えること自体はそこまで多くなる。そうなるようにカリキュラムを調整されているらしい。

その理由は、主に2年生以上になると、学外での、授業とは別な活

動が増えてくるからだ。

その最たるものが『校外活動』^{ヒーローインターン}である。

これは『職場体験』の本格版とでも呼べるもので、必修の授業ではなく、生徒が任意で『プロの現場を体験する』ために行う活動である。

職場体験ほど学校側からのバックアップはなく、通常インターンは体育祭などであった指名をコネクションとして使い、生徒が自分で交渉やら何やらを行っていくことになる。

要するに『そちらの事務所で働かせてください』って売り込むわけだ。

その際、採用されるかどうかは当然、その事務所が売り込んできた学生を『使える』と判断するかどうかによって決まる。ゆえにこの活動は、指名をもらうなりなんなりして、一方的にでもプロの事務所とのつながりができていなければ、活動自体難しい。無名の、使えるかもわからない、半人前もいいところな学生なんて、そりゃ誰も金出して雇おうとしないだろうしな。

もつとも、それでも『雄英生』つてのはそれだけでかなりのブランドになるから、完全な自由募集の形にすると、それはそれで引き入れのためにいざこざが多発するため、こういう形になったそうだ。

「本来このインターンは、通常は2年生になってから……最低でも2学期以降に説明して取り組む者が出てくるような話だし、我々教師陣からの説明も大体そのくらいの時期に行われる。それだけ『プロの現場』つてのは難易度が高い活動を行うからでもあるし……何より職場体験と違って、インターンを受ける際には『仮免』の取得が必須だからな」

「仮免、つて……ヒーロー活動の、ですよね？」

と、麗日が確認するように聞く。先生は首肯して、

「そうだ。『職場体験』はあくまで、あらゆる活動を、担当になるプロヒーローの監督の下で行うという条件があったからこそ、仮免もないお前達でも、公的な場でコスチュームの着用や『個性』を用いての活動が許された。万が一の時には監督者が責任を負うって仕組みのもとでな。だが、インターンの場合には全く話が異なる。インターン生は

『お客』ではなく、1人の相棒……プロとして扱われる。当然、四六時中プロが面倒を見ていてくれるわけがないし、仕事の内容によっては、単独行動や現場でのとっさの判断なども必要になる。結果、責任の比重がより自分に大きいのしかかってくるわけだが……お前達はまだ、そこまでの『責任能力』自体がない」

『職場体験』において、基本的にずっとプロヒーローと一緒にいたことや、危険なことをさせなかったことも、その辺の理由なわけだ。いくら息巻いていても、私達はまだ『卵』だから。

私の場合も、パトロールするにも座学をするにも、基本的にベストジーニストがいつも見ている所であった。

事務仕事の学習——現場から通信をもらって資料に記録する作業とか——ではそうでないこともあったが、それだってサイドキック達が何人もいる場だったし、そもそも通信を入れて来たのはベストジーニストだったつけ。

極端な話、いくら自分の行動に責任を持つと言ったところで……何の権限もない私達では、『責任を取る』ことすらできないということだ。まだまだ学生である私達の首なんて安いもんだらう。

その問題を解決するために必要なのが、校外でヒーロー活動を行う際に必要となる『仮免』だ。

限定された状況下においてとはいえ、自分の判断で『個性』を使用することができるようになるコレがあつてこそ、長期的かつ本格的なヒーロー活動が可能になる。

それを持つていない私達では、実質的に『インターン』は無理だということだ。

ところで……仮免の有無以外にも、私達がインターンを行うのが難しい理由がある。

さつき中途半端で話をぶった切ってしまった、カリキュラムやら難易度やらの話がそれだ。

『校外活動』^{ヒーローインターン}は、一般企業などでよく見られる『就業体験』とは違う。

それらは1日から、長くとも1週間程度の日程で、気軽に仕事の1

部を体験するものだが、インターンは多くの場合、最短でも1ヶ月以上の契約で、しかも有償で行われる『就労』だ。

しかもその仕事内容はヒーローとしての活動。バイトみたいに休みの日や時間がある時に気軽にやっていいものじゃないので、相応の時間と手間をそこにとられることになる。

何が言いたいかってというと、休みの日以外にも、平日、普通の授業時間がある部分をその活動に食われるってことだ。場合によっては、公欠という形で学校を休むことにもなる。

雄英の授業密度が1年の時に重く、2〜3年になると比較的軽くなるのは、その分を自学自習で取り戻しやすいように、っていうのもあるのかもしれない。

ゆえに、1日1日の授業のウエイトが重く、短期間休むだけでも取り戻すのが大変だったことから……1年の時からのインターン参加はかなり難しいと言えるのだ。

そこまで先生が話したところで、ふと気づいたように瀬呂と耳郎が、

「……じゃあどっちみち俺達関係ねえんじや……何でこのタイミングでそんな話を？」

「今後のカリキュラム見直しの話だったはずですよ？ ひよつとして、それが関係してくる？」

「そういうことだ。さっきも言ったが、生徒により多く『学ぶ機会』を与える目的で、このカリキュラムの比重からなる時間確保の難しさについて解決する案が、ここ最近の職員会議で話し合われてな。試験的なものになるが、今学期から導入することになった。プリントの裏面見ろ」

あ、裏あったんだ？

ひっくり返すとそこには……ああ、やっぱりあった。聞いてた話が。

『ワーキングホリデー』と『フレックスタイム』の試験的導入……ですか？」

八百万が、少し困惑を滲ませた声で、そうポツリと呟いた。

他の面々の顔にも、そこに並んでいる単語を見て『なぜ?』という感想を抱いている気配が現れていた。

多分、彼ら彼女らは、『ワーキングホリデー』と『フレックスタイム』の本来の意味を知っているからこそ、なぜここでそれらの単語が出てくるか不思議なんだろう。

『ワーキングホリデー』っていうのは、異文化交流などを目的に定められている制度の1つだ。

留学生などが外国での休暇を楽しみつつ、その滞在期間中に必要になるであろう資金を稼ぐために滞在先の国や地域で就労することを期限付きで許可される、というもの、だったはず。

国同士が提携を結んでいる間柄の場合に、一生のうちの回数を限定して施行されているケースが多い。あまり頻繁ないし長期的なのは、不法就労につながりかねないからな。

一方で『フレックスタイム』は、一部の企業などで用いられている、『就業時間を自分で自由に決められる』制度のことだ。

1日に何時間以上働くこと、この時間帯は必ず出勤してきていること、などという根幹のルールを守って活動すれば、何時から何時まで働く時間にするかを自由に決められる。子供の送り迎えのために時間が必要だったり、ラッシュアワーを避けて通勤したい人なんかには便利である。

ただもちろん、今相澤先生が言ったこの2つの意味は、今説明した『一般的な意味』とは全く異なる。『インターン』と同様に。

『ワーキングホリデー』は言ってみれば、『職場体験』の第2弾、第3弾だ。自分で行く先の事務所を決めて交渉を行い、ヒーローとしての仕事を体験し、さらに理解を深める」

「え!?! また職場体験やるんですか!?!」

「芦戸、話は最後まで聞け。この『ワーキングホリデー』は、『インターン』と同様、必修科目ではない。あくまで生徒が自主的に行うものだから……『インターン』と、こないだ行った『職場体験』のちょうど中間みたいなもんだと思え。やるのであれば学校側からバックアップはある程度するし、活動はプロヒーローの監督下に限定されるが……日

程や指導内容は決まっていなくて、それらの交渉や調整、そもそも売り込みから自分で行うことになる」

なるほど……まさに『中間的なもの』だな。仮免がなくても受けられるのは『職場体験』の部分だが、売り込みや調整を自分で行う『インターン』に近い部分もある。

自分が忙しくない時期に参加させてもらうとか、休みの日を中心に日程を組むとか、そういうやり方がメインになりそうだな……まさに『ワーキングホリデー』か。

「でもそれだと、インターンと同じように、コネがない人は活動自体難しいってことですよ？」

「確かに。仮にはいえ就労の分類だ……興味も持っていないいち学生を雇ってくれるほど、お人好しで暇な事務所などそうないだろう。原則として、体育祭で手にした指名がベースになるのか」

「ということは……また指名のない人が不利ってことかあ……」

大事な部分に気づいた耳郎と飯田。それを聞いてへこむ芦戸。

A組で指名あったの、体育祭で活躍できた半分くらいだったもんな。

芦戸と同じように指名のなかった葉隠と蛙吹が、

「うえーん、不公平だよー。また差がついちやうよー……」

『職場体験』の時に、学校側がオフアールしたリストはもう使えないのかしら？」

「使えないことはないが、あくまで自主的な活動だから、希望すれば必ず受けられるなんてことは当然ない。ゼロからの売り込みと同じだ。逆に、指名が入っていないかつた事務所でも、ゼロから自分を売り込む前提であれば交渉することもできる……難易度は相当高いがな。あるいは、他の誰かに紹介してもらって手もある」

「紹介？」

「この『ワーキングホリデー』は、指名人数を1事務所あたり2名までと定めていた『職場体験』とは違い、事務所ごとの受け入れ数に上限はない。事務所自体のキャパをオーバーしなければな。例えばそうだな……近接戦闘が主体の砂藤あたりが、麗日が体験にいった『ガン

ヘッド』の事務所に興味を持ったとする。そこで受け入れてもらえないか、麗日を通して交渉する、とかだな」

なるほど、紹介つてのはそういう…他者のコネクションを使うのも選べる手段の1つか。

「多くの事務所は、使えもしない素人には興味も持たないが、この先あるインターンや、卒業後のサイドキックとしての雇用・確保を見据えて、雄英生とつながりを持つておきたいと思っている事務所も決して少なくはない。注目度と期待値を有効利用することだ。…とはいえ、指名数はある意味そのまま、周囲からの評価であると共に…体育祭で見せた個々の実力を示している。自分に今、本当に『ワーキングホリデー』が必要かどうかは、自分自身で慎重に考えることだな」

「…どういう意味？」

いまいち理解できなかつたらしい峰田が小声で言ったのが聞こえた。

それに、聞かれたからってわけじゃないだろうが、斜め後ろにいた轟が、

「まだ実力不足なんだから、課外活動なんかやってねえで基礎固めに注力したほうがいい奴もいるってことだろ。地力が定まってねえのに応用メニューに取り組んでも、上辺だけの力しか身につかねえし、最悪、氣ばかり逸つて失敗につながりかねえからな」

「そういうことだ。無理して『ワーキングホリデー』に出ても、それを色々な意味でのメリットに変えられるかどうかは個人個人違ってくる…そこを忘れるなつてことだ。さて、これについてはこのへんにして、もう1つ…『フレックスタイム』についてだ。これは、今話した『ワーキングホリデー』その他の課外活動の助けにするために、時間に余裕を持たせるための制度だな」

『インターン』もそうだったが、学校があまり関わらない課外活動に参加する場合、公欠が増えたり、正規の授業時間が食われることも多い。学校の制度上問題なくても、そこで学ぶはずだった内容が欠落するのは、後から取り戻すにしても手間だし、損失だ。

そもそも、公欠だつて無限に取れるわけじゃない。法律で『授業日

数』ってものが決まってるんだから。

それを何とかするために設けられたのが『フレックスタイム』。

これはざっくりいうと、『補修・補講を先に設定することでその分の休みを貯める』というか……狙って振替休日を作る制度である。

一般的な学校で、土日に授業参観や体育祭が行われた際、翌月曜日が休みになったりするように……本来授業がないところにあらかじめ補修その他を入れることで、その分を通常授業で休めるようにするのだ。制度的にも、学習内容的にも、不安を取り除いた形で。

ただでさえ1週間のうち6日授業があるこの雄英で、放課後にさらに補修を受けたり、残り1日の日曜日も登校するとかして『休日の貯蓄』を作ること、どこかで平日休める日を作っておく。

そしてそれを利用して、まとまった日程の休日を確保した上で『ワーキングホリデー』を行ったりするわけだ。

「上手く組み合わせて使えば、限られた期間の中により密度の高い学習を詰め込めるわけだな」

「その分難易度も上がるんだろうけど……実質、休みを返上して修行に充てると同義だぞこれ。座学系統の学習計画もきちんと立てて、予習復習しっかりしないと破たんする」

「詰め込めばいいってわけでもないしね。パフォーマンスを保つためには、適度な休養や気分転換も重要よ」

と、障子と尾白、そして蛙吹。それに、『けどよ』と切島が続ける。「リスクはあるし大変だけど、上手くすればまた1つ上のステージにも行けるんだろ!? しかも、またプロの現場を体験できる機会にもなるし……こりや燃えてくるってもんだぜ!」

いつもながら熱血で向上心豊かなその言葉に、賛同する者は決して少なくない。基本的に、程度に差はあれど上昇志向を持った者が集まっているのがこのクラスだ。

見る限りでも、何人も『うんうん』『確かに』ってうなずいてる奴が男女問わず多い。

「そのあたりの判断も含めてお前達の自由だ……が、相談したいと思った場合は随時受け付ける。受けたほうがいいかどうかのアドバ

イスも含めてな。他に質問あるか？ ……ないな、よし、ホームルームは以上。1限の準備して静かに待て」

そう言っただけで先生は退出。

その後、『静かに待て』という指示はどっかに放り出され、教室はたちまち今通知された『ワーキングホリデー』と『フレックスタイム』関連の話、ないし相談でいっぱいになった。皆、やるかどうかはともかく、寝耳に水な成長の機会に興味津々のようだ。

私はというと……興味はあるが、皆程驚いたり浮ついたりはしていない。

というのも……さつきからちらちらつと云ってた通り、私は事前にこれらのことを母さんから聞いていたからだ。こういう制度が始まるって、大まかにだけだ。

母さんこと『アナライジユ』が携わって進められている、ヒーロー科1年生の強化のためのカリキュラム調整……この『ワーキングホリデー』企画は、その一つである。

通常時の授業やイベント、補修課題なんかの設定あたりにも既に積極的に母さんがまとめた情報は組み込まれているし、教職員は皆、リアルタイムで更新されていく生徒への指導用データノートを共有して持っているはずだ。それらを駆使し、痒い所に手が届くラインナップで『課題』ないし『試練』を用意していくことにより、皆の強化は順調に進んでいると聞いた。

単純に基礎トレや座学を繰り返しているだけに見えても、その実、色々と考えられたメニューを各自こなしているのだ。気が付かない、ないし、意識しないうちに。

そこにさらに発破をかける形で提案されたのが、この『ワーキングホリデー』。

そして、それらを支援するための制度として『フレックスタイム』だ。

さつき言ってた通り、上手く使えば、期末試験を前にして大幅なレベルアップが可能になる。

そして……だ。

私及び緑谷は、これらを上手く使って自分を強化することが『すでに決定している』。

そのためのカリキュラムもスケジュールも既に組まれている。私の母さんに加え、義姉さん達によって、色々と調整された上で。

(後で緑谷に話さないとな……例の『超特設』、いよいよ始まるって)

第62話 TS少女とプログラム説明

案の定というか何というか、その日の学校は放課後までずっと、『ワーキングホリデー』の話題でいっぱいだった。

『職場体験』と同様に、己の身になる経験を積める（かもしれない）機会だ。形は違えど、向上心に溢れたメンバーが集まっているこのクラスの皆なら、まあこうなるだろうなとは思っていた。

しかし、すぐには、そう簡単には運ばないのがこの世の常である。

体育祭で指名をもらった者達の中には、早速今回の制度について指名先に説明を行い、『受け入れやってますか?』と確認した者も多かったが……

「ぬあー……ガンヘッドさんの事務所、インターンの受け入れはやってないって……。今回の『ワーキングホリデー』も多分やる予定ないって言われてもた……」

「けろ、セルキーさんも今のところそうだって言われたわ。やっぱり『職場体験』とは勝手が違うみたい」

「やっぱりそういうところ多いんだな……俺もフォースカインドさんに思い切つて聞いてみたんだけど、さすがにそこまではやってねえつてさ。あー、見込み外れちまった」

麗日、梅雨ちゃん、切島の3人は、どうやら昼休みとかに早くも聞いてみたらしいが、いずれも撃沈したようだ。

まあ、向こうの負担ある形でのことだし、そう簡単にはうなずいてはもらえないよな。

こつちからすれば、『仮免がなくても受けられる』という点で利点だけど、あつちからすればそれは自分にとっての負担になるからな。常に目の届くところに置いておいて見ておかなければならないわけだし……何かあったら自分の責任になる。ヒーロー殺しの時みたいに。

まして、インターンは有償……すなわち給料をきちんと支払つての『就労』って扱いだからな。である以上、中途半端な戦力はお呼びでないだろう。

『ワーキングホリデー』はその限りではない。給料が出るかどうかは、どう契約を結ぶかによるから、双方が納得済みであれば、有償でもいいし無償でもいい。

生徒達からすれば、そこで積める経験が既に報酬だともいえるし。それこそ、こつちが明確に戦力として機能するとか、あつちが雄英生とのつながりを持ちたがってるとか、何かしらのメリットでもない限りは……余程後進の教育に力を入れてるような事務所でもない限りは『ご縁がなかった』ということになるだろう。

(後進の育成か……ベストジーニストの事務所なら、相手にもよるけどやるかもしれないな)

「ねえ、永久ちゃんはどうするの？ 職場体験先に聞いてみた？」

と、ちようど思ってたのと同じことを梅雨ちゃんに聞かれた。

「いや、まだ。まあ、やるにしても色々都合とか、勉強のスケジュールとか考えないといけないし……今々急いで取り掛かることも無いかなー、とか思ってる」

「俺も同様だ。経験を積むのは意義あることだが、その為に別な部分を疎かにしていいわけではないだろうからね」

と、飯田も。相変わらずのカクカクした動きでそう言ってくるが、その直後にちよつと気まずそうにして、

「それに俺の場合、職場体験ではマニュアルさんに迷惑をかけてしまったから、頼むどころか相談もしにくいし……そもそもあの人は、その一件のせいで、教育資格のはく奪期間中なんだ。だから現状、当てもないと言った方が正確だな」

「ああ……飯田の場合はそれも絡んでくるのか。ヒーロー殺しのせいで飛んだとぼっちりだな」

切島のその言葉に、ちよつと飯田が言葉に詰まっていた。

飯田からしてみれば、兄であるインゲンウムは襲われるわ、自分も職場体験の時に襲われるわ、その事務所にも『監督不行き届き』つてことで迷惑がかかるわ……傍から見たら、そりやまさしく疫病神にも等しい存在だ……という風に切島は思ったんだろう。

……実際は、職場体験先の選択とか、実は飯田の方からヒーロー殺

しに攻撃を仕掛けてたとか、色々問題行動もあつたんだが……まあ、その辺はもう『なかつたこと』になつている。

それもあつて、飯田は少し居心地悪そうな表情になつたんだろう。「ん？ つてことは、エンデヴァーやベストジーニスト、それに緑谷が世話になつた……あー、誰だったか忘れたけど、その人も受け入れ無理な感じか？ 教育権なんちゃらで」

「いや、同じようにあの一件に関わりはあつたけど、親父は教育権はく奪は食らつてねえからな。今度の休みに、面接行けることになつた」「マジかよ!?! いいなー轟……」

轟が言つたように、あの件に『受け入れ先』として関わつた4人のプロヒーロー……エンデヴァー、ベストジーニスト、マニュアル、そしてグラントリノは、誰もかれもが監督不行き届きで同じ罰を受けたわけじゃない。

きちんと私を監督下に置いて（というか私がきちんとということ聞いてというか）面倒を見ていて、本当にヒーロー活動の中でしか被害を出さなかつたベストジーニストは、お咎めなし。

エンデヴァーは、一応轟の要請に応じて（友達がピンチかもしれない、つていう程度のもものではあつたが）許可を出していた。

結果的にその見込みが甘かつたせいで怪我をさせたつていう落ち度はあつたものの、教育権のはく奪はなし。わずかに減給を食らつたくらいである。

グラントリノは、緑谷が勝手に行動してしまつたものの、その大部分はベストジーニストが代わりに面倒を見ていたのでそこまで危険に対する責任は大きくならず、教育権はく奪と減給。

もつとも、元々ヒーロー活動にそんなに興味ない人らしいので、特に堪えてないらしいが。

そしてマニュアルが一番重い。内容としてはグラントリノと同じだが、彼の場合、ほぼ最初から最後まで飯田の暴走を許してしまつた上、戦いに加わる＝監督下に戻すまでも一番長かつたからな。

それでも、隠蔽のカバーストーリーのおかげでそこまでの罰にはなつてないが。

「すると、轟ちゃんは『ワーキングホリデー』、エンデヴァーのところ
で受けるのかしら?」

「多分な。日程とかはこれから調整することになるけど、早ければ今
月中旬くらいからやる予定だ。面接も形式的なもんだって言ってた。
給料出すかどうかは成績とか見て決めるってよ」

「うっそ、お給料まで出る話になっとるん!? えーなー……でも、エン
デヴァーって轟君のお父さんやから……実質、お小遣いもらってお手
伝いみたいな形になるん?」

「……アイツからただ金貰うだけってのも癪だから、一応労働の対
価ってことで考えようと思う」

ちよつとつまらなそうな轟。反抗期の子供みたい。

まあそれでも、職場体験の時同様、そこに行くことで得るものがある
とわかってるからこそ、こういう判断を、しかもその日のうちに下
したんだろうな。

未だにどういう理由でかは詳しくは知らないけど、なんか不仲っぽ
かったし。

今だって、解消できたわけじゃなさそうだが……轟家、依然として
闇が深い?

「けどそうなると、緑谷は?」

「え? あーつと……僕の担当だった人は、教育権はく奪くらつ
ちやったから……いやそれ以前に、別件で今なんか忙しく動いてるみ
たいで、どっちみち無理みたい。他当たれって言われた」

「そっかー。そうなると……指名来てた他の事務所とかに手あたり次
第電話かけてみるしかあらへんのやろか?」

「そうね。でも、いい機会だから私、きちんと基礎を固めながらゆっく
り考えようと思うわ。『フレックスタイム』の貯蓄は、貯めるだけなら
やっておいて損はないだろうし……受け入れ先が見つかった時にす
ぐにでも動けるようにしておくのもいいかもしれないわ」

「それもいいかもな。……俺の場合、勉強の方にもあんまり余裕ある
わけでもねーし……」

と、切島はふいに思いだしたらしい、中間テストの成績を思い返し

て言っていた。

うんうん、さつき飯田も言ってたけど、座学を含めて他のところを疎かにしちゃいけないもんな。

……ただまあ、私の場合……いや、私と緑谷の場合は、どこに電話して決める以前に、そういうのは既に決まってるも同然なんだが。

緑谷の方も……なんか、いつものよくわからないオールナイト関連ネットワークが頼れなくなったみたいだし、好都合だ。

梅雨ちゃん達が『爆豪も轟と一緒にエンデヴァー事務所に行くのか』って聞いているのを見ながら、私は緑谷にそっと声をかけて、耳打ちする感じで言った。

「緑谷、今日の放課後空いてる？ ……もし来れそうなら、うちに来て」

「えっ!? う、うん、いいけど……何？」

「……義姉さん達から連絡入った。いよいよさ、始まるって。『デウス・ロ・ウルト』」

「……っ……!」

☆☆☆

はい、というわけで我が家です。

場所はリビングルーム。緑谷が居心地悪そうに、若干小さくなって座っております。

今となつては、緑谷は私の部屋に来たくらいじゃさして緊張することもなくなつたんだが……今の室内の男女比が1:4だからね、仕方ないかもしれない。

男が緑谷1人なのに対して、女性は私と、育乃義姉さん、成実義姉さん、そしてまさかの母さんまでそろってるからな……緊張しても仕方ないだろう。

しかし、これから始まる話をするうえで、ここにいるメンバーは全員必要な面子なので、そこは諦めてもらおうしかない。

「それじゃあ緑谷君、永久、これから私から、2人に体験してもらおう

トップヒーロー育成プログラム『デウス・ロ・ウルト』について、本格的な説明をさせてもらおうわね」

育乃義姉さんがそう言っただけでリモコンを操作すると、机の上に置いてあったプロジェクターが起動して、壁にスライドショーが浮かび上がった。部屋が明るくてもきちんと思えるタイプの奴だ。

義姉さんはそこに映し出される資料を使い、順序立ててこのプランについて話していく。まんま企業の会議かプレゼンみたいな感じである。

「まず大前提として、これから行うプログラムはあくまでこちらのテストケース。内容についての相談・調整は随時受け付けるし、かかる費用は被服控除の分も含め、全てわが社が負担するから、心配はいらないわ。その上で……今日学校から発表された、『ワーキングホリデー』と『フレックスタイム』。この2つを最大限利用して進めていきます」

そう言っただけで画面を切り替える。映し出されたのは、おおまかなスケジュール表。

6月から8月までの3ヶ月分のカレンダーが表示されていて……その中にはいくつつか、既に予定のようなものが書きこまれていた。プログラムもそうだが……学校行事もあるな。

「見てもらうとわかる通り、雄英高校はこれから先、7月上旬に期末試験、夏休みに入ってから『林間合宿』が設定されているわ。加えて……」

「これはまだ外部に明らかにされてはいないけど、夏の終わりにある『仮免試験』において、今期の1年生も参加が検討されているの。今回のカリキュラム調整も、それを見据えて生徒1人1人の実力を伸ばすためっていう意味合いが強いと思っただけでいいわ」

と、母さんが付け加える。

なお、緑谷は母さんとは今日が初対面なので、さつき既に挨拶は済ませてある。

『仮免』……普通は2年生になってから取得を検討する人が多いって聞きました」

「普通は、ね。でも、こう言つては何だけど……今年の雄英1年ヒーローは、粒ぞろいと言つてもいいくらいに有望な子が揃つているのに加え……普通じゃない事態が続いているでしょう？ 学校側としては、生徒達にもより成長の機会を、そしてそれ以上に、自己防衛の手段を持たせることが必要だと考えているようなの。そのために、限定的な条件下であれど、公共の場で『個性』を使うことができるようになる『仮免』の取得が急務、ということよ」

インターン関連の話で、ちようど今日聞いたところだった言葉が出て来たな。

これも、偶然つてことはないだろう。雄英の教師陣は……そして、そこから委託を受けているうちの母は、どの辺までを見据えて動いているのやら。

「そのために少しでも実力を伸ばすため、新たに今日説明された2つの制度が導入された。今回の『デウス・ロ・ウルト』でも、それらを最大限活用するわ。具体的には……6〜7月の休日や放課後にびっちり補修を入れたり追加課題をもらつたりしておいて、可能な限り『フレックスタイム』を貯蓄しておく。それを使って、要所要所でこちらが設定した強化プログラムに参加してもらおう」

「それに加えて、普段の日常生活からも可能なアプローチを組み込んでいきます。食生活や基礎トレーニングの改善による体作りや、本格的な体術訓練なんかも含めてね。もつとも、それらは既に雄英高校が最高水準のそれを用意しているだろうから、多少手を加えるだけではないと思うけど」

まあ、確かにね……ヒーロー基礎学では、最初にやった『戦闘訓練』や、最近やった『救助レース』みたいに派手さのあるものもあれば、普通に対人の格闘訓練とか、救助の際に必要な器具（避難トンネルとかAEDとか）の取り扱いも学ぶからなあ。

そういうところで、あくまで基礎であれば学べるし、体作りのためのトレーニングもやる。

もつとも、それだけではトップヒーローになるには足りないから、そのへんを補填するために、つていう扱いで学ぶことになるだろう。

「それと、座学についてもバックアップさせてもらおうわ。実技のみに注力して座学が疎かになり、後顧の憂いを抱えてしまうようでは本末転倒。『フレックスタイム』の確保のためというのもあるし、不足なくこなせるように講義をこちらで手配するわ」

「そこまでしてもらえるんですか……!?!」

「トップの中のトップを目指すんだから、これくらいはね。特に今の時期は、仮免取得のために、確実に実力をつけていくことが必要とされるから、スタートダッシュの意味でも、少し過密気味にスケジュールを詰め込むわ。適度に息抜きなんかも設けるけど、辛すぎて心身へ負担が大きいと思ったら遠慮なく言ってちょうだい。調整するから」
そしてそこから、育乃義姉さんと成実義姉さんは、私達の強化プランを詳しく説明していく。

……たっぷり1時間ほどもかけて、説明は終わった。

何ともまあ……予想以上に大掛かりで、しかもかなり環境が急変するような内容だった。

私も緑谷も、心の準備は色々としてたつもりだったんだけど……コレは流石に、すぐに決められるようなものでもないんじゃないか？

いや、私は緑谷が望むならすぐにも準備始めるつもりだけど……さすがに生活の変化が大きすぎると思うし、即決は難しいのでは……と思っていた。

が、緑谷は少しの間考え込むようにしたかと思うと、『よし』と小さく言つて。

「わかりました、その内容で準備始めたいと思います。さすがに引越してもなると、親への説明なんかも含めて、色々準備期間はほしいですけど……」

そう……このプラン、しよっぱなからド本気だということがわかる基準の1つとして、住む場所までこっちで用意するというのがのだ。

体作りのために、衣食住全てに手を入れるようで……マジか、と思わず思ってしまった。

私はともかく、流石にコレは緑谷にいきなり大きな負担じゃないか

と思ったんだけど……緑谷は緑谷で本気度が前よりも上がっているように感じた。なんと、即決である。

親の説得は苦勞するかもだけど、なんとかするって。

「それなら問題ないわね。まずはできる部分から取り掛かっていく予定で見ているから。そうね……2週間後くらいを目途に用意を進めてくれればいいと思うわ」

緑谷の要望を、快く承諾する育乃義姉さん。もともとこのくらいは想定していたようだ。

「いいのか緑谷？ 結構大きく生活変わるけど……そんなにすぐ決めて？」

「うん、大丈夫だよ栄陽院さん。元々、強くなるためなら何だってやらなくちゃ、って思ってたし……ここまでのものを用意してくれたってうんなら、僕だって応えたいから」

「やる気十分、ってわけだ？ なら話は早いわ。訓練施設だけど、明後日から利用できるようにしておくから、放課後はそこに通うようにしてちょうだい。荷造りとかの期限は特に設けないけど……まあ当然早いほうがいいわね。用意ができたら、資料に乗せてある電話番号に連絡を入れてくれれば業者を向かわせるわ。それと……永久と緑谷君には、コレも渡しておくわね」

そう言つて成実義姉さんは、私と緑谷の目の前に、封筒を1つずつ置いた。

促されるままに、開けて中身を確認して見ると……中に入っていたのは、1枚のカードと、何枚かの説明書と思しき書類。

何だろコレ？ キャッシュカードとかクレジットカードにも見えるけど……色が、黒い？

説明書を読んでみると……

「え、栄陽院さん、コレ……!?!」

……どうやら、同じ内容を目にしたらしい緑谷の、何かこう……助けを求めるような視線が飛んできた。うん、まあ……気持ちはずななくわかるよ。こんなもんポンと渡されたらね、そりゃ、ありがたい通り越して怖いよね。

「あー……義姉さん達？ 母さんも、ちよつとコレは流石に……」

「いいのよ、そのくらいは持つてもらった方が。ヒーローってのは何かとお金かかるもんだし、心配しなくても経費なら唸るほど用意してあるから」

「あんまり関係ないことに無駄遣いとかしたら注意入るけど、学業及びヒーロー活動に関して何か必要なものがあれば、全部それで落としちゃっていいからね？ あ、被服控除とか、テストケース自体についての報酬はもちろん別に用意するから安心して頂戴」

このカードの正体は、『栄陽院コーポレーション』が支払元兼保証人になっている、複合機能カードだった。クレジットカードとして使用することができ、たいていのもはコレで購入できる上、残高の許容圏内であれば、キャッシュカードみたいに現金を引き出して使うこともできる。

限度額は流石に存在するものの、毎月リセットされる。

要するに、この事業にかかる経費の前渡しみたいなもんか。何か必要なものはコレで買えと。

基本的に『テストケース協力費』の名目で支給されるものなので、ヒーロー活動及びその関係の学習に不必要な、ないし関係ないものを買うと経費として認められない可能性もあるが、割とその辺ガバガバのようだ……書類を見る限り。

「飲食費、被服費、接待費、資料代……この内訳っていうか、具体例詳しく聞いてもいい？」

「飲食費はそのまんまよ。雄英の学食から、訓練中に飲むスポーツドリンク、口休めに買うお菓子まで何でもOK。被服費は、汗かいて着替えたり拭くのにシャツとかタオル買うでしょ？ 接待費は、クラスメイトや、事業関連で会う人とかとの付き合いに使うお金とかあるでしょ？ ファミレスとかで打ち合わせしたり。資料代は……特に緑谷君とかならわかると思うけど、ヒーロー関連の書籍や雑誌なんかそれで買っちゃってOK」

「ちよつとそれ経費の幅広すぎませんか!? 何か途中、いくらでも解釈広げられそうなものが結構まじってましたよ!？」

思わず緑谷から悲鳴が上がる。

彼の心境は、いきなり札束を『必要な時に使いなさい』ってお小遣いとして持たされたようなものだろうか。信頼と期待が重いというか、分不相応なもの持たされて高級感が怖いというか。

「いいのよそんなもんで。あまりに常識はずれな……それ使つてテレビゲーム買うとか、アイドルのコンサート行くためにネットオークションでつぎ込むとか、ソシヤゲで課金しまくるとか、そういうアホな使い方しなければOK」

「漫画家や小説家だつて、書く作品のジャンルに応じて、フィギュアとかエアガンとか写真集とか経費で落とせたりするでしょう？ ならヒーローの卵が成長するために必要なものを買うのに遠慮なんかいないわ。都度現金を支給するのも手間だし、必要だと思つたらそれで買つてしまつてちようだい。経費の書類作成やら精算なんかは、きちんとかつちで履歴を見て行つておくから」

……とんでもない特別待遇だな……訓練メニューの設定から講師その他の手配、さらには経費の支給までしてくれるとは……

ありがたいけど、純粹にプレッシャーも強い……緑谷も横で、ちよつと後悔してるような顔色になつてるし……

まあ、乗り掛かった舟だ、なるようになれ。私は何にせよ、全力で行くだけだ。

第63話 TS少女と緑谷の1日

S i d e . 緑谷出久

朝、目が覚めた僕は……昨日までとは違うベッドで目を覚ました。ベッドどころか、部屋が違う。部屋のあちこちに飾られているオーラマイトグッズは、紛れもなく僕の私物だけど、その設置場所その他は、僕が今まで寝起きしていた部屋とは微妙に違っている。

部屋の広さや間取りがそもそも違ってるから、当然と言えば当然だけど。

一瞬、きよとんとしてしまったけど……すぐに思いだす。

ああ、昨日……引越したんだっけ、と。

トップヒーロー育成プログラム『テウス・ロ・ウルト』。その一環として、僕は普段の生活習慣から徹底的に変えて、基礎となる体を作るため……昨日からこの部屋に引越したんだった。

ここは、栄陽院さんが住んでいるタワーマンション……その、栄陽院さんの部屋と同じ階層フロアの一室だ。この部屋丸々、僕の生活スペースとして提供されている。

はつきり言って持て余すほどの広さなんだけど、まあ……豪華すぎるって点に文句をつける気はないので、ありがたく使わせてもらっている。

引越すに際して、お母さんを説得するのは大変だったけど……僕がどれだけこのプロジェクトに本気なのかを根気強く説明したら、どうにか納得してくれた。

ただし、なるべく頻繁に顔を見せに帰ってくることで、1日1回は近況報告の電話をすること（勉強や仕事の邪魔にならない程度でよしとする）、つてのを条件にだけ。

そうして荷物をまとめ、この部屋に……実は、栄陽院さんの部屋の隣室であるここに引越してきたわけだ。ここで暮らす僕にとつては、衣食住全てが修行となる。

一刻も早く、オールマイトの期待に応えて、次代の『平和の象徴』になるために、やれることを全部やる。そう考えていた僕には、ここでの新生活は願ってもないものになるはずだ。

朝起きたらまず、パジャマを脱いでジャージに着替える。

このジャージも特別製で、ギプスみたいにより体に負荷をかけてくれるため、より効率的に体を鍛えることができるものだ。しかも、僕に合わせて作られたオーダーメイドらしい。体育祭の特訓の時に使ったウエイトスーツの強化版みたいなものようだ。

加えて、同様にその時にも使った、低酸素環境やら何やらを再現できるマスクも身に着ける。より効率的に体に負荷をかけられるように。

さらには、ジャージにもマスクにも、各部に電極の役割を果たすパーツやら何やらが内蔵されていて、バイタルをコンピューターで随時モニタリングできるそうだ。ハイテク。

これらに着替えた上で、トレーニングジムで軽く汗を流す。

どこのジムかと言えばもちろん、このタワマンから地下通路を通っていける、体育祭の特訓でさんざんお世話になったあそこだ。このたび、僕もこのマンションの住人になったので、フリーパスをもらえた。これで、栄陽院さんに付き添ってもらわなくても、あのジムに一人で行ける。

もともと、同じように栄陽院さんもトレーニングに来るから、どっちみち一緒になるんだけど。

メニューは、あくまで『軽く』なので、文字通り朝食前の運動っていう程度だが……決して雑にやるわけではなく、1行程1行程しっかりと集中して、使う筋肉を意識してこなす。

ランニングマシンで走り込みを行い、軽く筋トレをして体に負荷をかけ、各部を温める。体中の筋肉をバランスよく使って、全体的に熱が感じられるくらいに。

そしてこのメニューだけど、毎日微妙に違ってくる。

常駐している専任のインストラクターの人が、トレーニングに付き添いつつ指示してくれるので、それに従ってこなす感じ。その時々

感触で微調整したりする。

そしてその内容は、僕と栄陽院さんでは微妙に違う。

まあ、性別や体型、戦闘スタイルなんかが違えば、そりゃ求められる体のつくり方も違うだろうからね、それは当然だろう。

加えて、内容はインスタクターの人が考えているのではなく（微調整はともかく）、前日までの僕らの体調やら何やらを踏まえて、『アナライジユ』を始めとした、このプロジェクトに協力している腕利きのトレーナーやアナライザーなどが協議して考えているそうだ。毎日。

トレーニングをこなし終えたら、きっちり水分補給をして、整理体操もした上で部屋に戻る。

戻ったら軽くシャワーを浴びて汗を流し、制服に着替える。

その頃には、常駐してくれている給仕係の人が、朝食を作ってくれているので、リビングでそれを食べる。

……なんか、お母さんでもない女の人に食事作ってもらったりするなんて、不思議な気分だけど……よく考えたら、僕よく栄陽院さんにそうしてもらってたな。

朝食のメニューは、あからさまに節制用とか、体鍛える用みたいな偏食じみたものじゃなく……むしろ、普通によくある朝食メニューが多い。トーストとか、ベーコンエッグとか、定番メニューが主に並んでいて、特に堅苦しい感じも何もなく、普通に食べられる。

一昔前のアスリートやボディビルダーみたいに、たんぱく質が多い食品だけとか、プロテインとか、そういう腹の満たし方をしていない。栄養バランスとかは考えられているけど、全体的に子供の弁当で喜ばれそうな、あるいは僕も好きなラインナップだ。

なんなら、事前に希望を出しておけば、ある程度それに沿ったものを作ってくれずらする。

量もちょうどいいし、朝からきつちりたつぷり腹を満たすことができる。

ちなみに……食事はひよっとして、栄陽院さんが作ってくれるのかな、なんてふと思つてたりしたんだけど……よく考えたら、彼女もこ

のカリキュラム参加者の1人だもんな、そんな暇はないか。

……ちよつと残念に思ったのは内緒である。

残さず全部食べて……皿洗いとか後片付けは、これまた常駐している、家政婦というか、ハウスキーパーの人にお任せ。

僕は普通に準備をして、普通に学校へ行く。

……ああ、説明しそびれたけど……給仕の人や家政婦の人は、別に僕の部屋に常駐してるわけじゃない。このフロアの、また更に別の部屋が住み込み用のスペースになってるのだ。

このタワマンのこの階層、どうやら全部屋『栄陽院コーポレーション』で買い取って押さえたらしくてさ。だから、階層ごと『デウス・ロ・ウルト』のために使ってるんだよ。やることが豪快どころじゃないな……毎日考えられているトレーニングメニューといい、気合の入りが違う。

その分期待されているってことにもなるから、こつちも気合入るけど。

学校での過ごし方自体は何も変わらない。

雄英の授業カリキュラムは、元々プロヒーロー育成のために考えに考え抜かれた最高峰のレベルのそれだ。それに加えて、今のは『アナライジユ』の協力でさらに強化・効率化されてるから、これ以上何かいじったり工夫する必要はない。

昼に学食で、あるいは弁当で何食べるかとか、それすら何も指定されないの、今までと何も変わらず過ごし、1日を終える。

ただ1つ違う所があるとすれば、放課後に不定期で栄陽院さんに行っていたトレーニングは行わず、まっすぐ家に……マンションに帰ってくるくらいだ。

雄英の訓練室じゃなくて、放課後の鍛錬その他もトレーニングジムで行うので。

あと、放課後に『フレックスタイム』の貯蓄のための補講を受けることもある。

その場合は、それが終わってから、やはりまっすぐ部屋に戻る。

部屋に帰つてくると、またトレーニングに入る。

朝と同じように、ウエイトスーツとマスクを装着してジムで、メニューに沿って体を動かす。

ここでは、朝はあまりやらなかった筋トレやスパーリングなんかもやる。単に体を動かすだけではなく、やや、ではあるが『戦闘』を意識した動きをしていくフェーズだ。

ただし、相手はもっぱら、衝撃測定機能付きのサンドバッグや、スパーリング用に調整された敵ロボットとかで、対人戦闘はほとんど行わない。前まではそこそこの頻度でやっていた、栄陽院さんを相手にした組み手とかも、ここ最近はやってない。

もつとも、対人戦の基礎トレとかは、学校でやってるから、経験不足とか勘を忘れるなんてことはなさそうだけど。

そして、ここで相手にする敵ロボットは、入試や体育祭で相手にしたような、『壊せる』前提で作られているものじゃなく……ただひたすらに強固で壊しにくい頑丈さを持っているタイプだ。

見た目的にも強固で、サンドバッグに手足をつけて、さらにプロテクターをつけたような感じに見える。概ね人の形をしていると言えるけど、寸胴で動きは鈍そう。

実際動きは鈍い。というか、ほとんど動かない。

そもそも、こいつは戦闘訓練用のロボだが、こっちに攻撃してくるわけじゃないのだ。

それはどういうことか……そもそもこのロボを使ってどう訓練するのか、説明しよう。

「それじゃあ、よろしくお願いしますー！」

「はい。それではトレーニングを始めます……マスクとゴーグルを身に着けてください」

ロボの前に立った僕は、インストラクターの人の指示通り、朝も使っていたマスク（ゴーグルと一体になっている）を身に着ける。

呼吸が制限され、慣れるまで少しの間息苦しく感じるようになり……視界も、少し狭くなる。

それ以外は何も問題ないことを確認した上で、僕はゴーグル部分についているボタンを押す。

するとその瞬間、寸胴で愚鈍そうなデザインにしか見えていなかった目の前のロボットに、まるで着ぐるみを着せるように、黒色の筋骨隆々の肉体に脳が露出した外見の『敵』……脳無の姿が上書きされて見えるようになった。

僕の目の前で、だらりと脱力して真正面からこちらを見ている姿に、否応なしにUSJでのことを思いだしてしまうけど……すぐに、呼吸を整えて精神を落ち着かせる。

そのついでってわけじゃないが、マスクによる呼吸の制限にももう慣れた。問題ない。

さて、このいきなり外見が変わった脳無(中身はサンドバッグロボ)だが、もちろん実際にロボが脳無に変身したわけじゃない。

この脳無の姿は、ゴーグルのレンズ部分がディスプレイになって、そこに映っているだけだ。

「では、ライフ10、制限時間2分で設定。ARスパーリングを始めます」

すると、視界の右上あたりに、『2:00』『LP:10』という表示が現れる。同時に目の前の脳無が、USJの時よりかなり遅いが、拳を振りかぶって僕に殴りかかってくる。

僕はそれを避けて、カウンターの拳を脳無の胸に叩き込む。

が、当然ながら拳に伝わってくる感触は、サンドバッグロボのものだ。

何度も言うけど、脳無は目に『見えている』だけ。そこに実際にあるわけじゃないからな。

また目の前の脳無が殴りかかってくる。僕はそれを避けて、またカウンターで殴る。

その繰り返し。幻の拳を回避して、幻の向こうにあるサンドバッグロボを殴る。

1度、回避をミスして、脳無の拳が僕の体にかすってしまう。その瞬間、視界の右上に表示されている『LP』の文字が、10から9に

減った。

もうわかっているとと思うが、この『LP』は、ゲームという所の『ライフ』とか『HP』……要するに残りの体力である。これが0になるとゲームオーバー。

幻の脳無の攻撃が僕にヒットするとこれが削られる。これを、なるべく減らさないようにしながら、可能な限りサンドバッグに攻撃を叩き込んでいくのが、僕のトレーニングである。

なお、『個性』は使わず、素の身体能力だけでやる。

あまり詳しくはないんだけど、これはいわゆる『AR』……『拡張現実』という系統の技術だ。

立体映像やゴーグル型ディスプレイに、人やモノの動きを感じ取るセンサーを組み合わせて使うことによって、現実と連動させた幻影なishi映像を投影し、色々なことに役立てる技術らしい。

例えば、脳無みたいに精密かつ強力な攻撃性能を持った敵ロボットを作るのは、技術的にはもちろん、コストもかかるし大変だろう。使い捨てのスパリング相手に使うなんてのは難しい。

しかし、あくまでそれが『見てくれだけ』であれば……そして、実際に体にダメージを与えられなくとも、『当たった』そして『ダメージが入った』という情報を認識し、データとして表示できれば、それでも十分トレーニングには使えるのではないか。

このトレーニングシステムはそんな発想の元に作られている。

殴りかかってくる脳無は映像だけの偽物だ。殴られても、触れた感触すらない。

しかし、その動きは僕のゴーグルと、体の動きを感じ取るセンサーに連動していて、僕がきちんと動いて避けなければ、『当たった』と判断して、データ化されている『ライフ』を減らすことで僕に知らせるのだ。

一方でサンドバッグとしての機能は本物なので、こっちが叩くことはできる、というわけだ。そしてその威力についても測定して、データとして表示するので、ディスプレイで確認できる。踏み込みが甘かったとか、そういうのもきちんとわかるわけだ。

さらに、このARスパーリングは脳無以外の敵を投影することもできる。

インプットされている『敵』や『ヒーロー』の映像を呼び出し、必要に応じてサンドバッグも変えることで（そもそも使わない場合もあるが）、データ上で再現される様々な戦闘能力を相手にスパーリングができる。

スナイプ先生の射撃から身を守るとか、『分身』したエクトプラズム先生を同時に複数相手にするとか、イレイザーヘッドの視界に入らないようにしつつ戦う、なんてこともできる。どれも、攻撃ないし『個性』がヒットするとデータでそれを把握できる。

こんな風に、データやハイテク機器を武器にして、色んなシチュエーションでの戦闘を疑似的に再現しつつ戦うっていうのが、僕がここ数日ずっとやっているトレーニングの内容だ。ぶっちゃけこんな訓練法聞いたこともないし、すごい上流階級御用達の方法であることは間違いない。

とはいえ……

（ハイテクなのはそうだけど、この訓練が僕の身になるかって言われると……）

グラントリノのところでもみっちり扱かれた上、何度も『敵』との戦いを経験したことで、いかに実戦形式、あるいは実戦によって得られる経験が大きく重いのかを、僕は知っている。

だからこそ……ハイテクではあるけど、そのままズバリ確かな『力』に続くかどうかと考えると、いかに色々体験できるとはいえ、痛みも危機感もないこのトレーニングで、戦闘能力が上がるかと考えちゃって……無理そうだ、っていう思いがどうしてもよぎる。

もつとも、最初からこのARを使った訓練は、あくまで『体を作るための』訓練だって言ってたから、戦闘そのものはそこまで重要視してないって最初に言ってた。

対人戦闘訓練は、雄英のカリキュラムでひとまず足りるから、そっちに今は任せるって。

だとしてもなあ……どうしても『ゲーム』ないし『遊び』としての

イメージが先に来る。

ハイテクな機材と、何人もの専門家と話を合わせた『最先端のトレーニング』であるのは確かだけど……コレの先にどう体ができていって、どう強くなれるのか……具体的なところがわからない。最初に受けた説明会の時も、さきつとだったしな。

恵まれた訓練環境だと思うし、感謝も信頼もしてるけど、そこそこ、どうしても不安というか……『これでいいのか』的な思いがよぎるというか……。

このトレーニングの後にいつもやってることがことだから、余計にそんな風に、不安に思えちゃうのかもしれないけど……。

時間いっぱいA Rスパリングや、その他の訓練メニューをこなして体を動かした後、今日の訓練はそこまで切り上げる。もちろん、きちんと整理体操はした上で。

で、ここからがちよつとアレな部分……。

いつも通り、ジムのシャワールームで汗を流してから帰る……のではなく、汗は簡単に拭く程度にとどめて、そのまま部屋に帰る。そして、部屋についているバスルームのシャワーで汗を流す。

そしてその後、体を拭いてから……パンツ一丁で、衛生担当のスタッフの人達に、健康状態をチェックしてもらう。日々の記録をつけるのと、ケガやアザなどがついていないかの確認のために。

隅々まで見られる上に、場所によっては触診とかもされる。その上で、翌日に疲労を残さないように、必要に応じてマッサージとか整体なんかもしてもらえる。

すごく助かるし快適になるんだけど……やってくれる職員さんが全員女性（しかも皆さん若くてきれいなひとばかり）だから、流石にちよつと緊張しちゃうんだよね……。

着衣がパンツ一枚だから、下手すると一部分が變形して大恥かくし……なるべく心を無にして、時間が過ぎる、処置が終わるのを待つようにしてる。

この時、何気に助かってるのが、以前にもつとヤバい経験を……タ

オル1枚で、栄陽院さんっていう超のつく美少女にマッサージされた経験があることだ。それだけの経験を先にしているので、不思議とある程度こういう場面でも冷静でいられる。

ただし、その時のことを思い出そうもんならたちまち逆効果なんだけど……。

それが終わったら部屋着に着替えてゆっくり休む。

一息ついたくらいで、給仕の人が夕食を作ってくれてるので、食べる。これも、栄養バランスはいいけど、特に何か制限したって感じはしない、普通のメニューだ。

僕の好物もよく出てくるし、美味しく食べられる。

その後は、学校から出ている宿題を含めた今日の復習と、明日以降の予習、その他色々行う、勉強の時間だ。自力で解けるならそれでもいいし、予習や理解が大変なところには、『デウス・ロ・ウルト』で手配されている家庭教師の指導を受けられるので、スムーズに進む。

元々勉強は苦手ってわけでもないし、サポートもあるおかげで、短い時間で効率的に学習できてる。今のところ、学業方面で不安は特にない、かな。

それが終われば、本日のカリキュラムは全て終了。あとは完全な自由時間だ。

雑誌を読むとか、テレビを見るとか、あるいはネットでオールマイトやその他ヒーローの動画を見るでもいい。好きな風に過ごせる。何をしてもいい。

ただし、自主的にトレーニングするのだけはなしだ。明日までにきちんと疲労その他が抜けるように計算されてるから、オーバーワークになりかねないってことで。

握力トレーニング用のグリップでも握ってるくらいなら、まあ大丈夫だけど。

あと、お母さんに電話するのも大体この時間だな。今日は何があったとか、お母さんの方はどうだったとか、他愛もないことを話してゆったり時間をすごす。

暫く話して、『頑張ってたね』『辛くなったらいつでも帰っておいで』と

激励を受けて……もういい時間だし、少し早いけどもう寝ようかな……と考えたところで、スマホが鳴った。

(……ああ、そっか。今日まだだっけ)

「……毎日の最後の『予定』がまだだったなと思いつつ、画面を確認すると……やはり、そこに表示されていたのは、お隣さんの名前だった。

『やつほー、こんばんは緑谷』

「こんばんは、栄陽院さん」

『今日はどうするー?』

電話口で、軽い感じの声でそう聴いてくる。

僕は、少し考えて……

「えっと……じゃあ、お願いしようかな。一本でいいや」

『はいよー。すぐ準備するから待ってて』

そう言っただけで電話が切れ……暫くすると、玄関のチャイムが鳴った。

出ると、そこには……着心地のよさそうなナイトガウンに身を包んだ栄陽院さんが立っていた。

さつきまでお風呂に入ってたのか、髪の毛がしっとり濡れてる。

僕と同じで訓練終わりにシャワーなりお風呂には入ってるはずだ

けど、寝る前にしつかりもう一回入ることも多いからな、彼女の場合。

で、そんな彼女が何を持ってきたのかという……

「はいコレ。あ、あつためる場合はごめんだけどセルフな?」

「うん、あ、ありがと……」

いつものカフェオレ……ではなく、パックの牛乳を差し出される。

500mlの奴。

もちろん、栄陽院さんが『エネルギー』を溶かし込んだ奴を。これ

飲むと、その日の疲れがより確実に取れて……朝スッキリ目覚められ

るんだよね。

その日の最後に、疲労度に応じて頼むと届けてくれるのだ。……な

んか業者みたい利用してるようで申し訳ないけど、全然手間じゃな

いからって、彼女自身は。

……こないだ言っただけでもあって、むしろ頼ってくれると嬉し

い、とも言った。

ちなみに、カフェオレじゃなく牛乳なのは、寝る前にカフェイン飲むと寝る邪魔になるから。

それを受け取りながら、ふと……どうしても、栄陽院さんのある部分に目が行ってしまう。

今来てるガウンはバスローブと違って、暖かそうだけど薄手の奴だから、割と体の線が出るんだよね……。

彼女の、モデル顔負けのスタイルとか……豊かなバストとか……

……その先端のちよつと尖ってる形まで、その……

……え、栄陽院さんってたしか、すぐ寝る場合は風呂から出ても服着ない……っていうか、そのまま裸で寝るんだっけ……。

つまりその服の下は……というか、さつき電話した時もまさに……

「あ、ありがとう栄陽院さん。その……じゃあ、また明日」

「うん、じゃね、ご主人様♪」

「……っ……！」

……確信犯かもしれない追撃を食らいつつも……僕は、どうにか噴き出すのをこらえて部屋に戻った。手に持っている牛乳の冷たい感触が、やたら熱い体に妙に心地いい。

……ホットミルクにしよう、コレ。よく眠れるし。

ぱりっ、と未開封のパックを開けて中身を大きめの耐熱タンブラーに移し、電子レンジで加熱。

待つ時間の間にトイレに行つて用を済ませ……出たあたりで、ちよつと加熱が終わったところだった。

熱いのでちよつとずつ飲んで……ベッドに入る。

こんな感じで、僕の1日は終わる。

恵まれた環境で、充実した1日を送れていると思う。

流石は『本気でトップを目指すプログラム』だ。普通に生きていたら……いや、はつきり言つて、栄陽院さんに出会ってなかったら縁がなかったような体験を、ここ数日でいくつもしている。

……それでも、夏休みまでもつと爆発的にパワーアップする、っていう話の割には……まだ大人しいメニニューな気もする。

サポートの充実ぶりもあるからかもしれないが、僕が去年やってきた『目指せ合格(略)』よりもだいたい余裕あるし……。目指す場所が場所だから、あれと同じかあれより過酷になってもおかしくないって、一応覚悟はしてたのに。

……まあ、ここから変わってくるのかもしれないし……。今はまずは、1日1日を無駄にせず、大切に生きていくことだけ考えていよう。少しまだドキドキしてたけど、疲労自体はあったので、体が休息を欲して……。そのまま普通に寝れた。よかった。

☆☆☆

緑谷が眠りに落ちた丁度その頃、

隣の部屋で永久は、彼の予想通り、何も着ていない状態でいた。洗面所に立って、ぽい、と脱ぎ捨てたガウンを洗濯機に放り、自分はそのまま、言葉通りの『身一つ』で寝室に……。行こうとして、洗面所の鏡に映っている自身の姿を見る。

全身とまではいかないが、バストアップくらいの範囲で、みずみずしい肌の裸体が映っていた。

「色々な意味で仕込みは上々、と……。ふひひ。ああ……。今日も思いつきり胸、見てたなー……。一言言ってくれば貸すんだから、遠慮することも自分でどうにかすることもないのに」

『男のチラ見は、女にとってガン見』という言葉がある。

永久にとっては、転生前に聞いたことがあるという程度の言葉だったが、女になった今となつては、不思議とそれもはつきりわかるものだった。

必死に見ないように、意識しないようにしていた緑谷の努力は、見事に無駄だったわけだ。

もつとも、それを本人は気にしていないどころか、喜んでいるのだが。

「しかし多分、緑谷、『思ってたより楽だな』とか考えてるんだろうな

……もう、色々と『改造』は始まつてるのに、それに気づかず……」（ま、今はそれでいいだろう。お望み通り、もつと過酷な訓練も……すぐに来るから）

そんなことを考えた永久は、寝る前に何か飲み物でも軽く、と考えて冷蔵庫を開け……ふと、買い置きしてある葡萄のジュースに目が行った。

ドイツからの輸入品で、お値段は日本円で5桁。永久の好物である。

体育祭の時の『お泊り特訓』で口にして以来、緑谷にも好評な銘柄だ。

これにしよう、と手に取ったそのビンの……ラベルに書いてあるドイツ語を見て、永久はふと、このジュースの存在を覚えてくれた——というかお土産にプレゼントしてくれたというか——ある『友人』のことを思いだしていた。

少し特別というか、珍しい銘柄のそれは、現地でも有名なワインの酒蔵で作られたものである。

ワイン用の葡萄から、発酵途中にアルコールを止めて作られており、葡萄本来の濃厚でありながらスッキリとした甘みで、後味も爽やか。べたべたと残る感じが全くない。

永久は飲んだことがないのでわからないが、その濃厚な味は大人に言わせると、アルコールこそ入っていないが『ほぼワイン』であるらしい。

たしか、『彼女』はそんな知識を自慢げに語っていた。

同じくドイツの菓子であるシュトルーデルという焼き菓子を、よく一緒に作って、このジュースと一緒に飲んだり食べたり楽しんでいたものだ。

もつとも、彼女自身は確か、ジュースよりもコーヒーが好きらしく……まだ味覚が子供だった永久は、そこだけは理解できなかったのだが。

（ドイツ、か……そういや、義姉さん達が言ってたけど、教官としてあ

いつが呼ばれたんだったな。会うのも久しぶりだな……あいつが軍
大学に入ってからだから……2年、いや3年ぶりか)

第64話 TS少女と教師達の密談

雄英高校、校長室。

来客用に誂えられた、座り心地のいいソファに腰かけて、2人の男達が顔を突き合わせていた。

この部屋の主である校長・根津は、手ずから紅茶を入れ、残る2人……オールマイトと、イレイザーヘッドこと相澤に振舞っていた。

どうも、と礼を言つて2人はその紅茶を口にする。そうして口の中を湿らせつつ、2人は今話題に上っていた件を、今一度頭の中で反芻していた。手元の資料を何度も読み返しながら。

根津もまた、自分の分の紅茶をトレーから取って、ソファの1つに腰を下ろし、口を開く。

「それじゃあ相澤君は、事前に緑谷君からコレのことは聞いていたんだね?」

「ええ、そうですね……体育祭が終わったあたりで、一度相談されたので。もつともその時は、まだここまで大掛かりなプログラムだとは聞かされてなかったんですが」

言いながら、相澤は……先日、緑谷から提出された資料に目を落とす。

そこにかかれている内容は、『栄陽院コーポレーション』企画の、次世代のトップヒーローを育成するためのプロジェクトの企画案。『デウス・ロ・ウルト』に関する情報である。

遡ること、およそ1ヶ月前。

相澤は緑谷から、担任教師として1つの相談事を持ちかけられていた。

曰く、外で企業やスポーツジムの類が行う、個性訓練を含む講座のようなものに参加するのは、雄英の生徒としてアリなのかどうか、というものだった。相澤はそう記憶していた。

この『超人時代』、個性とは、1つの身体機能として認知されており

……それを伸ばすための訓練は、あちこちで、色々な形で受けることができる。

例えば、進学校に通う高校生が、よりいい成績を取るために学習塾に通って勉強する、というのは、よくある話だ。

それと同じように、ヒーロー科に通う学生が、あるいは仕事に『個性』を使う労働者が、自分の『個性』を伸ばすためにジムに通ったりすることは、ごく普通にこの社会では行われている。

同時に、そういった『需要』があるということ、あちこちの学習塾やトレーニングジムでは、個性訓練の指導コースなどが当然のように用意されている。用意されているのだから、訓練したいと思う者は当然それを利用して経験を積み、腕を上げる手助けにする。

雄英生においてもそれは例外ではない。ヒーロー科、普通科などを問わず、そういった外部の講座やジムを利用して訓練を積む生徒は決して少なくない。

相澤のクラスで言えば、飯田や轟、八百万……そして、他ならぬ永久などがそれにあたる。

轟の父親はNo.2ヒーロー・エンデヴァーだ。家や事務所には、個性訓練のための訓練室や、基礎的なトレーニングを行うための道場などもある。そういった施設で、幼い頃から厳しい訓練を付けられながら育ってきた。

ヒーロー一家に生まれ育った飯田も同様だ。家などにある訓練施設はもちろん、飯田家はそういった施設のいくつかに対する出資なども独自に行っている。その関係で、それらのジムで使える優待チケットなどをもらっているため、そういった施設で訓練することも多い。

八百万、そして永久は言うまでもない。どちらも日本で有数の資産家一族だけあり、私的に、あるいは傘下に持っている訓練施設は非常に質が高く充実している。2人とも、そういった施設をフルに利用して『個性』の他を磨き上げて来た。

このように、勉強を行う学習塾と同じような感覚で、外部で『個性』の訓練を行うというのは珍しくないし、需要にこたえるようにそういった訓練コースはそこかしこに用意されている。

そして、雄英は特段、生徒が自主的にそういったものを利用することを禁じてはいない。

ゆえに相澤は、緑谷がその話を持ってきた際、先に述べた者達と同じような『個性修行の一環』としての外部システムの利用だと考え、『構わん』と許可を出していた。生徒が向上心を高く持つことは、何ら悪いことではない。むしろ歓迎すべきことだと。

だが、最近になってようやく内容が固まったから、と提出されたプログラムを見て、いち生徒に科すにはレベルが違いすぎるその完成度、そして本気度に相澤は驚かされた。

明らかに、どこにでもある、誰でも受けられるような個性訓練のレベルを逸脱している。

そう思つて、今更だとは思いつつも詳しく聞けば——その際に手持ちの資料を借り受けて目を通しもした——緑谷、と永久が受ける予定でいる『デウス・ロ・ウルト』なるプログラムは、将来のトップヒーローを育成するための、超がつく大掛かりな一大プロジェクトだったと知った。

巨大企業『栄陽院コーポレーション』が企画する……というより、まだ企画段階で正式なサービスとしてロールアウトしていない事業。しかしそれゆえに、テストの意味も込めて、一切妥協なく最高水準と呼ぶのもおこがましいレベルの育成プログラムが組まれている。

「僕も何度か読んでみたけど、これは驚きの一言だね。栄陽院コーポレーションはどうやら、本気で次世代のトップを作ろうとしているみたいだ。まだ企画段階のコレのテストケースとして、身内である栄陽院君、そしてその彼女と仲が良く、また今年の体育祭の覇者の片割れでもある緑谷君に目をつけて勧誘した、といったところかな」

「どちらも『金の卵』としては申し分ない、というわけですか……大層な評価をされたもんだ、あいつらも」

「内容を見る限りでは、豪華さはともかく、実施形態そのものはクリーンですが……」

言いながらオールマイトは根津を、そして相澤をちらりと見る。ネズミである根津の表情が読みづらいのはいつものことだが、隣に

座る相澤も相澤で、なかなか感情を表に大きく出すことがない。黙して熟考するタイプであるため、今、何をどう考えているのかというのを、ちらりと見た程度で読み取るのは難しかった。

「確かにね。念のため他の関係書類も見てみたが、規模を除けばその内容は、一般向けの講座として開設されているものとそう変わりない。安全基準などもきちんと満たしているし、法的にも問題あるものではないね。しいて言えば、進捗に合わせて柔軟にカリキュラムを組み替えていく点に、少々具体性がないと言えるかもしれないが……概ね問題ないと言えるだろう。何より……学校でやる授業と内容の重複や、進行に差し障りが出る要素は全くと言っていいほどない」

「ええ……ですが何度も言うように、いち生徒に対して行うようなレベルではないのも確かです。……まあ、ないとは思いますが、色々と邪推されても仕方のないレベルですよ、こうなると」

相澤の言葉通り……緑谷と永久の2人に施されようとしているトレーニングメニューは、雄英の教師である彼の水準からしても、超がつくほどに高い完成度を誇る内容だった。

それこそ、八百万や栄陽院が実家のバックアップで行って来た修行すら大きく上回る水準。誇張も何も抜きで、トップヒーローを育成しようとしていることがわかるものだったのだ。

そして相澤からすれば、いくら商売とはいえ……しかも、まだテストケースに過ぎないこれで、ここまでのカリキュラムを実行しようとするものか。何か、緑谷と栄陽院にここまでするだけの『何か』があるのではないかと考えてしまっても無理のないことだった。

例えば、極端な例えになるが……卒業後、何らかの形で緑谷と栄陽院を『栄陽院コーポレーション』に取り込もうとしている、など。

(だが、そういうことを考えるなら、こんな回りくどい方法を取らなくてもいくらでもやりようはある。むしろ非合理的な方法だ……だとすれば本当にコレは、規模がけた違いなせいで色々と邪推してしまうだけの、額面通りの育成プログラムととれる。……どっちにしろ扱いには困るが……)

頭では納得しつつも、あまりに前例のないことであるだけに、相澤

自身、本当にこれが『合理的』と呼べる判断であるかという問いにはすぐには答えられないのだ。

原則として、雄英と生徒に害さえなければ細かく言う必要性はないだろうが、だからといって『はいじゃあいいよ』で済ませるのも無理だ。

以降も含めて様子を見ていくことこそ必要であると言えるだろう。

（規模は違うが、緑谷は栄陽院に手伝ってもらって急成長した前例もある。その、恐らくは『アナライジユ』のノウハウを組み込んだプランなら……ま、過信は禁物だが、経過を見守るくらいには信憑性はあるだろう）

「結論としては……もう許可も出してしまってますし、先方の都合もあるでしょう。2人には、このまま希望通りにプログラム参加の許可を出します。もともと、規模が違うだけで、一般的に行われている指導・訓練コースを受けるのと条件は変わりませんから……飯田達や、栄陽院自身の実例がある以上、それだけを理由に待ったをかけるのも合理性に欠ける」

「なら、あくまで『少し規模の大きい学外学習行動』として許可は出しつつ、経過報告等を密にしておくのがよさそうだね。もたらされるものを考えれば、不利益になっていくわけでもないしね！ 見れば、今後実施予定の『ワーキングホリデー』についても上手く使って行うつもりのようなだし、こちらとしても生徒が成長し、データも手に入ると思えば悪い話ではないはずさ！」

その校長の言葉通り、緑谷と栄陽院が参加する予定の『デウス・ロ・ウルト』については、両名からカリキュラムの経過報告を密に行うこと、学校のカリキュラムに支障をきたすようなことになるのは避けることを条件として、しばらく様子を見ることになった。

色々と思う所はない様子だが、相澤も現段階ではこの程度の対応がベストないしベターであることはわかっているようで、これから注意深く見ていくつもりで、そのまま1つ2つ確認して認識を共有した上で、校長室を後にした。

そうして部屋には、オールマイトと根津の2人が残る。

相澤が行った後、改めて紅茶を入れなおした根津は、オールマイルトと共に今一度それで唇を湿らせ、一息置いてから話を切り出した。「さて……万事順調に進んでいる、と喜ぶべきだと思うかい？ オールマイルト」

「どう、なのでしょね……緑谷少年の躍進が続いている現状を見れば、そうなのかもしれませんが……いかんせん、予想以上にうまく進みすぎている、という思い、ないし戸惑いがないとは言えません。相澤君の言う通り……情けない話、私も少し『邪推』しています」

「それは無理もないことさ。実際、緑谷君がここまでの実力を手にしようと思ったなら、最低でも半年……下手をすれば年単位の期間が必要だと僕も思ったからね。それも、途中で『個性伸ばし』を始めとしたいくつかの特殊なプロセスを経た上でだ。……ここまで早く、そして安定した成長を遂げることができているのは……ひとえに彼女の、栄陽院君の存在あってこそだろう」

根津の頭脳の聡明さはオールマイルトも知るところだ。その彼が言っているのだから、緑谷出久の成長速度が、本来……というか、彼の独力ではありえないレベルだというのは確かなのだろう。

そう言った分野に明るくないオールマイルトとしては、体育祭の前後でも『喜ばしい』くらいにしか思っていなかったが、言われてみれば成程と思えていた。

緑谷出久は、言っただけだが……ほんの1年と少し前まで、戦闘のせの字も知らなかった、体も脆弱としか言えないそれしか持っていなかった、『無個性』の少年だった。

自分がほとんどつきつきりで体を鍛えるのを見ていたとはいえ、雄英入学時点ですら、『個性』をようやく手にし、そして体が最低限できているだけの状態だった。

その眩いばかりに輝くヒーローの精神に感動し、彼こそ自分の、『ワン・フォー・オール』の後継者にふさわしいと見込みこそしたが、大成するまではまだまだ時間がかかるはずだった。

高校時代、恩師曰く『体だけは完成していた』自分でさえ、それまでに師匠である『先代』に鍛えられた期間と、さらに1年近い期間を

いっばいに使い、ひたすら実践訓練で鍛え上げられた地獄のような鍛錬を経て、ようやく一線級の実力を手にしたのだ。

幾度も嘔吐させられ、トラウマすらこしらえながら強くなった身として、決して平坦ではなく、また短くもなかった道のりだったと言えることができた。

体すら『最低限』しかできていなかった緑谷出久が、わずか1ヶ月足らずの期間で、轟や爆豪を始め、それまで何年もの鍛錬を積み重ねて来た学友達を圧倒できるまでの実力を手に入れた。

『ワン・フォー・オール』という強力無比な『個性』を持っているとはいえ、数年分の距離の差を一足飛びに縮めたかのようなその快挙。これがいかに異常なことだったか——決してけちをつける意図で言うのではないとはいえ——冷静になってみるとわかる。

「聞かされた当初は、互いに高め合える学友ができてよかった、あるいは青春らしい相手ができたのかもしれないだのと、能天気なことしか考えていませんでしたが……先日改めて緑谷少年に聞かされた話のこともあります。必要に応じて、彼女からも話を聞く必要があるかもしれない」

それで何かがわかる自信もないが、と自虐気味に心の中で付け加え、オールマイトは疲れ気味にため息をついた。

オールマイトはつい先日、緑谷出久から、永久との関係が微妙に変化したことについての報告も受けていた。そこで聞かされた、永久の心の内や……彼女の個性の本当の名についても。

『オール・フォー・ユー』。自らにとつての宿敵の名に近いそれに、一時は驚いて警戒感を示したものだが、よくよく聞いてみれば単なる偶然だった。

むしろ、『全てを奪う』あの男と、『全てを捧げて尽くす』永久のあり方は——どちらも歪んでいる面があるのは否定できないが——いっそ真逆とすら言えるものだ。

何かつながりがあるのではといった、最悪の想像がかすりもしていなかった現実にはっとしつつも、また別な意味で特異すぎるその個性……そして、それに影響を受けている永久の価値観には、流石にオ―

ルライトも戸惑わなかったとは言えなかった。

そしてそのことは、根津にも報告している。

生徒の色恋が絡んでくる問題を、第三者に吹聴するようなことは決して褒められたものではないが、ことは最重要機密である『ワン・フォー・オール』の練達にも絡んでくる問題だ。それに影響を及ぼす一要素であるならば、関係者間での情報共有は必須という判断だった。

「栄陽院君の献身と、栄陽院コーポレーションの企画した『デウス・ロウルト』……この2つは、間違いなく緑谷君を急速に成長させるだろう。それも、ほぼノーリスクに近い万全な形でね。彼女自身は『ワン・フォー・オール』のことは知らないから、そこに何か考えを持ってこれを企画したわけでもない……我々の立場からすれば、間違いなく『嬉しい誤算』という奴だ」

「ですが、緑谷少年は多少なり負い目に感じているようです……いえ、緑谷少年だけではない。私も多少なり思う所がある。本人の意思とはいえ、彼女に負担を強いているわけですから」

「それは僕だって同じさ。けれど、もともとどうにかして踏破しなければならなかった道だ。それも、何年もの時間をかけて、血反吐を吐いてでも。平和の象徴を受け継ぐとは、そういうことだからね……意図せずしてその期間を大きく短縮し、なおかつ完成度自体も上げることもができるならば……わざわざ横からブレーキをかけてやるのも、それはそれで『非合理的』だ。改善するのは……僕らの心の負担、自己満足くらいのものだよ」

「……覚悟していたつもりではいました。緑谷少年に、私が背負って来た重荷を渡すのと同様に……平和の象徴というのは、その名を、存在をもって全てを支える存在という意味ですから……」

「教育者が聞いて呆れるね。守るべき生徒に負担を強い、生徒が何かを犠牲にしてその先にあるものをつかもうとしているのを……損得勘定から黙殺しなければならいんだから。それが例え、生徒自身の意思だとしても、そんなことは言い訳でしかない。学び舎を預かり、生徒の未来を保証する身でありながら、見守ることしかできないこの

無力……せめて忘れないでおこう」

緑谷出久による、平和への献身。

栄陽院永久による、緑谷出久への献身。

大切なものを守るため、支えるため、己の全てをかけて突き進む彼らを、根津とオールマイトは止めないことに決めた。

代わりに、その行く手にある困難を全力で排除し、全力で突き進めるように支え続ける覚悟を決めた。守るべき子供たちに、平和という名の重荷を受け渡さなければならぬ立場にいる者として……せめてできることを全てするために。

『デウス・ロ・ウルト』。

根津の頭脳を以ってした解析の結果として……お世辞抜きに、本当にトップの中のトップに届き得る、前代未聞の強化プログラム。

その実行をもつて、緑谷出久を……『平和の象徴』の後継者を大成させるために、彼らはこれから、全力でそれを後押しするだろう。

託す側の者として、最後の最後まで、彼らなりに全てをかけて。

またすっかり冷めてしまった紅茶をぐくりと飲み干した後、根津はふと思いだしたように、

「あ、そうだオールマイト。この話、昨日グラントリノにも聞いてもらったんだけどさ？」

「え……お、お話しになつたんですか？ グラントリノに？」

「ああ。そりゃ、隠居しているとはいえ、秘密を共有している仲だしね。今現在、何やら色々調べて動いているみたいだから、隠居じゃなくなってるけど」

根津の言葉を聞きながら、オールマイトはたらりと冷汗を流していた。

（まずい……緑谷少年の指導、私大して役に立ててないのがバレる。いや、それはもうこの際仕方ない……事情を知っている仲間内でまで、指導の功績まで栄陽院少女から奪っていいはずもなし、大人しく怒られよう……）

「それでね、オールマイト。グラントリノに栄陽院君のことも話したんだが……そしたら、変なことを言ってるね」

「？ 変なこと？」

ややみみつちい理由で戦慄し、しかし最終的に勝手に覚悟を決めていたオールマイトは、根津の言葉に、頭上にクエスチョンマークを浮かべて反応した。

「ああ。オールマイト、緑谷君の話だと……栄陽院君の旧姓って『幾瀬』なんだよね？」

「ええ、そのように聞きました」

「だよ。念のため私も過去の卒業生の記録を調べてみたんだけど、OGである彼女の母……トレーナー・ヒーロー・アナライジユも、在学時の名前は『幾瀬叶恵』だったしね」

けど、と続ける根津。

「何を知ってるのかはわからないんだけど……グラントリノにそのことを話した時、こう返されたんだ。『そいつひよつとして——』」

—— 『奉生家』の末裔じゃないだろうか？』ってさ」

第65話 TS少女と軍人幼女

S i d e . 緑谷出久

「すー……はー……すー……はー……」

自分の呼吸の音が、やけにうるさく聞こえる。

それ以外に音がほとんどないからそう聞こえるだけだろうけど……今は僕には、そんな風に何か意識を向けて、暇をつぶせることができるものがあるだけでありがたい。

何せ、何も無い……というか、何をすることもできないこの状態では、他にやることもなくて。

今僕は、薄暗い部屋の中で……ジャージ姿に、両手両足を拘束された状態にいる。

手首には手錠をかけられて上手く動かせない。両足も同様。その状態で椅子に座らされている。この姿勢のまま、ずっとじっとしている。

いや……実際に長い間なのかはわからない。僕の間でしかないから。

何せ、この部屋には時計がない。窓もない。

天井の裸電球のわずかな明かりだけが部屋を照らしていて、ずっとそのままだ。時間がわかるものが何もない空間。あるのは、その電球と……今座ってる椅子。そして、正面に見える扉だけ。

とつくに目は暗闇に慣れたけど、指標になるものが何もないから、どのくらいの時間こうしているのか……感覚がなくなった。秒数を数えてみようかか思ったりもしたけど、無理だった。

なので、今はただひたすら、じっとして待っている。この時間が終わるのを。

(思ったよりコレ、つらいな……ただ退屈というか、何もすることがないだけなのに……今、何時なんだろう？ 僕はあと、どのくらいこう……)

——ガチャ、ばたん！

その時、突然、鍵が開く音がして……正面にあった扉が開いた。はつとして視線を上げると、そこには……開いた扉から入ってきたのであろう人が立っていた。

小柄で華奢な……しかし、凜とした雰囲気と、重厚そうな軍服が特徴的な、金髪に緑の目の美少女が。

「終了だ、緑谷出久。本日の『対尋問訓練』はこれまでとする」

「あ、はい……ありがとうございます」

話は、昨日の夕方の訓練が終わったあたりにまで遡る。

いつも通り、ウエイトスーツとマスクを使ったトレーニングを終えた僕は、昨日と同じく、後はシャワーを浴びて（そして衛生状態の確認＝半裸ガン見を挟んで）夕食かな、と思っていたところで……なぜか、別メニューをこなしていた栄陽院さん共々、ジムの別な部屋に連れていかれた。

そしてそこには……1人の女の子が、既に来て待っていた。

（小さい……中学生？ いや、もしかしたら小学生かも？ でも、どこかで見たとような……）

普段身近にいる女子の中に、少なからず発育のいい女子や背丈の高い女子がいるためか、最初に僕が思ったことはそんなことだった。

小さくて華奢な体躯。服の上からでもわかるほどに手足は細く、どう見ても子供だ。

さらに言えば、金髪碧眼の美少女である。どこからどう見ても外国人だ。……まあ、この個性社会、見た目が当てにならないというケースはさほど珍しくもないが。

そして、そんな小さな女の子は……軍服に身を包んでいた。

単なるコスプレの類ではない、と一目でわかるほどにぴしっと着こなしていて……肩についている階級章もかなり立派な装飾がついている。胸の部分には勲章？ みたいなのもいくつか。

本職の軍人？ だとしたら、それなりに上の地位にいるんだろうか

?

あるいは、こういうヒーローコスチュームとかなのかもしれないし……だとしたら、この子はプロヒーロー？ 小さいのに……いや、何度もアレだけ見た目はそこまで当てにならない。

以前会った『ビューティーバスケット』だって、見た目は中学生くらいの女の子にしか見えなかったけど、きちんと成人しているプロヒーローなんだから。

「おや、お揃いでおいでなすったわね、お2人さん！」

そうそう、この通り子供にしか見えな……って!?

「え!? び、ビューティーバスケット!？」

「あれ……バスケさんも来てたんですか?」

「もちろんよ! こんな面白そうな企画、私が誘われて断るわけないでしょー!」

その軍服の女の子の陰に隠れて見えなかったが、そこにいたのは紛れもなく、プロヒーロー・ビューティーバスケットだった。

以前行った彼女のエステサロンで、前後不覚になるほどとろつとろに気持ちいいマッサージ(嫌らしい意味ではない。断じて)を受けたのはまだ記憶に新しい。

そんな彼女が、ヒーローコスチュームなのかどうかわからないゴスロリ服姿でそこにいた。何でここに……?!

「何でってあんた……聞いてないの? 今日から私達が、新たにあなた達の講師役に加わることになったからよ。『デウス・ロ・ウルト』とやらだね」

「え、そうなんですか!？」

現役プロヒーローの講師! それも、美と健康の第一人者であるビューティーバスケットが僕らの特訓を見てくれるなんて!

彼女はそのスキルから派生して、健康を『増進させる』ないしは『取り戻す』類の仕事の功績も数多く残している。有名なトレーニングジムとタイアップして体質改善や鍛錬のメニューを作ったり、事故で体が不自由になった人のリハビリメニューを作ったりもしてたはずだ。

『体作り』はある意味彼女の本領なわけだ。モデルやボディビル

ダーミたいな『魅せる肉体』から、アスリートやプロヒーローみたいな『動かす肉体』『戦う肉体』まで何でもござれ。

そんな彼女が協力してくれるなら、この上なく心強い！

……けど今、ビューティービスケットは『私達』って言ってたな？
それってやつぱり、もう一人のこの……軍服の女の子のことか？

僕の視線がそっちを向いたのに気づいてか、その子が僕の方を見て言った。

「初対面の相手に向けるにしては、少々視線の不躰が過ぎるのではないか？ 私は観賞用のアイキャンディではないのだが」

「えっ……あ、す、すみません……」

ぴしやりと言われたその言葉に、思わず敬語でそう謝ってしまった。

なぜだか、そうしなければならぬ気がしたというか、凄みみたいなものを感じて。

すると、女の子は『ほう』と少し感心したように、

「なるほど、礼節を全くわきまえていないというわけではなさそうだな。日本人の奥ゆかしさというやつか……私の姿を見ると、たいいていの男は見た目で侮って子ども扱いしてくるのだが。まあいい……自己紹介がまだだったな」

今度は彼女は、体ごとこっちに向き直って、

「永久には必要ないだろうが……私の名はターニャ・フォン・デグレチャフ。所属はドイツ正規軍、階級は少佐、プロヒーロー資格も持っている。ヒーロー名は『シルバーピクシー』。今回、軍上層部と『栄陽院コーポレーション』の協定に基づき、貴様の指導を行うために教官として着任した」

「ドっ……え!? 外国のプロヒーロー!？」

驚く僕には構わず、彼女……ターニャさんは、説明というか自己紹介を続ける。

「私が見るのは主に戦闘訓練と精神鍛錬、あとは必要に応じて座学なども見るようになってる。貴様は別に軍人ではないから職業上の上下関係はないから、そこまで肩肘張った敬う態度はいらん。が、教

官である以上立場は私が上だ。年齢では貴様の方が上だとしてもな」
年下!?! え、もしかしてホントに見た目通りの年齢!?

……っっていうか、思いだした! どっかで見たことあると思ったら
……以前、外国のヒーローを紹介する特集番組で見たことあったんだ
!

プロヒーロー『シルバーピクシー』! 世界最年少クラスのプロの
1人って触れ込みで……そこまで詳しくは紹介されてなかったはず
だからすぐには気づけなかったけど。よくよく見れば、あの時にテレ
ビに映ってた女の子に似てるような……でも、あの時はもつと髪の毛
長かった気が?

「トップヒーローを目指そうだな? ならば、私が与える試練程度、
容易く乗り越えられるようになって見せる。貴様が全力をもって
……おい、聞いているのか?」

「えっ!? あ、はい、もちろん聞いてます!」

「……まあいい。私の指導は明日から始まる……今日はこの後は、い
つも通り食って寝ろ。永久、お前の面倒も見ることになった。仕事で
ある以上、友人とはいえ本気でしごくつもりだ……お前なら大丈夫だ
とは思うが、死ぬ気で付いて来いよ。軍人としての私は……優しくは
ないぞ」

「了解、よろしくターニヤ。あー……呼び方とか口調どうすればいい
? 私ら生徒になるわけだし」

「さっきそいつにも言ったが、そこまで深く考えなくていいさ。学校
の先生にやるような敬語か……それも窮屈ならため口でもいい。た
だし、あまり無礼すぎるようなら殴ってわからせる」

「いや、手出す前に口で言いなっ……」

無礼なことしたら殴られるのか……っっていうか、なんかそんな風
には見えてたけど、やっぱり2人って知り合い、というか友人みたいだ。
随分気安く話してるし、互いのことをよく知ってるみたいだし。

ターニヤさんは訓練期間中、僕らのいるタワマンのフロアの一角を
自室として滞在するらしい。実質、住み込みの家庭教師みたいな扱い

だ。

一方、ビューティーバスケットはここには自宅ないし事務所から通うそう。必要な時はゲストルームあたりに泊まるそうだけど。

部屋に戻る途中で世間話的に聞いたんだけど……栄陽院さんとターニャさんはそこそこ古い付き合いで、ターニャさんがプロヒーローになる前からの友人なんだそう。仕事で忙しいから、会うのは久しぶりだそう。

どうやって知り合ったのか聞いたら、どうやら、栄陽院さんのお母さんが関係しているようだった。プロヒーローとして、ターニャさんの『国際インターン』を受け入れたことがあるらしい。

ホームステイ状態だったから、その時に知り合って、友人関係になって、今に至ると。

その時に、多少なり『アナライジユ』仕込みの解析・指導のスキルも身に着けたらしく、今は軍の現場で辣腕を振るっているそう。基本は後方勤務だけど、必要に応じて現場に出て、軍人としてもプロヒーローとしてもバリバリ働いてるんだって。

ちなみに、以前栄陽院さんが言ってたドイツの知り合いってのはやはりターニャさんだったそう。あのぶどうジュース、彼女つながりで持ち込まれたのか。

彼女自身はジュースよりコーヒーが好きだそうだが。

栄陽院さんから『コーヒーもジュースもどっちも経費で飲み放題だから』って言われた時は、年相応？に嬉しそうな顔をしたな。

しかし、見た目は可愛い女の子でも……飛び級して軍大学も出ているプロヒーロー。恐らくだけど、僕なんかよりずっと強い。

軍隊仕込みの訓練か……。明日からだっていうけど……。不安でもあるけど、やっぱり楽しみだ。

☆☆☆

そして、明けて翌日。

いよいよ始まる訓練がどんなものかと思っていたら……。課された

のは、この訓練だったというわけだ。

その名も『対尋問訓練』。軍人なんかが、敵に捕まって捕虜にされた時なんかには、尋問、あるいは拷問されても秘密事項を話さないようにするための訓練。

いや、たしかに軍人っぽい訓練ではあるけど……：……よりによってこんな感じで……？

別に、縛られて鞭で打たれたり、痛みを伴うようなものじゃなかった。

ただ、時間も何もわからない暗所で、いつまでも同じ姿勢でいさせられるというもの。ストレスはまあ……：……確かに結構かかるしつらいけど、今のところまだ耐えられる範囲だ。

もう少し長時間続けられたら参ってくるかもしれないけど……

……：……ていうか苦痛云々よりむしろ、訓練の方向性が予想外だったことへの戸惑いが大きい。

軍隊式だつて言うから、よくテレビのドキュメンタリーとかで見るとような、大の大人でも泣きながらなんとかこなしていくような、すごい厳しい訓練になるんだとばかり思ってたけど……：……いや確かに、着任当時、精神鍛錬もやるとは言ってたけどさ……

というか、プロヒーローに対尋問訓練って必要なのかな？　まあ、敵に捕まった時とかに、そういうスキルがあれば味方の情報を話さなくて済みそうでいいかもだけど……

「安心しろ、肉体的に追い込む訓練もきちんとやるよ、主に夕方な」

「えっ!?　あ、はい……：……すみません。……あれ？　僕、声出ました？」

「いや？　ただ、予想通りの反応というか表情だったからな。それを差し引いても貴様はわかりやすいが」

……：……最近、色んな人に言われるな。僕……：……わかりやすいって。

「まあ、確かに軍人程ヒーローに『対尋問訓練』は必要ないかもしれないんさ。だが、きちんと意味があつてやっていることだ……：……でなければ、朝のこの貴重な時間を使つて、こんな時間だけは無駄にかかるような訓練などやらんさ」

それは確かに……今までは朝練ってことで体動かしてたもんな。
それに代わる何かの『意味』がこの訓練にはあるんだろう。純粹に
対尋問スキルを積ませること以外にも、恐らく何かあるであろう『意
味』が。

歩きながらそんなことを思っていたが、前を歩いていたターニヤさ
んが足を止めたので僕も止まった。

そのまま動かない。見ると、ジト目になってこっちを睨んでくる。
「おい、いつまでついてくる気だ。部屋に戻って身支度して飯を食え
と言っただろ」

なんとなくてターニヤさんについて行ってしまっていた僕は、『対
尋問訓練』に使っていた部屋から出るのではなく、また別な同じよう
な部屋の前までついてきていた。しまった、考え事してたから……

でもこの扉、同じような部屋に見えるけど……やっぱり中も同じ
『対尋問訓練』用の部屋か？

だとしたら、僕以外にそれに参加している人は……つまり、この部
屋の中にいるのは……

「何だ、そんなに拘束されている永久の姿が見たいのか？ ……それ
なりに仲はいいようだが……かといって婦女子のあられもない姿を
見ようとするなど、あまり感心せんぞ？」

「え!?! い、いいいいえそういうわけじゃ!?! っていうか……あ、あら
れもない姿って!?!」

何!?! 栄陽院さんそんな刺激的な恰好で拘束されてるの!?!

僕は普通に雄英ジャージに手錠+足錠だったけど……ど、どんな
……

「言つとくがこっちもジャージだぞ、普通に。ポージングが特殊なだ
けだ」

「と、特殊……?」

「まあ、想像にお任せする」

ほらさっさと部屋行け、と追い出された僕。

と、特殊って……どんななんだろう……? い、いかん、気になっ
てきた……。

……聞いたら教えてくれるかな？ いや、いやでもあんまりアレなの
だったら聞くだけで白い目で見られる可能性も……いやでも、栄陽院
さんなら大丈夫な気も……

「緑谷様ー？ あの、朝食もうできていますか……？ 着替えも
早くしませんと……お疲れになりましたか？」

「えっ!? あ、す、すいません今行きますっ！」

☆☆☆

「あられもないって何さ……ただ単に拘束されてるだけじゃん。
ジャージだし」

「男にとつてはそうではあるまいよ。お前クラスの女が拘束されて
るっただけで、ジャージだろうが下着だろうが色気が出るっつも
だ」

「ターニヤにもその感覚わかるの？」

「いや、わからん。わからんが、そういうものだと教わった」

「誰にだよ？」

「士官学校のカリキュラムでだ」

「マジかよ……ドイツ軍、高度なこと教えてんな」

そんな馬鹿な話をしながら、私はターニヤに拘束された体を解放し
てもらっていた。

……部屋の前の会話、聞こえてたかんね。

別にいいんだけどさあ……緑谷になら見られても。

ただ、そんなに面白みのある光景でもないと思うけど……ただ単
に、両腕鎖で壁にはりつけっぱくされてるだけだし……しかも、微妙
な高さで。

立っていると中腰になるし、座つてると吊り下げる形になつて腕が痛
い。どっちにしても地味にきつい。

楽なところで……膝立ちくらいで延々と耐えている必要がある。

色気……あるかなあ？ 私個人としては膝と腕が痛いだけなんだ
が……これで薄着だったりすればワンチャンかもしれんけど、ジャー

ジだし……。

まあ、精神的にストレスがたまるのはそうだから、対尋問訓練にはなるかもだけど。

「にしても、対尋問訓練って、裸にされて鞭で打たれてるとか、ずっと寝かせてもらえないとか、食事抜かれるとか……そういうのやつばフィクションの中だけなの？」

あとは電気ショックとか、石を抱かせるとか、水を張った牢屋の中で延々と立たされるとか、それかもっと……薄い本的なエロいのか、そういうイメージあつただけ……流石にないか。

「いやまあ、そういうのもなくはない。だが、そこまでするのはよっぽど特殊な任務に就くような……まあ、特殊部隊の、超のつく精鋭くらいだ」

「あ、あるにはあるんだ。そういうSMプレイみたいなの」

「お前もうちょっとマシな例えをしろ……まあ、そういう部隊はえてして重要な情報も扱ったりするからな。敵方に漏らされると困るから、そういう訓練にも力を入れるのさ。反対に、末端の兵卒なんぞ大した情報は扱わんからな。訓練課程の1つとして、今やったような拘束・暗所ストレスなんかはやるが、それだけでもある程度効果はあるからそこまで突っ込んだことはやらん」

聞けば、人間って『そういう状況』に置かれたことがある、っていうだけでも大分ストレスに耐性つくんだそうだ。わざわざ『へっちゃらなくらいに慣れる』までやらなくても。

だから、こういう訓練は頻度的にはそこまで多くはしないんだと。そういうもんなのか。

「それに、敵方に精神制御系の『個性』持ちでもいれば、途端に意味なくなるからなあ……情報を渡さないために一番確実な方法はと言えば、今も昔も変わらんよ」

「その方法て？」

「奥歯にカプセル仕込んで捕まったら何かされる前にガリっと」

「その中身毒だろ。物騒だなおい……」

死人に口なしってか……怖いわ。

や、でも実際、心操みたい個性もちには対尋問訓練なんてするだけ無駄だしな……軍人ともなれば、時に死ぬのも仕事の内だって聞く。それも立派に選択肢というか、手段なのか。

「この手の訓練は今後も、形を変えて散発的に行う。予告なく抜き打ちでな。ただ、精神鍛錬は私1人で見ているうちはまだ楽だしまでもだからな。途中から奴が来るらしいから、気をつけろよ」

「? 奴って?」

「……あのゴム女だよ」

「ゴム女……ひよつとしてラバー!? うわ、マジか……あの人もカリキュラム参加すんの……?」

こっちの情報の方がびっくりだった。

えー……あの人があ……。あの人が精神鍛錬担当すんのか……きつそうだなっていうか、あれこそまんまSMになっちゃうんじゃないや……?

第66話 TS少女と軍隊式教練

走る。走る。走る。

足を止めずにひたすら走る。

止まればやられる。後ろから追ってくる圧倒的な暴力に、なすすべもなく撃ち抜かれる。

「永久！ 動きが単調になっている！ そんなことでは狙い撃たれて終わりだぞ！ 貴様もだ緑谷出久！ いちいち向かう先や狙う的を視線で見ると何度言ったらわかる！」

決して狭くはない、多用途訓練スペース。まあ要は、広くて頑丈な道場みたいな場所なんだが……そこで私達は、我が友人であるターニヤの指導を受けていた。

今年で15歳になるターニヤは、私達より年下だが、その能力はあらゆる面で下手なプロヒーローを上回る。戦闘能力もさることながら、洞察力、頭脳、そして指導に関しても。

この実力がどんなふうにして培われたのかってのは……前に聞いたことがあるけど、あまり聞いていて気分のいい話じゃなかった。

(もつとも、その理屈を今回の『デウス・ロ・ウルト』では活用してるんだけど……！)

道場の中で、私と緑谷は2人がかりでターニヤを相手にしてるんだが、正直勝負になってない。実質、ターニヤからの攻撃を避けて逃げて防ぎ続けるばかりだ。

ターニヤ自身の総合的な実力もそうだけど、何より『個性』が強力すぎる。

点、線、面……あらゆる範囲で攻撃してくる上に、さつきも行ってたけど単調な動きじゃ先読みされて狙い撃たれるからだ。

今ターニヤは、一昔前のライフルっぽい武器を構えてこちらに向けている。

しかし、そこには鉛玉が込められているわけではない。飛んでくるのは……彼女が『個性』で、自前で用意した弾丸だ。

ダウン！ という轟音と共に……暴風が圧縮された弾丸が放たれ、間一髪射線から逃れた私のすぐ横をかすめていく。

しかもそれが2発、3発と放たれるので、足を止めてなんかいられない。

と、私が撃たれている間に、緑谷がターニヤの死角から最高速度で突っ込んでいくけど、ターニヤはそつちを見ずに宙返りしてその攻撃をかわす。

それを追って緑谷が、いつも通りの身軽な動きで空中に跳ぶ……が、

「筋肉の駆動、視線の移動、予備動作のベクトル……全てがお前の次の動きを私に教える」

跳躍と同時に、その方向に割り込んできたターニヤの足に突っ込んでしまった。

頑丈な軍服の、しかも金属が仕込んであるらしいつま先が鳩尾にめり込む。かはつ、と苦しそうに……肺から空気が抜けた音が、緑谷の口から洩れた。

「動きの癖まで今すぐに直せなどと無茶は言わん。だが、いつまでも課題をそのままにしておくことは私は認めん。口でわからぬなら……」

そして、ターニヤの持つ銃の銃口が、緑谷を射線にとらえ……

「それができないとどうなるか……体で覚えろ！」

バズーカみたいな威力で放たれた空気の砲弾が、緑谷を反対側の壁まで吹き飛ばし、叩きつけた。

「が……は……は……」

「緑谷！ くっ……」

気絶はしていないが、ダメージが大きすぎてすぐには動けなそう

その緑谷に向けて、追撃とばかりにターニヤは銃口を向ける。

助けに行こうととっさに、大回りして私が動く……しかしそれもターニヤは察知していた。

私が駆け出した先に、またしても先読みするように何かが放り投げ

られ……手榴弾!?

大慌てでそこから飛び退ると、その手榴弾は次の瞬間、私の目の前で爆発……はしなかったが、代わりにその周囲にとんでもない暴風が発生して、離れた所にいた私も吹き飛ばされそうになった。何て威力……本物の手榴弾かってくらい爆風だ。

「他人の心配とは余裕だな永久……お前とて未だ、前線に出るには褒められた領域にはいないぞ!」

そして、銃口がこつちに向き……私が体勢を立て直すより先に、さまざまの暴風が……しかも、体全体にたたきつけられるような衝撃のそれが襲って来た。

2度、3度それを食らってしまい、たまらず私は床に倒れ込んだ。

しかし、倒れてそのままじつとしてたんじや追撃が飛んでくるだけなので、どうにか転がって攻撃範囲から逃げようとする。

「痛った……今の、散弾銃か?! そういうの軍人が使うのは条約違反じゃないの?」

「軍人同士の戦いならな。だが、サイラン敵からすればそんなものは関係のない話だ。日本の連中は特にそうでもないようだが、海外ではこの程度珍しくもない。国や地域にもよるが、銃器や毒物その他で武装した敵など当たり前のようにいる。殺されてから『銃を使うなんて卑怯だ』と恨み言でも言う気か? 15秒待ってやるから呼吸を整えてさつさと立て」

「ごもつともで……あー、心身に身になるなあ、この鬼特訓。」

こんな感じでここ数日、私と緑谷は夕方の特訓、ターニヤにもまれ続けている。実践的な訓練……というか、彼女がやると実『戦』的なそれになるというか、もはや戦そのものというか。

指導方針が軍人のそれを踏襲してるから、容赦なくて、しかし教えの全てに意味がある。

見つけた弱点をそのままにしておくことを絶対に許さない徹底的な指導のおかげで、日に日に動きが改善されていくのがわかる。ハードさに見合ったりターンが実感できる訓練だ。

聞いた話じゃ、本国で指導教官としてターニヤが着任した際、本来は2年かかる実戦指導プログラムを1ヶ月に短縮して実施して、脱落者多数出すも、50人近くのエース級軍人を育て上げたっていうから、筋金入りだよな……彼女に教えてもらっている現状は、幸運以外の何物でもない。

なおその訓練、脱落者の中には重軽傷者多数だったらしいが、一応死者も再起不能者もいなかったらしい。そんなところにも彼女の確かな手腕が光る。

それに加えて、彼女自身の『個性』の使い方も絶妙だしな……ただ火力に訴えるんじゃないやなくて、繊細に制御して指導方針に合わせた使い方をしてくる。

ターニヤの個性は『気流』。空気に流れを作って、穏やかな風から竜巻クラスの暴風まで作り出したり、空気を圧縮して弾丸にしたり、風圧の爆弾にすることもできる汎用性の広い『個性』だ。

今回みたいに銃に込めて空気の砲弾を打ち出したりすることもできる。しかも威力は彼女のさじ加減1つ。縁日のコルク銃クラスから、対物ライフルクラスまで自由自在だそう。

さらには弾丸の形態を変えることで、さつきみたいにショットガンにしたり、火炎放射よろしく薙ぎ払ったりもできる。

さつき私がくらった手榴弾もその応用の1つだ。あの手榴弾はただの偽物というか玩具なんだけど、その周囲に圧縮した空気を纏わせて、彼女が投げた瞬間に『起爆』させ、周囲に暴風をまき散らしている、という仕組みだ。

おもちやの手榴弾を核に使っているのは、見た目でわかりやすいようにっていう、単なる訓練時の私達への配慮である。その気になればターニヤはアレを不可視の爆弾にしてできる。

見たことはないけど……やろうと思えば、空気を超圧縮してプラズマを発生させ、それを使って全てを焼き払うような超破壊力の攻撃をも繰り出せるのかなんとか……。

年齢15にしてドイツのトップヒーローに数えられ、ゆくゆくはN.O.1ヒーロー確実とまで言われる実力者っていう看板は、偽りも何

もなし、つてわけだ。

今更だけど、私すごい奴と知り合いだわ……母さんの人脈に感謝だな。

2日、3日と繰り返すうちに、私達の動きはどんどん良くなっていった。

いや、身体能力が劇的に変わってるわけじゃないんだが……ターニヤのしごきは、私と緑谷の体に、『戦場で生き残るためにひつようなこと』を徹底的に叩き込んでいったのだ。

何と言つても極意は『雑に動かないこと』……これに尽きる。

よく格闘漫画とかでは言われることだけど、達人、ないしある程度以上の実力者は、相手の体、ないし筋肉の動きや視線の向きを見て、相手が次にどこを狙ってどんな攻撃をしてくるかを察知するという。それによって、相手の行動を予測し、そこに回り込む形で迎撃する。

相手はそれに気づけず、わけもわからないまま、気が付いたら負けていた、なんてことがよく起こる。『個性』なんて使わなくても、人間は極めればそれだけのことができる。

私達に課せられたのは、それをできるようになること……同時に、それをされないようにするための訓練だ。一挙手一投足に自分の意思が乗らないように、読まれないような体運びを心がけ、目は一点を見ず全体を見るようにし……戦いの中の一瞬一瞬の情報戦を制する。

今は考えながらでいい、だがいずれは意識せずにできるようになる、それがターニヤの課題。

無茶苦茶なことを言っているが、それができるようになれば……それまでの私達とは一線を画する強さが手に入るのも事実だ。

とはいえホントに厳しくて……毎度毎度限界まで体を酷使して、それが終わると倒れるように床に……いや、ようにじゃなくて倒れてるな。ランナーズハイとかアドレナリンの過剰分泌？で無視できてた分の疲労と苦痛も一気に襲ってくるから、そのまま動けなくなる。

しかもこの訓練、私達『個性』使わずにやってるからね……体の動きとかその他を鍛えるのが目的だし、ターニヤは適切に手加減してく

れてるからそこまで危険はないけど。

私の場合……まあ、『エネルギー』があればスタミナ無限だから、使っていると体鍛える系の訓練がしづらいつてもあるからなあ。スタミナ鍛える時には意図的に切ることはよくしてるけど、その状態でこの訓練やるのホントにきつくて……

そしてその後、『個性』が解禁されたら速攻で『エネルギー』を使って体力を回復させる。

緑谷にも、私の体力を分け与えて回復させる。

……で、その後、最後というか1日のしめくりに、『個性』を解禁して、時間制限つけた状態でターニャを相手にあらためて全力で模擬戦。

ここで今日の特訓の成果を確認して……そしてやっぱりボコボコにされ、ようやく1日が終わる。

こんな感じで私達の1日のトレーニングメニューは終わる。

限界まで酷使した体を引きずって歩き、シャワーを浴びて汗を流し、どうにかリフレッシュしてから部屋に戻る。

なお、シャワーは最近、私も緑谷も冷水で浴びている。

そろそろ夏も近づいて気温も上がってきてるのに加え、ハードトレーニングで体中に熱がこもっちゃってるから、冷たい水が気持ちいいんだよね……。

加えて、温水よりも冷水の方が、疲労物質を流して落とす力が強いらしいし。

(まあ、体に熱がこもってるのは多分、ハードだからだけじゃないんだけど……)

緑谷と一緒に修行できて、一緒に強くなれてドキドキしてるから……つてわけでもない。

この『熱』は多分……隠れて進行しているあるカリキュラムが順調に進んでいる証明だ。今はまだ、緑谷には言えないけど……

それでも、動くのも億劫なくらいに体中ボロボロなわけだが、この過酷なメニューを支えてくれているのは……ほかでもない、ビスケさ

のである。

2日に1回やってきて、トレーニング終わりの私達にマッサージをしてくれているのだ。

ビスケさんの必殺技の1つに、『桃色吐息』^{ヒアノマッサージ}というものがある。

彼女の『個性』である『肉体活性』を使ったマッサージなのだが、これが彼女の神憑り的な整体技術と相まって、恐ろしいほどの疲労回復効果を叩き出す。曰く、たった30分のマッサージで、たっぷり8時間、夢も見ないくらいに熟睡したのと同じ回復効果があるそうだ。

緑谷はもちろん、私もお世話になっている。『エネルギー』で疲労は回復できても、筋肉が断裂したり、普通に怪我したりしてる部分はあるからなあ……そこすら急激に癒しつつ、また筋力を増強するために必要な『超回復』もきちんと起こしてくれるんだからすごいってんで。

今日も夕食を食べた後、私達2人に施術してくれて……コレのおかげでどうか、学校のカリキュラムと『デウス・ロ・ウルト』のカリキュラム両立できてるんだよなあ……。

そうして体力を回復した後は、座学の講義を受けたり学校の課題をこなしたりして……まあ、普段通りに1日が終わるわけだ。

そこから寝るまでは自由時間。読書するもよし、PCで動画見るもよし、ゲームするもよし。

こんな風にターニヤの晩酌に付き合うもよし、だ。

まあ、晩酌とか言いつつ、飲んでるのはきちんとジュースだけだね。いつもの奴。

ふう、と一息ついてゆっくり体を休めつつ、ふと気になったことを聞いてみる。

「ターニヤさあ……いつまでこっちにいられるの?」

「? 何だ突然、鬼教官に早く帰ってほしいのか?」

「そんなんじゃないって。ターニヤって一応、ドイツ軍所属だろ?」

飛び級までして軍大学も出てるし……仕事、忙しくないはずなのに、よく日本こっちにいる時間あるな……ってというか、よくこのプロジェクトに乗って渡日する許可取れたなって」

「そのことか。まあ、アナライジユにはインターンの時の恩もあるし……現在の私の能力の基礎を作ってくれたのは彼女だ。その彼女から、お前を鍛えるために手を貸せと言われたんだ、そりゃあ義理を通して手伝いくらいするさ。日本食の味もそろそろ恋しかったしな」

「ははは、ちやつかりしてるな」

そう言えばターニヤ、そのインターンで日本に来た時は、卵かけご飯の美味しさに驚愕して絶句してたっけ。

味もそうだけど、生卵をこんな風にためらいなく食べられる、日本の衛生管理の優秀さにも。

その他にも、寿司、天麩羅、お刺身、お茶漬、蕎麦……実は彼女、自身は日本人じゃないかってくらいに日本食大好きなんだよな。日本語も上手いし。

「……それに……別の用事もあつてな」

「? 別の思惑……?」

「悪いがそれは話せん……軍務の一環だ。何、お前達に迷惑をかけることはないから安心してくれ」

……? 軍務の一環で日本に? 一体どういうことだろ……?

☆☆☆

Side. 緑谷出久

「デク君、今日すごかったね! あっちこっちぴよんぴよん跳ね回って!」

「ホントだぜ緑谷! 体育祭からまた強くなってるんじゃないやね? 結局最後まで、誰にも1回も捕まらなかったしよ!」

「あ、あはは……ええと、ありがとう」

今日の『ヒーロー基礎学』、課題はずばり『鬼^{チェ}ごっこ』。

相澤先生が取り出したカードには『CHASE^{イス}』と書かれていた。

ヒーローが敵を捕まえる際の追跡能力を鍛えるためのカリキュラムだそうだ。

ルールは簡単。市街地を模した演習場で、『鬼』役に設定した4人の

生徒が、その他16人の生徒を追いかけて捕まえるというゲーム形式だ。

そして、『鬼』役もそうでない生徒も、当然『個性』の使用は自由だが、相手を足止めする程度ならともかく、明確に『攻撃』であると思われる使い方はNG。減点になる。

あくまで『逃げる』『捕まえる』ことに注力して結果を出さなければならぬ。そして、町や施設への破壊等の被害も極力抑える（かつちゃんがすごく面白くなさそうな顔をしてた）。

まあ、ヒーローが逃げる敵を追っかけるために、町とか壊しまくってたんじゃダメだしね……加速や跳躍の際の力加減も重要になる。

『鬼』は逃げる人にタッチすればそれで確保になる。確保テープを巻くのとかは必要ないし、体のどこにタッチしてもOK。

これを制限時間を定めて5回繰り返し、20人の生徒が代わる代わる鬼をやる。全員が1回ずつ鬼をやるようにする、っていう内容だった。

ルールを聞いた栄陽院さんが何やらブツブツと、『逃走中』とか『ハンター』とか言ってた気がするけど……何だったんだろう？ よくわからなかったな。

なお、ルール説明の最後に『タッチと称してセクハラ行為に及ぼうとする者が出た場合は、個性による反撃を許可する』というのが付け足されたんだけど……誰を想定しているのかがあまりにもわかりやすい文言である。その瞬間、全員の視線が峰田君を見たから。

そして実際、峰田君はやろうとして……梅雨ちゃんの舌に絡めとられて投げ飛ばされ、耳郎さんのイヤホンジャックで昏倒させられたところを、相澤先生に拘束されて演習場の外に連れ出された。『後で補習だ』って言ってたのが聞こえた。うん、まあ、自業自得だし何も言えない。

やっぱりというか、機動力のある個性の人が強かったな。足が速い飯田君とか、立体的に動ける瀬呂君や梅雨ちゃんとか、スタミナ無限でずっと全力疾走できる栄陽院さんとか。

けど、その他のみんなも『個性』を上手く使ってた。

あらかじめ道を氷で塞いで逃げ道を限定して、詰め将棋みたいに追い詰めてく轟君、

ドアを通り抜けた後、ドアノブを酸で溶かして開かないようにしていた芦戸さん、

進行方向にあるものを次々に浮かせて障害物&目くらましにしながら逃げ続けた麗日さん。

『鬼(ごっこ)じゃなくて『かくれんぼ』になってて、時間いっぱい見つからずに逃げ切ることで機動力不足をカバーしていた葉隠さん、

峰田君も……逃げる側にいる間は、『もぎもぎ』を上手く使ってトラップにしたりして、上手いこと逃げてたんだけどなあ……。まじめにやれば便利で強い『個性』なのに。

僕はというと、『フルカウル』の機動力を生かして逃げ回ったのはもちろん、最近のトレーニングのおかげで『考えて動く』ことも得意になってきたので、『鬼』役でも活躍できた。

「緑谷が『鬼』やった時すごかったよな……隙をについて逃げようとした時には、その方向にもう回り込まれてたぜ? 『逃げる前に』もう緑谷動いてたよなアレ?」

「あ、やっぱそれ気のせいじゃなかったんだ。俺も……意表ついて急に方向転換しようとしたら、本命の逃げ道の先にもう回り込まれてた。んで、テープつかまれて逃げらんなくなって御用」

「けろ。私も全然フェイントが通じなかったわね……緑谷ちゃん、いつの間にそんな予測が得意になったの?」

「あー、うん。色々僕も試してみててさ……その成果、かな」

こうして実際に実戦で使ってみると、この技能の重要さや便利さがよくわかるんだよね。

相手がつきまどどこを見るか、どんなふうにも体を動かすかで次の動きを予測して、そこに回り込むように動く。意表をつけて驚かせると同時に、動き的なアドバンテージを得られる。

このコンボでかなり活躍できた。ただ、顔全体を覆うマスクしたり、サンングラスとかしてる人相手だと、視線が見えないせいで効きが悪いけど。

一番コレが通じなかったのは……やつぱり葉隠さんだな。目どころか何も見えないし、途中で本気出して全裸になられたから……足跡とか呼吸音以外に手掛かりがなくて、すぐ見失う。

僕が鬼になった時も、唯一彼女だけ、捕まえられなかった。

なお、その時の僕以外の『鬼』は、かつちゃん、芦戸さん、口田君だった。探知タイプがいなかったってのも敗因だな……葉隠さん相手に、肉眼だけが武器ってのは不利どころじゃないし。

犬でもいれば口田君に頼んで匂いを追ってもらえたかもしれないけど、演習場にそんな野生動物なんて中々いないしな……。

そんな感じで色々考えていると、ふと視線を感じた。2つ。

1つは……斜め後ろから感じた。そつちを見ると、麗日さんと目が合った。

すると、なんか慌てて目をそらされた。……ちよつと傷ついた。

どうしたんだろ、何か用事でもあったのかな？ 顔赤いけど……後

で聞いてみようか。

で、もう1つの視線だけど……そつちの主は自分から僕の方に近づいてきた、

で、普通に話しかけてくる。

「緑谷、お前さっきの訓練中、所々足取られてたろ？」

「えっ!? あ……はい、すいません」

と、相澤先生。

相変わらず、見てないようで生徒のことよく見てる先生だ……さっきの模擬戦で、何度か僕の足が、靴底が僕の動きについてこれなくて流れてたの、見抜いてる。

「何で謝る。……お前、ぼちぼち今のコスチュームが成長に追いつかなくなってきたな。時間ある時に、なるべく早く工房に行っておけよ？」

「え、工房？」

「そうだ。……いい機会だから全員に話すか。今年は例のカリキュラム強化のおかげで、例年より伸びがいい生徒が多いからな」

全員集合、と声をかける先生。

うちのクラスは相澤先生の声にはどれだけ騒がしくしていようと
も反応するように教育されているので、すぐに私語をやめて全員が先
生に注目する。

これで集まらなかったら目がキュピーンって光ってたところだろ
う。

「お前ら、入学してからこつち、様々な課題を乗り越えて実力を伸ばし
ているわけだが……中には純粋な成長然り、方針転換然りで、今のコ
スチュームでは戦いをカバーできなくなってきた者もいるだろ
う。そういう問題はそのままにしないで、コスチューム改良できちん
と解決しておけ」

「コスチューム……改良？　コレ、いじれるんすか？　雄英で？」

と、切島君。他にも何人か、『できるの？』っていう顔になってる人
がいる。

「できるに決まってるだろ。校舎1階の……あー、場所は後で各自確
認しろよ？　コスチュームやサポートアイテム開発用の工房がある。
そこ行けば、簡単な改良くらいならすぐにしてもらえるし、規模が大
きかったり、具体的なプランが定まっても、相談に乗ってもら
うこともできる。轟や榮陽院なんかは既に利用してるだろ？」

と、先生が言うと、その2人に視線が集まった。

「……はい。色々あって『左』も使うことに決めたんで、それに対応し
たデザインに変えました」

「私は……大枠弄ってもらったのは職場体験の時なんですが、微調整
のために利用してましたね」

轟君は、以前は『戦闘に左側は使わない』っていう方針だったから、
左側を氷の怪物みたいなアーマーで覆ってたし……榮陽院さんは職
場体験の時にガラツとコスチューム変えたからな。その時に調整し
きれなかった部分を、通って弄ってみたいだ。

なるほど、2人とも必要に応じてきちんとかコスチュームに手を加え
てるわけだ。

「でも、雄英の『被服控除』って、コスチュームのデザイン会社に申請
が必要なんですよね？」

と、麗日さん。そうそう、その申請をしないと、コスチュームの開発にお金かかるからな。

『被服控除』の制度は、在学中のコスチュームの発注や改良なんかを無料、あるいは格安でできるシステムだ。ただし、その都度コスチューム会社に申請が必要だったはず。

「それも工房の方で代行してくれるよ。もつとも、弄るのには免許がいるから、きちんと担当の先生がいる時でなきゃできんがな。今日は確かパワーローダー先生がいたはずだし、大丈夫だとは思うが。それと、弄るにしてもノープランで行くなよ？　きちんと現状の自分のコスチュームの問題点が何か、どうすれば改良できるか、どういう風に変えたいかを自分で考えてから行け」

最後に先生が付けた足した言葉で、何人かが体をこわばらせていた。とにかく考える前に行ってみよう、試してみよう、とか考えてたメンバーかもしれない。

僕の場合は……色々と課題はあるけど、とりあえず改善したい部分はもういくつか思い浮かぶな。放課後までに、どういう風にしたらいいか考えて、それでいこう。

いや、そういえば『テウス・ロ・ウルト』のプログラムに、コスチュームやサポートアイテムに関する援助してくれるっていう項目もあつたっけ。そっち利用してもいいかもな……？

第67話 TS少女と工房の女ヒーロー

S i d e . 緑谷出久

雄英高校、校舎1階。コスチューム工房。

ヒーロー科のみならずサポート科や経営科も利用するここでは、日夜コスチュームの改良や、サポートアイテムの研究開発が行われている……らしい。

僕はまだここ利用したことないから、今日が初めての利用なんだけど。

そして、一緒に飯田君と麗日さんも来ている。2人も何かしら、コスチュームで改良したいところがあつたんだそうだ。

「ねえ、デク君はどこ改良するん？」

と、麗日さんが聞いてくる。

何かここにこ笑ってて、凄く楽しそうとか嬉しそうとか……機嫌いいな。コスチュームの改良、そんなに楽しみなんだろうか？

「僕は、最近、前までよりかなり動けるようになってきたから……思い切って靴もコスチュームに組み込もうかなって。あとは、動きを阻害しないように、腰の部分のポーチとかの位置調整かな」

「ふむ、そう言えば緑谷君のコスチューム……靴だけは普段から履いているそれだったな」

「あ、そう言えばそやね。手袋とかと同じで、頑丈な素材にするん？」
「それもあるけど、まず接地面の安定性が第一かな。思い切り力入れて踏ん張っても、後ろに流れないように、力が上手く地面に伝わるようにしたい。あとは、蹴り技を使うために補強も」

2人は？ と聞くと、飯田君は自分の足を指さしながら、

「俺は足の冷却装置ラジエーターを強化してもらおうかと思っている。レシプロのデメリットを軽減してもっと使いやすくすれば、今日のような場面でもより機動力を大きく、長く保てるからな……こういう『個性』だから仕方ないと諦めてはだめだと痛感した。麗日くんは？」

「私はもつと酔いを抑えたくて……今のコスチュームでも、冷却用のチューブとか色々ついてんねやけど、他に使えるようなツールや技術があればって思っ、その相談もかねてるんよ。自分を軽くして機動力を上げられれば、ガンヘッドさんに習った近接も生きてくるし」

2人共、きちんと具体的な目標を見据えてるんだな。飯田君は、今ある持ち味をより伸ばす方向。麗日さんは、今の弱点になつてる部分を潰して選択肢を増やす方向、か。

僕もそういうの、考えていかないな……今やってる、自分の地力を伸ばす方向の訓練も大事だけど、もつとできることがあるかもしれないし。積極的に、自分の課題を見つけていこう。

そんなことを考えている間に、工房の入り口に到着。

何かやたら大きな金属の扉だな……教室と同じでバリアフリーなのかもしれないけど、材質は……ああ、工房だから音とかが外に漏れないようにしている、とか？

まあいいや、早速中に入ろう。……コレ、ノックしても中に聞こえるのかな？

「すいませーん、コスチュームの改良のことで相談が……」

「コスチュームの改良!? よくいらっしやいましたさあさあどうぞ入ってください!」

「誰?!」

扉を開けた途端、明らかに先生ではない誰かがすごい勢いで突進してきて中に迎え入れられ……え、ホント誰、何いきなり!? ピンク色の髪に、作業着の……女の子?

思わず再度看板を確認してしまうが……うん、間違いなくここコスチューム工房だ。

……っていうか、アレ? この人、どこかで見覚えがある気が……とか思ってたなら、向こうの方も『おや?』って反応をして。

「ああ、誰かと思えば体育祭の人!」

そう言っ、装着していた特徴的な……スチームパンク的なデザインのゴーグルを上にはずらす。

ぱっちりとした目がその下から出てきて、顔全体がようやく……

あ、思いでした。

この人、体育祭の騎馬戦で一緒になった発目さんじゃないか。あの時と違って、作業着っぽい姿だからすぐにはわからなかった。

……さ、作業着にしてはちよつとその、露出大きい気も……まあ、熱くて上着脱いでるからそう言う感じに見える……のかも？ 知れないし？

って、それはどうでもよくて……何で彼女がここに？

見ると、麗日さんも気づいたみたいだ。飯田君は……まだピンと来てないかな？ 騎馬戦で戦ったつてことくらいしか接点ないから仕方ないかもだけど、決勝トーナメントには出てたから、顔を見た記憶はあるはずだ。

で、残る発目さんかというと……

「お久しぶりですね！ 1位の人と無重力の人！ えー……すみません名前忘れました」

あけすけというかドライというか……うん、まあそう来るんじゃないかって予感はしてたけど。

思い返せば、僕、あの体育祭当日でさえ『1位の人』とか主に呼ばれて、名前で呼ばれた記憶がいまいちないというか……あつたかもしれないけど思いだせない。

まあ、初対面で『立場利用させてください』つて言ってきたことか知らして、そもそも僕に興味とか抱いてないだろうから、無理ないかもだな。

飯田君に至ってはナチュラルに触れてもいないし……スルー？

一応自己紹介して……で、何で彼女がここにいて、僕らを招き入れるの？

ああでも、ここにいること自体は不思議じゃないか。サポート科や経営科も利用するつて先生は言ってたし……なるほど、体育祭にあれば多彩なアイテム（発目さん曰く『ベイビー』）を持ち込んでた彼女は、ここに入り浸って研究開発してもおかしくはない。

でも、あくまで彼女がここを利用してるとしても、このの主はパワーローダー先生のはず。その先生にできれば一声挨拶したい

……っというか相談したいんだけど。

「あの、発目さん、パワーローダー先生は？」

「ん？ 先生でしたらさつき呼び出しかかって3年生の校舎に行くと
言って出ていきましたか？」

「えっ、いないの？」

「あちやー……どうしよう？ まさか急用入って留守にしてるとは
……。」

相澤先生の話だと、免許持ってる先生がいないとコスチューム弄れ
ないんだよね？ コレは今日は出直したほうがいいのか？ その
用事がすぐに済むもんなのかもわからないし。

麗日さんと飯田君に視線をやると、2人もやはり『どうしよう』と
いう表情になってた。

どっちにしろ、僕らだけここにいってもやれることはないわけだし、
やっぱり今日は……

「それよりも皆さん、コスチューム改良の話でしたね？ さあさあこ
ちらにどうぞ！ 粗茶ですがお茶でも飲みながら詳しい話をお聞か
せください！ あ、でも飲む場合は自分で入れてくださいそこに
ティーパックと電子ケトルありますので！」

けど一番部外者のはずの発目さんのヒートアップが一向に止まら
ない。

所々言ってること滅茶苦茶だし……なんか、体育祭の時もちらつと
思ったけど、病的に自分本位な人だな……それも、俗に言うマツドな
方面に。

やる気なところ悪いけど、発目さんも学生である以上は免許とか
持ってないはずだし……しかしコレ普通に言ったくらいじゃ聞かな
いよな、どうしたもんか……

いつそのまま帰『ガチャリ』あ、扉に鍵かけられた。うわあ帰さ
ない気だよ、ガチだこの子。

椅子を3つ用意して、そのうちの1つに自分が座って（結果1人分
足りなくなってることに気づいているのかどうか）、発目さんは『さあ
来い』とばかりに目で催促してくる。

ホントどうしようかと、僕らがアイコンタクトで会議をしていたその時、

部屋の奥の方から、黒い紐みたいな何か伸びてきて……発目さんを腰のあたりでからめとり、勢いよく引つ張り戻してしまった。『ぐえい!』と女の子らしからぬ声を上げて飛んでいく発目さん。

とつさにそれが伸びて来た方向を見ると……そこには、1人の女性が立っていた。

なんとというか……特徴的な服装の人だな。

かなり厚手の、黒いマントかローブ、あるいは法衣みたいなものに身を包んでいて……その隙間から見える手足も、グローブやブーツ、さらにボディースーツか何かと思しき、こちら黒い衣服でおおわれている。

首から上以外、肌が露出している箇所が全くない人だ。加えて、一番外側に着ているマント?が重厚なせいで、体のラインがほとんど見えない。

それでも見る限り、体格はやせ形で、やや身長は高め……僕より少し背が低いくらいかな? あ、でもはいてる靴がヒールっぽい奴だから、ちよつと背伸びしてるみたいになってるかも。

やや赤みがかった黒髪。長さはセミロングで、メガネをかけた知的な雰囲気美人さんである。年齢は……女子大生くらいか、それよりちよつと上、かな?

そして、たった今発目さんをからめとった黒い紐みたいなものは、そのマントの端の部分から伸びていた。まるで、マントが変形したような……いや、実際に変形してるのか? 『個性』?

誰だろうこの人? ここにいるってことは関係者だと思っただけ……雄英にこんな先生いたかな……? いずれにせよ、コスチューム着てるってことはプロヒーローだよな? こんなコスチュームのヒーローいたかな? 脳内のリストにそれらしき人が中々……

悩んでいると、その人はハア、とため息をついて。

「発目さん、いけませんよ、パワーローダー先生に断りなく勝手なことをしては……戻るまで大人しく待っているように言われていたで

しょう?」

「コレは失礼しましたラバーエンプレス先生! ですがこの方たちも忙しい合間を縫って工房に足を運んでくれたのですから、話を聞くらしいはさせていただけいてもいいのではと思ひまして!」

「それだけで終わるつもりないでしょうに……でも、せっかく来てくれたんだからというのもそうですね。そこのお三方もこちらへどうぞ、コスチュームのお話は私がききましょう。ああ、申し遅れました! そう言つて、その女性はにこりと微笑んで……ああ、思ひだした!

この人は……

「私は呉武くればへす絵守。今週からですが、雄英高校で『非常勤職員』として勤務することになりましたプロヒーローです。ヒーロー名は……今発目さんが言つていましたが『ラバーエンプレス』です。コスチュームやサポートアイテム加工の資格も持つっているので、主に工房で皆さんのお手伝いをするようになります。よろしくお願ひしますね!」

造形ヒーロー『ラバーエンプレス』。

個性『ゴム』。

自分の周囲にあるゴムを自在に操る『個性』を持つプロヒーローだ。オールマイトやエンデヴァーみたいに、一線で戦うようなヒーローじゃなく、またメディアへの露出もさほど多くないので、知名度では劣ると言わざるを得ない。

相澤先生……もとい、イレイザーヘッドみたいな、アングラヒーローほどじゃないが。

しかし、『個性』に加えてその美的センスや手先の器用さを武器にしたアイテム・ツール類の作成においてはかなりの腕前を誇り、ファッションからサポートアイテム開発まで、様々な業界で辣腕を振るうヒーローである。

研究者や発明家としての面もっており、様々な技術や素材を作り出して世に送り出している。その中には、ヒーロースーツの素材として多くのヒーローが愛用しているメジャーなものも、決して少なくない数含まれている……っていうのが、僕が知っている範囲での知識

だ。

そんな彼女が雄英に……この工房にいるのは、非常勤職員として務めるからだそうだ。

「校長先生から伺っています。今年の1年生は粒ぞろいだと。この工房を利用する機会も早いうちから増えるだろうから、人手が欲しいということまで声がかかりました。OGの縁もあり、非常勤でよければ、とお誘いを受諾したわけです。気軽に何でも相談してくださいね？」
「理知的な笑みを浮かべるラバー先生（長ければ略していいって言ってた）。重厚さを感じるコスチュームとややギャップがあるけど、それは彼女の『個性』柄必要なんだろうな。」

彼女の『個性』は……簡単に言えば、セメントス先生のゴムバージョンだ。

自分の周囲にあるゴムを自在に操れる。形も、動きも。

セメントス先生と違って、直接触れなくても、『個性』の効果範囲内であれば操れるらしい。このへんはそうだな……ベストジーニストの『ファイバーマスター』に近いかもしれない。

さつき発目さんを拘束していたのもこれだ。ゴムでできた装甲マントの一部を紐みたいに変形させて伸ばしてからめとっていた。それは今は、もとのマントの形に戻って纏われている。

そして、ゴムの種類は問わない。硬質ゴムだろうが生ゴムだろうが、加工前のものだろうが、輪ゴムとかゴム紐みたく加工されているものだろうが操れるらしい。ただし、燃えたりして化学変化を起し、ゴムとは呼べなくなってしまった場合は操れない。

それでも十分な強個性だと思うが、彼女自身はコレを使って第一線に出る気はそもそももなく、さつきも言った通り、裏方で研究やものづくりをすることをメインに活動している。

そう。こんな風に。

「はい緑谷君、そのまま動かさないで。飯田君も……はい、採寸終わりましたよ」

「早！」

「採寸というか、もうコレは型取りでしたね……」

コスチューム関連の要望を伝えた僕ら。

それを聞いたラバー先生は、案を出して考えるところから入らないといけない麗日さんをまず後回しにして、僕と飯田君のコスチューム改良を進めることにした。

どちらも足部分の改良なわけだけど、ラバー先生は僕と飯田君に、膝から下の衣服を脱ぐかまくるかして素足になって座るように言った。

言われた通りにすると、次の瞬間、ラバー先生の『個性』が発動。装甲マントの1枚がどろりと解けるように変形し、僕と飯田君の足に絡みついて……ギプスみたいにながっちり固定した。膝から下を全部、隙間なく覆いつくす形で。

僕らがその光景にびっくりした、さらにその次の瞬間には、それがパカッと真つ二つに割れて、そのままの形でラバー先生のところに戻っていく。

あつという間に先生は、ゴムで僕らの足の『型』をとってしまったのだ。

それを使つて今度は、型にゴムを流し込んで固める形で、僕と飯田君の膝から下をゴムで再現して作ってしまった……ここまで、僕らが座つてから10秒も経つてない。

な、なるほど……これが『ゴム』の個性……実際に見るとすごいな。超がつくくらいにモノ作り向けの個性だ。

余りの早業に呆気にとられる僕らの前で、ラバー先生はまず、僕の足（ゴム再現）を持ちあげてじっくり見つつ、僕の今着ているコスチュームとも見比べながら話し始める。

「緑谷君の戦闘スタイルは、徒手格闘がメインでしたね。今現在のコスチュームは……防御性能はそこまでではなく、動きやすさと体の各部……特に関節部の保護がメインのようですね。追加する脚部のパーツも同様のコンセプトにするつもりで行きますか？」

「あ、はい。今の靴だと、強く踏み出そうとした時に、場所によっては足裏が地面をとらえきれなくて流れてしまうこともあつて……そのあたりをまずどうにかしたいと思つてます。あとは……」

そんな感じで希望を伝えつつ、初めてのコスチューム改良は、担当してくれる先生の優秀さもあって滞りなく進む……

「それなら、こんなのはどうでしょう!？」

……進む、かと思っただけどね……

結論から話すと、とりあえず僕ら3人共、コスチューム改良に関する道筋はある程度見えた。

途中からはパワーローダー先生も戻ってきてくれたし、麗日さんの要望についての相談もできたから……さすがにすぐには言えないけど、数日中には形になって、より機能を強化させたコスチュームが僕らの手元に届くはずだ。

ただ、そこに至るまでが大変だったけどね……

改良案を考えるのもそうだけど、そこにいちいち割り込んでくる発目さんが……

『足を冷やしたいなら腕で走ればいいと思うんです!』って、飯田君に腕に装着するタイプのブースターを渡して、暴走させて壁とか天井に激突させたり。

ラジエーターを強化、って具体的な注文出してるのガン無視だもんな……

『酔いの解消には唾液を分泌したり、シヨウガの成分がいいそうですよ!』って、麗日さんに強くかむと仕込んだカプセルからシロップとかが滲み出す特殊なマウスピースを渡して、試してみた彼女を酸っぱい梅干しのエキスで悶絶させたり。

濃度的に、唾液が出る以前の問題だったっばい……ていうか、シヨウガじゃないのか。

そして僕には、足のツボや筋肉を電流で刺激してキック力を何倍にも上げてくれるっていうスニーカーをくれた。……あの、だから僕、踏ん張った時により強く力を伝えられるようになって言ったんであって、別にキック力の増強は自分でっていうか、自前でやれるから……

何? 小学生の子供でもサッカーボールで大人を一撃で昏倒させられる威力? いや僕高校生だしサッカーボールも蹴らないしそも

そもこつちの話をホント聞いて……

……まあ、その後に提案してくれた『アイアンソール』はホントに使えそうだったから、検討していく方向で話はまとまったけど……。

他のアイテムも、こつちの意向に沿ってないのはともかく、性能自体は見事だったしな……発目さんってホントに、サポート面での実力はあるみたいだ。

パワーローダー先生もラバーエンプレス先生も、そこだけは認めて褒めてたし。

ただ、協調性とか人の話を聞かないところとか、人格面、コミュニケーションでの課題は山積してるけど。

とまあ、こんな風なことを繰り返して、1つずつコスチュームの改良を進めていくんだろうな、と思っていた僕は……この時、ラバー先生が、僕に向けていた意味ありげな笑みに気づかなかった。

もちろん、彼女が何を思ってるそんな風に笑っていたのかという、理由も。

僕がそれを知るのは……もう少し後のことだった。

第68話 TS少女と修行のコンセプト

S i d e . 緑谷出久

コスチューム改良に関する相談を終え、家に戻ってきて、また今日もターニヤさんと地獄の特訓……かと思いきや、今日はさらにトレーニングメニューが追加された。

「姿勢制御が甘い！ 動くときに不必要に姿勢を崩すな！ 自分のペースを乱して生まれる一瞬の隙が実戦ではあんたを殺すわよ！」

「はっ……はい！」

さつきから延々30分、ぶっ続けで僕は組み手というか、実戦形式の戦闘訓練を続けている。

相手は、ここ最近教官を務めてくれるターニヤさん……ではなく、時々『ピアノマツサージ』でお世話になっている、ビューティービスケットである。

この人、本業はヒーローで副業としてエステティシャンをやっているわけだが、その他にも様々な顔を持つ。整体師、化粧品や健康食品の研究者、管理栄養士、宝石鑑定士……エトセトラ。

色々な技能や資格を持つてる、実に多芸なお方だ。

そのうちの一つに、『心源流』っていう武術の師範であることがあげられる。

美容・健康方面の第一人者である彼女だが、その戦闘能力はプロヒーローの中でも上位に位置するものであり、徒手空拳の達人なのだ。

本人はなぜかそういう方面でメディアに出ることを嫌うらしいので、戦っている映像なんかはほとんど存在しないんだが。

だが、実際にこうして徒手格闘で訓練をつけてもらうと……その実力が本物なんだと実感する。

強いのはもちろん、その指導的確かさや、僕の体の動きが甘い部分を鋭く突いてくるところなんか、『師範』という肩書が伊達でも何でもないんだとわからせる。

動きづらそうなゴスロリ服だつていうのに、それをものともしない
鋭く素早い動きで、拳を、蹴りを叩き込んでくる。

戦いつてもものに触れ始めてまだ決して長くない僕にもわかる、武術
経験者特有の『筋の通った動き』って奴がよくわかる。

僕や栄陽院さんの動きは、身体能力に物を言わせた我流格闘だ。体
幹やら何やら鍛えてるから、動きと同時に色んな方向に姿勢が崩れた
りするのを力づくで素早く直してカバーし、それによる隙をなくして
いる。勢いに引つ張られず体勢を立て直す訓練とか、いっぱいした
し。

けど彼女……ビスケさん（毎度長いのでこう呼んでいいって実は言
われてる）の動きには、そもそもその『体勢が崩れる』部分がない、あ
るいは極端に小さいように見える。

極限まで最適化された動き、というより最早『体の動かし方』がそ
うなっている戦闘は、コンマ一秒のよどももなく動作1つ1つが連結
していく。

「私みたいに1つの『武術』を習得しろとは言わない。けど、見て受け
て、盗めるところは盗みなさいな！ 武術ってのは良くも悪くも、い
かに効率よく戦い、倒すかを主眼に置いて、先人たちが連続と受け継
ぎ、研磨してきたいわば技の結晶！ 色々な部分に、異なる戦い方に
も応用できる技術が組み込まれてるもんだわさ！ それを見つけて
自分のものにするのよ！」

「っ……はいー」

道場のようになっている室内を縦横無尽に駆け回り、戦いながらビ
スケさんの動きを1つ1つ見極めていく。ブレない体の軸……制動、
慣性制御……

攻撃1つ1つどころじゃなく、移動から攻撃、その後の移動までが
一続き……何一つ力を無駄にしない、無意識レベルで計算された見事
な体の、力の連動……なまじ戦いというものに慣れて来たがゆえに、
今日の前でビスケさんがやっていることのレベルの高さがわかる。
わかってしまう。

一番最初に覚えた、体の各部を連動させてより大きな力を、より効

率的に発揮する……その技法のさらに応用の位置にある技。それを、当たり前のように……！

（一朝一夕でできるはずがない、いわば武の極致……それでも、どれだけ道のりが長く遠くても、それが新しい力になるなら……僕も！）

それからしばらく組み手は続き、例によってボロボロになるまでしごかれた。

その後、シャワーを浴びて夕食、となったわけだが……その時、ふと思った。

この間までに比べて、なんかまた食べる量が増えてきているような気がするんだよな……白いご飯のおかわりはもちろん、おかずや汁物も、美味しいと思えばがつついて食べられるだけ食べるようになったし……それでお腹いっぱい食べても、お腹が痛くなったりすることはまずない。

食べた分が全部力になるように、次の日の特訓ではまた最初からパワフルに動けるし……もちろん、朝食の時には食欲も回復している。

そして気のせいじゃなければ……微々たる違いではあるけど、一昨日より昨日の方が、昨日より今日の方がいい動きができる。明日は今日より上手く動けるのかな、とか思う。

まるで、食べて、寝て、戦うごとに、どんどん体が強く作り替えられていくようだ。

それも、単なる肉体改造を超えるレベルで。

そんなことを、食後のビスケさんの『ピアノマッサージ』の場でぽつりと話したら、隣で寝ている（マッサージ済）栄陽院さんや、同席していたターニャさんも、驚いたというか意外そうな顔になっていた。ま、まあ……中々に突拍子もないこと言ってるしね、僕……

しかし、施術後の休憩時間、ビスケさんが『順調そうでよかったわねえ』と言っている横で……ターニャさんはずっとぶつぶつ呟きながら考え込んでいた。

そして、

「……自覚できたのなら、いつそ教えてしまったほうがいいか」

そんなことを、ぽつりと呟いた。

どういう意味かと尋ねるより前に、ターニヤさんが椅子に座り直して、僕と栄陽院さんの2人共に声をかける。どうしたんだらう？

座学を終えて、後はもういつもなら寝るまで自由時間……なんだけど、今日はその前に、ちよつと話があるってことで、ターニヤさんに呼び出された。栄陽院さんの部屋に。

もう何度もお邪魔しているそこに行くと、ゆったりめの部屋着の栄陽院さんに出迎えられ、そのままリビングに通された。すでにターニヤさんとビスケさんも来ていた。

2人共部屋着……というか、なんかもう寝る前のパジャマとか寝間着みたいな服だ。

かわいらしい女の子3人がリラックスした服装でいるところに、僕1人男子がいるって結構な疎外感とか緊張感があるんだけど……そんなことには構わず、ターニヤさんは『それじゃあ揃ったし』ってことで話します。

「これから話すのは……この訓練におけるあるあるコンセプトについてだ。本来はお前には話さずに進めていくはずだったのだが、話してしまったほうがいいと判断した」

「えっ……いいんですか？ それ……当初の予定とは違うんですよね？」

「ああ。だが、最終的な判断は私に任されているし、お前は普段から、色々と考えて動くタイプの人間だったようだからな。話して、意識させた方がより伸びるのではないかという思惑もあるし……先のマツサージの最中に言っていたことを鑑みる限り、自力で気づくのも時間の問題だ」

どうやら僕らが受けていた訓練の中に、僕に意図して内緒で……おそらくは、意識させないようにして進めていた『何か』があるらしい。まあ、そういう風に聞かされると、何なのかってのは気になるし、ありがたいと言えばそうだ。

けど、さっきの会話の中で……？ 一体、どういうことなんだろう

?

「緑谷出久。お前、ゲームは好きか？」

「え？ ゲーム、ですか？」

「そうだ。テレビゲームないし携帯ゲーム機のそれ……特にRPGとかそのあたりだな。昨今はまあ……ソシヤゲとかそのへんでもいいか」

ゲーム、か……うん、まあ、そこまで熱中してやることはあまりないけど、好きと言えば好きかな。まだ小さい頃は、お母さんに買ってもらったテレビゲームとかをやった時期もあったし。

……今思えばあれらも、母さんが『無個性』という現実に打ちひしがれている僕を慰めるために、色々と打ってくれた手の1つだったのかもかもしれないけど……あーやめやめ、こういうこと考えると湿っぽくなっちゃうよ。

けど、それがどうかしたのかな？

「ふむ、ならばそこそこの知識はありそうだな。時に緑谷出久、そういったゲームの一部には……『強くてニューゲーム』というものがあるのは知っているか？」

「？ はい、知ってますけど……」

なんか、外国人の、しかもあんまりそういうのに興味なさそうなターニヤさんの口からその言葉が出てくると……なんとというか、若干の違和感を覚えるな。

今彼女が言った『強くてニューゲーム』っていうのは、ゲーム用語の1つだ。

周回プレイにおける、キャラクターの強化ボーナス機能のことである。

例えば僕が、何かRPGをクリアしたとする。それで満足してゲームを終えてしまえばそれまでだけど……面白かったのもう一回最初からやろう、と考えて……その時に活躍する機能だ。

一度シナリオをクリアした人だけが使える、ご褒美というかボーナス的な機能で、様々な『得典』を使ってキャラクターを強化した状態でゲームを最初から始めることができたりするのだ。

例えば、クリア前の所持金やアイテムを引き継いでスタートするか。

クリア前までに覚えていた呪文や特技を覚えた状態でスタートするとか。

普通に冒険するより強い敵を出せるようになるとか。

ゲームをそれなりにやったことがある人にとつては、割と誰でも知ってるレベルの知識だけど……何で今、そんな話題になるんだろ？「そういうボーナス要素の中では割とメジャーなものかと思うが……『成長しやすくなる』というものがあるのを知っているか？ よりゲーム風に言えば……『獲得経験値2倍』とか、『敵が落とすゴールド3倍』とか、そういう系統のそれだな」

「あ、はい。よくありますよね……それが何か？」

「それがまさに、お前に起こっている現象の正体だ」

「……………はいっ」

え、どういうこと？ えつと……言ってることがよく、いや、全くわからないんですけど。

精一杯噛み砕いて解釈しようとしてみると……経験値〇倍、だから……僕が、僕の状態が……あの時の会話……肉体改造が急激に……

……僕の体が今、『経験値〇倍』みたいに、通常の訓練で成長するよりも早く強くなってるとか、そういう風に言いたい……のか？

そして、ターニヤさん達はそれを狙ってここ数日の訓練を行っているた……と？

「突拍子もないことを言った自覚はあったのだが、頭の回転は早いようで何よりだ。説明も少なく済みそうでこちらも助かる」

「ど、どういうことですかそれ？ まるでそんな、ホントにゲームみたいな……僕の体に、そんなことが起こってるって、一体……？」

「緑谷出久、生物が最も成長できる時というのは、どういう時だと思う？」

？ 成長期、とかじゃないよね、その聞き方だと……

最も効率のいい訓練をしている時とか、よく食べてよく動いてよく寝てとか……そういう普通の答えでもなさそうだ。何を求められている

んだろう……だめだ、わからない。

恐らく、ここ最近の僕の訓練メニューの中に、そのヒントがありそうだけど……しかし、思い返して答えを探るより先に、ターニヤさんは口を開いて言った。

「答えは簡単。必要に迫られた時だ。より生々しく言えば……『追い込まれた時』」

「追い込まれた……時？」

「そう。後がない、力を発揮できなければそこで終わるといふ状況下において、生物は普段の自分の力を大きく超えた力を発揮する。『走馬灯』というものがあるだろう？ 死の間際、時間がゆつくりになり、一瞬のうちに自分の人生を振り返るといふアレだ」

そのくらいは僕も知ってる。というか、似たようなことなら、体験したことすらある。

雄英高校に入ってからこっち、そういうヤバい出来事に遭遇したことも1度や2度じゃないし。

USJ襲撃の時もそうだし、体育祭最終盤のトーナメント、轟君やかつちゃんとの戦いの最後の一撃を放つ瞬間とかもそうだ。職場体験の時、ヒーロー殺しとの戦いの中でもあった。

一生を振り返るとか大げさなものじゃないけど、まるで時間がゆつくりになって、すごい速さで頭が回るといふ、ある種の異常な時間感覚。

「そういつた『死に際の集中力』に代表されるように、人間の体は追い込まれると限界を超える力をしばしば発揮する。そしてそれは、刹那的なものに限らない。より強くならなければ、大きく躍進しなければ助からない……人間はそんな状況下において、限界を超えた速さ、あるいは大きさを『成長』してみせることがある。それを引き起こすのは……『本能』だ」

「本能……？」

『成長しなければ死ぬ』というような極限的状況下に置かれた時、生物は何よりも『生き残らなければ』という本能的な欲求ないし渴望を燃やす。心の奥底、自分自身も認識できていない領域でだ。そしてそ

の渴望は、生物の肉体と精神を、常識や限界を超えて『成長』させる。何よりもまず、死という運命を回避するために、防衛本能としてそういった方向に全力を出すわけだ」

「……それが、さっき言った『強くてニューゲーム』とか、『経験値増加』とかの意味ですか？　つまり僕の体は本当に今……理屈はわからないですけど、そういう『より早く成長する』状態に、しかも狙っておかれている、ということ……？　『本能』を刺激することで……!？」

そうだ、と肯定して、ターニヤさんは僕の目の前に立った。

「私の姿を見て、どう思う？　思ったままを言ってみろ……よっぽど無礼なことではなければ、何を言われても怒らんと約束してやる。遠慮は無用だ」

そう言うので、不躰にならない程度にターニヤさんの姿をじつと見て……思ったことをそのまま言う。

人形みたいにかわいらしい外見。細くて、やせ形で……とても、あんなに強くて苛烈な戦闘をこなせるようには見えない。こうして普段着ている分には、普通の女の子に見える、と。

もつとも、実際のところは180度違うレベルなわけだし、それを僕も身に染みてよく知ってるけど……まあそれは置いて。

「自分の体のことだ。私を見てくれについては、私自身よく理解している。初めて私を見た者は、だいたいそういう評価に落ち着くよ。実際私も……軍になど入っていないければ、そういう評価そのものの少女として青春を送っていたのかもしれない。だが、現実はそのようにはならなかった」

ターニヤさんはそのまま、自分の過去を簡単に語ってくれた。

彼女はもともと孤児であり、ドイツのとある孤児院で育った。

父親は軍人だったが、彼女が生まれて間もなく戦死している。母親は彼女を育てられなくなり、彼女を孤児院に預けて二度と現れることはなかった。ここまで全て、彼女が物心つく前に起こったことだそう

だ。

今僕らが生きている日本——オールマイトの存在により、犯罪発生

率が6%に抑えられている——とは違い、ドイツの犯罪発生率は決して低いとは言えないレベルだ。

加えて、ターニヤさんがいた地方の村は治安もいいとは言えず、個性犯罪が多発していた。

親による庇護もなく、社会的な地位・保証も何もない孤児だった彼女は……当時からかなり聡明だったようで、自分の置かれている状況の危うさというものを、子供ながらに悟っていた。

そして、このままでは自分は危ない、と悟り、行動を起こした。

幸いと言つていいのか、彼女には非常に強力な『個性』が宿つていたため、それを頼みに、当時試験的に運用され始めていた、軍士官学校への低年齢児の入学制度を使い、軍に志願した。

それが何と7歳の時。彼女は、日本ならランドセルを背負つて友達と楽しく学校に通っているであろう年齢で、ランドセルの代わりにダツフルバッグを背負い、リコーダーの代わりにライフル銃を持って、訓練の日々を過ごしていた。

飛び級して9歳で、幼年過程のみならず、通常の育成過程も終えて軍士官学校を卒業。ヒーローとしての資格入手にも邁進し、卒業時には『個性』使用の仮免も取得した。

初陣を済ませ、約1年間の従軍・現地任務の後に、今度は上層部から推薦を受けて軍大学へ入学。そこで2年間勉強し、卒業時に軍の将校過程を終了したことで『大尉』に任官。

同時にプロヒーロー資格を取得。ドイツ軍始まって以来の超新星としてその名を轟かせる。

ここまでだけを聞けば、華々しいサクセスストーリーみたく聞こえるかも知だが、実際には血のにじむような……なんてもんじゃない、つらく苦しい道のりだったそう。小さな子供が大人に混じつて訓練漬けの日々を送ってきたんだから、そりゃそうだろう。楽だったはずがない。

それでも、自分にはそんなことを嘆いている余裕はない。

身よりも、財産もない孤児。社会的に最底辺と言つていくくらいに弱い立場を捨て、確かな地位と力を手にすべく、ターニヤさんは死に

物狂いで修行して今の強さを得た。

才能もあつただろうが、決してそれだけで至ったものではなく……
そうしなければ危ない、後がないという、ある種の強迫観念の中、ま
さにその『本能』を呼び起こして前に進み続けた。

その結果得られたのが、今日の自分。彼女は、そう語った。

「生き残る。ただひたすらに私はそれを、そのための力を求めた。ま
だ体も出来上がっていない、1桁の年齢の小娘がやるにはハードどこ
ろじゃない修行の日々を乗り越え、期待される以上の効果を引き出し
て成長できたのは、今思えば間違いなくそれ……『本能』の後押しに
よるものだ。意識の表層に現れない根源的な部分での渴望は、生きる
という意思の力は、常識と限界を超えさせる」

「それを……僕にも……？」

「私が着任する前から、それは始まっていた。食事、トレーニング、そ
の他あらゆる生活環境の改善によって、修行を始めるのに最適な状態
に体を、そして生活サイクルを持つていった。さらに、それ以前に集
めていたデータと照らし合わせて、お前の体に、指向性を持たせた負
担をかけるようにトレーニングを続けさせた。お前自身の意識とし
ては疲れるだけだっただろうが、お前の体は『今のままではついてい
けない』と感じ始めていたんだ。成長の度合いを見極めて徐々に負荷
を上げていき、貴様の体と『個性』を刺激し続け、『生きようとする意
思』を叩き起こしていたわけだ」

「それで僕の『本能』が、もっと体を強くしようとしている……？」

「そうだ。……とはいえ、私達としても正直予想外のペースで進んで
いるがな……こちらからのアプローチに対して、反応が実に迅速で、
目に見えるほど大きく表れている。まるで……既に幾度もそれを繰
り返してきたかのように。昨日までの自分を乗り越えて強くなる、と
いうことに関して、お前の『個性』はあまりにも相性が良すぎる……
そんな印象を受けた」

その指摘に、ついドキツとしてしまう。

言い回しは微妙に違うが……ターニヤさんが言ったことには、モロ
に心当たりがあつたから。

僕の個性『ワン・フォー・オール』は、連綿と受け継がれてきた『個性』。

力を継承した者が、自分の力を鍛えて練り上げて、それを継承することでもた次の継承者が力を手にし、それをまた練り上げてさらに次の世代へ……という風に繰り返されてきた。

『オール・フォー・ワン』の弟を、そしてオールマイトを含め、8人の継承者が磨き上げ、研ぎ澄まし、鍛え、練り上げた……8代に及ぶ努力の果てに作り上げた、究極の身体能力だ。

言ってみれば、それだけ長い間、努力と成長を繰り返して、天井知らずに強くなってきた力。他の誰よりも何よりも、積み重ねて強くなるということを知っているはずだし……それに関して理解があり、また貪欲であることにも間違いはないだろう。

こう言うともまるで『ワン・フォー・オール』そのものに意思があるみたいに聞こえてしまうし、流石にそれは言いすぎだと思うけど……少なくとも、『限界を突破して強くなる』というやり方は、個人的には『ワン・フォー・オール』には最もなじみ深い、効果的な修行法の1つだと思う。

ターニャさんやビスケさん、その他、この修行法を提案した人達はそんなこと知る由もないだろうけど……恐らくこの方法でなら、考え得る限り、僕は最高効率で強くなれる。

完全に直感とか、そんなものでしかないけど、そんな気がするのだ。「言うなれば『本能の覚醒』。この方針は、これからも継続していく予定でいる。お前の心身に負担をかけ続け……生物の持つ生存への本能、力への渴望、成長し続けようとする意思を呼び覚まし、お前の体が最高効率を超えて強くなっていけるように働きかける。あらゆる手段を使ってな」

「もつとも、それをずっと続けるわけじゃあないけどね？ 言わば今の時期はスタートダッシュ。これから長い時間をかけて強くなっていくあんたに、いわば最初の最初から火をつけているわけ。これからずっとボーナスモードで成長していけるようにね。そのためにも……おおよそ夏休み前までを目安に、ガンガンあんたを追い込んで本

能に火をつけるわさ。覚悟しときなさいな」

ビスケさんも加わってそう説明というか、宣告してくれる。

体の中に眠っている『生きる意志』を呼び覚まして、それによって『成長する力』を得る、か。

そこだけ聞くと単なる根性論みたたく聞こえるけど、実際に僕の体は、そして『個性』はそれに応えている。『本能』の声に耳を傾けて、どっどん体を強くしていつている。

だからわかる。これを繰り返せば……僕はもつと強くなれると。

2人に視線で『やれるな?』と問いかけられているように感じながら、僕ははつきりと頷いた。

「わかりました。これからも……よろしくお願いします!」

こうして、ターニヤさんからの説明会は終わり、僕はその場で解散して自室へ戻る……かと思いきや、ターニヤさんが『それともう1つ』って感じで、帰ろうとする僕を呼び止めて、

「緑谷出久、さつきまでの話で大体はわかったと思うが、これからも私は基本方針として、お前に負荷を、試練を与え続ける。それも、どんどん厳しくなっていくようになる。その際に覚えておくべきこととして……『欲する』ことを忘れるな。常に心の中に置いておけ」

「? 欲すること……ですか?」

「要するに『欲望』だ。単語だけ聞くと外聞が悪いと思う者もいるかもしれないが……人の発展の歴史というのは、イコールで欲望をかなえてきた歴史だ。こうしたい、ああしたい、アレが欲しい、コレが食べたい……人は常に、己の欲望と向き合って生きている。そしてその欲望をかなえるためにこそ努力し、時に歴史を変える力にすらしてきた。そしてそれは、ヒーローも例外ではない」

例えば、と続けるターニヤさん。

「お前が戦った『ヒーロー殺し』ステイン。奴の主張では、ヒーローとは私を滅して他者のために尽くす者。そこに見返りを求めてはならない……そういう感じだったと思うが、私はそれが正しいとは思わん。何を心に抱いて、何を力に変えるかなど人それぞれだ。ならば、

何かを求めて、目標・目的に据えて行動する方が、己を奮い立たせるのに効果的かつ効率的だ」

そう言って彼女は、再度僕の目の前に立った。

真正面から、その綺麗な瞳で、結構な近い距離で僕の顔を覗き込んでくる。しかし、不思議と……恥ずかしい的な意味でドキドキはしない。

……何か真面目な雰囲気というか、凄みみたいなものをむしろ感じている。

「今更な問いかけではあるが……お前、『平和の象徴』になりたいそうだな？」

「……！ ……はい」

「立派な目標だ。それ自体は一向にかまわんだろう……だが、その『平和』のために、お前が他の全てを犠牲にしてしまうようなことはするな。私を滅し、公に全てを奉げる果てにあるのは、1人の人間としての意思が存在しない……願いを受け止めるだけの器。ある種の人柱だ。私はお前に、そんな未来を歩んでほしくはない。人間は皆、己の欲と共にあり、上手く付き合っていくものだ。それが多すぎてもいけないが、少なすぎても歪になる……そうだな、こんな言葉がある」

一拍置いて。

「禁欲の果てにたどり着く強さなど、たかが知れたもの。強くなりたくば食らえ」

なんていうか……随分刺激的、ないしワイルドな格言？だな……。

「己の欲望から目を背けるな。欲しいという気持ちを捨てるな。全て受け入れて、力に変えろ。欲することは罪ではない、欲するに足る者となれ。欲しいもの全て、胸を張って食らいつくせ」

とん、と、その小さな拳で軽く僕の胸を叩く、あるいは押すように押し付けた。

「今言った言葉の意味は、いちいち説明はせん。……何、すぐにわかるさ。ここから先は、お前の中のそういう『欲』を引っ張り出して、そ

してそれと戦い、そして受け入れることも修行のうちだ。意味を理解し、そして実践することができた時……お前は1つ上のステージに行けるだろう」

そう言つてターニヤさんは、ちらりと横を見る。

その視線の先には……部屋着でソファにのんびり腰かけている、栄陽院さんがいた。

なぜ視線を向けられたのか彼女もわからない様子で『?』と首をかき上げていたけど、ターニヤさんは何も言わずに、今度こそ部屋を後にした。

僕も、それを追つてじゃないけど……栄陽院さんの部屋を出て、その日はこれでお開きになった。

……ターニヤさんが言つてたことの意味、か……いつ頃わかるんだろうな？ 早いとありがたいな。

第69話 TS少女とラバーエンプレス

トップヒーロー育成プログラム『デウス・ロ・ウルト』。

私と緑谷が取り組んでいるこのテスト事業は……次のフェーズに歩みを進めていた。

ターニヤに見てもらっていた訓練とはまた別な、しかしさらに苦しさを増した訓練。

どうにか今日の分をやり遂げはしたものの、気力・体力共に使い果たした私達は、力なくジムの床に転がって倒れていた。息はハアハアと荒く、必死に肺が酸素を取り込もうとしているのがわかる。しかし、着ているこのスーツと、顔に着けているマスクのおかげで、それもいまいち上手くいかない。スーツはどうにもならないので、急いでマスクを外して呼吸を楽にする。

横を見ると、ちょうど同じように緑谷もマスクを外したところだった。

スーツに覆われている首から下はわからないけど、首から上は脱水症状が心配になるほど汗だくだ。まあ……私も似たようなもんだらうけど。

そして、そんな私達2人を見下ろし……ニヤニヤと嗜虐の笑みを浮かべる1人の女性。

翼のように展開した超硬質ゴム製の装甲マントと、その下から現れた、体にびったりと密着しているゴムのボディースーツ。戦闘用としても想定しているため、各所が補強されてはいるものの……全体的に卑猥っぽく、しかしそれ以上にサディスティックな雰囲気醸し出している。その手にぶつといゴム製の鞭を持つてるから、余計に。

どちらも下手をすれば、ミッドナイト先生と同等かそれ以上にだ。「うふふふ……2人共全然まだまだ力が足りてませんねえ。でも心配はいりません、明日からもきっちりみっちり、私が2人につきつきりで指導させていただきますから。泣いてもわめいても漏らしてもいいですから、死なないようにだけ気を付けて、死ぬ気で付いてきてくださいねえ♪」

(この……ドSッ……！)

私と緑谷を、特訓と称して……いや実際にそうではあるんだけど、それに多分に趣味的な意味を込めていたぶって、滅茶苦茶楽しそうにしているこの女、呉武絵守……プロヒーロー『ラバーエンプレス』が、今日から私達の指導に加わっていた。

遡ること2時間前。

今日もトレーニングを始めるべく、緑谷と一緒にジムにやってきた私を出迎えたのは……ターニャやビスケではなかった。

「ら、ラバーエンプレス……先生!？」

「うげっ、ラバー……」

「あらあら、『うげっ』だなんてご挨拶ですnee、永久ちゃん。緑谷君は、この間ぶりですね。工房ではどうも」

「あ、あはは……来るとは聞いてたけど……」

にこにここと笑うこの人を前にして、若干腰が引ける私。

対して緑谷は、驚いてはいるようだけど……それだけみたいだ。雄英で『非常勤』として働いているのは知ってたけど、緑谷、ちようどそこで会ってたんだな。

そして、ということは……緑谷はまだ、彼女の『本性』を知らない。だからこんな風に平然としているし、私の反応を見て『どうしたんだろう』って感じのそれになっているんだろう。

が、母さんの知り合いである彼女の、その性格……というか『性癖』を知っている私としては、これから何が始まるのか考えると震えが止まらない。

プロヒーローに指導してもらえることに無邪気に喜び、事の深刻さに気づいていない緑谷は……今はまだ、幸福であると言わざるを得ない。

「じゃ、じゃあ……ラバー先生がここから先の『デウス・ロ・ウルト』の担当に加わるんですか？　すごいや……よろしくお願いします!」

「ええ、こちらこそよろしくお願いしますね、緑谷君。永久ちゃんも「は、はーい……」

まあいい。すぐに思い知ることになるからな、緑谷も。この人の『本性』って奴を。

おそらく……この後すぐ。

「ターニャさんから話は聞いています。あなた達がどの程度できるようになってきているかということや、この訓練で主目的としている、心身への負荷による成長速度の強化についても。私が行う訓練は、単純に言って、それをさらに加速させるものです。無論、決して楽な道のものであるとは言えませんが、お2人とも、Plus Ultraの精神で乗り越えてくれることを期待します」

「はいー」

「……はい」

テンション対照的な私達2人に向けてにつこりと笑いかけ、『ではまず』と、ラバーは今日の訓練に際して、最初に私達にするべきことを告げた。

「お2人とも、今すぐ全裸になってそこに立つてください」

そら来た。最初からフルスロットルだよ。

「……え？」

きよとんとなる緑谷。何が起きたのか、というか何を言われたのかわかってないというか……脳が理解することを拒否してるなアレは。説明を求めて、私とラバーの顔を交互に見る。しかし、彼の求める答えは返ってこない。

なぜなら、ラバーの要求は言われたままであり、婉曲表現も何もないからだ。

造形ヒーロー『ラバーエンプレス』。

本名、呉武絵守^{くれたけえす}。

彼女の性格は……ドSである。

その後、要求通り、私と緑谷は一枚残らず来ている服をはぎ取られ……訓練場のど真ん中に置かれた、黒いマットのようなものの上にそ

れぞれ立たされていた。

流石に、自室でもないところでこんなオールヌードになってるのは……私も恥ずかしい。

例えここにいるのが、同性であるラバーと、見られてもいい相手である緑谷だけだったとしても……公共スペースでこんなカツコになるのは……。

いや、貸し切りだから見られる心配はないけど、それでもさあ……。そして緑谷はもつと深刻だ。必死になってラバーに『勘弁してください』と撤回を求めたものの、結局取り合われずに裸にされ……。只今、じろじろとラバーに体中を見られている所である。

しかも、手で隠すことすら許されずに……。さすがにかわいそう
だ。

せめてもの救いは、私達が背中合わせにされて立ってるので、互いの裸は見えないところか。

いや、私は別にいくらでも見てくれていいんだけど……。緑谷の精神衛生上、ね。

っていうか、コレ訓練の一環としてじゃなかったら（だとしてもま
ずいとは思うが）普通に犯罪だよな。通報したら捕まるよなラバー
……。

「ふんふんふん……中々いい体してますね、緑谷君。筋肉のつき方も
バランス取れてるし……えい」

「ひゃっ!? ら、ラバー……先生……!? ど、どうしてこんなつ……
!？」

「もちろん、修行のための下調べですよ？ ふふつ、そんな所を
そんなにしちやっつて、何を期待してるのかしら？」

「こ、これはそのつ、せ、生理現象で……しかたなくてっ……!」
「ど、こんなところをどんなにしてるんだろうか……」

正直見たい。見たいけど、見たら緑谷が精神的に死にかねないので
我慢する。

ぺたぺたと体を触って、そのたびに『ひゃ』『あうっ』という悩まし
気な声が聞こえてくる。……正直、耳に毒だ……女だっつてこんな状況

でこんな声聞かされたらクるっつーの……！

ちなみにさつきまでは私がそんな感じになってたので、その音声を聞いていた緑谷は、さぞかしそんな所がそんなになっちゃってることだろう。

……こんなでも母さんの盟友だけあり、仕事はきちんと真面目にやる人だ。

単なるセクハラだけでこんなことやってるわけじゃなく、きちんと仕事に必要なことをやってるんだよな……その過程というか手段に多分に趣味が反映されるだけで。

しばらく経ってようやくそれが終わったようで……私から見て横方向、視界の端に、満足した様子のラバーの姿が見えた。後ろから嗚咽が聞こえてきそうな雰囲気だが、そして、

「さて、2人の体は隅々まで調べさせてもらいました。それをもとに……あなた達専用の修行用コスチュームを用意させてもらいますね。……ちよつと痛いですが、動かないでくださいね？」

「え？」

さて、ここで私達の今の状況をもう一度見てみよう。

私達は、最初に言われた通り……事務の床に敷いてある、黒いマットだかシートみたいなものの上に立たされている。そして、素足の裏で感触を見る限り……コレ、『ゴム』っぽいんだよな。

このシートがうねうねとうごめきだし……そして次の瞬間、

——びしいっ！

「痛だあっ!？」

まるで全身にゴムパッチンでも食らったかのような衝撃と痛みが走り、何事かと思つて体を見下ろすと……さつきまで全裸だった私の体に、バンテージみたいなのも状、あるいは帯状に変形したゴムがあちこちに巻き付いていた。

テーピングを下着代わりになっているようになっていて、胸とか大事な部分はきっちり隠れている上、揺れないようにきっちり止められている。

エロい見た目ではあるけど……黒くて重厚なゴムの帯は、どこか

物々しさも感じるな。

咄嗟に振り返ってみてみると、緑谷の方もそうだった。体全体にまばらに黒ゴムテープが巻かれ、きちんと下着の代わりの役割も果たしている。

すると続いて、今度は足元のシートの別な層がうごめきだした。

どうやらこのゴムシート、何層にもわかれていて……座布団を何枚も重ねた上に私らは立たされていたようだ。その、さつき動いて巻き付いたのとは別のゴムの層がうごめきだし……今度は私達の体を、ウエットスーツのように薄く、全体を覆い隠した。首から下全体に、ぴったりと密着。

今度は痛くなかった。比較的ゆっくりと、全体を包み込むように動いたから……かな？

これをやつてるのがラバーの『ゴム』の個性によるものだというのはもう予想するまでもないことだけど……なるほど、さつき言つた『スーツを作る』ってのはこのことか。

もうこの2つ目のゴムの下に隠れちゃったけど、記憶にある限り緑谷と私の体に最初に巻き付いた黒いテーピングゴムは、部位ごとの巻き付き方や量が明らかに違っていた。

さつきまでやっていた身体検査といい、どうやらこのスーツは……
「明察。さつき私が言つた『修行用コスチューム』です。さつき2人の体は隅々まで見させてもらいましたから、2人にあつた形で肉体に負荷をかける設計にしていますよ？」

「それが、さつき最初に巻き付いた黒いゴムのテープ？」

「それだけじゃないですけどね。ほら、動かないでください。まだまだいきますよ」

そこからさらにラバーは、何種類ものゴムを組み合わせ、編むようにして私達の体の表面、ゴムスーツの上に張り付けて固定し……ものの1分足らずで『修行用コスチューム』を完成させた。

このスーツはさつきラバーが言つた通り、私達の体に合わせて作り上げたもの。筋肉の収縮や関節の可動域なんかを考えた上で、最高効率で鍛えられるように作られている。関節などは壊さないように

保護しつつ、筋肉と精神、その他色々な部分に適度に負荷をかけられるように。

さらに皮膚呼吸も適度に制限する上、ゴムの収縮で内臓機能を刺激したり、逆に保護したりすることすらもできる。そのへんの微調整も、『個性』の使い手であるラバーにかかればさつとできてしまう。

おまけに見た目は……全体的に黒とか暗色系メインで構成された、わりとスタイリッシュなボディスーツだ。悪くない。

「今日からの訓練は、基本的にこのスーツで行ってもらいます。慣れてきたら徐々に負荷を上げていくので……今はひとまず、2人共、着ているスーツの締め付けに負けずに、また不快感にも負けずに戦うことに注力してみてくださいね」

そしてラバーがこの訓練に参加するのは、この個性を利用して、私達の体と心、両方を鍛えることができる人材だからだ。

肉体はゴムによるギプス的な効果で負荷をかけて強化し、鍛える。そして同時に、ゴムスーツによるストレスと、彼女の元々の性格を考えれば……そっちの方法も込みで、私達のメンタルを鍛え上げに来るはずだ。

……眼に、そういう危険な光が灯りつつあるから、何となくわかる。なお、緑谷はそういった雰囲気を感じていない。ただ単に、『恥ずかしい思いはしたけどすごい訓練用アイテムもらえてラッキー』くらいにしか思っていない。

その通りというか、そのままだったらむしろありがたいかもだが……

☆☆☆☆

で、冒頭というか、現在に戻る。

手足の指の先まで覆われている『ハードラバースーツ』は、一挙手一投足に負荷がかかる。ウエイトスーツ以上に体が鍛えられる感じがした。

そして、思うように動けない、という状況は、少なくともストレス

にもなり……心にも負荷をかける。『対尋問訓練』と同じで、そういう状況下でも冷静にいられる、耐えられる精神を、ここでも鍛えることになった。

加えてこのスーツ、通気性が最悪なので……蒸れる。

ゴム同士がこすれ合うことで熱を発する上、保温性が高いのでかなり暑い。熱がこもる。

その状態で動くからさらに熱くなる。

その状態で汗をかいて、しかしピッチリ密着してるもんだから不快感が……決してバカにできないレベルのストレスを与えてくるわけだ。それを我慢しながら、ハードトレーニングをこなし続けなければならぬ。そんな2時間だった。

ようやく終わって……心身ともにへとへとな私達は、少し休んでいくらか回復した後で、部屋に戻ろうとしたわけだが、

「あのー……ラバー？ この服って、どうするんですか？」

着替えるために更衣室に向かおうとしてそれに気付く。

このハードラバースーツは、今さっきラバーが『個性』で即席で作ってくれたものだ。全裸だった私達に、その場で造形して纏わせる形で。

なので、『着る』というプロセスを踏んでいない。着脱の仕方がわからん。

というかそもそも脱げそうにないんだけど……めっちゃぴったり密着してるし、引っ張ってもあんま伸びないから、ダイビングの時に使うウエットスーツみたいにぐいっと脱ぐこともできない。

胸元とか襟の部分の引っ張っても……この通りちよつとしか伸びない。

う……引っ張ったところから、汗のにおいがむわって……やっぱ相当蒸れてるな……早いとこシャワー浴びたい。

とか考えてたら、

「それなら大丈夫ですよ。ほら」

ぱちん、と指を鳴らすラバー。それと同時に、『個性』を発動したらしく、私達の体を覆っているスーツが、はらりとほどけて落ちた。

当然、その下から現れるのは……私らの裸体である。

「……………っ!?!」

緑谷、素早く丸出しになった股間のリトル緑谷をガードし、私から視線を外して必死に見ないようにする。まあ、わかり切ってた反応だ。

ていうか、嫌な予感のはしてたけど……やつぱ着脱方法コレなのね……ラバーの『個性』でのみ着脱可能。しかも、0か1かしかない感じ。

かと思えば、ラバーはほどけて落ちたゴムを塊状にしてしまい、そのまま素材の状態で回収した。当然ながら、スーツは跡形もなく消えた。

さつきからセクハラ全開なラバーは、慌てている緑谷と呆れている私に、さつき脱いで置いておいた服その他荷物を投げ渡す。緑谷はそれを手にすると、急いで男子更衣室に駆け込んでいった。

私は……この汗だくの状態ですぐ着るのもアレなので、シャワー浴びてからかな。

見てるのもラバーだけだし、さつきとそのままシャワー室に行こうとして……ふと思いついて、ラバーに問いかける。

「ねえラバー、さつきからいくら何でも訓練の中にエロ要素入って来すぎだと思っんですけど……ひよっとして狙ってやってます? だとしたら明らかに私のことも『教材』にしていますよね?」

「ええ、正解です。もともとコレは、メンタルを鍛えるのと同時に、心身への様々な負荷によって成長を促すのが主軸の修行ですからね。トマトを甘く育てるのと同じです」

「? トマトって、何それ?」

「トマトをより甘く、より美味しくそだてる方法の1つに、環境ストレスを利用する方法があるのを知りませんか? 生育の際にわざと与える水分を抑えたりして『ストレス』を与えることで、より質の高い果実が作られるように誘導するんです。今私達がやっているのも同じこと……あなた達の心身に負荷をかけることで、体の奥底に眠る『生きる意志』を呼び覚まし、より強い肉体を、より早く作れるように

する。今日の修行も、その合間合間の悪戯もその一環です」

「えつちなハプニングも？」

「ええ。生物の持つあらゆる『欲』は、それを叶える、手にするための力や手段とセットで考えられますから。牙をむいた猟犬に追いかけられればウサギは死ぬ気で走りますし、目の前に人参をつるしてやれば馬はそれに食らいつこうと必死で走って首を伸ばします」

「猟犬とウサギ、ニンジンと馬、ね。要するに、何を使って力を伸ばすかって例えだな。」

「痛みや苦しみを与えれば、それを乗り越えようとして、それらに耐えられる、あるいは打ち勝てる強さを求めて体が成長しようとする。」

「快楽や幸福を与える、あるいは目の前にぶら下げてやれば、それを手に入れるために必要な力を得ようと、体はより一層成長しようとする。」

「どちらも私達の特訓に用いられている『負荷』にそれは現れているわけだが……緑谷の場合、お色気方面の『餌』もそれにプラスされるってことだな。」

「具体的には……私の肌すらも利用する、と。」

「思春期の男の子の性への興味なんてのは、あらゆる感情の中でももっとも火が付きやすい、燃焼促進剤ですからね。ガンガンそこを刺激して、緑谷君のハングリー精神を燃え上がらせ、その刺激を肉体にも及ぼせることで成長を加速させます。協力してくださいね？」

「つまりどんどん緑谷にエロいところを見せろってことですよそれ……倫理的に大問題ですよ。いくらこつちから頼んでるって言うても、高校生の女の子に……私コレ、訴えたら勝てますよ。というか、下手したらその刺激する対象が暴走して襲ってくるじゃないですか？」

「でもそうになったらむしろ大歓迎なんですよ？」

「……そうですね。ええ、協力しますよ全面的に。それが緑谷のためになるなら」

「うん、まあ……ね。別に何も文句とかあるわけじゃないからな。」

「ただ、今まで流れや天然でやつちやつてたことを、これからは狙っ

てやる場面が増えるだけだし……その結果緑谷に『手を出される』としても、私はそれでも……むしろ……うん。

にこにこ笑って『なら何も問題ないですね』と目で言ってくるDS。うん、何も問題ない、問題ないんだけど……なんか釈然としない……全てが彼女の手のひらの上な気がして……加えて、彼女の趣味を多分に盛り込んで全てが進められるだろうことが、既定路線で見えてるから。

ま、いいや……とりあえず、シャワー浴びて着替えよう。この後は夕食と座学だ。

「そういえばラバー……ゴムスーツ、素材に戻しちゃいましたけど……」

「大丈夫ですよ、明日また同じやり方で一から作りますから」

「……また全裸スタートですか？」

緑谷が大変そうだな、毎日、精神的に。

「その日その日の体調や筋肉の具合なんかに応じたコスチュームをその場で作りますから、エロスとか関係なくてもそこは仕方ないですね。ああ、私以外の講師が来るときには、きちんと更衣室の中で着替えられるようにしますからご安心を」

思ったよりまともな理由も混じってた。コスチューム技師として超がつくほど一流であるラバーに、その日の自分に最適なスーツを、日替わりオーダーメイドで用意してもらえるってのは、贅沢通りこしてめっちゃ恵まれてる訓練環境だと言える、か。

……この人の指導受けてるうちは、効率はめっちゃ上がる代わりに、トレーニング全般が全裸に始まり全裸に終わる的な感じになるわけだな……過酷なんだかアホっぽいだか。

効果はありそうなので、真面目に取り組みたいと思う。

第70話 TS少女と修行の日々

この時期の雄英のカリキュラムは、主に期末試験、及び夏休みの『林間合宿』に向けて実力をつけるように、基礎固め、及び知識や技能の習得に特に力を入れている。

ゆえに、まあ何というか……地味、もとい地道なカリキュラムが多い。

それでも、それらは母さん……『アナライジユ』の手によって強化・最適化されているし、内容において細かいところを説明しようとするばかりがない。

なので、学校生活については凡そ割愛させてもらうとして……私達が今もってこなしている、『デウス・ロ・ウルト』について、引き続き説明していこうか。

ラバーが講師に加わり、『ハードラバースーツ』を使って訓練をするようになってから、訓練内容はさらに高密度なものになっていった。

一挙手一投足に負担がかかって鍛えられる上、その状態でターニャやビスケさんと、あるいは緑谷とのスパリングをこなす。無駄な動きが多いと、あつという間に体力を奪われて動けなくなってしまうし、そもそも訓練についていけなくて一方的にどつき回されることになる。

2人共、こつちの体調やら何やらについてもきちんと考えて教えてくれるいい講師だけど、気のゆるみなんかの原因で起こるミスなんかには厳しいからな。そう言うことにならないように、私達は自分の動きを意識し、そして相手の動きを常に観察・予測して動いている。

今はこうして『意識して』『集中して』行えることを、繰り返ししていくことで徐々に『当たり前』のものにし……無意識レベルでできるようになるのがまずもっての目標だ。

そのくらいできなければ、一線級の戦いの中でやっていくことはできない。

また、このスパーリングには、ラバーも時々加わる。

積極的に戦闘に参加するタイプではないとはいえ、ラバーもその力はプロヒーローにふさわしいそれを持っているし、『個性』を使って戦う能力も一級品だ。

今のところ、私も緑谷も、2人一緒にやったスパーリングでも一撃も入れられていない。

もちろん、その時にラバーが『ハードラバースーツ』のゴムを操って妨害してきた、なんてことはなく……自分が武器として操るゴムと、その技量だけで手玉に取られた。

戦闘モードのラバーは、超硬質ゴムの装甲マントを、まるで翼のように展開し、攻撃に防御に振り回して、割とダイナミックに戦う。

ゴムと言っても、速度その他の要素によつては、金属と変わらない、あるいはそれ以上の殺傷能力……もとい、攻撃力を有する。

よく、アクション映画や小説とかで、銃でゴム弾を撃つシーンとかがある。あるいはゴムのナイフで格闘訓練したりとか。

ああいうのって、材質にもよるけど……当たると相当痛いらしい。特にゴム弾は、貫通したりはしないけど、威力は銃弾そのものだから……その衝撃が逃げずに叩きつけられる。そのため、骨が折れたりとか普通にするそう。貫通することで威力が逃げたりしないから。

また、防御に使って破損したとしても、ラバーは個性でそれを一瞬で修復し、再利用できる。形態操作系の個性って、そういうところも反則級に便利だよな……。

今日のスパーリングでは、ラバーがゴムの翼を大剣みたいに使って薙ぎ払い、叩きつけ、さらにその合間合間にゴム弾やゴムナイフの刃を高速射出してくるもんだから、2人そろって手も足も出ずにすっ転がされたなあ……。

攻撃力や身体能力では私や緑谷が上なのに、ことごとく動きの出足を潰されて……それらを生かせないままに惨敗だった。ああいう戦い方もあるんだな、と知った。

加えて、ラバーの持つ中で、『マント』と同じかそれ以上に凶悪な武器が……鞭だ。

コイツも当然ゴムで作られているわけだが、攻撃力はやはり高い。硬度や重量さえ伴っていけば、ゴム製の鞭っていうのは、振るう人が振るえば普通に骨折とかの重傷すら引き起こすからな。訓練だから、そこまではされないけど。

が、それ以上にヤバい点が……『痛い』というところだ。

何を当たり前のことを言ってるんだ、って思った？ それを使って攻撃されるんだから、そりゃ痛いのは当たり前だろ、って。

そういう問題じゃないんだよなあ……。

人間の肉体にとつて、実質的・絶対量的なダメージそのものは大したことなくても、時に表面上の『痛み』の方が深刻であることも少なくない、と言われている。

体の損壊具合が大きく、治療も長引くような傷は、そりゃ脅威ではあるけど……時に、傷自体は大したことなくても、その際の痛みが強烈過ぎて、実際のダメージ以上の事態を引き起こすことだって珍しくないのだ。痛みで呼吸ができなくなったり、気絶したり、最悪ショック死すらする。

鞭による打撃は、その最たるものの1つだ。鞭って、叩かれると滅茶苦茶痛いんだよ……実際のダメージよりも何倍も『大げさ』な痛みが叩き込まれるんだよ。

そして、その強烈過ぎる痛みが、精神を大きく追い詰める。

中東とか一部の国では、『鞭打ちの刑』ってのが今も残っているらしい。決められた回数、鞭で打たれることで刑罰とする、とかいう奴が、その執行中に、回数行く前にショック死してしまう例も珍しくないそうだ。あまりの苦痛に耐えかねて、体と心が生きることが諦めてしまう、らしい。

当然、と言えばいいのか……鞭を振るうラバーもそういう扱い方、振るい方をよく心得ていて……私も緑谷も、何度も模擬戦の最中、ラバーの鞭に打ち据えられて悶絶させられた。

そして隙だらけのところ、攻撃力においてさらに上に行く『翼』が飛んできてぶっ飛ばされ……大体この繰り返しになる。

そしてこの訓練は、痛みによって精神を鍛えるのに加えて……痛み

自体への耐性をつける訓練も兼ねている。

戦闘中に、ダメージが原因で動きを止めたり、思考を鈍らせないように。『翼』による追撃に見られるように、訓練中にそうなると容赦なく、余計ダメージを食らう展開が待ってるってことを、体で覚えさせられる。

最終的には、その痛みを無視して動けるだけの精神力を養うのが理想だと言われている。

それも、脳内麻薬や精神興奮物質エンドルフィンの作用で痛みを感じないとか、苦痛を忘れるとかじゃなく……『痛い』『苦しい』と認識しつつも、それを意思の力で無視して乗り越えて戦い続けることができようになるのが理想というか目標らしいけど……いつになるんだか、そんな境地に達するの……。

大いにまあ、追い詰めてくれている。実際、息が止まるほど痛くて苦しかったこともあったし……さぞかしこれらの訓練は、『本能』を刺激しているんだろうな。

そんな感じで、私達は『本能覚醒』のコンセプトの元、『追い詰められて、成長する』日々を送っている。

苦闘の甲斐あって、どんどん成長できている実感はある。

私自身の技量はともかく……普通ではありえないレベルで体作りは進んでいるし、そのために毎日、今までよりもかなり上に行く食欲に急かさねながら、がっついてご飯を掻き込んでいる。

毎食担当の人に作ってもらえるようになったのは楽でいいけど……たまに台所に立たないと、料理の仕方忘れそうで怖いな。せつかく『尽くす』ために覚えた技能(個人的な食欲による後押しも大きかったが)、捨て去ってしまうのは惜しい。後で母さんあたりに相談しよう。

そして、それが『エネルギー』に変換されるよりも先に、体の材料となって吸収され、血肉になっている実感がきちんとある。

今日食べるご飯が、明日の私を作る。明日の私は、今日の私を超えていく。

緑谷と一緒にそれを繰り返して強くなる日々を、私は、苦しみながらも、半ば楽しんでいた。

☆☆☆

まあ、そんな余裕もだんだんなくなっていくんだが。

私達の成長に合わせて、修行の難易度も上がっていつてるんだから、そりや当たり前のもんだけど……ホントに容赦なく『追い詰める』よね、私達を。

まず、修行用のコスチュームが変わった。

今までと同じように、私達のその日の状態に合わせてラバーが0から作ってくれるのは変わらないけど……装着されるそれが『ハードラバー・スーツ・レベル2』になった。

単純に、それまでの『レベル1』よりも負荷が強力になってるってだけなんだけど、修行の中ではそのわずかな差が大きく響いてくるので、一層油断できない時間を過ごしている。

レベル1の時に覚えた『最適な体の動かし方』を意識してやらないと、とても戦闘についていけないからな。

次に、修行する『環境』にもメスが入った。

それまで私達は、スーツに加えて、低酸素環境や暗所を再現できるマスクをつけてトレーニングをしてたわけだけど……それ以外に、トレーニングルーム自体の機能を使い、高温、低温、多湿、低気圧などの環境ストレスをかけた中で訓練を続けている。

これももちろん、体に負荷をかけるためだ。

スーツによる直接的なものよりも、僅かにいじるだけでももっと強力なストレスになるので、扱いには慎重になってるようだが。

そして、さつき言った『マスク』がさらに、特殊なガスを出すようになった。

ガスと言っても毒ガスとかじゃなく、むしろ体に有益な成分だし、薬効みたいなものはないに等しい。そもそも、一般の施設とかでも普通に使われているものだ。

一言で言うと、単なるアロマテラピーである。『森林浴の香り』的なやつだ。

緑のない都会で疑似的な森林浴を楽しめるってことで、市販されてもいるし、スパリゾートなんかでは、そういう香りに包まれるのを楽しめる疑似森林浴室なんてのもあるらしい。

訓練の合間、休憩している最中に、体に作用してリラクセスさせる成分や匂いが、気にならない程度に放出され、肉体の回復機能を高める。それによって回復↓修行↓回復↓修行の繰り返しにメリハリをつけ、同時に肉体を酷使から回復しやすいよう育てる……体自体の治癒能力や代謝機能を底上げし、本来持っているそれを最大限に強化するのが目的だそう。

野生に生きる動物が、人間や、人間に飼育されている動物よりも治癒能力が高い場合がある、っていう話を聞いたことはないだろうか？ 迷信だと思ってたんだけど、どうやらそれ、ホントにあることらしいんだよね。

……これも、ある意味『本能覚醒』の作用なんだろうか。厳しい大自然の中で生きていくにあたって、それに必要なだけのスペックを得られるように、体が適応して進化する、的な。

訓練自体もどんどんハードになり、『ピアノマッサージ』でも疲れが抜けきらなくなってきた。

しかしそれを予想していた義姉さん達は、今度持ち込んだのが、『高圧酸素カプセル』だった。

読んで字のごとく、内部に高濃度の酸素（人体に悪影響がない程度に）を混ぜた空気を充填させていて、その中で寝ることにより、高濃度の酸素を体に取り入れることができるというもの。

それにより、疲労回復や自己治癒力の向上など、様々な効果をもたらす『健康器具』だ。

一般的……とは言えないが、かといってそこまで珍しくも、貴重でもないものだ。個人でも普通に所有できるし、一昔前は、アスリートやその他著名人で愛用している人も多かったらしい。

もちろん、『個性』による効果とは比べるべくもないが、だからと

いってその効能はバカにできないレベルでもある。

超常以前……まだ『オリンピックク』が全盛だった時代に、ある有名な選手が、ワールドカップ直前に骨折してしまい、出場は絶望的だと言われていた。しかし、この酸素カプセルを使用したことで短期間で急激に治癒を進め、見事出場を果たした、なんて逸話もある。

私達の場合もコレを使い、数日に1回、1時間ほどをこの中で過ごして、体内に高濃度の酸素を取り込むことでリフレッシュする、という時間を設けている。こうすることで治癒力はもちろん、脳に酸素が回って集中力も上がるので座学にもいい影響出てるし、1回やれば数日もつので毎日やらなくてもいいってのもいいな。

こんな感じで私達は、どんどんトレーニングをハードなものにし、それに伴って高速で肉体を回復させるように工夫を組み合わせることで、1日のトレーニングの効率、というか密度をどんどん上げている。

日中、学校で授業を受けていることも合わせれば、相当なハードスケジュールの中で生きてるな……ちよつとコレ、まとめてみようか、試しに。

5 : 00 起床
5 : 20 トレーニング（早朝）
6 : 50 トレーニング終了・身支度
7 : 30 朝食
8 : 00 登校
16 : 15 下校・帰宅
16 : 30 トレーニング（夕方）
18 : 00 トレーニング終了
18 : 30 リフレッシュ
19 : 00 夕食
20 : 00 座学
21 : 30 自由時間
23 : 00 就寝（遅くとも）

こんなところか。ゆとりあるようなないような……いや、自由時間だのなんだのが結構確保されてるから、あるにはあるんだろうな。

ただ、修行部分の密度が尋常じゃなくハードになってるから大変に感じるだけで。

それに、この時間割（と言えいいのかどうか）は、その日その日の状況とかでいくらでも変わってくるから、こんな表に大して意味はないが。

『フレックスタイム』のために放課後補習したり、朝もつと早く学校に行く用事があったり、時折不意打ち気味に入ってくる『対尋問訓練』のせいで一部のカリキュラムが変わったり、いくらでも時間変わるし。

あと、特にトレーニングの時とかは、『もうちよつとでいいところまで行くから少し時間延長する』とか、逆に『時間前だけどキリいいから今日はここまで』とかもあるし。

ああ、その『対尋問訓練』も……いや、これは大して変わんないな。内容的には。

今までと同じ、精神的に負担になる、不安感を覚えるような内容で『耐える』というのがメインで……ただまあ、バリエーションはいくつか増えてきてるけど。

拘束されて、不自然な姿勢でそのまま放置……これが今まで私や緑谷がやってた内容だ。拘束される内容とか姿勢は変わったたりするけど。

鎖付き手錠で天井から吊り下げる形にされたり。ベッドの四隅に鎖で四肢を固定されたり、服そのものがベルトだらけで、それをしめることで拘束できる、いわゆる『拘束服』だったり。最後のは、某アニメの緑髪毒舌の魔女が普段着にしているようなアレだ。わからない？ ごめん。

ただ、この訓練だけは私と緑谷は基本別室なので、緑谷の方も同じなのかわからないが。

ラバーが講師に追加されたので、いよいよ鞭で打たれるとかそういうのも出てくるんじゃないかって少し心配してたんだが、そういうの

はないようでよかった。

ただ、これも近々グレードアップするって聞いたから、少し不安ではある……どっちみち鞭打ちとか痛い系はやらないとは聞いてるけど、どんなふうにするのやら……。

第71話 TS少女と原作ヒロイン

S i d e . 緑谷出久

暗い。狭い。息苦しい。

身じろぎ一つ満足にできない、そこにいるだけでやっとなつていう感じの空間。

2人分の荒い息遣いが、静寂に支配された暗闇に、やたらと大きく響いて聞こえる。

1つはもちろん、僕のものだ。

そして、もう1つは……

「で、デク君……っ！」

「っ……う、麗日さん……ごめん……っ！」

一緒にここに入っている、麗日さんのそれだ。

僕と彼女は今、互いの息遣いが聞こえるほど近くに……なんてもんじやない。

僕らは今、体と体をぴったり密着させて、正面から抱き合っている。お互いの顔を肩に乗せる形になって……必然的に互いの口は、耳元に置かれている。そりや呼吸がうるさいはずだ。

密着してるせいか……気のせいか、互いの心音まで聞こえてきそうだ。

神聖な学び舎で、こんな状況になってるなんて……後ろ指さされても文句は言えない所業だ。

でも、離れられない。抱きしめ合っているこの体勢から、離れることができない。

小さく震えている麗日さんの体を、僕はより強く抱きしめることで——この行為が正しいのかどうかすらわからないけれど——その震えを抑えてあげるくらいしかできない。

「あ——ありがとう、デク君……」

そんな、小さく抑えるような声を耳元で聞きながら……僕は、どうしてこんなことになってしまったのか……それを思い出していた。

☆☆☆

事の発端は、数十分前……『ヒーロー基礎学』の授業開始時に遡る。今日のお題は……っていうか、ヒーロー基礎学の時って、先生方みんな、お題が書かれたプラカードみたいなの出して告げるよね。今更だけど、あの仕様何なんだろう？

まあいいや、今日そのカードにかかれていたお題は……『HハYイDドEド』
AアNンDド SシEシEクKク』。

日本語訳で、『かくれんぼ』である。

こないだの『鬼ごっこ』に続いて、子供の遊び派生のお題だ。

その時にね、ちよつとしたトラブルが……というか、TトOロLロVベeエるが……うん。

『かくれんぼ』のルールは、こないだの『鬼ごっこ』とほぼ同じような感じである。

市街地演習場の……全体だと広すぎるので、どこか1カ所の建物の中をステージに指定し、『鬼役』と『隠れ役』に分かれて、文字通りのかくれんぼをする。

鬼役は時間内に隠れ役を全員見つけることが目的。隠れ役は鬼役に見つからないことが目的。

当然『個性』使用は自由。なので、耳郎さんや障子君、口田君みたいな、探知系の個性を持つてる人に有利なお題だ。

その時、僕は学校を模したステージで隠れることになって……どこに隠れたらいいかなって、ちよつどいい場所を探してた。

けど運悪く、隠れる前に鬼役の人の足音が聞こえてきて……慌てて近くにあった部屋……調理室に駆け込んだ。

どこに隠れたらいい？ 冷蔵庫？ いやさすがに寒すぎる。食器棚？ さすがに狭い、無理。シンク下……同じ理由で無理。他の棚も、狭かったりものが入ってたりでダメ。

入ってるものを出して入ろうにも、それが外に出てたら即ばれるし……隠してる場所も時間も……どこか、どこかないか……!?

そんな風に必死に探してた僕は、最悪、狭いのは覚悟でシンク下に

体をどうにか押し込めようかとか考えたところで……ふと、あるものを見つけた。

視線の先にあるのは、小さめの食器棚だ。まあ、小さ目って言うても2m弱くらいはあるんだが……金属製で、中に食器類は入っていない。でも、棚自体はほとんど引き出しとかだし、大きめのスペースはガラス張りなので、隠れることはできない。

それはいい。問題は……その食器棚の下の床に、床下収納と思しき小さな扉が見えることだ。

一般家庭にもある、野菜とか調味料とかを入れてしまっておくようなそこは、扉の大きさからして、僕でも楽に入れそう。深さにもよるけど……

もし僕が入れそうな深さなら、ここはいい隠れ場所かもしれない！上の戸棚くらいなら、最近常時15%くらいまで使えるようになった『フルカウル』なら、簡単に持ちあがるだろう。その後で、格納庫の扉を閉めて、同時に戸棚が上に乗っかるようにすれば……戸棚でカモフラージュされた隠れ場所の完成だ。

それだけでも見つかりにくいだろうし、万が一戸棚の下の収納が見つかっても、『こんな戸棚をどかして隠れるのは無理だろ』って見逃される可能性もある。そもそも普通の人じゃ、戸棚をどかすだけで一苦労だから、手間っていう点を考えてもスルーされる可能性は高い。

一か八かかってことで、音を立てないようにそつと戸棚をどかして、床下収納を開けてみると……よし、十分広い！これなら中で胡坐かいて座るくらいなら割と楽にできそうだ！

そう思っただけに入ろうと思っただけの瞬間、ガラツと音を立てて、調理室の扉が開いた!?

っ!? そんな、まさか鬼がもう……と思っただけ、

「っ、誰……へっ!? で、デク君!？」

「う、麗日さん!？」

入ってきたのは……同じく鬼から逃げて隠れているらしい、麗日さんだったのだ。

その後、本当の鬼（役の飯田君）が近づいてきていたので、慌てた僕らは……何をテンパったのか、2人一緒にその床下収納に隠れてしまったのである。

麗日さんの『個性』のおかげで、戸棚を上に乗せる偽装工作は、僕が覚悟してたよりよっぽど楽で、しかも静かに行えたのはよかった。戸棚を無重力にした後、扉と一緒に収納の上に置いてから解除する形で、外に出る時は……無理やりになるけど。

が、問題は……決して広いとは言えない（というか狭い）この空間に、僕と麗日さんの2人が密着して入ることになってしまったことだ。

収納庫の中に僕が胡坐をかいて座り……その上に麗日さんが、向かい合う形で座っている。

どこについて、僕の膝というか足の上にだよ……どうしてこうなった。いや、入ろうと思ったたらこの姿勢くらいしか取れる姿勢ないだろうけどさ。それはわかるけどさ。

しかもそれでもスペースギリギリだから、少しでも密着しないと苦しいのだ。なので、さつきから僕らは、座って向かい合って抱き合っ
てて……つまりは、冒頭の状況である。

こんな状況で何かこう……よからぬ想像でもしてみろ……っついていか今の、麗日さんと密着してるっついていうこの状況だけでヤバいっ
！

『変形』する！……どこがとは言えないけど！

いつもとは違うんだぞ！ 栄陽院さんならこのくらい笑って見逃してくれる——というか、そもそも『その先』だっで大歓迎だっ
てくれたくらいだし——けど、麗日さんは違うぞ!?

いや、彼女を悪く言うわけじゃなくて、むしろそれが普通だし……
そう、普通の女の子にそんな……『変形』させて押し付けるなんて真似、性犯罪者以外の何物でもない！ 普通に大問題っというか、ホントに大変なことになる！ マジで除籍とか処分もあり得る！

ああああ、でも自分の意思じゃ抑えられない、徐々に腰から下に血液が、熱くなって……

「…………あれ…………？」

麗日さんが隣で何かに気づき始めたように見えたと……もう本当にダメだ！ 一刻の猶予も……何か、何か気分が沈むようなことを考えろ！ 無理やりにもテンションを下げるんだ！

そうだ、中学生の頃……僕が『無個性』の『クソナード』だった頃のことを……

『個性は諦めた方がいいね』

『出久……ごめんね、ごめんねえ……！』

『ああ、そういや……緑谷も雄英志望だったか？』

『プ——ツ!!』 ↑クラス全員の嘲笑

『つーわけでき、雄英受けんな、ナード君！』

——BOMB!!

『ああっ、僕のノート……！』

『来世では個性が宿ると信じて！ 学校の屋上からワンチャンダイブ！』

『君が危険を冒す必要は全くなかったんだ！』

……………うん、下がった。色々下がった。

あー、しかし、いやあ……改めて思い返してみると酷いな、僕の中
学時代……いや、ちよつと前にかつちゃんにも言われた通り、僕自身
がダメだった点もあるけど……周りの環境も中々……

特にかつちゃんのコレ、あの時も思ったけど、教育倫理的に割と洒
落になってな……

「……………」

——ぎゅっ、がしっ

え……？ ちよっつ、え!?

「う、麗日……さん!?! ちよっつと!?!」

何で!?! 何で余計にっていうか、さっきより強く抱き着いてくるの!?!

しかも、ただ僕の膝の上に乗っかってるだけだったさっきまでの状況でもまずいのに……今度は麗日さん、両腕だけじゃなく両足も、僕の腰のあたりに回してがっちりホールドしてきて……み、密着面積がさらに増えた上に、麗日さんの体のほぼ全面がががが……!

こ、こういうのって……『だいしゆきホールド』って言うんじゃないのか? 峰田君が前に言ってたような……あんまり思い出すのもアレな、卑猥な話と共に、だけど。

ていうかダメだ、思い出すな! 　　というか意識するな!

峰田君がそういう話の中で語ってきたことは、恐らくこの体制は18歳未満お断りのそういうジャンルで使われるもので、つまり本来はこの姿勢で男女がああああ消えろ煩惱!

『どうして!?!』という意思を込めて横に視線をやると、麗日さんも顔を赤くしていた。そんな恥ずかしそうにするならやらなければいいのに……!?!

しかもなぜだろう、なんとなくその表情は、面白くなさそうな、意地にな? むきに? なってるっていう感じのそれにも見えて……何でそんな顔して僕にしがみつくの!?!

スペースならさつきまでのそれでも十分……っていうか、なんか微妙に動くから感触が……う、麗日さん!?! 僕の邪推じゃなければ、その……こすりつけるように動いてない!?! どうして!?!

う、麗日さんの胸の、お腹の、腕の、足の感触が……彼女の体そのものの重みすら心地よく感じられて……い、一旦意識しだすとあらゆる刺激が突き刺さって……い、ふあさつと当たる髪の毛の感触が! しっとりした肌の、僅かな汗のにおい、息遣い……あああああああ! あ!

こんなっ、せつかく精神を無理やり落ち着けたのに……あ……だめ

だッ、もう……無理……

ごめんなさい、オールナイト……僕、除籍されるかもしれない……！

☆☆☆

Side. 麗日お茶子

『いつから』って聞かれたら、ちよつと困る。

恐らく、『いつの間にか』って答えるしかあらへんから。

きつかけはまあ、多分、入試の時に助けてくれたことだったと思う。

その後、入学してから色々話したり、交流するようになって……初
めての『戦闘訓練』でも一緒になって……授業や休み時間、お昼休み、
体育祭……色々なところで縁があつて、彼の……デク君の姿を見て来
た。

多分だけど、1人を除けば、私はデク君の一番近くにいる女の子で
ある自信がある。

多分、だからこそ、私は……彼のことを好きになった。

明確に『いつから』とかはない。気づいたら、好きになってた……
と思う。

最初は決して強くなかった、ただただ、心配になるくらいに危なっ
かしい子だったデク君が……恐らくは、人の何倍も努力して、下手な
コントロールじゃ使うことすら危険な、超パワーの『個性』を使いこ
なせるようになって。

体育祭で優勝し、職場体験では『ヒーロー殺し』すら現れた保須市
での死闘を乗り越え……いつしか、学年全体でもその名を知らない者
はいないくらいの有名人になった。

そうなるまでの彼をずっと見ていて……優しくて、真面目で、ひた
むきで、一生懸命で、けどちよつとドジで抜けてるところもあったり、
かわいらしい一面も変わらず持つてる……そして何より……誰より
もヒーローらしい心をもった彼のが、気付けば頭から離れなく
なつてた。

今となつては、授業とかで一緒のグループになったり、昼休みに一緒に学食でおしゃべりランチするような時に、どうしようもなく幸せを感じている。

このままずっと一緒にいたいな、なんて思うことすらある。

けど、そのたびに思い出してしまう。

おそらくはクラスでただ1人、私よりもデク君に近い女の子のことを。

だいぶ後になってから知ったことだけど、デク君は永久ちゃんとは、ずっと前……入学直後くらいから、一緒に訓練室を借りて『個性』の訓練をしてたらしい。2人とも同じ増強系で似てるからって、互いに得るものがあるだろうからって、早くから協力関係にあったんだって。

けど、それが単なる協力関係ではなさそうだってことくらいは……わかる。わかってしまう。

2人が話す時に見せる、お互いに対しての距離の近さや、安心したような、楽しそうな表情。

偏見かもしれないけど、ただの男女の友達ってだけじゃ、ここまでにはならない……と思う。

それはつまり……デク君と永久ちゃんが、単なる友達以上の関係なんじゃないか、って思うには……十分な懸念材料で。

体育祭の時なんか……恐らくは私以外気づいてなかっただろうけど、ほんの一時、デク君が永久ちゃんの手を握ってた一幕もあった。

ちようどそう、常闇さんと永久ちゃんの試合が終わった後だっと思う。中々にアレな内容だったか……心配したのかな。

……敵に対してや、授業の上でならともかく、基本的に今でもちよつとヘタレなところがあるデク君が、あんなふうにするっていうだけで……単なる友達では絶対じゃないんだってことは、嫌でもその瞬間わかってしまった。

……考えるだけで胸が苦しくなった。

もし本当にそうなら……デク君と永久ちゃんが付き合っているなら……私にはどうしようもない。

私が入る隙間がもう残されていないなら、私には、この始まったもない恋を……諦めることしかできない。

そんなことはわかってる。

それでも……どうしても、あきらめたくなくて。

デク君に、どこかに行ってほしくなくて……私の手を取ってほしくて。

それが限りなく不可能なことだとわかってても……私は……！

(いや、だからって私は今何しとんのやろ……)

うん、そろそろ現実逃避はやめて戻ってこよう。デク君もテンパってるやろうし。

『ヒーロー基礎学』の授業で『かくれんぼ』している最中、床下収納にデク君と一緒に隠れて、密着して……

最初こそ『何この状況!』って思ったけど、その……下世話な話、ぶつちやけすぎく嬉しかったから、内心嬉々として密着してた。こんな大胆なことしてるってことが、永久ちゃんよりもデク君の近くにいられているようで……いや、アホなものの考え方だっけわかつとるけども。

そんな時に、デク君の上に座って密着してた太ももの部分に、なんかこう……硬いものが徐々に押し付けられる感触がありました。

これってひよっとして!? とは思ったものの……その、不思議と嫌な気分じゃなかった。

お、オンナの性(さが、と読みます)、あるいは本能って奴やろか。デク君が私で反応してくれたってことが嬉しいというかね? その、全然不快な感じじゃなくて、いや、だからってさすがに『ぼっちこい!』とまではならへんねんけど、というか授業中にそんなんアレやし……

しかしその直後、おそらくはデク君が鋼の精神力で(すごい必死そうな表情しとったし)それを抑えて……けどその瞬間、私は何だか、面白くないと思ってしまうた。

なんか昔……小学校の頃、私の友達の女の子が持ってきて学校で見せてもらった少女漫画のワンシーンを思い出していた。主人公の女の子が、男の子に『もう俺我慢できないんだよ!』って言い寄られるシーン、さ、最近の少女漫画って過激なシーン多いんです。

その場面が思い出されて、今の状況と被さって……こう……

(へー、そうなんや。我慢できる範囲なんや、私)

なんかちよつと面白くないな、と思って……気が付いたら私は、パツパツスーツに包まれた体をぎゅつと密着させてデク君に抱き着いて、むしろなんかこすりつけるように動いて……

そして、再びその感触が太もものあたりに押し付けられたのを感じて『よし、やった』とかアホなことを思ったところで我に返った。

(あ、あかんどないしよ……ななななんか勢いで痴女みたいなことやってもうた……)

ほ、ホントにどないしよコレ!? で、デク君にこんな、わざと、は、恥ずかしいこと……不自然にも程があることやし、絶対バレとるよね!? 下手したら……呆れられてる!? 軽蔑されてる!? い、いやらしい女だっと思われてたらどないすれば!?

は、離れなきやせめて……なのに、か、体が言うこと聞かへん!? どうして!? あ、アレか!? 体は正直やちゆうお決まりの……

っていうかデク君の体、あつたかくて、い、意外と柔らかい……筋肉とかすつごいついとるのに、触つてみるとこんな風なんや……男の人って汗臭いって聞くけど、そんなことないっていうか、むしろ悪い感じじゃないっていうか……いやこんな時にまで私は何考えとるん!?

こ、コレホントになんとかしないと……わ、わたしデク君に嫌われ……が、学校でも問題に……せつかく英雄に行かせてくれた父ちゃん母ちゃんに顔向けが……! く、口止めせんと……どうにかデク君にこのこと黙つといてもらわんと!

どうすればいいんやろ? どうしたら黙つといてもらえるかな!?

ここは、定番のお金? いや無理や、デク君真面目やし、不正とかそういうの嫌いそうやし……そもそもそんな余裕はあらへん。

そ、そうなることやっぱり体で……それならむしろ……いやだからそういう思考が祟ってこういう状況になつとるんやっちゅーねんえーかげんにせーよ私イ！

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

何かさつきから麗日さん小刻みに震えてきてるっぽいんだけど……息も荒くなつてきてるみたいだし、ちらつと見たら……泣きそうになつてる!?

そ、そんなに嫌だったの!? そこまでされると傷つく……いやよく考えたら当然じゃん、こんな性犯罪の被害者も同然の状況で……まずい、まずいよ……本格的にコレ僕この先雄英にいらなくなるパターンじゃ……

どうしようホントに……土下座じゃ足りないよね絶対……さつきから嫌な汗が止まらない、嗚咽がこみ上げてきそうだ……!

誰か、誰か助けて……いややっぱ誰も来ないで、この状況見られる方がまずいし。

あとこんな状況でさらに注文着けるなんてアレだけど、麗日さんでできれば震えるのをやめてほしいっていうか……気のせいじゃなければさつきからさらに密着してきてない? 女の子特有のいい匂いが鼻に届いてさらに精神の余裕が削れていくっ……。

し、しずまれ煩惱……お願いだ、僕にこれ以上恥をかかせないで……いやもう僕はどうなつてもいい、せつかく雄英でできた大切な友達なんだ、これ以上傷つけさせないでくれ……!

☆☆☆

S i d e . 麗日お茶子

なんかさつきからデク君震えとる上に泣きそうになつてない!?

そ、そんなに嫌なんやろか、私とこうしてるの……いや、よく考え

てみたら、男だからって女の子の体押し付けて喜んでもらえるなんて、そんな偏見やん。男女差別やん。

女の子が電車の中で痴漢にあつて泣きそうなくらい怖い思いしたって話はよく聞くし、そういう男に対して世の中の女の子はすべからく冷たい目を向けるはず。同時に、被害にあつた女の子に対しては心配していたわつてあげるはず。

それが、男女逆転してそういうことが起こらないってどうして言える？

今の状況は、私に加害者でデク君が被害者……逃げ場のない空間で淫猥な行為に及んだ私を、世間の冷たい目が責め立てて、被害にあつたデク君が優しく慰められるという図式……あ、あかん、私終わったコレ……

そんな状況だつてのにデク君いい匂いやつて思つてしまう、怯えて震えるデク君ちよつとかわいいなんて思つてしまう私はもうアレやな、うん、死んだほうがええんや……うう、泣きそう……いつそ殺して……

……そして、その時は訪れた。

恐らく、互いに頭ン中真っ白になつてた私とデク君の頭の上で、不意にガタゴト、つて音がしたかと思うと、天板が取り去られて……

「おっ！ 緑谷見つけ………お邪魔しました」

「待つてえ！」

その後、天板をどけて私達を見つけ出した永久ちゃん（鬼）への言い訳と、報告はやめてくれるようにつていう説得をして（なぜかデク君まで一緒になつて）、

さらにデク君と私がお互いにただひたすら謝り続ける土下座合戦（謝るのに必死で話が頭に入つて来んかった）を経て、その場はどうにか収まった。

最終的に第三者である永久ちゃんが上手いことまとめてくれたけ

ど、どんな感じで上手く収まったのか……テンパりすぎて正直覚えてへん。

ちよつと前まで悔しく思っていた……そして、デク君と一番親しいであろう永久ちゃんにそんな場面を見られて、どう思われているのか……つていう部分にすら思い至れなかった。

けどとりあえず、危惧していた事態にはならなかったし、デク君にも嫌われてない。

それだけで安心して私は、あとは何も考えずにその日を終えてしまった。

それで変に気を強くしたというか、調子に乗ったというか……今思えば、その翌日、よく私はあんなふうに彼を誘えたものだ。

「で、デク君！　こ、今度の日曜日もしよかったら……」

第72話 TS少女と最後の性癖

「麗日に『ワーキングホリデー』に誘われた？」

「う、うん……『ガンヘッド』のところなんだって。その……それで、どうしたらいいかと」

夕方のトレーニングの前に、緑谷が私と、ターニヤ、ラバー、ビスケさんの講師陣を前にして相談してきたのは、そんな話だった。

聞けば、今日の昼休みに麗日に『どうかな？』って誘われたらしい。ちやうど『もう1人くらい誘って来てもいいよ？』って言われてたのに加えて、緑谷は格闘主体の接近戦型だから、ガンヘッドのところまで学べることも多いんじゃないか、って。

それ以外の理由がないでもないとは思うが……まあ、まずいいとしてしよう。

「でも、ガンヘッド事務所って、こないだ聞いた話だと、『インターン』や『ワーキングホリデー』はやってないんじゃないかなかったっけ？ それで麗日落ち込んでたじゃん、当てが外れたって」

「なんか、やっぱり方針転換して、無理のない範囲でやることに決めたんだってさ。ほら、こないだの休みに、砂藤君と口田君がクラスで初めて『ワーキングホリデー』に行つたでしょ？ その時の評判が学内と業界の両方に広まって、『意外といいかも』って見直す動きが出てきてるみたい」

それは私も知ってる。

砂藤と口田。この2人はこないだ、他のクラスメイト達に先んじて『ワーキングホリデー』を体験した。それぞれ、スイーツヒーローの経営する事務所兼洋菓子店と、酪農ヒーローの経営する牧場で勉強してきたはずだ。

2人共、そこでの仕事を手伝いながらヒーローとして学べることを学ぶ形で、2日間ほどお世話になって戻ってきたはず。期間が短いから『職場体験』ほど濃密な時間ではなかったようだけど、それでも得るものの多かった時間だったって2人とも言ってた。

それに加えて、監督してくれたヒーロー達からは、『忙しい時に仕事を手伝ってくれて助かった』っていうお礼も言ってもらえたらいい。

口田はそれに加えて、お土産に生チョコ（自家製）貰って来た。

クラスみんなにおすそ分けしてくれたので、みんなで食べた。美味しかった。

2人は仕事を手伝う報酬として、色々教えてもらったり、稽古をつけてもらったような感じだったらいい。そしてその仕事ぶりは、きちんと満足してもらえらるものだったと。

この結果を受けて、クラス及び業界では、この『ワーキングホリデー』を、要するに……学生バイトとサイドキックを足して二で割ったみたいなものだと受け取れる、という感じに落ち着いたようだ。『職場体験』よりも短期で、面倒を見る必要はあるが、腕は確かな子を気軽に？雇える。

あるいはもちろん、個人的に『教え導きたい』と思う子を雇ってもいい。『職場体験』と同様に。雇用条件も相談して決められるし。

そういう感じで、『インターン』ほど肩ひじ張った扱いでなくてもよさそうだという評判になり、プロヒーロー側の『ワーキングホリデー』受け入れのハードルが下がったのだ。

ゆえに、今まではNGだった事務所の中にもOKに変更するところが出てきていた。なるほど、ガンヘッド事務所もそうだったのか。

聞けば、ちょうど今度の休み、カルチャーとか体験学習的な格闘講座の仕事（副業）があるそうで、そのイベントの手伝いをしてもらう人手として麗日に受け入れOKが出たという。

お給料は出ないけど、交通費、食費その他の経費は全て負担される。それに加えて、麗日に報酬として提示されたのは、『職場体験』の時と同様の、近接格闘の個人指導だそうだ。

で、もう1人くらい連れてきてもいいってことで、麗日は緑谷に声をかけた。

さっきも言ってたけど、緑谷の戦闘スタイルを考えれば、いい経験になるだろうしな……例えたった1日でも。

けどそれは、普通の雄英生と同様に過ごしていれば、っていう前提

であって……今緑谷は、超ハイレベルのトレーニングを毎日行つて体を鍛える『デウス・ロ・ウルト』を実施している最中だ。勝手にそんなのを受ければ、メニニューが狂うことも考えられる。

ゆえに私達にこの場で相談した、つてことだろう。

そして話を聞きながら、緑谷の目は……なんだか申し訳なさそうな光を帯びながら、私にちらちらと向けられていたようだったんだが……果たしてアレは何だったのかね……？

そしてその話を聞いて、ターニヤ達講師陣、そして私がだした結論はというと……

☆☆☆

数日後、日曜日。

「雄英高校から来ました、緑谷出久と申します。ヒーローネームは『デク』です。今日1日、どうぞよろしくお願いします！」

「うん、よろしくねデク君。ウラビティちゃんから話はよく聞いているよ。すごく仲のいい友達なんだってね？」

「が、ガンヘッドさんっ！……え、えと、私もあらためてよろしくお願ひします！」

「はい、よろしくね。それじゃ、早速打ち合わせに入るからついてきて」

緑谷と麗日は、それぞれのコスチュームを着込んで、早朝からガンヘッドの事務所を訪れていた。今日のイベントに、『ワーキングホリデー』として参加して手伝うと共に、その報酬という形で稽古をつけてもらうために。

聞いていた通り、事務所内に様々な格闘技用の道場が設置されており、恐らくここで基礎トレなどを行うのだろう、と緑谷には予測できた。

「今回の講座では、基本的に指導役は僕と僕の事務所のサイドキックがやるからね。2人にやってもらうのは、雑務とかの手伝いや、お客さんの案内整理なんか主になるから、今日1日のスケジュールさえ

しっかり頭に入れておいてくれれば大丈夫だよ。昼食休憩は皆でまとまって取るからね。それと、2人へのトレーニングは、これから実力や身体能力の把握もかねて軽く道場で見せてもらうのと、講座が終わってからの2回。どっちもここの道場でやるからね。その後、夕食を食べながらも1日の講評とかを行って解散、っていう形になるから、よろしくね」

「はい！」

ガンヘッドのサイドキックらしき男性からタイムテーブルをもらい、2人は元気に返事をした。

そして、やっぱり麗日は今日も考えていた。

(やっぱり、喋り方かわいい)

なお、緑谷はガンヘッドのコスチュームや事務所の風景に夢中で(必死で表情には現さないようにして、だが)特に考えなかった。

ヒーローマニアの緑谷ゆえ、知識として既に事前に知っていたというのもある。

……そして同時に、ふとこんなことも考えていた。

(……栄陽院さん……僕が麗日さんとここに来るの、反対しなかったな……)

少し、寂しげな顔をして。

☆☆☆

「よかったのか、永久？」

「? 何が、ターニャ？」

「緑谷出久のことだ。今日、あの麗日とかいう女子とデートなんだろう？」

「デートじゃなくて『ワーキングホリデー』でしょうか」

「いや、デートだと思いますけどね。学校で何度か見ましたけど、あの子、確実に緑谷君のこと好きですよ？」

本日、日曜日。

訓練の合間の休憩中のターニャと私の会話に、横からラバーが割り

込んできて言った。

今日は朝から緑谷が不在なので、私一人でトレーニングしている。

まあ、寂しくない、物足りなさが無いと言えば嘘になるけど……

「ターニャ達だって許可出してたじゃん。日程に余裕はあるから、多少なら問題ないって」

こないだ緑谷が『行つていいですか』って聞いた時に、そう答えていたのはターニャだ。ビスケとラバーともきちんと話し合つて決めた。

その後私にも確認取つてきたから、OK出して……その時、なぜか緑谷が少し驚いたような顔をしてたっけな。

「だから、そういう意味で言っているのではなくてな……」

「いいんですか？　緑谷君、他の女の子と一緒に出かけさせたりなんかして」

と、ラバーも一緒になって呆れたような声音と共に言ってくる。

ああ、なるほど……2人が気にしてたのはそこか。

「お前相手に婉曲表現でものを言うといつまでたつても話が前に進まんからはつきり言うが……惚れた男を他の女と遊びに出してよかつたのか、という話だ。ラバーの話通りなら、その麗日という少女は緑谷に気があるのだろうか？　横から搔つ攫われるようなことになるかもしれないぞ」

「ああ、うん、確かにそれはやだな……でも……」
「でもっ……」

「……緑谷がもし、本気で、心からそう望むなら……私は身を引くよ、多分」

私がぼそつと言つたその言葉を聞いて、2人は……

「やっぱりか」

ため息交じりにそう言った。

「価値観は母親と同じということか……難儀なものだな」

「本当ですね……自分から男に食い物にされに行く女の子つてところで共通してます。……叶恵もそうやって、自分が子供まで生んだ旦那のことを諦めて見送つたんでしたっけ」

母さんの盟友であり、当然ながら私が生まれる前からの付き合いであるラバーは、嫌な過去を思い出しているような表情でつぶやいていた。

食い物にされに行く、とか失礼な……私はただ、そう、多分母さんもそうだったんだろうけど……自分の全部を捧げられる相手がそう望むなら、って話をしてるだけだったのに。

……まあ、それが世間一般から見ると異端な考え方だっていうのはわかっているよ。

もちろん私だって……緑谷のことは好きだ。大好きだ。

ご主人様としても私をもらってほしいし……叶うなら女としても彼を支えたいと思う。彼の傍で。選んでくれるなら私は、誰より献身的に彼を支える覚悟も自信もある。私の持てる全ての力と知識を使って、だ。

進んで他人とくっついてもらいたい、私を置いて行って欲しいなんて思わないし、麗日が私からそうして緑谷を攫っていつてしまうことを、怖くないとは言わない。どっちかっていえばそうしては欲しくないし、私から緑谷にアプローチだってする。貰ってくださいって。

それでももし、緑谷が心からそれを望んでしまったのなら……私は涙を呑む決断をするんだろう。なんというか……そんな気がする。

「……相変わらず損な性分だな、お前の家系は」

「かもね………っていうかさあ」

そこまで言ってる私は、はあ、とため息をつきながら、

「そういう話になると、警戒しなきゃいけないの多分麗日だけじゃないんだよね……私が知ってる限りでも何人か、緑谷のこと狙ってそんな女の子いるもん」

「あら、そうなんですか？」

「まあ、雄英体育祭という大舞台で活躍したのだ。ファンが増えるのに不思議もあるまい、そのほとんどにはわかだろがな……」

ターニャの予想通り、1学年………どころか他の学年にまで波及して、最近の緑谷はファンを急激に獲得していつているし、男子としての彼を意識している女子も少なからず存在する。

入学当初は『地味でよくわからない奴』っていう評価がほとんどだったが、今ではそのヒーローにふさわしい心と、1学年の頂点に立った（爆豪と同着でだが）その実力を高く評価して狙っている女の子も多いのだ。

その中でも特に彼のことを魅力的に思っているのは……今現在私
が知る限りでは、私と麗日と、もう1人……。恐らく、USJで彼に
命を救われたという、あの子だ。

まあ、これといつて目立ったアプローチの類はないから、私の目が
節穴だって可能性もあるが。

果たして緑谷は、誰を選んでくれるんだろう。

私、麗日、残るもう1人……。あるいは、全く別な誰か……。はあんま
りないと思うけど……。はあ。

「……どーせなら全員貰ってくれないかなあ……」

「……久々に出たな、貴様のそのとんでもない性癖」

「ええ。かつてあなたがまだ10歳の頃に初めて口にして、私や叶恵
すらドン引きさせたそれ」

と、私が呟くように言った一言を聞いて、ターニヤとラバーがジト
目になった。

うん、まあ、普通じゃないことを言ってるのはわかる……。けど、実
際そう思うので仕方ない。何というかこう……。頭の悪いラブコメか、
18禁ゲームの中でしかないような展開だってことも、十分わかって
て……。それでもあえてというか、どうしても思ってしまうことだ。

かつて学校の女友達とかにぼろっと言った時は、まー色んな言われ
方、驚かれ方したな。

『野生動物の価値観』

『雌ライオン、あるいは雌ゴリラ』

『サバンナかジャングルのご出身ですか?』

『エロゲーのやりすぎ』

『男にとって都合が良すぎる思想』

『生まれてくる時代と身分絶対間違えてる』

ホントにうん、散々言われたっけなあ……そしてその後『正気に戻れ』って心配されるか、呆れるかされるまでがワンセット。

まあ、気持ちわかるけどね……友達がこんなこと言いだしたら、そりゃ驚くだろう。

恐らく、前世：男であるがゆえに生じた、私の性癖のゆがみ、その最たる部分。

ただ1つ……まだ私が緑谷にカミングアウトできていない、最後の性癖。

「いいじゃん、ハーレム。作れそうなら作っちゃえば」

ハーレム肯定派。むしろ願望。

前に何かの本で読んだフレーズだが……『優秀なオスは、群れを率いるものだ』。

納得してついていけるなら、1人の男が何人でも女を引き受けて、侍らせてしまえばいい。

自分の惚れた男が自分以外の女を選ぶのは、流石に私でも悲しい。それが例え、友達である麗日であっても。

けど、自分も自分以外も、どっちも、あるいは全員選ぶ分には問題ない。

誰かが選ばれて、誰かが選ばれない、そんな展開が好きじゃないのだ。なんなら、私自身が選ばれるかどうかに関わらず。

前世でよく読んでたラブコメでもさあ……最終回が近づくにつれ、徐々に主人公（男）が周りにいる女の子に『ごめん』って別れを告げていく展開が見てて辛くて……

だったらみんな一緒に幸せになればいいじゃん、って何度も思った。そして今も思っている。

私は緑谷が好きだし、麗日も好きだ。皆で一緒に幸せになることに、何のためらいもない。

たとえばそれが、法的にも倫理的にも問題アリアリのぶつとんだ選択

であろうと、私は緑谷が『誰か1人なんて選べないから全員と幸せになりたい』とさえ言うってくれば、全力をもってハーレムルート構築に取り掛かるだろう。そして私もそこに入る。

自分一人を選んでくれなくていいのかって？ あえて言おう、いい。

独占欲はないのかって？ なくはないけど、私が信頼できる女なら、いい。

自分以外にも手を出す男なんて不誠実だとは思わないのかって？

まあ、相手にもよるよ。誰彼構わずって感じならさすがにアレだけど、相思相愛で私とも仲が良ければ、うん、全く問題ない。

むしろ誇ってやるとも。私の男は、これだけ多くのいい女に好かれてるんだぞ、ってな。

だからさ、麗日にその気さえあれば、ぜひにって言いたいんだが……

(さすがにドン引かれるよなあ……)

麗日もだけど、多分緑谷も流石にコレは……真面目な奴だし、『えー……』って反応されそうで、ただこれだけは言いだせてないんだよなあ……ああ、カミングアウト、いつになるやら……

「というか、その性癖とか価値観そのものを直そうとは思わんのか？」
「思わない」

第73話 TS少女と今後のカリキュラム

S i d e . 麗日お茶子

正直な話、デク君を誘った時は……半ば勢いだっただと思う。

あの『かくれんぼ』の時、アレも勢いでだったけど、嫌われてドン引かれてもおかしくないレベルのやらかしをしまつて、色々と覚悟したけど……それでもデク君は、私を嫌いになることもなければ、責めることすらなく。

むしろ、自分が悪いみたいなのに、いつものあたふた具合でペコペコ謝ってきたのには、悪いけどちよつと笑いそうになってしまった。

そうして、今まで通りデク君と仲良くできる、と安堵したと同時に……欲が出た。

もつと仲良くなりたい。もつとお近づきになりたい。

今はまだ友達で、それ以上のことをしようとする、途端にどつちもあたふたしてしまうくらいの距離でしかないけど……できることなら、もつとその先へ進みたい。

……それがもしかしたら、自分の友達を押しつけることにつながるかもしれない。

そんな覚悟と共に私は、ある種絶好のタイミングで届いていた、ガンヘッドさんからの『ワーキングホリデー』の知らせを利用して、デク君をそこに誘った。

そして今こうして、2人一緒にお世話になっている。

今、デク君の隣で私が一緒にいられるっていう、この時間が幸福で……ううん、ここで満足したらあかん。せつかくの貴重な時間、この機会を生かさんでどないする！

もちろん、ガンヘッドさんから任された仕事もきつちりこなしつつ、この一緒の時間を大切にして……うん、もつと仲良くなれるように……！

そして、『初心者講座』の手伝いの仕事は、午前・午後の部ともに無事に終わって……夕方になってからやけど、ガンヘッドさんは私とデ

ク君の稽古を見てくれるようになった。

私の場合は、学校の戦闘訓練やら何やらでさらに磨きをかけた、他ならぬガンヘッドさん直伝の『G・M・A』の進捗と、動きその他の修正。そして、これから先の自主トレの方向性について。

デク君の場合は、戦闘全般における体の使い方やら、こう直したほうがいいっていうアドアイズとか全般についてなんやけど……

「んー……」

模擬戦の中でデク君の動きを見ていたガンヘッドさんは、一旦戦いを中断して、何やら少し考えこむような姿勢になった。どないしたんやろ？

デク君も少し気になってる様子、というか、不安そうになってるけど……

「デク君の場合は……あんまり僕がこう、って教えられることはないかもしれないね」

「え!?! ど、どういうこと……ですか?」

デク君もびっくりしてそう聞き返してけど、私もびっくりした。教えられることが……ない!?

どういうこと? そ、それってまさか、デク君もうそれだけ強いからとか……とか一瞬アレなことを思ってしまったけど、どうやらそういう意味ではなかったようで、

「デク君の場合、ちよっと体のつくり方とか鍛え方が独特なんだよね。加えて、戦闘スタイルも……割と既に定まってる感じがしてるし」

「? と、言いますと?」

「デク君ってさ、率直に言えば、オールマイトとかと同じように……強力無比なフィジカルにものを言わせた接近戦がメインの戦闘手段なんだよね。実戦で使う技も、そういうコンセプトで……というか、モロにオールマイトリスペクトの構成になってるし。『アトロイトスマッシュ』とか」

成程、たしかに。デク君、体育祭でもそうやったけど、オールマイトの技マネしとるね。

「そういう人自体は少なくないというか、どこにでもいるんだ。高校・

大学を問わず、ヒーロー科に通うヒーロー志望の生徒さんの中にも、そういう人は少なくないし……今日だって、体験教室に来てくれたちびっ子の中にも、そういう感じでやりたがってる子もいたし。けどはつきり言つて、その多くはまあ……言い方が悪いけど、形だけなんだよね。結局は喧嘩殺法というか、身体能力……多くは増強系の『個性』に振り回されてる人が多いというか、生かすきれてないというか」

「お世辞でも何でもなく言うけど、デク君の場合は、体の動かし方も、使う技も、体のつくり……筋肉のつき方とかそういう部分すらも、徹底的にそれに合わせて自分を構築している。それも……体育祭の時よりもはるかにそのレベルを増した状態で。完成度が段違いだ」

「は、はあ……あ、ありがとうございます」

「よほど努力をしてきたんだろうねえ……結論から言つて、デク君には、小手先だけの技や、中途半端に武術の動きを取り入れて、下手に今の戦い方、動き方を崩すようなことは必要なさそうだし、むしろ逆効果かな、つて思つたんだ。応用ができないわけじゃないけど」

「すごいなあ、デク君……さつきから褒められっぱなしや。」

褒められ過ぎてデク君の方がもうなんか恐縮しとる。汗すごい。

「それじゃあ、僕はどうすれば……武術の動きはもう、取り入れない方がいいんじゃないか？」

「いや、全くそうつてわけじゃないよ。今の戦い方を崩してまでそうする必要がないつていうだけで……今の戦いに生かせそうな、知識や経験として覚えるのは全然ありだと思う。そうだねえ……ウラビティちゃんに近い教え方になるかな、結果的には」

「えっ、私？」

思わず聞き返してしまった。

それに、『うん、そうだね』と頷いてくれるガンヘッドさん。

「職場体験の時、ウラビティちゃんには接近戦の基礎や、暴徒相手の制圧術なんかを教えたよね？ 後は君は、手で触れることが『個性』の発動条件だから、それと相性のいい動き方とかも」

「はい、そうでした」

近接格闘の基本的な動きや、相手の腕を絡めとって引き倒したりする技術なんかを教わった。ナイフとかの武器を持って襲ってくる相手に対して、素手で戦う方法なんかも。

どれも、初心者の私にもすぐわかりやすくて、1週間で『最低限実戦でも使える』レベルにまであつたという間に鍛え上げてもらったわけ。

そ、そのせいで、一時期ちよつと変な感じになっちゃったりもしたけど……呼吸音が『コオオオ……』って感じになって、梅雨ちゃんとかに『何があつたの』って心配されたり……

「けど本来のウラビティちゃんの方向性は、災害時とかの救助をメインにしたヒーローだ。だから職場体験では、本格的な戦い方の他に、その動きとか技術を応用して、これから作り上げていくであろう自分個人の戦い方に生かすノウハウも教えたよね。恐らく、僕が教えた動きそのままがこの先も使われることはない。君に合わせた動きに、訓練や戦いの中で磨き上げられていくはずだって」

「それを……僕にも?」

「うん。君の戦い方そのものを僕が教える、磨き上げるのは残念だけど難しい。けど、その栄養になりそうな色々な技術やノウハウを教えることはできそうだからね。簡単に言えば、色々な武術の動き、技……そういったものの中から、デク君に有用そうなものを選んで、『広く浅く』教えるよ。それを君の戦い方に合わせて、君が自分で応用していつてみるんだ。恐らくそれが一番、最短で君の力になる。それでどうかな?」

「はい! よろしくお願いします!」

「うん、いい返事! じゃあ時間もそんなにないから、さっそく始めようか。このやり方ならウラビティちゃんとも同時進行で一緒にやれるね。ウラビティちゃんもそれでいい?」

「はいっ! 頑張ろうねデク君!」

「うん、よろしく麗日さん!」

方向性が定まったことで、お互いにガッツポーズで励まし合う私とデク君。

それをガンヘッドさんは、なんだか微笑ましいものを見るような目で見ていた。

いや、マスクのせいで目そのものは見えないやけど……そんな気がした。

こうしてこの日、夜、少し暗くなるまで稽古をつけてもらって……それが終わった後、夕飯をご馳走になった。

最近事務所の近くにできたらしい、評判のイタリアンのお店で。オシャレや。ご馳走様です。

その席で最後の講評とか、今後のアドバイスもしてもらって、食べ終わってからその場で解散。

学校に提出する書類も全部記入して渡してもらって、駅までサイドキックの人に送ってもらって……私達の『ワーキングホリデー』は、終わりを告げた。

訓練としてももちろん身になったし、その……デク君とも一日一緒に過ごせた、すごく有意義な一日やったなー、って思った。

そして何より、帰りの電車……疲れてしまったらしいデク君が、その、隣で寝てもうて……

その……こてん、って倒れ込んで……リクライニングシート倒してなかったから、横に、私の方に体が……頭が……

びっくりしたけど、ぶっちゃけ嬉しかったので、そのまま駅に着くまで堪能させてもらいました。

いい一日やった……うん、誘ってよかった。明日からもまた頑張れそうや。

☆☆☆

緑谷と麗日の『ワーキングホリデー』から2日後。

時刻は、まだ昼過ぎ。緑谷も永久も、普通にまだ学校にいる時間。

緑谷から提出された『ワーキングホリデー』の報告書類を見ていたターニャとビスケ、それにラバーは、今後の教育プランを練るために

打ち合わせを行っていた。

手元の資料は、その報告書ともう一つ……昨日一日と今朝の朝練から取れたデータである。

淹れたてのコーヒーを口にして、その豊かな風味を楽しみつつ、ターニヤは口を開いた。

「思った通りだな。緑谷出久……奴を『ワーキングホリデー』で外に出したのは正解だった」

「より正確に言えば、『ガンヘッド』のところに行かせたのが正解だった、かしらね？」

ビスケがそう付け加え、ターニヤは否定しない。

他の2人同様、無言のまま、手元の資料を……『ワーキングホリデー』前後の緑谷の動きや戦闘能力を記載したそれを、見比べるようにしている。

そこに記されている内容は、専門用語やら何やらが多分に含まれて入るが……要約すれば、『ワーキングホリデー』の前後で大幅に緑谷が成長しているというものだ。

もちろん、たった1日で目を見張るような劇的な改善や、戦闘能力の向上があったわけではないが……『たった1日』の間に起こったことだと考えれば、劇的と言ってもいいかもしれない差でもある。それほどまでに、彼の変化、進歩は講師チームの目を引いた。

恐らく、普通のヒーロー志望の学生が同じ成長を遂げるとすれば、1週間や2週間ではとても足りないだろう。雄英生の才覚をもってしても同じことだ。

「普段の訓練の段階でそうかもしれないとは思っていたが、今回のコレで確信が持てた。緑谷出久は……今の自分にはない経験を積ませた時の成長幅が、異常に大きい」

「あの子にそれほどまでの才能があったとは……ちよつと予想外だわ。私の目も曇ったかしらね」

はあ、とため息をつくビスケ。彼女もまた、教育に関しては一家言ある身の上であり、今までそのスパルタ指導で多くの優秀なヒーローを国内外で育ててきた。

その中でも特に優秀だった2人がいた。

1人は、遺跡探索ヒーローとして世界中を旅してまわっている父親に会い、追いつくため。

もう1人は、『殺し屋一族』と呼ばれる代々ヴィランの家に生まれながら、その呪縛を断ち切つて飛び出し、ヒーローとして自由に生きるため。それぞれヒーローを志した。

数々の試練を与えられながらも、2人共立派にヒーローとして大成し、今は自らの国で辣腕を振るっているはずだ。何なら時々、エアメールなどで連絡も取っている。

無類の宝石好きでもあるビスケが、それぞれ『ダイヤモンドとサファイアのような輝きを持った最高の原石』と評するほどに、稀有な才能と力強い向上心に溢れていた2人。

その2人を思い出してみて、そこに緑谷出久という少年を見比べてみると……

精神性は素晴らしいものだと思う。ただ、こういまひとつ、彼女の第六感にビビツとくるような才能、ないし何かを感じないのも事実だったし、何なら今もそう感じている。

だが事実、緑谷という少年は、磨けば磨くほどにその輝きを増していく。

まるで、原石そのものが、元々持っていた限界を超えて成長しているような実感。あるはずのなかった輝きが、後から後から溢れてくる。

こんな生徒は初めてだと、ビスケも教えながら困惑していたものだ。

「底が見えないほど深く、しかし澄んだ輝きを放つエメラルド……いや、全容を見せないほどに色鮮やかな、万色の輝きを秘めたオパール……」

「相変わらずわかりやすいのかあいまいなのかわからん例えだな」

「……私の実感としては、緑谷君はまるで、与えられた経験をきっかけに、戦い方・動き方を思い出しているかのような印象を受けますね」

と、今度はラバーが感じたことを述べ、それに残る2人は耳を傾け

る。

「彼は確かに頭もよく、1を聞いて5、時には10を理解するようなこともやってのけます。ですがそれにしても彼の成長は速すぎる。習得までのプロセスも、天才型だとしても飛ばしすぎです……まるで、過去に経験して体に染みついていて動きや戦い方を、今の経験をトリガーにして思い出している……そんな感じがします」

「子供の頃ピアノを習っていた者が、しばらくそれをやめていても、少し練習すればまた引けるようになる……というようなものか？」

「いやいやいや……それこそ無茶でしょ？　彼はこちらで与えた試練、そのほぼ全てに対してそういう反応見せてるのよ？　それを『経験済みだから習得が早い』って……人生何周したらそんなだけの経験を詰め込めるっての。彼が天才で、私達の目が節穴だったって方がまだ信憑性があるわ」

「……だが、それに近い状態なのも事実だ。経験しているはないにしても……そうか、そう考えれば、これから取るべき方策も違ってくるな……」

ターニヤの脳裏には、緑谷出久という少年の可能性のイメージの形として、無数の引き出しがついた巨大な棚、あるいは金庫が思い描かれていた。

膨大な数ある引き出しの大半には鍵がかかっており、開けることはできない。

しかし、ガンヘッドのところを得た、様々な武術に関する『広く浅い』経験。

それらがいくつつかのカギとなり、あちこちの引き出しの鍵穴に入り、開錠。封印を解き……その中から、死蔵されていた『才能』あるいは『能力』という宝物が解き放たれる。

未だ無数にある引き出し……それらが全て『死蔵されている才能・能力』だとすれば。

（奴に必要なのは、『積み重ね』による地道な成長と、『本能覚醒』による成長加速……そう思っていた。もちろんそれは確かだ。だがしかし、この予想が正しければ……奴の中に眠っている才能や可能性を叩

き起こすことで、乗算的に力を高められるかもしれない)

奇しくもターニャ達は、今まで幾人もの先人が『経験』することによって練り上げてきた力の結晶という『ワン・フォー・オール』の根幹たる部分に到達しかけていた。

しかしまさか、『成長し継承される個性』などというものの存在を知る、あるいは思い至ることができはるはずもなく、やはり正体不明の『底知れない何か』という結論しか出せないまま、ターニャは思考を進めていく。

(もともと緑谷出久の成長速度、カリキュラムの成熟速度は、こちらの想定をはるかに超えており、カリキュラムは既に、夏休みまでに想定していた部分の7割近くを消化している。仮に期待通りの成果が出なかったとしても問題はないから『ワーキングホリデー』に行かせたが……時間、そして色々な意味で『余裕』があるなら有効活用すべきだ。その場合、さらに負荷をかけるよりも……)

それから少し考え……それがまとまった段階で、ターニャは口を開いた。

「……今後のカリキュラムを一部変更する。余裕がある分、もっと詰め込むとしよう」

「まあ、今のペースでやってたら、予定してたカリキュラム、『ワーキングホリデー』を含む実地でやるモノ以外は、7月になるかならないかくらいで全部終わっちゃう見込みだし、妥当なところね。でもどうやって？ 夏休み以降に予定してた分を前倒しにするの？」

「いや、予定通り夏休み前までは『スタートダッシュ』だ。ただ、緑谷出久には、鍛えられる土台の部分に未着手・未開発の部分が大きくある可能性が浮上してきた。ならば必要なのは、それらを叩き起こす作業だ。ガンヘッドがやったのと同じように……とにかく色々な経験を積ませる」

「なるほど……でもそれだと、本格的に……」

「永久ちゃんとは足並みが合わなくなってしまうですね。訓練そのものも、しばらくは別メニューになりますか」

「仕方あるまい、遅かれ早かれだ。もともと、永久の固有能力である

『無限エネルギー』を鍛えるのは、我々には無理だった……………いよいよ動いてもらわねばな。『アナライジユ』に」

第74話 TS少女とそれぞれの修行

月日は流れ……今現在、6月下旬。

「全く勉強してねー!」

上鳴、唐突に咆哮す。

あーうん、試験前の高校の教室ってどこもこんな感じなんだなー、としみじみ思う私。

さっき言った通り、今は6月下旬。

1学期最大の山場である『期末試験』がすぐそこまで近づいている。それを前にして、日々の実習やら予習復習やら何やらで、期末試験の勉強を進められていない現状を顧みて、『絶望した!』とでも言いたげな上鳴のセリフがさっきのアレである。

ちなみにその隣では、こちらは打って変わってお気楽な感じで芦戸が笑っているが……よく見るとあの笑みには、諦めとか諦観の感情が込められていることもわかる。

なるほど、つまり同じような状況か。

まあ確かに、毎日の授業もかなりハイレベルで、それについて行くだけでも大変な上、『ヒーロー基礎学』や『ヒーロー情報学』といった、ヒーロー科特有の科目もあったりするため、決して時間に余裕があるわけじゃない中で過ごしてきた私達だ。常に要領よく立ち回らなければ、まあ……こういう事態になったとしてもおかしくはない、のか。あんまり考えたくないけど。

そしてやつぱり、要領がいい奴と悪い奴、そしてもっと単純に、頭のいい奴悪い奴ってのはどうしても存在しており……それがどうしようもなく、残酷なまでにはつきりと表れてしまうのが、学校の定期試験という奴なのだ。

ちなみに上鳴と芦戸だが、ちょっと前の雑談の中で聞いた感じだと、2人はA組の中間テストの成績ワースト1、2だったはずなので……まあ、うん、今回の期末も不安なんだろうな。

ここまで彼ら、彼女らが必死になるのは、ひとえにこの試験の結果次第で、夏休みの目玉イベント『林間合宿』への参加の可否が決まるからだ。

話を聞くに、クラス全員でのお泊り、花火、肝試し、その他色々お楽しみイベント目白押しって感じで、皆楽しみにしてるんだが……期末試験で赤点を取った者はコレに行くことができないため、皆必死なのだ。夏休み、学校で補修地獄は嫌だよな……。

教室のあちこちで、悲喜こもごも、自信ある奴ない奴が語り合っている。

自信がない奴は勉強できる奴に教えてほしいと頼み込み、勉強会が企画されたりもしてるようだ。

色んな人から頼られて機嫌をよくしている八百万が『いいテストモー！』と先生役を引き受けている光景もあれば、爆豪が『んだと教え殺したるか!?!』と新しい単語を生み出したりもしてる。……あんなんで成績はいいんだよな、一応。

ちなみに私は……自慢じゃないが頭は悪くない。中間試験は、八百万に次いで2位だった。

流石に『創造』するものの分子構造を全て暗記するほどの規格外の頭脳には及ばなかったが、人生2度目ともなると、普段からきっちり予習復習しておくことの重要性は知っている。

それ以前に私……と、緑谷もだが、『デウス・ロ・ウルト』の一環で座学講義も受けてるので、正直、期末試験の筆記の方には不安はない。

座学の講師もやってくれてるターニャ曰く、そもそも『テスト勉強』なんてものをやってる時点で間違ってる、っていう話だ。

重要な試験の前に集中して、追い込みかけるような感じで勉強すること自体は否定しないが、そうでなくとも日々の予習復習を欠かさずに行い、それこそ抜き打ちでテストでも何でも、いつあってもいいように常にきちんとしておくと、実践は難しい話だ。

うん、よく言われるけど、実践は難しい話だ。

実践しての方が確実に楽ではあると知ってたから、この2度目の人生では私、そうしてるし……『デウス・ロ・ウルト』による座学講義

も、まさにそうなるように組まれてるんだけどね。

なので、筆記試験はあんまり心配してない。不安があるとすれば、もう1つの方……実技試験の方だな。

今日の昼休みに、緑谷が食堂でB組の拳藤達に聞いたらしいんだけど——その際、同じくB組の物間に不幸な出来事が起こったらしいが、興味ないのでそれは知らん——例年、期末試験の実技のお題は、入試や体育祭でやったようなロボ相手の模擬戦らしい。

……おっ、向こうで上鳴や芦戸もそれ聞いて『なーんだ楽勝じゃん』とか言ってるな。筆記はともかく、実技に対する懸念がなくなって安心したか。

「ま、その考え、甘いとしか言いようがないんだけどな……」

「え？ ど、どういうこと栄陽院さん？」

と、夕方、久々にジムで一緒になった緑谷は、私が言ったことに驚いた感じになっていた。

今しがた、雑談から期末試験、実技の話題になって……正直、今の私や緑谷であれば、入試の時のロボなんて100体いようが相手にならないから、楽勝だよなって話だったんだけど、そこに私が今のセリフを吐き出したので、驚いたんだろうな。

しかし事実である……と、思う。少なくとも私は。

「B組の拳藤さん達が嘘ついてる……ってわけじゃないんだよね？」

「うん、それはもちろん。そんな奴じゃないのは私もよく知ってるしね。というか、私もその試験について何か知ってて言ってるわけじゃないんだけどさ……」

「じゃあ、何で栄陽院さん、そんな風に思うの？ とうか、そもそも『考えが甘い』って……」

「……入試の時のロボなのかどうか自体はわかんないよ？ ただ私としては、そんな簡単な試験のはずがない、ってことだけは確信できてるかな。だって、母さんが1枚噛んでんだから」

今年の1年生は、A組もB組も、私の母であるトレーナーヒーロー・アナライジユが監修を務めた強化カリキュラムをこなしているため、

全体として例年よりも実力その他の伸び率がいい。

小耳にはさんだ程度だけど、身体能力など基礎的な能力の伸びはもちろん、個性の使い方が上手くなってるし、コストチームを改良して着る者も少なくない数いる。A組、B組を問わずね。

そうでなくとも、入試の時の敵ロボなんて、ほぼ全員、体育祭の時点で敵じゃないくらいには実力をつけていた。だったら今更そんなものをぶつけたところで、私達の正確な実力を測れるはずがない。相澤先生が言っていたところの、『1学期で学習した総合的な(略)』なんて、とても見ることはできないだろう。

だとすれば、例年通りのロボバトルではないと思った方がいい。

入試の時よりも強いロボが使われるか、あるいは……試験内容自体が全く別物になるか……

「そ、そっか……言われてみればそうだ。自画自賛かもしれないけど、僕らは例年以上のカリキュラムをこなしてるんだから、その思惑通りに成長しているんであれば、テストだけが例年に合わせたものが実施されるなんてむしろおかしいんだ……で、でもだとしたら何が試験になるんだろう？」

「さー……それは内部情報だし、調べるのは無理じゃないかな？ 母さんも教えてくれないだろうし……『演習』っていうくらいだから、何かしら体動かして『個性』は使うだろうけどね。何が来てもいいように、準備万端にしておくしかないんじゃない？」

「……そうだね。それがいい。うん」
不安もあるようだけど、緑谷は前向きに考えて……より一層自分の力を高めて、純粋に試験に備えることにしたようだ。うん、それがいいそれがいい。

まあ元々緑谷も私も、この数週間の間はみっちり訓練を積んで、体育祭や職場体験の時と比べても大幅にパワーアップしてるんだけどね。

もつとも、途中からは私達、別な訓練メニューで鍛えだしたから、伝聞というか、訓練後の自由時間のおしゃべりで聞いた内容でしか、緑谷の現況は把握できてないんだけどさ。

それもまあ、仕方ないことだ。私と緑谷は、体格も違えば『個性』も違う。1から10まで同じ訓練内容で成長できるはずもないし、遠くからこうなることはわかっていた。

緑谷は、とにかく色々な戦闘経験を積んで、それらを力に変える形で鍛えていった。

私は、基礎的なところを鍛えつつ……母さん直伝で『オール・フォー・ユー』のエネルギーの扱い方を徹底的に叩き込まれていた。折角だ、ちよつと詳しく振り返ってみようか。

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

時期的には、麗日さんとの『ワーキングホリデー』が終わったあたりからだっただと思う。

僕の訓練カリキュラムが一部見直されて、基礎的なトレーニングは続けつつ、とにかく色々な経験を積ませるように実戦形式メインで進めていく、って、ターニャさんに伝えられた。

そしてそこから僕のトレーニングには、新たな講師が加わった。その人は、僕もよく知っていて……会ったことのある人だった。あの時……栄陽院さんの『体育祭優勝のご褒美』で。

「トップヒーローになる……その意気やよしッ！ しかしながらその道は決して平たんではなく、剣林弾雨の茨の道となりましょう。それでも進むか若人よ……よろしい、ならば先達として、このパンドラス・アクター！ 未来ある少年のために一肌脱ごうではありませんか！

P l u s U l t r a !」

長身？ 軀、顔はゆで卵のようにつるんとして丸い……そこに、黒い丸、としか形容できないような者が3つついた、単純だが独特で印象的な造形の異形。黄色をメインカラーとし、過去のドイツ軍の軍服に似通っているらしいデザインの軍服をコスチュームとして身にま

とっている。

ドツペルヒーロー、パンドラス・アクター。テレビや舞台でも役者として幅広く活躍するエンターテイナー気質のヒーローであり、老若男女問わず多くのファンを持つ。

しかしその戦闘能力もまた非常に高く、戦闘や敵退治に専念すれば、トップランカー入りは確実とまで言われるほどの実力者だ。

ドイツ出身らしいが、ビューティービスケツトと同様に日本に帰化している。というか、両親は元々日本人らしいし、実質生まれ以外は日本人なのだ。本名は確か……鈴木化^{ぼける}、だったかな。

その『個性』がまたとんでもなく強力だ。

個性名『ドツペルゲンガー』。他人に自在に変身することができ、その『個性』すら使いこなす。一般に知られているのはここまでだ。詳細な発動条件なんかもあるらしいけど、公にはされていないし、僕も聞かされることはなかった。

けれど彼は、『栄陽院コーポレーション』からの依頼を受け、その『個性』を使って、僕の修行を手伝ってくれた。様々なヒーローや『敵』に変身して、僕と戦うことで。

最初は、全身を白銀の鎧で多い、剣と盾を装備した聖騎士みたいな人に変身した。装備ごとコピーできるなんてすごすぎるな、この『個性』……その姿を相手に、接近戦の訓練を積んだ。

次に変身したのは……常闇君と同じような？ 鳥のような異形の人だった。ただしこっちは顔だけじゃなく、翼もあるし、武器は弓。空を飛んで遠距離から撃ち抜いてくる相手の訓練。

その次は二刀流の忍者、その次は大太刀を携えた鬼みみたいな異形の侍、その次はスライムみたいな粘液の塊、その次は巨大な両手で殴りつけてくる巨人みたいな人、その次はヤギの頭と蹄を持った人、その次は……という風に、様々な人達を相手にした。

実際にはその中身はすべてパンドラス・アクターなわけだけど、変身するたびに、見た目も戦闘スタイルもガラツと変わるから全然違う経験を積むことができて……すごい時間を過ごした。

それを何日も繰り返すことで、たった1人でこの人は、僕に何十人

分、何百人分もの経験を積みさせてくれたのだ。

もちろん、楽な時間じゃなかった。というか、本当に死ぬほど苦勞させられた。

高校時代のオールマイトは、こんな風にしてグラントリノにトラウマを抱くようになったんじゃないか、と思うほどに。心が折れそうになり、体力を使い果たして何度もぶっ倒れるほどに。

それでもその甲斐あって、苦勞に見合った成長はできたんじゃないかな、と思う。

あんまりこういうことを言うのもどうかと思うんだけど……期末試験、どんなふうに先生たちに評価してもらえるのか……実は僕、ちよつとだけ楽しみだったりするんだよね。中々こう……自分の実力って、自分じゃわかりにくいから。どうしても。

☆☆☆

緑谷が『幾百の経験』を己の力に変える特訓をしている間、私は、母さんから『エネルギー』の操作という稽古をつけられていた。

あの日見せてくれた、一体何をされたのか全く分からないままに体の自由を奪われた、あの技も……『エネルギー操作』による応用技能の1つだったのだと、その時知った。

エネルギー操作修行の初日、母さんは久しぶりに見るヒーローコスチューム姿で私の前に立った。

デザインとしてはシンプルで、体の線が出るタイプの……麗日のそれに近い、いわゆるパツパツスーツだ。それの上に、法衣やローブみたいに大きめでゆったりした服を着ているという形。

上着の中には様々なサポートアイテムが仕込まれていて、戦闘能力自体は高くない母さんの短所を補えるようになっていて、他、戦場で敵を観察したり、味方の状態をモニタリングしたりするのに有用な道具なんかもひと通り揃えられているそうだ。

まあ、デザインはどうでもいい。私が重要視したいのは、教えてもらう中身だし。

しかし、ヒーローコスチューム着たつてことは、母さんと模擬戦でもするのかな？

「するわけないじゃない。ぶっちゃけて言うけど、今のあなた、単純な戦闘能力なら私より全然強いんだから」

「え、そうなの？ いやでも、母さんにはあのよくわかんない技とかあるじゃん」

「そりゃ、あの手の技で不意打ちとか決めれば戦いにならなくもないけど、そもそも永久の『オール・フォー・ユー』は、出力自体が現時点でも私の数倍から十数倍はあるのよ？ 技量や経験はともかくとして、絶対値的な戦闘能力じゃ、あなたは私をもう超えてるわ。だから、戦闘に関してはターニャちゃんやビスケさんにお任せして……私は私にしかできないことをするつもり」

ほうほう。まあ、強い弱いはもうこの際置いて……そのころは？

「今言った通りよ。『オール・フォー・ユー』によって扱う、エネルギーそのものの操作技能。そして、それによって可能になるいくつもの応用技の伝授。私があなたに教えるのは、それに尽きる」

そうして母さんが話してくれたことをまとめると、こうだ。

『オール・フォー・ユー』によって扱えるエネルギーは、腕や足に込めることで身体能力を強化したり、他人に譲渡することで、他者の体の強化や疲労回復なんかに使える。

ここまでではまあ、私も普通に知ってるし、今までもやってきた使い方だ。

だが母さん曰く、『エネルギー』の使い道、その応用性・汎用性はまだまだこんなもんじゃないらしい。『オール・フォー・ユー』の真髄は、自分のそれのみならず、他者の体に流れ込んだ後の『エネルギー』すら操作してしまう『操作能力』にあるそうだ。

例えば、あの日私が経験した謎の金縛り。

あれは、母さんが私の体内のエネルギーを操作して起こしたものだという。

つん、とつついた瞬間に少量のエネルギーを流し込み、それを媒介

にして、私の体の中の大部分のエネルギーの流れを一時的に掌握。それを操作することで体を動かなくし、麻痺させ、結果的に手足に力が入らなくなつて私は倒れた、というのが真相のようだった。

この技はもちろん、同質のエネルギーを体内に持つ私だから効いた……なんてことはなく、技量さえ伴えば誰にだってかけられる。操作する対象になる『エネルギー』の定義自体、なんだかんだであいまいなもんだからな。

こんな風に、エネルギー操作の応用技能……その核は、流し込んだ自分のエネルギーを媒介とした他者の体内のエネルギーの操作だ。この技能、とんでもなく広い範囲で応用が利く。

例を上げれば、体内のエネルギーの流れを止めて内側から体を縛ることで無力化したり（さつき説明した麻痺技がコレだ）、

体内のエネルギーを特定の個所に集中させたり、エネルギーの流れをそこに多く集まるようにすることで活性化させ、部位を絞って能力を強化したり、治癒を促進したり、

エネルギーの流れを滅茶苦茶にしたり、特定部位に流れにくく、あるいは流れなくすることで、さつきとは逆に弱体化させるデバフ的な使い方もできたりする。

もちろんこの操作技能、自分の体内のエネルギーをより素早く、より繊細にコントロールすることにもつながるので、戦闘能力その他の向上にもなる。

極めつけには、エネルギーを体から放出して飛ばして相手の体に着弾させることで『注ぎ込む』という行為を行う……すなわち、直接触れなくてもそれらの効能を及ぼすことができるし、従来の使い方である『譲渡』もそれで行える、というのもある。

つまり、これらの技能を覚えることができれば……私の目標という方針である、味方のサポートを行える幅がより大きく広がるといふわけだ。

近距離く中距離くらいであれば、遠隔でバフや回復を行えるようにもなるだろうし、デバフなどの敵への妨害も然り。回復効果そのものも前に比べて上がるとなれば、より一層ヒーラーみたいな活躍もでき

るようになるだろう。いや、拳で戦うからモンクだろうか。

いずれにせよ、これは全力でやらなきゃな……覚えることができれば、私はさらに上へ行ける。

さらに大きく、確実に……緑谷の役に立てるようになるはずだ！

☆☆☆

そんな感じで、それぞれの訓練をこなした私達。

それを存分に発揮する場である期末試験は、もうすぐそこまで迫ってきている……！

が、その前にもう一つ、私達にはやることがある。

さつきも言ったが、私達は『わざわざテスト前にテスト勉強をする』という必要がないように、毎日座学講義できちんと学習内容を頭に叩き込んでいる。

それゆえに、テスト直前の今の時期であっても、焦って勉強したりする必要はないし、なんならいつも通りに休日を過ごすこともできる。

そしてそれを利用して、『デウス・ロ・ウルト』の一環として、1件、まだ『ワーキングホリデー』の予定が入っているのだ。期末試験は、その後だ。

いやまあ、そりゃ、その『ワーキングホリデー』で私達が修行の成果を発揮するような事態になるとかは限らないけどさ。基本、仕事の手伝いがメインになる予定だし。

さらに言えば、その仕事自体、遊び……とは言わないまでも、結構私達にとっても気分転換になりそうな感じだし……え、どこに何をしに行くのかって？

それはね……

☆☆☆

そしてハイ、数日があつという間に過ぎ……本日その『ワーキングホリデー』ですよっと。

今日から2泊3日の予定でお世話になるのは……この人達だ。

「きらめく瞳でロックオン！」

「猫の手助けやってくる！」

「どこからともなくやってくる……！」

「キュートにキャットにステインガー！」

「ニ「ワイルドワイルド・プッシーキャッツ!!」ニ」

というわけで、4人1組のチームで活動し、主に山岳救助の現場で活躍しているヒーローチーム『ワイルドワイルド・プッシーキャッツ』の皆さんである。

緑谷にも聞いているし私も知ってるけど、この道12年以上のベテラ

ン——

「心は18——」

——へぶっ!?

第75話 TS少女とワイルドワイルドプツシー キャッツ

「雄英高校1年A組、緑谷出久です！ ヒーロー名は『デク』です、よろしくお願いします！」

「同じく1年A組、栄陽院永久です。ヒーロー名は『ダイナージャ』です」

「い、1年A組、麗日お茶子です！ ヒーロー名は『ウラビティ』です！」

「雄英高校1年B組、宍田獣郎太と申します！ ヒーロー名は『ジェボードン』ですぞー！」

「雄英高校1年B組、塩崎茨と申します。真名は『ヴァイン』を名乗っております」

「同じくB組、取陰切奈です。ヒーロー名は『リザーデイ』、よろしくお願いしますー！」

なんか1人だけ名乗り方が違った気がしたけど、この6人が今回『ワーキングホリデー』で『ワイルドワイルドプツシーキャッツ』の皆さんにお世話になる面子である。

『デウス・ロ・ウルト』のカリキュラムの一環として来ている私と緑谷とは別に、独自に申し込んで採用されたのが残りの4人。麗日と、B組の宍田、取陰、塩崎である。

……多いな。

「ねこねこねこ……元気でよろしい！ うん、堅くならずには、楽しいこう！ 今日から2泊3日の楽しいキャンプだよ！」

「2日とも泊まる場所違うけどね。っていうかその監視員というか、職員としてだし」

今、『ワイプシ』のメンバーである、それぞれ水色と赤の猫コスの名……ピクシーボブとマンダレイが言った通り、今回の私達の仕事は、キャンプの手伝いである。

正確に言えば、キャンプ場のあるこの山の、山岳監視員の手伝いだ

が。

「それじゃ、さっそく打ち合わせ始めるよー、あちきらについてきてー？」

と、黄色の猫コスの『ラグドール』が言うのに従って、彼女達が運営しているというコテージのような宿泊施設の中に入る。

……彼女達、とは言いつつ、筋骨隆々の男性が1人混じってるけど……。

名前は『虎』さん。茶色のコスチュームに身を包んだ、丸太のように太い手足を持つ……男性、である。一応。スカートはいてるけど。こないだ緑谷に聞いて知ったんだが、彼は『元女性』らしい。マジか。

……あともう1人、端っこの方にはなれていたけど……男の子が1人いたようだった。

すぐいなくなっちゃったけど……アレ、誰かのお子さんかな？ 子連れで仕事？ わからん。

今回の私達の仕事、というか体験内容は、さっき言った通り、キャンプ場のある山で山岳監視員の手伝いをする事。その具体的な仕事は、大きく2つに分けられる。

1つは、キャンプ場に來ているお客さんたちの面倒を見ること。

もともと、何ら専門的なスキルは必要ない。キャンプその他に関する指導は、キャンプ場の職員の人達や、『ワイプシ』の人達がメインで行うので、私達はせいぜい、危ないことをする人がいないか見て回ったり、適宜雑用をするくらいだ。

ああ、言うのが遅れたけど、このキャンプ場自体は『ワイプシ』の人たちがやっているわけじゃない。彼女達も今回は、依頼されて面倒を見る立場なのだ。

大規模なキャンプイベントがあったりする時は、不測の事態に備えて、山岳監視・救助のエキスパートである彼女達が依頼されて警備その他につくことも多い。

で、もう1つの仕事は、この山自体の見回りないしパトロールであ

る。

この山は、自然が豊かに残っていて、野生動物たちも多く住んでいる。危険な奴……熊や猪なんかは、よっぽど奥に行かないと出てこないけど、狐やリス、様々な種類の野鳥なんかは人里近くでもけっこう目撃される。そういうのを見に来る、バードウォッチャーや登山家もなど多いそうさ。

それだけに、よからぬことを企んでいるような者も少なくない。密猟者とかね。

あとは単純に、登山に来て遭難してしまうようなこともなくはない。そういうのを警戒してパトロールを行い、何かあれば救助、あるいは拘束するのも仕事ってことだ。

「普段は我ら4人、あるいは他のヒーローとのチームアップで行っている事業だが、今回は丁度、後進の育成にちょうどいいということもあって、『ワーキングホリデー』を利用してもらった。採用人数が多いことが気になっていた者も多いだろうが、そういう理由だ」

「基本的に私達4人は持ち場を決めてそこを担当するわ。具体的には、私とラグドールがキャンプ場の方を、ピクシーボブと虎がパトロールの方ね。あなた達にはローテーション組んでもらい、キャンプ場班、パトロール班、休憩・待機班の3チームに2人ずつ分かれて当たってもらおうわ」

「休憩……休んでてええんですか？　空いてるところを手伝ったりとかしなくても……」

「いいのいいの。休憩だけじゃなくて待機もだつて言ったでしょ？　何かあった時にそこに駆けつけて加勢するのもその班の役目だよ。それに、山歩き舐めちゃいけないよ、普通に舗装された道を歩くより何倍も疲れるんだから、きちんと休んどかなきゃいざって時動けない！」

「体調管理、休むのも仕事ってことか……ちなみに、その班分けはどうやって？」

「それはねー、はい、今決めた！」

と、ラグドールが会議室のホワイトボードにささつと書き込んでい

く。

1班：デク、ウラビティ

2班：ダイナージャ、リザーデイ

3班：ジエボーダン、ヴァイン

「はい、これで決定!」

「今決めたんですか、これ?」

「うん、そーだよ。あちきの個性『サーチ』は、目で見た人の情報を知ることが出来るから、実際に会って見て、能力を把握してちよーどいい組み合わせをその場で決める、って予定だったの」

「とのこと。なるほど、理にかなってるな……決め方も、チーム分けそのものも。」

「なるほど……ちよーど上手くタイプ別に分かれているようすな。それぞれのチームに、接近戦型とサポート型が1人ずつ入っている」

緑谷、私、宍田が、フィジカルを武器に戦うタイプってことだな。まあ、私もどつちかついていえばサポートの方が得意でもあるんだが……まあいつか。肉弾戦も得意なのはそうだし。

そしてそれを支援する、あるいは得意分野で力を発揮するのがもう1人か。

緑谷と、彼と組めて嬉しそうにしている麗日がコンビ。A組でも仲が良くて、何かと縁があっってお互いの個性や能力もよくわかってる組み合わせだな。

同様に、宍田と塩崎もそうだろう。同じクラスで互いのことをよくわかっていて、連携も取りやすいだろうな。

そして、私のとこだけ混成チームか……

「体育祭ではなんやかんやあつたけど、よろしくね栄陽院。ああ、今は『ダイナージャ』か」

「うん、よろしく。えーと、じゃあ私も『リザーデイ』って呼んだ方がいいか?」

「せつかく名乗ることが許されてる機会なんだし、コスチュームも着

てるんだからそうしようよ。B組とA組ってほら、ただでさえ交流する機会とか少ないし?」

「あーまあ、合同授業も2学期にならないとないみたいだからなあ」

見ると、あつちでも打ち合わせ……ってほどじゃないけど、よろしくね的に話してるな。

「塩崎氏、よろしくお願いしますぞ！ 私も未熟者ながら、精一杯体を張る所存！」

「至らぬ者同士、微力を尽くしましょう、黙示録の獣よ……歩みを止めなければ、必ずその先に光はあります」

「うん、でも私『ジェボードン』。名前でもどっちもいいから、ちゃんと呼んでいただきたい」

「よ、よろしくねデク君、今日も一緒に頑張ろ！」

「そ、そうだね麗日さ……あ、ヒーロー名の方がいい、のかな？」

「あー、えっと……ええよ、呼びやすい方で。あはは……」

「にやははは、チームワークきっちりね！ あ、そんなもって仕事はこれね？」

と、言つてさらにホワイトボードに書き加えるラグドール。

1班：キャンプ場

2班：パトロール

3班：待機

「これがこの後、午前の部から始まるそれぞれの受け持ち場所ね。午後の部の前半と後半を合わせて順々にローテーション。仕事内容がそのまま上に繰り上がる感じでいくよ」

「なるほど……つまり、私トリザーデイは最初パトロールで、次は待機、そんで最後キャンプ場か」

「然り。パトロールは一番体力を使うゆえ、その後に待機・休憩が来るようにしてある。午後の部が前半と後半、両方とも終わった後、反省会と明日の打ち合わせを行う。余裕があれば稽古をつけてやってもいいが、疲れが残りそうならやめておくべきだな」

「となると……最後にパトロールが来る私と塩崎氏は少し不利、ですな。いや、不利という言い方もおかしいですが」

「どうあろうとも全力を尽くすのがヒーローです。……自分の都合や希望などは、その余裕がある時に留めておくべきでしょう……」

そう言いながら、なぜか塩崎は……緑谷の方を見た？ しかも、意味ありげな、憂うような表情で。

一瞬だけだったけど、そう見えたような……でも、何で？ 塩崎と緑谷って、接点特になかったような気がするんだけど……気のせいかな？

と、思ったら、私と同じように塩崎の方を見て……なぜかニヤニヤしている取陰が見えた。

そして、こつちの視線に気付くと、またニヤリと笑う。……何で？

(2回目)

(2人共、緑谷と何か接点とかあったっけ？ この雰囲気、まるで麗日と……)

「各々役割が分かったところで、各パートの仕事内容の説明に入る！ 聞き逃さぬように！」

と、虎さんの声で全員、ホワイトボードに注目した。

……まあ、いいか。後で思い出した時にでも聞こう。

☆☆☆

そして仕事開始。

ピクシーボブと虎さんについて、山の中の決められたルートを歩いて様子を見ていく。

……なんか、マンダレイ達3人は普通にヒーロー名で呼べるのに、虎さんだけなぜか『さん』付けしたくなるのは何でだろうか。コードネームっぽくないからか……はたまたある偉大な風来坊の名前を思い出すからか……うーむ……

「体力的には余裕みたいだけど、考え事していると足場悪いから捻挫するよー、ダイナージャ」

「えつ、あ……すいませんピクシーボブ」

「うん、わかればよろしい。リザーディは反対に、ちよつと苦しそうかな？」

「いえ、全然まだまだいけますよー」

「今はそのようだが、山歩きには基礎体力と、体を上手く使って動くことが重要になるからな。歩き方ひとつで疲れやすくも疲れにくくもなるものだ、この機会に学んでおくといい」

「そうなんですか。あー、面目ないです……私確かに、体力ある方じゃないし……」

「疲れたら言いなよ、私の分けてやれるから」

「ああ、そういやあんたの個性そうだったね。ははは、その時はよろしく」

とは言いつつも、取陰もヒーロー科だけあつて鍛えてはいるし、コスチュームも動きやすそうなデザインだから、まだまだ余裕ありそうだな。息遣いも乱れてないし。

目を覆うマスクに、体全体を覆うボディスーツが彼女のコスチュームだ。彼女の『個性』である『トカゲのしっぽ切り』をイメージしてか、爬虫類の表皮ないし鱗みみたいな質感に見える。

そしてそれが、体にびつたりフィットして、胸元も含めて体の線がはつきり出るデザイン。麗日のコスチュームより『パツパツスーツ』の呼び名が似合いそう。なんというか、露出は少ないけど煽情的に見える……。緑谷とか、微妙に目のやり場に困ってたな。

というかむしろ、取陰が『ちよつと苦しそう』だつてどうやって見抜いたのかがわからん。この道12年の経験からくる、ベテランの観察眼つてもんは流石に……

「何か失礼なこと考えなかつた？」

「いえ何も」

突如ぐりん、と首を90度くらいこっちにに向けてそう言ってくるピクシーボブ。

鋭い！ てか怖！ 何その年齢の話題に関する嗅覚……口にも出してないのに……

っていうか、同時に取陰の声も聞こえたんだけど……同じこと考えてたのかな？

「そう？　ならいいんだけど、何度も言うように私は心はじゆうは……」

「止まれ、何かある」

と、虎さんの小さな、しかしよくとおる声が響いたのに反応して、全員すぐさまたまたま直し、周囲の様子をうかがう。ふぎけた空気は一瞬で霧散して、警戒態勢に。

虎はその場でしゃがみ込み、地面を指さしている。

その示す先にあるのは……足跡？

「んー……登山靴の足跡だね。人数は2人。まだ新しい。できたばかりって感じた。……この辺りは登山コースからは外れてるし、歩くにも適してないんだけど」

「まさか……密猟者とかですか？」

「いや、違うだろう。歩き方からして、この者達は自分の存在を隠す気はないし、山歩きにそこまで慣れてるわけでもないな。加えて、靴の裏の形状……この登山靴は初心者用の安価なものだ。良くも悪くも手慣れている密猟者のそれとは、特徴が一致せん」

「足跡一つでそこまでわかるの……!？」

「慣れればな。……同じ場所を何度も歩き回っている、右往左往している印象だ」

「虎、こっちの切り株に、2人分の腰かけた痕跡があった。その脇の地面には、荷物か何かを置いたような跡も。……多分コレ、不用意に登山コースから外れて遭難しちゃってるんじゃないかな。道がわからず右往左往、疲れて休憩……行動パターン合うよ」

「……おまけに、片方は足をくじいたか何かしているな。足跡のつき方が不自然だ」

すらすらと、僅かな痕跡からあつという間に状況を推理していく2人の見事な観察眼に、私と取陰はただただ驚くことしかできなかった。専門家とはいえ、ここまでのことができるのか……

「周囲を警戒しつつ、遭難者がいる前提で搜索に移る。リザーバイ、

『個性』使用を許可する、無理をしない範囲で適宜使え。それと、チームを二手に分ける。リザーブは我と来い。ダイナージャはピクシーボブとだ。見つからない場合は待機チームに声をかけて人海戦術だ、始めるぞ！」

「了解！」

その後、遭難者は無事に見つけることができた。

予想通り、色んな景色を見たいと思って登山道を迂闊に外れて帰れなくなっていたようで、しかも足をくじいていた。

その場で私が、『エネルギー』を流し込んで体力を回復させ、同時に捻挫の個所にエネルギーを集中させることで大分症状を和らげることができた。ありがとう、ってお礼言われた。

その後、無理させないために、ピクシーボブが『土流』の個性で作った『土魔獣』に2人を乗せて、彼女が最寄りの山小屋とかパーキングまで連れていくことになった。私達と虎さんは、引き続きのパトロールに戻った。

第76話 TS少女と取陰切奈

無事にパトロールを終え、午前部を終了させて帰ってきた私達は、コテージでお昼ご飯の時間を迎えていた。

昼ご飯は、待機組になっていた2人、塩崎と宍田が課題として作ってくれていた。

曰く、災害時などにおける炊き出しなんかも救助活動の一環だからって、簡単にだけど複数人数用の食事を作る体験ってことだったんだそう。なるほど考えてるな。

「白米の飯もちょうど炊き上がりましたぞ！ さあさあ皆の衆、遠慮なく食べられよ！」

「食事は日々の活力。我らの糧となってくれる命に感謝していただきましょう」

「おー！」

「おー……！」

先に響いた『おー！』が私と取陰。美味しそうな食事を見て。

で、後の方の『おー……』が……緑谷と麗日である。どしたの、めっちゃ疲れてない？

たしか2人は……午前中、キャンプ場の担当だったよね？

「うん、そやったんやけど……子供連れが多くて……」

「相手するの、思いのほか疲れた……子供って何であんな元気なんだろう……」

あー、そういうことね。

確かに、遊んでる時の子供って、体力底なしだよな……なんであんなに動き続けられるのかわかんないってくらいに。テンションもずっと高いし……キャンプなんてワクワクする場ならなおさらだろう。

おまけに予想外の行動めっちゃとるから、気も抜けないし……精神的に疲弊したのか。

「あははは……うん、ホント大変そうだったわね。2人とも体育祭で

有名になっちゃってるから余計に、つてとこかしら。まあ、将来子供ができた時の予行演習だと思えばよかったんじゃない？」

と、マンダレイは場を和ませるつもりで言ったようだったが……その瞬間、電撃走る。

ドキツとして赤くなつた顔を急に上げ……とつさにこつちを見るくる緑谷。

同じようにはつとして赤い顔を上げ、緑谷を見る麗日。しかし、その視線が私の方を向いているのをみて……何だか辛そうに、面白くなさそうにする。

塩崎もぴくつと反応して、視線だけ動かしてちらつと緑谷の方を。その後すぐ、少し恥ずかしそうに、ほほを赤く染めて目を反らした。

取陰は、私と同じようにその場の全員を見ながらニヤニヤしてる。

そして自身も……特に、緑谷の方を見ているようだ。心なしか、熱のこもつた視線で。

なお、宍田はタイミングよく？悪く？飲み物を取りに台所へ行っているで今ここにはいない。

そして視界の端で……交錯する女子たちの視線に『え、何この空気？』とちよつとマンダレイが戸惑っていて……

「…………ぐふっ！」

……その隣で、精神にダメージを受けたらしいピクシーボブが崩れ落ちた。

「さあさあ皆の衆、お茶とジュースどちらが……何ですかこの空気は？」

あ、宍田帰ってきた。

食事を終えて片づけの最中、ふと私と緑谷は、マンダレイが1人分と思しきおかずと、ご飯をおにぎりにしてマンダレイがキープしているのを見つけた。

そしてそれを彼女は、食堂の外にいた小さな男の子に渡していた。

あの子、集合場所にもいたな……マンダレイの息子さん？

と、思っていると、その子がこつちに気づいてなぜか睨んできて

……それを見てマンダレイもこっちに気づいた。

で、聞いたところ、彼の名は冴汰君。マンダレイの子供じゃなく、従甥だそう。『じゅうせい』と読みます。

関係性は……いとこ、の子供……だな。ゆえあって預かってるらしい。

「そうなんですか……あ、僕、緑谷出久。よろしくね」

そう言っって手を差し出す緑谷だが、ぷいっとそっぽを向いてしまう冴汰君。

それを、どうしたの？ と緑谷がさらに声をかけても、無視。私にも同様だ。

「えーっと、どうしたの？ 僕何かしちやったかな？」

「あー、ごめん。気を悪くしないであげて？ その子さ……」

と、マンダレイが何か言おうとした瞬間、冴汰君は突然振り返って、突如としてパンチを繰り出した。振り向きざまに、恐らくは緑谷の……大切な部分を狙って。

いきなりそんなことするなんて、何かよっぽど気に障ることでもあったのか、なんて思ったが……それよりも、その拳は緑谷のリトル緑谷、あるいはお稲荷さんを捕らえることはなかった。

パンチした位置、ないし高さからして、緑谷がさっきまでと同じようにそこに立ってたら当たってしまった可能性は高いが、タイミング悪く緑谷はその瞬間、マンダレイの言葉に反応して立ち上がった、少し場所をずれ……代わりにその位置には、私がいかがみ込んだところだったのだ。なるだけ冴汰君と視線を合わせて話せばいいかな、とか思っって。

結果、

——ぼすっ

「……あ」

「……っ!？」

冴汰君の拳は、ちょうど私のコスチュームの軍服の、ボタン止める個所の間にあたり、そのまま……私の胸の谷間に突き刺さった。食事時でボタン緩めたままだったなそういや。

その光景を見て、驚いて顔を真っ赤にする冴汰君。固まる周囲の空気が。

面白くなさそうにし、責めるような視線になる緑谷。その隣で冷汗をかくマンダレイ。

そして周囲からは……『何してんだこのエロガキ』とでも言いたげな視線が針のむしろのごとく冴汰君に襲い掛かる。しかし冴汰君、驚きすぎて動けない様子。

どうしようコレ、何て言えばいいかな、とりあえず怒るべきかな、とか思っている間に、マンダレイが再起動し……流石に見過ごせなかったのか、冴汰君を引き離して私の胸から腕を抜き取らせ、そのままげんこつを落とした。

「ご、ごめんなさい栄陽院さん！ 冴汰！ 謝りなさい！」
「ご、ごめんなさい！」

流石にコレは悪い、あるいは謝らないとまずいと思ったか、冴汰君、素直に謝る。

マンダレイも一緒に謝る、腰を90度に奇麗に曲げて。

ああうん、いーっていーって。わざとじゃないみたいだし……ただ、アレが私じゃなくて緑谷に当たってたなら、そのヒット箇所はあまりよろしくない場所だっただろうことを考えると……少し、アレだけど。

もう見たまんま『自分の子供がいけないことをしてしまつて必死で謝る母親』と化しているマンダレイにも、気にしていない旨を伝えて、その場は収めた。

ちよつとびつくりしたけど、緑谷が私のために怒ってくれる視線というレア映像を見れたから良しとしよう……脳内フォルダに永久保存決定である。

☆☆☆

午後、私と取陰のチームは待機から始まった。

何もしないでただ休んでいるのも退屈なので、持ってきていた学校

の課題その他をやりながら、交代の時間が来るのを待っていた。

取陰も同じようにしているが、そんな中、ふいに取陰が口を開き、

「あのさあ栄陽院、ちよつと聞きたいんだけどさ」

「何？」

「緑谷のこと、好き？」

まるで『今日の朝何食べた？』とでも聞くような気軽さで、結構なことを聞いてきた。

それに一瞬驚いてきよとんとするものの……いつも通りの、ギザッ歯を見せた笑みを浮かべながら……しかしどこか真剣なまなざしでそう聞いてくる取陰に、私も、普通に返すことにした。

「あー、うん、好きだよ。一応ね」

「やっぱそうか……私も好き」

「……やっぱり？」

今日、所々で見られた反応見てて、そうじゃないかなとは思ってたんだよね。けど、本人の口から裏取れるとは思わなかったな……そうか、好きなのか、取陰、緑谷のこと。

「あと、塩崎もそうだよ？」

「あ、そっちもやっぱり？ ていうか、いいのそんなこと勝手にばらしちゃって？」

「そんなこと言つて、気付いてんでしょ？ 塩崎つてば、わかりやすかったもんね今日」

「それはまあ確かに……あーでも緑谷自身は気づいてなさそうだけど」

「あはははは、鈍いみたいだしねアイツ。ていうか、見た感じ麗日もそうだよね……何この偶然、緑谷のこと好きな女子が『ワーキングホリデー』に一堂に……来てないの蛙吹ぐらい？」

「そこまで把握してんのか……」

そう、私がそうじゃないかとにらんでいる、A組で緑谷のことを好きであろう女子。私と麗日と、もう1人は……梅雨ちゃんである。恐らくはUSJの時、あるいはそれがきっかけになって心惹かれるようになって……って感じだと思う。表情変わらんからわかりにくいけ

ど。

「だてに中学時代ギャルやってないよ。この手の噂とか大好物だし、割とそう言うの見てて鋭い方だよ、私？」

ギャルとそれ関係あるのか、つかギャルだったのか、なんてことを思ったが……さつきから私ら、結構アレな内容のことをごく普通のトーンで話してるな……

こういうのって、きやぴきやぴテンション上げながら姦しく話すもんだっていうイメージ強いんだけど……実際に、芦戸や葉隠がいたらそんな感じになっただろうし。

けど、私や取陰みたいに、どっちかっていうとサバサバ系？な女子が話すと、コイバナもこんな感じになるんだろうか？

「というか、それ関係で気になっただけ……取陰と塩崎って、ぶつちやけ緑谷と接点なかったよね？ 何でっていうか、いつの間に、何があって好きになったの？」

「お、聞いちゃう？ それ聞いちゃう？」

ニヤニヤと笑いながら、ちよつと機嫌よさげに言う取陰。

ちよつとだけでもったいぶった後、思い出すようにして取陰は話し出した。

☆☆☆

Side. 取陰切奈

気弱そうなヘタレ男子。いつつもびくびくしてて、独り言も多くて、なんかオタクっぽい。

それが、私が緑谷に対してはじめに抱いた感想だった。

前の学校……というか、私が中学校の頃にも、そういうのはどこのクラスにもいた。陰キャって言えばいいのか……他人と積極的に関わったりすることが得意じゃなくて、弄られ役になってたりする、なんというか……頼りない感じの男子。

私や、つるんでた同じギャルな女子たちからすれば、率直に言って、嘲笑の的だったと思う。

別にいじめてたとかそんな事実はないけど、内心では正直、バカにして見てたような存在だ。

緑谷もそんな感じなんだろうなって、正直思っていた。

USJでA組が『敵』騒動に巻き込まれてからも、その評価は変わらなかった。

一部の噂では、緑谷も前面に立って敵と戦ったとか言われてたけど……その真偽は定かじゃなかったし、あの頃はまだまだ自信なさげな緑谷のままだったから、どうせ爆豪とか轟、あとは栄陽院あたりの、入学直後から注目されてた連中がメインだったんだろうなって思ったし。

本格的に注目するようになったのは、やっぱり体育祭の時。

下馬評を大きく覆してその実力を見せつけ、トーナメントでは轟や飯田といった実力者を相手にして勝利。さらに決勝戦では、性格はともかく実力的には学年最強クラスと目されていた爆豪と、一対一で一歩も引かずに戦い、同時優勝なんてしてみせて。

体育祭を通して、その圧倒的な実力と、ヒーローにふさわしい不屈の闘志を見せつけた。

この時点で、何もできない気弱なオタク男子なんていう評価は吹っ飛んでたけど、さらには職場体験で、かの凶悪ネームドヴィラン『ヒーロー殺し』を相手にして交戦・生還までして。

この頃にはもう……ヒーローとして戦う時に見せる緑谷の顔に、オドオドした弱い心みたいなのはほとんどなくなっていて……学年全体で、あいつに対する評価が爆発的に上がっていった。

それでも普段の緑谷は、入学当初よりはマシになったとはいえ、やっぱりどつかオドオドして、いつも緊張気味で、あと……女子と上手く話せないヘタレのままだった。

やっぱりというか、私の中では、ヘタレ男子っていう評価は根強く残ってたんだよね。

緑谷は覚えてるかどうかわからないけど、何度か私達は学校内で会っている。

いや、会ってるって程じゃないかな、せいぜい一緒の部屋にいたく

らしいもんだし。

例えばそのうちの1回は、コスチューム工房でのことだ。コスチュームの改良に来た緑谷が相談の順番待ちをしている間、隣に座っていたのが私だった。

私のコスチュームは御覧の通り、体のラインがくつきり出るような……露出は少なくてもセクシーなデザインなので、一目見て顔を赤くして、おどおどしてたのは記憶に残っている。

戦えばあんなに強くて、私じゃ絶対勝てないくらいなのに……私のことを直視することもできず、横で私がぐぐーっと伸びをして、その際に胸を突き出すようなポーズになったり、足を組み替えたりする動作1つ取るたびに、いちいちびくっとしてオドオドしてたりして。

初心だなあ、かわいいなあ、なんて思いながら見てたもんだ。

……あの日も私は、同じように思っていた。

その日私は、『ワーキングホリデー』であるイベントに来ていた。ヒーローの見回りの仕事を手伝うだけの簡単な内容。全部終わってから、仕事場の見学と、稽古をつけてもらえる。そっちがメイン。参加者は私と、塩崎の2人。

だと思ってたんだけど、現場に行くと、他のヒーロー事務所とのチームアップで依頼に当たることになって……そのヒーロー事務所所の『ワーキングホリデー』で、緑谷が来てた。

ここでも緑谷は、私達のコスチュームを見て目のやり場に困ってたっけな。

私のはさつき言った通りだけど、塩崎のも……なんか布を巻いたような、聖人っぽい装束だから、露出は少ないけど、ひらっと動く見えそうになったりするんだよね。腕とか鈍足とかも、結構色気あるし……まあ、本人に自覚はないみたいだけど。

緑谷をちよつとからかってやったりして遊びながら、そしてそれを真面目な塩崎にとがめられながらすごしていた。ああもちろん、仕事そのものはきちんと真面目にやってたからね。

何度やつても慣れない、ちよつとからかうたびに真つ赤になるのが面白かっただけ。

それに塩崎だって緑谷のこと怒ってた……とは言わないまでもぴしやりと色々注意してたしね。もつと自信を持って、堂々としてくささいって。私達はヒーローなんですから、何事にも誠実に、正面から、正々堂々と向き合わなければなりません、って。

塩崎ってそのへんの融通が利かないというか……『はかりごと謀は絶対にいけません』的な、下手すると男子連中以上に愚直な部分があるんだよね。信条っていうか、信念、あるいは信仰じゃないかってレベルで。……マジでありそうだけどね、確かあいつ、クリスチャン系の学校の出だったし。

時と場合にもよるけど、策を弄して戦うのも割と好きな私とは、あんまりそりが合わないというか……衝突することも多い子だった。

そしてそれが原因で、あの日、事件は起きた。

塩崎と2人でパトロールをしていて、もう30分もしないうちに業務終了だな、何もなくてよかったー、と思ってた時のこと。

物陰でひそひそ話をする怪しい男達を見つけた私と塩崎は、こつそりその話を聞いていると……それが、違法薬物の取引だったことを知った。

そしてこれからその売人は、薬を欲しがる哀れな被害者達に、それを売りさばきに行くところなのだった。このイベントをカモフラージュにして、いつきに大量に薬を隠れてさばくのだと。

予想外にヤバい現場に出くわしてしまい、早く監督役のヒーローに連絡して指示を仰ぐ、いや応援を呼んでもらわないと、と思ったんだけど、それを待たずに塩崎が飛び出してしまったのだ。

このままあの売人を放置すれば、ヒーローが到着するまでの間に薬が売りさばかれて被害者が出てしまう、一刻も早く取り押さえて、薬物も押収しなければって。

被害者達のことを思ってたのことはわかる。塩崎はそういうのを見過ごせない性格だ。

けど、この場においてそれは完全に勇み足……を通りこして、失敗

そのものの判断だった。

塩崎の『個性』で拘束したはいいが、そいつらには他にも何人も仲間がいて、たちまち私達は囲まれてしまった。しかもその1人が、塩崎にとつて相性最悪な炎熱系の個性持ちで……あつという間に私達は追い詰められた。

どうにか私が派手に動いて挑発・かく乱し、塩崎だけは逃がすことに成功したけど……私はその場で取り押さえられ、逃げられないように何かの薬を打たれた。個性が上手く使えなくなって、体に力が入らなくなつて……朦朧とする意識の中で、私は縛られ、車に乗せられた。連れ去られる最中、さらに恐ろしいことも聞こえてきた。

こいつらは薬物取引だけじゃなく、人身売買までやっていること。日本国内だけでなく、海外にまで手を伸ばして顧客を持っていて、国境を超えて取引することもあるということ。

そして、目撃者である私の始末をどうするかということ。殺してしまうには惜しい。日本人の若い女はどこに出してもいい値段がつく。スタイルがよくて、しかも天下の雄英生なら、付加価値もついて高く売れる。

薬漬けにして逃げられなくして、海の向こうにでも売り飛ばしてしまえば、口封じにもなつて一石二鳥だ。

動けない私の体を無遠慮に触つて撫でまわしながら、男達は下卑た笑みを浮かべていた。

どうしようもなく怖くて、けどもうどうにもできる気がしなくて。もうだめだ、私これから殺されるより酷い目に合うんだ、そんなの嫌だ、お願い誰か……

(誰か……誰か、助けて！)

その直後だった。

結論から言えば、私は助かった。

逃げ伸びた塩崎が救援を要請したらしい。私が隠し持ってた——というか、壊される前にとつさに飲み込んで胃袋に隠した——GPS

つきの小型インカムが生きていたので、その反応をたどって駆けつけ、駆けつけたヒーローが個性を使つて車を止めた。

車を降りた犯人たちが、私を人質にして逃げ伸びようとする中……突然、私を抱えていた犯人の足元のマンホールのふたが吹き飛んで、中からすごい速さで出て来た人影が、逃げていた犯人を全員まとめて殴り倒した。

そして、上手く体が動かず、倒れそうになった私を抱きとめて……こう言ったのだ。

「うわ、え、と、取陰さ……えーとえーと、あー……も……もう大丈夫、僕が来た！」

……こんな時にも、いまいち締まらないなあ、なんて思いながら、私は……私を助けてくれたヒーローの……緑谷の顔を見上げて、安心してしまい……緊張の糸が切れて、意識を失った。

☆☆☆

「それでその後、緑谷にお礼言つて……塩崎には泣きながら謝られて……ヒーローの人にはめっちゃ怒られて……一件落着つてわけ」

「それがきつかけで緑谷のこと好きになった？」
「んー、どうだろう……少なくとも、明確にあいつを男として認識するようになったのはあの時だったかな。その時から好き、ではなかったかもしれない。ただ、1人の男として、恋愛の対象としてアイツを見てたら、今まで気づけなかった緑谷のいいところとか、かっこいいところとかが見えるようになってきて……何だすっごいいい男じゃないか、今まで気づけなかったけど、って感じかも」

取陰は徹頭徹尾、軽い感じの口調を崩さずに語っていた。

けど目は限りなく本気、ないし真剣で……ああ、緑谷のことがホントに好きになったんだな、ってことがよくわかった。

なんとまあ、ドラマチックというか、劇的な展開の果てに芽生えた

恋心だな……まさに王道って感じじゃないか。

「そーかなあ？ 私としては、そういうのってむしろチヨロインの類じゃないかって思うけど？ だってヒーロー業界なんて、チームアツプやらサイドキックも含めて、助けて助けられてなんて日常茶飯事、当たり前の世界じゃん。そのたびに惚れてたらそりゃキリないでしょーよ」

「でも好きになったんでしょ？」

「なっちゃったんだよねえ……たはは、どうしたもんか。ああちなみに、塩崎は何ていうか……自分ではまだ好きだって自覚はないかもね。何かとどうしようもなく気になる男子、くらしいの認識」

「時間の問題だろそれ……で、なんでこの話私にしたの？」

「んー、何でだろうね。何となくかな」

「何となくで、推定恋敵の相手にそんなこと話すかね……ある意味宣言戦布告じゃないのそれ？」

「あ、じゃあそれでもいいよ？ どの道私だって、負けるつもりないしい？ あんたにも塩崎にも麗日にも、ああもちろん蛙吹にもね」

「さよかい」

「ついでに聞いておきたいんだけど、それ以外で縁谷に気がありそうな子いる？ B組にはもういないとは思うんだけどさあ……A組には？」

「……今んとこいないかな、多分。つか、やっぱり『負けない』とそういう話になるのかこの場合」

「？ どゆこと？ そりゃあんたも言ってた通り、恋敵なんだから、1人の男を取り合って骨肉の争いって奴をさあ……」

「えー……しなきやだめ？」

「……？ 戦う前から降伏宣言、ってわけじゃないよね？ 栄陽院こそ、さつきから何が言いたいの？」

「だからあ……」

—— トウルルルル！ トウルルルル！

「!!」

突然、待機室の電話が鳴って、話が中断する。

私の方が電話に近かったので、受話器を取ると、その向こうから聞こえて来たのは、ラグドールの声だった。

『あーもしもし、待機中の2班の2人?』

「2人ってどうか、はい、ダイナージャです。何かありましたか?」

『時間よりちよつと早いけど、パトロール終わりそうみたい。キャンプの監督の方もちよつとキリいいから、ローテ交代できないかなーって。大丈夫?』

そう聞かれたので、取陰にすばやく確認を取って、

「はい、問題ありません。みど……デクとウラビティが戻り次第、そちらに行くってことでよろしいですか?」

『いーよー! じゃ、準備しといてねっ!』

——プツン（電話が切れた音）

「だつてさ」

「ははは、じゃ、コイバナはここまでつてことで、準備しますか。続きは……風呂でもする?」

「いいね、女子全員集まりそうだし……ここ温泉あるらしいよ?」

「マジでっ!? うわ、楽しみ!」

「ご飯も食べてゆつくり休んで、きつちり元気回復した私と取陰は、予定通り緑谷達が帰ってきたのと入れ違いで部屋を後にし、今日のローテーションで最後のシフトである、キャンプ場の手伝いへ向かった。」

なお、緑谷達は間に食事休憩をはさんだとはいえ、子供の相手からの山中パトロールだったため、めっちゃへとへとになっていた。ゆつくり休んでくれ……

第77話 TS少女と入浴事故

……今の状況を今一度見てみよう。ええと……

私：全裸

取陰：全裸

麗日：全裸

マンダレイ：全裸＋タオル巻き

緑谷：全裸＋泡まみれ

……この状態で女四人で、倒れて転がっている緑谷を見下ろしている。それが今の状況だ。

なお、ちよつと離れたところには、同じく全裸……か、あるいはタオル巻いた状態の塩崎がいるものと思われるが、ここからは見えない。仕切りあるし。

……うん、とんでもない状況だな。

さて、何でこんな状況になったのかというと……ちよつと時を1時間ほど巻き戻そうか。

最後の『キャンプ場係』のシフトも無事に終了し、私達のワーキングホリデー、その1日目は終わりを告げた。

今日も1日お疲れ様でしたーってことで、夕食の時間。

最後に休憩・待機シフトだった緑谷と麗日を中心に、皆で協力して夕食を作って食べる。

その際、普段から大人数用の食事を作り慣れている私のスキルが大活躍して、マンダレイ達に褒められたことを追記しておく。

大人数っていうか、ただ単に1人でいっぱい作って食べてるだけなんだけどね。

そんなわけで、疲れた体にエネルギーが満ち溢れるような献立の数々を用意した。

いただきます、の合図と共にみんなで仲良く食べ始め、食べながら

今日の感想とか講評を言い合ったりして、わいわい楽しい夕食の時間を過ごした。

……なお、今回も冼汰君はやってこず、マンダレイが1人分の夕食を別皿に取って確保していた。彼が何で私達を避けてるのは分からないけど……保護者も大変だな。

せっかく子供が喜びそうなメニューも色々作ったのにな……まあ、後で温め直してとかでもいいから、美味しく食べて欲しいもんだ。

ごめんね、つてちよつと悲しげに笑いながら言ってくるマンダレイを見て、そんなことを考えてしまった。

その後、私達はお風呂に入ったんだが……ここのコテージ、近くにある源泉から温泉が引つ張られてきていて、いつでも入れる設備になつてるとんだから、まー皆テンション上がったね。

中学生男子かってくらいにはっちゃけで、取陰が湯船で泳いだり、背中流しっこしたり、お風呂で遊んで……女性陣皆で、いいお湯加減の温泉を堪能した。

途中でマンダレイも入ってきた。時間空いたから今のうちに入っちゃおうと思つてだつて。

他のメンバーは？ つて聞いたら、ラグドールは今日の夜勤当番だから事務室。お風呂には早めにもう入っちゃったんだと。

ピクシーボブと虎さんは晩酌だつて。……なんか、幸せな家族連れを多く目撃してしまったピクシーボブのすさんだ心を癒すためとかなんとか……

……聞けば、適齢期を逃しそうになつてて焦つてるんだそうだ、彼女。

あー、それでなんか昼間、それ関係のワードにダメージ受れたり、『10代の乙女……青春……恨めしい……』とかなんとか小声で言つてたのか……

まあ……山岳救助だもんな。基本的に山の中で、出会いのなさそうな職場だからなあ……

それでマンダレイが、『あなた達もヒーローやるなら、普通の女の子

よりそういう機会は遠のいてもおかしくないから……出会いは大切にしないね』とか重苦しいご助言をいただきまして……と思ったら、それ聞いて取陰がふと思いだしたように。

「ああ、そうだ、出会いというか相手というか、そういう話で思い出したんだけどさ、塩崎」

「はい？ 何ででしょうか、取陰さん」

「栄陽院だけどさ、やっぱ緑谷のこと好きなんだって」

「フツツ!?!」

途端、麗日と塩崎が噴き出した。

マンダレイはというと、突如始まったコイバナ……にしてはやけにあげすけな雰囲気のために、きよとんとして驚いている。リアクションできてない。

「えっ、な、なっ……何を言うのですいきなり!! え、栄陽院さんが、みみみ、緑谷さんのことを……そ、それが何か、というかなぜ私に……」

「えー、だって塩崎も緑谷のこと好きでしょ？ あと私も好きだしー」

「なっ……っ!?!」

「えっ……えええええ!?!」

驚く塩崎と……それ以上に驚いている麗日。

まあ、麗日の方は……私はどうやらマークしてたようだけど、ノーマークだった取陰と塩崎も恋敵（かもしれない）ってわかったわけだからな……

口をパクパクさせて何も言えない麗日に対して……取陰がとどめの一撃を。

「で、麗日も好きなんだよね?」

「っ……っ……ッ!?!」

確信犯で取陰がニヤニヤして面白がって、麗日と塩崎がパニックって……マンダレイは最初から最後まできよとんでボーっとしてたので、事態の鎮静は主に私が行いました。数分かかった。

全くもう……いきなり何を言い始めて何を引き起こしてんだよ、取

陰ってば……

「だつてさあ、せつかくこうして恋敵が全員一堂に会して、しかも裸の付き合いできてるんだから、この機会に腹を割って話しておきたいじゃん？ まあ、実質的には宣戦布告かもだけど」

「せ、宣戦布告……ですか？」

塩崎がそう聞き返すと、そうそう、と取陰はニヤリと笑う。特徴的なギザツ歯を見せて。

「ここにいる4人……ああ、ここにはいないけど、A組の蛙吹も含めれば5人かな？ 全員緑谷が好きなわけだけどさあ……実際に結ばれるとしてもこの中の1人だけでしょ？ あるいは、思わぬダークホースの出現で誰も報われないなんてこともあり得る。もちろん私はそんなの嫌だから、積極的にアプローチしていく予定だけど。そんではないは、みたいなの？」

さらつと梅雨ちゃんのこと暴露した取陰だが、その直後、

「わ……私もっ！」

と、ばしやつと音を立てて湯船から立ち上がり、麗日が何事か言いかける。

驚いた眼になる塩崎とマンダレイ。面白そうに見返す取陰。

「わ、私も……それは、やだから……私も、デク君、好きだから……！」

その、えつと……ま、負けない、です！」

真っ赤になりながらも、振り絞るようにして最後まで言い切った麗日。

言い切ると同時に、恥ずかしさがぶり返したようにばしやつとお湯に沈んで、口のあたりまでつかってしまふ。ブクブクブク、と、呼気が泡になって上がってきていた。

「うんうん、まー、麗日と栄陽院はクラスも同じだし、2人とも今すでに緑谷と特に仲がいいって評判になってるからなく。強敵だわ。ねえ塩崎？」

「わっ、私はその……」

いきなり話を回されてしどろもどろな塩崎だが、どうにか心を落ち着かせると、目を泳がせながら……しかし、1つ1つ言葉を選ぶよう

に話し始めた。

「わつ、私は……緑谷さんのことを、確かに、尊敬して……強くて、気高いヒーローだと思つていますが……。正直、わかりません。私は、私が彼に……彼を、好きなのかどうかは……」

「……………」

「確かに、ふと気が付くと、目で彼を追っていたり、彼が笑う所を見ると嬉しくなったりもします。けれどそれは、皆同じように持っている隣人愛で……私も、あの一件で緑谷さんを少しだけ近くに感じるようになって、知つて、それで……でも……!」

「でもそれで、他の女の子と緑谷が仲良くしてるのを見ると不機嫌になるんでしょ?」

「それはっ! それは……私は……でも、こんな……!」

それっきり、顔を真っ赤にして、目の端にうつすら涙を浮かべて黙ってしまった塩崎。なんていうか……自分で自分の心の中を整理できてない、的な感じだな……。

神学校系の女子高なんだっけ? そういうのに縁がない環境で育ってきたようだし、仕方ないか。

取陰が『ちよつと急だったかな、ごめんね』と謝つて慰めていた。

そしてそれを、不思議そう、ないしは不安そうな目で見ている麗日。自分で断言はしなかったものの……やっぱり油断できない相手なんだ、ぐらいには思ったのかな。

で、最後にこの取陰砲が向けられるのが誰かと言えばそれは……

「そんじゃ最後、栄陽院もいつてみようか?」

「え、やっぱ私にも回つて来んのコレ?」

「そりゃもちろん! 恋敵3人が勇気振り絞つて宣言したんだから、1人だけ何も言わないはなしでしょ。さき、ズバツと言つちやつてよさつきみたいに!」

麗日と、少し落ち着いた塩崎が『さつきみたいに?』と少し不思議そうにしているが……あー、どうしたもんかな。何をどう言えば……いや、単純に私も緑谷が好きだ、ていいのか?

それとももつと正確に……どつちかっていうと『尽くしたい願望』

みたいなもんがあるって言った方がいいのか……そのためなら緑谷の最終決定に従うとか色々……

……あ、待てよ？

それはともかくというか、別に話すとして……コレ、いい機会だから言ってみるか？

なんか今、半ば無理やりではあるけど、色々カミングアウトする的な流れっていうか雰囲気だし……うん、試しに、いいかも。

何、失敗してもドン引きされる程度だ。

話してみよう。私の……緑谷にも話していない、最後にして最大の『性癖』について。

「……私のことを話す前にさ、ちょっと折角だから皆に聞いてみたいことがあるんだけど。ああもちろん、この緑谷争奪戦にも絡む話でね？」

「うん？ 何？」

そう返してきたのは取陰だけだったけど、麗日も塩崎も、あと流れでだろうがマンダレイも聞く姿勢に入ってくれているようなので、言う。

「あのさー……ハーレムってどう思う？」

「「……………は？」」

——話した。

結果、全体的に引かれた。ドン引かれた。

麗日とマンダレイは顔を赤くして、でも引いてる。

塩崎は、理解できないものを見るような目をしてる。

取陰は……なんか爆笑してる。

「あつはつはつはつは！ マジで、マジで!? いやー予想外どころじゃないってあはははは、あーやばお腹痛い。うわーマジか……え？ 栄陽院そんな性癖っていうか趣味あったわけ!?!」

引いてはいないな。なんかもう予想外というか明後日方向過ぎて

妙にツボってるだけか。

「いやあ、苦し……あー、すごいなコレ。ハーレム願望かあ……現実にいるんだそんなの。しかも女子にとって……」

「と、永久ちゃんそれ……本気で言っとんの？」

「え、栄陽院さん、そ、それはいくらなんでも流石に……ふ、不誠実などというものでは……」

「さ、最近の女子高生って、え？　こんな……え？」

まあ、ある意味『女の子らしくない話』なのは、それは否定できないし……実際この価値観、私の前世：男の部分の価値観が多大に影響してる結果だろうからなあ。

異端視されるのは何も文句なんて言えないよな。

……でも、本気なんだよな。

「だってさあ……誰か一人選ばれて他全員哀しい結末になるより、全員まとめて食べられちゃった方がよくない？　実際に全員に好かれてるんだから……緑谷がそれだけいい男だってことでしょ？　なんでみんなで仲良く幸せになるって選択肢がないのかなー、つくづく、この国はさあ」

「た、食べっ……」

「表現が生々しいです……そ、それに！　あ、あなたはそれでいいんですか栄陽院さん！　その……法律や倫理的な問題もそうですが、伴侶となる男性にそんな……自分以外の女性と関係を持たれるようなことがあって、それが問題だとは、悲しいとは思わないのですか!?　そ、そういうのは……か、姦通、ないし浮気と称されるものであって、古来より忌むべきこと……」

「えー？　むしろ古代なんて今よりそういう規制緩い時代の方が多いじゃん。権力者、ないし優れた能力を持つ男が女を大勢侍らせた例なんていくらかもあるじゃない。日本の大奥とかもそうだし……優秀なオスは群れを率いるべきだよ、むしろ。私に言わせれば」

「た、例えば極端っていうか……最後のはほぼ野生動物のものの考え方よね……？」

「そりゃまあ、誰かもわからない女をとつかえひつかえのべつまくな

し、とかならやだけどき……私もきちんと信頼、ないし納得できる相手ならいーかなって思う。麗日とかなら全然」

「ええええ!」

「そういう風に私も納得できて信頼できる女なら、何人いようが気にならないどころか、むしろ誇る気にすらなる。私の男は、これだけ多くのいい女に好かれてるんだぞー! って!」

「な、な……そ、そんな……」

「あっはははは……あーもうダメお腹痛い……いやあ、すごいね栄陽院あんだ、エロゲーから出て来たみたいにも男に都合のいい性格!」

「その分男の理想は高いけどね? まー、中学の時に女子トークでの性癖カミングアウトした時は、そりやもうドン引かれたなあ……いと思うんだけどなあ、ハーレム。あるいは、一夫多妻。ローテーション決めて代わりばんこで妊娠・出産してさ、子供も皆で協力して育ててさ。核家族化で育児の負担が家庭内で大きくなってるのが昨今問題になってるんだから、皆で協力し合える環境が元からできてる形になるんだと思えば心置きなく……」

「もうやめ……もーやめよ、永久ちゃん! 聞いてて生々しすぎ……っていか予想以上に一夫多妻のメリット提示されたっちゅーか、意外に将来のこときちんと考えてて面食らった……ハーレムのことご近所付き合いか地域コミュニティの延長みたいに考えとるコレ……」

「き、きちんと考えているというのでしようかこれは……いい、いずれにせよ、話の内容が衝撃的過ぎて、さっきまでの動揺とかが根こそぎ吹き飛びました……」

「さ、最近の女子高生って……す、進んでるのね……いや、進んでるともちよつと違……ん?」

と、その時、マンダレイが何かに気づいたような素振りをして……男湯との仕切りの方に視線をやった。少しの間、耳を済ませるようにしたかと思うと、

「……雑談はここまでみたいね。男湯……緑谷君が入ってきたわ」

「「ー」」

そう言うと同時に、仕切りの向こうで扉が開く音がして、ひたひたと浴室の床を歩く音も聞こえてきた。かけ湯をしているのか、バシヤバシヤという音も。

お湯のじんわりとした温かさが心地いいのか、『ふう』なんて息をつくのも聞こえた。ああ、確かに緑谷だな。

そもそも宍田は、緑谷や虎、その他全員が入ってから最後に入るって言うてたからな。自分が入ると浴室が毛だらけになるから、最後に入ってから寝るって。律儀。

ピクシーボブがこつちに来ていないってことは、虎さんはまだ晩酌続けてるんだろう。つまり、男湯は緑谷の貸し切り状態と。

今度は、わしやわしやわしや……ごしごしごし……なんて、タオルを泡立てたり、体を洗ってるような音が聞こえて来たな。『ふう……』『あく……』なんていう、力の抜ける声も。

……っていうか、なんか流れでこうなってるけど、女湯の面々、全員黙って男湯の緑谷に聞き耳立てるみたいにして……ははは、コレ普通に考えて男女逆なんじゃ……

——つるん、ごん！

「……………え？」

不意に聞こえた、その不穏な音に、皆の声が揃った。

今、何か鈍い音が……水にぬれた床とかで滑るような音も……おい、これもしかして。

「……………滑って頭打った？」

「……………デク君!？」

その瞬間、脳裏に倒れている緑谷の姿がよぎって……私と麗日は反射的に動いていた。麗日は自分を無重力にし、私は身体能力にものを言わせて、風呂場の仕切りを飛び越える。

「ちよ、ちよっ……お、お2人共!?! そちらは殿方の浴場で……」

「今いるのは緑谷だけだから大丈夫だよ。私も行ってくる!」

体を何十個にも分割して飛びあがり、取陰も追って来た。

「ちよつとあなた達!? い、いくら何でも……っっていうか緑谷君だけだからって大丈夫ではないでしょ!? ああもう、待ちなさい!」

そしてマンダレイは、着替えるか、タオル巻くかしてから追ってくるつもりなのか、脱衣場の方へ走っていった。塩崎は……テンパリすぎて動いていない。

私が見えたのはそこまでで、そのまま私は男湯の方に飛び降り……湯気の中で倒れている緑谷を発見。

麗日と一緒に駆け寄って状態を調べてみて……頭、体……うん、ケガなし。

ちよつとコブになってるから、やっぱり頭打ってるようだけど、大したことなさそうだ。

「ほ、ほんと!? よかったあ……」

「全くもう、人騒がせだなあ……」

麗日と取陰も、呆れつつもホッと安心したようだ。

その2人も含めて見ていて、呆れたようにしているマンダレイ。彼女はバスタオルを巻いてから、脱衣場側から男湯に入ってきて合流した。一緒に緑谷の容体も見てもらった。

よかったよかった、って一安心な空気になったところで、全員ほぼ同時に、はつとしたように今の状況を改めて認識して……冒頭のシーンに至る。

年頃の女子が3人そろって全裸で、ちよつと、いや大分年上ではあるものの、まだまだすごく魅力的な体の大人の女性が1人、バスタオル巻いてるけどやはり裸で、

その中心には、眠るように気を失っている、やはり裸の少年が……コレ、傍から見たら……

「事案」

「ち、ちやうよ! 人命救助、不可抗力、ともかくその、えーと……ち、ちやうんや!」

「落ち着きなつて麗日……ははは、我ながら何も考えずにすつ飛んできちやつたからなあ……あーでもさ、緑谷このままにしとくのはまず

「いよね？」

「そりゃ、無事だったからつてこのまま放置しとくのはアウトだろ。しかし体、泡だらけだな……洗ってる途中だったのか？ とりあえず、お湯で流して着替えさせて……体拭いて服着せて……」

「で、デク君を……寝てるデク君をそんなに……洗って拭いて、服着せて……え、ええんやろか……そんな……」

繰り返すが、緑谷はまるで眠るような穏やかな顔で気を失っている。

いかにも人畜無害そうな、どちらかと言えば地味だが、かわいらしいとも言える顔だ。そんな安らかな寝顔の、しかし裸の緑谷を色々といじくるのを想像して、麗日は顔を真っ赤にしていた。

けどほら、このまま放置してたら確実に緑谷風邪ひくし……やるしかないでしょ。

以下、鮮明に描写すると色々アレなシーンが多いので、会話文と効果音のみでお送りします。悪しからず。

「取陰、そっち持って……はい麗日、お湯かけて流して……」

「はいよー」

「う、うん……で、デク君、かけるね……熱かったら言うてね」

「いや、それでホントに何か言ってきたら大変だと思っただけ……起きてるってことじゃん」

——バシヤバシヤ

「……んんっ……！」

「おー、緑谷気持ちよさそうにしてる。あつたかいお湯かけたからかな？」

「……け、けっこうくるな……じゅるり」

「取陰さん、ちよつと危ないわよ今雰囲気」

「えーつと、緑谷のコレ、パンツとシャツと……ああ、こつちが使用済みの奴かな？ くしゃくしゃだしほんのりあつたかいし。すると

こつちが着替え用の新しい方……」

「……………」

「……………！ おうい、麗日〜」

「ふえ!? な、何、取陰さん!? き、ききき着替え見つかった、つていうか揃ったん?」

「着替えはいいんだけどさあ、緑谷の使用済みのシャツとパンツ、何をそんなに熱心に見てるのかわからなく、と思ってさ? 持って帰っちゃダメだよ?」

「せ、せえへんよそんなこと! それより早く! あ、永久ちゃん緑谷君抱えてきて……っ!?」

「? どうしたの麗日……あ……!?」

「着替え見つかったか、麗日、取陰?」

「あーうん、着替えは大丈夫だけど……その……それ……抱えてるその、緑谷が……」

「で、デク君のデク君が……!」

「あー、うん……あんまり見てやるな。男は寝起きとかどうしてもこうなっっちゃうらしいし……生理現象だ、仕方ないだろ」

「さて、じゃあ体をふいて服を着せるわけだが……この状態だとパンツとか履かせづらいな……」

「……………1回『処理』すると小さくなるんだよね?」

「しよ、処理!? 処理って……」

「あなた達それ以上は流石に見過ごせないわよ!? きちんとした救助行為だから見逃してるけど……不埒な目的でやるようなら……ああもう、体をふくのは私がやるわ!」

「え、何でマンダレイが? ……ひよっとしてマンダレイも緑谷のこ……」

「おバカなこと言ってるんじゃないの! 私は洗汰が小さい頃、お風呂に入れるの手伝ったりしてたから、体拭いてあげるのとかそういうの比較的慣れてるのよ! 服着せるのもね」

「あ、なるほど……でも洗汰君と緑谷じゃ、結構違うでしょ、サイズと

か

「どこの？」

「ど、どこのってそりゃ……」

「どこのじゃなくて全体的にそうでしょうが！ 3人は体を動かしたりして私を手伝いなさい！ 言動とかがもう危なっかしくて任せられないわ……不純異性交遊……」

「裸の男子を色々いじくりまわしてる時点でそんな領域もうぶっちぎってる気もするけどな」

「いらんこと言わない！ もう、ここからさつさと済ませちやいましょう……拭くわよ」

「そ、そこから拭くんですか？」

「気を付けてくださいねーマンダレイ。私の中学時代の友達の話だと、そうなる時の男の子ってすごく敏感で、優しく扱わないと『暴発』しちゃうこともあるらしいんで」

「ほ、ほほほ『暴発』!?!」

「どんな知識持つてる友達がいるんだよ取陰……いやまあ、私もそういう話は聞いたことあるけど(っっていうか前世知識でまさに知ってるけど)」

「だ・か・ら！ 知らないこと言わないのもう、最近の高校生の風紀ってどうなってるのかしら……あなた達に心配されるまでもないわ、デリケートな部分の扱いくらい、ちっちゃい頃の洗汰のでちゃんとわかって……(ごによごによ)……水気を残さないようにきちんと隅から隅まで……っ！」

「「……あ……」」

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

……なんか、よっぽど疲れてたのかな僕……お風呂に入って、途中からの意識がないや……気が付いたら部屋に戻ってきて、布団で寝た。

『掛け布団もかけずに寝ると風邪をひきますぞ！』って宍田君に起こされちゃったよ……ドジだなあ僕。

でも、明日に疲れを残しておくことはできないから、きっちり寝て休んでおかないとね！

……いやでも、なんか、疲れてるっていうか、確かにちよつとだるい気はするけど……その割に、何か妙にスッキリしてるような感覚もあるんだよなあ……何だろうコレ？ 不思議な感覚だ。

まあいいや、おやすみなさい！

「む？ ピクシーボブよ、今日の洗濯当番はうぬではなかったか？」

「そうなんだけど、なんかマンダレイが代わってくれたの。なんか、不注意で洗濯物増やしちゃったから、って」

「ふむ……ジューズでもこぼしたのか……？」

「だ、大丈夫かな……宍田、獣型だから鼻が利くんだけど……マンダレイ？」

「消臭剤徹底的にばらまいたし、置き型の奴も置いたから大丈夫……だと思うけど……。汚れちゃったタオルも、いい匂いの洗剤と柔軟剤たっぷり投入して洗ったから……多分……」

「あ、アレって、あんな色してて……あんな匂いするんやね……知らなかった……」

「おお、神よお許してください……彼女達はただ友を助けようとしただけなのです……！ しかし、あんなことになった彼に何も知らせずに加黙ってゆりかごに戻すような……ああっ！」

「……まあ、もしバレたら素直に謝ろう。緑谷なら許してくれるよ……羞恥心で死にたくなるかもだけど（実際前にも似たようなことあったしな。マッサージの時だったか）」

(な、何が起こったのかあちき、『サーチ』で知っちゃったんだけど……
言わぬが花、知らぬが仏、って諺あるよね……ごめん緑谷君、隠
蔽します。何も知らずに眠って……)

……zzz……

第78話 TS少女とキャンプ場の子供たち

緑谷や永久達の『ワーキングホリデー』、その2日目。

今日彼ら、彼女らは、昨日面倒を見たのはまた別の、少し離れたところにあるキャンプ場に出張して仕事をこなしていた。

……が、その裏で、1つの出会いが起こっていた。

緑谷達と『ワイプシ』に……正確にはその中の1人であるマンダレイについて、そのキャンプ場に来ていた少年……いずみこうた出水洗汰。

彼は、ヒーローが嫌いだった。個性が、そしてヒーロー社会そのものが嫌いだった。

本来、彼くらいの年の頃の子供であれば、テレビで見るヒーロー達に憧れて、『将来はヒーローになる!』などと言っているもおおかしくない。いやむしろ、そっちの方が普通だろう。

しかし彼は、それに当てはまらない。ある不幸な過去が、彼からヒーローへ、そしてそれに連なる全てのものに対する憧れの感情を奪い去っていた。

自分の保護者であるマンダレイ。彼女もまたヒーローであり、彼にとっては好きになれない対象であるが……他に身寄りもない彼は、仕方なくといった様子で身を寄せているのが現状だ。

そんな彼女と、彼女とチームを組んでいるヒーロー達の元に、これからヒーローになるのだという若者たちが集っている今の環境は、彼からすれば一緒にいるだけで虫唾が走るもの。

一緒にいたくないと思った彼は、家を飛び出し、迷子にならない範囲で山に入って、一人でいる時間を過ごしていた。元々彼は、1人である時間が好きだった。それも、ヒーローへの憧れを失ってしまったからだった気がするが。

その日も彼は1人で歩いていたが、歩いている最中、目の前に、普段暮らしている山では見ないような、大きな蛾がひらひらと現れたことで、ぎよつとして立ち止まる。

しかし、別にハチのように刺してくるわけでもない。せいぜいが見

た目が気持ち悪いだけだ。すぐに気を取り直して、しっしっ、と手で追い払う。

少しの間しっこく付きまどっていたが、すぐに蛾は淘汰から離れて遠くへ飛んでいく。

ふん、と鼻を鳴らして歩き去ろうとする淘汰だが、その直後、悲鳴が聞こえた。

いや、悲鳴、というのも少し大ききかもしれない。その声はただ単に、子供が何かに驚いて出したような声だったからだ。驚きこそあれど、恐怖の感情は感じ取れない声音だった。

声は、今蛾が飛んでいった方角から聞こえたようだった。恐らく、アレがまた別な誰か、恐らくは子供を脅かしたのだろう、と淘汰は思ったが……その時だった。

蛾が飛んでいった茂みの向こうに、突然、巨大な獣が現れたのだ。

どこかから走って、あるいは跳んでやってきたわけでもなく、本当にいきなり、そこに。

(……はあっ!?)

それは、一言で言うなら、ショッキングピンクの体色を持つライオンだった。少々ファンシーというか、デフォルメされた形状をしている気もするが。

大口を開けて威嚇するように唸るライオン。その口元によく見れば、驚いて逃げていく蛾を見ることができたが……淘汰からすればそれどころではない。何せライオンは、淘汰のいる方目掛けて、のっしのっしと歩いてくるのだから。

「わっ、わっ……わああっ!?!」

ほとんど反射的に、淘汰は自分の『個性』を使っていた。両親から受け継いだ、手から水を放出する個性を、そのライオンに向けて放っていた。少しでも怯んでくれれば逃げられる、出来ればこれでそのまま逃げだしてくれ、と、パニック寸前の頭で考えながら。

しかしその時、不思議なことが起こった。

水はライオンの顔にかかる……かと思われたが、そうならずすり抜けてしまったのだ。ライオンなどそこにいないかのように、背後の

草むらの中にふりかかつて落ち……

「んきやあああああああ?！」

代わりに、甲高い……女の子のような声が聞こえて……次の瞬間、ライオンはまるで幻だったののように消えて失せた。

何が起こったかわからず、唾然としている冼汰。

するとその目の前の茂みから、小さな影が飛び出し、猛烈な勢いでこっちに走ってくる。

頭のとっぺんからびしょぬれになって、半泣きになりながらも、肩を怒らせて睨みながら。

「ちよつとお!? 何よ今の水!? 冷たいんだけど!? 思いつきり濡れちやつたんだけどお!?」

「えつ……えつ!? な、何だよ、誰だよお前!?」

「あんたが誰よ!? つか今の水あんたの仕業!? 『個性』か何か!? 何すんのよいきなりイ!?」

「お、お姉ちやーん!? どこー、大丈夫ー?」

「こつちよ活真! で、あんた誰よ!?」

「あ、俺、出水冼汰……って、何言わせんだよ!? つかお前こそ誰だよ!?」

「私は島乃真幌! キャンプで家族でここに来てんのよ何よ文句ある

!?! てかあんた誰よ!?!」

「いや今もう名乗っただろ!?!」

その後、出会いがしらの勢い10割の口喧嘩(というか真幌の一方的な罵倒)をどうにか収めて、冼汰と真幌、そしてその弟の活真は、ひとまず座って休めるところにいた。

と言っても、森の中にある倒木がちょうどいいベンチのようになっているというだけの場所だが。

「こつち見るんじゃないわよ、スケベ」

「誰がスケベだ! 見ねーよ、ちつ……」

真幌は今の冼汰の水流で濡れてしまった服を脱ぎ、軽く絞って水を切っていた。その間、冼汰は彼女に背を向けて立っている。何も興味

なざげにはいるが、顔が少し赤く見える。

なお、こうなるに至った経緯は、口喧嘩を収めた後の話し合いの中で一応、双方把握していた。

洗汰が追い払った蛾は、真幌達の方に逃げていったのだ。

突然飛んできたそれに驚いてしまった活真を守るため、真幌が自分の個性『ホログラム』で幻のライオン（シヨツキングピンク）を出して蛾を追い払ったのだ。

しかし今度は洗汰がそれに驚いてしまい、追い払おうと水を放った。

『ホログラム』で出したライオンは、実体のない幻、言葉通りの立体映像である。見えはするものの、そこにあるわけではなく、触ることはできない。

ゆえに、水はライオンを通り抜けて、その向こうの茂みの中にいた真幌にかかってしまったのだ。

結果、水をぶっつけた洗汰も悪いが、驚かせた真幌も悪いということになって、話はおしまいに。

割と最後の方まで両者は『自分は悪くない』と譲らなかつたし、今だって険悪な雰囲気を感じそうともしないのだが。

しかしそんな2人の距離は、ある話題を真幌が口にしたことよって変わっていくこととなる。

服の濡れた部分を絞って水を切った真幌は、不快感を感じながらも、我慢してそれを着た。

「もお、びっしょりびっしょりじゃない……ってかあんた何してたのよ、あんなところで」

「……うっさい。俺がどこで何してようと勝手だが」

『個性』の訓練でもしてたの？ ヒーローになるための特訓とか、そんな感じ？」

何気なく、というかほぼ思い付きや勢いで言われたのであろうその言葉だった……洗汰にとっては劇薬だった。

一瞬でカツとなった洗汰は、ほとんど怒鳴りつけるように言い返そうとして……しかし、その次の言葉を聞いて、それを止めた。

「あーやだやだ、どいつもこいつもヒーローヒーローって……わけわかんない。そんなにヒーローなんてもんになりたいわけ？」

(……えっ?)

冨汰にとつては、ある意味衝撃的なことだったかもしれない。

自分のように特殊な事情がある者を除けば、ほとんどの子供……それこそ少なくとも、冨汰が普段通っている学校の同級生などは、1人残らずヒーローが大好きで、あこがれている者ばかりだ。言うまでもないが、『将来はヒーローになる!』と言っている者も1人や2人ではない。

というよりも冨汰は、記憶している限り、ヒーローになる・ならぬいならばともかく、遠回しにでも『ヒーローが嫌い』だというような発言をする者を、自分以外で知らなかった。

ふと見ると、真幌の横で……活真はどこか、悲しそうな、しゅんとした表情になっていた。真幌の今の言葉を聞いて、かもしれない。

そんな活真の表情を見て、真幌も少し悲しそうだが、何も言おうとはしない。

妙な空気を醸し出している姉弟の姿に、思わずといった調子で冨汰は聞いていた。

「……ヒーロー、嫌いなのか？」

「えっ?! ぼ、僕は……好き、だけど……」

「あたしは嫌い」

今度こそ、真幌ははつきりとそう言った。

「だって、危ないもの。災害とか、事故とか……『敵』とか。進んでそんなのに向かってくとか……それで怪我したり、死ぬかもしれないのに、わけわかんない」

冨汰が見ている前で、やや乱暴な口調でそう言う真幌だったが……その目は、ちらちらと弟の活真に向けられていた。そして、目には口調とは裏腹に、優しい、心配するような光が宿っていた。

それだけで冨汰には、真幌がどんな気持ちでその言葉を言っているのか、何となく察することができた。

単なる好き嫌いではない。この少女は……誰かを心配して、大切に

思うからこそ、ヒーローという職業や、その仕事を否定しているのだと。

「……俺もだ」

「？」

「……俺も、ヒーロー……嫌いだ。ヒーローも、『個性』も……強くて、かっこいいのがいいことだって。頑張つて危険に飛び込んで、人を助けるのがいいことだって……そんなの、下らん」

「……………」

そして、真幌と活真もまた……よくはわからないが、目の前の少年が、何か重苦しいものを心の中に抱えて、その言葉を言っているのだということ、何となく察していた。

「……あんた、名前何だっけ？」

「もう忘れたのかよ……出水洗汰だよ」

「そっか……よし洗汰、じゃああんた、私の服濡らした罰として、今日1日私の子分ね！」

「はあ!? 何でそうなる!? おい、ちよつ、ま……待てよ!？」

この後、何だかんだで3人は意気投合し、自然の中で思いつきり遊ぶこととなる。

どこか沈んでいた空気を嫌って、真幌が男2人を引っ張つて、あるいは振り回して明るい空気を振りまいた結果のことだったように見えたが……少なくともその選択は、失敗ではなかっただろう。

振り回されながらも、よく見なければわからない程度に楽しんでいった洗汰。

さつきまでの毒舌はどこへやら、普通に楽しんで笑顔を振りまいている真幌。

険悪な空気がなくなつてほつとして、素直に新しい友達との遊びを楽しむ活真。

本来の歴史では、出会うはずのなかった3人。

彼らがこうして出会ったことで、何が変わり、何が起るのか……今はまだ、誰も知らない。

☆☆☆

今日も今日とて、昨日と同じ感じでローテーションで仕事に当たっている。

午前中にパトロール。午後の一発目は、私と取陰は休憩なので、食休みもかねてのんびり事務室で待機しているところだ。他愛もない雑談をしながら。

「へー、じゃあ取陰のそのコスチューム、破けたり欠けても自動で再生するんだ？」

「そーだよ。私の『個性』柄、体に合わせて服も再生させないとき、ちょっとと刺激的なことになっちゃうからさあ。いや、最近の技術力つてすごいね」

取陰の個性『トカゲのしっぽ切り』は、体を何十個にも分割して操作できる個性だ。自在に切り離し、飛ばして動かし、元通りくっつけることができる……ぶつちやけバ○バラの実である。

その状態でも各種感覚機能は繋がってるので、例えば、目とか耳だけを遠くに飛ばして、遠くの景色を見たり、音を聞いたりして索敵する、なんて使い方もできるそうさ。

ただし、体の一部を飛ばす速さや勢いはそこまでではないので、ロケットパンチみたいに遠距離で有効打を与えるような攻撃は難しいらしいが。

そして、この分割した取陰の体は、体に戻せば元通りにくつつくらしいが、切り離れたままだと一定時間で動かなくなり、本体の方で『再生』させられるらしい。そんな部分まで、ホントにトカゲみたいな能力なわけだ。

ただし、再生にはそれなりに体力を使うため、出来れば体のパーツはきちんと元に戻すようにしているそうだが、それでも、欠けても再生できるっていう点は大きい。いざという時には、文字通りの『トカゲのしっぽ切り』の要領で、身を捨てる手段を取る場面もあるだろう。

そんな使い方をする時にも困らないように、取陰のコスチュームに

は『再生機能』がつけられている。

例えば、取陰が右足から先を切り離して、そのまま何らかの理由で体に戻せず『捨てた』場合、普通の素材のコスチュームとかだと、体だけ再生して服は破棄したままだから、素足になっちゃうわけだ。

しかし取陰のコスチュームは、体に合わせて服が再生するようになっていて。ゆえに、ただ切り離している段階では再生はしないが、右足を再生させた時には、コスチュームも再生する。

そのため、体だけ再生して服は再生しない、体は治ったけど服は穴だらけでいやーん、なんていうお色気アニメみたいな事態にはならないようになっていてるわけだ。科学の力ってすげー。

「栄陽院の服にはないの？　そういう面白機能」

「面白……うーん、ないかなあ。私のは基本、頑丈さと動きやすさだけ重視したもんだから。『個性』自体も、コスチュームの材質や機能に左右されるようなもんでもないし」

「ふーん……そんなもんか。まあでも、B組でも鉄哲とか穴田とか、単純な肉弾戦ないし増強系の戦闘になる個性はそんなもんだって聞いたっけな。せいぜい、強度や伸縮性、武器になる部位の装甲とかを頑丈にするくらいだって」

そうそう。緑谷もまさに……いや、でもアイツは最近、色々とコスチューム改造して機能性を豊かにしてきてるらしいな……。

『デウス・ロ・ウルト』での改修もそうだけど、学校で手軽にやる範囲での改良もよく利用して……たしか、サポート科の発目ってのとよく話してるって聞いたな。今使ってるグローブも彼女のデザインで作った奴で、空気弾を狙った場所に飛ばしやすくなってるんだっけか。

ここからさらに本格的にコスチューム弄る段階に入るらしいし……ひよつとしたら私のコスチュームも、初代の改造学ラン、二代目の軍服に次いで、また改良される段階になるのかも？　だとしたらそれはそれで楽しみだ。

そのまま取陰とは、お互いに『今のコスチュームを改良するならどうすべきか』みたいな話題で盛り上がった。これから強力なヴィラン

と戦う機会もあると思えば、そういうのを見据えて改良を進めなきゃいけないかもしれないし。

私も取陰も、そういう機会に1度以上直面してる者同士、リアルな危機感を共有して話し合うことができたから、割と建設的な意見交換ができたな。

けど、そのヴィラン云々ってところで、ふと気になったことがあったので、ついでに私は取陰に聞いてみた。

「ところでさ取陰……昨日話してた『ワーキングホリデー』の時に巻き込まれたっていう事件のことなんだけど」

「うん？ ああ、アレね……それがどうかしたの？」

「なんか聞いた限りだと、薬物取引とか人身売買とか、結構な大ごとに関わってるんだけどさ……その事件。なのに、そういうニュース全然私聞いたことないな、ってふと不思議に思ったんだけど……もし、私が聞き逃したり見逃してるとかじゃなければ、その事件、故意に伏せられてる？」

昨日聞いた時は、緑谷との恋愛事情に意識が行ってすぐには気づかなかったけど……取陰と塩崎が巻き込まれた事件って、内容からしてもけっこうヘビーな奴だよな？

なのに、全然そういうのがニュースになってる気配どこにもないんだよな……検索してもヒットしないし。

そう話したら、取陰は『あー、言っただけ』と今思いたしたように。

「うん、その話……なんだか、別件の捜査に差し障るとかで、大っぴらに公表はされてないみたいでさ。どうも、摘発した組織が予想以上に根が深くてさ……他の敵団体とも結構つながりがあったとかで……そっちの捜査してる他のヒーロー事務所と話し合っただけで……だつて。その事務所が抱えてる案件が片付くか、ひと段落するまでは公表は差し控えるって」

「へー……まあ、人身売買なんてヤバいことやってる組織なら、そういうこともあるのか。でも、そのさらに元締めっぽいことやってる組織って、相当ヤバそうだな……まさかとは思うけど、『敵連合』じゃ

ないよな？」

「あはははは、違う違う、そういうのじゃなくてもつと……あー、具体的な名前までは聞いてないんだけどさ、『指定敵団体』って奴だったと思う。何だっけ……ヤクザ？」

「ヤクザ？　つて、あの……絶滅危惧種の？」

「そうそう。最早天然記念物だつて言われてる、あのヤクザ」

ヒーローの台頭以降、解体・弱体化が進んで、さらに個性犯罪で古い運営体制のそういう連中は徹底的に淘汰され、あるいは摘発されていった。今じゃ、存在自体が骨董品とかレア度高めな扱いされてるんだよな、あのへんの団体。恐れるよりも先に物珍しさが来るレベルだ。

ただ、危険度はそれ相応にあるらしいから、関わるべきではない相手なのはそうだし、警察とかからも年中マークされてる『指定敵団体』なんて扱いをされてるそうだが……なるほど、今回の件をきっかけに、その捜査とやらも進んで、上手くすればその天然記念物も摘発できるかもな。

どこの事務所が捜査してるのか知らないけど、上手くやってくれば、また平和に……

『こちらマンダレイ！　チームメンバー及び『ワーキングホリデー』生各位、非常事態につき『テレパス』で通信しています、全員そのまま聞いて！』

「!!」

突如、何の前触れもなく頭の中に響いた声。

一瞬してそれが、自分でも言っていたように、マンダレイの『個性』……頭の中に直接言葉を贈ることができる『テレパス』による遠距離通話（ただし一方通行）だと理解する。

そしてこれも言っていたけど、無線とか電話での通信じゃなくて、マンダレイが『個性』を使って連絡してくるっていうこの事態は……何か普通じゃないことがあったってことだ。

どこか知られていた雰囲気や即座にただし、私と取陰は立ち上がって声に耳を傾ける。

『キャンプ場の職員から連絡があつて、キャンプに来ているお客さんの子供が2名、行方不明になっているそうよ！ 森で遊んでくると言つたきり昼食時間になつても戻らず、遭難した可能性あり！ キャンプ場の管理・監督は現場職員に任せられることになったから、休憩班、キャンプ場班も加わつて総員で捜索します！ 打ち合わせするか30分以内にコテージ1階の会議室に集合！』

「……取陰」

「わかつてる。私達は会議室と……物資の準備しよ」

それだけ言葉を交わし、私と取陰は動き始めた。

だがこの時、私達は気づいていなかった。

行方不明になつてゐるのは、その2人だけではないということに。普段から近くにはいないから気づけなかつた、というか、問題視することもできていなかったけど……もう1人、行方不明になつてゐる少年がいたことに。

そして、この『遭難者捜索』の一件が……この後、予想だにしない展開というか、大事件へと発展していくことになる、ということ……まだ誰も知らなかつた。

第79話 TS少女と遭難者捜索

打ち合わせの場で、色々な情報共有を行った後、私達はそれぞれ担当地区を決めて捜索に出た。

いなくなったのは、本州から遙か南に位置している離島『那歩島』から家族でキャンプに訪れていた、島乃真幌ちゃんと活真くん。

お母さんは……どうやらないらしく、お父さんと3人でここを訪れていた。

聞けば、2人は普段から、出稼ぎで基本的に本州・都心にいるお父さんとは別れて暮らしているらしく、年のわりにしっかりしている。そのため、野外でも危険な遊びはしないし、帰って来れないようなところにはいかない。むしろ、自然が多く残る島で育ったために、そのあたりは普通の都会の子供よりよほどしっかりわかっているのだという。

そう思つて油断して目を放してしまった。『お昼ご飯までには帰ってくるんだぞ』といつて、山で遊びたいという2人を送り出してしまい、気が付いたら戻つてこなくなったそうだ。

……親としてそれはちよつとどうなんだ、と思うのは私だけだろうか。

しっかりしてるとはいえ、聞けばまだ小学校低学年か中学年くらいの子供のようだし……むしろ、普段触れ合う機会のない子供達なんだから、傍にいてあげた方がよかつたんじゃないかな。

いや、人の家の家庭事情に首突つ込む気はないけどさ……

ハイキングコースをいくら探しても見つからないのでキャンプ場のスタッフに相談がいき、それでも見つからないので、緊急だと判断して私達に話が来たわけだ。

ともあれ、小さい子供2人が山で遭難なんて、成人に比べて危険度が段違いだし……それに加えて、明らかに非常事態……いや、『異常事態』だと判断する根拠がもう1つあった。

ラグドールが、『個性』でその追跡を行えなかったのだ。

彼女の個性『サーチ』は、目で見た人の様々な情報が100人分まで丸わかりになる、非常に強力で便利な『個性』だ。もちろんそれは、居場所や、状態なんかも含まれる。

彼女はそれを利用して、今日のキャンプ参加者全員を今朝、一度視界に収めている。万が一迷子になる人が出ても、即座に追跡して救出できるように。

だから今回みたいなケースは、ラグドールがいる限り緊急性は本来、ないのだ。彼女の情報提供を受けて、マンダレイの『テレパス』での指示を聞きながら、パトロール班がすぐにそこへ駆けつければ、それだけで解決するから。

しかし、それができなかった。『サーチ』でその2人の行方を追えなかったのである。

考えられる可能性は2つ。

1つは、ラグドールの『サーチ』が届かないほど遠くに行ってしまったか。

もう1つは……何らかの理由で『サーチ』によるマーキングが解除されてしまったか。

どちらにせよただ事じゃない。この短時間で、子供の足で、しかも山を歩いて『サーチ』の範囲外に出るなんてことは不可能だし……後者の理由はどういいうわけでそうなるのか予想もつかない。

幸いと言っていいのか、事故か何かで亡くなってしまったから、という可能性はない。死亡したならしたで、彼女の『サーチ』はそれすら判別できるから。

私は例によって取陰と組んで、担当する地区内を探し回った。取陰は、許可取った上で『個性』もフルに使って。

しかし、見つからない。通信越しに、誰かが見つけたという報告も一向に入らない。

それどころか……さらにとんでもない報告まで入ってくる始末だ。

「はあ!? 洸汰君もいない!?!」

『そうなの! いつまで経っても戻ってこなくて……『テレパス』で指示してからもう1時間近く経つのに……!』

搜索開始から小一時間経ったくらい時間に、突如マンダレイから追加の通信が入った。『テレパス』ではなく、オープンチャンネルでの通信で。双方向にやり取りできるように。

コテージの事務室での打ち合わせの時、その場に洗汰君はいなかった。

例によって一人で遊びに出てるんだと思っていた私達は、それを特に気にしないでしまった。ラグドールの『個性』で監視してるのはキャンプ客だけだったから、私達や彼は、その時点では『サーチ』の対象外だったし。

それでも、マンダレイが『テレパス』で『非常事態だからコテージに戻って!』と指示を出したし、彼も彼でしっかりしてるから大丈夫だとは聞いてたんだけど……

なお、今回は役割分担で、コテージに司令塔として塩崎とマンダレイを残し、他全員で搜索している形だ。すれ違いで、自力でコテージに戻ってくる可能性もあったし、必要に応じて山の地図やハザードマップなんかを参照する必要もあったから。

『それだけじゃないの! ごめん、この情報、もつと早く手に入れられてればよかったんだけど……』キャンプ客の子供たちの中に、例の姉弟2人が、角みたいな飾りのついた帽子をかぶった男の子と一緒にいたのを見たって子がいて……』

「……あのガキンチョ、そんな帽子被ってなかった?」

「被ってた。刺さったら痛いのかなってどうでもいいこと考えてたから覚えてる」

「……ってことは……遭難者(多分)3人かよ……ていうかいつの間になんな友達作ってたんだ、あの、なんかコミュニケーション能力に難がありそうな感じの少年が。」

幸いと言つていいのか、3人共山歩きや自然探索なんかにはなれる様子だけど……いや、逆にそんな面子が揃ってどうしてこんなことになってるのかって不安も大きいな。

あまり考えたくないけど、何か事件に巻き込まれた、なんて可能性は……

通信の向こうで、緑谷の声で、

『他に何か情報ありませんか？ 捜索に役立ちそうな……後は……洗汰君の『個性』は？』

『役立つかどうかはわからないけど……洗汰のは水の『個性』よ。親譲りの……手から水を勢いよく放出できる『個性』！ あの子、私達に隠れて『個性』の訓練とかしてたみたいだから、その気になれば結構な量と勢いで放出できると思うけど……』

「……ん？ 水？ ねえちよつとダイナージャこつち来て！ 何か見つけたかも！」

と、それを気いた瞬間、取陰がはつとしたように言った。

インカムでの通信越しにそれは全員に聞こえたようで、『どうした!?』『何かあったの!?』と声が聞こえてくる。マンダレイの声が一番必死そうだな……当然かもだけど。

その取陰だが、現在左目と左耳がない。あちこちに飛ばして情報を集めてるせいだ。

「なんかこう、上手く言えないんだけど……飛ばした目で、めっちゃ水に濡れてる岩壁みたいの見つけて……ここから南西に少し行った川岸！ これからちよつとそこ2人で行ってきます。何か手がかりとかがありそうならまた連絡……」

『待て、それならば痕跡探索になれている我らからも1人そこに向かった方がいい！ 不慣れな者では見逃してしまうやも知れん！』

と、取陰のセリフを聞いて虎さんがそれを止めるように言う。次いでラグドールが、普段のお気楽な感じの声のトーンを捨てて、真面目なトーンで矢継ぎ早に、

『位置的には……ピクシーボブが一番近い！ マップ確認、経緯度●●●——●●●！ リザーデイとダイナージャに合流して現場を調べて！』

『了解！』

そのすぐ後に私達は、リザーデイが見つけた痕跡の場所に来た。

そこは、ラグドールが言っていた通りの川岸で、岸壁に……結構乾

きかけだけど、広範囲、それも高い位置にまで水に濡れた痕跡があった。

すぐそこに川が流れているとしても、あんな所までは濡れないだろう……大雨で増水したとかならともかく……水しぶぎとして見るにはピンポイント過ぎるし。地形からして、上から何か水が垂れて来た感じでもない。

少ししてピクシーボブも合流し、皆でその場所を調べていたんだけど……流石の観察眼というか、ピクシーボブが何かを見つけた。

『これ見てー!』と呼ばれて行った私達に向けて、それを指し示して話す。無論、コスチュームに内蔵された通信をONにして、全員に聞こえるように。

「これ……何ですか？ 何か、岩の一部が、硬いものでこすられたような感じになってますけど」

「多分だけどコレ、形状からして係留ロープの跡だよ。ボートとか停める時に括り付けて、流されないようにするやつ。碇みたいなもん。これがこんなところにあるってことは……」

「ここにボートか何かが停まっていた？ ……そんなもの止められるほど広さも水深もないと思いますけど……」

「こんな浅瀬にそんなもん持ってきたら、速攻で座礁すると思うんだが。」

しかしピクシーボブは、周囲の地形をすばやく確認して……周囲の岩にも同じような痕跡をいくつも見つけ出した。さっき見たのよりもずっと小さい痕跡も見逃さずに。

その位置関係を考えて彼女が出した結論は、小さ目のゴムボートとかカヌー、カヤックなら不可能じゃない、というもの。

「どうしてそんなものがここに停まっていたのか……誰が何の目的で停めておいたのかはわからないけど……仮にこの水の跡が冨汰君の『個性』によるものだとしたら……」

「冨太君……あるいはその2人の子は、ゴムボートですずっと遠くに流された可能性があるってことですか!?!」

「ちよっ……それまじいんじゃない……この川、結構流れ速いよ!?! もし

そうなら、ラグドールの『サーチ』の範囲から出ちやってもおかしくないかもだけど……万が一落ちたりしたら……つていうかなんでそんなことに!? 係留されてたボートのロープに悪戯でもしたとか!」「私に聞かれてもわからん! とにかくこれ思ったより深刻! マンダレイ! 聞こえる?」

『聞こえてるわ! すぐにその川の流域に活動範囲のあるヒーロー事務所と、管轄の警察署に連絡を入れて応援を要請する! ピクシーボブ、リザーデイ、ダイナージャはその川の下流域の搜索を、虎とラグドールはその分の搜索面積のカバーをお願い! 念のため他のエリアの搜索も同時進行で進めるから!』

それからしばらく、付近のヒーロー事務所も巻き込んで探し回ったけど……手がかりはほとんど見つからず、時間ばかりが過ぎていった。

全く見つからなかったわけじゃない。子供3人が歩いた後思しき足跡や、それ以外にも水の痕跡が見つかったりもした。近くに水場がないのに明らかに不自然なほど大きな水たまりがあつて……しかもそれが木陰で、乾きが遅かったようだからわかつたらしい。ぬかるんだ地面には、既に乾いてしまった部分も合わせて、子供用の靴の足跡が残っていた。

ちなみにそれを見つけたのは緑谷と麗日だ。そして、それを追って歩いてきたところ……足跡は途中で途切れてしまったものの、私達が痕跡を見つけた川岸近くにまでそれらは伸びていた。懸念していた事態が、より一層現実味を帯びた結果になった。

時刻はもうじき夕方になる。暗い時間帯の搜索は、探す方も危険だ。あと1時間かそこらで今日の搜索は打ち切りになってしまう。

そんな風に考えて、焦り始めた私達の元に……その数分後、予想外すぎる方向から情報が入ってきた。

☆☆☆

それから数時間後。

夕方どころかもうそろそろ日も暮れそうになっている時間帯。

私達は……捜索場所から遠く離れたある場所にいた。

といっても全員ではなく、ワイプシからはマンダレイとピクシーボブが、雄英生からは、私、取陰、緑谷、麗日の4人がここについてきている。痕跡の発見や、その他色々な意味での当事者だ。

ついさつきまで、『打ち合わせ』ないし『引継ぎ』を行っていたんだが……今はとりあえず、休憩ってことで、客間みたいな部屋で休ませてもらっている。

で、ここがどこかって言うと……海難ヒーロー『セルキー』の事務所である。

「けろ……大変だったわね、皆」

「今はとにかく、私達に任せてゆつくり休んでください。引継ぎが終了した以上、私達も動くことができますから」

と、聞きなれた声と聞きなれない声の両方が耳に届く。

片方はまあ、口癖から蛙吹……もとい、ここでは『フロッピー』——だというのはわかると思うが、もう1人は、この事務所に勤めるヒーローの1人、『シリウス』さんである。顔の横にひれみたいなのがついているのが特徴の、セーラー服が実によく似合う美少女だ。

個性は『グッドイヤー』。耳がすごくいい。可聴域外の音を拾ったり、超音波なんかを聞き取ってエコーロケーションみたいなことをすることもできる。

さて、どうして私達がこんなところにいるのかといえ、夕方も近づいたところに入った通信により、例のゴムボートがようやく発見されたからだ。

しかしそれが発見された場所は、私達がいた地点よりはるか下流。時間ずっと流されっぱなしでもたどり着くかどうかというほどの場所というか位置だった。

それこそ、沿岸付近を縄張りしている、このセルキー事務所の活動範囲にギリギリ入ってしまったっているほどの位置だった。当然のよ

うに県境も超えている。

加えて、強烈に違和感を覚える……というか不自然な点があった。そのボートに残されていた痕跡だ。

まずそのボートだが、救命ボートみたいな簡易的なものではあつたのだが……動力付きだった。ある程度練習すればだれでも使えるような簡単なエンジンがついたもので、手でこいだりする必要はなく、手漕ぎ式よりも速く移動できる。

そしてその動力には、満タンまで燃料が充填された痕跡があり……しかし発見された当時にはほとんど残されていなかった。つまり、動力を使って移動してきたということだ。

次にそのボート、どう見ても子供2〜3人が乗っていただけの痕跡ではなく、成人男性かそれに準ずる体格の者が複数人、2〜3人は乗っていたような痕跡だった。それでいて、子供が乗っていた痕跡もあつた。土足の足跡なんかはその代表例だったようだ。

また、ボートには毛髪が残されており、そのうちのいくつかは、明るい茶髪。DNA鑑定の結果、真幌ちゃんと活真君のお父さんとの親子関係が認められた。つまりは彼らの毛髪だ。

そしてそして他のものうち、黒色のものの1つは、コテージの枕に残っていた冼汰君のDNAと一致。この時点で、彼らがこのボートに乗っていたことが確定した。

そして一番重要なのがここなのだが……それらの毛髪以外にも、まだいくつかの毛髪が残っていたんだけど、そのうちの1つが……警視庁のデータベースに登録されていた、前科のある犯罪者のDNAと一致した。

動力を使って移動した形跡のあるボート。

大人数人と、真幌ちゃんと活真君、そして冼汰君が乗っていた痕跡。さらに大人の1人は前科者の犯罪者。

予想をはるかに上回ってまずいことになっている。彼らは何か、事件に巻き込まれてしまっている可能性が非常に高い。

ゆえに、情報提供と引き継ぎのためにこうして、私達は直接セルキー事務所を訪れ……しかし日中からずつと動きっぱなしだったこ

とで疲労が蓄積していることを指摘され、しばらく休んでいるよう言われてここに通されたわけだ。

今、蛙吹とシリウスさんから出されたコーヒーその他を飲んで休んでいる所だ。

マンダレイは最後まで『協力させてください！』って言ってたが、セ ルキーさんは頑として『今は休め』の姿勢を崩さなかった。肉体的にはともかく、精神的には無理をしてるのが丸わかりだったからだ。それこそ、素人の私達にも。

今は部屋に置いてあるソファに腰かけて、うつむいてじつとしてい る。食欲がないのか、出されたコーヒーにもお茶請けのお菓子にも手 を付けた様子はない。

ピクシーボブ曰く、『彼女もきちんとプロだから、少しすれば調子を 取り戻す。今はそつとしておいてあげて』とのことだけど……

「心配はいらないわ緑谷ちゃん。セルキーさんはこの辺りの地形は、 海だけじゃなく港湾周辺まで含めて知りつくしてるし、周辺のヒー ロー事務所とのチームアップも既に済んでるわ。もつとも、それは別 件での協力を見据えてのものだったようだけど……きつと見つかる わよ」

「そう、かな……うん、そうだよね。ありがとう梅雨ちゃん」

「けろ、いいのよ。不安になる気持ちはわかるし、緑谷ちゃんは優しい ものね」

視界の端では、同じように不安になってそわそわしている緑谷を、 コーヒーのお代わりをもってきた蛙吹が慰めていた。表情は変わら ないけど……それなりに長く一緒に過ごしていると、彼女の表情とい うか感情の微妙な変化もわかるようになってきている。今は、不安が る緑谷を慈しみ、労わるような感じのそれになっている。

隣にいる麗日は、緑谷が少し楽そうになってよかつたと思っっている 反面……女としてだろうか、少し複雑な気分にもなってるように見え た。

そのまましばらく部屋の中が静かだったんだが、ふいに、ソファに 座っていたマンダレイが、『ごめんなさい』と、眩くように口を開いた。

さつきより少しは落ち着いたようだが、依然として悲痛そうな表情である。

「私がつともしっかりしていれば……こんなことには……」

「何言ってるのよマンダレイ。この事件であなたに責められるような個所なんでないでしょう？　行き過ぎた自意識過剰な罪悪感なんて持ってても、誰もそんなの求めてもないわ」

少し強めの口調で、ぴしゃりというピクシーボブ。

「ラグドールの『個性』による監視だって、彼女の脳のキャパシティがある以上、常に全員を見ていられたわけじゃない。キャンプは人数も多いし、範囲も広がったからね……走り回るから小さな怪我をする子なんて珍しくもなかったから、対処に忙しかったんでしょ？」

「それでも……請け負った以上は仕事は果たさないとイケなかったはずよ。それに、仮にキャンプ地の方は多忙で限界があつたとしても……私は、淘汰の保護者なのよ……あの子のこと、きちんと見てあげるべきだった……仕方ないなんて思って、距離を置いたりせずに……」

その言葉に、緑谷がふと何か思いついたように聞いた。

あるいは、今のこの空気を、どうにかして方針転換させられないかとか思ったのかもしれないが。

「あの……気になってたんですけど、マンダレイの従甥なんですよね、淘汰君って？　どうしてマンダレイが面倒を見てるんですか？　ご両親とかって……」

ただなあ……この手の話題は、えてしてもつと重い話につながりかねないんだが……

それを予想していたかどうかはわからないが、緑谷も少しして『あれ、まずいこと聞いた？』って表情になったものの、マンダレイはどうやら隠しておく気はないらしく、

「そうね、話しておいた方がいいか……淘汰の……あの子の両親はね、2人共プロヒーローだったの。でも……殉職してしまったのよ」

☆☆☆

沿岸部のすたれた倉庫街に、今はすでに潰れてしまった会社の、もう長いこと使われていない倉庫や工場がある。

一時期は不法就労者の温床になっていた場所だが、最近では電気もまともに通らなくなり、不法就労すらできなくなってしまうたとして、誰も手をつけないまま放置されている。

そこに今夜は、やけに多くの、しかも身なりを小綺麗にした人間たちが集っていた。

もつとも、小綺麗という以外にも、やたらと奇抜な恰好が目立つ者達でもある。

大きく2グループに分かれ、向かい合う形を取っている。まるでこれから、悪の組織同士が裏取引でも進めるかのような光景だが……実際その通りだ。

片方は、ペストマスクや、それに似た形状の仮面を顔に装備している者達。大柄なものからやたらと小柄なもの、若い者から壮年の者まで様々いるが、どうやらその中心にいる、年若い、しかし隙の無いはずまいの青年が彼らのボスのようだ。

そしてもう片方の団体は、大きく分けて2種類の構成員がいるようだ。作業用のツナギに身を包んでいる者と、背広など正装を纏っている者。そしてその中心にいるのは、スーツに加えて、厚手のコートと、なぜか潜水用のマスクのようなものをつけて、顔を半分隠している男だ。

双方のボスと思しき2人の視線が交差する。

「遅かったな……『キュレーター』」

「遅いって、約束の時間より15分も早く来てるんだがな……ああ、日本のヤクザは30分前行動が基本だっけか? 『オーバーホール』?」

「……まあいい、さつさとビジネスの話に移ろう。品物はきちんと持ってきてるんだろうな?」

「当たり前だろ。そっちこそ……? 何だ、事前の話にはなかったモノが転がってるように見えるが……いつから『死穢八斉会』は人身売買なんぞ始めたんだ?」

「別に。部下がバカやってな、成り行きで攫って来たガキだ。これから口封じするところだが、お前のところは人も取り扱ってたと思ってる？」

「欲しけりや安くしとくが、どうする？」

男達の視線の先。

そこには……薬で眠らされ、ピクリとも動かないでいる……茶髪の姉弟と、黒髪の少年が、手足を縛られた状態で床に転がされていた。

第80話 TS少女と湾岸騒乱

『ウォーターホース』という名のヒーローがいた。

彼らは、夫婦でチームを組んでヒーロー活動を行っている珍しいタupesのヒーローであり、対敵はもちろん、水難救助や火災現場の消火活動などにおいて、目覚ましい活躍を見せるヒーローだった。

しかし彼らはある時、ある強力な『敵』の手によって殺されてしまう。

一般人を逃がすため、助けるために懸命に戦い、敵の顔……左目に深手を負わせることに成功するも、2人共が帰らぬ人となった。

その、たった一人の息子を……出水洗汰を残して。

彼にとって不幸、ないし最悪と呼べたのは、両親の死もあるが、むしろそこから先だった。

一般人を守って死んだ『ウォーターホース』のことを、周りの人が彼の前で、こぞつて褒め称えたのだ。立派に戦ったのだと、彼らは無力な一般人を守ってその命を燃やしたのだと。誇っていいのだと。

自分の両親の死を、たとえどんな形であれ肯定されるようなことを言われた少年が、どんな風に思うかなど、考えもせず。

かくして、両親の死を呼び込んだとすら言える『ヒーロー』そして『個性社会』への不満感を、恨みすら募らせた彼は、これまで誰にも心を開くことなく生きてきた。

従叔母であるマンダレイに引き取られてからも、ヒーローである彼女達に心を開くことはなく、しかし身寄りが彼女達しかないから、仕方なく従っていたような形。

そんな彼のことを心配に思いながらも、『ヒーロー』である自分の言葉では彼の心を救えない、彼の心には届かないと諦めてしまっていたマンダレイは、時間が心の傷を癒してくれるのをじっと待つことしかしてこなかったし、できなかった。

そして今、それすらもできなくなりかねない事態を前に、どうか無事でいてくれと、マンダレイが特に信じてもない神仏に祈っていた

……その時だった。

——ウウ~~~~!! ウウ~~~~!!

「!?!」

突如、セルキー事務所全体に鳴り響くサイレンの音。

何事かと、部屋にいた全員の視線が、ここにいる中で唯一この事務所
の常勤ヒーローであるシリウスに向かう。

「非常事態を告げるサイレンです！ 周辺のヒーロー事務所や所轄の
警察署からの応援要請なんかの時に鳴るんですが、こんな時に一体
……!?!」

『所轄警察署より応援要請！ 港湾エリア洋上にて船舶火災発生！
観光用の屋形船2隻がヴィランの攻撃を受けて炎上している模様！
相当数の乗船者が水上に投げ出されて救助を待っている状態の
ことです！ 一刻を争いますが、動ける人員は至急現場に急行を！ な
お、付近にネームドヴィラン2名を含む敵組織2つの存在を確認して
いると、セルキー所長及び、プロヒーロー『サー・ナイトアイ』から
報告アリ！ 救助に向かう際はそれらとの接触に十分注意してくだ
さい！』

放送設備越しに聞こえて来た、混沌にも程がある、一体何が起こっ
ているのかわからない状況報告に、全員がしばしの間混乱して目を白
黒させていた。

☆☆☆

全ては、不幸な偶然がいくつも組み合わさった末の結果だった。

その日、指定敵団体『死穢八斉会』の若頭、治崎廻……ヴィラン名
『オーバーホール』は、数名の部下を引き連れて、ある取引を行う予定
だった。

その相手は、主に日本国外で活動し、様々な国際的な裏取引・密輸
等を行うブローカー・伊佐奈。ヴィラン名『キュレーター』。

そして取引の内容は、発注していた武器・兵器類——特殊なものを含む——の引き渡しである。

誰にも知られず、ひっそりと金と品物の受け渡しをして終わるはずだったこの取引だが、そこにケチがついたのは、直前の取引現場だった。

取引に必要な品物を、誰も見ていない山の中で受け渡してもらおう手はずになっていた死穢八斎会の構成員が、その現場をキャンプ客の子供に見られ、取引の内容も聞かれてしまったのだ。

偶然そこにいた、島乃真幌と島乃活真、そして出水洗汰の3名に。逃げようとしたその3人を捕まえたヤクザたちは、このままここで殺しても死体の始末が面倒だと考え、一旦生かしたまま連れ去った。

そしてその先で、余計なトラブルを呼び込んだと苛立った治崎に叱責されるも、今回の取引相手であるキュレーターは、人身売買も行っていたと思いだした彼は、金になれば儲けものと考えて、すぐには目覚めないよう薬を使って眠らせ、取引現場に連れて来たのだった。

それだけならばまだよかったのだが、彼らにとつてさらに不幸だったのは、元々治崎が、あるいは『死穢八斎会』そのものが、あるヒーローにマークされていたことだった。

プロヒーロー『サー・ナイトアイ』。かつてオールマイトのサイドキックを務めていた経歴を持ち、様々な事件解決にその手腕を発揮してきた凄腕。

彼が、事務所で雇っているインターン生であり、雄英高校ビッグ3とまで言われるうちの1人、通形ミリオ……ヒーロー名『ルミリオン』と共に、不穏な動きをしている治崎達を張っていたのだ。

そして、海外で活躍する凶悪なネームドヴィランとの武器や違法薬物、さらには人身売買までも行っていた——洗汰達の拉致は治崎達にとつても予定外のことだったが、ナイトアイ達には彼らの悪事の1つにしか見えなかったし、実際そうする気だった——現場を押さえることに成功。

もともと沿岸部での取引ということチームアップを要請していた、セルキー事務所を含む複数のヒーロー事務所の人員によって包囲

を完了し、いざ摘発という段階になって……一瞬早く治崎達に存在を感づかれてしまい、双方から数人の構成員を逮捕、物資の一部を押収したものの、治崎と伊佐奈を含む主要メンバーに、強行突破による逃走を許してしまう。

そしてそこから、治崎と伊佐奈にとっても予定外の方角へ話は進んでいく。

取引が、ただ邪魔になっただけではなく……ご破算、喧嘩別れに終わってしまったのだ。

双方、車で逃走中……双方の首魁同士による、電話での会談が行われた。

「……どういうことだ？」

「言葉通りだオーバーホール。お前とはもう取引はできない……信頼を失ったからな。あのヒーロー共、お前らを張ってたんだろ？ それに気付かず、不用心に取引を設定して現場を晒したお前のミスだ。そんな間抜けとはもう取引できない」

「……そうか、わかった。なら例のブツだけでいい、渡せ。金は払う」
「渡せるか、あんなもの。信頼もできない相手に……一発で足がつかねないような代物だぞ」

「足がつくのはお前が甘いからだろ」
「何とでも言え。沈みゆく泥船に乗ってやる気はない。さつさと帰れ」

「……こっちも、アレを手に入れずに終わるわけにはいかない。渡さないなら……」

「力づくで奪うか？ やってみろ」

死穢八斉会は、海外の違法研究所と密接な関わりを持つキュレーターに対して、『ある銃弾』の開発を委託していた。

特殊な有機素材を材料にしたそれは、今後死穢八斉会が裏社会を牛耳るためのビジネス・資金源の1つとして考えていたもの。その試作品の開発を、キュレーターを介して依頼していたのだ。

今回の取引のメインの商品はその銃弾であり、彼にとっては何が何でもそれは、研究データと共に持ち帰らなければならないものだった。

た。

だが特殊すぎる代物であるがゆえに、発注や輸送に痕跡が残りやすく、キユレーターにしてみれば、仮にこの後治崎達が摘発されてお縄になり、その銃弾が押収されてしまえば、そこから自分達やその協力者に捜査の手が及ぶ可能性もある。ゆえに、信頼できない奴には渡せない。

(俺達の方で独自に進めているものとデータを突き合わせて研究すれば、『銃弾』と『血清』は完成する……ここで持ち去られるわけにはいかない。最悪、コイツを殺してでも……！)

この瞬間、治崎と伊佐奈は敵同士になり、ヒーロー達を巻き込んだ三つ巴の『抗争』へと事態は悪化したのだった。

その数分後、あらかじめ用意していたボートで沖に出た伊佐奈たちは、ヒーローの追跡を振り切るため、たまたまそこにいた屋形船2隻を攻撃、沈まない程度に破損させて火を放った。

徐々に燃え広がる炎、上がる悲鳴、たまらず飛び降りて助けを求め無関係の一般人。

ナイトアイ達是否応なしに彼ら、彼女らの救助に人手を割かざるを得ず、セルキー事務所を中心としたヒーローの半数近くと、救助用に船のほとんどが離脱した。

それでも救助に手が足りず、沿岸の警察の船舶と、セルキー事務所に待機していた、マンダレイ達を含む動ける人員全てを投入し、100人を超える屋形船の乗員乗客の救助に当たっていった。

その隙に伊佐奈達は、あらかじめ洋上に停泊させていた大型クルーザーに戻り、日本から脱出すべく舵を切り……加速するより早く、間一髪乗り込んだナイトアイ達ヒーローチームがそのクルーザーに乗り込んで、戦闘が始まった。

☆☆☆

「じゃあ何か!?」今あそこに見えるクルーザーに、その『キユレ

ター』つてのと……それを追って、ナイトアイやらルミリオン……つて誰だかよく知らんけど、ヒーローチームも乗り込んで戦ってるわけか!？」

「道理でさつきからなんか爆発音とか聞こえるわけだ……」

現在、沿岸から乗ってきた船で、屋形船の客の救助活動を行っている永久達は、インカムや通信機越しに聞こえてくる通信で逐一状況を把握し、沖に停泊している大型クルーザーに注意を払いながら、1人、また1人と救助していく。

泳ぎが上手くない客や小さい子供などは、セルキーや蛙吹を始め、水中で有利な『個性』を持つ面々が優先して救助し、その他の客達も随時、浮き輪を投げたりロープを伸ばしたりして救助していく。海から人を引つ張り上げる際には緑谷を始めとしたパワー系の個性持ちが、救助後に体調などに不安がある者に対しては永久らサポート系の個性持ちが奮闘した。

そして、ようやく全ての要救助者を船に収容したところで……大型クルーザーの方からひととき大きな爆発音が響き、火柱が上がっているのが見えた。

蛙吹や緑谷、麗日がはっとしてそつちを振り向き、呟く。

「……あつちは随分派手にやってるみたいね」

「ネームドヴィラン『キュレーター』……確か、海外で主に活動してるヴィランだよ。個性は『鯨』……超がつくほど強力なパワータイプだ。水中じゃ最強クラスとも言われてる」

「さすがデク君……敵にも詳しいんや」

「ヒーローのこと調べてると、戦った敵についても色々知ることになるから。もつとも、僕の敵関連の知識が現場で役に立つのは……ヒーローと戦ってなお逃げ伸びた敵に対してくらいだから、実はあんまりありがたくないかもだけど……」

「それよりマンダレイ、警察から連絡は？ 洸汰君の行方は……」

「……いいえ、さつき通信で情報が入って……どうやら摘発現場にはいなかったって。ただ、毛髪なんかの痕跡があったから、一時的にある現場にはいたみたいなの。つまり、連れ去られて……」

「今、あの船の中ってこと!？」

と、ピクシーボブの声と同時に、またしてもクルーザーの方から爆発音が響く。今度は先程よりも大きな火柱が上がった。燃料か何かに引火したのかもしれない。

直後、熱を含んだ衝撃波がここまで届き、決して強くないが突然だったそれに、そこにいた面々が顔をしかめる。救助されたばかりの人々の中には、すぐ近くで起きている爆発に悲鳴を上げる者も多かった。

目は口程に物を言うというが、今のマンダレイはまさにそんな状況だった。

その悲痛なまでの表情が、血が出るほどに噛みしめた唇が、涙を浮かべた目元が、助けに行きたいと雄弁に物語っている。

しかし今、自分はここで救助活動中、持ち場を離れるわけにはいかない。ここで苦しんでいる人達を放って動くことはできない。

12年を超えるプロヒーローとしてのキャリアの中で磨かれたプロ意識が、彼女に個人の感情で動くことを許さずにいたが……救いの手は、意外なところから現れた。

——ガガ……ガガガ……

爆音と悲鳴の中、最初にその音を耳でとらえたのは、シリウスの『グッドイヤー』だった。

音源は船の無線機。そこに、何者かが通信を入れている。

駆け寄って音量を最大まで上げたと同時に、それでも常人が聞き取るにはやや頼りない音量で、声が聞こえて来た。

『こちらはプロヒーロー、サー・ナイトアイ。現在、大型クルーザーにて『キュレーター』及びその一味と交戦中だが、船内にて、人身売買の被害者と思しき一般人達を発見。ここについては巻き込まれる可能性があるゆえ、保護を求めたい。救助用に船を回してほしい。中型船舶1隻あれば足りると目されるが、敵の妨害が危惧されるゆえプロヒーローの同乗を推奨。繰り返す……』

その通信を聞いたマンダレイは、誰よりも早くシリウスに駆け寄って、言った。

「私が行きます！」

「マンダレイ、あなたは……」

「私達が乗ってきた船なら、中型の中でも大きめのサイズだから人員も収容できます。今乗っている要救助者を他の船に請け負ってもらえれば動かせます……行かせてください！」

シリウスは一瞬考えたようだが、特に矛盾がある発言ではないこともあり、うなずいた。

……私情が入っていないといえば嘘だろうが、それでもプロヒーローである以上、マンダレイの腕は確かだし、救助に関してはノウハウもある。

更に数秒考えて、素早く人員の選定を済ませる。

タイミング悪く、他の船の大半は、限界まで屋形船の乗員乗客を救助して積み込んだところで、港に戻ってしまっている。ここにいる面々から突入班を選ぶしかなかった。

「マンダレイの乗っている船の要救助者をこちらの船に全員移して！」

その後、マンダレイ、ピクシーボブ、デク、ダイナージャ、フロツピーの5名で救助に向かってください！ ただし、戦闘は基本避けて、救助と捜索のみに絞って活動を！ 敵との戦闘は先行したヒーローチームに任せてください、無暗な戦線拡大は被害を徒に拡大させることに繋がります……よろしいですね!？」

「了解！」

名前を呼ばれた5人は、シリウスからの指示を頭の中で反芻し、そうでなかった者達も含めて迅速に動き出す。

わずか数分で要救助者の移送を済ませ、船の各所から既に炎上を始めている大型クルーザーに向かって船を出した。

第81話 TS少女と洋上の死線

「POWERRRRRR!!!」

その少年、あるいは青年は、あらゆる場所から出現して戦っていた。壁をすり抜け、天井から滲み出し、床から湧き出て……縦横無尽に飛び回り、仕切るものなどないがごとく……というか実際に壁も床も物理的に無視して、すり抜けて動き回る。

時に死角から不意打ちで、時に反応も許さぬ速攻で、部屋の中にある無法者達を叩きのめす。

その奥で、青年に守られる形を取りながら、何やら機械をいじっていた長身の男がいたが、少しして、やっていた作業が終わったのか、振り返って部屋の中の惨状を目の当たりにした。

様々な武器で武装したアウトローな男たちが、死屍累々そこら中に倒れ伏している光景。

それをたった1人でやってのけた青年……自らの事務所で雇用している『ヒーローインターン』生である、通形ミリオこと『ルミリオン』を視界に収めると、その男、プロヒーロー『サー・ナイトアイ』は、満足げにうなずいた。

「苦勞、ルミリオン。怪我は……あるはずもないか、この程度の連中相手に」

「あれ、サー。随分早かったですね。通信はもういいんですか？」

先程『船の外に通信を飛ばすから5分ほど扉を守っていてくれ』と言われていたルミリオンだが、その半分もないくらいの時間でナイトアイが出て来たのを見て、少し驚いた様子だ。

それを気にする様子もなく、サー・ナイトアイは無線の電源を入れっぱなしにして部屋を出て、駆け足で廊下を走り始める。

途中、何人かマフィア、あるいはヤクザと思しき者に遭遇するも、鎧袖一触とばかりに無力化して、足を止めずに走り抜ける。

ある者は彼が高速で投擲する重量5キロの超重量印によって、ある

者は壁も床も天井もナイトアイも透過して襲い来るルミリオンの拳の一撃によつて、全く相手にならず叩き伏せられていった。

「予想よりも外からの応答及び対応が迅速だった。すぐに救助用の船と人員を回してくれるそうさ。後のことはバブルガールに任せておけばいいだろう」

「それはよかった！　なら我々は甲板に戻りますか？　なんか逃げられたと思ったオーバーホールも一緒に乗つててまさに修羅場ですもんね、今」

「そうだな……迅速に場を収める必要がある。オーバーホールはもちろんだが、キュレーターも非常に危険な『敵』だ。……船が沈む前にケリをつけなければ」

「沈むとは穏やかじゃないですね……『予知』したんですか？」

「しなくともわかる。あんな連中が暴れていればどのみち不安定な足場などそう長くは持たん。それに……恐らく『キュレーター』は……最初からそのつもりだ」

☆☆☆

Side. 緑谷出久

要救助者の移送を済ませた後、ナイトアイ事務所のサイドキックであるバブルガールから、簡単な説明をもらった上で、僕らは大型クルーザーに突入。

入り口は都合よく、横っ腹で不自然な形に歪んで外れていたドアがあつたので——多分、本来は接岸した状態で使うものなんだろうな——そこから入った。

そのまましばらく道なりに進んで……

「まって！　……何か聞こえなかつた？」

「？　何か、つて……何が？」

「人の声でもしたかしら？　私は聞こえなかつたけど……」

栄陽院さんとピクシーボブには聞こえなかつたみたいだ。反応を見るに……マンダレイも梅雨ちゃんも同じかな？

でも、僕には何となく……何か聞こえた気がした。

「シリウスさんがいればよかつただけ……あの人の『グツドイヤー』なら、超音波でも聞き取れるわ」

「今更ながら、探知タイプの不在はこういう時痛いね……でも、それならそれでやりようは、っと」

言いながら、ピクシーボブは頭の猫耳型ヘッドギアについているギミックをいじり……集中するように目を閉じる。

誰が言うでもなく皆が自然と黙り、待つこと数秒……はっとしたように目が開かれた。

「こつちから、僅かだけど人の声を拾えた！ 音域が高い……たぶん子供！」

どうやら、ヘッドギアに備わっている收音機能みたいなのを使ったらしい。なるほど……災害現場で、か細い人の声を聞き取って探すのに役立ちそうな機能だ。

ピクシーボブの先導に従い、5人で走る。ほとんど一本道だけど、1度だけあつた曲がり角では、そのおかげで迷わず、止まらず走れた。

「ける……結構距離があるわね。緑谷ちゃん、よく聞こえたわね」

「……言われてみれば。緑谷そんな耳よかつたっけ？」

「え？ ど、どうだろ……運とか、位置がよかつたんじゃないかな？」

そんなことを梅雨ちゃんと栄陽院さんの2人に言われて、僕自身『そういうえば……』とちよつと不思議に思ったりもしたけど、それより先に、前を走っていたピクシーボブが立ち止まった。危うく玉突き事故を起こしそうになったが、どうにか僕らも急停止する。

「ここ、つばいけど……ずいぶん大きな扉ね、しかも分厚そう……」

「防火扉並みね。子供がいるってことは、ここは監禁用の部屋か……あるいは、それに使えるくらいには頑丈な作りなんでしょうね。力技で突破するのは……無理？」

マンダレイの問いかけに、ピクシーボブと梅雨ちゃんは苦々しげな表情になる。

僕と栄陽院さんは……こんこん、と扉を叩いてみて……

「僕や栄陽院さんならできると思います。ただ、蹴破ったりすると、中

にいる子供たちが危ないですから……」

「なら……どうだな」

と、言つて栄陽院さんは……おもむろに、肩を回して準備運動するような動きを見せた。

そしてその後、扉の歪みを利用して、指を上手く引つ掛けるようにして手でつかむと……

「押してダメなら……引いてみるって、ね！」

——バギン!!

そのまま……力任せに扉を引つpegがした。

カギをかけていた留め具と、蝶番みたいな金具が一緒に引きちぎられて、あっさりと扉は開いた。

構造的にも強度的にも絶対にありえない開き方だし、二度と閉まらなくなったが。

「……その言葉、そういう使い方する奴じゃないと思うんだけど」

「ツツコミは後よ。どうやら……あたりだったみたいね」

マンダレイの言う通り、引つpegがした扉の向こうには、何人かの子供が入っていた。

皆、怯えてこつちを見ている。……あまりに乱暴に出入口を作ったからか……はたまた、こんな状況に置かれたから、もとから怯えてたのか。

……僕らがヒーロー、ないし、自分達の味方だつてことはわからな
いみたいだな……言つてわかるかな？

幸い、ケガをしているような子はいないみたいだが……どうしよう、と僕らが考えていると、すたすと僕らの、そして栄陽院さんの隣を抜けて、梅雨ちゃんが部屋の中に入っていく。

子供の1人、男の子らしい子が、他の子を守るように前に立ちはだ
かった。

その子自身も、息は荒く、足は震えてるし、泣きそうだし……無理
してるの丸わかりだけど……それも気にせず、梅雨ちゃんはその目の
前まで歩いて行って……ぐっ、とサムズアップした。

「……？」

突然のことに、若干恐怖が薄れて、きよとんとしてる男の子に、さらに梅雨ちゃんは、

「えらいわね。自分より小さい子を守ろうとして……あなた、強い子だわ」

「……えっ……」

ゆっくり、急がず……落ち着いて言い聞かせる。

こちらへの警戒心が緩んだタイミングで、梅雨ちゃんはぼん、と男の子の頭に手をやり、少し乱暴なつてくらしいの強さでわしわしとなでた。

もう片方の手は……落ち着かせつつ、ぬくもりを確かめるように、肩に。

「でも、もう大丈夫よ。私達、これでも一応ヒーローなの。あなた達を助けに来たわ。……一緒に、おうちに帰りましょう」

ところどころ聞き取れなかった——なんかこの船、ちよくちよく破壊音とか戦闘音があちこちから聞こえてくるから——けど、梅雨ちゃんは1つ1つ、ゆっくり言葉を紡いで……適宜、ガッツポーズみたいなジェスチャーとかも交えて、その子たちに言い聞かせていく。

そのうちに、男の子……だけでなく、後ろにいた女の子たちも、目に涙がたまっていく。

けど、恐怖とか悲しみのそれじゃないのは、僕達から見ても明らかだった。

「う、うわああああ——ん！」

「怖かった、怖かったあ……」

「帰る……おうち、帰る……連れてつてえ……!」

そして、安堵の涙と共に……3人共、梅雨ちゃんに抱き着いてきて泣き始める。見た目相応の、弱弱しく……しかし、だからこそ守ってあげなければいけない子供3人がそこにいた。

3人分の突撃を食らって……自分も小柄で軽い体だからか、梅雨ちゃんちよつと『おつとつと』つてなりかけてたけど、どうにか持ちこたえて、3人とも抱きしめてあげてた。

……慣れてるといふか、様になつてるといふか……。

でも凄く優しく、見てるこっちも安心するような光景だ。ヒーローの1つのあり方だな。

「……すごいね、梅雨ちゃん。ていうか、なんか手馴れてるね、梅雨ちゃん」

「ける……ありがとう、緑谷ちゃん。私にも弟や妹がいるから。こういうの割と慣れてるの」「なるほど」

胸に抱き抱えて3人の子供をあやす梅雨ちゃんは、褒められてちよつと照れてるらしく、ちよつと赤くなっていた。

それを見て……いつも冷静でポーカーフェイスな梅雨ちゃんだから、そんな様子がちよつと新鮮で。

子供達との様子というか、絵面が微笑ましいのもあって、こっちまでにつこり笑ってしまう。

……なぜかもつと梅雨ちゃんが照れたように見えた（といってもわずかな差だけだ）。

え、何で？

不思議に感じて、不意に振り向くと……マンダレイもなぜか顔を赤くして、僕からさつと目を反らした。視線を空中に泳がせて。

隣にいるピクシーボブは……なぜか闇を背負って壁パンを始めた。ブツブツと何か呟きながら。

何を呟いてるのか聞こえないけど、なんとなく聞こえなくてよかったと思えた。

そして栄陽院さんは……なんでガッツポーズ？

文字通り三者三様の反応に、僕がさらに頭の上に『？』を増やして浮かべていると、

「そ、それよりも……早くこの子たちを外に連れていきましょう。怖かったでしょうし、早く避難させてあげなきゃ。それに、まだ船内の搜索は続くわ、時間は有効に使わないと」

「おっと、そうだった。じゃあ……フロツピーと私が外まで一緒に連れてくよ。マンダレイ、デク、ダイナージャ、あなた達は引き続き船内の搜索を……頼める」

「……ええ、わかった」

腐ってもそこはプロ。一瞬で再起動したピクシーボブの言葉に……少し間を置いて、マンダレイも同意する。

視線は、助かったと安堵してまだ泣いている子供たちを捕らえてはいるけど……どこか、違うものを見ているような気がした。

少し考えて、理由に気付く。

ちよつとだけヒーローらしくない、しかし、1人の人間として……あるいは、『保護者』としては、極めて正常な考えだ。おそらく、コレで合ってる。

(洗汰君……じゃなかった。女の子2人だし、どっちも黒髪……真幌ちゃんと活真君は茶髪だって話だし、どっちとも違うか)

彼女達も心配だし、助かったのは喜ぶべきことだ。

しかしそれはそれとして、一刻も早く搜索を再開したい……こんなところだろう。心の内は。

その後、僕らはピクシーボブが言った通りに分かれ……梅雨ちゃんとピクシーボブが船外に向かって子供達を逃がしに、残る3人は船のさらに深部へ潜っていった。

そして、進んだ先で道がT字路になっていて、2つに分かれていたので……手を増やして搜索するため、僕と栄陽院さんが右、マンダレイが左に進む形で分かれ……それぞれ搜索を始めた。

さつきから、聞こえてくる戦闘音や、破壊音の頻度、聞こえてくる場所・方向なんかが増えてる……時間、あんまりなさそうだ。

☆☆☆

ところ変わって、甲板。

何人ものプロヒーロー達を相手に、2人のネームドヴィランがその圧倒的な強さを見せつけていた。

自分達の部下たちは、既にヒーロー達の手によって倒されてしまつてはいるものの、個人としての戦闘能力が元々群を抜いている2人

……『オーバーホール』と『キュレーター』。

それぞれ、床や壁を変形させたり、体の一部を異形に変形させて、遮蔽物や敵の攻撃ごと全てを薙ぎ払い、船が壊れるのも構わず暴れ続ける。

不幸中の幸いは、この両者が対立して争っているということだ。

オーバーホールはキュレーターの持つある持ち物を狙って、キュレーターはそれを奪われまいと、お互いの力をぶつけあっている。

その余波だけで周囲のヒーロー達や、今自分達が乗っている船もまた甚大な被害を被っている。遠からず取り返しのつかないことになりそうな光景であるが、全く意に介さず、2人は争いを続けていた。

オーバーホールが床に手をつくると、彼の『個性』で即座に床が分解されて粉々になり……その一瞬後、無数のとげのような形に姿を変えて伸び、キュレーターに襲い掛かる。

しかしキュレーターはそれを避けるそぶりもなく、迫りくる凶器を見ていて慌てることもない。

数秒後には自分を串刺しにするであろう、高速で伸びてくるそれを黙ってみて……しかし着弾の直前、コートが変形した、巨大な尾びれのような何かを振りぬいて、その全てを粉碎した。

キュレーターに傷一つもつけないこと叶わず、金属のとげは全て砕け散った。破片が飛び散り……さらに、今の攻撃に巻き込まれ、数名のプロヒーローや、彼らの仲間のはずのヤクザやマフィアまでもが、船から海に叩き落された。それを見て、どうにか避けることに成功し、甲板に残っているヒーロー達が青ざめる。

「おい、やべえぞ！　今ので何人か……！」

「怪我人が海につ……おい、セルキー！　他にも……水系の個性の奴らは救助に回ってくれ！　海の中じゃあんたらが一番動ける……ここは俺達が残るからよ！」

「だ、だが、ここでこれ以上人員が欠けるのは……」

既に敵の手勢、ザコ敵はあらかた倒し、残っているのは敵の首魁2人のみ。あとは、オーバーホールの周囲に数人の直属の部下達がいて彼を警護している程度。

にも関わらず、その首魁2人があまりに圧倒的過ぎるがために、既に人数でも勝る立場となつているヒーロー達は、攻めあぐねている……どころか、全く歯が立たず、戦況を押し込めないでいた。

危険度超級のネームドヴィラン2名。その壁があまりにも厚い。今いる戦力では突破できない、仕掛ければ確実に返り討ちに遭う。犠牲者を出さないので精一杯。ゆえに、彼らは動けずにいた。

そんなヒーロー達の焦燥を意にも介さず、ヴィラン2人は睨み合う。片やペストマスクを、片や潜水用の金属のマスクを顔に装着した2人が、どちらも表情をわかりにくくさせて相対している光景は、奇妙な不気味さを見ている者に覚えさせる。

はあ、とため息まじりに、キュレーターは呟くように言う。

「人の船だと思つて好き勝手しやがる……あーあー、コレ修繕にくらかかるんだか」

「けち臭いことを言うな……密漁と密輸、人身売買でしこたま稼いでるだろうが」

一方でオーバーホールの言葉は、呆れたような苛立つような仕草を見せる。ぼりぼり、と首のあたりをかくようにしながら、しかし油断なくキュレーターを、そして周囲の状況を見ていた。

こうしている間にも船は傷ついていつているし、2人の戦いの合間を縫つて、あるいは隙をついて襲つてこないとも限らない。常に周囲に気を配り、何が起きても対応すべく構えている。

「船をこれ以上壊されなくなかったら……いや、半分くらいはお前が自分で壊してるが、さつさとブツを渡せ。それで俺達は大人しく退散する……なんなら金だつて払つてもいい。お前からすりやはした金だろうがな、それだつて」

「さっき言った通りだ、そのつもりはない。……損得とはまた別な話だよ。あんなもんを俺のところを持ち込んでおきながら、身辺管理の1つもできないお前が悪い」

オーバーホールの言葉で、ヒーロー達は、彼らがおかを『渡す』『渡さない』を巡つて争っているのだということをおぼんやりと理解した。

そもそも、最初に摘発した現場も、それは何かの裏取引の現場だつ

た。

恐らくそれを渡す渡さないで争っているのだろうが、それが何なのかまではわからない。……だが少なくとも、ろくなものではないのだろうということはある。

緊迫した状況の中、おもむろにキュレーターはすつ、と自分の斜め後方を指さす。

何かを示そうとしているのか、はたまた思わせぶりの挙動によるトラップか。警戒する一同。

「あーそれと、そこに隠れてる奴……俺の不意を打つのは無理だからやめとけ」

そう言った数秒後、甲板の後方の扉を開けて……観念した、あるいは諦めたように、長身のサラリーマン然とした男……サー・ナイトアイが姿を見せた。

「キュレーター……個性は『鯨』だったな。音波による反響定位……エコーロケーションか」

奇襲をかけようと機会をうかがっていたことを見破られていたことに焦りはないようだ。

メガネをくいと直しながら言うナイトアイの言葉に、ため息をつくキュレーター。

「人の船に不法侵入しておいてこの不遜ぶり……日本人が憤ましかかだって時代はどこに行っただんだかな」

「あいにくと『敵』相手にわきまえる礼節はもたん。そもそも、貴様とてこの国には不法入国だろう」

「それこそあいにくだな、俺は生まれも育ちもこの国だから不法滞在にはあたらんよ」

「居るだけならばな。だが、出入りを不法にしているというだけでアウトだ」

「問題ない。証拠は残してないからな。あと……」

その直後、コートが尾びれに変形して、ナイトアイがいた場所とは逆側を大きく薙ぎ払う。

船の様々な設備が派手に破壊され……その中から、『うわつとお!』

という驚いたような声と共に、翻るマントが特徴的なヒーロースーツの少年が飛び出した。

「俺に奇襲は無意味……さっき言っただろう」

「くっ……すいませんサー！ 失敗しました！」

「……いや、意識をこちらに向けさせきれなかった私の落ち度だ。……やはりオールマイトのジョークか何かをチョイスすべきだったか」

「はあ……インテリな見た目に似合わず、意外と頭が……ん？」

その瞬間、同じく『エコーロケーション』による異変を……そして同時に、視界外から『バツン!!』という怪音を聞いて振り返るキュレーター。

しかし、そこには……一瞬前までいたはずのオーバーホールらがいなくなっていた。

恐らく、その『個性』で床か壁を壊し、即座に修復することで船内かどこかに逃げたのだろう。

しかしそれを知っても、特にキュレーターは動揺するともなければ、それを追おうともしなかった。ただ、『やつといなくなったか』とばかりにため息をつく。

一方で、それをチャンスと受け取ったのは、そこにいるヒーロー達である。

今まで手を出せなかった2人のうち1人が——恐らくはナイトアイとルミリオンの合流で形勢の不利を悟ったか何かの理由で——いなくなった。であれば、攻勢に出るには……こしかない。

覚悟を決めた表情になるヒーロー達が少なくない数見受けられるその光景は、今彼らが何を狙っているのかが非常にわかりやすいもので……当然、それにキュレーターも気づいている。

それでいてなお、慌てる素振り一つない。

今までと同様、少しの苛立ちと、あとは気だるさをにじませたような目でヒーロー達を見渡し……

「どいつもこいつも、人の商売の邪魔をしやがって……」

そうつぶやいた直後、今まで被っていた、潜水用マスクを外して投

げ捨てる。

そのために視界が一瞬塞がった隙に、ナイトアイが超質量印を投げ、同時にルミリオンの床に沈み込む。2重の速攻だが、やはりそれもキュレーターは読んでいた。

——キイイイイ——!!

周囲一帯に耳をつんざくすさまじい音波が放たれる。

範囲内にいたプロヒーロー達が、ナイトアイすら含めて顔をしかめるほどの暴力的な音。さすがにこの中でさらなる行動を起こせる者はいない。

唯一『透過』によって音をほぼやり過ごしたルミリオン。しかし、放たれ続けている超音波のせいで、実体化すると即座にその部分にダメージが入る。

「……………POWERRRRR!!」

だがそれも無視して、ルミリオンは懐に入り込み、拳だけを実体化させてキュレーターの腹に一撃を叩き込んだ……………が、

(っ……………硬い!?)

「……………驚いたな、届かすか、この状況で攻撃を……………」

お返しとばかりに放たれた超音波攻撃から、再度『透過』を使ってその場から即座に離脱し、ナイトアイの隣にまで戻る。

「すいません、サー、だめでした! 殴った瞬間、すごく硬くて重厚な感じがして……………」

「……………おそらく、それも『個性』によるものだろう。クジラの皮膚、及び肉体は頑強で、海で船などに衝突した際、逆に船底を損壊させることもあるらしい」

ナイトアイの考察の通り、キュレーターはその『個性』ゆえに、尾びれの一撃による攻撃力だけでなく、肉体自体が鎧のような頑強さを持つていた。ゆえに、並のヴィランならば一撃で確実に昏倒させる威力のルミリオンの拳ですら、ほとんどこたえていない。

「どうしますか、サー? キュレーターを速攻で仕留めるの、難しそうですねが……………このまま放っておくと、オーバーホール……………治崎にも逃げられる可能性がありますけど、どっちを?」

「うん？ ああ、そうか……そういやお前ら、オーバーホールの方を追って来たんだったな」

と、ルミリオンの言葉から思いだしたようにキュレーターが言う。「それなら心配するな。もうあいつらを追いかける必要はなくなるから」

「……？ どういう意味だ？」

「すぐにわかるさ……それまで生きてればな」

ポケットから手を出して言った、次の瞬間……キュレーターの体が急激に膨れ上がっていった。

☆☆☆

Side・出水洗汰

友達になった……のかはわからない。

ただ、なんかこう……遠慮しなくていいくらい距離というか、関係っていうのは……今までにあんまり経験ない……ことはなかったけど、そんな風になったのは久しぶりで……楽しかった。

パパとママが、『敵』に殺されてしまって……けど、周囲の皆はそれを立派なことだって褒めて……俺は、ヒーローってものがわからなくなった。

何で、パパとママが死んだのに褒められるの？ 何でそれが正しかったみたいに見えるの？

マンダレイは、『いつかその意味が分かる日が来るから』って言うんだけど、そんな日、来てほしくもない。

それじゃあまるで、俺まで『パパとママが死んだのは仕方なかった』って認めるみたいで。

自然と俺は、『ヒーロー』も『個性』も嫌いになって……

でも、『個性』の訓練——パパとママがよくやってたのを見てたから、やり方は覚えてた——だけはなんとなくやめる気になれなくて、続けていた。俺の『個性』は、パパとママから受け継いだものだから。2人を思いだせる……大切にしたい、数少ない思い出でもあるから。

それでも、学校でヒーローが嫌いな子供なんて俺くらいだから、次第に友達とも遊ばなくなつて……

だから、気の合う友達と——と、とりあえず友達でいいや——一緒に遊べるなんて、その頃以来のこと……本当に久しぶりだった気がする。

真幌はちよつと生意気で、今日初めて会った俺のこと、遠慮なしに振り回してきて……活真はそれに俺と一緒に振り回されながら、ちよつとだけ申し訳なきさそうにして……

そんな時間が心地よく思えて、気が付けば昼近くにもなつていた。そんな時だった。俺達が……事件に巻き込まれてしまったのは。正直、よくわからないままに話が進んだ。

川岸に遊びに来たら、何か話している男達がいた。

お金と、何か……白い粉みたいなものや、瓶入りの薬みたいなるものを交換してた。

砂利を踏んで足音を立ててしまつて……逃げようとしたけど追いつかれて。口元にハンカチみたいなるのを押し当てられたと思つたら、すごい眠気が襲つてきて……

そして、起きたらそこは……見たこともない部屋だった。

ただの物置つて感じ。家具とかもないし、人が住めるような……いや、住めなくはないかもしれないけど、とても好んで住むような部屋じゃない。

同じ部屋には、真幌と活真も捕まつていて……活真は怯えて、部屋の隅で体育座りになつていて、真幌がそれを励ましているようだ。……彼女自身も不安そうなるのを隠せてないけど。

どうやら……俺が起きたのが一番最後だったらしい。

ドアにはカギがかけられている。内側から開けられないように。

なんだか、床が揺れている。

地震つて感じじゃない。これは……船の上にいるんだ。

しかも、あつちこつちから何か……壊れるような音や、割れるような音、爆発するような音が聞こえてくる。明らかにただ事じゃない……この状況も、活真が怯える理由の1つだろう。

そんな時だった。その声が聞こえて来たのは。

『洗汰！ わかる!? 私よ、マンダレイ！ もう大丈夫、助けに来た！
今、外に救助艇で乗り付けてる……すぐに救助に向かうわ！
でも、この船では今、ヒーローとヴィランがあちこちで戦ってるの、う
かつに動くと危ないから、そこにいて！ いいわね！』

今日だけは、本当に頼もしいと思えてしまう……マンダレイの『テ
レパス』の声が頭に響いた。

すぐにそのことを2人に伝える。真幌もほっとした様子で……活
真も、ようやく泣き止んだ。

けど、中でもひととき大きな音が近くで響いて、同時に大きな振動
が襲ってきた瞬間……ばきん、と音が聞こえた。どうやら、今の振動
で鍵が壊れたらしく、ドアが開いていた。

マンダレイには『待つてろ』つて言われたけど、なんとなく、ここ
にいちゃいけない気がして……俺と真幌は、怯えている活真も連れ
て、ひたすら走った。

そして、何度目かの曲がり角を曲がった先に……ようやく彼女を
……マンダレイを見つけた。

「可哀そうになあ……。お前も……」

彼女は、

『個性』なんて病気を持つてなければ……そんな変な力、持たなけれ
ば……」

マンダレイは、

「……こうなることも、なかっただろうに」

いつもの猫のコスチュームをボロボロにされて、壊されて……血ま
みれの状態で、床に転がっていた。

そのすぐそばに立っている、目つきの悪そうな……口から下だけを隠す、鳥のくちばしみたいなマスクをつけた怖い男に、見下ろされながら。

次の瞬間響いた悲鳴が、真幌のものか活真のものか、あるいは……俺のものだったのか、わからなかった。

第82話 TS少女と混迷のクルーザー

時は少し遡る。

緑谷達と別れて搜索を続けながらも、マンダレイの頭の中には、常に洗汰のことがあった。

仕事を疎かにするつもりは決してない。しかし、彼のことも全力で探したい。探さなければならぬ。自分がもつとしつかりしていれば、洗汰が自分にもつと心を開くようにしていれば、こんな事態にはならなかったかもしれない。

不安と後悔が次々に浮かんで消える中、まさしく猫を思わせる素早さと身のこなしで船内を駆け抜けていたマンダレイだが……その搜索途中、予定外にして最悪の連中と遭遇してしまう。

通路を走っていた時、前方の壁が突如として崩れるように開いた。驚いて急ブレーキをかける彼女の目の前に、ペストマスクで顔の一部、あるいは全部を隠した集団が現れる。

その直後、集団の中心に立っている男と、目が合った。

「……ん？ おいおい、ここにもヒーローか？」

その言い方から、その男……あるいは男達は、そのヒーロー側に属しているのではないようだ。と取れるが……それよりも先に、マンダレイは男達の風貌から、既に情報として受け取っている、今回最も注意すべき『敵』の名を思い出していた。

「……オーバー、ホール……!?!」

「ヒーロー、のようですね……ふむ、あなたは誰ですか？ 目的は？」

そのオーバーホールの隣にいた、黒装束に、ペストマスクで顔全体を覆った部下らしき男が、なんとも率直に、正面からマンダレイに問いかける。

そんな風に馬鹿正直に聞かれても、こちら馬鹿正直に答えたりは普通しないだろう。会話の流れで何か情報を聞き出そうとするような意図でもあれば別だが。

しかし、その声が耳に届いた瞬間、マンダレイの口はほぼ勝手に動き始めていた。

「私はヒーローチーム『ワイルドワイルドプッシーキャッツ』のマンダレイ。この船に乗せられている人身売買の被害者達と、従甥の洗汰の救出が目的……………ツ!？」

言い終わって初めて違和感に気づいたかのように、はつとして自分の口をふさぐマンダレイ。

つい言ってしまった、というレベルを超えて、明らかに不自然なほど自然に、自分の口は相手の望む情報を吐き出していた。

即座にこれが『個性』であることを察したマンダレイだが、警戒する彼女をよそに、オーバーホールは『へえ?』と何やら興味深そうに声を上げる。

「何だ。俺達を追って来たんじゃないで、人命救助が目的か……………ヒーローは大変だな、やる事が多くて……………それが例え、やりたくもないことでも」

「……………?」

一瞬、オーバーホールの目に、好奇心のようなものが浮かんだのを見たマンダレイ。

困惑するも、すぐに思い直して……………自分がやるべきことを考える。(ネームドヴィラン……………部下3名随伴……………オーバーホールとあのメガネペストマスク以外は個性も不明……………4対1じゃ交戦は無理。どのみち私達の主目的は救助。ここはやりすぎすしか……………いや、その前にこのことを皆に……………)

考えがまとまる前に、オーバーホールが口を開く。

まるで天気の話でもするかのように、軽い調子で尋ねてくる。

「それで? 助ける相手は見つかったのか、ヒーロー?」

「……………あいにくとまだね。だからさっさと探しに行きたいんだけど……………」

「そうか。ならさっさと行くといひ」
「……………!?!」

あまりにあっさりと言われたその言葉に、マンダレイは逆に面食らう。

どうにかしてこの場面を切り抜け、被害者達を、そして洗汰を助け

に行かねばと考えていたところに、思いがけず向こうから逃がす旨を告げられた。

言葉だけ見れば喜ぶべきことではあるが、同時に警戒と困惑も湧き出てくる。

「こつちも暇じゃない。こつちまで騒がれたら、俺らも組ごとさつさと逃げて、ほとぼりが冷めるまで息をひそめる必要がある。そもそもこつちも『探し物』が見つかってなくてな。ヒーローではあるが、俺達にちよつかい出してこないなら危害を加える気はないし……そんな時間もない」

(……情報で聞いた内容とは今のところ一致してる。この男は何かを……恐らくは取引で受け取るはずだったものを探してる。それを最優先としているなら、この申し出は本当に……)

「まあ、悪党を見逃すのには抵抗もあるだろうが……理由はあるんだ。助けを待っている人のところに駆けつけるって大義名分がな。ここはひとつ、賢い選択をしてくれると嬉しい」

「……そう、それなら……」

その瞬間、

——パァン！

オーバーホールの横……というか下というか。まるで小さなぬいぐるみが歩いているかのような、ある種異様な風体の……恐らくは部下であろう何者か。

その腹の部分から……突如として銃口が生え、それと同時に乾いた音が響く。

マンダレイがはつとした時には……二の腕に軽い衝撃があった。

咄嗟にそこを見ると、自分のむき出しの二の腕にめり込むようになって……恐らくは銃弾と思しきそれが見えた。

しかし、銃の威力であれば貫通してもおかしくないであろうに、少しの鈍痛を覚える程度にとどまっている。それがかえって……ただの弾丸ではない証明であるようで、不気味だった。

「まあでも」

続くオーバーホールの言葉が聞こえた瞬間、視線を外したことを迂闊だと気づいたマンダレイは再び前を見て……薙ぎ払うように振るわれた巨腕に吹き飛ばされ、廊下の壁に叩きつけられた。

「か……っ……!!?」

息が詰まり、意識が飛びそうになる。機械チックな猫耳型ヘッドギアが、攻撃の衝撃で固定部分が壊れ、外れて落ちた。

「お前を見逃しても……他のヒーローを応援に呼ばれちゃこつちも困る」

ずり落ちるように壁から落下しながら、マンダレイは床に落ちたヘッドギアを、今彼女を跳ね飛ばした巨漢が、バキン、と音を立てて踏み潰すのを見た。

「折衷案だ。俺達の邪魔をしないよう……迅速に死んでくれ、ヒーロー」

「っ……お断り……っ!」

どうにか起き上がろうとしながらも、マンダレイは今の状況を『テレパス』で仲間達に伝えようとして……それが使えなくなっていることに気付く。

(ど、どうして……このクルーザー程度の大きさじゃ、端と端にいたところで効果範囲外になるはずが……まさか、さっきの銃弾……!い、一体何なの!?)

「どうした? 『個性』でも使えなくなったか?」

「……!」

オーバーホールの一声で、やはりこの異常はいいつらの仕業だとマンダレイは悟った。そんな彼女に、先程の黒装束が言う。

「お前の『個性』は何だ?」

聞いてしまったが最後、マンダレイの口は……話すのもつらい体調も構わず、勝手に動く。

「私の『個性』は……『テレパス』。念じたことを、通信のように、他者に届ける……ある程度距離が離れていても使える……1人だけに送ることも、一度に多数に送ることも、可能……っ」

「おいおいおいマジかよ。ははは、ファインプレーだな入中！ 『個性破壊弾』撃つといてよかつたじゃねーか」

(……『個性破壊弾』……う？ やはり、さっきの弾丸が……)

入中、と呼ばれた小さなぬいぐるみのような『敵』。

腹に銃口を引つ込めながら口を開く。その声は、見た目に似合わずかなり野太いそれだった。

「バカ野郎、活瓶……ホイホイ喋ってんじゃねーよ。ってもまあ、別にいいか……コイツはもう殺すわけだし」

「だな。あ、殺す前に吸つといていいか？」

「ダメだ。お前吸つたら体もデカくなるだろ……この狭い船内でこれ以上動きづらくなる気か」

「ああ、それもそうか」

「そのへんにしとけ、お前ら。時間がないんだから、さつきと聞くこと聞いてずらかるぞ。まあ、放つておいても死ぬだろうが……念には念を入れて息の根は止めていくか」

「？ いや、まだそこまで重傷じゃねー感じだけど？」

「いや、ろくに動けない程度の傷なら十分死ぬさ。あの……」

——ズウウウウン……!!

瞬間、船全体が揺れるような感覚がして、オーバーホールの部下達は、何事かと周囲を見回す。

同時に、オーバーホール自身は、マスクで隠れていない部分の顔に苛立ちの表情を滲ませた。

「……こらえ性のねえ……もうタイムアップか、くそ」

「え!? どういうことだよ若頭!? 何だコレ、あの鯨野郎が何かやったのか!？」

「……恐ろくな。キュレーターの野郎……」

一拍置いて、

「この船ごと、乗ってる奴ら全員始末するつもりだ」

☆☆☆

一方その頃、甲板。

そこは、巨大な何かが暴れたような破壊痕がそこかしこに刻まれていた。

巨大な何かで薙ぎ払ったように破壊されている機材の数々。あちこちが水浸しになっていて、電気設備から漏電している箇所もあるようだ。甲板はひび割れだらけ、穴だらけで、まともに歩くことができそうなスペースがそもそも少ない。

立っているのは、もはや3人だけ。

ヒーロー側は、サー・ナイトアイと、ルミリオン。

それ以外のヒーロー達は——救助のために自ら飛び込んだセルキーなどを除いてだが——『個性』を発動したキュレーターの怒涛のごとき攻撃によって打ちのめされるか、海に落とされた。

そのキュレーターは、大型クルーザーの甲板の上が狭く感じるほどの圧迫感と共に、そこに君臨していた。

比喩ではなく、実際に狭くなっているのだが。

『鯨』の個性を開放したキュレーターの今の姿は、体長10mを超える巨大な人型の鯨、とでもいうべきそれだ。人型の手足を残してはいるものの、頭部は完全に鯨のそれになっており、肌も黒く重厚な鯨の皮膚になっている。

先程までに増して防御力を増したその鎧の肌には、ルミリオンの拳もナイトアイの超質量印も、全くと言っていいほど効いていない。

的が大きくなった分当てやすくなっているが、それを打ち消して余りあるタフネスだった。

そして同時に、繰り出される攻撃はそれ以上に凶悪だ。

手足を振るうだけでも、その範囲内にあるものが全て吹き飛ばす。尾びれを振るえば分厚い鉄板すら粉々に砕け、潮吹きの水流で押し流される。頭突きで真正面にある全てを砕き、超音波に至っては……『個性』発動によって威力が底上げされたのか、最早衝撃波だ。

動きは鈍重だが、当たれば即死、余波だけでもKO確実とすら言え

る攻撃が嵐のように吹き荒れる中を、『予測』を駆使して切り抜けて来た2人だが……流石に疲れも見え始めていた。

が、そんな中……突如としてキュレーターは……しゆるしゆるとその体を縮めていき、あつという間に元の人間サイズに戻る。

困惑し警戒する2人の目の前で、数分前まで相對していた人の姿になつた。

「……大したもんだな、あんたら……本気で殺すつもりでやってたんだが、耐え抜かれるとは」

「それはどうも。しかし何のつもりだ？ 降参したい、というわけではなさそうだが」

「そうだな……さつき言ったことの答え合わせ、かな」

言いながら、キュレーターはポケットに手を入れて何かを取り出す。

それはまるで、ライターか何かのように見えた。手のひらに収まるくらいに小さい、黒い機械のようなもの。スイッチのような部品がついているのが、夜の闇でもかろうじて見える。

武器には見えないが、2人にはそれが、ひどく不吉なものに見えた。

そして、そのスイッチを……カチツ、と押した。

その瞬間、船全体が揺れているかのような巨大な振動が起こり……さすがのナイトアイヤルミリオンも、バランスを崩して一瞬ふらつく。

その間に床を蹴って跳躍したキュレーターは、船の外縁部の手すりを飛び越えて、もう半歩進めば海に落ちるところまで行く。

それを見とがめたルミリオンが、思わず叫ぶ。

「キュレーター！ 何をした!?!」

「言つたら、さつきの答え合わせだ。さつき俺は『それまで生きてればな』つて言つたら？ その意味さ……これが答えだ」

さつき押したスイッチを見せびらかすようにしながら、キュレーターは続ける。

「今、この船に仕掛けておいた自爆装置を作動させた。もう間もなくこの船は完全に崩壊し、海の底に沈む。中の積み荷や、一切の証拠ご

とな」

「!?!」

「負けを認めるよ、ヒーロー。今回の取引は失敗だ。が、失敗なら失敗で、きちんと精算と損切りまでやらなきゃな。どのみちオーバーホールが暴れたせいでボロボロだったし、色々見つかるはずいブツもある。後始末をするには……きっぱり全部捨ててしまおうのが一番いい」

「……不法入国の次は不法投棄か。しかも……」

ナイトアイが視線を向ける先で……船の縁より下から、オレンジ色の温かい、しかし不吉な光が闇夜を照らしていた。

火だ、と彼は直感する。しかし同時に、なぜ海の上で、とも。

考えて……さほど時間をかけずに、結論を導き出した。

「……やられたな。わざわざ我々の相手をしていたのは、時間稼ぎのためか」

「正解だ。俺が『鯨』になって暴れている間、船の周囲にオイルを流れ出させてた。それが今の爆発で引火して、文字通りの『火の海』ってわけだな。これで救助の船も当面は近づけない。沈みゆく船と運命を共にしてくれ」

（しかし……本来なら十数秒ほどで船体全てが崩れるように計算して爆薬をセットしてあったはずなんだが……オーバーホールの野郎が弄っていったのか？ それとも、暴れすぎて構造がいかれて計算が狂ったか……まあいい、誤差の範囲だろう）

「それじゃあな、ヒーロー。リアルタイタニックを楽しんでくれ」

「待て、キュレーター!」

ルミリオンの声に今度こそ応えることはなく、キュレーターは夜の海に身を投げた。海面を覆っている油と火を突き破り、そのまま浮き上がってこなくなる。

死んだ……わけはない。『個性』の力で潜水したのだろう。最早、追うことは不可能だった。

ナイトアイは、取り逃がしてしまったことに歯噛みするも、すぐに頭を切り替える。

今、この場ですべきことは何か。自分に何ができるか。

「……ミリオ、ここからは救助活動だ。海に落ちた者達はセルキー達を信じて任せる……私は通信で連絡を入れた後、甲板のヒーロー達をどうにかする。ミリオは船内を駆け回って探せ。通信機は常にONにしておけ、随時情報を送る」

「了解です、サー！ そちらもお気をつけて！」

☆☆☆

Side. 送崎 信乃（ヒーロー名：マンダレイ）

（バカだな……私……）

さつきまでに増して力が入らない体を、床に横たえて……私は、自分の力の無さ、認識の甘さを自嘲していた。

そのくらいしか……もう、することも、できることもないから。

オーバーホールの口から、キュレーターはこの船を、全ての積み荷ごと沈めて証拠隠滅するつもりだって聞いて、一刻も早く淘汰を助けなきゃと思って……でも、走り出した先で、簡単にさつきの巨漢のペストマスクに回り込まれてしまった。

それでも、一撃加えて怯ませれば逃げられると思った。

けど、全然思うように体が動かない状態ではそれもできず……あつさりとかウンターを食らって殴り飛ばされ、さらにそこに……オーバーホールの『個性』で突然壁が爆散して、散弾みたいになって襲ってきて……それはもう、あつさりと私は負けた。

『個性』も使えず、戦う力も残ってない。もう、私に、この先に待ち受ける死に抗うことはできない。

……ここで殺されるのか、それとも放置されて船と一緒に沈んでいくのかはわからないけど……それでも、もう終わりなんだな、つて……思ってしまった。

そう思った瞬間に、向こうの曲がり角から……淘汰が現れた。

（そんな……こんな時に……!?）

淘汰と一緒に、男のこと女の子が1人ずつ。特徴からして多分、島

乃真幌ちゃんと活真君だろう。やっぱり一緒に巻き込まれていたのね……。

無事だったのはよかったけど、私は全然安心できなかった。

どうやら私の姿を確認したらしい冼汰は、目を見開いて涙を流して、絶叫しながらこつちに走ってきて……当然、そんなことをすれば、オーバーホール達にも気づかれる。

その瞬間、自分でも驚いたことに……力なんて残っていないはずの私の体は、ほぼ反射的に飛び出して、オーバーホール達の横を駆け抜け、冼汰達との間にその身を滑り込ませた。

上手くブレーキ踏ん張れなくて、片膝をつく。それでも、なんとか倒れずに姿勢を保てた。

「マ……マンダレイ!? 血が……怪我が……!?」

「大丈夫、私は大丈夫……よかった……冼汰、あなた達が無事で……！」

「まだ動けるとは大したもんだな。火事場のバカ力か……はたまたかわいいたつとやらのためか」

恐らくもう、私のことは脅威にも感じていないだろう。オーバーホールは、無警戒に、不用心につかつかところちに近づいてくる。他の部下たちも一緒だ。

どうやら……逃がしてくれるつもりはないらしい。

……大丈夫なんて大嘘だ。もう私に、戦う力なんて残っていない。

なんとか、私が盾になっている間に、冼汰達だけでも逃がせれば

……いや、無理だ。今の私じゃ……時間稼ぎすらできないだろう。

せめて誰かヒーローを呼べれば……無線も使えない、『テレパス』も使えない状況じゃ、それもできない……いや、出来たところで間に合うかどうか……。

考えても妙案は浮かばず、そうしている間にも、つかつかところちオーバーホール達は迫ってくる。

後ろから、怯えてしゃくりなく声や、息をのむ音が聞こえる。ぎり、と奥歯を噛みしめ、必死で恐怖をこらえているような音も。最後のが……冼汰かな。

自分が情けない。あれだけ普段、いつかヒーローっていう職業がどんなものなのか、どんな気持ちであなたのお父さんとお母さんは命を懸けて戦ったのか……いつか分かるなんて言っておいて、このざまだ。私共々、彼の命を風前の灯にしてしまっている。

なんてことを考えていると、オーバーホールは私……を飛び越して、洗汰に話しかけた。

「ガキ。すごいな、お前のお母さん……じゃなくて、おばさんだったか？ まあいいか……そこのおばさん、今からお前のために死んでくれるってよ」

「……え……!?」

洗汰の震えた声。唐突に言われたことに、理解が追いついていない……みたい。

「すごいもんだよな、ヒーローってのは。仁義でも忠誠心でもなく、人助けで命なんか懸けちまえるし、捨てちまえる。まあ、だからってお前らが助かるわけでもないんだが……立派なもんだ。なあ、ガキ……死ぬ前にお別れの1つも言っとくか？ ちよつとなら待ってやるぞ？」

「え……あ……」

「ほら、何か言いたいことないのかよ。せつかくヒーローが、お前らのために命捨てようとしてんのによ」

「……やだ……!」

「？」

「そんなの、やだ……! マンダレイが死ぬなんて……!」

絞り出すようにして聞こえた声。

洗汰の、弱弱しく……しかし、不思議とはつきりと聞こえる声だった。

「そんなのいい、いらない! 助けなくていい……命なんかかけなくていい!」

「……」

「立派じゃなくてもいい! だから、だから死なないで……やだ! もう……誰かのために死なないでよ、俺をまた1人にしないでよお

……死なないですよ、マンダレイ!?」

「……………ッ……………」

ホントに、私って駄目ないところ叔母ね……

こんな小さな子に、こんな、血を吐くような必死な声で……………こんなこと言わせるなんて……………!

両親を失って辛い思いをしたこの子に、今また、同じようにつらい思いをさせようとしてる……………そんなこと、断じて許容していいはずもないのに!

(助けなきや……………この子を……………この子たちを……………!)

でも、私にはもう……………それを自力で覆す力はない。

どころか、戦って盾になる力すらない。こいつらがその気になれば、一瞬で全員殺される。

(どうすれば……………私にはできない……………誰か、誰か……………!)

助けを呼ぶ手段はない。あっても間に合うとも思えない。

それでももう、私には……………動くことで精いっぱい、武器もなく戦えない私には……………このくらいしか、祈ることくらいしかできない。

視界がにじむ。洗汰達が後ろにいて見えないのがせめてもの救い。

(誰でもいい……………お願い……………どうか……………)

神様仏様……………なんて信じてないけど、誰でもいい。

この願いを聞き届けてくれるなら、何だっつてする。何だっつて捧げる。

お金? 立場? 体? 労力? 何だっつてくれてやる。だから

……

……………お願い。どうか……………

(誰か……………この子たちを……………助けて!!)

——そして、

「SMMAAASH!!!」

咆哮にも等しい声と共に、目の前の壁がはじけ飛んで……その向こうから現れた、やや小柄な緑色の人影が、私達とオーバーホールの間に割り込んだ。

突然の乱入者に、さすがにオーバーホールも驚いた様子だ。

思わず、といった様子で半歩後ずさり。その彼をかばうように部下達が前が出る。

そんな光景にもひるまず、揺らぎ一つ見せず、彼は立っていた。

そして……小さいけれど、なぜか、不思議と……大きく見えるその背中を見せつけて、言った。

「もう大丈夫……僕が、来た！」

そう言ってデク君は、絶体絶命の窮地に陥った私達の前に立ちはだかつて……笑ってみせた。

第83話 TS少女とオーバーホール

時は少しさかのぼり、レスキュー班が船内に突入してしばらくした頃。

緑谷と永久は、ナイトアイ事務所のサイドキックであるバブルガールから提供された情報……要救助者がいると予想されるエリアを片っ端から搜索し、幾度かの空振りを含みつつも、船内数カ所に監禁されていた、人身売買の被害者達を救出し、船に乗せることに成功していた。

最初に助けた子供達を船に乗せた後は、蛙吹とピクシーボブもそれに戻っている。

何度かそれを繰り返した時、不意にピクシーボブが、妙な匂いが漂ってきていることに気づいた。

それは、トラップ発動のためにキュレーターが散布し始めていたオイルの匂いだった。

間一髪脱出艇に、あるいはクルーザーに全員が退避し、さらに脱出艇はクルーザーから距離を取ることで炎に巻かれるのを回避した。

しかしその結果、位置が悪かった緑谷と永久、そしてまだ船内にいるマンダレイがクルーザーに取り残されてしまった。

緑谷と永久は2人は通信で脱出艇か何か見つけて何とか逃げると伝え、そのままマンダレイを探すため、そしてまだ見ていない区画を念のため確認するためにその場を後にした。

その途中からは、サー・ナイトアイと別行動になって船内を駆け回っていたルミリオンと合流したりもした。雄英の先輩後輩ということで互いに自己紹介の時に驚いたりもしたが、今はそんな場合じゃないと協力して搜索を再開。

しかし、幸か不幸か、予定されていた区画を全て調べたが、残された者はいなかった。

いや、『幸』とは言えないだろう……何せ、洗汰達がまだ見つからないのだから。

オイルによる海上炎上網が発生した時点で、救出艇に沈没達は回収できていなかった。つまり、まだ船内にいると目されていただけだが……見つからない。

もしかしたらマンダレイが既に保護しているのかもしれないが、それを確認することもできない。先程からマンダレイの無線が全く繋がらないのだ。ジャミングによって聞こえづらい、つながりづらいということではなく、反応・手ごたえがない。

不安を覚えながらも走っていた緑谷達だったが……その時、

——ピキイイイイン！

まるで何か、電流が走ったような感覚を、緑谷は覚えた。

「……えっ!?!」

「? どうしたの、緑谷君?」

「緑谷? 何か見つけた?」

「いや、今何か……」

何かが聞こえた……というわけではない。

何かが見えたわけでもない。匂いを感じたり、何かに触れたわけでもない。

ただ、上手く言い表せないが、第六感的な何かを『感じた』。

まるで、保須市でのステインの逮捕直前のあの瞬間のように……それは、『殺気を感じた』というものに近い感覚だった。

だが緑谷には、今の感覚は殺気や敵意の類ではないということも同時にわかっていた。

むしろまるで……それは、助けを求めているかのような『何か』を感じた。

(この感じ……声みたいだけど声じゃない……コレ、さつきも似たような……)

船に入った直後、およそ声というものが聞こえる距離ではない場所で、助けを求める子供たちの声が聞こえたような気がした、数分前の出来事を、緑谷は思いだしていた。

言葉をしゃべれない赤ん坊が、懸命に泣くことで意思表示をし、親に、周囲に助けを求めると同じように……言葉というものを介さずに、誰かが助けを求めている。

客観性に乏しく、支離滅裂ですらある。しかし、彼の語彙ではこうとしか表現できない。

永久にそれを伝えれば、『それなんてニューターOP?』くらいの返しは期待できたかもしれないが……それより前に、緑谷は2度、3度とそれを感じ取り……その時点で、今まで幾度となく起こったことが、今回も彼の体に起きた。

考えるより先に、体が動き出した。

「ごめん、こっちー!」

「え、ちよつ……こっちつて何!? 何か見つけたのかい!」

「……さーせん先輩、私も行きます! ああなると緑谷まず止まらな
いんでー!」

「ちよつ……2人共!? ああもう!」

即座に緑谷を信じる判断を下した永久と、困惑しつつもそれを追うルミリオン。

何度か曲がり角を曲がって走っていく緑谷。走るごとに、どんどん頭に聞こえる『声』は強くなっていく。『フルカウル』まで使って加速し、止まることなくそこへ向かって走る。

マンダレイの『テレパス』とは似て非なる感覚だが……この『何か』の発信源は同じくマンダレイだと、途中から緑谷は確信できていた。まるで、彼女の心の叫びが、声にしなくともあふれ出す感情がそのまま入ってくるかのよう。

そして、急ブレーキで足を止める緑谷。

そこまでくると、最早その救援信号は……はつきりと何を言っているのか、あるいは言いたいのかを感じ取ることができた。

『誰か……この子たちを……助けて!!』

——そして、

「SM A A A A A S H!!」

横の壁目掛けて振りぬかれる拳。

大穴が開いて隣の通路と一続きになり、その向こうに見える……満身創痍のマンダレイ。その背後には、洗汰と……恐らくは、島乃真幌・活真兄弟と思しき2人をかばっている。

一瞬の躊躇もなくそこに飛び込み……前回、似たようなことになってしまった時には、残念ながら噛みまくってしまったセリフを、今度こそ彼は言い放つ。

「もう大丈夫……僕が、来た！」

そして、場面と時間が合流する。

☆☆☆

Side・緑色出久

「デク……君？」

「お前っ……!？」

マンダレイと洗汰がそれぞれ驚いて呟く声を後ろに聞きながら、僕はどうにか状況を整理しようとしていた。

保須市と状況似てるなあ……思わず飛び出してよくわからない場面に飛び込んだじやつた。

けどこれも同じように、それ自体に後悔はない。そうしなれとおそらくは、いや確実にまずかったであろう場面だからだ。見るからに。

子供たちを守って戦ったのか、それとも先に会敵していたのかはわからないけど……恐らくマンダレイは既に交戦していたんだろう。

しかし、現状を見るに、敵側は傷らしい傷も負っていない。力及ばずというか、マンダレイに勝ち目は無い状況だったようだ。

するとあの妙な感覚は、マンダレイからの『テレパス』による救援

信号？ いや、それ以前に使っていたそれとは、まるで感じ方が違ったような……相手を問わず使えるはずなのに、栄陽院さんや通形先輩には届かず、僕にだけ届いた理由も気になる。

そもそも、ここまでになる前に、何でマンダレイは『テレパス』で連絡を寄こさなかつたんだろう？ 猫耳型の装備が壊されてるみたいだから、無線連絡が使えないのは理解できたけど……。

……疑問は尽きないけど、考えている暇はなさそうだ。

勢いで飛び出しちゃったけど……目の前にいるこの4人は、ネームドヴィランとその仲間。

中心にいるこいつが、サー・ナイトアイから提供されてた映像情報にあつた『オーバーホール』で……その周りの奴らが部下、か。全員同じような、くちばしみたいな形のマスクをつけてる。……ペストマスク、っていうんだっけか？

ネームド……名前を付けられて呼ばれるようにまでなつた敵の恐ろしさは、保須市で既に体感している。情報にあつた恐ろしいほどの強『個性』のこともあるし……油断していい相手じゃない。

まして今回は手下たちがいるとなると……しかし、幸か不幸かこつちも1人じゃない。

「デク君……今、壁壊して……ど、どうしてここが!？」

「勘、ですかね……」

マンダレイに聞かれて適当言っちゃったけど、実際よくわからないから仕方ない。……今みたいな聞かれ方したつてことは、やっぱりマンダレイの『テレパス』じゃなさそうだ。

「か、勘つて……いえ、それよりも今はこの子達を！」

「それはもちろんですけど、マンダレイもですよ！ ちゃんと全員で、無事に帰るんです！ でないと子供たち……洗汰君泣いちゃうでしょう！」

「なっ、泣くかよ！」

「泣かなっ……泣かないわよ！」

洗汰君の方は予想通りだけど、女の子の方——真幌ちゃんだっけ？

——も言い返してきた。気が強い子なのかな？ それとも、弟を怖が

らせまいとしてか……

どつちにしろ、僕は誰も泣かせるつもりはない。マンダレイもちやんと助ける！

「いいタイミングでお仲間が登場ってか……。よかったと言いたいが……」

と、オーバーホールが呟くように言うと同時に……。その横に立っていた巨漢が、弾かれたように飛び出してくる。思い切り拳を振りかぶりながら。

狙いは……。僕の頭。

「……ちよつとシヨッキングな映像が増えるだけだ」

「ごんにちは、死ね！」

そんな言葉と共に……。恐らくは言葉通り殺すつもりで、僕の頭目掛けて、その巨大な拳を、ペストマスクの巨漢は振り抜いて……。しかし拳は、空しく空を切る。

代わりに、今の一瞬で懐に飛び込み、カウンター気味に放った僕の拳が、その巨漢の横つ面に突き刺さつてのけぞらせた。

「……ほお」

「あ、っ……!?、いふ!?」

何が起こつたかすぐには理解できなかった巨漢の鳩尾に、追撃に、押し返すような形の蹴り——ヤクザキックつていうんだっけか——を叩き込んで吹っ飛ばした。

とんぼ返りして飛んできた巨体を、さつと避ける残りの3人。

「このガキ……!」

悪態をつきながら、黒メガネのペストマスクが銃を取り出してこつちに向けてくるけど……。そこにもう僕はいない。

飛んできた巨漢に気を取られて僕から視線を外した一瞬の隙に、床を蹴って壁に跳び、その壁を蹴って天井付近に跳び上がっている。

その状態で、指ではじいて飛ばす空気弾……。『エアフォース』を放ち、黒メガネの手から銃を取り落とさせる。

怯んだところに追撃をかけるべく、グラントリノみたいに、壁を何度も蹴って縦横無尽に跳び回り、狙いを悟らせず、なんなら目で追え

もしないくらいに動きながら、動揺する黒メガネに追撃を打ち込もうとして……

その軌道上に割り込んできた手に、言いようのない不吉な予感を感じて、急遽中止。

飛び退って、マンダレイ達の前に戻りつつその全体を見ると……やはりというか、その『手』の主は、部下をかばう形で文字通り手を出してきた『オーバーホール』だった。

「ほお……勘、ないし危機察知能力はあるみたいだな」

「……知り合いに物騒な手とか指を持つてる奴が多くてね……経験則かな」

「そうか、大変だな」

特に感情のこもってない、いかにも間を持たせるためだけって感じの会話。

とはいえ、言ってることは割と本音だったりする。……手のひらが爆発する幼馴染や、触れられると塵になる手を持つ敵なんか……後者は知り合いにカテゴライズしていいのかは微妙だけど、実際にいるし。

……もつとも、そんな2人と比較してなお、この男の手は危険なんだろうが。

事前情報として聞かされている、こいつの『個性』……『分解と修復』。手で触れたものを分解し……直後に修復する、規格外の強個性。一瞬で壊し、直後に元通りに組み上げる……あるいは、自分の望む形に改造して組み上げてしまう。

甲板であつたらしい戦いの内容を聞く限りだと、床を無数のとげに変形させて突き刺してきたり、太い柱に変形させてそれを倒して押しつぶそうとしてきたり、変幻自在だったらしい。

さらにそれを応用すれば、触れたもの全て『分解』し……そのまま『修復』しないことで、防御不能、一撃必殺の攻撃手段にすらなる。

(触れられなければいい……なんてのんきなこと言っていられる相手じゃなさそうだ。自画自賛になるけど、さっきの僕の動きにあっさり反応された。『個性』だけの奴じゃないってことだ……)

直後、話に聞いていた通りの光景が目の前で再現された。

オーバーホールが壁に手をついた直後、その壁が一瞬崩れたようになったかと思うと……直後に何本もの太いとげになって、こつちに襲い掛かってきた!? しかもご丁寧に、よければ後ろのマンダレイ達に当たるルートで……!

避けるわけにもいかず、僕は両腕に許容上限いっぱい力を込め……バチバチとひと際激しくスパークさせながら、立て続けに拳を放って、その全てを粉々に粉碎した。

僕自身にも、後ろにいるマンダレイ達にも、1発の攻撃も届かせずに。

しかしその瞬間、今度はオーバーホール……ではなく、その足元にいた小さいぬいぐるみみたいな奴に動きがあった。

その腹から、突然……銃を持った手が飛び出てきて来た!? 何だアレ!? あの小さいのの個性か!?

それにはつとしたマンダレイが、顔を青くして口を開く。

「気を付けて! その銃弾に……」

言い終わるより早く、僕の眼前に、見慣れた黒いコスチュームの背中が立ちはだかった。

同時に、ズシン、という大きな音も。そしてその直後、バアン、キーンツ! という音が立て続けに聞こえた。

一瞬遅れて、今何が起こったのかを把握する。不意を突かれそうになったのを、追いついてきた栄陽院さんがかばってくれたのだ。

僕もマンダレイ達もまとめて……例によって豪快な方法で。

ちょうど近くにあった防火扉（金属製。大きい。重い）を取り外して、というか留め具のところから引きちぎって、僕の前に飛び出しながらそれをドン、と床に横向きに叩きつけるように置いて壁、というか盾にした。その直後に発砲されて……しかし銃弾は、金属のドアに阻まれた。

「んなあ!？」

向こう側から驚愕する声が聞こえる。さっきの発砲した敵だろうか?

まあ、僕も本日二度目のドア破壊（例によって引きちぎられてるあたり……）を前にしてちよつと驚きとか色々で変な汗かいてるけど……まあ助かったのでよしとしよう。

しかし、見た目によらず野太い声だな……なんて思っている前で、栄陽院さんは視線をちらりとこつちによこしつ、拳を振りかぶるようにする。

やりたいことを察した僕も、拳を振りかぶって……同時に、その防火扉を殴る。

ガガン！ と轟音を立てて、巨大な壁が迫る勢いで飛ぶ防火扉。それと通路の隙間から、オーバーホール達が驚愕している様子が見えて……その直後、彼をかばうために、大柄な、いかにも肉弾戦が得意そうな部下が飛び出してきて、両腕で扉を受け止め……

その直後、連中の背後から壁を『透過』して通形先輩が飛び出してくるのが見えた。

その時、僕か、あるいは他の誰かがはっとしてしまったのかもしれない。

銃を拾い直したところだったらしい、黒メガネの部下が、何かに気づいて振り向き、とっさに突き飛ばすようにして彼をかばった。

「危な——」

「何ッ!？」

「POWERRRRRRR!!!」

凄い速さで振るわれた2発の拳が、そのサングラスと、足元にいた小さい敵を殴り飛ばした。

オーバーホールをかばって食らった黒メガネの方は壁にたたきつけられ、恐らくは気絶。

手元から零れ落ちた拳銃をそのまま通形先輩がキャッチ。

ぬいぐるみ?の方は、その体の小ささゆえに扉の隙間からこつちにまで飛んできて……

「サッカーしようぜ、お前ボールな！」

——ドゴオ!!

「なバギャツ!?!」

また独特というか微妙なセリフと共に榮陽院さんが放ったサツカーボールキックで再度逆方向に吹き飛び、鉄の扉に激突して気絶……

……したと思っただら中からすごい大柄な筋肉質の男が出て来た!?!

え、何アレ!?! あんなの中に入ったの!?! 『個性』か!?! なんてギャップ……あ、でも声はむしろ納得いったかも、あの体格だと。

手に拳銃を持っていたけど、それも同時に取り落として……かしゃん、かしゃん、とこつちに転がってきたので、拾っておく。

一応マンダレイに渡す。肉弾戦は厳しいくらいにはボロボロだし、自衛手段になる……かな?

そう言えば、さつき何か言いかけてたような……

「あ、ありがと……でもデク君。ダイナージャと、向こうの彼も……気を付けて! そいつら何か特殊な銃弾を使うわ! それに撃たれてから私……『個性』が使えなくなったの!」

「……!?! 『個性』が……使えなく!?!」

何だそれ? 何かの薬品か何かか? そんなん聞いたことないけど……こんな場面で嘘を言うはずもない。

それに、それなら逆に納得できるぞ……今の今までマンダレイが『テレパス』を使って連絡してこなかったのは、そのせいか! 使いたくても使えなくなってたんだ!

途中から、声を大きくして言っていたから、向こう側にいる通形先輩にも聞こえているだろう。

改めてその敵……オーバーホールの恐ろしさ、危険を認識していると……さつきまで涼しい顔だったそいつが、眉間にしわを寄せ、明らかに苛立っているのが分かった。

「さつきから次々と……どいつもこいつも……俺の邪魔を、するな!」

そして、壁に手をついた次の瞬間……壁が、床が、天井が砕け散り……縦横無尽に無数のとげが形作られた。さつきよりも大量……範囲内にいる僕達全員を、皆殺しにする気満々の攻撃だ。

自分の仲間は回避させている辺り、逆上しきってるわけじゃないよ
うだけど。

僕は後ろに、栄陽院さんは横に、とつさに跳躍して回避した。マン
ダレイも冴汰君達を、抱えるというか押し出すようにして、そのとげ
の波状攻撃からどうにか逃れていた。

しかし、完全にかわすことはできなかったようで、コスチュームに
少しかすってしまい……スカートと上着の前側が大きく裂けてし
まっていた。

スカートの中と胸の谷間が丸見えになってしまった状態だったけ
ど、そんなことに戸惑っていられるほど余裕のある状態じゃない。多
分、本人含め誰も気にしてないだろう。

……ああいうハプニングは栄陽院さんで割と見慣れてる……とま
では言わないが、耐性はあるしね、僕も。

その栄陽院さんは(珍しく)無傷で回避に成功したようで何よりだ。
色々。

その向こう側には通形先輩が無数のとげに貫かれて串刺しになっ
て……ないな。全部『透過』してる。便利な個性だ……いや、それ以
上に先輩の実力あったのことだろうけど。

ひとまず全員無事だが……その中心で、苛立ったままのオーバ
ーホールは、マスク越しでもわかるくらいに息を荒くして周囲を睨みつ
けていた。

「めでたい頭で……強い『個性』なんてもんを振りかざして、いい気に
なって……。『個性』だの『ヒーロー』だの、そんなものがあるから、
社会がおかしくなる……そんなものがあるから、傷ついて行く人がい
て、失われていくものがある……!」

「……!」

その瞬間……冴汰君がびくつと反応したように見えた。

……どういふつもりで言っているのかはわからないが、なるほど
……『個性』や『ヒーロー』を否定するその言葉、ついさつきマンダ
レイが話していた、冴汰君の『事情』に通じるものがなくもない。

殉職したヒーロー『ウォーターホース』……それを褒め称えた周囲。

人を助けて死ぬという、いかにも英雄らしい最期を称賛するかのような世間の態度は、ただ両親を失って悲しんでいた彼には理解できないもので……まるで、自分の親の死がいいことだったかのように扱われたその経験は、洗汰君から『ヒーロー』への、そして『個性』への好意的な感情を奪い去っていた。

今のオーバーホールの言葉にそれを不意に重ねたのかもしれない洗汰君だが……それで恐怖やら不安が少しマシになった様子はない。……むしろ、不安が増してるんじゃないだろうか？ さつきから震えが大きくなってるし……

それに、その隣の……真幌ちゃんと活真君、かな？ 2人も何やら、より不安になっているような……

「そんなものにあこがれて、得意げに振りかざして……拳句、間違った社会が形作られ、バカな連中がもてはやされ……今まであったものが失われていくのに誰一人目もくれず……拳句の果てに、無残な死を迎える者が次々生まれる……！ どのいつもこいつも、病気だ……！ ヒーローも、それを目指す子供も……この社会そのものが……！」

言葉が紡がれるたびに……真幌ちゃんと活真くんはそうでもないけど、洗汰君の顔色がどんどん悪くなっていく。

……予想だけど、なまじ考えること、言うことが似てるだけに……こんな恐ろしい敵と、自分が同じことを考えてることに怯えてるのかな？

例えば、そう考えているからって、自分が行く先があんな恐ろしい男みたいになってしまうのかとか、自分は周りからああ見えているのか、とか……洗汰君、年齢の割に頭がいいみたいだから、そんな必要ないことまで考えてそうで不安……ってのは僕の考えすぎかな？

多分だけど、そう思う理由も、その先に見ているものも全く違うだろうから、そんな風に思う必要はないのに……。

当然、そんなことに気づく由もないオーバーホールの語りは続いている。

続いているが、周囲を油断なく睨みつけていて隙がないので、通形先輩も踏み出せないでいるようだ。

「だから、俺がそれを変える……あるべき姿に戻す……この力が、そして破壊の力があれば、それが……！」

「……超人社会の否定……『個性病気論』だったかな？ さつきマンダレイが言ってた弾丸といい……この社会を壊すために作ったとか、その為に動いているとか、そんな感じか？」

「どーですかねえ……この手の連中にそんな殊勝な心構えがあるとは思えませんけど」

と、通形先輩がつぶやいた疑問に、栄陽院さんは、まるで挑発を含んだような口調で返す。

「昔の資料で読んだことあるんですけど、ヤクザってのは良くも悪くも、社会の隙間に生きる人種だそうですね。社会制度が行き届かないところに巢食い、そこに転がる闇を飯の種にする……それが、時代劇に出てくる侠客みたいなものか、はたまた弱者を食い物にする奴らかはあるにしても、そんな活動家みたいな、金が動かないのに動くようなもんじゃないでしょ。ましてやそんな、特殊すぎる薬物だの弾丸だの作ってるとしたら……もつと儲け話なんてありそうなものだ」

「例えばどんな？」

「所謂マツチポンプなんてどうですか？ 『個性』を壊す毒をばらまいて、『個性』が使えなくなつて困る人を量産し……そのせいで死人が出たり、問題が大きくなり始めたタイミングを見計らつて、その解毒剤みたいなものを高値で売るとか。金は手に入る、恩も売れる、名声も高まる……表向きWin-Winの関係の出来上がりです。ま、裏の仕組みに気づかれたら終わりですけどね」

栄陽院さんがからかうように言った言葉に、オーバーホールの目が少しだけ大きく見開かれたように見えた。

「……え、もしかして当たった？ あるいは、近いこと考えてた？」

挑発じみた物言いだつたし、なんなら僕から見ても『何てこと考え付くんだ』つて思つちやつたから……怒るならまだわかつただけ……戸惑つてるとなる……。

防火扉を受け止めた大柄な部下も、なんか『あらー……』なんてことをつぶやいてるし……本当にそんなこと考えてたのか……!?

栄陽院さんも何か反応がおかしいことに気づいて『え?』って感じになつてるし……

見事にいい当てられた形になつていて、この構図は間抜けに見えるけど……やろうとしてることに目を向ければ……悪辣極まりない。

通形先輩が、気を引き締め……何が何でもここで捕らえる、って感じの表情になつたのが、ここからでもよく見えた。

あの人は理解したんだ……コイツは絶対に、ここで逃がしちやいけない敵だつてことに。

「……活瓶」

「おう? 何だい若頭」

「お前はその女と、緑色のガキを殺せ。確実にここで殺せ。……こつちの金髪は俺が殺す。絶対に……この船から生きて出すな。息の根を止めたのを確認してから戻つてこい」

「聞かれたからには、つてわけかい? 了解した。あつちの猫女とガキどもは?」

「俺がやる。今、な」

その瞬間、再び壁に触れるオーバーホール。今度は、両手で。

そして、さつきよりも大きく、通路全体がうごめき始めて……全てが崩壊し、そして作り替えられていった。

第84話 TS少女と死穢八斉会

オーバーホールが最後に放った……何ていうんだろうな、攻撃だから破壊だか……

ともかくそのせいで通路全体がぶっ壊れ、そしてすぐに修復された。

それに巻き込まされて圧殺されたりすることは避けたものの……分断されたな。

緑谷はとつさに跳んで、マンダレイ達を追いかけていった。

オーバーホールは私と同じ空間に残すつもりだったのかもだが、閉じようとする壁をぶち抜いて追いかけていったからな。止めきれなかっただろう。

その際、一瞬のアイコンタクトで『ここは任せて行け』って伝えておいた。通じたといいけど。

通形先輩はオーバーホールと一緒に空間にいたな……自分で直接、確実にトドメを指すためか？ 私達の中じゃ最も強くて危険だと判断されたか。

まあ私達も弱いつもりはないし、正直通形先輩の實力はまだ測りかねてたけど……逆に、パツと見て測れないくらいには動きも『個性』も見事だった。……多分大丈夫だろう。

で、私の相手はこいつなんだが……

「はっはあ——！ おいおいお嬢ちゃん、コイツはお前さんの『個性』かい？ なんとまあ……運がいいな俺は！ 相性ぴったしじゃねえか俺達2人はよ！」

「うっさい。体だけじゃなくて声もでつかくなってないかあんだ……てかサイズまで変わるのかよ」

「おう、お前さんからたんまり吸わせてもらえたおかげでな！」

言いながら、私の目の前に巨大な拳が迫る。

視界を埋め尽くすほどに大きくなったそれは、回避した私の後ろにあった壁を粉々に砕いて隣の部屋と一続きにしてしまった。

そのまま横に風ぎ払うように振るわれる腕。私はその上を、転がって回避する。

飛んでも、弾いてでもなく、転がって。

そのくらいに……錯覚でも何でもなく、本当にこいつの腕が、というか体が大きくなっている。

最初出会った時すでに十分大柄だったけど……それでも2mと少しぐらいの体格だったはず。

それが今は、優に3mを超えているであろう背丈になり、腕の大きさも拳の大きさも明らかに最初よりサイズアップしている。それに比例するように、パワーも上がっていると来た。

原因はわかっている。こいつが私に『接触』するたびに——さらに言えばその瞬間に息を吸い込んでいたようにも見えた。関係あるかわからんけど——私の体から、力が吸い取られる感触があった。拳を受け止めたり、逆に私の攻撃をガードさせた時とかに。

人からエネルギーを吸収して巨大化する『個性』か？ 単体で使えるようなものじゃないが、上手く決まれば相手の弱体化と自分の強化を同時に行える『個性』だ。

そして、私みたいに……体内にエネルギーを膨大な量貯蔵している奴が相手だと……なるほど、こいつが歓喜するくらいには、確かに相性はいいだろう。

「こんだけ『活力吸収』してんのにぴんぴんしてるかよ！ 残念だなあ……お嬢ちゃんんなら、うちの組に入ってくれりやよかつたのによ。敵だからこんなことになってるけど、俺とお嬢ちゃんが組めばそりゃ無敵だぜ？ いつでも最高のパフォーマンスを發揮できるからな！」

「あんたのエネルギータンクになれってこと？ ごめんだよ」

「ハッハッハ、振られちまったか！ まあ領かれてもそれはそれで困ったがな……若頭から、ちゃんと殺せって言われちまったからよ！」

言うなり、ドン、と床を蹴ってこっちに突進してくる巨漢——名前、活瓶かつがめだっけ？——は、握りしめた拳を、私の頭を粉碎すべく振り抜く。

それを私は両腕を前に出し、野球のキャッチャーのように受け止める。

同時にそこから吸い取られるエネルギー。私の力をまた奪って、活瓶は力に変える。

「ははははははー！ いいぜいいぜ、すごく元気になってくるぜエ！ ホントによお、ここで殺すのもったいねえなコレは……俺のためにあるような『個性』だぜ！」

ぐむぐむとさらに大きくなっていく体。反対に、私の体からは力が抜き取られていく。

まだまだ『エネルギー』の蓄えに余裕はあるが、このペースだとそれよりも先に、こいつが手が付けられなくなるほど強くなってしまいうことも十分考えられる。

ああ、本当にこの『個性』……私の『無限エネルギー』と相性がいいんだな——

——ただし、私にだがな。

ドスツ、と私の拳が男の横っ腹に突き刺さる。

既に4mを超えているであろう身長を手に行っている男の、分厚い腹筋を前にしては、あまりにも頼りない一撃だっただろう。現に、気にも留めていない。

「ははははっ、効かねえよ今更そんなパンチ！ 諦めなお嬢ちゃん、もう勝ち目……は……？」

しかし、その瞬間現れる異常。

まるで、油をさしていない機械のように……ギギギ、と異音が聞こえてきそうなほどに、活瓶の動きが鈍くなっていく。

流星におかしいと思ったようだが、もう遅い。

「そうだな、もう勝ち目ないよ……お前にな」

ドン、ドン、ドン、と私は拳を、そいつの両手両足、そして両肩に打ち込む。

そのたびに動きが悪くなり……ついにはほとんど完全に止まって

しまった。自分の意思では全く動かせず、微妙に体がぶるぶると震えるくらいにしかなくていい。

説明はしないが……今放ったコレは、母さんとの特訓で身に着けた新技だ。

本来は、接触ないし打撃によって相手の体の中に、私の『エネルギー』をあえて流し込み、それを流し込んだ後も制御することで、相手のエネルギー全体の流れを掌握したり狂わせる技。

そのパターンの1つとして、『エネルギーバインド』と呼び名のついで……相手の体内のエネルギーの流れを止めることで、動けなくしてしまう技がある。

あの日、私が母さんに（全裸で）かけられた技がそれだ。

なお、名前が特になかったら私は『ノッキング』とか名付けてたかもしれない、とか思った。

母さんレベルのコントロール能力でなら、ごくわずかな量のエネルギー……それこそ、指先でちよつと触れただけでも十分に拘束できるだろう。よつぽど大柄とか、パワフルな敵でもなければ。

私はまだ未熟だし、ましてこいつかなり大柄でパワフルだから、本来なら結構な量のエネルギーを流し込んで、相手の体内における私由来のエネルギーの比率を大きくしてからじゃないとコレ上手くないかないんだが……こんだけ豪快にというか、自分からエネルギーをどんどん吸い取ってくれる相手なら、集中力もテクニックもほとんど要しないほどに簡単に拘束できた。

ぶるぶると震えながらも立っていた活瓶だが、バランスを崩してか、はたまた踏ん張る足腰が言うことを聞かなくなったからか……仰向けにどう、と倒れた。

が、大きくなりすぎて壁につつかえて、寄りかかるみたいな形で止まっている。

ふむ、この姿勢……サイズがサイズだし、ちょうどいいかな。助走つければ……いけるか。

「何を……した……!？」

「敵にわざわざ説明するわけないだろ、どこぞのオサレバトル漫画

じやあるまいし……あと話長くなるからめんどくさいし」

「おま……この流れは普通……」

話を最後まで聞かず、部屋の反対側に走っていき……そのままUターンして、座り込む活瓶目掛けて加速して走る。

「舌噛むなよ?」

「は!? 何するんツ……」

加速はそこそこにして、助走からの跳躍。そのまま、胡坐と体育座りの中間みたいな形になっている活瓶……の膝のあたりに左足で着地。そのままそれを足場というか踏み台にして体をひねり、助走の勢いを殺さずに上手く乗せて……

残った右足、その膝を、マスクに覆われた顔……その横つ面に、顎を捕らえるように叩き込んだ。

ドゴオツ!! と鈍い音がして、振りぬかれた私の膝蹴り……シャイニング・ウイザードのつもりで放ったそれを受けた巨体は、それきりそのまま沈黙してしまった。

上手く脳を揺らせたようだ。少しの間警戒しつつ確かめてみたが……ちやんと気絶したっぽい。これで当分は起きないだろう。

まあ、起きても『エネルギーバインド』が効いてるうちは動けないだろうが……これからコイツを運ばないといけないからな。運んでる間に吸われたら困るし……そもそもこれ以上大きくなったら運ぶのも大変だ。

……今でも十分に大変だが。船に乗るかな……?

早いところ、緑谷達の様子も見に行きたいんだが……。

☆☆☆

オーバーホールの手が壁に触れる。

『分解と修復』……驚異の強個性の力が、周囲一帯に伝播する。

「認めるよ治崎……一介のヤクザとは思えない戦闘能力だ……!」

壁が一瞬で無数のとげに変化し、ルミリオンを串刺しにするか、あるいは押しつぶしてミンチにするか、あるいは粉碎して肉片にするために殺到する。

「それに加えてその『個性』！ 触れるだけで対象を分解してしまう、防御不可能の凶悪さ！ それを、スベックに振り回されることなく使いなすセンスも圧倒的だ！」

その全てをすり抜け、疾風のような速さで迫りくる。あらゆるものを『透過』し、攻撃も防御も意味をなさないうまま、見る見るうちに間合いが詰まる。

「それほどの力を手にするまでにどれだけの努力をしてきたのか、何を考え、何を見据えてそこに至るまでになったのか、それもわからない」

そしてオーバーホールの眼前にとうとう到達し、拳を振りかぶった瞬間……オーバーホールの背後から、彼の横をかすめ、眼前を貫くように何本ものとげが伸びた。

自分を殴る瞬間に実体化するはずの拳。そこを狙ってカウンターを当てるために。

「実力は一級品だ……並のヒーローではなすすべもなくやられてしまおうだろう！ でもね！」

しかし、それすら読んでいたルミリオン。

空しくそのとげは拳をすり抜け……驚愕しつつも、防御しようとす腕すらすり抜け……

「それでも！ 俺の方が！ 強い！」

100万を救う輝きの拳が、その顔面に突き刺さる。

ペストマスクが外れるかと思うほどの威力で、顎に直撃した拳。

咄嗟に打点をずらすべく体をひねっていないければ、オーバーホールの意識はきれいに刈り取られていただろう。鍛え上げられた肉体が繰り出す拳は、それだけの威力を持っていた。

それでも激しく脳を揺さぶられ、ふらつきながらも……オーバー

ホールは、衰えぬ気迫を視線に乗せてルミリオンを睨みつける。

それで彼が怯むことはなかったが、少なくとも、何発殴ろうともこの男は諦めない、投降しろと言ったところで聞くことはありえないだろう、ということとは読み取れた。

一瞬だけ自分の顔に触れる。それで今の傷を『修復』してなかったことにし、懐に手を入れて何かを取り出そうとし……驚愕。

そこで初めてオーバーホールは、自分の着ていた服の胸の部分が、引きちぎられていることに気づいた。恐らくは、今殴り飛ばされた時……その一瞬でだろう。

そして、そこに入っていたはずの『中身』は……今、目の前に。

ルミリオンの手の中にある。銃と、それに込めるはずだった弾丸……その両方が。

そして、弾丸の方は……ただの弾丸ではない。この状況を打開するために切ろうとしていた、切り札だった。……それも、もうないが。『デザートイーグル……これも密輸品か？ 装弾数は8発。けどこのケースには10発入ってる。予備の弾丸にしちや数が半端だし、梱包もやけに丁寧だ。オマケに弾頭に針がついてる……ただの弾丸じゃないね？ 恐らくは……さつきマンダレイが言っていた、個性を破壊する特殊弾』

「貴様、なぜそれを……！」

「どうしてコレを持ってたことに気づけたか？ そりや、動きを『予測』するために、お前のことをきちんとずっと見てたからね！ ……さつきお前、音本と入中がやられて銃を失った時、一瞬、自分の懐を確認しただろ？ そこに代わりになる銃が入ってるんじゃないか、あるいは、この状況を打開するための秘密兵器でも持つてるか……あるいはその両方か。そう『予測』したのさ」

ルミリオンの予想は当たっていた。拳銃は単に武器だが、ケースの中身の弾丸は『個性破壊弾』である。

もっとも、オーバーホールからすれば、それがなくても十分戦える。不意打ちで相手の『個性』を消せれば有利にはなるだろうが、そうでなくとも、周囲一帯を武器にして相手を圧殺できるだけの力を、彼は

持っているのだから。

だが、それを持ち帰って検証され、中身が何なのかを調べられたりするこの方が問題だった。ゆえに、絶対に取り返すか……奪われるくらいなら廃棄しなければならぬ。

隙を伺いながらも、ギリ、と奥歯を噛みしめ、苛立ちを滲ませる。

「この銃弾を使って何をする気なのかはわからない……でも、こんなものを作っているという時点で、お前は、お前達は本当に危険だ……絶対にもう、ここから逃がすわけにはいかない！」

「どいつもこいつも……大局つてもものを見ることができない、力に酔っただけの英雄気取りが……！ 病気だ……お前ら全員……この間違った社会に毒された異常者どもが……！」

「力に酔う？ ははは、そりやまた買いかぶられたもんだな……こちらどろどろから必死こいて這い上がった元劣等生だよ？ そんな上等な力なんて持つてなかったし、成績も悪かった……今だってそんなもんに酔っぱらってる暇なんてないよ。まあでも……」

オーバーホールの殺気を軽く受け流すルミオン。そのにこやかな笑顔の裏に……確かに正義の熱い炎を燃やしていた。

そして、正義感と同時に……先輩としての意地も。

ふと思いつき出されているのは……オーバーホールによって崩壊していく通路の向こう……1年の中でも特に期待の新星とされている2人が、はぐれる直前に、自分に向けて来た目。

言葉一つなく、よこしたのは視線のみだったが、それで十分伝わった。

『通形先輩！ マンダレイ達は僕が……そつちはお願ひします！』

『船で合流しましょうね！ なる早でオナシヤス！』

※意訳である

「切羽詰まった状況だったとはいえ、間違いなく、かわいい後輩が信じて託してくれたんだ……！ そりや先輩としても、ヒーローとしても！ 張り切らなきゃ嘘つてもんだよね！」

言いながら、ルミリオンはそれを上空高く放り上げ……とつさにオーバーホールは、ほんの一瞬だけ、それを負って目を、視線を上

やっってしまう。

その瞬間、ルミリオンは床に沈み込んで姿を消し……次の瞬間、瞬間移動したかと思うほどの速さでオーバーホールの眼前に現れた。

咄嗟に突き出された手。それに触れれば、いかなる物質もその形を立ちどころに失って『分解』されることになる。

しかしその必殺の手のひらも、最後までルミリオンの髪の毛一本すら捉えることはできず。

鳩尾に拳が突き刺さり、オーバーホールの体が『く』の字に折れ曲がって、宙に浮く。

さらにそれを足払いの要領で蹴飛ばし、体勢を崩させる。

これにより、完全に空中に放り出されたオーバーホール。手を伸ばしても、壁にも、床にも、天井にも最早届かない。

そこにさらに顎に拳が叩き込まれる。その勢いで、空中で体が反転するほどの力が加わり……当然、激しく脳が揺さぶられる。

ルミリオンはその動きのまま、オーバーホールの体をすり抜けて背後の床に沈み込み、そこから実体化・反発の勢いを利用して、さらに追撃をかける。加速の乗った拳が、また1発顎に打ち込まれた。

そのまま今度は天井付近にまで跳び上がり、肘の部分だけを引き絞るようにして……そのまま天井に肩まで沈み込ませる。そしてまた、実体化によって生じる力をカタパルト代わりに、打ち下ろす拳を打ち込んだ。

そしてそのまま落下。再び床に、体が見えなくなるほどに沈み込み……追うように落下してくるオーバーホール目掛けて……トドメの一撃を放つ。

「POWERRRRRR!!!」

打ち込まれた拳は、とうとうその意識を刈り取り……白目をむいて、オーバーホールは力なく床に落下。そのまま動かなくなった。

そして、それよりも早く、もといた地点に戻ったルミリオンは……数秒前に自分が投げ上げ、落下してきた拳銃と弾丸をキャッチしたと

ころだった。

一拍遅れて、オーバーホールの体が床に叩きつけられた音が響く。そのダメージも、『個性』を使えばたちまち修復されてしまうのだから、意識がなければそれも関係ない。

動く様子が間違いなくないことを確認し、ふう、とルミリオンは息をついた。

……しかし、次の瞬間、

——ズズウウン……！ ギギギギギギ……！

「……っ!?」

船体全体が再び揺れたかのような衝撃と振動。そして、前後左右上下から、まるで何かかきしんで壊れるような音が響いてくる。

さらには足元に違和感。徐々に船が傾き始めているのを察するこ
とができた。

それでもオーバーホールは目を覚ましてはいないようだが。ルミリオンはそれに安堵しつつも、今の轟音と振動の意味を察知して青ざめる。

(まずい……もう限界か！ 船が……沈む！ 緑谷君に栄陽院さん……マンダレイ達も！ 脱出、出来ただろうな!?)

第85話 TS少女と新たなる目覚め

オーバーホールの『個性』の大規模発動により、他のメンバーと分断されてしまった緑谷は、足を止めることなく、ひたすら走っていた。通路どころか壁も床も天井も滅茶苦茶になっている。加えて、キュレーターが仕掛けた自爆装置の影響もあってあちらこちらで破壊が起こり、最早この船の寿命は長くないことは明らかだった。

もう一刻の猶予もないであろう中……緑谷の足取りに迷いはない。出発前、大まかに頭に叩き込んだ船の見取り図——この船そのものではなく、同型の船のそれをナイトアイから提供されていた——も最早役に立たないが、緑谷は何かに導かれるように、時に直進し、時に角を曲がり、時に道がないところで壁をぶち抜いて進む。

否……実際に導かれているのだ。
先程から聞こえる、謎の声によって。

(マンダレイの『テレパス』じゃない……けどコレは間違いなく、マンダレイの『心の声』だ。それだけじゃない、洗汰君や、活真君や真幌ちゃんのもの……はつきりじゃなくおぼろげに『感じ取れる』だけでなく、それでも……居場所がわかるなら問題ない！)

ノンストップで走り続け……ふいに停まる。
そこで、緑谷は何もない通路の壁に手について……何かを確かめるように目を閉じる。

そして、その壁目掛けて拳を振りかぶり……

「SM A A A A A A S H!!」

突き出した拳……その衝撃は、金属や木材、コンクリートや断熱材などを等しく粉碎しながら壁を貫通し、その向こう側に広がっていた広大な空間を緑谷の目の前にさらけ出させた。

☆☆☆

その部屋はまるで、造船ドックのような作りになっていた。

多数の小型クルーザーやジェットスキーを格納しておくためのスペースだ。この船自体は沖合に停泊させておいて、陸地に秘密裏に上陸するための小型艇の保管庫、ということだろう。

もつとも、それらの小型艇は……脱出を防止するためか、自爆装置の作動と同時に破壊されるようになっていたらしく、全てスクラップ同然になっている。動きそうなものは一つもない。

しかも、船の発着設備という関係上、設備の一部は水を通して、水路として外海と繋がるようになっていたため、どうやらその分底の部分が脆かったらしい。水を通すどころではなく、完全に浸水してしまっている。猛烈な勢いで、設備の数々が、いや部屋そのものが沈んでいって、水に飲み込まれつつあった。

キュレーターによる自爆装置の影響というか、破壊による被害を大きく受けているのだろう。そこは、今にも部屋全体が崩れ落ちるか、あるいはその前に水没してしまいそうな空間だった。

その部屋の……水面と天井部の中腹のあたりに、マンダレイと子供たちはいた。

マンダレイと洗太、真幌と活真の4人は、滅茶苦茶にされた船内を、通れる通路を選んでとにかく足を止めずに走り続けた。走りすぎて足が、脇腹が痛くなっても、足を止めれば死んでしまうとわかってきたから、全員必死で走り続けた。

マンダレイも、ヒーローと言えどさすがに子供3人を抱えて走ったり動くのは難しいし、そもそも彼女は先の戦闘での負傷に加え、少ないとは言えない量の血を流して消耗していた。万全とは言えない体調で、無理をして動いている彼女にも、そういう意味でも最早残された時間は少ない。

ほとんど役に立たないことは察していながらも、マンダレイは必死で頭の中から船の見取り図を引っ張り出して、どうにか外へ通じる通路へ出ようと4人で走り続けたが、その果てに行きついてしまったのはこの部屋だった。

確かに外には通じているが、それは水中を通じた。それ以外の通路は全て崩れるか、水没してしまっていて実質使えない。

だが、今から別のルートを探しては確実に間に合わない。

どうにかならないか、とマンダレイは部屋を見渡し……開閉式の天井が一部破損して夜空が見えていることに気づいた。あそこまで登れば、外には出られる。あとは……海に飛び込むなりして、崩落からひとまず逃れられれば救助されるのを待てば……と。

意を決してマンダレイは、洗汰達にそれを説明し……ハリウッド映画も真つ青な、崩落しかけている部屋の無事な通路を渡つての脱出を試みる。

子供たちも、最初は『怖い』『そんなの無理だ』と首を横に振ったが、それしか助かる道はないと説得し……注意深く、しかし急いで歩みを進めていく。

壁沿いの作業用通路や、ゴンドラを思わせる昇降機、そのロープを伝って……あるいは壁に張り巡らされている配管の上を渡って、少しずつ、確実に、どうにか出口へ近づいて行く。

しかし、そんな頑張りも空しく……何度目かの大きな揺れが起こった際、先へ続く道が全て壊れて閉ざされてしまう。配管は外れ、通路は固定具ごと引きちぎれ……全て水の底へ吸い込まれて行った。

「ま、マンダレイ、道が……！」

「大丈夫！ 慌てないで、落ち着いて……まだ、まだどこか使えるルートがあるはず……」

そう言つて見渡して探すも……使えそうな脱出ルートは見つからない。

ないわけではない。まだいくつか配管などは残されているし、そこを伝つて、あるいはボルダリングのように足場にして登っていけば出ることはできそうだ。

しかしそれが可能なのは、大人である自分だけだろう……それも、体調が万全でない今の自分では、決して簡単には行けなさそうである。

1人でも不安な道のりだ……子供たちを、例えば1人ずつでも抱えて

登るのは無理だろうし、時間が足りない。そもそも、それまで全ての足場が持つはずもない。

ぎり、と奥歯を噛みしめて表情を歪ませるマンダレイを見て、子供たちは幼いながらも、最悪の状況を頭によぎらせる。目の端に涙が浮かんできてしまうのも仕方のないことだった。

「ね、ねえ……どこ!? どこを行けば助かるの!?!」
「っ……それは……」

「ねえ……ねえ! あなたヒーローなんでしょ! 助かるって、大丈夫だって言ったじゃない! 嫌……こんなの嫌! お願……助けて! 助けてよ! こんなところで死ぬなんて嫌!」

マンダレイの、一部が千切れたスカートに縋りつくように、涙を流しながら問いかける真幌。

その後ろでは、どうしていいかわからずに、しゃくりあげるばかりの活真が、姉とマンダレイの顔、洗汰の顔や、崩れた道をあちこち繰り返して見ている。

まるで、どこを行けば助かるかの答えを探しているように。どこを見ても、答えなど書いてあるはずもないのに。

そんな中、真幌はふいにはつとしたような顔になり、

「罰があたったの……!?!」
「えっ?」

「ヒーローなんか嫌いだって、そんなこと言ったから罰があたったの? 私が悪いの? だから助からないの……ねえ……そうなの?」

真幌がそう呟き……彼女の心の内を知っている2人……活真と洗汰は、こちらもはつとする。

ヒーローが危険な仕事であることを、彼女は知っている。時に危険な場所へ赴いて、自分の身を、命を危険にさらして人を助けなければいけない。時に凶悪な『敵』と、命を懸けて戦わなければいけない。彼女はそんなヒーローという職業にあこがれてはいなかったし……弟である活真があこがれていることも、将来ヒーローになりたがっていることもよく思っではいなかった。

それがきっかけで洗汰と仲良くなったわけだが……マンダレイは

それを知らない。

ゆえに言っていることもよくはわからないが、これだけは言うことができた。

「そんなことない……あなたが悪いなんてこと、何一つないわ」

「でも……こんな……」

「大丈夫……大丈夫！　必ず、必ず助けてみせるから……私の、命に代えても！」

「……っ！　そんなこと言うなよ、マンダレイ！」

その瞬間、はつとしたように反応した冼汰が、先程の真幌に倍する大きさの声で言った。

聞いていた面々は突然のことに戸惑うが、構わず冼汰は続ける。単に気にするような余裕がないのであろうが、それ以上に……今のマンダレイの言葉は、彼の心の琴線に触れていた。

「言うなよ……命に代えてとか、そんなこと言わないでよ！　誰かのために犠牲になるとか……そのためにマンダレイが、ヒーローが死ぬとか……もうやだよ！」

「冼汰……」

「冼汰、あんた……!?!」

冼汰の叫びに、マンダレイはその激情の根源を察したのはもちろん……詳しくは事情を聴いていなかった真幌と、何も言わないが活真も、何となくだが、彼の原点にあるものを察した。

その答え合わせになるように……感情そのままに、冼汰は口から言葉を紡ぐ。

「……わかってるんだ……ヒーローが嫌いとか、個性なんてくだらないとか……そんなこと言ったって意味ないって、そんなことわかってるんだ！　パパとママは、『ウオーターホース』は、皆を守るために戦ったんだって、そうしたかったただけなんだって、悪いのはヴィランだってのもわかっているけど……それでも、だからってパパとママが死んだことがよかったみたいって言われたの、納得もできなくて……でも何をどうしたらいいのかもわかんなくて……!」

「冼……汰……!」

「わかんないからって全部ヒーローとか個性とかのせいにして……俺がバカだったのもわかかってるけど、それでもこれだけは言える……俺、もうそんなのやだよ！ マンダレイに死んでほしくないよ！ もう……俺を置いていかないでよ！ ヒーローのことバカにするのやめるから、もう八つ当たりしないから……何でもするから死なないで、死ぬなんて言わないでよお！」

未だ心の傷が残る従甥にこんなことを言わせてしまったと、マンダレイは涙を流して懇願する冼汰を前に……自分の未熟さ、無力さを嘆く。

いくら普段生意気にしていても、強気そうでも……彼はまだ子供なのだ、大人が守ってやらなければいけない存在なのだ、改めて痛感し、理解していた。

そして……自分に最早、それだけの力がないことも、同時に。しかし、天は彼女を見放してはいなかった。

あの通路で……オーバーホールらを前に、冼汰達を守れない自分の無力を嘆きながら、心の声で叫んで助けを求め……それに呼応して起こった、1つの奇跡。わかるはずのない場所を探り当てて駆けつけた、1人の若きヒーロー。

その奇跡が……再び起ころうとしていた。

「SMAAAAAAAAASH!!」

聞き覚えのある声と共に、背後の……丁度4人が通ってきた位置の壁が吹き飛んだ。

はつとして振り返ったマンダレイ達は、そこに空いた風穴から飛び出してきた緑谷の姿を見る。同時に緑谷もまた、マンダレイ達を見つけて顔をほころばせた。

「マンダレイ！ 冼汰君達も……」

「デク君！」

「み、みど……！」

「うわあああん、たす、助けてえ——！」

驚くマンダレイに……その彼女の隣に寄り添う洗汰。マンダレイの、そして自分達の命の危機に、どうしていいかわからずいたところに光明が差したからか、その目からは涙が零れ落ちていた。

そして、それ以上の勢いで泣いている真幌と活真も。

事態を把握した緑谷が動こうとすると同時に、マンダレイが声を上げる。

「デク君！ 君が来たその通路……外にはつながっている!？」

「いえ、ずっと僕も中で……ルートまではわかりません！ 途中のルートはオーバーホールが弄っちゃったし、必ずとは……」

「なら上を見て！ 開閉扉の一部が変形して隙間になっているの！

あそこまで行けばひとまず、外には出られるはず……後は救助艇に引き上げてもらえば、海に飛び込んででも……」

「ま、マンダレイ！」

その時、洗汰が悲鳴を上げ……その、マンダレイが今まさに言っただけ示していた天井の隙間を指さした。

見ると、船体そのものが崩れて変形していく影響でか、ギギギギギ……という破滅的な音と共に、隙間を形作る2枚の金属扉が変形していき、折り重なるようになって……今まであった隙間が、なくなっってしまった。

「……！ そんな……」

愕然とするマンダレイ。今まさに、最後の希望が摘み取られてしまった。

加勢が来て、助かるかと思った矢先に……あまりにも残酷な仕打ちに、崩れ落ちそうになる。

しかし、同じようにそれを見ていた緑谷は、素早くその周囲を確認し……何も言わず、その場から大きく跳躍する。

ガアン！ と音を立てて勢いよく足場を蹴り、壁や配管を次々に蹴って、あつという間に部屋を駆け上っていき……先程まで『隙間』があったところに近づいて行く。

そしてその直前で、よりしつかりした壁を足場を選んで強く蹴り、勢いをつけて回転しながら……2枚の鉄扉が重なっている場所目掛

けて、拳を叩きつけた。

「カリフォルニア……スマツシユ!!」

ガゴオン! と、思わず耳を塞ぎたくなるような激しい音が響き……その衝撃に、重なっていた2枚の金属板が離れて、先程よりも大きな隙間ができた。

「……すごい……!」

今しがた自分達を襲った悲劇を、いともたやすく解決してしまった緑谷の姿に、そしてその所業に、活真は涙すら止めて見入っていた。洗汰と真幌も、程度は違えど似たようなものだ。

しかし緑谷は、苦々し気な表情をして……壁に丁度ある突起部分に上手く着地して言う。

「だめだ……あれじゃまたすぐ塞がる」

緑谷の言う通り、変形そのものが進んでいるせいだろう、今緑谷が殴って作った隙間も、徐々に塞がってきていた。あれでは、マンダレイ達が登りきる前にまた塞がってしまうだろう。

「そんな……無理なの!?!」

「大丈夫、何とかなるよ!」

「どうやって!?! また穴開けても、塞がっちゃうんじゃ……!」

真幌の悲鳴のような言葉が響くが、デクは……務めて笑顔を浮かべたまま、力強く応える。

「だったらもつと強く殴ればいい。ちよつとやそつとじゃ塞がらないくらいの大きな穴をあけて……その瞬間にみんなで一気に通れば……100%の力なら、行けるはず……!」

「待って! デク君、100%って、もしかして体育祭で見せた……アレは、反動で君の腕が壊れてしまうような技でしよう!」

マンダレイがはつとして言い、それを聞いた洗汰達も驚いて彼を見るが……緑谷は、否定することはなかったが、それでも表情を変えることはない。

既にその目は覚悟を決めた目になっていて、それを前提に、今取るべき最善手を模索している。周囲の壁の状況を見て、4人を助けるためのルートや運び方を考えていた。

(100%の力なら、簡単には塞げない穴を開けられるけど、それも船自体が崩壊に近づけば塞がって……というより意味がなくなってしまう可能性が高い。崩落とかで……可能な限り早くそこを通って抜け出せるようにしないと。そのためには、マンダレイ達をあらかじめここまで連れてきてから穴を開けた方がいい。マンダレイは独力で登れそうだけど、残りの3人は無理だろう……背負って登って、このあたりの比較的しっかりした足場で待機させて……っ!?)

しかし、お得意の思考(大急ぎ)の最中に、緑谷は衝撃の光景を見る。

今さっきまで自分がいた足場……すなわち、マンダレイ達がまだいる足場の下部から、バキン、バキン、と破碎音が聞こえて……ボルトが何本も飛んでいるのだ。

それが意味するところは、支えの欠落である。そうならば当然……(まづいー!)

反射的に緑谷は彼女達の元を目掛けて跳び……それと同時に、がくん、とマンダレイ達のいる足場が傾いて……その瞬間、ようやくマンダレイ達は異常を察知した。

「なっ……!?!」

「うわあああああ!?!」

「きやあああああ!?!」

パニックになって悲鳴を上げる子供達を、マンダレイはどうにか抱えてかばおうと、落下する直前に全員を抱き寄せ……それをさらに、間一髪間に合った緑谷が全員抱え上げ、別の無事な足場に押し込むように着地させた。

しかしすぐにその足場も傾きだし……

「皆！ 僕に捕まって！」

緑谷は壁と一体化していて簡単には崩れないであろう部分を見極め、左手でそれをつかむ。そして右手で、最も力が弱いであろう活真と真幌の服を力いっぱいつかみ……その腕を、洗汰とマンダレイがつかんだ。もちろん、活真と真幌も、2人の側からも緑谷の腕や体、コスチュームの端などをつかんでいる。

内3人が子供とはいえ、一気に4人分の体重を支えることとなった左腕に負担が重くのしかかるが、常時許容上限30%の『フルカウル』で強化した腕力と握力はそう簡単にはへばらない。

しかし……捕まっている方の突起、ないし壁はそう上手くはいかないようだ。

頑丈そうな場所を見極めたとはいえ、元となる壁そのもの、なんなら部屋そのものが崩れかけているせいで、いつ壊れてもおかしくない。危機的状況は継続していた。

腕一本、身一つで4人の命を支えている緑谷は、必死で頭を巡らせる。

(この状態から誰1人落とすことなく、駆け上がってあの金属扉をぶち破る……幸いというか、一塊になれてるんだし、このまま跳べば……いやダメだ！ つかんでる2人はともかく、マンダレイと冴汰君は振り落としてしまうかもしれない！ それ以前にちようどいい足場がない……きっちり蹴って踏ん張れなきゃ、100%の力でも……そもそも、その後きちんと蹴って外に出るには、そこにも足場があるんだ！ それも探さなきゃ……でも、時間が……もうこの壁がまたない……！)

そんな彼を下から見ていたマンダレイは……順に、不安がる冴汰を、怯える真幌を、目をきつく閉じて恐怖が去るのを待つ活真を見て……口を真一文字に結ぶ。

そしてなぜか、片腕だけで緑谷にしがみつく状態を取ると、腰に着けている小さなポーチに手を入れ、何かを取り出す。

見た目は大きめの金属性の楕円形の輪か何かのように見えるそれは、山岳救助の等の際に、ロープなどと組み合わせて体や荷物の固定に使う、カラビナと呼ばれる道具だった。

それをいくつか単体で使い……冴汰や真幌、活真の服の一部を緑谷のヒーローコスチュームのベルトなど、頑丈な部分に固定する。多少激しく動いても、彼らが振り落とされたりすることのないように。

何かしているのに気づいた緑谷や、冴汰達が、説明を求めるように不思議そうな視線をマンダレイに向ける。その目に移った彼女は

……この状況に似合わない、穏やかな笑みを浮かべていた。

その表情を見て、そしてその表情の裏に隠された『感情』を感じ取って……緑谷は、強烈に嫌な予感が頭をよぎり、問いたただそうと口を開こうとする。

しかしそれより先に、マンダレイは口を開いた。

「緑谷君……これで多分、あなたが多少激しく動いても、洗汰達が振り落とされることはないわ。特別製のカラビナだから……そこらの拘束具より頑丈だから。身軽になったら、どうにか皆を逃がして……お願いよ」

「身軽……？ マンダレイ？ 何を……」

「……真幌ちゃんと、活真君だった？ ごめんね、怖い思いをさせて……おばさん、ヒーローなのに……最後まで、ちつとも頼りにならないくてさ」

「え……!? 最後、って……」

「ま、マンダレイ……さん？」

マンダレイの口からつづられる言葉の数々に……緑谷のみならず、真幌も活真も不吉な予感しかない。そして、最後に……その筆頭であらう洗汰に、マンダレイの視線が向いた。

「洗汰……」

「ま、マンダレイ……？」

聖母のような優しい表情のまま、マンダレイは洗汰の頬に手をやって……力なく笑う。

「ごめんなさいね、洗汰……ふがないおばさんで……頼りないヒーローで……。わかってたことではあるけど……結局私じゃ、あなたのパパとママの代わりにはなれなかった。苦しんでるあなたの本心に、心の叫びに、気付いてあげること、何かしてあげることができなかった……」

それでも、とマンダレイは続けた。

やめて、それ以上言わないで、と目で訴える洗汰を無視して、続けた。

「どれだけ時間がかかってもいい、どんな形でもいい。ヒーローが嫌

いでもいい、『個性』が嫌いでもいい……あなたが悪いことなんて何一つない。だから、どんな形でもいい、どうか幸せになつて………私
のことは、忘れて」

そして、

「マンダレイ!?!」

「ダメです、そんな……やめてマンダレイ!」

洗汰の悲鳴と、緑谷の制止を無視して、

「……………さよなら」

その手を放し、目を閉じて、落ちていった。

二度と上がって来れない、水の底へ。船の残骸と冷たい海水が混ざり合った、地獄へ。

「やだあああああああああ!!」

☆☆☆

(何だ、コレ?)

恥ずかし気もなく涙を流す洗汰の悲鳴を聞きながら、人1人分軽くなった感触をその身で感じながら……緑谷は、まるで『死に際の集中力』のように、ゆっくりを時間が流れる中にいた。

(何だ、コレ? ……何だ、コレ!?)

目の前で、ゆっくりと……マンダレイが落ちていく。

水没した部屋を下へ下へ、仄暗い水面目掛けて落ちていく。

自分の最後の役目として、緑谷にかかる重量を、大人1人分軽くして……その分を自分が、地獄に持っていく覚悟を胸に持って。

あと3秒もすれば、マンダレイの体は着水し、水面を突き破って沈んでいくだろう。

マンダレイはケガと失血で、体調は万全には程遠い。とても泳いで生還するだけの力はない。

まして、今この船が『沈んでいる』最中だというのが問題だった。船などの巨大な物体が沈んでいく際、それに伴って海中に向かつて水の流れができる。それに巻き込まれると、周囲にいる人やあるものもまた、引きずり込まれるように海の底に流される。

沈む船から逃げる時は、泳ぐにしろボートに乗るにしろ、とにかく一刻も早く船から離れることが重要だと、緑谷は何かで読んで知っていた。

すなわち、ここで水中に落ちれば、体力も残されていないマンダレイは……そのまま海底まで船と一緒に引きずり込まれていく未来しかない。

(ダメだ……ダメだ！ そんなこと！)

あつてはいけない。そんな未来を許容してはいけない。

そうわかつてはいるが、ならばどうすればいい？

飛び込んで助ける？ 不可能。いくら緑谷の身体能力が高くても、そこまでの大きな水流に、人1人……いや、子供達も合わせて4人抱えて抗うのは難しいだろう。そもそも子供達への負担が大きすぎる。

着水前に助ける？ 不可能。跳躍を繰り返してそうできればよいが、ちょうどいい足場がない。そもそも落下のスピードに間に合わない。

あれも、これも……0.1秒と経っていない短時間の間に、いくつもの手を考えて……しかしそのどれもが不可能だとわかってしまう。不可能だと、もう救えないと、余計に残酷な現実が浮き彫りになってしまう。

ヒーローとて神ならざる身。できることもあれば、できないこともある。それは、かのNo.1ヒーローであっても同じことだ。時には、自分が救えない現実に向かい、涙して、後悔して、心に傷を負って……それでも、それを乗り越えていくことこそ重要なんじゃないのか。

マンダレイが、命を捨てる覚悟で託してくれたものを……確実に助けること。

それこそが今、自分にできることなんじゃないか。彼女が安心して

行けるように、自分がすべきことなんじゃないか。

そんな考えが、緑谷の頭に浮かんで……

(……ふざけるな！)

……一瞬にして、はじけ飛んだ。

(そんなヒーローを、僕は目指したわけじゃないだろうが！)

——ドクン

どれだけの苦境でも、どれだけ絶体絶命でも、ヒーローが人を助けることを諦めていいはずがない。助ける前から助けないことを考えていいはずがない。

難しいからなんだ、託されたからどうした。普通なら諦める状況だから何だつて言うんだ。

そんなものは、最後の最後まで死に物狂いで頑張つて、その後考えればいいことだ。

(僕が目指すのは、全てを救う最高のヒーローだ！ 絶対、最後の最後まで……諦めるもんか！)

——ドクン！

(マンダレイを見捨てて、洗汰君が悲しくないはずがない！ それがわかっている以上、見捨てるなんてことはできない！ しない！ 全員助けて、皆で無事に帰るんだ！ そのために……僕にできることがあるなら何だつてやる！ 考えろ……考えろ！ どうすればいい!?)

——ドクン!!

——ドクン!!!

そして、その瞬間……

緑谷出久の体の中で……新たな何かが、目覚めの時を迎えた。

「ああああああああっ!!!」

——ギューン!! ガシイツ!!

一瞬だった。

それは、一瞬のうちに起こって……マンダレイを助けていた。緑谷の腕からあふれ出した、暗い緑色のオーラのような何か。

それが、紐状に長く伸びて……今まさに着水しそうになっていたマンダレイを絡め捕っていた。

「……え……う？」

何が起こったかわからず、きよんとするマンダレイ。

落下の衝撃と冷たい水の感触を覚悟していれば、やってきたのは宙づりにされたかのような……全く予想外の感触。

閉じていた目を開けば……そこに見えたのは、緑谷の腕から伸びる、得体のしれない『何か』。

(……!? これは、何……デク君の腕から……サポートアイテムには見えない。まるでエネルギーで構成されている物質のような……彼の『個性』は増強型のはずじゃ? 一体、何が!?)

「デク君!? こ、これは一体……」

「……そんなこと、言わないでください……!」

マンダレイの言葉を遮って、緑谷が……絞り出すように言う。

「諦めちゃダメだ……最後の最後まで……! 冴汰君が大事なら……猶更……! 冴汰君を傷つけるようなことを、自分で選んじやダメだ

! あなたはヒーローでしょう!」

「……っ……!」

「あなたが冴汰君を助けたいように、僕だって、あなたも冴汰君も助けたい! 真幌ちゃんも活真君も! だったら最後まであきらめたり

しないで、全力で戦ってください！ 助けられる方に回ったからって、簡単に自分の命を投げ捨てるなんてダメだ！ 助けたいなら……助かりたいなら……僕も全力で助けるから！ 全力で助けられてください！ 冼汰君のためにも！」

気が付けば、涙が零れ落ちていた。

自分より一回り以上も年下の少年の言葉が胸に突き刺さる。その少年にしがみつくと、従甥の少年の涙が、泣き顔が胸を締め付ける。

どちらも、自分の選択の結果、この目で見てしまったもの。

それが今はなぜか……とても恥ずかしいものに思えた。

「冼汰君の見てる前で……ヒーローが諦めるな！ 苦しくても、みつともなくても、最後にみんな笑うために全力であがけ！ 生きることから……逃げるな、マンダレイ!!」

その瞬間、緑谷は必死の形相で、思い切り右手を引っ張るように動かし……伸びる紐状のエネルギーを縮めるようにしてマンダレイを手元に引き寄せる。

同時に、壁の突起をつかんでいた左手を放し……今しがた、ついに変形で隙間が再度ふさがってしまった天井へ向けて、左手からも同様にそれを伸ばす。

投げ縄のようにして絡み付かせると、それを今度は縮めて、自分達全員の体を一気に天井付近に持って行った。

（何だ、コレ……頭が……いや、体中が痛い……使ってる間中ずっと……！ でも、何でもいい……コレで皆を助けられるなら、今は……だから、もう少しだけでもつてくれ、僕の体！）

金属扉に激突する直前に急減速し、その勢いで滞空する形になる。子供たちやマンダレイにかかる負担、ないし反動を極力抑えてそこに至った緑谷は、左手を拳に握って振りかぶる。

空中では、踏ん張る場所がなく、拳を繰り出すにも十分な力が出ない。先程よりきつく閉じてしまっているであろう金属扉を打ち破ることができるか、どうしても不安が頭をよぎる。

だが、次の瞬間、あることに気づき、それも吹っ切れた緑谷は……声を張った。

「永久ア——!!」

『?!? 緑谷……この向こう側か!』

扉の向こうから聞こえて来た声に、声を張り上げて簡潔に伝える。

「ぶち破る! 1人じゃ足りない両側から同時に全力で……いくぞ!」

『! 了解!』

そして、その扉の反対側にいた永久。

緑谷の言いたいこと、やりたいことを把握した彼女は、自分のなすべきことを理解して……その右腕に、膨大なエネルギーを充填し始めた。

(要するに、この滅茶苦茶な状態に変形しちまつてる扉をぶち破るんだな。だとすると……強化上限……500%じゃ足りない。だってら……)

「だったらその上を行けばいいだけだ……母さんに習ったコントロール技能……その応用で……」

今までの永久の強化上限……500%。

それを超えて、腕にエネルギーを充填していく。あまりの密度に、今から反動じみた鈍痛を感じ、腕からきしむような音や、耳鳴りが聞こえるほどに。

「エネルギー充填……強化上限超過、レッドゾーン突入……!」

そして反対側では、緑谷もまた、左腕を大きく振りかぶって、腰や肩で思い切り回転の勢いをつけて……必殺の拳を繰り出さんとする。

「ワン・フォー・オール……100%!」

そして、タイミングを計るまでもなく一致させ……互いの最強の一撃が、鉄扉、そこに巻き込まれた瓦礫やら廃材を挟んで……炸裂する。

「デトロイトオオオ……スマアアアアッシュ!!」

「限・界・突・破……800%パアアアンチ!!」

——ドツゴオオオオオン!!

間にあつた邪魔なものが全て吹き飛ばさ、木っ端微塵に砕け散つたことで、外へと続く大穴が開く。

その瞬間、永久は左手を伸ばし……緑谷もまた、振り抜いた左腕から再び黒いエネルギーの紐を伸ばして、永久の腕に絡み付かせた。

それに一瞬ぎよつとした永久だったが、すぐに左腕に力を籠め……

「フイイイ——ツシュツツツ!!」

一本釣りのごとく、それにくつついてきた緑谷と、冴汰、真幌、活真、そしてマンダレイを引っ張り上げて……そのままの勢いで、海に放り投げる。そして、自分も海に飛ぶ。

その瞬間、今の最強の一撃×2でオイルが何かに引火したのか、背後、船の横っ腹のあたりで大爆発が起こった。期せずして、巨大な爆炎と黒煙を背負って一同は大ジャンプする絵面になる。

ハリウッド映画のような豪快な脱出となったが、それがかえって幸いし、船が起こす海流が届かない位置まで飛んで……その一瞬の間に、子供たちと、負傷者であるマンダレイをかばって、衝撃から守る形で海に着水。すぐさまスタンバイしていたセルキーや蛙吹、その他、水中が得意な『個性』の持ち主によって、救出艇に引き上げられ、救助されていく。

全員救助完了。緑谷と永久はもちろん、冴汰、真幌、活真、そしてマンダレイも。

全員が無事に收容され、検査の結果、命に別条がある者は1人もいないとはつきりしたところで……ようやく、彼らの長い夜は終わったのだった。

第86話 TS少女と騒動の顛末

S i d e . 緑谷出久

不思議な空間に、僕はいた。

黒い、靄のようなものが立ち込める空間。そこで僕は……霧みたい
に不確かで、ふわふわした状態でたたずんでいた。

隣には、精悍な顔つきの方がいて……その奥にも知らない人が何
人か。Googleをつけたスキンヘッドの男性、黒髪の若い男性、その
向こうには……遠くてよく見えないが、見知った姿も。

前にも見たことがある。いや……前よりも明瞭に見える。

『なぜ抗うんだ？ 僕と征こう……愚かでかわいい弟よ』

『間違っているからだ、許してはならないからだ。兄さんの全てを』

そして、少し離れたところに、上等な身なりの男性と、ボロボロで
くたびれた身なりの若い男性が一緒にいた。向かい合って立ってい
た。

2人は何やら、言い争っているように見える……

……なんとなく、この2人が誰なのか、僕にはわかった。

(『オール・フォー・ワン』……そして、その弟つてことは……初代『ワ
ン・フォー・オール』……)

すると、僕の横にいる人たちは……歴代の『継承者』達……

オールマイトの師匠だっていう、黒髪の女の……7代目をはじ
め、僕の他に7人、横に並んでいる。僕は、9代目……

(……?) 体育祭の、あの場面で見えた時は、もっと多かったような……
いや、今思えば、僕は『9代目』なのに、10人以上の影が見えたのつ
てそっちの方が変だ……見間違いだったのか?)

そこで僕は、主張の衝突の末、『初代』が個性を与えられる——押し
付けられる、と言った方がよかったかもだけど——その瞬間を見て
……そこでもう、徐々に意識が薄れていって……

その瞬間、とん、と背中にかかたった。

いや、当たったというより……受け止められた？ 何だか、よく

知っているような感触……

振り返ると、そこには……さっきの人達とは、また別な何人か、見知らぬ人たちがいた。

見える範囲で6人。……気配から、もつといそうではあるけど……位置というか視界の問題で、それ以上は見えない。

色んな身なりの人がいる。

昔の……侍？みたいな身なりの男性。

やや露出多めの、忍者みたいな装束を着込んだ女性。日本人っぽい……くノ一？

西洋の甲冑を着込んだ……兜被ってるから性別分かんない人。

戦いとは無縁そうな、あでやかな和装に身を包んだ女の人。

尼僧……つていうのかな？ 静謐な雰囲気を漂わせた、妙齡の女性の僧侶。

そして、最後の1人は……見覚えがある。

ヒーローコスチュームに身を包んだこの人は……『アナライジユ』

!?! 栄陽院さんのお母さんの、現役のプロヒーロー……何でここに!?!

そして、首をググつと回して、僕を抱きとめている人が誰なのかを確認して……もつと驚いた。

(栄陽院さん……!?! 何で、ここに……『ワン・フォー・オール』の面影の空間に……!?!)

クラスメイトの……僕に全てを捧げたいとまで言ってくれている女の子。

彼女が、彼女もまたヒーローコスチュームで、僕のことを……靄のように安定しない体を、どうやってか抱き留めていた。

鼻から下がらないせいで、声を出して聞くことはできない。

目の前の栄陽院さん(だと思ふ)も、何もしやべらない。にこりと笑いかけるだけ。

その代わりに、別な方向から声が聞こえて来た。

「おや、今はもう、これで限界かと思っていたけど……もう少し余裕がありそうなのかな？」

「ああん？ よくわかんねーが……それならそれでありがてえな。あ

んがとよその嬢ちゃん！」

更に振り返ると……さつき、その姿を見たうちの1人。いや、2人。『初代』ワン・フォー・オールと……歴代『継承者』の中にいた1人である、スキンヘッドの男性。その2人が……面影どころじゃない、はつきりとした存在感を、それどころか意思を持って、僕に語り掛けてきていた。

その2人の方に向けて、栄陽院さんは背中を押ししてくれる。

「不思議な光景さ……こんなこたア今までで初めてだ。この空間に、継承者以外の人影が混じるとは……9代目の継承者は、何やら妙なことになってんなア……まあ、敵っぽくもないからいいか」

「……君たちは……ひよつとして……」

すると初代が、何かに気づいたような仕草を見せて……それに応じるように、僕の後ろにいる面影？の何人かが、にこりと笑ったように見えた。

「？ 何か知ってるのかい、初代？」

「いや……大丈夫だ。そうか……そうだったのか……安心していいよ、5代目、そして9代目……彼ら、彼女らは、僕達の味方だから」

……!? 初代……この人達のこと、何か知ってるのか!?

だとしたら、教えてほしいけど……く、口がないから聞けない……

「ああ？ お口がないのか……ドンマイさー」

「わが末裔が支えています、あまり時間もありません。お話したいことがあれば手短に」

すると、今まで沈黙を保っていた……僕の後ろの人達の1人……尼僧っぽい女の人が、ちよつとぴしゃりとした語感で言った。喋れるのか……!?

「そうだね……そうしよう」

「いかんせんまだまだ力不足は課題か……どうにか30%くらいさ？ 体はかなり育ってきてるが……成長が早すぎて逆に馴染む時間が足りてないのか？」

何事か呟くように話していたが、その後すぐに、2人は僕に向き直る。

そして、スキンヘッドの男性……5代目、と呼ばれた彼の腕から、見覚えのある、黒い紐状のエネルギーが発せられ……驚く僕に、彼らは話し始めた。

この力……『黒鞭』は、過去の継承者である自分の『個性』であること。

歴代継承者の力の因子は『ワン・フォー・オール』の中に眠っていて、僕の代に至るまでに、8人の人間を渡って強化されたことで、大きく脈動し始め、『個性』が成長していること。

これから恐らく僕には、歴代の……合計6つの『個性』が発現するであろうこと。

そこにさらに何らかの要因が加わり……その成長がさらに加速すると共に、全く予想がつかない形に至る可能性があるということ。今言ったばかりの『個性』の数や内容すら、異なるものになるかもしれないこと。

しかし、それは決して君を害するものではない、むしろ君の味方であるはずだから、決して恐れる必要はないということ。

最後の1つについては、『初代』は、僕と……僕の後ろの人達を、そして、僕を後ろから抱いている栄陽院さんを、順に見ながら言っていた気がした。

「頑張れ坊主……お前は1人じゃない。俺達がついてる！ あと、正直俺もよくわかってないが……お前の後ろにいる連中も、どうやら味方みたいだしな！」

「きつと、君は成し遂げる……分かれた2つの道が、とうとう1つに戻った今……恐れるものなど何もない。君と、彼女の力を信じるんだ……きつと、君なら『ワン・フォー・オール』を……！」

……認識できたのは、そこまで。

気が付くと僕は、病院のベッドの上だった。

清潔なシーツと布団に包まれて寝転がって、知らない天井を見上げていた。

☆☆☆

騒乱の夜がようやく明けたわけだが……その後の顛末？　みたいなのを簡単に説明しておこうと思う。

まず、今回の主だった敵組織は2つ。指定敵^{サイラン}団体『死穢八斉会』と、名称不明（というかフェイクの名前がいくつもあって絞れないらしい）の国際ブローカー組織。

その双方の頭目のうち、『死穢八斉会』の若頭・治崎廻……敵名『オーバーホール』を逮捕。

あの大規模崩壊の後、ルミリオンこと通形ミリオ先輩が1対1で戦って倒したそうさ。

ネームドヴィラン、それも超のつく大物らしい『オーバーホール』を単騎で撃破か……すごいなあ。後から知ったことだけど、雄英高校ヒーロー科3年の頂点『ビッグ3』とまで言われているそうだし……あのサー・ナイトアイの事務所でインターンやってるだけあるってことか。

……あと、これも後から気づいたんだけど……あの人、去年の体育祭で全裸になってた人だよな……だ、誰でも失敗することはあるってこと、だよな!?　そう思いたい。

一方で、ブローカー組織の方の頭目『キュレーター』には逃げられてしまったらしい。暗い海の中で、『鯨』という水系個性を相手に追跡は、その場にいた他の水系個性のヒーロー達でも流石に難しかったみたいだ。

とりあえず『オーバーホール』の方は、個性を使えないようにする手枷で拘束されて連行されたそうさ。厳重な監視の上で幽閉され、最終的には法の下に裁かれることになるだろう、とのこと。

なお、『オーバーホール』が連れていた手下たちについても同様だそうさ。

手下3人のうち、1人は通形先輩が殴り倒して（オーバーホールを狙った拳をかばって受けた、って形だったけど）……1人は榮陽院さんが蹴り飛ばしてたな。あの小さい……けど、中にすごいガタイのい

い男性が入ってたのを。

そして残る大柄な1人は、こちらも栄陽院さんが撃破していた。ちなみに、あの場で倒れていた黒メガネと巨漢（ちっちゃいのに入ってた方）は、脱出途中で栄陽院さんが見つけて拾って、同じように運び出したそうさ。

成人男性3人……しかも、うち2人はガタイがかなり良かった上に、そのうちさらに1人は『個性』でサイズ倍加してたから、むちゃくちゃ運びにくかったって言った。ははは……ご苦労様。

そして、奴らが所属していた『死穢八斉会』についても、近々捜査機関やプロヒーローによる摘発が行われるようだ。

目立った犯罪行為は行ってないから今まで放置されてたけど、今回の件をきっかけにして、『組』の解体に着手するらしい。警察に加えて、付近のプロヒーローにも召集がかかったって。

『敵』に関してはこんなところだろう。

次は、救助対象だった冼汰君達……そして、その保護者であり、今回かなり傷を負ったマンダレイに関してだ。

結論から言えば、皆無事だった。

冼汰君達は、特に目立った外傷もなし。せいぜい、縛られてた時の縄の痕や、強く抑え込まれた際にできた肉出血くらいのもんだ。それも、特別な治療をしなくてもすぐに治る見込み。

もちろん、真幌ちゃんと活真君も同じ。

マンダレイの方はそれなりに傷を負っていたけど、命に別状はないし、手当て、念のための輸血さえきちんとしてしまえば、あとはもう何も心配いらなそうさ。激しい運動はダメだけど、普通に歩いたりする分には何も問題ないって。

その話を、ついさつき病室に来たマンダレイと冼汰君、そして、真幌ちゃんと活真君、そしてそのお父さんから聞かされたところだ。

全員から、助けてくれてありがとう、ってお礼言われて……なんか照れ臭いというか、背中がむずむずするというか……変な感覚だった。いや、もちろんうれしんだけど……反応に困って……

さらにマンダレイからは、迷惑をかけてごめんなさい、あなたが来

てくれないければ危なかった、って少し重い感じで謝られたし……マンダレイは真幌ちゃんと活真君のお父さんにも謝っていた。事件を未然に防げず、お子さんを危険にさらしてしまったって。

けど、2人のお父さんはそれを責めたりすることは全然なかった。むしろ『子供達のために必死で戦ってくれてありがとうごさいます』って感謝を述べていた。

助けられた2人も——真幌ちゃんはちよつといまいち素直じゃなかったけど——マンダレイには悪感情なんて全然なくて、むしろきちんと感謝してたし。

聞いた話じゃ、真幌ちゃんはヒーローが嫌いだっていう話だったんだけど……そんな様子は……なくもないけど、普通に感謝してる様子だったし、態度も柔らかかったな。

今回の件で、色々と思う所があったのかもしれない。

そしてそれはどうやら、冴汰君も一緒にみたかった。

相変わらずこつちも、ちよつと気難しそうな感じだけど……きちんと素直に感謝の気持ちを使い表すことはできていた。マンダレイと……あと、僕にも。

2人とも、すぐに劇的に変わる感じではないにせよ、少しずつ何か、心の中で変わり始めているものがあるような……そんな気がした。

なお、活真君は普通にキラキラ輝いた目でマンダレイにお礼を言つてて、しかもその目のまんまで僕の方にも来て……う、嬉しいけどちよつと恥ずかしかった。

『デク兄ちゃんみたいなのヒーローになりたい！』って……ぼ、僕もまだまだなんだけどね……

そんな活真君を、まだ少し複雑そうな様子で見ている真幌ちゃんに気づいて……なるほど、何で真幌ちゃんがヒーローのことをよく思っ てなかったのか、少しわかった気がした。

温かい、けど確かに『心配』するようになったから。

そして、その隣の冴汰君も同じ感じだった。……やっぱ、まだそのへんは複雑か。

ともあれ、一応検査入院で3人とも1泊はしたものの、何も問題な

いとこのことで、僕より一足先に退院。真幌ちゃんと活真君は、お父さんと一緒に家……『那步島』っていう島に帰るらしい。

マンダレイと冼汰君は……マンダレイがもう少し（と言ってももう1日か2日程度らしいけど）入院して経過観察らしいので、冼汰君が一足先に帰るんだって。ピクシーボブと一緒に。

そのマンダレイも、経過が順調で問題なければすぐに退院できる。しばらく静養して、傷が癒えたらヒーロー活動復帰するって。

最後にもう1度、冼汰君を助けてくれてありがとうって、にっこり笑って言って、マンダレイは病室に帰っていった。

憑き物が取れたかのような、ずつと凝り固まっていた問題が解消されたみたいな……すぐく明るく、晴れやかで、魅力的な笑顔だった。

あるいはその理由は、同じように優しい視線を向けていた、冼汰君の変化にあるのかもしれない。

その後も色んな人がお見舞いに来てくれたり、電話をかけてきたりした。

一緒に救助活動に出ていた梅雨ちゃんや、セルキー事務所のシリウスさんとか。

救助活動にまで一緒に来ていた、麗日さんや取陰さん、ピクシーボブも来た。

ワイプシの『ワーキングホリデー』で一緒だった、しかし事務所の方で待機していた、塩崎さんに宍田君……そして、ラグドールや虎も一緒に来た。そのままマンダレイのお見舞いもして、冼汰君と一緒に連れて帰った。お大事にね、と言い残して。

あ、ちなみになんとか今更だけど、僕の状態だが……今回はほとんど戦闘も行っていないので、普通に元気です。念のための検査入院です。

ただ、腕だけはまた壊しちゃったけどね……今はギプスを装着してる。久しぶりの感触だ。

でもあれは、あの場面では100%出さなきゃ、万が一破れないとかだったら洒落にならなかつたし、仕方ないだろう。

それに、リカバリーガールの『治癒』がないからゆつくり治すしか

ない状況だけど、それでも普通に寝てるよりずっと早く治癒していつてるしね。今。

理由は2つ。

1つは、活真君とそのお父さんがこつそりやってくれた、彼らの『個性』による治療である。

どちらも『細胞活性』っていう『個性』を持っていて、新陳代謝の促進みたいなことができる。その延長上で、治癒力を活性化させることもできるようだ。リカバリーガールのスローペース版、みたいなものだろうか。

それのおかげで、さつきから腕が熱を持っていて……しかし、温かく心地いい感触なのがわかる。どんどん治癒していつてるな、って、何となくわかる。

そしてもう1つは……例によってと言えればいいのか、栄陽院さんだ。

彼女はこの数週間の間、僕と同様に『デウス・ロ・ウルト』で色々な訓練を積んでいたわけだが……その一環として、『エネルギー』の操作を学んでいた。

その応用の一つで、相手の体内でエネルギーを操作して、負傷した部位に集束させ、集中して作用させることで、治癒力を活性化させるという回復技能を習得していたのだ。

ワイプシの『ワーキングホリデー』の最中、負傷した遭難者や、遊んではっちゃけ過ぎてケガをした子供とかに使ってあげてたようだけど、それを僕もやってもらったのだ。クルーザーから脱出した直後、救出艇に帰還した時に。

カフェオレを飲んだ時とか、抱きしめて流し込んでもらった時に感じる『エネルギー』が、腕に集中して……傷を癒し、痛みを取っているのがわかった。

一応、技名あって……『コンセントヒール』っていうらしい。

直訳で、『集中治療』……ああ、エネルギーを集中させるからか。

『細胞活性』と同じように、スローペースでの治療だけど、一度体内のエネルギーを操作して『流れ』を作ってしまうえばらくこの治療

は持続するらしいので、助かった。

治癒と同時に、かなりの量のエネルギーも流し込んでもらえたし……寝ている間に、大分治癒が進んだみたいだ。感覚で、何となくわかるまでに。

その栄陽院さんだが、彼女もここに入院している。僕と同じく、腕その他を負傷して。

彼女の場合、死穢八斎会の構成員の1人と戦ったので、僕よりも戦闘で受けた傷は多い。けど、守りに徹した上でカウンターの戦い方で決着させたらしいので、そこまでひどくはない。

一番ひどいのは、彼女もまた『腕』だ。最後、鉄扉を僕と一緒に粉砕したあの時……彼女も、限界を超える威力を出すために、大量のエネルギーで腕を強化して殴っていたらしい。

前に、あまり大量にエネルギーを充填しすぎた状態で殴ると自分も負傷するって言ってたっけな……ちよつと無理させちゃったか。

でも、彼女は僕と違ってギプスも必要とはしてない程度だったの、そこまで重傷じゃないようだったのは幸いだ。明日には退院できる見込みだそうだし。

というか……

「……うん？ どうしたの緑谷、そんなじろじろ見て」

「い、いや、何でも……」

もう既に元気そうなんだけど。

さつき病室にお見舞いに来てくれて……タイミングいいのか悪いのか、ちようど麗日さんや取陰さんが来てる時だったから、そのまま僕の病室で女子トークなんか始めたりして。

で、そのままこうして居座ってるんだよね……。

今、僕のベッドの横でリングの皮剥いてくれてる。宍田君が買ってきてくれたやつ。

いや、それはありがたいんだけど……今日、というか今はその……できれば病室で大人しくしてもらいたかったなーとか、早く帰ってこないかなーって思わなくもない。

保須市の時と同じく、男女だからってことで別々に個室割り振られ

てるんだからさ、せつかく。

それにその……僕と同じく病人着で、薄手だからちよつと体の線が出てて……目のやり場に困る。

ほとんどパジャマ的な扱いだからかな。その、多分……ノーブラだよね？ 体の線に加えて、胸元がちよつと開けてて中が少し見えてて……下手したら、し、下も……？

それに、それ以外にもちよつと今は……触れてほしくない、ないし、触れられるかどうかちよつと不安な話題があるから……

なんてことを考えてるのがいけなかつたんだろうか。

ふと見ると、栄陽院さん……こつちを見ながらニヤニヤ笑つていて、

「そんな取り繕おうとしなくても、好きなところを好きなように見ててくれていんだよ？」

「……っ……ご、ごめん……」

バレてた……見てるの……。

ふ、布団の中に半分入って上体を起こしてる状態でよかった。

え、何でつて？ ……言わせないで。

「そんな謝らなくてもさあ……私と緑谷の仲なんだから、遠慮なんかしなくていいのに」

「ぼ、僕と栄陽院さんの仲って……いや、そ、その……」

「んー……船では『永久』って呼んでくれたのに、もう呼んでくれないの？」

「うえっ!？」

思わず変な声が出てしまった。

や、やっぱりそれ話しちゃう……？ そ、そりや気にするよね……今まではさん付けで呼んでたのに……というか、僕って基本、男友達でも関係なくくん、さん付けで呼ぶのにな……。例外は、幼馴染のかっちゃんくらいだ。

けどあの時は何だか……必死で、思わず口が動いちやった感じで……

でも、同じように『必死で』『思わず』って感じだった、戦闘訓練の

時とか、『ヒーロー殺し』の一件とかの時は、それでもいつもの呼び方だったのに……自分でも不思議だ。なんであの時、普通に栄陽院さんのことを……名前で……

それについて考えようとする……な、なんだか顔が熱くなってくるし、思考がとっ散らかって上手く考えられないんだよなあ……

しばらくそのまま、何も言えずに時間だけが過ぎて……時間がどのくらい経ったのか、いまいちわかりにくい。何秒か、あるいは何分も経ったのか……

すると不意に、栄陽院さんの笑みが『ニヤニヤ』から『につこり』に変わって……ああ、よかった……こうなったらもう大丈夫だ。

もうこのへんはパターンだから知ってる。からかうのとか、追及はこれくらいにして引いてくれる時の栄陽院さんだ……つて、こんな感じのこともわかるくらいになっちゃってたんだな。

……思ったより僕は、彼女のことを……もう、ずっと身近に感じてるというか……前にもちらっと考えたことがあるように、日常の一部みたいに思ってるのかも。

形は違えど、ずっと前から、ずっと近くで一緒にいたかつちゃんと同じように、僕にとつて、他の人よりも近くて、特別な人……になってるのかもしれない。

それこそ、もうそろそろ……単なるクラスメイトとか、修行仲間っていう関係から……もつと、深く進んだ関係になる時期も、近づいてるんじゃないか、つてくらいに思えて……でも、思えば僕……こういうことを考えると深みにはまってしまいそうで、下手すると戻れないところまで踏み込んでしまいそうで……意図して考えないようにしていた気がして。

けど裏を返せば、『もう戻らなくていい』と思えるのなら……僕は……

「ふふっ、ごめんごめん……いや、実際私もちよつと昨日のは、あー……思いだしてテンション上がり気味だったというか、ぶっちゃけ嬉しかったというかできさ。浮かれちゃってたかも。もちろん、昨日は色々アレな状況だったつてのもわかってるんだけどね」

「え？ あ、えつと……うん……」

「まーアレだ、いつもと同じで、私から急ついたりするつもりはないからさ。緑谷のペースで、ゆっくり考えてよ。そうしたいと思った時に言ってくれればいいから……待ってるからさ、私」

「……うん……」

こんな風に、彼女の好意に……何事においても僕を立てて、優先してくれる姿勢に甘えっぱなしじゃ、もうよくないんだよな……

僕の方から一歩踏み込まなきゃいけない、っていうのも、わかってるんだけど……

それでも結局は……少なくとも今日のところは、甘える形になってしまった。

僕と彼女の関係のこともそうだし……それに、『黒鞭』のことも……今更だけど、昨夜、僕が突如使った『超パワー』以外の能力……夢の中でその名前を知った『黒鞭』という個性については、当然ながらすでに栄陽院さんにも、そしてマンダレイにも聞かれた。

当たり前だろう。前情報にない……特に、栄陽院さんからしてみれば、ずっと今まで一緒に修行してきた中では影も形もなかった能力を、突然僕が使っていたんだから。

2人共、実際にエネルギーの紐で絡めとったというか縛ってるんだから、気のせいとか見間違いないなんて言葉で納得できるはずもないし。

かといって、ことは『ワン・フォー・オール』という力の根幹にも関わってくる話だから……心苦しいけど、栄陽院さんにも、マンダレイにも、真実を話すわけにはいかない。

結局、無難にと言えればいいのか……『あの場で急に使えるようになった、自分でもよくわからない力』という説明で通した。実際、前半部分はホントのことなわけだし。

幸いにも、2人ともその説明でひとまずは納得して、追及はやめてくれた。

……いや、納得したんじゃない……何か訳ありだと、隠してる……ことがありそうだってことを察しつつも、追及しないでくれたんだろう。

マンダレイは、命を救われた恩とかがあるから、だと思っ。

そして栄陽院さんは……『関係』と同じだ。僕から言おうとしない限りは、多分、彼女は聞いてこない。僕が話すのを、待つてくれるつもりだ。

……もつとも、学校の授業や『デウス・ロ・ウルト』にも少なからず関わってくるであろうことだから……いずれは、いくらかは話さなきゃいけないだろうけど……いまは、ひとまず。

話すとしても、オールマイトにきちんと話してからじゃなきゃ……

……とか考えたのがいけなかった……のかな？

今日、現在、夕方になって……最後にお見舞いに来てくれた人達が、今……僕の目の前で、パイプ椅子に座って2人……向かい合っている。

睨み合っている、というわけじゃないけど……それに匹敵するくらい気まずい空気だ。

少なくとも……同じ空間内で一緒にいる僕は。

「……………」

無言。

何というか……どっちも、言いたいことがあるのに言い出せない、的な感じに見える。

険悪というわけじゃない。けど、どっちも無駄に影や凄みがある人だから……それだけでも周囲に漂う緊張感が、その……キツイです。

この2人が来たと同時に、それまで一緒に部屋にいた栄陽院さんは人払いされて帰っちゃったけど……もし一緒にいたら、彼女も同じ感想を抱いただろう。

片や、長身ながら骸骨みたいにやせた見た目の男。しかしその実態は、『平和の象徴』とまで言われるN.O. 1ヒーロー・オールマイト……その、『トウルーフォーム』と呼ばれる姿。

片や、そのN.O. 1ヒーローを一時期ブレンとして支えていた、同じく長身に、メガネの向こうに光る鋭い目が特徴的な、スーツ姿の

プロヒーロー……サー・ナイトアイ。

その2人が、僕の病室で……言っちゃなんだけど、病人・怪我人に優しくない空気を醸し出しながら、ずっと無言で……あの、すいません、ホント何かしやべって……気まずい……。

☆☆☆

今日もう時間が許す限り緑谷の病室に入り浸ろうかなーとか思ってたんだけど、追い出されました。なぜか。

先に部屋にいたのは私なのに……いや、こんなガキみたいなこと言ってもしゃーないのはわかってるけども。大仕事が終わった後くらい、癒しを求めてもいいじゃん……

……いやでも、あれ以上緑谷と一緒にいて、赤くなって返答に困る緑谷を見ると……こっちはこっちで赤くなりそうというか、思いだして嬉しくなってるにやけちやいそうだったから……ある意味ベストタイミングだったのかもだけど……。

いやだって、呼び捨てで……緑谷が、呼び捨てで、私を。

学校で、幼馴染の爆豪以外は——と、梅雨ちゃんもそうだけど、アレは彼女から『呼んで』って言ってだし——皆『くん』『さん』付けて呼ぶ緑谷が、私を……名前で。

いくらでも遠慮をなくしてほしい……というか、なんなら手を出してほしい私からすれば……うん。

あの場では必死の状況で気を向けらんなかったけど……病室に入ってベッドの中で思いだして、何度悶えそうになったか……。

昨日の深夜にそうなって、物音を聞きつけて『どうかしましたか!』って駆け込んできた看護師さんに誤魔化すのが大変だった。

変な夢見た、って言うてどうか……。

……いや、実はそれ自体も嘘じゃないんだけど……まあそれはいい。

ともあれ、言われた通り、今日はもう自分の病室に戻ってゆっくりすることにした。

緑谷とは後日、お互い落ち着いてから改めて話そう。落ち着いてから。

……できるならその時、あの新技らしき『何か』……あの、エネルギーの紐みたいなのについても……話してもらえたらいいな、とは思う。

今後の訓練方針とかはもちろん、私が今後、どんな形で緑谷の役に立てるか、緑谷を助けていけるか……とか、そのへんにも関わってくることだし……。

遠からず、何かは話してくれるだろうとは思う。

話さざるを得ない、ともいうが。私だけが知ってるならともかく、いつまでも黙ってられることじゃないだろうからな……もう。

あの場で大々的に使って……間違いないく目撃したのが、私とマンダレイ、それに助けた子供3人の、計5人。しかし、救助に当たっていた人たちの中には、目にした人もいるかもしれないし。

それでも……一度聞いてはぐらかされた以上は、本当に切羽詰まってる必要にでもならない限りは……こつちから聞くのはやめよう。緑谷が話してくれるのを待とう、私は。今まで通りに。

いつもと違って、何か……本当に真剣にというか、頼むから聞かないでほしい、みたいな雰囲気だったからな。

あとはもう、お互い今日はゆつくり休んで……いや、緑谷はこの後まだ、あの2人との面会か。何を話すのかは知らないけど……

しかし、何だってサー・ナイトアイがここに……？ いやまあ、今回の戦いに参加して1人だし、不自然じゃないかもだけど……事情聴取なら既に警察の人から、緑谷も私も受けてるんだけどな……何か、他に用事でもあったのかな？

そして、訪ねて来たのはナイトアイ1人じゃなくて……金髪の背の高い、やせたおじさんが一緒だった。ちよつと、いやかなり大きめなトレンチコートと、ダボダボめのズボンが印象的な。

不健康な見た目だけど、ガタイは割とよかったな……身長も、ナイトアイより上だったし。

しかも話を聞けばその人、なんと『オールマイトの秘書』だとかで

……しかも、非常勤だけど、時々雄英で事務員もやってるんだって。名刺貰っちゃったよ。『八木俊典』……聞いたことないな。

まあ、自分でも『メディアに露出する立場でもないですからね』って言ってたし……事務員の人まで、流石にいちいち全員覚えてないかな、同じ学校関係者でも。それは別にいいか。

しかし、またオールナイト関係か……本当に何なんだろうな、緑谷を取り巻くそれ系の環境は……一体、どういうわけでそこまで……

(ああ、それと……聞きそびれちゃったな、緑谷に)

自分の病室に戻ってベッドに寝転がったことで、ふと思い出した。

今朝、起きた時から気になって……お見舞いのついでに、緑谷に聞こうかなと思ってたことがあったのを。

と言っても……こんなこと聞いても仕方ないかもだけど……ただ私が気になってるだけだし。

話のタネになれば、的なる程度に考えてることだしな。何せ……

(私の見た、変な夢に緑谷が出て来た、なんて……んなこと言われても、緑谷からしたらポカーンだろうしな……。しかも、内容の方はてんで意味不明……なんか、緑谷が儂く消えそうに？なってたから思わず抱き留めて……その後、ボロボロの服の変な男と、ごついハゲのおっさんが……あれ、やば、もうなんか忘れ始めてる…………うーん………いいか別に)

光景が意味不明な上に、音なしのサイレントみたいな感じの夢で……結局何もわかんなかったからなあ……まあいい。置いてこ。もうそろそろ夕食なので、考えても仕方ないことは一旦頭からのけておくことにした。

食事は楽しみだけど……病人食……体にいいものを、体にいい味付けで作ってるからだろう、味気ないんだよなあ……少ないし。

というかぶっちゃけ正規の献立だと、私の基礎代謝の方が高いから、全然足りないんだよ。量はもちろん、カロリーの。救助と戦闘で大量に使ったエネルギーの補給が、全然できない。

……自費でデリバリーでピザとか頼んだら怒られるかな？
怒られるよな、やっぱ。……

第87話 TS少女と病室の密談

S i d e . 緑谷出久

長いような短いような沈黙の時間の後、最初に口を開いたのは、サー・ナイトアイの方だった。

「今日の朝刊に載っていましたね、オールマイト。昨日は散歩がてら事件を4件、解決したそうで」

「ああ……どれもチンピラ同然の『敵』の喧嘩だったから、そこまで時間も手間もかからなかったがね。食後のいい運動になったよ」

「それはよかった……と言っているいいものか。相変わらず、ヒーロー活動に精力的な様子で……引退は、まだ考えてはもらえないか」

鋭い視線に強い眼力を乗せたままの、ナイトアイの言葉。

くぼんだ眼窩の奥の目に、少しの動揺を見せて……しかし、オールマイトは首を横に振った。

「まだこの世界には『象徴』が必要だ。私がそれでいられるうちは……私の手元に、『残り火』があるうちは……私は、人々の心の拠り所でありたい」

「それを、全てを知っていて見ているわずかな者がどれだけ……いや、やめよう。もう何度も話したことだ。……何を言っても、貴方を叛意させられないことを、私は知っている」

少しトーンを下げた声でそう言っ、ナイトアイはちらりとこつちを見た。

「あなたが引退する時が来るとしたら……その『残り火』が消えた時か……全てを託すに足る『後継者』が、真に生まれた時だけなのだろう」「……そうかもしれないね。後者に関しては、おかげさまで順調だよ。私もびつくりするほどにね」

ニヤリと、頬のこけた顔で笑うオールマイト。

……何か、不思議な気分だ。褒められてるのはわかるのに……何でだろう、感情の表し方がわからない。どう反応しているのか……いまいちわからない。

モヤモヤする……何か、今の会話の中に……僕が気付けてない、あるいは、知らない何か……重大な事実が隠されている気がして。

オールマイトと、ナイトアイ。彼ら2人だけが理解できている、何かを前提にすえた話がされているような気がして。

けど、それを聞くより前に、ぽん、とオールマイトの大きな手が、僕の頭に置かれた。

筋肉量こそ『マッスルフォーム』よりも頼りないが、手の大きさや身長なんかが変わっているわけではないから……やはり、大きくて力強さを感じる手だ。

その握った拳で、何百万、何千万の笑顔を守ってきた、英雄の手だ。

優しく僕の頭をぽんぽん、と労わるように軽くたたきながら、オールマイトは続けて言う。

「君が、通形ミリオ君を育ててくれたことは、根津校長からも聞いて知っている。『ワン・フォー・オール』の後継者候補として、私に紹介してくれるつもりだったということも」

「……！ 通形先輩が、『ワン・フォー・オール』の……!?」

前にナイトアイは……そうだ、保須市で会った時だ。

『ワン・フォー・オール』には、もっとふさわしい人物がいる、と言っていた。それも、単に僕がふさわしくないという意味じゃなく……誰か、もっとふさわしい人を知っている、とでもいうような言い方で。

それが、通形先輩だったのか……！ ナイトアイの事務所でインターンとして雇用しているのも、実力を買っているのはもちろん、そのためにナイトアイ自身が育てていたから……

確かに、通形先輩の『予測』を軸とした戦い方は——船で少しの間交流しただけでも、その片鱗をうかがい知ることができた——ナイトアイのそれに通ずるものがある気がする。

そして、それは今も……？

「無個性の中学生を後継者にすると聞いた時は、君には猛反発されたいからね。私の考えていることが理解できないと、もっとふさわしい者がいるはずだと」

「……当たり前だろう。志だけで務まるものではない……『平和の象

徴』の名は、安くはない」

「仮にもその立場に立つ者として、安く見ているつもりはないさ……君が言っていることはよくわかっていた。それでも私は、彼にならそれが務まると思っただ。事実彼は、私の予想を、期待をいい意味で裏切り続けている……今でも君は、彼では力不足だと思うかい？」

そう、オールマイトはナイトアイに問いかける。

自然と、僕も……オールマイトに従うように、ナイトアイの方に視線を向けてしまう……答えを期待し、問いかけるような視線を。

2人分の視線を受け止めながら、ナイトアイは少しの間、目を閉じて考えて……

「……いい意味で予想を裏切る。その表現が的確なものであろうことは、私としても異論はない」

「……………」

「1年と少し前まで、間違いなく何の力も持たない、一般人だった彼が……ひいき目なしに、プロの領域にも足を踏み込めるだけの力を、今すでに持っている。ミリオからも同様の評価をもらっていたようだ。現時点で確かにある実力に加え、驚異的な成長速度。それらにはきちんと理由が存在するとはいえ、その部分……言ってみれば『人脈』も実力の一部だ。そしてオールマイト、貴方が認める、英雄の精神……これだけ揃っていて……私の私的な感情だけで『不適合』だと断ずるのは、非合理的というものだろう……複雑な気持ちではあるが、そうだな……認めざるを得ない」

一拍、

「緑谷出久……君は確かに、『ワン・フォー・オール』を受け継ぐに値する力を持つ者だと」

一瞬、僕もオールマイトも……失礼な話、ナイトアイが何を言っているのかわからなかった。意外過ぎて、上手く頭に入ってこなかった。

けど、徐々にその意味が理解できていくにつれて……何とも言えな

い気持ち心がの中に広がってきた。隣に座っているオールマイルトも、やせた顔でもよくわかるような、安心したような笑みを浮かべているのが見えた。

2人共、ようやく理解できた。

言っていた通り、複雑そうな心境ではありそうだが……それでも間違いない、今この瞬間……ナイトアイが、僕のことを認めてくれたのだ、ということ。

しかし、話はそこで終わらず……『だが』とナイトアイは、いい感じになっていた空気を断ち切るように言葉を続けた。

以前として鋭いままの目を僕に向ける……むしろ、さっきまでよりも真剣みが増したような眼差しだ。

『目は口程に物を言う』とよく言ったりするが……まさにそんな感じだ。

ナイトアイの目からは、僕に何か……あまり好ましくない、少なくとも、素直に褒めたり認めたりするようなことを言うのではない、ということだけは伝わってきた。

「だからこそ私は、君に問わなければならぬ。そしてオールマイルト、あなたも聞いて知っておくべきだ……『ワン・フォー・オール』に起こっている、異変を。その意味を」

「……異変……？」

「ミリオから既に報告は受けている。君は船の中で、いくつか不可思議な行動をとっていたと。手がかりゼロの状態にも関わらず迷いなき足取りでマンダレイの元にたどり着いたことや……紐や鎖のような見た目の光を発していた、ように見えた、という報告もあった。いずれも、『ワン・フォー・オール』にはない力だ。君は元々『無個性』である以上、君の個性由来の力というわけでもないな？」

剣呑、というほどではないけど、正直に答える以外の反応は許さない、とでも言うようなナイトアイの目。その隣では、驚いたような表情になっているオールマイルトが……こちらもやはり、驚いたような、そして説明してほしいような目になっている。

少したじろぐというか、気圧される僕だけ……そもそも僕の方が

らも、今ナイトアイが言ったことについては、オールマイトに相談するつもりでいたんだ。願ってもないというか、ちょうどいいというか……。ナイトアイにも一緒に話すことになるのは予定外かもだな。それでも、彼もまた『ワン・フォー・オール』の秘密を知る一人だ。複雑ではあるが、知られて困るようなことでもないし……そのまま、部屋にいてもらったままで話そう。

昨日見た夢を……そしてそれが意味しているのであろう、『ワン・フォー・オール』の成長について、僕が知る限りのデータを。

「『ワン・フォー・オール』の成長……歴代継承者の『個性』とは……」
「そして、『継承者』ではない者達の意味……なるほど、オールマイトやその先代が扱っていた頃の性質とは、大分異なるようだ……そのようなことになっていたとは」

表情こそ変えないが、頬のあたりにたらりと一筋汗を流しているナイトアイ。

その横では、こちらはガリガリの顔でも割とわかりやすく驚いているオールマイトがいた。

どちらも、今僕が話した内容は……流石に予想外というか、かみ砕いて飲み込むのに苦労する程度には衝撃的だったようだ。復帰するまでにもう少しかかるかなあ。

と、思ったんだけど、流石はプロ。すぐに気を取り直して、あるいは気持ちを切り替えて、今聞いた内容に関して考え始める。

「現時点ではいえ、今の君より実力で勝るオールマイトにも、そのさらに先代達にも表れなかったであろう特殊能力……『身体能力』以外のそれを、いくつも発現させているということか。『黒鞭』と、もう1つ……マンダレイの居場所を察知した、他者の居場所を察知する能力、か？」

「居場所、っていうよりは……まるで、マンダレイが『個性』の『テレパス』を使った時みたいに、彼女の、心の声……って言えばいいのかな？　そういうのが感じ取れたんです。それも、はつきり『声』とし

て聞こえたつていうよりは……助けてほしい、つていう感情そのものを感じ取れたような感じで……その感覚のまま走ったら、マンダレイのところに行けたんです」

わかりやすいように、それでいて正確に伝わるように。

言葉を慎重に選んで説明する。

「……そういう話を聞くと、君に初めて出会った日を思い出すな。あの時も君は、爆豪少年を助けるために、考えるより先に、勝手に体が動いていた……助けを求める人の居場所がわかるなんて、君にぴったりの能力じゃないか。君の『個性』がそうだったらぴったりだったかもしれないね」

そんな風に言ってくれるオールマイト。ははは……そうだったらよかつたのかもですけどね。

「ですが、そんなことはない。そして当然、その『個性』ないし『能力』にも心当たりはない、と」

「はい……『黒鞭』が、歴代継承者の1人のそれであることは、あの夢の通りだとすればわかつているんですが……『心の声』の方は、よくわからなくて……説明も難しいし。他の継承者の『個性』なのか……それとも、それ以外の人のなのかも……」

僕が『それ以外』と言ったところで、ナイトアイのメガネの奥の目がきらりと光った気がした。同じようにそこに注目している、とでも言うように。

「……それが一番大きな問題だな。『継承者』でもない者のビジョンの存在……それも、その中に、君の同級生……栄陽院永久の姿があつた、か。事実だとすれば……明らかにただ事ではないな」

「疑うわけではないけど、確かだったのかい、緑谷少年？ 本当にそれは……夢で見たのは、栄陽院少女だったのか？ よく似た誰かではな
く。」

「そう、ですね……何ぶん夢のことなので、絶対に記憶違いではないと言いつ切るのも難しいんですが……少なくともあの時は、そうとしか見えませんでした。それに、栄陽院さんだけじゃなく、そのお母さん……『アナライジユ』の姿もありましたし、偶然とか見間違いだとも

……」

……あんまりこういうことを人前で言うのもアレなので、とつさに言葉を濁してしまったけど、あの感触といい、匂いといい、そして目が合った瞬間の……第六感的な感覚といい……

どれをとつても、あの夢の中で会った彼女は、栄陽院さんだったと思う。

アレが単に僕の脳が作り出した妄想……もとい、イメージとかじゃなく、きちんと意味のあるビジョンなんだとしたら……何で彼女が、そして『アナライジユ』や他の人たちまでも、あの『ワン・フォー・オール』の空間にいたんだ？ どんなつながりで、一体何のために？ 彼女の『個性』……その、本当の名前として教えてもらった『オール・フォー・ユー』……ひよつとしてそれと、何か関係があるんだろうか？

栄陽院さんは、現実の世界でだけでなく……あんな、こう言っちゃなんだけど、よくわからない世界でまで……僕の力になろうとしてくれているのか……？

同じように考えつつも、これといって何か結論が出たわけでもなさそうだったオールマイトは、

「元々彼女……栄陽院少女は、緑谷少年がここまで強くなったことにおけるキーパーソンの1人だった。彼女の個人的な、かつ特別な感情についてはまあ置いておくとしても……彼女の『個性』の特異性や、それが生み出す予想だにしない現象……いよいよというか、放置するには問題が大きくなりすぎている気がしてきたな」

ううむ、と口元に手をやって、考えこみながら唸るオールマイト。その隣にいるナイトアイも……こちらもこちらで色々と考えていたみたいだが、はつきりとした答えが出たわけでもないらしい。

……それにしては意味ありげな視線を向けてくるけど。心配するような視線を。

『オール・フォー・ユー』……『オール・フォー・ワン』に似た名前の個性に加え、『ワン・フォー・オール』の異空間に姿を見せた……最早、名前が似ているだけの偶然とは考えづらい。少なくとも、『ワン・

フォー・オール』の異変に関しては、彼女はほぼ確実に何らかの形で関与していると見てよさそうだ……話を聞かないわけにはいかなからね」

「ですが、正面切って話を聞くわけにもいきません。こちらからの情報開示は最低限にしておく必要がある……『ワン・フォー・オール』にかかる情報も明かすべきではないでしょう。もしかすると、彼女自身は無自覚、という可能性もありますからね」

「? どういう意味ですか、ナイトアイ?」

『個性』という名の特殊能力には、未だにわかっていないことも多い……『ワン・フォー・オール』に成長の余地というものがあつたのと同じように、時に人は、自らの『個性』が持つ一面、ないし可能性というものを知らぬままに使い、そして時に他者に影響を及ぼしていることがある」

ナイトアイ曰く、恐らく栄陽院さんが何らかの形で僕の『ワン・フォー・オール』に影響を及ぼしているのは、ほぼ間違いない。しかしそれを、彼女が狙って引き起こしているのかどうかはわからない、ということのようだ。

無意識のうちに、彼女の『個性』が勝手に作用して『ワン・フォー・オール』に干渉しているとか、そういう可能性があるということだ。

僕もどつちかというところ、そつちの可能性の方が高いと思うな……彼女が何かを狙って僕に近づいてるとか、邪な何か思い、ないし狙いを抱いているとかは考えづらいし……信じたくない。

……あと、ちょっとアレな方向に考えが飛ぶけど……僕のために『全てを捧げて尽くす』とまで言ってくれた彼女が、変なことを考えているとは……ちよつと考えづらいと思う。

いや、言ってる内容がそもそもぶつ飛んでるのはそうだけど……それでも、彼女は真剣だし。

もつとも、同じように『違うとは思うが』と言っているナイトアイの考えていることは、友達である彼女にそんなことを考えていてほしくないという、僕のような願望ではなく……『故意でない可能性がある以上、こちらから『ワン・フォー・オール』に関する情報は明かせ

ない』という警戒によるものだろう。

継承される個性『ワン・フォー・オール』は……平和の象徴・オルマイトがナチュラルボーンヒーローであるという世間の認識に直結してしまうトップシークレット。それが露見してしまうような行動は、どのような場面であれ慎まなければならない。

だからもし、栄陽院さんに何ひとつ自覚がなく、単なる偶然とかで『干渉』してしまっている場合、こちらから不用意な情報を与える形にもなりかねない。それも警戒すべきだ、とナイトアイは言ってるわけだ。

こちらからは情報は極力渡さず、しかし相手からは望む情報を聞き出す……す、すごく難しそうに聞こえるんだけど、そんなことできるかな……

「……見るからに腹芸が苦手そうな君に、そこまでは望まん。それは私がやろう」

「？ ナイトアイが……彼女から話を聞くのかい？」

「そのつもりです。それと、それにも関わることですが……1つ、いや2つだな、君に頼みたいことがある」

そう、ナイトアイは僕の目を見て、ぽん、と肩を叩いて言ってきた。その瞬間、なぜかオールマイトがびくつ、と震えて、何かに気づいたような仕草を見せた気がしたけど……そのまま特に何も言わなかった。……何だったんだろう、今の？

そのまま、ほんの少しの時間、僕を見つめていたように見えたナイトアイ。

しかし、僕が何か言ったり、反応するよりも早く……なぜか、僅かに眉間にしわを寄せる。

「……あの、頼みごと、って？ あ、もちろん、僕にできることなら何でも……」

「ほう？ ならば、ミリオに『ワン・フォー・オール』を譲渡してほしい、とでも頼めば、貴様はそれを聞いてくれるのか？」

「え……ええええ!?!」

「……冗談だ、本気にするな」

「ナイトアイ、そういう冗談緑谷少年からしたら心臓に悪いからやめなさい」

な、何だ冗談か……よ、よかった……

ナイトアイ、真顔で言うからわかりづらいよ……通形先輩やグラントリノ曰く、ユーモアと笑いを大事にする人らしいけど、悪いけどとてもそうは見えない……少なくとも、今はまだ。

通形先輩は、『もし君がサーのところインターンにでも来ればよくなるよ！ その代わり、キャラっていうかイメージがだいぶ崩壊するのを覚悟しないといけないけど』という、なんだか反応に困るようなことを楽しそうに言ってたな……ちよつと気になるな。何があるんだ、事務所に。

ふとそんなことを考えていた僕は……それゆえに、次の瞬間ナイトアイにかけられた言葉に、余計に驚いてしまった。

内容がその……あまりにタイムリー過ぎて。

「1つ目だが……君に、私の事務所に『ワーキングホリデー』に来てもらいたい」

「へあ!？」

うん、ほんとにタイムリー……。しかし、何でいきなり？

「緑谷少年を……？ ナイトアイ、今度は彼を自分の手で育てるつもりかい？」

「それもありませんね。君を『ワン・フォー・オール』の後継者として認める以上は、私自身もできることをしてやりたいという思いはある……他ならぬ貴方の選択でもある、尊重したいと、思わないわけではない。そしてそれ以上に、より正確に彼の力を見たいからだ」

「僕の、力を……?」

「体育祭や職場体験の時よりかなり戦えるようになっていたようだな。断片的に聞いてはいるが、『栄陽院コーポレーション』のテストプログラムとやらで、余程いい経験を積んだと見える。だが君は今回の一件ではほとんど戦闘に参加しなかったし、君の活躍を私がこの目で見れたわけではない……ゆえに、改めて今の君がどれだけの力を持っているか、そして、私が君に何を教えてやれるか……それを見たい、確

かめたい……といったところだ」

厳しさの中にも、きちんと僕のことを……そして、オールマイトのことを考えてもくれているのがわかる言葉だった。

もちろん、僕にそんな申し出を断る理由なんてない。

色々ごたごたが終わってからにはなるだろうけど、即決で僕は首を縦に振った。

「色々な手続きや打ち合わせは後日行うこととしよう。……状況などにもよるが、今はまだ、私やミリオの方が君よりも強い……短い期間かもしれないが、学べることを全て学ぶつもりで来たまえ」

「はい……よろしくお願いします、サー・ナイトアイ！」

「私からもよろしく頼むよ。……こんな時にばかり、頼るような調子のいいことを言つて、申し訳ないと思うけどね」

「……あなたの役に立てることをするのに、私が躊躇する道理などありませんよ……オールマイト。さて、緑谷出久……頼み事は2つ、と言ったのを覚えているな？」

「え？ あ、はい……もう1つは？」

するとナイトアイは、くいっ、とメガネを直す動作の後に……こちらもある意味タイムリーなのかな、っていう感じの話を切り出した。「その『ワーキングホリデー』に……栄陽院永久も連れてきてもらいたい。こういう言い方は好ましくないかもしれないが……君の頼みなら、彼女は恐らく聞くだらう？」

☆☆☆

「正直……少し意外だったよ」

「？ 何がです？」

帰り道……ナイトアイの運転する車の助手席に乗っているオールマイトは、おもむろに口を開いて、そんなことを言った。

隣にいてハンドルを握っているナイトアイは、視線を前に固定したまままで聞き返す。

「君が素直に緑谷少年を認めてくれたことさ。彼は確かに強くなった

……けど君の言う通り、まだ君や、通形少年だったかな？ 彼の方が強いのも確かだ。色々言われるんじゃないかと思ってた」

もう日が暮れ始めている空を眺めながら、オールマイトは少ししみじみとした空気の中で言う。

「……正直、私は君に合わせる顔がないと……君にはもう、愛想をつかされているものだと思っていたしね。それだけのことをしてきた自覚もある。迷惑をかけた末に、君を突き放すような真似をしてしまった……それも、二度もだ」

「……何を言うかと思えば。今でも私は、あなたを敬愛していますとも。まあ……色々と衝突することが多かったのは否めませんが、どちらかと言えば突き放したのは私だ」

張り詰めた、とまではいわないが、奇妙な緊張感が漂う車内。

「……緑谷出久には、話していいのでしよう？ 私の『予知』を」

「……ああ、言っていない。言う必要がないと思っただからね」

「またそうやって抱え込む……まあ、予想はできていましたが」
ため息交じりに言いつつも、ナイトアイには……予想はついていたのだろう。オールマイトの返答に、特に驚いたような様子はなく、むしろ『やはりか』という呆れがあった。

かつて、ナイトアイが己の個性である『予知』で見た……最悪の未来。

オールマイトが『オール・フォー・ワン』との戦いの後、常人ならば一生ベッドの上で過ごすことになるであろう負傷を押して、ヒーローに復帰しようとした彼に向けて、ナイトアイは告げた。

彼が……オールマイトが死ぬ『予知』を。

『敵』によって、想像を絶する凄惨な最期を迎えてしまう、認めたくない未来の存在を。

それがいつなのかはわからず……しかし、感触からして、今年から年の可能性が高い。

期間を逆算してそれを重々承知しているオールマイトには……その話を蒸し返すような話題を持ち出されても、特段動揺はなかった。理解した上で、彼は走っている。見えているゴールに向けて……そ

れまでにできること全てをやりきって、最後を迎えようと、心に決めている。

話した当時……そして、今でもその未来を回避したい、変えたいと願っているナイトアイとは、その価値観の相違によって、当時、コンジを解消するに至ったのだ。

自分のことよりも世界の平和、人々の笑顔を優先したいオールマイトと、そんなオールマイトに生きて、幸せになってほしいナイトアイとの、ある意味必然な、悲しいすれ違いだった。

(そう考えると、少し似てるかな……私の後を継ごうとしてくれる緑谷少年と、その緑谷少年を何が何でも支えようとしている栄陽院少女……私達のようにならなければいいが)

「……先程は言いませんでしたが、私が彼を『ワーキングホリデー』で受け入れようと思った理由の一つがそれです」

「うん？」

不意に告げられた言葉に、オールマイトは頭上に『?』を浮かべてナイトアイに聞き返した。

「私が終盤、彼と視線を合わせて手を触れていたのに気づきましたか？」

「……あの時か。君やっぱり『視』ていたんだね、彼を」

その瞬間のことを思いだして、『やっぱりか』とため息をつくオールマイト。

ナイトアイの個性『予知』……その発動には、条件がある。

対象となる人物の……手でも肩でもいい、どこか体の一部に触れ、その状態で目を合わせる事。

それにより、1時間の間、その人物の取り得る行動を先に『視』ることが出来る。

見たいと思った未来……その1コマ1コマがフラッシュバックするように、ナイトアイの脳裏に浮かぶ。他人の一生を記録したフィルムを見るようなものだ。見れる範囲は限られているが。

ナイトアイが彼に『頼み事』を告げる際、肩に触れて視線を合わせた行動を見て、オールマイトは『個性』の発動を察していた。口には

出さなかったが。

「それで……何か気になるものでも見たのかい？　緑谷少年の未来に」

「いや……何も」

「？　特に気になるものは見なかった？　なら、何を気にして……」

「そうじゃない、そうじゃないんだオールマイルト」

ちやうど交差点の信号待ちに捕まり、車を停止させるナイトアイ。

その時間を利用して、助手席で『どういう意味？』という表情になっ

ているオールマイルトに視線を向け……告げる。

「何も……そう、何も見えなかったんだ。彼の……緑谷出久の未来が」

「何……？　君の『個性』でか？」

『個性』が発動しなかったわけではない……だが、まるで何かに遮られたように……コマの1つも見ることができなかった。拒まれた……いや、阻まれたんだ、彼の未来を知ること。……こんなことは今までで初めてだ……流石に私も動揺した」

今まで、ナイトアイが『未来を視る』ことができなかった人物などいなかった。

そして、それによって得た『予知』が外れたこともまた、なかった。

……それゆえにこそ、彼は残酷な未来を回避するために躍起になっているとも言える。

そのナイトアイが、人生で初めて、『予知』が通用しなかった存在……それが、緑谷出久だった。

『黒鞭』や、『要救助者の感知』と同じように、それもまた何かの『個性』によるものか……あるいは……」

（信じたいが……未来を『予知』できない……。定まっていない、己の意思で未来を選択できるような人間であれば……。そして、あるとすればではあるが、その仕組みやからくりを知ることこそが……『視』てしまった未来の回避につながるかもしれない……。あの、最悪の未来の……！）

敬愛するオールマイルトが目をかけている少年に対して、利己的ともいえる、不純な勧誘動機であることは否定できない。

それでも、ナイトアイの脳裏には……直感にも似た鮮烈な感覚が焼き付いていた。

まるで、暗闇の中に一筋の光明を見つけたように、決して無視できない、したくない可能性。

オールマイトが聞き返すより前に、信号が青に変わる。

自身の逸る心が表れてしまったかのように、ナイトアイは車を急発進させ……その勢いで助手席のオールマイトが『わっ』と少しのけぞって驚き……疑問を聞きそびれてしまっていた。

（私が確かめなければ……『ワン・フォー・オール』の異変も、栄陽院永久という少女の真意も……そして、彼が、緑谷出久がその身に宿している……世界の希望を守る可能性も……！）

第88話 TS少女と後始末の大捕り物

S i d e . 緑谷出久

あの一件……洋上での救出&脱出劇から、まだ日も経っていない今日……僕と栄陽院さんは、またしても『ワーキングホリデー』に来ていた。

期末試験も近いってのにね……けどまあ、試験勉強に不安はないから、問題はない、と思う。

体験先の事務所は、病室で話があったとおり……『サー・ナイトアイ事務所』。

僕は、ナイトアイとオールマイトの意向で、栄陽院さんは、僕が誘ってついてきてもらった形だ。

そして、そこで任される……というか、参加することになった仕事はというと……なんと、あの一件の後始末である。

指定敵団体『死穢八斉会』の摘発、及び残党狩りだ。

と言っても、既にその本部に対しては、他のヒーロー事務所や警察の捜査本部による家宅捜索の手が入った後らしい。それも、相手が武力行使で持つて抵抗してくることを見越して、複数人の武闘派、ないし対凶悪犯罪で活躍しているヒーローを動員して。

リューキュウにギャングオルカ、ミルコにベストジーニストまで動員されたっていうから驚きだ。凶悪なネームドヴィランが所属していた組織……それだけ警戒されていたってことだろう。

しかし、そのガサ入れ自体は……予想されていた通り抵抗はあったものの、想定よりもずっと大人しく進めることができたらしい。何人か強引に突っかかってくる者を退けて以降は、大人しく、抵抗せずに奥まで捜査員達を招き入れて、物証の提出にも応じたって。

同行してたミルコの機嫌が、暴れられなかったことで逆に少し悪くなっただけくらいに。

それもそのはず……『オーバーホール』につき従っていた幹部、ないし直属の部下たちは、既にその組にはもういなかったのだ。

『オーバーホール』が逮捕された報告を受けて、あるいは連絡がつか

なかった時点でそうするつもりだったのかもしれないが……『八齊衆』という名前のついていた直属の部下達は、間一髪の差でその場を逃れていた。彼が何やら進めていたらしい、裏ビジネスの資料の一切を持って。

そういう話を、大人しく投降した……残っていた組員から聞かされたそうだ。

その他にも、興味深い話や……聞き逃せない話も、いくつか。

現在、『死穢八齊会』の組長は、病により意識不明の状態で床に臥せっており、もちろん会話なんてできる状態ではないこと。

そんな状態なので、組の実権は若頭である『オーバーホール』……治崎が握っていたこと。

治崎の方針は、組長の本来の方針とは大きく違っていたため、反発が大きく……しかし治崎はそれを、恐怖統治によって無理やりまとめていたこと。

今まで彼に逆らおうとして、あるいは抜け出そうとして命を失った者は数知れないこと。

……組長の現状も、治崎の仕業であると睨んでいる組員がほとんどであること。

治崎が、組長の本来の方針……古き良き『任侠』を行くそれとは真逆の、どす黒いビジネスを進めていたらしいこと。しかし、自分が信頼できる部下にしかその詳細を教えていなかったため、今ここに残っている者達では、恐らくそれを教えることはできないこと。

そして……そのビジネスに、組長の孫娘である『壊理』という少女が利用されており……幹部達は、その子連れ出して逃げたらしい、ということも。

そして、僕らが動き出したのはそのしばらく後だ。

その目的、というか、現場でやっていたことは……

『こちらシンリンカムイ！』 目標を目視で確認、国道〇〇号線を南下するコースで逃走中！ 速度……目測で100km/hオーバー！ 周囲に一般車両多数！ 間もなくウワバミ事務所の設置したト

ラップゾーンにさしかかる……交戦はおそらく避けられん、各車両は集結を！」

「こちらナイトアイ事務所、了解した。1分30秒後に現着見込みだ」
『ファットガム事務所も同じくや！　ここからなら1分かからへんさかい、先に始めとこか！』

『足並み揃えた方がいいから待つといた方がいいかと思えますけど……あ、ホークスです、今こっちも目視で……対象の車両とカムイ君の両方を確認しました』

猛スピードで車を走らせながら、ナイトアイは無線で他のヒーロー達と連絡を取り合っている。

僕と栄陽院さん、そして通形先輩は、その車に同乗して現場を目指している所だ……『死穢八斉会』の、逃走している幹部格達の確保と、『壊理』ちゃんのプロテクションのために。

警察の協力により、逃走している連中の居場所はわかったけど、奴ら……『八斉衆』は警察の検問を力づくで突破し、僕らが到着する前に逃走した。現地の警察が追っているけど、道交法なんて丸ごと無視した暴走運転で今も逃走している。市街地だろうとお構いなしにスピードを出して。

追跡していた僕ら『ナイトアイ事務所』に加え、出張なんかで管轄外であるのも含めた、付近にいたヒーロー……ファットガム、ウワバミ、シンリンカムイ、そしてなんとNo.3ヒーローであるホークスまでもが急遽チームアップして対応に当たっている。

さらには、それらの事務所の中には、僕らと同じく『ワーキングホリデー』に来ている切島君や八百万さんまでもいて……身内多数、思わぬ規模の大捕り物になった。

ほどなくして僕らの位置からも、追跡対象の車両が見えるようになった。違う道路を通過して遠くから見えるからよくわかる……確かに、すごいスピードで飛ばしてるな……。

あのスピード、途中で何に当たろうと関係なしで飛ばすつもりで走ってるんだろう……それこそ、無関係の一般車両に当たったり、一般人をひいてしまってもお構いなしに。

見ている間だけでも何回か危ない場面が……一般人が引かれそうになつているところがあつただけけど、それより早く、何かにつ張られるようにその人が進行ルートから外されて、離れた安全な位置に放り出されていた。

恐らく、ホークスの『剛翼』だ。無数のしなやかで強靱な羽を飛ばし、操れる『個性』。

そのホークス本人は、車から100mくらい離れたところを、自分の『個性』で飛んでる。

すると、『八斉衆』の乗っている車——大型のバンみたいなそれ、2台——が、新路上にあつた棒みたいなのを踏み越えて走って……しかしその瞬間、ガクツとスピードが落ち、まともに走れなくなつたようだった。遠くから見ても、明らかにスピードが落ちていつている。

もつとも、何が起こつたのかは知っている。事前に作戦は聞いていたから。

さつきシンリンカムイが無線で言っていた通り……あれは、ルートを読んで先回りしたウワバミ事務所が仕掛けていたトラップだ。より正確に言えば、八百万さんが個性で作つたもの。

海外で、警察の検問なんかでも使われているらしい道具であり……名前は忘れたけど、地面に設置しておく、その上を通つた車のタイヤをパンクさせて走行不能にするものなんだそうさ。

通常、車のタイヤは、パンクしてもしばらくは……ひどく走りづらくはなるけど、空気がある程度中に残っていれば走ることができる。そういう風に、車もタイヤも作られている。

しかしあの道具を使うと、パンクの傷が大きく、さらにタイヤ内の空気が一気に抜けるため、即走行不能になるくらいの即効性があるんだそうさ。そんなものまでよく知ってるな、八百万さん。

『おー、流石ですね。えーと、ウワバミさんのところの……クリエティちゃん？ 助かるよ、俺の『剛翼』じゃあ、改造車両止めるにはパワー不足だからね』

『お、おほめにあずかり光栄ですわ、ホークス』

『では他の事務所の方々、後はお願いします。私達ウワバミ事務所は

バックアップに回りますので』

『おうき！ こつからは荒事、ファットさんらの出番やで！ サン

イーター！ レッドライオット 烈怒頼雄斗！ 気張ってけや！』

『押忍！ ファット！ 全力で行きます！』

『はい、全力で行きます……緊張と乗り物酔いなんかには負けません……』

2台ともがそれを踏んでしまい、走行不能になって止まる車。

加えて、後ろからは続々と警察車両が追いついてきて……『八斉衆』はやむなく、車を捨てて足で逃げることを選択した。

強行突破して入り組んだ住宅街に入ればまだ望みはある、と踏んだんだろう……実際、警察じゃあ検問も突破されてしまったように、戦闘能力に不安が残るわけだし。

そして、そこをカバーするために僕らが、ヒーローがいる。

そこからは、迅速に事が進んだ。

もともと荒事は、ヒーローの専門分野みたいなものだし……そこで後れを取ることにはなかった。

もつとも、相手もさるもの……一筋縄じゃ行かない連中だったけど。

誰が合図するでもなく、一斉に、何もさせずに無力化すべく行動を開始する。

車から出て来た構成員達——『八斉衆』だけじゃなく、その雑用的な部下たちも何人か一緒だったみたいだ——が、意気込んでこつちに拳銃とか凶器を向けたり、『個性』で攻撃しようとしてくるも……

「オラア来んな！ 来たら……」

「先制必縛、ウルシ鎖牢！」

「言ってる暇あったら逃げりやいいのに……いやまあ、逃げられても困るんすけど」

言ってる間に、構成員の大半が、シンリンカムイの伸ばした樹木で拘束され、それを逃れた面々は、今度こそ残らずホークスの『剛翼』ですくい上げるように飛ばされ、武器を取り落とされた上で警察車両の

ど真ん中に放り捨てられた。当然そのまま御用である。

残るは『八斉衆』のメンバーのみ……その時点で確認できたのは、4人。

その全員が、死に物狂いで徹底抗戦するような構えで……その覚悟が見受けられる目をして、こっちに向かって来たけど……その瞬間、僕の、あのよくわからない感覚が働いた。

(……誰だ……誰の『声』だ!?)

声が、届いた。助けを求める声。

咄嗟にそっちの方向を見ると……扉が固く閉じられたまま、曇りガラスで中の様子をうかがい知ることできない、バンの片割れがあった……

「……ん？ あの車の……」

「ナイトアイ、その車です！ 多分……保護対象の子！」

「中に……お？」

後になってから聞いたんだけど、この時、ホークスは『剛翼』による振動感知で、あの車の中に、子供（のような高い声）の存在を確認して、それを伝えようとして……しかし、ほぼ同時にそれに気づいた僕の言葉に、少なからず驚いていたんだそう。

そんなわずかな間にも、目まぐるしく状況は動く。

「キメラクラーケン!!」

「レッドガントレット烈怒頑斗裂屠!!」

まず、『八斉衆』の中でも、事前調査資料にあった2人……窃野って奴と、宝生って奴。

それぞれ、相手が身に着けている者を奪い取る『個性』と、体から硬質の結晶を生み出す『個性』の持ち主だけど……窃野は何かする前に、無数のタコの足みたいな触手に叩き伏せられた。

通形先輩と同じ、雄英『ビッグ3』の1人であり、ファットガムの事務所に『インターン』に出ている、天喰先輩の技だ。

もう片方の宝生は、拳を結晶で固めて殴ってきたものの、ファットガムの『脂肪吸着』によってその拳をからめとられて動けなくなつたところに、拳を硬質化させた切島君に殴られ、硬度負けして結晶を砕

かれ、昏倒。

その直後、その場にいたほぼ全員が、平衡感覚を失い……まるで、酩酊状態になったみたいに、上手く動けなくなった。

突然、敵（ヒーローや警察）の前にいるにもかかわらず、酒を飲み始めた男の『個性』だ。

「ウィ〜……！ ほらあ、来るんじゃねーぞお、ポリ公共にヒーロー共オ！ おお、俺の近くに來るとよオ、酔っ払っちまアアアア〜くアア!？」

「あつそ、じゃあんたちよつと離れててくれ」

どうやら、周囲にいる人間を強制的に酩酊状態にする『個性』らしかった。

そのトリガーとして自分も酒を飲んで酔っ払う必要があったのか、それともただ単にアルコール中毒なのかは分かんないけど……しかしどっちにせよ、その活躍も短かった。

ホークスが飛ばした翼（大きめ）に服を引っ掛けられて、そのままぐんぐん空中へ飛ばされて行つて……あつという間に、僕らはその『個性』の射程圏外になった。

男は飛ばされたまま、空中で止まっている。あのままにしとけば……なるほど、こつちにもう『個性』は届かない。さすがだ……さつきから大活躍だな、ホークス。さすがNo.3。

残る敵は……頭陀袋みたいなのを、目と口の部分に穴をあけていた小柄な男だ。とりわけ不気味な見た目のこいつは、資料では……確か、何でも食いちぎって食べてしまう『個性』だったはず。

口をガバツと開けて、ファットガム目掛けて食らいつこうとしたその瞬間……ナイトアイが横から飛ばした超質量印が顎に直撃してそのまま昏倒させられた。あつさりど。

まあでも、無理もない……か。口を大きく開いた……すなわち、歯を食いしばって耐えるってことができないタイミングで、しかも顎にあんな重量級の一撃を食らったとなれば……うん。

しかしその直前、僕が注目していた車の扉が開いて……中から、男が3人と……そのうちの1人の脇に抱えられるようにして、小さな女

の子が、泣きそうな顔で……恐怖を押し殺すように、歯を食いしばっていた。

その、涙を湛えた目がこつちを見て……目が合った瞬間、僕と通形先輩は走り出していった。

しかし、当然のように……残る2人の男がその前に立ちはだかる。僕の前には、手に手甲みたいなものをつけた大柄な男が。

通形先輩の前には、着物だか浴衣みたいな服に身を包んだ壮年の男が。

通形先輩の相手の男は、どうやらバリアの個性持ちらしく……僕が大柄な男と戦おうとした際、その体に拳が届くことなく、透明な壁みたいなものに阻まれて……しかし、そのせいで相手の拳も阻まれてしまっていた。

「おい、俺の喧嘩だ、余計なことすんな！ このバリア解け！」

「熱くなるな、乱破！ この局面、私欲を滅し奉公の心に殉ずる覚悟なくば乗り切れんぞ……オーバーホール様の宿願のために、貴様が矛、私が盾という役割を……」

「POWERRRRR!!」

「理解しぶぐほあっ?!」

「あーあー……長々くっちゃべってっから……」

通形先輩に普通に殴り倒される壮年男性。そして、それを見て呆れる栄陽院さん。

僕も同じ感じになってたと思うけど。

まあ……障壁系の『個性』って、通形先輩相手にするととなると、相性最悪だからなあ……普通に『透過』して殴られるわけだから……そして、立ちふさがる敵が、大柄な男1人になり……そこからは、僕の戦いだ。

リストになかったから個性の詳細はわからないけど……どうやら単純な増強系か、あるいは何らかの形で打撃攻撃……それも、威力だ

けじゃなく、繰り出す速さをも強化するものらしかった。目にも留まらぬ速さで、とんでもない威力のパンチを繰り出してくる。

一発まともに食らって、吹き飛ばされてしまった。

息が詰まって転がる僕を助けるため、飛び込んで盾になってくれた切島君や、ファットガムの防衛すら抜かれて吹き飛ばされてしまったことから、そのすさまじさがわかる。

アレは……受けようとしたらいけない。防御力自慢の2人でもだめなら……手数と威力で削り殺される。拳だけど、チェンソーみたいなもんだな。鏝迫り合いが相手に有利に傾く。

(だったら……受けなければいい!)

確かに、目にも留まらないほど……速い。

けど……まだ、反応できる速さだ。僕なら。

(ターニヤさんの弾丸よりは遅い! ビスケさんの拳や蹴りよりは読みやすい!)

見てから反応するんじゃ遅い……『観』て、予測しろ。

次の相手の動きを読んで……相手が動く前に、最善の動きをする。

考えるより早く動け! いや、考えるな! 感じろ! 今の僕なら、それができる!

パンドラズ・アクターにもらった、幾十、幾百の戦闘経験……そこから学んだこと。

相手の動きを見たその刹那、頭に最善手を組み上げる。考えるよりも早く体を動かす技。

(『直観力』! どれだけ速かろうが関係ない……その上を行ってみせる!)

☆☆☆

「チェスや将棋の世界において、プロの棋士はほとんどノータイム、あるいはそれに近い早さで、テンポよく駒を進めていくことが多くあります。しかし、彼らは決して適当に打っているわけではない……なぜそれほど早く打てるのかわかりますか、デク君?」

「あ、はい、聞いたことがあります。たしか、長期間の訓練や膨大な経験の中で、一般人、ないしアマチュアにはない脳の神経回路が発達していて、それを使っているからとか……」

「その通り！ 言うなれば、プロは考えない……感じるのです。そういった思考技術は『直観力』と呼ばれます……。これが、君が私との修行の中で習得すべき力です」

「直観力……ですか」

「そう。『勘』ではなく『観』です。膨大な経験が可能にする、思考のショートカット技術……と言うと大仰に聞こえますが、実際にはそこまで非日常じみたものと考えなくていい。箸と茶碗を使って食事をする際、意識が食事ではなく、箸を、手を動かすことについている人はいないでしょう？ それと同じ……経験、繰り返しによって、余分な思考と体の無駄な力みをそぎ落とす。いちいち考えずに、あるいは考えている自覚なしに、無意識にできるようになること。それが目標です」

「で、できるんでしょうか、そんなことが……日常生活の動作ならともかく、戦闘で……」

「その考え方がすでによくない。自分を疑わない、信じること、それが『直観』の第一歩だ」

「？ 信じる……？」

「そう。まあ、難しいのもわかります。こういうのはえてして、気付けばできるようになっている……できることが当たり前になっているもの。意識してそれをやり、さらにその先で意識せずにやるといのは、ある種の矛盾を孕んでおり、確かに体得は容易ではない。ですが安心なさい……既にあなたは、その扉に手をかけているのですよ？」

「デグレチャフ女史との訓練……その中であなたは、相手の動きを『予測』する術を、独学ではあるが身に着けた。戦闘中の高速思考と並列思考、戦いながら考える力……『戦闘洞察力』をビスケ女史から学び、ラバー女史の指導でそういった負荷に耐えきる精神を練り上げた。すでにピースは揃っています。後はそれを、考えずにできるようにな

るだけ……ならばあとは、練習あるのみ」

「……練習……『経験』ですね」

「その通り！ 私との、いやあえてこう言いました……私『達』との戦いの中で、それを学びなさい。考えることすら面倒になるまで、戦い続けるのです！ いっしかあなたが考えることをやめた時……あなたの体は、真の意味で全力を出して戦えるようになるでしょう……！」

☆☆☆

拳が飛んでくる。避ける。

また飛んでくる。避ける。

大きくは動かない。最低限の動きで……少し体をずらすだけ。

また飛んでくる……今度は避けられない。

飛んでくる拳に、こっちの拳をぶつけて弾く。軌道がそれる。

隙が大きい……反撃できる。こっちの拳を叩き込む。

また飛んでくる。これはブラフ。最初から当たらない。

直後に飛んでくるもう片方。これが本命。避ける。

読む。避ける。あるいは弾く。

その繰り返しで……合間合間にカウンターをねじ込んで、徹底回避型のインファイトで、ガトリングみたいな拳の乱打に渡り合う。

考えてる暇なんてない。なら考えない。見えたまま、起こると思つたままに体を動かし、戦う。

「なんや……あの拳の乱打、捌きよるんか……!? エライの同級生におるな、ライオット頼雄斗」

「いやあ……俺もビックリしてるつす……。緑谷、スゲー……」

「サー……緑谷君のあれって……」

「ああ、『予測』による動きだ……まだ粗削りではあるが、それを補つて余りある反応と思いい切りの良さでカバーしているようだな……」

（まだ、君を過小評価していたということか、私は……）

意識の端に、ファットガムや切島君、通形先輩やナイトアイの声

聞こえる。

ヒュウ、と、ホークスのそれであろう口笛の音も聞こえた。

それをきちんと認識しつつも、戦闘に支障は出さない。反応速度を落とさずに戦い続ける。

「初めてだぜ、お前みたいな奴！ 俺を相手にここまで粘って、ここまですぐで長く戦ったのも……ここまで拳が当たたらねえって経験も！」

そう言いつつ、男——乱破、って呼ばれてたっけ？——は微塵も動揺した様子はなくて……むしろ歓喜しているのが伝わってくる。声だけじゃなく、心が震えるような『感情』が……

(……まだまだ。よくわからないけど、相手の『感情』がそのままわかるこの感覚……『助けを求める意思』だけじゃなく、それ以外の感情まで拾うようになったのか?)

——ヂツ！

「っ!？」

「おおっと、今掠ったなあ?! 集中力続かなくなってきたか!? 俺はむしろようやく肩があつたまってきたところだぜ!？」

……っ……一瞬、余分なこと考えて、反応が鈍っちゃったか……いや、それだけじゃない。

今言った通り、だんだん拳が速くなってきて……こつちが反撃するために使う時間が、隙が、もうないくらいに。

今の僕じゃ……今のままじゃ、この弾幕みたいなパンチを超えて、コイツを倒すだけの攻撃を放つことができない。それこそ捨て身の特攻にでも出なければ……いや、出たところで押し切られるだけだ、無理だな。

でも、それなら……手はある。

単純な話だ。今までの僕を超えればいい。

(今の、この時間を……この『経験』を力に変えろ！ コイツの動きを覚えて、慣れて、読め!)

「おい、何かこのコ……」

「まだ速くなるのか……すごいな」

「……っ……!？」

徐々に、加速する。乱破だけじゃなく、僕も。

コイツの拳に慣れて……反応するまでに、読むまでに必要な時間が、どんどん短くなっていく。

ファットガムとホークスの、感心したような、驚いたような声はどこか遠くに聞こえる。最後に聞こえた息をのむような音は……ナイトアイだろうか。

目の前の戦いに集中して……しかし、考えるまではしないで、どんな思考を、そして体の動きを最適化させていく。

「がふっ、こいつ……！」

僕の拳が、乱破って男の……ペストマスクでおおわれた顔に当たる。

割り込む余裕ができて来た。カウンターでの反撃……その頻度………どんどん増していく！

『フルカウル』の光がどんどん強くなる。眩いばかりに、火花もバチバチ散って……

しかし気にしない。気にはならない。見ているのは……目の前の敵だけ！

もっと、もっと……もっと速く、もっと疾く！ もっと多く！
もっと強く！

数打ちや当たるとかそういうんじゃない、1発1発を全力で！ 1秒前よりも進化させる！ 進化しろ！ 相手を置き去りにして強くなれ！ 今の自分を超えていけ！

いつだったかな……オールマイトも言っていたじゃないか！

危機も、逆境も……ヒーローは、全て乗り越えて、ぶち壊していくものだって！

だからこそ……そう！

「Plus……Ultra!!!」

ズドガシヤアアアアン!!

気が付けば……ひと際大ぶりの拳の一撃を繰り出した形で、僕の姿勢は止まっただけ。

殴り飛ばした乱破って奴は、今まで乗っていた車にたたきつけられて気絶していた。

人型にひしゃげて凹んでる……ちよつと強くやり過ぎたかな。ぴくぴく動いてるから、きちんと生きてはいるみたいだけど……。

潮が引くように、気分の高揚が収まっていく。体から発せられていた光も、収まっていく。

急速に戻っていく思考。周囲のことを『考える』という余裕が、僕に戻って来る中……

「……オール……マイ、ト……!?!」

ナイトアイが、恐らくは無意識でぼつりと言ったのであろう、そんな言葉が……妙に、僕の耳に残った感じがした。

……色々と気になるけど、今はいい……まだ、やるべきことがある。

あの、壊理ちゃんって子……彼女を、助けないと!

☆☆☆

その後……無事に僕たちは、壊理ちゃんを助けることに成功した。

僕が戦っている途中……今の僕を超えようとし始めたあたりから、乱破を僕に任せて、通形先輩がすでに助けに走っていた。

残る最後の『八齊衆』……事前資料にあった、玄野って奴も倒して。ただ、その時にひと悶着あったんだよね……

どうも、壊理ちゃんが『個性』を暴走させてしまったみたいで……その時、ちょうど壊理ちゃんに触れていた通形先輩が苦しみ出して……とつさに、壊理ちゃんが彼から離れた。

助けてほしい、と願っていた子が……恐らくは、通形先輩を苦しめているのが自分だと悟って、自分から離れたのだ。……すごく辛そう、苦しそうな顔で。

それでも、先輩を傷つけまいと、自分から離れたんだ。

それが放っておけなくて、思わず僕はその小さな体を抱き抱えて……その瞬間、壊理ちゃんが『ダメ、離れて！ 死んじゃう！』と、耳元で叫ぶように言って……それを認識するかどうかでっけい早く、まるで、体が内側から引つ張られるような感覚が襲ってきて……けどそれでも、僕は彼女を一人にしまいと、『大丈夫！』と声をかけて、ぎゅっと抱きしめて……

その瞬間、ぽん、と僕の背中……と、壊理ちゃんの背中に、栄陽院さんの手が置かれて……次の瞬間、急激にその感覚が収まっていった。

その時、壊理ちゃんは、驚いたような、不思議そうな顔をしていて……けど、僕や……自分に触れている栄陽院さんが無事だつてことを理解すると、ゆっくりと目を閉じた。

どうやら、疲れがたまっていたらしく……気絶してしまつたみたいだつた。

後から聞いたんだけど、あの時栄陽院さんは、壊理ちゃんの体の中のエネルギーを操作して、暴走状態にあつた『個性』を鎮静化させたらしい。

そんなこともできるのか……修業して応用幅が広まつたのは知つてたけど……すごいな。相澤先生みたいなことまでできるようになったなんて。

……あのまま僕が、壊理ちゃんの『個性』の暴走にさらされていたら、最終的にはどうなつたんだろう……？ そもそも、壊理ちゃんの『個性』がどういうものなのかも、わからないんだよな、僕、まだ……聞かされてないから。

ただ、玄野つて奴が、暴走状態の壊理ちゃんを前にして、酷く怯えてたから……少し、いやかなり危険な力だったのかもしれない、な。その後壊理ちゃんは、救急車で運ばれた。容体は安定しているそう

だ。
なぜか、保護した時よりも、頭に生えていた角が縮んでいたらしいけど。

こうして、波乱は色々あったものの、僕と栄陽院さんの、サー・ナイトアイ事務所への『ワーキングホリデー』と、そこで扱った『死穢八齊会』の事件の後始末は、無事に終わったのだった。

『オーバーホール』に連なっていた構成員全員を無事逮捕し、1人の女の子を、無事に保護することができたという結果で。

……僕が知っている範囲では、だけどね……。今のところ。

第89話 TS少女と壊理ちゃん

中々に波乱だった1日が終わり、私と緑谷……それに、切島と八万の4人は、そろって電車で帰路についていた。

皆、程度に差はあるが、決して少なくはない疲労を身に抱えて。電車に揺られている。

さつきまで、大捕り物に参加してたわけだから、当たり前前だけど。

それでも皆、眠る様子はないのは……さつきまでの戦いの高揚感が収まっていないのに加えて、話題に事欠かないから、なのかもな。

特に今こうして、興奮気味に緑谷に話しかけてる切島見ると、そう思う。

「緑谷お前、演習の時もちよくちよく思ってたけど、また強くなつたんじゃないね？ 武闘派で有名なファットガムでも苦戦してた相手なのに、もうなんか途中から完全に圧倒してたじゃんかよー！」

「確かに……完全に相手を手玉に取っていましたわね……。あれほどの回避能力と……いえ、それ以上に先読みの力でしようか？ どのようなトレーニングの末に会得されたのですか？ その……もしよければ、参考までに教えていただきたいと……」

切島だけじゃないな、八百万もか。

2人共、向上心豊かだからな……

「あーうん、ありがとう。えーつと……理由があつて詳しくは話せないんだけど、とにかく経験あるのみ、って感じだったかな」

そんな感じで、向上心溢れる若人たちの会話がしばらく続いたわけだが……それが途切れたあたりで、ふと私の目は、切島の両腕に巻かれた包帯に行った。

「そーだ切島、腕の調子どう？ いや、さつき怪我しといてどうも何もないかもだけど」

「んあ？ おう、心配いらねーよ、もう痛みもほとんどねーし、手も普通に動くから、すこぶる快調って感じだぜ！ 多分だけど、この感じなら……明日か明後日にはもうすつかり治つてると思う。栄陽院がやってくれたアレも結構効いた感じするしな！」

最後の戦いの時、乱破とかいう奴の拳を受けて『硬化』による防御を抜かれ、体を割られてしまった切島だったが、応急処置として消毒やら何やら済ませて包帯を巻いた後、私の『コンセントヒール』で治癒力を促進させてある。効果はあったようで何よりだ。

結構多めに『エネルギー』を流し込んだのに加え、強めに『流れ』も作っておいたから、治癒力の強化もしばらく続くはずだ。

私の見立てでも、もうあと数時間から十数時間もかければ自然治癒で大体治るくらいにはなつたと思う。間違つてないといいが。

治りそうだつてんなら何よりだ。何せ……

「ならよかつた。もう明後日から期末試験だからな……2日目には実技演習もあるし、それまでに治らなかつたらヤバそうだなつてちよつと心配してたんだよ」

「ははは、ありがとな栄陽院。安心しろつて、そのくらいで力を出せなくなるほどやわじゃねーよ俺は！ 筆記も準備バッチリだし、実技も今日までの経験を生かして絶対合格するつもりだぜ！」

「……そう言えば、切島さん……今更言うのもなんですが、筆記の方の勉強は大丈夫だったんですの？ 先日、教室で話題になった時には、その……少し不安げにしておられたようですが……」

八百万の言葉を聞いて、私と緑谷も思いだす。そう言えばそうだったなど。

私達が言うのもなんだが、今日は期末試験の前々日なのだ。こんな時期になつてまで『ワーキングホリデー』に行くなんて、特別な事情がある私や緑谷くらいだろうと実は思つてたから……切島と八百万に現地で会つた時は正直、驚いたんだよな。

普通の高校生なら、試験直前は少しでも勉強しておくものだろうか。私も前世はそうだった。

ホークスのところに常闇が、ウワバミのところに拳藤が、シンリンカムイのところに塩崎が来ていなかったのはそういう理由である。たぶん。

通形先輩と天喰先輩は……どうなんだろう、よく知らん。3年生は勝手が違うのかな？

まあ、八百万（筆記中間1位）はともかく、どっちかっていうと切島もそっちの類だったように記憶してたので、私も正直そこ心配してたんだが……

「おう、抜かりねえぜそのへんは。こないだの週末に爆豪からみっちり教えてもらったからよ！　頭いいだけじゃなくて、意外と教えるの上手いのなアイツ」

「あーうん、かっちゃんって基本的に何でもそつなくこなすからね……敬語とか態度以外」

「そうなんだよな。で、みっちり教えてもらったんだけど……その後自分で復習とかもして、割と準備万端になったはいいけど、頭ばっか使いすぎて体動かしたくなつてよ……。そんなときに、前にも一度『ワーキングホリデー』で世話になってたファットガムから『ちよつと手が必要やさかい手伝わへん？』って誘いが来たから、気分転換もかねて乗ったんだ」

「そういうことだったのですね……。私の場合は、筆記についてはそれなりに自信がありましたので、今の自分にとって課題である実技に生かせそうな経験を積む目的で、今回参加したのですが……」

何かもの言いたげな八百万。

……今回、ウワバミ事務所はバックアップ担当というか……矢面には立たずに、避難誘導とかトラップの設置を中心に立ち回ってたから、それに関してかな？

前線で敵と戦った私らと比べて、自分の方は経験としては劇的なものがなかったことを少し考えている感じだろうか……。けど、それだつて立派な仕事なのはわかっているから、口に出すのははばかられる……。つてところか？　難儀な悩みだなあ……

そもそもというか、八百万って体育祭あたりからこっち、何かにつけて自信なさげにしているシーンが多い気がするんだよな……。少し気になってた。

「まーともあれ、皆大きなケガもなく終われてよかったってことでいいだろ。さつき言ったように明後日から私ら期末試験だし、そこまで疲れその他諸々残らないようにしないと……。つーわけで車内販売

のおねーさん、駅弁ください」

「いやどんなわけだよ……あーでも俺も腹減ったわ。食お」

「よく見たらもう夕飯の時間なんだね。僕も買おうかな」

「あ、では私も……」

そんな感じで、軽い感じの雑談を交わしつつ、それぞれの目的地まで、しばし駅弁をつつきながら談笑しつつ、私達はその日の『ワーキングホリデー』を終えたのだった。

すっかり食べて、今日明日はもうゆっくり休んで、試験に備えないとな。

ちなみに駅弁は、緑谷がトンカツ弁当で、切島が焼肉弁当、八百万が牡蠣飯弁当っていうちよつと高いのを買った。私は生姜焼き弁当とから揚げ弁当の2つを買った。

せつかくなので、ちよつとずつおかず交換とかした。切島に貰った焼き肉が、思いのほかジューシーで美味しかった。

☆☆☆

明けて翌日。

今日は期末試験直前ってことで、トレーニングは最低限である。きつちり食べて、ゆっくり休んで、英気を養う時間に充てることになっっているの。

そんな日になんだが、私は気分転換もかねて……っていうと若干不謹慎かもしれないが、病院に来ていた。ある用事で。

隣には、相澤先生。いつもの黒のツナギを着て、ヒーローとしてのいでたちである。……誰にも気づかれてないっぼいけど。トレードマーク？ のゴーグルも首元の布に隠れてるし。

何でこの私達2人が病院に来ているのかという……ヒーローとしての仕事である。

私の場合、まだ仮免も持っていない『卵』なので、相澤先生はその引率としての役割もある。

この病院には……あの、『死穢八斉会』から保護した女の子……壊理

ちゃんが入院しているのだ。

色々と詳細に検査してもらった結果と、『死穢八斉会』の残党連中から聞き出した情報、押収した資料なんかから得た情報をまとめると……壊理ちゃんの『個性』は、両親のどちらとも異なる形で発現した『突然変異』らしく……暫定的にはあるが、『巻き戻し』と名付けられた。

壊理ちゃんは、その体から発する何かしらのエネルギーによって、触れた相手の時間を巻き戻すことができる。

例えば、怪我した人に触れた場合、傷を治す……ではなく、傷を負う前の状態に『戻す』のだ。

この例えだけなら『治癒系の目的に使えるいい個性じゃん』と思うかもしれないが、そんな単純な話ではなく……この『個性』は、言っちゃなんだが、もっと強力で、凶悪なものだった。

フィクションとかでよくある話だが……人間の時間を巻き戻していくと何が起これると思う？

怪我が治る？ 不治の病や、病気の後遺症、消えない傷や欠損が治る？

単に若返る？ お肌がつやつやになる？ 諦めていた毛根が復活する？ 青春時代をもう一度？

……うん、まあ、夢のあつていい話だし、一部それを想像して喜びそうな大人もいそうな話ではある。……水色のコスチュームの猫さんとか。

けど、そんな生易しい話じゃないんだなコレが……

人間が『成長』していく時間そのもの。それを巻き戻していくとどうなると思う？

大人が子供になり、子供が赤ん坊になり……やがて胎児に……そして、生まれる前に戻って消えてしまう、なんてホラー展開を聞いたことはないだろうか？

壊理ちゃんはこれができる。できてしまう。

現に彼女は、彼女の父親——『死穢八斉会』の組長の娘婿にあたる

——や、世話係として関わった何人もの大人を『消して』いる。生まれる前に戻してしまっているそうだ。

組員からの聞き取りの情報の段階で、その証拠があるわけじゃないけど……確かにそれらの人物の中は、一時期を境に消息が追えなくなり、失踪扱いになっている人が何人もいた。

さらに、もつと別な概念で『戻す』ということすらも、使い方によってはできてしまうという。

さつきは、時間的な『成長』を例に取った。それだけでも驚くべきことだが……彼女の場合は、もつと別な『時間』を戻すこともできるというのだ。

例えば……人間の『進化』の時間を巻き戻していけば……人間は進化する前の類人猿や、猿にまで戻ってしまうかもしれない。

人間の中身……『記憶』だけを巻き戻していけば、知識も常識も何もかも欠落した、見た目は大人、中身は子供、なんていう状態になってしまうかもしれない。

想像するだけでも恐ろしい話だが、壊理ちゃんならば出来ることらしい。

そして、その『恐ろしい話』の最たるものが……人間を『超常』以前に巻き戻すというものだ。

最早、概念的な話になってしまっているが、人間が『個性』を使い始めるようになる以前……私の前世の記憶の中にあるような、『普通の人間社会』だった頃に、人間の状態を巻き戻す、ということが、彼女の個性を使えば可能になってしまうのだ。

……今、私は……先の2つの例と違って、『可能になる』と断言したが……それは、既にその事例が確認されているからである。

思い出した人もいるだろう。クルーズ船でのマンダレイだ。

あの時彼女は、『オーバーホール』の部下、『ミミック』こと本部長・入中が不意打ちで放った妙な弾丸を受け、その結果、一時的に『個性』が使えなくなった。

あの、先端が注射針みたいになっている、いかにもな弾丸だが……実は、その時に押収した残りの弾丸を分析した結果、未使用のそのの

中から……人間の体組織らしきものが検出されている。

……もうお分かりだろう。あの弾丸の材料が何だったのか。

オーバーホールは、壊理ちゃんの体……血液や細胞組織を採取して弾丸に加工していたのだ。『個性』を破壊する兵器の材料として。

ゆくゆくは、一定時間で復活するようなものじゃなく、完全に『個性』を消滅させる弾丸を作るつもりだったらしい。海外の違法な研究所ともつながりのあるとされる『キュレーター』と取引を行っていたのも、あるいはそれが目的か。

その上で、それを治療して『個性』を復活させるための『血清』と組み合わせて売りさばくことで、巨額の利益を得ようとしていたようだ。

……もうなんか、色々と言いたいことはあるが、何から言ったもんかわからん。

オーバーホールの外道っぷりとか、壊理ちゃんがかわいそうだとか、キュレーターにその研究のデータが一部渡ってるんじゃないかとか色々あるけど……その大半は、警察やプロヒーローの領分だし、私が首や口を突っ込むことじゃないから、まずおいとく。

ひとまず今はそれより……私、と相澤先生がこの病院に呼ばれた理由の方に行こう。

一通り壊理ちゃんの『個性』について説明したが……先に話した個性事故の件で察していると思うが、壊理ちゃんは現在、まだこの『個性』をまともに扱えていない。

自分で制御しきれず、暴走させてしまう。その結果、望まぬ被害を出してしまう。

自分の父親を消してしまった件もそうだし……あの日、事件解決間際で起こっていたこともそうだ。暴走したエネルギーの奔流にさらし、危うく通形先輩と玄野、そして緑谷を『巻き戻し』に巻き込んでしまう所だった。

そして壊理ちゃんは、オーバーホールがその事実を利用して『お前は触れるだけで人を傷つける』『俺だけがお前と一緒にいられる』『お前は外に出ちゃダメなんだ』って洗脳教育じみたことを吹き込んでい

たせいで、ひどく精神的に追い詰められている。絶許。

もちろん、克服するための個性訓練なんかもさせていない。利用するつもりだったんだから、そんな親切なことはしないか。

そのため、余計に不安定なまま今に至っているのだ。

これを抑えられるのは、現時点では2人……いや、3人しかいない。見るだけで『個性』を消せる、『抹消』を持つ相澤先生。

そして、エネルギーの流れを操って現象そのものを鎮静化できる、私……と、母さんだ。

現にこないだの現場では、そうやって壊理ちゃんの暴走を抑えて、緑谷と壊理ちゃんを助けたわけだし。行けそうだと思っただけ……私の『エネルギー』と混ぜ合わせて操れたんだよね。

それで、徐々に沈静化させるイメージで動かしてやったら、収まった。ただ、発動しかけていた分のエネルギーは、大部分が霧散しちゃったけど。

というわけで、私達がこうしてここに呼ばれた理由は、そこなわけだ。何かあつても、壊理ちゃんを抑え込めるから。母さんは、諸用で留守にしている来れなかったの、私に白羽の矢が立った。

被害者である女の子を……危険物扱いしてしまっているようで、いい気はしないけど。

そのまま病室に行くと、壊理ちゃんはかわいいピンク色の病人着を着てベッドに座っていて……私のことを覚えていたらしく、『あ……』と、驚いたような顔になっていた。

部屋には他に、ナイトアイ事務所のサイドキックのバブルガールや、警察の人も何人かいた。

サー・ナイトアイも……あれ、いない？ 今日、彼も来るはずじゃなかったっけ？

え、何、バブルガール？ ……急用で来れなくなった？ あ、そうなんですか……

その時丁度、壊理ちゃんの左の額にある角から、僅かに個性の光が出ていたのを見て……壊理ちゃんが慌ててそれを隠そうと、あるは手で押さえようとしたと同時に、先生が『抹消』を発動。

その瞬間、光は消えて……壊理ちゃんが今度は『?』になっていた。「……なるほど、俺の個性でもきちんと消せるようだな」

「角が関係あるようではありませんが、異形型のカテゴリーじゃなく、きちんと見た目通り発動型みたいですね……よかったです。……しかし、昨日より角、小さくなってるような……?」

「……? あ、あの……」

おっと、壊理ちゃん放つといて私達だけで放してたらダメだね、きちんと話してあげなきゃ。

それからしばらく、私は壊理ちゃんと一緒に色々な話を話しつつ、試してみていた。後者に関しては、バブルガールや先生、警察の人からの指示をもらいつつ。

その結果、わかったことが1つ。

「なるほど。それなら栄陽院……彼女に対して、お前の『無限エネルギー』なら、有事の際の抑制と、個性自体の訓練・指導の両方を担える力を持つてると見ていいわけか」

「今日試した感じではそうですね。彼女の体の中のエネルギーの掌握も、さほど苦労しませんでしたし。外部から指向性を持たせて操作するまでは流石に無理そうですが」

『抑える』と『教える』。その2点さえどうにかなるなら十分な収穫だ」

今の会話の通り……私が今日、ここに来た目的はもう1つある。

壊理ちゃんの『個性』と、私の『個性』の類似性について、相澤先生や医療関係者立ち会いの元で色々と検証し……私が彼女に、エネルギーの……ひいては『個性』の使い方について指導できるかどうかを調べるためだ。

暴走した壊理ちゃんの『個性』を私が沈静化できたことから、エネルギーの扱いそのものを指導できる可能性が浮上したもんで。

結論としては、壊理ちゃんの体内のエネルギーの扱いそのもの……暴走させないように循環し鎮静化させたりする程度であれば、私が外部からやる要領で教えられそうだ。

エネルギーそのものの性質は全く違いそうだから、ホントの意味で『使い方』を教えるのは難しいけど……相澤先生の言う通り、最大の懸念だった『暴走』をどうにかできるなら十分か。

また、その過程でわかったことなんだけど、壊理ちゃんのエネルギーはため込みすぎると暴走してしまう性質であるらしい。

私の『個性』を使えば、ため込まれているエネルギーに干渉して、余剰分がある程度霧散させることもできるので、そのへんも役に立てる、かな。

そのことを話したら、壊理ちゃんも……見ていたバブルガールや警察の人、医療関係者なんかも、ほっとしたような表情になっていた。皆、心配だったんだな。壊理ちゃんのこと。

今後、壊理ちゃんの容体がきちんと安定して、退院した後になると思うけど……ちよいちよい私か母さんが、『エネルギー』の扱いを教えていく役目を負うことになりそうだな。

訓練は大変だけど、きちんと『個性』を使えるようになれば、普通の生活を送れるようになるよ、的なことを言っただけなら、『がんばる！』と意気込んでいた。えらいえらい。

が、その後、ふと思いついたように……

「あの……あの人、とも、また会える？」

「？ あのやつ……どの人？」

「その……私を、助けてくれた人……。永久さんと、一緒に」

……私と一緒に壊理ちゃんを助けた人……。ああ、緑谷か。

会えるよ、大丈夫、って教えてあげたら、嬉しそうにした。

なんだ、緑谷……懐かれたのかな？ よかったじゃないの、こんなかわいい子に……本人知らないだろうけど。

……後になってから事情聴いて知ったんだけど、壊理ちゃんはその危険かつ制御不能な『個性』のせいで、他人から触れることも近づくことも避けられて今まで過ごしていたらしい。

彼女を利用しようとしていたオーバーホールやその部下ですら、必要以上には彼女に触れようとはしなかったそうだな。

そのため、何のためらいもなく自分に触れてくれた緑谷や私に、他の人以上に懐いてるのかもしれない、無意識の好感みたいなものがあるのかもしれない、というのが、バブルガールや警察の人の見立てだった。

嬉しいは嬉しいんだけど……くっついてきた理由部分が思いのほか重い……。

壊理ちゃんにはぜひ今後、きちんと『個性』のコントロールを覚えて幸せになってもらいたいものである。

第90話 TS少女と緑谷の決意

S i d e . 緑谷出久

今日、なんか栄陽院さんは用事があつて出かけたみたいなので、マンションで1人くつろいでいた僕のところ……来客があつた。

もつとも、事前に電話で聞いていた上での来訪だったので、特に驚いたわけじゃないけど……またあえてよかつたというか、嬉しかったのは確かだ。

「お久しぶり……ってほどでもないわね。緑谷君」

「……ども」

「マンダレイ！ 冼汰君も、遠いところようこそ！」

尋ねて来たのは、この2人。『ワーキングホリデー』から『オーバーホール』の一件にかけて、お世話になったり一緒に戦ったりした、マンダレイと冼汰君だ。

今日はオフつてことで、マンダレイは私服だけど。

2人共すっかり回復して、元通りの生活が送れるようになった。ヒーローとしての活動も、近々再開するそうさ。

なので、あらためてお礼を兼ねて挨拶に来たらしい。

リビングに上がってもらつて……まあ、お礼とか挨拶つて言つても、堅苦しいものではないので、他愛もない雑談に花を咲かせる。

あれからマンダレイと冼汰君、少し距離が縮まったというか、よく話すようになったこととか、

冼汰君が新しく靴を買う際、僕と同じ赤色の靴を選んで買うと言つていたこととか（冼汰君、照れてマンダレイの口を塞ごうとあたふたしていた）、

あれ以来、冼汰君は友達になつた真幌ちゃんと活真君とたびたび連絡を取つてるとか、またいつか一緒に遊ぶ約束もしたとか、

あと、このマンション見て『す、すごいところに住んでるのね……』つて、2人とも緊張してみたんだけど、事情があつて一時的に住んでるだけです、と言つておいた。

「僕自身は、うん、正真正銘の一般市民だからね……ホントにコレ、『デウス・ロ・ウルト』のためだけの借り物だから。」

「え、明日期末試験だったの？　じゃあお邪魔しちゃ悪かったかしら……」

「あ、いや、大丈夫ですよ。その……普段から勉強というか、予習復習はきちんとするようにしてるので、そこまで切羽詰まってるのではないので」

「立派ねえ……洗汰、あなたもちやんと緑谷君見習ってきちんとしなさいよ？　毎回、テストの前だけ勉強するんじゃないよ」

「なっ……や、やってるし。ちゃんと……テストだっていつも……」

「この間再テストギリギリだったでしょ？　しかもそれ、楽勝だったなんて真幌ちゃん達に嘘ついて……知ってるんだからねちゃんと」

「えっ……な!?　何で知って……テスト見せてないのに……」

「小学校の先生ってのはね、そういうの割と細かく連絡ノートに書いて教えてくれるのよ。まあ、今までは口うるさくは言わなかったけどね……わかったら、宿題きちんと後回しにしないでやること。わかった？」

「……はいはい」

「はいは一回」

「なんか、普通の親子の会話みたいな感じでほっこりするなあ……ホントに仲良くなったんだ。2人とも。」

その後、洗汰君がトイレに行きたいと言ってきて、場所を教えてくださいました。

彼の帰りを待つ間、ちよつと洗汰君の前では言いづらかったらしいことを、マンダレイが話してきた。

「……あらためて、緑谷君……今回は本当にありがとう。私も、洗汰も……あなたのおかげで助けられた。命も……心も」

「そ、そんな……その、当然のことをしただけです……ヒーローとして……まだ、卵ですけど」

「ふふっ、前途有望で頼もしいわ……何か、私にできることがあったら何でも言ってみてね。全力で力になるって約束するわ。1人のヒーロー」

としても……あの子の親としても」

そう、笑って……しかし、力強い目で、マンダレイは言った。

「あ、ありがとうございます……。にしても、なんか……もうすっかり普通の親子って感じですね、マンダレイ。あ、いや、今までがどうかという話じゃないんですけど……」

半ば照れ隠しも込めてそう言ったら、マンダレイは今度は、普通におかしそうに笑って、

「いいのよ緑谷君。遠慮しないで言ってくれて……確かに私と洗太、今までは……お世辞にも褒められたような関係じゃなかったと思うもの」

ちよつとしんみりしちゃった。

少し伏し目がちになり、どこか過去を思い出すような雰囲気になったマンダレイは、手元のジュースを少し飲んで、息をついた。

なおこのジュース……いつものアレである。お値段5桁の、ドイツ産のぶどうジュース。栄陽院さんにおすす分けって何本か貰ったのだ。

洗汰君まだ子供だし、お茶よりジュースがいいかなと思って出したんだけど、あたりだったようで……美味しいってごくごく飲んできた。遠出してここまで来たのに加え、最近どんどん暑くなってきたのもあって、喉乾いてみたいだ。

ちなみに値段のラベルは取り外し済みである。せっかく美味しいジュースを楽しんでる時に、あそこにかかれてる5桁の数字が目に入るとびくってなるからね、僕、今でも。

それが功を奏して、遠慮なく飲んでもらえたのはよかった。

「今思えば……私って本当に、保護者としてはダメだったなっことがわかるわ。時間が解決してくれるのを待つしかないって、ずっと洗汰のこと、ほったらかしにしてたんだもの。自分から歩み寄りたり、わかり合う努力もしようとせず……どうにもならないことを嘆くだけなんて……」

「それは……でも、洗汰君の場合は、事情が……」

両親だったプロヒーローの殉職や、それをきっかけにした、周囲と

の……ひいては、ヒーロー社会そのものとの隔意、そして、そんな状況の中で、同じくプロヒーローであるマンダレイに引き取られることになったなんていう境遇は……中々に複雑なそれだ。

すぐにわかり合えるはずもないし、少なくとも最初のうちは、間違った判断じゃなかったはず。

無理して歩み寄ろうとしても、関係こじらせるだけだったと思うし……洗汰君が『ヒーロー』や『個性』そのものに抱いている感情は、そのくらい、厄介なものだったはず。

だとすれば、時間が悲しみを薄めてくれるのを待つて、つていうのも立派な手段だったはずだ。

けれど、マンダレイは首を横に振って、

「確かにそうかもしれない。けれど、そうだとしても私は……全部、時間と……そして、洗汰自身に任せようとし過ぎてしまったから。何もなくても、待つていればどうかなると考えて、自分から動かなければいけないことがある、つていうことを……わかってなかったのよ」

マンダレイは、洗汰君を預かり始めてからのことを、思いだすようにして話していた。

洗汰君は、確かに……マンダレイのところに来てすぐは、彼女や、他の『ワイプシ』の面々にも心を開いていなかっただろうし……その段階で声をかけても逆効果だったと思う。

けど……ずっとそうだったわけじゃないはずだと、マンダレイは言う。

洗汰君は、隠れて『個性』の練習をしていた。

隠れてと言いつつマンダレイは普通に気づいていたらしいけど……それによれば、結構な量の水を、勢いよく噴出することができるくらいの錬度には達しているらしい。洗汰君を探す時にも言つてたな、そう言えば。

基本的に、マンダレイ達が暮らしている山（の中の事務所兼家）は、そのあたり一帯も含めて私有地だから、『個性』使用は自由だ。それもあって、特訓する機会は多かつたんだろう。

そして、そんな『個性』の訓練を……嫌っているはずのそれを、洗汰君が、しかも自主的に続けていた理由は……多分、洗汰君の方は、もう向き合おうとしていたからなんじゃないか、とマンダレイは思っているらしい。

過去を忘れるとか、悲しみを乗り越えるとか……そこまでの話じゃない。

ただ、洗汰君にとって、両親である『ウォーターホース』から受け継いだ水の『個性』は……忌まわしく思う以上に、両親との思い出の1つだったはずだ。

あるいは、今はなき両親の残してくれた、大切な形見のようにも思えるものだったはずだ。

同時に、自分が忌み嫌う『個性』であり……使うのも、目を向けるのも嫌なもの。それを使ってヒーロー活動をやったり、強くなるように鍛えることだって、彼からしたら『くだらん』と切って捨てるようなことだったはず。

それでも、彼は自分の『個性』と……両親が残してくれた宝物と向き合うことを決意した。

捨てずに、目を背けずに、自分の大切な『個性』を育てていくことを決めて、実行していた。

もしかしたら、それも……そんなに深く考えていない、ほとんど無意識というか、迷いながら、悩みながらのことだったのかもしれない。ひよつとしたら、こんなことをしている自分にも、戸惑いながらやっていたのかもしれない。

それでも、考えることを放棄することだけは、していなかったのは確かだ。

何かを考えて、それに突き動かされて……彼は『個性』と向き合っていたはずなんだ。

少しずつでも、もしかしたら変な方向にだとしても……彼は歩き始めていた。

なのに、自分は何もしなかった。彼が歩き出してくれるのを、ただ待っていた。歩き出してから、何もせず見ていた。

マンダレイはそう言って、大きくため息をついた。

「洗汰を引き取った時……今は無理でも、いつかは親代わりになってあげられれば、なんて思ってたの。傷ついたこの子の心を、いとこ叔母として、ヒーローとして支えてあげたいって。だっていうのに、私ときたら……何もできなかったなあって、どうしても思ってしまったの。あの子がとくに自分の足で歩き始めてたのに、私は見守るだけだった。いいえ、何もせず、指をくわえてみているだけだった」

「そんな……マンダレイはちゃんと、洗汰君のことを心配して、気にかけてたじゃないですか！ 僕だけじゃない、栄陽院さんや、麗日さん、取陰さんや塩崎さん、宍田君だって見てましたよ！」

そして、口には出さなかったけど……洗汰君だってそうだったはずだ。

じやなきや……全く何も思わない他人としか見てなかったなら、クルーザーの時に、あんなふうに取り乱して、必死になって『死んじややだ』なんて叫んだりしなかったはずだ。

間違いなく、マンダレイは洗汰君の中でも、かけがえのない存在になつてたはずだし、洗汰君もマンダレイが自分のために心を砕いてくれていることを知っていたはずだ。

「うん、それはわかる……私も、まあ、さつきあは言っただけど……何もしなかった、ただ見てただけなんてつもりは流石にないしね。でもね……最近になってようやくわかったの。私、少しだけ……傲慢にものを考えてたんじやないかって」

「……傲慢……？」

「上から目線だったのよ。洗汰が立ち直るのを『助けてあげる』んだって……そんな風に考えてた。洗汰が立ち直るのを、歩み寄ってくれるのを、信じて待つ。でも、もし、苦しそうにしているなら、助けを求めらるなら……手を取ってあげる、暗い闇の中から引つ張りだしてあげる……そんな風にね。でも本当は私……歩み寄って、一緒に歩いてあげることが正解だったんじゃないかって思うの」

マンダレイにとって洗汰君は、『助けを求める子供』だった。

その認識も、なんなら客観的に見た状況も……実質のところ、間違

いでも何でもなかったと思う。大人としても、親代わりとしても……ヒーローとしても。

でも、それが本当に冨汰君の望む形につながるのか、ふいに考えるようになった。

「あの子の心をどうやったら助けてあげられるのか……それを私は、2つあるうちのどっちかだと勝手に思ってたのよ。1から10まで全部、全力で助けてあげるか……あるいは、信じて見守って、待つているだけか……実際は、そんな単純なことじゃなかった。けど、簡単なことだった」

「……………」

「1から10まで助けてあげる必要なんかなかった……冨汰はそんなに弱い子じゃなかったから。でも、あと1歩のところまで、これからどうしたらいいのか……道がわからなくなっていたんだと思う。私はそれを、ただ冨汰を信じてみていることしかしなかった。そつとしておいてあげなきゃって……それだけで……私の方こそ、何も変わってない、同じことを延々と考えていただけ……冨汰はずつと、どうしたらいいのかわからないところで、1人で苦しんでいたの」

一般人を守って殉職した『ウォーターホース』。人々は、マスコミは……それを褒め称えた。

幼い冨汰君は、まるで、両親の死が賞賛されているように感じてしまった。

けど、心のどこかで、そうじゃないってわかってたんだ。そんなつもりで言ったんじゃないって。過熱気味な報道の表現に、幼い心で……ただ、両親を失った子供としての冨汰君は、どうしても耐えきれなかった、受け止める余裕がなかったんだ。

それも、徐々にわかってきていた。人々がヒーローを褒め称える気持ちだが、ヒーローが人々を守ろうとする気持ちだが、間違った物じゃないってことも、もしかしたらわかっていたかもしれない。彼だって元々は……両親というヒーローに憧れ、誇りに思う、普通の少年だったはずなんだし。

でも、認めるわけにはいかなかった。

ヒーローという仕事の、立場のせいで、一般人を守って戦って……結果、2人が死んでしまったことに変わりはないんだから。冼汰君を置いて……逝ってしまったんだから。

それが、強力な『個性』を使ったからだっていうのも、ある意味間違っではないから。

どっちも間違っってない。どっちも正しい。自分はどうしたらいい？

誰を憎めばいい？ 誰を認めればいい？ どう考えればいい？

いつそ意固地にすらなっって、それらの葛藤の中で苦しんでいた冼汰君。

彼に必要なだったのは……最終的に彼がどういう結論を出すにせよ、そつとその傍にいて、一緒に歩いてあげることじゃなかったのか。

辛い時に励ましてあげて、時に背中を押してあげて……ただ、彼を支えてあげる。

それこそが、冼汰君に必要なことだったんじゃないか……マンドレイは、そう思ったそうさ。

「冼汰は強い子よ。私は、冼汰ならいつか、このつらい現実を乗り越えてくれるって信じてた……けど、信じてるからこそ、私の方からも歩み寄ってあげることが、その手を取りに行っってあげることが、そして、受け入れることが大事なんだって……ようやくわかったの」

「信じるからこそ……自分からも……」

「触れちゃいけない、そつとしておいてあげなきゃなんて遠慮する時期はもう終わっってた。本当に……単純な話。私の番だったのよ、頑張るのは」

話を聞いているうちに僕は……不思議と、その話に聞き入っっていた。

いや、もともとちゃんと真面目に聞いてはいたんだけど……なんだろう、心に響く感じがして。

なんていうか……他人事とは思えない、この話をきちんと聞かなくちゃいけない……ような……

「冨太はもう、全力だった。だったら私も、やるべきことをやらなきや、全力でそれに応えなきや。もしそれが的外れなお節介でも、冨汰なら、笑ってでも怒ってでもいい、受け止めてくれるわ、私のお節介くらい。そもそも親なんて、子供とすれ違つて、喧嘩してなんぼでしよ？ それでも子供のために全力で何かしてあげるのが、親の役目なんだつて、ようやくわかつた」

「随分遠回りしちゃつたものだわ……手を伸ばせば、一步踏み出せばすぐに手が届くところにあつたのに、もうどれだけその声に応えずにいたんだらうつて、気付いた時は心底自分に呆れたわ。でも気づいたのなら……どれだけ遅くなつたとしても、今からでもその手を取つてあげなきや。もちろん、取つたら取つたで前途多難でしょうけどね……既に反抗期みたいな気配感じ取れるし」

「それでも私は怯まない。もう、覚悟は決めたの。嫌われても、ウザがられてもいい……あの子のために私にできることを、私がやるべきだと思つたことをやる。それが原因で喧嘩になるとしたら、全力でぶつかるし受け止める。それが親だから……それでこそ、親であると思ふから。あの子の全部を受け止めて、とことん一緒に歩いて行く。それが……私のあの子との、これからの生き方よ」

その後、トイレから冨汰君の『水の流し方わかんないー！』つていう悲痛な声が聞こえてきた辺りで……しんみりした空気が霧散した。

ああ、うちのトイレ、つまみとかじゃなくてボタンだから……それも、ウオシユレットとかいっぱいあつてわかりにくいし……初見の小学生には優しくなかつたか。

その後、少し話して……帰りの電車の時間が近いからつて、2人も帰つた。

あんな話を聞かされてしまったからかもしれないけど……帰り際、冨汰君と……手をつないでとかじゃないけれど、一緒に並んで帰つていくマンダレイの後姿は、どこか立派に『母親』としての立ち位置に立っているような……よくわからないけど、そういう風に見えた。

なんとなく、後ろ姿を見送りながら……僕は、マンダレイに聞かさ

れた話を反芻していた。

「……自分の番……か……」

信じているからこそ、自分からも歩み寄る。

やるべきだと思っただけをやる……全力で相手の気持ちに応える。

一歩踏み出せば届くところであって……あとは、自分の気持ちだけ。

覚悟を決めて……全力でぶつかって、受け止める。

……不思議と、すんなり頭に入ってきた。

いや、不思議でも何でもない。

これらの言葉が、すんなり頭に入ってきた理由に……まるで僕の頭が、もともとこれらの言葉を欲していたかのような、この感覚の意味に……僕はもう既に、気付いている。

ずっと前から、目の前にありながら……それでも、自分から一歩踏み出すことができずにいて、流れに任せるままで放置していた一つのこと。

あとは、僕の意味一つ。だというのに、何だかんだ理由をつけて、答えも、手も、出さずにいた。

……本当はどうするべきか……いや、どうしたいか。

とつくに自分の中で、答えなんて出ていたにもかかわらず……踏ん切りがつかずに放置し続けて……願わくば、最後の一線を向こうから声てくれるのを待っていた。

……それじゃ、ダメなんだ。

「お、緑谷じゃん、どしたのこんな廊下で突っ立って？」

「あ、栄陽院さん……戻ったんだ？ お帰り」

「うん、ただいま。……え、もしかして待ってくれてた？ ごめん、観光地とか行っただけじゃないから、お土産とかないんだけど……」

「え!? ああいや、そういうわけじゃなくて……ちよつとお客さん見送った帰りでさ」

「あ、そうなんだ。誰ともすれ違わなかったと思うけど……エレベーター別のに乗ったのかな？」

そんなことを話しながら、今丁度帰ってきた栄陽院さんは、鍵を取

り出して自分の部屋を開けて、『じゃね』と一声かけて入っていった。
僕も、自分の部屋に戻って、ドアを開けて部屋に入ろうとして……
既にドアが閉まって、栄陽院さんが中に消えた、隣室の入り口を見る。
(……待ってるだけじゃ、ダメ、なんだよね。……わかってる……わ
かった)

さつきまでと……いや、今までと、少しだけ違う感じになった自分
の心を自覚しつつ……僕も、明日以降に備えて……今日は部屋に戻っ
て、そのまま休んだ。

第5章 TS少女と期末試験 第91話 TS少女と期末試験

期末試験、筆記は無事終了。

手ごたえは上々。まず赤点ってことはないだろうと思う。なんなら、『デウス・ロ・ウルト』のバックアップが合った分、中間よりできたくらいだ。

緑谷にも聞いてみたけど、大体そんな感じだったみたい。この分なら、中間と同じく上位は狙えると見ていいかな、私達2人共。

そんな感じで筆記は終わったってことで……残る『実技演習』の方に、これから挑むわけだが。

各自コスチュームに着替えて、集合場所であるバス乗り場に集まった私達。

ここ最近の間に、コスチュームの改良を進めた者はそれなりに多くいたようで……以前見たコスチュームと違うデザインだな、つて見てわかる者が何人かいた。

口田がつけてるマスクや、上鳴が腕に着けてる……何かの機械っぽいガジェット。耳郎がつけてるヘッドホンに……切島も、こないだの件の時に気づいたけど、微妙にデザインとか変えてるな。

ちなみに私は、『個性』のコントロールと地力の強化に重点を置いていたので、そんなに変わってない。微調整した程度だ。

対して緑谷は……細かいところが色々と変わってる。工房にちよくちよく言つて、ラバーやパワーローダー先生、それにサポート科の発目とも仲良くなって、色々弄ってるみたいだった。

それでも、まず今できる改良にとどめていて、本番は夏休み入ってかららしいけど。

ともあれ、準備万端で試験開始を待っている状態なわけだが……ちと気になることが1つ。

「……………先生多いな……………」

と、ぽつりとつぶやくように言った耳郎は……どうやら、私と同じ感想を抱いたらしい。

その横にいる葉隠が、数えるようなジェスチャーをして……相澤先生を含めて、この場に8人もの先生——無論、全員プロヒーローである——がいることを不思議に思っていた。

相澤先生にマイク先生、ミッドナイト先生にエクトプラズム先生、パワーローダー先生にセメントス先生、13号先生にスナイプ先生か……

……嫌な予感がする。

何人か勘のいい連中は、そのことに違和感を抱きつつある中……いつも通りの気だるげな様子のまま、相澤先生が説明を始める。

「さて、それじゃあ演習試験を始めていく。諸君なら事前に何か知ら情報を仕入れて、何するか薄々わかっているとと思うが……」

「入試みてえなロボ無双だろ！」

「花火！ カレー！ 肝試しー！」

と、上鳴と芦戸の2人がハイテンションで答える。

2人とも、八百万に勉強教えてもらって、懸念だった筆記テストが大丈夫だったからこそそのテンションだな……こっちの実技の方は、上鳴いわくところの『ロボ無双』だって聞いているし、こっちはむしろ楽勝だどとらえている様子。

芦戸は……発言内容からして、すでに頭の中が林間合宿に飛んできてしまっているらしい。まー楽しそうに、ぶんぶん腕を振って、明るい未来に思いをはせているが……

「残念！ 色々あって今年から内容を変更しちゃうのさー！」

相澤先生の首元、マフラーみたいになつて捕縛布の下から突如現れた校長先生の一言に、2人とも、ビデオの一時停止のボタンを押されたかのような見事な硬直。

シヨックの大きさが伝わってくる……哀れな。

まあ、大体予想ついてたけどね……そんな単純な課題じゃないだろ

うって。

今の私達なら、個性の相性にもよるけど、ロボなんて対して敵じゃないし……そもそも相澤先生曰く、戦闘能力しか見れない『合理的でない』試験らしいからな、アレ。

「校長先生、変更って……？」

不安げに聞き返す八百万。

尋ねられた校長先生は、捕縛布をロープ代わりにしてよいしょ、よいしょ、と相澤先生の肩から地面に降りる。その背後で、滑って落ちないように支える手をスタンバイしてた13号先生の心遣いは流石というか、見た目がアレだから微笑ましい光景に見えなくもなかったというか。

まあそれは置いて……校長先生曰く、私の考えた通り、ロボを使った演習は実戦的ではないという話になったそう。

昨今の『敵』の活性化状況や、今年度特別カリキュラムの実施で大きく伸びている私達の実力も考慮し、対人戦闘・活動を見据えた、より実戦に近い形式の教えを重視することのこと。

「というわけで、諸君にはこれから……2人1組で、ここにいる教師1人と模擬戦を行ってもらおう！」

「先生方と……!?!」

驚いて聞き返す麗日。

もともと、麗日以外の黙っている面々も、同じような感想を抱いているようだけでも。場の緊張感が、否応なしに高まっていくのを感じる。

私としても……予想しないじゃなかったけど、やっぱりそうだと突きつけられると……驚きはともかくとして、緊張はせざるを得ない。

ロボはそもそも問題として見ちゃいなかったが……相手が先生方となると……その難易度は段違いどころじゃないからな。そりゃまあ……緊張もする。

細かいルールなんかはまだ説明されてないが、楽な試験ではないだろう、間違いなく。

なお、組み合わせは既に決定されているらしい。個々の抱える課題

とか、相性なんかを考慮して……その相手まで含めて、職員会議の中で独断で決めたとのこと。

発表された組み合わせは、以下の通り。

轟・八百万VSイレイザーヘッド
耳郎・口田VSプレゼント・マイク
瀬呂・峰田VSミッドナイト
蛙吹・常闇VSエクトプラズム
飯田・尾白VSパワーローダー
砂藤・切島VSセメントス
葉隠・障子VSスナイプ
芦戸・上鳴VS校長
麗日・栄陽院VS13号
緑谷・爆豪VSオールマイト

なお、オールマイト先生は、発表される段階になって突然現れた。そういう演出好きだよねこの人。

またなんか……安定してそうな組み合わせから、不安しかない組み合わせまで色々……

飯田と尾白、梅雨ちゃんと常闇みたいに、2人共真面目だったり冷静で、連携取る分には問題なさそうなどころもあるけど……反対に、緑谷と爆豪みたいに、『よりもよってこの2人かよ』って言うしかないようなペアまで……

先生方曰く、これらのペア全て、それぞれに抱えている『課題』つてもものがあるらしいんだが……それがわかりやすいペアもあれば、全然わからんペアもいる。

私の場合は、麗日とのペアで、相手は13号先生か……。
課題は……わかるような、わからないような……多分これかなってのは、一応あるな。

「以上の組み合わせで行う。それぞれステージを用意してあり、試験は10組一斉にスタートする。試験の内容については、各々の対戦相

手から現地で説明がある。移動は学内バスだ、時間がもったいない、速やかに乗れ。以上」

だつてさ。じゃ……移動しますか。

「よろしくね、永久ちゃん」

「おう、よろしく。13号先生も、よろしくお願いします。どうぞお手柔らかに」

「ははは、手は抜かないけどきっちりやらせてもらいますよ。よろしく、2人共」

☆☆☆

会場であるUSJに到着し——よりもよつてここかよ——試験開始前に、13号先生からルールの説明。麗日も私も、襟を正して聞く。

「それでは、今回の試験のルールについて説明しますね。まず、今回の試験ですが、普段ヒーロー基礎学などでやっているであろう戦闘訓練と同様、『勝利条件』……すなわち、あなた方が目指す目的が2つ、設定されています。1つは、このハンドカフスを僕にかけること」

そう言つて、13号先生は、手錠みたいな形のツールを取り出し、私らに渡してくる。

「これを、僕の体のどこにでも、2つある輪つかの1つだけで構いません、かけることができればそれでクリアです。そしてもう1つの目的は……決められた出入口からの脱出。すなわち、逃げることです」

「え……逃げてもええんですか？」

「はい、もちろんです。というのも……さつき校長先生が言っていた通り、今回の模擬戦は、可能な限り実戦を意識したものになっています。要するに、君達生徒は、僕ら教員を『敵』そのものだと思つて対処することになる……その場合、どういった対応を取るのが正解か」
「……なるほど。敵に遭遇して、そのまま戦つて勝てればよし。しかし、時には自分の実力では手に負えないような敵と遭遇することもある。その時にどうすべきか……ということですか」

「その通り！ その場合は、逃げて応援を呼ぶ、様子を見るなどの対応も立派に選択肢のうちの1つとなります。戦闘能力以外に、そのあたりの判断力や観察力もまた、試される項目です。……こう言っては何ですが、栄陽院さんは……流石にそのあたりの理解がありますね」
少し言いづらそうに言う13号先生。

麗日は隣で『どういう意味？』みたいな感じになってたが……私にはすぐ分かった。

……まあ、私とか緑谷とかは……そういう場面というか、ガチでヤバい敵に遭遇した頻度や回数が、結構なもんになってるからな……
ここUSJで最初の襲撃があつた時もそうだし……保須市でのヒーロー殺しの一件もそう。さらには、ついこの間の『オーバーホール』の一件も……

どれも、私達『有精卵』の手には余る敵との遭遇。交戦すること自体が得策とは言えず、結局……時間を稼ぐなりなんなりして、その場に駆けつけたプロヒーローに助けられた。もちろん、それが間違つた対応だったとかではないが。

USJではオールマイト先生が、保須市ではエンデヴァーとジーニストが(つてことになってる)、そして『オーバーホール』の時は、サー・ナイトアイとルミリオンが、それぞれ助けてくれた。

だからこそ、私は……私達は、手に負えない、どうしようもないような敵との経験をいくつも積んでいて……その場合に取りべき行動もよくわかつてる。

……もちろん、そのままでもいいわけもない、つてこともだが。

「それでも……こういう言い方は面白くないかもしれませんが、教師である僕達と、あなた達生徒の間には、思っているよりも大きな差があります。なので僕達は、ハンデとしてコレを装着します」

「……？ 腕輪、ですか？」

「重りです。腕輪型のね。かなりの重量が超圧縮されたもので、これを僕ら教員は、自分の体重の半分の重さだけ身に着けて模擬戦に臨みます」

なるほど……戦闘を視野に入れさせるためか。

自分の体重の半分ともなれば、人にもよるが結構な負担だ。大きく動くような戦い方が主体のヒーローには、かなりの負荷になるだろう。

……中には、そのくらいじゃハンドレにならなそうな人もいるが。

ガン無視できてしまえそうなくらいの怪力持ちのオールマイト先生とか、そもそも大きく動くことが少ないであろうセメントス先生とか……。

目の前で『わわっ、思ったより重い』なんて、ちよつとかわいりアクションをしながら腕輪を装着している13号先生を見ながら、この人はどっちだろうと考えるけど……わからん。

「そしてもう一つ。今回の試験、制限時間が当然設定されていますが……全員一律で、試験時間は30分間。何もできずにタイムアップになってしまえば、もちろん赤点、不合格です。ただ、基本的に途中で試験が終わることはないのです、最後の1秒まで諦めずにトライして、くすることを期待します。まあ、ドクターストップなんかの、どうしようもない例外はありますけどね」

その他、色々と質疑応答何かを経て……事前説明は終了。

開始時間が迫っているってことで、13号先生とは別れ、それぞれスタンバイに入る。

今回は生徒というか、コンビごと試験会場は違うが……全員共通して、生徒は会場の中心からスタートする。

それに対して、教員はどこからスタートしてもいい。出口を塞ぐってことで、ゲート付近に陣取ってるかもしれないし、奇襲をかけるために近づいてきている可能性もある。

そのあたりの見極め、対策、対応なんかも評価対象ってわけね。

作戦タイム、可能な限りのことは話して決めた……後は、精一杯やるだけだ。

「がんばろうね、永久ちゃん！ 私なんかじゃ、あんまり役に立てへんかもやけど……」

「そんなことないよ……いや、むしろそれが、私らの場合の『課題』かもだし、考えても仕方ないというか……とにかくよろしく、麗日。今

は試験に集中！ 絶対林間合宿行こうな！」

「うん！」

そんなやり取りを交わしたところで、アナウンスが響く。

リカバリーガールが救護係を兼ねて、試験監督をやってくれてるらしいから……彼女の声だ。

『それじゃ今から、雄英高校1年A組、1学期期末試験開始するよ！

レディ——………ゴォ!!』

第92話 TS少女と作戦会議、と緑谷の成長

麗日とコンビを組んで13号先生に挑むことになったわけだが……当たり前だが、真つ正面から突っ込んでいつてどうにかなる相手じゃない。

仮にも教員。自分達よりも格上の相手だし……私達の場合は、特に凶悪な相手だ。

というか、想像ではあるが……このチームアップといい、相手が13号先生なのといい……

「多分だけどき、私達への課題って……『相性が良くない相手との対処・連携』だと思うんだ」

「相性って……私と永久ちゃんが？ それとも、私達と13号先生が？」

「多分、両方。この組み合わせも、相手が13号先生なのも……私らの『個性』の利点を潰しに来てるとしか思えん」

まず、13号先生が相手である点について。

13号先生の『個性』は、USJの時にも見た『ブラックホール』……強力な重力の渦によって全てを吸い寄せ、分子レベルで分解してしまう、とんでもない『個性』だ。

殺傷能力という意味でも凶悪だし……それ以上に、炎だろうが光だろうがなんでも吸い込んでしまうので、こちらからの攻撃を届かせる手段がない、つてのがきつい。

当然ながら、そんなのを相手に私達は攻撃する方法つてもんが……ほぼない。

私は肉弾戦が主だし……最近では『エネルギーバインド』なんかの絡め手的な技も使えるようになってきたとはいえ、それだって接近戦じゃなきゃ効果を発揮しない。

麗日も同様だ。彼女の『個性』は手で触れなきゃ発動しないし……職場体験とワーキングホリデーで習った『GMA』を使おうにも、接近する必要がある。

……何でも吸い込んで塵にしてしまう『個性』を持つ『敵』を相手に、接近戦……

「危なすぎる……やんな？」

「その道に特化したプロならまだやれもするんだろうが……私と麗日の接近戦技能じゃ厳しいな。麗日はフィジカル的な部分が不安あるし……私は馬力には自信あるけど、戦い方自体は所詮我流の喧嘩殺法だから、プロである13号先生に通じるとはちよつと考えにくいし……」

『デウス・ロ・ウルト』の修行で前よりは格段に強くなっている自負はあるが、それでもなあ……相手の『個性』の強力を考えると、ここは自分の技能を過信していい場面じゃない。

仮に彼女が本当に『敵』だとするならば、接近して、しかし迎撃に『個性』を向けられ……回避ないし離脱に失敗した時点で死亡確定なから。

そしてこの試験、もう1つ私達にとって課題というか、枷になっている部分があつて……いや、おそらくこの部分をあえて突きつける目的で、私と麗日を組ませたんだろうな。

「そういうえば、さつきもそんなことゆうとったね。何なん？ 私と永久ちゃんの課題って」

「……多分だけど、『個性』の相性が悪い、って点だと思う」

「相性？ しかも『個性の』って……」

「私と麗日の『個性』ってさ……互いにその特性を生かしづらいんだよ」

例えば私の個性『オール・フォー・ユー』……もとい、『無限エネルギー』として皆に認知されているコレは、緑谷や八百万なんかと組んだ時にこそ真価を発揮する。

緑谷の場合は、疲労回復や身体機能のブーストって形でエネルギーを生かせるし、八百万なら、譲渡したエネルギーを使って物体を生産しまくることができる。

砂藤や飯田、B組の塩崎や取陰でも似たようなことができるかも。砂藤はパワーアップ、飯田はエンジンの燃料として、それぞれ糖分と

オレンジジュースの代わりに私の『エネルギー』が使えるのは、実験して既に証明されてるから。

塩崎の場合は、水と日光の補給で頭の『ツル』を生やし続けられるらしいが、私のエネルギーはその両方の代わりになるし、取陰の場合は、肉体の再生に際して体力を必要とする仕組みだから。

もつとも、燃料にせよ材料にせよ、本来必要となるそれを使った方が効率はいいみたいなんだが。あくまで私の『エネルギー』は代替物だってことだな。今んとこ。

そんな感じで、上手いこと『個性』の仕組みがかみ合えば、私の『エネルギー』は、その汎用性も相まって無類の強さを発揮するんだけども……麗日が相手だとそうもいかないんだ。

麗日の『個性』は、『無重力』^{ゼロ・グラビティ}。手の指先の肉球で触れることで、物体にかかっている重力をゼロにするものだが……この効果は、『エネルギー』を譲渡したところで強化されるようなものではないので……。

譲渡によつて麗日の身体能力やスタミナは上がるだろうけど、その……彼女はもともとのそれがそこまで優れているわけではないので、焼け石に水というか……懐に飛び込むでもできれば、そりゃ違つてくるだろうけど……。

同様に、麗日の『無重力』を私に使うことを考えても同じだ。私の体を軽くしたところで……まあ、多少は速く動けるようになるだろうが、劇的に改善するわけじゃない。『ブラックホール』の捕縛能力を逃れるのは難しいだろう。

それにそもそも、重さがなくなるってのはいいことばかりじゃない。

どこぞの格闘漫画で、『腕力×体重×握力∥破壊力』なんて方程式が出てくるくらいには（コレあつてるかどうかうる覚えだけでも）、重さってのは打撃による威力と密接な関係がある。

例えば、ボウリングの玉と、それと全く同じ大きさのゴム風船。この2つを同じ速さでぶつけたとして、どっちが痛いかなんて考えるまでもないだろう。

いかに腕力があれど、そこにある程度の『重さ』が伴っていないことには、衝撃力は激減してしまう。私の動く速度が多少上がったも……攻撃力のダウンは、それを帳消しにして余りある。

それに、重さを消されたものの動きって独特だからな……体重が消えて身軽に動けるってだけじゃなく、ちよつとの風や振動にも振り回されるようになるってことと同義だから……今までと同じ感覚では動けないんだよ。そんな点も、私に『無重力』を使うのが悪手である理由だ。

さつきボウリングの玉とゴム風船で話を例えたけど、この2つ、投げたところで同じ速さで飛んでくわけないからな……。

というわけで結論。私達の『個性』は、相性がよろしくない。組み合わせ使っても、かならずしもいい効果をもたらさない。

この状況で、さらにまともに戦うってことができない『敵』を相手に、どう戦うか……ってのが恐らく、私達が評価される部分なんだろう。

「……あかんやん、そんなん……え、詰んでへん？」

「詰んではないんだと……思う。それなら最初から、試験なんて形でやる意味ないし。ちゃんとかしらあるんだよ、この状況を打開する答えてるのは……それにどう気付くか……」

あくまで『テスト』なんだ、これは。だつたらきちんと、発想次第で達成可能な難易度になっているはず……こういう考え方で試験に臨むの自体、あまり褒められたことじゃないだろうけど……背に腹は代えられない。

この試験の目的は2つ。13号先生にカフスをかけて『確保』することか、もしくは……決められた出口から外に出るか。

出口の方は常にきちんとマークしてそうだよなあ……かといって戦闘で、カフスをかけられるくらい接近するのも難しいし……やっぱ、どうにか突破して脱出、が上策だろうか？

でも、それが難しいんだよな……補足されたが最後、よっぽど距離がありでもしなれば、『ブラックホール』に吸い寄せられてしまう。光すら飲み込む超重力から逃れるのは簡単じゃない。

「……そういや、このステージ自体や備品も自由に使っていて言ってたよな？」

「うん。ただ、あまり必要以上に施設とかを破壊するのは、ヒーローにふさわしいとは言えない、って普段からゆうーとるやん？ だから、あまり派手に施設を壊すようなのはダメかも……」

「無茶を言う……でも、バリエーション自体は富んでいるわけだから、そこはありがたいか」

幸いというか、ここUSJは、様々な災害や事故の現場で救出活動などについて学ぶため、色々な備品が用意されている。それらを……まあ、やり過ぎない程度に使うのも手か。

火災エリア、水難エリア、山岳エリア、暴風雨エリア……その他色々。ゆっくり見る時間はないから、何か、使えそうなものやできそうな作戦に目星を立てつつ急いで……

前みたいに火炎放射器……はないだろうけど、何か投げつけるか？ いや無理だな、何を投げつけても、結局吸い込まれちゃ意味ない。

それこそ、炎そのものを浴びせても無力化されるだろう。何せ、光すら飲み込む『ブラックホール』だ。投げつけるとか直接的な攻撃じゃなく、他のアプローチを考えるべきだ。

……そこまで考えて、そもそも、13号先生の個性についての情報が不足していることに気づく。

『ブラックホール』って名前は知ってるものの、具体的に何ができて何ができないのか、そのへんを私達は知らないのだ。

そもそも、先生が作り出してるものは、本物の『ブラックホール』である……はずがない。

そんなもん作り出した日にや大惨事だ。極小のそれであっても、『事象の地平面』から内側の全てを吸い込んで塵にするのが、ブラックホールという宇宙の災害である。

仮に指先程度の大きさでも……間違いなくこのあたり一帯は消滅することになる。サイズが小さくともそれだけのことが起こる。むき出しの重力特異点は、時空そのものを蝕むのd(略)。

限界があるとはいえ、ある程度でも狙いをつけて、狙った方向にの

み吸引力を発生させるなんて芸当ができること自体がその証明だと言える。アレはあくまで、似たような性質——なんでも吸い込んで塵にする——を持った別の何か、あるいはそれっぽいものというべきだ。

まあ、『光すら吸い込む』という性質からして、アレは本当に超重力、あるいはそれに匹敵する吸引力であるのは確かだ。それが本当にどっちなのか、もっと細かいところでどんな性質を持ってるのかによつてとれる策も変わってくると思うが……残念ながら、私も麗日もその答えを知らない。

(……緑谷がいればなあ……。あの人間ヒーローデータベースの知識量ならもつと……。13号先生の『ブラックホール』は光も吸い込む、つていう情報自体、緑谷に聞いた情報だし……。こういう時に使える知識とかも持つてるだろうに……)

こんな時……そう……

「緑谷(デク君)なら………え?」

☆☆☆

一方その頃、思わぬ場所、思わぬ場面でその名前を、存在を思い出されていた、その緑谷出久はというと……

「死・ね・やアアアアア!!」

「行っ……けエエエエエ!!」

目にも留まらぬ速さ、息もつかせぬ勢いで、自らの試験官であるオールマイトを相手に、爆豪との見事なコンビネーションでもって戦っていた。

「H A H A H A H A H A!! すごいじゃないかお2人さん、こう言っちゃなんだが、完璧に予想以上だ……おじさんびつくりだよ! くりや油断できないなこつちも!」

爆豪は、『爆破』による凶悪な攻撃力——オールマイトを相手にするには心もとないと言わざるを得ないが——に加え、驚異的な反射神経と、『職場体験』及び『ワーキングホリデー』で培った戦闘技能を生か

して攻める。

余程実りある時間を過ごせたのだろう。爆破そのものの威力はもちろん、大火力を出すまでに必要な時間も、一瞬で発揮可能な火力も、その扱いも、体育祭以前とは段違いに上がっていた。

一方の緑谷は、『フルカウル』による超人的なフィジカルに加え、『デウス・ロ・ウルト』の中で手にした格闘技能、サー・ナイトアイとの稽古でさらに錬度を増した先読みの技能——『直観力』、工房で改造を繰り返して強化したサポートアイテムの数々、そして、依然正体不明の『感情感知（仮）』の能力、それら全てを使いこなし、爆豪に呼吸を合わせつつ、一歩も引かずに立ち向かっている。

迸る緑色の火花、その力強い輝きが、以前に増して力をつけていることを如実に物語っていた。

時に炎で、時に黒煙で、時に閃光で視界を奪う補助攻撃もかみ合わせつつ、タフネスに物を言わせて、本当に30分続けるのではないかと思えるほどに攻め続ける爆豪。

スピードとテクニクで翻弄しつつ、的確に隙を突き、また爆豪の隙をこれも的確にカバーし、ここぞという所で痛打足りうる威力の拳や蹴りを叩き込んでくる緑谷。

大威力の『爆破』を叩き込まんとする瞬間、迎撃に動く拳を緑谷が迎撃して——それも力で正面から迎撃するのではなく、関節や重心などを上手く使って——強引に隙を作る。

爆発によってできた煙……煙幕の向こうから、爆豪が突っ込むのは方向もタイミングもずらして、『セラウエアスマッシュ・エアフォース』による空気弾が飛んできて呼吸を乱す。

『閃光弾』の光を腕で防御した直後、がら空きになった横合いから痛打が叩き込まれる。しかもご丁寧に、腕を防御に使ってしまったて対応できない方向から。

手加減しているとはいえ、オールマイトの拳を驚異的な反応速度で爆豪が回避し、その向こうから緑谷が突っ込みつつ……片手を使って爆豪の体勢を立て直させる。

その直後、緑谷の攻撃が防がれると同時に、立ち直った爆豪が攻撃

を加え……距離を取ろうと飛び退った先には既に緑谷が回り込んでいて挟まれる。

(いや本当に油断できないなコレ！ まあ火力自体はどうにかなるにしても、コンビネーションが凶悪すぎるぞ……熟練のプロヒーローチームでもこうはいかないってレベルだ！)

「君達……いつの間に仲直りしたっていうか、コンビネーションの練習なんてしてたの？ いや、生徒の仲がいいことは先生として喜ぶべきことだろうけどさ、最近まで全然そんな気配無かったから、ちよつとびつくりしたよ」

「仲直りだあ!? んなことしてねえよ気持ち悪いこと言うなオールマイト！」

「同じくです！ こんな感じの試験で、かつちゃんとのコンビだつて聞いてたらまあ……事前にちよつと何かしらしてたかもしれませんが、今日初めて知りましたし！ それに……」

「事前に知ってたからってんなことするわけねーだろうが、調子乗んなデク！」

「かつちゃん相変わらずこんな感じなのでそういうの無理です！」
(てことはコレ本当に即興のコンビネーション!? いや、どつちかつていうとそれを意識してるのは緑谷少年だけで、爆豪少年はあくまで自分が戦いやすいように戦ってるってだけみたいだし……流石に緑谷少年を巻き込む攻撃とかは避けてるし、最低限合わせるようにはしてるみたいだけど……つまり、厳密に言えばコンビネーションですらなく、上手いこと戦い方をかみ合わせてるだけ……!? どれだけ相性がいいんだこの2人!? たったそれだけでここまで化けるのか!)

試験前に開催された職員会議。

そこで、緑谷と爆豪のチームの試験官を任されたオールマイトに、相澤が提示した『課題』は……『仲の悪さ』だった。

幼少期からの因縁……微笑ましいとはお世辞にも言えないそれを持つ2人は、ことあるごとに対立しており——というよりは一方的に爆豪が緑谷に突っかかっており、緑谷はただオドオドしているのだが——
協調性のかけらもない。

緑谷は割と人がいいため、人付き合いは……得意ではないが避けるわけでもなく、友人もまあ、少ないわけではないし、気の置けない仲間も何人かできている。優しさや正義感の強さ、そして最近急激に実力を伸ばしている優秀さも相まって、彼をよく思う者は増え続けている。

爆豪は誰にでも強く出るが、その能力や生来の完璧主義な性格、意外と高い学力や、目的達成のためなら努力を惜しまない向上心、一度決めたことはやり遂げる責任感の強さなどのギャップもあり、切島を始め、そのあたりを評価し慕う友人は少なくはない。

2人共、それぞれであればうまくやれる、組んで戦える者はいないわけではないのだ。

ただ、この2人が組むということにおいては、正直、下手な先生でもさじを投げたくなるくらいには『最悪』だろうというのが多くの教員の見立てだった。

加えて性格の差による……予想される立ち回りの違い。これも大きい。

誰が相手だろうと逃げるなどありえないという、闘争心の塊である爆豪。この試験でも、『重りを装着する』というハンデは彼にとって挑発。まず間違はなく向かってくるだろうと予想できた。

対して緑谷は真逆だ。リカバリーガールの言葉を借りれば、彼にとってオールマイトは『神にも等しい』存在。憧れの対象であり、相対するとなれば最大級の脅威。すなわち、選択は逃げの一手。

(ぶつちやけ私もそう思ってたんだけどな……爆豪少年はともかく、緑谷少年に関しては、見事に予想を外された！ 様子を見つつとはいえ、正面から来るとは……しかも、それだけじゃない)

2人の息が抜群に合っている……だけではない。ただ『喧嘩しない』というだけでは……仮に、緑谷が自分の感情を押し殺して攻撃に移るといっただけであれば、ここまでの見事なコンビネーション(結果的に)は生まれないだろう。

(間違いない。2人共、足りないと思われる点の1つが既に改善されている！ 爆豪少年は、好戦的かつ直情的過ぎるあまり冷静さや

周囲への配慮を欠くという点が……。緑谷少年は、頭だけでもものを考えがちで、時に自分から飛び込んでいくことも必要だという積極性……すなわち、『考える前に』ではなく、考えてなお動くことを必要とすることがあるということへの理解が……。』

どんどん勢いを増していく、2人の生徒の攻撃をさばきながら、自分で考えて理解した内容に、改めてオールマイトは、静かに驚愕する。

『ワーキングホリデー』で行った先の、エンデヴァー事務所。そこで爆豪は、『職場体験』に引き続き、爆破そのもののコントロールと……。それに加えて、戦い方、動き方……。そしてそれら全てに関する心構えというものを教わった。

自分の管轄下にある市街地の全てを理解し、把握しているエンデヴァーは、日常のパトロール1つとつても、そのけた違いの実力というものをいかんなく見せつけた。

慚然とした態度で町を偉そうに闊歩しているだけ……。かと思えば次の瞬間、悲鳴が響くより早く動き出す。

炎を圧縮して超加速し、一切迷わず現場へ駆けつけ、犯罪・事件・事故が起こってから即座に……。時には『起こる前に』それを叩き伏せてしまう。しかもそれにあたって、犯人の逃走経路の制限や周囲の安全確保に至るまで、全てを冷静に考えて即座に最適解を導き出し、実践する。

自分が1つをこなす、あるいはどうこなそうか考える間に、全てが終わっている。あまりの完璧な仕事ぶりに、爆豪はもちろん、一緒に行っていた轟も何も言えなかった。

そこにいたのは正に、『No. 2』の名にふさわしい実力と実績を持つ、真正正銘の英雄だった。

『管轄の町を知りつくし、僅かな異音も見逃さず、誰よりも早く現場へ駆けつけ、被害が拡大せぬよう迅速に処理。野次馬がいれば怒鳴りつけてでも遠ざける……。以上全てを常にやる』

『ヒーローとして世に出るならばこれは基礎中の基礎だ。最初からすべてこなせとは言わん、だがいずれは意識すらせずできるようにならねばならん。1つ1つ積み重ねてものにしろ』

『間に合わなかった時に言い訳などできん。学生と違って、ヒーローが失敗した時に落ちるのは、成績ではない……人の命だ』
(要するに『全部完璧にやれ』『できるようになるまで、できること全部やって努力しろ』ってことだろ！ そんなんでいいならいくらでもやったらア！)

これだけ見事に『差』を、『事実』を見せつけられてしまえば、最早言い訳など効かない。するつもりもない。

自分に足りていなかったもの、見えていなかったものの存在を、その大きさを、歯を食いしばりながらも受け止めた爆豪は、今日にいたるまで必死に『積み重ねて』来た。

幸いと言つていいのか、自らもハングリー精神と上昇志向の塊であり、息子である轟焦凍に『霸道』を歩ませるべく指導に当たるつもりだったエンデヴァーの教育方針は、スパルタもスパルタ、そして実践的……というか『実戦』そのものであり、経験値は膨大だった。

持ち前の学習能力と相まって、それら全てを力に変えて、爆豪はどんどん成長していった。

(一方で緑谷少年……『デウス・ロ・ウルト』とやらで力に磨きをかけたのに加え、ナイトアイのところでも相当揉まれたようだな！ 動きの端々に、彼の『予測』の影が見えるよ！)

短期間に急激に実力を伸ばし、出来ることを増やしているながらも、それらほぼ全てを確実に自分の『力』にする形でものにしている。持て余しているもの、死蔵しているものを作らず、今の自分にできる最善の扱い方を熟知し、それらを組み合わせる最善手を導き出している。

勝手は違うが、サー・ナイトアイとルミリオンに叩き込まれた『予測』のノウハウ。それをさらに『直観力』と組み合わせることで、『見る前に動く』戦いをさらに昇華させ、

そこにさらに『感情感知(仮)』を組み合わせることで、対戦相手であるオールマイトはもちろん、爆豪の動きも常に把握して最善の動きを、連携を続ける。

それらを全て円滑に、最大効率でこなすことを可能にしているの

は、さらに出力を上げた『ワン・フォー・オール』と、その動きと戦闘を最大限支援するコスチューム、そしてサポートアイテムの数々である。

空気弾に指向性を持たせるグローブ、しっかりと地面や壁面をつかんでブレない靴の裏、打撃に威力を持たせつつ肉体を保護する、アーマー兼サポーター。驚異的にしてなおも『未完成』なコスチュームに搭載されたギミックの数々が、緑谷の戦いを強力にサポートしていた。無論、緑谷自身の努力あってこそそのものではあるが。

(しかし何より……この目！)

オールマイトは爆豪の爆破を受け流し、その隙を絶妙なタイミングで突くべく突貫してくる緑谷を迎撃すべく向き直って……その瞬間、緑谷と目が合う。

もう何度か既にこの試験中に見ている、緑谷の目。彼の、自分に向けるまなざしは……あがめ、憧れる対象を見るような目ではない。

驚いたことにその目は……今、共に戦っている爆豪と同じ、あるいは非常に近い目だ。

自分のことを、超えようとしている……向上心やハングリーさを宿した、力強く燃える目だ。

言っただけだが、緑谷が自分にこういう目を向けてくるということ自体、オールマイトにとっては驚きだった。リカバリーガールの言っていたことは、オールマイトとしても『あながち間違っていない』とすら思えるほどに、普段の緑谷は、オールマイトを尊敬、いやむしろ崇拜していた。

それが今は、敬意を感じないわけではないが、本質が違う。きちんと憧れた上で……その上で、自分を超えようとしている。

自分のことを……いつまでも輝き続ける太陽のような、至高の存在、絶対不可侵の『平和の象徴』ではなく、今は背中を見ているが、いずれば追いつき、そして超えていく壁として見ている。

(見据えてくれている、ということだ。私の、その先を……。自分が征くべき道を、未来を……。！ H A H A H A ……先を行く者として、こんなに頼もしくて、そして嬉しいことはない！)

ともすれば、不遜な考えになるのだろう。もう長いこと、国内外に名を知られる『平和の象徴』である自分に向かって、『超える』という意味を明確にするなど。

しかし不思議と、オールマイトは……憧れにキラキラと光を宿した目で美辞贅辞を並べられるよりも、燃える炎のような強い目で拳をぶつけてこられる今の方が、喜びは明らかに強かった。

何も語らずとも、彼の本気を、決意を感じ取ることができて、心が躍った。

(しかし、どうあれこの変化は予想以上だ……。順調な成長が自信につながったか……あるいは、ナイトアイが何か言ったのか? 『予知』のことを言ったわけじゃないと思うが……聞いていたら、緑谷少年100%顔に出るし、聞いてくるだろうし。また栄陽院少女か……? あるいは、他に何か、きっかけになる出会い、ないし出来事でもあったのかな……?)

「いずれにしろ……成長自体は喜ぶべきこと。ならば私も、全力で応えよう!」

「アア!? 何か言ったかオールマイト!」

「いや、何でも? H A H A H A……さてじゃあ、もうちよいギア上げていくぜ有精卵共! どこまでついてこれるかな!」

「上等だ! ついてって追い抜いてぶち殺したら!」

「かつちゃん! これ試験、試験だから! 単なる喧嘩じゃなくて達成条件あるから忘れないで!」

「うっせえわーってるわんなことは!」

成長は嬉しい。気になることもある。

しかし、それを喜んだり考えたりするのは後に回して……オールマイトは拳を握り、笑顔の裏で闘志を燃やす。また1つ……どころではなく、2つも3つも成長し、着実に自分のいるところに迫りつつある2人を導くべく……先達として、今は立ちはだかるために。

(あの頃が、遠い昔のようだ。周囲の、緑谷少年の成長を認められず、当たり散らして暴れ回っていた爆豪少年……まったく個性の制御が効かずに毎度自爆し、考えることもやることも危なっかしかった大変

だった緑谷少年……本当に、短い期間でよくぞここまで……)

『緑谷少年が大成する時は、きつとそう遠くない』

かつて、自分で言ったことだった。しかし、それをこうも目の当たりにすると、また格別に思うところがあるのも事実。

ならばここで自分が尻込みなどして、その勢いを衰えさせてはならない。残り火ではあるが、今ある力の、その全力でもって彼らの意思に応えようと、オールマイトは全身に力を込めた。

ここまでの彼らを見守り、育ててきた者として……最後までその背中を押してあげようと。

(……あ、でも私、実際はあんまり彼らの成長に関与できてない気が……エンデヴァーとか栄陽院君の関係者に任せっきりで……ま、まあそれはさておき……少なくとも今は！ この試験の試験官として！ どうせなら彼らの全力を發揮してもらって、それを見極めさせてもらおうでしょうか！ より一層、今後の糧になるようにね！ H A H A H A！)

ふと頭によぎった余計な考え、ないし残酷な現実は、とりあえず流して。

第93話 TS少女と13号

「おや、ようやく来ましたね。栄陽院さんだけか……麗日さんはどこかで隠れているのかな?」

「まあ、ご想像にお任せします。すいません、交渉事や腹芸が得意じゃないので、会話は最小限になるかと思いますがご了承ください」

出口付近で警戒しつつ待ち構えていた13号。

その眼前に……永久は姿を見せた。隠れている様子はなく、正面の扉を通って堂々と。

あまりに露骨すぎる『何か企んでいる』という気配に、ひとまず様子を見る13号。依然として姿の見えない麗日のことは、もちろん警戒しつつ。

「あははは、正直ですね……まあいいでしょう。時間はもう折り返しを過ぎてるのに動きがないから、ちよつと心配してたんですよ。このまま何もしないつもりかと思つて。こうして出て来たつてことは、何か作戦が考え付いたのか……今までは作戦会議をしていたんですか?」

「いえ、恋バナしてました」

「恋バナ!? 試験中に!? 何で!?!」

予想外の返答にさすがに驚く13号。

これも何かの作戦かとすぐに警戒するも、あまりにもしれつと答えられた上、どことなく気まずそうな、申し訳なさそうな雰囲気を漂わせる永久に、『え、まさか本当に?』と冷汗をかく。

「あー……えつと……ちゃんと作戦会議もしましたんで、大丈夫ですよ?」

(つてことは恋バナの方も本当つてこと!?! い、いや落ち着け……そういう作戦というか、こつちの集中を乱すための嘘かもしれないし……)

「あ、あははは……ま、まあプライバシーには立ち入りませんから大丈夫ですよ、ご自由に。話はその……盛り上がりましたか?」

「まあ、盛り上がったと言えば盛り上がったんですが……」

「……………」

「……三角関係って、思ったよりめんどくさいもんですね……」

「さんかくかんげ——!?!」

「はい、いわゆるトライアングルです。……ともすれば、四角形スクエアになり
ます。……」

「!?!?!」

「いや、現時点で下手したら既に……5、6……いや7……? 結構怪
しいんだよなああの人も……あと、あの子は……8……いや年齢的に
……まだいいか」

話が思ったよりドロドロし始めた。

何だトライアングルって。何だスクエアって。むしろ聞いたこと
ない。

そのあとと言った数字は何だ? 5? 6? 7? 8? 何の
数字だ。聞くのが怖い。

これ本当? 嘘? ていうかむしろ嘘であってほしい、フィクショ
ンであってほしい。割と無視できないトラブルなんじゃないのか、大
丈夫かコレ、ヒーロー科で何が起こっているんだ。

先輩、相澤先生、イレイザーヘッド何とかしてください、担任とし
て。いや正直望み薄だけでも。こんな問題あの人にどうにかできる
とは思えない。

そんな感じでいくつもの困惑に満ちた考え方が、13号の脳内に浮
かんで消える。

もちろん、全てブラフである可能性も高い、というか何度も言うが
そうであってほしいというのは13号もわかっているが、一旦頭に浮
かんでしまった、しかも妙に生々しい疑問が離れない。

「あ、ちなみに13号先生にお聞きしたいんですが。参考までに」

「な、何……?」

警戒しつつ次の句を待つ13号。何が来ても動揺しないように。

「ハーレム、ってどう思います」

「やめなさい栄陽院さん! たとえそれが仮に作戦の類だったとして
も、年頃の女の子がそんな、言っていていいことと悪いことってあります

からね！ 誤解されたらどうするの、もつと自分を大切にしなさい！」

半ば悲鳴じみたお説教を始める13号。最早これが本当かどうかなど頭になく、冷静な思考も8割方吹っ飛んでいた。目の前の美少女が発した、あまりに18禁な話題に頭が茹で上がる。

もしかしてミッドナイト先生が何か入れ知恵した結果変なことを覚えちゃったんじゃないか、とも思い始めていた。あの人18禁ヒーローだし。

なお、酷い誤解というか、冤罪である。1から10まで永久の自前の性癖なのだから。

しかし彼女もヒーローである。意識の中、確認できる範囲で何か不穏なことがあれば、即座に頭を切り替えて冷静になれるだけの能力を保持していた。

具体的には……ヒーロースーツに搭載されているセンサーが発した、電子音に。

「……！」

(やべ、気付かれたか?)

彼女は単純な戦闘よりも、災害時などの人命救助を専門分野、ないし得意分野とするヒーローである。ゆえに、その宇宙服のようなヒーローコスチュームも、それに対応した機能を持っている。

見た目通り『防護服』と言えるだけの防御力及び機密性があり、粉塵やガス、高温・低音の環境下でも活動できるようになっている。森林火災や、有毒ガスが発生した事故現場などでも、瓦礫の撤去や負傷者の救出などを行うために。

簡易的なものではあるが、そういった物質を感知するためのセンサーも備えており……その機能が今、反応した。

即座にクレバーな思考を取り戻した13号は、ヘルメットの端のディスプレイ部分に表示されている項目を確認して、驚く。

「これは……可燃ガス!？」

「バレちゃったらしやうがない！」

その瞬間、永久はポケットからライターを取り出し、点火して投げ

つける。

すると、それが落下するよりも、そしてもちろん13号が『ブラックホール』で吸い込むよりも先に、空气中に漂っていた、13号曰く所の『可燃ガス』……正確には、気化した燃料に引火し、勢いよく燃え上がる。

「ちよつ……燃え……」

しかし、爆発的に燃えはしたが、充満していた分が燃焼しただけで、数秒でその炎は収まる。

当然ながら、それだけの時間では、13号のスーツに遮断されてしまい、『ブラックホール』で吸い込むまでもなくダメージは通らない。ただしその燃焼の瞬間、永久……と、物陰に隠れていた麗日が、かなり大きな包みのようなものを放り投げて……それらは空中で破れて中身を……手あたり次第に詰め込まれたと思しき、紙くずや布切れ、木くずといった『燃えるもの』をまき散らす。

そしてそれらは、まだ消え切っていなかった炎に引火して燃え上がり——もともと燃料が染み込まされていたのか、勢いよく燃える——濛々と煙を上げる。

(……い……これが狙いですか!)

どのみち熱でダメージを受けることはなさそうだと思っていた13号だが、その煙で視界がふさがれつつあることに気づく。

しかもその直後、煙で見えないその向こう側で、ガガガガツ! と何か……硬い者が刺さるような音がして、即座に13号は煙の除去に動く。『ブラックホール』を発動させ、周囲を覆う黒煙を吸い込んで視界を晴らしていく。

すると、その向こうに見えたのは……

(やはり、栄陽院さんが何かして……あれは、何だ? ロープのような……いや、あれは……ザイルか! まさか、山岳エリアから持ってきたのか!?)

煙に紛れて永久は、13号の見立て通り、山岳エリアから持ってきたザイルとピック……断崖絶壁を登る時などに使う、命綱と、それを壁面に打ち付けて止める留め具のようなものを、繋げていくつも施設

の壁に投げつけていた。

強化した腕力で投げつけられたそれは、壁に深々と突き刺さっている。それらを足掛かりに、そこをそのまま登れそうなくらいに。

ただ奇妙なのは、本来の使用用途のように、上に向かって刺しているのではなく……横に、横切るように刺していることだが……即座に13号は、その意図についても見抜いた。

(まるで、出口に向かって……そうか、アレを伝えていくことで、僕の『ブラックホール』の吸い込みに対抗しようというわけですね……！ さっきの黒煙は、その準備のためのわずかな間の目くらまし……燃料と可燃ガスは、こちらは火災エリアから持ってきたのか。でも、そう簡単にはいきませんよ！)

出口近くまで投げられて刺さったピックとザイル。それを伝うようにして、永久は跳躍し、一気に13号の横をすり抜けるようにして出口へ向かう。

13号はすかさず『ブラックホール』の引力を向けるも、ごくわずかに引き寄せられるような挙動が見えるだけで、永久はびくともしない。そのまま、壁に打ち込んだザイルを伝って進んでいく。

しかも、吸い込みながら気づいたことが1つあった。

(ザイルを支えにしているにしてもあまりに引つ張りが弱い……そうか、麗日さんか……彼女の『個性』を上手く使われましたね)

(思ったより引つ張られない……やっぱり先生の『ブラックホール』、重力を操ってものを吸い寄せてるってところは本家本元と同じか！)

永久は跳躍の直前、麗日に触れてもらい、自分の重さをゼロにしていた。

その状態で進むことで、『重力』によって物体を吸い寄せる『ブラックホール』の影響下から外れることに成功していたのである。ものの重さそのものがなければ、いかに強力な重力であっても、吸い寄せることはできない。

もつとも、全く吸い寄せられないというわけではない。

重さがゼロということは、それだけ『軽い』ということ。それはつまり、風などにあおられやすいということだ。

例えば、『ブラックホール』によって、直接永久を吸い込むことはできなくとも、その周囲の空気などを無差別に吸い込めば、そこにできる空気の流れ……つまりは風に巻き込まれて、体重が軽くなっている永久も吸い寄せられてしまう。

それを防ぐために、永久はザイルとピックを使ったのだ。

よく考えられた作戦だ、と感心する13号だが、それでもまだ、この作戦には穴がある。

13号は、道半ば程まで進んだ永久ではなく、永久が投げつけたザイルとピック……その、出口付近に打ち込まれたものに集中して『ブラックホール』を向ける。

すると、遠かった分打ち込む力が足りず、刺さり甘かったのか、あるいは位置が悪かったのか……数秒ほど吸引をかけたところで、ピックが抜けて吸い込まれていく。

吸い込まれたザイルとピックはどちらも塵になってしまいが、しっかり打ち込まれていた分のそれは吸い込みを逃れ、壁に残った。

(狙いはよかったです、詰めが甘い。力が足りなくて、こうして引っこ抜かれてしまったては意味がありません。残念ですが、オマケしてあげるには少しミスが大きすぎました……ね?)

壁に残ったザイルと永久に『ブラックホール』を向けようとして……しかしその時だった。

——ピピツ ザアアアアアアア——ツ!

「なっ……!?!」

先程の煙によってだろう、施設に備え付けのスプリンクラーが作動し、視界を悪くするほどの量の水が周囲に降り注ぐ。そのせいでヘルメットの表面が濡れ、さっきと同じかそれ以上に13号の視界が悪くなった。

(っ……煙は、火災報知器を作動させる目的もあったのか! まずい、ヘルメットは撥水加工してあるけど、水滴量が多すぎて純粋に視界が

悪い……いや、でも、大体の位置でも吸い込み続けられれば、出口までのザイルがもうない以上、栄陽院さんもすぐには動けないはず……」
13号がそう考えた瞬間……無数の水滴の向こう側で、永久が動いた。

なぜか永久は、逆上がりでもするかのような要領で、ちようど上の足場の手すりがある部分に上がると、折角のザイルを放し、その床に両足をズン、とめり込ませるように突き刺した。その場に自分を固定してしまった。

そして……よく見ると、彼女はその体に、壁についているそれとは別に、もう一本ザイルを結んでいる。その先端は……先程まで永久と麗日がいた場所のあたりに続き……麗日がその先端を腰に結んでいた。

(ツ!!? まさか、彼女達の狙いは……最初から、栄陽院さんがゲートをくぐるのではなく……!)

13号はそこで、永久と麗日の作戦にきづいたが……もう遅い。

「麗日ア、行けエエエエエツ!!」

その瞬間、永久が思い切りザイルを引っ張り……その勢いで引っ張られた麗日——自身とザイルに『無重力』発動済み——は、『ブラックホール』でも捉えられないくらいに高速で13号の遙か頭上を通過し、そのままゲートに突っ込んで『脱出』した。

そして脱出後、ご丁寧に腰のザイルを切って、完全に内側とのつながりを断つ念の入れようだ。

「なるほど……栄陽院さんは自分も含めて、僕の目と足を止めるための目くらましでしたか……。いや、コレはやられましたね」

「13号先生が相手だと、そもそも『戦う』って選択肢がなかったですからね……こうでもしないと勝ち筋が見えませんでした」

『麗日・栄陽院チーム、条件達成!』

一拍遅れて、アナウンスが鳴り響き……試験終了を告げる。それを聞いて、ようやく気を抜けた永久は、床から足を引っこ抜いて、その場に座り込んで脱力した。

ゲートの奥に飛んでいった麗日は……トイレに走ったようだ。自身を軽くするのは負担が大きい上に、あの速さで投げ飛ばされたのだから……無理もないが。

ひとまず試験は終わったということ、13号からの『お疲れ様でした』という言葉を受けながら、永久は少し休んでから医務室に向かおうと決めたのだった。

(そういやさつき、準備中に……緑谷と爆豪もクリアしたって放送流れたな。オールマイト先生に勝ったのか……すごいな……カツコよかったんだらうな……リプレイ見せてくんないかな……。あーでも何か、リカバリーガールの声がちよつとあきれた感じになってたのが気になるけど……)

そしてすぐにそんな思考にシフトするあたり、永久はいたって平常運転であった。

余談だが、

「と、ところで栄陽院さん？　そ、その……さつき話してた、恋バナとか、三角関係とかなんとかって……アレ、僕を油断させるための嘘ですよね？」

「うん？　ああ、あれですか……ご想像にお任せします」

「ちよつと!?　明確に否定してくれないとその……流星に困るんですけど！　先生として、その……そんな特大の問題を投げっぱなしにされても！　ねえ！　栄陽院さん！」

「嘘っていうか、作戦のための冗談ですから安心してください。既存のストーリーにちよつとそれっぽく手を加えただけです」

「な、なあんだ冗談か……って、既存？　えっと、どういう……」

「……最近の漫画雑誌とかその類って、結構過激な上なのが多いですよ。どっかのラブコメとか、主人公1人に対して、脇役含め女の子がもう何人も同時に……最早モラルハザードっていうか、無自覚の

ままハーレム上等で引っ掛けまくって5股、6股状態っていうか……」

「あ、ああ、そういう意味ね……そっか、そういうのを参考に……なるほど、よかった。うん……よかった……ホントよかった」

「……………」

永久は、嘘をついた。

いや、嘘はついていない。確かに話した内容は『既存』のストーリーであるし、最後の漫画雑誌の例えは、何のつながりもなくただ昨今のラブコメについて語っただけなのだから。

しかし、『頼むからブラフであってくれ』とひたすら願っていた13号は、深く追求せず、明言されなかったにもかかわらず、『問題なし』として話を終えてしまうのだった。

☆☆☆

時は少しさかのぼり、別な試験会場にて。

『あー……緑谷・爆豪チーム、条件達成……ってことにしとくよ、しやーないから』

「あ、はい……ありがとうございます、リカバリーガール……」

「……………」

試験終了、合格のアナウンス。

待ちわびていたであろうそれを聞いたにもかかわらず……試験場に漂っている空気は、微妙、と言うしかないものだった。

さらに言えば、アナウンスのリカバリーガールの声も気の抜けている者であり……『ってことに』以降はマイクをこの試験場のみにしぼって流していた。

その理由は……今にもブチギレ寸前といった表情の爆豪と、気まずそうな苦笑いを浮かべている緑谷、そして、いつものスマイルがどこか引きつっているオールマイト……その3人の視線の先にある、あるモノが原因だった。

そこに落ちていたのは……金属製と思しき、何かの残骸。

小さい欠片のようなものだが、見た目に反してかなり重いのか、落ちたところの地面が割と深くまで陥没し、めり込んでいる。

ところで、この試験においては、教師たちは生徒達と戦う際のハンデとして、超圧縮した重り（デザインコンペで発目明のデザインを採用したものを）、総重量が自分の体重の半分になるように装着することとなっている。見た目のコンパクトさに反して、非常に重く作られているそれを。

……もうお分かりだろう。この『残骸』が何なのか。

悲劇は、1分ほど前に起こった。

およそ10分強に渡って、ほぼノンストップで壮絶な戦いを繰り広げていた、緑谷・爆豪チームと、試験官のオールマイト。

リカバリーガールが『こいつらハンドカフスカ脱出かって条件忘れてんじやないだろね?』と若干不安がっていた前で、緑谷が動く。

10分を超えてなおオールマイトに隙を見いだせなかった場合……体力の残量を考えて、流星に絡め手を取らなければならぬと判断していた緑谷は、事前に『どうしてもだめだと思ったら各自の判断で最善だと思おうように動くことにするから』と爆豪に確認を取っていた。

その上で緑谷は、自分が持っていたあるものを使った。

「かつちゃん!」

「あ!?! ……つと……!?!」

オールマイトにわざと見える位置で投げ渡されたそれは、確保用のハンドカフス。

やはり緑谷が持っていたのか、とオールマイトが納得する一方で、それを爆豪に投げ渡したという事実が多少なり驚きだった。てっきり、それをかける役目は……ルールとはいえ絡め手に通じるものの扱いは、爆豪が好まないゆえに、緑谷がするものだと思っていたからだ。何せ爆豪は、実技試験での確保テープすら使いたがらない男なのだから。今は幾分改善されているとはいえ、その我の強さ、プライドの高さは折り紙付きだ。

流星に息が上がり始めていた爆豪は、その直後……面白くなさそう

な顔をする、手にはめていた籠手を使って最大威力の爆破を放つ。オールマイトは、それを防御してなお、ほぼ無傷だ。しかし、流石に爆風とそれによる土煙、そして轟音で、視界と耳がきかなくなつた。もつとも、煙自体はパンチ一発で容易く晴らせるだろうが……何か嫌な予感がしたオールマイトは、警戒しつつ周囲の様子をうかがつていた。

すると、ガガガガ……ボボボボ……という音が、かなり離れたところで聞こえていた。

(……！ H A H A H A、こりや一本取られたぜ緑谷少年……ここに来て『逃げ』にシフトとは！)

すぐさまオールマイトは、拳の爆風で煙を晴らす。

するとそこには、誰もおらず……全速力で『出口』に向かって走っていく、あるいは飛んでいく2人の姿があつた。

ハンドカフスのパス。アレによって、いかにもこれをどうにかして使う……と印象付けた状態で、爆豪の爆破で目と耳を潰す。比類ない攻撃力を持つ『最大火力』を、目くらましのためだけに使う。

そしてそれと同時に、全速力でその場を離れて……『脱出』によるクリアを狙つたのだ。

逃げたことを責めるつもりもないし、そんなこともできない。きちんとしたルールにのつとつた行動である。

さらに言えば、残りの体力を鑑みて速やかに打てる手を打つたその判断力は、それ自体が十分に評価対象と言えた。

ハンドカフスの思考誘導と合わせて、見事な戦略だ。

だが、そう簡単にクリアはさせないとでも言うように、オールマイトは足に力を込め……アスファルトを蹴り砕くほどに力強く地面を蹴って跳躍。数百mの距離をゼロにして、一気に緑谷達に追いつき……その事実を2人を驚愕させ……

——バキン、ぼとつ

「へあ？」

「あ？」

「……アツ……」

地面を蹴った際、一気に足に力を込め過ぎたがために、筋肉が膨れ上がったのと……蹴った際の衝撃で……装着していた重りが壊れて外れ、落ちてしまった。

そして、今に至る。

「ふつつぎけんなアアアアア!!」

「あー……ごめん、ホントごめん」

「あ、あはは……し、仕方ないですよ。その……わざとじゃなかったんだし」

緑谷・爆豪ペア、期末試験結果……合格。

備考……試験官であるオールマイト教諭のミスによる反則負けのため。

なお、それまでの戦闘において、両者ともに実力は十分であることが確認でき、懸念されていた事項は一応の改善が見ることができたため、そのまま合格判定とする。

体育祭に引き続き、『望まぬ勝ち』で試験が終わってしまったことに……爆豪はただ、空へ向けて怒りの咆哮を響かせるのだった。

第94話 TS少女と試験終了……？

試験終了し、後は解散……ってなるのかと思ったんだが、私達は終了後、集場所だったバス乗り場に再度集合していた。

皆、どうやら大きなケガもなく……無事のような。怪我した者も、リカバリーガールの治癒で既に治ってるしな。

ただ、その時に見ただけでも……今回用意されてたあの仮設テントみたいなの、『リカバリーガールの出張保健所』になってたんだが……。

保健所？ 保健室じゃなくて？ 意味違ってくるよな……

ともあれそんな感じで、皆きちんと無事に戻ってくる事ができて、元通り整列している。

……まあでも……

「「………」」

試験結果まで無事だったわけじゃないのが残酷なところだが……

なんか、集場所の一角がお通夜ムードだ。理由は明白だが。

芦戸、切島、上鳴、砂藤の4人が……課題クリアできないままにタイムアップを迎えてしまったのである。

この試験、事前に『林間合宿に行けるかどうか』がかかった試験だというのは、相澤先生が大々的にアウンスしていた。そして、彼らはクリアできなかった。

……つまりはそういうことだ。

「皆……お土産話、つひぐ、楽しみに……うう……してる、から……！」
嗚咽をこらえて言う芦戸。

上鳴も切島も、普段の元気さ、テンションの高さが嘘のようにお通夜である。

砂藤も……なんか背中に影を背負って……重苦しい……。

悲痛だ……見てらんない。何て返すのが正解だよコレ……？

みんなの分まで楽しんでくるね、とか……いやコレは違うな。泣くな芦戸たぶん。

今も緑谷がどうにか励まそうとして……しかし失敗して上鳴に攻め立てられている。

慰めなんていらないと。どんでん返しなんて起こりっこないと。

コレはあれか、なんかもうやけくそでテンション変になってんのか？

などと考えているうちに、相澤先生がやってきた。全員、習慣で背筋が伸びる。

朝と違って全員が集合するわけじゃないようだ。来てるのは相澤先生だけだし。

何か連絡事項でもあるのかな？ あるんだろうな……いい内容じゃなさそうだが。

表情と声のトーンはいつも通りのまま、先生は続ける。

「えー……諸君、試験ご苦労だった。結果についてだが……残念ながら赤点が出た。したがって……」

林間合宿は全員行きます」

「どんでん返しだあ！」

またこのパターンですかい。

いや、よかったけども。皆で行けて。

先生によると、筆記は赤点なし（もう採点終わったのか）、実技の方は、課題を達成できなかった4人と……瀬呂が赤点だった。頑張ったのが峰田1人で、何もできなかったからって。

普通に不合格で赤点になるより恥ずかしいって、落ち込んだ。……ドンマイ。

予想した通り、あの試験は生徒個人に合わせた課題を設定し、また意図的に勝ち筋を残して課題と向き合わせていたそうで……その部分が足りないと判断されたわけだな、5人は。

で、林間合宿は元々『強化合宿』なので、赤点取った奴らにこそ励んでもらわなければならぬってことだそうさ。

「しかし、こう何度も虚偽を重ねられると信頼に揺らぎが生じるかと思っ！」

「わあ、水差す飯田君」

4人が喜んでる傍でそんなことを言ってくる飯田……と、穏やかに突っ込む麗日。どっちもいつも通りで結構。……疲れてる分、若干キレがないかもだが。

「まーいいじゃん飯田、誰も不幸になつたわけじゃないんだからさ」
「む、それはそうだが、コレはあくまで信頼感の欠如につながる故の問題であつて、不幸云々ではなくてな……」

「それを言つたら、そもそも私らがきちんと課題をこなして、それこそ教師陣の信頼に応えてればよかつた話だろ？ そこらへんについてもたらされる精神的な負担くらいは甘んじようぜ」

「！なるほどー理あるな……そうだな、これを機に一層奮励努力に励むこととしよう。求められているものに的確に応え、いやそれ以上の成果を上げることができてこそヒーローというわけだ！」

細かいところを気にする割に、割と簡単に納得する飯田。

……今の、自分で言うのもなんだけど割と暴論だった気がするんだが……まあいつか。

「ちよつとちよつと飯田くん！ 永久ー！ 何もうそんなところで景気の悪い話しないでよー、折角一緒に行けることになつたんだからさー！」

「そうさそうさー、それに俺達、行けることになつたからつて傷ついてないわけじゃないんだぞー！ 慰めろー、甘やかせー！」

と、芦戸と上嶋が……行けるとわかつた途端にこれか。現金なもんだ。

まあ、気持ちはわかるから無理もないけど……とか思つてたんだが……

「おい、まだ途中（きゅぴーん）」

光る相澤先生の目。一瞬で静まり返る一同。

あ、まだあったのね話……そういやもう終わりとはまだ言っていなかったな。

「今しがた飯田が言っていたことにもまあ、一理あると言えばそうだな。そこらへんは以後鑑みるよ……ただ、全部が全部嘘ってわけじゃない。赤点は赤点だ、お前らには林間合宿の際、別途に補習時間を設けてる。……ぶつちやけ学校に残ったの補習よりきついからな」

その宣告に、再びお通夜ムードに突き落とされる一同。

しかも今度は瀬呂まで加わって……ああ、痛々しい。

まあでも、行けないよりましだろ……大変なくらいは、うん、頑張れよ。乗り越えろ。Plus Ultra。

「合宿のしおりについては来週以降配る。そこに記載するスケジュールを参照すればわかるが……まあ先に話しとくか。基本、夕食後の自由時間とか睡眠時間の枠が削られて補習に充てられる」

「睡眠時間、削るんすか……?」

「それ、昼間きつくなるんじゃない……べ、勉強の効率とか、ほら……もつとゆとりを、ね?」

険しい顔になる砂藤。次いで上鳴が、どうにか条件を緩和しようとしてか、一応もつともなことを言ってみたりするが……しれつと返される。

「心配するな。多少負担にはなるだろうが、それでも最低限の睡眠時間は確保できるプランニングになってる。ただ、勉強を終えてから何もせずすぐに寝て、朝起きてまた勉強を始めるサイクルに努めればいいだけの話だ」

夢も希望もない追い打ちの宣告と共に。

毎日毎日仕事ばかりで趣味や遊びの時間がない、社畜みたいな生活習慣になるのか……

補習組が背負う闇が深くなっていく……心なしか常闇の黒影が元気になるような気すらする。

しかも恐ろしいことに、まだ『下』が用意されていた。

「ちなみにもしそれでも足りなければ、他の勉強でも睡眠でもない他の時間……レクリエーションの部分の削る。肝試しとか、花火とか

な」

「う そ だ ろ!?!」

ああ、芦戸が崩れ落ちた……。

さ、流石にここまでくると……『行けるだけよかったじゃん』って言うのすら……

ガチで補習組はきついだけの強化合宿になりそうだな……場所が学校か合宿所だけで、楽しい場面にいられないの事態は変わらなくなってくるから……

レク削減は……『そうならないように頑張れ』としか言えん、か……と、思っていたが、

「……と、言いたいところだが」

相澤先生、今度こそ話が終わるかと思っていたところで、さらに何かある様子。

補習組も、その他の生徒も、みたび視線を集中させる。

「赤点である以上、そういう扱いにするのが例年のことであるし、そうでもしなければならない状況にその個人個人が置かれているのは確かだ。が……ここでクラスの他の連中との足並みが乱れたり、仕方なくでも効率が下がるってのも、それはそれで完全に合理的とも言い難い。特に今年度は試験的なカリキュラムをいくつも実施している分、なるべくペースは乱したくない。なので……」

一拍、

「救済策を用意した。つまりは……『追試』だ」

「[!:]」

「コイツを受けて今度こそきちつと合格点を出すことができれば、その後、合宿前にいくらかの補講を行うことで、合宿日程中の補習授業は免除になる。もともと、この『追試』は自由参加だから、内容説明も含めて、あくまで受ける者に限った話ではあるが……」

「[!:]受けます!」 ↑補習組全員

ま、そりゃそうだろうな……ここで受けしないで、合宿当日苦勞する

方を選ぶって奴はいまい。

折角用意された救済策だ。がんばって通常日程での楽しい合宿を送れるようにやり切ってほしいものである。応援してるぞー、皆。

がんばるぞー、おー！ と気合を入れている芦戸達補習組、あらためて追試組を、皆、微笑ましい目で見守っていた……………1人を除いて。

「おい、まだ途中」

——きゅぴーん

微笑ましきの欠片もない視線と共に、静寂が戻ってきた。相澤先生、続きどうぞ。

ため息と共に、やれやれ、と話に戻る先生。

「まあ、やる気があるのは結構だ。一応全員参加希望ということで話は受け取った。が……………この『追試』について、いくつか注意点を含めた説明を今行う。お前ら全員、よく聞いとけ」

……………ん？ 何か今、相澤先生……………補習組だけじゃなく、私達クラス全員に向かってそんな感じのこと言った気が……………

というか、私らを帰さないで同じ話を聞かせるのは何でだ？ そもそもこういう話って、短い話じゃない以上、関係者だけ別室に集めてやる的なのが本来のやり方じゃ……………

「……………あの、相澤先生。俺達も一緒に聞くんですか？ いや、別に面倒とかそういうわけじゃないですけど……………」

「こういうのって、関係者だけを集めて話したりするものじゃないかしら？ その方が5人も、落ち着いて聞けると思うのだけど……………追試の話なんて、他人に聞かれないものでもないはずよ」

と、同じことを気にしたらしい尾白と梅雨ちゃんが質問する。

質問事態は想定内だったらしく、相澤先生も『そうだな』と返していた。

「普通ならな。ただ……………関係ある場合はそうはいかん」

関係『ある』？ 私らが？

誰かが訪ねる前に、今度は先生が回り込むようにして、

「それも今から話すから黙って聞いて。まず初めに、今回の『追試』についてだが……受けるにあたっていくつか注意点、ないし条件がある」

「追試に……条件？」

「そうだ。まず1つ目……この追試は、赤点になった者が対象なわけだが、受けるにあたって、試験と同じペアで挑むわけではない。上鳴と芦戸、砂藤と切島はそれぞれ別々に受けることになり……瀬呂が受けるからって峰田が受ける必要はない」

それを聞いて峰田、ガツポーズ。正直な反応である。

瀬呂がそれを見て微妙な表情になってたが、自分は何もできなかったのに加え、助けられた手前……何も言えないようだ。

瀬呂が最初に峰田を助けたからこそ峰田が動けた、っていうバツクグラウンドもあつたけど、他人を助けたからと言って自分が戦闘不能になっていいわけじゃないしな……そういう考え方が甘い、ダメだつていうのは、あの『個性把握テスト』の時に、緑谷が先生に言われたことだ。

「2つ目。この追試は……1人で受けることはできん。参加は2人1組とする」

「「!？」」

え、どういうことそれ……今、試験でのペアは使わないって言ったばかりじゃ？

しかも、それだと追試5人だから、誰か1人余るんだけど……

「3つ目。今言ったペアを作るのに際し……追試を受ける者同士が組むことはできない」

「「!？」」

しかもまた意味わかんない条項が……しかしコレ、2つ目の条件と組み合わせて考えると……

追試自体がペアじゃないと受けられない……でも、同じ追試対象者でペアを組むことはできない……ってことはつまり……。

「……追試対象者は、補習とも追試とも無関係な他のクラスメイトを巻き込んで、なんなら頼み込んで一緒に追試に出てもらわなきゃなら

ねえ、つてことか……」

「そういうことだ」

独り言じみた轟の言葉に、そしてそれを肯定した相澤先生の言葉に、ぎよつとする5人。

いや、5人だけじゃないな……もしかしたら『巻き込まれる』かもしれないっていう、クラスの他の面々もちよつと警戒してる。

うん、まあ……無理もないが。テストもう1回、しかも巻き込まれでやんなきゃいけないっていう可能性が浮上してきたわけだもんな……応援してるし、一緒に合宿楽しみみたいとは思ってても……その辺の道連れになるのもOKかって言われると……

それに、そんな条件で協力してくれる人を探すのが難しいっていうことを、追試組5人もまた理解している。突如として出現したハードルに、戦慄していた。

なるほどな……これがあったから、私達全員を残して話を聞かせたのか。

まあでも……

「もちろん、巻き込まれるだけってのは非合理的でもあるから、ペアを組むことになった相手には、この『追試』の分を追加の評価点として成績に加算することになるし、『フレックスタイム』の貯蓄に回すこともできる。講評やアドバイスも別個にもらえる。時間と労力は食うが、損にはならん」

この一言でやる気出す者が何人か出てきてるあたり、向上心豊かなクラスなんだよな、うちは。

空気が変わったのを5人も察して、誰に声をかけようか早くも考え始めたようだ。

……なんか芦戸が私に視線を送ってくるんだが……え、狙われてる？ どうしようかな……

しかし、さらにそこに冷や水を浴びせる我らが相澤先生。

「それと……一応言っとくが、間違っても暇な奴とか、単に仲がいい奴を適当に選んで声かけたりするなよ。追試のパートナーを誰にするか、よく考えて声かけろ」

その言葉に、何人が『え、ダメなの？』って感じの表情になったが……果たして先生、気づかなかったのか、意図的に無視してくれたのか……

「……お前ら、この追試つてもんをどうして自分が受けることになったのかをよく考えろよ。期末試験……一体自分の何が悪くて、何が足りなかったから赤点になったのか、どうすればよかったのか。そもそも自分の課題とは何か……そして同じようなことが起こった際、どうすればそれを克服できるか、その為に力を借りるべきは誰か……考えることはいくらでもある。これは『追試』……言うなれば、何かしら足りなかったがゆえに逃してしまった、期末試験の延長上なんだぞ」
苛立ち交じりではあるが、真剣なその先生の言葉に、はつとする者多数。

……つまりアレか。そこを考えるとところから、取り組む姿勢を要求されている。言うなれば……

「パートナー選びの時点から、すでに『追試』は始まっている、ということか」

と、障子。まさにそれだな……一気に重要度が増した。

追試組の5人、本気で頭を回転させて考え始める。

その様子を見て……まあ、先生も何かしら言いたいことがないわけじゃなさそうだったが……ひとまずは見守ってくれる判断を下したようだ。

「なお、期末試験同様、追試で何をするかは当日その時まで教えん。何が起こっても、何を要求されてもいいように備えておけ。そして、注意点4つ目、これが最後だが……日程についてだ」

と、話は続く。全員また聞く姿勢になったところに……これまた結構な爆弾発言というか、重要、ないし強烈？な情報がぶつこまれてきた。

『追試』の実施日程だが……開始は明後日の正午。そこから……翌日の正午まで、24時間の日程で実施する」

「二泊二日あ——!?!」

そんないきなり、しかも外泊って……しかも日程、近ツ！ 明後日

かよ!?

「ああ、でもあくまでそれが開始時間だから……移動時間考えて、集合は午前11時な」

しれっとそんな情報まで付け足してくる先生。

私ら一同、最後の情報が爆弾過ぎて何も言えん……つか、24時間かける試験って、何やらされるんだ……?」

「先に言った通り、内容は教えられん。ペアを組む相手が決まったら、明日の正午までに俺に報告すること。報告がない場合は棄権とみなし、補習対応とする。なお……今回の演習でコスチュームが破損した者は、速やかに予備への取り換え及び修理申請を行っておくように。特に追試者及び協力者は、早いところ直さないと間に合わなくなるぞ。以上だ、解散」

最後の最後にどでかいのをぶっこんで、その場は終了となった。さっさと帰る先生。

これは……とんだ延長戦が待ってたな……荒れるぞこれは、割とクラス中が最後まで……。

結局その後、解散直後から……教室に戻るまで、戻ってからも、ずっと5人の追試組は悩み続け……時折、緑谷とか飯田、八百万あたりの、分析が得意な面々に相談しながら、自分の『課題』を探っていた。

そしてその上で、放課後になるまでに全員悩みに悩み抜いて……それぞれが決めた、協力を要請するパートナーに対して、アプローチを行う。

ある者はOKをもらい、またある者は断られて他を探し……

「永久! お願ひ……私の追試、一緒に受けて!」

「芦戸か。ああ……いいよ、私でよければ」

とまあ、そんな感じで……放課後までになんか全員がパートナーを決めて、相澤先生に報告。明後日の正午から24時間の日程で、『林間合宿』の命運を……天国になるか地獄になるかを賭けた、勝負の『追試』に臨むことになった。

なお、ペアの組み合わせは以下の通りである。

上鳴・飯田ペア
切島・爆豪ペア
砂藤・障子ペア
瀬呂・緑谷ペア
芦戸・栄陽院ペア

さーて……思わぬ形で始まった、期末試験の延長戦。
一泊二日のお泊り演習で、一体どういうことをやらされるのか
ね、つと。

第95話 TS少女と追試験

(多くね? しかも、色々……)

追試当日……午前11時。つまりは集合時間。

一昨日の試験当日と同じく、バス乗り場に集合した私達なわけだが……そこに来た私が、まずパツと見の印象で思ったのが、そんな感想だった。

そこに集まってる人数が……予想以上に多い。

それ自体はしかし、期末試験の時も思ったことだけど……今回はさらに多く、そしてその多さが『異質』だ。何せ……

「何でB組が居……」

「聞いたよA組イ! そつちは追試の対象者が5人も出たんだつてエ!?! アハハハハハ、どおおうことかなあ!?! A組の皆は僕らB組よりずーっと優秀なはずなのに、あれれれれ、おかしくないおかしくない!?! アハハハハハゴフツ!?!」

セリフの途中で割り込んで来やがったB組のクレイジー野郎に手を叩き込んで(拳藤の真似)黙らせつつ……改めまして、何でB組まで一緒にいるんだよ?

今回の『追試』……A組とB組合同でやるのか?

どうやらあつちも聞いてなかったらしく、きよとんとしている者もいれば、逆になんかやる気出している者もいる。別な意味でやる気を出して騒いできたバカ者は今黙らせたが……

え? あ、物間回収してくれんの? ありがとう。

えーと確か、B組の……吹出君だったっけ? よろしくね。

で、あらためて見てみると……B組からは6人来ている様だ。つまりは、追試対象者はその半分……3人か。

……いや待て、違う。B組からは『5人』だ。

よく見ると……

「あれ、ヤオモモじゃん!?! なんでここにいんの!?!」

と、芦戸もそれに気づいて、B組の方に一緒にいる彼女……八百万に問いかけていた。

彼女は昨日の時点で、追試対象者の誰のパートナーにも選ばれていなかったはずである。なのになぜか、ここにいます。しかも……

それに八百万が『それは……』と答えかけたところで、

「私がお願ひしたからです。パートナーとしてこの試験に共に臨んでほしい、と」

それを遮って、隣に立っていた塩崎が答えた。

つまり、塩崎がB組の追試対象者の1人で……八百万はそのパートナー。

「マジかよ、クラスメイト以外もありなの!？」

「そんなん聞いてねえ……いや、俺達が気付けなかったってだけか。可能性でも気づいて確認すれば、先生は教えてくれたんだろうな」

驚く上鳴に、盲点だったとばかりに頭を抱える瀬呂。

そこにさらに砂藤と切島が、

「でもまあ……そこまで残念がることもねえだろ。それに気づいてB組から選んだところで、必ずしも有利になるとも限らねえわけだし……そもそも俺らは俺らで、きちんと選んで頼んだんだしな」

「そうだぜー！むしろそんなこと言ったら、折角頼んで引き受けてくれたパートナーに失礼してもんだろ。なあ爆豪?」

「知らねえ」

「コレだよ」

爆豪のいつもの感じはともかく、残念がっていた2人も『それもそうか』と納得していた。

そんな隠しルールはさておいて……B組からは、物間と、彼のパートナーであるらしい吹出、それに塩崎に……鉄哲と骨抜が参加のようだ。内、追試対象は、物間、鉄哲、塩崎の3人。

骨抜は鉄哲のコンビか……こないだ取陰から聞いたけど、彼がB組のもう1人の推薦枠らしいな。『個性』はたしか、体育祭で地面を柔らかくしてたアレか……

……どうでもいいが、瀬呂や飯田みたいに顔全部隠れるコスチュームだからわかりにくいな。

『ワーキングホリデー』で一度見てる塩崎はいいとして、鉄哲のコス

チュームは……なんか、自前の防御力を生かすためのシンプルなデザインの様子。……切島とコンセプトがまた被つとる。

吹出のは……マンガ、あるいは漫画家的なイメージか？ インク瓶っぽいのに加えて、その他大まかには動きやすさ重視のデザインかな？

で、物間（気絶中）だが……なんかフォーマルというか、正装って感じの服装なんだが……パーティーにでも出られそうな……。

何、『個性』が『コピー』だから奇をてらう必要がない？ って言ってた？ あつそう、ありがと塩崎。……てらつてないつもりなのかアレ。

「しかし、塩崎が追試って意外だな……頭も要領もよさそうなのに」「……買いかぶりです、栄陽院さん。私などまだまだ未熟……かつての失敗を、未だ生かすことができなかったがゆえの、この醜態です」？ どういう意味だろ……って聞くより前に、

「全員揃ったな？ それじゃ、これから試験についての説明を始める」相澤先生からそんな言葉が発せられ、全員背筋を正す。

あ、今まで放置してたけど、先生方ももう集合済みである。

で、こつちもこないだと同じように、人数多い……1、2、3……また8人か。

相澤先生にマイク先生、エクトプラズム先生にセメントス先生、スナイプ先生にミッドナイト先生……それに、私の試験官だった13号先生に……B組担任のブラドキング先生。

また、相澤先生の襟元から校長が出てきたり、不意打ち気味にオーライト先生がでてきたりは……しないか。しないといいな。内容にもよるけどさ。

「言うまでもないことだが、今回の試験は、各々自分に足りないものがある者が集められた『追試』だ。ただ闇雲にやってみぐれで合格貰ったところで意味なんぞない。常に自分の課題と向き合い、それをどうにかするか考えながら取り組みよ」

「はー」

追試対象者8人の、揃った返事。

「よろしい、では説明に……入る前にひとつ、言っておくことがある」
「今回、お前達追試対象者とそのパートナー達に加えて……この試験を一緒に受ける者がいる。そいつらを今、紹介させてもらう」

と、相澤先生と、ブラドキング先生も続く形でそんな説明が。

？ 他に受ける奴がいるって……どういうことだ？ A組とB組の追試対象者以外ってことだよな、今の言い方だと……

ブラドキング先生が、後ろに停まっているバスに向けて『出てこい』と声をかけると……どうやら今までその中に乗っていたらしい人影が2つ、バスを降りて私達の前に姿を現した。

それが誰なのかを目にして……私達のほとんどが『あ！』って感じの目になる。

何せ、2人のうちの片方が……よく知ってる奴だったもんで。

もう片方は知らな、い……？

知らない、けど……どこかで見たような気が……。

なんか、横で緑谷も、1人目を見た時に『あ！』って顔になった後、2人目の彼を見て『あれ？』って顔になってるし……どこかで会ったっけかな……？

そんな私達の心中を知ってか知らずか、相澤先生とブラドキング先生はそのまま紹介を続ける。

「今回、お前達と一緒に本試験に参加することになる2人だ。普通科からヒーロー科に編入を希望している……まあ、希望している生徒自体は今年は結構多いんだが……」

「その中でも特に成績が上位、言ってしまうえば最有力株の2人だ！

現時点での実力等の把握のため、今回一緒に試験を執り行う。では、自己紹介を。簡潔に」

そう促され、その2人は1歩前に出て……

「今回、一緒に試験を受けさせてもらうことになった……普通科、C組の心操人使です。体育祭とかで世話になった人もいますが……全力で臨むつもりです。よろしく」

「普通科D組、青山優雅……遅れて来た星の輝きで、ヒーロー科を照ら

しに来たよ☆キラッ」

……だそうです。

また何か随分と……変というか、濃いというか……独特なのが普通科に隠れてたもんだな。

☆☆☆

さて、そんなわけで。

上鳴・飯田ペア

切島・爆豪ペア

砂藤・障子ペア

瀬呂・緑谷ペア

芦戸・栄陽院ペア

鉄哲・骨抜ペア

塩崎・八百万ペア

物間・吹出ペア

心操・青山ペア

以上9ペア、18人の参加者——ほとんどクラス1つ分だな——が揃ったところで、あらためて説明に入るようだ。……ここまで長かったな。

なお、心操と……青山というらしい彼は、先生たちが言っていた通り、今現在普通科にいて、2年次からヒーロー科への編入を希望している生徒達の中でも、特に見込みがあるとされている2人だそうだ。ゆえに今回、現時点での実力の把握と課題の洗い出しのため、この『追試』の機会を利用することになったとのこと。

彼らにとつては、編入試験……ではないけど、それを受けるまでの準備段階、ないしアピールタイムみたいな扱いなわけだ。気合も入るだろうな、そりゃ。

……2人とも、表情からそれは読み取りづらいけども。

心操は相変わらずの仏頂面（そして寝不足気味を疑う隈で人相悪

い)だし……青山の方は、こっちはこっちでなんか……ニコニコ笑ってばつかでよくわからん。逆に表情とか感情が読めん。

発言も独特だし……なんか、色物感がすごい。ていうか、ナルシストか、もしかして？

あと、何で青山の方は見覚えある気がするのかまだわからん……まあいいか、今は。

「今回の試験だが、期末試験と同様に、教師その他相手の模擬戦だ。もつとも、形式から何からだいぶ違うから、感触は全く異なるし、場面場面で柔軟な対応が求められるがな」

(……………？ 教師……その他？ 今何か、変な言い方を……)

私……と、何人か、その言い回しの不自然さに気づいた者がいたようだが、止まらず説明は続く。

「今現在、ここには8人の教員がいるが……今回試験官として設定され、準備している人数はもつと多い。これから行く先の演習場^{フレイ}で、ここにいる面々と合わせて……総勢18人の試験官がお前達を待ち構えている」

「18人!？」

「俺らの人数と同じじゃないっすか……え、もしかして、今回は模擬戦……2対2でやんの？」

「違う。最後まで聞け。さて、この追試験だが……当然ながら諸君らに求められているのは、心操と青山はともかく……本試験でできなかったこと、こなせず未だ残る『課題』の克服である。そのためにお前らには、それぞれの課題にあった相手との模擬戦を行ってもらおう」と、ここまでならば期末試験と同様だ！ だが、この追試ではさらに厳しくいく……1段劣っている所から、合格した生徒達に追いつくのだから当然だな。さて、追試対象者達には、事前に紙の封筒を1つずつ配布しているが、持ってきているな？ それを今、開いて中を見てみる」

言われた通りに、私の隣で芦戸はその封を開け——っていうかそんなの貰ってたのか——中に入っているものを取り出した。それを横から覗き込んで見る私。

中に入っていたものは2つ。いや、厳密には3つかもだが。

1つは、名刺くらいの大きさの、白無地のカードが2枚だった。素材は……プラスチックか？

特に何も仕掛けとかはなさそうな感じだが……ど真ん中に大きく、『5』と『14』って数字だけがそれぞれに書いてあった。

もう1つは、地図みたいだ。コレは……さっき言ってた、『演習場φ』の地図か。

A4サイズでラミネート加工されているそれは、あちこちに数字とどうか、番号みたいなのが書き込まれている。コレは何を意味してるんだろうか？

数字は1から18まである……18、か。ってことは、恐らくこれは……

それに『φ』って確か……雄英の敷地内にある演習場の中でも、特に大きくて広い1つだよな。

「中に入っていた地図。そのあちこちに書き込まれている番号は……全て、試験官がいる場所を示している。それらのうち、同じく封筒に入っていた2枚のカード……そこにかかれた番号が、自分が挑戦すべき試験官がいる場所だ。その場所で待っている試験官のプロヒーローにカードを提示し、模擬戦を行う。それを……24時間の間にこなせるだけこなす」

「こなせるだけ……？ いただいているカードは2枚ですが、ひよっとしてそれ以外の番号も？」

「そういうことだ。お前達の手元にあるカードの番号は、あくまで『必ずこなすべき課題』を指示しているもの。それ以外の番号の試験官による模擬戦も、任意で受けることができる。その場合はカードを二枚とも提示し、任意での受験であることを示して受けるように。そして、それによって出した結果は……自分の評価に加算される」

「つまり、受ければ受けるだけ、アピールの場になると。それがプラスに転ぶかどうかは別にして」

「そういうことだ。ただし、他の人が受けている場合は無理だし……原則として『必ず受ける』奴が優先だがな。それと、それで無駄に怪

我したり、無様晒してちや逆効果だと思え。自己管理とか適切な現場判断ができてない証拠だからな。あとは、必須課題との間に順番の指定は特に設けないから、どういう順番でやってもいいが……その2つの課題が、明日正午……すなわち試験終了時点で、どちらか1つでも未達成の場合は、問答無用で赤点、補習決定だから注意しろ」
ふむ……まとめるとこんな感じか。

・広大な試験場内のあちこちに、1から18までの番号が割り振られており、それらの場所でプロヒーロー達が試験官として待ち構えている。

・追試対象者及びそのパートナーは、それらのうち、必ず受けるよう指定された2カ所を含め、制限時間内に回れるだけ回って課題、ないし模擬戦をクリアする。

・時間や体力に余裕があれば、指定された個所以外でもいくつでも受けていい。受ける順番は早い者勝ちで、既に他の者が受けていたら、順番を待つか他に行くこと。なお例外として、その課題が必須課題の者は順番を優先とする。

・制限時間は今日の正午から明日の正午までの24時間。

これらのルールの元、課題をこなすのはもちろん、できるだけ自分の成長や改善をアピールすることが肝要になるわけだ。そのためには、必須の2つに加えて、自由参加の他の試験も積極的に受けて積み重ねていくべきだろう。

その後、一通り説明した後で、相澤先生から『バスに乗れ、移動する』と告げられ、私達は全員同じバスに乗って目的地へ……『演習場φ』へ向かった。

バスの車内にいる間に、簡単に作戦会議？とかしたものの……相手がどんなヒーローで、どういう模擬戦をこなすことになるのかがわからない以上、対策なんてろくに考えられないので……私達の連携とかそのへんの簡単な確認に終始した。まあ、仕方あるまい。

そうして到着した『演習場φ』は……なんか、超大型のテーマパークみたいな外見だった。

というか、そのものなんじゃなからうか。各アトラクションも動いてるみたいだし……っていうかこの番号って、もしかしてアトラクションの位置に対応しているんじゃないか？　位置的に、そんな気がしてきた……

　　入場口から入って、それぞれ指定されたスタート地点に行く。

　　ここからだ……5番のアトラクション……もとい、試験官が近いな。誰が待ち受けているのかはわからんけど……だったら行けばわかるってだけの話だ。

　　芦戸も、色々ややこしいというか予想外な事態に戸惑っていたものの、覚悟を決めたようだ。これから24時間の間、合格へ向けて全力で戦い抜く覚悟を。

　　全ては、楽しい『林間合宿』のため……クラスメイト達との、楽しい夏の思い出作りのために。

　　カウントダウンだ。5、4、3、2……

『期末試験追試、レディー………ゴォー！』

　　あ、今回もアナウンス役、リカバリーガールなんだ。

　　じゃ……試験開始だ。5番のアトラクションに行こう。

第96話 TS少女と地下迷宮

「ねえねえ永久、どのアトラクションから回ろっか？」

「そのセリフだけ聞くと単に遊園地に遊びに来てる感じになるよな……まあ実際にアトラクションなんだけど……。ここから近いから5番だな。えーと、あそこにあるのは……『雄英地下迷宮』……迷路か」

「おお、ちよつと地味だけどテーマパークっぽい……っというか、アレ？　なんで場所と番号だけじゃなくて、アトラクションも知ってるの？　地図に書いてないよね？」

「雄英の施設である以上はデータベースに乗ってるだろ？　スマホでダウンロードして調べた。適宜地図と照らし合わせて見てこ」

「おー、心強い」

そんな感じで、特に急ぎはせず、かといってだらだらもせず、駆け足でその『5番』のエリアに行く、芦戸と私。

ほどなくしてたどり着いたそこには、検索した通り『雄英地下迷宮』というアトラクションがあった。

そして、入り口のところに待っていたのは……

「やあ、よく来たね芦戸君に栄陽院君。歓迎するのさ！」

「校長先生でしたか……」

「ま、また……!?!」

一次試験にて、見事に芦戸と上鳴を赤点に叩き落した、根津校長だった。

芦戸はトラウマ……とは言わないまでも、やはり前回のことがある以上、不安は拭えないようで……顔色が悪い。それでもやる気は消えていないので、大丈夫だとは思うが。

げっ歯類に怯えて後ずさる芦戸に構わず、校長は早速とばかりに話を始める。

「それでは早速、君達の必須課題の1つ目、この『雄英地下迷宮』で行う模擬戦の様式を説明するのさ。よく聞くように。……といっても、

迷路なんだからやることは1つだけだね。入り口から入って、出口から出てくる。これだけさ」

「……あれ？　今回は脱出一択？　ハンドカフスとかそういうのいいんですか？」

「ああ。今回のコレは『模擬戦』と銘打ってはいるものの、前回の試験のように直接的なバトルばかりではないのさ。あくまでそれぞれの生徒に自分の『課題』を見つめ直させることが目的だからね。ただ、全く僕が何も関わらないわけじゃない、適宜妨害を行うから、それらを突破して迷路から脱出するのが君たちの目的さ」

芦戸の顔色はまたちよつと悪くなった。多分、試験の時の鉄球クレーンからの崩落コンボを思い出している。

「障害物迷路ってわけか……。どんな障害物が出てくるとかは？」

「教えるわけにはいかない。ただ、障害物の中には戦闘を要するものも含まれる。その場合は壊して構わないよ。でも、それ以外の備品や、迷路の壁とかを壊すのはNGだ。減点対象、最悪失格になるから注意するようにね」

「なるほど……。迷路そのものを障害物として破壊するのはNGと」

「うん、さらつと普通にそういう発想が出てくるあたりに軽く戦慄してるのさ。まあ冗談だと思いつつ言うけど、2人共『個性』の加減を間違うとそうなりやすいから注意してね。故意でなければある程度は見逃すけど、迷路の壁に傷をつけたりして目印にするのはNGとさせてもらおうよ」

他にいくつか説明を受けた上で、私達は迷路の入り口に案内され、そこで一旦校長と別れる。私達の『妨害』を行う準備のため、別場所に行くとのことだ。

そして、入り口で待機していた私達は……。そこに設置されていたランプが赤から青に変わったタイミングで、迷路に入った。地下へ通じる、薄暗い階段を下りて。

中は、レンガや石材の壁で形作られている……。ように見えるが、実際はそうじゃないな。合金やその他の別な、強度的に問題がない素材で作られてるようだ。

壊そうと思えば壊せるレベルの強度でしかないが、それは禁止事項なので普通に歩いて進む。

「……芦戸。初めに言っとくけど、それやめた方がいいぞ。多分無駄だから」

「え、何で？ これって迷路の必勝法じゃないの？」

と、左手を壁につけたまま、その通りに歩いて行く……いわゆる『左手法』で迷路を攻略しようとしている芦戸に、声をかけておく。きよとんとして、不思議そうに聞き返してくる芦戸。

「入り口入ってすぐに、一番外側の壁に手をつけていけるならそれもありませんだろうが……多分、今回のこの迷路には通用しない。私ら、地上から階段降りて、そこからスタートしたろ？ そこから見える範囲の壁が、一番外側の壁である保証ないからさ」

例えば、さっきの階段降りた位置が、迷路のど真ん中の部分だとすれば。

そして芦戸が今手をつけている壁が、外側の壁……すなわち、入り口と絶対につながっている壁だとは限らないとすれば、意味はなくなる。

最悪、1つの区画とか柱の周りをぐるぐる回るだけになりかねない。

……そもそも、階段降りて始まった迷路だ。出口も同じように階段であり……一番外側の壁自体が、出口と一続きでなく、囲い以外の意味を持っていない可能性だってある。

「え、ってことはどうやってこの迷路攻略するの？」

「……地図もなし、必勝法も使えないとなれば……片っ端から歩いて探って出口を探すしかないだろうな。その過程である程度でもルートを覚えてもらえば……幸いというか、敷地面積からして、小さくはないが、べらぼうに広いつてわけでもない規模だと思う。あてずっぽうでも何とかかならずはないだろうが……というか芦戸、それを考え

——」

——がこつ、(ぎゅぎゅ)……

「……ん？」

ふと妙な音が聞こえて……芦戸と私は、同時に振り向いて後ろを確認する。

するとそこには、さっきまでは絶対になかった大きな空洞が壁にぽっかりと口を開いていて……

——ゴロゴロゴロゴロ……！

そこから、通路全てを塞ぐほど大きな鉄球が転がって出てきた。

「んなベタな!？」

インデオージョーンズかよ!? 何、妨害ってこういう感じですか校長!?

何か罨とか踏んだ感覚もないし……見てるだろコレきては。

「うわーん、また鉄球ー!」

「ネタっていうか仕掛けが古典的過ぎだろ……下がってる芦戸! ぶっ壊す! 勢いがつく前なら、フルパワーでならなんとか……」

『ああ、栄陽院君、そのギミックは『戦闘』には含まれないから破壊はNGだよ。逃走一択さ』

「ならなそうだから逃げるぞ芦戸!」

「ガッテン!」

っーかやつぱり見てたし、聞いてたな校長!

貴様ツ、見ているなツ!? ……ってネタやつてる場合じゃないって、逃げる——!!

その後、どうやら追尾機能がついてるか、あるいは校長が遠隔操作しているらしい鉄球にめっちゃ追い回され——曲がり角でカーブして追ってくるって斬新だな——ようやくそれが去ってくれたところで、一回休憩することにした芦戸と私だが……

「……ここまで歩いたルートとか、覚えてる?」

「全部忘れた……調べ直しだ」

しかし、それからしばらくの間……調べては妨害が入り、完全に、あるいはほとんど道がわからなくなつて努力がパアに、というのが繰り返され……否応なしに、私も芦戸も悟つた。

この『迷路』、運任せで闇雲に進んでちやダメだ。きちんと計画を練つて、考えて動いて攻略する必要がある。

恐らく、校長の……というか、試験の狙いはそこなんだろう。

「そっか……私、期末では何も考えずに闇雲に、壊される前に走れみたいなことしかできなかったから……結局道全部塞がつてタイムアップになつて……ここでもそれじゃダメつてことか」

「話聞いた感じだと、きちんと『勝ち筋』は残されてたんだろ？ 校長にも、壊すわけにはいかない場所とかあつただろうし……自分が乗つてるクレーンの基部とか、その近くとかさ」

「そういうことか……でも、迷路なんてどうやつて攻略すればいいの？？」 道全部覚えてられるほど、私頭よくないよ……」

「全体の広さや現在地もわからずにそんなことができるのは、プロヒーローまで含めてもむしろ少数派だろうな。うちのクラスじゃ、八百万なら何とかつてレベル……いや、全体の広さはわかるか」

地図を取り出して再度確認する。縮尺から考えて……広さ、形は……ほぼ四角形、一边は長くとも300m程度。広さ自体はさほどないな……まあ、遊園地にアトラクションとして置くには過剰だろうが。

ただ、似たような見た目の通路が多く、また傾斜のついた道や段差・梯子の上り下りがあつて上下移動があるせいで感覚をつかみづらいのが問題つてことだ。

マップピング……地図を書いて通つた道を記録すること自体は禁止されてないから、そうする手もあるが……それだつてもう何度もあつたように、妨害で位置がわからなくなるだけですぐに意味がなくなつちまうし……

「ゲームみたいに上画面から見てやればまだできる可能性あるのに……」

「んな無茶な。カメラでもなきや無理だろそんなん……いや、地下迷

宮なんだからあっても無理か。上から見るってことができないし。せめて何か目印になるようなものでもあればいいんだけど、壁も床もほぼほぼ全部同じ形なんだもんなここ……遠近感おかしくなる……」
高速道路とか、同じような景色が延々と続いてる場所を走ってたりすると、徐々に脳の思考能力や集中力が低下していく『感覚遮断』という状態になることがある。その感覚に近い。

普通の道路であれば、信号機とか特徴的な看板とか、適度な『刺激』がある分大丈夫なんだが……この迷路の構造に加え、よく見えないこの薄暗さがそれに拍車をかける……。

常に道を覚えて、集中し続けて攻略するのは至難の業だぞ……と考えていたところで、芦戸がはつとしたように、

「ねえ、それならさ……何か目印、ないし目標になるようなものがあれば、その……『マッピング』だっけ？ 地図、作りやすいんだよね？」
「そうだけど……この迷路ホント何も無いぞ？ ギミックは壊せないし……私も芦戸も、荷物は最小限にしてるから、仮に無くしたりした時のことを考えると、何かここに置いて行くのは……」

「それなら大丈夫、考えがある。……目印には、永久がなつて！」

「……は？ 私？」

「そう！」

どういう意味だ、と困惑している私に対し、芦戸は今思いついたらしい作戦を話していく。

今私達は、幸か不幸か、多くの道に通じている十字路に立っている。ここを基点にマッピングを行うという作戦だ。

しかし、歩きながら、歩いた道を少しずつ記録していった地図を作るのではなく、今言った通りここを『基点』にする。

ある程度歩いて道を調べたら、ここに戻ってきて、立ち止まった状態でゆっくり、なるべく正確に道順を記録して地図を書く。そしてそれができたら、また道を調べに行く。

その繰り返しで、ここを基準点にしたある程度広範囲のマップを作り、これ以上は難しいってとこまでやってから初めて移動する。そしてそれを、別な場所を基準点にして何度も繰り返すことで、マップを

埋めていくというものだ。

なるほど……今までは、来た道自体のマップはできてても、妨害でひっかきまわされ、その位置関係とか方角が分かんなくなつて結局おじやんになつてたけど、ある程度の塊を作れば……元々ある程度にしか大きな自体はない迷路だ。攻略の日の目も見えてくるはず。

でも、その目印が私つてのは？

「永久が言った通り……私達の荷物とかコスチュームの一部を目印に置いてつても、なくしちゃうかもしれない。行つた先で妨害にあつてここに結局戻つて来れなくなるかもだし。だったら、目印自身が場所を教えてくれればいいと思うの！ 遊園地のアナウンスみたいに、わかりやすく！」

「つまり、私はここに立つて待つてると？」

「そう！ そして、道を調べるのは私がやる。戻つて来れなくならない程度にだから、少しずつだろうけど……確実にマップを作つていけば、その分動ける範囲も広がるでしょ？ もし途中で妨害にあつたりして、道がわからなくてここに戻れなくなつたら、大声出すから永久もそれに答えて声出して！ それを頼りに私、ここまで戻つてくるから！」

……なるほど、悪くない手だ。それなら、歩きながらやるより確実性あるだろう。私自身が目印になれば、この場所を見失う確率も低い。

時間はかかるが……この『迷路』の試験は、特に制限時間とかは設けられていない。全体の制限時間である24時間つていう部分さえ破らなければ……極端な話、数時間単位で時間をかけることも可能だ。

欠点としては、私と比較して芦戸の負担が大きくなり過ぎることだが……

「いいんだよそんなの！ 元々私の試験なんだから……それに……」

「それに？」

「……私、頭あんまりよくないから……このくらいしか思いつかないもん。この作戦だつて……昔、家族で遊園地に行つた時に、迷子に

なってどうしようってなった時のことを思いだして作った程度のものだし……」

聞けば、パレードを見ている最中にはぐれてしまい、家族の居場所どころか、自分が今どこにいるかもわからなくなってパニックになりかけたことがあったんだそう。けれどその直前に行った、遠くからでもわかるくらいに目立つ、音も光も派手な、それでいて芦戸自身も気に入ったアトラクションの位置はわかったので、そこへ向かったら、家族と合流できたそう。

「だから、自分で考えたことくらい……ううん、自分でできることはとにかく何でもやってみて、経験を積んで色々考える材料にしたいの！ 小さい頃のことやヒントになって今回みたい、一応とは言え作戦思いつくなんてことがあるってことは、色々経験して知識にした分だけ、こういう時に作戦考えるのに有利ってことでしょ？ 私には、そ

ういう時の冷静さとかはもちろん……その辺の能力も、もともになる経験や知識も足りてない気がする。だから……こういう機会を生かしたい！」

「……なるほどな。わかった、その『目印』は私が引き受ける。芦戸はじゃあ、ここを中心にしてあっちこっちを走り回って調べて、少しずつ地図作ってこう。調べる時に無理はするなよ、もつと行けるけどこの辺で戻ろうかな、くらいにしておくのでちょうどいいはずだ。妨害とかくらくらく0になるのが一番もったいないし。まあ、そうになったらそうなったでまた調べればいい話だけだ」

「了解！ じゃあ、長期戦覚悟で行くってことで……行ってきますー！」
吹っ切れた……とは言わないけど、きちんとやるべきことを見据えて、それでいてなおやる気を燃やして取り組む姿勢を見せる芦戸。駆け足でルートを調べに行くその背中を、私は……同級生にこういう感情を抱くのもアレだが、ほほえまし気な視線と共に見送った。

この光景を見ているであろう、校長先生は、どんな風に思ってるんだろうな、なんて考えながら。

(どうやら、きちんと学ぶべきことは……少しずつだけ理解し始め

てるみたいだね。相澤君も、いい指導をしてきているということかな。けれど、それでも一度赤点になってしまったのは事実……取り組む姿勢と意欲、向上心は見る事ができた。ここからは実際に何がどのくらいできるかを見させてもらおうとするさ……期待しているよ、未来のヒーロー達！」

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

まんまと瀬呂君と分断されてしまった。

瀬呂君の性格を、とっさの動きの癖を、見事に利用されて……

今頃瀬呂君は、海難ヒーロー・セルキーと、そのサイドキックの人達を相手取っていることだろう。

必ずしもガチの戦闘ってわけじゃないから、やり方次第では勝ち筋はあると思うけど……それでも、プロを、それも複数を相手に1人でつていうのは苦しいどころじゃないはずだ。

だから、一刻も早く加勢に行きたいのに……この3人が、それを許してくれない。

「おっ？ 今もしかして、瀬呂のこと心配した？」

「っ!? な、何で……」

「ける……緑谷ちゃん、割と表情でわかりやすいもの。特に他人の心配とかする時はね」

「確かに。悪いけど……もうちよつと私らにつき合ってもらおうよ、緑谷！」

（梅雨ちゃんに、取陰さん……拳藤さんまで……3対1での足止め……厄介すぎる！）

「ごめん、瀬呂君。……合流、まだもうちよつとかかりそうだ……！」

第97話 TS少女と課題達成（ひとまず）

S i d e . 緑谷出久

瀬呂君と最初に向かったアトラクション……というか試験場というか……まあいいや。

そこは『アマゾンシップ』という名前の乗り物系アトラクションだった。

よくあるタイプの……コースに沿って動く船に乗って移動し、道中の景色とかギミックを見て楽しむという奴だ。添乗員さんが小粋なトークなんかを挟んできて受けを取ったりすることもある。

筏みたいな形の船に乗って、コースを一周する。船はコース上を自動で動くので、操作する必要はない。およそ15分ほどで一周するそうだ。

そんなアトラクションで行われる僕らの、というか瀬呂君の『試験』だが……もちろんただ乗っていればいい、なんてわけがない。乗っている最中にきちんとやることがあつて、その部分がきっちり『模擬戦』であり……瀬呂君の課題に通じていた。

ここの試験官を担当していたのは、海難ヒーロー・セルキーだった。梅雨ちゃんの職場体験とワーキングホリデー先であり、先の『オーバーホール事件』の際に共闘した事務所でもある。

18人つという動員人数にも驚いたけど、教員以外のヒーローもいるなんて……重ねて驚いた。

それはともかく、このコースにおける勝利条件は……『敵の捕縛及び護送』である。

このステージでは、セルキー以外にも、事務所のサイドキックなど動員していて、7人の『敵』がエリア内に潜んでいるらしい。それらの『敵』役を捕縛して船に乗せ、その状態でゴールするIIゲートにくぐるというのが達成条件だ。それで初めて『護送完了』扱いになる。

瀬呂君の個性である『テープ』……期末試験でペアだった峰田君と同様、拘束能力に定評がある個性であると言える。また、飛ばして巻

き取ることでも移動にも使用でき、応用幅は広い。

恐らくそれに関連した『課題』であり、それが期末でこなせなかったからこそ、ここでもそれを求められてるんだろう。

なお、一周15分かかるつてのはさつき言った通りだが、この試験の制限時間は1時間。

すなわち、船はオートで動き、このコースを4周する。その間に、セ ルキーを含め7人いる『敵』役のうち、3人を『護送完了』にすれば 達成だ。

だが、一旦捕まえて船に乗せても、ゴールのゲートをくぐる前に奪 還されて、あるいは逃げられてしまえば意味はない。また逆に言え ば、船がゴールする直前に捕縛して船に乗せ、そのまま達成、とかで も問題ない。できるならば。

要するに、船がゲートをくぐる瞬間に、船に乗せて捕縛できていれ ばいいわけだ。

また、僕らは常に船に乗っていないわけじゃない。

そもそも、僕らは船を降りて陸地や水路を歩いて、『敵』を見つけて 交戦、捕縛しなきゃいけないわけだからな……逆に船に乗っているの は、捕縛した『敵』の護送中、それを取り返されないように守る間だ けでも十分なわけだ……というか、むしろそっちの方がいいかもしれ ないな。

そんな感じで、さあ頑張ろう、と意気込んで出発した僕らだったん だが……開始から5分も経たないうちに、状況は大きく動いた。

お互いの死角をカバーしつつ、密林……に似せて作ったエリア内 を、『敵』を探して歩いていたんだけど……ふいに、僕の背後を見た瀬 呂君がはっとした表情になって、

「緑谷、危ねえ！」

そう言つて、僕を押しつけて背後に向けてテープを伸ばす瀬呂君。 とつさに僕もその視線を追いかけて先を見ると、そこにいたのはな んと……

「お前つ、B組の……」

「取陰さん!?!」

「やつほー、頑張ってるかいお2人さん？」

この間の『ワーキングホリデー』でも一緒になった、B組の推薦入学枠、取陰さんがいた。

いつものように、体にぴったりと密着する、煽情的な……って言えばそうなくらいのセクシー系なコスチュームに身を包んでいる彼女だが、そこには腰のあたりから上だけが浮かんでいた。射出された瀬呂君のテープを、ひらりと交わした姿勢で。

ていうか、何で彼女がここに……と思った瞬間、僕の腰に何か絡み付く感触があったと同時に……取陰さんとはまた、全く別な方向に勢いよく引つ張られた。

そつちに視線をやると、絡みついているのは……舌!! っていうか……

「梅雨ちゃん!? それに……B組の拳藤さんも!」

「はあ、梅雨ちゃんにB組の委員長!? おい、一体どうなってんだよ!」

「けろ、悪いけど話している暇はないから……緑谷ちゃんもらつていくわね。拳藤ちゃん」

「あいよ。よいしょつとおー!」

梅雨ちゃんが舌を引つ込めるのに合わせて、拳藤さんが『大拳』を発動し、持ち前のパワーで一気に僕のことを引つ張り抜いて……そのまま投げ飛ばして向こうの水路に落とした。

そこからは、水中がホームグラウンドの梅雨ちゃんに、あつという間に瀬呂君から遠く離れた位置まで運ばれて、その姿すら見えなくなってしまうた。

瀬呂君は、攫われていく僕を助けようとテープを飛ばそうとしていたけど、無数に分裂した取陰さんの体の破片が縦横無尽に飛び回ってそれを妨害し、結局無理だった。

そして、今に至る。

梅雨ちゃん、取陰さん、拳藤さんの3人を相手に、僕は今戦っている。

1人1人を相手にするのであれば、多分……戦闘能力では勝っているし、3人同時でも勝てないと思う。

けど、3人は必ずしも、僕と戦うというか、ノックアウトするような感じじゃなく……あくまで僕を『逃がさない』ことを目的に戦っている。いわば、足止めに徹している感じだ。

近距離戦で威力を発揮する『大拳』を持つ拳藤さんに、縦横無尽の動きと冷静な判断力、長い舌で中距離からの支援をこなす梅雨ちゃん、分裂させたパーツを飛ばして遠距離からちまちまといやらしく攻めてくる取陰さん……なんて厄介なんだ！ コンビネーションもばっちりだし！

というか、何でこの3人がここにいるのかわかってまずは聞いたんだけど……なんと、『ワーキングホリデー』だそうだ。セルキー事務所の。この、雄英の試験官をやる仕事の際のエキストラとして募集が……というか、直接梅雨ちゃんに話が持ち込まれたんだって。職場体験からのつながりで、どうかって。

さらにその梅雨ちゃんが、こないだの一件でつながりのできた取陰さんに声をかけ、さらに取陰さんが、戦闘の際のバランス的にインファイターが欲しいなっことで、拳藤さんに声をかけた。

結果、近距離、中距離、遠距離の3個性が揃った凶悪なトリオが結成されたわけ。

「緑谷ちゃんにも瀬呂ちゃんにも恨みはないけど、これもお仕事だから、許してね」

「それは理解したし、仕方ないと思うけど……僕をさらったのって、戦力の分断が目的？」

「それもくはないよ。けど、本命の目的は……瀬呂が期末の時にやらかしたっていう失敗をきちんと顧みて、反省点として生かしてるかの確認だつて……さー！」

インパクトの瞬間に拳を巨大化させ、かなりの威力にして殴りつけてくる拳藤さん。

受け流すように防御したおかげで、さして痛打にはなっていないけど、その合間に、あるいは援護するような形で梅雨ちゃんと取陰さん

の攻撃来るからやりづらい……

梅雨ちゃんの鞭みたいになる舌はもちろん、細かく分裂した取陰さんのパーツが怒涛のようにぶつかってくるのも……威力は大したことないけど、鬱陶しいし、視界も遮る……数が多すぎるわ死角から飛んでくるわで、『直観力』でもよけきれないし……

それに、さつきから……

(なんか取陰さんの体のパーツ、『バシッ』とか『ズドッ』って突っ込んでくるのに交じって……時々妙にやわらかい部分が『ぷによん』って突っ込んでくるんだだけ?! 狙ってる?! 狙ってやつてるコレ?! いや確かについていうかまさに、僕の集中力を削るには有効な手段だけども——)

「ふ——っ」

「ひよわああああ!?!」

耳に! 耳に息が! ぞくってなっあ痛っ?! 怯んだ瞬間に梅雨ちゃんの舌……そして間髪入れずに接近してきた拳藤さんの一撃があ痛あっ!?

さつきからこんな感じで、色んな意味で『いやらしい』攻撃とかコンボが多い……っ!

けど、そんなこと言ったところで言い訳でしかない。どんな攻撃であろうと通じているのは事実……『痛いところがあるなら突いていく』っていうのは、戦闘において常に頭に、冷徹に置いておくべき思考だって、相澤先生やターニヤさんも言ってた。

ひとまず落ち着け、動揺してたら思うつぼだ。

集中は切らさずに、かつ、動揺する原因になった事柄は考えないように……:そういうや、話がまだ途中だったな……:ちようどいい。

体勢を立て直して構えつつ、さつきまで喋っていた拳藤さんに問い返す。

「反省点って……瀬呂君のだよな?」

「ん? ああ、そうだよ。この仕事に当たって、私らも瀬呂と峰田の期末のVTR見せてもらったんだけど……瀬呂、峰田をかばってミッド

ナイト先生の『眠り香』食らってただろ？」

「自己犠牲の精神はヒーローにとつて大なり小なり必要なもののは確かよ。ただ、それで一時的に脅威をしのげたとしても、それが『次』に続かない、戦況を悪化させるだけの結果にしかならなければ、それは正しい判断だとは言えないわ」

『拘束系の能力の生かし方』とはまた微妙に別枠の課題だけど、瀬呂の場合はそのへんも重要な評価点なんだってさ。で、多少なりともそのへんを反省して、今回という『次』に生かせるようにしていたかの確認だったんだけど……残念ながら、緑谷攫われちゃったね」

っ……さっきのでマイナス評価になったかもしれないのか、瀬呂君……

確かにさっき、僕を突き飛ばしてテープを放つて、取陰さんから助けてはくれたけど、それまで瀬呂君が見張っていた方向がそれによつてノーマークになって、そっちから隠れてきていた梅雨ちゃんに僕、捕まっちゃったからなあ……あそこでの正解は、僕の背後をけん制しつつ、自分の周囲及び受け持っている範囲も疎かにはしない、つて感じの判断だったのか。

評価担当者であるセルキーもそれは承知しているはず。幸先の悪いスタートになったかな……

でも……

（大丈夫だ。瀬呂君なら……きつと挽回できる。彼はもう多分、課題自体には気づいてるはずだ！）

船に乗る前……何ならその前の移動中からの雑談の中で、そういう……『次に続かない自己犠牲』が間違いであり、失敗にしかならないことは、瀬呂君はもう認識していた。

奇しくも、入学直後あたりの僕もまた、その辺に関して同じように甘い考え方を持っていたから、よくわかる。そのことを、相澤先生から『個性把握テスト』で指摘されたんだっけな。

ただ、とつさの、反射的な動きの改善まではどうしてもできていなかった。そのせいで今回はこういう結果になっちゃったんだと思う。

連れ去られる瞬間に見えた瀬呂君の顔……はコスチュームのマス

クで見えなかったから、声だけだけど……すごく悔しそうな感じだった気がしたから。

多分、してやられたこと以上に……教訓を生かせず、同じ部類の失敗をしてしまったことを悔やんでたんだと思う。

そのことをセルキーが気づいているかどうかはわからないけど、ここからでも十分挽回は可能なはずだ。そのためにも、一刻も早く戻って合流しないと！

彼を信じないわけじゃないけど、だからって僕も何もしないでいて気が済むほど、僕も物分かりがよくはない。どうせなら、ここにいる足止め役の3人のうち、1人か2人でも捕まえて持ち帰れば——字面が酷いな、他の表現探そう——課題達成に貢献出来て、十分なりカバリーになる。

後ろ向きにばかり考えても仕方ない。瀬呂君もそうするだろうと信じて、今できる全力を尽くせ！

「……アレ、なんか面構え変わったけど……」

「けど……どうやら、逆境で逆に火がついちやっただみたいね。……ここから大変よ、2人共」

「みたいだね……体育祭優勝者が本気になったか。……上等！ 元々緑谷、格闘型のアんたとは一度戦ってみたいと思ってたんだ、挑ませてもらおうよ！」

「一佳ってそんなバトルジャンキーみたいなどこあったっけ？」

「単純な向上心だと思うわ。いずれにしても油断しないで取陰ちゃん。あの目になった緑谷ちゃんも本当に強いから。ぼーっとしてると……全滅もあり得るわ。警戒して」

「了解。しかし……よく見てんねー蛙吹、緑谷のこと。さすがはクラスメイトって奴？」

「……………けろ」

……なんか少し気になる会話をした気がするけど、まあいい。

皆、真剣にこの試験に挑んでるはずだ。だったら……多少アレなやり方で攻めてこられようとも構うもんか。僕もヒーローの卵として、今出せる全部で瀬呂君と一緒に戦ってやる！

「今までと同じ手は通じない、ないし対応されそうだな……よし、こつちも色々攻め方とか変えてみよう！ 今度はとりま……寝技メインとかでやってみる？」

「寝技って……ただでさえパワータイプの緑谷を相手にするのに、それは危険だろ……」

「いいえ、そうでもないわ。近接格闘の中には、上手く決まれば力がどれだけ強くても抜け出せない拘束技みたいなものもあるもの。リスクはあるけど……試す価値はありそうね」

「……なるほど、そういう考え方もできるのか。よし……わかった。私がサポートに回るから、その技と拘束は、蛙吹と取陰にまかせる。よろしく！」

「了解！」

……なんか、また別な意味で油断できない展開になりそうではあるけど。

え、マジで寝技でくるの……？

梅雨ちゃんは真面目に言ってるのかもだけど、取陰さん、ニヤニヤ笑ってるんだけど……明らかに邪な部類の考えを抱いてるんだけど。弄られる予感しかないんだけど!?

あーもう、上等だ！ 僕だって成長してるんだ、舐めるなよ！

この後、ホントに寝技メインで攻めてこられて……色々ギリギリになりながらも、どうにか勝った。足止め役3人の中からは、どうにか梅雨ちゃんを捕縛することに成功した。水中を自在に動ける彼女をここで捕縛できたのは大きい。

拳藤さんには、隙をついて逃げられてしまった。欲を言えば彼女も捉えたかったんだけど、まあこの際だ……贅沢は言うまい。

あと、取陰さんも逃げたけど……彼女の優先度は低かったのでよしとする。

体のパーツが分裂しちゃうような個性なんて、テープを使ってどんなふうにしたら拘束できるかって話だ。一部を縛っても他の部分が分離していくらでも逃れられるだろうから。

そんな感じでもまずは問題ないと信じていきます。
けど、感触が……梅雨ちゃんと取陰さんの体の感触が、色んな所に残って……。

前からとか後ろからとか、抱き着いたり上に乗つかるように密着してくるし……うう、そのへんも課題だよなあ……

そして瀬呂君は、かなり危なっかしくはあったものの、自分でも独自に色々と考えた上で行動し……僕が再度合流してからは、同じような事態は1回も起こさなかった。

これもまた、求められている『進歩』には違いない。なんなら、きちんと課題を認識しつつ、乗り越えようとしている努力がきちんと感じられる、くらいの評価にはなるかも。そう願おう。

そのまま、梅雨ちゃんを含め……どうにか3人を制限時間内に集めて『護送』することに成功。無事にセルキーからの追試項目、合格で飾ることができた。

☆☆☆

結構時間はかかったけど、どうにか『迷路』はクリアした。

校長先生も、今回の結果や評価点を早めに集計して示す、って言うてくれている。後はまあ……評価を待つばかりだな。やり切ったんだ、これ以上この項目に関して、私達がなんやかんや干渉できる点はない。信じて、待とう。

で、私達は少しの休憩をはさんでから、もう1つのアトラクション、もとい試験官のところへ赴き……

『条件達成！ これでもこの課題はクリアだ。急に細かい調整が必要になる悪条件でよくやった』

パワーローダー先生のそんなアナウンス。

よし、これでクリアだ……芦戸の『必須』課題、どっちも達成した。神経使ったけど……

なお、パワーローダー先生の試験は、入試や体育祭と同じロボを相手にした戦闘だった。

ただし、急所だけをピンポイントで破壊して壊さないといけないっていう条件付き。なんでも、爆発すると周囲に多大な被害を出す、危険な動力炉を搭載しているっていう設定だそうで。

これでまず、『追試』そのものの合格についてはますます考えなくてよくなった、けど……

「まだ続けるんだよな？　できそうな奴に目星つけて、色んな経験をこの機会に積むつもりで」

「そーゆーことっ！　疲れてるかもだけど、まだよろしくね、永久！」「大丈夫だよまだ、全然。しこたまチャージしてきたしな。さ、次どこ行く？」

「んー、そうだね……」

第98話 TS少女と『後半戦』

同級生に対してこんなことを考えるのって失礼かもしれないけど……芦戸とその後も試験をこなしていく中で、彼女の成長をどんどん目の当たりにして行つて、なんだか微笑ましい気持ちになつてしまつた。……今日何回目かな。

クラスでも知られる……というか、なんなら自他共に認める感じで元気いっぱい、ただしちよつと頭の部分が足りないところがある彼女だが、いくつもの『アトラクション』をこなす中で、きちんと『考えて動く』っていうことを学んでいっていたようだ。

『コーヒーカップ』を模したエリアでは、乗つていて大丈夫なカップとそうでないカップがあつて、不規則にそれらが入れ替わる仕組みだった。その状況下で、襲ってくる敵ロボに応戦する。

同じカップにずっと乗っていると、高温の蒸気が噴き出してきたり、カップが基板から脱落してがっしやんと転げ落ちたり、担当であるミッドナイト先生の『眠り香』が風に乗って流れてきたりする。

周囲の状況や敵の存在のみならず、異音、振動、風向き……適宜それらを察知してカップを移動しながら戦い続ける必要があつた。

いつ乗っているカップがダメになつてもいいように、常にどう立ち回るか頭において考え続け、ダメになったらどのカップに飛び移つてどう戦い続けようか、こんなことが起こつたらどう対処すればいいか……考えながら戦つて、とつきの事態にも隙を見せずに対応することができるよう。

また、邪魔にならないように、ロボ1つ壊すにしても残骸を飛び散らないようにしたり、適宜外側に吹っ飛ばすようにしないといけなかつた。

『観覧車』では、『ヴィランが仕掛けた爆発物を見つけ出して処理する』つていう、戦闘力には関係ないシチュエーションが用意されていた。

ただしこれ、細かい作業や集中力が要求される課題なのかと思いき

や、思いっきり肉体労働系の課題だった。

何せ、止まらず動いている観覧車を登って行って、爆発物が乗っている部屋に乗り込むってところまで自分でやらないといけないので。

しかもその後は、揺れに注意しながら必要な手順を踏んで爆弾を解体する必要がある。

その指示は、トランシーバーから担当のエアジェット——ここでも外部のヒーローか——が指示してくれるので、それを聞き逃さないようにしつつ進めるということだった。

なお、何でこのステージの担当が彼なのかというと、万が一観覧車を登っている最中に滑って落下したりしても助けられるようにってことで、飛べる彼が抜擢されたのと、彼は都市部での犯罪への対処にもよく参加しているので、こういう場面の対応も経験があるんだって。

彼はどっちかかっていうと避難誘導とか搜索側だけど、ノウハウは知ってるわけだ。

『トロツコライド』っていう名前の、文字通り線路の上をゆつくり走るトロツコに乗って移動するアトラクションでは、トロツコの上から降りずにスナイプ先生の狙撃を防ぎ続けるっていう課題だった。

事前にルート上の地形情報なんかを渡されるので、僅かな猶予時間の間に『ここは狙撃しやすいそう、要注意』『ここは隠れる場所が多い』『ここは遮蔽物が少ない』みたいな場所を洗い出して警戒し、それに応じて防ぎ、なるべく自分達およびトロツコそのものへの被弾の回数を少なくするっていうのが目的だった。

よく考えないとわからないような場所も多く、難題だったな……ゴム弾だから当たると普通に痛いし、それで動き止めたりすれば、狙撃だつてのに連射とかしてくるし……。

まあでも、そういう『狙われやすい場所を予想する』『敵の攻撃から乗り物や護衛対象を守る』っていうのは、ヒーローの必須技能でもあるか……。

さらに『お化け屋敷』では……なんかもう、おぼけていうかゾンビが、つていうかクリーチャーが襲って来た。敵ロボをそれっぽい形

で作った奴。

舞台になってるのも洋館だったし、脱出が目的だし……バ〇オハザードだぞもう……

もちろん、襲ってくる敵ロボ（ゾンビ仕様）はぶっ壊してOKなんだが、音を立てるとわらわら寄ってくるので、戦闘は極力回避しつつ、見つからないように進む必要があった。

で、ちよいちよい神出鬼没のエクトプラズム先生（の、分身）が襲ってくるからそれへの対処も必要だし、ゾンビロボはゾンビロボで、急に出てくるから心臓に悪いし……

強さは大したことなかった（エクトプラズム先生の分身の方が危険だった。色々と）けど……スリラーとバトルの両方で心臓と神経を酷使用する課題だった……

そんな過酷な時間を過ごした甲斐あって、わずか1日の間に芦戸の動きはどんどん良くなっていった。

いや、動きがってよりは、きちんと頭で考えながら体も動かすってことを覚えていった感じだったな……なまじそういうのが要求されるアトラクションが多かったせいもあるだろうが。

……こういうのもある意味、『追い込まれて成長する』……いわゆる『本能覚醒』なのかな。私達が『デウス・ロ・ウルト』でやってると同じ感じのそれ。

規模は違うとはいえ、本人のやる気も伴ってのことだし、なるほど成長につながってる。

……ひいき目が入っていないとは言わないけど、この分なら芦戸はもう、心配いらないうんじやないかな。期末で露呈した課題も……多少なりとも克服されつつあると思う。

結局その日は、休憩をはさみつつ7つのアトラクションに挑戦し……内6つをクリア。1つは落としてしまったが、必須じゃない奴なので大丈夫だろう。

中々のハイペースだったな……しかし、実りある時間になった。

なお、食事はなんと敷地内の売店が普通に使えたので、そこでパンと飲み物を買って普通に食べた。

何せ24時間の日程だ。サバイバル要素があるかもって予想してたから、何も食べるものがなくてもいいように、1日分とはいえ携行食料準備してきたんだが……いらなかったか？

「そういえばさ……私達はもう試験終わっちゃった扱いになるんだよね、コレ？ 必須課題は2つともクリアしたし」

「そうだな」

「……何でこの『追試』、24時間も時間取ってやるんだろう？ 今、えーと……19時42分か。開始から8時間も経ってないのに終わっちゃったのにな」

「それどころかフリーでもういくつも課題受けてるしな……他の連中が私達よりべらぼうに時間食つてるとも考えづらいし……けど、相澤先生が、そして雄英が意味のないことをするとは思えない」

「つまり？」

「何かあるんだろ。まだ……恐らくは、24時間っていう設定にしないきやいけなかった理由が」

もつとも、それを考えてもわからなかったけど……その他に気になつてることならある。

私はおもむろに、ぽん、と、胸ポケットに……そこに入っている、カードに触れる。

試験開始前、私達のアトラクションを指示するために配られたカードだ。先生の指示で、『無くしたり捨てたりせずに最後まで持つていること』とのことだったので、私が2枚、ここに入れて保管していた。

ただ番号を伝えるためだけにしては妙に大仰な用意というか……カード自体もやけにしっかりした作りだし……これ、何かあるよな、確実に。

☆☆☆

時は少しさかのぼり……時刻は、午後5時前あたり。

試験場の1つである、『シルク・ド・ゼンジャラス』というアトラクション……というか、完全にサーカス、あるいは見世物小屋のテント

といった感じの場所である。

機械仕掛けのものは何もなく、頑丈な骨組みを有するテントの中に、高さ1mほどの広く頑丈な円形のステージが置かれているだけの、まさしくサーカスの舞台といった見た目だ。

そのステージ上で、この『追試』参加者のうちで唯一、ヒーロー科に属していない2人……心操人使と青山優雅は、地面に倒れ込んで、あるいはうずくまっていた。

片や体力を使い果たし、片や『個性』の副作用である腹痛をこらえて。

周囲に散乱する、無数のロボの残骸に囲まれながら。

そのステージに『よっこいせ』と上がる相澤……イレイザーヘッド。ブラドキングもそれに続いて上がり、声をかけて2人の状態を確認する。

「お疲れさん。試験、無事に終わってよかったな」

「無事、ですかね……散々でしたけど……」

「ツ……まだ、僕は……僕の輝きは……☆」

既にどう見ても満身創痍でありながら、2人共、心は燃え続けている。

目を見た瞬間それを理解したブラドキングは、イレイザーヘッドと視線を交わし、互いにこくりと頷いた。

「確かにな、ここに至るまでに、必須課題2つを含む5つに挑戦。うち、達成できたのは1つだけ……試験として見れば失敗かもしれないが、それでも、ヒーロー科生徒を対象とする前提で設定された試験でここまで健闘したのは大いに評価対象だ。反省するなどは言わんが、そこは誇れ！」

「動きを見ていれば分かったが……戦いの中で失敗するたびに、きちんと学んでそれを次の戦いに生かしていた。基礎体力も、普通科である現状を鑑みれば十分な水準に達している。こちらで用意した『追加カリキュラム』をこなしたことを差し引いても、成長幅としては……まあ、合格ラインにはあるといい。そこらへんはむしろ、ここからの課題だな」

単純な評価に加え、激励すら混じった——相澤のは若干わかりにくい言い方であるが——講評をもらった後、心操と青山は、救護用のハンソーロボに乗せられて運ばれて行った。

それを見送りつつ、イレイザーは考えを巡らせる。

多少難易度を調整したとはいえ、ブラドキングが言った通り『ヒーロー科向け』に設定された試験内容を、それも立て続けにいくつもこなし……しかし2人は、何度も打ちのめされつつも、1度も弱音を吐かずに最後まで戦い抜いた。考えることも最後まで辞めず、常に頭を回転させて、最善の行動を模索し続け……そのうちの1つに至ってはクリアすらしてみせた。

彼ら2人に関しては、体育祭の時期から特に既に注目されており、アナライジユ謹製の『追加カリキュラム』による強化がなされていたため——『42人』のうちの、ヒーロー科以外の2人がこの、心操と青山なのだ——普通の普通科より動けることに不思議はないが、それでも素直に褒めていい結果だと言えた。

戦闘訓練もほとんど受けておらず、個性訓練も最低限、コスチュームもない。

そんな、前提が何もかも違う条件下で受けて出した結果だと思えばなおさらだ。

心操に至っては、戦闘向きの個性ですらないにも関わらず、イレイザーヘッド直伝の捕縛布を使った戦い方を磨き上げ、実戦レベルとはとても言えないものの、この模擬戦でもそれを発揮してみせた。

「あの2人は特にだが……他にも今年の普通科は優秀なのが多くていいな。鍛えがいがある……さて、どっちがどっちに編入してくると思う？」

「おい、気が早すぎだろうが。まだ試験前の準備段階だぞ……本決まりになるのは、夏休み明け以降の編入試験を待ってだろうが」

「それはわかるが、期待しても仕方ないだろう……あの成長速度なら、夏休みまでにはまだ伸びるぞ？ カリキュラムの精度を抜いて考えなくても、むしろあの2人が『編入確定』になるまで何も準備をしない、というのも非合理的じゃないのか？ 何、少し我々の手間が増える程度

だ」

「人のいいことで……とはいえ、有力株なのは確かだし、上手く使えばA組、B組の連中にも更に発破をかけられるな……おいブラド、夏休みの件……お前、ありだと思っただけか？」

「奇遇だな、俺も同じことを考えていた」

何やら意味ありげなことを話しながら、2人の教師は次にやるべきことの準備に移る。

「まあ試験自体は上出来、評価出来るものではあったが……あの様子ではこの後には参加できまい。残る8組16人だけで始めさせるでしょう」

「もともとコスチュームのない、各種訓練も積んでいないあいつらにはまだ荷が重いことはわかりきっていたからな。見る対象が少なくなつて俺らもやりやすい。アナウンスは任せていいか？」

「了解だ。なら、関係各位への伝達は頼むぞ」

☆☆☆

時刻はもう間もなく、午後8時になろうかという所。

『どこで寝泊まりすればいいんだろ？』『ホテルとかないのかな？』

ないだろうな』なんて会話を交わしていた私達の耳に、どうやら演習場全体に響いているらしいアナウンスが聞こえて来た。

ピンポンパンポーン、というありがちな電子音の後に、聞こえて来たのは……

『演習場にいる生徒達に通達事項がある。喋るのをやめてよく聞くように』

B組のブラドキング先生の声？ 通達って……何だろう？

『現時刻は午後8時だが、現時刻において、既に全ての対象者が、必須課題を含む複数の課題を達成済みである。よって、諸君らに『追試』として定められているカリキュラム自体は、既に終了している……そのため、これより諸君らには伝えていかなかったもう1つのカリキュラムに移行する』

「もう1つのカリキュラム!？」

「……まーた何かいきなり始まったよ……何やらされるんだろ」

こういうの好きだよな雄英……まあ、やる以上は必要なことだからやるんだろうけど。

言つてた通り、もう8時だ。売店も……8時閉店つて言つてたから、もう閉まった時間である。こんな夜更けから一体何を……？

訝しんでいると、不意にケータイが振動した。芦戸も同じようだ。

見て見ると、そこには学校のアドレスからメールが届いていた。

内容は……『追試後半戦・標的通知』……なんか不穏な文言書いてないかコレ。

そして本文には……

「え、ええ〜……!？」

「おいおい……マジかよ」

☆☆☆

永久の予想通り、アナウンスは演習場全体に響き渡っていた。

そして、同時に届いたメールの内容と合わせて……十人十色、それぞれ異なった反応を、追試の参加者達は見せていた。

焦る者、高ぶる者、冷静に戦略を考える者……各々の反応は一樣ではなく、しかし皆が、この事態への対応を迫られる。知らされていなかった、追試『後半戦』。

その課題内容は……至極単純。

生徒同士の、模擬戦である。

『今各自の携帯電話に送ったメールにある名前が、各自の対戦相手だ。今回の模擬戦は、期末試験同様、こちらで対戦相手を勝手に決定させてもらった。原則として、今日この『追試』でそれぞれが学んだことを生かして戦うことが求められるであろう相手を選定してある』

「マジかよ……ここにきて戦闘訓練……しかも相手、八百万達つて!」
「八百万君はもちろん、B組の彼女……塩崎君も相当な手練れだと聞

く。油断できないな」

「飯田さんと上鳴さんが相手……一筋縄ではいきませんわね」

「誰が相手だろうと、全力で当たるのみです……よろしくお願いいたします、八百万さん」

飯田・上鳴ペアVS塩崎・八百万ペア

☆☆☆

『勝利条件は、各自がそれぞれ持っている番号カードの破壊！ そのカードは数字が書いてある面がシールのようになっていて、それをはがして接着できるようになっていて。各自、体のどこかにそれを張り付けろ。張り付ける場所は自由だが、服などで隠れていない、外から目で見える場所に限定する。模擬戦の中で、相手のカードを破壊すれば勝利、破壊されれば敗北だ！』

「お、ホントだ剥がれた。これがターゲットってことね……。つていうか対戦相手……。物間って、体育祭の時のアイツかよ……」

「……ぶっ殺す」

「あーあ、やっぱり火について……。いや、割と誰にでもそんな感じだったなお前」

「ガーンだね……。あの怖い人が相手だつてき……。しかも、確か物間、体育祭で喧嘩売ったんだよね？ 目つけられてそう……」

「アハハハハハ！ 何を人聞きの悪い、尋常の勝負の中でのことだよ？ もしそれを持ちだして来たならそれはつまり相手の度量がその程度ってことだね！ まあ、油断できない相手なのは変わらない……。作戦詰めようか、吹出」

切島・爆豪ペアVS物間・吹出ペア

☆☆☆

『時間は今この時から、追試の終了時間である明日の正午までとする。いつ、どこで、どのように戦闘を行うか……そういったことは一切こちらでは指定しない。演習場から出なければ、全て自由だ。明るくなってから戦うもよし、暗いうちにさっさと始めるもよし。ひとまずゆっくり寝て休むもよし、相手が寝入っている間に動き出すもよし。正々堂々正面から仕掛けるも、奇襲をかけるも、全て諸君らに任せる。早い話が何でもありだ！ これを実戦だと思って臨め！』

「えげつねえルール出してきたな……障子、コレ実質、寝て休む選択肢とかねえよな？」

「そうだな。奇襲をかけられる可能性を考えれば、そんな無防備なこととはできない。ただ、休息時間をとることも重要だ……寝るにしても仮眠程度。最低でもどちらかは起きておくべきだろう」

「ああ、そうだな。それで相手は……体育祭で切島と戦ってた奴だな。色々被ってる奴と……もう1人は、地面を柔らかくしてたな」

「B組の推薦入学者だ……思考が柔軟で頭も回ると聞く。油断はできないぞ」

「おい骨抜！ こいつらどんな奴だっけ、トーナメントには出てなかったよな？」

「発動条件のある増強型と……パワーはあるけど本領は索敵型の奴だね。バランスのいい組み合わせだ……障子がいるから奇襲は困難。でも戦闘自体は接近戦主体になるな」

「つまり小細工はいらねえってことだな！ よっしや行くぜえ！

待ってるよA組イ！」

「……まあ、策としては間違っていないし。いいんじゃない？」

砂藤・障子ペアVS鉄哲・骨抜ペア

☆☆☆

そして……

「うわああ……A組最強の一角が相手かあ……。瀬呂だつてかなり強いよね……。どーしよ永久？」

「……無策で挑める相手じゃないのは確かだな。とりあえず休んどこ……。体力回復させないと」

「探して奇襲かけてきたりしない？ あ、いやあつちは索敵能力とかないし大丈夫か」

「……どうだろ。何か最近妙な……。いや、率直に言つてヤバい勢いで成長してきてるからなあ……」

「え、そうなの？ うわ……。ますます怖……」

「おいおいおい……。あの2人かよ。俺相性悪りーぞ……。芦戸は『酸』でテープ溶かされちまうし、栄陽院にはパワー負けするだろうし……。どうする緑谷？ つか、すぐ動くか？」

「……。いや、ひとまず休もう。あつちも疲れてるはずだし、索敵能力はないから、そんなに夜中に力を入れて攻めては来ないはず。栄陽院さんはエネルギーが続く限りは体力無限だけど、だからこそ逆に無駄遣いは嫌うはず。明るくなってからが勝負だ」

「そうだな……。戦い方や場所もできれば考えたいところだな。」

瀬呂・緑谷ペアVS芦戸・栄陽院ペア

(緑谷との、勝負……！)

(栄陽院さんが、相手……！)

(……思えば、訓練以外で……。ほぼ実戦形式でのガチバトルって、あんまりしたことないな。特に……。『デウス・ロ・ウルト』が始まって以

降は)

(示し合わせたみたいに、学校の戦闘系の課題でもぶつからなくなつた。もしかしたら……初めて全力同士での戦いになるかもしれない)

(緑谷の実力はもう、私が把握できる範疇なんかとつくの昔に超えてしまっている……一体何がどれだけできて、どれだけ強くなったか、もう全然わからない……でも、だからこそ……!)

(ここまで強くなるまで、最初の一步からずとお世話になつてたんだ……当然その強さも、いや、それが最近さらに強くなつてることよく知ってる。でも、だからこそ……!)

(こんなにも胸が高鳴る……心が躍る! 全力の緑谷に自分をぶつけられる、全力の緑谷を受け止められる……お互いの修行の集大成を見せられる、運命的なほどに最高のタイミングだ!)

(一步も引かない、引くわけにはいかない……全力でぶつかつて僕の全てを使って挑む! 栄陽院さんの全てを受け止める! それくらいできなきゃ……その先になんて行く資格はない!)

ある意味では罰当たりかもしれない考え。『追試』の主役であるはずの2人を差し置いて……激突の機会が巡ってきたことに、闘志を燃やす2人。

そのどちらもが、心のどこかで感じていた。

この、ある意味運命的なタイミングですらある戦いは……何かの1つの区切りになると。

この闘いを経て、自分達の関係……その何かが終わり、そして始まる気がすると。

第99話 TS少女とそれぞれの課題

「なるほど……やっぱり蛙吹もだったか」

「ける。でもびつくりしたわ……取陰ちゃん。休憩時間に入ったと思つたら、いきなり、緑谷ちゃんのことが好きか聞いてくるなんて」「あははは、ごめんごめん……中々聞ける機会ないもんだから、ついね。あー、わかつちやいたけど手強い恋敵多いなあ……」

はいコレお詫び、と差し出された、売店か何かで買ったと思しきファストフードを受け取りながら、蛙吹梅雨はモニターに視線を戻した。

試験明け、気分転換もかねてセルキー事務所に『ワーキングホリデー』に来た2人——来たのは拳藤もだが、今ここにいるのは2人である——だが、両名にはある共通点があった。

同じヒーロー科に在籍する……蛙吹にとつては同級生である、緑谷出久という男子生徒を、異性として意識している、あるいは好いている、という共通点が。

付け加えて言えば、そのきっかけになったのも、どちらも『敵』から助けられ、それをきっかけに意識していつて徐々に好きになった……という点も似ていたが。

今2人が見ているのは、昨日の日中に行った『追試』の最中、自分達3人が緑谷の足止めをするために戦っている場面を記録した映像である。戦闘の振り返りを行うための資料として、セルキー及び雄英側からも許可をもらって見返しているのだ。もう何度も。

実際に戦っている身ではあるが、こうしてあらためて映像で見直すと気づける点というのはいくつもあるものだ。

そして蛙吹も取陰も、見るたびに……映像の中でもわかる、緑谷の戦闘能力の高さに舌を巻く。

「こうして見るとさ、緑谷が最初弱かったとか信じられないんだけど……蛙吹はクラスメイトだから、緑谷の入学当初のこと知ってるよね？ マジでそうだったの？」

「そうね……お世辞にも動けるとは言えなかったわ。戦術眼とか度胸はあったと思うけど、『個性』も全く制御できてなかったから、『個性把握テスト』も最下位だったし。でも、USJの事件の前後くらいからかしら、急激に強くなっていたって……体育祭では、クラスメイトの大半が驚かされたわ」

「1ヶ月ちよつとくらいでつてことだよねそれ……何度聞いても信じられないわ……今にしても、入学から4か月経ってないのに、こんな動きするようになるなんてね……すご」

画面の中で緑谷は、驚異的な反応速度で、四方八方から襲い来る取陰の体のパーツをよけたり弾いたりして防いでいる。それも、全部防ごうとするのは効率が悪いとして、移動の邪魔になるものや、急所あるいはその近くに当たりそうなものだけを選んで。

それに紛れて飛んでくる蛙吹の舌をも難なくかわし、それらを援護射撃に接敵した拳藤の拳も、余裕を持って迎え撃つ。

見ていると、攻撃の苛烈さゆえにこちらが押しているように見えなくもないが、実際には全くの逆。接近戦では完全に拳藤を手玉に取っていて、その上で蛙吹と取陰の援護攻撃もさばききり、痛打になる攻撃をほとんど浴びずに戦い続けている。

拳藤は女子だからに、『個性』を生かすために格闘戦技能を相応に鍛え上げており、『大拳』から繰り出される一撃は威力的にもかなり強力なのだが、それでも緑谷には全くと言っていいほど通じていない。全て防がれ、流され、酷い時は動く前に出足を潰されていることすらあった。

ただ時折、ドキツとしたような表情になってわずかに隙を見せることがあり、その時にまれに拳藤の拳や蛙吹の舌がクリーンヒットすることがあった。

その時は大体、意図して取陰が、ある特定の部分のパーツを緑谷の手や顔に当たるように飛ばした時であり、触れてしまって察した緑谷が顔を赤くして取陰に——胸部や腰部周辺がちょうど分裂してどこかに行っている状態である——抗議するような視線を向けるのでわかりやすい。

しかしそんな時折混じるハプニング展開を差し引いても、やはり緑谷の戦闘技能は、自分達と比べてなお一線を画するものである。

「ひよっとしたら、『個性』を上手く扱えなかったから足踏みしてただけで、元々才能はあったとかかな？ 課題だった部分が解決して、一気に進歩したとか」

「どうかしら……戦闘技能そのものも、最初のうちは拙かった印象があるけど……でも確かに、初期の緑谷ちゃんは、弱いというより危なっかしいの印象が強かったわね。考える前に体が動くっていうような性格だったし、自分そっこのけで他人を気遣ったりもするし。……その性格自体は、今も変わってはいないようなのよね。でも……」

「びゅっ。」

ふと、会話が途切れる。

不自然に思っ取陰が蛙吹の方を見ると、蛙吹の目は、画面の中の緑谷にくぎ付けになったまま動かない。

表情は……変わったようには見えない。もともと無表情なのでわかりづらいだけかもしれないが。

画面の中では、ちょうど取陰が緑谷への攻め方を『寝技』に変えたあたりだ。

接触、というか密着が多くなる展開に顔を赤くして攻めあぐねる緑谷。そんな緑谷に、バラバラにしたパーツを『技をかけている形の体』で、まるで装着するように再構築することで一瞬で寝技をかける、という取陰の奇策が猛威を振るっている場面だ。

過程をすっ飛ばして拘束技を完成させるため、難易度や完成度自体は無駄に高い。

もつとも、すっかり胸や太ももを緑谷に押し付けているところからわかるように……やっっている取陰の思惑自体は邪だと言わざるを得ないが。

しかし、蛙吹は別にそれを注視しているわけでもないようで、どちらかというとぼーっとして、あるいは考え事でもしているかのようだった。

暫くの間、そのまま沈黙していた蛙吹だったが、少しして、やはり表情を動かさないままに、

「取陰ちゃん、さっき『恋敵が多い』って言ってたわよね？ それってもしかして、永久ちゃんやお茶子ちゃんのことかしら？」

「あれ、蛙吹も知ってたの？ そのへん全員緑谷が好きだった」

「クラスメイトだもの。それに、2人共結構わかりやすいし……注意してみれば分かるわ。……気持ちも理解できるから、猶更ね」

実際にはそこにB組の塩崎も加わるのだが、さすがにそこまでは把握してないか、と取陰は納得していた。クラス間の交流が少ないのだから、それは仕方がない。

しかし、それがどうしたのだろう。緑谷がモテるということが、何か今の……気のせいではなければ、妙に緊張感がある空白と関係あるのだろうか？

そう問いかけるより早く、蛙吹は再び口を開く。

「……お茶子ちゃんとはともかく、永久ちゃんは……時々、不思議な風に見えることがあるの。最近緑谷ちゃんは、戦闘能力や、真面目で優しい性格なんかが徐々に知られてきて……女の子の間でも人気が出てきているでしょ？ 中には、本気かどうかはわからないけど、緑谷ちゃんを好きだって言う子も結構いるのよ」

「うん、そうだね。私も結構よく聞くよ、最近。そう言う話」

「そういうのを目に、あるいは耳にしたりすると、お茶子ちゃんは少し辛そうにするの。私も少し不安になるわ。緑谷ちゃんが評価されるのは嬉しいけど……だからって、自分が諦めたいわけじゃないから」

でもね、と続ける蛙吹。

「……永久ちゃんだけは、そういう話を聞いて……つらそうにしてる様子がほとんどないの。むしろ、緑谷ちゃんが人気が出れば出るほど、彼の周りに人が増えれば増えるほど、嬉しそうにするの」

（あ、ああ……なるほどなあ、そりや不思議にも感じるか……自分の好きな男の周りにね、女が増えればね、そりや普通はね……でも栄陽院の場合、性癖が特殊すぎるからなあ……）

あの『ワーキングホリデー』の場に……正確には、あのカミングア

ウト温泉にいなかった蛙吹は、永久の『ハーレムOK』というとんでもない性癖を知らない。知るはずもない。予想できるはずもない。できてたまるか。

ならば、そういう態度を不思議に思うのも当然だろうと、取陰は半分呆れながら（呆れはもちろん永久に向けてのものだ）思ったが……話はそこで終わらなかつた。

「それでね。どうしてかしら……そういう反応をする永久ちゃんを見ると、なぜか不安になるの。よくわからないけど……すごく『危うい』雰囲気を感じるのよ」

「……………」

取陰は心の中で、『まあハーレムって相当危うい考え方ではあるけど……』と思っていたが、どうも様子がおかしい。

自分が認識している『危うい』と、彼女が言う『危うい』の意味は違う気がする。そんな感覚があった。彼女の、あまり変わらない表情からでも何となく読み取れる緊張感から、そう感じた。

「まるで、初期の緑谷ちゃんみたいな……放っておいてはいけなさそうな、誰かが見えていて、止めてあげなきゃいけないような……ごめんなさい、上手く言えないわ。何か根拠があるわけでもないし……私の気のせいかもしれない」

「……………」

一体、蛙吹は緑谷……ではなく、緑谷を見ている時の彼女・栄陽院永久から、何を感じ取っているのだろう。

（……何か、あるの？ 栄陽院の心の中には……緑谷への好意や、あのとんでもない性癖以外に……私達の知らない何か、まだ………？）

考えても、取陰の脳内に、これという答えは浮かんでこなかつたし、蛙吹もついで、それを上手く言葉にしてはくれないまま……トイレに行って席を外していた拳藤が戻ってきて、その話は終わりになった。

☆☆☆

ところ変わって……場所は、市街地のようなエリア。それも単なる市街地ではなく、中世のヨーロッパ、あるいはファンタジックな世界を思わせる、やや前時代的な街並みだ。

『演習場の』内部にあるここは、もちろん普段人が暮らしているような町であるわけもなく。

演習場そのもののコンセプトが『テーマパーク』であるということもあって、そういった場所によくある、見て楽しむ街並みのようなものを作っている、というエリアだ。

ただし、あくまで演習場。普通のテーマパークであれば、その内部は土産物屋やレストランなどの商業施設になっているのだろうが、ここは外側だけが作りこまれていて、中はほとんど空っぽであるため、見た目だけの街並みでしかない。それでも、見て楽しむ分には十分だろうが。

そんな街並みを歩いているのは、芦戸と永久の2人である。

何をしているかといえば当然、自らの対戦相手を探しているのだ。

「見つからないねー、緑谷と瀬呂」

「まあ……雄英敷地内でも屈指の広さを誇る『φ』だからな……歩いて探そうと思ったらそりゃ、何時間かかるか……向こうも移動してるならなおさらだ」

「……試験内容、設定ミスじゃない？ それ……最悪、遭遇出来ないままタイムアップしちゃうんじゃない？」

「そうならないように探してるんだけど……多分だけど、この広い敷地内でどう相手を見つけていくかっていうのも、評価基準な気がするし」

「だからさつきから『オールマイト展』とか『オールマイトの像』なんかがある場所を重点的に探してるんだよね。緑谷がいそうだから？」

……はい、そんなとこ回ってました。

「……より正確に言うなら、緑谷がいそうだ……って私が思いそうだって緑谷も思いそうだから、だろうな。こっちを見つけたいのはあっちも一緒だ。だったら、自分がいそうなところに相手……つまり私達が来るだろうと踏んで、あえてわかりやすい場所に隠れている方

が可能性がある」

「なるほど、向こうから来てもらうような作戦ってわけだ……朝のアレみたいなもん？」

「かもしれないけど……あれは正直、私もどうかと思う。いや、あいつらしいっちゃそうだけど」

朝一番、午前7時くらいだ、突然、園内放送で……

『砂藤オ！ 障子イ！ 俺だ、B組の鉄哲だ！ おめーらの対戦相手だ！ 探してんだろ俺らをよ！ 逃げも隠れもしねえ、待っててやるから〇〇まで来いやア!!』

『……うん、とりあえずうちの相方こんな感じなのでホントに待ってます。来てね』

(放送設備ジャックして宣戦布告で……やるのがすげーな、流石は脳みそ金属(本人にとってはほめ言葉))。

「なるほど……それで今度は、この先にある『オールマイト通り』って奴か……でもそれ、待ち伏せのリスク高いよね？」

「まあな。でも、来るとわかってればある程度……」

と、永久が言いかけた瞬間……家の影、ないし路地裏とっていい暗がりの位置から、高速で長い何か……瀬呂のそれと思しきテープが射出されてきた。

咄嗟に防ごうとした永久の腕に巻き付いたそれは、直後、巻き取られたか引っ張られたか、ぴんとたわみ1つなく張り、その巻き付いた永久の腕を強く引っ張った。

しかし永久は、多少腕を引っ張られただけで、びくともしない……

「わ、早速来た!?!」

「みたいだな。だがまあ、この程度のパワーじゃ、私は引っ張られあああ!?!」

……かに思われた次の瞬間、想像以上に強い力で引っ張られた永久は、なんと力負けして踏ん張り切れず、裏路地に引っ張りこまれていく。勢いよく……それこそ、地面に足がつかないくらいの勢いで。

突然のことに驚く永久と芦戸。

しかしそんな芦戸の背後から、またしても『テープ』が伸び……芦戸のコスチュームの背中部分にペタツとくつついて、こちらも強く引っ張る。

逆方向に引っ張られて大きく距離を開けられた2人。

そしてその瞬間、その間にあつた家々が、強い衝撃が叩き込まれたかのように崩れて瓦礫の山になり、2人を完全に分断した。

「よっし、上手くいった……」

「あれ!? こっちに瀬呂……え、でもさつき永久の腕にもテープ……え、何で!？」

テープによって永久が引っ張られていったと思つたら、自分もテープによって後ろに引っ張られて離れ離れにされた。

しかも、自分が引っ張られた先には瀬呂がいる。しかし、同じように永久もテープによって引っ張られていたはず。これはいったいどういうことかと、芦戸は困惑していた。

「そーいう作戦だよ。テープを飛ばしたのはどっちも俺。でも、その後栄陽院を引っ張つたの……家をぶっ壊して道を塞いだのは、緑谷だ。この状況を作るためにな」

仕組みは単純である。

瀬呂はテープを飛ばしてくつつける他に、巻き取って回収することもできる。体育祭の騎馬戦では、その機能を生かして、何度も騎馬を置き去りにして飛んでいく爆豪を、何度も回収していた。

それを生かし、瀬呂はあらかじめ、極力物陰を通して目立たないようにし、道路の反対側に端を張り付けたテープを伸ばしていた。

その状態で物陰に隠れ、永久がちょうどいい位置に来たところで、もう片方の腕からテープを射出、捕縛する。

そしてその直後、ある程度引っ張って力を誤認させると同時に、肘からテープを切り離して緑谷にパス。それを今度は、永久に負けないフィジカルを持つ緑谷が思い切り引く。

同時に瀬呂はもう片方の、伸ばしていたテープを巻き取ることで一

瞬で横断し——この時、予想外のパワーに驚いた永久と芦戸に気づかれないかは運次第——反対側から芦戸の背中にテープをくつつけて引き寄せる。

この時、腕や足にテープを巻きつけてしまうと、即座に『酸』で溶かされる可能性が高いため、コスチュームのインナーとアウターを間に挟み、分泌した『酸』が染み渡って届くまでに時間を要するであろう背中にくつつけることでその時間をカバーする狙いもあった。

最後に、距離が離れたところで緑谷が間にある家を壊して分断すれば……この状況の完成だ。

2対2というより、1対1が2つという構図。すなわち、瀬呂たちの狙いは……

「各個撃破、つてこと？」

「そういうこと。俺の『個性』はどつちかかっていうと拘束やトラップ向きだけど、お前ら2人が相手だと相性悪すぎるし、かといって正面から戦うには、それはそれでリスク高いし……なら、実力が近い者同士でぶつかって対処した方がいい、つていう緑谷の意見を参考にした」
「なるほどねー……こりゃ一本とられたなー。てことは今、永久は……」

——ズウウウウ……ウン……！

と、言いかけた芦戸の疑問に答えを返すように……地響きにも似た衝撃音が、芦戸と瀬呂のいる場所まで響いてきた。

☆☆☆

時を同じくして……テーマパークの各所で、戦いは始まっていた。

「『俺拳』!!」

「『シユガーラツシユ』!!」

砂藤と鉄哲の拳がぶつかり合う。

手数と威力で勝る砂藤が打ち合いを押し切るが、反面『スティール』の個性で防御に優れる鉄哲は、その乱打にさらされてなお健在。怯むことなく睨み返している。

砂藤は鉄哲の『個性』について、体育祭の時の切島との戦いを見ていて、鉄分の補給なしでは、いずれ『金属疲労』で強度や力を保てなくなるかと知っていた。試験の際に組んでいた相手が、似た個性を持つ切島でもあったため、そして自分も同様に『継戦能力』に課題がある身であったため、突き崩すならそこであろうことも。

もちろん、それは糖分が切れればパワーダウンしてしまう自分にも言えることではあったが。

だが、そのラツシユが途切れたその一瞬の隙に、2人の立っている場所の地面がぐにやりとぬかるんだようになり、2人共『うおっ!』と驚いて足を取られる。

それが骨抜……鉄哲のパートナーの『個性』だと気付くと同時に、砂藤の足元の地面から潜行していた骨抜が飛び出し、足をつかんで引きずり込もうとする。

が、間一髪その射程外から、触腕を伸ばして手を複製した障子が、砂藤の腕をつかんでその底なし沼から救出した。

「っ、悪い障子、助かった!」

「こちらこそすまん。警戒はしていたのだが……抜かれた。さすがに地面に潜られると……音で位置はわかってても手が出せん……では、俺は引き続き骨抜を警戒する」

「ああ。パワーなら俺達が勝てるが……あっちもそれはわかってるはずだ。あいつの個性で各個撃破、ないし拘束されちまうのが一番怖いからな……それに、俺の方の糖分切れを狙ってくるだろうし……それへの警戒も要る。糖分と、警戒……二重の意味で根競べだ」

一方、砂藤の捕獲に失敗した骨抜は、周囲の地面を柔らかくして追撃を交わしつつ、鉄哲を連れてこちらも射程外に離れるところだった。

「くそあ、もどかしいぜ……一対一で正々堂々殴り合えないなんてよおー!」

「悪いね、邪魔しちまって……でも、消耗戦に弱いのはお前も同じだし、あつちのチームはシンプルな分対応が難しい。俺と鉄哲、どつちかでも欠けると勝つのは難しいんだよ」

「いや、補給なしでの活動時間は俺の方が砂藤より長えが、攻撃力じゃ劣る……それはわかってるんだ。あのままじゃ俺が押し切られてたつてことも……悪いのは力が足りねえばかりに、やりたい戦い方ができない俺だ！ 骨抜、ありがとう！」

「おう。力が足りないのは俺も同じさ……だから、今の俺達は今の俺達にできることをやろう」

一方、既に勝負がついてしまった組み合わせもまた、あつた。

「くうっ……無念ー」

「ウエ……ウエイ……」

塩崎の『ツル』で雁字搦めにされて動けなくなっている飯田と、それ以上の量のツルで……最早繭のように閉じ込められている上鳴が力なく呻く。

飯田は『レシプロ』の発動後でエンジンが黒煙を吹き、上鳴にいたつては、既に脳がショートするほど放電しつくして、顔が作画崩壊してアホになってしまっていた。見えないが。

その2人共が、既に身に着けた『カード』を割られてしまっている。すなわち、敗北だ。

周囲一带に広がる『ツル』の中心では、ふう、と緊張が途切れて一息ついている塩崎と、その傍らには八百万も立っている。

「さすがですわ塩崎さん。何もさせずにあの2人を捕らえてしまえるなんて……私が作った絶縁シートも、結局出番はありませんでしたし」

「いえ、先程も申しましたように、この作戦は八百万さんというブレーンがいてこそ意味を持つもの……私だけでもぎ取れたものではありません」

「言い訳するような形になってしまいが……確かにそうだな。僕ら2人も見事に騙されてしまった……ああそうだ、君達は何も騙すことな

どしていかなかったのに、勝手に騙されたわけだ」

「裏の裏をかかれたってわけか……あー、悔し……ウエイ」

上鳴と飯田も、何も無策で突っ込んで塩崎にとらえられたわけではない。むしろ、塩崎と八百万のコンビネーションによるいくつものトランプの可能性を考慮し、警戒していた。

一つ的能力だけで汎用性がある塩崎と、『創造』による様々な手を繰り出してくる八百万の組み合わせは凶悪の一言。読み違えれば罠に絡めとられてしまう。

だからこそ、何かさせる前に速攻で決着をつけるべく、上鳴が囿になっっている間に、飯田が最高速度で、八百万の確保、ないし撃破に動いた。体育祭の時に常闇がやったように、何もする暇を与えず終わらせるために。

しかし、それが既に女子2人の術中だった。

色々と思わせぶりなものを作っていた八百万であったが、それらは全てはったりであり——もちろん、使おうと思えば使えるものではあるが——八百万を警戒して速攻をかけて来た飯田を、塩崎が正面から高速で展開したツルにより、網にかけるようにして一瞬でとらえ……それと入れ違いで、八百万は脱出用に用意されていたツルに捕まってその場を離れた。見事にカウンターを取られて、捕縛と相成った。

1人残された上鳴は、絶縁シートを持っている八百万を狙っても意味がないと、塩崎に全力放電を仕掛けるが、多量の『ツル』で封じられてしまい、彼女の本人には届かず。

そのまま捕まり、締め上げられてカードを圧壊されたのだ。

結局、深読みしすぎて『罠はないという罠』にかかったがゆえの結末だった。

素直に敗北を受け入れて反省し、今後に生かすことを誓う飯田と上鳴を見ながら……塩崎は、ふう、とため息をついていた。

「自らも謀を使い、また相手の謀に頼らざるを得なかった……これもまた私の弱さなのですね」

「そういえば、塩崎さんは作戦や謀の類がお嫌いだと聞いていましたが……必要に応じてこういったこともできるのですね。少し意外で

したわ」

交流の中で、塩崎が意思が強く、また意外と頑固であることも知っていた八百万は、事前に聞いていた彼女の性格とは少し違っていた点について、何の気なしにそう尋ねていた。

職場体験で一緒になった拳藤から時々聞く話の中にあっただのだが、塩崎は過剰に実直な部分があり、そういう『謀』を、たとえば戦いの中であろうと用いるのを嫌うという話だった。

しかし今回の模擬戦では、『作戦はないという作戦』という形であれ、飯田と上鳴を捕縛するのに見事に作戦勝ちをもぎ取って見せた。それ自体に文句などないが、単に少し気になったのだった。

それに対して塩崎は、

「いえ、今でもそれは変わりません。『謀は悪に通ずる』というのは、私の信条の1つです……ですが、それにかまけてやるべきことから目を背け、成すべきことを成せないのでは本末転倒ですから……既に私は2度、そのせいで失敗しています」

1度目は、ワーキングホリデーの現場。融通の利かない考え方が原因で、ヴィランに応援を呼ばれて取り囲まれる事態になり……取陰を危険にさらした。

2度目は、期末試験。鉄哲と組むことになった彼女は、『1度目』の経験を踏まえて、作戦や謀というものに対して柔軟に、寛容に構えようとすることも……パートナーである鉄哲もまたそういう性格だったことが災いし、とる作戦が自然と『正々堂々』に近いものに。

自分だけでなく鉄哲も望んでいるなら、と思ってしまうのも大きい。そして、悪かった。

結果、セメントスを相手に物量戦を挑んでしまい、鉄哲は鉄分が、塩崎は水分が足りなくなつて『個性』を使えなくなつたところで、コンクリートに閉じ込められて日光までほぼ遮断されてしまい、あえなく赤点となつてしまったのだ。

「格上を相手に考えなしに戦い、思考をやめて被害を拡大させるなど許されません。いえ、最終的にはそれを目指すとしても……今の未熟な私には、そんな『我儘』を言うことなどまだ許されない……今回の

『謀での勝利』は、その事実の証明。肝に銘じて、精進していくつもりです」

力強くそう言い切る彼女の姿に、八百万のみならず、飯田と上鳴も、まだまだ自分達には課題が……何より、自分のなりたいヒーローになるために、どうにかすべき点がいくらでもあるのだな、と実感するのだった。

この勝利、あるいは敗北にとられ過ぎるのではなく、これを糧にして前に進んでいかねばならないのだな、と。

終わってみれば……その後の反省も含めて、4人共にとって、実ある戦いだったと言えた。

そして、また違う場所。

「やられたく……」

「あはははははは！ 笑っちゃうねえ、まさか！ まさかだよ！ あのA組でも有名な協調性皆無の暴君が、こんないい子ちゃんになっちゃってるなんて痛あ!？」

物間・吹出ペア。

吹出の『コミック』による汎用性と対応力を生かして立ち回り、それによって生じる隙について物間が対戦相手の『個性』を『コピー』するという作戦を主軸に構築されたペアだったが……彼らは何もする暇を与えられず、カードを砕かれて敗北していた。

接敵から実に1分と経たず、まさに秒殺と言っていい速さで。

2人にとって何よりも脅威だったのは、爆豪の『爆破』という個性。その攻撃力である。

直撃すれば一撃KOもあり得るそれに耐えて懐に飛び込むには、切島の『硬化』が必要。ゆえに吹出の『コミック』で遠距離攻撃を行ったり、2人を分断させてその隙に接近を試みた。

だがそれを読んでいた爆豪は、フォローを切島に任せて突出するのではなく、裏をかいて接近された切島をかばう形で物間から守り……自分の『爆破』をあえてコピーさせた。

やむを得ず『爆破』を使ってけん制しつつその場から退避しようと

した物間だったが、そこに今度は切島が突っ込み、コピーした『爆破』を正面突破して接近戦に挑む。

『爆破』がきかないのは痛手だが、むしろこれでコピーできるなら好都合だととらえた物間は、多少の被弾は覚悟の上で自分も切島目掛けて飛びこみ……

その瞬間、切島は全身を全力で硬化させ……切島ごと巻き込む形で、爆豪が横合いから放った特大爆破により、まだ『硬化』をコピーできていなかった物間だけが吹き飛ばされた。

そのままカードを破壊され、脱落となった。

そのあとは、孤立した吹出が総攻撃で撃破され、あえなく敗北、という形だ。

敗北後も得意の憎まれ口だけは止まらない物間であったが、内心、自分の見通しが悪かったことによる作戦負けについては認めていたし、反省してもいた。

それはそれとして……憎まれ口でなくとも、普通に爆豪が……本人に自覚があるかどうかはわからないにせよ、随分丸くなっていることには、素直に驚いていたが。

(確か、推薦入試の轟と一緒に、エンデヴァーの事務所にずっと『ワーキングホリデー』に行つてたんだっただな……そこで色々と学んだのかな)

よく動く口の裏で、思考は冷静に。

自分の個性だけでは強くなれない物間は……その分、相手を観察して策を練り上げることには、人一倍気を配っている。その貪欲さはそれ自体が武器であり、彼はこの敗北を糧にして、また一つ自分に足りないものを見つけ出そうとしていた。

(言い訳はできないな。今回の変化は、彼が暴君でなくなったというだけ……すなわち、彼本来のスペックを遺憾なく、コンビネーションという形で発揮しただけだ。ならば、それを上回ってこそ『勝利』の2文字が真にふさわしい……)

「……誰も文句一つ言えない、完膚なきまでの勝利……か。ふふ、いいじゃないか」

「あ？ 何か言ったかよテメー」

「別に？ 君が負けて悔しがる顔は次の戦いまで取っておこうと思っただけさ」

「ほぎけ、次も俺が勝つわ。つかテメーが俺に勝ったことなんざねーだろうが」

「アハハ！ そうだねえ、体育祭でも結局は負けちゃったからねえ……いや残念だ！ 君の悔しがる顔が、ベそかいて歯を食いしばる顔が見れなくて！ 今のところそれを見たことがあるのって、戦闘訓練で君が負けたつていう緑谷君だけかな？ いやあ羨ましいな、どんな風だったんだろうなあ今度緑谷君に根掘り葉掘り聞いてみようかなその時の痛あい!?!」

「死ね！」

「こんな時でも挑発に余念がねえってすげえな、逆に……」

「クラスメイトだけどころいうところ未だに慣れない……ポカーンだよ……」

第100話 TS少女 VS 緑谷出久

切島・爆豪と物間・吹出の戦いは、以前よりも柔軟に戦えるようになった爆豪が、それぞれの『個性』とそれに由来する動き——物間は最初に切島をコピーしに来るはず、など——を読み切って、それを逆手にとった戦略で、切島達の勝利。

飯田・上鳴と塩崎・八百万の戦いは、相手の個性への警戒そのものを逆利用して『罨はないという罨』……すなわちシンプルな物量で待ち構えていた塩崎と、ブラフと万が一の備えを同時に受け持っていた八百万の策が見事に結実し、塩崎たちの勝利。

砂藤・障子と鉄哲・骨抜の戦いは、互いに慎重になるがゆえに、長く一進一退の戦いと膠着状態が続いたものの……鉄哲と戦っていた砂藤が、骨抜が柔化させた地面に引きずり込まれ……そうになった瞬間に障子が骨抜を吊り上げるように捕獲、カードを破壊。その後、自力で拘束から脱出した砂藤との2対1で鉄哲を破り、砂藤達の勝利となった。

そして、残る1組の戦い。

追試を受ける本人である芦戸と瀬呂は、芦戸が軽快に動いて『酸』で攻撃する中を、瀬呂がテープを用いて縦横無尽に動き、テープの先に重りになる鉄パイプや瓦礫などをつけて、遠距離で応戦するのに徹していた……その頃。

彼、ないし彼女のパートナーである2人は……いつそ気持ちのいいほどに、小細工なしで真っ向から立ち会っていた。

ぶおん、と、

弧を描いて迫る永久の回し蹴りを、4つ足になるまでに姿勢を低くして交わした緑谷は、そのまま懐に飛び込もうとして……しかし、目の前にかざすように出された手を前に、急カーブして側面に回り込む。

その頃には永久は体勢をほぼ立て直して迎撃する構えになっていたが、構わず握った拳を突き出し……しかしやはり、腕を使ってガ―

ドされる。

お返しとばかりに踏み込んで放たれる永久のストレートパンチを、その肩に手を乗せて跳び箱のように飛び越えて回避する緑谷。

そのまま空中で体をひねって、首元に手刀を叩き込もうとするが、今度は永久がストレートパンチの勢いそのままに前に転がるように出て、側転の要領で距離を取った……

……かと思いきや、地を蹴って即座に反転、そして跳躍。飛び膝蹴りを打ち込んでくる。

緑谷は空中で少々無理やりに体勢を変え、足に装着したアイアンソールでそれを迎え撃ち……しかし空中では踏ん張りがきかず押し切られ、蹴飛ばされる。

ダメージはないが、体勢が崩れた状態で放り出された。

それを隙と見た永久が、着地と同時にさらに踏み込んで追撃の拳を放つも……その瞬間、突如として勢いよく上方向に逃れる。

余りに予想外な動きに驚いた永久が振り返ると、そこには……両腕から伸ばした、黒緑色の光で形作られた紐を、左右の建物に伸ばして、それを手繰るようにして離脱した緑谷の姿が。

それも一瞬のことで、緑谷が顔をしかめると同時に、紐は消えてしまったが。

「出たな、謎能力……でもいいのか？ それ、ここで使つて……」

永久からすれば、恐らくは緑谷が隠していたであろうそれを、審査のため、確実に先生方が見ているであろうこの場で使ってしまったのは、隠すこともできなくなる、という意味での心配だったのだが……緑谷はと言えば、不敵に笑っている。

「問題ないよ。一部の先生にはもう話して、つていうか相談してあるし……そもそも僕自身、まだよくわかってないし、慣れてない力なんだ。いつまでも怖がつて押し込めてちゃ、何も変わらない」

「あ、そうなんだ。なら……遠慮や心配はいらないか」

永久からすれば、自分よりも先に先生方——どの先生かはわからないが、恐らく担任の相澤か、何かと縁があるらしいオールマイトあたりだろうと予想できた——に話していたというのは、ちよつとだけ寂

しいと思わなくもなかったが、それも結局は我が儘というもの。

個性の指導にかかることなら、学生である以上、それが可能なら教員に頼るのは正しい手順だ。

恐らく、その後自分や、『デウス・ロ・ウルト』関係者にも話すつもりだったのだろうとあたりをつけて……今は永久は、戦いに集中する。

永久は今度は、長い脚を生かして大股で素早く踏み込んで、そのまま突っ込む。

勢いを乗せたタツクルをかましてくるが、読んでいた緑谷は斜めにすり抜けるようにしてこれを回避し、すれ違いざまにその足を払って転ばせる。

が、永久は手をついてそこを起点に、まるでカポエラのように回転することで、簡単にそれをいなしで攻撃につなげる。ここでも足の長さによるリーチと遠心力が牙をむく。

あえてそれを受け止めて反撃しようとした緑谷に対し、それを逆利用して……ガツ、と緑谷の腕が自分の足を捕らえた瞬間に、腕のばねを最大限使って跳び……

「わぷっ!？」

「おっと失礼っ♪」

そのまま、体が逆さの状態で緑谷に抱きついた。

体は向かい合わせだが、上下が逆なため……必然的に、緑谷の腰や下腹部のあたりに永久の顔が来る。同時に、緑谷の頭も永久の腰あたりに来て……というよりは、思い切り両方の太ももで頭をがしつと挟まれてホールドされていた。

勢いに負けてそのまま倒れ、組み伏せられているような状況。もしこのままどちらかが上体を起こせば、もう片方の頭の上に乗っかって座るような形になる。

見方が見方なら、少々、いやかなり刺激的というか……色々と問題がありそうな光景である。

もしこの光景を彼らの小さな同級生が見ていたなら、間違いなく血涙を流して悔しがると同時に、大声でそのポージングの名前を叫んで

いただろう。

突然のことに緑谷も動揺し、頭に血が上って顔を赤くしそうになるが……それよりも先に、はつとして気付く。照れている場合ではないことに。

別な意味で、この体勢が……というよりも、永久に密着している現状が危険だということに。

「まずっ……『オクラホマスマッシュ』!!」

その場で強制的に体を回転させて永久を振りほどき、すぐさま距離を取って体勢を立て直す……時すでに遅し。

先程までよりも、多少ではあるが疲れが取れて……しかし、体が重くなっていることに気づく。

(やられた……『エネルギーバインド』!)

密着している間に『エネルギー』を流し込まれ、それを媒介に自分の体の動きを制限する『エネルギーバインド』をかけられたことに、歯噛みする緑谷。

永久はというと、『まだ浅いな』と、己の技量不足を反省しつつ、ひとまず少し自分に有利に戦況が傾いたことを確認していた。

(やっぱり……栄陽院さんの戦いは、僅かな時間の接触も命取りになりかねない……。接触した端からエネルギーを送り込まれて縛られるし、そもそも馬力だけならA組でも最強クラス……。今だって、組み付かれてすぐだったからよかったけど、もう1秒抜け出すのが遅かったら、きつくしがみつかれて振りほどけなくて終わってたかも……)

(ホントすばしっこくなって……。緑谷、捕まらないな……。ガードすらほとんど取ってもらえないとは……。確実に警戒してるな、私のこと。一瞬一瞬の接触で気長にやるつてのも手だけど、ここ最近の緑谷は戦いの中で急激に成長するようになってきたし、先読みも磨きがかかってきているから……。時間をかければかけるほどどんどん攻撃が当たらなくなる……)

互いに様子見の時間、わずかな隙間に考察を交えて戦う2人。

ふとしたきっかけでそれが崩れれば、また拳や蹴りを交えた戦いに

戻り、流れが途切れると離れて隙を伺い……を繰り返す。

そんなやり取りの中で、ふと何の気なしに口を開いた永久。

それはせいぜい、インターバルの間の時間を潰す程度の意図しかない、単なる軽口だった。

少なくとも、最初は。

「それにしても、ちよつと不思議な感じするな、こういうの……」

「え？ 何が？」

「私らつてさ、『デウス・ロ・ウルト』の戦闘訓練で、いつも散々模擬戦とかやつてるじゃん？ けどそれっていつも、基礎体力とか戦闘技能を鍛えるために、『個性』禁止とか、身体強化だけにしぼってだったから、こんな風にガチの何でもあり、手札全部使つてやるような戦いつて……実はほとんど経験なかったな、つて、今こうして戦つてて思つた」

「そう言われればそうだね……多分、この先のカリキュラムでならあつたんだろうけど、まだ基礎固めの時期みたいだからね、僕ら。そう考えると、貴重な実戦経験になるのかな、コレ？」

「かもね。実際……ここでこうして緑谷をガチで相手にしてみても、その身体能力とか、身のこなしの厄介さみたいなのを……理解できたつもりでできてなかった部分を痛感するわ」

「ははは……そつくりそのまま返すよ」

不思議なもので、いつも一緒に訓練しているにも関わらず、わかつていかなかった互いのことが、拳をぶつけあうことで理解できるという感覚に、2人共新鮮さを思っていた。

「そういう意味じゃ、私はこういう機会が……まあ偶然のことだし、元々後々用意されてたのかもしれないけど……こういう経験ができてよかったかな。こうして緑谷のことをより多く知れば……その分、私がどうやればより役に立てるかわかるつてもんだし」

最後の方は小声で、にひひ、と笑つて放たれたその言葉に、緑谷は一瞬ドキツとするも……すぐに、さつきまでに増して真剣な顔に戻る。

いつもならそのまま顔を赤くしておろおろし始めてもおおかしくな

い緑谷の変化に、ふと不思議に思った永久だが……そこに今度は、緑谷の方から言葉がかけられた。

「栄陽院さんは、さ……そんな風に、いつでも僕のことをまず考えてくれるよね」

「？ そりやまあ……何をとは言わないけど、前にああまで言っちゃったしね。今更隠そうとも思わないし……それがどうかした？」
「うん……最近はやさ、そうやって言ってくれることにも、変な話……僕も少しづつ慣れてきてさ。それをでも、嬉しいなって思う反面……このままじゃいけないな、って思うようにもなって」

「……？ あ……私に悪くっていうか、負い目とかに感じるってことなら、そんな風に思う必要はないぞ？ 正真正銘、私がしたくてやってることだし……」

「うん、わかってる。でも……それもあるけど、そうじゃない」
「……？」

先程からどうも話が見えなくなり、頭の上に『？』を浮かべる永久。その場をつなぐための軽口のトークだったのはもう忘れて……警戒しつつも、聞き入っている。

「こないださ……マンダレイと洗汰君が家に来てさ。そこで色々話したんだけど……そこで、マンダレイ、言ってたんだ。相手が動くのを待ってるだけじゃダメだって。もし何か望みが……どうしたいとか、どうなってほしいとかいうのがあるなら、自分からも動かなきゃいけないんだって」

「……はあ」

壊理ちゃんに会いに行ったあの日だろうか、と思い返しつつ、永久は続きを聞く。

「思い返してみれば、今まで……栄陽院さんから、色々なものをもらって来た。そのほとんどは、言い方が悪いけど……僕は君から、与えられるまま、流されるままに受け取っていた気がする。君はそれでいいって言うってくれるけど……今までずっとそうあってきて……別に誰も困ってないし、これからもそれでいいんじゃないかって、どこか思ってた。でも……今なら、そんなんじゃダメだってはつきり言え

る。真剣に僕のことを考えて、僕と向き合ってくれてる君に失礼だった」

「……んーまあ、そりゃそうしてくれればうれしいけど……私は別に、緑谷に何かを強制するつもりはホントに……」

「それじゃもう、僕の気がすまなくなってるんだ。変な話っていうか、今更勝手なもの言いかもしれないけど……栄陽院さんをもらうのに、それじゃ僕は胸を張って『君が欲しい』って言えない」

「……へ？」

余りにもさりげなく、あつさりど、緑谷の口から飛び出したその言葉に、一瞬呆ける永久。

その直後、何を言われたのか一拍遅れて理解して……常ならば緑谷がやるような反応を取ってしまう。顔が一瞬で赤くなって、変な声が出た。思考も盛大に乱れてパニック寸前である。

普段弄る側であることが多い永久であるが、さすがにこんな不意打ちには想定外だった。

しかも、緑谷にそんな自覚はなく……というか、自分が今何を言っているのかすら、正確に把握しているのか怪しい。

真剣なのはわかるが、そう思うあまり頭が動いていないのではないか、感情が仕事していかないのではないかと思うくらいに、真剣度100%である。不自然なほど雑念を感じない。

ともすれば、修行の中で『感覚や感情と思考を切り離し、いついかなる時も冷静に考えて動く』という訓練の成果、あるいは、思考している自覚がないほど自然に頭を働かせる『直観力』の会得に至ったことの弊害なのかもしれない。

しれないが、少なくとも今、緑谷はそれを自覚することはできないまま、話は続けられる。

「栄陽院さんとカミングアウトし合ったあの日……いや、それよりもっと前、体育祭の後の『ご褒美』の日からずっと考えてたんだ。男女の付き合い方をここから先……望む形に一步進めるのが、こんな道筋でいいのかって。結局、その答えは出なかつたけど……それでも、流されるまま行ってなんやかんやで、つていうのは違う気がした。そ

んな感じで欲しいものを手に入れても、その先ずっと納得できない気持ちが残るんだと思う。何かの度に、ことあるごとにそんな風に思えてしまうくらい……僕にとつて栄陽院さんは、大切に、かけがえのないものになってるんだって、知った」

「……っ、ぐ……」

「そう思うってことは、僕の方から君に対して抱いてる気持ちがあるってことだ。それを伝えずに待つてるだけなんて、やっぱりおかしい。たとえ欲しいものが手に入っても、自分の方からも全力でぶつかって手に入れることとはやっぱり違うことなんだと思うから……だから僕は、ちゃんと、胸を張って伝えられるようになりたい。だから……」

「だ、だから……?」

「……押し込めて、見ないふり、気付かないふりをするのはやめた。恥ずかしくても、上手く言えなくても……僕の方からも、嘘偽りなく、全部伝えた上で……その上で、貰う。貰ってく」

そう言いきって、緑谷は拳を構えなおす。

真剣な気持ちの全てを語るうちに、自然と精神の全てが一色に染まっっていく、結果的にある種のルーティーンのような役割を果たしていた。今の緑谷の頭の中には、ただひたすらに真剣に、目の前にいる永久と向き合い、己の全てを出しきるという意思だけがある。

「だから……今日の夜、話があるから。永久……君の家で待ってて。……貰いに、行くから」

そう、静かに言い切って……その瞬間、緑谷の肉体に火がついた。そう思えるほどに……雑念の一切をそぎ落とした純粋な闘志は、これまででない出力と純度で『ワン・フォー・オール』を制御させることに成功しており……文字通り、己の全てを呼び起こして、緑谷は永久との戦いに飛び込んでいった。

そして、それを受け止めるべく、微動だにせず待ち構えている永久はというと……

(待って!? 待って!? え、何!? なんかコレ……え、まだ戦ってる最

中だよね私ら!? 今なんかコレ……え、ちょ、直接的にこそ言われてないけど、告白されなかった今私!? 緑谷ちよつと今自分で何言ってるかわかって言ってた!? わかってない可能性大! いや、まあ、うん、う、嬉しいんだけどね!? と、時と場合つてもんが……さ、さすがに動揺誘う作戦とかかってわけじやなさそうだけど……つてかそうだったらすすがに私でも傷つくけど……なんかすごい真剣だし多分違うと思う。……つていうか今日の夜話があるつて言ってたけど、話すことなくね!? もう何か今全部言っちゃってね!? 思いつきり『欲しい』つて言われたよ!? また名前で呼ばれたし! あともう私が『はい』つていえばそれでもうコレ終わりじや……それとも何!? 夜はもつと進めるといふか、もつと凄いことでもするつていうのか!? よーしそれならそれで大歓迎だ……つて駄目だ私の方もなんか頭がバカになりつつある……つていうか何にしてもこの状況で今から戦えとか無茶だろオオ!?)

ここまで思考0.1秒。かつてない早さで頭を回して……パニックになっていた。

しかしそこは永久も修行の成果である。どうにか感情と思考、そして体の操作を切り離し、緑谷の攻撃を受け止め、あるいは受け流して戦いに戻る。

パニックで頭が回らないのを逆に利用して、無駄に頭を回さず、小限の思考で……ある種の『無我の境地』の中で動くという高等技能(のようなもの)を、この場で開眼していた。

開眼の経緯は若干微妙だが、この瞬間彼女もまた1つ強くなったのだ。経緯は微妙だが。

……しかしながら。

喜ばしくもというべきか、どうしてそうなのかと戸惑うべきか……かつてないほどに澄んだ思考の中に身を置いている緑谷は、今までとは全てが違っていた。

それこそ……パニックの中にあつて、無我の境地でどうにか戦えていた永久が……それに気づいて驚愕し、そのパニックから結果として

抜け出すほどに。

火花1つ1つの明るさが、輝きが違う。

心なしか、僅かにだが髪の毛が逆立っているように見え……体全体が光を纏っているかのよう。

疾風怒濤、そう表現するのがふさわしいというほどに、スピード、パワー、テクニクが全て備わった連続攻撃が、決して大柄とは言えない緑谷の体軀から繰り出され続ける。

市街地という環境も相まって、前後左右上下に足場に事欠かない点もうまく利用し……グラントリノのように、縦横無尽の立ち回りの中で、拳を、蹴りを繰り出して永久を追い込んでいく。

永久もさるもので、磨き上げた戦闘技能と恵まれた体軀、そして『エネルギー』によって生み出される驚異的なフィジカルで迎え撃つ。

何より、彼女自身が緑谷のことを思っているがゆえに、緑谷に対する理解は人一倍あり……それゆえに模擬戦や、先程までの戦いの中でも、その知識と経験から手を先読みして対抗する、ということが可能になっていた。理解しているがゆえの強みとして。

しかし、それでもなお、食らいつくのが精いっぱい……どころか、徐々に押されて行っているのを、永久は感じ取っていた。

1分前、1秒前、一瞬前よりも、緑谷が強くなっていく。自分との戦いを糧にして。

理解と経験から緑谷の動きを予測しても、やがてはその更に先を予測されて追い抜かれた。

一合一合打ち合うごとに拳が鋭く、強くなり、また防御や受け流しはより堅牢になる。

こちらのダメージが増えていき、あちらにはろくにかすりもしなくなる。既に、攻撃が緑谷の腕なり足の真芯を捕らえる感触は、感じ取れなくなっていた。

ついには攻撃の出足を見抜かれてかわされ、防がれ、潰される。

さらにはそれを回避や防御にまで応用される。防御は抜かれ、退避・回避はタイミングを狂わせたり、回り込まれて許されず。思惑がことごとく外されていく。

打てる手が少なくなっていく。

千の手を打ち込もうとも、千の返しが待ち受けている。

自分との戦いが、まるで食らいつくされ、平らげられていくような感覚に、永久は陥っていた。

この闘いそのものを緑谷が今、まさに糧にして成長し、そのままの勢いで自分を超えようとしている。

自分という存在が……今まで、少なからず彼にとって壁であったそれが、今、打ち砕かれようとしている。

この表現が正しいかどうかはわからないが、近い部分はあるはずだ。少なくとも、今までは。

始まりは、あの日……緑谷に『個性』の使い方をお教えるため、ジャージ姿で何も無い訓練室で、2人で努力し始めた日。

あの時はまだ、緑谷よりも永久の方が強かった。それは、緑谷もわかっていただろう。

それが、共に努力を重ね、心の距離を縮める中で、2人の実力差も狭まっていった。

緑谷の成長は、永久にとって喜ばしいことだったし……しかしそれでもまだ、長きにわたる鍛錬で積み重ねた力と『個性』、そして緑谷への理解が、自分を緑谷の『壁』にしていた。

それが今、とうとう終わろうとしている。

緑谷は今、永久という壁を打ち砕いて前に進もうとしている。

……いや、違う。この表現はふさわしくない。

永久は、抗う全てを打ち砕かれ、全てをはぎ取られて……

その上で、緑谷に全てを奪われようとしているのだ。

言っていたまさにその通り、緑谷は私の全てを自分のものにしてしまうとしてくれているのだ。

心も、体も、力も、技も、『個性』も……何もかも。

そんな思考に頭の中を埋め尽くされながらも、永久は戦いつづけた。

しかし、それが『戦い』である時間は、もう、長くない。

拳を突き出しても、最早通じない。

蹴りを振りぬいても、最早通じない。
先読みしようとする。読み返される。
何かしようとする。する前に潰される。
ついには、『個性』すらも。

打ち込んだエネルギーに干渉できない。緑谷の意思の力に振り切られ……効かなくなった。

(通じなくなっていく……私の、全部が……！ 全部全部、緑谷の『糧』にされてく……私の全部が、緑谷の力になっていく……！)

通じなくなるほど、緑谷は強くなっている。
通じなくなる分、自分は緑谷に捧げている。

苦戦がもたらす苦痛の中で、そんなどこか歪な……しかし本人からすれば、当然、ないしは純粹な喜びを感じながら……最後の最後まで、永久は戦い、拳を振るい続けた。

最早、何者をもとらえることのないであろう拳を。

数分後。

全て出つくした様子で……力が入らないほどに疲弊して、永久は地面に、大の字に寝転がっていた。

呼吸は荒い、息も苦しいのだろう。ということは、スタミナの代替になる『エネルギー』も、恐らくは底をついているか……限りなくそれに近い状態。

だというのに、その顔には……いかにもやり切ったというような、満足げな笑みが浮かんでいた。

不意に、その傍らに緑谷が立った。

彼もまた汗だくになっていて……先程までのような『フルカウル』の輝きも、真剣さ一色といった瞳のきらめきも収まっている。やはり、全力同士の戦いは、彼にとつても楽なものではなかったようだ。それでも、緑谷が立って見下ろしているこの光景は、どちらが勝者であるのかを如実に表していた。

緑谷は永久の傍にしゃがみこむと、その襟元に手をやる。

そこには、永久が張り付けた『カード』があった。

永久は……抵抗しない。もうすでに、そんな余力すら、ない。

緑谷はそれをはぎ取って持ちあげ……永久の目の前で、ぱきん、と2つに折って壊した。

これで、模擬戦のルールのにも、言い訳のしようもなく、勝敗は決した。

そうした後も、緑谷はその場から動かず、立ち上がらず……ふいに、そつと永久の頬のあたりに手をやった。

「……さつき、さ」

「……うん？」

「大事な話……後で部屋でするって言ったけど……ごめん、なんか……それまで待ってる時間がもつたない感じかも。で、ちょうど何か今、いい感じに気分乗っててさ……今いい？」

「あははっ、何それ……いーよ、いつでも。私は緑谷相手なら、24時間365日ウエルカムだよ」

「そっか。じゃあ……」

一拍。

「栄陽院さん。君の全部が欲しいです……僕のものになってください」

「はい、喜んで。私の全部……もってけ、緑谷」

それは、本当なら……夜景の見えるレストランとかで、ムードを重視して、一世一代の決心と共に告げるようなことだったのかもしれない。

巖かで静謐な雰囲気の中で、着飾った男女が、互いに思いを告げ合うのかもしれない。

しかし今の2人ときたら、模擬戦直後で汗だく、細かい傷だらけ、土埃やら何やらの汚れだらけ。しかも、互いに敵同士として戦っていて……勝敗がついた、その直後。

2人共、正装は正装でも、ヒーローコスチューム。着飾っている、の

方向性が違う。

周囲は演習場で、かなり壊れて、瓦礫なんかもあちこちに。

ロマンチックさのかけらもない。ムードもへったくれもない。

それでも不思議と……全てを出しきって、己の全てを見せ切った状態でのそのやり取りは、当の2人にはしっくりくるものだったらしい。

「……ってどうか、そこは永久って呼んで言ってくれるところじゃないのー、緑谷ー?」

「へあ!? え、えーと、それはその……ごめん、何か……まだ、かも。慣れるまでその……気長に待ってくれると嬉しい……」

「ふーん……さっきは呼んでくれたくせにい」

「……えっ!? ……よ、呼んでた!? いつ!」

「やっぱ無意識かい、あのへん」

そんな、最後までおしやれとは無縁な、気の抜けるやり取りと共に。

この日、栄陽院永久は……緑谷出久のものになった。

第101話 TS少女：ピリオド

S i d e . 緑谷出久

僕が今住んでいる部屋の……その隣の部屋の扉。
今まで、もう幾度となくくぐった扉。

なんなら、この扉の先の部屋で『楽にして待っててよ』なんて言われてくつろぐのまで、日常のほぼ一部になりつつある僕ではあるが……今日ばかりは、その……この扉をくぐるのに、かつてないレベルの緊張を覚えていた。

それこそ、初めてこの部屋を訪れた時以上に。

恐らく、この扉を開けば僕は……未知の領域に踏み込むことになる。

多分、再びこの扉をくぐって出ていくときには、その……何というか、色々と、今の僕とは違う僕になって帰ることになると思う。というか、できるならそうになりたい。

あの時、あの場で、あんなことを言って……そして、ああ返してもらったからには……

(で、でも、いざとなるとちよつとコレ……緊張する……さすがに……！ど、どうしよう、どんな顔して会えば……っていうか、何を話せば……!?! というかそれ以前に、まともに顔を見れる気がしないっていうか、い、今思えば僕なんであんな場面であんな……も、もうちよつとああいうのって雰囲気を大事にするべきだったんじゃない?! いくら全力の模擬戦で栄陽院さんに勝って調子づいてたからって、あんな勢いで言うみたい……だとしたら、その更に、成功したというかOKもらった勢いの延長でこうして部屋にお邪魔しようとしている現状も決して褒められたものでは……せ、せめて心を落ち着かせて、緊張をほぐすために気の利いたジョークの一つでも……う、うん、やっぱりここは一旦ちよつと心を落ち着かせて色々準備してから出直し……)

何か色々考えた結論として、一旦部屋に戻ろうとして……

「うおおーい待て待て待て！ ちょっと待て緑谷!? え、何帰ろうと
してんの!?!」

ボタン！ と勢いよくドアを開けて、栄陽院さんの方から出て来た
!?!

見慣れたはずのエプロン姿が、何だろう……妙に艶かしく見える
……ようなそうでもないような。

少なくとも、本人が出て来たタイミングとかテンションはコメディ
ちっくだったからな……いや、今の状況ならそれもかえってありがた
いかもだけど。

ってというか、ホントにすごいタイミングよく出て来たな……待って
たの？

「待ってたっていうか……まあ、緑谷の接近を察知して玄関まで出て
きて、せつかくだから定番の『ご飯にする？ お風呂にする？ それ
とも……』ってやろうとしたところだったよ……まさか帰られそう
になるとは思わなかったから、折角作ったキャラも表情も全部壊れた
けど」

「そ、そうなんだ……ごめんというか、ありがとうというか……」

どうしよう、何か僕もつたいないことしちゃってみたいだ。……
率直に言って、そのセリフを行ってくる栄陽院さん……見たかった。
そしてできることなら、その3つから選びたかった。

どれを選ぶのかって？ あー……ノーコメントで。

「いやまあいいんだけどさ……それよか、そんな緊張しなくていいか
らさつさと入りなつて。来てもらっておいてなんだけど、用事自体は
もう半分以上昼に済んでんだからほら、緊張しないで」

くいつ、と、ドアを開けて部屋の中を指し示す栄陽院さん。

幸か不幸か、今のやり取りのおかげで多少緊張はほぐれたので、お
邪魔します、と断って部屋に入らせてもらう。

それでも……1歩1歩進むごとに……見慣れたはずの部屋の光景
が、なんというか……違ったもの、違った雰囲気に見えてきてしまう
のは……うーん……やっぱまだ緊張してるのかな。

あるいは、今までにない何かを『期待』してるのか……。

「あ、そうだなみに緑谷、一応聞いてみるけど……ご飯にする？ 食事にする？ それとも飯？」

「えっ!? あ、そ、そうだな、えっと……いやちよつと待って、それ全部同じだよね？」

言い方変えただけで、どれ選んでも食卓に行くコース一択だと思うんだけど。

『お風呂』と『それとも……』はどこ行つたの？

「うん。ぶっちゃけ丁度料理が出来立てだから、出来ればもう今熱いうちに食べてほしいなー、と思つて。ほら、あつため直すより出来立てが一番美味いからさ」

「あ、うん、そういうことなら……いただこうかな。じゃあ、ご飯で」「はいはい了解、仕上げつていうか準備するから、適当に座つて楽しんで待つてて」

待つと言つてもほんの数分ほどで、配膳とか色々済んで、食卓の上に、豪華な料理が並んだ。

期末試験（追試含む）無事に終わった記念+αつてことで張り切つたそう。いつもではあるが……どれもこれも美味しそうで目移りしちゃうな。

ただその……美味しそうだけど、料理とか食材のチョイスに、何かしらの思惑を感じなくもないメニューな気が……する、かも。

白米のご飯はいいとして……おかずが色々豪華だな、量もある。カツオのたたきやマグロの刺身、カキフライにサザエのつぼ焼きなんかの海の幸。

肉類では、牛肉のステーキ（焼き加減レア）に、トンカツ……レバニラや鴨肉なんてものも。

サラダはトマトとチーズ、アボカドなんかで彩り鮮やか。見た目にも美味しそう。

汁物は……アサリの味噌汁か。……貝類多いな。

献立に、和洋中の統一性はないけど……どれも美味しそうだ。というか、美味しかった。

トレーニングで体が作られているおかげで、今の僕は前までより結構食べるようになってる。

普通の男子なら苦しくて食べきれないような量でも、ペロツと行けるくらいに。

まして、ここ数日……試験やら追試やら、そして『ワーキングホリデー』やらで体を酷使してきたから、ご飯が美味しいのなんの。

肉、魚、貝、野菜、そして米……美味しい料理と、それを消化吸収して得られる栄養素を、体が渴望しているのがよくわかる。舌とか頭だけじゃなく、体が喜んでる感じだ。また強くなるための、強い体を作るための最高の材料だー、って。

夕食にしちやガツツリめだったかもしれないけど、栄陽院さんと2人で、きちんと残さず全部食べた。ごちそうさまでした。

その後は2人で、何てことない穏やかな時間を一緒に過ごした。

最近話題のドラマと一緒に見たり、その合間に流れるCMで出てくる店や食べ物なんかについて『美味しそうだね』って話したり。

栄陽院さんがいつものぶどうジュースとワイングラス×2、おつまみのチーズやドライフルーツと一緒に持ってきて、なんちゃって晩酌みたいにして笑いながら食べたり。

今日が期末試験の『追試』だったわけだが、明日はちょうど日曜日。学校は休みだ。さらに言えば、『テウス・ロ・ウルト』の修行も休みにしてもらっているの、いつもよりゆっくりにできる。

……そう。ゆっくりにできるのだ、いつもより。

ちよつと夜更かしして、夜中くらいまで今日起きていても……その結果、明日ちよつと寝坊してしまっても、大丈夫なのだ。特別に。

そのことをわかつている僕は、普段なら『それじゃ、今日はこのへんで帰るね』つてお暇するくらいの時間になっても、のんびりしたらと彼女の部屋で過ごしていた。

栄陽院さんもそれを咎めることはなく、取りとめもない話題でゆったり話し続ける。

……彼女の方はどうかかわからないけど、僕の場合は……ただ理由も

なくここにいるわけじゃない。

きちんとこの後、言いたいこと、やりたいことがあつて粘つてるんだけど……た、タイミングとか色々考えちゃつて……ふ、踏ん切りとか決意みたいなのがまだ……い、いや、そもそもそういうのをしたうえでここに来たつもりだったんだけど……

こういう時つて、いつも栄陽院さんの方から話題振つてきてくれたからなあ……

で、でも、あの時もきちんと思えたじゃないか……自分から行動することが大事なんだつて。

何かしたいことがあるのなら……望むものがあるのなら！ 僕の方から動いて、伝えなきゃ！

……僕の考えすぎというか、自意識過剰とかでなければ……望んでくれているようにすら見える。その先を言つてくれることを、期待している的な。

態度以外にも、そう思う根拠はもう1つ。

そろそろ消化・吸収もあらかた終わる頃だと思ふんだけど、晩御飯として作ってくれた料理のメニューが……ね。

カツオやマグロなんかの青魚、カキやサザエ、アサリといった貝類。肉類全般……特にレバニラや鴨肉。

トマト、チーズ、アボカド……その他色々。色の濃い野菜や、乳製品。豆類など。

これらは全て、程度に差はあれど……俗にいう『精がつく』食材だ。しかも、迷信とかじゃなく……そういうのに必要な栄養素として科学的にきちんと立証されているそれ。

ここまで狙つて出してきたつてことは……うん。

それに、こう言つちやなんだけど……もう一番大事なところは超えてるんだ。OKももう貰つているに等しい。

僕が『求める』ならば、彼女が断つてくることは……まず、ない。あとは、僕の度胸の問題。

意を決して僕は……その直後、おあつらえ向きに話題が途絶えた夕イミングで、

「……あの、栄陽院さん」

「……！ うん……何、緑谷？」

どこか、僕の語調というか……雰囲気は今までと違うことを察してか、微妙に栄陽院さんの声にも緊張が含まれているようだ。

でも……彼女にその先を止めるつもりはないみたい。

……どっちにしても、僕はもう、引く気は……ない。

だから……

——でーんーわーがー、来た！ でーんーわーがー、来た！

「!？」

……すごいタイミングで、僕の携帯が鳴った。

力強いオールマイトの着ボイスに、その場の空気は完全にスマッシュ……じゃなくてクラッシュされ、ぼーぜんとした状態で、僕も栄陽院さんも……机の上に置かれているそれを見る。

……いつもは聞くだけで安心できて心躍るその声が、今日だけはちよつとその……うらめしい。

いや、オールマイトは何も悪くないんですけどね？ せめてその

……誰がかけてきたのかわかんないけど、タイミング……

画面を確認すると……上鳴くん？

「(ピツ) もしもし、上鳴くん？ どうしたの、こんな時間に？」

『おう緑谷！ 悪いな夜遅くになってから……あのさ、明日って空いてたりする？ 昼から』

「う、うん、たぶん大丈夫だと思うけど……どうかしたの？」

『おう、今日でどうにか全員『追試』終わって、めでたく全員林間合宿行けることになっただろ？ それを祝って、まあ打ち上げみたいなのやろうと思つてさ。追試メンバーで』

急で悪いんだけどさ、と付け足しながら、上鳴君はそう聞いてきた。

うん、それなら……大丈夫かな。明日も……午後なら。

追試メンバーと言いつつ、僕は付き添いだから厳密には違うんだけど……まあいつか。そこ指摘するのも野暮だろう……彼らからして

みれば、一緒に頑張った人たちは皆、誘いたいんだろうし。

上鳴くんに了承の返事を伝えて、僕は電話を切る。

ふう……思わぬハプニングだった。

そのまま少し、ちようどいいのでその『打ち上げ』を話題にして話し……頃合いを見計らって……

「……栄陽院さん」

「……！ うん」

何か、自動的に声のトーンが変わっちゃうな。

どくん、どくん、と鼓動が早まるのを感じながら、僕は思い切って

……

——TRRRR!! TRRRR!!

「!？」

また電話!? あれ、でもこれ、僕の着信音じゃない……栄陽院さんの?

すると栄陽院さんは、ズボンのポケットに入っていたスマホを取り出して……ああ、やっぱり彼女のだったんだ。

画面を確認して、僕に『ごめん』とジェスチャーで伝えてから、それに出る。

「あーもしもし、芦戸? どしたん、こんな時間に」

『ごめんねー永久、遅くなってから。あのさあ、明日って空いてる?』

昼からとか』

電話口から漏れ聞こえて来た声は、A組のムードメーカーの1人である芦戸さんのものだった。

ついでに言えば、彼女もまた、『追試』メンバーの1人であり……栄陽院さんをパートナーとして選んで参加していた。

ああ、考えてみれば当然か……同じように追試に参加したんだから、彼女にも誘いが来るだろう。ちよつと時間差だったけど……悪意を感じそうなタイミングだったし。

案の定、その誘いだったので、栄陽院さんも受けて……ついでにこ

んな会話も。

「あのさあ芦戸、その……何だ、打ち上げ？　場所って決まっていたりする？」

『場所？　いや、適当にカラオケとかファミレスかなーとか思ってたけど。時間遅いから電話とかで話し合うのも今日はまあ……アレかなと思つて、目星だけつけとくつもりだった。連絡はメールかLINEあたりで』

「そっか……あのさ、1コ提案あるんだけど。こういうこと言うのアレだけど……私のうちつて、八百万と一緒に結構……なんだ、セレブリティな枠組みに入るのね？　いや、自慢するつもりないけど」

『あーうん、永久つてそう言えばそうだったね。油断すると忘れがちになるけど』

「おい」

『あははは、ごめんごめん。それで、それがどうしたの？』

「うちの実家の系列店で新しくオープンした飲食店の招待チケット貰つてさ。1枚で4人までOKのが6枚もあつてめっちゃ余つてて……どうかなと思つて」

『そんなにあんの!?　多!?!』

あ、それさつき話した奴だ。確か、栄陽院さんがもらったのは2枚だけなんだけど、お義姉さんたちが『忙しくて行けないから』つて自分達の分2枚×2人分も押し付けて余らせてたつて。

「その打ち上げ、B組の奴らも来る？　だとすると、全部で16人……心操と青山は？　ああ、連絡つかない……それに忙しそうだった？　普通科も何かあんのかな……まあ、そういうことなら仕方ないか。でもそれならチケット4枚あれば足りるな」

『ちなみにどんなお店？　高級店とか？』

「いや、確かにちよつとおしゃれな雰囲気かもだけど、そこまで肩肘張った感じじゃないよ。中華料理のビュッフェのやつなんだけどさ」

『おおー、中華！　しかも食べ放題！　いいね、打ち上げにぴったり！

わかった、それ提案してみるね！　ありがと永久！』

「どーいたしましたして(ピッ)」

楽し気な打ち上げの予定が決まったところで……と。

……ええと、雰囲気ができるのを待つのもアレだ。もう夜遅いし……電話している間に、心の準備は済ませた。

よし、じゃあ……

——TRRRR!! TRRRR!!

また!?! え、何なのこのタイミングで、また今度は栄陽院さんの……誰だ? 芦戸さんかな……何か話忘れてたことでもあったのかな……??

栄陽院さんも、僕からの話の続きを期待してたみたいで、若干『何だよ……』みたいな表情になってスマホを操作し、

「はいもしもし……どしたん葉隠、こんな時間に」

『ごんばんわー、永久ちゃん。ごめんね夜遅くに。今いい?』

「うん、まあいいけど……何?」

今度は葉隠さん? 何だろう……彼女は追試メンバーでもないのに。

聞いてみたら、どうやら葉隠さんの発案で、皆で林間合宿の買い物に行かないか、っていう話になってるみたいだ。

ただ、さすがに明日とかは急は話だから断念して、来週末ってことになったらしい。

仲のいい女子メンバーにだけ今電話してて、他の面々には明後日以降、学校で話すみたい。

なるほど……合宿なら、色々準備とか必要だろうしな。それに、期末試験っていう、いわば試練を乗り越えたタイミングだし、楽しく買い物つてのもクラスの親睦を深める意味でいいかも。

葉隠さんとの話は割とすぐに終わったので、今度こそ……

流れも何もないけど……構うもんか。僕は、電話を置いた栄陽院さんの目を正面から見て……

——ピンポーン

インターホン!? 今度は来客だと!?

バカな……タイミングの悪さもそうだけど、今9時過ぎだぞ!? 夜の!

一体誰が……あだめだ、ここ栄陽院さんの部屋だから、僕が出るわけにはいかない。

玄関から見えないように、扉を閉めて身を隠して待ってる……

「母さん、何なのこんな時間に……」

「ごめんごめん永久、遅くに来ちゃって。今日泊めてもらっていい?」

明日、早朝からこの近くで仕事なのよね」

アナライジユだったのか!? ま、まあ、肉親なら……この時間に来てもまあ、セーフと言えればセーフかもしれないけど、……いや、それにしたってホントに何で……

「いや、別にいいけど……ただ、別の部屋使ってくれる? 頼むから、今日だけは」

「? それは構わないけど……あら? ああ、あらあら? あ、そういう感じ!? ついに!」

「……察したなら頼むから……」

「うんうん、わかってるわかってる。ふふふ……ごゆつくり♪」

ばたん、と音がして、アナライジユは扉を閉めて去っていったようだ。

……最後の『ごゆつくり』、やけに音量大きかった気が……ひよつとして、僕がいることに気づいてた? いや、それも当然か……玄関に思いつきり靴置いてたし……

でもそれはつまり、あの感じだと……こ、これからすることを（しようとしていることを）理解した上でなお認めてくれたっていうこと……よし、これはもう……行くしかない。

……わずかに聞こえて来た『納品書要る?』『いや、いらなから』っていうやり取りの意味がちよつとよくわからなかったけど……まあいい。

リビングに帰ってきた栄陽院さんも、幸か不幸か、アナライジユの言葉でちよつと意識して赤くなってるし……タイミングも雰囲気も、今なら凶らずも悪くない感じだ！

今度こそ、僕の口から……

——でーんーわーがー、来た！ でーんーわーがー、来た！

……なんでき。

今度は誰だよ、と思いつながらスマホを手に取る。……着信元は……んん!？」

「も、もしもし?」

『H A H A H A! やあ、緑谷少年、夜分にすまないね……今ちよつといいかな?』

と、着ボイスと同じ声が電話の向こうから聞こえて来た。まさかのオールマイト本人である。

どうしたんだろう、こんな時間に……

「あ、はい、大丈夫ですけど……どうかしましたか?」

『うん、あ、でもその前に……君今、1人? ちよつと込み入ったことも話したいんだけど……』

「あ、はい、ちよつと待つてくださいね」

栄陽院さんに断って、廊下に出る。

あのちよつと言いだ感じ……何か、人には聞かれたくないことを話すようだった。もしかすれば、『ワン・フォー・オール』とか、その関連かもしれない。

なら……悪いけど、栄陽院さんに聞かれるわけにはいかないからな。

話をする準備ができたと伝えると、オールマイトは、

『うん、実はね……ナイトアイのことなんだけど』

「? サー・ナイトアイですか?」

『最近、事務所というか、ヒーロー業を暫く休業……とは言わないまでも、規模を縮小してやってるみたいだね。いやまあ、最近と言っても

ここ数日くらいのことらしいけど……何か知らない？』

ナイトアイが……？ 知らなかったな。

いやでもそういうえば……前に栄陽院さんが、ナイトアイに呼び出されて行ったっていう、壊理ちゃんが入院してる病院で……『ナイトアイが来るはずだったのにバブルガールだけが来てた』って言ってたわけ。それも何か関係あるのかな？

オールマイト曰く、ナイトアイはそのサラリーマンっぽい見た目通り（？）事務とかデスクワーク的な仕事がすごく優秀らしく、人の何倍もの量の案件をいつも同時進行で進めているんだって。オールマイトのサイドキック時代からそうだったらしい。すごいな。

そうは言っても、ナイトアイも人間だ。たまには休みたい気分にもなるんじゃないかな……特に今は、『死穢八斉会』の摘発、『オーバーホール』の逮捕っていう大仕事を完遂したばかりだし。

何にしても、特に体を壊してるとかじゃなければいいんだけど……と思っただら、

『まあ、私としてもそれは同感なんだけど……ナイトアイには、なるだけ早く連絡を取らなきゃいけない理由もあるからね。というか、そのことをナイトアイも承知してるはずなのに、私に連絡もなしで……と……とか、なんか連絡自体つきにくいみたいでさ、少し気になるなと』
「理由……？」

『覚えてるかな、緑谷少年。ナイトアイが君と……栄陽院少女を『ワーキングホリデー』に招いた理由。君の強さを見るためと、栄陽院少女から話を聞くため……だったろ？』

「！ はい、そうでした。あ、もしかしてそれで？」

『うん……まだ私、その見解というか結果というか、彼に聞いてないんだよね。その様子だと君もかな……まあ、前者に関しては正直心配してないけど、後者については……まあ、心配はこっちもしてはないけど、やっぱり気になるから、電話でも聞きたいんだけど……なぜか、ナイトアイにそれを聞くこうすると、『少し時間をくれ』ってほぐらさされるんだよ』

「……………」

ナイトアイが、なぜそんなことを……栄陽院さんに関して、何か気になることでもあるのか？

『ワーキングホリデー』中は、特におかしな様子はなかったと思うけど……なんだったら、彼女の事務作業とかそのへんの手際に関しては、褒めてたくらいだし。サイドキックのバブルガール共々、思わぬ戦力だつて評価してたはずだ。

それに、ナイトアイは言いたいことがあるならばつきり言うタイプの人だ。それが例え、オールマイトが相手であろうと、遠慮せずに。そんな彼が、はぐらかす……確かに、気になるな……

何か言えない理由があるのか……それとも、言う前に何かやることがある？ ヒーロー業の一時縮小や、その割に最近忙しそうにしてるつてのは、そのためか？

何にしても、僕は残念ながら何も知らないのです、そう伝える。

『そうか……わかった。ありがとう。すまないね緑谷少年、遅くに変な用件で電話して』

「いえ、そんな。じゃあ……おやすみなさい」

『うん、お休み……あ、それと緑谷少年、もう1ついいかな？』

「？ はい、何ですか？」

『ええと、上手く言えないんだけど……おめでとう。栄陽院少女と仲良くね？』

「へあ!? な、何っ……あ。あつ、えつと、あの……はい、ありがとう
ございます……」

……そう言えば、そうだった。オールマイトはもう知ってるんだ。
僕が、彼女に、その……告白したつて。

……というか、あんな場所で、あんな場面で告白なんてしたらそりゃ……当然なんだけどね。

何せ、あの時はもうなんか……気持ちが高ぶつて、目の前の栄陽院さんしか見ていなくて忘れてたけど……『追試』の会場で……試験中だったんだから。

生徒の安全確保や、『追試』自体の実技採点のため、先生たちが見てたんだから。

ただ、僕の場合は少し特殊だ。何せ、継承される特殊な個性にして、オールマイトの秘密……ナチュラルボーンヒーローとしての立場の秘密にも関わる『ワン・フォー・オール』が絡んでくる。

だから僕の試験——いや僕のじゃなくて瀬呂君のだけだ——に関しては、採点役を選別し、オールマイトとリカバリーガール、根津校長だけで主に見ていたそうさ。上手いこと役を割り振って。

追加で後から知らされることになるのも、せいぜい担任の相澤先生くらいだそうで……まあ、そのくらいは甘んじて受けるべきだろう。生徒同士の関係で、把握しておかなきゃいけないこともあるだろうし……

それ以外は、プライベートというか、生徒の個人情報ってことで一応公にはしないでいくれるとのことだった。まあ、何か事情があればその限りではないけど。

ともあれ、オールマイトにお礼も言って……通話、終了。

しかし、それを置いといても、ナイトアイのこととか、色々と気になることはあつたけど……まあ、考えても仕方ないか。今は。

……それよりも……今度こそ……

もう何度目かわからないくらいではあるが、決意をし直して、廊下から部屋に戻ると……

「……えっ？」

そこには……机に突っ伏して寝てしまっている栄陽院さんが。

え、うそ……寝……!? こ、このタイミングで!?

いや、それはあんまりじゃ……確かに僕、何度も言い逃ししちゃったけど、だからってこんな……それに、まだ10時だよ!?! 早寝早起きは心がけるとはいえ、起きてられない時間って程でも……

(……ん?)

失意とか落胆、困惑の只中にあつた僕は……ふと、栄陽院さんの目の前に置いてある、あるものに気付く。

それは、さつきまで僕も一緒に飲んでいた、いつものぶどうジュース……だが、さつきよりビンが1本増えている。

片方は空みたいだ。結構長く話しちゃってたから、待ってる間に、

新しいの開けたのかな……なんて思っただけ……よく見るとその新しい方のビンが、いつも飲んでいるものと違うことに気づく。

ラベルのデザインはほとんど同じ（ドイツ語だから何書いてあるのかは相変わらず不明）だけど、張つてある値段シールが、いつものよりさらに高い。倍以上だ。

加えて、ラベルの下の方にちっちゃく『7・7%』っていう表記が……

……!? これ、ジュースじゃなくてワインじゃないか!? アルコール入ってる奴だ!

え、何でこんな……そういえば、コレの輸入先の業者は、ワインも作っていた（とうかむしろワインが本業で、ジュース『も』作っている業者）はず……納入されたジュースに混じってたのか!?

それとも、アナライジユかビスケさんあたりが晩酌用に持ってきたものが混じった!? 2人共、時々栄陽院さんの部屋で、料理持ち寄つてそういうことしてたはずだし……

ピンは冷たい。冷蔵庫に入ってたみたいだ。どうやら栄陽院さん、ラベルよく見ないで出して……見た目ほぼ同じだから、間違えてコレ飲んで寝ちやつたみたいだな……

いつもの彼女ならこんなミスしないのに……緊張してたのかな、やっぱり、彼女も。

しかし、これは……今日は……もう、仕方ないかな……

無理、だよな……いくら何でも、起こしてまでつていうのは……

正直、落胆は隠せないけど……こうなってしまうものは仕方ない。今日は、その……諦めて、明日以降また……機をみて、伝えるしかないだろう。

それに、アルコールが入ったとはいえ、こんなにすぐ寝ちやつたつてことは……疲れもたまつたのかもしれないし……いや、たまつてないはずないか。『ワーキングホリデー』に加えて、この間の期末試験や、今日の追試もあったんだ。

特に今日は、僕との戦いで、『エネルギー』ほとんど全部使い果たすほど消耗させちゃったし……それなら、このままゆつくり休ませるのも、決して悪い選択ではない、はず。

ともあれ、ここにこのまま寝かせておくことはできないだろう。

体が痛くなつちやうかもしれないし、せめてベッドに運んで寝かせなきゃ。

起こしてしまわないよう、注意して優しく抱え上げると、彼女の部屋に行く。

192cmの栄陽院さんでもゆつたり横になれるほどに大きなベッド(たぶん特注)。

その布団を軽くめくり、そこに彼女を横に……したと同時に、ふと気付く。

このまま寝かせちゃつていいのかな……服、部屋着とはいえしわくちゃになったり、寝汗で匂いがついちゃうかも……パジャマか何か……。

前に僕が同じようなことになった時は……きちんと丁寧に寝間着に着替えさせてくれたっけ。僕もそうした方が……待てよ？

(栄陽院さんって、寝る時たしか……な、何も着な……)

ということは、ふ、服を脱がせ……い、いやさすがにそれはまずいよな……

悪いけど、しわとか匂いは、後々洗濯とかアイロンとかで何とかしてもらおうとして、このまま布団を……

「ん、んう……っ！」

ぐいつ ↑ 身をよじり、襟元のあたりを苦しそうに引っ張る

……寝苦しい、のかな？

いつもと違う格好で寝てるから……

「……っ……(ぐくり)」

これはアレだから……必要なことだから。

栄陽院さんが寝苦しそうにしてるから、少しでも楽にしてあげためだから……多分このくらいじゃ怒らないから……もし怒られたら謝るから……

服が元々ゆったりめだったのが幸いして、そんなに苦勞せず脱がせることができた。

その最中にあちこち『ぷにつ』とか『ぎゅむ』とか当たったり擦れたりしてこつちも大変だったけど………どうにかこれで、上下下着姿にまでは脱がせた………。

……これは流石に無理。

モラル的のところもそうだけど(そつちはもうとつくにアウトかもだけど)………僕が我慢できなくなる。

さつき食べた『精がつく料理』の数々は見事に仕事をして………そしてここまでの刺激で、見事に一部分が『変形』しちゃってるので………割と理性、ギリギリなんで………

今更だけど………この状況、傍から見たら………完全に夜這い、どころか性犯罪の現場だよね。

同級生の女の子が寝ている所に、一部分を変形させながら服を脱がせて息を荒くしている………しかも、僕は何もやってないとはいえ、寝ているのは酒のせい(事故)、というおまけつき。

酔わせて寝込みを襲つていと言われたら、酒の部分以外反論できない。ヒーローどころか、人として終了である。

(こつちは自分で、というか自力で処理するとして………さつきと部屋から退き——ん、っ!?)

しかしその時、服を脱がせるためにベッドの上にいた僕は………ベッドの縁から足を踏み外してしまい、ガクツと体制を崩してそのまま下に倒れ………

——どさっ! (むにゅ)

「むぐっ………!?!」

「ぐっ………ほっ!?! な、何………えっ?」

そのまま、寝ている栄陽院さんの上に頭から思いっきりダイブしてしまっただけ!?!

絵面はともかく、実態は完全なるドジ。しかも結構勢いづいて突っ込んで………というか落下してしまっただけ、その衝撃は結構なものだったと思う。

ル○ンダイブじゃなくて、ボディプレスだったもんな最早……起きた瞬間の栄陽院さんの声も、苦しそう十驚いた感じだつ、た……し……

「……そう……『起きた』瞬間の……」

「……………」

「……………」

……よりもよって、落下位置と身長差の関係で、彼女の豊富なバストにうずもれる形になっていた頭を、恐る恐る上げると……それはもう見事に、目があった。

彼女の……困惑している目と、僕の、色々死にそうになっている気がする目が。

さつき言った通り、この状況はただ滑って転んでボディプレスなんだけど、彼女からすれば……いつの間にか寝室に運ばれていて、下着姿にされていて、僕（一部変形済）がその旨に顔をうずめているという状況に他ならないわけで……

「えっ、と……緑谷……？」

「ち、違うんだ栄陽院さん！ は、話を聞いてお願い！ その、こうなってるのは不可抗力というか、僕はただ単に栄陽院さんの服を脱がせてただけでああそれも別にやましいことを考えてじゃなくてほら栄陽院さん苦しそうだったし寝る時裸だつて聞いてたからいや裸って言っても全裸にするつもりはなかったしとととととにかく誤解なんだ！ お願い信じてくだ……」

「……………誤解、なの？」

「……………え？」

ふと見ると……栄陽院さんは、少しだけ顔を赤くしつつ……どこか、微妙に残念そうな表情をしていて……少なくとも、怒っている様子は微塵もない。

「……というか……何かを期待しているように、見えなくも……」

「いや、その、まあ……いきなりっていうか、気が付いたらこんなこと

になつてて、びっくりはしたけどさ……別に私、その……何も……うん……嫌、とかではないというか……」

「……えっ、あ……!」

「……ね、緑谷……誤解?」

「ご、誤、解……だけど、誤解じゃなくなりそう……」

思わず、といった感じでそうつぶやいてしまった僕。

すると栄陽院さんは、残されていた最後の衣服……上下1枚ずつのそれを、自分で取り去った。僕の、目の前で。

「ねえ緑谷……今日、言ってくれただろ? 『全部をくださいって』」

「……う、うん」

「それに私も『はい』って言つたろ?」

「……うん……」

「なら……今、目の前にあるものは? 頭のとっぺんから足の先まで、中も外も、髪の毛一本にいたるまで……誰のもの?」

「……僕のもの。栄陽院さんの全部は……僕の、ものだ」

「そう。なら……遠慮なんかせず……」

召し上がれ?」

(あつ、ダメだこれ、やば……)

僕の理性が、わずかでも働いていたのは……ここまでである。

そして、気が付けば……

(……黄色……くはないな、別に)

気が付けば……朝。時刻は、午前6時30分。

窓のところのカーテンを開けて……最初に思ったことがそれだった。

よく、そういうことした翌朝は太陽が黄色く見えるっていうけど……黄色いと言われればそうも見えるし、いや別にそうでもない、普通というかいつも通りだって感じもするし……っていうか自然光って色ないよね。白とかだよ。

なんて、中身のない、取りとめもないことを考えてしまうのは……まだどこか、僕の心が冷静でないからなんだろうか。

朝の外の景色を見て落ち着こうと思ったけど……ちよつと無理かもだな。まだ。

朝、一発目で目に飛び込んできた光景が、刺激的過ぎた。

というか、その瞬間に、昨日の夜のことまで全部一気に思い出して、その刺激に叩き起こされたというか、何というか。

ふと、斜め後ろの方……ベッドの方を見る。僕自身もさつきまで寝ていた、寝心地のいいベッドを。

ベッドの片側半分というか、人1人分のスペースが、不自然な空白になっているベッドだが……もう片側半分には……彼女が寝ていて、まだ寝息を立てている。

この部屋の主であり、さつき寝ぼけまなこの僕を一瞬で覚醒させた犯人であり……つい昨日、僕のものになった……栄陽院さんが。

布団で隠されて見えないけど……生まれたままの姿で。体中を、寝ている布団ごと、色々なものでべとべとにして。

……汗とかもちろんそうだけど、半分くらいは多分……僕由来のものである。

何とは言わないけど……うん、色々アレだから。

僕もそうだが、栄陽院さんは……『デウス・ロ・ウルト』のトレーニングの関係もあって、午前5時くらいには起きる習慣が身についている。

それが、こんな時間までぐっすりってことは……よつぽど疲れ

ちやっただらう。

……その犯人というか……『無理させた』のは僕んだけどね……
昨日の夜。

そのことを思いだすと、昨日あんだだけやったのに、色々むずむずしてくるといふか……つていふか、ちよつと肌寒いな。いや、当たり前か……今更だけど、僕も起きた時のまま……裸なんだし。

暖を取ろうと布団に入ろうとして……しかし、その布団には先客と
いふか、栄陽院さんが今既に入ってるわけで……でもさつき起きるま
では僕も入ってたわけで……そもそも昨日あんだけのことをして
いて、布団くらいで恥ずかしがるのも……いやでもやっぱり多少は恥
ずかしいわけで……

……でも……いい、よね？ もう、そのくらい。

もう……『僕のもの』なんだから。

第102話 栄陽院永久：オリジン

……だるい。

でも、嫌なだるさじゃない。

心地よい疲労感というか、いまいち体力が足りて無い感じの中で、私はキッチンに立ち……体力残量とは裏腹に、最高の気分の中で鍋を振っていた。

あ、いま朝食作つてるところ。メニューは朝からガッツリ肉。でも重すぎないように気持ち赤味多め、脂身少な目の、スタミナの元になるようなあたりを、野菜と一緒に用意。

ベーコンにウインナーとまあ、朝食の定番はこの辺かな。あとは卵とか……スクランブルエッグとオムレツのどっちがいいか……いや、あえてのゆで卵もありか？

……なんだ、この……こんな風に献立を考えてる時間すら楽しい。いや、いつも楽しいんだけど、今日は格別というかね。この後、これらを緑谷に食べさせることを考えると……うん、なんか、新妻気分というか。

昨晚、私はついに、身も心も緑谷のものになった。

なんかそこに至った経緯は色々とツツコミどころがあるものだったけど……いやまあ、まさかボディプレスで起こされるとは思わなかったって言うか……そもそも間違えて酒飲んで寝るとか何をしてんだ私は。

けど人生万事塞翁が馬、何が転んでいい結果になるかわからないもんで。

そのあと無事に手を出してもらえて、朝目が覚めたら……2人一緒に布団で。生まれたままの姿で。

しばらくそのまま緑谷の寝顔を眺めていたものの、このまま寝続けるのもダメだろってことで、こうしてキッチンに立ったわけだ。

昨日は『追試』のせいで体力のストックがほとんどなく、それも夜

使い果たしてしまったので、起きて食事を作るのは少ししんどかった。

けど、誰のためになる苦労かを思えば……まあ、現金なもので、その疲労感も、むしろ労働へのモチベーションに早変わりである。

今まだ緑谷は寝てるけど、起きた時にすぐに美味しい朝食を食べてもらえれば……いやむしろ、朝食の匂いで起きてくるなんてシチュエーションも王道で良きかな。

（ふへへ……あーだめだ、顔がにやける……コレ暫く続くな。今日休みでよかった）

ずっと温め続けて来た思いが成就したっていう幸福感は、さつきからずっと私の心の中に居座り続けている。油断するとそれが表情に表れてしまうくらいに。

……今日が学校だったら、芦戸か葉隠あたりに『何かあったの!?!』って迫られてた気がする。

仮にその2人には大丈夫だったとしても……麗日とか取陰あたりには100%気づかれる。

何があったかまではわからないだろうけど、何かあったことは気づかれる……と思う。

いやまあ、私としては別にそれでもいいんだけどさ。

前々から言っている通り、私の望みの形……その最も歪なところが『みんなだ』幸せになるというものだ。だから、知られるどころか、ここに麗日や取陰なんか『加わる』ことすら、別に構わないというか、むしろ歓迎……

「……………」

そこで、思考がふと止まる。

自分の胸の中に……昨日までとは違う何かがあることに気づく。

……えっと、何だろうコレ？

……優秀なオスは、群れを率いるべき。

同じ男を愛する者同士、みんなで仲良く幸せになろう。緑谷は、そのくらいにはいい男だ。現に今もこうして、何人もの女の子に好かれてるわけなんだから。

だから、彼が望むならハーレムだって全然ありだ。

何なら私は、正妻が誰になるか、自分の順番がどこに来るかすら、別に拘らない。

緑谷を中心に、麗日も、梅雨ちゃんも、取陰も、塩崎も……あと、はつきりとはわからないけど、それらしき気配がある他の同志たちも……皆で幸せになれるように尽力しよう。

皆が納得してくれて、緑谷が望んでくれるなら、私は大歓迎だから。

(……そう、思ってたはずなんだけどなあ……)

ベッドですやすやと眠る緑谷の寝顔を思い出すたびに……今まで私の中になかった『思い』が、何やら染み出してくるような感覚を覚える。

彼と、『2人で』幸せに過ごしたい、というそれが。

……え、もしかして私……ハーレム願望、なくなってる？

☆☆☆

その後すぐに緑谷が起きて来たので、思考はいったん中止。

ちよつと照れ臭い感じになりながらも、『あらためてこれからもよろしく』って感じでいい雰囲気になって、そのまま食事。

朝食が終わった後は、緑谷は色々やることがあるってんで、部屋に戻っていった。

まあ、昼というか午後には、『追試』メンバーの反省会というか、お疲れ様会的なアレがあるので、また会うことにはなるけども。

その間、午前中の暇な時間を使って、ぼーっとしながら考えてみた。さつき私の頭の中に浮かんだ疑問というかなんというか、について。

……結論から言うと、私の中にあったハーレム願望ないし、肯定的な感情は……なくなっていた、とは言わないまでも、大分なりをひそめていた。

どっちがいいかと問われれば、断然『2人で幸せになる』に軍配が上がるくらいには。

もちろん、全く魅力的に思わないわけじゃない。温泉で麗日達に語った『ハーレムの利点』その他についての評価とか考え、単純な魅力みたいなのも相変わらず持つてる。

何より、緑谷がそう望むなら一も二もなくそうするつもりではあるが——とはいえ、彼は誠実で真面目なのでそういう感じには、少なくとも自発的はなさそうだが——何だろうな、自発的に『ハーレム作ろうよ、みんなで幸せになろうよ！』って感じの感情が……あんまり、湧き出てこない。

何でだろう、と考える中で……ふと気付く。

……さつきから『ふと』思ったり気付いたりすることが多いな……それだけ、たった一晩の間に、私の心に大きな、あるいは数多くの変化が起こってるってことなんだろうか。

そしてどうやら、その根源となっている『変化』にも気づけた。

「なんか、今の私……女だな」

ぽつりとつぶやいたそのままが、私の気づいた内容だ。

もちろん、あっちの意味での『女』にもなったというか、緑谷にそうしてもらったというか……ただし私が言いたいのは、そうではなく、私の『心』そのものだ。

男だった前世の記憶を持っている私は……心とか人格は女だが、男としての感性や価値観みたいなものを結構持っていた。そのせいで、自分の容姿に無頓着だったり、無防備だったりっていう、今の私が形作られている。成長する中で、そういうのがうまい具合にミックスされて。

よくあるTS転生ものの小説みたいに、心は男、みたいな感じではない。私は言ってみれば、男だった記憶を持っている女なのだ。

しかし、『女』になって迎えた朝、ないし今日……それまでであった『男』としての感情やら何やらが、ほとんど消え去っていることに、さつき気づいた。

全部じゃない。まだ多少はそういう感性はあるし、今までの16年

弱の人生で性格の一部として組み込まれているそれは普通に残っている。

ただ、要所要所でちよいちよい現れていた、男っぽいもの考え方……『ハーレム願望』なんてその最たるものだと思うが、それらがあらかたなりをひそめているのだ。

……これってひよつとして、『女』になったことが原因というかきっかけで……私は本格的に、女としての私の感性を手に入れたとか、『前世Ⅱ男』であるがゆえにこびりついてた、時に歪にも見えていた感性が洗われて落ちた、みたいな感じになるのかな。

つまりこれが、私の……TS少女としての感覚ではなく、正真正銘、女の子である『栄陽院永久』としての感性、ってことなのか？

……わからん。実感わかん。

よし、考えてもあんまり意味なさそうだからこれ以上は。やめとこ（思考放棄）。

ともかくにもアレだ。究極的には、緑谷に喜んでもらえて、幸せになつてもらえればそれが一番なんだから、いつそそれを基準にしよう。

さて、と……休息は十分にとつた。さーて、元通りの生活に少しずつ戻していかなと……まずは月曜日の授業の予習からだな。予習復習、大事。

昼前には待ち合わせ場所に行かないといかんし、軽めにやる。

その日はもう、何事もなく終わった。

いや、『何事もなく』はないな、色々はあった。

昼食を取りながらやった『追試』の反省会では、A組もB組も一堂に会して、まー賑やかに行われた。

もともとパーティや宴会系の企画にも沿った形で利用できる店だから、そのへんは問題なかったし……あっても私の方でどうにかするつもりでいたけど。

比較的リーズナブルでありながら本格的な中華料理が楽しめる店だつてことで、今話題の店だ。何人かこの店のこと知つてて、『ここで食べられるのかー!』つて嬉しそうにしてたな。

緑谷や飯田、塩崎や八百万なんかは、食べながらも色々建設的な意見を交わしていた。今回の経験を糧にして、より一層強くなるため、ヒーローとして高みを指すために。勤勉な面子が集まると、どこでもきちんと勉強会になっちゃうんだな……そういうの、嫌いじゃないけど。

それに、いつの間にか、と言えばいいのか……八百万なんだが、少し前まであつた、自信なさげな態度がなくなっている。入学直後……ともまた違うようだが、向上心に溢れて、なおかつ余裕もある、やわらかで力強い感じの雰囲気になつていた。

というか、追試の前から割とそんなだつた気も……期末試験で何かあつたのかな？ ペアは……轟と一緒にだつたはずだが。

上鳴や瀬呂、芦戸といった基本賑やかなメンバーは、互いの健闘を称え、今後どうしたらもつと強くなれるかな、かつこいいかな、かわいいかな……なんて話しながら、楽しそうに騒いでいた。

息も話題もよくそんなに続くな、つて感じで。無事に林間合宿に行けることが決まった喜びもあつてか、まだまだあのへんのにぎやかさは収まりそうにないな。

賑やかに加えて暑苦しいのが、切島と鉄哲のいるあたりだな。ノリとかはガヤ組と近いけど、互いの健闘をたたえ合つて『次もがんばろーぜ!』つて火をつけ合つてるあたりがね。

そして音量も大きい。普通の店だつたらギリギリでアウトなレベル。店員さんに怒られるかも。

砂藤、障子、骨抜なんかも楽しんでいるようだが、上鳴達よりは落ち着いて感じでゆつくり楽しんで、談笑しているようだ。

……というかこの3人、食事風景中々独特で見てて面白い。

砂藤はスパイシーなものよりも、杏仁豆腐なんかの甘いものを好んで持ってきて食べてる。この店はそういうのも充実してるからな……テーブルに結構な量の甘味が並んでるのは壯観、かも。

障子は触腕に口を複製して食べてる……のはいつもと同じだが、スパイシーなものが多くいからか、時々口を休憩させて、新たに別な口を作り出してそっちで食べてたりしていた。舌酷使したのか？

骨抜は歯がむき出しの（ぶつちやけ初見、パツと見虚ホロウみたいだって思った）形だから食べにくいのかなって思ってたけど、普通に食べてた。……見た目はどうしても独特だが。

あと、爆豪も参加してたのには普通に驚いたかも。こういうの『誰が行くかボケ！』ってバツクレそうだと思ってたんだけど……切島に聞いたら、店のことを調べて、本格的な四川料理なんかもあると知って参加を決めたようだった。

あー、爆豪辛いのが好きだっけね…：そういや、いかにもって感じの麻婆豆腐とか、火鍋ほごうとか、辣子鶏ラーズージーなんかも食べてたな。さらに唐辛子とか山椒振って辛くして。

そして、そんな面々を順繰り回って煽ったり、しかし時には加わって騒いだりしているのが、ご存じ物間である。

もつとも、さすがに今回まで空気悪くするつもりはないようで、あくまでにぎやかし程度に『煽る』にとどめてるようだが。そしてそれを横から吹出が『まあまあ』って抑えたりして。

もちろん彼ら自身も食べて飲んで楽しんでるようではあるけど。皆、楽しんでてもらえて何よりだ。場所とチケットを提供したかいがあったというもの。

そんな感じで楽しいひと時を過ごし、2時間弱ばかりで解散。

そこからは各自、買い物したり遊んで歩いたり、まっすぐ帰ったりと思いきいに過ぎたことだろう。

ちなみに私は、ついなので色々買い物して帰った。日用品とか、本とか。

緑谷もそうみたいだが、別行動だったので何を買ったのかはわからない。

で、その買い物の中……完全に偶然ではあるんだが、取陰に会った。

彼女も買い物途中だったみたいだが、私を見つけると『おー!』と機嫌よさそうにして歩み寄ってきて……しかし少しして、何やら訝し気な表情になった。

かと思ったら、ニヤニヤといたずらっぽい笑みを浮かべて……え、嘘、気付かれた？

この反応……朝に予想した通りか。

何があつたかは気づかれてない。が、何かあつたことには気づかれた、らしい。

……ちようどいいので、あんまり細かい部分はぼかしつつ……それとなしに相談してみる……というか、懺悔、ないし告白することにした。

『ワーキングホリデー』の時、ハーレム願望とか推奨とか言つてたけど、心変わりしたかもつて。

ちよつとあることがきつかけで……女の子大勢じゃなく、自分という1人を緑谷に見てもらえるっていう形が魅力的に思えてきてしまつて……私はもう、必ずしも『みんなで』幸せになるためには動かないかもしれないつて。

そしたら……

「あー、うん。大丈夫大丈夫、全然OK」

「軽!」

あつさりそんな……え、マジで？

こつちとしては、あんだだけ大口叩いておいて何さあ、くらい言われども仕方ないと思つてただけ……と言つたら、

「あつはつは、そりやないつて。だつて半分くらいは『こうなるんじゃないかな』とか『なつてもおかしくないな』つて思つてたもん」

「……? 私、こつうつて……え、何で？」

私すら思いもしてなかつたこの心境の変化を、取陰は予想していたという。

何だつてそんなことが……と、当然ながら不思議に思う私。

しかし、理由を聞かされてみれば……なるほど、と思う他なかつた。「だつて、緑谷つてそのくらいいい男だつてあんたが言つてたじゃん。

だったらさ……そういういい男を自分のものにした、自分だけを見てほしい、自分と一緒に2人で幸せになりたい……そんな風に思うのは、女として当然のことでしょう？ それに……何があったのかはわからないけどさ、あんた前より『女』っぽくなったって感じしてるし、だったらそう思ってもおかしくないじゃん」

「えっ、あ……」

「つまるところ、女だからこそそう思うだろうし……より女らしくなったあんたにもそれは言える。ぶっちゃけ考えるまでもなく、そうなるって思えるよ」

……こりや一本取られた。

なるほど、女であれば誰でもそう思う。そういう心理……か。

……本格的に私は、緑谷に……心も体も、女にされちゃったんだなあ。

なんだかそうしみじみ思っていると、取陰は『それはそうと』と言葉を続け、

「まあ、何がきっかけになったのかはあえて聞かないよ。もしかしたら、あんたが私達……私や、麗日、塩崎や蛙吹とかよりも、1歩……どころじゃなくリードしちゃったのかもしれないけどね。それでいて、みんな幸せに、っていう選択肢はなくなったのかもしれない。でも……」

でも……？

「そうになったらそうだったで、普通の恋愛と同じようになるだけだけどね？」

「……？ その心は？」

「争奪戦。私……諦めるつもりとかは、微塵もないかんね？ 多分だけど、他の連中もそうだよ」

「！……はは、こりやまいったな、油断できないことになりそうだ……ま、これが『普通の恋愛』になるかどうかは別として」

「確認できてるだけでも、恋敵5人のサバイバルだもんねえ……」

その後、取陰ともしばらくとりとめのない話題で話して——結局取陰は最後まで、私に『何があったか』は直接には聞いてこなかった——

—そのまま別れ、私はマンションに戻った。

家を出る前にはまだ『疑問』のままだったそれに、1つの答えを見つけて……それが、何のことはない、私も1人の『女』だったからだとわかったからには……あとはもう、自分を受け入れて、これからの幸せな生活のために、1日1日を大切にしてい進んでいくだけだ。

午後の分の予習復習を済ませ……その後は、軽く体を動かす。鈍らない程度に。

合間におやつ（買って来た）を食べてエネルギー補給。

夕食を、今回も2人分（と言いつつ量は10人分をオーバー）作り、緑谷と一緒に食べ、食事中と食後、楽しく談笑して過ぐし……

……その後は、2人そろってちよっぴり今日も夜更かしして……

明日に影響が出ないように、きちんと後始末をして、部屋に戻って寝た。

……どうやら私は、緑谷の方から、遠慮せず『欲しがって』もらえるくらいには、壁を取っ払ってもらえたというか……気の置けない相手になれたみたいだ。実に嬉しい限りである。

ともあれ、明日からまた学校。

気持ちをきちんと切り替えて、しっかりと学ぶ日々に戻るとしよう。

マイナスイオンの100倍リラックスできる、彼の匂いの残る布団に包まれて……私は、ここ最近本日二度目の『心地よい疲労感』の中で、横になり、目を閉じた。

☆☆☆

——プルルルル……プルルルル……ガチャッ

「ああ、ようやくつながった……もしもし、ナイトアイ？」

『オールナイト……どうかしましたか？ 何か急ぎの用件でも？』

「いや、急ぎっていうか……ほら、君から例の、栄陽院少女の話とか報告というか、まだ聞いてなかっただろ？ それだけならまだしも、なんかここ最近連絡つかないし、事務所にも顔を出してないようじゃないか。少し気になってね……そっちこそ、何か急な仕事でも

入ってたのかい?」

『それは……申し訳ない、心配をおかけしてしまっただけで。そうですね……急、かどろはわかりませんが、少し調べものをしていまして。例の件にも関わることでしたので』

「そうなのか。それならいいんだけど……それで、何かわかったりしたのかい? 緑谷少年から話を聞いた感じだと……彼女も『視た』んだろう?」

『……それについて、ちょうど、色々とお話ししたいことができたところでした。確か、雄英高校は期末試験が終わったくらいの時期でしたね。直接会って話せますか? できれば……そうですね、ご足労をかせますが、私の事務所だと一番都合がいいかもしれません』

「もちろん構わないよ。こつちも仕事かひと段落したところだったしね。今までよりも少し余裕ができたから、私も緑谷少年に指導する時間なんか、今後少しはとれるようになるかもしれない』

『それは重畳ですね。いつでも好きな時にお越しを。疲れた胃に優しいハーブティーなどを用意しておきますので』

「H A H A H A、そりゃありがたい……けど残念ながら私、胃袋ないぜナイトアイ!」

『そうでしたね。ただ、時折あなたは『ないはずの胃が痛む』などということをおっしゃってましたので、今のうちにきちんと用意しておいた方がよろしいかと思ひまして』

「……え、待つてナイトアイ。今、私の胃が幻痛を覚えるようなシチュエーションで話すことになるってことを前提にして話してる? え、ちよ、何を調べて何を見つけたの、ねえ君?」

『それについては当日お話ししましょう。……ああ、そう言えばグラントリノはたい焼きやどら焼きなんかの甘いお菓子が好きでしたね、用意しておかないと』

「ちよつとナイトアイ!? い、今なんて……え、先生来るの!? ひよつとして君の用事っていうか調べものにも一枚かんで……もしもし!」

「もしもし!」

第103話 ショッピングの陰で

「つてな感じでやってきました！ 県内最多店舗数を誇るナウでヤングな最先端！ 木榔区ショッピングモール！」

……つて芦戸がテンション高く仕切ってるが、『誰に言ってるんだ？』つて言ったら負けなんだろうかコレ？

私達は今、『追試』が、その後の補講も含めて全て無事に終わったつて頃で、改めて皆で買い物に行こうつてことになって——あの夜、葉隠から電話来たアレである——週末の休みを利用してここに来たわけだ。

夏休み中旬くらいに始まる『林間合宿』……めでたく全員普通スケジュールで行けることになった一大イベントの、その準備のために。

1週間の日程の中で色々やるわけだが、それに持つてくのに必要なものがないつて人もいるからな。どっちみちほとんどの連中が、各自何かしら買い物に来ることにはなったはずだ。

だったらそれをもうイベントっぽく遊びの機会にしちゃえつてことで、こうなった。

こういうのを思いつくセンスというか、思考の瞬発力は流石だな、葉隠。

そして、その目的地を選ぶ方のセンスも。

このショッピングモール、ホントなんでもあるからな……色んな種類の店が揃つてて、しかもそれぞれの品ぞろえが豊富でまあ……

「腕が6本のあなたにも、ふくらはぎ激ゴツのあなたにも、きつと見つかるオンリーワン！ 『個性』の差による多様な形態を数でカバーするだけじゃないんだよね。ティーンからシニアまで幅広い世代にフィットするデザインが集まっているからこの集客力……」

「幼児が怖がるぞ、よせ」

思わず緑谷が、ヒーロー関連でもないのに饒舌になってしまうほどである。

ああ、そういえば緑谷つて、ヒーローマニアであると同時に『個性』

マニアでもあったな。それでこういう『個性』絡みの事柄になった時
もああなるのか……

たしか、自分の『個性』が発現したのがごく最近だから、それまで
は緑谷は『無個性』で……コンプレックスから逆に詳しくなったとか、
かな？ そのへん、聞いたことないからあんまり知らん。

まあ、あんまり聞いてて明るい話じゃなさそうだし、緑谷も話そう
とはしないから、例によって私の方からは聞きませんよっと。

話を戻そう。このショッピングモールで、私達は今日、林間合宿の
買い物だ。残念ながら、轟や爆豪など、不参加の奴らもいるが、そこ
はまあ……仕方ない。

轟は家族のお見舞い行くなって話だし——誰か入院でもしてんのか
な？——爆豪は『行ってたまるかかったりイ』の一言で不参加だって。

切島の『補修』には参加したのに……なんでこっちはバックレたん
だろ？

そう話したら、緑谷が若干気まずそうにしつつ……『詳しくは言え
ないんだけど……多分、追試は……ストレス発散の場が欲しかったん
だと……』……期末試験で何があつたんだ？

まあそれはしかたないとして、いるメンバーで楽しみましようか
ね。

6泊7日の合宿……結構な大荷物だ。勉強道具とか着替えとかは
もちろん……レジャー企画の中で使うことになる水着とかも買わな
いとだ。

こないだ配られた『合宿のしおり』の中に書いてあるイベント、結
構多いんだよな。

(忙しいのはそうだが、楽しい部分ときつそうな部分と、上手いことバ
ランスとって持続性を持たせたメニューだった……あの組み方、多分
アレにも母さん噛んでるな)

なんて考えてるうちに……まあ、時間も有限だからってことなんだ
ろう、続々とクラスメイト達が買い物のため行動に移っていく。

「とりあえずウチ、大きめのキャリーバッグ買わなきゃ」

「あら、では一緒に回りましょうか、耳郎さん」

と、耳郎と八百万が旅行用品のあるエリアに向かえば、

「俺アウトドア系の靴ねえから買いてえんだけど」

「あ、私も私もー!」

「靴は履きなれたものとしおりに書いて……あ、いや、しかし成程用途にあったものを選ぶべきなのか……?」

上鳴と葉隠は靴か。飯田は……なんかいつもの感じで熟考モードに入った。

「暗視ゴーグル」

「いや、んな奇をてらうような買い方しねえで素直に明かり買つとけよ。懐中電灯とか」

「切島、多分峰田そういう感じで言ってるんじゃないと思う」

何やら不穏なものを買おうとする峰田に対し、切島と尾白がそれぞれツツコミを入れる（片方はちとピントがずれてるが）。

「糖分多めの携帯食料みたいなものってあるもんかな……1本あたりの含有量とか表示されてると一番いいんだが」

「ミリタリーショップにでも行けばあるいは……いや、あの手の商品は栄養バランスが前提ないし、売りのようなものだから……ピンポイントでとなると難しいかもしれない。単に甘いもの、ないし菓子類と
「ただよなあ……けどそういうのって嵩張るし見栄えも……やっぱ自分で作るのが一番確実か」

「それが選択肢に出てくるってだけですげえよお前」

砂藤、障子、瀬呂のそんな会話。特訓メニューに備えた買い物かな？ 砂藤の場合は、トリガーになる『糖分』を常備しておく必要があるからな……

「あーそうだ水着も買わなきゃね! ねー永久、一緒に選ぼう? 追試のお礼に私も選ぶの手伝うからさ!」

と、芦戸。あーそうだ、水着もなあ……やっぱ買った方がいいかな? ?

ちらつと緑谷の方を見ながら、そんな風なことを思う。

その緑谷は、麗日と何を買うか話してるみたいだが……一緒にいる

麗日は、ちよつと顔を赤くしつつも、嬉しそう、ないし楽しそうだ。

……まあ、当然だよな。麗日も、緑谷のこと……

……ここで、今までなら心の中でガツポーズ決めてたであろう私
が、なんとなく『面白くない』って感情が浮かんでくるあたり……
あー、取陰に言われた通りだ。ホント、一線超えてから……私の心の
中に、普通の女の子の価値観が急激に……

「永久ー？」

「ん？ ああ、ごめんごめん芦戸、考え事してて。えーと、水着だっけ
？ やっぱ新しいの買った方がいいよなあ……」

気分的にも……サイズのにも。

去年より背も胸も成長したからなあ……多分、入らんし。

「そりやもう、せつかくの機会なんだもん、買おう買おう！ すっごいの
の選らんだげる！」

「すっごいのって……いや、普通でいいけど……」

と、何か気合入ってる芦戸の『すっごいの』発言に、周囲の男性陣の
大半がぴくつと反応して……内何人かはちらちらと視線をこつちに
向けてきたり、逆に目を反らしたり……

なぜか突然座り込んだ奴もいるな……理由は考えんところ。

あと、麗日とか耳郎からも意味ありげな視線が……

麗日は『あれを『すっごい水着』が包んで……』とかつていう戦慄す
るような視線。耳郎からは（結構離れてるのによく聞こえたな）それ
に加えて、何やら恨みがましそうな……いや、毎度のことだけど嫉妬
されても私には何もできなくて……

あ、隣にいる八百万にも『そう言えばこいつも……』って感じの視
線を向け始めた。八百万、寒気でも感じたのか震えとる。とんだと
ばっちりだ。

そして、緑谷はというと……ちよつと気になった風ではあるけど、
他の男子達ほど反応はしてないな。

別に興味ないから、とかだったら悲しいけど……『僕はいつでも見
れるから』とかいう風に考えてくれるとすれば嬉しい……ええ、え
え、いつでもいくらでもお見せしますとも。

「ピッキング用品と小型ドリル……」

そしてさつきから犯罪臭が漂うもんばかり買おうとする峰田はちよつと本格的に注意が必要なのではないかと思う今日この頃。合宿中に問題が起こる気が……。

後で先生に何か注意が必要だつて進言……いや、相澤先生なら私が何か言うまでもなく対策とかしてくれるとは思うけども……生徒達でもできることはやつといたほうがいいかな？

障子とか耳郎あたりに頼んで監視が要るか……？ それとも、ピッキングとか盗撮・盗聴防止のグッズを買っていか、八百万に頼んで用意してもらうか……

……つて、折角の買い物でこんなこと考えたくもないつての。

「目的地ばらけてっし、時間決めて自由行動すつか！」

と、切島の号令？でそれぞれ買い物に向かう。

……まあ、全員纏まって団体行動つてのもあれだしな。何グループかにわかれて各々好きなように買い物するのが一番効率的か。

「んじや、水着か……普段は特注とか輸入品で買ってるんだけど、どこで買うのがいいのかな？」

「おお……さすが永久、セレブっぽい買い物。でも最近は既製品もすぐく品ぞろえいいのそろつてるよ？ そうだな……日用品なら、デトネラット社とか一番堅いかもね」

「ああ、業界最大手の……なるほど、見てみるか。えーと、服飾店は……」

……あ、服飾で思い出した。

服、とはまた違うけど……私、と緑谷のヒーローコスチュームについて。

戦闘訓練の一件の後や、『職場体験』の時にいじつてからこつち、私も緑谷も、ちよいちよ改良を続けてきたわけだが……そのコスチュームにも、いよいよ『デウス・ロ・ウルト』の手が及ぶ段階に来ている。

具体的には、今、雄英の委託してる業者や、工房での簡単な改造（発目プレゼンツ含む）による性能に落ち着いているコスチュームを、『栄

陽院』が全力でバックアップしてリビルドする。素材、組み込む技術レベル、アイテム1つ1つの性能……何から何まで最新鋭・最先端・最高級のものを使って。

そしてそのために、ついに日本すら飛び出す時が近づいている。行き先は……ヒーロー『個性』関連の技術の粋が集まると言われている科学技術のメツカ。

海の上に浮かぶ巨大研究施設兼テーマパーク（的などころ）……『I・アイランド』である。

そこに既に話を通ってるので、夏休みになって少ししたら、私と緑谷は『栄陽院コーポレーション』の案内でそこに行き、そこに集まる最高の素材と技術でヒーローコスチューム、及び付随するサポートアイテム各種を作るのだ。

そしてそこで同時に、その最新版コスチュームの慣らしのための訓練とかも行う。『I・アイランド』にはそういう設備も充実してるので、問題ない。

さらに、ちょうどそこで近日開催されるエキスポにもついでに出る。遊ぶ。

……というより、『I・アイランド』には『栄陽院コーポレーション』も出資してるので、色々融通利くんだよね……今回の企画協力もその伝手らしいし。あいかわらずやり手な義姉達だ。

しかも、何やら当日は、『デウス・ロ・ウルト』とはまた別に、大口の取引も予定しているとかなんとか……企業秘密だからって教えてはくれなかったけど。

そしてその伝手で、入場のためのI・アイランドのエキスポチケットも手に入ったわけだ。

ただ、緑谷の場合、雄英体育祭で優勝したため——爆豪と『同時優勝』ではあつたけども——エキスポのペアチケットを別口で既にプレゼントされて入手していた。体育祭優勝するとそんなのももらえるんだ……初めて知ったよ。

そして、ペアとして行く相手に私を誘ってくれたので、私もそつちで行くことに。

チケツト用意してくれた義姉さん達には悪いけど……こつちの方で行きたい。ごめん。

ま、そつちの規模とか意味が違う『買い物』はその時までとっておくとして……今はこつちの買い物に集中しなくちゃね。

あんまり緑谷のことばかり考えてると、芦戸に気取られそうだ。

結局、私と緑谷の関係は、一応秘密にしたまま行くってことになったからな。今んところは。

一部には気取られそうにはなってる——取陰あたりは確実に気づかれたよなあ——けども、まあ……とりあえず秘密の関係のままってことで。今んとこね。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

途中まで、麗日さんと一緒にショッピングモールを回って……色々なおしゃべりしたり、買い物したり……楽しい時間を過ごした。

僕は最初、ウエイトとか、トレーニング用品を買おうかと思ってたけど、そういうのは『デウス・ロ・ウルト』のスタッフの人に言えば、最適なものを選んで手配してくれる、あるいは特注すらしてくれるので、こういう店で出来合いのものを買う機会がないんだよなあ。

なので、麗日さんにつき合って、虫よけとかキャンプ用品的なものを色々買った。

キャンプとかアウトドア系の専門店に行つて……普段あんまり行く機会がない店だから当然だけど、見慣れないもの、あるいは見たことないものばかりで……なんか、思いがけず楽しくなって色々見たり買ったりしちゃった。

途中で偶然、砂藤君達と合流したりもした。保温水筒や弁当箱、携帯型の調理器具とか見に来たんだって。お菓子に限らず、色々な料理が得意な砂藤君らしいな。

そして、あらかた必要そうなものを買った後……麗日さんと一旦別れた。

麗日さんは、葉隠さんや八百万さん、耳郎さん達と一緒に、栄陽院さんと芦戸さんに合流して、女子皆で水着選ぶんだって。皆、どんなの買うんだろうなあ……。

芦戸さんは、栄陽院さんに『すっごいの』買うって言ってたけど……
……頼んだら見せてくれるだろうけど、楽しみを林間合宿の時に取っておくべきか……うーん……

贅沢な悩みを頭に浮かべつつも、集合時間までまだ少しあるので、何をして時間を潰そうかと考えていて……

……そこに、そいつは現れた。

「おー、雄英の人だ、すげー！ サインくれよ、サイン」

そんな軽い感じの口調で話しかけながら、すたすた歩いて近寄ってきた。

フードを深くかぶっていて、顔はよく見えない。上下黒一色、長袖長ズボンの服……もう夏だっていうのに、ちよつと暑そうだな。

こういう人は、今日もう既に何度も出くわしている。

雄英体育祭の時の反響はまだ尾を引いているようで……特に僕は優勝したし、麗日さんも決勝トーナメントまで残ったからなあ。いろんな人に、まだ覚えられてるみたいだった。

ネットや雑誌で取り上げられることはほとんどなくなって、世間に知られてるんだなあ、って実感することになった。

中には……麗日さんと2人である時に出くわして、『つき合ってるんですか!?!』なんて言うてる人もいて……

勘違いされたり、拡散でもされたら困るから、『クラス皆で買い物です』ってきっぱり否定したら、なぜか麗日さんが少し面白くなさそうな顔を……何で？

そんな風に、騒ぐ人や『ファンです』っていう人に何人ももう出くわした。

けど……

近づいてくるその人は、若干馴れ馴れしい感じで肩を組んで、声だ

けは明朗なまま、僕の首元のあたりに手を添えようとしてきて……

——がしっ

そうなる前に、僕はそいつの手を、手首をつかんで止める。

突然つかまれて、驚いたようにその人は一瞬、びくつと震え……

「えっ、何!? ちよつ、痛いよ雄英さん、馴れ馴れしいのが嫌だった!?

ごめん、放して……」

途中まで、戸惑った感じの口調で言っていたものの……すぐに、そんな雰囲気はどこかに霧散した。

「……………ああ、何だ。もうバレてるパターンか」

どこか気だるげ、投げやりな感じの……聞き覚えのある声に戻った。

……近づいて来た時から、何かやばそうな奴だったのはわかったけど……声のトーンが違うから確証は持ててなかったんだよね。さつきまで。

けど、こういう風に話してもらえると……あの時と同じ声だったよくわかる。

「……最近、お前みたいな奴に特に敏感になってね。何となくわかるんだ」

「俺みたいな奴が、かい？ はははっ……大したもんだな……まさにヒーロー向けの能力じゃないか。悪意とか殺意でも感じ取ってるのか？ どつちも出したつもりはなかったが……」

「一体こんなところで何の用？ 僕を待ってたのか？」

「おいおい、そりゃ自意識過剰つてもんだ。偶然だよ、今日は。正真正銘な」

まあでも、と男は続ける。

「ここまできると、因果、因縁……あるいは、運命じみたもんを感じるよ。USJ、保須市……行く先々でお前という存在が視界にチラついたり、立ちはだかったり……しかし、ちよつと見ない間にお前、大人っぽくなったんじゃないか？ オドオドしたりせずに、落ち着いてるし

……男子三日会わざれば、って奴？」

「……さあね。それで、何の用さ？　どうしてここにいる……死柄木
弔？」

「用、ねえ……。特にないんだが……まあ折角だ、座ってゆつくり話そ
うぜ……。緑谷出久？」

こうして会うのは、USJ以来になる。

70名を超える『敵』を率いて雄英を襲撃してきた『敵連合』……
その主犯格。手で、あるいは指で触れたものをボロボロに崩して崩壊
させてしまう、凶悪な『個性』の持ち主。

半ばトレードマーク扱いされていた、手の形のアクセサリーは、今
は一つもないけど……紛れもなく、そこに立っているのは、その男だ。

平和に、楽しく過ごせるはずの休日だったのに……最後の最後、と
んだハプニングが起こったもんだ……。

妙に傷だらけでしわも多いように見える顔で、ニヤリと不気味に笑
うそいつ……死柄木を前に、僕はこの後自分がどうすべきか、自分で
も驚くほど冷静に考えていた。

第104話 夏休みの予定

その日、久しぶりに私は、『1人だけ』で家に……マンションの部屋に帰ってきていた。

いつもは一緒に、あるいは時間をずらして帰ってくる緑谷はいない。彼は今……というか今日、ここには帰ってこない。

警察から、実家の方に直帰する予定だからだ。

……話は、数時間前に遡る。

といっても、私も伝聞の情報しか知らないんだけど。

ショッピングモールで買い物を終え、そろそろ集合時間ってことで、事前に決めていた場所にちらほらクラスメイト達が集まり始めていたところで……不意に、飯田のケータイに着信が入った。

飯田、バイブで着信入るとあんななるのか……全身で着信が来たって表現するような……また1ついらんことを知ってしまった。

それはともかく、ケータイに出た飯田の顔色がみるみる変わり……周囲にいた面々が『何かあったのか?』って聞いたところ、予想の斜め上に行く自体を、その口から告げられることになった。

曰く、『緑谷君が『敵連合』の死柄木と遭遇した』……と。

……どうということなの。

いや実際あの時はそう思ってしまった。

何でも、それ自体は完全に偶然の邂逅らしいんだが……そのまま色々話して、何も荒事とかに発展することはない別れたそうさ。

緑谷自身は大丈夫だったようだけど、休日のショッピングモールってことで、周囲に無関係の一般人が大勢いるから、もし死柄木が暴れ出して犠牲者が出たらまずい、っていう配慮だったと。

何かこう……お互いの主張とか心情?みたいなものを話して、表面上は平和的に、その場は別れたんだそう。……色々物騒なことを言い残して消えたそうだけど。

USJの時と同様、ヒーローや今の社会、そしてオールマイイト憎しみたいところは変わらずだったようだし……相変わらずよくわか

らない奴だな……。

その後、緑谷は警察で事情聴取を受け、私達は、一緒に行動していた麗日も含めて先に帰ることに。

緑谷はその後、親御さんに連絡が行って迎えに来てもらって……今日はこのマンションじゃなく、実家に帰ることになった、というわけ。さすがに、お母さんにすごい心配かけただろうから……それは仕方ない。

なんだったたら、そのまま何泊か家で過ごして、親御さんを安心させるのもありだろう……諸々のことは全部こつちでやるから、ゆつくりしてきな、つてきつき電話したとこだ。

あとで、こつちに移してある緑谷の荷物のうち、必要そうなの届けないとな。

(にしても……タイミングの悪い。こんな休日、ゆつくり過ごしてる時に……それも、私と緑谷が別行動取ってる時に遭遇するとは……)

……こんなこと考えても仕方ないというか、どうしようもないってのはわかってるけど……自分の知らないところで、緑谷が危ない目に遭ってるってのは、想像するだけでもうなんか、辛いというか悔しいと言うか……。

緑谷が大変なことになってたんなら、私もその場にいたかった。できぬなら。

緑谷のことを信じてないわけじゃないし、実際無事だったとはいえない……

いや、傲慢な物言いだつてのはわかってるけどもね？ 重ね重ね。

……緑谷のお母さんの心配とか不安感は、私なんかより断然上だろうし……。

(そもそも、私がいいたところで何ができたとも……いや、実際何ができたか……もし万が一の事態になった場合、私がそこにいれば……)

……そのまま少し考えて、はあ、と息をついた。

何か、思考がどんどんダークな方へ行くわ……不安感その他で正常な思考が働いてないのか、はたまた何か夜ってそんな気分になるからか……考えても仕方ないなコレ。

一瞬ちよつと怖いこと考えちゃったし……いや、でも……実際そう
なったら……

（多分、その時は私は……やめやめ！ 考えても仕方ないこういうの
は！）

緑谷関連で、今回ばかりは私にできることはない。緑谷のお母さん
の心配を和らげることも、緑谷自身が敵に狙われないようにすること
ももちろん無理だ。

だったら、今の私にできることをするしかない。

すなわち、次に備えて体調を万全にすることだ……多分。

なので、今日はもう休みます。あ、でも腹減ってるから何か作って
食べてからな。

いただきます。ごちそうさま。

そして、おやすみ。

☆☆☆

「ただいま、黒霧」

「死柄木弔……よくご無事で」

いつもの、と言っているのであろうか。彼らが会合によく利用する
バー。

カウンターの向こうで、グラスを磨きながら、入ってきた男……死
柄木を迎えた黒霧は、異形ゆえに表情こそうかがい知れないものの、
声音からは、言葉通り安心したような空気が伝わってきた。

しかし、死柄木自身は特にそんな黒霧の気持ちも気にせず、カウン
ター席についてくつろぎ始める。

ふと目を向けた先のテレビでは、自分が数時間前までいたショッピ
ングモールの映像が流れていた。どうやら黒霧はニュースでコレを
見ていたようだ。

「雄英の生徒と接触したそうですね？ 最初からそのつもりで？」

「まさか、偶然だよ……けど、中々いい時間を過ごせた」

「おや、それは……こちら側に引き込めそうな人材でも？」

「いや、逆。……殺すべき、壊すべき対象が何か、定まった」

出されたドリンクをぐび、と一口飲んで、死柄木はポケットから、いつもの手のアクセサリーを取り出し……顔に装着する。その特徴的過ぎる1つがついただけで、たちまちそこにいる男は、雄英襲撃の際に音頭を取った『敵』その人に見えなくなった。

「緑谷出久……あいつ、前にあった時より随分変わったな。何つか……真っ当に成長してるっていうか、大人になったっていうか……うん、そうだな。腹立つくらいに」

「……よりにもよって、接触したのは緑谷出久でしたか。彼との話が、実りあるものだったと？」

USJの件の際、自分と死柄木を殴り飛ばした少年……あの時はまだ、パワー以外は素人に毛が生えた程度のそれだったはずの少年を思い出し、黒霧は呟くように言った。

顔を思い切り殴り飛ばされ、歯が欠けるまでの負傷を負い、拳句、オールマイトの到着まで粘られて敗北することとなったあの一戦。その最たる敗因の1つであったあの少年を相手に、死柄木が再会した際、激昂することを危惧していた。

しかし、そうはなからなかった様子である。その点についても黒霧は胸をなでおろした。

（彼との邂逅が何をもたらしたのか、何を話したのかは知りませんが……こちらにもいい影響をもたらしてくれているようですね。不幸中の幸い、といったところですか）

一方で、死柄木もまた、今日の邂逅、そして緑谷出久との話の中で、いくつか思ったことを反芻し、考えをまとめていた。

（オールマイト……平和の象徴……。あいつが全ての起点になってる。平和ボケした一般人共……物騒な持論を振りかざして暴れまわった『ヒーロー殺し』……そして、今の世の中をぐ丁寧に守ろうと、そのために強くなろうとしている、ヒーローの卵共……。そしてそれは、俺も……）

またドリンクを一口。手のアクセサリーを器用に避けて、口に含む。

アルコールではないため、酔う感覚はないが、思考を続けている死柄木には却って好都合だ。

(どいつもこいつも、あの『平和の象徴』様が作ったこの世の中を、平和な今をありがたがって……今を惰性で過ごしている。自分達の見えないところで、そうしていられない奴らがいることに目をつぶって……。いや、むしろそんなものなどいないとばかりに、知らずに……。それができてしまっている……。だからわかってない、わからない。平和なんて、まあ脆いものなんだと……)

「始まりは、オールマイト……か」

「? 何か言いましたか、死柄木弔?」

「何でもないさ。それより黒き……」

「緑谷出久君!? 今、緑谷出久君の話してましたか!？」

と、そんな2人の会話に割り込む、明朗な女の子の声。

死柄木が聞こえた方を振り向くと……案の定、そこには……つい先日、『私も入れてよ!』と、自分達の組織『敵連合』への加入を希望してきた、女子高生……らしき見た目の少女がいた。

実際は、学校になど通っていないので、そんな身分はないわけだが。彼女……トガヒミコ本人は、逃亡生活を送る中で、女子高生の恰好をしていると色々と都合なのだと言っていた。

うきうきとした目をしながら、店の奥に備えられているスペースから出て来たらしい彼女。どうやら今の話題を聞きつけて来たらしかった。

その後ろからは……こちらは今のところ無言で、全身あちこちの皮膚が焼けただれたような、あるいはつぎはぎのようになっていいる男……茶毘が現れる。

こちらはただ単に、何事か騒がしくなってきたから出て来たただけのようだ。

「緑谷出久君の話してましたよね? 会ったんですか?」

「会ったけど……何、お前アイツのファンか何か? ステインのファ

ンじゃねーの?」

「ステ様も好きです! でも出久君も好きです! どっちもボロボロで、すごくかつこよくて!」

「あー……お前が暇なときにステインか、雄英体育祭の映像見てるのってそういう理由かよ」

と、こちらは何やら納得いったとばかりにため息をついている茶毘である。

トガヒミコの『血まみれでボロボロな人が好き』という性癖?を理解して、彼女の行動に得心が行った様子だった。それは、聞いていた死柄木達も同じだった。

「どうでした? ボロボロでしたか? 血だらけでしたか? かつこよかったですか?」

「シヨップینگモールにボロボロの血だらけで来る奴がいるかよ……普通だったよ。少しばかり……前よりシユツとした感じはあったかな」

「そうですか! でもボロボロになればもつときとかつこいいです!」

「だといいな」

とりあえず満足いく、ないしは噛み合う会話については、死柄木は早々に諦めた様子であった。

死柄木からの返答にはあまり関係なく、とりあえず自分の願望と期待でのみワクワクしているトガヒミコ。そんな彼女に続いて、茶毘が訪ねて来た。

「にしても、『シユツと』って……何だそりゃ? 背でも伸びてたのか?」

「さーな……上手く言えない。ただ、前より落ち着いてた……堂々としてたとか、おどおどした感じがなくなってた、かもな。何かきつかけがあったのか……」

(ただ単に場数や経験を積んで、真っ当に成長した、って感じとは違った気がする。まるで、一気に自分という存在に自信が持てるようになったみたい……)

「へー……よくわからねえけど、あんたが素直に他人をほめるなんて珍しいな。明日は槍でも降るんじゃないか？」

「……お前、初めて会った時から変わらなず失礼だよな……悪口なしで会話できないのか？」

死柄木は、はあ、とため息をついて呆れ気味に言う、

「まあいい……どんなふうになってるかは……もうじき会えると思うから、見たきやその時自分で見て確かめろ」

「ホントですか!? わあ、楽しみ！」

「ほー……つてことは、やんのかい？ 例の計画」

「ああ……ま、しばらくは準備とかプランニングだけだな……黒霧」

「はい、死柄木弔」

「まだ手が足りない。『先生』の伝手と……ブローカーにも声をかけて、動ける奴を集めろ。ただし……USJの時とは違って、今回は少数精鋭だ。あと、先生から出せる脳無の数を確認しとけ」

「かしこまりました」

会釈程度に一礼する黒霧。死柄木はそれを横目でだけ確認すると、死柄木はテレビに視線をやる。

そこには……タイムリーなことこの上ないタイミングのCMが流れていた。

ショッピングモールの事件を取り上げていたニュース番組がちやうど途切れ、流れていたのは……オールマイトの出演するCM。

何のことはない、単にタイアップしているお菓子というだけのものだが、むしろ死柄木には、画面の中で、見る者全てを安心させるであろう——少なくとも、真つ当な生き方をしている者であれば——スマイルを浮かべる、No.1ヒーローだけが見えていた。

(緑谷出久も、この狂った世界も……そして、俺も……あんたが全ての始まりだった。ああ、認めるよオールマイト、あんたはすごい奴だ……拳一つで、世界を変えた。犯罪率を減らし、バカな民衆が何も考えずにのうのうと過ごせるだけの、平和に狂った世界を作り上げた。でも、だからこそ……始まりがあんたなら、『終わり』もまた……あんなだよなあ、オールマイト……！)

狂気を孕んだ笑みを浮かべる死柄木。

緑谷との対話を通して、自分の『やるべきこと』を、『壊すべきもの』を見つけた彼は……どこか『吹っ切れた』ような、ある種清々しさすら覚える思考の中で、来るべき時に備えて、頭の中で、再度計画を練り上げにかかっている。

平和の象徴が作り上げた、この素晴らしい……しかし、同時に脆く儂い、メツキないし張りぼての平和を……ひと思いに壊し、世の秩序を瓦礫の山に還すために。

☆☆☆

「……というわけで、例年使用させていただいている合宿先は急遽キャンセル。合宿の行先は、当日まで明かさない運びとなった」

「「え——!?!」」

という説明と同時に、先日配ったばかりの『合宿のしおり』をびりりと破いて捨てる先生。『コレもう役に立たねーぞ』的な演出だろうか。

告げられた内容に、教室中が『マジかよ』的な空気になるけど……まあ、仕方ないかな。

緑谷と死柄木の接触自体は、そいつの言動が本当なら、単なる偶然だったっばいけど……今後、『敵連合』が本格的に動き出すとしたら、USJに引き続き、雄英がターゲットになりかねない、という可能性は否定できないもんな……。

別れ際には、緑谷に向けて『次は殺す（意識、略）』とか言ってたそうだし……

だとすれば、今までと同じ行き先を使うのは危険、か。

瀬呂とかは『もう親にどこ行くか言っちゃってるよ』って困った風な顔になってたけど、その後に八百万が指摘していた通り、まさにそれが変更の理由なんだろうな。

ただでさえ、40人もの生徒が、敷地内であれば一応は警備体制万全の学校を1週間も外れて外泊するんだ。

その学校のセキュリティすら抜いて侵入してきた連中が相手だとすれば……このくらいいしないと警戒十分にはならないだろう。

「つか、いきなりイベント始まったり、当日まで秘密だったり……雄英ってこういうの好きというか、得意だよなホント」

「今回ばかりは好きでやってるわけじゃないだろうけど……」

と、思わずつぶやいてしまった言葉に、後ろの席の尾白が返してくる。

確かに……今回のコレは、意外性を狙ってでも何でもなく、単純に安全確保のためだしな。

それでも合宿自体を中止にしないっていうのはまあ……思い切った判断というか、またこれも体育祭の時と同じ『屈しないよ！』アピールなのか……

何にせよ、合宿といい『デウス・ロ・ウルト』といい……忙しい夏になりそうだ。

第6章 栄陽院永久と夏休み 第105話 I・アイランド

『当機は間もなく、I・アイランドに到着いたします。皆様、着陸に備えて、着席の上シートベルトを着用してください』

「早ッ!? もう着いたの……I・アイランドってそんなに近い位置にあっただけ?」

「まあ、『栄陽院』所有の自家用ジェットの中でも、スピードが売りの奴を引つ張り出してきたって話だからな……民間機よりは早くつくだろ。ってことで、そろそろ到着らしいよ、成実義姉さん」

「聞こえてるわよ、ちゃんと。コレ終わったら片づけるから、あんた達先に準備しちやいなさいな」

現状を説明すると、今、私達は……さっきのアナウンスの通り、『I・アイランド』に向けて飛ぶ飛行機の中にいる。

こないだ言った通り、『デウス・ロ・ウルト』の一環として……私と緑谷のコスチュームを改良するために、あの個性技術の総本山に向かっていているわけだ。

移動手段として、『栄陽院コーポレーション』所有の自家用ジェットを飛ばして。

なお今回、添乗員その他のスタッフを除けば、私と緑谷に加え……さつきから私の隣の席で事務仕事をこなしている、成実義姉さんが一緒に来ている。

島にいる間の『デウス・ロ・ウルト』関連の手続きなんかは、彼女が担当してくれる予定なのだ。

それ以外にも色々やることはあるみたいだけど、そこは仕事の領分なので聞いていない。

「それにしたって……随分早く着いたよね。それだけ早く飛んでたってことなんだろうけど……全然そんな……Gとか感じもしなかったのに」

「まあ、基本的にうちの自家用ジェットはどれも、乗り心地重視というか、ストレスにならない快適な空の旅を、っていうコンセプトで作られてるらしいからな」

「けど同時に、そのクオリティを保ちつつも最大限のスピードを出せるように設計されてるわ。そのへんの絶妙なバランスもまた、うちの技術者たちが頑張ってくれた誇れるところね」

と、成実義姉さん。

「快適な空の旅もいいけど、それでもあくまで移動は移動。早く、短く済むに越したことはない……言う人の中には、長い移動は時間の無駄だ、なんて人もいるしね。スピードと快適さのバランスを最高効率で保つことこそ最重要……ってのが開発時の至上命題だったらしいわ」
「うちは……っていうか『本家』の血筋は仕事人間多いからなあ……そういう考え方にもなるか」

言いながら私は、隣にいる義姉さんの手元をちらりと見る。

さっきのアナウンスにあった『もう間もなく着陸(略)』までにキリのいいところまで終わらせようと、シユバババ……とすごい速さで仕事を片していつているが……その光景は少々異様だ。

凄早い早さで書類が作成されていく。レイアウトはもちろん、中身の完成度も、そのまま重要会議の資料に使ってもいいくらいのもものが、1枚、また1枚と見ている間にできがあつていく。

だというのに義姉さんは、パソコン、ないしは電子機器の類を一切を使っていない。

白紙のコピー用紙に義姉さんがすつと指を滑らせると、その跡に突如、印刷されたようなきれいな活字が並んで現れる。

さらさらさら……と文字通り指を滑らせているだけ。なのに、見る見るうちに書類が出来上がっていく。

今度は、手元にあつた資料……そこに載っている写真を見ながら、また紙に、今度は手のひらを押し付けるようにしてから滑らせて……すると、今日で見ている資料の写真と寸分違わぬ画像が印刷されて現れた。

これが成実義姉さんの個性……『文房具』だ。指や手のひらなど、体

の各部があらゆる文房具……あるいは、オフィス用品の役割を果たす『個性』である。

指でなぞるだけで、頭の中で考えた文面を紙に印刷でき、目で見たものをそのまま画像にして、同じく印刷できる。今やってみたいに……人間PCとか人間プリンター、人間コピー機とか人間スキャナなわけだ。……いろいろ言い方はあるな。

他にも、爪を押し付けるとその部分にホチキスの針が刺さって紙を固定したり、唾液が接着剤になったり、じゃんけんの『チョキ』がそのままハサミになって切れたりする。

「……む、間違えた」

と、珍しく書類作成ミスつちやったらしい義姉さんは、使える部分を別なまっさらな紙にコピーして写した後、ミスプリントした方の紙を、5本指の爪を立てて軽くひつかく。するとその瞬間、1mm以下の幅に断裁されて紙面がバラバラになり、そのままゴミ箱にぽい。ああ……今度のは人間シュレッダーってどこか。

PCみたいなことができる義姉さんであるが、一度印刷したものが、されているものを編集し直す、ということとはできない。あくまで印刷するところまでだ。PCってよりタイプライターに近いか？

指で紙面をこすって消しゴムみたいにすることはできるらしいが、ペンで書かれたものはそのままってことだな。

一応、砂消しゴムみたいなこともできなくはないそうだけど……紙が削れて見た目悪くなるしな。

ま、義姉さんの『個性』のことはこのへんにしとこう……って、そんなこと考えてる間に仕事終わらせてもう片付けてる。素早いな……流石敏腕OL。

「じゃ、着陸したら着替えてロビーに集合ね。あんた達はヒーローコスチュームでしょ？」

「あ、はい。きちんと申請して持ってきてあります」

「義姉さんは仕事だからスーツだっけ？ 肩こりそうで大変だね」

「もう慣れたっていうか、コレがもう私にとって、あんた達の戦闘服みたいなもんだからね。到着時間から少ししたら、今回お世話になる

人に会いに行くからね。失礼のないように」

「はい」

かちつ、と音を立ててシートベルトを装着しつつ、ふと窓の外を見ると……洋上に浮かぶ人工の島が、そこに見えた。

あれが……話に聞いた『個性』研究の総本山、『I・アイランド』か。思いつきり近未来な感じの施設がたくさんあるな……かと思えば、テーマパークみたいな場所も、観光地っぽくホテルが密集してるようなエリアもあるし……。

ちらりと向かい側の席をみれば、すごく興奮した様子の緑谷が、窓際に張り付いてその光景を眺めている。テーマパークに来た子供そのものだな……かわいい。

まあ、この後もつと興奮することになると思うけど。

主に、これから会う人が原因で。

「で、確かこの後会う人っていうのが……」

「名前くらいは知ってるでしょ？ デヴィッド・シールド博士……よ」

☆☆☆

デヴィッド・シールド博士。

『個性』関連の研究の現場における世界的な権威であり、『ノーベル個性賞』を受賞した『個性』研究のトップランナー。今までに様々な発明品を世に送り出し、『個性』分野の研究を前に進め、それを生かして世界中のヒーロー達を助けて来た実績を持つ（中略）。

そして何よりもこの人は……オールマイトのコスチュームを手掛けたことでも知られている。

アメリカにいた頃の『ヤングエイジ』から、『ブロンズエイジ』『シルバーエイジ』そして『ゴールデンエイジ』に至るまで、激しい戦いの中でも見事にオールマイトと共に戦い抜いたコスチュームを素材から開発し、形にしたのがこの人なのだ。

彼らはカレッジの時代からの親友同士であり、アメリカで活動していた時は相棒と呼べる存在だったとかで……事務仕事や情報整理な

んかもやってたって聞いてるし、日本で言えば、サー・ナイトアイミ
たいな立ち位置だったのかな？

今でも個人的に交流があるそうだ……と、ここまで緑谷のマシंगा
ン説明トークより抜粋である。

「ほら、博士びっくりしちやつてるでしょ、緑谷」

「はっ!? す、すいません、つい……その、興奮しちやつて……」

「ははは……いや、光栄だよ緑谷出久君。君にそんな風に思ってもら
えているとはね」

「!? 僕のことを知っていたらだいてるんですか!？」

「いや、そりや『デウス・ロ・ウルト』でこれからお世話になるんだか
ら情報くらい行ってるだろ」

「それだけじゃないよ。時々国際電話でオールマイトと話すんだが、
その時よく話題に上ってくる子だからね……あいつがあんなに楽し
そうに話すんだ、そりや印象にも残るってものさ」

ああ、なるほど……そういうのもあったか。

「そして、そちらが栄陽院永久君だね。2人共、よろしく頼むよ……私
にできることなら、精一杯やらせてもらうつもりだ。お互いのベスト
を尽くして、最高のコスチュームを作り上げよう」

「か、感激です……デヴィッド・シールド博士に、僕のコスチュームを
手掛けてもらえるなんて……よ、よろしくお願いします!」

「そう緊張しないでくれ。別に私だけがやるわけじゃないんだから
ね」

博士はそう言うが……オールマイトのコスチュームを作った発明
家だもんな……ヒーローオタクであると同時に『個性』オタクでもあ
る緑谷には、そりや夢のような展開だろう。

もうさつきから目が輝いて、きらきらしっぱなしだ……話が頭に
入ってるか若干不安なほどに。

「では博士、打ち合わせは予定通り、この後15時からということによ
ろしいでしょうか?」

「ああ、よろしく頼むよ、栄陽院……成実さんだったかな。今回は世話
になる」

「いえいえ、こちらにも利益があつてのことですし……『個性』研究の第一人者であるデヴィッド博士とこうして協力してコトに当たれるというのは、ヒーローを支える仕事に就く者として大変な名誉です。経験として十分に糧にさせていただく所存でおります、どうぞよしなに」

と、仕事モードの義姉さんが、お世辞抜きに完璧な礼儀作法とか動作で博士に挨拶。フランクな人柄なのは見てわかるけど、それはそれとしてきつちりやる人だ。

……が、気のせいだろうか？

何か一瞬、笑みを浮かべつつも真面目な義姉さんの瞳の中に……何やら鋭い光が見えたような気がしたんだが……『ギラリ』とか効果音つきそうなそれが。

そして、その瞬間、僅かにデヴィッド博士が体をこわばらせて、反応したようにも……

何だ今の……？ 何かこう……剣呑とは言わないまでも、ビジネスとか大人の仕事の現場に似つかわしくない雰囲気か漂った気が……

もつとも、その雰囲気も既に霧散してしまつて残つては……いや、元々私の気のせいって可能性もあるけども……何だつたんだらうかな？

緑谷が……あ、気付いてる様子ないなコレは。おめめキラキラ継続中だもの。

「なら、それまでどこかで時間を潰してきてはどうかかな？ ここはまだプレオープンだけど、飲食店なんかは既に営業を始めているし、エキスポを前に各展示スペースも見れる、体験できる状態になっているはずだから、楽しめると思うよ。私はそれまでに……この部屋をもう少し見れた状態にしておくことにするから」

「そういうえば、この部屋は……探し物か、模様替えの最中ですか？」と、ふと思つたらしい緑谷が尋ねる。

私としても、緑谷が今言ったことをまさに尋ねようかと思つてたところだ。……この部屋の状態というか惨状を見たら、誰だつてまあ……そんな風に思うわな。

なんかもう……散らかり放題って感じだ。

所かまわずものが散乱してってほどじゃないが、机の上とか棚の上に書類が山積みになってたり、チューブファイルや書籍……論文？なんかが無造作に積んであったりする。

ちよつとバランスが崩れたら、雪崩が起こるんじゃないかと不安になるほどに。

書類だけじゃなく、何かこう……サポートアイテムか何かのパーツみたいなものまであちこちに……工房で発目がとっ散らかしてる光景を思い出すな。研究者とか技術者って結構こうなのか？

いや、それにしては、部屋の一角はきちんと、というか妙に片付いてる。片付けが苦手とか、散らかし癖があるってわけじゃないさそうだ。……案外緑谷が言った通りに、掃除とか模様替えの途中、あるいは探し物をしてるところ……って言った方がしっくりくる気も……「いや、お恥ずかしい……ものが多いせいで片付けや荷物の整理一つとっても結構な手間だね……普段なら助手が手伝ってくれるんだが、彼はもう……」

「あれ、パパ、お客様？」

と、そんな声が唐突に後ろから聞こえてきて……後ろ？

振り返るとそこには、長い金髪にメガネをかけた美少女が立っていた。

この服……たしか、この『I・アイランド』のアカデミーの制服か？ この子、高校生か大学生っぽく見えるけど……その生徒さん？ というか、今……

「ああ、メリッサ、帰ったのか……今ちよつと仕事の打ち合わせをしていたところでね」

「そうなんだ、ごめんなさい、邪魔してしまつて……あ、私はメリッサ。メリッサ・シールドです。パパがいつもお世話になってます」

そう言つて一礼。やつぱり、デヴィッド博士の娘さんか。

娘がいるとは聞いてたけど……私達と同じくらいか、少し年上かな？ 『異形型』の個性でもないようだし、見た目通りの年齢だと思いが。

けっこう快活というか、フレンドリーな性格のようだ。初対面の私達の手を躊躇なく取って、両手で握手してくる。距離も近いし……緑谷、ちよつと緊張して顔が赤いな。

まあ、芦戸とか葉隠っていう前例が身近にあるから、そこまで戸惑いはしないけど。

あとどうでもいいが、スタイルいいな……やっぱ外国人って育ちが早いのかね？

こちらでも簡単に挨拶して、もう話は終わったのでお暇する旨を告げると、

「あ、そうなんだ……なら、大丈夫かしら？」

と、何やら入り口の方をちらちら見ながら言うメリツサさん。大丈夫って何が？

「どうかしたのか、メリツサ？」

「あ、うん……ちよつとね？　パパを驚かせようと思って、来てもらってる人がいるの」

と、デヴィッド博士が首を傾げた瞬間、緑谷が何かに気づいたように、はつとして入り口に視線を向け……その瞬間、

「わーたーしーがー！　再会の喜びに打ち震えながら、来た！」

割と見慣れている、しかし世間的にはこれ以上ないビッグネームである、No.1ヒーローが……ちよつと窮屈そうに入り口を通り抜けた。ポージングして現れた。

しかもよく見ると、その向こう側には、彼ほどではないにせよ、長身にスーツ姿の元サイドキックの御仁と一緒にいるようで……

「と……トシ！」

「オールマイト！」

「……うん？　え、アレ、緑谷少年に栄陽院少女!?　どうしてここに!?」

「……ほう、こんなところで会うとは。例の『プロジェクト』の一環か」「あら、オールマイトに、サー・ナイトアイ……おそろいで」

「あ……やっぱり知り合いなんだ。まあ、雄英の生徒さんだものね」
なんだか奇妙な場所で奇妙な邂逅を果たした私達であった。

いやまあ、この後すぐにお暇しますけどね？ 邪魔はしないんで……ご存分に旧友との親交を温めてください。

そこで、オールマイトとデヴィッド博士のツーショットに興奮し始めてる緑谷回収して帰りますんで。……あ、でもせっかくだから写真1枚くらい撮ってあげてもらえると喜びそうな……

……どうでもいい話だけど、今、デヴィッド博士……オールマイトのこと『トシ』って呼んでたような……何だその呼び方？

普段は、メディアの前とか、それこそさつきまでも、『オールマイト』っていうヒーローネームで呼んでるはずだが……さつきはとつさに、って感じで……。

『トシ』、ねえ……？ ただの仇名か、それとも………というか……

(……何か最近、オールマイト関連で、似た響きの名前を聞いた気が………?)

第106話 オールマイトとデイヴとナイトアイ

思わぬところでオールマイト……と、サー・ナイトアイに会ったわけだが、その場ではちよつと話したくらいで、私達はすぐにそこをおいとました。

旧友同士の語らいを邪魔するのもアレだし、義姉さん曰く『仕事』はまた別に時間を取つてあるそうだから。

さつき知り合つたばかりのメリツサさんと一緒に、パビリオンを見て回ることにした。

「そうか！ どこかで見たことあると思った……雄英体育祭で、1位と3位になつた人だつたのね」

「あ、うん、はい……1位2人いますけどね、今年の大会……」

「2位がいなくて3位が同じく2人だしね」

「それだけすごい試合だつたつてことじゃない。そんな人に会えるなんて光栄だわ！ 栄陽院さんも、アカデミーではすごく人気ある人だから、会えてうれしい！」

なんかアレだな。ヒーローを前にした緑谷を彷彿とさせる——いやさすがにアレほどじゃないかもだが——はしやぎっぷりだな。

シヨツピングの時の一件で、まだ『体育祭』の熱が後を引いてるのは割とわかつてはいたけど、こんな日本から離れた土地でもそうなのか？ ……何だか、気のせいじゃなければ、メリツサさん……何か別な、私達にあえて喜ぶ感じの理由があるっぽいな。

この感情が向けられてるのは、ヒーローに対してか、あるいは……「僕らもすごく光栄ですよ。あのデヴィッド博士にコスチュームを手掛けてもらえるなんて……しかも、メリツサさんも手伝うんでしょ？

凄いですね……まだ学生なのに、研究室での仕事も任されてるんですか？」

「そんなに大したことじゃないわ。私が作つたり、理論を提唱してるサポートアイテムのいくつかが、2人のコスチュームに応用できそうだっていう話だから、ちよつとだけ手伝えることになつたの。まだまだ

だ未熟よ、私なんか……あ、でももちろん、最高のコスチュームになるように、全力で頑張らせてもらおうからね！」

「はい、よろしく願いますー！」

「ええ、任せて！ それより2人共、次の予定まで時間があって、何するかも特に決めてないんでしよう？ よかったら、私にここを案内させて？ 楽しめそうなところ、いっぱい知ってるわ」

「本当ですか！ それならありがたいけど……えーと？」

と、言いながらこつちをうかがってくる緑谷。

「うん？ ああ、私も構わないよ。土地勘ゼロだし、現地をよく知っている人の案内がもらえるならこつちも心強いや」

「よかった！ なら、楽しんでもらえるように頑張るわ……いきましよう！」

背も高くて大人っぽい人だけど、性格はなんというか……私達と変わらない感じだな、こうして見ると。

やっぱり理由はわからないけど、嬉しそうに、楽しそうにしてるし……いいか、まずは。

今日1日はほとんど暇な予定だったからな。案内してくれるのは素直にありがたい。

ガイドブック的なのはあるけど、どうせなら地元（って言っているのかコレは）の人がホントにお勧めしたいものを味わいたい。アトラクションも、食事なんかも。

明日からは『公私』の『公』がメインになるからな。今日は息抜きに使ってもばちはあたるまい。

メリツサさんに手を取られて、顔を赤くしながら引つ張られていく緑谷を見ながら——ていうか、やっぱりこの子距離感の近さとかフレンドリーさは芦戸や葉隠以上な気がする——私も遅れないようにそれについて行くのだった。

☆☆☆

「どういうことだ、トシ……なぜこんなにも『個性数値』が下がって

る!？」 以前調べた時はここまでではなかったはずだぞ!？」

「……長年、この状態で戦い続けて来たんだ……そりや、ガタもくるさ」

デヴィッド・シールド博士の研究室……その一室にて。

トウルーフオームに戻ったオールマイトと、その付き添いで『I・アイランド』に来たサー・ナイトアイ。そして、彼の事情を（OFA以外、ではあるが）知っているデヴィッドがそこにいた。

診察台のような形の椅子の上に身を横にしているオールマイト。その体の状態を測定していたデヴィッド博士は、『平和の象徴』が急激に力を失っているという現実には愕然としていた。

「AFOとの戦いの傷がここまで……いやしかし、だからといって『個性』そのものがここまで弱るなどありえるのか……!？」

彼は、オールマイトの個性……『ワン・フォー・オール』について知らない。代々受け継がれていくものであり、後継者……緑谷出久にそれを継承した結果、オールマイト自身の体の中にある『残り火』だけで今、戦っているのだということを……遠からずそれが失われるのだということを、彼は知らない。

ゆえに、『個性』そのものが弱っているという前代未聞の事態を前に辟易しているのだが……

（……デヴィッド……すまない。こればかりは、君にも話せない……。この秘密を知れば、君達も巻き込んでしまうかもしれない。君とメリッサを、奴との戦いに巻き込むわけにはいかないんだ……）

親友である彼にであつても、話すわけにはいかない。

そんな秘密を抱えて苦悩するオールマイトの意思を汲んだか、傍らに立っていたサー・ナイトアイが、くいつとメガネを上げる動作と共に言った。

「長期間にわたり、後遺症を抱えた肉体を酷使し続けた結果かもしれないですね……『個性』は身体機能だ、体そのものが弱っていれば、その影響を受けて減衰するということもあるのかもしれない。そもそも、『個性』自体、外部からの干渉を全く受けないわけではないですから」

「……？ どういう意味だい、サー・ナイトアイ？」

「先立って私の事務所が手掛けた案件の中に、『個性因子』を傷つけて『個性』を破壊する薬品、ないし弾丸を扱った連中がいました。それを思い出しましてね」

「……！ ああ、私も話は聞いている……『ヤクザ』……ジャパニーズ・ギヤングが引き起こした事件だったな。だがなるほど……『個性因子』自体も全く何も外部からの干渉を受けないわけじゃない……『イデオ・トリガー』と逆の原理で、身体機能の1つとして考えれば、衰退という結果も……前例がないだけでありうるのかもしれない」

「……と、申し訳ない、生意気を言いました。博士には釈迦に説法でしたね」

「いや、貴重な意見だったよ……とはいえ、この状況をどうにかするというのが、私にもさすがに手が思い浮かばない……このままいけば、遠からず……」

元より『どうにかする』方法など、それこそ、緑谷出久から『個性』を再譲渡してもらおうくらいしか手はないのだが……それを知っている2人は、結果的に誤魔化せたとはいえ、だます形になってしまった博士に対して、罪悪感に胸をちくりと痛ませていた。

頭を抱えるデヴィッド博士は、悔しそうに画面を見上げ……呟くように口に出す。

「このままでは、平和の象徴が失われてしまう……！ どうにかしなければ……」

苦悩する彼に、『大丈夫だ』とオールマイトは声をかける。

『後継者がいる』とはさすがに言えない。『ワン・フォー・オール』のこともそうだが、オールマイトほどのヒーローが、誰か特定の個人に目をかけて育てているなどという情報は、世間には刺激が強すぎるからだ。マスコミにとって格好の餌になるだろう。

だが、次代を背負う若き『有精卵』達は着実に育っているし、そもそもオールマイト以外にも、日本には強いヒーローが他にもたくさんいる。

もちろん簡単に倒れるつもりはないが、ヒーローは必ず悪を倒し、

勝ち続けるだろうと告げる。

デヴィッド博士は、それを聞いて、言葉の上では納得しつつも、それでもやはり思う所があるのだろう。それが、カレッジの時代から共に戦っていた親友の力が失われてしまうことにか、平和の象徴の喪失という一大事を前にしてか、いかな理由の憂いなのかは定かでないが。

苦悩を表情に滲ませながら、つい口から出たかのような調子で、ポツリと言った。

「……せめて、あの研究がもう少し進んでいれば、手の打ちようもあつたのかもしれないというのに……っ！」

「……？ あの研究……？」

親友の口からこぼれ出た言葉を聞いたオールマイトが、そう聞き返す。

と同時に、オールマイトは、先程から少し気になっていたところが再び目につき始め……それも一緒に口をついて出た。

「そういえばデイヴ……ここ、君一人しかいないのかい？ 研究する

時は、いつも何人か助手をつけてたと思うんだが……入り口のロッカーにも、名札が君とメリッサの分しかなかったが」

「ご息女が助手、ということでしょうか？」

サー・ナイトアイもそれに続けて尋ねると、博士は顔を上げて、

「ああ……いや、メリッサは……確かに時々手伝ってもらうことはあるけど、違うよ。……まだ言っていないかったことだが、近々私はここを離れることになってね。今、片づけをしていたんだ」

「離れる、つて……!? I・アイランドをかいブフォアツ？」

「お、オールマイト落ち着いてください！ これを」

驚いて診察台から起き上がり、その拍子に喀血したオールマイト。そしてその口元に、かいかいしく、とも言えるような感じでタオルを差し出すサー・ナイトアイ。見た目のやせ細り具合も相まって、傍から見ると要介護者の世話をしているかのようである。

しかし、ナイトアイ自身も今の言葉には驚いているようだ。鉄面皮で知られる彼ではあるが、割とわかりやすく驚愕を表情に浮かべてい

る。

「ああ、ありがとうナイトアイ……いやしかしデイヴ、どういうことだい？ I・アイランドを離れるって……いや、さつき『研究がひと段落した』とは言ってたけど……まさか……!?!」

「……いや、研究者自体をやめるわけではないよ。場所を移すだけさ……商売相手もね」

「そう、か……いやでも、それにしてもどうして君ほどの研究者が、この『I・アイランド』を……ここは『個性』研究の総本山、君のホームも同然だろうに。ここ以上に設備の整っている研究施設なんて、そうそうないだろう？ 国際的に中立で、立場も保証されているし……」

「色々とあつてね……詳しくはまだ話せないが、もう決めていることなんだ。既に『I・アイランド』側には話も通しているし、助手も全員、異動先を紹介した上で解任した。今は研究室の、文字通り後片付けの最中さ」

話題が変わったことが多少の気分転換要因になったのか、博士は表情を少し楽にした様子でそう答えた。ふう、と息をついて、目の前のキーボードを操作し、測定した記録を保存していく。他者に見られないように、セキュリティ上の保護を施すことも忘れずに。

「サム……ああ、最後に残っていた助手なんだが、彼もつい先日出ていったよ。予定ではもう少し長くいてくれるはずだったんだが、急に予定が変わったとかで……おかげで、1人で片づけをしなければならなくて大変だ。休みの日にメリツサにも手伝ってもらってるくらいだよ」

「H A H A H A、そいつは災難だな……私でよければ後で手伝うよ。力仕事なら任せておけ!」

「気持ち嬉しいが、こんなものを見せられた後だとなあ……それに、今日この後はレセプションパーティーにも出るんだろ？ まずは休んでおけよ、トシ。ナイトアイ、この通り、ちよつと目を放したり時間ができると無茶をする奴だから、お目付け役をよろしく頼むよ」

「ご安心ください、デヴィッド博士。よく知っております」

「おいおい2人共……そんな人を言うことを聞かない入院患者みたい
に言わないでくれよ」

「下手な入院患者よりよほど重篤な状態で無茶苦茶なことをする方だ
と思いますかね……まあこの通りなので、早く引退して柔らかいベツ
ドでゆつくり寝てもらいたいところですよ。いつそ雄英にアメリカ留学の力
リキュラムでも提案してみるのも手かもしれないですね……『国際イン
ターン』の一環としてなら可能そうな気もする」

「カレッジ時代のトシみたいなのに、武者修行の旅としてかい？ おいお
いそりゃさすがに無茶つてもものだよナイトアイ。それに当時つき
合ってた私が言うのも何だが、あの頃のトシと同じように毎日戦って
たんじや、普通のヒーローや学生じや到底身が持たないぞ？」

「当時からそうでしたか……まあ、ヒーローの本場アメリカでなお、そ
の歴史に名を刻むほどの戦いぶりを見せたわけですからね、予想はつ
いていました。その足跡を追わせるというのも、現役のヒーローな
らともかく、まだ未熟な学生にはさすがに荷が勝過ぎるというもの
か」

「ついでに単位取得の心配もしなきゃいけないしな。ラジオから事件
のニュースが聞こえてきた瞬間に、乗っている車の行先変更を余儀な
くされるから、時間通りに授業に出るってことがまあ難しい……日本
人は時間にシビアなお国柄だっという話を疑わざるをえなかったよ、
あの頃は。2人で教授に頭下げて、どうにか補修を受けさせてもらっ
て、そしてその補修すら遅刻して……」

「それも日本でやっていましたよ。確かに、スケジュール管理という
ものが大変で仕方ありませんでした……ラジオやケータイのニュー
ス速報がそのまま出勤要請と同義ですから、その瞬間に予定の組み直
しや関係各所への連絡をしないといけず……。最近では教師になっ
たのですから、せめて授業に遅刻するのはやめてほしいといえますか
……生徒達に妙な影響が出ないといいのですが」

「あの、ちよ……デイヴ、ナイトアイ……あんまし、その……私の失敗
談とかやらかし談で盛り上がらないでくれると……恥ずかしいから

……。なんかこう、三者面談で学校の先生と親が盛り上がってる横で小さくなつてなきやいけない感じの気分……」

「まさにそういう場面で言われそうなセリフですが……そういう話になる原因があなたにあるからこそこうなっているんでしよう」

「ははは、言われてしまったなトシ。君はもうちよつと、ゆとりを持つてのんびり生きるくらいがもうちよつといいんだと思うよ……ナイトアイ、こんな男だが、これからよろしく頼む。君ほどの男が、きちんとトシと仲直りしてこうして一緒にいてくれるのは心強い」

「身に余るお言葉です……ありがとうございます、博士。ええ、必ず」
がしつ、と固く握手をする、親友と元相棒。サイドキック

その2つの手の間にある懸念、ないし信頼は、恐らく自分のことなんだろうなと思うと、オールマイトは喜んでいいやら、反省すればいいやら、不思議というか微妙な気分になった。

そして、ふと思った。

(そういえば、デイヴが進めてた研究つて何だろう……さつきお茶を濁されたつてことは、機密の類か……少なくとも今は、聞いても教えたくないんだらうな。ま、仕方ないか)

☆☆☆

「……林間合宿、まだ始まってないよなコレ？」

「あーまあ、ウチも正直そう思ったわ……集まり過ぎでしょ、この島に、1—A」

とまあ、カフェのテラス席で、ジュースグラス片手に一服してる私らである。隣には耳郎。

向かいの席で、ちよつと戸惑いつつ、麗日が緑谷と話している。麗日は偶然会えたことを喜びつつも……しかし、メリッサと一緒にいるところを見て妙な圧を放っている様子。

また別な席では、注文したピザにタバスコどぼぼかけて食ってる爆豪と、公共の場なんだからつてもう少し落ち着いて食べるように言ってる飯田。そのやり取りを呆れ半分で眺めてる切島と轟がいて

……あ、ちなみに私の席の逆隣には八百万がいる。

で、このレストランでボーイの仕事（バイト）をしている峰田と上鳴が忙しそうに走り回ってる。ちなみにこの2人だけ、ヒーローコスチュームじゃない。ウェイター服だ。

他にも、ここにはいないけど、砂藤や瀬呂、障子や常闇、芦戸や葉隠や梅雨ちゃんも来てるっていうし……示し合わせたみたいに揃ったな、うちのクラスの連中が。

「爆豪と切島は体育祭優勝のペアチケットで来てて、轟はエンデヴァーの代理……峰田と上鳴は、バイトに応募して採用された……で、麗日と耳郎は八百万の家に届いたチケットだっけ？」

「そ。飯田んちもヒーロー一家だからチケット届いたんだってさ。緑谷は爆豪と同じで優勝者用のチケットだろうけど……栄陽院は？」

「私んちも八百万と同じような家だからさ、人数分チケットはもらってんだよね」

「ああ、なるほど……や、もしかして緑谷のペアチケットで誘われたのかと思っただけど違ったか。一緒に出てくるもんだからついね」

「あははは、悪い悪い紛らわしくて。緑谷のチケットは……誘ってた相手が急に来れなくなったらしいよ？ もったいない……何気にプラチナチケットなのにな」

嘘はついてない。私んちにチケットが届いてるのはホントだ……それを私が使ってここに来たわけではないというだけだ。明言してないだけだ。

あ、でも緑谷のチケット云々は嘘か……ごめん耳郎。まだ秘密だから、このへんの事情は。

「ですが、今日の夜のレセプションパーティーに出られるのは、チケットがある人だけですから……残念ながら、ここにいらっしゃる方々のみでの参加ですわね」

「砂藤達や、ウェイターやつてる峰田たちはダメってことね。ま、そりゃ仕方ないか……」

「じゃんけんで負けた3人、悔しそうな顔してたもんなあ……あ、まあ葉隠は表情見えないけど、悔しそうにはしてた。っていうか……緑谷

のチケットつて、そうすると余ってたよな？ それ使えば、もう一人誘える？」

「あー、ダメだろ多分。使わないから置いてきちやっただけ言っただし」

「そっかー、残念」

そんな感じで、気の置けない友達同士のリラックスした会話を楽しみながら、私達は……思いがけず集まった1ーAメンバーで、1日目のパビリオンを回ることにになり、すぐに全員と仲良くなったメリッサの案題で『I・アイランド』を堪能させてもらったのだった。

あ、でも爆豪だけは『つき合ってたれっかポケが』って離脱して……お目付け役（すでにそんな立ち位置）の切島もそっちについてっただけだ。

あと、仕事があるから峰田と上鳴はついてこれなかったし、飯田と轟も行くところがあるって言って途中で離脱。結構ばらけたわ。

結果、緑谷、私、麗日、耳郎、八百万、メリッサで大半のパビリオンは回った。

……今更だけど、男女比偏ってたなコレ……。

そしてその後は、集合時間に遅れないように早めに解散し、それぞれ正装に——ヒーローとしての、じゃなくて、普通にドレスコードとか用のそれに——着替えた上で、パーティー会場に集合。

メリッサのはからいで特別にチケットを用意してもらえた峰田と上鳴も含めたメンバーで、オールマイトも出ている（ただしこっちはヒーローコスチュームで）パーティーに、緊張しつつも皆で参加して……

……特に何事もなく、無事にパーティーは終了した。

……？ いや、いいことなんだけど……というか、別に何もトラブルが予期されてたわけじゃないから、そりゃこれで当然なんだけど……うん。

せいぜい、私やメリッサ含めた女性陣のドレス姿に男性陣が『おおく！』って大興奮してたり、耳郎だけ褒められ方の方向性が違って（つか褒められてなくて）制裁が飛んでたりしたくらいだし……ああ、あとは、途中から合流した爆豪がいつもの調子で態度悪いから大変だったくらいか。

　　とうかよく正装持ってきてたなと思ったんだが、切島が用意してたそうだと。お母さんかよ。

　　……うん、まあ、何事もなくて結構、のほろなんだけど……何だろ、この、物足りないというか……コレジャナイ感？

第107話 コスチューム・アップグレード

レセプションパーティーは何事もなく進行し、美味しい料理に舌鼓を打ちつつ堪能させていただいた。

麗日や耳郎といった面々の、見慣れないというか、いつものイメージと違うドレス姿も、見てて楽しかった。私や八百万は比較的着る機会があるから慣れてる方だったけど、見慣れないっていう点では皆と同じだったかな。他の人にとって。

男性陣からは色々褒めてもらえたけど……正直耳郎へのほめ言葉（褒めてるとは言っていない。言えない）はちよつとどうにか……『女の殺し屋みてー』はないだろスケベコンビ……。

あと、私のドレスが肩出しタイプだったので、いつもより露出が多くて……それもあってだろう、いつもみたいにはハプニングが起こらないか心配された。峰田にはむしろ期待された。

私が皆の中でどういう立ち位置なのかを嫌でも思い知らされる反応だった。

……いやでも実際、ずっこけた麗日が私のドレスをとっさにつかんで降り降りしそうになっちゃってたから、危なかったのはそうなんだよな……。

その直前に緑谷が麗日の体を抱き留めたおかげで、難を逃れたけど。ちよつとドレスがしわになったくらいである。

麗日は麗日で、緑谷に抱き留められて抱えあげられて、顔を赤くしつつも喜んでた風だったので……まあ結果オーライだったようである。

なお、後から緑谷に聞いたら、あの時はむしろ麗日っていうよりは私の方を気にして守ってくれた感じだったようで……うん、その……嬉しかったです。

パーティーも始まってしばらくすると、漂うセレブリティな雰囲気緊張してた面々もいい感じにほぐれてきたようだった。

ここまでは場慣れしている八百万や飯田が先導してくれていたんだが、ここからは私のターンである。こなれて碎けてきてからの、こういうハイクラスなパーティーの楽しみ方だ。

偉い人のスピーチとか、それに伴ったスライド上映とかが始まると、照明が落ちる。

そうしたら、立食形式で色々料理が並んでるわけだが……そこから好きなように料理を取って組み合わせ、好きなように食べるつてのがジャンクっぽくて楽しくて美味しい。

大きめの器にライスをもらって、そこにローストビーフをどっさり乗せてお好みのソースをかけた『ローストビーフ丼』とか、

同じくライスと、海鮮コーナーで新鮮な鯛の刺身をもらい、飲み物コーナーで緑茶とか梅昆布茶をもらってかけて食べる『鯛茶漬け』とか、

チーズフォンデュのところからトロトロのチーズを、肉料理のコーナーからステーキやハンバーグを、サラダコーナーから瑞々しいレタスやトマトを調達し、ふわふわに焼かれた食パンに挟んで好みサンドイツチにして食べたりとか、

規模と見た目が違うだけで、やってることは食べ放題の店でアレンジ料理作ってるのと同じ感じだが、それでいいんだよそれで。

照明落ちて暗くなってからやってるから、誰に迷惑かけてるわけでもなし。

八百万や飯田は『えー、ちょっと……』って感じになってたけど、まあ見逃してくれてたし……上鳴や峰田はむしろ面白がつて色々やってた。峰田が作った、薄っすいローストビーフをオニオンソースと交互に何層も重ねて作ってた『肉ミルフィューユ』が割とマジで美味かつたので真似した。

もちろん、食べてばっかりいたわけじゃないけどね。会場にはヒーローや色んな関係者がいたから、適宜挨拶して回ったりもしたし。

緑谷なんかはむしろそっちがメインだったかも。食事を楽しみつつも、会場で有名なヒーローとか『個性』関係の研究者を見つけると挨拶しに行ったりして……

私や上鳴、峰田が『花より団子』な楽しみ方をしてたとしたら、緑谷はその逆で、きちんと花を楽しんでいたと言えるのかどうか……まあいいや。

そんな感じで、皆思い思いにパーティーを堪能してその日は終了した。

その後は各自ホテルの部屋に戻って、就寝。明日以降の予定に備えて体を休める。

麗日や八百万達も色々予定あるだろうし……峰田と上鳴はバイトの仕事明日もあるだろうし。

私と緑谷は……いいよ、ここに来た本来の目的のために、だな。

☆☆☆

どこかわからない、とある場所。

薄暗く、見通しがあまりよくないが……しかし狭さ、窮屈さは感じない部屋で、2人の男が向かい合って座っていた。奇妙なもので……2人とも、仮面で顔を隠して。

「よろしかったんですか？ デヴィッド・シールドの一件……『個性』を強化する発明品の奪取を、しかも向こうさんの手引きで行えるつてのに、その話蹴つちまってる」

「構わないさ。研究自体がもつと進んで、あるいは完成していればまだやる価値はあったかもしれないが……今はそれよりも重要視したいこともあることだしね。君にはそちらに注力してほしいんだよ、ウォルフラム」

ウォルフラム、と呼ばれた男……軍人か傭兵のような装備を身に着け、目と口元が開いた、装甲にもなりそうな仮面をつけた男は、返されたその答えに『そうですか』と、少しつまらなそうにつぶやいた。「ま、聞いた話じゃ、会場にはあのオールマイトも来てたっていうし……中止して正解だったのかもしれないね」

「ふふっ、それはそれで楽しみ方もあったのだろうけどね……」

笑いを押し殺すようにして、座っている椅子の背もたれに体重を預

けて深く腰掛けるその男は……ドクロを模したようなデザインの、頭全体を覆う仮面、あるいはヘルムにも見えるものを装着しており、表情をうかがい知ることはできない。

しかし、恐らくは笑っているであろうことは、なんとなく楽しそうなその声音から推測することができた。

「オールマイトの親友を悪の道に……『敵』の協力者に堕とす。ふっ、そうなった時、その事実を知った時にオールマイトがどんな顔をするのかと考えると……いや、どの道僕はその顔を見ることはできないから、考えても空しくなってしまうのだけだね」

「いずれにせよ、その発明、ないし研究自体が中途半端なところで止まっちゃってる以上は、無理してことを起こしても旨味が少ないってわけだ。素人目には面白そうな研究に思えてましたんで、正直期待してたんだが……」

「もう少し待てば、それも見える形になるかもしれないよ？　どうやらデヴィッド博士は、場所と立場を移してその研究をつづけるつもりのようなからね」

「そうなんですかい？　そりや楽しみだ……でもそう考えると、あの助手もバカなことをしたもんだ。先走って目先の利益だけを追求しようとして、欲をかいいた結果がこれか」

ウォルフラムはそう言いながら、数か月前、裏のルートを介して自分に『商売』の話を持ちかけて来た、小太りの研究者の男を……つい最近まで、デヴィッド・シールドの助手であった、サムのことを思いだしていた。

デヴィッド・シールド博士は、『個性強化装備』の研究を進めており……その概要は、特殊なサポートアイテムを身に着けて、それによって脳や個性因子を刺激することで、装着者の『個性』を大幅に強化できるというものだった。しかも、薬品による強化などと違い、ノーリスクで。

しかし、その発明が現在の個性社会のパワーバランスを崩してしまふものになりかねないと危惧した各国により圧力がかけられ、研究は凍結……その過程で作った試作品のそれについても、I・アイランド

で嚴重に保管・封印されることとなってしまった。

實質的に、研究は博士の手を離れてしまっていた。何年もの長きを費やして進めて来たにも関わらず、ついに日の目を見ることなく。

そこに至るまでに費やした労力や費用、さらには得られるはずだった名誉や富……研究の協力者として、苦勞に見合ったそれを心待ちにしていたサムは、どうしてもこのまま終わってしまうことに納得できず、まだデヴィッドには内密ではあるが、ある計画を企てていたのである。

テロリストの襲撃を起こし、その混乱・どさくさに紛れて、試作品とその他の研究成果を回収……取り戻すという、狂言の計画を。

テロリスト……すなわちは『敵役』をこちらで用意し、侵入から何から手引きをして事件を起こさせる。多くの人質の命を盾に、ヒーローを拘束して何もさせず……その間に、自分達は犯人に連れていかれたふりをして、『試作品』とその他の回収に向かう。

その際、『試作品』の他にも、保管されている研究資料などをいくつか盗み出してしまふ。何を狙ったのかを絞らせないカモフラージュのために。

回収が完了したら、テロリストは『目的は達した』として撤収。それが何だったのかはうやむやにしたままその場から逃走してしまう。人質やヒーロー達には、一切の被害を出さず。

後になってから、『試作品』がなくなったことには気づかれるだろうが、もうどこに行ってしまったのかもわからないテロリストのことなど探しようもないだろうという目論見だ。

もつとも、本物のテロリスト、ないし『敵』を用意する必要はないこの計画ではあるが、サムが声をかけていたウォルフラムは、まごうことなき本物の『敵』であるし……サムは利益のために、カモフラージュで奪った研究資料などについても裏で売る手配をしようとしていたようだったため、結局はよくに目がくらんだ俗物だとウォルフラムは見ていたのだが。

それでも、ウォルフラムや、彼の主人……AFOの利益になるのならばそれを受けてもよかったかと考えてはいたのだが、他にも仕事

できそうであることや、研究自体の進捗が不十分である点などを問題として、結局その話を蹴ることになったのだ。

それでもサムは、どうにかして研究成果の奪取を……懲りずに裏から手を回すような形で成し遂げたがっていたのだが、所詮は表社会に生きる、裏社会の厳しさを知らない半端者。

強引に『敵』を……ウォルフラムの所属以外の組織だが、そこに話をつけようとして逆に目を付けられ……逃げるように行方不明になる、という結末を彼は迎えた……らしい。

らしい、というのは、そこまでは、ないし最終的にどうなったのかまではウォルフラムも知らないからだ。興味も最早ないし、どうでもいいのだが。

今頃、ほとんど着のみ着のまま逃げ出した、元研究者の男が、職も何もかも失って、どこかで途方に暮れている現状が出来上がっていることだろう、という予想がつく程度である。

処される前に逃げ出すことに成功した分、運はいいのかもしれないが、それまでだ。

「それでボス、次は俺は何をすりゃいいんで？ 潜伏がてらのんびりバカンスもいいんですが、いいかげんに体が鈍って来ちまいそうだな。荒事の類だと個人的にはありがたいんですがね」

「そうかい？ それはでも、もう少し待つてもらおうことになりそうだな……いや、そうなる可能性もなくはないんだが。次に頼みたい仕事は、国外からコンタクトを取ってきた国際ヴィラン組織と渡りをつけてもらいたいんだ。代表者と会って、色々話を詰めてくれ。そういう仕事は、まだ弔には早いだろうからね」

「ああ、あの秘蔵っ子……まあ確かに、ありやまだまだガキっぽいところがあるようだ。見込みはありそうですから、今後の成長に期待したいところですかね」

「ほう……君にそう言ってもらえると、僕も彼の『先生』としては嬉しい限りだね」

「それで、話をする相手するのは何者なんです？ 交渉内容の詳細は？」

「国際的なブローカー組織の頭目……『キュレーター』という名の男
さ。近々大きく動くつもりがあるから、その準備のために色々動い
てほしくてね。向こうも最近、大きな取引に失敗して儲け話を探して
いるようだったから、いいビジネスパートナーになれると思うよ」

☆☆☆

楽しい時間というのは、あつという間に過ぎるもんだ。

やってることは、どつちかつていえばヒーローとしての勉強、ないし仕事に近いものだったんだろうけど……日に日に自分達の装備が強く、便利に作り替えられていくのを見ているのは、それはもう見て楽しくかつたし嬉しかったので……うん。

デヴィッド博士に加え、メリッサも手伝って……私と緑谷のコスチュームのバージョンアップは、数日間をかけて行われてた。

時間をかけて、それだけ念入りに、慎重に進められたわけだが……しかしそれでいて大胆に、ガッツリと遠慮なくメスが入った。

その結果、今までとは一線を画す性能の装備が出来上がった。

いや、今までも十分高性能というか、ハイスペックなそれではあつたし、そもそも見た目はそれほど変わってないんだけど……流石、『個性』研究の総本山というかね？ I・アイランドの設備と技術力を、まだ甘く見てたかもしれないというかね？

布というか繊維質の部分は、特殊合金の鋼線を編んで作られた特殊強化素材。それを何層にも重ねて作られているので、強度は下手な装甲版よりも上つていう代物になった。防弾・防刃はもちろん、部位によつては耐衝撃機能まで完備しているので、接近戦や不意打ちにも強い。

それでいてしなやかで軽いから、動きをほとんど阻害しない。

緑谷のは比較的薄手だから、防御力はやや低めだが（それでも十分高いが）その分動きやすい。逆に私のは厚手で、何枚も重ねて着るから防御力はかなりある。やや動きを制限するけど。

それに加えて、各自の装備も軒並み強化された。

緑谷のグローブは手の甲や拳頭といった、接近戦、特に打撃攻撃に使う部分に強化兼保護用の装甲が備え付けられ、攻撃力と防御力を増している。もちろん、『エアフォース』を使う際に活躍する遠距離攻撃補助機能も健在だ。

加えて、肘まであるグローブは、インパクトの反動から拳、というか腕全体を守る保護機能を持つサポーターにもなっていて、強力な一撃の反動を抑えてくれる。その衝撃吸収機構は、メリツサが以前に作ったとある発明品を参考にしてているそうだ。

加えて、肘や肩といった部分にも保護装甲が追加されていて——布地の下にだから、あんまり目立たない形でだけ——これも攻防力を増している。

それらの装甲は『アダマンチウム』という、破壊不可能と言われているほどに強靱な超合金でできているため、攻撃と防御の両面で緑谷を助けてくれるだろう。

加えて、最近緑谷の武器に加わった『アイアンソール』。発目によって設計され、実装されたコレにも手が入り……構造自体は優秀なのでほとんどそのまま採用されたのだが、素材がこれも、より高性能なそれに置き換えられてた。

その名も『ダークマターインゴット』。加工の仕方によって重量や密度が変わるっていう超がつくくらい特殊な合金らしい。多少重量はあるものの、それは緑谷の身体能力ならどうにでもなる程度だし、その強度は『アダマンチウム』以上で、しなやかさと頑丈さを併せ持つ。

こんな感じで手、足、その他強化されまくった緑谷のコスチュームだが、最大の特徴は、体の各部……特に関節の周辺を保護すると同時に、動きをサポートするために組み込まれた、『サイコフレーム』という名の特殊素材である。

まさかこの素材がこの世界に存在するとは……と、聞かされた時は度肝を抜かれた。

が、別に巨大ロボットの装甲に組み込まれるとかそういう感じじゃないらしい。あくまで、使用者の精神に感応して駆動を補助する

ものだそうだ。それでも大層なものだ。

どうも緑谷の『個性』……特にあの『感情感知(仮)』がこの素材と妙に相性がいらしく、感知能力をブーストしてより強力な形で安定させてくれた。

その際に、体の各部分が赤く光るのがなんかもう……かつこいい。某1本角のガン〇ムを彷彿とさせる。カラーリングのイメージは違うけど。

加えて、緑谷が思った通りに体が動くのを能動的にサポートしてくれるから、動きが若干であるが軽やかになり、コンマ数秒を争うような戦いでは優位に働くだらう。

さらに、この素材は『黒鞭』——あの黒い紐みたいなエネルギー操作の名前らしい——とも相性がよく、より安定してあの技を使えるようになっていた。

……そのうち、あのロボットアニメみたいに予測不能な奇跡でも起こしそうだ。ただでさえ緑谷の個性は何やら底が見えない感じなのに、それに相性がいい素材なんてものが加わるとね……。

こんな感じで、緑谷のコスチュームは、見た目はそれほど大きく変わってはいないものの、超が2つ3つつくくらいには強化され、それに伴って本人の戦闘能力も爆発的に上がることとなった。

もちろん、緑谷だけじゃなく私の装備もだが、私の場合はそこまで複雑なギミックとか装甲は搭載してないからな。

せいぜい、さつきも言った特殊繊維で服を作ったのと……各部の急所とインパクト部の保護用にアダマンチウムのプレート等を入れるくらいだ。

ただ、軍服の内側や、腰回りや腕に装着するポーチその他の収納スペースは軒並み強化・増設した。救急キットや支援用のツール、サポートアイテムなど、色々しまっておいて持ち歩くために。

衝撃に強い素材と機構を採用し、激しく動いても落ちないように固定部の頑丈さも追及した。

なお、サイコフレームは私のコスチュームには入っていない。私の『個性』と……というか、私自身と相性があまりよくなかったみたい

ので。残念。

その代りつてわけじゃないが、私のコスチュームの軍服には、体の各部にエネルギーを素早く、効率よく伝達するための、血管のように使えるラインが組み込まれている。

『フォトンストリーム』という名で呼ばれているこのユニットは、『個性』の発動に合わせてそのラインが発光するところとかが個人的にかっこいいと思っている。

色々な特殊素材に加え、私の髪の毛も使われている。いわゆる『個性無効糸』の類と同じで、私に合った性能を発揮してくれる、素材レベルでのオーダーメイド品なわけだ。

これらの改造に加えて、緑谷にも私にも、切り札的なギミックないしサポートアイテムが1つ2つ組み込まれているんだけど……まあ、その辺はまたの機会についてことだ。

それに限らず、この生まれ変わったコスチュームの性能を存分に発揮するためにも……今までにまして、一層訓練に力を入れないとな。ここまでのものをこしらえてもらったからには、宝の持ち腐れなんて結末は絶対に起こしちゃいけないからな。

ここ『I・アイランド』に滞在してられる残り期間は、そう長くはない。その間に、デヴィッド博士とメリッサ監修の元、きつちりコスチュームの扱いを、そして、それによって強化されているであろう『個性』の制御というか、再調整をきちんとものにしないのだ。

第108話 デヴィッド博士への依頼

『ヴィランチャレンジ』というアトラクションが、I・アイランドにはある。

単純に、『敵』を模して配置されているロボットを、全部壊すまでのタイムを競うだけのものなんだけど……まあ、私ら雄英生からすれば、まあ、ロボ敵なんてのは雄英のカリキュラムで見慣れてるし……というか入学試験の時から相手にしてるし、緊張も何もしない。

完全的に当て、あるいは瓦割みたいな感覚でぶっ壊すものになってるし、純粹にタイムだけを競うような感覚になっていた。

現に、プレオープン期間中に挑戦した切島が、確か……30秒台。その後、爆豪が15秒、緑谷も15秒、轟が14秒を記録。

その更に直後、むきになった爆豪が本気出して12秒でクリア。負けじと緑谷も本気＋『黒鞭』も使って11秒でクリア。

その後轟が12秒でクリア。最初の1回は氷だけで範囲攻撃だったけど、今度は左側の炎も使って高速移動しての合わせ技だった。

なんか触発されたのか、飯田も参加してた。結果は17秒。スピードはあるけど小回りは効かない分の差かな。

ちなみに私は17秒だった。スピード特化ってわけでもないからな。

敵ロボの半分は、壊したロボの残骸を投げつけて遠隔でぶっ壊してなおこのタイムだし。

ちなみに、緑谷はもう既に皆に対して『黒鞭』を公開している。

当然ながら、パワー型の個性だったはずの緑谷に、明らかにジャンルの違う能力が覚醒してるってことで『どういうこと!?!』ってかなり話題になったんだが、結論として『よくわからない』『でも使えるので使っている』というところに落ち着いている。

まあ、暴走とかするような気配も今のところないし、強くなれる分にはいいか、つてことで、皆容認してる感じだ。わからない以上は気にしても仕方ないってのもあると思うけど。

ただ、爆豪は相変わらず面白くなさそうにしてたし、瀬呂は『俺のアイデンティティーがアレなことになる』って何か危機感を覚えていたようだったけども。

……個人的には、そろそろ緑谷が隠している『個性』絡みの事情みたいなのを、そろそろ少しでも知ることができればなー、と思ってるんだけども。

いや、何度も言うように、こっちから急かすつもりはないし、彼に話す気がないなら無理強いするような気もないが……彼を『支える』立場としては、うん。

緑谷がどんどん強くなって、成功していつてくれることは私の喜びでもあるが、その傍らに立って効率よく支えることを考えるのであれば、ある程度の情報は欲しいというか……緑谷の成長に合わせて、今後の私の方針とかも考えるからさあ。

なんてことを最近よく考えていたので、今回のこの『I・アイランド』におけるカリキュラムの1つ……デヴィッド博士による『個性数値』を始めとした、『個性』そのものに関する研究・解析は、私が楽しみというか、期待していたことの1つだった。

博士は、専用の機材によって、『個性』保有者の『個性因子』の絶対量や活性化度なんかを数値化して目に見える形で示し、そのデータをもとに様々なサポートアイテムやコスチュームの開発を行うといった手法を確立している。

また、サポートアイテムの開発以外にも、単なる健康状態の把握や、『個性』の伸び率の解析、トレーニングの方針決定なんかに使う資料としても有用なので、そういう狙いもあるそうさ。

そういうわけで、『個性』の解析をしてみらうのを何気に楽しみにしていた私。

てつきり、『個性』マニアでもある緑谷も同じだと思ってたんだけど……何か、妙に緊張してる？ というか……焦ってるのと心配なのが半々、つてくらいな気が……どうしたんだ？

憧れのデヴィッド博士の研究手腕を見れるから緊張してる、って感

じじやないな……これはまるで、そう……母親にエロ本の隠し場所を見つかりそうになってる思春期男子みたいな……

例えばともかく……緑谷、何か隠してる？　そして、それがバレそうになってるのを焦ってる？

……そういや、緑谷って『個性』がらみで何か隠してたんだっけ……それがひよつとして、このデヴィッド博士の解析でバレるんじゃないかとか、不安なのかな？

けど、ホントに何だ？　緑谷が隠すような、ばれたらまずい『個性』の秘密って……？

結局それがわからないまま、デヴィッド博士の研究室で『個性数値』を調べてもらう段階になって……まずは、レディーファーストってことで、私から。

「これは……大したものだな。活性化度合いだけで見れば、プロヒーローと比較しても遜色ないくらいにはなっているよ」

「本当ね……それに、安定感もあるし、体にきちんと馴染んで使えているのが見てるだけでわかるわ。これなら、強化したコスチュームの機能も十全に使えるわね」

シールド親子に揃ってそんな風に褒められている私。まあ、悪い気分はしない。

画面に映っている内容は……専門用語ばかりだし、そもそも英語なので全然わからないんだが……何か、折れ線グラフが結構高い位置にまで上がっていたり、振れ幅型のグラフが大きい幅で豪快に動いている（ただし急ぎはない）ので、まあいい結果なのかなと思うことにする。褒められてるし。

母さんから聞かされて知ってるんだけども、『個性』というのは身体機能であり、筋肉と同じで、使えば使うほど強くなる。逆に、使わなければ衰える。

個性を限界を超えて使い続けることで、許容上限を上げて強化する……そのまんま『限界突破』と呼ばれる方法で、鍛え上げ、強くすることができると。

私や轟なんかの、ヒーローが身近にいて稽古をつけてくれる環境に

あつた者は、多少なりそういうのを経験して、『個性』そのものを底上げしている。飯田や八百万も、程度は違うがそういうのを積み重ねているはずだ。

加えて言えば、というかネタバレ気味なことを言うが、今度予定されている『林間合宿』は、主にこの方法で『個性』を伸ばすことを主軸にカリキュラムが組まれているらしい。何をやることになるのかは、まだその時まで秘密らしいが。

しかしその強化度合いは、筋肉とかと違い、腕の太さや筋繊維の本数みたいな、わかりやすい形では現れない。いや、現れなかった。今までは。

が、デヴィッド博士の発見した『個性数値』によって、その度合いを視覚化することが、今日には可能になっているのだ。

で、その『個性数値』で見たところ、私のそれは相当に鍛え上げられているらしく、数値だけを見れば、すぐにでもプロで通用するんじゃないかと言えるほどのものだそうだ。

もつとも、筋肉が大きさや形だけでその性能を判断することができないように、『個性』もまた、『個性数値』や単純な馬力だけでその性能を、あるいは使い手の戦闘能力を直接判断するなんてこともできないんだが。

その辺は、まだまだ私が未熟なところ。これから雄英で勉強して伸ばしていくべき所だ。

それはさておき、私が終わった後はいよいよ緑谷の番、ということになったんだが……

なぜかいつの間に来ていたオールマイトとナイトアイも一緒に見守る中、緑谷の個性解析が行われて……その結果、驚くべきことが明らかになった。

あ、ありのまま起こったことを話すぜ？

私は緑谷が最近色々よくわからない能力を使い始めるから、『個性』が急激に何か成長とか変化してるんじゃないかと思ってただけで、調べてみたら変化どころか『個性』そのものが増えていた。

何を言ってるのかわからないと思うが、私も何が起こってるのかわからなかった。頭がどうにかなりそうだったようなそうでもないよな。

突然変異とか個性特異点とかそんなちやちなもんじゃ断じてない、もつとわけのわからない超人社会の片鱗を味わった……！

……ネタはこれくらいにして。

とりあえず、これだけじゃ何もわからないと思うから……順序良く話そうか。

話は、私の次に、緑谷が解析を受けた時のことだ。

なんか、なぜか微妙にオールマイトも緊張しながらその結果を見守っていたんだけど……さつき私の解析を行った時とは打って変わって、デヴィッド博士は驚愕を隠そうともせずに、モニターに表示されている緑谷の『個性数値』に見入っていた。

その結果なんだが……

「これは……こんな現象は初めて見る……！ 緑谷君の体内に、複数の『個性因子』が内在して……完全に別々に成長している、のか……!? しかも、『個性数値』のみならず、これは……体になじんでいる度合いにも差がある……!?!」

「そんな……1人の人間に複数の個性……そんなことが!?!」

愕然としているシールド親子。

メリッサはともかく、『個性』関連で言えば海千山千のデヴィッド博士をここまで驚愕させるとは……緑谷の『個性』絡みで何が起きているのかって部分は、余程特殊な内容らしい。

というか、もしかしてとは思ってたけど……緑谷って個性いくつも持ってるの？

緑谷は……なんか緊張継続中。言葉があんまり出てこないみたいなので、私から。

「……クラスメイトに、『半冷半燃』って、炎と氷の2種類の個性を使う奴がいるんですけど……そういうのとは違うんですか?」

「あ、ああ……そのクラスメイトは多分、エンデヴァー氏のご子息の轟

焦凍君だね？ たしか、レセプションパーティーにも出ていたと思うが。まあ、彼の個性数値を計測していないから何とも、というか断定はできないけれど……ああいった形の『個性』なら、前にも解析したことがある。しかし、あれらは『複合型個性』として、2つの個性が混ざり合って何らかの形になっているもの。『個性数値』そのものは通常と変わりない計測パターンを示すから、データ判別上は普通の個性と同様に扱えるんだ。しかしこれは……」

言いながら、デヴィッド博士は再度モニターを見上げる。

そこに表示されているグラフは……さつきまで表示されていた、私のグラフとは大きく違う。

私の解析結果のグラフは……中身の詳細がわかるかどうかはこの際置いといて、折れ線グラフも波長のグラフも、どちらも色々と大まかな、あるいは細かい特徴はあれど、1つだけだった。

しかし、今表示されている緑谷のグラフは……3つの線が別々に表示されている。

数値、振幅ともに最も大きい『個性』が1つと、中くらいのが1つ、そしてやや小さめのが1つ……合計3つのグラフが、一度に表示されている。

これが、能力的には2つ3つを宿しているように見えても、『複合型』として1つにまとまって混ざっているのであれば、こんな結果にはならない。どんな形であれ、1本の線、1つのグラフにまとまる。

つまりこれは……完全に分離した状態の3つの個性が緑谷の中に覚醒している、ということに他ならず……前代未聞の話だ。

そりゃ、専門家であるデヴィッド博士も……いや、専門家だからこそ驚くだろう。

……と、思っていたんだが……

「これは、まさか……まるで……」

……どうも何か、そういう反応とは違う気がするな。

博士……何を考えてるのかまではわからないけど、緑谷の測定結果を見て、小声で何かつぶやきながら……何でか、緑谷とオールマイイトの方を交互にちらちら見てる。何だ、博士……何を察した？

それが何かはわからない。が……『何か』があるのは確かなようだ。また、オールマイトか……

そんな私の予想を裏付けるように、そのオールマイトに動きがあった。というか、この人も何でいきなりここに現れたんだかな……

『んんっ！』とわざとらしく咳払いをすると、

「あー……すまないね、ちよつとそのお……栄陽院少女とメリッサ、席を外してくれないかな？ これからおじさん達、緑谷少年も交えてその……ちよつと、男同士の話し合いがあつてね。うん、ちよつとばかりデリケートな問題だから……」

……ごまかすつもりがあるのか——あるとしたらちよつとお粗末だと言わざるを得ないが——オールマイトはどうやら、関係者のみで話をしたいらしい。そしてそこに、私とメリッサは含まれないと……

メリッサは何か言いたそうだったけど、彼女の方はデヴィッド博士が説得していた。どうやら彼も、何らかの形で、緑谷の、ひいてはオールマイトの『秘密』的なものに関わりがある立場らしい。

で、私の方は……言うまでもない。

気にならないわけじゃない……というか、むしろ大いに気になるが……緑谷に『ごめん、何も聞かないで』と言われたら……その通りにするのが私だ。

仕方がない……メリッサと一緒に、外のフードコートでも時間を潰すか。……何食べても、ちよつと味とかわからないかもただけだな。今のテンションだと。

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

栄陽院さんとメリッサさんが退室した後……僕らは、デヴィッド博士の部屋の談話スペースに場所を移して話を始めた。

その際、『秘密』を知っている人しかここにはいなくなったというところで、オールマイトはトゥルーフォームに戻っている。やっぱりというか……デヴィッド博士も知ってるんだな、このこと。

その博士はというと、オールマイトが姿を変えたことにはさして反応せず……むしろ、ほとんど僕に視線を固定したような状態で、話し始めた。

「トシ、コレは一体どういうことなんだ……君は何か知っているのか？」

「コレは、とは……さっきの測定結果のことかい、デイヴ？」

「そうだとも。こんな例は今までに見たこともない……！ いや、まれにだが、複数の『個性因子』を持ち、『個性数値』の測定結果にそれが現れる者がいないわけではない……だが、それら全てが発現し、ほぼ十全にという形で使えている例など……私は彼の他には、1つしか知らない」

デヴィッド博士はそこまで言っ……何か辛いことを思いだすよ
うな、苦虫を噛み潰したような表情になった。そこから先、口を開くのも躊躇しているというような感じだ。

それをオールマイトも悟ったのか、博士よりも先に口を開いた。

「先に結論から述べておこう。君の懸念は外れているから安心してくれ。彼は……緑谷少年は、奴と……『オール・フォー・ワン』と何らかのつながりがあるわけではないよ」

「……そうか、なら……それなら、いい」

……そっか、そうだよな。

何も知らない人からしたら……そしてその人が、『オール・フォー・ワン』のことについて知っているとすれば、『個性を複数持っている』という特徴から、僕という存在と、オールマイトの宿敵『オール・フォー・ワン』のつながりを危惧しても仕方ないだろう。

この『超人社会』においても、いやだからこそ……『個性』は1人1つという、基本にして絶対のルールは大きい。それを外れている存在なんて、今までいなかっただから。数少ない事例同士を結びつけることに、不自然なことはない。

そう……『知らなければ』。

「……こうなった以上は、君にも話さなければならぬのだろうな……」

「トシ……?」

「オールマイト? しかし、それは……」

呟くようにオールマイトの口から出た言葉に、ナイトアイは『まさか』といったような表情になって、止めるような視線を向ける。

しかし、オールマイトは頬のこけた顔で力なく笑うと、

「遅かれ早かれだ、ナイトアイ。どのみち……デイヴに緑谷少年の『個性』の解析結果を目にされた以上は……ここでごまかしても、いずれ彼なら自力である程度は真相に、あるいは近いところまで行きつくだろう。それなら、最初から事情も含めて話しておくべきだ……黙っていたのは、我々の方なのだから、そのくらいの誠意は見せてもばちは当たらんさ」

「しかし、そもそもあなたは彼のことを案じて……」

「そうですよオールマイト! そもそも、その……今回のことだって、僕が不用意に……こういう結果になるかもって予想できていれば、もつと……」

と、ナイトアイに続けて僕もオールマイトを止め——実際、『デウス・ロ・ウルト』の一環だからといって、不用意に『個性』の専門家であるデヴィッド博士の検査を受けてしまったわけだし——生意気かもとは思いつつかばおうとするけど……それを遮って、デヴィッド博士が口を開いた。

「待ってくれ、サー・ナイトアイ、緑谷君……勘違いしないでくれ、私は別に、トシや君達を責めているわけではない。そもそも、トシが私に話せない何か秘密を抱えているのだというのは……カレッジの時代からわかっていたからね。しかし、理由があるのなら無理に聞こうとは思わないし、それ自体について何か言おうというわけではないんだ。緑谷君とAFOについても、トシがそう言うのなら無関係なんだろうし、それ自体は私としてもよかったと思っている。せつかく娘にできた友人の一人に、後ろ暗い事情があったのでは、と思っていたからね」

「……そう言ってくれるとありがたいよ、デイヴ。だがさつきも言ったように……こうなった以上は、君にも知っておいてもらわなければ

ならないと思っっている。それに実は……もともと、今回の来訪で、君にこの秘密を打ち明けることも検討していたんだ。個性研究者としての君の力を……借りなければならぬ事態になる可能性があったからね」

「……？　そうなのか、トシ……私の、研究者としての力を？」

また別な方向に意外そうな表情の博士。

横で聞いていた僕も少し驚いている。オールマイト……と、ナイトアイもだろうが、2人は元々デヴィッド博士に……恐らくは『秘密』つて、『ワン・フォー・オール』のことだと思っけど、それを打ち明けるつもりだった……。

そしてその理由は、博士の協力を得るために、そうしなければならぬから。

つまり、『ワン・フォー・オール』関連で、博士に協力してもらっことになる、ということ……恐らくは、『個性』に関する研究や解析の分野で。

デヴィッド博士は、また僕とオールマイトを交互に見ながら、顎に手を当てて考えるようにして、

「……先程までの話からすると、トシがこれから話す『隠し事』というのは、緑谷君に、そして、『オール・フォー・ワン』にも関わりのあること……というわけだな？　そして恐らくは、現状抱えている何らかの課題・問題を打破するために、私の力がいる……と？」

「……ちが何も言わぬいうちから理解が速くて助かるよ、デヴィ……その通りだ。これから話すことは……私と緑谷少年、そして奴に関わりのある話だ……できることならデヴィ、君やメリッサを巻き込まないためにも、墓場まで持っていきたかったことなんだが、な」

「水臭いことを言うな、トシ。それでも昔は、散々君の無茶に付き合わされてきたんだぜ？　今更そのくらいで怯むものじゃないさ……君の、そして君の作った平和のためなら、そうだな……テロリストでも何でも雇ってI・アイランドを丸ごとジャックするくらいのことだつてやってみせよう」

「H A H A H A！　おいおい、やめてくれよデヴィ、そんなことしたら

私は君を逮捕しなきゃいけないか、悲劇だろそんなの。君が刑務所にぶち込まれてる間に、メリッサが愛想つかしてどこかの馬の骨とも知れない男と結婚して出ていっちゃったらどうするんだい？」

「それは困るな……うん、やめておこう。君に迷惑がかかったり、メリッサを泣かせるようなことはしたくないしな。目に入れても痛くない自慢の娘だ、どこの馬の骨とも知れない男にくれてやる気もない。それならそうだな……緑谷君にでも貰ってもらった方が安心かな？」

将来有望なヒーローのようだしね、と続けて笑いかけてくるデヴィッド博士。いきなり話を振られた上に、内容が……ジョークだとはいえ、あんまりにも予想外の方向だったので、『へあ!?!』ってびっくりしてしまった……。

め、メリッサさんが僕の……い、いや考えるなバカ、ジョークだジョーク。アメリカンジョーク。それに僕にはもうとw……え、栄陽院さんが……

なんて考えて必死に心を落ち着けようとしている僕だったが、それを待たずに……会話は進み……ふいに、シリアスな空気が帰ってくる。

「そうだね、割とそれもいいかもしれない……トシが目をかけているということはもしかしたら、君の後継者にでもするつもりなのかい？」

だとしたら未来のトップヒーローだな」

「H A H A H A……そうだな、ああ、その通りだ。その通りなんだよ……デイヴ。彼は……私の選んだ、私の……いや、『平和の象徴』の、後継者なんだ」

「……? 何……?」

突如変わった空気に、デヴィッド博士もたたずまいを直す。

僕も、そしてオールマイトの隣にいるナイトアイも……これから始まる真面目な、そしてデヴィッド博士にとっては寝耳に水極まりない話のために、心の準備をした。

「……デイヴ。これから話すことは……私というヒーローの『原点』に

触れる話であり、この世界の人々の心の拠り所である『平和の象徴』という存在の根幹にも関わってくる内容だ。今から話すこと、決して忘れず、そして漏らさず……君の心のうちにとどめておいてくれ。そしてその上で……私達から君に、彼の……緑谷少年のサポートと、もう1つ……頼みたいことがある」

僕のサポート……恐らくは、僕の『個性』……ワン・フォー・オールのことを打ち明けた上で、これから先の特訓のため、そして『敵』と戦っていくための協力を、つてところか……

そこまでは予想がつく。ついた。
けど……もう1つ、つて何だ……？

考えてもわからず、気になっていたその疑問に答えを出してくれたのは……オールマイトではなく、その直後に口を開いた、ナイトアイだった。

「そしてもう1つの頼み事とは……先程までここにいた少女……栄陽院永久、そしてその『個性』についてです」

(え……!?! 栄陽院さん、の……?)

「彼女の『個性』……その名も『オール・フォー・ユー』……! これの解析をお願いしたい。私の考えが正しければ、その力はある意味……『ワン・フォー・オール』よりも、『オール・フォー・ワン』よりも特異で、強力で……そして、残酷な力だ。私達は、それを知つて……見極めなければならない」

第109話 新たなる協力者

Side. 緑谷出久

「……なるほどな。『ワン・フォー・オール』……成長し、継承される個性、か」

内容が内容だから、少し、いやかなり長めで、しかも密度も濃かった話が終わり……それを聞き終えたデヴィッド博士が、ぽつりとつぶやくように言った。

オールマイトにより、今まで隠してきた『ワン・フォー・オール』の秘密を聞かされた博士は……流石に咀嚼して理解するには苦勞していたようだけど、一旦飲み込んでしまえば、話は早かった。

あるいはそれは、学生時代、ずっとオールマイトと行動を共にしていたからこそその理解の早さ、そして信頼のスムーズさだったのかもしれない。

譲渡できる、受け継がれる個性なんて、普通の常識から考えてみれば、ありえないと言っていいくらいの話なのにな……僕も最初は信じられなかったし。

「……流石に驚かされたし、正直まだ戸惑いが消えたわけでもない。だが、理解はできたよ……トシ、それが君がカレッジの時代から、私にずっと隠して来たことなんだな」

「ああ……すまない、デイヴ。君のことを信頼していないわけじゃないんだ、だが、こればかりは……」

「わかっているとも。私を……私達を巻き込まないように、という理由からだろうか？ 君が誰かに隠し事をしたり、負担を押し付けるようなときは……大抵その誰かのことを思っていることだ。……なんだ、昔と何も変わらないじゃないか」

そう言った博士の目に、オールマイトを責めるような色は少しもない。

むしろ、安心とか感謝とか……そういう優しい感情を宿して、目の前に座るやせこけた親友を見ているようだった。

「しかし、それを今になって私に話した。まあ、さっきの測定結果を見られたからというのもあるだろうが……それだけが理由じゃないだろう？ さっきもちらつと言っていたが……」

「ああ……デイヴ、君にも協力してもらいたい。私達でも全容をつかめなくなってきたている、緑谷少年の『個性』について知るために……そしてそれを鍛え上げ、来るべき巨悪との……復活した、『オール・フォー・ワン』との戦いに備えるために」

「……そっちの話の方が、私にとってはよほど悪夢だ。君を疑うわけではないが……確かなのか？ 奴が復活した……いや、生きていたというのはい」

「残念ながら、その可能性が濃厚だ。根拠はいくつもあるが……特に大きいのは、あの『脳無』という怪人の存在と、もう一つ……」

「この間、『敵連合』の首魁の……死柄木と、僕が遭遇したんですが……その時僕は、奴に、『AFOは何が目的だ』と聞いたたら……『さあな、知らない』と答えてきました。つまり……」

「……AFOの存在、そしてそれと関わりを持っていること自体は、否定しなかった、と」

「付け加えて言うならば、『敵連合』には、首魁と幹部格として、死柄木、黒霧の両名の存在が認められていますが、その更に黒幕たる『先生』と呼ばれていた人物の存在が示唆されています。今彼が言った不意の邂逅の時に加え、『USJ』の襲撃の際にもそのような様子が見られた、と」

「そして、怪人『脳無』は、複数の個性を持っており、受け答えするほどの知性を有していない……なるほど、知れば知るほど『AFO』の存在を疑う、いや確信してしまうような情報だな」

博士はイスに深く腰掛けると、ふう、とため息を1つついた。

「よくわかったよ……今、状況は私が予想、ないし覚悟していたそれよりもよほど悪いということがね。伝説の巨悪が復活し、私兵を率いて何かを成そうとしている。加えて、君の力は衰え、残された時間は少ない……しかし、君の『個性数値』の急激な減少、そのからくりも同時にわかったのは、不幸中の幸いというべきか」

「ああ、緑谷少年に『個性』を譲渡して以来、私の中の『残り火』は徐々に弱くなってきたからね……だが、遅かれ早かれ、私の体は限界に近づいてきていた。このタイミングで彼に『OFA』を譲渡できたことは、私にとってむしろ幸運だったと考えているし、後悔なんてあるはずもない」

「……そうか。なら、私が何か言うべきではないのだろうか」

博士はそう言って、何度目かになるため息をつくとき、背もたれから体を話し、今度は少し前のめりな感じになって、テーブル越しにオールマイト達に視線をやった。

「オールマイト、ナイトアイ、それに……緑谷君。私に何を望む？ 私 は、君達のために……世界の平和のために、何をすればいい？ 私の全てをかけて君達に協力させてもらおうよ」

「ありがとう、デイヴ……！ 私達が望むのは、彼の……緑谷少年の『個性』に関する詳しい解析だ。現在、緑谷少年の体の中には、『OFA』に溶け込んで残っていた、歴代継承者の『個性』が眠っている……潜在的に複数の『個性』を宿している状態なんだ。彼自身の努力もあって、『黒鞭』と『感情感知』はある程度使いこなせるようになりつつある。しかし恐らく、これからもまだまだ……最低でも4つの個性が発現することになるだろう。その時に、それらの個性との付き合い方や、それによる『OFA』そのものの異変などについて、検証を頼みたい」

「そして、それに対応したコスチュームの改良も、ですね。『個性』を複数有するというその特異性から、既存の企業や、それこそ英雄の設備であっても、彼の装備を作るのは難しいでしょう。いや、正確には、『使える』装備を作るのは難しいが……彼の能力を『十全に発揮できる』ような装備を作るのは難しい。それこそ、多種多様な『個性』を持っていることを前提にした上で研究・開発を進めなければいけないでしょうからね」

「不特定多数の相手に今の状況を明かすわけにはいかない以上はそうだろうな……英雄では既に、『正体不明の力』としてある程度の情報開示を行っているという話だったが、それにも限界があるだろうし……」

わかった、私の方で全面的に協力させてもらうよ。ただ……」
「？ ただ？」

「先に話したかと思うが、私は近々ここを離れる身だ。だから、ここに籍があるうちはよくても、その後は少し時間をもらうことになると思う」

「あ、そうだったな……そういえばデイヴ、こないだ聞けなかったけど……君、I・アイランドを離れた後、どこに身を寄せるつもりなんだい？ 引退するわけじゃないみたいだし」

「その場所、あるいは立場によつては、今後の展望を考えなければなりませんね」

思い出したように、オールマイトとナイトアイが言う。

そつか、デヴィッド博士……と、メリツサさんも一緒にだけ……2人は近々、このI・アイランドを出る予定になってたんだっけ。

何だか複雑な事情がありそうだから、そこは詳しくは聞いてないんだけど……いくら博士が優秀な研究者だと言っても、設備も何も満足なものがない状態で、解析も開発もろくにできるもんじやないだろう。

聞けば、きちんと再就職先？ みたいなのは決まってるみたいだけど……もしそこが、外国の企業とか研究所だったりするなら、この先もちよくちよくお世話になるとかいうのは難しいはずだ。

博士個人の仕事になるのはもちろん、僕やオールマイトだって、日本で決して暇なわけじゃない。いや、お世話になる立場でこんなこと言うのもアレだけど……

いや、というかそつちの方が可能性高いよな。何せ、デヴィッド博士の祖国はアメリカだ。

そこはヒーローの本場だし、むしろそこに戻って研究を続ける可能性の方が高いだろう……だとすれば、今後の協力は限定的なものになるか。

まあ、それでも僕らは何か文句や不満を言うべきじゃ……と、思っていたんだけど、

「ああ、それなら心配いらぬ。私の次の勤め先は……『栄陽院コーポ

レーション』だからね」

「……へあ!?!」

なんか変な声が出てしまった。

しかも、なんか2人分聞こえたな、と思っただけだ……横に座っているオールマイト（トウルーフオーム）も同じように驚いていた。

いや、でも無理ないと思う……え、今なんて？

デヴィッド博士……今度、栄陽院コーポレーションって……栄陽院さんの実家の会社に勤めるんですか!? 確かにあそこ、ヒーロー関連の支援事業とかにも手を出してるけど……このタイミングで……いや、もしかして、このタイミングだからこそ？

「あの、もしかして……『デウス・ロ・ウルト』と関係があったり……」
「ああ、そういう部分もあるね。一番は単純に、理想的な環境で研究を続けられるからだけ……栄陽院成実氏と今進めている、契約内容に関する相談では、その事業に技術面で協力することも、仕事内容に含まれている。だから何と言うか……神妙な話の後でこういうことを言うのもアレなんだが……私は元々、君達には協力する予定だったんだよ」

事情を知っているかどうかの違いはあるがね、と付け足して苦笑したデヴィッド博士に、僕もオールマイトも啞然とするしかなかった。

なんだ、コレ……こんな偶然が……いや、ある意味『偶然』とは違うかもしれないけど。

両者とも、優秀な研究者だからこそ、デヴィッド博士に話を持って言ったわけだろうから……その結果、どっちに転んでも結局僕は彼のお世話になることが決まっていた、っただけで。

彼の言った通り、違うのは、博士が『OFA』について十全に理解した上で仕事に取り組めるかどうかという点……いやこの部分結構大きいだろうから、プラスには間違いなく動いてると思うけどね。

「二応まだ内密に話を進めている段階だから、他言はしないでくれよ？ まあそういうわけで、その立場からいくらでも彼の『個性』に関する協力をすることはできるし、なんなら積極的にそれに携わること

だって簡単だろう。安心してくれ」

「そ、そうだな……私達にとつてもそれは好都合だ。でも、なんだっていきなりそんな話に？　そもそも君が『I・アイランド』を離れるってこと自体、私は聞かされた時驚かされたんだが……一体君ほどの研究者が、なぜここを離れて、巨大企業とはいえ民間のそれに移ることになったんだ？」

「……そうだな、それについても話しておいた方がいいか」

デヴィッド博士がその後話してくれたのは……彼がこの『I・アイランド』から離れるきっかけになった、ある研究についてだった。

それは、彼が独自に編み出した『個性強化装置』についての研究・開発事業だった。

『個性』を強化するだけなら、今現在でも様々な方法が提唱され、実践されている。『限界突破』によって普通にトレーニングして上げる方法や、薬物によって強化する方法。

後者はあまり褒められたものじゃないし、副作用なんかもあったりするから、日本では認められていない非合法なものだな。一時期は、弱個性への救済策として注目されたらしいけど。

でも、博士が研究していた装置は、一切の副作用とかデメリットをなしに『個性』を限界以上に強化することができるもので……『個性社会』に革命を起こしかねない技術だった。

強いて言えば、装置自体への負担が大きく、寿命が極端に短い、くらいか。試作品は、数十分も使っていれば、動作不良を起こして壊れてしまう程度の耐久力しかないとか。

さらに言えば、博士はそれをオールマイトに使ってもらうつもりだったようだ。衰えつつある彼に再び全盛期の力を取り戻してもらい、確かな『平和の象徴』であり続けてほしいと。

「もつとも、それも望み薄、というものになってしまったがね……今、君の中にある『個性』が、いわば『残り火』のようなものだとは……いや、私の研究が形になりさえすれば、それを強化してより長く、より強く戦うことも不可能ではないのだろうか……」

「そう、だったのか……しかし、もしそんな手段があるのなら……」

「オールマイト……ですから、そういう破滅的な、あるいはワーカホリック的なものの考え方はそろそろ自重してください。そもそも、あなたは『個性』以前にそれを使う体そのものがボロボロなんですから……『個性』だけ強化しても、体への負担が大きくなるのでは……」

「あ、ああ……そうだね、すまないナイトアイ。わかってる、わかってるんだ」

「わかっているのは本当でしょう。ただ、それでも反射的にそういう考えが頭をよぎったり、口から出てきてしまうのが問題だと言っているのであって……」

「さ、サー・ナイトアイ！ その話はその、また今度に……ええと、デヴィッド博士の話の途中ですから、ね？」

「……ああ、そうだったな。申し訳ありません博士、つい熱くなってしまつて……」

「い、いや、構わないとも……むしろ、トシのことを大切に思っていてくれるようで何よりだ。さて、話を戻すが……私はその研究を進めていたんだが、『個性社会』のパワーバランスを崩してしまうのではないかと危惧した各国からの圧力で、研究を中断せざるを得なくなつたんだ。そのことは正式に『I・アイランド』にも通達され、その研究に関しては予算も降りなくなつた。そんな環境では、私も流石に研究を続けられない。大切なサンプルも封印されてしまつたしね……そんな時に声をかけてくれたのが、『栄陽院コーポレーション』だったんだ」

そこは、というか成実さんは、自分達が十分な予算と万全な設備を用意するから、やりたいように研究を続けてほしい、と持ちかけて来た。

もちろん、自分達の望む形で力を発揮してもらふことにはなる、という話も込みでだけど、企業との契約なわけだから、そういうものだろう。もつとも、その『望む形』っていうのの一番は……僕が今参加している『デウス・ロ・ウルト』なわけだけだ。

そしてデヴィッド博士は、その話を受けた。つまり彼は今後、『栄陽院コーポレーション』で研究を続けていくことになるわけだ。表向き

は、企業に勤め、企業の指示で研究・開発を行いつつ……『I・アイランド』ではできなかった研究で、やってみたいものを進めていくつもりらしい。

『個性強化装置』以外にも、あそこは各国に対して中立であるという立場上、『特定の国や地域に有利なものになりかねない』というような研究はやりづらかったそうだから。

「今月中にはここを引き払う予定だ。手続きも込みでね。その後日本に渡って、来月の半ばか、再来月の頭くらいから正式に研究機関に所属し始めて……といったところだな。メリッサもそれに伴って日本に渡るが……編入先がまだ決まっていなくて、近々紹介してもらおう予定でいるんだ」

「メリッサか……確か今17歳、今度18歳だったか？ 日本で言えば高校3年生だな」

「今から編入となると……残りおよそ8か月の学校生活ですか。長くもなく短くもなく……彼女自身が優秀な技術者ですから、どこを選ぶかは余計に迷う所でしようね」

「微妙な期間だから、本人は試験か何かで高卒資格だけ取って、大学へ編入で入るルートでも構わないと言ってるがね……と、話がそれてしまったな」

いけないいけない、と話題を元に戻すデヴィッド博士。

「そういうわけだから、緑谷君の『個性』を引き続き見ていくという点での協力は、むしろ仕事として、『栄陽院』のバックアップを受けた上でやれると思う。もっとも、今聞いた話を企業側にするわけにはいかない以上、多少なり気を使って見ていくことになるだろうがね……それよりもトシ、いやこの場合、ナイトアイに聞くべきかな……さつき言っていたことについてなんだが」

「と、申されますと？」

「言っていたらどう？ さつきまでここにいた、彼女……栄陽院永久くんの『個性』についても、詳細な解析を頼みたいと。そして……どういう意味かは分からないが、彼女の『個性』が……トシや緑谷君が宿している『ワン・フォー・オール』や、かの大悪党『オール・フォー』

ワン』以上に特異で、強力で、残酷だと。彼女もまた、『デウス・ロウルト』では私が見る対象になるだろうから、見ろと言われれば見るが……一体、何をもってそんなことを言ったんだい？」

「そうだ、僕もそれが気になってたんだ。」

栄陽院さんの個性『オール・フォー・ユー』が、どうしてそんな……物騒な言われ方をされているのか。一体、オールマイトとナイトアイは……何を知っているのか。

多分、それを僕に聞かせていなかったのは……何か理由あつてのことだろうと思う。

あるいは、単に聞かせるまでもないと判断したか……時期を見て聞かせるつもりだったのか。

いずれにせよ、可能なら、その理由も合わせて聞きたかったところだけど……何にしても、仲のいいクラスメイトであり……その……決して浅からぬ関係になっている彼女が、一体どういう扱い方をされているのか……その辺も興味あるし。

そういう感情を視線に乗せてしまったんであろう僕と、それからデヴィッド博士の視線も受けて……オールマイトは、少し考えた後に、『わかった、話そう』と言った。

もうとつくに覚めてしまったお茶を口に流し込んで喉を湿らせ、ふう、と息をついた。

しかし、そこで口を開いたのは……オールマイトではなく、ナイトアイの方だった。

「事の発端は、私がオールマイトから、栄陽院永久の『個性』と、彼女自身の、緑谷出久に対する態度、ないし向き合い方……姿勢……そういったものを聞かされた時、脳裏によぎったある噂話でした。いや、噂というよりは、都市伝説に近いものがありますが……」

「都市伝説……？」

「ええ……そして時をほぼ同じくして、偶然、オールマイトからそれを聞かされた根津校長が、グラントリノにもその話をして……その時に返されたある質問。それらを脳内で重ね合わせ、生まれた懸念を検証した結果が……先の、博士への依頼につながります」

都市伝説に、グラントリノに……なんか、また妙に話が広がってるな……。

いや、オールマイトに栄陽院さんの『個性』について報告したのは僕だし、そのオールマイトが相談した相手……ナイトアイや校長先生、さらにそこから聞かされているグラントリノ……全員、きちんと事情を知っていて信頼できる人だから何も問題はないと思うけど……この話が一体どんな形で収束するのか、全然想像つかないな……でも、だからって途中で茶々を入れる気はない。ナイトアイのことだ、きちんと順序を踏んで、最終的にはきちんとわかりやすい形で話してくれるだろう。今はまず、待とう。

「根津校長がグラントリノから聞いた話を、オールマイトは根津校長から聞かされたわけだが……そこで校長は、『奉生家』なるものの存在について話したとのこと。そしてそれこそが……私が眉唾物に聞いて知っていた、都市伝説の内容でもある。この奇妙な合致に違和感を持った私は、グラントリノと協力して詳細調査し……1つの結論を得ました。これからそれについてお話します。彼女の『個性』……『オール・フォー・ユー』……そのルーツについて。そして……『ワン・フォー・オール』と『オール・フォー・ワン』との関連について。これら3つの『個性』には……ある繋がりがあったのです」

第110話 哀しい過去と、残酷な未来

超常黎明期……突如として出現した『個性』という名の特殊能力。その頃はまだ『異能』という呼ばれ方をしていたその力は、普通の人間を『超人』に変えた。

そして当然のごとく、『異能』を持つ『超人』とそうでない者の間では確執が生まれ……『異能』を持つ者が暴力によって他者を虐げるようになり、持たざる者達もまた団結し、安寧のために彼らを排除しようとした。

法も何も意味を失い、秩序は破壊され、社会は混乱の中にあった。そんな中であって、己が力によって逸早く社会をまとめ上げてみせた男がいた。

後年、『オール・フォー・ワン』と呼ばれるようになるその男は、『他人の異能を奪い、与える』という反則じみた力を持ち、その力で自分に従う者を増やしていった。

時に、反目する者を力でねじ伏せた。自らの使える『異能』をもって。あるいは、相手の『異能』を奪って自らの力にすることだ。

時に、力を欲するものに『異能』を与えることで、自分の手駒とした。

時に、望まざる『異能』を持つ者からそれを取り去ってやることで、恩によって協力者とした。

その男を中心に強力な『秩序』が生まれていき、彼を中心に、限られた範囲ではあるが、社会は回っていく。彼に従う者、心酔する者は数多く現れ、反目しようとする者は排斥された。ついには彼を守るため、なんら指示を出さずとも行動に移す者が現れるまでになった。

そんな『オール・フォー・ワン』には、弟が1人いた。

彼は体が弱く、『異能』も持っていなかった。

そして正義感が強く……悪の道をひた走る兄の所業に心を痛めていた。何の力も持たない自分では、彼を止められないことを嘆きながらも。

力がないにもかかわらず、自分に反目し、共に征こうと誘っても、決して首を縦には振らない。

そんな弟の反抗を嘆きつつも、『オール・フォー・ワン』は彼を傍に置いていた。

そんなある時、彼は弟に、『力をストックする』という『異能』を与えた。

体の弱い弟にも都合のいい、それでいて使いやすい『異能』だと言って。

そしてその結果、弟の体内で、『個性』が変容することとなる。

持っていないと思われていた弟だが……彼も、『力を与える』という、それ単体では意味のない『異能』を持っていた。それが、『力をストックする』という異能と混ざり合い……変質した。

そうして生まれたのが……『ワン・フォー・オール』である。

……ここまでは、オールマイトが緑谷出久に、既に話して聞かせている内容である。

しかし、ナイトアイが、そしてグラントリノが調べたところで……この話には、さらなる裏が、事情が隠されていることが明らかになった。

そしてそこにこそ……『奉生一族』ほうじょうが絡んでくる。

ここで一旦、話は『個性』ないし『異能』の話を離れる。

『奉生一族』とは、遡れる限りでは、源平合戦の時代にまでその存在を確認することができる存在である。当時の彼らは、非常に忠義心に厚く、己の全てを懸けて主君に尽くすことを喜びとする一族だったと記録に残っている。

武力やその命のみならず、地位も、名誉も、家も、金も、全てをかけてただひたすらに主君を支える。文字通りその『生』の全てを『奉』げる者達として、その時代の主たちからは信頼され、他の武士達からも一目置かれていた、とされている。

一説には、時の幕府を支えたかの『北条』の一族に源流を発する、という説もあるが、これについては書物にも記載はなく、定かではない。

論ずるべき所ではないだろう。

当然であるが、その頃はまだ『個性』も『異能』もありはせず、単なる忠義者の一族であった彼らだが……そんな逸話も忘れられるほどの時間がたつてから、彼らの末裔にも『異能』を持つ者が現れ出した。

超常黎明期、すでに『奉生』という名前すら失っていた彼らの末裔達……その多くが手にした力は……『力をストックする』というものだった。中には、それをさらに『他者に分け与える』という性質を持つ者もいた。

普段は力をためていて、ここぞという時に発揮するものだと思えば……あるいは、溜めた力を直接主に、あるいは同じように主に仕える者に分け与えて使うものだと思えば……その性質も、彼らの『忠義者』としての性分に合っていたのかもしれない。

そして、その中の1人が……戦いに身を置いていた。

その当時の『秩序』であり、悪と認識されていない巨悪……『オール・フォー・ワン』に反抗するための勢力に。

レジスタンスとも言うべき勢力に身を置いて……時に、その弟……まだ何も力を持たず、弱いままだった頃ではあるが、紛れもなく正義の心を持っていた彼と同じ、戦うこともあった。

彼も、『オール・フォー・ワン』の弟も、共に正義のために戦い続けようと誓い合っていた。

しかし、力及ばず……その末裔の男は、打ちのめされた挙句に、命を絶たれてしまう。

その間際……『オール・フォー・ワン』は、その耳元でこう囁いた。「力をためる……そして、少しずつでも使ったり、弱い力を補うことができるのか……いいね。シンプルで使いやすそうな力だ……ちやうどいい。あの子への贈り物にしよう」

そして、『異能』が抜き取られる感触を味わい……しかしその間際、その男は、それを表情に出すことなく……ニヤリと、心の中で笑った。(俺の力を……そうか、自分の弟に……彼に与えるつもりか。いいだろう……持っていけ。だが、俺はただでは死なん……命を失っても、

俺の『異能』が、魂が……必ず彼と1つになって、彼の力になって、お前を倒す武器になるだろう……その時まで、せいぜい笑っているがい……!)

そして、末裔の1人は……命と『異能』を奪われた。

奪われた『異能』は……『オール・フォー・ワン』の手による少しの検証を終えた後、『体の弱い弟にも使いやすい異能』として、無理やり彼に与えられた。

かつて自分の友だった男の形見だと聞かされ、涙する弟に。

そして……事態は奇跡的に、末裔の男の思惑通りに動く。

2つの『異能』が混ざり合い、巨悪を倒すための力が……『ワン・フォー・オール』が生まれた。

話はここで終わらない。

『オール・フォー・ワン』は、その当時はまだ、『オール・フォー・ユー』とも『無限エネルギー』とも違う名前を持っていた、『ストックする異能』に目をつけて、彼以外の末裔を探した。

自分に従うならばそれを取り込み、従わないのなら『異能』だけを奪うために。

しかし、それなりに苦勞して、ようやく別な末裔を見つけた『オール・フォー・ワン』は……自分の下につくことを拒否したその者から、命と『異能』を奪い……そして、この『異能』が本来、使いやすさ、都合の良さなどとは無縁のものであることを知る。

弟に渡した異能だけが使いやすかったのか、あるいは何か条件が違ったのか……わからないことは多いが、とても使えたものではないことだけは確かだった。

その当時から、後の世で『オール・フォー・ユー』と名付けられることとなるその『異能』には……『主のために全てを奉げて尽くす』という、『奉生一族』の源点とも呼ぶべき思考がしみついていた。『オール・フォー・ワン』には特に、致命的に合わないものだったのだ。

それを悟った『オール・フォー・ワン』は、奪つても制御しきれない、思う通りに使えない……それどころか余計な感情や思考を呼び起

こざんとするその『異能』をすっぱりと切り捨て、他の末裔探しもやめた。

興味を失いはしたが、脅威に覚えるほど危険視もしなかったというのも理由だった。いくら力を蓄えたところで、即座にそれを圧倒できるだけの力を、自分は扱うことができたからだ。

そして時は流れ……互いのために互いに関わることをやめた2つの力は、それぞれ代を重ねて力をつけていった。

『ワン・フォー・オール』は、人から人へ渡つていき、練り上げられ……譲渡の度にその力を増していった。

そしてついに、八代目にあたるオールマイトの手で、『オール・フォー・ワン』が打倒されるに至り……しかし、その脅威は、薄れはせども未だ晴れず。

『オール・フォー・ワン』は、健在……とは言えないまでも、未だ死なず、闇に君臨している。『ワン・フォー・オール』の役目は、9代目……緑谷出久に受け継がれた。

そして、『ストック』の個性は、こちらも代を重ねるごとに強化されていった。

もつとも、その強化は、他の個性にも起きていく程度の微々たるもので、『ワン・フォー・オール』のような劇的なそれではなかったが……代を重ねるごとに、使い手たちはその力の使い方を覚え、より効率的に使う術を、より強い力を振るう術を学び、ものにしていった。

そしてそれに伴い、遺伝子にしみついているのではないかと思えるような、『尽くす』精神もまた『個性』と共に成長していき……いつしかその名を『オール・フォー・ユー』とするまでになった。

私を滅し、誰かの傍らに立ち、その者に全てを捧げて尽くす生を送ることを前提とした……ある意味で尊く、ある意味で残酷な『個性』に。

本人達がそれに気づくことも、気付いたとしても、それを気にすることもないままに。

2つの力は、ともに『ストック』という共通の原点をもつ力。

戦いの中で枝分かれし、今に至るまで出会うこともないままに数百年の時間が流れた、生き別れの双子のような力。

それぞれに力を増し、そして今、ひとつどころにて巡り合おうとしている2つの力。

九代目『ワン・フォー・オール』……緑谷出久。

『奉生一族』の末裔にして歴代最高レベルの『オール・フォー・ユー』の担い手……栄陽院永久。

2人の邂逅は……そして、この2人の間に紡がれた『主』と『従』の関係は、互いの『個性』を……そして、それが紡ぐ運命を……大きく変えようとしていた。

☆☆☆

「セントルイス……スマッシュユー！」

私の鳩尾を狙って放たれる緑谷の蹴り。

それを私は、左腕で受け止める……ずしりと重い一撃を感じるが、十分に耐えられる威力だ。

お返しに1歩踏み込んで、こちらは緑谷の上方から打ち下ろす形で手刀を放つ。

ハエ叩きみたいに叩き落す軌道で放たれるそれはしかし、緑谷が空中で腕や足を振るい、その勢いで体をひねったことによってかわされる。

それでも空中で動きがとりづらいままなのは変わらない……と思いきや、かわしたと同時に『黒鞭』を放っていた緑谷は、それを巻き取る、あるいは引き寄せるようにして大きく動き、私の射程の外に出る。そして着地してから、改めて構えなおす。

それを見届けた私は……この模擬戦の目的でもある、新しい装備の力を使うことにした。

ああ、今更になるが……何やら緑谷達が秘密の話っぽいのを終えた後、あらためて解析を行って……で、そのデータをまとめる間、模擬

戦して装備をならしとこうって話になったんだ。

その監督をしてもらってるのが、観客席にいるメリツサ。装備の稼働状況なんかを見つつ、気づいた点があったら、適宜試合を止めたり、あるいは終わった後に言ってくれる。

そんなわけなので、新装備の力を使うことも必要なわけだ。戦闘の中でしか取れないようなデータってものもあるしね。

まあ、単に装備の材質が変わってるとか、装甲を追加したって程度の部分なら、もう存分に使ってるけど。

緑谷のアイアンソールが『ダークマターインゴット』製になってる点とか、私も含めて体の各部に保護用の『アダマンチウム』が仕込まれてることとか。攻撃に防御に存分に使えている。

そしてここからは、そういう『結果的に使うことになる』機能ではなく、『使おうと思って使う』機能の方だ。

私は今の状態でも、体に『エネルギー』を充填して強化しているが、それを拡大させる。

体だけでなく……身にまとっているコスチューム……軍服全体に、『エネルギー』をいきわたらせるイメージだ。

服の下に走っている『フォトンストリーム』を経路として、全身に素早く、力強くエネルギーがいきわたる。その際、金色に発光するそれが紋様、あるいは血管のように全身に現れる。

そしてそれに反応して……全身に仕込まれている人工筋肉が稼働し始める。

コスチュームの内側に仕込まれている人工筋肉。これらも今回追加されることになった装備の1つだが……最大の特徴として、半生体の有機素材であることがあげられる。

バイオ素材とも呼ぶべきコレを用いることにより……強度は十分なそれを持たせたままに、私の『エネルギー』による強化を受け付けるようになってるのだ。

私の『エネルギー』は、無機物や道具を強化することはできない。よくフィクションとかで見えるように、『魔力を剣に流して切れ味と強度を』なんてことはできない。馴染まないから。

しかし、この素材であれば……『半生体素材』であるがゆえに、普通の人間の体ほどではないにせよ、駆動を強化できる。そしてその分のパワーを、私の攻撃に上乗せでき、同時にサポーターとしての機能も持っているので、反動を抑えることもできるといふ優れモノだ。

それが全身に装備されているので、コレを稼働させれば私は、パワー・スピードは更に上がり、なのに体への反動はむしろ下がるという状態になる。装備に頼っている部分があるのは否定できないが、それでも実戦においてはこの上なく頼りになる、純然たるパワーアップだ。

おそらく、許容上限を、今の500%から……600、いや650%くらいまでなら上げられるんじゃないだろうか。その状態で、今までよりもはるかに高いパフォーマンスを発揮できる。

見た目も……全身に金色の光のラインが走って、いかにも何か『強化フォーム』っぽくなるし、気に入っている。

まあ欠点としては、体とスーツの両方を常に強化し続けるわけだから、使うエネルギーの絶対量は倍増してるわけなんだけど……そこは仕方ないよな。

一方、私が『フォトンストリーム』と『バイオ人工筋肉』を稼働させたのを見た緑谷も、新たにコスチュームに搭載された機能を開放する。

呼吸を整え、精神を集中するようにする。と同時に……体の各部分に、赤い光のラインが走る。

もともと緑谷の『フルカウル』は、一定以上の出力で使うと、緑色の火花と同時に、体の各所に傷跡みたいな赤いラインが光って浮き出る特徴があるけど……コレはそれとは違う。コスチュームに内蔵されている『サイコフレーム』が放っている光だ。

この『I・アイランド』でもまだ実験開発段階であるらしいそれは、某宇宙世紀で用いられていたロボの材料的なアレではなく……しかし、それに近いんじゃないかという性質を持つものだった。何研究して、何作ってんすかデヴィッド博士……。

さて、『個性無効糸』というものをご存じだろうか。

人間の髪や古い角質なんかを材料にして作られる素材で、その持ち主の『個性』発動に合わせて、それに順応した効果を同時に発揮する性質を持つている便利な素材である。

例を用いてわかりやすく説明すると、ナイトアイ事務所でお世話になった『ルミリオン』こと通形先輩のコスチュームに用いられているのがコレだ。

通形先輩の『個性』は『透過』。発動中は、彼の体は全てをすり抜ける。

それはもちろん服も例外ではないので、服を着てる状態で『個性』を使うと、脱げる。

素っ裸になる。放送事故が起こる。というか、過去の体育祭で起こった。

しかし、通形先輩の髪の毛から作られた『個性無効糸』でできたコスチュームは、彼の『透過』の発動に合わせて自分も『透過』の性質を持つので、脱げることはない。

これにより通形先輩は、ヒーローとしての活動現場でも、素っ裸にならずに戦えているわけだ。

話が遠回りしたが、緑谷のコスチュームに搭載されている『サイコフレーム』もその類の素材なのだ。緑谷の毛髪や爪の欠片から生態素材になる部分を培養して増やし、それを材料にしている。

緑谷の意思に反応して、内蔵されている受容体がその脳波だか意思の力だかを感知し、彼の体の一部となって動きをサポートする。その結果、多少ではあるが動きがよくなる、早くなるというのが効能なわけだが……戦闘においては、そのコンマ数秒の動きの差が勝敗を、あるいは生死を左右することだって珍しくない。彼の大きな助けになるであろうシステムだ——

——と、いう見込みだったんだけど、予想外にそれどころじゃなくなっただよな、これが。

某機動戦士でもそうだったけど、『サイコフレーム』は使用者の精神

と密接に関わって、時に想像を超えた動きを可能にし、時に説明不可能な『奇跡』とすら言えるようなことを引き起こす。

それが、緑谷にも起きた。

さっき言った通り、あくまでこの『サイコフレーム』は、緑谷の動きのサポート用として搭載を決めた装備だったんだが……ここに来て予想外に、『感情感知（仮）』の能力と、凄まじく相性がいいことが分かったのである。

その『感情感知』については、さっきの『解析』の際に、やはりこれも『黒鞭』と同じように、独立した1つの『個性』である可能性が高い、という結論が出たところなんだけど……これもまた人の脳、ないし意思と密接にかかわる『個性』だった。

その結果、その能力増幅に『サイコフレーム』が一役買ったのだ。

『サイコフレーム』が受信機、ないしは受容体の役割を果たし、より強力に、より精密に相手の感情を感知し、それをさらに効率よく動きの補助に回せるようになったのである。

しかもその性質上、緑谷の思考の補助みたいなものまでしてくれるから、もたらされる情報の処理で脳が疲弊することはほぼなく、むしろ負担は軽くなっているとか。

結果、何が起ころるかというと、

（わかっちゃいたけど……当たらないなあ、1発も！）

さっきよりスピードもパワーも……パワーは関係ないか……上がっているはずの私が、ろくに攻撃を掠らせることもできない。いや、当たってないわけじゃないんだけど、ことごとく緑谷が手や拳で受け流したり、撃ち落としたりしてるともんだから、ダメージはほぼほぼゼロだ。

私の縄張りであるはずのインファイトで、コスチュームの改良によつて、自分でもわかるくらいには強化されてる状態でこれかあ……自信無くすな。

いやでも、緑谷が強くなるのは私にとっては喜びだ。問題ない。

殴っても蹴ってもつかみかかっても、全部避けられる、あるいは防がれる。

しかもそのほとんどが、私が動くと同時に、あるいは動く前に対処されてる。

今の緑谷は、目で見て、耳で聞いて、鼻で……はあんまりないかもだけど、そして、脳と『サイコフレーム』で感じ取って、相手の攻撃……のみならず、挙動のほとんどを察知できる。そこに、緑谷自身がスキルとして体得している『予測』や『直観力』が加わる。

その結果、思考を読むがごとき『先読み』が可能になり、攻撃前に攻撃をかわされる、防がれる、なんていう事態が起こるわけだ。

……これもう、『直観力』の領域超えてないか？

今はそれでもいいかもしれないけど……なんだろう、近いうちに、もっと別な何かが変わってくるような気がするんだが。

今のこれだって、ある種の『無我の境地』……いや、それも逸脱し始めてるな。

『サイコフレーム』の補助があつてとはいえ、体中で思考して反応してるようなもんだ……どっちかっていうと、『身勝手の〇意』の方が近いんじゃない……

……案外近いうちに、そんな領域にも至りそうな気がするんだが……

ともあれ、そんなわけで模擬戦は私の負け。

惜敗とかそんなんじゃないやなく、完敗、あるいは惨敗だ。

緑谷が強くなってくれたのは嬉しい。嬉しいが……私自身も、このまま満足してちゃいけないよなあ……！

でも緑谷って、見てるこつちが怖くなるくらいには早いペースで成長していくからなあ……いや、コレを成長と呼んでいいものか……まさか『個性』が増えるなんて思ってもみなかったしな。

ま、何であれ緑谷は緑谷なのには変わらない。私は全力で、彼を支えるだけだ。

……そのためにも、私自身も強くならないといけない。これからの『アウス・ロ・ウルト』に加え……今度の『林間合宿』も、気合入れて臨まないとな。

あ、ちなみに模擬戦を見ていたメリツサだが……途中から私達の戦

いを目で追えなくなったので、多角度から録画したそれをスロー再生して解析を行っていた。

まあ、彼女、戦闘要員でも何でも無いし、訓練も積んでないからな……仕方ないか、それは。

それとコレは関係ないかもだけど、彼女、今の世代には珍しい『無個性』らしい。

本人はもう……少なくとも今は……それを気にしてる様子はないけど。

昔はヒーローにあこがれてたけど、それはもういい。今は、研究者としてヒーローを支えることを目標にしてるんだって。前向きでいい子だなあ……いや、年上だけどね。

ぜひその調子で、うちの緑谷のことも支えてほしいもんである。なんなら『一緒に』。

……積極的にハーレム作るつもりはなくなっても、発想としてはパツと浮かんできちゃうな……未だに。何でだろ？

☆☆☆

「運命、って奴なのかな？…これも」

模擬戦スペース……その観客席で、オールマイト（マッスルフォーム）はぽつりとつぶやいた。

その隣には、ナイトアイの姿もある。相変わらずの仏頂面のままで、何も言わずに座っていた。

「緑谷少年と、栄陽院少女……2人がこうして出会い、歩み出したのは……まあもちろん、男女の関係としても微笑ましいというか、喜ばしいことかもしれないけど……まさか、彼らの『個性』に……『ワン・フォー・オール』と『オール・フォー・ユー』に、そんな過去があったとは」

「しかも、当人たちはそれを知らずに知り合い、惹かれ合い……絆を育んだ。その片割れが真実を知ったのは、全てが出来上がってから……なるほど、確かに運命的ではある。……それが、望ましい結果をもた

らすものなのかはともかくとして、ですが」

口を開いたナイトアイが呟くように言ったのは……オールマイトの言葉を、肯定も否定も両方するものだった。

「……それは」

彼には珍しく、あまり感情の抑揚を感じない声で、ナイトアイに尋ねるオールマイト。

「君が見た……彼女の未来の『予知』ゆえのものかい、ナイトアイ？」

結局……緑谷少年には、君はそのことは伝えなかったね。私の『予知』の話と同じように」

「……伝えられるわけがないでしょう……どんな顔をして、言えと……そして、彼にどうしろというんですか、こんな、残酷な未来を……！」

そして、今度は本当に珍しい事態だ。

ナイトアイが、その表情を、苦悶、あるいは葛藤かと思えるようなそれにゆがめ……視線を下に、目を伏せた。

まるで……フィールドの中心で楽しげに話している、永久と緑谷を見ていられない、とでも言うように。

「緑谷出久は……彼は確かに、あなたの後継者となれるだけの人物だ。今はまだまだ未熟、あなたに遠く及ばずとも……すでにあなたを超えてすら行けるだけの才覚の片鱗を、今見せている。そしてその力は、彼女が……栄陽院永久が彼を支えることで、より早く、より盤石に結実するでしょう」

「けど、君はそれを祝福しない……できない、かな？」

「新たな『平和の象徴』……その誕生、大成、それ自体は喜ばしい。だがその道中……あるいはその後かもしれないかもしれませんが……彼を絶望に落としかねない悲劇が待ち受けている」

「……………」

「恐らくは、今年、あるいは来年にまで迫った、あなたの死……そしてもう一つ……………」

一拍、

「今、彼の隣にいる……彼女の……栄陽院永久の死だ」

永久が事務所にインターンに来た時、ナイトアイは彼女の人となりを知るため、そして緑谷出久と『ワン・フォー・オール』の異変への関与の有無を、そこに彼女自身の意思の有無を見極めるため、様々な手を仕掛けた。『予知』によって彼女の未来を見るのもその一つだった。

結果、ナイトアイは永久が、悪意を持って緑谷に何かを仕掛けているのではないということを知り、彼女をひとまずは信頼するに至った。

ただその際、余計なものも見てしまい……やや微妙な心境に至ることとなる。

……一時的に。

「……昨今の高校生というのは、進んでいると言えいいのか、ふしだらと言えいいのか……どうやら緑谷出久は、随分と多くの女性に好かれているようで……ええ、随分と」

「(二回言った……) ええと……君、『予知』でそういう未来も見ちやつたんだっけ？」

「ええ……人として、男として……あまり褒められたものではないのではないかとこの場面もいくつか。英雄色を好む、という言葉はありますが、それにしても……まあ、緑谷出久の性格からして、あんな状態を彼が望んで、積極的に作り上げたというのは考えづらいですから、恐らくはあれも、栄陽院永久による彼への献身の結果、と見るべきなのでしょうが」

あからさまに『何を』見たのか、は語ることはないナイトアイ。

……あまり語らない方がいいものなのは確かだろう。下手をすれば、年齢制限がかかるようなものである可能性すら、ある。

最初にその話を聞いた時、オールマイトも『うわあ……』と心の中で呟きながら、微妙な気持ちになった。

男女の恋慕に口出しするのは、教師としてどうなのかと。しかし、そういうあまり褒められたものではない形に生きかねないのなら、そ

れをそのままにしておいていいのかと。そもそも榮陽院永久は、一体緑谷出久という少年をどうしたいのかと。

ヒーロー一筋でここまで来たがゆえに、そのあたりで困惑するしかできないオールマイトだったが……その時、違和感にも気づいた。

それを話すナイトアイが、神妙な雰囲気のままだった。

緑谷出久の不貞を咎めてのもの……ではなく、何か悲痛な思いを押し殺しているかのような目をしていた。オールマイトには、そう見えただ。

「あなたの後を継ぐ者として、それはどうなのかと正直思いました。やや、落胆も……ただ、その後に見たものが加わって……話が変わってきた。彼女の未来は……恐らくは、緑谷出久のそれと同じように、定まっていなかった。いくつにも枝分かれし、私の『予知』でも読み切れなかった」

彼が目にした、緑谷出久との『そういう未来』自体も、いくつもの形を見たとのことだった。

永久と結ばれる未来、

麗日と結ばれ、永久はその補佐に徹して支え続ける未来、

そのどちらでもない者と結ばれる未来、

そして……幾人もの女性と結ばれ、共に歩む未来も、

しかし、そのあたりはともかくとして……それらの未来全てに……少なくとも、ナイトアイが『予知』で見た未来全てにおいて、共通していることがあった。

それは……『死』である。

「私が調べた限り……『奉生一族』に名を置く者は、代々短命だ。それは、体が弱いとか、遺伝性の病気を持っているからとかではない……むしろその理由は、彼らの『性質』に起因するものであり……代々の『ワン・フォー・オール』継承者に通ずるものがある」

「すなわち……何かのためにその命を使う。燃やし尽くす……か」

「ええ……『ワン・フォー・オール』の歴代継承者が、ことごとく悪との戦いの中で……そのほとんどが『オール・フォー・ワン』との戦いなわけですが、その中で命を燃やし尽くし、死んでいった。それと同

じです。『奉生一族』は、主と定めた者のために命を燃やしつくす。時に主の剣として死ぬまで戦い続け、時に主をかばって盾となつて凶刃に倒れ……主よりも先に死ぬ」

「……それを、君も見たのか」

「……見た『予知』の中における栄陽院永久の死……それらは全て、時期や場面は違えど、緑谷出久を何らかの形でかばって倒れるという最後だった。それも、何の迷いも躊躇もなく……彼女に、そして『奉生一族』にとつてすれば、守るべき主よりも自分が先に死ぬという選択肢は、当たり前なのでしょう」

そして、と、ナイトアイは続ける。

「ここからは私の推測……いえ憶測です。栄陽院永久の死……それをある種の『前提条件』として据えて見た場合、先程私が話した、ふしだらな未来……その意味が変わってくる」

「聞く限り、栄陽院少女が、緑谷少年が自分以外の女の子と親密になることを歓迎してるような感じだったんだよね？」

「ええ……陳腐な物言いになるのを承知で言えば……ハーレム願望、とでもいうのでしょうか。私も、また若くしてとんでもない性癖を持つている者だと思つたものですが……そうではない、としたら？」

「？ どういう意味だい？」

「今言つたように、コレは私の憶測です。彼女自身、意図してそうしているのかはわからない。しかし、これも今言つたことですが……『奉生一族』の者は、主の盾として自分の身を、命を投げ出すことを当然の使命として考えている。いざそうなつた時に、迷いも躊躇いもない。ならば……そうなつた時、あるいは後のことを考えているのも、ごく自然なことではないでしょうか」

「……何？」

一瞬、何を言っているのかわからなくなるオールマイト。

ナイトアイは少し間を開けつつも……困惑したままのオールマイトに、話して聞かせる。自分が至ってしまった、とある仮説を。憶測を。

「ある種、自画自賛のような考え方になります……緑谷出久の中に

おいて、栄陽院永久という少女の存在は大きい。それが、ある日突然
帰らぬ人となれば……そしてそれが、自分を守るためだったとすれば
……当然、気を落とすでしょう。彼は優しい……わかり切ったこと
だ。ならば……

……栄陽院永久が、そうなった時のための備えをしていないと、ど
うして言えます?」

「……っ!」

今度こそ意味を理解したオールマイトは……はっとしたように、
ワールドの中心にいる永久と緑谷を見た。

どうやらもう模擬戦は終わりなのか、待機席に戻っていくようだ。
傍らには、今までそこで試合を見ていた、興奮している様子のメ
リッサもいた。

恐らく、『すごい戦いだっただわ! 2人ともやっぱ強いよね!』と
いうあたりのことをしゃべっているのだろう……手を取られている
緑谷が顔を赤くしている。

そしてそんな様子を、ねたむでもなくすねるでもなく、永久は笑顔
で見ている。

今話を聞いてしまったからか……普段ならば微笑ましく見えて
しまうはずのそんな光景が……ひどくいびつなものに見えた。

メリッサと緑谷が仲良くすることに対する笑顔。あれは、単なる友
人としての祝福か、はたまた倒錯した性癖からくるものか、それとも
……

「自分が、主よりも先に死ぬことを見越して……自分が死んだ後の備
えをする。それはすなわち、後継者の用意……オールマイト、あなた
がやっていることと同じです」

それに気づいた時、ナイトアイの脳裏に浮かんだのは……『オール
フォー・ワン』との戦いの直後の、傷つき、病人着に身を包んだオー
ルマイトの姿だった。

病院の廊下で、手すりと壁に体を預け、口の傍から血を流しながら

も、現場に戻ろうとする……あまりにも痛々しい姿。

『テレビ、見ていないのか……皆が、私を待っている。なら、行かないやな……私は、平和の象徴、なんだから……！』

『そんな姿で出てこられても辛いだけだ……無茶だ、もう引退すべきだ、オールナイト……あなたはもう十分に戦った、柔らかいベッドでゆっくり休んでいいんだ！』

ナイトアイは、既に……緑谷出久の中に、その時のオールナイトにも見た、狂気的なまでの『英雄の精神』を見出していた。

しかし、それとはまた別種の『狂気』を、彼女の……永久の頭の中に、信念に、見ていた。

「まさか……彼女は……！」

「何度も言うように、私の憶測です。どころか、彼女自身、意図してそうしているわけではない可能性もある……だが、現状は確実に、もしそうなった場合……そうなる道筋ができている」

思い返せば、緑谷が仲良くしている女性は、ある程度の親密さにしてぼつて考えるくらいであれば、オールナイトにも予測できた。

栄陽院永久に、麗日お茶子、蛙吹梅雨、そしてあそこにいるメリツサ・シールド。

B組の2人までは思い浮かばなかったし、そもそもここ最近で知り合ったばかりのメリツサをそこに加えるべきかは悩むところだろう。

この中で、永久を除けば特に仲がいいと断定できるのは、クラスメイトであり、いつも一緒にいるほどには仲がいい、麗日だろう。

彼女なら……何かあつて落ち込んでいる緑谷を、放っておかないだろう。彼女自身、優しい性格だ……どうにかして彼を慰め、支えようとするだろう……今の永久と同じように。

そう、つまり……

「……栄陽院永久。彼女が、主と定めた緑谷出久の周囲に女性を、仲間を集めるのは……自分が彼を残して死んだ後、その彼を慰め、支え、立

ち直らせ……共に歩いていく者を用意するためではないか……自分の後を引き継いで、彼を支えることを任せられる者を……！」

「バカな……戦国時代じゃないんだぞ？ そんな考えが……」

「近代であつても戦国時代にも等しい忠誠心を持つているのが『奉生』であり彼女だ……そういう考えが魂に根付いていても不思議ではないでしょう。たとえばそれが、無意識にでも……」

そこまで言つて……ナイトアイは席を立った。

「私にはわからない……同じように、誰かを失う未来を恐れ、憂いていく者として……失われようとしている命を、それでも生かし、自分以外が次に繋げてくれることを……主を支えることを考えているかもしれない、彼女という存在が……！ そして、その彼女と共に歩み、いずれ悲劇を迎えることになるであろう、緑谷出久……彼の前途を、祝福していいものかすらも……！」

「……………」

「これらは、彼女の持つ『主従関係』としての意識ないし在り方のほんの一部分にすぎない……今後、博士の解析で徐々に彼女の『個性』について明らかになっていくければ……さらに恐ろしい事実が明らかになる可能性すら、ある」

「……今話した以上のことが、彼女の『個性』には隠されていると？」

「……そう言えば言っていたね、OFAやAFOよりも特異な力だ、と……その部分かい？」

「……今はまだ、もしかしたら、という程度のもですが。予想が外れていることを、願うばかりです」

そしてそのまま、もうこれ以上は話すのもつらいという感じで、その場を去った。

トイレにでも行ったのか、あるいはこのままホテルにでも戻つて帰つてこないのか……それは定かではない。

だが、残されたオールマイトは特にそれについては考えず……無言で、そこに座っていた。

先程まで、前途有望な若者2人が、拳という刃をぶつけあい、研鑽

し合っていたフィールド……今は無人となっているそこを、眺めながら。

さつきまで笑い合っていた、少年と少女の笑顔……いずれ、あの片方が永遠に失われ、もう片方が曇ってしまうのかと思うと、何を言うどころか、何を考えていいのかすらわからなかった。

(……君が、『予知』の未来を見たららない気持ちがよくわかってしまったよ……ああ、本当に……未来って、残酷だな。そんな彼らに、それでも、託さなければいけないんだから……)

第7章 栄陽院永久と林間合宿

第111話 林間合宿・スタート

薄暗く、得体の知れない……謎、としか言えないような空間。

風が吹きすさぶような音だけが響いているそこに、私は、ただ棒立ちになっていた。

……棒立ち、という表現が正しいのかどうかも怪しいな。ただそこにいるだけ、って感じがするだけで……姿勢まではわからんし。

なぜか、首を動かしたりして自分の姿を見ることができないから……そういう感覚だけで『棒立ち』って言っちゃったんだよな。

……まあ、それはいいとして。

そんな私の目の前には……ヒーローコスチュームで完全武装状態の緑谷が立っている。

そして、緑谷と向かい合うように……誰だコレ？　なんか、いい身なりの壮年男性みたいなのが立って……しかし、顔のあたりに靄がかかっていてよく見えない。

ただ、何だろうコレ……妙な、というか嫌な、威圧感みたいなものを感じる。……『敵』なのかどうかわかんないけど……単なるそこらの一般人、って感じじゃなさそうだ。

しかもなんか、目の前で黒々としたオーラみたいなのを纏いだして……チープな例えだけど、悪の魔王みたいな感じの見た目に……

そしてその魔王(仮)を前にして、緑谷は体中から電光を迸らせ、全力での戦闘態勢にシフト。

しかし、身構える緑谷の体からあふれ出す緑色の光よりも、敵(多分)である男が放つ黒い光が強くて……そのまま押し切られそうに、あるいは飲み込まれそうになってしまう。

そんな時、私の体に異変が起きる。

相変わらず自分の体を見ることができないんだけど……私の視界が緑色に染まっていく。

視界そのものがその色になつてゐるわけじゃなく……まるで、私の体から、緑谷のそれと同じ、緑色の光があふれ出しているかのようだ。それまで1つだった光が、私を光源とするものと2つ、それらが更に合わさつてより輝き始め……黒い光を押し返していく。

緑谷の体から迸る光、私の体からあふれる光、どちらもどんどん強くなり……さらには、まるで共鳴するかののように、互いが互いを強めていく。私が緑谷を、緑谷が私を強くしていく。

その境界線はやがて薄れていき……2つの光は溶け合つて、1つの大きな眩い輝きのようになっていく。

黒い輝きにも負けない明るさ、眩さ。空間そのものの闇をも切り裂く光となつたそれを、緑谷はその身に宿し……拳を握りしめ、大きく振りかぶつて、目の前の黒い魔王に立ち向かつていく。

それを私は、緑谷の後ろのような、あるいは前のような……あるいは隣のよう……よくわからない、不思議な位置から見守りながら……なぜだか、心を満たす満足感に包まれながら、目を閉じた。緑谷の輝きの強さに比例するように、私の意識が薄れていき、そして……

——ガタン

「……んあ？」

「あ、ちようど起きたか栄陽院。休憩だつてよ」

「……あー、なる。おう」

そこで、目が覚めた。

☆☆☆

さて、何か変な夢見てた気がするがよく思い出せない……ので、今の状況を整理しようか。

今現在私は、とうとうやってきた雄英高校夏の一大イベント『林間合宿』に参加するため、学校が手配したバスに乗っているとところだ。

ところだが……途中で寝ちゃったらしいな。

例によつて『行き先は秘密』なので、このバスがどこに向かうのかは聞かされないまま、雄英のバス乗り場集合からの出発となったわけだが……寝てしまうまでの道中は中々楽しかった。

定番のしりとりやら、持ってきた音楽プレイヤーを使った、それぞれの好きな曲披露やら、持ち寄ったお菓子の交換やら……

最後のお菓子については、ほとんどの面々が買ったものを出している中、砂藤が自作のチーズタルトを持ってきており、『シュガーマン』の名に恥じないその見事な出来に皆が感心していた。

負けじと私もそこに、ちよつと今回気合入れて作ってみたガトーショコラを出してみた。『どつちも美味しい！』つて好評だった。よかったよかった。

まあ私のお菓子……に限らず料理はね、最近はおっぱら緑谷に作つてあげる日々を送ってるから、こういう時に作るものも、前に作つてあげた時に好評だったものを選ぶパターンが多いわけだが。

それをわかつてるといふか思い出したのか、緑谷もにつこり笑つてこつちを見てくる。

最高の報酬をもらった気分です満足しながら、私も自分の分を食べる。あー美味しい。

「……つておい、栄陽院お前自分の分一番でかいじゃねーかよ」

「あーホントだ、永久ずるいー!」

と、横の席に座つた瀬呂と、前の席に座つてる葉隠が気づいて指摘してくる。バレたか。

「仕方ないだろー、包み紙の大ききさとか考えてちようどいい感じで切つたらこうなつたんだからさ。アレだよ、作った人の特権みたいなもんだよ」

「配つてた奴の2.5倍くらいあんだけど……ホントにお前花より団子だよな」

「失礼な、きちんと『花』の方を楽しむ時は楽しむつて。……食べられる『花』ならなおよし」

「それ両方『団子』だろーが……つてもう食つたのかよ、早っ」

ご馳走様でした。あー、甘いもん食べたなら喉乾いた……お茶飲も。

とまあ、そんな感じで進んできて……いつのまにか寝ちゃって、変な夢見て……起きたと思ったらちようど休憩らしくて……現在に至るわけか。

何か全員降りるみたいなので、私もまあ……折角だし降りることに。

自販機でもあれば、何か飲み物でも買おうかと思って、手持ちバツクも一緒に持って降りたわけだけど……なぜだか、降りたところにいた相澤先生に、じろりとにらまれたような気が……？

……っていうか、アレ、何ココ？

「何だここ、パーキングじゃなくね？」

「何も無いな……登山道の途中にある休憩所とか展望台みたいな感じだ」

とまあ、私と同じような感想を抱いた人は多いようだ。

バスが止まっているそこは……降りる前、私は勝手に、高速道路のサービスエリアみたいなの……自販機とか売店、トイレなんかがある場所を想像、ないし期待してたんだが……降りてみればそこは、何も無いだけの広い場所。

山肌からそこだけ出っ張っている……今丁度尾白が言ったように、展望台か何かかって感じの場所である。地面……そう『地面』だ。アスファルトで舗装すらされていない。土の地面だ。

「ふー、やっと着いたー！」

「いやまだ着いてないから、パーキングで休憩……あれ、パーキングじゃない？」

「ホントだ、何……あれ、A組もいる」

とか言ったらB組も来たみたいだ。私らと同じように、何か謎な場所に降ろされて不思議な感じになっている。……向こうも、何も聞かされていないままに降ろされたっぼいな。

そのB組が乗ってきたと思しきバスの入り口には、当然ながらB組担任のブラドキング先生が立っていて……何やら相澤先生と目配せ

し合っている。

……何だろう、嫌な予感がする。

他にも勘のいい連中が『何かおかしくね?』って感じの空気を醸し出し始めた中……

「ようー、イレイザー！ ブラドキング！」

突如、何の前触れもなく、聞き覚えのある声が響いた。

声が聞こえた方に、私や、他の面々の視線をやると……あ、やっぱり。

「きらめく瞳でロックオン！」

「猫の手助けやってくる！」

「どこからともなくやってくる……！」

「キュートにキャットにステインガー！」

「二「ワイルドワイルド・プッシーキャッツ!!」二」

つい最近、『ワーキングホリデー』でお世話になった4人。

山岳救助等を得意とするヒーローチーム……『ワイルドワイルドプッシーキャッツ』。

マンダレイ、ラグドール、虎、ピクシーボブの4人が、相変わらず見事にキマっているポージングでそこに立っていた。

「あれ、ワイプシの皆さん……」

「わー、お久しぶりです！」

取陰と麗日が再会を驚きつつも喜び……緑谷と宍田は、向こうの方で説明してるな。結構な人数、『誰だこの人達』ってなってる連中が多いから。

とりあえずあつちは任せて……挨拶せな。

「お久しぶり……って程でもないけど、ご部沙汰してます、皆さん。その節はどうも」

「いえ、こちらこそ。元気そうで何よりだわ、ダイナ……おっと、まだコスチューム着てなかったわね。それはまだ今日は取っておきましようか」

と、マンダレイ。前あつた時がそうだったからか、ヒーローネームで呼ばれそうになった。

その後ろでは、あははは、と笑うラグドールと、うむ、と相変わらず貫録たつぷりの虎さん、そして……あれ、ピクシーボブいない……？

「心は18ー」

「へブツ!？」

あ、なんかあつちで緑谷に猫パンチしとる……

……年齢か経験年数でも話題に上がったかな？ 相変わらずだな

あの人……

「まあ何にせよ、皆さんお元気そうで。今日は洗汰君は一緒じゃないみたいですけど……」

「ああ、洗汰なら一足先に宿泊施設で待ってるわ。色々準備とか手伝ってくれてる」

「宿泊施設、って……今日の、っていうか今回の『林間合宿』の宿泊先って、もしかして!？」

「そーだよー。あちぎらの管理する……ってアレ、イレイザー、ブラドキング、話してないの?」

驚いて言った取陰の言葉に、ラグドールは……どうやらあつちも思い違いがあつたようだ。先生方が私達に、ギリギリまで……うん、ホント当日の、今になつてもまだ、どこでどんな風に合宿やるのか話してないって聞いて、きよつと驚いてる。

「ええ、生徒にはギリギリまで知らせずに来たもので……とはいえ、もうそろそろ説明しておいた方がいいかもしれませんね」

「……まで来たらほとんど同じだと思うがな……まあいい。よおし、B組集合! A組もだ! 全員注目! 今からいうことをよく聞くように!」

と、ブラドキング先生の怒号……もとい号令で、パーキング……とはいえない休憩場所に散っていた面々が集まってくる。

……何人か、トイレ我慢してるっぽいのがいるようだ。ちよつとつらそう。特に峰田。

……私の予想だと、これからもつとつらいことになるかもしれないが……

で、その説明だが……集合かけたブラドキング先生じゃなく、マンダレイがやるようだ。

簡単に自己紹介した後、休憩所？のへりの柵のところまで歩いて行って……

「ここら一带は私たちの所有地なんだけどね……あんたらの宿泊施設は、あの山のふもとね」

猫爪グローブで……すっげー遠くの方にある山を指さしながら、そう言った。

「遠ッ!？」

「え、じゃあ何でこんな半端なところに……」

「いやいや……え、おいまさか……」

「ははは……バス……戻ろうか？ 早く……な？」

マンダレイの言葉に、不穏な空気を感じ取る麗日と砂藤。

そうした方がいいと本能が囁くのか、乗ってきたバスに戻ろうと、そそくさと歩き出す瀬呂。

そこにさらに、追い打ちをかけるように……ラグドールとピクシーボブが、

「今は午前9時30分。大体3時間くらいとして……早ければ12時前後つてとこかなー？」

「じゃ、余裕持つて12時30分つてことで。昼食その時間で設定するから……遅れたコは残念だけど、お昼抜き、つてことで」

「ダメだ……おい」

「戻ろう！」

「バスに戻れ、早く！」

次々と告げられる不穏な言葉に、1人、また1人とバスに向けて……歩いて戻るどころじゃない、走り出す。

しかし、そのバスに向かう途中……目の前に、虎とブラドキング先生が仁王立ちで立ちふさがっている。威圧感その他諸々がヤバいですはい。

「知らなかったのか？ 雄英のカリキュラムからは逃げられない」

「どこの大魔王ですか……つか、これってやつぱり……」

「お察しの通りだ。A組B組、全員ここから徒歩だ。歩いてあの山のふもとにある宿泊施設を目指してもらおう」

「んな無茶苦茶な！ いや、雄英が無茶苦茶なのは割といつものことですけど、いやそれでも！」

「見たところ……ここからだとかかなり距離がありますぞ?! 山道だということを加味して考えると……3時間程度では到底……」

上鳴と、B組の宍戸が……宍戸は、私ら同様『ワイプシ』のワーキングホリデーに出てたから、この課題？の過酷さが正確にわかっているっぽいな。

かく言う私らも同様だが。ここから、あの山のふもとって……どう考えても3時間じゃ絶対足りないって……それこそ、マンダレイ達みたいに、慣れてて体力もある面々ならってレベルだ。

しかしそんな部分を指摘しても、先生方の答えは変わらない。

相澤先生曰く、

「本当はここから問答無用で突き落として、嫌でも歩かせる計画も上がってたんだが……今のお前らだと、何人かは確実に反応して回避したり、這い上がって来そうだっていう結論になったんでな。不意打ちとかではなく、きっちり説明した上で歩かせることにした」

「あ、なんか一応実力的なものを認めてもらった上での対応なのね」

「それにしたって内容が内容だから喜べないノコ……」

「ん……」

と、B組の方から……柳、小森、それに小大だったか。率直にして切実な言葉が飛んでくるわけだが……すると、そんな言葉を聞いたからなのかはわからないが、ブラドキング先生が、

「まあ、お前達の気持ちもわからないでもない。いきなり制服姿で、何の準備もなしに森を縦断しろ、と言われてるわけだからな。なのでそのあたりを鑑みて……どうしても嫌だという者は、バスに戻って乗って、このまま普通に宿泊施設を目指すんでも構わない」

などと言う。

その言葉に『やった！』と喜ぶ面々が出る中……これはこれで何かおかしい、といぶかしむ者も多くいる。

私も後者である。いやだって、今まできつちりスパルタでやります的な宣言しておいて、こんな甘やかすようなことを言うというか、ただの逃げ道なんて用意するはずないし……何かあるだろコレ。

極論、先生方からすれば『いいから行け』って命令するように指示していかせてもいいわけだし……そうしないってことは、何かは確実にあるんだろ。この後、私達に自分の意思で選択を迫るだけの理由、みたいなもんが。

すると案の定、ブラドキング先生は『ただ……』と繋げる形で言い……

「まあどつちでも構わんが……1つ補足というか、今のうちから説明しておこう。ここから徒歩で宿泊施設を目指す場合においてだが、ただ歩いて行けばいいわけではない。詳細は省くが、途中で様々な障害物などを用意しており、それらに対応することをもつて、立派なトレーニングメニューの一環となっている。合宿はもう始まっている、と言っているわけだ。そして……」

なるほど。その分、トレーニングメニュー1つ飛ばすから損する。向上心を持って合宿に臨むなら、きちんとコレもやるべきだと。

……そして？

「徒歩で目指すことを選択した者については……既にというか、今もう一足先にこの下に降りている生徒2名と合流した後に、協力して宿泊施設を目指すことになる」

「？　もう既に……2名？」

「え、今回の合宿……俺達以外にも参加者いるんすか？」

と、今度は常闇と、B組の……泡瀬だっけか？

ブラドキング先生の言葉に、初耳だ、って感じで聞き返す。他の生徒も、その意味を凶りかねてきよとんとしている顔が多いようだ。

が……一部の生徒は、それを聞いて、思い浮かぶものがあつたよう……あ、私もだが。

幾分遅れて、はっとしたように上鳴が、

「2名……あ、ひよつとして、心操と青山!？」

「え、心操!?!　心操って……体育祭で緑谷と1回戦で戦った……あ、そ

の前には、騎馬戦で尾白と栄陽院と鉄哲と混成軍作って暴れてた、あの心操か？」

「ああ、あの寝不足っぽい紫髪の……いや、あの騎馬戦で暴れてたのはほとんど栄陽院だろ」

「うるせーやい」

「つか、青山って誰？」

上鳴の言葉に、『ああ、あいつか』的な感じで思い出してく者が多い。凶悪なまでの初見殺しな個性ってことで、結構注目浴びてたからな。

『追試』に参加していなかった者も、ほとんどがすぐに思い出していた。

ただ残念ながら、青山の方は……体育祭では第2種目にも残れておらず、覚えている者はごく一部だった。

第1種目も、40位以内にこそ及ばなかったものの、結構上の方の順位にはなってたんだけどな……レクリエーションでもそこそこ活躍してて、『個性』の煌びやかさもあって目立ってたみたいだし。

あと、あの『追試』の時は気づけなかったけど……私が、そして恐らくは緑谷も、あいつに微妙に見覚えがあった理由もわかった。

青山優雅……あいつ多分、私と緑谷がいた入試の試験会場で一緒だったんだ。残念ながら、私や緑谷は受かって、あいつは（ヒーロー科は）落ちちやったようだが。

そんな青山と、そして心操は……こないだの『追試』の時の話を聞いてもわかるように、今、普通科からヒーロー科へ編入するために一層努力して、今年度のトップ2、編入の最有力候補として見られるまてになっただけ……そして今回の林間合宿にも、特別に参加する立場のようだ。

『追試』に参加した面々が、そんな感じのことを簡単に説明した後で……タイミングを見計らっていたんだろう、相澤先生が、気だるげに、しかしはつきりと聞こえるような声で、

「まあ、そういうわけで、普通科からヒーロー科へ編入を希望する中で、の最右翼の2人なわけだが……2人共、この事情を説明した上で、お前達と同じように、バスで行くか徒歩で行くかを聞いた時には……一

切迷わず『徒歩で行く』と返答した」

「……」

『自分達はただでさえヒーロー科の面々には、全てにおいて遅れている位置にいる。それを少しでも縮められる助けになるなら、出来ることは何でもやる』……だそうだ。今回のこれも、余すことなく自分の経験にする勢いで2人とも言ってきたぞ」

「さて、それを踏まえてもう1度聞こう。1年、ヒーロー科の諸君。普通科ではなく、ヒーロー科の諸君。……徒歩とバス、どちらで行きたい？」

続ける形でブラドキング先生がきいてきたわけだが……うん、まあ……ここまで言われちゃあね。そりやもう、答えは決まってるわな。

基本的にヒーロー科つてのは、向上心と……あと結構な頻度で、負けず嫌いな性根の連中が揃ってる場でもあるからな……

「上等じゃねえか！ たかだかこの程度の距離、余裕で歩き殺したらア！」

「おうよ！ 普通科の2人がそこまで漢見せてんだ、俺達がそこで逃げるような真似できねえ！」

「言うじゃねえか切島ア！ 俺も同意見だぜ、ヒーロー科として情けねえ真似するわけにはいかねえよなア！」

「もとよりこの合宿は強化合宿……今の自分を超えることにつながるのなら、そもそも避けるべきことなど考えるべくもないということか……！」

あ、順に爆豪、切島、鉄哲、飯田ね。

爆豪はまた、変な新語作って……歩き殺すってなんだよ。

盛大に口に出していったのは4名ではあるが、他の面々も大体同じ感じのようだ。まあ、ここまで言われちゃあ……ヒーロー志望として、安易に楽な道を選ぶなんてことは選択できないわな。

ヒーロー科としての意地もあるが……そもそもが立派な試練の1つとして用意されているものなんだ。こなせば確実に1つ成長できるわけなんだし、そう考えれば避けて通るのももったいない。

皆、大なり小なりそういう風に考えて心を決めたところで、『うむ』

とブラドキング先生は満足したようにうなずいた。意図した通りの展開になった、ということのようだ。

すると、今度は虎さんが口を開いて、

「全員覚悟が決まったよう結構。では今一度説明する！ 貴様らには今から、ここから歩いて、あの山のふもとにある宿泊施設を目指してもらおう！ ただ歩くだけではたどり着けん……途中には様々な障害を用意してある。私有地につき、『個性』の使用は自由だ、協力して切り抜ける！」

なるほど。さつきも言ってたが……何かあるわけね。『障害物』的な何か……『個性』を使って対応すべきレベルのものが。

全員それを聞いて頷いたところで、

「では、ピクシーボブ、頼む」

「はいや」

と、ピクシーボブが答えてしやがみ込み、両手を地面について……その瞬間、私達が立っている展望台(?)全体が、地響きのようにゴゴゴゴ……と揺れ始めた。

というか、ピクシーボブが手をつけている点を中心として、波打つように……アレ、え、ちよつとコレやばいんじや……つか、下がアスファルトじゃなく土のここにバス止めたのって……

「では、今より試練の始まりである。行ってこい有精卵共！」

と、そんな虎さんの、怒号にも等しい号令と同時に……地面がめくれ上がり、まるで大津波か鉄砲水のように私達全員を押し流した。

全員なすすべもなく巻き込まれて、崖下の森へ落とされていく……「……って、ちよつとお!? 行くのは全員承知してるんですから、こんな乱暴な方法使わんでも!? せめて普通に降ろしてくださいよお!」

「ねこねこねこ、甘ったれたこと言っちゃだめだよキティ達! 言っただでしょ、もう合宿は始まつてるってね! ライオンは我が子を谷に突き落とすっていうアレもあることだし……あーでも別に私子供とかいないしそもそも相手もいないっていうか影も形も気配もないんだけどね……」

「こらピクシーボブ、自分で言っ自分で勝手に傷ついてんじやない

の。ちゃんと集中して『土流』操りなさい」

「さっき言った通り、12時30分までに到着できなかつた場合はお昼抜きだからねー！ 協力してこの『魔獣の森』を抜けて、宿泊施設まで急いでおいでませー！」

なんか漫才っぽいやり取りが挟まったりもしたが、最終的にラグドールの声を聴きながら、私達は全員仲良く崖下に流されていった。

林間合宿……とんでもない始まり方をしたもんだ。

1日目のド初っ端から飛ばしてくるなあ……さすが雄英。過酷な1週間になりそうだ。

第112話 魔獣その他色々の森

「あーいたいた、よっす心操、青山。よかつたー合流できて。元気？」
「いやいやいやいや、元気とか聞く前にお前ら一体何があつてそんなことになつてんだよ。何だつてA組とB組がごっちゃ混ぜになつて土石流と一緒に流れ落ちてくるんだよ」

「雄英だからだよ」

「そうか、うん……わかるようなわからないような」

アホなやり取りを交えつつ、心操たちとはまあ無事に合流できたので……状況を整理するか。

「マジユウだ——!?!」

……移動しながら。

瀬呂と上鳴の悲鳴。どうやらあつちに、さつそく出たっぽいな。

落下直前に聞こえて来たラグドールの言葉からして、私らへの課題は、この『魔獣の森』とやらを抜けて宿泊施設を目指す、というもののようだ。

上鳴曰く所の『ドラクエめいた名称』であるが……『ワーキングホリデー』でワイプシのところに行つた面々からすれば、その意味するところはすぐに理解できた。

要するにあれだ……ピクシーボブの『土魔獣』が跋扈してる森つてことだ。

彼女の『土流』は、土を自在に操る『個性』だ。コンクリを操るセメントス先生や、ゴムを操るラバーと同系統の能力だな。

しかし、その規模はともするとその2人以上である。さつき私達を展望台もどきから流し落としたみたいに、超広範囲に大規模に、地形変動並みの動きを起こすことすらできるんだから。

そしてその応用で、土で作つたモンスターの奴を操る『土魔獣』つてのがある。

ワーキングホリデーの時にも使つてたな。遭難者を運ぶ時に、担架

や大八車の代わりに。

それを今回は、戦闘訓練用の的として使うわけだ。今まさに、土く
れのモンスターが大量に、私達に襲い掛かってきている。

戦闘能力はそこまで大したことないが、大ききとしぶとさ、そして
数が厄介だ。

何せ、入試や体育祭でおなじみ『敵ロボ』と違って、どこを壊せば
動かなくなる、なんていう弱点みたいなのがなくて……全体を粉々に
するくらいに破壊しないと死んでくれないから。

いや、もともと命ある存在じゃないが、便宜上『死ぬ』って言うの
でよろしく。

四つ足の、ネコ科の肉食獣みたいな見た目の『土魔獣』を、後ろ半
分破壊しても、前半分で飛びかかってきたりするからな……痛覚も何
もあるわけない、というかそもそも動かしてるのはピクシーボブだろ
うから、文句なく『死んだ』っていうくらいに破壊しないと止まっ
てくれない。

……上空をドローンが飛んでるんだが……多分彼女、アレ越しに
こつちを観察してるんだろうな。

アレ壊したら目を減らせるだろうけど、多分ルール違反だろうから
できない。

それでも……母さんこと『アナライジユ』監修の強化カリキュラム
をこなし、例年の生徒以上に成長しているA組、B組、そして普通科
コンビは、襲い来る土魔獣達を片っ端からなぎ倒して進んでいく。

特に直接的な攻撃力のある、緑谷や爆豪、B組の鎌切や穴田を中心
に攻める。

次いで、範囲攻撃ができる轟や塩崎、中々遠距離で攻撃できる常闇
や角取、鱗に青山あたりはサブに立っての攻撃役だ。

同じように攻撃が得意だが、許容上限や時間制限なんかがある面々
……砂藤や切島、鉄哲や、前述した連中程の攻撃力はない尾白や回原
は一步引いて、適宜支援するような立ち位置にいる。あまり前に出過
ぎると消耗が早いし、切島や鉄哲はその防御力でガード役も担えるか
らな。

直接的な攻撃力以外の面が強い者は、後方支援とかに回っている。瀬呂や峰田、泡瀬や凡戸、それに骨抜きなんかは、襲ってくる相手を拘束して動きを封じ、その隙に攻撃役がタコ殴りにする。言ってみればデバフ要員だ。

相手の攻撃から味方を守る場面では、さつき言った切島や鉄哲に加え、円場が強い。ある程度近くであれば、空気の壁で即座に任意の形の防護壁を作れるから。

周囲に気を配る索敵役も重要だ。奇襲を食らわないよう、耳郎や障子、口田や取陰といった面々が常に目を光らせ、発見した端から手の空いてる奴が斬り込んでいく。

戦闘向きでない個性や、相性が良くない個性の者は、支援に回っている。

前者は、麗日や葉隠、小森に心操なんかがそうだな。後者は、上鳴とか黒色か。

葉隠や心操は、ロボに引き続き戦闘に生かしづらい個性だしな……上鳴の電撃は、生物相手なら強いけど、こいつら生き物の形してるだけの土くれだし、黒色は黒い土以外には手を出せない。

麗日は多少接近戦もできるし、触れれば浮かせて落として壊す、っていう手も使えるが、重量があるだけにキャパの消耗が早いんだよな。

彼ら彼女らは、その時その時で必要になる支援や、八百万が作り出した武器を使って戦っていた。心操は、相澤先生の使ってるのと同じ『捕縛布』を持ってたので、それを使ってたが。

そして意外と多いのが、トリツキーな戦い方で、攻撃的でもないけどかなり活躍する面々。

相手を溶かして無力化したり、地面に『酸』を撒いて滑らせる芦戸や、色々な『効果音』を実体化させて場面に合わせた活躍ができる吹出、そしてオールラウンダーの代名詞ともいえる個性『創造』を使いこなす八百万。

面白いのが、B組の3人が組んで見せてくれた攻撃パターンだった。小大が小さくした岩や木片を、柳が飛ばし、敵に向かって激突、あ

るいは落下させ……その瞬間にサイズを元に戻すことで威力を倍増させる。

さらにその直後に、庄田の『ツインインパクト』を発動させてダメ押しという、何気に凶悪なコンボ。上手く使えば、省エネながら一撃で土魔獣を破壊できていた。

そしてそれらの面々に指示を出す、司令塔として活躍しているのも数名。

飯田と拳藤の委員長2人に加え、いつも冷静沈着ポーカーフェイスでおなじみの梅雨ちゃんに、性格はアレだが策士としての能力は確かであり、彼自身も八百万と同等かそれ以上のオールラウンダーである物間なんかが該当する。

ちなみに私は、支援型だ。腕つぶしはあるものの、私の『無限エネルギー』の本領は、エネルギーの蓄積と譲渡……すなわち『人間点滴』としての回復キャラである。『個性』を酷使して疲弊した面々に、片っ端からエネルギーを与えて回復させて、の繰り返しだった。

そんな感じで、A組B組プラスアルファの戦いぶり、連携ぶりが……最初こそ拙かったものの、上手くかみ合うようになり、途中からは破竹の勢いで進んで行けた。次々襲ってくる土魔獣達にも足を止めず、むしろ瞬殺してコンビネーションの経験値にして。

仲間と協力するつてことの重要性、そしてそこで生み出される力の大きさって奴を実感するな。

この分なら、3時間……は無理かもだけど、かなり速いペースで進める。2時台くらいには到着して休めるんじゃないかな……

……なんて思ったのは甘かった。

途中から、出てくる敵が微妙に変わり始めたのだ。

変化の内容は簡単……空から、飛んでやってくる敵が出始めた。

「おい、また来たぞー！」

「また、ええと……蝙蝠みたいなのと、コンドルみたいなの！」

上空から飛来するそれらの敵は、地上にいる連中よりは小型で攻撃

力も低いが、縦横無尽に飛び回って視界を遮ったり、土魔獣を援護するように動いたり、前衛をスルーして後方支援のメンバーを狙ったりするので、厄介極まりない。

しかしそれ以前に、私や緑谷は、そいつらが『飛んでくる』という点自体に違和感を抱いていた。

ピクシーボブの『土流』で作られた土魔獣は、何度も言うように土の塊である。それ自体を自在に動かすことはできれど……重量があるそれを、空を飛ばせたりすることはできないのだ。あくまで地に足をつけて戦わせなければならぬ。

セメントス先生もそうだ。そもそもこの2人は共通して、触れている部分から地続き、ある程度の距離にある対象物質(コンクリと土)しか操れないからな。ピクシーボブの場合は、一度操ってしまえば、ある程度自由に行動させられるけど。

同じ操作系能力でも、遠隔で、空中でも操れる、ベストジーニストやラバーみたいなことは………待てよ？

ふと思いついて、飛んでくる魔獣の姿をよく観察する。

ちようどそこに蝙蝠っぽい方がいるが……気のせいかな？ 翼部分に張ってる、いわゆる『翼膜』の部分が……土埃で汚れててわかりにくいけど、よく見ると……質感が、土じゃない何かに見えるんだが。おかしいと思つて、ちようど青山が『ネビルレーザー』で撃ち落としたりしたそいつを、拳を叩き込んで粉碎、トドメをさし……土くれの中から、翼膜をつかんで引つ張り出す。

……やっぱり、間違いない。『ゴム』だ。

つまり……

「栄陽院さん、コレ、まさか……」

と、視界の端で見ていた緑谷も、同時に気づいたようだ。

「ああ……ラバーがいる」

ピクシーボブだけじゃない。彼女が……『ラバーエンプレス』がここに來てる。ここに來て、『魔獣』を使つての私達の襲撃に加担してる。

飛べないはずの土魔獣が空から現れ出したのは、彼女が手を貸して

たからか！ 体の一部をゴムにして、あるいは内部に組み込んで、空を飛ばしてたんだな……！

すぐさま他のクラスメイトやB組メンバー、そして心操と青山にも、そのことを通達する。

ここからは、飛行能力はもちろん……ラバーの『ゴム』を使った攻撃手段を用いてくるかもしれないから……鞭とか、手足が伸びるとか……

まあ、案の定使ってきたわけだが。

いきなり手足が伸びてリーチが長い攻撃かましてきたり、打撃を浴びせたら体内に仕込まれていたゴムに威力を吸収されて半減してしまったり、厄介なことこの上なかつた。今まで通用していたやり方が突如効かなくなるってのは、思いのほか混乱を誘う。

それでも私達は、なんとかその変化にも適応して戦いを続けていた。

相手が『ゴム』だとわかれば、また対処の使用もわかってくるし、違ってくる。

この魔物たちをラバーが操ってるなら……操ってるのは魔物たちの体の『ゴム』の部分だ。しかしラバーは、ゴムが熱せられたりして変質してしまえば、それをもう使えなくなる。

あるいは、ゴムは極度の低温で冷却すれば割れる。そういう性質上の弱点がある。

それを利用して、轟の氷結や熱、爆豪の炎、あとは芦戸の酸なんかもそうだな。そういうので弱点をついて破壊していったりもした。

だが……それをあざ笑うかのように、さらなる変化が襲う。

いや、変化っていうか……そもそもジャンルの違う敵が出て来たっていうか……

「魔獣、ってかアンデッド出て来た——!?!」

「おい、マジで今度は何なんだよアレ!? スケルトンって奴か!?!」

「いや、『しりょうのきし』とかその辺かもしれ……ってんなことはど

うでもいいんだよ！ 向かってくる以上は相手するしかないんだから……つてかアレも土くれか？ それともゴムか？」

「いや、壊してみた感触からして……本物の骨っぽいぞ」

「嘘、怖っ、何それ!? え、どういうこと!?!」

「今度は何だよ!? ロボット!?!」

「いや、違うだろコレ……土でもゴムでも骨でもない……石か!?!」

あつちのは……鉄の塊!?!」

「何だよコレ……スケルトンの次はゴーレムか!?!」

「キヤアアアアア!!」

「うわっ、びっくりした……え、今の口田か?」

「あー、虫苦手だもんね口田……そりゃ、こんなでかい虫が出てきたら悲鳴も上がるか……つか、こいつら何なわけ!?! さっきから統一性がない上に厄介な化け物ばかり出てきて……」

「土とゴムの魔獣以外は、倒すとドロドロに溶けていなくなる……同じ人の『個性』か？ だが、この一貫性のなさは……」

そう、耳郎が言ったように、統一性がないこと。そして、飯田が言ったように、倒した後のリアクションが似ていること。この2つの特徴は矛盾しているようで、戦っている者にも考えている者にも混乱を誘っているが……私達は、この特徴に見合う力を持った存在を知っている。

アンデッド、ゴーレム、巨大昆虫……その全てを召喚して従えることができる……言ってみれば、『一貫性がないことこそ特徴』とでも言うべき『個性』を持っている、千変万化の顔無しを。

(間違いない……ラバーに続いて、『パンドラズ・アクター』もここに來てる……!) 雄英が独自に声をかけたのか、それとも母さんが何か手を回したのかは知らないけど……こりゃ残り3分の1くらいの道のり、相当きつくなるな……)

……結局、

「やーつと来たにゃん」

私達が宿泊施設にたどり着いたのは……もう日も暮れるくらいで感じの時刻。すっかり夕日で空が赤くなってからだった。

全員ここまでくるのに、おおよそ8時間……そのほとんどを戦い続けて……全員もれなくヘトヘトのボロボロだ。もーろくに『個性』使う力も残っちゃいない……

超疲れた……つかあの妨害の苛烈さ、絶対私らのこと昼までに施設に着かせる気なかったろ。

「何が3時間すか……今夕方なんすけど……」

「ざっと8時間……昼飯抜きで、ぶっ続けて戦い続けて……ローテ組んではいえ……」

「腹減った……死ぬ……」

上鳴、瀬呂、切島の恨みがましい声に、ピクシーボブとマンダレイは意地の悪そうな笑みを浮かべ、

「悪いね、アレ、私達ならって意味」

「それも、極力戦闘は避けて、全力で逃げに徹しながらなのだけどね」「何にせよ、実力差自慢のためか……やらしい……」

「けど、ホントはもつとかかると思ってたよ？ 私の『土魔獣』や……他にもこつちで用意した、昆虫やゴレム、アンデッドやゴム魔獣もさつくり攻略されちゃったし……聞いてはいたけど、今年はホントに優秀な子が揃ってるんだね」

「うんうん。バス降りたところからずっと見てたけど、『個性』そのものも成長させて、上手く使いこなしてる子も多かったし。今年は粒ぞろいだねー！」

「何人かいた、特に動きが優秀な子は……経験値ゆえかしらね？ 私達も一応当事者だったけど、今年度は『ワーキングホリデー』で現場の空気を知ってる子が多いみたいだし」

「うんうん、3年後が楽しみー！ より取り見取りじゃん、いーねーいーねー！」

……なんか例によってピクシーボブの言動と仕草に邪な意思を感じるのですが。

ツバでもつけとくかのごとく、舌なめずりしながら、今回活躍していた数名の男子を……狙うような目つきで見て……うん、まあ、その……ホント必死だなこの人。学生に手出そうとするなや。

そんな、適齢期に追われて焦る気持ちが若干顔を出しているピクシーボブには目もくれず、その後ろから、相澤先生とブラドキング先生がでてきた。

『お疲れさん』とごく簡単なねぎらいの言葉の後、淡々と連絡事項を告げる。

「バスに乗せてた荷物は玄関ロビーにまとめて置いてある。自分のを探して取って、部屋に運び込め。A組とB組、そして男女でそれぞれ別々になってるから、図面見て場所確認しとけよ」

「その後は、食堂で夕食。そして入浴して本日の日程は終了だ！ 本格的な訓練は明日からとなる。各自、しっかり寝て疲れを取っておけ！ 以上！ さあ動け！」

うわーい、疲れていようが関係ない、きびきび動けとばかりのお言葉……でも食事は嬉しい。正直、空腹でもう限界だったから……エネルギーもほとんど底をついたし。

お言葉に甘えて早速取り掛かろう……食べ放題かな？ 食べ放題だといいな。

しかし、出迎えメンバーの中に、ラバーとパンドラはいなかったな……隠れてるのか？ それとも……何か別の仕事にも出てるのかね？

まあいいや……とりあえず今は飯だ飯！ あるだけ食って補給させてもらわないとなあ！

第113話 1日目、終了

「ヒーロー以前に人としてのアレコレから学び直せ」

「クソガキイイイ！」

「ったく、懲りねーな峰田の奴……」

「A組は毎度あんなのの被害に遭ってんのか……大変だな」

「B組は全体的に硬派なのが多いみたいだから羨ましいよ。こっちはノリの軽い奴が多いから……体育祭の時のチアもそうだったし……」

「洗汰くーん、ありがとー！」

がつつり食べて食事を終え、今現在、私達は風呂に入っている。

女子は効率その他を考え、A組とB組でもう一緒に入ってるんだが、男子は人数が多いのでどっちか片方ずつのみ。

それを決める際、代表して切島と鉄哲が（何でこの2人が選ばれたのかは不明）じゃんけんして、A組から風呂入ることになったんだけど……今思うと、峰田がいるんだから、少なくとも女子の入浴時間とはずらすべきだったのかもしれない。こういうことになるってわかり切ってたんだから。

もつとも、それをさらに予見していた相澤先生により、予防策として洗汰君が男湯と女湯の仕切りのところに変換バイしており（間に空間があつて二重になってるらしい）、登ってきて覗こうとした峰田を突き落として防いでくれた。

その後洗汰君は、こつち側（女湯）を見ないように気を付けて下に降りていった。芦戸や取陰の『ありがとー』にも一切耳を貸さずに。今のつて、マンダレイの従甥だっけ？ 小さいのにしっかりした子だねー」

「え、そうなの？ ていうか、何で葉隠そんなこと知ってるの？」

「食事の最中、何度か料理運んだり、空のお皿下げたりしてたよ？ 気づかなかつた？」

と、不思議そうに聞き返した拳藤に葉隠が教えていた通り、洗汰君、ちよいちよい出てきてお手伝いしてたな。……B組のテーブルの方

には行つてなかつたのか？ それとも、拳藤がただ単に気づかなかつただけか……まあいいや。

「峰田とは大違いだね。きちんところち見ないようにして降りてったし」

「でも気づいてた？ あの子、耳赤くなつてたよ？ キョーミがないわけじゃないんだと思うな」

「あー……そのくらいは仕方ないんじゃない？ 男の子だし」

「興味があること自体は仕方がないでしょう。重要なのは、きちんとして自らを律することができかどうかです。幼くしてそれを理解しているなら、彼は誠実な精神を持っていると思いますよ？」

「むしろ峰田がダメなんだろうけどな……あいつ見た目があれなのを利用して、名指しで出禁くらうまで地元の女湯とか入ってたらしいし」

「うわ、最悪ノコ……」

「……やめよやめよ。せつかくの温泉で変態のせいで空気悪くなるとかないわ」

ちなみにコレは後から聞いた話なんだが、冴汰君がきちんと女湯の私達に配慮してみたいようにして降りてったのは……マンダレイ曰く、元々の彼の比較的硬派な性格もあるが、おそらくは真幌ちゃんの影響が大きいとのこと。

影響つていうか、そんなことがあつたつて……不可抗力とはいえ女湯見たとか……知られたら、何言われてからかわれるか分かつたもんじやないからつて。

実際、こないだ話した時に、少し前まで冴汰君がマンダレイにお風呂に入れてもらつてたつて知られたらしい。まだ子供だし、そんなに変なことでもないと思うんだがなあ……銭湯とかなら、10歳までとか小学生以下とかなら、親の性別に合わせてOKつてしてるところも多いし。

特に冴汰君の場合は……両親があんなことになって、しかもそれが原因で色々こじれて……傷心の期間も長かつただろうし。立ち直るまでだけでもそういうのは必要だつたと思う。

けどその時は洗汰君、真幌ちゃんから散々からかわれて……『親と一緒に風呂に入るのが許されるのは幼稚園までだよー!』とかなんとか……以来、面子のためにもそういうの気にするようになったんだと。……どこで覚えたんだそんな言い回し……。

まあ実際、真幌ちゃんや活真君は、普段お父さんが単身赴任で本州に行ってる間、家があるっていう那歩島で2人で暮らしてるわけだからなあ……当然、お風呂だって1人で入ってるみたいだし、そういう実績を盾にされると何も言えないわけか……

(しかし、最近の小さい子ってたくましいなあ……それともこの『超人社会』特有なのか……?) 私の前世の記憶では、子供ってもうちよつと年上でもこう……いや、考えても仕方ないか)

なんて考えている間に、周囲の面々はすぐに気分を切り替えて、軽口を叩き合う感じに戻っている。

ちよいと刺激的なスキンシップ気味にじゃれ合う取陰や芦戸、それに戸惑う塩崎や八百万。そういうの慣れてなさそうだもんな……そこに、やれやれ、って感じで拳藤が止めに入る。

普通にとというか、無難に洗いっことかしてる面々もいる。麗日とか蛙吹、小大や柳がそんな感じだな。そういや蛙吹は、弟や妹のお世話で、背中流すのとか洗ってやるのは慣れてるとかいう話を聞いた気がする。

ただゆっくり、じっくり湯船につかっているのが好きな面々も。かくいう私もそれに入るわけだが……あ、八百万もこっち来た。

すると、一緒にこっち来た小森が、ふと気づいたように、

「そういえば……話に聞いてはいたけど、実際目にしてみると……」

「うん? 何?」

「……それ、ホントにお風呂で浮くノコね」

そんな言葉と共に、私と八百万の……まあ、湯舟で浮いている胸部装甲を見る小森。

特に変な感情……妬ましいとか、羨ましいとかはないみたいで、ホントに純粹に『浮くんだな』って感想を抱いているようだ。……向こうから修羅の視線を送ってきてる耳郎とは違って。

「あーうん、まあな……いやでも実際風呂とかプールだと楽なんだよな、重くなくて」

「ですわね……普段はこう、持ちあげるようにしても……どうしても肩が……」

わかるわかる。下着とかで支えても、結局そういうのって肩に紐が来るから、多少なり負担がかつちやうんだよなあ……そういうのが少ないタイプの着ても。

……耳郎から感じられる視線の圧力が増した。

「まあ、ちっちゃいはちっちゃいで希少価値だし、別にそこ気にはしないけど……というか、ぶっちゃけそこまで大きいと動きにくくないノコ？」

「あ、それ私も思ってた。正直私も時々……きちんと固定してないと動きにくく感じる時あるんだよな。栄陽院とか大変じゃない？ インファイターだろ？」

と、拳藤もこつちに来て聞いてくる。ああ……拳藤も格闘型だもんな。

胸部装甲もそこそこというか、結構なもんがついてるし……いやホントに格闘扱う者にとっては、嫌みでもネタでも何でもなく、この胸の重りって邪魔なんだよな……

……まあ、使うと緑谷が喜んでくれるから十分収支プラスだけど。「それはまあ、正直……でも、それこそきちんと固定するなりなんなり、対処するくらいしかないんじゃないかね？ 肩こりと同じで、切っても切れないもんだよそれは」

「やつぱさそうか……うーん、いいアドバイスもらえないかって正直期待してたんだよ、ひそかに」

「あれ、一佳そんなんでも悩んだの？ へー、意外」

「意外、ってお前な……割と切実なんだって。揺れるし、重心崩れるし、足元見えづらいし……」

「急に動いたり、回し蹴りとか回転するような動きとかすると、慣性とか遠心力で引っ張られたりして動き障害するし」

「それな栄陽院。取陰はそういうの？」

「肩こりはわからなくもないけど……私、戦闘の時はほら、ばらけさせて飛ばすから」

「あー……『個性』である程度解決ないし軽減できる奴はいいよな……麗日ー、『無重力』で胸の重さだけゼロにできない？」

「無茶言わんという……でも実際成功したことないわ、今まで」

「あ、試したことはあるんだ……まあ、麗日も結構あるもんね」

「なんとも色気のない巨乳談議というか、苦労話である。まあ、現実はこのまんまなんだ。」

「後はもう各自、部屋に戻って寝るだけかー……あつという間に一日終わったな」

「だね。まあ正確には、ひたすら戦いっぱなし、歩きっぱなしだったから、そういう感じに思えてるだけだろうけど……うん」

「ける。さすがに疲れてるし、この上何かしろって言われても逆に困るわ」

「なら、女子会は明日以降で」

「ん」

「ああ、女子会……そういうえばそんなのも企画されてたな。お菓子持ち寄ってパジャマパーティー的な感じで……初日はそんな元気も残らなかった感じだが。明日以降はどうだろ……」

「合宿が本格化するとか予告受けてるんだが、残ってるかね？　そういう軽い感じのノリに移行するだけの元気……」

「そこは意地でも残そう、うん……何が悲しくてこんな、花の女子高生がただ汗かいて戦って苦労するだけの合宿なんて……レクリエーションも用意されてるんだし、楽しむところは楽しもう！」

「そうありたいもんだな……じゃ、私そろそろ上がるわ。ちよつと先生たちに用事、っていうか、相談もあるし」

「？　相談って？」

「さつき試しに部屋の布団に寝てみたんだけどさ……サイズ足りてなかった。頭と足はみだした。もっと大きい布団ないか聞いてみようかと」

「ああ……永久、身長高いもんね……192cmだっけ？　うちのクラ

スで一番高いんだよね」

まあ、相談してみるだけ。ダメならダメでいいんだけどね。寝相崩せばどっちみちはみ出すだろうし、丸まって寝てもいいわけだし……そもそも今夏だから、布団なしで寝ても寒くないし。

ただ、敷布団はせめてほしい……床に直接は流石に体が痛くなる。普通の布団、2枚並べてとかでもいいから……

「へー、そうなんだ……あれ？ 確かうちのクラスだと、一番背が高いの……凡戸の191cmじゃなかったっけ？」

「マジで!? おー、すごい、つまり永久つてば1年ヒーロー科で一番じゃん！ 僅差だけど」

「喜んでいいのかねそれ……」

ゆっくり湯につかって疲れをとった私達は、その日はちよつと寝床で雑談とかした後は、大人しく就寝した。昼間の疲れもあったから、皆すつんと意識が落ちた。

ちなみにその寝る時なんだが……流石に普段のように全裸で寝るのはやめておいた。

いくら女同士とはいえ、さすがに家族でも緑谷でもない他の人がいる場所でそういうのはな……風呂場ならともかく、寝る時はちよつと遠慮すべきだろうと。同じ屋根の下に、男子生徒もいるわけだし。

なので、こないだの買い物時にパジャマ新しいのを買っておいたのだ。芦戸に選ぶの手伝ってもらって。

それにこれは学校の合宿だ。夜中とか急に部屋に誰かが入ってくるパターンもあり得る。

女子の部屋だし、相澤先生とか男の先生が『朝だぞ』って起こしに来る……とかはないと思うけど、マンダレイとかが見に来る可能性はあるし……極端な話ではあるけど、火事とか緊急時とかには構わず入ってくるだろうし。

それと……英雄だし、夜中に突然何らかの訓練が始まってそれに放り込まれるみたいな可能性も……なくはない、かも。そういう時に服を着る暇がなくて全裸で放り出されたり、あるいは服を着るのに手間

取って出遅れたり……どっちも嫌だしな。嫌、の種類が違うけど。ちなみに、私の横の布団で、葉隠は全裸で寝ていた。布団が、人の形にへこんでいた。

が……彼女は色々例外だと思うので、いいか。

そんなわけで、1日目、終了。

……なお、明日から男女の入浴時間をずらすらしい。相澤先生から通達があった。

理由は言うまでもない。

☆☆☆

明けて翌日。

いよいよ今日から、『林間合宿』が本格始動する。『強化合宿』としての側面をもって。

その内容は……事前にある程度聞いてはいたけど、『個性』の強化である。

午前5時30分、運動場……って名前なのかどうかはわからないけど、広場的なところに集められた私達（ジャージ姿）は、デモンストレーション的なのでそれを目の当たりにした。

相澤先生は、あの『個性把握テスト』でも使ったボールを3つ取り出し、1つを爆豪に、1つを常闇に、1つを私に渡して、投げさせた。結果は、入学当初（つてか入学初日）の測定値と比べて……以下の通り。

常闇：ほとんど変化なし

爆豪：ちよつと伸びてる

私：そこそこ伸びてる

「とまあ、こういう結果になったわけだが……どうしてこうなったかわかる者、挙手」

不思議そうにしてざわついているクラスの面々や、戸惑いつつも悔しそうにして齒ぎしりしている爆豪を丸つと無視してそう問いかけ

る先生。

少し考えた後、緑谷と八百万、それに私が手を上げた。

「じゃあ、八百万」

「はい。恐らくですが……『個性』そのものの成長に起因する差ではないでしょうか。このソフトボール投げの記録は、常闇さんならば『黒影』の能力に、爆豪さんは手のひらから起こせる爆発の威力に、栄陽院さんは肉体の強化度やその効率等に依存していると思われる。もちろん、体力テストでも用いられる競技ですから、個々の技術や体力でも記録に差は出るでしょうが、それらはそこまで入学時から劇的な差はないはずです。であれば、この差はお三方の『個性』そのものがどれだけ成長し、差がついているかによるものなのではないかと推測しました」

「正解だ。なら、なぜこの差はついたと思う？ ……じゃ、今度は緑谷」

「はい。えっと……恐らく、『個性』の使用頻度と、どれだけ効率的に鍛えられたかの差だと思います。学校の授業では、共通のカリキュラムで練習しますから、そこまで差はつきません。せいぜい、戦闘訓練とかを経て『個性』の使い方が上手くなるくらい……となれば、学校以外の部分……個々の自主トレや、『ワーキングホリデー』の場で、どれだけ個性を使っていたかだと思います」

「これも正解。爆豪と栄陽院は、常闇よりも積極的に『ワーキングホリデー』を活用し、現場での経験と共に、より実践的に『個性』を使用する訓練を積んでいた。体験先での指導で、より効果的に『個性』を使う技術も学んだだろうしな」

それを聞いて、少し悔しそうにする常闇。

単に記録で負けたから……じゃないな。自分は私達より、そういう『実戦的な経験』を積むことがあまりできていなかったから……つてところかも。常闇たしか、ホークスのところで、後始末とかばかりやらされてたって聞くし……事件解決とかに携われるようになったの、結構後の方だつて。

とはいえ、これは自分の成績やスケジュールと相談して最善を尽く

した結果でもあるだろうから、そこまで悔しがっても仕方ないだろうし……それは常闇自身もわかってるはずだ。

むしろ……そこを、この合宿でどうにかするんだろうしな。

「では最後に……『ワーキングホリデー』の回数や頻度で言えば、爆豪と栄陽院にそこまで差はない。栄陽院は色々な事務所で、戦闘を含む色々な経験を積んでいたし……爆豪はエンデヴァーの事務所で、『敵』犯罪を始め、色々な事件の場で経験を積み、戦闘能力向上にかける指導も受けていた。にもかかわらず、『伸び率』においてこういう風に差ができたのは……栄陽院、行けるか？」

「……恐らくですが、どれだけ『個性を』『効率的に』鍛えられたかの差かと。爆豪は……私が知る限り、使用頻度と、戦闘技術と合わせての技術的な向上……爆発を圧縮したり、素早く最高火力を引き出したリすることが可能になったはずですが、許容量そのものが強化されたわけではない」

例えば、爆豪の『爆破』は最大で1000の威力を引き出せるとして……しかし、通常時すぐに使える威力はそこまでない。せいぜい、20とかその辺だと思う。

爆豪はスロースターターだから、汗かいて、体が温まっていくほど、爆発が強力になる。十分なウォーミングアップを経て初めて、『ハウザーインパクト』みたいな大技を出せる。

これを爆豪は、エンデヴァー事務所での訓練で、今までよりも早く、今まで以上の火力を引き出せるようになった。

ただ、上限自体は100、あるいはそれよりちよつと成長したくらいで変わっていない。一度の爆発に乗せられる、絶対値的な威力の大きさもだ。だからこそ、ソフトボール投げの記録は、『爆発の圧縮』などの小手先の技術の分しか変わっていない。

一方私は、今まで『エネルギー』による強化上限が500%だったものを……母さんからの指導によって、効率的に、繊細にエネルギーを扱う術を覚えたことで……多少ではあるが『上限』を引き上げるこ

とができた。ゆえに、記録はそこそこ伸びた。

もちろん爆豪も、時間をかけてウォーミングアップを十分にすれ

ば、もつと大きな記録も出せるだろうけど……それはそれで、テストの時と同じ条件とは言えなくなる。

私だって、なんならコスチューム着て同じようにすれば、『バイオ人工筋肉』とかのサポートが入るから、もつと伸びる。身体強化も最大650%まで可能になるし、無理すればもつと行けるし。

『同じ時間で、同じ条件で、同じことをして、どれだけ結果に差が出るか』……それが、結局は個々人の『地力』の……ひいては『個性』そのものの成長を測る物差しになる。

「私の場合……家に伝わる『個性』の訓練に関してのノウハウがありますので、『ワーキングホリデー』先での訓練はもちろん、自主トレなどの際にもそれを意識してやっていました。それによって、『効率的に『個性』を鍛える』ことができた点が大きいです。言ってみれば……適当に相手を選んで戦って経験値を稼いだか、きちんと努力値配分して鍛えたかの差、かと」

「最後のはともかく、概ねそれであってる」

もつとも、最後の努力値云々の話で『ああく』ってわかったっぽいリアクションしたのが何人かいたけど……思い付きで言ってみただけど、やっぱそういう説明の方がわかりやすいか。ポ○モンはこの世界でも偉大だな。

「他にも何人かそういう立場の奴はいるが……要するに、そういう『個性』を伸ばす上で効果的な経験ないし訓練を積むことができたかどうか。それが、大きい。と言ってもまあ、現状自分がそうでないからといって悲観する必要は全くない。そもそも焦ってやって上手く習得ないし成長できるようなものでもないしな。何より……そのための、この合宿だ」

そうやって先生は、私達全員を見回し……ニヤリと笑って言う。

「そういうわけだ。普段の学校での訓練と違い、この合宿では『個性』そのものを伸ばす訓練を行う。無論、『個性』は十人十色、それぞれ違った内容になるわけだが……当然ながら、楽な内容は1つもないことは覚悟しておけ。死ぬほどきつい……くれぐれも死なないよ」

第114話 『個性』伸ばし

『個性』とは身体機能であり、筋肉と同じように、使えば使うほど成長し、強くなる。逆に、使わなければ錆びつき、衰える。

そして、筋トレと同様に、効率的な鍛え方つてもものがきちんと存在する。

私の家にはそのノウハウがきちんとあり、ここ数週間は母さんからそれを教わりつつ鍛えて来たが……私のそれは、やはり『コントロール』に比重を置いていたため、それによつて瞬間的な馬力は上がっているものの、爆豪や常闇同様、絶対値的な量を増やすには至っていない。

さっきのソフトボール投げは、あくまで『爆豪よりは効率的に鍛えてたし増えてるから』という結果であつて、あくまで比較上の話なのだ。

なので、その絶対量を増やすこと……つまりは全体的な『地力』の底上げこそが、私がこの合宿でやることの内容である。

英雄ヒーロー科1年、A組とB組……そして、プラスアルファの特別枠で参加することになった心操と青山、総勢42名。

この人数の面倒を一気に見るために、四位一体のヒーローチーム『ワイルドワイルドプツシーキャッツ』に声がかかった。

ラグドールの『サーチ』で全体をモニターし、ピクシーボブの『土流』で訓練に見合ったフィールドを形成、マンダレイが『テレパス』で各自に、複数同時にアドバイスを飛ばし、虎が殴る蹴るの暴行……最後のは何か他に言い方はなかったんだろうか？

まあ、やつてることは単純に体を動かしたりする系の、相手が必要な指導のようだけど。

雄英の人員にも限りがあるため、大人数の教員をこの合宿に動員することはできないし……最近は『敵』の活性化、特に『敵連合』の蠢動もあるため、あまり大規模に動くことはできない。

ゆえに、最小限の人員で最大限の効果をたたき出せるこのチームに

白羽の矢が立ったわけだ。

しかし、そこに先生2人を加えた6人では……まだ足りないらしい。

例年通りならそれでもよかったのかもしれないが、今年のヒーロー科。プラスアルファは、うちの母さんこと『アナライジユ』の強化カリキュラムによつて、例年より進んでいる。ゆえに、さつきソフトボール投げで明らかになったように、『個性』訓練の進捗状況に多少のばらつきがある。

中には、例年同様のやり方では十分に成果を期待できない人もいる。

今年のカリキュラムは、個々の実力を『最大限』伸ばすことを目的にしている以上、それを『仕方ない』『ある程度は伸びる』で妥協してちやいけないうつてことで……さらに数名、追加の人員に声がかかっている。規模が大きくなりすぎないギリギリを見極めて。

で、その1人が……

「授業参観かつての……」

「はい、文句言わない。手も口も止まってるわよ、永久」

「止めてるんだよ……ちよつと休憩させてくれ。もう腹に入んない……」

「だからペース配分考えなさいって言ったでしょうに……しようがない娘ね」

うちの母その人である。

といつても、もちろん私の保護者としてきたわけではなく、プロヒーロー『アナライジユ』として、この合宿全体の総監督を行うために来たのである。まあ、今年度のカリキュラムの作成責任者みたいな立場にいるわけだし、立場的には自然なことではあるな。

今は単に、私の『無限エネルギー』の操作のために、最初にコツを指導する係についてくれていただけ。見通しがつけば、他に行く……というか、全体を見る作業に戻る。

なお、これは私が特別というわけじゃない。

微妙に自画自賛になるが、今回の合宿において、一定のレベル以上

にまで『個性』の成長が既にみられる者や、そもそも個性自体が特殊な者に対しては、他の生徒よりもピーキーな指導・調整が必要になることが考えられるため、一時的にはあるが個別のコーチがついたり、むしろ個別指導をメインにしたりするのだ。

例えばあつちでは、飯田がひたすら走って足腰を鍛えている。あいつの『個性』は脚力と直結するものだから、その鍛錬方法はシンプルなものだ。

別な場所では、梅雨ちゃんが跳躍やら舌伸ばしを繰り返して、『蛙』としての力を鍛え上げてるし……さらに向こうでは、B組の拳藤がサンドバッグを殴っている。

どれも、『個性』に由来する体の各部を、『個性』と合わせて鍛えているわけだが……注目すべきは、今言った全員が、腕や足に見覚えのある『ギプス』をつけている点だ。

アレは言わずもがな、ラバーが作ったものである。私と緑谷に、『デウス・ロ・ウルト』で施したのと同じものだ。各自の体の状態に合わせて挑めた、オーダーメイドの強化ギプス。

もちろん、私らみたいに全裸の状態から着けさせるわけじゃないし、そもそも体の一部分にしか装着していない。飯田と梅雨ちゃんなら足、拳藤なら肩から拳にかけてだ。

それでも、体に見合った動きを心がけたりしないと動きづらかったり、効果的に全体に負荷をかけて筋肉の成長を助けたりと、性能は十分。少なくとも、市販品なんかじゃ比にならないレベルのものであると言える。

私達を鍛えた時のアレは……私らの羞恥心とか倫理観を完全に取っ払って、その分も修行に全振りすることが可能だったからできただけだ。あと、私も緑谷も増強系だから、全身満遍なく鍛える必要があつたってことで。

更に別なところでは……あの『魔獣の森』で出現した、アンデッドやら何やらが出現し続けていて、それを相手に戦い続けている者が多数。

いや、一概に『戦い』かどうかはわかんないけども。

やっているのはやはりというか『パンドラズ・アクター』だ。ラバーもそうだけど、やっぱりここ来てたのね……。

パンドラズ・アクターによって生み出された無数のモンスター達を相手に、スパーリング……と呼んでいいのかどうか微妙なガチバトルを繰り広げている面々が多いわけだが、戦い方はそれぞれ違う。

例を挙げれば、B組の鎌切は体から出す刃でひたすら敵を切り刻んでる。しかし、出せる刃には長さにも数にも限りがある。あっちこっちから敵が出てくるので、素早く出し入れして切り替えて迎撃しないと、数の暴力的なアレで組み伏せられて倒されてしまう。その訓練か。

そのちよつと向こうにいる角取は、上空から飛んで襲ってくる昆虫型の奴を、『角砲』で撃ち落としてる。彼女は、あの角のコントロールと馬力、それに同時に操れる数が課題らしい。

他にも、単純作業の繰り返しでは対応できなかつたり、ピクシーボブの『土流』や、虎の『我ーズブートキャンプ』ではカバーしきれない点を補填するのが彼の役目のようだ。

しかしあの人の『個性』、ホント謎だな。いろんな人に変身できて、その『個性』まで使えて……一体どんな『個性』なんだ？ 個性名が『ドツペルゲンガー』だってこと以外、制限とかデメリットも含めて一切不明だし……まあいいや。

ま、他の人は置いといて……私の場合は、さっきも言った通り『底上げ』だ。

なので今何をやっているのかというところ……ひたすらゼリーを食べている。

ただのゼリーじゃない、特別製の、超高カロリー、超高速消化の栄養補助ゼリーだ。少量で大量のエネルギーを、栄養素的にもバランスよく摂取できる代物。

ただし市販品ではない。栄養価が高すぎるため、普通の人下手に取ると逆に体を壊す可能性が高いためだ。

というかコレ、そもそも食品ではなく、どっちかかっていうと医薬品にカテゴライズされる。本来は病院とか指定医療機関・施設なんか

で、栄養失調で即時のカロリー補給が必要な人や、胃腸が弱っていたり異常があるため、普通の食事が食べられない人向けに使用されているものなのだ。

今回、私の訓練のために、特別に発注してもらって大量に届けられた。それを私は、どんぶりに山盛りにして片っ端からかき込んでいく。

私の『個性』なら、どれだけのオーバーカロリーだろうが太らず、体調も壊す心配はない。その分が全て『エネルギー』に変換されるから。たださつきまでずっと食べてたせいで、物理的に容量オーバーになって……お腹たふんたふんになっちゃったので、ちよつと休憩した。

で、あらかた消化できたようなので、その補給したエネルギーを使つて……今度は、筋トレ。

立ち上がり、そばに置いてあるロープを手にとって……その先にながっている、おもりが大量に積まれたそりを引っ張って歩き出す。指定されたコースを、延々と引っ張って歩く。

気分は、サンタさんのそりを引っ張って走るトナカイか何かである。

要するにあれだ……野球部員とかが、タイヤをロープで体につないで、それを引っ張って走って足腰を鍛えたりするじゃん？ それと同じようなことやってるんだ私、今。

そして、そりに乗ってるおもりはただのおもりではない。期末試験の時に先生たちが使っていた、小型でもとんでもない重量のある超圧縮おもりだ。

ブレスレット状のものが8つほどで、オールマイトの体重の半分……100 kg オーバーの重量になるそれを、何十個もそりに積んでいる。そして、そのそりから繋がるロープは、引っ張っても切れないように、金属繊維を編み込んだ特別製だ。

早い話が、超重い。

具体的に言うと、このおもり満載のそりは、私が『個性』を使用して、強化上限まで強化して全力で引っ張っても動かさないくらいには

重い。

なので、ほんの少しではあるが、限界を超えた強化をした上で引つ張らないといけない。それによって体全体への負荷をかけ続け、慣らしていき、『上限』を上げる試みだ。

エネルギーが尽きるまでこれを続け、尽きたらまたゼリー食べて補充して、また引つ張る。この繰り返し。

(なんか……私が、一番最初に緑谷にやってあげたのと、同じようなことやってるな……偶然だろうけど……なんか、無駄に感慨深い……) 今の私の、サポートなしでの強化上限を、10〜20%かそこから上回る形で『エネルギー』を充填し、全身に鈍痛を覚えながらも、そりを引つ張って引つ張って引つ張り続ける。

今日はこれを、午前中いっぱい続ける予定だ。午後からは……別な何かメニューに行くらしい。

しかし、やつぱきついなコレ……限界を超えて力を使うのは、負荷もそうだけど、コントロールも精度だだ下がりになるから、エネルギーの枯渇が速い……

枯渇したら……いや、枯渇してからじゃ消化間に合わないの、エネルギーが少なくなってきたタイミングで、そりに積んでいるゼリーを開けてかつこんで、また歩く。その繰り返し。

時々、走り込みがてら飯田がやってきて、『補充だ!』とゼリーの箱をどきつとそりの上に置いていってくれる。マンダレイから『テレパス』で受け取った指示で、配達役やってくれてるらしい。そりに積んでるゼリーが丁度なくなるタイミングで来てくれるので助かる。

しかし、繰り返すほど体中が痛くなってくる……それでも、続ける……めっちゃきつい。

ここまでやってんだから、伸びてくれよ……私の『個性』よお……!

☆☆☆

S i d e . 緑谷出久

「んん……見事ですな、緑谷出久君。少し見ない間に……また1つ、いや2つも3つも段階を上げてきましたか」

「ありがとうございます……ごい、ますっ！」

褒められたことにお礼を言いながら……僕は、重くて動かない手足を懸命に、しかし雑にはせずに最適な動きで動かしながら、戦い続ける。

相手は、今しがた僕の成長に驚いていたパンドラズ・アクター……ではなく、その彼が作り出した巨大なアンデッドだ。

それも、昨日『魔獣の森』で戦ったスケルトンっぽい奴とは比較にならないほど危険そうな奴。

一応、『死の騎士^{デス・ナイト}』という名前があるらしいそいつは、デカいわ怖いわ……あとでかい剣と盾持つてるわけで、どう見てもゲームとかのなかにか出てこないような凶悪な見た目をしていて。そして、見た目通り強い。

剣は刃を潰してあるようだけど、当たれば大ダメージなのは変わらないし……それ以上に守りが素早く、そして堅牢で、中々ダメージを与えられない。盾でことごとく防がれるし、あまり大きく動くと攻撃後の隙を突かれる。

しかも僕は今、ラバーエンプレスによって作られた、懐かしき『ハードラバースーツ』を身にまとわされている。服の上から着る簡易版だが——ここでまた『全裸になれ』とか言われなくてよかった——性能は健在なので、雑に動くとおつという間に体力が尽きる。

満足に動かない体……超がつくほど強力な敵……一瞬も油断できない戦い……なるほど、いかにも強くなれそうな、地獄の特訓だ。

「前もそうでしたが、緑谷出久君……君の『個性』は、『伸ばす』というより『起こす』と言った方が正しい伸び方をする。君自身の成長や経験と合わせて、相乗効果的なそれが期待できます。ならばただ単に体を鍛えるよりも、その使い方を同時進行で学習すべき。まあ、やっていることはいつもとあまり変わりませんから、不満かもしれませんが……」

「そんなこと、ない、です……強くなる、ために、できることは……全

部っ、やりたいですから！」

「うむ、その意気やよし！ ではまず、その『死の騎士』を倒すところからです。私は他の生徒を見に行きますが、倒されたら察知できるようになっていきますから安心なさい」

「はいー」

もちろん、こうして話している間にも攻防は続いている。剣をかわして攻撃し、盾に防がれて後ろに飛んで追撃をかわす……単純に攻めてたんじゃダメだ、いつまでたっても終わらない。体力がなくなる前に、こいつの動きを見切れ……

今までと同じように……

摘発の時に『死穢八齊会』の乱破を、

追試の時に栄陽院さんを、

それぞれ、観て、学んで、超えたように……

考えるな、感じる……全てを……僕の、糧に……！！

☆☆☆

「期待通り……いえ、それ以上の成長速度ね。また強くなってるわ、彼」

パンドラス・アクターが去り、緑谷が、極限の集中状態……永久が冗談交じりに『身勝手の極意』と呼んでいる状態になった際、それを見ている者がいた。

木立の向こうから……邪魔にならないように気配を消している、アナライジユである。

「彼に何よりも必要だったものは、『自信』……言葉そのまま、『自分を信じる』ということ。完全にものにしていてと言つてよさそう……ふふっ、いい仕事してくれたみたいね……永久」

眩くようにそう言ったアナライジユは、先程よりも速く、力強く、そして危なげなく……徐々に余裕まで出して『死の騎士』の猛攻をさばいていく緑谷を見ながら、笑みを深めた。

いわゆる『無我の境地』や『ゾーン』といった呼ばれ方をする、ス

ポーツ選手などがしばしば体験する極限の集中状態。一説には、そうなるために必要なのは、『自分を信じること』だと言われている。

まるで体が勝手に動いているような状態になるそれらの境地においては、無論、実際にはきちんとして脳が考えて体を動かしているわけだが……一切の迷いも無駄もない思考と、それと一続きになった体の反応、動作が、そう錯覚させる。

そんな不思議で不確かな感覚にも構わず、今までの自分の経験と努力、そして力を信じて『託す』ことができなければ、それ自体を『強さ』として形にすることはできない。

10年以上もの人生を『無個性』として卑屈に生きて来た緑谷には、それが決定的に足りていなかった。自分は弱い、周りより劣っているのだと、心の底にまでしみついていった。

ゆえにアナライジユは、『デウス・ロ・ウルト』のプランの中で、なるべく緑谷に、自分の成長を目で見て感じ取れるようにさせることで、自分は確かに強くなれているのだと自覚させ、少しずつその卑屈さ、後ろ向きさを取り払っていった。

ともすれば、初期の爆豪のように、過剰な自信や傲慢さにつながりかねない手法ではあるが……言うては何だが、緑谷はそもそもそのラインが低かったので、むしろちようどよかったと言えた。

さらに幸か不幸か、緑谷の場合は、オールマイトという雲の上の存在が常に頭にあったことや、グラントリノやサー・ナイトアイ、ルミオンといった、自分よりも強い『壁』に適宜出会っていたことにより、天狗になることなく、強さを積み重ねていくことができていた。

着実に力をつけていき、それを驕らず諫め、正確に認識・把握する。その繰り返しでここまで来た緑谷は、その過程で、アナライジユの狙い通り、『自信』をも育て上げてきた。傲慢には結び付かない、堅実に健全な自信を。

そして、その最後の一押しになったものが……他ならぬ、永久だった。

フィクションなどではよくある話である。男が一人前になるのはいつか。

ありがちな物言いになるのかもしれないが……緑谷の場合も、『それ』を経験し……それが最後の一押しとなつて、自分への自信につながった。

あるいはそれだけではなく……永久という、誰に聞いても『美少女』と評価される容姿を持ち、また将来有望なヒーローの卵でもある彼女が……自分のことを認め、『主』としてついていきたい、と伝えて来たこともまた、永久という1人の女を通して、自分という存在を見ることができた理由なのかもしれない。

いずれにせよ、緑谷出久は、栄陽院永久を自分のものにしたあの日、同時に確固たる自信を持った。

かつてターニャに言われた、『欲するならば、それに足るだけの者となれ』という言葉の通り……永久の主として、彼女に釣り合うだけの男であろうと、胸を張って前を向いて進もうと決めた。

そしてそんな、たった1つの決心が、精神の成長となり……かけがえないピースとなった。

今までそれがなかったがゆえにできなかったこと全てが、緑谷の手に収まった。

（見初めた主の強さの一部になる……『幾瀬』の者としてこれ以上の喜びはない。ふふっ、よかつたわね永久……そして、緑谷君がそうだったのなら……次はあなたの番）

ここはもう問題ないだろうと、結局最後まで存在を悟られることなく、踵を返すアナライジユ。

去り際に、緑谷が『死の騎士』の頬に拳の一撃をクリーンヒットさせたのを見た後、そのまま歩き去った。

歩きながら……誰にも聞かれることのない独り言を、つぶやくように口からこぼす。

「あの子も、『主』と定めた緑谷君に、身も心も女にされた……緑谷君は、『個性』も含め、着実に成長している……となれば……そろそろ、だと思ふのよね……」

眩きながら、歩いて行く。

行き先は……恐らく、もう間もなく全身の痛みが限界になり、『エネ

ルギー』の量に関係なく動けなくなっているであろう、娘のところだ。
（あの子の『個性』は……『オール・フォー・ユー』は、間もなく本性
を現す……。その真価は、エネルギーの貯蓄や譲渡でもなければ、そ
の操作でもない。己の『全て』を主に捧げて尽くすための、献身の極
致たるその力こそ……私達『幾瀬』の誇りにして、理解されえぬ狂気
……！）

「明日以降が楽しみね。ふふ……永久、あなたはどうか『変わって』いく
のかしらね……。愛しい彼のために……！」

第115話 謎の『胎動』

「では午後の部を始める！ 午前中にOKが出た者は、ピクシーボブのところに行って指示を仰げ！ 他のもは引き続き『我ーズブートキャンプ』で基礎トレだ！」

「サー……イエツサー……」

虎の号令に、懸命に答えようとする生徒達。

しかしながら、午前中にあまりにも密度の濃い時間を過ごしたために、疲労が抜けきらずに全員フラフラの様相だ。弱音を吐こうとはしないあたり、流石のガッツである。

A組からは尾白や切島、B組からは穴田や回原など、単純な増強型、あるいは体を鍛えることで『個性』の成長につながると目される者がそこにいるが、全員足元がおぼつかないレベルだ。

しかし、虎も別にそれを押して動かせようと思ったわけではなかった。

いくら校訓が『Plus Ultra』、限界を超えと言っても、無理をし過ぎて壊れてしまつては元も子もない。既に彼らが体力的に限界であることは、ラグドールの『サーチ』による解析でわかつており……ゆえに、それに対する対処も用意してあつた。

「午後の部を始める前に……お前達にプレゼントがある」

「……？ プレゼント？」

不思議そうに聞き返す切島。

彼らの目の前で、虎は後ろの方に置いてあつた謎の木箱（午前中はなかつた）を持ちあげ、切島達の前に差し出す。

中を見ると、そこには……栄養ドリンクか何かと思しきガラス瓶が、人数分入っていた。

1人1本取り出して飲むように指示され、言われた通りそれを手に取り……ラベルを見た穴田がそれに気づいた。

「？ 何ですかなコレは……『トワビタンE』？」

誰も聞いたことがないような商品名である。そもそも、ラベルに

は、その製品名？以外に何も表記がなく……ふたのところには、『消費期限：今日中』と書かれている。明らかに市販品ではないし……名前がどうにも気になった。

そこでふと、尾白は、クラスメイトのとある少女の『個性』を思い出し、

「……コレ、もしかして栄陽院さんの？」

尾白の脳裏によぎったのは、自分の『エネルギー』を他人に分け与える力を持つクラスメイト。そしてそれは、人に直接渡す以外にも方法があった。

もう随分前になるが、USJの時に、彼女が『エネルギー』を溶かし込んだ牛乳を、回復アイテムとして自分に持たせて渡したことがあった。飲めば力がみなぎり、疲れが吹き飛ぶ、まさしく回復アイテムと言える代物。

それに対しての虎の返答は……肯定。

「左様、栄陽院永久に『個性』の訓練がてら作ってもらったものだ。それを飲めば、失った体力はたちどころに回復する！グイツと飲み干してブートキャンプを再開するのだ！」

☆☆☆

時刻は、もうそろそろ正午、つてくらしいの時間帯。

午前中の訓練……補充して、使いきって、補充して、使いきって……その繰り返しだった。

限界以上の充填と、その状態でおもり満載のそりを運び続けたおかげで、体中が痛い……筋肉痛とか、あるいはそれに類する状態だと思う。単にスタミナだけじゃ解決しない何か不調が、私の体に起きている。

あるいはこれこそが、私の『限界突破』のために必要な過程なのかもしれないけど……どっちみち、もうこれ以上は動けそうにない……。

限界を超えて、それも我慢して動き続けて……限界の限界くらいに

までなってる。弱音とかじゃなく、ホントにもう体が動かん。

しかし、きちんとそれを察知したらしい母さんが、すぐにそこに現れた。

あれ、今度は、なぜか相澤先生も一緒だ……どうしたんだろ？

「お疲れ様、永久。うん……いい感じに限界みたいね。それじゃあ、ここからは休憩もかねて……もう1つのトレーニングメニューに移りましょうか。では先生」

「はい。お前ら、それぞれ置き」

「「ういっす……」」

と、声が聞こえて……よく見るとそのさらに後ろについてきていた、砂藤と口田、障子が、手に持っていた大きな木箱を、それぞれ地面に置いた。

A組でも特に大柄でパワーもある……身長で言えば、2位から4位にあたる3人だ。どうやら、荷物運び係として動員されたらしい。お疲れさん。

身長1位？ 私ですが何か？

置いた瞬間の音がやけに軽かったことや、『ガチャガチャ』って硬質な音が聞こえたこと、やけにそつとおいたことからすると……割れ物でも入ってるのかな？

なんて思いながら覗き込んだら……そこにあっただのは、何十本ものガラスの瓶。見た目的には、栄養ドリンクのそれっぽい大きさと形である。

ふたぎつちり閉まってるし、中身入ってるようだけど……何だこのラベル？

『『トワビタンE』……何ですかコレ？ 新手的ジョークグッズ？』

「お前の特訓に使う道具だ。同時に、他の連中にとつての回復アイテムだな」

母さんと先生曰く、ここから私は、さっきまでと同じように、医薬品の高カロリーゼリーでエネルギーを補充しつつ、この大量のビン……の中に詰まっている特殊な薬品に、それを溶かし込んでいく、という作業に移るそうだ。

ちよつと復習だが、私の『エネルギー』は、飲み物なんかには溶かし込むことができる。

そしてその溶かすものが、高カロリーであり、動物性たんぱく質に近い成分であるほど、大量にエネルギーを溶かすことができ、また長持ちするという特性がある。

このビンの中身は、薬品とは言いつつも、清涼飲料水の類と云っていいようなもので、成分は動物性たんぱく質などが主である。そのため、私の『エネルギー』を、市販品の牛乳やカフェオレよりも効率よく、大量に溶かすことができる。もちろん、人体には完全に無害だ。私はまず、ゼリーを胃の限界ギリギリまでドカ食いして、その後すぐにこのビンの中のドリンク剤にエネルギーを溶かし込んでいく。

ここで重要なのは、ゼリーを消化しきってエネルギーを充填できた後に充填するのではなく……まだ消化・吸収が終わっていない時からエネルギーを充填しようとし続ける。吸収出来たら、片っ端から注ぎ込む形にする。

これによつて、食べてから消化・吸収が終わって『エネルギー』に変わるまでの時間の短縮をめざす、というものだ。必要にせつつかれ、引っ張られて、体というか胃腸の機能が、素早く消化・吸収を済ませられるように強化される形にするのが狙いである。

体育祭の時、エネルギーを使いすぎて、その後の補充も間に合わず……爆豪戦でエネルギー欠乏を引き起こしてしまったことからわかる通り、私にとっては『エネルギーを蓄えておく』ことが至上命題なのだ。

しかし、いつもそう上手くいくわけではない。それこそまさに、体育祭の時みたいに。

どうしても残量が少なくなってしまう時というのは来る。そうなった時、素早く必要なカロリーを補給することができれば、すぐに戦闘に戻ることや、味方の回復を行うこともできる。そのための特訓というわけだ。

エネルギーを切らさないように。切らしたとしても、即座に回復できるように、と。

そして、もう想像はついていると思うけども……私が修行の過程でエネルギーを充填したドリンク剤は、そのまま栄養ドリンク、ないし回復アイテムとして、今あちこちでトレーニングを続けている、A組、B組の面々の体力回復のために有効利用されるとのこと。

まあ、ただ作ってそのままじゃもったいないからね。合理的だ。

それに私がエネルギーを注いだ『回復アイテム』は、飲んだら即座に体力に変換されて回復するからな。ぶっ続けで『個性』伸ばしの訓練に取り組めるわけだ。

まあ……効率的に修行に取り組めるのはともかく、疲れても回復して即修行に戻ることになるローテーションに置かれることが、果たして当人たちにとって幸せかどうかは……人によるだろうけども……。まあ。それはいい。私は私の修行をするだけだ。

それから私は、エネルギーの過剰充填で痛む体が回復するまでの間、誰が名付けたんだかわからない『トワビタンE』を作り続け……およそ1時間半ほどかけて、用意されたビン全てに『エネルギー』を注ぎ、回復アイテムを作り終えた。

その頃にはちょうど私の体も回復していたので、また私も午前中と同じ筋トレに戻る。

ただし、今度やるのは前までと同じ『そり引き』ではなく……

「ちわー、三河屋でーっす……」

「……栄陽院？ 何してんのお前？」

「スルーかこの野郎。……栄養ドリンクの宅配だよ。ほれ、コレ飲んで頑張れ」

と、汗だくになって捕縛布の訓練をしている心操に、担いでいる箱から取り出した『トワビタンE』を2本渡す。

1本は心操に、もう1本は……そこでうずくまってお腹を押さえている青山の分だ。

確か、青山の個性の『ネビルレーザー』……1秒以上連続で射出すると腹壊すんだっけ？ 麗日のそれに通ずる扱いづらさだな……使いきすぎた後に起こるであろう悲劇も含めて。

「ありがと……コレ飲んで大丈夫なのか？」

「一応きちんと人体には無害だって聞いている。私はただ『エネルギー』を溶かし込んだだけだからそれ以上は知らん……もし腹壊したら文句は相澤先生に言え」

ちよつと不安そうにしながらも、ぱきゅつ、とふたを開けてドリリンクを飲み干す心操。青山も、まだちよつと苦しそうにしつつ、それに続く。

もともと小さいビンで、内容量も多くないので、すぐに全部飲んで……驚いた表情に。

「……すごいな、ホントにすぐに回復するんだな。手足の痛みなんかは取れないみたいだが」

『疲労』には効くけど、体の大なり小なりの『損傷』には効きが悪いからな……でも多少回復が早まる効果はあるから、それで納得してくれ」

「……整腸作用☆、とかは？」

「……さー……多分ないと思う」

すまん、青山。その辺は自力でというか、『個性伸ばし』の課題だろうから、頑張ってくれ。

「しかし、心操はトレーニングしてるの『個性』じゃないんだな？」

「俺の『個性』は特殊すぎるからな……鍛えて強化できるようなものじゃない。鍛えらるとすれば、それを扱う俺のスキルや発想力の方だし……そういうのはどうしても一朝一夕に鍛えられるもんじゃない。だからこの合宿では、併用して戦えるように全体の底上げをするそうだ」

「それでその布の訓練か……」

「まあ、『個性』に関しても何もしないわけじゃなく……どっちかという座学とかメインで応用力を鍛える方向だそうだ。後は、まだできてないけど……サポートアイテムでいい感じのを作れそうだからって、雄英の方で研究してくれてるらしい。ところで栄陽院、聞いていいか？」

「？ 何？」

と、体に染み渡ったエネルギーのおかげで疲れが取れ、呼吸もだいぶ落ち着いてきた心操は、汗を拭きながら……私が背中に担いでいる背負子しよごこを指さして言った。

「それ、ただの背負子じゃないよな？ 滅茶苦茶重そうに見えるんだが……金属製か？」

「そんな生易しいもんじゃねーよ……100kgや200kgじゃないんだぞコレの重量……コレ使って私、午後ずっと配達のために歩き回ってんだよ」

今更になるかもだが、私は今、さつき作った『トワビタミンE』……回復アイテムのドリンク剤を、あちこちでトレーニングしている同級生たちに配って歩いている。

マンダレイから『テレパス』で指示が来るのだ。次はどこそこにいる誰のところに行つて、栄養ドリンク何本届けてくれ、つて。

その際に使っているのが、この特別製のかい背負子なんだが……さつきまで私が引つ張つてたそりに乗せてた『超圧縮おもり』が大量に埋め込まれている特別製である。

当然ながら、午前中と同じように『限界突破』で体を強化しないと歩くことはおろか、持ちあがりもしないので……まあ、そういうことだ。

この背負子に、作った栄養ドリンク全部と、栄養補給用のゼリーを入れて（こつちはまた定期的に飯田が補充してくれる）歩き回っている。ずっと。

……きつつい。

けどコレ、色んな人の訓練風景を見ることになるので……それが気晴らしにはなる。

熱湯に手のひらをつけて汗線を広げて爆破の威力を増す試みを続けている爆豪。

激痛や出血に耐えて個性を使い続け、上限を上げようとしている瀬呂や峰田。

走り続け……時々私にゼリーを届けてくれる飯田。燃料であるオレンジジュースの代わりにもなるので、受け取ると同時に飲み干して

また走っていった。

午前中と同じく、ギプスをつけた状態でひたすら『大拳』でサンドバッグを殴っている拳藤。

バンドラズ・アクターが用意した様々なモンスター達を相手に戦い続けている鎌切。

金属の体自体の強度を上げるために、竈に入って自分を熱している鉄哲。……赤熱して全身真っ赤だな……冷めてから飲めよ。ビン割れるぞ。

その他、虎さんのところでブーツキャンプやりつつ、適宜自分専用の訓練もやっている、切島、尾白、穴田、回原……etc。

皆、頑張ってるなあ……

そして、最後は……

「よつす、緑谷……お疲れ。今休憩中？」

「あ、栄陽院さん……お疲れ様。えっと……ウエイトトレーニングか何か？」

「まーそんなもん。あと、回復アイテムの宅配」

「宅配……あー、そういうこと」

余程ハードなトレーニングをこなしていたんだろう。木に背中を預けて座って休んでいる緑谷のところにたどり着いた。ちょうど体力を使い果たして休憩中だったようだ。

なら、タイミング的にはジャストだな。

さて、ここで普通なら、他と同じようにドリンクを渡して終わりなわけだが……

「それじゃあ、僕も貰えるかな？ それ……えーと、なんて言うか……」

「あー、悪い緑谷。ちよつと緑谷の場合は事情が違ってさ……母さんから、直接『エネルギー』を渡すように言われてるんだ」

「え、そうなの？ 何で？」

「理由は聞いてない。ただ、私の訓練に関わるから……とかで」

ここ来る前、またマンダレイから指示が入って、緑谷にドリンクを届けるように、その居場所と共に『テレパス』が来たんだが……その

直後、母さんが直接やってきて、そう指示されたのだ。

緑谷に対してだけは、ドリンクじゃなくて、私が直接エネルギーを注ぎ、つて。『オール・フォー・ユー』の強化に関わることだから、つて。

……あの時、母さんはわざわざ『オール・フォー・ユー』という言い方を使った。ということは、やはり何か意味があつてそういう指示を出したんだろう。私が『主』としていて緑谷に対してだけ、そういう方法を取るように指示したつてことは……そう言うことのはずだ。

理由は教えてくれなかったが、まあ、別に疑うことでもないし、不都合もない。『ゼリー』食べたからエネルギー自体はたくさん貯蓄あるし、何も問題ない。

あと、私自身もそつちの方が色々嬉しい。

と、いうわけで……

「それじゃ、失礼して」

「あ、うん……」

私は、緑谷の傍で立膝をついてしゃがみ込むと……緑谷の頭をぎゅつと胸元に引き寄せて抱きしめ……エネルギーを注ぎ込む。

必然的に、緑谷の頭部は今、私の胸を変形させてそこに埋もれる形になっている。感触もぼつちり伝わってるだろう……汗のにおいもかな。ちよつと恥ずかしい。

緑谷は、ちよつと緊張してびくつと反応したようだったけど、特に抵抗もせずにそのまま抱きしめられて……エネルギーが体に満ちていき、楽になっていくのに合わせて、呼吸を整えていた。

まあ、もつとすごいことやってるからな。このくらいは……人目があるならともかく、平気つてことだろう。うん……もういいな。

十分エネルギーを注ぎこんだと判断した私は、そのまま緑谷の頭を放そうとした……その時。

——どくん

(……………)

突如、私の胸の奥から……心臓の鼓動のような、しかし微妙に何か違うような……得体のしれない何かが感じられた。え、何だ今の？

この感触……前にも覚えが……そう、たしか……

「……えっと、栄陽院さん？」

「え？ あ、ああごめん緑谷、ボーっとしてた。ほら、終わったよ」

「あ、うん、ありがと……」

そう誤魔化しつつ、記憶の糸を手繰り寄せる……あ、思い出した。

そうだ。入学当初、まだよく知らないうちに……緑谷を見ることに感じてたアレに似てるんだ。

入試の会場で、初めて緑谷を見た時。

『個性把握テスト』で、緑谷がボールを投げて大記録を出して見せた時。

戦闘訓練の場で、限られた手札で緑谷が爆豪と戦い、勝ちをもぎ取った時。

それらの時に感じた、私の中における『オール・フォー・ユー』の胎動……それと同じ何かが、私の中で起ころうとしている……？

『主』も定まって、身も心も捧げた今になって、一体なぜ……いや、あるいは……

(今だからこそ、か……？)

第116話 2日目、終了

「さあ、昨日言ったね!? 世話焼くのは今日だけだつて!」

「己で食う飯くらい己で作れ! カレー!」

らしいです。

現在、合宿2日目の夕方。

限界突破でトレーニング頑張りまくった末に、食事が用意されていないと知った時の喪失感・絶望感よ……いや、まあ、こういう所もスパルタってことなんだろうけどさ。

あつちでは飯田が毎度おなじみ『確かに、災害時などに、疲弊した人達の心と腹を満たすのもヒーローの仕事……』って勝手に納得してやる気出しとるし。

……まあ、間違つてるとは言わないが、その背後で『飯田便利』とか思つてそんな相澤先生の視線がその……うん。

ともあれまあ、そういう仕様なら落ち込んでても仕方ない。きつちり作るとしよう。

ピクシーボブとマンダレイが用意してくれていた食材は、何十人分……下手したら百人分以上になるんじゃないかってくらい大量だった。大きな編み籠に山盛りのジャガイモ、ニンジン、タマネギ……肉は大きな塊で……豚肉か。

カレールーも何箱も積まれてるし、鍋その他調理器具もめっちゃいっぱいある。

けどまあ、育ち盛りの高校生……しかも、昼間動きまくってへトへトで腹も減つてる42人分の食料だもんな。

食べる奴は2杯も3杯もお代わりするだろうし……つか私がするし……体が大きい生徒もいるからな。これでも足りるかどうかは不安なくらいかも。

効率を考えて、A組とB組（あと心操と青山も）合同で協力して作ることになったんだが……その際、何班かに分かれて作業をしていく

ことになった。

白米のご飯、飯盒で炊いて作るってなった時は驚いたけど、そのへのノウハウは爆豪が知ってたので、任せることに。

登山が趣味らしく、その延長上で自炊とか普通にできるらしいんだよな。意外。けど納得。

男子何名かと共に、炊飯係を担当してくれることになった。

カレーを作る班には、メンバーの中でも料理慣れしている私や砂藤、蛙吹や尾白、塩崎や小森が主にひっぱっていく感じになった。

私と砂藤は、お弁当交換の場で知られてるから言わずもがなだ。特に私は、単に自分の食欲ゆえだが、一度に大量の食事を作るのに慣れる。

塩崎は淑女のたしなみとして、小森は後々を見据えて自発的に料理は勉強してるらしい。

蛙吹は家で弟や妹の面倒を見てるから、家事の一環として慣れる。尾白は料理というより、こういう大人数で合宿とかの食事を作るのに慣れてるそう。武術やってたんだもんな、そういう経験もあるってことか。

こちらの班にも何名か手伝う人を選抜し、残りは色々な雑務を担当してもらうことに。食器の用意とか、ゴミ捨てとか、使い終わった調理器具を先に洗ったりとか。

こういうのを全部後回しにせず、こまめにやっておくことが、後々の処理を楽にする秘訣だ。

そういうわけでまずは、野菜を洗って切って、って感じになるわけだが……量が量だ、結構大変である。

幸いピーラーとかは用意されてるので、全部包丁でやらなきゃいけないってなことにはならなかったけども……それでも手間だな。

「砂藤と栄陽院は流石に手馴れてるな……」

「うん、そうか？ まあ、普段から色々やってるからな……慣れた、慣れ」

尾白が感心する横で、手早くジャガイモの皮をむいている砂藤。

2人とも同じ作業をやってるんだが、その手際の差は歴然である。

指や手首の細かい動きでシウルシウルとジャガイモの皮をむく砂藤は、尾白が1個やる間に2〜3個は終わらせるうえ、皮と一緒に削れてしまう身も最小限だ。プロレスラーのような体格に似合わぬ繊細さが光る。

まあ、体格と作業のギャップは私も似たようなもんだが。

塩崎と一緒にニンジンを担当させてもらってるんだが、ピーラーでしゃしゃつと皮をむくだけの簡単なお仕事である。切る部分は流れ作業的に別の人……後の方にスタンバってくれてる麗日とかに任せてるし。

なお、タマネギの担当はじゃんけんで負けた蛙吹と小森である。

涙と戦いながらの作業になるかと思われたが、八百万がゴーグルを作ってくれたので、それを装備することで事なきを得たようだ。よかったよかった。

それらの作業で一番早く終わった私達ニンジンチームが肉の下ごしらえも終えて、全部食材が揃ったら火にかけて少し炒める。

量が量なので、何個もフライパン使って、分担してやることになるんだが……中華鍋があったので、それ使って私1人で一度に大量に炒めた。周りで見てる面々から『おー』って歓声が上がった。

そのまま順調に進み、後はいくつもの大鍋でカレーを煮込むだけ、という所まで来たんだが……その煮込みが終わるのにも、あと向こうの爆豪チームのご飯が炊きあがるのにも、まだ少し時間が必要そうだ。

後片付けは、前もって分業していた片づけチームが既にやってきているので、手持ち無沙汰になってしまった。

……普通に大人しく待っててもいいんだけど……

「相澤先生……あの、怒らないで聞いて欲しいんですけど」

「内容によるが……何だ、栄陽院？」

「その……ですね。カレーとか、まあ、いかにもキャンプとか合宿の定番っぽくて、美味しいおいしいと思うんですけど……流石にそれ一品とかじゃ寂しい気がすると言うか……おかずとかトッピング、オプショ

ンで付けられたりしません？」

「二応学校行事の一環なんだ、そんな至れり尽くせりな感じになるわけないだろうが」

「ですよー……流石に無理か。」

「まあ、量が足りてなくて困るとかならその限りじゃないが……そういうわけじゃないんだろ？」

「ん〜……まあ、こっだけ作りましたんで、足りないとか、食えなくて飢えるってことはないでしょう。……物足りない、なら随所で発生するかもしれません」

「コレは本当だ。私だけじゃなくて……昼間あんなだけ動いたわけだから、さぞかし皆腹を減らしてるだろうしな。男子連中、特に大柄な面々は、がつりお代わりもするだろう。この辺はさつきも懸念したが。」

「それでもまあ、1人あたり1〜2杯は確実にいきわたるだろうし、足りないってことはあるまい。」

「ま、もともと強化合宿の体だったんだし、仕方ないと思うことにするか……と、私が思ったところだったんだが、」

「あ、もしあるものでよければうちの備蓄から提供しよつか？」

「と、マンダレイからそんな言葉が。え、マジですか？」

「思わず、相澤先生と同時に振り向く。」

「あーいえマンダレイ、お世話になっておいて、そこまでしていただくわけには……」

「いいのいいの。どっちみち足が早くて、早めに出さなくちゃいけない食材だから。おすそ分けでもらったのはいいけど、多すぎて処分に困ってたのよね」

「捨てるのももったいないし、とのこと。」

「ワイプシが面倒を見ることになっていたキャンプ行事で、例の事件の影響か、中止になってしまったものがあるらしい。それ関連で、急に取りやめたお詫びってことで、おすそ分けしてもらった食材が余ってるんだとか。」

「そりゃ、大人数用の食材もらったらなあ……イベントか何かくらい」

でしか使える場面ないだろうし。

肉とかは燻製なり何なりに加工して保存するつもりだったらしいが、野菜とか、燻製に向かない肉はどうしようって話になってたらしい。

なので、むしろ都合だそうだ。

「もちろん、食材は出すけど、作るのはあなた達だけだね？　それでもいいなら、保管してあるところに案内するわよ？」

それを聞いて、思わず期待した視線を向ける私。

向けられた相澤先生は、ハア、とため息をついて、

「……ま、そういうことなら問題ないか。すいません、マンダレイ、お気遣いいただきまして」

「いいわよこれくらい。私達も助かるし。1人で作るの？」

「いえ、ノって来そうなの数人連れてきます。ちよつと待っててくださいマンダレイ！」

相澤先生のお許しも出たので、マンダレイにそう断って、仕事が終わって休んでる連中のところに行く。

「おーい、ちよつといい？　暇してる奴らで、誰かおかず作るのに協力してもらえる？」

「おかず？　え、何、プラス1品とかできんの？」

「マンダレイ……っっていうか、ワイプシが余ってる食材くれるってき。調味料とかも。カレー1品じゃアレだなーと思ってたらご厚意で。どうする？」

「いいなそれ。よし、俺も手伝うわ。他は……」

砂藤がそう言うのと、俺も、私も、と次々名乗りでる。おお、みんなプラス1品がいいか、嬉しいか。よし行くぞ。

「……っつて、あり？　爆豪もくんの？」

「ああ？　飯あと蒸らすだけで暇なんだよ、悪いかボケ」

「いや、悪くないけど……味付けは普通にしてくれよ？　激辛とかでなく」

「わかつとるわ！　ちつ……後付けで調整できるようにすりやいいだろ」

「まあ、それなら……」

そして、カレーとご飯も出来上がり、さあみんなで食べよう、って時になって、

「いただきま……何コレすつご!?!」

「カレーだけじゃない! ハンバーグとかから揚げとかトンカツとか

……何コレ、生卵? ……違う、温泉卵だ!」

「え、うそ、これってアレ? トッピング自由な感じ!?!」

「すげー、豪華じゃん! 誰作ったのコレ……砂藤と栄陽院と、爆豪も? マジで?」

大好評。よかったよかった。

疲れも吹き飛んだかのようなテンションの中、皆大満足で食事を終えた。

うん、エネルギーも補給して、明日からもきっちり頑張れそうではない。

なお、そんだけ追加して作ったにもかかわらず、皆の怒涛のお代わりの結果、肉の一欠片、米の一粒も残らず平らげられた。マジで、ホントに一粒も。びっくりした。

やっぱみんな疲れてるからだろうか、全然入っちゃうもんなんだな。

もちろん、作った私達も、美味しく食べてもらえて満足である。

緑谷の時にもいつも思うけど……いいね、美味しく食べてくれる人の笑顔ってのは。

そしてその日は、そのまま平和に……何事もなく終わった。

腹も膨れ、お風呂にも入り……あとその後ちよつと、女子部屋にお菓子とか持ち寄って女子会みたいなのしたわけだが……それ以外は、特に何もなし。

疲労感に包まれて、その日を終えた。

なお、女子会では、A組が誇る恋愛番長こと芦戸&葉隠（本人達が恋愛経験があるわけではない）により、コイバナトークが実施された

ものの……私は現状、緑谷との関係は、緑谷自身の意向もあり、当分は秘密にしていく予定であるので、そこでは何も言わなかった。

その結果、『花の女子高生がこんだけそろって恋愛話ゼロなの!』と、期待を外されて芦戸と葉隠が絶望したりしていたものの、自分達もそうである以上、強くは言えず。

結局、『男子で言えば誰がかっこいいか』とか、その他、他愛もない雑談に終始した。それでも十分楽しかったし、皆笑顔になってたけどな。

……ただ、その女子会に参加していた者達のうち……麗日、蛙吹、取陰、塩崎、そして私の5人の間には……表面上は何一つ変わらずとも……気のせいであれば、火花が散っていたような気が……しなくもなかった。

……こないだ取陰が言ってた通り、口には出さなくとも、皆、多少なり悟ってるのかもしれないな……私が、緑谷と何かあったって。

そして、その上で……誰一人諦めてないと。うん……引き続き油断できないわけね。

今はおそらく、『当事者』である私ら以外の目もあるから何も言わないだろうが……こないだみたいに温泉で、内輪だけになったら、どうなんだろうね……？

……これが、ラブコメ漫画の学校行事とかなら、誰かヒロインと一歩関係が進むようなイベントが起こったり、もちよつと過激な奴なら、『間違い』が起こったりするのもかもしれない。

けど、さすがにここは雄英ヒーロー科。皆でお泊りという場で解放感に包まれているとはいえ……そこまでやる者はいないだろう。私もしないし。

つか、特に私の場合……先生には知られてるからな、緑谷との関係を。

どこまで進んでるかとはともかく、追試のテスト会場で告白とかされちゃったから。うん……そら仕方ないわ。そら知られるわ。秘密にしてくれるだけ御の字だわ。

……まあ、それはもういい。

恐らく、この合宿中にそういうイベントが起こることは……ないんだろうな。決定的なチャンスとか、あるいは正真正銘の不慮の事故でもない限り。

なんなら私らの場合、そういう色気のあるハプニングよりも、もつと物騒な……『敵』関連のハプニングとかにしようつちゅう見舞われるからな。ひよつとしたら、この合宿中にも……いや、さすがにないか。

やめよう、こんなところでまでそんなこと考えるの……気が滅入る。日程は、あと5日間。ひとまずこの期間は、色恋は（なるべく）忘れて、強くなることに没頭することにしよう。今後のためにもね。そんなことを思いながら、布団で2日目の夜、眠りについて……

また、夢を見た。

立ちはだかる『何か』。

『何か』に立ち向かう緑谷。

せめぎ合う、黒と緑の光。

徐々に追い込まれていく緑谷。その時、私の体から光が立ち上り……あるいは、私の体が光に変わり……緑谷に吸い込まれていき、彼の光と響き合う。

生まれる、いつそう大きな緑色の輝き。それに伴って、心地よい満足感が生まれ……徐々に私の意識は薄れていく。

しかし、一点だけ、前に見た時と違う点があった。

緑谷の体に、私の光が吸い込まれた時……何かを感じた。

それは、気配だった。緑谷でも、彼が立ち向かっている巨悪（仮）でもない、誰かの気配。

それも、1人や2人じゃない……緑谷と繋がった瞬間、その存在が私に流れ込んできた。

しかし、嫌な感じじゃなく……まるで、それらの気配は、私達を……というか、恐らくは緑谷をだと思いが……見守っているような、支えているような感じで……

しかし、結局また……それが何なのかわからないまま、私の意識は

……消えた。

☆☆☆

同時刻……男子部屋。

(何だ……今の……？ 夢……？)

息を荒げ、寝汗……あるいは冷汗で、顔や背中をぐっしよりにして、緑谷は起き上がっていた。

ゆっくり、むくつと起きたのではない。跳ね起きた、とでも言えそうな勢いで、がばつと上体を突然起こしたのだ。

幸い、それで他の男子達の迷惑になつたり、起きる者がいるわけではなかったが……そんなことに気をやる余裕がないほどに、緑谷は困惑していた。

(何だ、今の夢……妙にリアルな……いや、リアルさはないけど、なんか、夢って感じがしなかった……生々しい？ どう言えばいいんだろう……。 栄陽院さんが……彼女の力が、僕の中に……僕と1つに……？ いや、違う……あれは、1つになつたつていうより……同調した……？ しかもその瞬間、歴代の人達の気配が……一体、あれは、あの夢は……ダメだ、結局何もわからない)

ふと見ると、壁に掛けられた時計が示す時間は……まだ夜中である。

まあ、窓からわずかな光も差し込んできていないのだから、それは当然だが。

(……ひとまず、寝よう……。 気になるけど……寝不足にでもなつたら、明日に差し支える)

考えても答えは出ない。なら、考えても仕方ない。

その時はまず諦めて、緑谷は……再び布団に横になり、目を閉じた。その数分後、まだ体に残る疲労感、速やかに緑谷を眠りにつかせた。

幸か不幸か……今度は、夢は見なかった。

第117話 夢と『エネルギー』

S i d e . 緑谷出久

合宿も今日で3日目。

昨日と同様、各自の『個性』に見合った『個性伸ばし』の訓練を続ける僕らヒーロー科、及び編入有力コンビの2人。

ガッツリ食べて、ぐっすり寝て、皆元氣いっぱい朝を迎えることができたからだろう、進捗はすこぶる順調である……と、思う。少なくとも、僕の見える範囲では。

かつちゃんはどうぞん爆発の威力や、瞬間的に発揮できる火力を上げてるし……飯田君も加速力やスタミナが徐々に伸びてきている。

切島君は防御力が、砂藤くんや上鳴君は『個性』の許容量が伸びていつている。尾白君や梅雨ちゃんも、『個性』由来の器官……尻尾や足、ベロを使った動きが洗練されてきている。

なるほど……ホントに『使えば使うほど鍛えられる』ってわけなんだな……

そんな皆に比べて僕は……そこまで劇的な変化は起こっていないので、ちよつとこのままでいいのかな……なんて焦ったりしているんだけど、地道な積み重ねが力になる、っていうのもまた事実。『デウス・ロ・ウルト』で、それを僕は痛感している。

「と、いうより……まさにその『デウス・ロ・ウルト』があるからこそ、君の能力の伸びは緩やかになっているんですけどね？」

と、僕の手足に新しい『ハードラバースーツ』を装着させながら、ラバーエンプレスは言う。

う……また一層動きづらくなってるな。力と動き、両方に気を配って……しかし、意識しすぎないようにして……効率的に体を動かさない。

しかし、今、先生が言ったことって……？

「？ どういう意味ですか、今の？」

「言葉通りですよ。緑谷君と永久ちゃんは、大なり小なり、『デウス・ロ・ウルト』で、夏休み以前から『個性』を強化してきましたからね。

未熟なところから目に見えて強化されるなんていう段階は、とつくの昔に通り過ぎてます。今は徐々に、少しずつ、確実に積み重ねていく段階です」

なるほど……最初に相澤先生が言ってたみたいに、僕らのほとんどは『個性そのものは大して成長していない』……だからこそ、効率的に訓練を積み始めれば、最初のうちは、目に見えるスピードで成果が現れる例も多い。さっき上げた人達みたいに。

でも、僕や栄陽院さんはそのへんのステージはとつくに通り過ぎてるから、実感しづらいと。

「もつとも、まだ全く、あるいはほとんど手を付けていない『強化方針』があつて、そつちに進むことができればまた違ってくるんでしょようけどね。永久ちゃんみたいに」

「栄陽院さん？ たしか……消化吸収のスピードを上げてるんでしたっけ？」

「普段、実技方面の能力を鍛えることに比重を置いてると、どうしてもそういう点の強化には手が回りませんからね。それに対して、緑谷君のトレーニングはひたすら反復・ひたすら経験だから、似たような感じになつちやつて、成長が緩やかになるのは仕方ないかもしれない」

シンプルで、鍛え方が自然と定まつてきてるからこそ、か。

僕の『ハードドライバーーツ』を仕立て上げた後、ラバー先生はまた別な生徒のところへ行き……僕は、パンドラズ・アクターから指示されたメニューをこなし続ける。

その時々でメニューは違う。パンドラズ・アクターが出したモンスターとのスパリングの時もあれば、飯田君や梅雨ちゃんみたいに、アスレチックな地形と走ったり跳び回る時もある。

単純な『身体能力』つてのは、シンプルなだけに、使い方や発想次第でいくらでも応用が利くようになるから、色々なやり方になるのは道理でもあるか……この合宿は、ただ単純に戦闘能力を伸ばすだけじゃなく、『個性』そのものを、ひいてはそれによってできること自体を伸ばす、あるいは増やすことが目的だからな。

なら、もつともつと頑張らないと……って思ってる傍から、体力がもうそろそろつきそうになってフラツと来て……

——ぼふっ

「よいしょっと。いいタイミングだったみたいだな、緑谷」

「わっ!? え、栄陽院さんか……びつくりした」

その瞬間、いつの間にか来ていた栄陽院さんに抱き留められて……すぐさま『エネルギー』を注がれて、体力が回復していく。

抱きしめられている間の感触がまた……うん、その……癒されるし。

少し前までの僕なら、赤くなってドキドキして、休憩どころじゃなかったんだろうけど、今の僕は、むしろ感触やら何やらを堪能しながら、リラックスしてこの時間を過ごせる。

それこそ、彼女とならこれ以上の………ん?

「………あれ? 栄陽院さん………なんか、このエネルギー………いつもと違う?」

「え? 違う、って……いや、別に何も違うところなんかないけど……普通に、いつもと同じ感じに、同じ『エネルギー』を注いでるだけなんだけど………何か変だったか?」

と、きよとんとして言ってくる栄陽院さんだけど……あれ、なら僕の気のせいかな?

なんか、今こうして注いでもらってる『エネルギー』は………体力が回復するのとかは同じように感じてるんだけど………昨日と、ちよつと違う気がするんだけど。

上手く言えないけど、昨日よりもよくなじむというか………違和感なくすつと受け入れられるというか………

もともと栄陽院さんの『エネルギー』は、その即効性は無類といていいものがある。手渡しにせよ『回復アイテム』経由にせよ、摂取した端から体力を回復させるから。

今感じてるのもそれに違いはないんだけど………昨日までよりも、より僕の体に合っているというか、すごく思い通りに動かせそう………違和感がない………いやむしろ、馴染みすぎて違和感がある………だめ

だ、ホントに何ていったらいいか分かんない。

自分の貧弱な語彙力を恨めしんでいると、今度は栄陽院さんがふと思いついたように、

「……ひよつとして緑谷、注がれたエネルギーを認識しやすいとか、思った通りに扱いやすい、みたいな感じになってる？」

それを聞いてはつとした。

それだ、まさにそんな感じだ！

注ぎ込まれたエネルギーが即座に体力その他の回復につながって、僕のものになるのは今までと同じ。けどその後、より長く、より細かくその存在を、流動を感じ取れる。

十分に体力が回復したところで、栄陽院さんから放してもらった僕は、試しにその状態で『フルカウル』を発動させてみて……より正確に今の状態を把握できた。

今なら、上手いこと言葉にできる気がする。

僕の体に注がれ、僕のものになった『エネルギー』……それが、どこにどれだけの量流れているかがわかりやすい。それだけじゃなく、自在に位置・量その他を変えられる気がする。

僕の今の『ワン・フォー・オール』の許容上限は、おおよそ30〜35%だ。このくらいなら、常に全身に、安定して無理なく力を張り巡らすことができる。

少し前までもうちよつと少なかったんだけど……栄陽院さんを『僕のもの』にして、自分に自信がついた分、なのかな。現金なもんだけど……そういう成長って、フィクションじゃなく現実にもあるものなんだな。

ただ、『ワーキングホリデー』での経験上、たいていの『敵』を相手取るのには、ここまでの強化を常時やっている必要はない。もつと少なく……15〜20%程度で十分足りる。

相手を制圧できるだけの身体能力や、障害物を排除する破壊力はもちろん、20%力を発揮できれば、遠距離技である『エアフォース』も使えるし、ごく短時間なら『黒鞭』も使える。

そして、今のこの感覚なら、その辺の調整が……

「……右腕30%、左腕25%、両足20%……！」

自分の中にエネルギーが流れているのを、そしてその流れている量を各部分で変えるようにイメージ……口にした言葉通りに、部位ごとの強化度合いを変える。

右腕に最も力強く……左腕はそれより少し力を抜いて、両足は更に少なく……余裕をもって。

……そこから……

「右腕15%、左腕20%、両足35%……！」

イメージと共に強化度合いを変更……やっぱり！

いつもよりイメージしやすいし、素早く力の込め具合を変えられた！ 前よりもずっとスムーズに、力を流動させられる！

きちんと狙った通りに力が変わっている証拠に……今の状態で、両手で『エアフォース』を放ってみる。

15%しか強化していない右腕では、風圧は出るものの、すぐに拡散してしまつて、近距離に暴風ないし衝撃波を起こすのがせいぜいだ。

対して、20%強化している左腕からは、結構な距離まで届く衝撃波が出た。

もつとも、どちらも発目さん考案のグローブをつけないで撃つてるから、その状態より収束や飛距離は甘いけど……

さらにその後、体の各部分でそれぞれ違った強化度合いで『ワン・フォー・オール』を発動し、気のせいでも何でもなく、その切り替え・流動が素早くできるようになつていくこと、わかりやすく認識できていることを確認した。

彼女に……栄陽院さんにエネルギーを注いでもらつてからだ。それが目印になるみたいに、自分の体の『力』をより自在に動かせるようになってる。

いや、この感じなら……慣れていけば、僕自身の力を同じようにきちんと認識できて、素早く動かせるようになるかも……何回か練習は必要だろうから、都度、栄陽院さんに協力してもらふ必要はあるかもだけど。

そう話したら……いやまあ、彼女のことだ、返事なんて決まってるな。

「任せなあって緑谷、いつでも好きなだけ、喜んで練習付き合うからさ！」

にかっ、と笑う栄陽院さん。

彼女の協力があれば、このエネルギー把握と操作の能力を完全にものにできる。そうすれば……僕はもっと強くなれる。

……けど、何でいきなりこんな風に、彼女の『エネルギー』を介して、自分の力を正確に認識したり、操作できるようになったんだろう？ 今まではそんなことなかったのに。

彼女の『個性伸ばし』の影響かな？ 『個性』が成長したおかげで、今までできなかったことができるようになったとか、今までとは違う使い方ができるようになったとか……

……それとも……

（『個性伸ばし』とはまた別な部分で、彼女の『個性』に異変が起きてる……とか？）

彼女が今やってる訓練は、『強化上限の底上げ』と『消化吸収のスピードアップ』の2つだ。どちらも、今回の異変につながりそうなものじゃない……

加えて、まるで僕のサポートをするのに都合よく設定されたかのような、今回のこの能力……

そして、これは関係あるかどうかわからないというか、そもそも思い付きのようなものだけ……昨日の夜の、あの夢。

栄陽院さんの力が……というより、まるで栄陽院さん自身が僕の手になって、さらに大きな力を手にするかのような、あの……力強く、頼もしく……けど、どこか不吉な夢。

これら全ては……無関係なことか？ 一度に起こったのは……偶然か？

……偶然、と考えるのは苦しいのかも……何せ、ナイトアイの話の通りなら、僕の『ワン・フォー・オール』と、栄陽院さんの『オール・フォー・ユー』は、原点を同じくする力だ。

かつて『奉生一族』に発現したという、まだ名もなき『力をストツクする』個性。そこから派生して誕生し、異なる形で育てられてきた2つの力。

以前の夢の中で、初代は『2つに分かれた道が、1つに戻ろうとしている』という趣旨のことを言っていた……。

それが、僕と栄陽院さんの力が合わさって、巨悪を倒す力になる……という意味ならいい。何も問題ないし、そうであってほしい。

けど、昨日見たあの夢はまるで……栄陽院さん自身が僕の『力』になるような暗喩に思えた気がして……少し、怖い。

どうしてか、たかが夢、と切って捨てられない。

もしかしたらこの異変は、それに関係があるものなんじゃないか……だとしたらもしかして、栄陽院さんの力は……

(僕のために……あるいは、僕の成長や、必要に合わせて……形を変えている、みたいな……?)

午前中の訓練は、その栄陽院さんの『エネルギー』により、思っていたよりもずっと進んだ感覚を手にすることができた。

その代わりに、色々と気になることもできてしまったけど……そのうち、解決しようと思う。

……それに……前々から思ってたんだけど、僕、彼女に対して……このままでいいのかな？

『ご主人様』云々のことじゃない。

僕の『個性』……オールマイトから受け継いだ『ワン・フォー・オール』のことについてだ。

このことについて、彼女に秘密にしておいたままでいいのかな……って、最近、思う。

もちろん、入学直後にオールマイトにきつく言われたことは、今もきちんと覚えてる。

この『個性』の存在はトップシークレット。気軽に誰かに話しているものじゃない。

理由は大きく2つ。

1つは、オールマイトという『平和の象徴』が、ナチユラルボーンヒーローであるという世間の常識に触れてしまう、その認識を揺るがしてしまう事柄であるから、その露見を防ぐため。

そしてもう1つ。この『個性』の存在を知る者を、強大な悪との戦いに巻き込んでしまうことを防ぐためだ。

『ワン・フォー・オール』の継承者は、いずれ巨悪と戦う宿命を負う。その時、この力の秘密を知り、積極的に関わってきた者は、その戦いに、何らかの形で巻き込まれてしまうかもしれない……現にオールマイトは、それを防ぐために、親友であるデヴィッド博士や、教師としての同僚である相澤先生達にも内緒にしていた。

この『個性』について知っているのは……根津校長、リカバリーガール、グラントリノ、警察の塚内さん、サー・ナイトアイ、そして僕と……この間話した、デヴィッド博士だけだ。

少なくとも、僕が知っている限りは、だけだ。

情報流出の懸念を少しでも減らすため、この秘密は誰にも話してはいけない。

……その考え方からすれば、栄陽院さんにも……例え、彼女が僕を『ご主人様』として一生ついてきてくれる意思を持っていても、どれだけ彼女にお世話になっている立場だとしても……話すわけにはいかない。

けど……何だか最近、『個性』関連でも彼女にとって、僕の『ワン・フォー・オール』の成長が……他人事じゃなくなってるような気がするんだよなあ。

変な夢はともかく——いや、アレも気になるけど——彼女の個性、その性質が、僕に都合のいい形に変わっている気がする。午前中のあの一件で、彼女に注がれたエネルギーは、より僕が『ワン・フォー・オール』を使いこなすためのきっかけになったわけだし。

もつとも、もちろん、その場限りの真正正銘の偶然だったことも考えられるけど……そうじゃない気がするんだよなあ……。

まあ、そのあたりは……この合宿が終わった後、オールマイトやサー・ナイトアイに改めて相談しよう。

どう結論付けるにせよ、放置していい問題じゃないことは確かだし……この合宿期間中に、さらに何か異変があれば……それも検討する材料になるだろうから。

もちろん、それが僕の力になってくれるようなものであり、いつか『巨悪』に立ち向かう力になってくれるのであれば……それは、喜ばしい。

けど、もしも……そこに何か……上手く言えないけど、許容しきれないような代償、あるいは犠牲がついてくるようなら……僕は……

第118話 合宿、4日目、折り返し

Side・緑谷出久

本日、合宿4日目。

一週間ある日程のうちの……折り返し地点である。

『個性伸ばし』の訓練もかなり順調に進んでいる。

普段やっている、技量や体力づくりを重要視した訓練よりも、『個性』そのものの成長にしぼって行っているだけあり、成長をより実感できるってのがモチベーションにつながってるな。

加えて、適度に用意されている息抜きとかも、僕らのコンディションを維持してくれている。

3日目には、2日目同様の豪華な夕食に加え、クラス対抗肝試し大会っていうレクリエーションもあって、皆で楽しめたからね。

夕食に関しては……2日目の夕食、食材だけ提供して、有志が揃ってプラスワンどころじゃない豪華メニューを作ってそれをみんなで平らげ、3日目もいいコンディションで行うことができた。美味しい食事って、やっぱり活力に変わるんだよね。

それがもたらす効果を鑑みてか、先生達、夕食のメニューによる士気向上も利用することにしたらしく……3日目の夕食も、『食材はあるから作りたければ作れ』みたいな感じで、肉じゃがだけでなく、色々なメニューを自力で作って楽しめる形にされていた。

そして今日もそこで腕を振るう、料理得意組。

栄陽院さんや砂藤君を筆頭として、その他腕に覚えのある、多少なり経験のある人達が台所（といってもレンガとかで作った屋外の炊事スペースだけど）に立った。

しかも今日は、昨日はそこにいなかった面々……青山君や麗日さんなんかも加わって、『今日は私も！』とばかりに得意なものを作っていた。

なので、また昨日とは違ったメニューで舌も目も楽しめる食卓になった。

種類は滅茶苦茶だったけどね。皆適当に得意料理作ったから……。

皆で作るメインの料理である肉じゃがに加えて、豚の生姜焼きや肉野菜炒めといった家庭料理。

そこに、スパニッシュオムレツ、ナポリタンスパゲティ、エビシユウマイ、カニチャーパーハン、フレンチトースト、ポトフ、鶏のから揚げ、ホイコーロー……その他色々。

最初ご飯だけだったはずの主食が、パンと麺類までそろってるのに加え……おかずも充実したなあ。和洋中その他ごちゃまぜの、でもどれも美味しい料理ばかりだった。

これらの料理が僕らのエネルギーになり、明日の活力になり……：そしておそらくだけど、明日の料理を作る活力にもなるんだろうな。なんか不思議。

もちろん、今日も残さず食べました。

ちなみにこれらの食材はどうしたのかというと、今日もワイプシの皆さんからの提供……ではなく、雄英の方で手配したそう。

がつつり食べさせた方が効率上がると見たらしい。英断だと思う。それにしたって、昨日の夜か今日になつてから注文してよくこれだけ用意できたな。しかも、こんな山の中に届けてもらって。

と思つてたら、どうやらコレ、アナライジユが……：栄陽院さんのお母さんが何かしたらしい。

彼女、今年の1年生の指導に一役買っている関係者枠であるのに加えて、今回、ワイプシの皆さん以外にここに『講師』として来ている、ラバーやパンドラズ・アクターの紹介ないし手配に関しても一肌脱いでるらしいから、合宿自体のメニューにも色々口とか手も出せるんだって。

例えばだけど、僕らの成長度合いが例年の1年生と同じか、さして違わないようであれば、講師は極端な話、ワイプシの皆さんと相澤先生、ブラドキング先生の合計6人態勢でも大丈夫だったらしい。大人数で動くのは目立つし、追加講師は手配しなかったと思う、とのことだ。

しかし、自分で言うのもなんだが……：今年の1年生は、個人差はあるとはいえ、例年よりかなり今の時点で強化されている。ゆえに、例

年通りのやり方じゃ、この『合宿』の間に力を伸ばしきれない。それは、『合理的でない』。

なので、僕らの成長という目標に最低限必要な面子を行使で揃える必要がある……その段階で、アナライジユの人脈やら何やらを使った。大活躍だな……というか、僕ら知らないところで、随分彼女の世話になってるな。

僕なんか、親子二代にわたって面倒見てもらってる形になるのか……なんか複雑。

ともあれ、そんな感じで、僕らが最も効率的に強くなれるように、全てのスケジュールを随時見直しながら進めているわけだ。食事や、レクリエーションによる気分転換もそれに含まれる。

きついのを歯を食いしばって耐えながら一週間過ごすつても、それはそれで根性やら忍耐力が養われるのかもしれないけど、より伸ばすなら、やる気を高く保った方が効率的だろうしね。

僕らとしても、この合宿が『大変だった』というだけのものに出の中で染まってしまうのは寂しいし、楽しい思い出と充実した修行時間が両立した夏の日々でいられるのはありがたい。

そんなところにも気を配ってくれている先生たちの思いに報いるためにも、残りの日程、全力で頑張らないとな……！

その後の肝試しも、クラス対抗で『個性』を駆使して脅かし合っ……怖いけど楽しい時間を過ごせた。

B組……ガチだったな……

結城さんが『ポルターガイスト』で物を飛ばしてきたり、黒色君が潜んだ黒いものを『支配』でいきなり動かして脅かしてきたり……。

他のネタで脅かされて走って逃げよう、さっさと通り抜けようとしたところで、円場君が作った不可視の『空気凝固』の壁で通れなくて焦ったり。

一瞬目を離れた隙に、小大さんが『サイズ』で縮めて配置してたものをいきなり大きくして、そのせいで一瞬でその場に現れたように見せたり……

あと、来るだろうとは思ってたけど、それでもやっぱり怖かった……取陰さんの『トカゲの尻尾切り』……バラバラ……生首……完全にホラー映画だったよ……

後個人的に一番怖かったのは、最後の最後に待ってた物間君だった。

失禁（リタイア）せずに最後まで来た人に対して、いつもの彼お決まりの彼の憎まれ口がマシンガントークで投げつけられて……けどまあ、これも無事に終わらせることができた結果みたいなものだと思えば、いいかな、とか思つて油断してたところに、それは来る。

作り物で偽装されていた背後の壁を切り裂いて、突如現れる鎌切君。

その刃で切断される物間君の体。宙を舞つてごろんと足元に落ちる、驚いた表情の首や、ぴくぴくと痙攣し続けている手首。飛び散る血しぶき。

驚いて逃げようとした先で道を塞ぐように出てくる、ビーストモードの穴田君。

この、パニック映画のラストの奇襲かよつてな感じの奴が……うん、怖かった……。

あ、もちろん物間君のアレは、取陰さんの『個性』を『コピー』した結果のものだったんだけどね？ 血糊ももちろん作り物だったんだけどね？

ちよつと考えればわかつたはずなのに……アレは本気で驚いたっけなあ……

そんな感じで3日目を終えた僕らは、無事に4日目に突入しまして……そこで冒頭に戻るわけだが、この日はなぜか、朝一番でA、B組と心操君、青山君も含めた全員が集められた。

宿泊所の入り口前に集合して並んでいる僕らの前には、この合宿で講師役をしてきている人達が勢ぞろい。担任2名とワイプシの4人に加え、パンドラズ・アクターとラバーエンプレス先生、そしてアナライジユもだ。

その中の1人である相澤先生が、全員を見回して口を開く。

「さて、今日も楽しく特訓なわけだが……その前にお前達にあらかじめ言っておくことがある。なので、始める前にこうして集まってもらった」

「といっても、別にこれから抜き打ちテストやら何やらが始まるわけではないから安心するがいい。今後の予定やら何やらについて通知を確認しておくだけだ」

と、ブラドキング先生も続けて言う。

「まず、以前少しだけ話してある通り……今年の1年ヒーロー科、その当面の目標は、緊急時における公共の場での『個性』使用及び戦闘の許可……すなわち、ヒーロー活動の『仮免』の取得だ。昨今、『敵連合』を始めとした『敵』の活性化が無視できない規模になっていることを考えれば、お前らにも自衛の手段、ないし、ヒーローとして切れる手札も相応のものが要だからな」

「また同時に、例年に比してお前達はかなりのハイペースで成長できている。現段階で既に1年生レベルを逸脱している者も珍しくないほどにな。であれば、それに即した進行度までカリキュラムを『前倒し』することも当然選択肢の一つ……ことを早く進めれば、それだけ多く、深く学ぶことができ、同時にお前達であればそれだけのことができるだろうという、雄英からの期待でもある」

教師2人からの叱咤激励に――相澤先生のは事務的というか、ちよつとストレートでない分わかりにくいけど、よく注意して聞くときちんと期待してくれてるのがわかる――心身を引き締める僕達。ごくり、と誰かがつばをのんだ音が聞こえた。

「しかし当然、その取得の難易度はかなり高い。例年、合格率は5割を切る……まして、出てくるのはほとんどが他校のヒーロー科、2年生以降の生徒……要するに、お前達よりも経験を積み、より多くのことを学び、『個性』を磨き上げた連中だ」

「当然一筋縄ではいかん。今のままでは、いかにお前達の実力が例年以上のものがあれど、足りていないことが多すぎる……ゆえにこの合宿での『個性伸ばし』に加え、これ以降のさらなるカリキュラムの消

化をもつてその下準備とする予定だったが……先程も言ったように、お前達はこの短期間においてもわかるほどに成長が順調だ。ゆえに今のうちに、予定だけ話しておく。もし可能であるならば……合宿中にその領域にまで進むという選択肢も、場合によってはあるだろうし、『それ』を見据えて今の自分に磨きをかけていくというのものとれる手の1つだ」

いいか、とブラドキング先生が……なんだろう、わざとらしくためを作っている。

僕らはその次の句を、固唾をのんで待つ。

「仮免試験の実施は、时期的に見て夏休み明け直前。それまでにお前達には、最低、1人2つ……」

『必殺技』を作ってもらおう！」

「学校っぽくてそれでいてヒーローっぽいのがキタアア!!」

☆☆☆

全員、おめめキラキラだな……緑谷も含めて。

まあ、無理もないけど。この展開は……男の子にとっては、いや女でもたまらないだろう。

仮にもヒーローを目指す者として、魅力的過ぎる単語だ。

必殺技。

読んで字のごとく、『必ず殺す技』。

……まあ、さすがにそれはないけども……要するに、相澤先生達の言いたいことは、『仮免試験』に向けて、自分にとっての『必勝の型』を作り出せ、というものだった。

改めての説明にはなるが、『必殺技』というのはいわば『自分を象徴する技』。

これさえ使えれば有利になる、という常勝のパターンであり、自分にとっても味方にとっても、そして守るべき市民達にとっても、その

存在そのものがある種の精神的支柱になる。

逆に敵にとつては、警戒すべき対象であり、自分の存在をそのまま脅威として決定づける要素になり、ものによっては戦意そのものを減衰させ、あるいは砕く要素足りうる。

有利な状況で使つて勝負を決定づけるもよし、不利な状況を覆すための切り札として使うもよし……そういう、状況を問わず安定した成果をたたき出せる、つていうのもまた、『必殺技』の存在意義であり、それができるといふのはすなわち、その分高い実力を持っていることになる。

当然、存在そのものにそれだけのネームバリューを持たせるんだ、相応の効果を持っていることが前提になるし……あるいは、それを使つて勝利やら何やらの『実績』を積み重ねることで、ネームバリューそのものが持つ力つてやつも増えていく。

だからこそ、先生達は伸ばした『個性』を十全に生かすものを、つて指定したんだな。

他の人にはない自分らしさ……それを最も簡単に表すには、自分だけの力……すなわち『個性』を使うのが一番確実だし、有効だから。

「うおおおおお！ やつべええええ、テンション上がってきた！」

コレ、もう今日から修行入つていいんすか!？」

「落ち着け上鳴、さつき言つただろ……全員がすぐに『必殺技』作成に入るわけじゃない。そもそも、この合宿自体が『必殺技』の下準備だ。作成を見据えて修行をしたり、カリキュラムに取り込むのは構わんが、本格的に着手するのは、土台が十分に固まったと判断できた者だけだ」

「基礎となる『個性』の成長度合いが中途半端のままそういうのを作つても、小手先だけの技にしかありませんからね」

と、今度はラバー。

「ただ単に名前を付けて、ちよつと強力で見栄えのいいだけの技を作つたとしても、それがヒーロー活動……こと対人戦、ないし対『敵』戦において、十分な威力を発揮できるものでなければ、それは『必殺技』とは呼べません。例えば……今発言した上鳴電気君？」

「え？ あ、はい」

「君の個性『帯電』は確かに強力ですが、デメリットも多く、そして重い。電撃の収束が甘いゆえに、名前の通りの『無差別』の放電で味方を巻き込みかねず、使いすぎればウェイになってしまう」

「あ、はい、確かにその通りなんですけど……一応その辺は今、サポートアイテムで改良中にして……あとウェイってすいませんちよつと間違っていないんですけど言い方もっと他に……」

ちよつと切なげなトーンでの上鳴の抗議をさらりと流し、続けるラバー。

なお、視界の端で耳郎が必死で笑いをこらえております。気持ちはわかる。

「ええ、もちろん知っていますよ。そうやって創意工夫を凝らして自分の長所の強化、弱点の抹消に努めることは重要です。そうでなければ……体育祭でも使っていた、君の『無差別放電130万ボルト』……あれは残念ながら、『必殺技』と呼ぶにはギリギリ不適合ですからね」
それを聞いて、『うつ』とたじろぐ上鳴。

事前にトークの中でその理由を説明されていたからだろう、反論もないようだ。

まあ実際、あの技は……周囲に味方がいないことを前提にした、文字通り『無差別攻撃』だからなあ……加えて、『帯電』を『放電』にまで持っていくレベルの出力を要するから、高確率でウェイになる、継戦能力つてもものと無縁の技でもある。

そんな技は、威力がいくら強力でも、自分を象徴する『必殺技』にすることはできない……ってわけだな。最低限、デカすぎるデメリットをどうにかした上でないと。

「逆に、単純な技でも十分な威力、及び実用性を持たせることができるならば、それは『必殺技』足りうるということでもあります。なんならそれは攻撃技である必要性もない。例を挙げるなら……超加速で一気に戦いのペースを持つていく、飯田君の『レシプロバースト』や、大量のツルで一気に広範囲を制圧する、塩崎さんの『ヴィアドロローサ』、単純なストレートパンチながら、ヒットすればまさしく一撃必殺

の威力を誇る、緑谷君の『デトロイトスマッシュ』なんかそうですね」
その言葉に、飯田は『あれ『必殺技』でよかったのか……』と感激し、塩崎は『恐縮です』と一言言つて一礼……しかしちよつと顔が赤い。

緑谷は素直にうれしそうだけど……若干、何か考え込んだ風にもなってるな。

……緑谷の場合は……『デトロイトスマッシュ』つていう技自体が、オールマイトリスペクトのネーミングだからな。技名からくるインパクトの何割かはそこ由来になつちやうし……同時に、憧れを背負うつていう重みにもなってるから、その辺複雑なのかもしれない。

それでも今や、その名に恐縮するだけじゃなく、それにふさわしいヒーローに、男になろう、つていう思考ができるようになってるのが、今のこの……ぐつと拳を握つて、力強く頷いている緑谷なんだけどもね。

「本来必殺技に優劣はあまりありません。ですが、今言つた意味を基準として比較するならば……攻撃技なら、爆豪君の『ハウザーインパクト』、補助技なら、栄陽院さんの『コンセントヒール』や『エネルギーバインド』が強力なものとして挙げられるでしょう」

「！」

お、今度は私と爆豪か……いきなり名前出されたからちよつとびつくりした。

それにラバー、公の場だからか、私のこと苗字呼びだったな……まあいいけど。

そして説明によれば、爆豪の『ハウザーインパクト』は、見た目も派手で威力も高い。また、きちんと『個性』そのものの強化による恩恵を受けて威力が上がるつてことで、まさしく彼と彼の『個性』を象徴する技になるだろうから、ということだ。

一方、私の技2つだけ……『コンセントヒール』は、味方を回復させられるつてのはそれ自体が強力で、味方や市民にとっては精神的支柱足りうるものになる。彼女がいれば助かる、つていう希望になれる能力だから。

また、『エネルギーバインド』は、相手を動けなくするっていう効果自体の強力さもさることながら、エネルギーを叩き込むと発動するっていう条件から、『触れるとまずい』っていう、接近戦そのものに警戒を持たせるような副次的・精神的な効果も期待できる。

こつちも接近戦はしづらくなるけど、『補助・回復役』っていう私本来の立ち位置を考えれば、相手から交戦を避けてくれる要素はむしろありがたいだろうしな。

攻撃力その他の『実用性』、見栄えその他の『話題性』……それらを両立させているこれらの技が、『必殺技』として優秀な部類に入ると評価されるそうだ。

「無論、いかにそういった部分のアイデアが秀逸であれど、元となる『個性』が未成熟ではその力は半減どころではない。ゆえに、『個性伸ばし』がその水準を満たしていない者は、『必殺技』を意識しつつも、引き続き『個性』を伸ばす訓練を継続。そして、水準を満たしていると判断された者は……『個性伸ばし』も続けつつ、順次『必殺技』の構築に移ります！」

と、今度はパンドラ。そして最後に母さんこと、アナライジユが、『皆さんの『個性』や、特訓の方針、これまでの成長の傾向や、修行時の注意点などについては、ここにガイドブックがありますので、この後順番に取りに来てくださいね。コレの中身と、教師陣が適宜行うアドバイスをもとにして修行を進めて、以降の日程の修行を進めてもらいますので」

そう言つて、テーブルの上にどさつと置いてある、ホチキス止めの紙束を指し示す。アレ、私ら1人1人に用意した指導要領みたいなものだったのか。こりゃガチだな、母さんも……

あ、ちなみに彼女が私の母さんだつてことは、昨日の時点でもう皆にばらしています。別に、何が何でも隠しておかなきゃいけないようなことでもないしね。

驚かれたけど、それでもすぐに気を取り直して皆、修行に戻つてた。もちろん、『親が教師陣だからってえこひいき云々』なんて言つてくる人も、物間以外はいなくて……その物間も、別に本気で言つてるわ

けじゃなかったしな。

ただアイツは、弄れる、煽れるネタがあればいいだけの男だから多分。

そんなわけで……合宿もいよいよ折り返し地点。

この日々を実りあるものにするために、今日も特訓、特訓！

私や緑谷は『必殺技水準』をすでに満たしているのです、そっちの開発にも着手することになって……しかもその際は、より実践に近い形で技を磨くために、先生方が持ってきてた『コスチューム』に着替えて修行することになったし！

どんなのがいいかな、私の『必殺技』。『コンセントヒール』と『エネルギーバインド』以外にも、あと1つ2つ……継承した技じゃなくて、私だけの技が欲しいな。

それこそ、より緑谷の役に立てそうな技だとなおよし！ あー、どうしょ……

☆☆☆

永久がやる気を出して、しかしそれゆえに、これからどうしたものか、と悩んでいるのを見ながら……アナライジユは、ほほえましいものを見るような表情の裏で……ある考察を進めていた。

(経過は順調……合宿としても、『オール・フォー・ユー』の進展としても……それは確実に言っている。けど、1つ気になるのは……緑谷君と永久の間で、『夢』の共有や、感覚が通じ合う、というような現象が起こっている点ね)

修行中、何の気なしに永久が相談してきていたその話。

アナライジユは、『オール・フォー・ユー』の個性としての力を知る者として……知るからこそ、どういうことなのか思考していた。

単なる成長、主とのつながりの強固さ、と片づけることはできない、なぜなら……

(夢や感覚で、ワイヤレスでつながる……そんな力は『オール・フォー・ユー』にはない。少なくとも、私にはなかった……だとすれば、これ

が意味していることは……この現象の正体は、原因は……？ あの子にあつて、私にないもの……となると考えられるのは、緑谷君の側の個性が特殊である場合。あるいは、『変容』の結果。あるいは……まさか……)

ごくろり、と、

自身も気付かぬうちに、つばを飲み込んで喉が鳴っていた。

「まさか……あの人の『個性』……？」

どこか遠い目をして、ごく小さい声でアナライジユが呟いたその言葉聞いた者は、いなかつた。

第119話 『必殺技』を求めて

「纏え、黒影……『深淵闇駆』……!」

「必・殺! こう、手から酸を……ドバアアア!!」

「おりやあああああ! スーパーグレープラッシュ!」

うーん……順調そうなのから、そうだなさそうなのまで……

『黒影』を身に纏う形で、弱点だったらしい接近能力をカバーする作戦に出た常闇に、一度に出せる酸の量を増やしたことでより強力な攻撃ができるようになった芦戸、今までよりも大量に『もぎもぎ』を投げつけている峰田……

その他、皆、色々なやり方で、思いつく『必殺技』を試している。今現在、4日目午後。

A組は半分以上が、B組は3分の1ちよつとが『個性伸ばし』が及第点に至ったとして、『必殺技考案』にシフトしている。

この差はやっぱり、そこかしこで指摘されてきた『経験値』の差だろうか。A組とB組で達成者の割合に差がでたことには、B組の連中は悔しそうにしていた。

それでも、それをばねにして前に進むくらいのことはずぐに思い至るらしく、さっさと自分達の修行に戻ってたな。

あ、それと……『必殺技』研究にシフトした面々は、先生方がいつの間にか持ってきていた『コスチューム』に着替えて練習してる。より実際に、実際に使う際に近い状況で練習する方が身になるからってことで、ジャージから一転、本気モードって感じだ。

まだ及第点に至らず、ジャージ姿で基礎固めの面々は、自分も早くあなりたいと思つて、意気を高めている。

「徹甲弾!!」
A・P・ショット

向こうでは、爆豪が一点に収束させ、その分貫通力を強化させた『爆破』を放ち、その威力で一気に数体の『土魔獣』を貫いて破壊していた。

これには、監督していたピクシーボブも思わず『おお!』と声を上げていた。

「すごいな爆豪、お前もう『必殺技』作ったのかよ!」

「お前もう何個も必殺技持つてんだろうに……つか、修行初めて数時間形にするって何なの?」

「つせえわ、クソ髪にしようゆ顔。元々考えて練習してたのが形になっただけだ……まだまだこれからだっつもの」

「そしてこの向上心よ……っし、俺らも負けてらんねえな! よおし砂藤! 栄陽院! 気が済むまで思いつきり俺をサンドバッグにしてくれ!」

「言い方! 誤解を招くぜ!」

「よし任せとけ」

「栄陽院!」

切島の言い方もまあアレだが、予想外の返事をさらっと返した私にもツツコミが入る。

ただ、そのツツコミ元の砂藤も……どら焼き片手にダンベル持ちあげてるっていう中々にカオスな絵面なんだが……まあこれは『個性』の関係上仕方ないというか。

ただ私と切島のスパーリング（ただし一方的）は、きちんと根拠とどうか方針あつてのものなんだけどもね?

切島の『硬化』は、鍛えれば鍛えるほど強くなる。それは、筋トレその他で自分の体を鍛えるのに加えて、『硬化』した状態で攻撃を受け続けることで強度を上げるっていう訓練も有効だ。

合宿の最初の方は、ひたすら硬化状態で尾白の尻尾に殴られたり、鎌切に斬りつけられたり、拳藤に殴られたり、爆豪に爆破されたりしてたし。

で、そこで今回私がスパーリングの相手選ばれたのには、今言つた通りきちんと理由、ないし目的があつてだな……

「ドラララララア!! ドラララララララア!!」

「うおおおおおおお! 『安無嶺過武瑠』——ツツ!!」

切島の『必殺技』である『安無嶺過武瑠』……単に、体を超がつく

ほどガチガチに固めるだけの技だが、その硬さは、爆豪や鎌切の攻撃でも、全くと言っていいほど傷がつかないレベルだ。

その状態の切島を私はひたすら殴ってるわけだが……殴る際、微量に『エネルギー』を叩き込んでいる。しかし別に、『エネルギーバインド』をかけるわけじゃなく……むしろ、切島を回復させて殴り続けるためだ。

そして、もう一つ。

「……っ……切島、左脇腹と右腕！ 緩んできてる！ 締めろ！」
「ぐっ……お、おう！」

私は、エネルギーを流し込んだ相手の体の状態……こと、『力』に関することについて、敏感に感じ取ることができる。流し込んだエネルギーを介して。

ゆえに、切島の集中やら気力が続かなくて、『硬化』が緩んで防御が崩れそうになってしまっている部分がある。そこを指摘して引き締めさせ、また延々と殴り続けるのだ。

幸い、殴りながら流し込んでいる『エネルギー』のおかげで、切島も体力その他は補充できるし、あとは切島の気力と集中力だけの問題……となれば、そのへんにこだわりのある『漢』切島は何も言わなくても必死で、歯を食いしばって固め続けるからな。

「今度は頭と腹だ！ どうした!? 疲れたか!? ちよつと休むか!？」

「いやまだ大丈夫だ！ 痛えけど……全然疲れてはいねえ……まだまだこのくらいならア！」

「よおしその意気や良……うおっ!？」

と、再び乱打に戻ろうとした時、突如として私の目の前に土の壁が現れて進路をふさぎ……同時に、切島の『硬化』が解除されて普通の肉体に戻っていた。これは……『抹消』？

「そこまでだ。栄陽院、切島、お前らちよつと休憩しろ」

「ピクシーボブに……相澤先生」

「お、俺まだやれます！ 全然疲れてなんざ……」

「疲労感がないのは栄陽院が注いでるエネルギーの影響だ。その実体内にダメージはたまってる。ラグドールの『サーチ』で観測した結果

だから間違いない。少し休んで回復させろ」

なるほど……表面からじゃわかりにくい、その辺の観測もしてくるのはありがたいな。

切島も、そう言われたら頷くしかないようで、『うっす』と一言言つて、地面に座り込んだ。

その切島に、私は今度は『コンセントヒール』で回復力を強化してやって……さて、切島が回復するまで、私は何すっかな。

と思つてたら、即座に指示が飛んできた。

『栄陽院さん、あなたは切島君の休憩の間、今から言う生徒達のところに行つて治療をお願い。『トワビタンE』だけじゃ抜けきらない疲労が出てきてる生徒が何人かいるのよ』

「了解です、マンダレイ。……あ、いや、こつちからの声は聞こえないのか」

「あー……痛い、疲れた、痛い、疲れ……おおおい瀬呂テメエ!?

何お前そんな羨ましいことになつてんだこの野郎オ！」

「いきなり出てきて何でそんな呪詛ぶつけてくんだよ峰田……普通に治療してもらつてるだけだろうが」

えー、只今はこうして、『コンセントヒール』で瀬呂の肘の部分の治療してやつてるところで……そこに峰田が来た結果、さっきまでの疲れはどこ行つたつて感じのシャウトが響いたわけです。

瀬呂の『テープ』は、使いすぎると腕に痛みが走るようになる。使えば使うほどそれは増していつて、最終的には激痛になる。

それを超えて使い続け、『個性伸ばし』を進めている所なわけだが……流石に限界に来たところで、体力回復のために私が遣わされたのだ。

しかしながら、峰田にはもう『女子と触れ合つてる』つて時点で『許ッ羨』な事態だったようで……もうなんか血涙でも流しそうな勢いである。

「心配すんなつて峰田……この後お前にもやつてやつから」

「マジでか！ うひよおおおお、合宿きてよかつたあ！」

「ただしお前、言うまでもないと思うけどおさわり厳禁な。あ、瀬呂念のためこの後テープちよつと貸してくれ。縛るからアイツ」

「おおい!? そこまですることないだろ!? 大丈夫だよ何もしないって! クラスメイトを信用できねえのかよ栄陽院!」

「初日にガッツリ女湯覗こうとした上に、夜中に女子の部屋に忍び込もうとして男子達に布団で簀巻きにされた状態で寝ることになった奴の何を信用しろってんだよ」

コレ、緑谷から聞いた情報である。これ以上こいつが問題起こすと、下手すると管理不行き届きとかで連帯責任で自分達もまずいかもだからって、男子一同結束して、夜は峰田は布団でぐるぐる巻きにした状態で床に転がしてんだと。

普通に見ればいじめの現場みたいなもんだが……こいつの場合、間違った対応じゃないからな。

「普通にマッサージとしては気持ちよくしてやるからそれで我慢しろ。……お前の個性に関連する部位は頭だから……頭皮マッサージみたいなになるな」

「うう、仕方ねえ……そのシチュエーションだけで我慢する……。っていうか栄陽院、前より少しガード堅くなった感じしねえ? 多少のハプニングは笑って見逃してくれたあの頃のお前はどこ行ったんだよオ……」

「お前の起こすハプニングは『多少』じゃないし、そもそも故意だが。まあ……もうちよつとまともに羞恥心持ってって色んな奴に言われたからな」

それに今の私は、髪の毛一本に至るまで緑谷のものだ。そうやすやすと他人に見せも触らせもしないよ。……それが結果的に貞操観念の後押しにつながってるのは……まあ、結果オーライってことで。

なお、その後の峰田は、ピクシーボブに頼んで土で美容院のリクライニングチェアみたいな作ってもらって、そこに固定した峰田に頭皮マッサージをしてやる形とした。

最初の方は『女子の指……うひひひ……』ってにやけてたけども、すぐに『あゝ……』って普通に気持ちよがるようになって、しまいに

は『zzzz……』寝た。

頭皮マッサージって、やり方にもよるけど、頭の血行よくするから、気持ちいいし眠くなるんだよな……私のはビスケさん直伝の技だから、自分で言うのもなんだが自信あるし。

にしても、こんだけ早く寝るとは……疲れはガチでたまってたんだな。

回復したらマンダレイが『テレパス』で叩き起こすそうなので、そのままほっといて……次。

続いての客？は飯田なんだが……

「お前、何してんのコレ……え、あのバイクの排気筒みたいなんどこいった？」

「つ、ぐ……引っこ抜いた……」

「何で!？」

今、飯田の足を『コンセントヒール』使いながらマッサージしてやっているとこなんだが……そのふくらはぎのあたりから生えているはずの、あのバイクのマフラーみたいな器官が、ないのだ。

で、聞いてみたら今の返答である。何でそんなことしたん……見るからに痛そうだけど。

「エンジンの『チューニング』……我が家に伝わる修行法だ。マフラーをあえて引っこ抜いて鍛錬を行うことで、より強い負荷に耐えられるそれが生え変わってくる……! 激痛と忍耐を伴うが……『個性』を、『必殺技』を最大効率で使うためには、必要なことだ……!」

それでさつきからめちやくちや脂汗かいてるのか……ホント、大した男だよ。お前は。

「私の『コンセントヒール』は……自然治癒の延長上だから、その『チューニング』の邪魔にはならないよ。ただ、少し治癒……この場合は『生え代わり』が早くなるだけだ」

「それは助かる……ありがとう、栄陽院君! 疲れが抜けたら、また走らせてもらう!」

「おう、頑張れ」

その後も、拳藤の手と腕や尾白の尻尾、耳郎のイヤホン、障子の触腕、なんかを治して回って……けど半分くらい、本来人間にはない器官が治癒対象だったから大変だったな。

あとそれ以上に大変だったのは、葉隠と梅雨ちゃん、そして取陰である。

葉隠はほら……透明だし。体見えないし。

手先の感覚を頼りにマッサージするしかないんだけど……見えないうって厄介だな。『うひゃひゃひゃ、くすぐりたい』って動くから、やりづらくて……。

梅雨ちゃんは……足はともかく、ベロが筋肉痛っぽくなったって言われた時はどうしようかと。とりあえず『トワビタンE』飲ませて、ベロは私の腕に巻き付けてもらって、その状態で『コンセントヒール』使ってなんとか……

あと取陰、お前、熱心なのはいいけどもき……私に体の一部分だけ渡してマッサージさせて、他の残った部分で修行続けるのやめれ。怖いわ普通に。

どんな気持ちで私があんたのバラバラパーツ相手にマッサージしていると……目の前にほすと置かれてる腰『だけ』をもんだり押ししたり……これじゃ治療ってより修理だよ。

そして最後はやっぱり緑谷。

いつもの奴に加えて、『黒鞭』とかいうあのエネルギー紐も鍛えてるらしく……流石に消耗が速いようなので、念入りにマッサージしておいた。全身。

手にまとわせた『エネルギー』を随時注ぎ込みながら……筋肉一つ一つを丁寧に……解きほぐすようにして疲労から解放していく。回復して、より強靱なそれが出来上がるように。

「ホントは『オイルマッサージ』ならもっと効率よく回復させてあげられるんだけどね……さすがに屋外でやるわけにもいかないし」

「ははは……それはじゃあ、また今度の楽しみにしとくね」

なんて軽口を叩きながら進めて……はい終了。

「んー……なんか緑谷、いつもより腕の部分の疲労が激しかったな……。やっぱあの『黒鞭』っての使うと、負担大きいの？　いつも腕からだしてるもんな」

「そう……かもね。でも、前より楽に使えるようになってきた感じなんだよ、これでも」

「そうなのか？」

「うん。……それこそ、昨日とかあたりからかな。栄陽院さんの『エネルギー』のおかげで、目に見えなかったり、実体のないエネルギー的なものを扱う感覚、みたいなのがわかってきてさ……で、調子に乗って練習しすぎた結果、余計に疲れちゃって」

「ははは……ほどほどにな。そうでなくたって、緑谷の……何だっけ？　『ワン・フォー・オール』だっけ？　それ自体が相当ピーキーなんだから」

「うん、本当に……えっ？」

その時、ふと会話が途切れた。

緑谷の顔が、一瞬、きよとんとしたものになって……見る見るうちに青くなっていく。汗も……多分、冷汗か何かの類であろうそれが、どっと噴き出していた。ど、どうした!?

「え、栄陽院さん……今、何て……何で、その名前を知って……？」

「うん？　名前？」

「ぼ、僕の『個性』……『ワン・フォー・オール』って……ぼ、僕、教えてないよね!?! どうして知ってるの……!?!」

「……あー、ごめん。つい。えっとほら……もうずいぶん前だけど、まだ緑谷が私の『寝技』っていうか、『人間ギプス』で『フルカウル』の練習してた時にさ。いつもの得意のブツブツで、『もつとフラットに』『ワン・フォー・オール』を考えれば……』って呟いてるの聞こえてさ。もしかしたら緑谷の『個性』の名前なのかな……って思ってたんだけど、何か聞く機会なくて今まで」

（そんな前!?! え、ていうか僕そんなこと言ってた……いつもの癖で……いや、確かにそういえばあの時、そんな風に考えてそんな風に

言ってた気も……『フルカウル』が上手くいきそうなところで嬉しかったからちようどよく覚えてる……いや、ていうかこれ、完全に僕の凡ミスじゃないか！)

「そ、そっか、ごめん……えっと、栄陽院さん、それ、誰かに話したりは……」

「いや、してないよ誰にも。そもそも私自身、何なのかよくわかってなくて……確信も持ててなかったし。何ならずと忘れてたくらいだよ、最近まで」

「そ、それならいいんだけど……」

「……あ、やっぱりっていうか……何か、秘密にしてた感じ？」

「う、うん……ごめん、栄陽院さん。その……理由は、言えないんだけど……その名前については、秘密にしておいてくれる？　ちよっと、誰にも知られたくなくて……」

「？　いいよ、わかった。黙っとく」

……なんか、理由は不明だけど変な空気になっちゃったな。

今、露骨にほっとしてる緑谷……やっぱり彼には、何か、私はまだ知らない秘密があるみたいだ……恐らくは、『個性』関連の。

いつもは『超パワー』とか適当な名前で呼ばれてるけど、本来の名前すら知られたくないなんて……一体どういう秘密なんだろうな？　そもそも、『黒鞭』なんてものが出て来た時点で、単なるパワー系の個性じゃなかったみたいだ……のはわかってたことだし……

今言った通り、詮索するつもりはないけど……いつか、話してくれたらうれしいな。

そんなこんなで緑谷のところを後にし……もう要治療者はいないってことで、自分の修行に戻る。もう切島も回復したらしいかな。

ここからは、切島を殴りつつ……同時に『エネルギー』を操作して回復もさせる感じの訓練になる。そうすれば、課題だった私の『エネルギー操作能力』の改善にもつながるからな……母さんみたいに、ごく少量のエネルギーを注いだけで、狙った結果を引き出せるようにならないと。

……傍から見てたら、私がひたすら切島を殴りまくってるだけの絵
図だから……見た目ちよつとアレだけでもね……。

そうして自分を鍛え続けて、今日の訓練は終了。

夕食はまた、本来のメニューである手巻き寿司に、有志連合のプ
スアルファメニュー満載で大満足のひと時を過ごした。ていうか、巻
く具がめっちゃ増えて多彩になって……折角なので先生方やワイプ
シの皆さんも一緒になって手巻き寿司パーティーだった。楽しかつ
た。

そのまま、風呂に入って疲れを取って、布団に入ってゆっくり寝て、
4日目終了し……。

……そして、その夜……また、夢を見た。

第120話 5日目

Side. 緑谷出久

……………おかしい。

いくらなんでも、これはおかしい。

目の前というか足元で、とけるように崩れ去って消えていく『死の騎士』を見ながら……………僕はしかし、困惑や混乱で頭がいっぱいになっっていた。

とにかく、おかしい。そう思うことしかできなかった。

3分。

僕がこの『死の騎士』に加え、その取り巻きとして一緒に襲って来た『スケルトン』30体、合計31体もの敵を倒すのに要した時間である。

パンドラズ・アクターの『個性』によって作られたこれらのモンスターは、下手な『敵』なんかよりも強い。それこそ『死の騎士』は、生半可な『敵』は問題にならないくらいには強い。知能は……………高いとは言えないが、戦闘に関する技量はかなりのものであり……………だからこそスパーリングや、『必殺技』の試し打ちの相手としては最適だった。

昨日も同じように、これらの『モンスター』や、ピクシーボブの『土魔獣』を相手にして戦ってたわけだけど……………昨日と、明らかに違う点がある。

その前に今のこの状況だが、さっき言った通り、僕は今しがた、『死の騎士』を含む30体以上のモンスターを全滅させたところだ。

そして、この31体一気に相手にする多対一バトルだが……………今日、すでに5回目である。

すなわち僕は今日、まだ午前中の時間の半分も終わっていないこの時点までで……………『死の騎士』5体を含む、合計150体以上のモンスターを倒している。

当然ながら、相応の強さを誇る敵、相応の労力を費やしての戦いだっただけ……………なのに、

「疲れない……。いや、疲れないわけじゃないけど、すぐに回復する……。腕や足の痛みも、昨日までよりもずっと早く引いていく……」

昨日までの僕は……。それなりの強さを持つモンスターの相手ともなれば、こなすことはできて、それなりに疲れてしまつて……。その後しばらく休んでいる必要があつた。

時間も……。回を重ねるごとに、長くかかるようになって……。10分も20分もかかるようになったりした。

けど今日は……。合間にとつている休憩の最中……。そのわずかな時間だけで、今までよりも格段に早く体力が回復する。

地べたに座り込んで、息について……。動くことをやめ、『休む』ということに、体を『休ませる』ということに意識を向けてじつとして……。体中がリラックスして、徐々に活力が湧きあがってくる。疲れが抜けていき、仮眠でも取つたみたい、短時間で大きく体力が回復する。

昨日まではできなかつたというか、考えもしなかつたことだ。けど、今日……。ふと思いついたというか、頭をよぎつて……。出来そうな気がして、やってみたら、できた。

これって……。『ワン・フォー・オール』の効果なのか？ 確かにまるで、強化された『身体能力』を、そのまま『回復力』にも向けているような感じにも思えるけど……

それでも、今までそんなことができるなんて、オールマイトにもナイトアイにも、グラントリノにも、誰にも聞いたことなかつたのに……

けどまあ、空気弾みたいに、ある程度僕が『個性』を使いこなせるようになってから教えるつもりだったのかもしれないし……

『……え、何それ？』

違つたみたいである。

何度目かの休憩時間を利用して、オールマイトに電話かけて聞いてみた返事がこれだ。

そんな使い方はしたこともない、できたこともない。自分だけじゃ

なく、先代である『七代目』もそんなことはできなかつたはずだ……
とのこと。

……まあ、正直、ある程度予想してた返答ではあるんだけど……
『ていうか、そういう聞き方してきたってことは……え、緑谷少年、そ
んなことできるようになったの？ うわ……羨ましっ』

「あ、あはは……なんか、気が付いたら今日、出来るようになってまし
て……」

オールマイト曰く、『そんなんでできるなら私が使いたい』とのこと
だった。すいません、なんか。

ただ……この能力に関しては、ふと思つたことがもう1つあつて
……

「あの、オールマイト。少し前……そう、ちょうど『黒鞭』が発現した
時あたりのことですけど……僕が変な夢を見た、つていう話をした
の、覚えてますか？」

『？ ああ、もちろんだ。歴代の継承者……私もそこにいたみたいだ
けど、そのビジョンが見えたんだよね？ しかも、その内の『初代』と
『5代目』と会話して、『ワン・フォー・オール』の異変……歴代継承
者の『個性』の覚醒について聞かされた。そして……継承者以外のビ
ジョンもそこにいたんだよね。その中には……栄陽院少女もいた、
と』

「はい。あの時はまだ、一体何で僕の夢に、栄陽院さんが出てくるのか
わからなかつたけど……『I・アイランド』で、ナイトアイから『ワ
ン・フォー・オール』と『オール・フォー・ユー』の関係について聞
かされて……ひよつとしたら、この2つが近くにあることで、互いに
干渉し合つて何かが起こってるんじゃないか、つて思つたんです。現
に……今言つた回復力の強化も含めて、ここ最近……『ワン・フォー・
オール』に、急激に変化が起こりすぎてる気がして」

『という……具体的に？』

「体の各部位に込められている力をより正確に感じ取れるようになって
たり、それを操作する精度や速さが上がった……それに、さつき
言つた回復力の強化……これらはどれも、この数日間で行けるように

なったことなんです。そして……これらって、栄陽院さんが使える技に似てる気がして」

回復力の強化は、エネルギーを集中・活性化させて回復を促す応用技『コンセントヒール』に似ているし、込められている力の感知は、今まさに彼女が磨いている応用能力だ。力の操作精度や速度の強化は、そこから派生したものだと言える。把握が迅速かつ正確になった分、扱いそのものが上手になった、っていう感じだ。

そして、これはもうだいたい前になるし、今更って感じもするけど……体育祭で心操君と戦った時や、職場体験で『ヒーロー殺し』と戦った時……拘束や支配系の『個性』に対して、それを僕は、自力で、ないしは制限時間よりも早く振り切ることができた。

以前栄陽院さんに、『エネルギーバインド』の応用で、こういう特殊な拘束状態を、体内のエネルギーの操作によつて解除できる技能があるって聞いたことがある。ひよつとして、それに近いことを僕は、あの時無意識にできていた……のかもしれない、なんて思った。

彼女が使える技……そのいくつかを、僕は、少し形を変えてとはいえ、使えるようになっていく。彼女との仲が親密になり、彼女が身も心も僕に捧げてくれてからは、一層それが加速している。

加えて、ここ数日、割と頻繁に見る、妙な……どこか不吉な、あの夢。

まるで、栄陽院さんの力が僕のものになるような……あるいは、栄陽院さんそのものが僕の力になるようにしているような……不思議な夢。思えば、あの手の夢を見た翌日、ないしは近々に、新しい能力が花開いているような気がする……

やっぱり、偶然じゃないのかも……？ 僕と栄陽院さん、2人の『個性』が……『ワン・フォー・オール』と『オール・フォー・ユー』が、干渉し合って何かが起こっている。

いつか『初代』が言っていたように、分かれた『2つ』が、『1つ』に戻ろうとしているかのような……予想もつかない、何か……。

これ……放置していいものなんだろうか……？

『ワン・フォー・オール』と『オール・フォー・ユー』は……一体、

どこに行こうとしてるんだ……僕と栄陽院さんの行きつく先に、一体どんな未来が待ってるっていうんだ……？

オールナイトとの通話そのまま終わり、その後、思考を続けていても結論は出ず。

新たにパンドラズ・アクターが出してくれたモンスターとのスパーリングの時間になって……結局、僕はそのまま……また、疑問を流して修行に戻ってしまった。

☆☆☆

「なあ上鳴、俺さあ……ちよつと重大なことに気づいちまったんだよ」

「奇遇だな、峰田……俺もだ」

「おかしいんだよ、この合宿……どう考えても……」

「ああ……ずっと思ってた。というか、ずっと待ってた。なのに……なのに……」

「いつになったら女子の水着を見れるんだ!?!」

以上、峰田・上鳴コンビのいつもの煩惱炸裂トークでした。

合宿5日目、昼も近くなつたくらいの時間帯である。昨日と同じように、疲れがたまってきた連中の治療というか回復のため、『コンセントヒール』行脚で回っている私の耳に聞こえて来た。

「おかしーだろ!?! 林間合宿！ 自然の中での楽しい共同生活！ 開放感からいつもより開放的にで大胆になる女子！ 始まる青春まつさかり、真夏のアバンチュール!」

「オイラ達の理想郷は！ 肌色の美女達が舞い踊る楽園はどこにいったんだよおおお!!」

「お前らその辺にしろ、教育上よくないから」

「洗汰君、見たらあかんよー」

アホなことを言ってる2人の影響を受けないように、ちよつど特訓を手伝ってくれてた洗汰君の視線をさりげなく外させる。見ちやい

けません。あんなふうには醜い大人になっちゃダメだぞ。

なお2人には、その場にいた女子人数分の白眼視が突き刺さっている。

「栄陽院んん！ お前ショツピングの時に水着買ったんだろお!? 芦戸とかと一緒にさあ、『すつごいの』選んで買ったんだろ！ いいのかよせつかく買ったのに披露しなくてよお、なあおい、もったいないだろオ!? かわいそうだろ水着がア！ 着ろよ、着てみるよ、着て見せろよオ!!」

怖えよ。

峰田、必死過ぎ。血涙出すんじゃないのかってくらいに……目力が……こんなことで。

「仕方ないだろ、その直後に『敵連合』の死柄木だかが出てきたせいで、合宿のプラン、場所だけじゃなくてレクの内容とかもまるつと変更になっちまったんだから」

「例年使ってる合宿所なら、近くにレジャーとか川遊びにちょうどいい川や湖もあったらしいけど……ここは全体的に山とか森だものね」
「日程が公開されてないからいまいまいちわかんねえけど……コレ、今年そもそも水着の出番ねえかもな」

「あああんまりだアアア!!」

「上鳴さんと峰田さん……ひよつとして、暑さと疲れで……」

「いや、あいつら割と普段からああでしょ」

心配する視線と共にそんなことを言う八百万だが、その隣で耳郎がバツサリ切つて捨てた。

「でも、せつかく買ったのに出番ないのは残念かも……ねえ、合宿終わったらさ、それとは別にして皆で海とか行かない?」

「あ、さんせー！ やっぱ息抜きも大事だよねー、せつかく買った新しい水着もお披露目したいし」

あつちでは、話題が飛び火したのか、芦戸と葉隠……A組の盛り上げ担当コンビがまた何か企画してるな。

しかし、海か……もうしばらく行つてないな。

別に水泳もレジャーも嫌いとかじゃないんだけど……中学生なっ

たくらいからか、海とかプール行くと結構な確率、ないし頻度でナンパされるから、そのへんがうっとおしくて敬遠してたな。

まだ義務教育のJCをナンパすなよ、って思ってたんだが……その頃から私、かなり背高かったから……女子高生くらいに見えてたらしくて。

今年は久々に……皆でなら、行ってみてもいいか？

あるいは……八百万とか、プライベートビーチとか持ってないかな？

「ありますよ？」

「「あるんだ」」

しかも別荘付きらしい。すげー……流石お嬢様。

ちなみに、栄陽院家にもあるが、外様の私を使うのはあまりアレなので、どっちみち避けてる。

使いたいとも思わんけどね……遠いし。

「まあ、私はどっちかっていうと夏は山派だから、こっちの方が楽しくていいんだけどな」

「いや、楽しいってお前、栄陽院……今んとこやってること、たまに入ってくるレク系以外は特訓ばっかだろ。いや、そういう合宿だけだよ」

「昼間はな。ただほら……ここ最近、夜、有志のコックで追加メニュー作ったりしてるじゃん。皆で協力して。自然の中で料理作るのとか、他の人が作る料理食べるのとか、あとそういうの見ててノウハウ覚えて、自分の料理のレパートリー増やすのも楽しいし……そのへん」

「ああ、それは俺も実はあるな。味付けとか、料理法の工夫とか……皆結構色々引き出しあるんだなって勉強させられてるぜ」

お、砂藤もか。毎日違った料理を楽しそうに作ってるもんな。

あと、そういう感じの話題になった時、爆豪も一瞬ぴくつと反応した気がしたんだけど……登山が趣味なんだよな、たしか。

それ以外にも、アウトドア系全般に趣がある感じなんだろうか？

包丁使うのも手馴れてたし……野外クッキングも色々勉強してるっぽいしな。飯盒で米炊くのも上手かったし。

しかし、キャンプとか、こういう野外でやんちやするのが好きだったりする感性は……TS前の男の価値観なのかと思ってたけど、今でもこうして楽しめてるあたり……きちんと私個人の趣味だったのかね。

「ちなみに目下の興味は、いわゆるジビエ料理だったりするんだけどな。何回か食べたことはあるんだけど、ちよつと作るころから挑戦してみたい」

「栄陽院の場合『狩る』ところから挑戦しそうだね、むしろ」

「狩猟免許もつてないから無理かなー」

「持ってたらやるのかよ。……でも実際、ジビエって美味しいの？ 鹿とか猪とかって、筋張ってて硬かったり、臭みがあるって聞いたけど」「下処理ちゃんとすれば結構美味いらしいぞ？」

実際私、何回かそういうレストランで食べたことあるし。

鹿肉とか兎だったと思うけど……結構美味かった。

「ていうか……さつきからなんかそこ、がつつり男の子同士の会話っぽいよねー……料理の話だけど、アウトドアとかサバイバル的な要素がき」

「もともと永久って男の子っぽいところあるもんね。色々豪快だし、リーダーシップもあって引張っていくタイプだし。男子連中も自然に話せるくらいに壁ないしね」

「女子高とかでモテそー」

女子勢は好き勝手に言ってくれてるなー……まあ、実際小中学校時代から割とそんな評価だったし、なんなら、色んな意味で『女』になった今でも、その辺の価値観とか残ってる部分あるから……別に何か言うつもりもないけどさ。

時には、『生まれてくる性別間違えてね？』とか『何で男に生まれてきてくれなかったの』なんて言われたこともあったし……

ちなみに、後者を言ってきたのは中学時代の先輩（女性）だったんだが、『この際女でもいいから……』とか言って鼻息荒く……さて、落ち着け、不毛だ、非生産的だ。

……アレなこと思い出した。去れ、忌まわしき記憶。

なんてことを考えていたら、増強型『個性』の人らの指導にあたっていた虎さんが、じつとこつちを見ているのに気づいた。

どうしたんだろう、と思っただけで見返していたら、少し考えるような感じの素振りを見せた後……

「……………タイ、行く？」

行きませんよ。

第121話 バーベキューと決意表明

この林間合宿は、単に訓練だけして1週間過ごすわけではない。きちんと合間合間にガス抜きになるイベントが用意されている。

すっかり鍛錬した後は、すっかり楽しいことがある。ザ・飴と鞭。

3日目にやった肝試しや、毎晩の炊事の時に許可されてる、有志連合によるおかずプラス合戦なんかがそれにあたる。

残念ながらちようどいい水場がないので、水着の出番が来るようなイベントは用意されていない様子で、峰田と上鳴が慟哭していたが……それでもきちんと、他にも楽しいイベントつてものは用意されている。

そう……こんな風に。

「そおら焼けたぞ、食らいつけ野郎共!!」

「「おっしやー!!」」

私の号令と共に、殺到してくる男子達。

見る見るうちになくなっていく、串にささってちようどよく焼けた肉や野菜たち。それらにかぶりついて、笑顔になる食べ盛り共。

「うめえええ！ バーベキュー美味エエ!!」

「やっぱキャンプときたらコレだよなあ……!」

「焼き加減も絶妙！ さすがだぜ栄陽院！ A組の料理番長!」

「何だそれ初めて言われたぞ……まあ、悪い気はしないけどな。ホラ、どんどん焼くから遠慮せず持つてけよお前ら！ 早いもん勝ちの恨みっこなしな!」

言いながら私は、このバーベキュー大会の料理係として、あらかじめ切り分けられて下ごしらえも済んでいる肉や野菜をしゅばばっつ、と適当に串に刺し、焼いていく。

熱で焙られ、肉汁が滴る。じゅうじゅうと食欲中枢を刺激してくる音、肉が焼けるいい匂い……野外で皆でわいわい食べるっていうシチュエーションも相まって、皆楽しそうに、美味しそうに食べるのなんの……うんうん、作ってるこっちも嬉しくなるね。

なんていうかなコレ……緑谷に限らず、いっぱい食べる男子って見てていいわあ……ああ、いやもちろん男子に限らず女子もだけどな？
「あー、味付けは各種調味料テーブルに置いてあるから好みで変えろ……ってもうやってるな」

「おーい、こっちでは肉以外も焼いてんぞ、食いたい奴から自由に持ってけよ」

「おう、砂藤……ってこっちは焼きそばにお好み焼き!? まさかの粉もの！」

「しかも美味そう……焼き加減ふわふわじゃねえか、流石砂藤！」

料理もできるシュガーマン！」

「いやあ……うちのクラスは料理番長が2人もいて助かるわあ……おかげで日々、美味な飯にありつける」

「ホントそれな。毎日の夕食もそうだし、こういうイベントがもつと楽しくなるわ……マジ砂藤と栄陽院に感謝だわ」

「だってよ、砂藤。嬉しいこと言ってくれるじゃねーのうちのわんぱく小僧共は」

「栄陽院お前、まんまガキの面倒見る母親か姉の思考回路だろそれ……まあ、景気良く食ってくれるのがこっちも嬉しいってのはわかるけどよ。それに、ここまで言われちゃあ……」

「ああ、張り切らねーわけにはいかねーってな！」

そこからはまあ、私と砂藤と協力して色々作った。

スタンダードなバーベキューはもちろん作り続けつつ、うなぎの蒲焼や焼き鳥なんかも作ったり、鉄板で焼肉にステーキ、チャーハンや餃子、焼きおにぎりやゴーヤチャンプルなんてものまで手分けして作った。

周囲の連中はそれらに驚きつつも、すぐに食欲を刺激されて片っ端から平らげていく。

なお、合間合間に私らもつまみ食いする感じで食べてるので、空腹とかは問題ない。

むしろそういう感じなので、ほぼ全種類ちよつとずつ食べてると思うし。さーて、次は……ジャガイモ切ったのが余ってるな、スパニツ

シユオムレツとジャーマンポテトでも作るか。

暫くそれを続けていると、A組の他の生徒や、B組の方でも負けじと料理好きが立ち上がって色々作り始めた。

ソーセージに焼うどん、お餅にハンバーグ、目玉焼きにカツレツ……さらには網焼きの方で、サンマ焼いたりスルメ焼いたり、ホタテやサザエや牡蠣を殻付きで……おい誰だたこ焼き器持ち出して焼いてんの……美味しいけど。

面白かったのは、何やら青山がゴソゴソやってると思つたら……その少し後に、アルミホイルで器を作つた『チーズフォンデュ』が出来上がったことだった。マジか、やるな貴様。

当然ながら大好評である。一気に彼の知名度と株価が上がつた瞬間だった。

さらに時間がたつと、スイーツ方面の焼きネタも出て来た。ホットケーキやパンケーキみたいなメジャーなものに加え……バーベキューらしく、マシユマロ焙つて焼いたり。

ここでシユガーマンこと砂藤が本領発揮。『鉄板ケーキ』なるものを作つたり、すぐに作れるレシピのクツキーを焼いたりと、その実力を遺憾なく見せつけた。

「いやしかし、栄陽院つてばそのスタイル似合うね、やたら。何て言うの？ その……屋台のお兄さんスタイルつて言うか、男の料理つて言うか」

「ああ、うん、まあ……どうも耳郎。褒められてると独自解釈しとくわ。まあ……言わんとすることはわかるし、自覚もあるから」

髪上げて頭にタオル巻いて、シャツの袖まくつて鉄板や網焼き台に向かつてるからなあ。そういう印象に落ち着くのも無理はない。

次いでそこに芦戸や葉隠も、

「似合っちゃつてるのがすごいよね……違和感全然ないもん。恰好もそうだけど……こうして砂藤と一緒に縁日の鉄板担当みたいなこの図が」

「永久ちゃんつてどつちかつていうと、ヤオモモと同じお嬢様のはずなんだけどね。B級グルメの方が圧倒的に似合つてる気がする」

「いやでも実際……こう言っちゃなんだけど、栄陽院ってそういうイメージだよな最早。色気より食い気っていうか……入学してすぐの頃だっけか? 『私の青春は甘酸っぱいレモン味じゃなくてデミグラスソース味だ』とか何とか言ってたし……」

「あんだそんなこと言ってたのか……」

また微妙に懐かしい記憶を掘り起こす瀬呂の言葉を聞いて、耳郎が呆れたように言っていた。ああ、うん、言ったなあ確かに……昼の弁当交換の時だっけか?

「まあでも、今はレモン味も悪くないかな、って思い始めてるけど」

「おおっ!? そ、そのところは!?!」

「焼肉やバーベキューってあっさりしたレモンだれよく合うよな」

「知ってた」

「ははは、まあ栄陽院だしな」

『永久に春が!?!』とばかりに興味津々で聞いてきた葉隠だったが、答えが期待外れだったために、ずっこけるリアクションとともに、雑談しつつ食べるのに戻った。ははは……残念でした。

恐らく、そんなことだろうと予想してたんだろう。おかしそうに砂藤笑ってるし。笑いながら一切手は止めず、今度はクレープ生地っぽいの作ってるし。

……いやでも実際、最近私、きちんと私生活ではレモン味……も下手したら通り越して、緑谷味の日々を過ごしてんですけどもね。ふへへ。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

「プレゼント☆」

「えっ!? あ……ありがとう……青山君」

バーベキュー、皆で楽しく騒いでる中……結構食べてお腹も膨れてきたので、ひとまず小休止にしようかな、と思って、輪を外れた時のことだった。

にゆつ、とでも効果音がつきそうな動きで、横合いから突如出現した彼……青山君。

彼がさつき作って、皆から喝采を浴びていたチーズフォンデュ。それをたっぷりまぶしつつ、こぼれない程度にしつかりからめた肉の串をもらった。

まあ、ちよつとびつくりしたけど……まだお腹に入るので、お礼を言ってもらっておく。

そのまま彼は……同じベンチ、僕の隣に腰かけて、取り皿によそった料理と、どこから取り出したのかわからないが、ワイングラスにジュースを入れて、ナイフとフォークで食べ始めた。

僕も同じように、貰ったバーベキュー串を食べるけど……何だろう、この空間……？ 何で僕ら今、一緒にいるの？

正直、彼のこと……よくわからないんだよな。

『追試』の時からちよくちよく見てるけど、何というか……不思議系、っていうのかな、こういう人って。あるいは……ナルシスト？

雰囲気も行動も独特で……今までに似たタイプの人に会ったことがないので、上手く付き合い方がわからないっていうか……

彼の『個性』……へそからビームを出す『ネビルレーザー』を見せてもらう場面も何度かあったから知ってるけど、かなり強力な『個性』だ。デメリットはあるけど、破壊力はもちろん、色々と応用できそうな感じだし……見栄えもかなりいい。

加えて、努力家でもあるんだろう。心操君同様、普通科からヒーロー科に編入を狙ってて、しかも先生たちが『最有力候補』とまで言うくらいだし……『個性』のみならず、体も鍛えてるようだ。

この合宿でも、最初の『魔獣の森』に加え、『個性伸ばし』でもその姿勢を見せ続けている。

彼がクラスメイト……になるかどうかはわからないけど、一緒に鍛えて、歩んでいけるなら、心強いし……こつちも身が引き締まる思いだ。皆同様、刺激し合って、一緒に強くなっていけると思う。

そういう感じのことを、僕は、雑談の中で——会話のペースまで独特なので、ついていけるか若干不安になりながら——彼に話したん

だけど……その瞬間、ふいに、彼の笑顔にわずかな影が差したような気がした。

同時に……僕の脳裏に、彼の『感情』が届いた。

……この『感情感知』の能力、戦闘なんかである程度高ぶってるような感情だったりしないと、あまり感じ取れないんだけど……今、彼の心はそんな感じに動いたんだろうか？

しかも、何だろうコレ……感じ取れた感情は……ほんの少しの嬉しさ、奮起。それに好感。

そして、それらを大きく上回る……悲しさと、後悔？

そしてさらに、その次に彼が口にした言葉が、さらに僕を混乱させた。

『ごめん』 そして、『ありがとう』

「……えっと、いきなり何？」

「……いきなり、じゃないよ」

……気のせいだろうか？ さっきまでと同じ笑顔なのに、なんだか……少しだけ遠い目をしているように、憂いを帯びた表情になっているように見える。

青山君は正面を向いていて、顔は半分しか見えてないけど……そんな風に見えてしまう。

「僕らが初めて出会った日のこと、覚えてる？」

「初めて……ああ、うん……覚えてるよ。一応……」

僕と青山君が初めてであったのは、あの『追試』の日……ではない。実はそれ以前に一度、僕らは会っている。といっても……別にこんな風にまともに会話したわけじゃない。どっちかっていうと、青山君から一方的に声をかけられただけ、みたいな感じだ。

それもほんの数秒のことで、それ以降別れちゃって……それこそ『追試』の時まで、会うことはなかった。

学校で何回かすれ違ったりしてるかもしれないけど、そこまでは流石に覚えてないしな。

彼と僕の初対面は、入試の日だ。僕が初めて『ワン・フォー・オー』を使って……見事に腕と足を壊してしまった、あの日。

麗日さんや飯田君と同じように……同じ試験会場に、彼はいた。

筋力がついて、多少動けるようになった程度の僕が、突然現れた敵ロボに襲われて、パニックになりかけていた時に……横合いから飛んできたレーザーが、その敵を破壊した。

言うまでもない。その時僕を助けてくれたのが、青山君だ。

……あの頃の僕は、まだ全然、心も体も弱くて……敵を前にしてビビるのがもう癖みたいなものだった。今では全然、怖くもなんともない敵ロボも……あの時の僕には、それを前にして動けなくなるほどの脅威だった。

だから、その時に助けてくれたことには純粹に感謝してるんだけど……同時に何となく、彼が何を『ぶいめん』なんて言ってるのかがわかった気がした。

青山君……こう言ってたっけな、その時。

『メルスイ！ いいチームプレイができたね』

『でも……君と会うことはもう二度となさそうだ』

「あの時言ったこと、ずっと後悔してた」

そう、呟くように言う青山君。

「煌めきとは程遠い……酷いことを言った」

「いや、そんな……僕、全然気にしてないよ？ 実際その……あの頃の

僕は、全然弱くて、情けなくて……IPのロボ相手に、委縮して動けなくなってたし……全然ダメだったよ」

「そうだね」

肯定された!? しかもノータイムで!?

あ、いや、別にそれはいいんだけど……ちよつと話の流れから『そう来る?』って思っちゃって……うん、僕がダメなのは確かだったからそこは……

「でも、僕が悔いてるのはそこじゃない」

「え?」

「バカにしたようなことを言ったのも、もちろん酷かった。でもそれ

以上に……怯えて何もできない君を見て……上から目線で見て、考えてしまった。……人のことを言えた義理じゃないのに」

その話をしている間は、何というか……独特な彼のペースが、少しゆったりなものに思えた。

考え、顧みながら話しているかのように。

青山君は、常にサポートアイテムのベルトを装備している。

今こうしてジャージでいる時もそうだし……学校でも制服と一緒に身に着けているそう。体育祭の時も、事前に申請して、装着して出ていたらしい。

『個性』を上手く使うため……だと思ってたんだけど、微妙に違うそう。

青山君の『ネビルレーザー』は、そのまま何も着けずにいると、時々レーザーが漏れ出てしまうらしい。これは体質的なもので、改善が難しいものなんだとか。

幼い頃にかかった医者先生に、そう言われたそう。身体に『個性』が合っていない、と。

自力では『ネビルレーザー』を制御しきれず、時々暴発して漏れ出してしまふ。それを防ぐために、彼は幼い頃からベルトを身に着けていた。

「試験で緊張していたとか、自分の力が通用していて浮かれていたとか、理由はいくらでもあった。それでも……自分がそうだった、いや、今もそうであることを忘れて、他人を見下していい気になるようなことをしていた。そう思っただけで……キラメキが遠のく思いだ」

そしてその後、僕はヒーロー科に合格し……青山君は、その篩から落とされた。

普通科には合格していたので、そっちに進学して……ずっと、複雑な思いを抱えて、学校生活を送ってきたらしい。

入試であんなふうに言っておいて、僕が受かって自分が落ちたことへの……自己嫌悪やら、後悔やら、苦悩を抱えて……それでも、立ち止まったり、投げ出すことだけはしなかった。

心操君と同じで……彼も、『ヒーローになりたい』と思ってしまった

から。憧れて、そう思ってしまった以上は……もう、どうしようもないから。

今いる場所で我武者羅に、出来ることをし続けて……しかし、どこか心の中にしこりを残したまま、雄英で普通科として暮らし続けていた。

あんな風なことを言っておいて、この結果。やはり自分には、ヒーロー科なんて、ヒーローなんて、高望みだったんじゃないか。そんな、ネガティブな思いが、ふとした拍子に頭をよぎる日々だったそうだと。誰かの活躍を聞いたり、何か些細なことで失敗したりするたびに。

しかしそんな中で迎えた体育祭で、彼は……普通科の応援席から、決勝戦を見ていた。僕と、かつちゃんとの試合を。

「物言いを悔いつつも、どこかで君と僕は似ていると思ってた。身体に合わない『個性』……無理をして、格好つけて、自分の体を壊してしまう……生まれつき背負ったハンディキャップの中で、あがかなければならない人生。……でも、違った」

「君は、決してあきらめず努力を続けて……強くなった。入試の時は、正直言つて、僕なんかよりよっぽど危なっかしかつた君が……見る者全てに火をつけて、前に進ませるような戦いを見せた。それは確かに、あがいて、もがいて、苦しんだ末に手にした力だったんだと思う……でもそれは、見苦しさなんて欠片もない……磨き上げられた宝石みたいに、舞台の上の君は、輝いて見えた」

「理解した瞬間、それで悩んでた自分が馬鹿らしくなった。体質がどうとか、もしもつと恵まれていたらとか……そんなことばかり考えていても仕方ない。そう思ってしまうのは仕方ないとしても……自分には他にやるべきことがあるし、できることがまだまだある。なら、それが見えているうちは……弱音を吐くのも立ち止まるのも後でいい。自分にできる全部をやつて、上を目指せばいい」

「あの日、君は僕にそれを教えてくれた。だから、ありがとう」

そう言つて、青山君は……言いたいことは全て言つたとばかりに立ち上がり、使っていた食器やら何やらをひとまとめにして片づけて……まだ座つたままの僕に、告げた。

「僕はもう、迷わない。煌めきも、強さも、リスクも、弱さも……全部拒まず、受け入れて……乗り越えて、磨き上げていく。このベルトと、『ネビルレーザー』と一緒に……努力して、強くなって……ヒーローになる。なってみせる」

腰に巻いたベルトに、さするように手をやりながら言う。

最早、彼から感じられる感情に……マイナスなそれは微塵もなかった。

ただただ……感じ取っているこっちまでやる気になるくらいのこと……そう、まさに『煌めいてる』とでも言えそうな、前向きで、力強い意志がそこにあった。

「すぐ追いつくよ。だから、もう少し待ってほしい。その時が来たら……君の光と僕の光で、共にこの世界を照らそう……緑谷君」

「……うん！ その時がすごく楽しみだよ……お互い頑張ろう、青山君！」

その言葉を最後に、青山君はそこから歩き去っていった。

……なんだかな……話を聞いて、嬉しくなっちゃったよ。

青山君からそんな風に思ってもらえてたのか、とか……あの『決勝戦』で、そんな風に人に勇気を与えられてたのか、とか……調子のいいこと言うようだけど、ヒーローらしく（まだ卵だけど）、人を元気にできてたのかな、なんて。

そして同時に、僕の方も……負けてられないと火をつけられた気分だ。

今は普通科だけど……青山君はきつとヒーロー科に来る。そのくらいの実力が、器が、彼にはある気がする……いやむしろ、何か1つのボタンの掛け違えとか、その程度の理由で……ヒーロー科にいてもおかしくなかった、とすら思える。

だからこそ、そんな青山君が認めてくれた思いを裏切らないように……彼のやる気に負けないように……僕も、もつともつと強くなつて、上を目指さなきゃ。

合宿ももう5日目が終わる。残り2日……できること全てをやつて、もつともつと強くなろう。明日は、もつと充実した、やる気に満

ちた一日を過ごせそうだ……！

☆☆☆

「まずは思い知らせろ、茶毘……連中の平穩だの、希望に満ちた明日だの……そんなものは全て、あつてないようなもんだつてことを。むしろ、俺達の手のひらの上だつてことを」

『了解した、死柄木。メンバーが揃い次第、行動を開始する。……にしてもあんた、最近とんと連絡とれなかつたな……電話にも黒霧しか出ないし。どこに行つてたんだ？』

「ちよつとな……先生に会つてたんだ」

『先生……ねえ。お前の支援者で、『敵連合』の黒幕で、その他にもいろいろと得体が知れない、あの『先生』か……今回の作戦の手伝いでも頼んだのか？』

「いや、それはお前らだけで十分なはずだ……先生に出てきてもらうほどのことじゃない」

『ハッ、褒められてんだか、便利に使われてんだか……じゃ、何してたんだよ？』

「……思い出話、かな。俺の過去に向き合つてた」

『……へえ……過去、ねえ……』

「案外とバカにできねえもんだぜ？ 自分の『原点』^{オリジン}に向き合つてのも……おかげで、随分と長いこと忘れてたことを思いだせた……足りなかつたものを、取り戻した気分だ」

『そりやよかつた……かどうかは知らねえが、まあ何かいいことがあつたみたいなのは何よりだ。んじゃ、こつちも吉報を届けられるように、せいぜい頑張るとするかね』

「ああ……楽しんで来い」

——プツッ

第122話 闇の蠢動

「いやー、お風呂気持ちよかったー！ さっすが最高級のタワマン、ジャグジーに簡易サウナまでついてるなんて……水回りの設備もばつちしいのが揃ってるわねー！ 備品として置いてあるシャンプーとかも私一押しのお奴だし！」

ここは、緑谷と永久の暮らすマンション。その一室。

1フロア丸々1つを『デウス・ロ・ウルト』の実践区画として確保しているうちの1つであり……ターニヤが住み込みで使っている部屋だ。

そこで、本日泊まりに来ている『ビューティービスケット』ことビスケは、風呂上り、ゆつたりしたパジャマ姿でリビングでワインを片手にくつろいでいた。

その対面側のソファには、こちらもパジャマ姿のターニヤが、こちらにはホットミルクを飲みながら、何枚かの書類に目を通してしている。

リラックスはしている様だが、目はきちんと仕事に向き合う時だった。

「おまけにお酒もおつまみも経費で食べ放題の飲み放題。いやー、この仕事引き受けてよかったわあ……ターニヤちゃんも一杯どお？

美味しいわよ、コレ」

「未成年に酒を進めないでください。あなたと違って実年齢が見た目相応ですのぞ」

「んまっ、可愛くないこと……いやでも実際、ほとんど何の手入れもなしにこのきめ細かいもち肌を維持してるってのはすごいわよね……うちの店の販促写真に使いたいくらいよ。ね、今度うちの店のポスターに出てみない？」

「私へのヒーロー関連の依頼は、タイアップも含めて全て、軍を通していただかないと受けられませんので。あと個人的にそういうのには興味ないです」

「もつたないわねえ……そんなに可愛くてきれいなのに。あーあ、私もそんなだったらなあ……何で私の体は鍛えれば鍛えるほど見た

目にも反映されるんだか……はあ」

ため息をかき消すように、くびつ、とグラスの中のワインを飲み干すビスケは、直後にボトルを差し出して注いでくれるターニヤから、ワインのお代わりをもらう。

何だかんだで気が利くターニヤに『ありがとう』と返し、

「しっかし、今頃永久ちゃん達は林間合宿も後半戦かあ……どのくらい強くなって帰ってくるかしらね？」

『個性伸ばし』による成長は、多くの場合戦闘能力に……そしてヒーローとしての在り方そのものに直結してきます。基礎固めは夏休み開始までにある程度区切りが付きましたが、ここから先も、今後の彼女達の成長度合いを左右するという意味で重要です。我々指導陣も気合を入れねば。……もつとも、私が彼女達の指導に当たられる期間は、さほど長くはありませんがね」

「あーそっか、『軍務の一環として』派遣されてる立場なんだっけ？」

その期間が終われば帰っちゃうわけか……」

「ええ、あつちでもやることは多いですから。だからこそ、それまでに彼女達のために、やるべきことをやって、残せるものを残していきたいのです」

「こつちもやる気十分つてわけだ。教えてもらえる永久ちゃんと緑谷君は幸せ者ねえ……2年間の訓練を1ヶ月に圧縮して大成功させた敏腕教官の指導を、もう2ヶ月も受けてるんだもの。そりや強くもなるってものよねー」

「本国の203大隊の時の編成・教導時の話ですか……あの時は、24時間全てを最高効率で訓練に費やせましたからね……。まあ、その分負荷も大きくなって、脱落者も出ましたが……極限状況下で30日間もガッツリ鍛えられれば、そりやある程度は成果を出せますよ」

「普通はそこまで行く前にぶっ壊れるわよ。その辺の加減を見極めて『成果』につなげられたのは、紛れもなくあなたの実力でしょう？　そもそも、24時間を訓練に費やすってことは、自分もほぼ同条件下で30日間指導に当たってたってことでしょうか……立派な軍人よ、あなたは」

感心と呆れが混ざり合ったため息をつきながら、ビスケは、つまみに用意したチーズをかじり、続けてワインを口に含む。

飲み下して、はあ、と息をついたタイミングで、ふと思いついたように、

「そういえば……日本に来ることになった『軍務』って何なの？ 前に、この『デウス・ロ・ウルト』への協力だけじゃない、とか話してたわよね？」

「それについては、申し訳ありませんが、機密……」

機密事項、と言いかけたその時……ターニヤのパジャマの胸ポケットに入っていた携帯電話が震え、着信を知らせた。

ターニヤはその画面を確認すると、失礼、と一言断って……リビングを出る。

そしてそのまま廊下で……ではなく、自分の寝室に戻り、ドアに鍵をかけて入って来れないようにした上で……ようやく受話ボタンを押した。

その目は、表情は……永久達を鍛える時か、あるいはそれ以上に引き締まった、まさしく軍人のそれになっていた。万が一にも誰かに内容を聞かれないように、防音の室内にきちんと鍵をかけて閉じこめて話をする姿勢からもそれがうかがえる。

『はい、ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐です』

そして、スマホの画面には『国際通話』を示すアイコンが出ており……彼女の口から出たのは……日本語ではなく、ドイツ語だった。

さらに付け加えれば、彼女にかかってきた電話は、盗聴防止の特殊な回線を介してきており……ここまで来れば、どこからかかってきた電話なのかは説明するまでもないだろう。

『私だ少佐……ゼートウーアだ』

『はっ、お疲れ様です、准将閣下。ご用向きをうかがえますでしょうか』

電話の向こう、渋いトーンの声（やはりドイツ語）で話すのは、ドイツ軍におけるターニヤの上司であり、准将の階級に身を置く、ハンス・フォン・ゼートウーア准将だった。

『日本での任務、まずはご苦勞と言っておく。旧友と親交を深めてくれるそうだな』

『は……任務の上でのことではありませんが、リフレッシュもかねて満喫させていただいております』

『結構なことだ。……このまま、何事もなく終わらせることができれば、いつそよかったのだが』

含みを持たせたその言い方に、ターニヤの目が細められる。

その雰囲気を感じてか分からないが、ゼートウーアはそこから続けて、

『デグレチャフ少佐、私が君に課した任務を覚えているかね？』

『はい、閣下。諜報部が入手した危険情報の裏付け、及び警戒であります。『近々日本で、巨悪が動き出す可能性がある』……との……』

『そのことについて、こちらでも調査を進めていたのだが……動き出すかはともかく、その存在、ないし生存自体はほぼ確実となった。ここ最近、そちらで蠢動している『敵連合』との関連もな……ひいては、君が日本にいる任務期間中に何かが起こる可能性が高い』

『……承知しました。引き続き警戒に当たります』

『頼むぞ。この任務に当たるに際し、有事の際の独断専行権が君に与えられているのは知っての通りだ……戦闘や撃破以上に、情報を確実に持ち帰ることを最重要事項とする。奴は……『オール・フォー・ワン』はそれだけの相手だ。心せよ、少佐……武運を祈る』

『了解しました。では……失礼します』

そう言つて、電話を切るターニヤ。

電話をポケットにしまい、ビスケが待っているであろうリビングに戻る過程で、眉間に寄ったしわをほぐして表情を元に戻しつつ……思考だけは続けていた。

『AFO』……軍大学の機密資料の中でしか私も見たことはない、『超人時代』における最悪の『敵』……超常黎明期から裏社会に君臨する化け物、か……数年前にオールマイトによって打倒されたというそんな怪物が、今なお生存しており、また動き出すとすれば、国際社会とて楽観などしてはいられまい。どれだけの国がこれに気づいて、そして

そのうちのどれだけが、私のように調査のためのエージェントを派遣しているかはわからんが……騒々しくなりそうだ)

☆☆☆

ところ変わってこちらは、某所……警察管理下の拘置所。

個性犯罪者をも幽閉できる施設が揃っている、この『個性社会』の警察施設にあつて……その中でも、幽閉している者達の面子を鑑み、特に厳重な警戒が敷かれている施設の一つ。

そこは現在……警察と救急、そして消防のサイレンが鳴り響き、悲鳴と助けを求める声が響き渡る……ある種の極限状況になっていた。

中と外を隔てる塀や壁は、何カ所も無残に壊され……既にそこは、『閉じ込める』という機能を半ば以上喪失している。

今は、駆けつけた警察やプロヒーロー達が門番のように立ちはだかり、応急処置のできる『個性』によつて簡易的な壁や柵を取り付けることで対処としている形だ。

敷地への立ち入りは、『KEEP OUT』のテープで規制されているが、その外側からでも、中の異様な様子がよく見えた。

あちこちが破壊されているのに加え、戦闘痕と思しきものも数多く見受けられる。血しぶきが壁や床にこびりついたり、『個性』によるものと思しき、溶けたり燃えたりしたような痕跡も、そこかしこにあつた。

その中にあつてひとときわ異質な1つが……まるで『塵』のようなものがあちこちに散らばつていてというもの。

そしてその周辺では、堅牢なはずの壁や塀が、崩れ去つたようになくなつていくというものだった。

「こちら、現場です。数十分前に『敵』による襲撃があつたと目されているここ、○○拘置所ですが、依然として現場は緊張に包まれています。警察や救急隊、機動隊に加え、何人ものヒーローが周囲を警戒し続けており、救助活動は依然継続中です。被害の全容は未だわかつておらず、私達報道陣もここより先に入ることはできません」

規制線の外で、カメラに向かつて、喧噪に負けない音量でリポートを続けるアナウンサー。その様子は、ネットテレビなどで生中継で全国配信されていた。

あらかじめ原稿を用意する時間もなかったのだろう。手元のメモなどに目を落としながらではあるが、正確な情報を伝えるためにはやむなしと、はきはきとした口調で伝え続ける。

「詳細な情報については公式発表を待つまではわかりませんが、周囲で話を聞いた情報によりますと、あの『敵連合』の構成員であると疑われる目撃情報が複数あげられています。また、情報によりますと、この拘置所には数々の凶悪犯が収容されており、そのうちの何名かがこの騒ぎに乗じて逃亡しているとのこと。その中にはあの……」

その様子を、ネットやテレビ越しではなく……現場近くのビルの屋上から、見下ろすようにして見ている者がいた。

10人いないくらいの人数ではあるが、そのほとんどが異様過ぎる風体をしており、下の道路などにいようなものなら、一発で通報されること間違いなし、といった集団だ。

『異形型』という、普通の人間からかけ離れた姿の者達が普通に街を歩いている、この個性社会であつても。

何せ、メンバーの大半を占める『脳が露出した外見』という特徴が、そしてその1人である、手のようなアクセサリを全身にまとっているというその容姿が、昨今、どころか今まさに世間を騒がせている『敵』組織の特徴と一致するのだから。

「死柄木弔……この位置でも『個性』次第では見つからないとも限りません。撤退はお早めに」

「わかっている、黒霧。お前は脳無達だけ先に返しといてくれ」
「承知しました」

答えると同時に黒霧は、自分の体を変形させたワープゲートを形作り、後ろの方に何も言わずに並んでたたずんでいる『脳無』達を飲み込んでいく。元いた場所へ戻し……必要そうであれば、再度調整を行って状態を万全にするために。

その場に残されたのは、黒霧と死柄木、そして……もう1人。

「しかしまあ、見事に騒ぎになってんなあ……上からだとよく見える。なあ、どう思うよお前、この光景見てよ？」

「……なぜ俺を助けた？」

「会話する気はなしか？　せつかく出してやったつてのに……お堅いねえ」

「質問に答えろ。なぜ俺を牢から出した……何が目的だ、『敵連合』死柄木」

「……目的はあんた自身さ……『オーバーホール』」

動きを封じる拘束服に身を包み——拘束自体は既に解除されているが——トレードマークのペストマスクこそないものの、鋭い目には未だ獣のような危険な光を宿し続けている、その男。

指定敵団体『死穢八斉会』若頭……ネームドヴィラン『オーバーホール』。

数週間前にあった一件で、不法行為を摘発されて逮捕され……その直後には、組も解体され、腹心であった部下たちも全員逮捕され……監禁していた義理の娘も保護された。

繋がっていたブラックマーケットのルートも芋づる式に摘発され、最早帰る場所など残っていない男ではあるが……そんな悲壮さなど、微塵も感じさせない。ぎらついた眼光で死柄木を睨む。

「……俺に、『敵連合』に入れとでも？」

「少し前までの俺ならそう言ったかもな。けど違う……自分から認めたくわけでもない限り、あんたは誰かの下につくことに甘んじるような性格じゃないだろ」

「なら何が目的だ？　まさか、気まぐれでここまでのことを起こしたわけじゃないだろ」

「それでもよかつたんだがな……まあ、1つ提案はさせてもらおうと思ってるよ。だがその前に、俺の方からも聞かせてくれ。……こうしてまあ自由になったわけだが、あんたこれからどうする？」

「……俺のやることは変わらない。組を……『死穢八斉会』を復活させる。ヒーローや警察に怯えてこそこそやってるようなケチな規模

じやなく……本当に、あるべき姿に戻るまで」

それを聞いて、死柄木は何も反応しない。

手のアクセサリーに表情が隠れているせいもあるが、何も言わず、黙って治崎の話を聞いている。続きを促すように、沈黙をもって、視線だけを寄こして。

「俺と組長、そして壊理がいれば、組は死なない……何度でも復活する。させてみせる。既に道筋とノウハウは組み上がった……後は、また手下を集めて力を蓄えて……次は上手くやる。そうじゃなきゃ……組長に……オヤジに合わす顔がない」

「そうか……それに関して俺から言うことは何もない。頑張れ、くらいだな。ただまあ、あえて言わせてもらおうなら……それだけじゃないよな、ヤクザ？」

「？ 何がだ？」

「俺も詳しいわけじゃないんだが……ヤクザってのは面子の生き物だって前に読んだことがある。おたくの組長さんも、組の『看板』に傷がつくようなことや、バカにされたり舐められるような真似をされるのは許さない質だったんだろ？」

聞きようによっては、治崎へのある種の皮肉とでも取れる言葉だったが……治崎に反応はない。

自分は100%、心の底から、組と組長のために動いている、自分の行動こそが真に組のためになると確信している治崎には、わからない、あるいは、わかっていても気にするようなことではなかったのかもしれない。

どちらにしろ、何も言わないのなら、と死柄木は続ける。

「だったらすべきことがあるよな……まあ、俺が言うまでもないかもしれないが……お前にここまでの苦汁をなめさせ、組を解体し、大切なものを奪い取った連中に……いずれは復讐するだろ？」

「……当たり前だ。来るべき時が来たら、落とす前は着けさせる」

「それでこそヤクザ者だ。……でだ、ここでさっきの提案なんだが……ちよつくらそれを、前倒しでやってみる気はないか？」

「……どういう意味だ？」

それには答えず、死柄木はコートのポケットから1枚の紙を取り出した。

折りたたまれて、何が書いてあるのかは開かないと読めなそうだが、それをそのまま治崎に渡し……治崎がそれを開いて見ると同時に、

「明日の夜……そうだな、今くらいの時間だ。ちよつと俺達『敵連合』は、皆で揃って遊びに行く計画を立てていてな……よかったら一緒に行かないか、つてお誘いだ」

死柄木の話聞きつつ、紙に目を通した治崎は、読み終わったところで聞き返す。

「……なるほどな。ここでお前らの『遊び』に手を貸せ、と？」

「いや、行動は指定しない。行つた先で何をしてくれてもいい……無差別に暴れるもよし、自分のターゲットを探し出して殺すもよし……だ。気が乗らないなら別に来なくてもいいが……もし一緒に行つてくれるなら、俺の仲間には手を出してくれるな。それ以外は好きにしろ」

「……………」

「その気があるなら、それに書いてある場所に、時間までに来てくれ。繰り返すが、気分が乗らなけりや来なくてもいい……後のことは知らん、好きにやってくれ」

「……本当に来なかつたとしたら、お前、今日丸々無駄な苦労だったことになるぞ？」

「それならそれで構わないさ。あんただけが目的だったわけじゃないしな……。ああ、それとその紙、読み終わったら……」

「……………ふん」

最後まで聞かず、治崎は紙を『個性』で粉々にした。

「燃や……あー、どうも、汲んでくれて」

「……………1つ教えておく」

「あ？」

「ヤクザは30分前行動が基本だ。……迎えに来るのはその黒い奴だろ……覚えとけ」

「……だとよ、黒霧」

「かしこまりました。明日、30分早く迎えに上がりますよう」

言いながら、黒霧は再びゲートを開くべく、霧状の体を展開させていく。

「人の目がありません、歩いて移動するのは困難でしょうから送りましょう。ご希望はありますか？」

「……港湾地区の適当な裏路地に送れ。後は自分で何とかする」

「承知しました。では……どうぞ」

黒霧のゲートをくぐって消えた治崎を見送りながら……死柄木は、ふう、とため息をついた。

「自分が今、誰のために何をやっているか……それがわからないまま、妄信だけで突っ走ってる奴ってのは……傍から見てもあんな感じなのか。ヒーロー殺しといい……哀れなものだな」

「よろしかったのですか、死柄木弔？　ここで貸しを作っておけば、配下とは言わずとも、今後の協力関係を築くくらいはできたのでは……」

「さっき言った通りだ、ありや他人の下につくことよしとするような奴じゃない……というより、あんなの危なっかしくて下に置いとけるかよ」

もう見えなくなってしまった背中を、その迷いない目を思い出しながら、死柄木は言う。

ある意味で予想通りだった、治崎という男について、彼なりの理解を語る。

「ヒーロー殺し……オーバーホール……緑谷出久……そして、オールマイト。思想も立場も年齢も……何もかも違うこいつらに対して、俺が今まで無性にイラついてた理由が、こないだようやくわかった」

「？　その4人に……何か共通点が？」

「ああ……こいつらは、結論が決まった道歩いている」

ヒーロー殺し……ネームドヴィラン『ステイン』。オールマイト以降最悪の敵の1人と言われる（公に知られている中では）その男は、

『贗作』たる拝金主義のヒーロー達を殺し、痛めつけることで、世間に『本物のヒーローのあるべき姿』を取り戻させようとした。

そうすることで、いずれ『真の英雄』を取り戻すに至ると思っただけで動いていた。

治崎……オーバーホールは、手段を択ばず金と黒い権力を手にすることで、それを元手に『ヤクザの復権』を成し、再び『死穢八斉会』を偉大な裏社会の覇者にできると思い込んで、その為だけに動いていた。それ自体を、他らなぬ組張本人に否定されているにも関わらず……ただ、そうすることが組の、恩人のためになると、信じて疑わず……守るべき組長や壊理すら傷つけて。

緑谷出久は、ヒーローの卵として、立場は前の2人とは真逆に近いが、その身に宿した『個性』を、そして戦闘技能そのものも順調に磨き上げ、ゆくゆくはプロヒーローとして社会に羽ばたき、平和を守る英雄になれるように日々精進している。尊敬するオールマイトの望みに答え、彼のように世界をその拳で平和にするまでになれる日を夢見て。

そして、オールマイトは……名実ともに『平和の象徴』として、存在そのものが悪への抑止力となり、この国の犯罪発生率を抑えるまでに至っている。それで満足せず、今でも現役のヒーローとして、行く先々で精力的に事件解決に貢献し、その拳を振るい続けている。彼の存在こそが、『個性犯罪』が蔓延するこの社会に、ここまでの平和と安寧を保たせていると言っても過言ではない。

それらを全て認識した上で……死柄木は、その先を見た。

つい先日思い至った、その先にある『闇』を。

死柄木は再び、眼下に広がる光景を見た。

襲撃現場となった拘置所。その規制線の周りには、多くの報道陣や野次馬が押しかけて、『入らないでください』と呼びかける警官たちの肩越しに、どうにかして現場を見ようとしている。

その数は明らかに、先程よりも増えていた。

「……あいつらはどうしてあんな風に、犯罪の現場をアトラクション感覚で見に来れるんだと思う？ 犯人が戻ってきて再び破壊活動を

おっぱじめるとか、残りの囚人が脱走して暴れ出さないかとか、考えないのかね？」

「ヒーローや警察がいるから、いざという時でも大丈夫、とでも思っているのかもしれないね」

「お気楽なもんだよなあ……そんな風に考えられる時点で。オールマイトがいれば安心、ヒーローがいるから問題なし……何から何まで対岸の火事、テレビ画面の向こうで起こってる悲劇は、自分の身には降りかからないと根拠もなしに確信して安心してる。そしていざ問題が起これば、自分達が信じて任せていた……全部投げていたヒーローを嬉々として糾弾するんだ。そういう連中自身も大概だが……それを可能にしちまつてるこの国の、たるみ切った空気って奴が俺は嫌いだよ」

「ゆえに、オールマイト……ですか」

「あいつからすれば、この、一般人が安心して平和に暮らせる社会ってのは、望んで作り上げたものなんだろうさ。これでよかったと思ってるんだろうし、これからも維持していきたいと思ってる。先生の言う通りなら、弱つちまつてる今の体に鞭打って活動続けてるのもそのため……皆同じだ、自分が信じるもののために全力を尽くし、その理想をかなえることが、最高の未来につながると……あるいは、繋がって、形作れたと信じて疑わない。……その裏に、目を向けることもなく」

「……」

「ヒーロー殺しがほんの一部のヒーローや敵を引き締めたところで、奴が捕まれば逆戻りだ。むしろ、模倣犯や思想犯を余計に生み出し……そして、インゲニウムのように、その過程で『生贄』にした連中は、そしてその家族は、改心も理解もしない、ただ悲しみと憎しみだけが残された」

「オーバーホールは組のためとか何とか言つといて、徹頭徹尾その組長自身が説いていた『任侠』のあり方を無視し続け、組長をその手で傷つけ、組そのものもダメにした。そこまですといて、失敗したのは自分のせいじゃないとか、大局を見ないバカ共が悪いとか抜かしてやる」

「オールマイトは確かに平和な世の中を作ったが、その結果がご覧の墮落だ。考えることや、本来持っていない危機意識や緊張感すら捨て去ったバカ共が、それでも生きていける世界を作っちゃまった。それを守るヒーローが、何かあれば責められるような理不尽な平和をな」

「そして緑谷出久は……その世界を守るために、これからの人生を費やそうとしている。青春する暇もない修行の日々に身を置いて、妄信、あるいは崇拜するオールマイトの後を追いかけるべくひた走っている……どいつもこいつも見えてないし、見ようとしてもしていない」

「ただひたすら、そうなるべき結果や目標だけを、達成して築き上げた成果だけを見て、その過程で置き去りにしたもの、そうならなかった日陰者たちの領域……そういう『臭い物』に蓋をして、見栄えのいい部分だけ見て満足している……だから後になって色々ガタが来るし、そいつらはどうしてそうなったのか理解できない。俺達みたいな連中が湧いて出るのを、結局、俺達が『悪』で『敵』だからっていう、そういう結論に結び付けて思考停止させることしかできない……実際は、コーラを飲んだらゲップが出るくらい、当たり前前のが起こってるだけなのにな」

自分の手のひらと、眼下でたむろしている群衆を同時に、交互に見る死柄木。

その胸中には、幼い頃から『先生』に教えられた、『気に入らないものは壊せ』という教えの元……その力を、今見ている者に向けてしまいたいという欲求がこみ上げる。

しかし、ひとまず今は蓋をすることにしたようだ。その光景に背を向け、黒霧に向き直る。

「型にはまった世界が生きづらくて、へらへら笑ってる奴らが気に入らなくて、今に満足できなくなつて……全部ぶっ壊そうと考える。瓦礫の山に全てを還し、そこからまた作り直そうと。今より不便で苦労も多なくても、それが自分の選択の結果なら納得できるし、今よりは多分ましだ」

「……なるほど。今回集まった彼らの大部分に当てはまりそうな理屈

ですね。確か今回は、生徒の中からそれに近い思想を持っていそうな者を選んで勧誘する計画もあったかと思いますが。確か……爆豪勝己、でしたか？」

「そうだな、体育祭の表彰台で暴れてたあのガキ……見た目もまあ、笑えるくらいこつち向きだった……いかにも抑圧されてそうな感じの、窮屈そうな奴だった。それに、もう1人……こつちは正直迷ってたんだが、無理そうだからやめた奴がいた」

「？　もう1人……？　誰でしょう……轟焦凍ですか？　それとも、栄陽院永久ですか？」

現在すでに『標的』にしている爆豪以外に、体育祭で活躍していた2人を思い出して、黒霧は問いかける。

片や、N O、2の息子という立場ゆえに、過酷な幼少期を過ごし、人生の選択しを半ば奪われた状態で無理やり英才教育を施されてきた少年。片や、思想はともかく、思い切りの良さと『個性』の優秀さゆえに元々目をつけており、何らかの形で利用できないかと思っていた少女。

しかし、死柄木の答えは……

「いや、どつちも違う。俺が目をつけてたのは……緑谷出久だ」

「……緑谷出久、ですか？　彼を、勧誘しようかと？」

その答えを聞いて、黒霧は、意外だ、と思うことしかできなかった。一番ありそうにないと思っていた人物の名だ。

USJで殴り飛ばされた因縁ももちろんだが、先程までも散々『気に食わない』と言っていた相手。現在、恐らくは死柄木が最も『殺したい』相手の1人であろう男である。

それを、一時でも『仲間にしようか』と考えていたなど、思いもしなかった。

「ま、さつき言った通り、気に食わないし、仲良くできなさそうだし……見込みがあってもそんなじゃダメだなと思ってやめたけどな、誘うの」

「見込みはある、と評価していたこと自体が驚きでしたよ……一体、彼の何があなたの琴線に触れたので？」

「……こないだ話した時に気づいた。あいつは恐らく……『闇』を知ってる」

思い出すような調子で、死柄木は、先程までとはどこか違うトーンで語りだした。

その目には、黒霧が映っているようで……何か、違うものが……あるいは、過去の過ぎ去った光景が見えているようでもある。

「オールマイトを目指してるくせに、オールマイトと全然違うんだ。まっすぐな目で自分の信念を語りながらも、その目は、ヒーロー殺しとは違った。迷いが、弱さが、不安が……残ってた。ただ意思の力で押し殺してるだけだな。あいつはオールマイトを崇拜してるけど、自分がやること自体には、それが全部正しいとか思っちゃいないし、狙った成果を出せるなんて確信してもいない。臆病に、慎重に、手探りで、自分が『できない奴』だってことを前提にして歩んでる。以前より自信をつけた、っていう評価を差し引いてもだ」

「ゆえに、素質がある。そして、『闇』を知っている……ですか」

「知ってるんだ。この世界には、スポットライトを当てられてないだけで、不幸な奴、報われない奴、置き去りにされた奴、踏みにじられた奴……そんなのはいくらでもいるってことを。ヒーローのせいで不幸になった奴でも知ってるのか、それとも自分自身が何かそういう過去を持つてるのか……。ヒーローへの憧れと、ヒーローは絶対でも完璧でもないという認識が同時にあって……それを抱えて、それでも歩いている。だからこそ、見込みがあつて……しかしだからこそ、向いてない」

「なるほど……そういう矛盾を認識していてもなお、彼は自分の意思で、それでもヒーローになる……そう決めた。ゆえに、あなたとは決定的に相いいれない」

「……ひよつとしたら、あいつと俺は似てるのかもな。闇を知って、その上で……何かのきっかけで、窮屈な中でも光に生きることを決めたか……それとも、何もかも全てぶっ壊そうと思ったか……それだけの違いだったのかもしれない。条件が違えば、俺とアイツの立ち位置は逆転してたのかもしれない。……まあ、それでも……」

ふっ、と自嘲するように、短く笑う死柄木。

「もう、遅い。俺は俺で……きちんと思い出して、きちんと考えた上で……もう決めてる」

おもむろに、その手で、五指でもって……今いる屋上の排水設備の1つであろうパイプに触れる。

すぐさまそのパイプが崩れ始め……しかしそこで止まらない。パイプが固定されている壁面にも、『崩壊』が伝染し、塵になって崩れていく。

壁が、扉が、床が、天井が、どんどん崩れていき……つかむものもなくなってしまう頃には、屋上への出入口が丸ごと消え去り、向こう側が見えるまでになった。

崩れてできた塵が、風に吹かれて飛んでいく。

同時に死柄木は、ずきん、と手に鈍痛が走るのを覚えた。

『崩壊』を行使し終えた手を見ると、やや震えているのに加え……所々、内出血が起こったようになっていく。『個性』の反動であることは明らかだった。

(……まだ、馴染んでないか……)

「……緑谷出久には、正直、むかついてるが……同時に感謝もしてるよ。あの日、ショッピングモールであいつに会って話をしたおかげで、俺もわかった。気に入らないものはぶっ壊せばいい……でも、その前に一回そいつとよく向き合ってみると、割と色々わかることもある。その後で改めてぶっ壊すのと、何もせずにぶっ壊すのでは……同じように色々違う。それもわかった」

「だから、自分の過去を知りたい、などと話していたのですか。そして……聞かされた」

「聞かされて、思い出した。生まれる前から俺が、普通の人生を奪われていたことも……よく言われる、地獄への道は善意で舗装されてる、って言葉の意味も。そしてその上で……決めた」

死柄木は、風に吹かれて散っていく塵を見ながら、顔に付けていた手のアクセサリーを取った。

その際に吹いた風が、彼の前髪をふき上げ……その顔が、夜の闇の

照明の光……ビルの屋上に届くわずかな光量に照らされる。

「……俺は、『死柄木弔』だ。『志村転狐』じゃあ、ない」

「……………」

「かつて、過去をぶっ壊したこの手で……俺は今度は、全てをぶっ壊す。平和も、未来も、優しく残酷な幻想に包まれた、この世界も……そして……」

——俺が選ばなかった道……その先にいるんであろう、お前も。

最後の一言は、言葉にはされなかった。

それきり沈黙した死柄木は、手のアクセサリを顔につけ直し……黒霧に指示してゲートを開けさせ、その場を後にした。

ほどなくして、黒い渦は忽然と消え去り……屋上に静寂が戻った。

奇しくも、同じ日、ほぼ同じ時間。

全く違う、しかし、少しだけ似ている2人は……それぞれ、胸に秘めた思いを再確認し……この先へ進んでいく決意を固めていた。

その二つがみたび交わる日は……そう、遠くはないのかもしれない。

第123話 襲撃

林間合宿も大詰めの日。

基礎的な訓練で合格点をもらい、コスチュームを着用して本格的に『必殺技』を作る、あるいはすでに作ったそれに磨きをかける段階に入っている者も割と多くなってきていた。

先生達の話だと、実質のところ、本腰入れて修行するのは今日まで、明日は総仕上げの模擬戦とか最終調整らしいし……ラストスパートってことで、『個性伸ばし』に『必殺技』に、全力で追い込みかけてる生徒が多い。

その分エネルギーの消費も激しいので、私が作る『トワビタミンE』もよく売れる売れる……ちよいちよいコレ作るのに時間取られたわ。修行中に。

……ちよつと不安なんだけど、皆、コレ飲んでハイペースで修行するのに慣れちゃって、雄英帰ってからも私、定期的にコレ作るのが仕事とかにならんよな……？

地味に時間的にも体力的にもリソース食うんで、ちよつと……いや、時々ならいいけど、頻繁に要求されるのは勘弁してほしいとかね？

というか、『トワビタミンE』もそうだけど、この林間合宿の間……私結構、皆の世話してたよな……。

『個性』の使い過ぎで体にダメージ入った連中を、体力的には『トワビタミンE』で、ケガとか筋肉痛は『コンセントヒール』で治癒を促進させて。

まあ、私自身の経験値にもきつちりなつたから、文句はないけど……

それに、そのおかげでぐんぐん成長していく皆を見るのも……緑谷に限らず、そういう風に世話を焼くのは嫌いじゃないというか、見ている楽しかったというか。

このへんも、『アナライジユ』の、ないしは『幾瀬』の血なのかもし

れないな。

全力で頑張ってるのをきちんと傍で見ているからこそ、こうして皆、1つも2つもレベルアップしている光景を見ると……うん、こっちまで達成感が出てくるな。

例えば、ふくらはぎの器官を無事に強化し終えた飯田は、とんでもないスピードで動けるようになっていた。小回りが利くかと言われればまだ要調整だそうだが、その速さはちよつと目で追うのも難しいレベルだし、キック力も当然強化されている。

超加速の持続時間も、10秒しか持たなかったのが、3分くらいにまで伸びたらしい……お手本のような成功例だな。

切島も、『安無嶺過武瑠』^{アンブレレイカブル}だかの持続時間や強度が伸びてたし、峰田や瀬呂も許容上限が伸び、今までよりも長く、ないし多く『個性』を使えるようになってた。

取陰は体のパーツを50個もの数まで分裂させられるようになってたし、塩崎も『ツル』の量と展開速度、操作性が磨かれていた。

その他にも、皆、それぞれこの合宿の中で大きく成長できている。無論、私や緑谷も含めてね。

……というか、恐らくけど……この合宿の中で一番成長できたの、間違いなく緑谷だと思うんだよなあ……ちよつとコレやり過ぎじゃないのかってレベルまで強くなつたし、出来ることも増えたし。

強化する『個性』……恐らくは『ワン・フォー・オール』という名前なんだろうそれに加え、捕縛に移動に自在な『黒鞭』も安定して使えるようになり、さらに、私がやるみたいな『エネルギー操作』系の技能まで使えるようになった。

特に、私がエネルギーを譲渡した際、その操作・制御能力が、もうなんか、自分の『個性』みたいに自在に行えているのは……ホントにその、成長しすぎじゃないかとちよつと思つた。

いや、悪いことじゃないのはわかるよ？ むしろ喜ばしいことなんだろうと思うし……けど、あまりに急に、今までの緑谷から見て脈絡ない感じの成長だから……私や緑谷本人はもちろん、先生達も『なじやこりゃ』って目を丸くしてたなあ……

全く違う系統の能力が発現していることからして、今までに前例のない成長の仕方してるから……今後の指導方針にも影響するだろうって、慎重に観察してるみたいだった。

とはいえ、今のところは何かデメリツト的なものは特に出てきてないので、純粹にできることが増えた、強くなった的な受け止められ方をしてるけどもね。

……しかし、この緑谷の成長……というか、最早これは進化、ないし変容といってもいいようなものに思えるけども……

……タイミング的に、私が緑谷のものになったあたりから急に進み出したような気がする……っていうのは自意識過剰だろうか？

いやでも、何か最近……私の方も色々変なことが起こってる気がするしなあ……

『個性』の成長もそうだけど、ここ最近よく見るようになった、あの夢……今思うと、あの手の変な夢を見た後あたりのタイミングで、緑谷に何らかの異変が起こったり……しかも、その異変や成長つてのいくつかは、私の『個性』に関係してたり、よく似ていたりする気も……

……偶然……じゃない気がするんだよなあ。

まあ、何にせよ……緑谷が強くなれてるっていう点を見れば、私としては喜ばしい。

もしこれが、何らかの形で私が、あるいは私の『個性』が彼の役に立っているんだとすれば、猶更に。

ともあれ、考えてもわからないことを考えすぎては仕方ない。

今は『パワーアップできてよかったじゃん』くらいにとらえておいて……何か後から問題がでてきたら、その時に考えるところでしょう。

☆☆☆

さて、そんなこんなで無事に合宿6日目も、修行の時間が、そしてその後の食事やら何やらが終わり……お楽しみのレクリエーションの時間となった。

合宿最後の夜となる今日、予定されているのは、花火。そしてキャンプファイアーである。

うん。まさに夏のキャンプ的行事のラストを飾るにふさわしいイベントだ……と、個人的には思う。

ただ、花火だけならともかく、キャンプファイアーをするには、宿泊所の周辺は……うん、危険だ。緑が多すぎてというか、森の真ん中過ぎて。

なので、少し遠くにある開けた空き地みたいな場所に行くことになった。

遠くに行っても、せいぜい歩いて15分から30分くらいである。

というか、生徒達の一部が訓練場として使っていた場所の1つなので、行ったことのある生徒も多い。轟とか爆豪とか、森林火災にならないようにそこで炎系の技の練習してたらしいし。

ただ、その準備をするのは私達生徒である。レクリエーションは、いわゆる『飴と鞭』の飴の部分ではあるけども、そこまでは流石に先生達もしてくれないので。

なので、キャンプファイアーに使う薪やら、あらかじめ用意はされていた花火やら、そういったものを手分けして運んでいくことになったわけだが……

「こういう時に小大の『個性』って助かるよなあ……ありがと、おかげで楽できるよ」

「ん」

かなり重労働になると予想された、キャンプファイアー用の薪を運ぶ係。

力自慢の私や砂藤、宍田や緑谷が当番としてあたっていたんだけど、B組の小大の『個性』……もの大きさを自在に変えてしまう『サイズ』によって、見事に出番がなくなった。

大きさに合わせて、重量も変化するので、薪全部小さくした後は、コンビニのビニール袋に入れてそのまま片手で持って運べる感じになったのだ。

いやまあ、今言ったように、楽でいいんだけどね？

念のためというか、キャパのことも考えて私らも同行してただけ
ど……小大もこの合宿で『個性』の要領を大きく伸ばし、キャンプフ
ィアの薪くらいなら縮めて持ち運べるだけの力を手に入れてい
る。1人で十分だったな。

「量があるから時間に余裕持つて動いたけど……だいたい早く着いちゃ
うね」

「まあ、遅れるよりはいいだろ。集合場所にいけばまだ他に仕事とか、
手伝うこともあるだろうし」

「そうだな。消火用の水とか、色々現場の準備、先に行つてる連中がし
てるはずだし……それこそ現場着いたら、今度こそ力仕事あるだろ」
「キャンプファイアの組み木など、先に済ませてしまえば後から
楽でしような。どのみち、花火を持つてくる班が合流しなければ始ま
らぬゆえ、できることをやって待つとしましょうぞ」

キャンプファイアの会場へは、それぞれの準備班が、担当するも
のを運んできて集合する手筈になっている。

薪担当の私達以外にも、花火担当、その他雑貨担当といった感じで
分けられているし、もの運び以外にも、会場設営その他を担当する班
もいる。全員揃うにはもうちょっとかかるだろう。

「しかし、花火とか薪とか、色々使うものあるのはわかるけど……なん
だつてこんな風にあちこちにばらけさせて保管してんだろな。おか
げで班分けして方々に散つて、それぞれ運ぶの無駄に手間食う感じに
なつてるけど」

「それは仕方ないんじゃないかな。ものによつてはホラ、森の中とか
山の中にまで運ぶの大変な物もあるだろうし、危ないからある程度開
けた場所に保管しておきたいとかいうのもあるんだと思うよ。花火
とかがまさにそうだけど、燃えるものを森の中に置いておくのは危な
いでしょう?」

「薪などの大荷物になるものもそうですな。少量ならともかく、ある
程度以上の量であれば、少なくとも軽トラか何かが行き来できる場所
への運び込みに限られましょう。まあ、『個性』によつてはそれも別で
しょうが」

「ま、安全のためにそうしてるんなら、考えすぎてダメってことはねーだろうし、いいんじゃないか？ それこそ、森林火災みたいなことになつたら洒落にならねえわけだし、引火して爆発するようなもんを……」

と、砂藤が言いかけた……その時。

——ドオオオオオオン!!

「「……………っ!?!」」

遠くからの、しかしはつきりと聞こえるほどの音量の……おそらくは、爆発音。

耳にした私達は、思わずぎよつとして聞こえた方を振り向いた。

するとその方角には……暗くなり始めている空の、夜の闇を押しつけそうな大きさの火柱が、そして黒煙が立ち上っていた。

「……………? 何、アレ……」

「森林火災……いや、つか、爆発音したよな？ まさか、花火に引火して、とか……?」

「いや、無理あるだろ。用意されてた花火なんて……いくら可燃物だつっても、家庭用の奴だろう？ いくら皆でやるから量が用意されてたつて言つても……パーティー仕様の何百袋用意したらあんな、兵器じみた威力の爆発起こせるんだよ」

「じゃあ、アレ……何?」

「いや、それはそれでわから……」

『——皆!』

と、その会話をさらに遮って、頭の中に声が響く。

マンダレイの『テレパス』だ……『ワーキングホリデー』の時もこの合宿中も、何回も聞いて、最早馴れ親しんでると言つていいほどになじみのある感覚だ。

けど、この……あきらかに切羽詰まつてる感じの声音とか気配

は……それこそ、『ワーキングホリデー』の時に聞いたくらいだな。

そしてそれはすなわち、あの時と同じような、何かろくでもないことが起こっている、という意味で……

『敵』^{ヴァイラン}2名出現！ 他にも複数いる可能性あり！ 他の班や位置を見てるワイプシの他のメンバーと無線が通じない！ 通信妨害の可能性大！ 全員すぐに施設に戻って！ 会敵しても決して交戦せず撤退を！』

「……おい、マジか」

「そんな……じゃあ、今の爆発は……！」

「何で、『敵』が……バレないんじゃないのかよ？」

「話は後です！ 今は指示通り避難をせねば……急いで施設まで戻りましょうぞ！」

「ん……！」

予想外にも程がある内容に困惑しつつも、私達は、『テレパス』で届いたマンダレイの指示通りに動く。すぐさま反転し、駆け足で施設に向かう。

その途中、足を止めないままに考える。

何だっこここに……こんな場所に『敵』が現れたのか。

街中で偶然『敵』の犯罪に出くわしたり、巻き込まれたりするのはわけが違う。こんな山奥で偶然『敵』と遭遇するなんてことは、まずありえないと見ていいだろう。

つまり、その『敵』とやらは……何らかの目的で、狙ってここに来たっことだ。

その目的が何か……私ら雄英か、はたまたワイプシかはわからないけど……これまでに起こったことを思い返す限り、最悪の想像をするなら……

……と、そこまで考えた瞬間、先頭を走っていた緑谷がはつとしたような表情になり、急ブレーキをかけたつ振り向いた。

それを見て私も、とっさに同じようにしてその視線の先を目で追い……次の瞬間、緑谷がそういう行動に出た理由を、一体何を察知したのかを知った。

そして同時に、緑谷と私は飛び出して……

『セントリススマッシュ！』

「400%！ &……『エネルギーバインド』！」

緑谷の飛び蹴りと、私の飛び膝蹴りが同時に放たれ……茂みから飛び出して、小大に襲い掛かろうとしていた『何か』に直撃。蹴り飛ばして地面に転がす。

同時に発動した私の『エネルギーバインド』により、動きを大きく阻害されているその頃の全容が……もう薄暗い時間帯ではあるが、私達の目で見ることができた。

そして、それにより……あまりありがたくない事実も、明らかになったのだが。

その姿を見た私達は、一様に息をのんでいた。

なぜなら……それは、どう見ても……

「……脳……無……!?!」

「……おい、こいつが出てくるってことは……襲ってきた『敵』って……脳が露出した外見という点で共通している、異形の怪人……『脳無』。」

こいつを戦力として投入してくる組織は……たった1つだ。

^{ヴァイラン}「敵……連合……!?!」

……最悪だ。

折角の合宿、最後の最後に……ケチがついた……いや、ケチどころじゃないな。

何せ、相手が相手……どう考えても、ただ騒がしくするだけに、闇雲に暴れるだけで帰っちゃくれない組織だ……何のためにこんな山奥まで来たのかはわからないが……こりゃ、えらいことになる気がする……きた……!」

なるべくなら当たってほしくない、そんな懸念が頭をよぎった瞬間に……さっきの爆発音とはまた別な、いくつもの方向から……爆発音やら、破壊音やら、地響きやら……取り留めもない、しかし不吉な音ばかりがいくつも聞こえて来た。

ホント……最悪だ……!」

第124話 『開闢行動隊』来襲

雄英高校、ヒーロー科1年の夏の恒例行事『林間合宿』。

例年と違い、ヒーロー科以外からも生徒を参加させ、例年よりもさらに気合を入れたカリキュラムを組んで行われたそれは、充実した時間の中で大きく生徒達を成長させ……大成功のうちに終えられようとしていた。

最後の夜、花火とキャンプファイアーによつて、この6日間の苦労をねぎらい、助け合い、高め合いながら過ごした日々を振り返り、導いてくれた教師や、ワイプシラプロヒーロー達に感謝し、明日の最終日に向けて英気を養う時間になる……はずだった。

しかし、楽しいはずの時間は……始まるのを待たずして、恐怖の夜に変わる。

春先にもその姿を見せた、『敵連合・開闢行動隊』の襲撃によつて。キャンプファイアーの準備のため、手分けして会場を設営したり、ものを運んでいた生徒達や、それに付き添っていた教員、あるいはヒーロー達。

あちこちで『敵』との遭遇が起こり、否応なしに戦闘に巻き込まれていく。

状況は奇しくも、USJの時に近い。あの時は、黒霧によつて各所に『飛ばされた』結果、そこに待機していたチンピラ同然の『敵』を相手に、否応なしに戦うことになった。

しかし今回は、各所に散らばるように生徒達が最初からおり、そこに敵が襲撃をかけてきた形になる。あの時よりも数は少ないが……その分、油断などできないレベルの、『少数精鋭』が。

備蓄されていた花火……ではなく、恐らくは敵が持ち込んだ爆発物か何かによる轟音。

それによるものか、森のあちこちで火の手が上がっている。

さらには別な区画では毒ガスが充満し、また別な区画では道が崩れて通れなくなっていた。

移動すら満足にできない状況の中、容赦なく『敵』は襲ってくる。

「うぬら一体何をしに来た!？」

振るわれる虎の剛腕を、あっさりとは言わないまでも、揺るがず片手で受け止める男……『マグネ』。

大柄でがっしりした性格に加え、布の巻かれたこん棒のような武器を手に持っているその男はしかし……その外見と野太い声にはミスマッチな口調が、逆に不気味さを醸し出していた。

「あらやだ、そんなに怒らないでよ。用事がないと襲いに来ちやいけないのかしら?」

「一週間……と言うには少し足りんが、この修行の日々を乗り越え、夢に向かって羽ばたこうと汗を流して歩む若人達……そのひと時の安息を邪魔しておいて、ふざけたことを抜かす……!」

「その未来ある若人に用意されているのは墮落の道か? ヒーローとは私を滅し、他を救う、それに全てをかける者の尊号なり。それを教えずして何を威張り腐るかア!」

「っ……当たり前だけど話通じないわね!」

一方で、トカゲのような異形の風貌の男……『スピナー』は、無数の刃物を鎖で束ねて作った武器を振り回し、マンダレイを相手に戦っていた。

また別な場所では、

「ああ……仕事……しなきゃ、我慢……! 仕事……でも、見せて……」

「きつ……もち悪! 何あいつ!？」

「何だか分かんねえし何だっいい……ただこれだけは言える……」

「ああ……相当やべえぞ、あの拘束野郎!」

「言っつないで逃げなあんたたち! こいつ、前にニュースで見たことある……脱獄中の死刑囚だ! そこのチンピラとはわけが違うよ!」

歯を枝分かれした伸縮自在の刃に変えて攻撃してくる敵『ムーン

フィッシュ。』

ピクシーボブが生徒達を守りながら、土魔獣を次々突撃させて迎撃つ。刃の1つ1つが凶悪な威力ゆえに、1体1体はさほど長持ちもせず壊されてしまい、しかし壊れた端から作り直して突撃させていく。

(くっ……ふざけた格好の割に素早い上に……手数が多すぎる！ 攻撃一発一発も強力だし、生徒達をかばいながらじやろくに戦えない……無線も通じないし……他の皆、無事なんでしょうね!?)

「全員急いで宿舎に戻って！ こいつは私が引き受けるから……ごめんだけど引率は無理！ さっきマンダレイが言ってた通り、敵と遭遇しても戦わないで撤退ね！ 委員長、先導！」

「了解しました！ ラグドールも……どうかご無事で！」
「にやははっ、大丈夫大丈夫！ おねーさんもプロヒーローだからね！」

既にキャンプファイアの会場……に、なるはずだった広場まで来ていた生徒達を襲撃してきたのは、下半身が巨大な蛇のようになっていた脳無だった。

監督に当たっていたラグドールは、飯田に生徒達の引率を任せて、その脳無に立ち向かう。

マンダレイ同様、決して戦闘に向いた『個性』ではないが、その熟達した身のこなしからは、危なげなく戦えている、確かな実力というものを探ることができた。

ヒーローの卵として、そこに加勢したい衝動を覚える生徒は多くいたが、今はまだ自分達はそれを許されない身。ラグドールを信頼し、その指示通りに踵を返す。

飯田の先導に従って、避難場所である施設を目指してかけていく。その背中が見えなくなったことを横目でちらりと見て、ラグドールは確認した。

(……よし、行ったね。後は私も……できればコイツここでしとめたかったけど……それより生徒の安全が最優先だもんね。適当に撤い

て、残る生徒を助けに行かないと……)

『サーチ』の個性を持つラグドールは、目で見た者を、同時に100人までモニタリングできる。直接見ていなくても、居場所も含めてわかる。

この合宿の間、ずっと生徒達を遠隔でモニターしていた。ゆえに今も、彼女ら全員の居場所と状況を、ラグドールは認識していた。「無線さえ潰されてなきや、通信で他の皆に指示出して、マンダレイの『テレパス』で全員迅速に動いて助けられたのに……」

「ああ、そうさ。そうされると困つから、封じさせてもらったんだよ、通信手段をな」

「……っ!?!」

突如その場に響いた、脳無でもラグドールでもない、第三者の声。はっとして振り向いた——もちろん、脳無への警戒はそのままに——ラグドールの目に映ったのは、夏だというのに、丈の長いコートやら半長靴やらを身に着け、まるで戦場に行く傭兵か何かのようないでたちの男だった。その顔は、装甲のようにも見える仮面で隠されている。

「ラグドール、だったな? 俺んこのボスがおめえに会いてえんだとよ。一緒に来てもらおうぜ?」

他の場所でも、それぞれに戦いは始まっていた。

生徒の救出に向かおうとした相澤に、手から青い炎を迸らせる敵……茶毘が立ちはだかり、その行く手を塞ぐ。

運悪く他の生徒と別れて、2人で行動していた蛙吹と麗日に、暗がりから女子高生のような姿の、刃物を持った敵が……トガヒミコが迫る。

逃げ道になり得るところにガスをまき散らし、学ラン姿の少年のような敵……マスタードが、生徒達の行動範囲を狭めていく。

投入された他の脳無達が、生徒達を見つけ次第襲い掛かるべく、夜の森を徘徊する。

(……………も、か)

地盤沈下か土石流でも起こったのかというほどに、無残に崩れ去った道。

もともと舗装もされていないため、脆くなっているであろうそこは、通ろうとすれば崩れて生き埋めになってしまいかもしれないような危険な状態だ。

ピクシーボブの『土流』ならどうにかできるかもしれないが、そういった何かしらの手段を講じずにこの道……だった場所を通ることはできないだろう。ましてや、大勢では。

忍者のような装束に身を包んだ男が、それを見下ろしていた。

やれやれ、とでも言いたげに頭を振ると、どろりとその体が崩れて……つるんとした卵のような顔を持つ、軍服姿の異形……パンドラズ・アクターにその姿が変わる。

先の忍者姿は、隠密行動及び高速移動に最も適した形態である。その力を使って、彼は今、避難経路となり得る場所を見て回り、いざという時に生徒達をどう逃がすか、どこで敵を迎え撃つかのプランを立てるために動いていたのだが……

(脱出経路がごとごとく潰されている……しかもこの痕跡は、ただ力で崩したものではない。一見すると雑に道だけが崩れているように見えるが、その実、破壊は崩落部分の周辺にまで及んでいる。大人数で通ろうとしたり、その他、一定以上の力が加われればその周囲ごと広範囲が崩落する仕組みの罠だ。金属片や木片などが大量に含まれて混ざっているため、殺傷力が高い上に、ピクシーボブの『土流』でも簡単には撤去できないようになって……それが何力所も……)

ポケットから取り出した、この森の地図に、今確認した場所を『×』で書き込みながら、パンドラズ・アクターは思案する。

しかし手や足は止めず、書くべきことを書き終えたら、即座に別なルートを確認しに行くべく、またその身を忍者に変えて、目にも留まらぬ速さで走り出した。

(これだけ大規模に、かつ精密に、何力所も、素早く……材質の違う細工を大量に埋め込んで……こんなことができる『個性』は限られる。

恐らく、今朝の朝刊に脱獄したと載っていた……奴か)

「……早いな、もう終わったのか?」

「想定しうるルートは全部崩した。ピクシーボブさえ合流させなければ、生徒達がここから逃げることはできない」

「マジかよスゲーじゃねえかヤクザ! 大したことねえな!」

森の中、とある場所。

現在、施設を出たところで、相澤と交戦しているはずの茶毘。

正確には、相澤と交戦しているのは『コピー』の茶毘であり、トウワイスが『個性』を用いて増やした偽物だ。そのトウワイスと一緒にここにいる茶毘こそが本物である。

その2人に……避難経路全てを、トラップを組み込ませたうえで潰すという仕事を終えた治崎——『オーバーホール』が合流したところだった。

「破壊も再構築も自由自在とはな……すげえ個性だ。羨ましいもんだ」

「それを使ってやるのが土木作業員の真似事じゃあ台無しだけだな!

いやホント大したもんだ!」

「……俺の仕事はひとまず終わりだな? なら後は、動きがあるまで休ませてもらう」

治崎は、茶毘の棒読みのほめ言葉にも、トウワイスのほめているのか貶しているのかわからない物言いにも興味を寄せず、切り株に腰を下ろした。

「何だ疲れたのか? なら俺が『倍』にしてコピー作れば、お前ここでゆっくり休めるぜ? 怠けてねえで働けよコラア! そいつに任せときゃ……」

「触るな」

トウワイスの提案を、言い切る前にバツサリと切り捨て、触れようと手を伸ばしてきたトウワイスをぎろりと睨みつける治崎。

一時的に協力関係となることを了承したものの、彼は連合を完全に信頼はしていない。どさくさに紛れて妙なことをされないように

警戒は切らすことはなく、また自分のコピーなどという、何が起こるのか不確かなものを他人に預ける気もなかった。

付け加えるなら、潔癖症でもある彼は、他人に触れられることを嫌がる。今の剣幕の幾分かは、そのことへの嫌悪感も含まれているものだっただろう。

「ジョーダンだよ、ジョーダン！ 俺はいつだって真面目だぜ！ まあ、どの道きちんと測らねえと出来ねえしな！」

「……ジョーダンは置いといて、お前、ぶっ殺したい奴が生徒の中にいるんじゃないのか？ そいつ殺しに行かなくていいのかよ？」

「……プロヒーローが何人もあちこちにいる森の中だ。行き当たりばったりで行動して不測の事態を招くのは不本意だ……やるならきちんと計画立てて自分でやる。今はまだ、いい」「そうかい。なら好きにしな」

……そして、

「血イ……見せろやア!!」

「こん……のおっー!」

全身から緑色のスパークを発し、傷跡のような赤い紋様を浮かび上がらせて立ち向かう緑谷。

その正面には、増殖して腕の外にまではみ出している筋肉が特徴的な、力任せに振り下ろす拳で破壊を引き起こす巨漢の敵……マスクユラーがいた。

岩肌を容易くえぐる威力の拳が繰り出され、しかも決して素早さなどを損なっているわけでもない。単純極まりない増強型の戦い方。シンプルゆえに、対応が難しい。

それでも……

（このくらいなら十分対応できる！ パワーは危険だけど、前に戦った、乱破って奴よりもスピードや攻撃の頻度、連打能力は下だ……コスチュームの補助がないのは少し不安だけど……やるしかない！）

突き出される拳をすり抜けるようにかわし、追尾してくる裏拳の薙

ぎ払いをかがんでかわす。

今度は蹴りが飛んでくるが、それをジャンプしてかわし、そこを狙って飛んできた拳の一撃は、こちらの拳ではじくようにして反らし、その巨大な腕の上を転がるようにしていなす。

そうして懐に飛び込み、拳を打ち込むが……頑丈さも相当なものようだ。

全く効いていないわけではなさそうだが、そこまで痛打になったようにも見えない。

少なくとも、腕の力だけで打ち込んだ拳では、この男を止めることはできないだろう、と、緑谷は悟りつつ、追撃をかわしながら距離をとった。

「はっはっはあ！ いいじゃねーか坊主おい！ なんだよ、ガキなぶり殺しにするだけの、弱い者いじめみてえなケチな仕事になるかと思ったら、いるじゃねーかイキのいい奴がよ！」

血狂いマスキュラー。非常に好戦的で残虐な性格の、指名手配中のネームドヴィラン。

今までに何人もの罪のない一般人や、捕らえようとしたヒーローを返り討ちにして殺害している凶悪犯であり……何を隠そう、『ウォーターホース』を……洗汰の両親を殺害した張本人である。

何の因果か、洗汰の前に現れたこの男から洗汰をかばい、立ち向かうこととなった緑谷は……再び拳を振りかざして襲い来るマスキュラーに対し、こちらも体からスパークを溢れさせ、全力で持つて迎え撃つ構えを取る。

この男を倒し、止めるため。そして、それ以上に……

(栄陽院さん……洗汰君……今のうちに、早く安全なところへ……！)

その、緑谷とマスキュラーの交戦現場から少し離れた森の中で、永久は洗汰をわきに抱えて走っていた。

理由は簡単……洗汰を安全な場所に届けるためだ。

マンダレイの『テレパス』を聞いた避難中……突如襲撃してきた『脳無』を撃破した直後のこと。

緑谷の『感情感知』が、また助けを求める声を感じ取った。

それにはつとしたようになって、永久達に先に行くように言い残して走り出した緑谷を、永久は慌てて後を追った。砂藤たちに『先に施設行っててくれ』と言い残して。

緑谷が駆け出した理由は、大体わかるから、とも。

予想通り洗汰を見つけて保護した緑谷だったが、予想外だったのは、今まさにその洗汰を襲おうとしている敵……マスキュラーがいたことだった。

ゆえに、マスキュラーを緑谷が殿として引き受け、その間に永久が洗汰を連れて脱出、という役割分担を行うことになった。

そうしたのは、小回りの利く緑谷の方がマスキュラーへの相性がいという判断や、洗汰を1人で行かせるのは危険が大きいという判断など、色々と理由はあるが、一番のそれは……

「と、永久姉ちゃん、いいのかデク兄ちゃんの手伝いしなくて!? アイツ、すごく強そうだったのに……」

「すごく強くて危ないからだよ！ 大丈夫、緑谷もあの時よりさらに強くなってから……むしろ、私や洗汰君がいた方が足手まといだからー！」

「俺はそうだけど……永久姉ちゃんなら……」

「……私が万全ならね。緑谷と協力してアイツ瞬殺してゆつくり避難でもよかったけど……」

(ないんだよなあ……エネルギーが、ほとんど……!)

この合宿中、永久は、修行の時こそ、栄養補助ゼリーで大量にエネルギーを補充して使えていたが、基本的にそれらのエネルギーは、修行終了までにほとんどを使いきってしまう。

加えて、夕食に食べる量は、食べ盛りの男子が満足できるくらいの量ではあるが、永久にとってはまだまだ物足りない量である。もともと筋肉量の多い永久は、基礎代謝——何もしなくても体が消費するカロリー量——がかなり多いため、あらかた消費してしまう。

今の永久は、本当に少ししかエネルギーの備蓄がない状態だった。それでも、別に足りなくて腹が減るほどでもないため、合宿中は特

に気にしていなかったのだが……こういった、突発的な戦闘が起こった場合、現在の貯蓄量では確実に足りなくなる。

あのままあそこにとどまって戦いを始めても、身体能力の強化だけで、ものの数分でエネルギーは底をついただろう。何かしら『技』を使えば、さらに消費は速くなる。

ゆえに、洗汰を連れて逃げることでいいが、永久にできることだった。しかし、勝つ見込みがある戦いとはいえ、緑谷を置いて逃げるという苦渋の決断をした永久に……さらなる厄災が襲い掛かろうとしていた。

「……っ!? コレ、この煙……毒ガスか!?!」

遠めに見える範囲にしか散布されていなかったはずの毒ガスが、風に乗ってか、はたまた単に範囲が広がったためか……永久達が逃げている場所にまで流れてきていた。

あつという間に周囲に充満し始めたそれは、僅かに吸っただけでも頭痛を覚えて体がやや重くなるもの。とっさに永久はハンカチを洗汰の口に押し当て、自分は息を止め、可能な限り早くこのガスを抜けるために走り出した。

急いで、しかし息が苦しくならない限界の速度で。

しかし、もう少しでガスの領域を抜け出るところまでは来たものの、もう息が続かない。このままでは間に合わない。ガスの中で倒れて、自分も、洗汰も……

そう思い至った永久は、苦しくてどうしようもない呼吸を必死に噛み殺しながら……洗汰を抱えたまま、ジャージの上着をバツと脱いだ。

そして、それを洗汰の顔……口元と鼻を覆うようにして巻き付ける。

「むっぐ!! おあええひゃ……あにふん……」

「体丸めろ! 痛いかもしれんけど我慢しろ、落ちたらすぐ起きて走れ! 行くぞ!」

ほとんど一息に言い切ると、永久は洗汰の体をボールのように持つて大きく振りかぶり……勢いよく投げた。

放物線……というには直線的な動きではあるが、洗汰は一気にガスの中を突き抜けてその外側まで飛んでいき……永久の狙い通り、クツシヨンになる茂みの中に落ちた。

無傷ではないだろう。細かい切り傷や擦り傷はできてしまっているに違いない。もしかしたら、打撲か何かできてしまったかもしれない。

それでも、ここで毒に巻かれてしまうよりはましなはずだ。

そして、永久は……その後息を止めて、思い切り足を動かして走り出すも……すぐに息が続かなくなり、周囲に漂うガスごと空気を吸い込んでしまう。

さらに、ガスが漂い始めた直後や、洗汰を投げ飛ばす前に『走れ』と言って聞かせた際に、少しではあるが既にガスを吸ってしまった。

すぐに歩みが遅くなり……息が乱れ、目の前が暗くなり……洗汰を投げ飛ばした距離の半分も走ることができずに……倒れ込んで、意識を失った。

第125話 緑谷VSマスキュラー

「すっげえなおい、お前！ 肉弾戦でここまで食らいつかれたの初めてだぜ！ そんなひよろいナリでよくこんだけやれるじゃねえか！」
「……げっほ……っ！」

緑谷とマスキュラーとの戦い。

それほど長い時間になっていくわけではないその戦いだが、攻撃の一発一発が一撃必殺級の威力をもって襲い掛かるマスキュラーの相手は、緑谷にはかなりの緊張感を感じさせており、わずか数分の戦いが、数十分か数時間かとも思えるような疲労をのしかかせていた。肉体的な疲労はまだまだ問題ないが、精神的なそれはバカにできない。

もう何度も経験していることとはいえ、こちらを殺す気で来る『敵』というのは、対峙するだけで相応に精神に負担がかかる相手だ。それが、そこらのチンピラなど問題ではない戦闘能力を持っているならなおのこと。

以前に『死穢八斎会』の乱破と戦った時と同様、回避主体のインフアイトで攻めようとした緑谷だったが、早々にヒットアンドアウェイに切り替えた。

速さこそあったが、攻撃をよければこちらの攻撃を届かせられるあの時と違い、マスキュラーの攻撃は、筋肉を『増強』することで攻撃範囲まで広がる上、多少の被弾をものともしないレベルのタフネスも同時に発揮される。

単純な攻撃力・防御力においては上を行かれている。素早さとテクニクでどうにかしのいでいるが、こちらからの攻撃が中々痛打にならない。

攻撃個所に筋繊維を出現させて強化することで防御力を上げられてしまい、衝撃が届かないからだ。それをさせないくらいに速さを重視した拳なら当たらないこともないが、それだとどのみち威力が足りない。

かといって威力を上げようとすれば、今度はこちらのスピードが殺されて……そのわずかな差で、また筋肉による防御壁を形作られてしまう。

単純、ゆえに攻略困難。

しかも先程、『ここから本気で行く』と言って……何やら左目をえぐり出し（どうやら義眼だったらしい）、ポケットから出した別な目と入れ替えた。

そうなってからさらに攻撃が強烈かつ苛烈になり、直撃こそしていないものの、何発か掠ったり余波を食らって、緑谷は負傷していた。現状はやや劣勢だ。

（100%の力……それをぶつけられれば多分、筋肉の防御も抜けるかもしれない。でも絶対じゃない……やってしまえばその後の結果に関わらず、僕はもう戦えなくなる……いよいよとなったらやるしかないだろうけど、今は、継戦能力を捨ててまで攻めるわけには……そうなる……）

もしこれが、永久や洗汰ら、守るべき無力な者がそばにいて、一刻も早く倒さなければならぬ、余裕がない、という場面であれば、迷うことなく100%を使っていたかもしれない。

しかし緑谷の心には同時に、『後に続かないようでは半人前』という、散々相澤から聞かされてきた自分への反省点が残っている。

それに加えて、この合宿を襲撃してきた敵は『複数いる可能性がある』とマンダレイの『テレパス』で言っていた。ならばこの男を退けた後、第2第3の戦闘が起こらないとも限らない。

『決して戦闘せず撤退を』とも言っていたが、そう上手くいってくれるかなど怪しいものだ。敵はこっちの都合も何も知ったことではなく、ただただ殺しに来るのだろうか。

そしてもう1つ……この後動けなくなったら困る理由として……（伝えなきゃいけない……誰かに……できれば、先生かマンダレイに、こいつらの目的を……）

先程マスキュラーが漏らした言葉が、緑谷の脳裏にはしみついていた。

『爆豪って奴、どこにいるよ?』

『お前とさつききの女、そーいや、死柄木の『殺すリスト』に名前があったな……』

(僕と栄陽院さん、それにかっちゃん……生徒が殺害対象ってことか!?! それを狙い……少なくとも、その1つ……この3人だけなのか、それとも他にも? 3人の共通点……体育祭上位入賞者? それとも保須市の一件の関係者? だとしたら轟君や飯田君も……何にせよ……)

一部分だけしか聞いていない緑谷は知る由もないが、実際には彼らへの指示は、緑谷や永久については殺害であるが、爆豪に関しては誘拐及び勧誘……である。どちらにせよ見過ごしていい事態ではないが。

一刻も早くこの闘いを離脱、あるいはこの男を撃破し、このことを伝えなくてはいけない。しかし、背を向けて無事に逃げられるような相手ではない。

それでいて、力押しで勝つのは難しい。後のことを考えれば、なおのこと。

それなら、と、緑谷は……違う手に打って出る。

「……ふう……」

「……ん……?」

不思議がるマスクュラーの目の前で、緑谷の全身を覆っていたスパークが徐々に弱まり、消えていく。そのまま、線香花火くらいの大ききさしかなくなってしまった。

完全に消えることはないようだが、感じられる力強さがほとんどなくなってしまうている。

いぶかしむような視線をしばし向けていたマスクュラーだが、すぐに表情を獰猛な笑みに戻し、

「何だアそりゃ、ガス欠か? それとも罨か何かか? まあ、どっちでもいい……殴ればわかる!」

増殖させた筋繊維を腕にまわりつかせて強化し、思い切り殴りかかってくる。

迫ってくる、一撃で自分を殺しかねない威力のそれを……緑谷は、抵抗せずに眺めていて……

直撃の瞬間、ほんの一瞬、眩いばかりのスパークが放たれる。ギリギリまで引き付けてからの回避。そこからの急加速。

一瞬にして高出力の『フルカウル』を発動させた緑谷は、すり抜けるようにしてそれをかわし……拳が降りぬかれた直後の、マスクュラーの懐に飛び込んだ。

が、その時には既にマスクュラーは、胴体周辺に筋繊維をさらに発生させていた。

「油断したところをやれると思ったか!? ひよろい奴の考えそうな小細工だ、丸わかりだったぜ！」

この状態では、打ち込んでも大したダメージを与えられないだろう。

しかし、似も関わらず……マスクュラーの目の前で、緑谷は不敵に笑っていた。

「あつそう……じゃあ、これもわかってたか？」

「……ああ？」

はったりか、はたまた何か隠し玉があるのか。

いぶかしむマスクュラーの目の前で、緑谷は腕を振りかぶり……しかし、その動きは、先程までとは違う。

拳を叩きつけるそれではない。まるで……

（突き出す拳じゃねえ、薙ぎ払うような動き……手刀？ チョップ それともラリアット？ いずれにせよ……そんなんじゃ俺には届かねえぞ！）

最大出力の『フルカウル』を示すスパークは一瞬だった。今の緑谷の腕には、それよりもかなり弱い火花しか残っていない。その程度の威力では、仮に筋繊維に覆われていない個所に当たったとしても、全く痛打ではない。

ゆえに、己の腹を狙って迫るその一撃を、そのまま腹筋で受け止めるつもりでいて……失敗した。

緑谷の攻撃。それは、拳でも、手刀でも、ラリアットでもなく……

——バッチイイイイン!!

破裂音、ともいうべき強烈な音を響かせて放たれた……平手打ちだった。

インパクトの瞬間、何だそりや、といぶかしみ、呆れすらするマスキュラー。

この期に及んで、女子供が使うようなビンタを当てて、一体何をする気だったのかと。

しかしその直後、事態は一変する。

「……っ!? ごああ……ん、だこりやあ……っ!?」

打たれた箇所から、身を切るような強烈な痛みが迸り……盛大に思考を遮った。

余りに予想外の事態に、場慣れしているマスキュラーですら隙を晒してしまうほどに。

余りの痛みに対する反射的な防御反応。全身の筋肉が強張り、それを抑えようとする。

しかし、一向に痛みは引かない。

(何だ!? ただのビンタが、何でこんなに痛え!?! こいつの『個性』か!?! ただのパワー系じゃ……)

「お前……今『個性を使った攻撃か?』って考えてるだろ」
「……!?!」

「残念、外れだよ……これは、ただの技術だ」

(『鞭打』……うまくいった……! 『デウス・ロ・ウルト』の修行中に、ビスケさんとラバー先生に教えてもらった技……同じ『打撃』でも、殴る蹴るとはまた別の……鞭と同じで『痛み』に特化した攻撃技術……!)

修行中、何度も苦しめられた、ラバーの鞭による攻撃。

実際体に通っているダメージよりも、その過剰なまでの『痛み』によって集中その他を阻害されてしまう、強烈にして凶悪な一撃。

それを、素手でも再現可能であるとビスケに聞かされ、参考までに教わった『鞭打』という技。

ガツン、と殴るのではなく、ぴしゃん、とはたく。

上手く決まれば……威力はさほどないが、それによる『痛み』は、いかに頑丈な筋肉や骨を持つていようとも、防御できるものではない。

もちろん、この個性社会……肌自体が頑丈な『個性』や、そもそも打撃が痛打にならないような『個性』の持ち主はあちこちにいる。ゆえに、覚えておけばどんな場面でも活躍できる、というような技術ではない。

それでも、そうと知りつつも、貪欲に強さを求め続け、できることを全てやってきた緑谷であるがゆえの突破口だった。

——バッチイイイイン!!

続けざまにもう1発。

腰から腕を回り込ませるようにして、背中へ。

叩きつけられた緑谷の平手は、一拍遅れてさらなる激痛をもたらす。

体が強張るのみならず、無意識のうちに、防御のために背中側に筋肉を発生させる。しかし、やはりそれでも痛みは引かない。全く効果がない。

そして、その結果……本当に一瞬ではあるが、前にいる緑谷への意識がおろそかになり……

「セントルイス……スマツシユ!!」

弧を描いて放たれた、その蹴りが……隙だらけのマスクュラーの膝目掛けて放たれ、直撃。

ゴキイ、という破滅的な音と主に、その膝を破壊してバランスを崩す。

そこからさらに緑谷は、もう片方の足に足払いをかけて転ばせ、倒れ込むマスクュラーの肩を踏み越えて後ろ側に回り、背中を踏みつけるようにして立った。

そして、素早くその両腕を取って背中側に引き、関節技に持ち込む。

今度は『フルカウル』も全力で使って自分の力を上げ、その上さらに『黒鞭』まで使って、絶対に振りほどかれないようにがんじがらめにして固定した。

激痛に耐えつつも、何が起こったかは察していたマスキュラーは、痛みがどうにか引いてきたと同時に、笑みを浮かべて背中中の緑谷を睨んで見上げ、吼える。

「かはつ、はあ……やるじゃねーかよ。所々何されたのかはわかんねーけど……でもな、俺を抑え込む気かその関節技？ そりや無茶つてもんだぜ……小細工ならまだ勝ち目あっただろうに……力勝負じゃ俺に勝てねえって、わかってたんじゃなかったのかあ!？」

そのまま、腕に力を込めて、緑谷の拘束を振りほどこうとするマスキュラー。

しかし、今のままの力では無理だと悟ると、腕と背中に目いっぱい『筋肉増強』を発動し、腕の馬力を上げる。さらに、単純に体積を増やすことによつて緑谷を引きはがしたり、関節の拘束を緩めさせることも狙っていた。

(まだだ……まだ！ もう少し！ 放すな……放すな！ 狙い通りだ……このままいけば……もう少しで……！)

『小細工』で必死に食らいつく緑谷と、力技でそれをねじ伏せようとするマスキュラー。

全身全霊の力と『黒鞭』による拘束を行いつつも、圧倒的な『力』の前に、押し出される形で緑谷が引きはがされてしまうかと思われた……その時だった。

——ゴキツ、ボキツ、ゴキベキバキゴキブチゴキイツ!!

「……………あ?」

突如、マスキュラーの背中から腕にかけて……あちこちから聞こえた異音。

その直後、強力無比な力で抵抗を続けていたマスキュラーの両腕から、ほとんど全ての力が抜け……どきりと、その体側に落ちた。動く様子は、ない。

突然いうことを聞かなくなった腕に、マスキュラーは困惑し、緑谷は……ようやく狙った効果が出たことに、警戒を続けつつも安堵し

た。

「……何だ、おい、今度も技術か？ それとも今度こそ『個性』か？」
「どっちかっていうと、前者……あと『知識』かな。それに……お前の力と『個性』を利用した」

「あ？ どういう意味だ？」

「お前、筋力と、筋肉の量で無理やり僕を引きはがそうと、あるいは拘束を解こうとしただろ……関節技に対してそれは、無理があるんだよ……まあ、技の種類にもよるけど……」

関節技をかけられた際に、それを力づくで破る方法は、確かにある。

しかし、それが万事通用するというわけではない。力で上回れば振りほどけるケースもあれば、人体の構造上、どうしてもそれが不可能なケースもある。

緑谷が仕掛けたのは、後者の技だ。

もともとは、『追討』の際に蛙吹と取陰が仕掛けて来たそれを参考にした戦術である。一旦極まってしまえば、何らかの外的手段で『振りほどく』形でしか脱出できない技……力で振りほどこうとすると、かえって危険な技があるのだ。

緑谷はそれを、『黒鞭』まで使って全力でマスクュラーにかけた。しかし、全力を出したのは、マスクュラーの体を破壊するためではなく……『関節技を維持すること』にだ。

関節を極め、そのままでは動けない形に維持し続ける緑谷を、マスクュラーは『個性』による馬力と、筋肉の物量で強引に押し切ろうとした。

もしそれにより、緑谷の拘束自体を解いてどかせていけば、上手くいっただろう。

しかし、そうならないまま……緑谷が『関節技』という形を保たせているままに、マスクュラーは力をかけ続け、体積を増やし続け……その分の負担は全て、極まっている関節に降りかかった。

本来曲がらない方向に力をかけ続けられている関節。その強度でもってどうにか耐えているというところに、よりにもよってマスクュラー自身が『力』を加えることで負担が増していった。

ついには限界を迎え、極まっていた関節という関節が破壊されてしまい……さらにその余波で、鎖骨やら腕の骨のいくつかやらが破損し、腕が完全に動かなくなってしまうのだ。

「僕がかけた『関節技』は本来、かける側よりもかけられる側が力を込める方が危険な技だった……それをお前が、力まかせに振りほどこうとしてくれたおかげで、僕は技を維持しているだけで（それも一苦労だったけど）お前が自分の力で関節を破壊してくれたんだ」

「……………！ そんなことが……………」

「できるんだよ……………人は、『個性』を使わなかったって、これだけのことができる。できるように、できている……………！ まあ……………信じてても信じなくてもいいよ、別に、もう」

緑谷は、首根っこをつかんでマスクュラーを立たせると、岩壁に投げつけた。

背中から激突したそこに、左手から出した『黒鞭』で押し付ける、あるいは縫い付けるように壁に固定する。

動けないマスクュラー目掛けて……………拳を振りかぶる緑谷。

その体には……………眩いばかりのスパークが迸り、明らかにこれまでで一番危険な威力であると、マスクュラーにはわかった。

ただ単に、筋肉の鎧をまとったところで、防ぐのは無理だろう。両腕に同じようにして筋肉を纏わせ、クロスさせるなどすれば別だったろうが、最早その腕は動かない。

「……………はっ……………しゃーねーか、お前の方が一枚上手だったってことだな……………」

どこか達観したような、妙に諦めのいいマスクュラー。

それでも一応、筋肉による防御自体は、諦めず行った。顔と首、腹の周辺に、出せる限りの量の筋繊維を纏わせたが……………

「デトロイト……………スマッシュユ!!」

それを撃ち抜く、最大威力の緑谷の拳が……………筋繊維の鎧をバラバラにして、マスクュラーの体に突き刺さり……………その背後の岩壁にまで、

蜘蛛の巣状のひびが入るほどの超巨大な衝撃を叩き込み……その意識を、奈落の底へ叩き落した。

その後、動かなくなつたマスキュラーを前に、緑谷は少し息を整えた。

そして念のため、確かに意識を失っていることを確認してから、岸壁から飛び降りた。

(かなり本気で殴つたから、多分意識はしばらくは戻らない……数時間は大丈夫だろう。仮に起きても、両腕と足も壊れてる上に、岸壁にめり込んでるから、自分ではろくに動けないだろうし……)

熱をもってびりびりと痛む腕を押さえながら、緑谷はそう割り切る。

折れてはいないし、ひびが入っているとかでもないだろう。それでも、確実に意識を奪うため、壊れないギリギリの威力を發揮させた腕は、しばらく動かしづらい程度のダメージにはなつてしまつていた。

しかし次の瞬間、緑谷ははつとして顔を上げる。

突如として、『感情感知』で感じ取つた……腕の痛みが一気に吹き飛ばすほどに強烈な情報が、その頭に叩き込まれてきた。

『感情感知』は、相手が発する感情がより強く、より距離が近いほどその精度・感度が上がる。

そのため……遠くから感じ取つた『感情』が、どういった種類のもの——怒り、悲しみ、救難信号その他——なのかはわかつて、それが誰の感情なのかはわからない。

よほど近くにいるか、あるいは……よほど親しい人物ならば別だが。

そして、後者であるということは……そして、その信号が救援要請であるならば……それはイコールで、親しい誰かが危機的状況にいることを意味する。

そして今、緑谷の脳内に届いたそれは……

「……永、久……!?!」

☆☆☆

時は少しさかのぼり……永久が、洗汰を投げ飛ばし、ガスの外に避難させた……その数十秒後。

永久が倒れ込んだ場所に、毒ガスの中を、平然と歩いて近寄ってくる者がいた。

「ガスの中を結構な速さで移動してると思ったら……コイツ確か、体育祭で3位になってた女か。ふん、ざまあないね……結局逃げきれずにガスに巻かれてこんな風になって。天下の雄英高校様が聞いてあきれよ」

現れたのは、襲撃犯の一人。学ラン姿にガスマスクとヘルメットを着けた、まだ年若いように見える少年、あるいは青年だった。背中には、ガスマスクと繋がっている酸素タンクと思しきそれを背負い、手には拳銃を持っている。

敵ネーム『マスタード』。毒ガスを操って広範囲を攻撃し、またそのガスの揺らぎを感じ取って空間内の状況を把握することができる『個性』の持ち主だ。

毒ガスによって、森における生徒達の動きを制限する役割を担っている彼だったが、生徒達に動きが出て来たため、それに合わせて移動していたところだった。それに伴って動いた毒ガスの領域に、永久達は逃走中に捕らわれてしまったのだ。

倒れこんで動かず、苦しそうに表情をゆがめている永久の様子を見ながら、マスタードはふん、と小馬鹿にするように鼻を鳴らす。

「大したことないね、天下の雄英ヒーロー科も。やっぱりただ学歴だけで……」

言いかけて、止めた。苦しそうに身じろぎした永久の姿を、改めて見て。

先程永久は、着ていたジャージの上着を洗汰に託して放り投げてしまい……その身にまよっているのは、上半身は下着だけになっていた。

そのため、A組において八百万と頂点を争うレベルの、胸部についた豊かな実りが、ブラジャー一枚で隠され、支えられた状態でさらさ

れている。

汗ばんだ肌や、苦しそうな吐息、振り乱された髪の毛、そして何より、永久自身の見た目のレベルの高さなども相まって……どうしようもなく煽情的な光景に見えた。

とりわけやはり、その胸の豊かな膨らみ2つが目を引く。どうしても、そこに注意がいく。

「っ……すっげ……」

その周囲の状況は、毒ガスにまかれているというかなり物騒なそれであるのだが……マスタードは、思わず、といった様子で、手に持っていた拳銃をホルスターにしまうと、その手で……さらされているそのの片方をむんずと無遠慮につかむ。

柔らかく、指が沈み込むような感触が伝わり、マスタードはその未知の感覚に、ごくりと生唾をのんだ。

そして、数秒ほどそのまま考えるようにしたかと思うと……その末に、何事か決めたようだった。

きよろきよろと周囲を見回し、誰も見ていないことを確認すると……永久の後ろ側に回り、その体を、わきの下に腕を入れて、羽交い絞めのようにし……そのまま抱え上げるようにした。

「い……いいよな、ちよつとくらい……どうせ殺すなら……うん。殺す前に、ちよつと遊んだって……終わったら、ちゃんと殺せば」

浅い考えの末に、本能と欲求……劣情に従った行動を取ることを決めたらしいマスタード。

誰に対してのものかもわからない自己弁護のような独り言を呟きながら、かなり大柄な永久の体を、引きずるようにしてどこに連れ去っていくのだった。毒ガスを吸ったわけでもあるまいに、やけに呼吸を荒くして……何かを期待し、楽しみにする下卑た心を隠さずに。

第126話 私の、ヒーロー

合宿地の森林地帯、その中程に、洞窟……とまでは言えないが、岩壁にできた洞穴があった。

せいぜいが、数人が雨宿りできる程度の大きさでしかない、ただの穴、あるいは窪みである。入り口からやや角度があるため、奥の方は見づらくなつてはいるが、それだけだ。明かりも漏れて入ってくるし、狭苦しさも特に感じない。

毒ガスを吸った永久は、意識のないままそこに寝かされ……その、上半身下着だけのあられもない姿を、息を荒くして、1人の少年が見下ろしていた。

敵名『マスタード』を名乗る彼が、いったいどこの誰で、いくつなのか。そんなことは、雇い主である死柄木や、それを仲介したブローカーも特に興味のあることではなかったし、知りもしなかった。

ただ、目的を遂行するだけの頭と実力、そして実績や経験があれば、それでよかったがゆえに。

あえて説明するならば、彼は少し前まで、どこにでもいる中学生だった。

ただ、色々な要因が重なった結果として……それらは、外的にもたらされたものもあれば、自業自得という他ないようなものもあるが……挫折し、俗に言う『負け組』と呼べるような形になってしまった。そしてその結果、ひねくれて日の当たる道を棄ててしまったという過去を持つ。

自分だって上手くやれていれば、もっと評価されていた。ただ、ちよつと運が悪かっただけ。少しの失敗が、たまたま大きく見られてしまっただけ。

なのに、世間はそれをわかってくれない。学歴や、目先の成績しか見ようとしなない。

自分はおつとやれるのに、こんな所でくすぶつていていい人間ではないのに、それをわかってくれない。わかってくれない世間が悪い。

だって、自分はこんなにも要領がよくて、こんなにも強力な『個性』も持っている。それを使って、色んなことができる。

世間はそれすらわからず、正しく評価できず……それどころか、それを危険視して自分をコミュニケーションから排斥するようなことまでやった。

そんな間違った評価ならいらぬ。自分は、自分を正しく評価してもらえる者のところへ身を置いて、その為だけに力を振るおう。

そんな、傍から見れば、単なる癩癩、あるいは逆切れとしか思えないような、中身の無い思考に身をゆだねた彼は、『敵』に身をやつし、いくつもの犯罪に手を染めて来た。

そして今、また別な犯罪に手を染めようとしている彼は……前準備として、永久の……無抵抗の少女の口元に、ポケットから出した麻酔ガスのスプレーの先端を近づけ、しゅうう……と吹き付けていく。

その麻酔ガスを『個性』で操り、永久の鼻と口の周辺に停滞させ……呼吸に乗ってどんだん体の中に吸い込まれていくようにした。

『お楽しみ』の最中に、間違っても目を覚まさないように。もし万に一つそうなったとしても、抵抗する力が残らないように。薬を使つて、その力を奪っていく。

「……っ!?!」

そんな永久が、ふと見ると……しかし、見間違いでなく、目を開けているのを見て、マスタードはぎよつとする。まさか、ガスが効いていないのかと。

反射的に腰の拳銃に手を伸ばしかけたが、直後に理解し、それを抑える。

目はとろんとしており、何も映していない。恐らく、体に触れたり、動かしたり、ガスを吸わせたりしたことによる反射や、無意識に起こる反応のようなものだろうとあたりをつけた。

実際それは間違っておらず、この時の永久には相変わらず、はつきりとした意識はない。ゆっくりと瞬きする程度で、自分の身に何が起こっているのかなど、わかっていない。

気を取り直してマスタードは、十分な量のガスを吸わせた後、永久

を地面に寝かせた。そして、あらためてその体を、上から下までなめるように見る。

スカウトが来てもおかしくない、かわいらしい顔。モデル顔負けの高身長に、やや筋肉質ながら、ひきしまっている見事なスタイル。それでいて、体は女性らしい丸みを帯びていて柔らかさそうさ。

特に、布一枚で隠されているたわわな実り……その感触のすばらしさは、彼自身が既に体験して知っていた。

今は隠れているが、恐らくは、ズボンと……そして上下の下着に隠されている場所にも、見事な光景が広がっているのだろう。

振り乱すようになっていく長めの黒い髪も、虚ろな目も、全てがその要因に思える。

自分のような負け組や、裏社会に生きる者では非合法な手段でも用いなければ……いや、たとえそうしたとしても縁のないような、極上の雌。それが今、無防備にその身をさらけ出している。

ましてやこの少女は、エリートで有名な雄英ヒーローの生徒。広く世間にもその存在を知られており、ファンも少なからずいる……自分とは真逆の立場にいる存在。スポットライトを浴びながら、輝かしいランウェイを歩く人生を歩くことが約束されているのであろう、勝ち組。

そんな少女を、これから自分が思う存分穢してやるのだと思うと、ぞくぞくと得も言われぬ快感が今から湧き上がってくるのを、マスタードは感じていた。

(汚してやる……見た目や学歴だけの、ちよつと評価される機会があっただけの勝ち組なんて、本当に強くて優秀な奴には奪われるしかないんだって教えてやる……証明してやる！)

どんどん息が荒くなる。

息をするのに邪魔だったので、マスタードはつけていたガスマスクを外した。『個性』により、毒ガスは洞窟には入ってこないようにコントロールしているため、問題ない。

本来ならば、敵に——この場合はプロヒーローや雄英の教師、あるいは生徒に——接近されないように、されても優位に立ち回れるよう

に、ガスは自分を中心に濃度を高くして渦を任せているのだが、入り口をふさいでおけば十分だと、今はお楽しみの方が大事だと判断して。

誰にも邪魔されず、世間的にも知られたステータスを持つ勝ち組を、無抵抗の美少女を思う存分好きにする……灰暗い情欲を開放しよう、マスタードは永久に覆いかぶさる。

その瞬間、依然、とろんとしたままの彼女の目と、目が合った。

しかし、光の灯っていないその目で見られたところで、何も怖くはない。帰って興奮するだけだ。

自由になった口で一層息を荒くし、劣情を隠そうともしない。

着こんでいる学ランの下で、わかりやすく体の一部分を変形させ……上からも下からも、わかりやすく、これからすることへの期待を漏れ出させている。

マスタードは、永久の豊満な胸元……その谷間に手を突っ込み、その内側から引っ掛けるようにしてブラに手をかけ、ぐいっと引っ張り……

「へへっ、じゃあ早速……恨むなら、自分自身を恨めよ。ちよつと人生上手くいったくらいで調子に乗って、ヒーローなんて馬鹿な夢を持ったお前が悪いん……ん？」

そこまで言って、ふと何かに気づいたマスタードは、動きを止める。

彼は『個性』により、操っているガスが漂っている範囲内で起こったことを感知することができる。その部分で何かが動いたことによる、ガスの揺らぎなどによって。

ガスの密度が低いとその精度は下がるのだが、半径数十m以内であれば何も問題ない。近づかれる前に、拳銃で迎撃して殺せばいい……今まではずっとそうしてきた。

今、マスタードは、ガスの外縁部に何らかの接触を……しかも、その動きからして、一直線にこちらを目指していると思しき何者かの存在を感じ取った。

しかし何だよこんな時に、と、悪態をついて思う……よりも早く、その異常さに気づく。

(……は!? 速っ……)

たつた今外縁部にその存在を感じ取った『何者か』は……一瞬のうちに凄まじい速さで森を、ガスが充満しているはずの場所を突っ切り、自分が今いるこの場所目掛けて突き進んでくるのだ。

迷って闇雲に走っているものの動きや速さではない、明らかにここを目指している。一切の迷いなく……恐らくは、自分がここにいることもわかって。

慌てたマスタードは、今度こそ腰から拳銃を抜き取ろうとして……

「S M A S H !!!」

——ドガゴオオオオオオン!!

外から、岩壁をぶち抜いて侵入してきた……と同時に放たれた緑谷の蹴りによって、何が起こったか知るよりも早く、洞窟の岩壁に叩きつけられて、めり込んだ。

当然ながら、その瞬間にはもう……意識など、どこかに消し飛んでいた。

☆☆☆

マスクュラーを倒した緑谷は、その直後に感じた……あまりにも弱い、しかし確かな、永久の『助けて』という感情に……考えるよりも早く、体を動かしていた。

永久の声が聞こえて来た方を見ると、森の一角に、おそらくは毒ガスと思しきそれが充満しているのを見つけることができ……そちらに意識を向けると、今度ははつきりと、その方向に彼女がいることを察知できた。

それと同時に、彼女の傍に、恐らくは『敵』であろう何者かがいることも察していた。

そして、その者が今、最も強くさらけ出している感情が……『劣情』

であることも。

その瞬間、考えることをやめた緑谷は、今自分が立っている岩壁を蹴り砕く勢いで跳躍し、同時に、これまでに成功したことがないほどの出力と射程で『黒鞭』を発動。永久の気配がするあたりに向けて一直線に伸ばし……急激にそれを巻き取るようにして自分を移動させた。

ものの数秒とかけずに、間にあつた距離をゼロにした緑谷。

その勢いのまま、岩壁に突っ込む形になるが、一切ためらわず緑谷は、激突と同時に『セントルイススマッシュ』を放って岩壁を粉碎、その向こうに空洞が広がっていることを認識する。

そして一瞬と間を置かず、そこにいた、敵意を放っている学ランの男……マスタードを蹴り飛ばした。

その直後、振り返った緑谷が目にしたのは……

「……………っ……………!?!」

上半身の衣服を全て剥ぎ取られ、あられもない姿で横たわっている永久の姿だった。

見れば、上着は見当たらないが、ブラジャーはマスタードの手に引っかかっている。

丁度指を引っ掛けた状態で緑谷に蹴り飛ばされたため、結果として今まさに『ぶちん』と切れてしまったのだが、そんなことまで緑谷が知る由もない。

一瞬で頭に血が登り、握った拳をマスタードに追加で叩きつけかけた緑谷だが……すんでのところまでそれを止める。

その耳に、苦しうにうめく永久の声が聞こえてきたために。

怒りを込めた視線で一瞥するにとどめると、マスタードはそのまま放置し、永久の様子を見る。

幸いと言つていいのか、服こそ脱がされているが……乱暴された形跡はない。

動けない様子なのは……外の毒ガスを吸ってしまったか、あるいはもつと他に、麻酔が何かを使われてしまったのかも、と当たりをつけた。

ふと外を見ると、マスタードが気絶したため、ガスが霧散して消えていくのが見えた。

これなら運び出せる、と安堵した緑谷は、永久の上半身を起こすような形で抱き上げ……しかしやはり反応がないのを見て、自分が運ぶしかないな、と思い至った。

その上で、抱え上げる前に……ぎゅっ、とその体を抱きしめた。理由はわからない、ただ、そうした方がいいと、そうしたいと思えた。

お互いの頭がお互いの肩に乗るように、正面から抱き合うような形にして彼女の、力が入っていない裸体を抱きしめ……彼女の存在を、温かみを確かに腕の中に感じながら、緑谷は、言った。

彼女に聞こえていないだろうことなど、承知の上で。

「もう大丈夫……もう、大丈夫だよ、永久………僕が、来た……！」
優しく語り掛けるような声で言われたその言葉は、確かに耳から入って、永久の脳内に吸い込まれ……

——どくん

その瞬間、少女の体内で……またしても、自覚なく……『何か』が胎動を始めていた。

☆☆☆

「……っ、栄陽院さん！」

「！ 起きたか、栄陽院！」

目を覚ました私が、『知らない天井だ』と言うよりも早く……視界に飛び込んできた緑谷の声が響いて……それに続いて、他の生徒達の声も聞こえた。それに交じって、B組の担任である、ブラドキング先生の声も。

なんか、頭がぼーっとしてるが……徐々に意識がはつきりしていつて、それと同時に、何が起こったのかも思い出してきた。

確か、緑谷と一緒に洗汰君を迎えに行つて、そしたらそこに筋肉ムキムキ……どころじゃなく、筋肉むき出しの敵がいて……緑谷がそいつを相手して、私が洗汰君を連れて逃げて……

けど途中でガスに巻かれて、洗汰君はたしか、ガスにやられる前に投げ飛ばしてどうにか範囲外に出したものの、私は力尽きてそのまま……

そして、その後……

『へへっ、じゃあ早速……』

『もう大丈夫……もう、大丈夫だよ、永久………僕が、来た……！』

………あー……最高の記憶と最低の記憶と一緒に……

そこでふと私は、自分の上半身……トツプレスだったはずのそこに目をやるが、そこには……

「……あれ？ これって……何で……？」

すると、横に座っていた緑谷が……ああ、今更だけど、私はどうやら、床に敷いた布団に寝かされていて……そのそばに緑谷がついていてくれたようだ。

その緑谷が、心配そうにこつちを見ながら、

「栄陽院さん……大丈夫？ 何があつたか、覚えてる？」

「あー、緑谷……ええと、途中まではうっすら……かな。緑谷が助けに来てくれたところまで、ぼーっとしてたからホントにかすかにだけ……でも私、何でコレ着てんの？」

「そっか……説明するよ。寝てていいから、そのまま聞いて」

質の悪い『敵』によつて捕縛され、性犯罪の被害者にされそうになり、ギリギリで緑谷に助けられた私は……どうやらそこで意識を失つてしまったようなので、その後のことを聞いた。

私を助けた緑谷は、ガスが薄まったからこれなら外に出られる、と思つたわけだが……それと同時に、現場の洞窟にラバーと相澤先生が

駆けつけたらしい。

私が投げ飛ばした冼汰君は、私を心配しつつも、ガスが充満して後戻りはできないため、必死に宿舎に向けて走った。助けを呼ぶために。

私と……緑谷にも、応援を出してほしい、助けてほしい、と。

その途中で2人と遭遇し、事情を伝え……その直後、破壊音と同時に、ガスが霧散して晴れていった。

それを見た2人は、一旦冼汰君を連れたまま、現場へ行き……ある意味で予想通り、ある意味で予想外の光景を見た。

予想通りなのは、緑谷によってノックアウトされたであろう敵がいる光景。

予想外だったのは、私がトッププレスで力なく横たわり、それを緑谷が抱き上げている光景。しかも緑谷、涙をこらえて目にためているような状態。

さすがにぎよつとしたものの、ラバーが素早く私の体の状態を観て、最悪の事態にはなっていないことを確認した上で……今もこうして私が纏っている、ゴムのスーツを作り上げて着せてくれた。

当然だが、訓練用の『ハードラバースーツ』ではない、普通に着心地のいいやつだ。

その後、ラバーが『個性』を使って、意識のない私と、限界まで走って足が棒な冼汰君、壁にめり込んで気絶している『敵』を運び、緑谷も一緒に宿舎に戻ってきた。

相澤先生とは分かれて……彼は、当初の目的通り、生徒達の救出に繰り出していった。

そしてその際、緑谷の口から、この襲撃に際しての敵達の目的が伝えられたとのこと……

と、そこまで聞いたところで、私達の頭の中に、ふたたびマンダレイの『テレパス』が響き渡った。

『通達事項2つ！ 1つ……敵の目的の1つが判明！ 恐らくは、生徒を標的とした危害、あるいは誘拐である可能性が高い！ 現在名指

しで標的だと言っていたのは、緑谷出久君、栄陽院永久さん、爆豪勝己君の3名！うち2名、緑谷君、栄陽院さんは施設にて保護済み！残る爆豪君は速やかに施設へ帰還を！なるべく1人にはならないで！また、標的はこの3人だけとは限らない……他にもいる可能性大！全員警戒を！」

『もう1つ！先に伝えた通り、原則としては戦闘は回避、無事に施設にまで戻ってくることを大前提として……それでもなお、それが困難であると判断できる場合……プロヒーロー・イレイザーヘッドの名において、生徒総員、戦闘を許可する！』

「……………相澤先生……………」

「おいおい、私有地とはいえこりや……思い切った手に出たな。まあ、こつちにしちやありがたいが……」

☆☆☆

「何ですか！友達が今ピンチなのに、指くわえて見てろって言うんですか！」

「俺達が未熟なことなんて百も承知です！それでも、じつと待つてるなんて……」

「だめだ！先も言った通り、あくまでイレイザーヘッドが下した戦闘許可は自衛のためのものだ……お前達が自ら危険に飛び込むことを容認するものではない！外のことはイレイザー達を信じて任せ……お前達はここにいろ！」

ある程度体も動くようになったので、広間に集まっているっていう皆のところ、私と緑谷が移動した時のこと。

そこでは、この施設の警備を担当しているというブラドキング先生に……切島や鉄哲といった……おそらくは運よく最初からここに、あるいはこの近くにいて、すぐに避難して来れた面々が、先生に食って掛かっているとこだった。

聞こえて来た会話の内容からして……外に仲間を助けに行きた

い、って申し出て却下された、ってところか。

まあ、そうだろうな……あくまで先生が戦闘を許可したのは、自衛のためだ。

緑谷曰く、『こんなわけのわからないままにやらせてたまるか』って言ってたそうだし……というか、それでも相当先生、危ない橋渡ってるんだけどな……私有地とはいえ、無免許の未成年に個性戦闘の許可出すって点で……

それはさておき、広間に入ってきた私達に気づいた彼ら彼女ら（ブラドキング先生含む）は、『大丈夫だったか!?!』って皆で駆け寄ってきて心配してくれた。

大丈夫だ、って答えたら、皆、安心したように息をついて……で、すぐにさっきの話に逆戻った。

仲間思いで熱血なメンバーは、危険を承知で、自分達も何かできることをしたい、と申し出たものの、ブラドキング先生は頑として首を縦に振らない。

そして、同じく仲間思いであるものの、比較的冷静に物を考えている面々……B組委員長・拳藤を中心とした何名かのようなだが、そういった、ヒートアップしかけている切島達をなだめていた。

「あんた達の気持ちはわかるよ……仲間を助けたいのは、私達だって同じさ。でもね……ここで私達が出ていって、それで怪我したり、殺られでもしたら……それこそ敵の思うつぼなんだって！ 命のあるなしに関わらず、その分私達の負けになっちまうんだよー！」

「その責任をとるのは、私達じゃなく……先生達ノコ。そもそも先生達は、私達を守るために動いて、戦ってくれてるノコ……その手間や仕事を増やしたり、邪魔になっちゃ……」

「邪魔になんて……俺達はただ……」

「結果そうなっちまうってことだろ。いくら以前より成長したからって……私達はまだ、ヒーローの『卵』でしかないんだからな。戦闘で足を引っ張ることもあれば、責任をとることもできない」

私も、そう割り込むように言って……悪いけど、拳藤達を援護する。それを聞いて、切島達も……何かまだ言いたいことは多々ありそう

だったものの、こっちの言い分の正しさもわかる分、何も言えないようだった。

自分達の主張が、所詮は単なる感情から来ているものであることを、理解しているがゆえ、だ。

……横目でちらつと見ると……緑谷もどつちかかっていうとそつち側っぱいな……こらえてる。明らかに。

その様子を……ブラドキング先生も、いかめしい顔でわかりにくくはあるけど、悲痛そうな感情が見え隠れする様子で、黙って見守ってくれていた。

「荷が重いことを無茶してやって、それで失敗してもつと状況が悪くなったら……そつちの方がウラメシいでしょ？ 私達は……私達にできることをやる？」

「ん」

「そういうことだね。これからそれぞれのクラスの連中……あー、普通科の2人もだけど、続々とこの施設に帰ってくるわけでしょ？ 中にはケガしてる奴もいるかもしれないし……そいつらの手当とかの準備、しなきゃいけないじゃん？」

「……そう、だね。必死で逃げて来た皆に、安心して休んでもらえるようにしなきゃね！」

柳が、小大が、耳郎が、葉隠が、それぞれに……切島や鉄哲をなだめつつ、今の自分達にもできることがある、と主張する。実際そういうのも、重要で、必要な仕事だろう。

それを理解して、どうにか切島たちも自分を納得させるに至った……と、思われたのだが、

「少なくともさ、ここまで逃げてこれれば安全ってことなんだから……それ目指して必死に逃げて来た皆のためにも……」

「さて……そうやって安心するにはちと早い気がするがな」

「……!?」

突如響く声。この場にいる、誰のものでもない。

それを聞いて、何事かと困惑する生徒達に……ブラドキング先生は、『不用意に動くな!』と一喝した上で、周囲を油断なく警戒し始めた。

しかし、どこを見ても声の主と思しき者はいない。

それきり声も聞こえてこない。

……だが代わりに、突如として……建物全体がきしむような音が聞こえて来たかと思うと……次の瞬間……

天井が、壁が、床が……ギギギギギギ、というきしむような音とともに、一気に縮むようにして全方向から迫ってきて……いや、襲い掛かってきた!?

「有事の際には避難場所として使え、籠城すらできるように……建物内の各所に金属部品による補強が行われている。大した防災意識の高さだが……それを利用されてちゃ、意味ねーわなあ?」

そんな……ニヤニヤと笑っていきそうな声音のセリフと共に。

安全だったはずの避難場所が一転、私達に牙をむいた瞬間を前に……私は、この襲撃事件、まだまだこんなもんじゃ終わってくれなさそうだと……何となく直感した。

シリアルキラーが来て、性犯罪者がきて……今度は一体、どこの誰なんだよ……!?

第127話 死闘、あちこちで

ヒーローチーム『ワイルドワイルドプッシーキャッツ』が保有する、山の宿泊所。

そこは、普通に暮らしても中々快適に過ごせる合宿施設であると同時に……有事の際には、そこに籠って避難を待ったり、対『敵』における籠城に使えるほどの強度になっていたり、ヒーローの拠点らしい性能を持っている施設でもある。

しかし今回、生徒を守る堅牢な盾、ないしは砦となるはずのその施設は……今まさに、内に閉じ込めた生徒達を押しつぶし、食い殺す罠へと変貌しつつあった。

外から外壁に手をつけて、その施設……に、組み込まれている金属を操っている、1人の男によって。

——バキ、ゴキ、バキ、ベキ、バキガシャンパリンギギギ……ゴシヤアアツ!!

轟音と共に……中心部に向けて、海の底の膨大な水圧がかかって圧縮でもされたかのような動きで……宿泊所の決して大きな建物は、潰れて無残な瓦礫の山になった。

その中にいた、大勢の生徒達は、迫りくる巨大な質量に抗えるはずもなく……無残にも、押しつぶされてその短い生涯を終えた………
………はずだった。

「……んん……？」

男は、違和感を覚えていた。

途中まで、自分の『個性』によって建物は確かに圧縮され、その中にいる者達に襲い掛かったはずだった。

だがそれは途中で止まってしまった。

『個性』の発動自体はしていたが……生徒達を圧殺するよりも早く、何か、壁のようなものに阻まれ……瓦礫のうねりが届かなかった。防

がれてしまった。

それを感じとして感じ取った男……ウォルフラムは、状況を確認するため、再度『個性』によって瓦礫をどかし、違和感があつた場所を露出させる。

するとそこには……不可思議な光景が広がっていた。

(……何だありや……骨の、壁？ 誰かの『個性』か？ 警護についてるはずの、ブラドキングのそれじゃないはずだが……)

生徒達が集まっている広間。

そこで、子供達を守るように……まるで、巨大な肋骨のようなそれが展開し、壁になって施設の瓦礫を防いでいる光景があつた。

しかしそれもすぐに、ほどけるようにして消えてしまい……あとに残されたのは、何が起こつたのかわからず、動転している生徒達。何人かは、その表情に恐怖が浮かんですらいる。

ウォルフラムがその様子を見て、生徒達の誰かがやったことではなさそうだとあたりをつけた瞬間……すぐ横から聞こえて来た風切り音に反応して、ぱつとその場から飛びのく。

一瞬前までウォルフラムがいた場所を、薙ぐようにして血の鞭が通過した。

「今度のはあんたか、ブラドキング」

「貴様も『敵連合』の手先か……何者だ。何の目的で来た!？」

いかつい見た目に似合わず、情に厚いことで知られるブラドキング。

今まさに、生徒に手を出され……傷つけられかけたことに怒り心頭の様子で、味方でも委縮しそうな鋭い目をウォルフラムに向ける。

だが、当のウォルフラムもまた、幾多の修羅場を潜り抜けて来た『敵』の強者である。微塵も怯むような様子を見せず、笑みすら浮かべて、鉄仮面の向こうから睨み返していた。

『誰だ』『何が目的だ』……平和ボケした日本のヒーローの話はいつもそこから始まるな。言ってる場合かどうか、言える相手かどうかくらい認識して、無駄なやり取りは省くべきじゃないのか?」

「答えたくないなら安心しろ、ここでは聞かん……貴様を捕らえて、取

り調べは警察に任せればそれまでだ」

「ネームドヴィラン『ウォルフラム』……非合法的な黒い仕事も進んで請け負う傭兵にして、全世界ほとんどの国と地域で国際的に危険視され、指名手配されているテロリスト……」

そこに、第三者の声が割り込んでくる。

油断なく、視線だけを向けたウォルフラムの前に現れたのは、闇から滲み出すようにして姿を現した、軍服姿の異形……パンドラズ・アクターだった。

「素顔を晒すことはまずなく、仕事の度に装備や仮面を換えるため、指名手配といいつつ搜索困難な『敵』。しかし、『金属を操る』という『個性』だけは知られている……先程の破壊は、ワイプシの皆さんが、保護した一般人などを守るために組み込んでいた補強材を利用したわけですね」

「ほお……俺も有名になったもんだな。するつてーと、さっきの骨の壁はあんたの仕業か……ドツペルヒーロー『パンドラズ・アクター』」「テロリストだと……なぜそんな奴がここに……!?!」

『なぜ』はひとまず置いておきましょうブラドキング教諭。この男はあなたの『個性』では相性が悪い……私が引き受けます。教諭は生徒達の再避難を。ここはもはや安全ではありません」

早口でそう言い切ったパンドラズ・アクターは、生徒達をかばう立ち位置でウォルフラムに立ちふさがる。

ブラドキングは、危険なテロリストの相手を任せてしまうことに何か言いたげな様子だったが、言っていることが正論であるがゆえに何も言えず、黙ってパンドラズ・アクターに従った。

「……生徒全員、俺についてこい! この場から避難する!」

「おいおい、つれねえこと言うなよブラドキング先生よお? 本物の『敵』、それも国際手配クラスのレア者を見れる折角のチャンスだぜ? きちんと生徒に、身をもって体験させてやりな!」

しかしその瞬間、ウォルフラムは周囲の瓦礫……の中の金属を操り、生徒達に殺到させて殺傷しようとし……しかし即座に反応したパンドラズ・アクターが、その姿を変えて立ちはだかる。

——ガギイイイイン!!

その身を、赤色のスライムに変え……その両手に盾を装備して、ウォルフラムの攻撃を受け止める……のみならず、その衝撃をまるで反射して返すかのように、金属の魔手はことごとくはじき返されて、逆向きに吹き飛んだ。

「……っ……前評判の通りか、何してくるかわからねえ野郎だ」

「ほめ言葉として受け取っておきましょう。ブラドキング教諭、皆さん、お早く!」

パンドラス・アクターが守る間に、ブラドキングはその場から生徒達を退避させ、今のここよりも、少しでも安全な場所を探すべく、夜の森に入ってしまった。

視界の端で、今度は純銀の聖騎士のような外見に変容したパンドラス・アクターが、凄まじい剣裁きで、襲い来る金属の豪雨を相手に戦いを繰り広げ始めたのを、ちらりと見ながら……しかし、すぐにそれも、夜の闇に阻まれて見えなくなった。

☆☆☆

「ち……またこの手合いか。この忙しい時に……」

一方、生徒の救助に動いている相澤は……マンダレイに『戦闘許可』を伝えるところまではできたものの、その直後、新たに襲来した敵の相手で手がふさがっていた。

それは……脳無だった。

体の色は黒く、体中に鎧のようなものをつけた重装甲・パワー型の脳無である。先程から『抹消』を使って『見て』いるが、襲ってくるその勢いは微塵も緩まることはない。

(つまり、この脳無も……USJの時と同じで、素のパワーがコレってことか。あの時の奴ほどじゃないが、それでも十分に……食らったら即ノックアウトもあり得る。捕縛も難しそうだ)

視界の端には、依然としてスピナーとマンダレイが、虎とマグネが戦っている光景が映っているが、どちらも自分のことで手一杯で、こ

ちらに加勢しに来る余裕はなさそうである。

もちろん逆に、相澤自身にも他の誰かに加勢する余裕はない。

長引くか、と思つて相澤がぎり、と奥歯を噛みしめた……その時。

脳無のすぐ斜め後ろの茂みから、細身の影が飛び出し……ばしん、と脳無の首元に手刀を打ち込んだ。

それ自体は、脳無にとつては痛打に等なりえない、あまりに弱い攻撃だった。打ち込んだ場所は、傷どころか赤くすらなっていない。

しかし、そのたった一撃が……致命的なものだった。

それを打ち込んだのは……その一撃で相手を止められる『個性』の使い手だったのだから。

『エネルギーバインド』……レイザー！』

「援護感謝します……アナライジユ」

手刀と一緒に叩き込んだエネルギーを介して、脳無に『エネルギーバインド』をかけたアナライジユ。彼女が飛び退つて脳無の傍を離れると同時に、レイザーは捕縛布を飛ばして脳無を縛り上げる。

身動きが取れなくなつたところで、再度アナライジユが脳無の体に手を触れ……先程よりもはるかに多くの『エネルギー』を流し込み、それを持つて完全に動けなくなるレベルで『エネルギーバインド』をかけた。

「……『脳無』、だったかしら？ 何なのこれ……体内のエネルギーの流れが減茶苦茶……それでいて馬力は非常に強い。長く縛るのは無理かも。でもこれで、1時間くらいは大丈夫なはず」

「助かります。1人じゃきつい相手だったんで……」

「あらやだ……新手？ んもお、厄介ね！」

ヒーロー側に加勢が現れ、さらに脳無が無力化されてしまったのを見て、マグネは相変わらず軽いままの口調で……しかし、警戒を露わにする。

それはもう1人の『敵』……スピナーも同様だった。言葉こそ発しないが、マンダレイと切り結びながら、どう動くべきかを考え……しかしその途中で、別なことに気づく。

(……？ 何だ、この音は……)

どこからか、何か大きなものが移動してくるような音が聞こえてくる。

バキン、ベキン、ドゴオン……といった、何やら破壊的な音も。生徒と思しき、子供の悲鳴もそれに混ざっているようだ。

ほぼ同時にマンダレイもそれに気づき……睨み合いながらも不思議に思った……次の瞬間、

『GYYYAAAAA!!!』

「きゃあっ!!」

「ぬああっ!!」

横の木立から……というか、その木立を盛大に吹き飛ばして飛び出してきた、黒い巨大な怪物。

それに驚いて、思わず2名は逆方向に飛び退って距離を取った。

マグネと虎、それに相澤とアナライジユもそれに気づき、驚きを隠せない。

「なっ……アレは……常闇君の!?!」

「常闇の『黒影』……暴走してるのか!?!」

『マダダ、マダア……暴レ足リンゾオオオ!!』

「よせ……もう、止まれ、『黒影』ッ……!」

自らの『個性』である『黒影』に、体を半分取り込まれているようにすら見える形になっている常闇が苦しそうにうめいているのを相澤は見た。

しかし、予想をはるかに超えて強力な破壊をまき散らしている黒影に、相澤では近づける気がしない。相澤の『抹消』では、個性そのものは消せても、異形型や、『個性』で生み出されたものそのものは消すことはできないのだ。すなわち、『抹消』で黒影を止めることはできない。

夜空に向かって、オオカミのごとく咆哮する『黒影』。止めるには、弱点である光が要る。

(くそ、ライトでも何でも持ってきてくりゃよかったか……『個性』で光を出せるのは、轟、爆豪、青山、八百万、上鳴……あとは、副次効果としてなら緑谷……それに……)

「レイザー、後ろだ！」

「!？」

その瞬間、虎の声に反応してとっさに飛びのいた相澤。

そこに……拘束されている脳無とはまた別な脳無が現れ、その太い腕……ではなく、蛇のような太い胴体を地面に叩きつけていた。

間一髪それをかわした相澤は、その脳無が……上半身は人型、下半身は蛇の、いわゆる『ラミア』のような容姿をしていることを把握する。

そして同時に、今の騒動の間に……先程まで、虎とマンダレイが相手をしていた、2人の『敵』がいなくなっていることに気づく。相手取っていた2人も同様のようだ。

どうやら、形成の不利を悟って判断し、今の混乱に乗じて撤退したようだ。

「っ……次から次へと……！」

敵が減ったのはいいが、危険人物を野放しにしてしまったという状況は決して好ましくはない。

ぎり、と奥歯を鳴らして相澤は……目の前の脳無と、向こうで苦しんでいる常闇と黒影を交互に見る……が、その黒影は、今の物音を聞きつけてか、今度はこつちに向かってくるではないか。

夜の闇で力を増している……だけではなく、何かきっかけがあつてあそこまで暴走しているのだろう。あれほどの力であれば……あのラミア脳無はもちろん、今拘束している黒脳無すら倒してしまえるかもしれない……それほど力だ。

しかし同時に、理性的な動きは期待できない。こちらも敵とみなし、破壊衝動のままに攻撃してくるはずだ。

幸いにして、今の脅威はあの黒影とラミア脳無だけ。相澤は素早く

状況を整理し、指示を出す。

「ここは自分と虎で押さえます！ マンダレイは他の生徒達の救助へ、アナライジユは何でもいいので光を持ってきてください、火でもライトでも……とにかくアイツを止められる手段を……」

「それなら心配いらぬ！ つすよ先生！」

しかしそこにさらに割り込む声。

と同時に、黒影と常闇の背後の茂みから、やや小柄な影が飛び出し……物音を察知した黒影が、その影目掛けて襲い掛からんと腕を振り上げる。

が、それが振り下ろされるよりも早く……

——バチチチイ!!

『キャンッ!?!』

上鳴が放った電撃……その光に驚いた黒影が、急激に力を失って縮んだ。

その隙に、どうにか制御を取り戻すことに成功した常闇は……自分の足元に黒影が元の大きさに戻ってきたことを確認して……ようやくくそこで脱力し、膝をついた。

その場に、放電を終えた上鳴と……一緒に来ていたらしい、峰田、小森、小大らが『大丈夫か!?!』と駆け寄っていく。

それを見つとも……相澤を含む数人は、黒影が無力化された瞬間に動きだしていた。

敵がいなくなつてフリーになつた虎が、正面にいた相澤に襲い掛かろうとしていたラミア脳無に、死角から一撃を入れて叩き伏せる

同時に、相澤がそれを捕縛布で拘束し……動けなくなつたところに、ダメ押しとばかりにアナライジユが『エネルギーバインド』を叩き込み、重ねて動きを封じる。

何かする暇もなく、極めて迅速に、ラミア脳無は無力化された。

ひとまず事態が好転したことにほつとしつつも……相澤は、同時に別な部分の問題に気づく。

今日の前にいるうちの何人かは、施設で待機していた生徒のはずだ。そして、相澤は、あくまで施設に退避し、その後そこで待機して

いることを前提として『戦闘許可』を出した。その後、自分達で能動的に動いて敵の迎撃ないし撃破などに出ることまでは許可していない。

ならばここは、指示にない行動をとっている生徒達を叱責すべき場面か、とも一瞬思ったが、それはそれでまた別な違和感がある。

これが……出てきているのが、緑谷あたりならば、『お前またやりやがったな』とでも言っていたかもしれないが……相澤が知る限り、峰田や上鳴は……自分から積極的に危険に飛び込んでいくような性格ではない。むしろ、プロや教師に積極的に任せようとする気質がある。

もちろん、いざという時には勇気を出して動ける性格であることも知っているが。今のように。

つまり今、施設にいるはずの上鳴や峰田がここにいるということは……その『いざ』が今、起きている可能性が非常に高い、ということであった。

そして、そのメンバーの中に……こういった場面で最も冷静沈着に動くことができる生徒の1人がいることを確認して、相澤は彼女に声をかける。

ほぼ同時に相澤の方を確認し、駆け寄ってきた……B組の委員長、拳藤に。

「拳藤、一体何があった、なぜここに……説明しろ」

「イレイザー……宿泊施設が……さっき、『敵』の攻撃で全壊しました。もう、あそこを避難場所として使うことはできなくて……それで、逃げて来たんです」

「!」

相澤のみならず、それを聞いていた虎やマンダレイ、アナライジユにも衝撃が走る。

これまで、自分達の動きの大前提になっていた部分が崩壊したのだから無理もないが……その説明を聞いていた他の面々も、口々に、こちらはしかし慌てた様子で告げる。

「そうなんすよ相澤先生! やべーヴィランが襲ってきて、それで

……施設完全にぶっ潰れちゃって、もう全部瓦礫の山で！」

「死ぬかと思った……いや、パンドラス・アクターが守ってくれなかったら死んでたかも……」

「その敵ですが……国際手配レベルのテロリスト『敵』らしいです。名前は確か、ウオルフラム……金属を操る個性……だったかと」

「それもパンドラス・アクターからの情報なんだけど、私達を逃がすために、そいつと戦ってくれて……その間にブラドキング先生の先導で逃げて来たんだけど、また別な敵が、青い炎を出す奴が襲ってきて……先生が戦ってくれたけど、それで皆散り散りになっちゃって……」

矢継ぎ早に語られる情報……しかも、ものの見事に全て凶報であるそれらに、相澤は、ぎり、と、今日何度目になるかもわからない歯ぎしりを響かせた。

第128話 夜の終わり

『敵』が襲撃かけてきてるところに常識だのなんだの期待するのなんて無駄だとはわかってるけどさ……今日これ、事態が急転直下しすぎじゃないだろうか。何から何まで。

……1回整理してみるか。

えっと……花火&キャンプファイアーの用意しようとはらけて移動してるところに、同時多発的に『敵』が襲って来たんだっけな。

マンダレイと虎さんのところ、ラグドールのところ、ピクシーボブのところ、洗汰君がいたところ、そして施設。少なくともこの5カ所に同時に。

ああでも、私達が避難中にぶつ飛ばした脳無や、あのガス野郎もいたし……そうすると最低7カ所ってことか。それも、チンピラどころじゃない戦闘能力を持った奴ばっかだっけ話だった。

それ以外のところにも出てたのかもしれないが……情報が入ってこないのわからん。……出ていないことを祈りたいけどね……。

私達と緑谷は、洗汰君を助けるためにあの筋肉野郎と戦って、けど私はエネルギーが枯渇寸前だったから、早々に洗汰君を連れて逃げる係にシフトした。

が、その途中であの性犯罪者のガスに巻かれ、やむなく私は洗汰君を、少々手荒な方法でガスの効果範囲外に離脱させ……自分は力尽きて気絶。

その最中、性犯罪の被害者になりそうだった所を、緑谷に助けられた。とつづくにカンストしてると思ってた緑谷への好意がまた一段と高まったのを感じた瞬間だった。

その後、再び気絶してしまった私は、緑谷とラバーによって施設に運ばれ、そこで目を覚まし……しかし、間髪入れずにそこに別な『敵』が襲撃をかけて来た。しかも、国際手配されてるテロリストだのっていうヤバイ肩書を持つてる奴が。

そいつをバンドラス・アクターが相手してくれてる間に、ブラドキング先生の引率で逃げ出したものの……そこにさらにまた別な敵が

襲い掛かってきた。手から青い炎を放射する奴が。

何なんだよこの襲撃頻度……わんこそばかよ。次から次へと。いらねーよもう。ヴィランじゃ腹は膨れないんだよ。

ブラドキング先生がそいつを相手する間に、私達だけでさらに逃げた。

しかしそこにさらにまた別な、今度は脳無が何体も現れて……結局そこで皆、散り散りになってしまったのだ。

ただ、先生が移動中に避難先の候補として上げていた場所は覚えていたため、そこで現地集合するような感じで、幾人かは集まることができている。

それでも……一緒に移動していた人数の半分もないが。上鳴や峰田、小森……それに、緑谷もない。

皆、伊達や酔狂でヒーロー科に在籍しているわけじゃない。無事だとは思うが……今回の場合、あのテロリストみたいな規格外の奴も『敵』側にいるらしいから……楽観はできないな。

……そして、いずれにせよ……今の私にできることは、正直……もう、ない。

ここに走ってくるまでの避難……もとい運動で、エネルギーが完全に枯渇してる。今の私は……多少身体能力が高いだけの、ただの『無個性』に等しい。

『自食作用』オートファジーという最終手段はあるものの……あれは相当に切羽詰まった状態じゃなければ使わないことにしている。使えばほんの数分、力は戻るだろうけど……その後、急いで何か腹に入れなければ、栄養飢餓でガチで命の危険がある。

今現在、私達は……宿泊施設が避難場所としてダメになったので、そこから少し離れたところに、別に用意されている倉庫に来ている。

古い山小屋を改装したものだそうで、宿泊施設の保管庫に入りきらない、あるいはあまり出番のない物資や設備を保管している場所だそうだが、幸いなことに非常用の物資なんかも保管されている。簡易的な山小屋として使うこともできるそうだ、今でも。

ただ、防犯構造ははっきり言ってアレな上、ここを守ってくれる

ヒーローもいないから、率直に言つて『屋根があるところで休める』くらいのものでしかないが。

それでも、少しでも落ち着いて休める環境つていうのは、今の私達には必要なものだ。

それは、『施設』から避難してきた私達にはもちろん……『敵』との戦いで、あるいは避難する過程で傷を負つて逃げて来た者達にも言える。

さつきから、何人かここに運び込まれてきてるんだよな……そういう怪我人が。

当然ながら、その連中をほっとくわけにはいかず、手当しなければならぬわけだが……幸いなことに、さつき言つたようにここには救助用の物資がある。医薬品なんかも。

ただ、そんなに潤沢にあるわけじゃないし、種類も限られている。傷の洗浄や消毒に使える水は……一応水道は引いてあるから、今のところ問題ないが。

ヒーロー科であれば、何かあつた時用に、応急手当や心肺蘇生の方法は必須カリキュラムとして学んでいるので、簡単な手当ではできるが……一定以上の重傷になると、応急処置だけでは不足なこともある。……既に、そういう奴が何人か出てきてしまっている。

応急処置の範囲でできることはやつたが、このまま放置しておく……死ぬことはないかも知るが、かなり症状が悪化してしまう可能性が高いのが、何人か……1年ヒーロー科には治癒系の『個性』持ちがないので、こういう場合に打てる手がないのだ。

一応、応用としてそういうのができるとすれば……瀬呂、八百万、そして私くらいだろうか。

瀬呂はまあ、テープで傷や骨折箇所に応急手当、八百万は医薬品を『創造』して……つて感じで。しかしそのどちらも、ここにはきていない。

そして私は、何度も言うように今、エネルギーがすっかりかんだ。応急手当に手を貸すことはできても、『個性』を用いた治癒……『エネルギー譲渡』や『コンセントヒーリング』を行うだけの余裕がない。

宿泊施設になら『ゼリー』があつたはずなんだが……食べる前にあの、ウォルフラムだかつていうテロリスト『敵』が現れたからな……置いてこざるをえなかった。

エネルギーを補充しなければ、私は役立たずだ。正直、純粹に肉体に貯蔵されているエネルギーも……ちよつと枯渴気味になつてきてる感触が……さつきからろくに動けなくて、怪我人の処置とか、皆に任せつきりになつちやつてるし……

ただそんな中、さつき砂藤が『ちよつと考えがある』つつつて走つていったんだが……何だろう、何か秘策でもあるのか？

……まさかとは思うけど、『ゼリー』を取りに宿泊施設の方に行つた、なんてことは……いや、さすがにないよな。砂藤が走つていったの、山小屋の中の方だし。何かを取りに行つた、と考えるのが自然だ。でも、何を？ 『考え』つて……この状況を打開するための手になるようなものなのか？

……だめだ……栄養が足りないせいもあると思うけど、頭が回らなくなつてきた……意識を保っているのがしんどい。体が、疲労と色々な不足で悲鳴を上げてる。

……正直、あの性犯罪者にやられそうになつた（色んな意味で）時点で、結構限界で……そこからここまで逃げてこれたの、ランナーズハイみたいな部分もあつたからだろうな……ここにきて、下手に心と体が休まつた分、そのへんのが噴き出してきたか……と、思っていた時、

「すまねえ、遅くなつた！」

「砂藤？ お前、いないと思つたら、どこ行つて……何だそれ？」

小屋の奥から駆け出してきた砂藤と、それを見て声を上げた尾白。尾白の方は、何か言いかけて思わず止めた、つていう感じだった。

恐らく、今、砂藤が持つてきたものを見てだと思ふ。よくわからない。く。

今の砂藤は、どこから持つてきたんだか……いや、多分奥の倉庫とかからだとは思うけども……よくわからないものを手に持つている。いや、何を持つているかがわからないわけじゃないんだが……何に使

うためにそれを持ってきたのか、って感じだな。

砂藤は、大きめのバケツ（新品っぽい。ビニールに包まれてる）と、陶器っぽいツボを持っていた。私達の目の前で、ぱりっとビニールを破いてバケツを取り出し、ツボの封をしている紙のふたと紐を取り外す。きよとんとしている私や尾白とは対照的に、神妙な顔つきで。

「色々考えたんだが……やっぱり今一番必要なのは、栄陽院の『個性』だと思う。怪我人の中には、本人の自然治癒力だけじゃ不安な奴らもいるからな……万全を期すなら、この合宿中何度も世話になった、あの治癒能力が欲しい。アレさえありゃ、多分大丈夫なはずだ。後遺症とかもな」

「それは……俺もそう思うけど、もう栄陽院自身、限界なんだぞ？ これ以上の使用は……」

「……無茶してどうにかなるならやるのがヒーローだけど、その後が続かないとなるとな……1人か2人助けた後は、多分私、死ぬし」

「もちろん、そんなことを許容するつもりはねえよ。ただ単に、栄陽院に『個性』を使ってもらうためには……エネルギーの補充が必要だ。それをどうするか考えてたんだ……そして運がいいことに、この倉庫に、おあつらえ向きのもんが眠ってやがった」

説明しながらも、砂藤は動いている。

洗面所に行って水道からバケツに水を入れていく。パッケージの表示からして、10リットル入るらしいそれにたつぷりと注ぎ込み……陶器のツボの横に置く。

そのツボだが、向きを変えると、ラベルみたいなものが張られているのが見えたんだが……

「……『果糖』？」

ラベルって言うか、達筆な毛筆の文字でそう書いてある紙が張り付けてあるみたいなんだが……え、何それ？

『果糖』ってたしか、アレだよな？ 果物を精製して作る、純粋な甘味料。

あ、ラベルに量書いてある……4 kg？ 結構あるな……

「山で遭難した人に対しては、少量で多くのエネルギーを効率よく取

れる食品……チョコレートや、この『果糖』みたいなもんを食べさせることが多い。もちろん、一番はそういう時のための医薬品とかなんだろうが……あの手のモンは保存に気を遣うことが多いからな。こういう、多少雑に保管できるものが、今の世の中でもある程度重宝されてる。ここにしたら、何かしらあると思ってた」

「確かに……果糖は普通の砂糖とかに比べてもかなり早く、負担も少なく人体に吸収されるけど……え、砂藤？ お前それ、まさか……」
「……常識も何もかも棄てたやり方だつてのはわかっている。それでも……今は、これしかねえ。悪いな、ろくに入れ物もなくてよ……未使用品だから、コレで勘弁してくれ」

砂藤は、バケツの水の中に……陶器のツボの中に入っていた果糖を、ぎざぎざ……と一気にぶちまけた。そして、一緒に持ってきていたらしいおたまで、それをさつとかき混ぜる。

10 kgの水に、4 kgの果糖を混ぜた……14 kgの砂糖水が、私の目の前で出来上がった。

……なるほど、大体わかった。

「……なるほど……飲めつてか、それ」

「……すまねえ……でも、ここにはゼリーもねえし、携帯食料のクッキーなんかじゃ、栄養価は会っても消化吸収に時間がかかる……『個性伸ばし』で強化された消化能力でも、多分間に合わねえだろう。だが、これなら……」

疲弊している私に、さらなる負担を強いる形になるこの作戦。吸収率無類の『果糖』を溶かした砂糖水で一気にエネルギーを補充し、それを用いて重傷者の治療を行う。

……治療には私のエネルギーを補充する必要がある、その大前提を最も効率よく解決するには……なるほど、今の状況じゃ、これ以外にないな。

当然、砂藤自身も苦渋の決断だっただろうし……それを悟った尾白もまた、気軽に喜んだり、受け入れることができるような作戦じゃない。砂糖水14 kg一気飲みなんて、普通に考えて、自殺行為もいところだ。血糖値爆上がりするだろうし、消化器官ぶつ壊れて死んでも

おかしくない。普通の人がやったら、ほぼ間違いなく体壊す。

けど、私なら……大丈夫だ。

私の個性なら……オーバーカロリーなんてなんのその、むしろ全てを効率よく吸収して力に変えられる。これは……私にしかできない、けど私なら確実にできる『無茶』だ。

「ありがと、砂藤……私じゃ思いつかなかった方法だよ」

「栄陽院……すまねえ、俺は……」

「皮肉なんかじゃない、本気で礼言ってんぞ？ ……私にとっては、何もできないまま、友達が苦しんでるのを見ていることしかできないのが……一番つらい。自分の無力を乗り越えて、力を手にできるなら……むしろ望むところだ。それに、オールマイトや……緑谷も言ってたしな」

「……？」

「ヒーローとは……常に、限界を超えていく者だ、つてよ……！」

☆☆☆

ぐく……ぐく……と、喉を鳴らして、砂糖水を飲み下していく音が響く。

溶けた果糖の爽やかな甘みを感じながら、絶え間なく喉を動かして、永久はそれを胃袋に送り込んでいく。

飲み干している量が量だ。当然、胃が膨らんで……腹部もぽっこりと出た形になっていく。

その様子を、砂藤と尾白は黙って見ていた。

連日の『個性伸ばし』の訓練で酷使され、修行中はともかく、その後は、常ならば摂れるはずの豊富な栄養の補給のないまま、只人の肉体としてふるまって来た彼女の体。

力が十分でないところに、突然の『敵』の襲撃。そこで『個性』を使用したことによるエネルギーの枯渇……

そこに加わった、『マスタード』のガスによる毒。いかな強靱な肉体と言っても、毒による負担は決して少なくないもので……衰弱しきつ

た体は、順調に蝕まれていった。

その上さらに襲い掛かる『敵』。心身ともに負担が重くのしかかる。闘争、毒、逃走……酷使に次ぐ酷使……

限界に近かった肉体は、正真正銘の限界にまで追い詰められ、彼女の体に残る力は、『個性』によるものにとどまらず、肉体的なそれについても枯渇しようとしていた。

人体最後のエネルギー貯蔵庫である、肝臓のグリコーゲンすらも底をつきかけ、本当に『自食作用』^{オートファジー}しか手段が残らないまでに。

何が起こったところで、抵抗する力はすでになく……襲い掛かる敵からは逃げることもしかできず、現に、常であれば敵ではなかったであろう矮小な『敵』に、主に捧げた肉体を穢されかけるまでの醜態をさらした。

——…どくん

主である緑谷とはぐれて動けなくなり……彼が戦っているであろう場にいられない。

……今の自分では、いても邪魔になるだけだろうが、それも含めて悔しいばかりだ。

——…どくん

さらには、自分の身を案じてくれている、砂藤や尾白といった仲間に、罪悪感を抱かせ、悲痛な顔をさせるまでさせてしまった。彼らは間違いなく、最善の方法を提示してくれているというのに。

——どくん

守るべき小さな子供……力なき市民である洗汰にも……決死の覚悟で守ろうとしたとはいえ、それゆえに涙を流させてしまったと聞いた。

——どくん！

彼女の肉体は……細胞達は……そして『個性』は……復讐を誓っていた。

今後もし、同じようなことが起こったならば……二度と無様は晒さない。

共に戦う仲間のため、守るべき市民のため、仕えるべき主のため

……必ず乗り越えてみせる。

——どくん!!

そのために必要なものを……今、ここで、手に入れる。

——どくん!!!

力なく朽ちかけていた、彼女の肉体と精神、そして『個性』に……空前の『超回復』が起ころうとしていた。

——どくん!!!!

そして同時に……前代未聞の『変容』もまた……その準備を、着々と調えつつあった……。

(いや、なにも一気に全部飲む必要はなかったんじゃ……)

なお、言うタイミングを逃した——飲みながら適宜治療してもらう、とかを想定していたようだ——男子2人の心の声は、形になることはなかったという。

☆☆☆

Side. 緑谷出久

「来んな……デク……!」

「かつ……ちゃん……!」

僕の目の前で、USJの時にも見たワープの『個性』の『敵』……黒霧の開いたゲートが、閉じる。

その向こうに……かつちゃんの……僕の幼馴染の姿を残したままに。

……守れなかった。取り返せなかった。

自分の中で、そんな思いばかりが反芻される。

恐らく、ここにいる皆……轟君や麗日さん、梅雨ちゃんや飯田君……皆、同じ思いだろう。

完全に……僕らの、負けだ。

宿泊施設を『ウォルフラム』とかいうテロリスト『敵』が襲撃してきた後、さらに襲つて来た別な『敵』や脳無によつてばらばらになった僕ら。

その後僕は、運よく、と言つていいのか……轟君やかっちゃん、さらに飯田君や麗日さん、梅雨ちゃん達とも合流することができた。

麗日さんと梅雨ちゃんは、また別な『敵』に襲われてたみたいだったけど……僕らが来たら、数の不利を悟つて逃げたらしい。

遠めに見えた感じでは、僕らと同年くらいに見える女の子だったと思うけど……

しかしその直後、敵の『個性』によつてかっちゃんが攫われてしま……それを追いかけて、僕らは『敵』が集合場所に行っていたらしいところまで行つた。

けど当然ながら、『集合場所』である以上、そこには強力な『敵』が数多く揃つていて……コスチュームもなく、人数も十分でなく、何人かは連戦で疲弊している僕らでは防戦一方だった。

加えて……そうじゃないかとは思つてたけど、どうやら今回の襲撃は、USJの時とは違って、量よりも質を重視にして集められたメンバーらしく、本当に凶悪な『敵』が揃つていた。

全てを焼き払う威力の青い炎を放つ……つぎはぎみみたいな肌の『敵』……茶毘。

女子高生みたいな見た目の——多分、麗日さん達が襲われてたのはこいつだ——刃物を使って襲ってくる『敵』……トガヒミコ。

……なぜだか、妙に僕に親し気に話しかけて来た。……初対面のはずだけど……？

黒い全身タイツの装束を纏つた『敵』……トウワイス。

自分自身は戦わないものの、僕らの目の前で茶毘を2人に『増やした』。とんでもない『個性』だ。

人間を磁石化する『個性』に加え、単純なインファイトの実力の高さも脅威だった、大柄な男……だけど口調がちよつとアレな『敵』……マグネ。

トガヒミコ同様、いくつもの刃物を使って襲い掛かってくる……自

らを『ステインの後を継ぐ者』と称した、トカゲみたいな異形の姿の『敵』……スピナー。

戦い方なんかには差はあれど、油断できない奴ばかりだった。

こちらにも決して浅くない傷を負いながらも、どうにか食らいついて……そうしているうちに、周囲にいたらしい青山君や鎌切君、切島君や障子君なんかも駆けつけてくれて、一旦はかつちゃんを取り戻すことに成功したのだ。

これなら後は撤退するだけ。どうにかなるか……と、思い始めた矢先だった。

轟君が、熱と冷気を駆使して発生させた水蒸気の煙幕に紛れて、撤退しようとした、まさにその時。

僕らの行く手を塞ぐように、敵の1人であり、『出入口』でもある黒霧が現れ……さらに、そのゲートの向こうから、敵方の援軍となる、予想だになかった相手が現れた。しかも、3人も。

1人目は……宿泊施設を襲撃してきた、あの仮面の『敵』……ウオルフラム。

パンドラズ・アクターが戦ってくれていたはずの奴がここに……彼が負けたのか、それとも黒霧が回収したから、戦線を離脱してここに来たのか……できるなら、後者であってほしい。

2人目は……茶毘だった。あつちに2人いるのに……恐らくは、こつちがオリジナルだったんだろう。つまりあつちのは、コピーと、コピーのコピーってことだ。……それでも十分強かったのに。

そして、最後の1人……こちらにも、僕が知っている顔だった。

それでいて、僕の知る限り……最凶最悪の『敵』と言っている1人……『分解と修復』という、恐ろしく強力で汎用性の高い『個性』を持つ『敵』……『オーバーホール』。

何でここにいるんだとか、逮捕されたはずじゃないかとか、『敵連合』に入ったのかとか……頭がこんがらがって上手く考えられない間に、オーバーホールと茶毘の広範囲攻撃で、一瞬で僕らは蹴散らされてしまった。たちこめていた煙幕ごと。

僕だけならまだよけられたかもしれないが……連戦による疲弊に

加え、コスチュームによる補助……特に『サイコフレーム』による感応能力の支援がない状態では、相手の攻撃を察知して、自分も皆も被害なく回避することは無理だった。

負傷と疲労で動きが鈍くなっていて、攻撃をよけきれない麗日さんと飯田君をかばいつつ、どうにか深手を避けるので精いっぱい……そこに追撃でもされたらまずかつたかもしれないが、それはされなかった。

しかし代わりに、かつちゃんが再び奪われ……黒霧のワープゲートに放り込まれ……

そして、冒頭に戻る。

「悲しいなあ……有精卵共……だっけか？ 目の前で攫われていく学友1人、助けることもできないとは……」

嘲るような……実際あざけているのであろう、茶毘の言葉が……僕に、僕らに突き刺さる。

黒霧のゲートに飛び込まず、ここに残った茶毘。それも2人。

こいつらはコピーだ……本体ではないから、回収しなかった、つてことだろうか。

……コピーだとしても、戦った感じ……攻撃性能は本体と同じか、限りなく近い。危険であることには変わりない。

失意の底に叩き落され、上手く体が動かず、心も整理できていないけど……

(落ち込んでる暇……ない……！ 戦わなきゃ……やられる！)

勝つちゃんが最後に見せた、あの目。あの光景を思い出すだけで、心が張り裂けそうになる……けど、今は考えるな！ これ以上犠牲を出すわけにはいかない……ここで僕が、コイツを止めないと……！

そう決心するも、僕らはすでに満身創痍だ。轟君も、飯田君も、麗日さんも梅雨ちゃんも、他の皆も……大なり小なりの傷を負って、動きが鈍い。

強い衝撃を与えれば消えるようだけど、それを補って余りある攻撃力を持つ、茶毘のコピーが2人……果たして、無事に済むかどうか……

そんなことを考えていた……その時だった。

「せっかくだ、選ばせてやるよ。ここで死に物狂いで抵抗するか、罪の意識ごと命を棄てるか……後の方が楽だと思うぞ？ お前らみたいなのは、そういうの結構気にするだろうしな……子供は子供らしく、責任全部大人に擦り付けてドロツプアウトっていうのも……」

「くたばれ エ!!!」

——ドツツゴオオオオオオン!!!

「!?!?!」

突如として、横の茂みから噴き出してきた大爆発……それによる爆風に、茶毘（コピー）が2人とも飲み込まれた。

突然のことに、茶毘達はもちろん……僕らも、一体何が起こったのか、わからない。

いや、わからないことはない。というか、こんな現象を引き起こせる人を……僕は1人しか知らない。それに、今、攻撃の瞬間に聞こえた声も……

でも、そんなはずはない。だって……彼は……

「……おいおい、どういうことだよ……?」

コピーの茶毘は、困惑と脱力感の混じった声音でそんな風に呟きながら、どろりと解けてその身を消失させた。2人共だ。

そして、僕を含む生徒達は……恐らく、同じ理由で困惑しつぱなしのまま、今の光景を何も言えずに見ている……

そんな僕らの目の前に、茂みの中から2人の人物が姿を現した。

「はッ……俺がてめえらなんぞに易々と攫われるかってんだ、クソ敵共が!」

今さっき、確かにワープゲートの向こうに連れ去られたはずのかわちゃん、もう1人……

「アハハハッ! 連れ去られる一歩手前まで行っておいでよく言えるねえ君、手の皮だけじゃなくて面の皮まで厚いみたいじゃないか。

というか君ほとんど連れ去られてたようなもんだよね？ 実際僕以前に緑谷君達が助けてくれなかったらあの変なビー玉に閉じ込められてそのまま「死ね！」ぐふうっ!？」

こんな時でも絶好調の煽り節を響かせ……その手から、『爆破』使用直後であることがわかる煙を立ち上らせている……B組の問題児。

けどこの場では、MVPとすら言っていないであろう活躍を見て見せたことが後で明らかになる、物間君だった。……かっちゃんに殴られてたけど。

これは、その少し後になってから……無事に先生方に保護されたところで、物間君から聞いた話になる。一体あの場で、何が起こって……どうしてかっちゃんが無事に済んでいるのか。

場面が動いたのは、轟君の水蒸気煙幕に紛れて僕らが逃げ出そうとした、あの時だ。

あの時既に、物間君は物陰に潜んでいたらしい。いざという時に奇襲できるように。

その必要もないまま、撤退成功、出番はないかと思われたわけだが……黒霧がゲートを開いて、見るからに強力な『敵』が現れたところで、即座に彼は動いた。

煙幕に紛れて駆け出し……素早く2人の人間に触れて、『個性』を『コピー』した。

その際、直前にコピーしていた取陰さんの『トカゲのしっぽ切り』を使い、遠隔で手を飛ばして触れる、なんて芸当も使ったそうさ。

そして、かっちゃんの手を引いて茂みに逃げ込み……同時に、コピーした『個性』を発動。

トウワイスの『個性』によって、自分をコピーして2人に増やした。トガヒミコの『個性』によって、そのコピーした複製の自分を、かっちゃんに変身させた。

変身に必要な血液は、既にかっちゃんがケガしていたので、それをこすって頂戴してからなめとることで、ごくわずかであるが摂取したらしい。

その『かつちゃんに変身した複製の物間君』と、本物のかつちゃんが煙に紛れて入れ替わり、間髪で煙が晴れる前に茂みの中に離脱。そのまま、偽物のかつちゃんを攫わせることで、まんまと敵を騙したというのだ。

そしてその直後、ちょうど時間切れで使えなくなった『トカゲのしっぽ切り』の代わりに、かつちゃんの『爆破』をコピーして……かつちゃんと2人同時に放った大威力の両手爆破で、一撃で茶毘を倒した……と。

敵の個性を組み合わせた囷の作成と、入れ替わり……あ、あの一瞬でそれだけのことをやってのけたのか……すごい、やっぱり物間君、性格はアレだけど、策士としては一流なんだ……！

え、もともとかつちゃんが狙われてたことが分かって、あの2人（トウワイスとトガヒミコ）の個性が分かった時点で考え付いた策だったから、あの場で一瞬で思いついたわけじゃない？ いや、それでも十分にすごいよ。

その後、今言ったように先生たちによって、僕らは保護された。黒霧がゲートを閉じてから結構すぐに来たから……オーバーホールやウォルフラムが僕らにとどめを刺さないで帰ったのは、万が一にも追って来たヒーロー達に補足されることがないように、っていう理由もあつたのかもしれない。

そうして……もうあと1泊で終わるはずだった、楽しいキャンプファイアーが行われるはずだった『林間合宿』は……当然ではあるが、6日目の夜にして中止となつてしまった。

『敵』の……しかもあの『敵連合』による襲撃がなされ、生徒に重軽傷者多数……さらに、プロヒーロー1名……ラグドールが『行方不明』という結果になった。

幸いにして、死者こそ出なかったもの……これは本当に、大変なことになった、と言わざるを得ない。

どうすればいいんだろう、僕ら、これから……

……僕が意識があつたのは、そこまでだ。

倉庫を中心に設営され、栄陽院さん達が負傷者の手当をしたりして

いた仮の避難所で、救助車両の到着を待っていたんだけど……どうやら、出血によるダメージや疲労がバカにならないものになっていたらしく、途中で意識を手放してしまったから。

その翌日、病院のベッドの上で目を覚ますまで……僕は、そのまま眠ってしまっていたそうさ。

第8章 栄陽院永久と神野区決戦 第129話 広がる波紋、生まれる波紋

「あーあー、派手にやってくれたな、あんにやろ……」

「えほっ、えほ……何ですかあ、今の……自爆？」

「……自爆の瞬間、泥みてえに溶けてなくなっていくのが見えた。ありや……」

「おいおいおい待てよ茶毘!? 俺は何もしてねえぜ!? ああ、確かに見た、ありや俺の『個性』だ!」

場所は、とある場所にある……『敵連合』の拠点となっているバー。そこは現在、かなり凄惨な光景が広がっていた。

まるで、店の中で爆弾でも爆発したのかというような破壊痕。机が、椅子が壊れて吹き飛び、壁や床がえぐれ……バーカウンターの向こう、棚に飾られた酒瓶も、何本か倒れたり割れたりしている。

実際にこの惨状は、かなり大きめの『爆発』がそこで起こったことによるもののだが、あまりにも突然のことだったがゆえに、現状を飲み込んでいる者は、まだ誰もいなかった。

『敵連合』のメンバー達は、今まさに、さらってきた爆豪に『仲間にならないか?』と勧誘していたところだったのだが、捕らわれていた爆豪は、『寝言は寝て死ね』と、間違えているのか罵倒しているのか微妙にわかりにくい反論を口走った直後……最大威力の『爆破』をその場で放ち、自爆したのである。

とつさに黒霧が、爆風や飛んでくるものをワープゲートで散らして癩ぎ、さらにMr.コンプレスが、玉に圧縮して持っていたバリケードなどを出して、爆風を防ぐ遮蔽物にした。

そのおかげで、この程度の被害に抑えられたのだ。

「今の崩れ方、私も見たわ。間違いなく、トゥワイスの『個性』……でも、違うのよね?」

「あ、ああ! 俺はあいつのコピーなんざ作ってねえし、そもそも作れ

ねえよ！ 事前に採寸やら何やら済ませた茶毘とかならともかく、攫ったばかりのアイツのコピーなんざ作れねえ」

「じゃ、間違えてコピーの方を攫ってきちゃった、っていうこともないわけですね……でもじゃあ、なんで？」

トウワイスは、自分の『個性』で作ったものであるということとは否定するが、茶毘やマグネが見た光景からは、明らかに彼の『二倍』で増やしたものの……の、朽ち果て方だったとわかった。

しかし一方で、トウワイスの言い分も正しい。

彼の『個性』は、手で触れたものを2倍に増やすものだが、無条件に発動できるわけではない。複製には、正確な採寸と明確なイメージが必要になる。装束の首の部分に仕込んでいるメジャーを使い、対象の大きさその他を正確に採寸し、その情報とはつきりとしたイメージを持って臨むことで、初めて『二倍』にできるのだ。

コンプレスが爆豪をさらってから、黒霧により転送させられるまで……そんな暇は一秒たりともなかったし、自らも暴れまわる爆豪を相手に、非戦闘型であるトウワイスは近づけてもいない。

そこで、ふと思いだしたように茶毘が、

「……そういや、雄英体育祭の映像の中に……他人の『個性』をコピーする奴がいたな。おいトガ、トウワイス、お前ら……そうだな、多分あの煙幕の時だと思うが、何かに触られなかったか？」

「……そういえば、触られたっていうよりは、ぶつかったような気がします……」

「俺も確か何かにぶつかったぜ!? 覚えてねえけど！ てつきりトガちゃんだと思ってたんだが……知らねえけどな！」

「……その時だな。今の爆豪……の偽物は多分、2人の『個性』の合わせ技だ」

からくり気づいた茶毘……と、続けてコンプレスもそこに思い至った様子で、

「なるほど……トウワイスの『個性』で自分を増やして、トガちゃんの『個性』で変身したのか。スモークがたかれたあの一瞬で入れ替わって……なるほど、大した役者だな、一杯食わされた」

トウワイスの『個性』は、採寸とイメージなくして複製はできない。しかし例外的に、自分自身であればその限りではない。採寸なしに複製することができる。

トウワイス自身は、あるトラウマゆえに自分を増やすことができないのだが……これがもし、トウワイスの『個性』をコピーした他人であれば？

コピーした『個性』で自分を複製し、さらにその複製の自分に、またしてもコピーした能力として『変身』を使わせれば……

真実に行き着いた連合メンバーは……最後の最後で騙されていたことに気づき……ある者は啞然とし、ある者はぎり、と奥歯を鳴らした。

そんな中であつて、冷静さを保ったままだった1人である死柄木が、ぱんぱん、と柏手を打って注目を集める。

「やるもんじゃないか、お前から一本取るなんてな……まあ、その点についてちやこつちの負けだ、潔く認めよう」

「……それでいいのかい、大将？」

「いいさ。ま、スカウトできればそれにこしたことはなかったが……こつちの目的そのものは、既に達成されているからな」

ぱんぱん、と服についた埃を払うようにして、死柄木はカウンターの椅子に座り直す。

そして、自分に視線を集中させている、店内の連合メンバーを見回すようにして、

「お前らも色々あつて疲れたろ？　ひとまず休もう……何、これから数日間……退屈はしないさ」

そう言いながら、カウンターのの上にあつたりモコンを手に取り、店の壁際に置いてあるテレビ……真新しい、大画面のそれに向けて、電源を入れた。

☆☆☆

無我夢中だったので、あの子のことは……正直、よく覚えていない。

砂藤が作ってくれた14 kgの砂糖水を飲み干した後、急激に補給できたエネルギーを使って、傷を負っていた生徒達の治療を行った私は……どうにか全員分、ひとまず問題ない所まで『コンセントヒール』で癒すことを終えたところで……今度こそ、意識を落とした。

で、気が付いたら……知らない天井だった。

まあ、予想通り病院に搬送されていたわけで……あちこちケガしたので、点滴とか心電図とか色々繋がれてベッドに寝かされていた。

その後のことは、病室で診察してくれたお医者さんに聞いた。

さらにその後、共有スペースで雑談——つてほど軽い感じで話してはなかったけど——していた、クラスの皆に追加で聞いて、大体の今の状況を把握できた。

『敵連合』の襲撃を受け、当然ながら『林間合宿』は中止。

かけつけた何台もの救急車両によって、私や緑谷を含む負傷者は病院に搬送された。

いや、訂正しよう。A組とB組、それに普通科2人……全員が搬送された。そのまま、負傷した者はその手当のため、負傷していない、あるいは軽傷の人も、念のための検査入院として、病院に厄介になることになった。

超がつくほどに大規模な個性戦闘が起こったのに加え……『マスタード』というガス使いの『敵』が投入され、複数種類の毒ガスが用いられていたのが大きな要因だった。種類にもよるが、ガスを吸っていれば、迅速に処置しなければ、後遺症につながる恐れもある。

一応、問題ないと判断できれば順次退院していく予定ではあるが……少なくとも2、3日は様子を見るといふ方針のようだった。

幸いにして、ガスを吸ってしまった者も、『敵』との戦いで傷を負った者も、心身共に回復しつつあるので、そのへんの心配はいらなそうだ。

談話スペースでだべってる皆も、割と元気そうだったし。

ただ、私達がよくても……これから、いろんなところが、色んな人が大変そうではあるけどな……

『敵連合』による二度目の雄英襲撃。

しかも今度は、USJの時よりも、被害規模がはるかに大きい。1年ヒーロー科全員そろった所に襲撃を食らい、重軽傷者多数。挙句、犯人グループには見事に逃げられた。

さらに、プロヒーローにも被害が出ている。なんと、ワイプシのメンバーの1人……ラグドールが行方不明になっているというのだ。捜索は続いているが、見つかっていないらしい。

コレ、やっぱ結構なスキャンダルになるよな……天下の雄英が、こゝう何度も生徒に被害を出して……合宿場所を割り出されて、情報管理も甘かったんじゃないかとかも……

いくらその裏で、相澤先生達がどれだけ必死に戦って考えて、私達を守ろうとしてたんだとしても……起こってしまった結果は変えられない。

そして、大衆やマスコミは、むしろそっちの結果を重要視して見る。個室の窓から、眼下に広がる景色を……病院の出入り口から、どうにかして入れてもらおうと、入院している私達に取材しようと、昨日から張っているらしい報道陣を見て、つくづくそう思う。

この病院は、普通の病院ではない。国が運営する公的機関であり、民間の病院とは、規模も立場もちよつと、いや結構違う、特別な病院である。

基本的に、救急を除く一般の客の診療は受け付けておらず、特殊な事情がある患者や、きちんと理由があつて紹介された患者だけが入ることができる。

その分、設備はスペシヤルだ。個性医療をはじめ、治療方法の引き出しが豊富なのに加え、設備や物資も一流のものがそろっており……セキュリティも万全。

時には、結構なVIPや訳ありの患者もかかることがあるとか……そういう、特別な病院だ。

私達の場合も、襲われた相手が相手、事件が事件なので、念のためつてことでこの病院に運び込まれたのだ。警備の充実に加え、不用意な報道陣との接触、モラルガン無視の取材から守るために。

あんなふうに加熱した報道陣もきちんとシャットアウトしてくれるわけだ。……断つても帰らないで、あの通りたむろしてるけど。そしてそれと同様に、あるかもわからない『追撃』を警戒して……でもある。

いや、まあ……今はそれはいい。

話を戻そう。今、もう何度も襲撃を許したり、そのたびに生徒や教師に負傷者が出たりで……雄英はちよつと今、対外的にあまりよろしくない醜聞をいくつも抱えている。近々記者会見が開かれるなんて情報もあるし……つたく、どこもかしこも好き放題叩いてくれて……そもそも悪いのは雄英じゃなくて、襲ってくる『敵連合』だろうに……毎度ほんとに迷惑だあの連中……。

そんな状況なので、私達は……セキリテイ云々に関係なく、報道陣の前に不用意に出ていくことはできない立場にある。……まあ、早い話が病院内で大人しくしてればいいわけだ。

ガチの怪我人も大勢いるわけだし、それは仕方ないというか、文句ない。

ただ……私らのために一生懸命戦ってくれた相澤先生やブラドキング先生、ひいては雄英が好き放題言われているのを、画面越しに見てることしかできないってのは……まあ、私だけじゃなく、皆共通して気に入らない点である。

そして、それに対して何もできない……というのもまた。

☆☆☆

「拝見します……はい、結構です。手続きを進めますのでしばらくお待ちください」

「お願いします」

ペこり、と頭を下げて……束になっている書類を持って歩き去っていく職員。

その背中が、応接室のドアの向こうに消えるのを見届けてから……ターニヤは、ソファに深く腰掛け直した。

そして待つ間、鞆から新聞を出して読み始める……と同時に、ポケットのスマートフォンが振動する。

ターニヤはひとまず新聞を置き、取り出したその画面を見て、相手を確認して電話に出る。

「どうした、ビスケット」

『どうした、じゃないわき……あんた今どこにいの？ 今後のことについて話さなきゃいけないからマンションにいてくれって、昨日『栄陽院コーポレーション』から連絡あったじゃない』

「悪いが出られなさそうだ……すまんがビスケ、代わりに話を聞いておいてくれ。資料もあれば貰っておいてくれると助かる。こっちは……本職の仕事が入りそうなんだな」

『本職って……え、軍関係？』

「ああ……少々、騒がしくなりそうだな。私の周囲も……この国も」

今現在、ターニヤがいるのは……日本にある、ドイツ大使館、その応接室である。

そこでターニヤは先程まで、この国でドイツ国籍のヒーローとして本格的に活動するために必要な手続きを進めていた。何枚もの書類を作成し、ハンコを押してサインもして、それが問題なく出来上がったというので、先程この大使館の職員に託したところだ。

わざわざそのような手続きをしなくても、ある程度のヒーロー活動……もちろん、『個性』を使用した戦闘を含む、その許可を既にターニヤは持っている。普通に過ごすだけなら、これ以上の手続きは必要ない。

ただ単純に、今以上の権限が……それこそ、ドイツ国内で、軍のバックアップを文武両面に受けた状態で動けると同じだけの権限が、場合によっては必要になる、と思ったためだ。

『敵連合』による英雄への二度目の襲撃。重軽傷者多数を生み出したその事件の一報を聞いた時点で、ターニヤはこの大使館に走った。直感したためだ。自分がこの国に派遣された……軍人としての使命。それを果たす時が、来てしまったのではないかと。

であるならば、ともすれば戦いはすぐそこに迫っているかもしれない

い。そうなる前に、可能な限りの力を集めておく必要がある。手始めに……心置きなく、全力で戦える準備を整えなくては。

(すでに本国に連絡はした。向こうでも手続きは進めておいてくれるだろう……最短で半日あれば準備は整うだろうが……いずれにせよ……)

「ビスケット。ビジネスもいいが、心の準備をしておいた方がいいかもしれない」

『？ 何よいきなり……何か『騒がしく』なりそうなのは、あんたの軍無関係じゃないの？』

「それとてこの異国の地で、私単体を相手に起こるわけじゃない。むしろ私は、既にある戦いに巻き込まれる……あるいは飛び込む側だ。この国のヒーローであるお前達の方が、余程他人事ではあるまい。……すまん、人が来た。忠告はしたぞ」

『ちよっ!? 結局何……』

何やら言おうとしていたビスケットとの通信を強制的に終了し……その数秒後、扉が開いて、先程書類を持って行った職員が姿を見せた。「お待たせしました、シルバートピック様。こちらがご要望の資料になります。ライセンスの発行につきましては、いましばらくお時間をいただければと思います」

先程、手続きのための資料を提出した際、同時に大使館職員に要望を出していた、彼らが入手している限りの『敵連合』やその構成員に関する資料を受け取り、鞆にしまうターニャ。

しまう前にぱらぱらと軽く目を通すが……やはりと言えはいいのか、構成員に関する者はかなり充実しているが、彼女が一番知りたい、ないし警戒している者に関する記述はほとんどない。

せいぜいが、その存在を匂わせる状況証拠がまとめられているのみにとどまっていた。

(なるべくなら、この資料の出番も来てほしくないものだが……)

望み薄ではあると自分でわかっていつつも、ターニャは心の中でそう呟いた。

☆☆☆

「なるほど、最後に思わぬ反撃があったものの、ひとまずは目的達成、といったところかな？ 弔も中々、指揮官としての貫禄が出て来たのかもかもしれないね」

「失礼を承知で言わせてもらうなら、まだまだケツに殻のついたひよっこではありますかね。もつとも……連合のメンバー達は、単純に今回のことを勝利とも喜べない様子ですが」

「無理もないだろ。最後の最後でおちよくられたような結果に終わったんだ……『終わり良ければ総て良し』なんて諺があるくらいだ、その逆だって成立する。戦略的見地からものを見れないガキ共なら、なおさらだ」

窓一つない部屋の中で、AFOは、ウォルフラムから報告を受け取っていた。

その隣には、少し前に協力関係を締結した、国際的に活動しているブローカーである、キュレーターの姿もある。

キュレーターがいたのは偶然だが、特に聞かれても困る話ではないと、AFOは言っておオルフラムにそのまま報告させていた。

死柄木弔が発案し指揮を執った、雄英高校ヒーローの『林間合宿』への襲撃。その戦果を。

その一部は、AFOから加勢として差し向けられたウォルフラムによるものであり……さらにそのウォルフラムがやったことの、さらに一部……ラグドールの誘拐に関して言えば、それはAFOが指示してやらせたことである。

しかし、それ以外の部分については、正真正銘死柄木弔の、そして『敵連合』の戦果と言える。

その報告を、AFOは嬉しそうに聞いていた。

「死者が1人も出なかったというのは、さすがはヒーローの卵、といったところかな。それも、何人かは返り討ちにまでしてしまうとは……未恐ろしい『有精卵』達が集まったものだ」

「死柄木がマークしていた、緑谷って奴は流石といっていいかもです

ね。マスキュラーとマスタードをやったそう。体育祭で同じように活躍した轟や、今回のターゲットだった爆豪も大した力を見せたようです。ただ、もう1人の体育祭3位はパツとしなかったよう。「ああ、彼女か……無理もないだろう。あれは、事前にきちんと準備ができていなければ、途端に無力になってしまうからね。そういう意味でも、扱いづらい『個性』と言えるだろう。ただ……」

かつて自分が『欠陥個性』と呼んだ、永久の『個性』について考えながら、AFOは語るが、ふと言葉を途切れさせて……

「あの『個性』の怖いところは、そこじゃあないんだがね……」
「? どういうことですか?」

AFOの、絶対の王者らしくもない『怖い』という言葉に、ウォルフラムはもちろん、横で聞いていたキュレーターも興味を持ったのか、AFOの次の句を待つ。

AFOは、ふむ、と少し考えるようにして、

「そうだね……いや、『怖い』というのも少し違うか。例えるなら、悪いものでも食べた時のような……平気な人には平気だし、むしろいい方向に進むことはあるが、そうでない人には徹頭徹尾、害……体の中であまりよくないことになるというか……うん……『タチが悪い』かな?」

そのまましばし、AFOがウォルフラム達を相手に、気まぐれの雑談のような話を聞かせていた……その最中のことだった。

唐突に、ばん、と部屋の扉が開き……小太りの壮年の男性が飛び込んできた。

AFOの協力者にして、『脳無』の開発者……『ドクター』と呼ばれる男が。

ノックもなく、話の途中でいきなり飛び込んできたその男に、ウォルフラムとキュレーター、2人分の責めるような視線が向けられる——AFOは特に気にした様子はないが——中、ドクターは焦った様子を隠そうともせず、

「す、すまん先生、来客中だったのか……じゃが、緊急事態でな……今よいか?」

「ははは、ダメと言うのが躊躇われるくらいには切羽詰まった事態のようだね、ドクター。どうしたんだい？　ここが嗅ぎつけられて、ヒーローでも乗り込んだできたかな？」

「い、いや、そうではないんじゃない？　厄介事というレベルで言えばどっこいかの。先程、実験体が1体、ラボから逃げ出してしまおうてな……」

「？　実験体というと……脳無かい？」

「いや、そっちではなく、『個性』絡みの方でな……被験体として優秀そうではあったが、どうにも癖が強い男で……色々な意味で、野放しにしていいものと聞かれると不安が残る。何より捨てるには惜しいし……すまんが手勢を貸してくれんか、先生」

よく見ると、『ドクター』は手にクリップボードのようなものを持っていた。

会話の流れからして、それにはその逃げ出した『被験体』に関する資料がとじ込まれているのだろう。資料の表紙には、『個性強化及び身体組成拡張概括実験』との記載がある。

何を隠そうそれは、目の前にいるAFOのために、ドクターが最も力を入れて研究を進めているテーマの1つであり……逃げ出したという被験体は、その稀有な成功例、ないしは重要なデータサンプルとでも言うべき存在だった。

ゆえにこそ、彼は『回収』を望み、AFOを頼った。

資料の表紙には、顔写真と共に……こうも記載されていた。

『本名：不明（名乗らず）』

『験体名称：ナイン』

第130話 『オール・フォー・ユー』の献身

「……何コレ？ やけ食い？」

「……半分あつてる。もうひとつはまあ……ただ単に、エネルギー補充。あ、欲しいのあつたら適当に食べちゃっていいよ？」

「いや、いい……なんかこう、見てるだけで満腹になつてくるわ、今のあんた……」

そんなことを言いながら、呆れたような視線を送ってくる耳郎。隣には、『うわあ……』って感じの表情になっている麗日と、ポーカーフェイスで表情の変わらない梅雨ちゃん、そもそも表情が見えない葉隠がいる。4人一緒に、個室でくつろいでる私を、変なものを見る目で見てる。

入院した同級生達の中でも、かなり目を覚ますのが遅かった耳郎と葉隠が無事に目覚めて、元氣そうなのは素直によかった。

何とかついている刃物使いの『敵』の少女に襲われ、斬りつけられて傷を負っていた梅雨ちゃんや麗日が無事だったのも。

負傷した2人に関しては、私も『コンセントヒール』で治療してたわけなので、気になってたんだが……うん、よかった。

そんな4人は、その治療についてお礼を言うのと、様子を見にすることで私の部屋に来たらしいんだが……今私は、ベッドサイドの机にコレでもかつてくらいに食べた後の空容器を積み上げて、デリバリーで頼んだジャンクフードその他を次々に平らげているところなのだ。

ピザ(パーティーサイズ)を全種類に、特上寿司5人前、ハンバーガー50個、チキンナゲット15ピース入りを10箱、カップ焼きそば20個、野菜ジュース2リットル、牛乳6リットル、e t c。

ちなみに、食事に關しては『質より量』という人もいれば『量より質』という人もいるが、私の場合、食事における持論は『量あつての質』である。高級なグルメもいいけど、ひとまずがつつり量を食べたのが私です。毎食とは言わんけど。

『個性伸ばし』のおかげで、胃袋の最大要領も消化スピードも強化さ

れている私は、食べてからより素早くエネルギーに変えることができるようになっていく。それを利用して、もうとにかく腹に詰め込んでいる。

いや、別に今からコレを『エネルギー』として使うような……治療やら戦闘やらするわけじゃないんだけど……なんか、こうしたい気分なんだよな。

直感的に、こうすべきだと……できる限り腹に食べ物を詰め込んでおくべきだと、そんな感じがして……ちよつと色々伝手を使って、こうして大量にデリバリーを頼んだ。

普通に考えて、病院に入院していながらデリバリーなんて頼むことはできないが、成実義姉さんに頼んで手配してもらい、裏の搬入口から一括で運び入れてもらったのだ。この病院には、私はともかく『栄陽院』の家としては伝手があるので、そこを利用して。

ついでなので、一緒に何か欲しいものがあれば手配する、ってクラスの皆にも聞いてみて、可能な限りそれも聞いて揃えてもらうようにした。

やっぱりというか、食べ物系多かったな。

保須市の時も思ったけど、病院の食事って味気ないの多いから……ジャンクフードとか、激辛メニューとか、蕎麦とか、フレンチとか……まー色々取り寄せたな。

喜んでもらえたので、よかったと思う。

次いで、雑誌とか、化粧品とかだったな。暇つぶしになる雑貨とか、ダンベルなんてものもあったな。

なお、エロ本を発注しようとしていた峰田については弾いておいた。退院後に自分で買え。

でまあ、何万キロカロリーだよって量をすでに平らげているわけだが……まだ足りない感じがするな……。

腹は十分膨れてるのに——すぐ消化できるけど——まだ足りない、まだ必要だ、って頭の中でささやかれているような……冷静に考えるとか何を言っただって話だが、ホントにそんな感じなんだよな……。

「ける……まあ、『個性』や体質の関係上、永久ちゃんが大食いなのは

知ってたけど、あまり食べすぎちゃだめよ？ さすがに体が心配になるわ……それに、周りへの影響も」

「周り？ さつきの耳郎の、見てるだけで満腹になるとかいうアレ？」
「それもあるけど、小さい子の教育によくないわ。栄養バランス滅茶苦茶なもの……真幌ちゃんや活真君が真似しちやったら……いや、真似できないとは思うけど……」

「うん、まあ、せやね……こんだけこつてりしたものの大量に食べといて、野菜要素、野菜ジュースしかないやん。こんなん、ジャンクフード大好きな子供に見せたらあかんよ。その2人もやけど……壊理ちゃんもおるんやから、ここ」

と、今梅雨ちゃんや麗日がしれつとといったように……この病院、意外な知り合いが一緒に入院している。いや、片方は入院とは違うけども。

どちらもあの、『死穢八齋会』絡みのワーキングホリデーの中で知り合った子供たち。

片や、誘拐の被害者になった上、人身売買の被害者になりかけた……真幌ちゃんと活真君。

片や、『オーバーホール』の野望のために利用されていた、組長の孫娘……壊理ちゃん。

彼女達が今、実はこの病院にいるのだ。その理由は、それぞれ違うが。

まず壊理ちゃんだが、彼女の『個性』に関する詳しい検査その他のため、一時的にこの病院に転院していたのである。ここ、元の入院していた病院よりも、そういう設備整ってるからな。

まずはここで検査して、詳しいことがわかったら、必要な病院にまた移すなり、退院して経過観察するなり……対応を考える予定だったそうさ。

私らが担ぎ込まれてきたのはそのさなかだったわけ。完全に偶然なわけだが……壊理ちゃんには随分と心配をかけてしまったらしい。反省。

まあ、大丈夫そうだと理解してからは、ほっとした様子で、最近自

然に見せるようになってきた笑顔を見せてくれて……たちまちうちのノリのいい女子達の人気者になってたな。

その壊理ちゃんは、相変わらず私と緑谷に懐いてるので、日中は散歩がてら私達のところによく遊びに来る。彼女との雑談やら何やらは、私達としても気分転換になって楽しい時間である。

で、もう一方……真幌ちゃんと活真君だが、こっちは全く別な理由でここにいる。そもそもこの2人は、彼女達自身がケガとか病気で入院してるわけじゃないのだ。

入院しているのは、どうやらそのお父さんであるらしい。普段、2人を故郷『那歩島』に残して都市部に出稼ぎに来ている、あの。

聞けば、先日突如として謎の『敵』に襲撃を受けたそうだ。命に別状はないとのことだが、軽症と言えるほどでもない、とのこと。

一応今は容体は安定していて、集中治療室から個室に移っているそう。

真幌ちゃんと活真君は、お父さんの付き添いで病院に泊まっているらしい。

小さいことが入院する時に、保護者が付き添いで病室に布団とか敷いて泊まり込むっていうのはよく聞く話だが、その逆ってことか？
変わってるな。

まあ……大事なお父さんがそんな大変な目にあってるんだ、せめて一緒にいたいって思うのは不思議なことじゃないし、そっちの方が2人共安心できるのかもしれないけど……

そして、真幌ちゃんと活真君は、久々に会った緑谷や、その友達であり、未来のヒーロー候補であるクラスメイト達に会って……活真君は興奮して、嬉しそうにしてたな。真幌ちゃんは……複雑そうだったけど。

あの一件で、ある程度ヒーローに対しての理解を深めたりはしたものの……今回、実際に私ら、『敵』の襲撃に会って負傷してここに入院してるわけだからな。やっぱりヒーローって危険なんだ、って思ってしまったのだろうか。

……ああ、それと、そのお父さんに関して何だが……真幌ちゃんが

変なことを言ってたな。

なんでも、『敵』に襲われた後……2人のお父さんは、『個性』が使えなくなってしまうらしい。

2人のお父さんの『個性』は、活真君と同じ『細胞活性』だ。緑谷にこつそり使ってくれて、回復を早めてくれたから……間違いない。覚えてる。

しかし、それが今は使えなくなっているらしい。お医者さんとの聞き取りの中で、そう言ったのを真幌ちゃん聞いていた。

それを聞いて私が思い浮かべたのは、『オーバーホール』の奴が使っていた『個性破壊弾』だ。

けど、それはどうやら違いそうである。お父さん、別に銃で撃たれたとか、そういう感じの傷はないそうだし……それに、その襲撃してきた『敵』に、こう言われたらしいのだ。

『安心しろ、殺しはしない。だが……『個性』をもらう』

(……『個性』をもらう、ねえ……)

……言葉通りに受け取れば……真幌ちゃん達のお父さんは、その『敵』に、『個性』を奪われた、ってことになるのか？ そんなことができる『敵』も『個性』も、聞いたこともないけど……もし存在するのなら、えらい危険度だぞ？

現に今、2人のお父さんは『個性』を使えなくなってるそうだし……それが果たして、一時的なものなのか、あるいは……

(この『超人社会』に今更ではあるけど、何か最近、どこもかしこも物騒だな……)

ふとそんなことを考えてしまったが……より正確に言えば、むしろ普段の日本って、まだ治安的に恵まれてる方なんだよな。平和ボケできるくらいには、一般市民にとって、危機的状況っていうのは、そこに遠い世界の話だから。

世界的な犯罪発生率の平均が20%……だっけ？ 対して、日本のそれは、オールマイトという『平和の象徴』の存在により、6%にま

で抑えられている。ありがたい話だ。

……ふと、思う。

これでもし、オールマイトが……『平和の象徴』が引退したり、な
いとは思うが倒れたりするようなことが起これば……普段私達が『物
騒』だの『やばい』だの言ってるレベルの事態が、社会で常態化する
かもしれないんだよな……。

いやまあ、そんな時代、来てほしくないけども……何でだろう、特
に考えていたわけでもないのに、頭に妙にこびりつく……？

なぜか頭から離れてくれない……むしろ、いわゆる『虫の知らせ』み
たいに、いやに印象に残るイメージに疑問を覚えつつも……私はとり
あえず、胃袋が催促してくるままに、次の食べ物を口に運ぶことにし
た。

……この時の私は、まあ、当然かもしれないが……露ほどにも、思っ
ていなかった。

私が、『ふと思った』可能性が……それも、それから1日も経たない
うちに、現実のものになってしまおうなどは。

☆☆☆

「これは……こんな、ことが……!？」

デヴィット・シールドは……『I・アイランド』から移り住んで、日
本における仮の住まいとして借りている部屋で——仮と言っても、セ
キュリティ万全のマンションの一室。栄陽院コーポレーションが用
意した超VIP御用達の部屋だ——PCの画面を見ながら、絶句して
いた。

本当に仮に住んでいるだけなのか、と問いかけたくなるほどに、
色々なものが置かれている室内。

その3割ほどのスペースを占領して稼働している、超高性能P
C。専門機関のそれほどではないが、在宅でもデータさえあれば、解
析作業が行えるレベルのスペックである。

それを使つてあるデータの解析を行つていた博士だが……その時、机の上に置かれていたスマートフォンが振動する。

はつとしたようにそれを手に取ると、発信元は……大学からの付き合いの親友だった。

「……もしもし、トシか?」

『やあ、デイヴ……今、大丈夫かい?』

いつも軽快なトークや笑い声から始まる、オールナイトとの会話は……やけに神妙そうな声音で幕を開けた。それだけで、何か重要、ないし内密な話だろうと博士はあたりをつける。

「ああ、大丈夫だ……どうかしたのか?」

『ちよつとね……明日、君とメリッサに会う予定だったろ? 引つ越し祝いにスシとテンプラをお土産に持つてくつて言つてさ。緑谷少年も連れて……すまないが、多分、無理そうなんですね』

「それは……まあ、仕方ないだろう。雄英が……緑谷君達ヒーロー科があんなことになって、対応に大忙しだろうというのはわかつているさ。落ち着いた時にでも改めて、でいいだろう?」

もともと予定していた食事会についての、中止の申し出。

それを聞いた博士は、なんだそんなことか、とばかりにため息をついた。が、

『いや、それもあるんだが……今日からしばらくの間、騒がしく、というか忙しくなりそうだね……数日は満足に連絡も取れないかもしれないんだ。だから……今のうちにと思つてね』

「……? よくわからないが、まあいい……了解だ。ああ、私の方からもいいかな?」

『? 何だい、デイヴ?』

と、今度は博士の方から話題を切り出した。

先程まで、食い入るように見つめていた、PCの画面を再び見ながら。

「今日から忙しくなる、と言つていたが……落ち着いた時でも、と今言つておいてなんなんだが……時間、いつ頃取れそうかな? できれば、なるべく早く会つて話したいんだ。君とナイトアイ、それに……」

緑谷君と栄陽院君も一緒に、かな」

『……？ それは一体どういう……もしかして、彼女の『個性』の解析が終わったのかい？』

「終わってはいないよ。まだデータが足りない……でも、途中でも報告して、相談しなければならなかったというか、わかったというか……そんなところだ」

デヴィット博士は、夏休み始め頃に『I・アイランド』で取ったデータに加え、『林間合宿』の終了後、病院で検査を受けた永久のデータを送付してもらい、それをもとにして解析を進めていた。

その結果が、先程の驚愕の表情につながる。

『……それ、電話で話せる内容かい？』

「できれば実際に画面というか、データを見ながらの方がいいが……そうだな、大枠だけでよければ大丈夫だろう。聞くかい？」

それから数分の間、デヴィット博士はごく簡単に、オールマイトに自分が目にした解析結果について告げた。

目の前にデータがない以上、詳細を説明するのは難しいため、本当に簡単な要約部分のみであったが……それだけでも、その内容は十分に……衝撃的だった。

研究分野に関しては素人であるオールマイトにもわかってしまうほどに。

思わず、『仕事の直前にいらんこと聞くんじゃないかも……』などと思ってしまうほどに。

話してくれた博士に悪いと思い、声には出さなかったが。

「緑谷君のデータを見た時にも驚いたが、今回の驚愕はそれ以上かもしれない……叶うなら、この2点の間のデータがいくつか欲しいところだよ」

『……聞くまでもないかもしれないけど、そんなこと、普通……あり得るのかい？』

「言うまでもないことだろうけど、普通は、ない。というか、ありえない……はずだ。それこそ……『オール・フォー・ワン』でも使わない

限りは……こんな『変容』はね」

『……そこまでのことか。ナイトアイの予想を超えて来たな、これは……』

「あの日彼に聞いた話を思い出せば……こうなった理由についてはわからなくもない。いや、だからって実際にこうして目にするとなると……驚愕どころじゃあないんだが。とにかく、なるべく早く会って話が見たい。健康状態のデータを見る限りでは、今すぐ何か処置が必要というわけじゃないが……だからこそ異常だ。可能な限り、彼女については注意して見ていくべきだ」

画面を睨むように見ながら、そう、やや早口になって言い切る博士。

その目は、PCの画面に表示されている、3つのグラフデータを……『個性数値』の解析結果についてのそれを捕らえて話さない。

並んで表示されているその3つのうち、2つは栄陽院永久のもの。残る1つは……緑谷出久のものだ。

2つ隣り合って表示されている、永久のグラフ。

1つは、『I・アイランド』で測定したもの。まだ高校生にしてはかなりのものだ、とデヴィット博士自身がほめて聞かせたことは、記憶に新しい。

しかし、もう1つのグラフは……一目見てわかるほどに、I・アイランドで測定したものと、形も何もかも変わっていた。

成長したとか、強化されたとか、そういうレベルではない。全くの別物と言っただけいいほどにまで……『個性』の性質そのものが違って来ている。

そしてもう1つ、驚愕すべきことに……その、後から測定した永久のグラフは……逆隣りに表示されている、緑谷出久のグラフに、その形状・性質が近づいていた。

もちろん、複数のグラフが表示されているわけではないが……緑谷のグラフの中でもとりわけ強力なものとして表示されている、『ワン・フォー・オール』のグラフに……かなり形が近い。

「この短期間で、この変化……『個性』の成長に合わせたとはいえ、これほどに……しかも、明らかに指向性をもって自らを作り替えている

……！ 偶然じゃない、これは……『個性』が……緑谷君のそれに近づこうとしている……！ 彼女の『力をため、変換し、分け与える』という能力において、それが意味することは……」

『エネルギー自体が、緑谷少年と、特に相性がいい。もつと言えば……彼にとつて、都合がいい』

親友の言葉を引き継いで、オールマイトは呟くように言った。

『……もしかしたら、という程度に思つてはいた。彼女の『個性』は……仕える主によつて、その在り方すら変えてしまうものなんじゃないかと。『ワン・フォー・オール』が生まれた時も……ただ単に、偶然、2つの『個性』が混ざつたのではなく……それは、『オール・フォー・ユー』が狙つて引き起こしたんじゃないかと……己の個性を、主君の目的のために使える、確かな力にするために』

「変化は、ごくわずかだが、バイタルにすら現れている。彼女は……いや、彼女の『個性』は本気で……彼女自身を含む全てを、緑谷君のためになるように、変容させている……まるで……」

『……』

「まるで……力も、命も、『個性』も……あるいは、それ以上の何かすらも……全て惜しげもなく、緑谷君に捧げるためにこそある、とでも言うように……！」

それからさらに数分の後、オールマイトとデヴィット博士の通話は終わった。

余りにも衝撃的な事実。自らの後継者であり、次代の『平和の象徴』のために、心強い味方だと思つていた少女が……予想ないし想定を超えて、自らの全てを使った『献身』をなしていた。

それは確かに、今も、心強い味方だ。

彼女の力を受け取つた緑谷出久は、これまでも増して強大な力を発揮し、またこれからも更に成長していくだろう。いずれは、全幅の信頼をもつて、この世界を支えることを任せられる、トップヒーローの中のトップヒーローにまでなることだろう。

しかし一方で、この状況はいわば……その目的のために、栄陽院永

久という1人の少女の人生……その全てを捧げさせるに等しい行為。使い潰す、とまで言ったら言い過ぎかもしれないが、ヒーローとしてふさわしい行わないし選択なのか、黙認していいことなのかと問われれば、即答できないのが正直なところだ。

明らかに、戦友やらサイドキックやらという領分を超えた……ともすれば彼女自身が、自分を『使い潰す』ことを前提として、覚悟しているような……この献身を。

数時間後に迫っている大捕り物を前に、オールマイトは……今考えても仕方ない、と、ひとまず目先のミッションに意識を向けることにした。

全て終わった後、きちんと、緑谷出久と栄陽院永久も一緒になって話そう、と心に決めて。

今まさに、彼女がその肉体を、『個性』を……平らげ続けて貯め続けている、膨大なエネルギーを糧にして……主君に捧げるために、急激に『変容』させ続けているとも知らず……

第131話 長い夜の始まり

『どーもオ、ピザラー神野店ですー』

そんな気の抜けるような言葉と共に……夜は始まった。

夕方のニュースの時間帯に合わせる形で行われた、雄英高校の『謝罪会見』。

校長・根津に加え、1年ヒーロー科の担任であるイレイザーヘッドとブラドキングが出席して行われたその会見では、さも捜索が難航しているかのように語られたが……その実、既に警察とヒーローは、執念の捜査により、『敵連合』の拠点を突き止めていた。

そのうちの1つである、彼らが集会に利用するバーに……連合メンバーのほぼ全員が揃っている状況で、オールマイトを始めとしたヒーロー達が文字通り殴り込み、シンリンカムイとグラントリノによってその場にいたメンバー全員が即座に無効化され、捕らわれた。

『最も厄介』と評された黒霧と、シンリンカムイの拘束に相性の悪い荼毘は気絶させられ、まさに絶体絶命。

雄英の謝罪会見を見て嗤っていた先程までとは打って変わって、後がない状況。

だというのに……死柄木は、落ち着き払って、目の前にいるオールマイトを睨み返していた。

(……意外だな。USJで見た時は、もっと未成熟で子供っぽい印象があったが……こんな風にあっけなく捕らわれ、全てが終わろうとしている段階になっても、癩癪も起こさず、悪態一つつかないとは……。経験を経て成長した？ 敵にされても、ありがたくもないんだが……今はいいか)

「聞かせてもらおうか、死柄木……奴は、どこにいる?」

「……なるほど、な。俺みたいなガキを相手に随分な気合の入れようだと思ってたけど……警戒してるのは、やっぱり先生か。その分じゃ、存在自体は確信してるらしいな」

「そういうお前さんも、もう隠す気なさそうじゃねえか。そのまま居場所も教えてくれや。ん?」

横合いから2人のやり取りを見ていた小柄な老人……グラントリノが、老いてなお鋭さを失わない目で死柄木を見据えながら問いかける。

彼もまた、その『先生』には因縁がある1人。今しがた、一撃で茶毘の意識を刈り取った蹴りからしても、その本気度がうかがえる。

「引石健磁、迫圧紘、伊口秀一、渡我被身子、分倍河原仁……少ない情報と時間の中、お巡りさんがよなべして素性を突き止めたそうだ。わかるか、もう逃げ場はねえつてことよ……仮にここから逃げおさせたとしてもな。大人しくしといたほうが身のためだぜ」

マグネ、Mr. コンプレス、スピナー、トガヒミコ、トウワイスの本名をそれぞれ言い当てる告げるグラントリノ。

聞いていた連合メンバーも、さすがに冷汗が出てくるのを止められない中、やはり死柄木だけは落ち着いていた。

既に包囲されている。脳無も呼び出せない。依然、危機的状況は何一つ改善されていないにも関わらず……それこそ、死柄木自身不思議なほどに、頭はスッキリしていた。

だがもちろん、何も考えていないわけではなく……その目は、静かに燃えていた。

だからこそ、対峙しているオールマイトには、今日の前にいる、少年と言っているくらいにも若い死柄木が、不吉で、危険に思っていた。

『ウルシ鎖牢』によって拘束され、動くことなどできない、最早万事休すであるはずにも関わらず。

はっ、と、鼻で笑った死柄木は、ちらりとグラントリノの方を見て、「何を今更……心配されなくなつて、身元が割れたくらいで絶望するような面子は、うちにはいねーよ……どいつもこいつも、社会にはじき出されて、居場所なんてもともと無いような奴ばかりだ。わざわざ心配してくれなくても、自分で居場所を作るために集つて、動いて、戦つてる」

「なるほど、立派なことじゃないか……それが他人に迷惑をかけない範囲でなら、むしろ私達も応援する側に回れたらうに。選んだ手段が残念だったな……やり直す機会が欲しければ、素直に我々に協力す

る姿勢を見せてくれれば早いかもしれないぞ?」

「そう急かすなよ、平和の象徴……時にそのちっさいじーさん……グラントリノだったか? ご丁寧に俺らの本名並べてくれたけど、俺と茶毘の名前はでてこなかったな。夜なべした程度じゃ、そこまでは調べらんなかったか?」

「ああ、残念なことにな……何だ、教えてくれんのかい?」

「……別に教えてもいいけど……いやまあ、茶毘の方は俺も知らねえけどさ。でもさあ……ちよつとがっかりしたかな」

「あ? 何がだ?」

「夜なべして調べたとか、我々の怒りをとか、大層なこと言ってたけどさあ……茶毘はともかく、俺の身元一つ調べられてないとはな。俺なんか、春の雄英襲撃の時に存在が割れてたんだから、時間なんて他の連中よりいくらでもあっただろうに……がっかりだよ、グラントリノ、オールマイト。やっぱりあんたらはその程度ってことだな」

その言葉に、名指しされた2人を含め、幾人かがふと違和感を覚える。

たまたま呼ばなかっただけかもしれない。しかし、なぜ今、ここにいるうち……オールマイトとグラントリノ、この2人だけ、特に名前を呼んで問いかけたのだろう、と。

疑問に思いつつも、隙は見せず、グラントリノは聞き返す。

「あーあー悪いな、期待に応えられなくてよ。けどそんなに自分のことを知ってほしいなら、この場で本名乗ったらどうだ? その名前、まさか本名じゃねえんだろ?」

「ひでーこと言いやがる。ま、確かにコレ、先生が付けてくれた名前だけどさ……俺は本名だと思ってるよ。元の名前より、こっちの方が好きだ……俺が過去を切り捨てた時、貰った名前だ」

「奴が……か。人の親の真似事をするような一面があったとは、意外だな……お前も随分と、あの男を慕っているようじゃないか。正直驚いたよ、単なるブレーションとしての付き合いだと思っていた」

「そうか? むしろ、実の親でもてんで親らしくねえ奴だっているだろうに……俺の父親もそうだったよ。自分では家族のことを考えて

るつもりだったのかもしれないけど、その実、子供にも妻にも、孤独だけを覚えさせ、何も家族らしい温かみなんぞくれなかった」

「……………」

唐突に始まった自分の身の上話に、やや困惑するオールマイトと……対照的に、特に興味を示した様子もないグラントリノ。

「おい、お前の身の上話なんぞ聞きたいんじゃないやねえんだよ。軽口につき合つといて何だけどな、今俺達が聞きたいのは、お前さんのボスの居場所で……………」

「で、ガキの頃聞いたつきりだからよく覚えてねえけど、その俺の父親も、その母親…………まあ、俺にとつては祖母な。突き放されて、捨てられるも同然の別れ方して…………まあ、結構辛辣にあれこれ言ってたな。ヒーロー活動のために家族を棄てたとか何とか、親とは思ってないとか……………」

「おい、話を……………」

「でも……………」

……………そんな女でも、あんたにとつては大事な盟友だったんだよな？」

「……………あ？」

その言葉に、さすがに…………グラントリノも、言葉を止めた。

オールマイトも同じだった。

すぐにその意味を理解できたわけではない。ただ…………『グラントリノ』『盟友』『女』…………これらのワードは、断片的にそれを捕らえたとしても…………決して彼にとつて、聞き流すことができないものだった。

それらのワードから想起できる人は…………オールマイトにとつても、かけがえのない存在。

先代の『ワン・フォー・オール』継承者にして…………かつて、自分がまだ未熟だった頃、他ならぬ『オール・フォー・ワン』との戦いの中でその命を散らした…………師匠なのだから。

「…………おい、お前…………何を言ってる？」

「志村……何だったっけ、菜奈？　で、その息子が『志村弧太郎』で……ここまでは知ってるか？　でもその孫の名前までは知らねえし、会ったこともねえよな？　俺もあんたらに見覚えなしな。……知らないだろ？　『志村転弧』なんて奴」

「何を言ってる?!　さつきから……」

「あんたこそ何言ってるんだ、さつき言ってるだけだろ、本名乗ったらどうだって。せっかくだからバックグラウンド込みでカミングアウトしてやってんだろ……ああそうか、理解できないんじゃない？……理解したくないんだな。俺が言ってるこの意味を」

呆れたように、はあ、とため息をつく死柄木。

「あんたらいつもそうだもんな。自分達が作り上げた、あるいは作ろうとしているものの、日の当たる部分しか見ない。見ようとしな。その影で誰がどうなってるのが見向きもせず、ほめそやしてくれる奴らにばかり笑顔を向ける……それとも何か？　自分が、戦友が、良かれと思ってやったことが、裏目に出るかもなんて考えたことなかったってか？　頑張ってる悪と戦って平和を守れば、何だかんだで万事うまくいってくれるとかおめでたいこと考えてたのかよ、え？　平和の象徴様？」

矢継ぎ早に投げかけられる言葉に、事態を上手く理解できていない他のヒーローや警察官達は元より……オールマイトもグラントリノも、発する言葉が見つからない。

嘘だ、はったりだと切り捨てるには、死柄木の声は、目は、あまりにもまつすぐに迷いなく……そして、端々に出てくる名や事実、情報は、どれも矛盾なく筋が通るもの。通ってしまうもの。

「志村菜奈が里子に出した子は、どこか遠くで幸せに暮らしてると思ってたか？　自分が特に気にならなくても、探さなくても、会いに行かなくても、手を差し伸べなくても、何だかんだできつと上手いこと幸せになってると思ってたか？　母親のことを理解して、仕方なかったんだと、自分のためだったんだと割り切って、自分は自分で幸せな家庭を築いていると思ってたか？　妻や息子……孫の世代まで幸せになれたと思ってたか？　思ってたんだらうな、その様子だと」

この先を聞きたくない、聞けばきつと後悔する。

しかし聞かないわけにはいかない、聞かなければならない。聞いても大丈夫だと信じたい。

「思いもしなかっただろ。志村弧太郎が、自分の子供や家族に、自分の母親について……子供を棄てた鬼畜だ、なんて教えてたなんて。写真を隠して姿も見せず、話題にあげることすら禁じていたなんて」

「ヒーローは、他人を助けるために家族を傷つける、なんて教えてたなんて」

「自分の教えを守らず、ヒーローに憧れる子供に……暴力を振るっていたなんて」

「……その息子が起こした、『崩壊』の『個性』の暴走で……家族全員が死に絶えていたなんて……志村弧太郎の妻も、娘も、義母も、義父も……粉々に砕け散って死んでいたなんて」

「拳句の果てに、志村弧太郎自身も、その息子によって、殺意をもって、殺されて」

「そして残った息子……志村菜奈の孫が、仇であり宿敵である男に拾われていたなんて」

「想像もしなかっただろ。なあ……ヒーロー」

大丈夫であってくれ。もしくは、はったりであってくれ。

そんな儂い願いは露と消え失せ、オールマイトとグラントリノの2人に、告げられた『事実』が突き刺さる。

どれか1つでも顔をしかめざるを得ない悲劇が、束になってたたきつけられた。

しかもそれらは、かつて戦友が、無事と幸せを願って遠ざけた、子供の……そして、孫の身に起こった『現実』であり……彼らにとって、は、信じたくない悪夢でもあった。

そしてもう1つ……

(……なぜだ……!?)

動けない、声も出ない、彼の武器の1つである『笑顔』すら引っ込みかけているオールマイトを……戦慄させていることが、もう1つ、あった。

(なぜ……!? 立場も、信念も、目の奥に燃える炎の彩(いろ)も……何もかも違うのに、なぜ……)

ふう、と、長台詞の後に一旦休むように息をついている死柄木。

そらさず、逃げず、自分の目を正面から見返してくるその男の姿が……オールマイトには……

(なぜ、今、私の目には、彼と……緑谷少年が、重なって見えるんだ……!? 死柄木とは真逆の……眩いばかりの英雄の精神を持つ、彼の姿が……なぜ、今!?)

「自分が何かを忘れてることには、いつからか……何となく気づいてた。でも、思いだそうとすると頭が痛くなつて、気分が悪くなつて……だから、別にいいやつて、目を背けてた」

でも、と死柄木は続ける。

「それじゃダメなんだ……いや、違うな。そんなことする必要ないんだ。自分が何を忘れていたのか……それを思い出した時、どうしたいと思ったか……その時の感情にこそ、従うべきだと思った。だから俺は先生に聞いて、そして思い出した。この手で、父を、家族を、家を……全てを壊して、殺した時のことを……そして、その時に感じた……途方もない快感や、解放感も」

その口元には、笑みが浮かんでいた。

「辛いこと、苦しいことに蓋をして、歯を食いしばってそれに耐えて、乗り越えて……そういうことができる奴は、あんたみたいなヒーローになるんだろう。でも俺は……我慢なんかしない、衝動の赴くままに……全てを壊す。邪魔なもの、目障りなもの、鬱陶しいもの……こんな生きづらい、窮屈な世界……全部ぶっ壊して、見晴らしのいい場所で思いっきり笑いたい」

全てを開放し、さらけ出した……隠すということを棄てた死柄木。動けず、抵抗できないはずのその男が、言葉と同時に発した殺気。かつてそれは、『ヒーロー殺し』の一件のラストで、名だたるトップヒーロー達をも後ずさらせたそれに似ていて……それを思い出したグラントリノは、ここに至って把握する。

警察やオールマイトによってもたらされた、彼に関する情報……そ

れは、あまりにも古かったのだ、と。

そして、今の死柄木はいわば……

(俊典や、あの小僧が選ばなかった道……その先頭を走っている者がいるとすれば……こんな感じになるのかもな……)

「今まで放っておいて……こつちが必死で自分のやり方で、自分の居場所を作ろうって段階になって、いかにも正しいことやってますって正義面して首突っ込んできて邪魔をして……そして真実を知って、次はどうするオールマイト？ もっともらしく善人面か？ 今度こそ、手を差し伸べてくれるのか？ ははは……笑えてくるな……まあ、結局何が言いたいかっていうとさ」

一拍、

「失せろ」

「消えろ」

「祖母と一緒に、俺が生まれるよりも前に、俺から『平和』を奪って置いて、今後は仲間と未来を奪おうとするゴミめ」

「お前が、嫌いだ……オールマイト……！」

『そうだ、それでいい……弔』

ふいに、そんな声が聞こえた直後……死柄木の周囲、何もない空間から……黒い水のようなものがあふれ出した。

☆☆☆

そして、ほぼ同時刻。

バーとは異なる2つの場所で、想定外の事態は進行していた。

ベストジーニストや虎、ギャングオルカにMt.レディ……『ピザラ神野店』とは別行動で、脳無保管庫を制圧したヒーロー達の元に……『それ』は現れた。

「さて……やるか。あつちもこつちも……騒がしい夜になるな」

『ファイバーマスター』による拘束をもともせず、一撃で、一瞬で、目の前にいたヒーロー達を、そのさらに向こう側にいた機動隊ごと全て吹き飛ばし……その直後、まだ戦意を見せていたベストジーニストを行動不能にする。

加えて、その場に投げ散らかされた脳無達を、黒い水のようなものを出してどこかへ転送する。

トップヒーロー達がまるで相手にならず、一蹴されるという悪夢のような光景。

たった1人で、あつさりとそれをなした……黒スーツと、不気味な仮面の男。

連合のブレイン、あるいは黒幕と称されていた存在……『オール・フォー・ワン』。

超人世界最強最悪の『敵』が、ついに動き出した瞬間だった。

そして、悪夢は……もう1カ所でも。

☆☆☆

遡ること、ほんの少しの時間。

夕方のニュースで放送された、雄英高校の記者会見。

それを、病院の共有スペースで見っていた、1年A組、B組の生徒達は……ある者は悔しそうにし、ある者は怒りをこらえ、ある者は悲しみの涙をこぼしていた。

「くっそ……好き放題言いやがってよお、マスコミの奴らあ……」

「けど、仕方ないよ……実際、雄英が襲われて、ウチら生徒が大勢怪我して……流石に今回まで、『屈しません』アピールだけじゃ無理だったってことでしょ？ ……何もしないのも、それはそれで、雄英の不義理になっちゃうんだろうし……」

「だけど、俺達はそんなこと何も悪く何か思っただろうが！ むしろ先生たちは、必死で戦ってくれて……それに、これからヒーローになろうって俺達が、『敵』と戦って怪我したくらいで……」

「違うよ切島……俺達の場合、始まってから今までの経緯が特殊すぎるから忘れ気味だけど、普通はその時点で問題なんだよ。生徒が『敵』に襲われてケガしたなんて、生徒の方に何か無茶やったとかの理由でもなければ、学校の管理体制の問題になって当然なんだ」

悔しそうに吼える鉄哲や、切島に諭すように言う耳郎や尾白。そこに付け加えて、骨抜や塩崎も……同じように悔しそうにしながらも、落ち着きを保ったままに言う。

「普通の高校や大学のヒーロー科なら、1年目で職場体験やら何やらに駆り出されるなんてこと、ほとんどないからな。最低でも半年から1年間、みっちり基礎を学んで『個性』も鍛えて、それで初めて社会に送り出して……時に『敵』と戦うような経験もさせる」

「言うなれば、雄英という看板があるからこそその英才教育……ですが同時に、『普通』を外れる以上、そのせいで何か間違いが起こった場合にはより強く非難されることになる……」

既に記者会見は終わり、テレビは消されて……画面は黒く、沈黙しているのみ。

それでも、生徒達の脳裏には……普段は見せない装いで、似合わない丁寧な言葉づかいで、1つ1つ丁寧に記者達の質問に答えていた、相澤達の様子焼き付いている。

信頼していた生徒達の保護者に申し訳ないと思わないのか、傷つけられた生徒達にどう声をかけるつもりでいるのか、今後の進退について何か考えているか……etc

「……それにしたって、ああまで人を勝手にダシにしたもの言いには、一言モノ申したい部分はあるけどな。頼んでもいない同情向けられたり、雄英を叩くための口実として使われるなんてのは」

「気持ちにはわかるけど、実際には言うなよ、轟。私らが何を言っても、今のマスコミ連中には燃料にしかならない。都合のいいように解釈し直されて、その分また雄英が大変になるだけだ」

「……チッー」

轟と拳藤の会話を聞いて、盛大に舌打ちをして、座っていた椅子から立ち上がる爆豪。足音荒く、扉を開けて部屋から出ていく。

「かつちゃん、どこ行くの？」

「ああ？ 寝んだよ。もう飯も食ったし、このままここにいてもやることねえし……テレビも見るもんねえし、むしろ見たくもねえもん見ることになってうつとおしいだけだ」

そう言つて、乱暴にドアを閉める。

「……まあ確かに、今大体どのチャンネル見ても、雄英のアレのこと話してるしな。臨時特番までやってるところもあるし……これじゃ見ても辛いだけか……」

「そして外にはアレだしな……」

ため息交じりに、今度は瀬呂と上鳴。

瀬呂は、スマホで各テレビ局の番組欄をチェックしている。言った通り、どこも特番を組んで、今回の騒動を特集している。中には、夕方の記者会見を見て急遽特集を組んでいるようなところすらあった。被害者への糾弾に熱心なことだ、と、呆れ交じりのため息がまた一つ。そして、上鳴が見ている先は……窓の外。

病院の、ちょうど入り口……敷地と外を分ける正門の位置である。

昨日まで同様……もう夜もそろそろ遅い、夏でも暗くなってくる時間だというのに、報道陣が詰めかけている。門は固く閉じられているので、中に入るわけにはいかず……そこを半ば塞ぐような形で陣取っている。

入院している被害者……すなわち、自分達雄英生の取材を行うことを狙つてだ。あるいは……問題なしと診断されて退院してくる者がいると予想して狙っているのかもしれない。

昼日中のうちでは警戒されているから、夜のうちにこっそり退院するかもしれない、などと、無駄に頭を回して。

「夜遅くまでご苦労なこつた……あれって残業代とか出てんのかな？」

「もしそうだとしたら随分ホワイトな職場だな、報道業界。あんな、成果も望めないような無駄な努力にまで、わざわざ給料出すとか」

「マスコミってホントに人の嫌がることに全力投球してくるよな。春先のアレもそうだったし。お……9時からならアニメやってる局あ

るっぽいな、そっち見るか？」

「瀬呂、Rは？」

「もち全年齢よ。つか、こんな病院でR指定のもん映るはずねーだろ峰田……」

「えーつと何々……あ、ホントだ。てカラ○ユタじゃん、ウチアレ結構好きなんだよね」

「私もー。気分転換にみんなで見ない？」

「ラピ○タ……ああ、『人がゴミのようだ』っていうアレだっけか」

「どんな覚え方しとんねん永久ちゃん……いや、確かに名シーンやけども」

「ついでに人生で一度は言ってみたい名台詞でもある」

「そのセリフ使うことになるってどういう状況だよ……」

「少なくとも私達がヒーローでいるうちは無縁かと思えますわ……多分」

「ゴミ……ゴミか……あそこの連中もゴミみたいに吹っ飛んだら少しはスッキリするかな？」

「ける……上鳴ちゃん、冗談でも不謹慎よ」

「そうだよ上鳴ー。むかつくのはわかるけど、そんなの爆豪君だってしないよ……多分」

「いや、そりやわかってるって、梅雨ちゃんも葉隠も……。けど……マスコミ連中が、俺達のために必死で戦ってくれた先生達にあんなことさせてんの見たら、どーにも心がささくれてよ……あと葉隠、せめて断言してやれって。わかってるから、爆豪だつてあんな……」

——ドツゴオオオオオン!!

「!?!」

突然だった。

何の前触れもなく、爆発が起こり……閉じられていた、病院の正門が、そこに押しかけていた報道陣ごと……吹き飛んだ。

「……は……？」

見ていたにもかかわらず、一体何が起こったのかわからない上鳴。その後ろから、突然の轟音を聞きつけて窓際に駆け寄ってくる学友達。

「え、何？ 爆豪君キレた？」

「いやさすがにちげえだろ。病室戻るつつつてたし……つてか土埃すげえな」

「……あそこに転がってるの、門の鉄柵か？ 何であんな吹っ飛んで……待て、何かいる」

突然の惨劇に、パニックになって逃げ惑う報道陣。

そんな中、土煙の中を悠々と歩いて、数人の人影が姿を現し……何のためらいもなく、病院の敷地内に入ってきた。

しかも、土煙が晴れて、その姿があらわになってみれば……明らかに異様な装束。

人数は4人。少なくとも、病院の関係者ではありえない。

オオカミのような異形型の個性の大男。

つやのある長い赤い髪の女。

全身に包帯、あるいは布を巻きつけた装束の男。

そして……黒い、鼻から下を覆い隠すようなデザインの、何か特殊なスーツのようなものを着込み……その上から、サラリーマンが着るような普通のビジネススーツを身に着けた、異様な風体の男。

あまりに急変した状況、わけのわからない光景。

その場にいた全員が困惑する中……誰かが、震える声で、言った。

「あ、アレ……何？ 何で、病院、入ってくるの？」
そして、

「……まさか……『敵』……!?!?」

……誰かが口にした。

第132話 あつちにもこつちにもそつちにも

「父親と一緒にここにいるとはな……那歩島に行く前に知れてよかつた」

パニックになっている報道陣をスルーして敷地内に入った、その男……ナインは、かなり大きな病院の建物を見上げながら、抑揚の少ない声でそう言った。

それにつき従うように歩いている、3人の仲間と思しき男女。

その1人……長い髪の女が、周囲を見回して……夜間の警備が集まりだしたのを見て、

「じゃあナイン、早くターゲットを探しましょう。あまり時間もなさそうだし……キメラ、マミー、あれらの対処と陽動と、頼むわよ」

「おう」
「了解」

獣の異形型の男と、全身赤い包帯の男がそう短く答え……左右に散開するようにかけていく。

行った先で、警棒で武装した警備員たちを、遠慮なく『個性』を使って蹴散らしていく。

それを見送った後、女……スライスは、ポケットから写真を出した。つい先日襲った、ある一般人の懐から拝借していたものだ。

どうやらそれは家族の写真らしく、子供2人と楽しそうにバーベキューをしているところが映っている。キャンプにでも言ったのだろうか。

「標的は、この間のターゲットの子供……この2人でいいのね？」

「姉と弟、どちらか片方くらいは、『細胞活性』を受け継いでいてもいいだろう……父親1人では足りないとは……誤算だったな。余計な手間を食った」

「でも、大丈夫かしら？ この病院……例の『雄英』の生徒が入院しているところよ？」

「問題ない。たかだか学生が邪魔をしたところで……私の歩みは止め

られんし、それを恐れて小細工に走るようでは、お前達と目指す世界の……王者として君臨するのに、ふさわしくなどない」

淡々とそう言つて、ナインはスライスから写真を受け取り……今一度顔を確認して、すぐに返す。

そこには、紛れもなく……島乃真幌・活真の姉弟の姿が映っていた。するとその時、キメラとマミーの猛攻をかくぐつて、2人の警備員が、ナインとスライス目掛けて駆け寄ってくる。

しかしそれに、スライスは髪を変化させた刃を、ナインは爪の弾丸を飛ばして、一蹴する。

決して軽くない傷を負ったであろう警備員2人が、夜の病院の窓ガラスを割つて中に叩き込まれるのを見ながら……特に何も感じるところのない様子で、ナインは今一度、病院の建物を見上げた。特に、何の気もなしに。

その瞬間、

「……運がいい」

入院患者がいる病棟で、明かりがついている部屋のうちの1つ。

そこから……小さな背丈で、精一杯身を乗り出してこちらを見ようとしている……2人の子供の姿が、顔が見えた。

つい十秒ほど前に、写真で見たばかりの顔が。

「おい、何だよアレ……何だよあの『敵』!?!」

「い、いや『敵』だとは限らな……ああいやどっちみち個性使つて攻撃なんかしてる時点で『敵』認定か、公には……」

「しかも何か4人もいるし、どいつもこいつもヤバそうなんだけど……ていうか、このタイミングで病院襲撃されるってマジ何なの?」

「……ひよつとして、アレも……『敵連合』……?」

「マジかよ!?! つてことは狙われてるのまた俺達つてことかよ……何なんだよこないだから、どこ行つても何してもあいつらあ!?!」

「落ち着け皆! まだそうと決まったわけじゃないだろ! パニックになるな!」

パニックになりかけた面々を、B組の委員長、拳藤が一喝して、強

制的に黙らせる。

流石だな、こんな時でも冷静に……ってまあ感心するのは後にして、今は落ち着いて……けど、何をすればいいか考えて、きちんと迅速に動かないといけない。

ヒーロー科の中でも、実戦経験が豊富なあたりのメンバーが比較的早く立ち直り、冷静に状況を分析し始める『 Bannon! 』あ、爆豪帰ってきた。こいつもそっち枠だったなそういや。

「あ、かつちゃん!」

「どけデク!」

「進行方向上にいないけど……」

扉を開けて入ってきた爆豪を、ちょうどその横側にいた緑谷が見て（そのまま歩いてても一切邪魔にならない位置だな、確かに）呼び止める。止まらんけど。

「おい、誰かアレ最初から見てた奴いるか？ 何が起こってる?」

「上鳴」

「あ、お、おう。なんか、報道陣がたむろってた正門のところがいきなり爆発して……んで、そのまま堂々と正面から入ってきた感じだった。それだけだな」

「確かに、忍び込んできたわけじゃなかったな……不自然なくらい派手に入ってきて、走りもせず ゆっくり歩いて、扉ぶっ壊して病院の中に入った」

「何考えてるのかわからないあたりが怖いわね……ひよつとしたらあいつらは陽動で、他に本命がいて忍び込んでる、とかあったりするかしら?」

「可能性はあるな。てか皆、誰かあいつらのうちの1人だけでも、見覚えある奴いる?」

「そう私が、部屋にいる全員に聞いてみるけど……肯定の返事はない。」

ほとんどが、『ない』とか、首を横に振ったりだ。つまり、少なくとも合宿を襲撃に来たメンバーの中には、あれらはいなかった……『敵連合』の可能性が少し下がったな。

ま、情報が皆無に等しい状態で、相手が何者かも特定なんて、できるとは思ってたなかったが……しかしそうになると、重要なのはむしろここからか。

これから私達は……どう動けばいいか。

合宿の時に、相澤先生が出してくれた『戦闘許可』は、当たり前だがもう解除されてる。仮免を持っていない私達は、正当防衛とか以外で、『個性』を用いた戦闘は許されない立場だ。

となると……まあ無難に、私達が普段、ヒーロー基礎学とか情報学とかでやってるような、緊急時の対応マニュアルに沿って、つてのが一番間違いないかな。

しかし、それはそれで骨だな……

「戦闘が許可されてない今の状況で、私達がやるべきは……まず、避難誘導の手助けだ」

「拳藤君に同感だ。最悪なことにここは病院……入院患者を含め、『戦闘』に巻き込むわけにはいかない人や、自力では避難できない人が大勢いる！一刻も早くその人達を助けなくては！」

「そう考えると、むしろ戦ってる暇とかねえな……こういうケースを想定した避難訓練とか、職員も普段からやってるだろうから、多少は楽か？」

「……そうでもない、かも☆」

割り込んでくる声。窓の外を見ていた青山が、何かに気づいたららしい。

「あの『敵』、まっすぐこっちに……入院病棟に向かって来てる。陽動と思しき2人も、無茶苦茶に暴れるように見えて……こっちに警備員を近づけないように立ち回ってるみたいだ……☆」

その言葉に仰天して、同じように窓の外を見ると……確かに。こっち来る。まっすぐ。

言ったように、陽動の2人……狼っぽいのとミイラっぽいのも、ここを守って戦ってるっぽい。

あ、ちらほら、付近で異変を察知して駆けつけたっぽいヒーローとかが戦闘に交じり始めた……でも相手になってない、普通に蹴散らさ

れる。

マジかよ……よりもよってここが狙いなのか!? 一体何が……とか思ってたなら、何やら部屋の入り口が騒がしくなった。

扉が開き、入ってきたのは……え?

「ま、真幌ちゃんに活真君……何で!? どしたの!?!」

「で……デク兄ちゃん、助けて!」

驚いて言った麗日……の、横に丁度いた緑谷を発見した活真君が、泣きそうな……いや、もう泣いてるっぽい顔で走ってきて、緑谷にしがみついた。一拍遅れて、真幌ちゃんも同じように。

震える声で、助けを求める……だけでなく、何かを伝えようとする彼の次の言葉に、自然と皆が耳を傾けていた。

「どうしたの、活真君! 大丈夫だよ、すぐに皆で避難して……僕らも協力するから」

「違うんだ……アイツなんだ!」

「え?」

「きつとまた来たんだ……殺す気で……お父さんを……やだよ、怖い……!」

嗚咽のせいで、途切れ途切れにしか聞こえてこない活真君の言葉だが、その直後に、ようやくするようににはつきりと聞こえる声で……真幌ちゃんが言った。

「お父さんが言ってた……! アイツなの……私達のお父さんを襲った『敵』、アイツなのよ!」

「……ツ!?! 真幌ちゃんと活真君のお父さんを襲った『敵』!?! それってたしか……」

「そいつに襲われて、『個性』使えなくなっただって前に……『個性』を奪う敵?」

「はあ!?! おい、何だそれ、どういうことだよ!?! 『個性』を奪うって……」

「い、いや、私らも聞いただけなんだけど……」

真幌ちゃん達と接点がなかったために、その話を聞いていなかった面々（主にあの一件の関係者以外）に、私達が彼女達から聞いたこと

を、簡単に説明する。

もつとも、伝聞でそうして聞いた以上の情報は、依然としてないだけでも。

ただ、それも終わるか終わらないかのうちに……『ひっ!』という声が上がった。

誰かと思つたら……小森か? どうしたんだろ?

「あ、あれ……あいつ……!」

窓の外を指さして、怯えながら言う小森。

つられてそつちを見ると……おい!? ちよつと!? アレって!?

「……ごめん、ちよつと皆……あたしもその……嫌なもん見つけちゃつた……」

かと思えば、部屋の端の方にいた取陰が……すんごい顔色悪くして……えええ、こつちはこつちで何を見つけたんだよ。

視線の方向からして、今しがた小森が見つけた『あれら』とはまた別っぽいけど……

ええと、どこ見てんだ? 病院の……裏手側? ああ、ここ角部屋だからよく見え……うん? なんか土埃みたいなのがあつちに……

あれ、人影も……

……えええ……マジかよ。

あつちも、こつちも、どつちも見覚えのあるのが……しかも、今めつちや来てほしくないっていうか、そもそも何で来たんだよって聞きたい感じのヤバいのがちよつと何ホントマジでコレ……!?

☆☆☆

正門前。

ナインたちが突入してから、まだ数分と経っていないうちに……そこに新たに、2人の人物が通りかかったところだった。

しかし残念ながらそれは、騒ぎを聞きつけてかけつけたヒーローや警察官などではない。

むしろ、そうして駆けつけようとしていたヒーローの幾人かを、『邪

魔だから』となぎ倒して動けなくして、悠々とここに入ってきていた。「奴さんここにいんのか？　また派手に暴れてやがるな……ほとんどは手下どもがやっつてることのようにだが……」

「何でもいい、さっさと終わらせちまうに限る……」サ仕事、さっさと終わらせちまうに限る……」

金属の仮面と、潜水用マスクのような仮面。

どちらも顔を隠した、ネームドヴィラン2人。ウォルフラムと、キュレーター。

『AFO』の指令により、逃げ出した『被験体』……ナインの捕獲・回収のためにここに訪れた2人は、巻き起こる破壊や逃げ惑う人々の悲鳴には、特に興味もない様子で……とりあえず騒がしい方に標的がいそうだと考えて、歩みを進めていく。

途中、自分達を止めようと向かって来た警備員やヒーローを、当然のように吹き飛ばしながら。

そして他方、裏口近く。

——バツン！

そんな特徴的な音と共に……正門の他に唯一の出入り口である裏口の門を『分解』して侵入し、ご丁寧にその後『修繕』することで、今度は絶対に外に出られない状態にしてから……その男は、悠々と歩いて病院を目指していく。

こちらはナインたちと違い、目立つつもりはないようだ。もっとも、隠密行動と呼べるほど、忍んで行動しているようにも見えないが。「表が騒がしいのは好都合だな……こっちはゆつくり探し物ができる。『キュレーター』の奴もいるようだ……まあいい。壊理さえ戻って来れば、あとは、組長を助け出せば……組は甦る。研究の遅れも取り戻せるはずだ」

顔に装着したペストマスクという、余りに特徴的な恰好ゆえに、遠目でもそれを見た取陰は、男の正体にすぐに気づいていた。

その男……オーバーホールは、入手した情報により、組長の孫娘であり、自分の計画の要である壊理が入院しているこの病院に、夜陰に

紛れて足を進めていった。

壊理を奪還し、再び自分の歪んだ信念に向けて、誰も望んでいない修羅の道を歩んでいくために。

要所要所で『バツン!』と音を響かせて、出られない、入れないように、窓やドアを塞ぎながら、入院病棟を探し回っていく。

(……そういや、この病院には雄英の生徒も入院してるんだったな。なら……いい機会だ、壊理にきちんと教えておくのもいいか……自分が、病気なんだってことを。そして、お前を治せるのは、『分解』できる俺だけなんだってことを……)

☆☆☆

……とりあえず一言。

何だよ、このボスラッシュ!?

第133話 戦闘許可、再び

「ええい、鬱陶しい！ 数ばかりかと思えば馬力のあるものまでいるか！」

「どれだけの数が一体……エッジショット殿！ 動きだけでも止められまいか!？」

「難しいようだ……普通の人間とは、微妙にだが肉体構造が違う。『改人』とはよく言ったものだ……簡単には止められんらしい」

死柄木達を『黒い水』が連れ去り、オールマイトがそれを追いかけて、もう1つの摘発現場の方に飛び出していった直後。

エンデヴァーを始めとした残りのメンバーは、死柄木たちと入れ替わるように湧いて出た、何体もの脳無の対処に追われていた。

その数は1匹や2匹ではない。見える範囲だけでも20はいそうであり……しかも何体か『黒』までもが混じっている。

エンデヴァーやエッジショットならば対応できる相手ではあるが、機動隊程度の戦力では相手にならず、なすすべもなく吹き飛ばされていく。保須市で軽々とヒーロー達を蹴散らしていた様子から見ても、やはり『黒』は別格なのだと思知らされる。

ならば自分達が相手をするまでだと、エンデヴァー、エッジショット、それにグラントリノが立ち向かおうとしたところで……

「……えええ、エンデヴァー……」
「……う？」

聞き覚えのない声に、連合のメンバーが誰か残っていたのかと、エンデヴァーは上を見上げ……そこにいたモノを目にして、驚愕を隠せなかった。

そこにいたのは……脳無だった。

脳の露出という、全ての脳無に共通している特徴がないために——フードをかぶったような形状になっている——断定はできないが、他のおおよその特徴や、雰囲気は一致している。

ただし、決定的な違和感が1つ。それは、エンデヴァーがこうして、視線を向けてこの脳無を発見することとなった原因、とも呼べるも

の。

「みみ、見つけた……強い、奴……！」

(こいつ……言葉を喋るのか!?)

「神野に格納していたものを合わせて……『下位』『中位』合わせて100体以上、『上位』10体、さらに『ハイエンド最上位』を3体とは……随分と大盤振る舞いだね、ドクター」

『何、所詮は数打ちの実験段階でできたもんじゃ。データは十分とれたし、寿命も長くはない……ならばパーツと景気良く暴れさせてやっただ方が、彼らも嬉しかろうて』

「なるほど、せっかくだ……『クイーン』も含めて有効利用させてもらうよ。オールマイトを相手に、弔があそこまでの啖呵を切った晴れの日だ。盛大に祝ってやりたい」

それから二言三言話してから、仮面の男……オール・フォー・ワンは、マスクに内蔵していたと思しき通信機をOFFにする。そして、『黒い水』でここまで転送されてきた、連合メンバーに向き直った。

その集団の、先頭に立っている、死柄木に。

「……手間、かけさせちまったな、先生」

「気にすることはない。失敗しても、またやり直せばいいんだ……そのために僕がいる」

そのやり取りは、ただ単に、先生と教え子の間で交わされる、普通のものだった。少なくとも、その光景だけを見れば。

誰もこれが、世界を震撼させるほどの力を持つ『敵』の親玉と、新進気鋭の『敵』組織の頭目の会話だなどとは思えないだろう。

淀んだ目と仄暗い魂で繋がった2人は、雑談にも近い会話を交わしながらも、一方で冷静に状況を分析する。

死柄木はふと、周囲かなり広い範囲にわたって広がる、開けた土地を……正確には、そこにあつたビル群を消し飛ばして作り出された、瓦礫の山が地面になっているその光景を見て、

「しかし……コレやったの先生か？ 派手にやったな……遠目からでも多分、すげえ目立つぞ」

「そうだね、確かに……少々力がこもり過ぎたかもしれないね。まあの道、場所自体が割れてる以上、奴は……ああ、もう来たのか」
その直後、空中から弾丸のような勢いで急襲してくる、大柄な影が1つ。

死柄木とAFO、両方を巻き込む軌道で飛んできたそれを、AFOは、こともなげに受け止める。

ガン！ と硬質にすら思える音を響かせて……AFOは、オールマイトの一撃を、素手で止めた。

「今度こそ、決着をつけるぞ……！ オール・フォー・ワン！」

「また、僕を殺すか？ オールマイト」

常の笑顔を捨て、憤怒の形相で舞い降りた『平和の象徴』を前に、最強の『敵』は、まるで意趣返しでもするかのように……仮面の奥で笑ってみせた。

☆☆☆

「じゃあ何か!? あの後から来た3人って全員ネームドヴィランなのかよ!? それも、トップヒーロー級の強さのやべえ奴！」

「ああ、正直あの『ヒーロー殺し』よか危険だと思う」

最早悲鳴とすら言える峰田の問に、こちらは落ち着き払った……ように見えるが、冷汗を流しながら答える轟。次いで緑谷が、補足説明を入れるように、

『『キュレーター』は『鯨』……発動型と異形型の複合で、とてつもなく強力なパワータイプ。『ウォルフラム』は周囲にある金属を操る……都会じゃ、四方八方に凶器があるようなもんだ。そして『オーバーホール』は……手で触れたものを、生物、無生物問わず即座に『分解・修復』する。極端な話……直接触れられたらその瞬間粉々に『分解』されるから即死だし、地面や壁を作り替えて広範囲に一気に攻撃したりすることもできる」

「聞けば聞くほどやべえ奴じゃねえか……そんなの本来、プロヒーローがチームアップで対処するレベルじゃねえの？」

「それで足りりやいいがな。……で、残るはあの変な仮面野郎だ」

「……いや、今言った4人全員仮面付けてっけど」

……確かに。金属の仮面に、潜水マスク、ペストマスク、あと……何て言ったらいいのかアレは。

「ビジネススーツの顔下半分仮面だボケ。さつき見た感じだと、手の指先からビームみたいな飛ばしてたな。だが……」

そこまで行つて爆豪は、いや、爆豪だけじゃなく私達も……さつきその『ビームみたいな』の後に見た光景を思い出す。

その部下と思しき『敵』2人の防御を間に挟んだまま、遠距離から『個性』で攻撃したヒーローがいたんだが……そいつの攻撃を、あのスーツ『敵』、何かバリアみたいなのを出して防いでいた。

さつきのビームとはまた違う『個性』？ それとも、同一の『個性』の使い方の違いか、あるいは複合型の何かか……

……もし、1つ目だとしたら……緑谷と同じように、『個性』そのものを複数持つてること……？ そんなの……いや、後だ！ 考えてもわからないことを考えてる暇ない！

とりあえず私達は、手分けして入院病棟の患者達の避難に協力することになったため、すぐに動き出した。病院の人達に申し出て指示をもらい、マンパワーが必要な部分を主に手伝つていく。必要に応じて、普段の授業で学んだ緊急時の知識を使いながら。

ただし、一部の生徒はそれに参加していない。

いや、一部つて言うか……もつたいぶらずに言うのと、私と緑谷なんだが……別行動で、ある少女を保護しに行ったからである。

言わずもがな……オーバーホールの狙いであろう、壊理ちゃんをだ。

合宿の時と同じように、『敵連合』としてきた可能性もなくはないけど……襲撃してきたここに偶然で壊理ちゃんがいるってのは、ちよつと考えづらいし……仮に違ったとしても、それを知れば嬉々としてあのヤロー回収に来るだろうしな。どっちにせよ、早めに保護しとかないといけない。

幸いと言つていいのか、こういう非常事態にも備えて病院の人達は

きちんと訓練を積んでいたので、患者さんの避難自体は順調に進んだんだけど……数分も経たない内に、施設自体が盛大に揺らされ始めてね……

まあ、恐らくはあいつらのうちの誰かが暴れ始めたんだろうな、とは思ったけども……何度も言うように、残念ながら私達には、『個性』を使つて戦う許可がない。ゆえに、戦闘という手段で彼らを守ることができない……

……そう、思われていたのだが。

『雄英高校の皆さん！ 聞こえますか！』

「!?」

突如、頭の中にそんな声が響いて聞こえて来て……ちようど壊理ちゃんを保護したところだった私と緑谷は、思わずびくつと体を震わせてしまった。

ちようど緑谷が抱き抱えていた壊理ちゃんが『？ 何？』って聞いてきたけど、それに返事をする暇もないくらいに、私達の意識は、頭の中に響いてきた謎の声に向いている。

「これ……マンダレイの『テレパス』？」

「似てる、けど……何か違う感じがする。声も違うし……となると、誰か別の……」

『こちらはプロヒーロー』『コマンドポスト』です。現在、私の『個性』である『アナウンス』によつて皆さんに声を届けています。そのままお聞きください』

あ、プロヒーローだった……聞いたことない名前だけど。

個性名も違うけど、マンダレイの『テレパス』と同じようなことができる……情報を直接声にして伝達するような『個性』ってことではないのかな？

当然ながら、その疑問に答えは返ってはこなかったけど、代わりに……一応は吉報、と呼ぶべきであろう知らせが、その『アナウンス』に

よつてもたらされた。

『現時刻をもって、本施設における『超非常事態認定』が発令されました。本病院は特定安全維持必要施設のA級認定を受けているため、これにより、施設の敷地内における、自衛等の限定状況下における『個性』戦闘が一時的に許可されます』

「え……何これ……？」

突然聞こえて来た内容に面食らう緑谷。

だが、すぐに彼も私も……『ヒーロー情報学』で習った内容の中に……今聞こえて来た内容に関するものがあつたことを。

公的な施設の中には、緊急時、特例措置として一般人や、私らみたいなヒーローの卵にも、『個性』を使用した戦闘——ただし、もちろん自衛の範囲でとか条件は絞られる——が許可される施設が存在する。患者の命を守らなさいけない病院や、重要な資料や記録、文化財なんかが保管されている保管施設などがそれにあたる。

そういった施設では、守るべきものを守るために、一時的に超法規的措施を取ることが許されることがあるわけだが、後になってその行動に正当性が認められなかった場合は、通常の違反よりもむしろ重い罪に問われることになったり……まあ、色々ややこしい法規が設定されている。

ま、今はそれは置いておいて……早い話が、この病院もそういう『特別な施設』に含まれているため、いざって時には、施設内にいる人達が自衛のために『個性』を使うことを許可できるのだ。そして、今がその『いざ』という時なわけで。

しかもその『アナウンス』の声は、続けて、

『つきましては、雄英高校の根津校長先生より同意をいただいておりますので、雄英高校の皆さんには、コスチュームの着用を含む、ヒーローとしての『個性』使用の許可が発令されました。以降、適宜必要に応じて自身の判断で『個性』の使用及び戦闘を行ってください』

なんてアナウンスが聞こえたと同時に、私の服のポケットに入っていたスマホに着信。

見てみたら、発信元は……ターニャ？

「……もしもし、ターニヤ？ 何？ 今ちよつと……」

『取り込み中であろうことは知っている。こつちも時間がないから手短かに伝える、そのまま聞け』

電話の向こうから聞こえてきたターニヤの声は、訓練中に時折垣間見せる、本気の軍人モード……よりもさらに冷に徹した感じの、堅く、鋭く、強い声音だった。

思わず背筋が伸びる私。しかしその返事を待たず、ターニヤは早口で話す。

『恐らく今しがた、永久達雄英生徒の一時的な『個性使用許可』を伝えるアナウンスがあったはずだ。それは本当だ、私が大使館経由でヒーロー公安委員会に掛け合って発令してもらった。これで度を超えなければ、『職場体験』や『ワーキングホリデー』の時と同様に、コスチュームを着用して見習いヒーローとして動いて問題ない。襲撃してきた『敵』にはそれで対処しろ』

「はい!? え、今のターニヤが……え、マジで!？」

『マジだ。ついでに言えば、『コマンドポスト』は私の教導隊時代の教え子だ』

しれつとそんなマメ知識的な情報も。さらに続けて、

『現在、付近にいるヒーロー達に一斉に応援要請が飛ばされている。事態が事態だ、雄英からも幾人か派遣される可能性が高いが……何分今すぐに現着とまではいかん。どうか持ちこたえさせろ』

「……わかった。きつそうだけど、戦闘許可出してくれただけでも御の字だな……コスチュームも使っていないなら、合宿の時よりはさらに条件もいいか」

この病院には、『合宿』の時の荷物とかもそのまま運び込まれてるので、私達のコスチュームも保管されているはずだ。明日には業者に頼んで、雄英に送り返してもらおう手はずになっていたはずだが……運がいい、まだ、保管庫にあるはずだ。

緑谷に頼んで、今ターニヤから聞いた内容を、A組とB組全員、それに心操と青山にも一斉送信してもらいつつ（私は通話中なのでアプリが使えん）……私はターニヤに改めて礼を言った。

同時に、こつちから提供できる情報も伝える。襲撃してきた『敵』の内訳について。

『オーバーホール』『キュレーター』『ウォルフラム』……そして、正体不明の男と、その部下と思しき3人。

最後の1人(+3人)については、ターニヤもすぐにはわからなかったそうだけど、その前に並べて述べた3人分だけで、十分厄介なことになってると認識したらしく、電話の向こうでため息の音が聞こえた。

『……どいつもこいつも、プロヒーローですら簡単に死ぬる危険度の奴が揃ってるな……。永久、許可を出しておいてなんだが、本当に戦闘は最小限にしろ……。判断を誤れば……。死人が出るぞ』

ターニヤとの通話を終えた私達は、壊理ちゃんをシエルターに入れた後で、コスチュームを取りに行こう、と考えてたんだが……。それより先に、コスチュームの方が私達のところに来てきて、届いた。

本来は、大きめのアタツシユケースくらいの大きさがあるはずのそれが、指先に乗るくらいにまで縮んだ状態で……。スズメみたいな小さな鳥によって運ばれてきた。

どうやらコレ、口田と、B組の小大の『個性』だな……。

小大の『サイズ』で小さくしたコスチュームを、口田が鳥に運ばせたわけだ。多人数に一度にこれらを届けるには、最適な組み合わせだな。

そして、私達にコスチュームを届けた鳥が飛び去って少ししてから、コスチュームは大きさを取り戻した。多分、飛ばした鳥が返ってきたのを『配達完了』の合図にして、『サイズ』を解除したんだろう。壊理ちゃんにちよつとだけ待ってもらって、素早く……。それこそ、早着替え張りのスピードで服を換える。色々今更なので、恥ずかしかって互いに見ないようにして、なんて事はしない。堂々と目の前で着替えた。

そのまま、特別病棟から最寄りのシエルターに壊理ちゃんを避難させて……。他の皆に合流しようとしたところで、すぐ隣の病棟で爆発が

起こった。衝撃波で、私達が通っていた通路の窓ガラスも、バリン、ガシヤン、と一気に割れてしまった。

咄嗟に窓から外を見て見ると……そこには、壁の一部が完全に吹き飛んで崩れ去ってしまっている病棟と……倒れ伏す、何人ものクラスメイト達。

そして……彼らに守られて無事だったのだろう。涙目になって、必死に逃げる……真幌ちゃんと活真君の姿。

そして、その2人を追って悠々と歩く、ビジネススーツ姿の『敵』。それらの光景を目にした瞬間、例によつて緑谷は……考えるより先に体が動いた、という感じの速さで飛び出していた。

無論、私もそれを追って飛び出した。

第134話 標的変更

「仕事中に内容の変更とか勘弁してもらいたいんだけど……」

『悪いとは思つとるよ。その分手当には色を付けるから勘弁しておくれ。……想定外の事態であることに変わりはないが、実戦テストのデータをとれるのならそれはそれで好都合じゃしの』

ため息交じりに、通信機の向こうのドクターに苦言を呈するキュレーター。

その隣にいるウォルフラムは、ビジネスの体裁を重視するキュレーターの意見を理解しつつも、

「まあ、やることは変わらないってんなら問題ない。ちよつとの間時間が伸びるだけだ……残業手当が出るだけだとも思つとこうや」

「二昔前の日本人でもねえのに、時間外労働に対して物分かりのいいこつたな。まあ今回は……その方が俺達も楽できそうだからよしとするか」

キュレーターとウォルフラムの見る先では、病院襲撃犯の首魁であり、同時に、自分達が回収を依頼された標的でもあるナインが、何人ものヒーローや、ヒーロー科の学生達を相手に、部下であるスライスと共に猛威を振るっている所だった。

最初、周囲のヒーローや学生、一般人もろともに蹴散らして標的を回収しようとしていた2人だが、現状を知ったドクターが、ナインの戦闘能力及び『個性』の定着度合いに関するデータを取る絶好の機会だと見て、そのまま静観するように指示を出したのである。

調子のいいことだと思ふ所がないわけではなかったが、ウォルフラム達にとっても益のある話だった。ヒーロー達との戦闘で疲弊してくれば、捕獲もしやすくなるだろうからだ。

自分達を発見して取り押さえようと向かって来たヒーロー達を素早く無力化した2人は、しばしの間隠密行動に切り替え、観戦に徹することとして、それきり口をつぐんだ。

☆☆☆

どうしようこいつめっちゃ強い。

明らかにネームドヴィラン級だろ……まあ、こんな風に大胆不敵に公的機関に襲撃なんぞかけてくるんだから、それ相応ではあろうとは思ってたけど……駆けつけてくれたヒーロー達、まるで相手にならずに蹴散らされちゃったよ。

しかもやはりというか、こいついくつも『個性』を使ってくる。

もう何ていうか……1つの『個性』の応用とかじや明らかに説明できないもん。技自体は単純だけど、バリエーションが豊富すぎる。ジャンルも違いすぎる。

爪をビームみたいに飛ばして……ってというか、爪からビーム出してるのか？ どっちなのかわかんないけど、とりあえず『爪ビーム』とでもいうべき技。

半透明のバリアみたいなものを出して、こっちの攻撃を防御してしまふ技。形とか範囲は自由自在なようで、前面の一部だけに出して、爪ビームで反撃してきたり、全方位からの攻撃を全方位のバリアで防いだりしていた。

さらに、衝撃波みたいなものも。特に目に見える形じゃなかったんで予想ではあるんだが、とびかかったヒーロー達が、周囲の瓦礫ごと吹っ飛ばされたもんだから……多分あってると思う。

そして、なんか青いドラゴンみたいなのを背中から出して……何だ一体コレ？ 常闇の『黒影』と同じような、使い魔的なアレか？

……そしてここに、真幌ちゃん達の——正確にはそのお父さんの——証言が正しいとすれば、『個性を奪う』っていうものがある……つまりこれらはやはり、単一の『個性』を使い方を変えてるとかじやなくて……全部違う『個性』？ 他人から奪ったもの？

……他人から『個性』を奪って自分のものにできる、って……どんな反則技だ……!?

苦戦しているヒーロー達やクラスメイト達を、そして真幌ちゃん達を助けるために飛び込んだはいいけど……逃げる隙が全くないし、し

かももう1人仲間がいたもんだから、そっちにも手を回さないといけなくて……

今、私はこっちの赤い髪の女の相手をしてる。真幌ちゃん達の方は、緑谷に任せて。

コイツ、髪を刃物みたいにして切り付けてきたり、飛ばしてきたりする。見切れない速さじゃないし、私のコスチュームは防刃使用だから、その下に仕込んである装甲と合わせてどうにか対抗で来てるけど……キツツいなコレ！

(手数が違いすぎる……つともー、こちとら病み上がりだつてのに！)

幸い、エネルギーはたっぷりあるから、戦い自体は問題なくできてるけど……。

あの食欲は、この事態を虫の知らせ的に私の中の何かが予期して……んなわけないか。

「失せなさい……子どもに用はないの。ナインの邪魔はさせないわ」「私なんぞよりよっぽど小さい子供を追い回して泣かせといてよく言う……盗人猛々しいってのはこのことだな。……まあ、『盗む』対象がだいぶ特殊みたいだけ、どお!」

行ってる最中に髪の毛を束ねて曲刀みたいにしてきたものを振りぬいてきたので、体を反らしてそれを避けつつ、蹴り上げ……でも、すぐにはらりとほどけて髪に戻ってしまい、蹴りはあえなく空回り。変幻自在のコレが鬱陶しい!

「へえ……『知ってる』んだ? その子達、あるいはその父親から聞いたのかしら?」

「否定しないってことはガチかよあの情報……どんな『個性』だ」

「彼が、彼の……私達の宿願のために手にいれた力よ。いずれ、この世界全ての頂点に立つための……!」

「(……手に入れた? それじゃまるで、後付けで習得したみたいなの……) そりゃまた、大きく出……っ!」

その瞬間、視界の端に……あの、ナインとかいう奴に、首を捕まられて拘束されている緑谷が見えて……とっさに私は走り出していた。

当然のように、『させない!』と進行方向上に割り込んでくる女。今更だけど、さつき『スライス』とか呼ばれてたな。

それを私は、足元の瓦礫を……その中に埋まっていた『ある物』ごと蹴り上げて、地面の砂で目つぶしする感じでスライスに向けて飛ばし、行く手と視界を遮る。

当然、刃物に変化した髪の毛で切り払われるが……

——ボウン!

「……っ!? 何、これ……粉……消火器か!?!」

瓦礫と一緒に蹴つ飛ばしてた消火器も一緒に両断してしまい、爆発。周囲に消火剤が飛び散って視界を盛大に妨害し……その直前に既に横向きに走り出していた私は、大回りする形で緑谷の元に走り出した。

☆☆☆

「……っ……げほっ、えほ……!」

「……!?! 『個性』を奪えない……潜在的に複数の『個性』を有しているのか? 今の私のストックには、収まりきらないか……!」

(今、何て言った? 『個性』を奪う?! じゃあやっぱり、こいつ、真幌ちゃん達のお父さんの『細胞活性』を……他人の『個性』を奪うなんて、それってまるで……『オール・フォー・ワン』じゃ……!?!)

緑谷の、自分の『盾』を揺るがしかねないほどのパワーを目にしたナインは、奪う価値がある個性だと判断し、自分のものにしようと試みるも……弾かれるような形で失敗してしまう。

それによって拘束から逃れた緑谷は、至極当然ながら、今ナインが言っていた言葉について考え……かつて、オールマイトに聞かされた、まさにそんな『個性』を持つ『敵』について思い出していた。

オールマイトに瀕死の重傷を負わせた……彼をして『巨悪』とまで称された最悪の『敵』を。

(こいつ、何か関係があるのか……? 『オール・フォー・ワン』は確か、『敵連合』のブレインの可能性が高いって前にオールマイトが言っ

てた。だとしたらこいつも……)

「お前……やっぱ『敵連合』なのか……!?!」

「……いきなり何だ？　どんな思考を経てその可能性に行き着いたのかは知らないが、そうだな……関係者と言えなくもない、と言っておこうか」

玉虫色ともいえる回答。

ナインにしてみれば、連合……というより、その協力者であるドクターの実験に参加したのは、自分の目的のために利用する意図あつてのことであり、『連合』の仲間になる気は微塵もない。

最終的に『力』でもって全ての頂点に立つ。それがナインの野望であり……そのための踏み台として利用したに過ぎないのだ。ゆえに、回答はこういった形になり……さらに言えば、連合とみなされようがみなされまいが、特にどうでもいい話だった。

変わらず無感情な瞳のまま、困惑しつつも思考を続ける緑谷に歩み寄ろうとするナインだが……その間に飛び込んできた者を見て、顔色を変えた。

「……っ！」

「無事か、緑谷！」

「っ、栄陽院さん！　あつちの敵は？」

「悪り、お前がヤバそうになつてんのが見えて、ちよつと撤いて……はいないか。どうにか加勢できないかってこつちに来たんだ。まだぴんぴんしてる」

その言葉通り、一拍遅れてスライスが追いつき、ナインの隣に立つ。しかし、彼女が口を開くよりも先に、

「スライス。あの少女は……君が戦っていた相手か？」

「ええ……ごめんなさい、ナイン。虚を突かれて……あなたの邪魔をさせてしまったかしら」

「……いや、構わない。むしろ好都合だ」

「……っ？」

気にしないだけならまだしも、『好都合』とまで言ったナインの意図が読めず、スライスは不思議そうに、隣にいる彼の方を見る。

その目は……よく見るとわかる程度に、光を放っていた。

「柵から牡丹餅、とでも言えればいいのか。運がいい……予定変更だスライス。B型の『細胞活性』は……あの子供はもう、いい」

その言葉に、スライスのみならず、活真と真幌を守って戦っていた緑谷や永久も驚くことになる。なぜいきなり、わざわざ狙ってこんな襲撃をかけて来た標的を諦めたのかと。

それについてろくに考えもしないうちに……ナインは、続けて言った。

「代わりに……その少女の『個性』を奪う」

「……っ……!?!」

永久を、指さして……そう言った。

立て続けに言い放たれた予想外の言葉に、絶句する緑谷と永久。

彼らに構わず、スライスはナインに問いかける。

「いいの？ A型の『細胞活性』だけでは不足だったのでしょ？ あなたの力を振るうには……」

ナインの有する個性の中の1つに——そしてそれは、奪ったものでも後付けしたものでなく、はじめからナインが持っていた『個性』である——強力ゆえに、使うほどに細胞が死滅していくという、大きすぎる副作用を持つものがあつた。

用語として『細胞障害性』というカテゴリーに分類される、ピーキーな力だつた。

それを十全に使うため、ナインは真幌と活真の父親から、細胞の分裂を促進し、肉体を回復させる『細胞活性』の個性を奪い取つた。デメリットの部分を相殺するために。

しかし、彼の『個性』だけではまだカバーしきれなかつた。

被験体としてドクターから受けた処置により、『個性』を奪う、という力を得て、大幅なパワーアップを果たしたはいいものの、副作用もまた酷くなつていたのである。

それをカバーするために、その息子である活真の『細胞活性』を狙つ

ていたナインだが……ここに来て彼は、それよりもさらに魅力的なものを、その目で見つけていた。

奪った『個性』の1つであり、ラグドールが使う『サーチ』に近い、対象の能力を看破する目を使って、彼は……永久の『個性』を見た。対外的に『無限エネルギー』で通されている……エネルギーを蓄えて、それを様々に応用して使うことができる『個性』を。

そして、その使用用途の中には、肉体を活性化させて回復を加速させることができるものもあると知り……その瞬間、ナインの標的は、移った。

「問題ない。『細胞活性』は今あるものだけで十分だ……その分をカバーして余りある『個性』だ。強力で、応用範囲も広い。同じ『個性』を2つ持っているよりもよほどいい」

「そう……なら、了解よ」

「……よかったな緑谷、これで真幌ちゃん達、狙われなくてよさそうだわ」

「笑えないからやめて……栄陽院さん。あいつら明らかに本気だよ、絶対に捕まっちゃダメだ！ 捕まったら……多分、本当に『奪われる』！」

最早、ナインとスライスは……緑谷が背後にかばっている、真幌と活真には、目は向いていない。興味すら抱いていないし、気にもしていない。

2組の目は……今は、永久に向けられている。

彼女がその身の内に宿している……ナインが欲している『個性』に。「一応、言っておく」

警戒状態の2人に対して……1歩目を踏み出す前に、ナインは声をかけた。

「抵抗するな、命まではとらない。いや、何もしなければケガすらしなくて済む。ただ……『個性』をもらうだけだ。守るべき一般人の代わりになれるのなら……ヒーローとして本望だろう？」

「それはひよつとしてギャグで言ってるのかお前……それで頷く奴とかがいるわけないだろ」

「奪わせない……誰だろうと、誰の命も、『個性』も！」
「そうか、ならば……力尽くで奪うまでだ」

特に残念がるそぶりも見せず、ナインは今度は言葉ではなく、爪の先に光を宿した手を、まるで銃口のように、2人に向けた。

第135話 さよなら

(……やばい、これ……マジで死ぬかも)

覚悟はしていた。想像を絶するレベルで強い『敵』だろうと。

いやまあ、実際に想像を絶していたというか、当然のように想像で
きる範囲内にいなかったというか……その結果が今のこれだ。

交渉とも呼べないような交渉の後、私と緑谷はナインと戦闘になり
……その最中、戦闘音を聞きつけた爆豪ら他の生徒達が加勢にかけつ
けてくれた。

そのうち、梅雨ちゃんと麗日は、真幌ちゃんと活真君を連れてその
場を離脱してくれた。これで巻き込む心配もなく、存分に力を振るえ
る。

……しかし、存分に力を振るえるくらいで何とかなる相手じゃな
かった。

「……これほどとはな……正直、驚かされた。子供だと思つて慢心す
るのは間違いだったようだ……お前達も立派に、強者の側だ。そこら
のヒーローなどよりも、よほどな」

全員見事に倒れ伏して動けなくなっている私達を相手に、余裕のナ
インがそんなことをのたまう。

総勢12名の有精卵、即席にしては満点と言ってよさそうなコンビ
ネーションで、波状攻撃をかけたが……ほとんど一蹴された。

私らが病み上がりで十全じゃないことを差し引いても……強すぎ
る、こいつ。

砂藤の拳も、B組の鱗の遠距離攻撃もバリアで防がれ、砂藤は衝撃
波で吹き飛び、鱗は爪ビームで撃ち抜かれた。

その隙を突こうとした尾白と回原だが、やはりこちらもバリアを抜
くことができず、衝撃波で返り討ちに。

穴田と鎌切は、攻撃の瞬間を見極めて、そこならバリアはないと強
引に突破して襲い掛かったものの、背中から飛び出してきた青いドラ
ゴン×2の突進で弾き飛ばされ、噛みつかれ……叩きつけられた。受

け止めようとした円場は、防ぎきれずに空気の盾を破られて、もろとも壁に激突。

周囲の瓦礫を巻き込んで、『もぎもぎ』とテープで拘束しようとした瀬呂と峰田だったが、上手くいったかと思った次の瞬間、中から衝撃波と爪ビームでそれをバラバラにしてあっさり復活。立て続けに放たれた衝撃波で2人ともKO。

攻防の合間合間に、見覚えのある感じの緑色の光があいつの体を覆った気がしたんだが……アレは、『細胞活性』か？ やっぱり奪ってたんだな……でも、何で戦闘中にあんな風に……？ ドーピングしてる感じじゃなかったが……

そして、それらの攻撃を全てさばいて接敵した、緑谷、爆豪、そして私だったが……

(雷って、何だよ……!?)

ありえないほどピンポイントで落ちて来た落雷が直撃し……とんでもない衝撃と電圧で、一気に戦闘不能にまで持っていかれた。

『爪ビーム』『衝撃波』『青ドラゴン』『バリア』『個性見破り』『細胞活性』『個性強奪』そして……『雷』……いや、下手すると『気象操作』か？ 雲が出て、空の色まで変わってる……やばい、全然勝ちの目が見えん……！ ってか、体動かない……)

『コンセントヒール』を発動して治癒を促進するものの、到底間に合う気がしない。

ぎっ、ぎっ……と、ゆっくりなペースで、足音がこっちに近づいてくる。

余裕のつもりか、それとも……？ 何だろう、表情、少し苦しそうだな？

ひよっとしてこの『個性』、反動がキツイのか？ 回復系の『個性』を欲しがってたっぽいのは、そのため……？

「治癒能力の促進か……素晴らしい力だ。それと『細胞活性』を組み合わせて使えば……私の道を阻む者は、最早何もいなくなるだろう……！」

「っ……させ、ない……！」

そんな声と同時に、視界の端で……緑谷が立ちあがったのが見えた。

その向こう側で気絶している爆豪は……まだ、起き上がれない様子だ。

緑谷の全身……というか、節々が赤く光ってる。『フルカウル』じゃないな……『サイコフレーム』の光だ。体の駆動を補助する機能を利用して、強引に体を動かしてるのか……！

でもあんなんじゃない、負担が大きすぎる……体が逆に壊れかねない！それに、よしんばもったとしても、『サイコフレーム』はあくまで動作の補助だ……外付けの神経回路として自分の体を操作できるような者じゃない。到底戦える動きはできない。

「……スライス」

その一声で、後ろの方で待機していた赤い髪の女が動きだし……緑谷目掛けて、赤い髪の毛を束ねた刃が何本も伸びて……

しかもその大きさというか、太さというか……明らかに当たったらタダじゃ済まないレベルの殺傷力だ。

今の一撃でも倒れない、邪魔する気満々の緑谷を見て……今度は確実に排除する気で、か？

殺す気……かどうかはわからないけど、死んでも別に構わない、くらしいのつもりで放ってるのかもしれない。いやそもそも、こんなことしでかす『敵』相手に、殺すつもりがあるだのないだの、考えるだけ無駄ってもんだ。

重要なのは……この1点。

このままだと……緑谷が、死ぬ、かもしれない。

その瞬間、私は、緑谷と同じように、コスチュームに内蔵された装備を……『生体人工筋肉』を利用して強引に体を動かし、緑谷のところにめがけて跳んだ。

多分、このことなんだろう。緑谷がよくやってる(？)、アレ。

『考えるよりも先に体が動いていた』っていうアレ……初めて経験したよ、私。

……そして多分、最後だ。

ナインは爪ビームを飛ばし……機動力を殺すためだろう、私の足を狙って当てて来たが……痛みも衝撃も無視して、足に過剰なほどにエネルギーを回して突進し……妨害を振り切って、緑谷の目の前に出る。迫る何本もの赤い刃との間に、強引に体を割り込ませ、緑谷を後ろに突き飛ばす。
そして……

——ドドドドド……ドシユツ!!

何発もの鋭い衝撃の後……その感触。

「っ、あ………かつ………」

……どうやら、防刃仕様の私のコスチュームでも、防ぎきれなかったらしい。

腕、足、それに腹……か。物凄い違和感………というか、異物感を、体の内側に感じる。

「……え、栄陽……院、さん……!」

かすれたような緑谷の声が、後ろから聞こえた。震えているようでもあった。

恐らくはそのどちらも、今の私の状態を見てのことだろうけど。

……コレ、あれだよな。多分……もうしばらくしたら、痛みとか色々来る奴だよな……今はまだ感覚が追いついてないおかげで、なんかやたら冷静に思考してられるけど……

いや、もしかしたら、体力の限界で意識飛ぶ方が早いかな？ いくらエネルギーが残ってようが、体そのものへのダメージが無視できないのは、USJの時とかでわかってるし……

不意に私は、下の方に視線を落とす。

けっこうな太さの赤い刃が、盛大に鳩尾のあたりに刺さっていた。異物感はそのから始まって、背中まで続いているので、貫通しているんだろう。同様の感触が足と腕にもあるから……貫かれたのは3カ所か。

体が動かなくなりつつあるのを自覚しつつ、どうにか首を動かして

後ろを見る。刺さってるせいで動きづらいが、痛みはないのでひとま
ずいいとして……よかった、後ろの緑谷には刺さってないみたいだ。

「……かひゆ……」

ああ、だめだ……何か言おうとしたけど、やっぱ声でない。

つてか、上手く息ができない。肺か横隔膜、やられたかな？

せめて何か、気の利いた言葉でも、最後に言えれば、よかったかも
だけど……止まるんじゃないやねえぞ、とか……あばよ、ダチ公とか……い
や、ご主人様か……？

ま、ひとまずは……いいか。守れた、なら……

でも、ヒーローとしては……コレ、微妙だな……守るのはともかく、
こういう……後に、続かない……終わり、方……追試でも、減点対象、
だったと……

……ああ、もう、限界か……目、閉じてないのに、目の前が、暗く
……

……ごめん、緑谷。

………さよ　　な　　ら

☆☆☆

(……なんだ、コレ)

呆然と立ち尽くす緑谷の、その視線の先。

クラスメイトが、あまりに日常からかけ離れた姿になって……がっ
くりとうつむいていた。

自分目掛けて伸びて来た、何本もの赤い刃。それを、自分をかばっ
てその身に受けて……腕と足、そして腹部を、その刃に貫かれて。

ぐったりと脱力したまま、ピクリとも動かず……うつむいた形に
なっている顔が、後ろからでも少しだけ見えた。

その目には、もう……光が灯っていないかった。

(何だよ……何だよ、コレ!?)

動けず、何も言えない緑谷を置いて、事態は進む。

「っ……いー…しまった……ナインー!」

焦った様子のスライスの声と同時に、これまで、ほとんど歩いてしか移動しなかったナインが、駆け足でスライスの方に向かう。

同時に、スライスは伸ばした髪の毛の刃を引き戻した。そこに刺さっている、永久の体ごと。

咄嗟に手を伸ばす緑谷だが、届くはずもなく……永久の体は、スライスと、その隣に到着したナインの足元に、どしやりとやや乱暴に落とされる。傷口から、おびただしい量の血液が、瓦礫を伝って流れ落ちていった。

ナインは、永久の首元に手をやると、

「……まだ生きている。大丈夫だ……生きているなら、奪える!」

「そ、そう……よかった。あなたの邪魔をしてしまったかと……!」

「あそこであれほどまでの動きをするなどと言うのは、私にも予想できなかった……結果さえよければ問題ない。『個性』さえ奪ってしまえば……それで用済みだ!」

およそ、人を人とも思っていないことがわかる言葉が並んだが、緑谷の頭の中に残ったのは、『まだ生きています』という部分だけだった。

その瞬間、緑谷は思考を取り戻し……途端に沸騰しそうになる頭で、考えた。

(まだ、まだ生きてる、まだ間に合う!　すぐに治療すれば……まだ……なら……!)

「返——!」

しかし、緑谷が言い切るよりも、地面をけって永久の元に跳躍するよりも、

2人の『敵』が、永久を取り戻そうと突っ込んでくる緑谷に、迎撃の手を向けるよりも早く……

——バツン!

そんな音が響いて……その瞬間、緑谷とナイン達の間、地面から、見上げるほどに高い壁が生えてきた。

突如として視界ごと、向こう側と分断されてしまった緑谷は、さすがに驚きで硬直し……そして、後ろからかけられた声を、聴いた。

「まあ、いいか。片方だけで……死ぬならそれで、手間もかからないと思えば」

聞き覚えのある声。

かつてのある事件の時、そして、数日前……林間合宿の襲撃の日にも聞いた声だった。

感電のダメージはまだ抜けていない。未だに重い体をどうにか動かして、振り向いた緑谷の視界に入ってきたのは……ペストマスクをつけた、まだ年若い、しかし凶悪無比なネームドヴィランとしてその名を知られる男だった。

「……オーバー……ホール……！」

「この間ぶりだな、ヒーロー……の、卵か」

そして、その壁の向こう側。

突如として現れたそれによつて、緑谷や……さらには他の、気絶中、あるいは動けない雄英生達とも分断され……予期せずして邪魔者のいない空間となったそこ。

ナインとスライスは、突然のことにさすがに驚き、しばし警戒していたものの……少し待ってみて何もなしを確認すると、ナインは肩の力を抜いた。

「……どうやら、この壁を作った誰かは……我々の邪魔をする気はないようだな」

「大丈夫……なのかしら？ 一体誰で、どんな『個性』かはわからないけど、これだけの範囲を一瞬で……相当な強個性よ？」

「問題ない。何かしてくるなら、受けて立つまでだ。邪魔にさえならなければ……いや……」

ナインはそこまで言つて……倒れている永久に向き直り、その頭の

すぐ横にしゃがみ込む。

「極論……これさえ済んでしまえば……もう何も、問題ない」

そして……抵抗することもできない永久の頭に、ぼん、と、手を置いた。

「もう、聞こえてはいないだろうが……せめて、安らかに眠るといい……。君の『個性』は……私がこれから、使わせてもらう。私と共に……新しい世界を征く力として」

第136話 『覚醒』の光

マミーと、キメラ。いずれも、ナインの配下としてこの病院に襲撃をかけて来た『敵』。

それぞれがネームドヴィラン級の戦闘能力を持ち、その『個性』もまた、凄まじく強力。

片や、包帯を巻きつけた物体を変化させ、いのままに操る兵隊にできる『木乃伊化』。

片や、体に様々な動物の特徴を発現させ、それによって攻撃できる『キメラ』。

「どうしたア、その程度かヒーローの卵共！ お前たちが不甲斐ないと、罪のない一般市民が死ぬぞー！」

「っ……その原因になる奴が好き勝手言いやがって……！」

地面を張って襲い掛かる轟の氷だが、普通に人間ならば芯まで凍り付かせるその低温も、キメラの強靱な肉体には通じない。その馬力だけで砕いて、反撃とばかりに、蛇のような尾で薙ぎ払う。

氷の壁ごと、前方の広い範囲が吹き飛ばされ、それに紛れて接近しようとしていた泡瀬が慌てて飛び退る。

その影で動いていた骨抜が地面を柔らかくして足を取ろうとするが、蛇の尾をその水面？に叩きつけ、その反動でその場から飛び退って逃れてしまう。

そして、猛禽のように鋭い爪を振りかざして骨抜に襲い掛かるが、横合いから飛びかかった『黒影』が、夜の闇で力を増したパワーで殴りつけてそれを払いのける。

しかし、狙いこそ反らせたものの、さしてダメージになっている様子はない。

「あの凶体で、速い……！」

「タフネスもだ。轟の氷も、黒影の物理攻撃も効き目が薄いと……！」

一方で、マミー。周囲にある、壊れた機材やら家具やらに包帯を巻きつけて操り、ミイラの軍隊を作り出して物量で押してくる。

「子供相手に不覚を取るほど甘くはないぞ。その無謀の代償、身をもって支払うがいい」

1体1体はさほど強くはない。ある程度のダメージを与えれば、包帯がほどけて元に戻る。

が、とにかくそこらにあるもの、ある程度の大きさのものであれば何でも敵になってしまうので、次から次へ後続が追加され、きりがない。

さらに、キメラほどではないとはいえ、本体の戦闘能力も低くはない。忍者のように背中に差している刀と、『個性』にも使う包帯を操って、近距離に遠距離に変幻自在の攻撃を繰り出す。

そしてその援護に、無数の『ミイラ』の兵士が立ちふさがるのである。まるで一人軍隊である。

「だー、くそー！ めんどくせえ、この野郎、次から次へと……」

「冷静になれ、切島！ 頭に血が上ったら思うつぼだ！」

「だけだよ、あのミイラ兵士、無駄にでけえ上に動きがめちゃくちゃで読みづらいし、数多いし……しかも、あの野郎、他のヒーローまで……！」

さらには、敵に包帯を巻きつけることで……今回の場合は、援軍として来てくれているヒーローを包帯でがんじがらめにし、『ミイラ』にしてしまった。

マミーの『個性』は、人間などの生物を操ることはできないが、着ている服や装備は『無生物』である。ゆえに、それを介して操ることができるのだ。あくまでも、動きだけであれば。

飛びかかってきたヒーロー達を、ある者は気絶した状態で、またある者は動きを止めて包帯でからめとり、自分の兵士にしてしまった。そしてそれらもまた、他のミイラと同じように襲ってくる。

単なる家財道具や機械類がミイラ化している者とは違って、うかつに攻撃すれば中の人間にまでダメージがいつてしまう。やりづらいことこの上ない中で、切島達はどうにか食らいついていた。

多くの者が、これまで『職場体験』や『ワーキングホリデー』で相手取ってきたような、一山いくらのチンピラとは違う。本当に危険な

部類の存在、ネームドヴィラン……そう呼ばれる者の脅威というものを肌で感じ、しかしそれでも一步も引かずに立ち向かう意思を見せていた……その時、

突如として、病院の敷地全体を……強風が吹き荒れ始めた。

立っていられないほどのそれではないが、明らかに急に発生するに不自然な風。しかもよく見れば、先程まで、一応夜ではあるが晴れていたはずの空が、かなりの大きさの淀んだ雲に覆われている。星の輝きが、ほとんど見えなくなっていた。

「……！ これは、ナインの……」

「ああ！ ……ということはアイツ……やったかついに！」

その光景を見て、何かに思い至った様子のマミーとキメラ。

そして、その声にこたえるように……彼らの視界の端にあった、瓦礫の山の壁が吹き飛び、その向こうから……スライスを伴ってナインが現れた。

その姿は、先程までのサラリーマン風のスーツ、その上を脱ぎ捨て、体に密着しながらも重厚さをもった特殊なスーツが見えていた。体にはまるで血管のように、紫色のラインが浮かび上がり、髪留めを外した白髪が暴風で乱れている。

「ナイン！」

「よお……成功したみてえだな、どうだ気分は？」

「ああ……最高だ。ようやくこれで……私の力は、完成した」

そう言っ、ナインはその手を天にかざす。

それに伴って、先程までに倍する暴風が吹き荒れ……さらには、落雷まで発生した。誰かに当たったわけではないが、病院の敷地内に滅茶苦茶に何発も落ちてきて、轟音が空気を震わせる。

その光景を、スライスを始め、3人の部下は感動した様子で見っていた。

すると、ナインはわずかに眉を顰めるようにしたが……次の瞬間には、緑色の光が彼を包んで、その眉間のしわも消え去った。

『個性』による細胞の再生は万事うまく運んでいる。そのブーストとなる、このエネルギーを操る『個性』も……そう言えば、名前を聞か

ないでしまったな」

まあいいか、と呟くように言うと、ナインは……キメラやマミーそして彼らと戦っていた者達よりもさらに後ろ側……建物の陰になっている部分に視線をやり、

「……いつまで隠れているつもりだ？ 私に用があるなら、出てきて言ってみるといい……今の私は気分がいい、少しならつき合っただけでもいいぞ」

「は……バレてたか。しかし、えれえ『個性』を持つてる奴がいたもんだな」

「だからさっさと捕獲しときやいいって言ったんだ……くそ、めんどくせえ……」

瓦礫の陰から姿を現したのは……侵入そのものは確認されていれど、なぜか今までほとんど誰にも目撃されず、隠れていたと思しき2人……ウォルフラムとキュレーター。

ドクターから、被験体であるナインの捕獲を依頼された、2人のネームドヴィラン。

「ヒーロー……ではないな、追っ手か。ちょうどいい……帰ったら、感謝している、と伝えておいてくれ。おかげで私は、これほどまでの力を手にすることができた」

「そりや無理つてもんだ……なんせ俺達は俺達で……」

と、ウォルフラムが返事を言い終えるよりも早く、キュレーターが超音波で広範囲を……ナインのみならず、ヒーローも雄英生達も、ナインの部下も巻き込んで無差別に攻撃した。

物理的な破壊力すら伴って襲来するそれに、悲鳴を上げたり、吹き飛ばされたりするものが続出する中、ナインは手をかざしてバリアを張るだけで、一步も動かずそれを受け止めた。

「……おい、まだ俺喋ってんだろうが」

「知るか。馬鹿正直に時間与えたり、下手に様子見なんぞするからこうなるんだ……データは取れたんだろ、ならもう余計な手間も時間もかける理由はない。さっさととっ捕まえて帰るぞ」

「ま、それもそうか……てなわけだ。大人しく捕まってくれねーか？

実験台さんよ」

「まあ……素直に帰ってくれるとも思わなかったが……いいだろう。そちらがその気なら、相手になろう……この力に慣れる、いい機会ともとれるからな」

ウォルフラム、キュレーター、そしてナイン。

破滅的な実力を誇る3人の敵による戦いが始まり……その邪魔をさせまいと、スライスも加えた3人が、周囲のヒーロー達や生徒達の掃除に動く。

さほど間を置かずに地獄絵図となるであろうその戦場。

……そことはまた別な場所で、1人孤独に戦っている者がいた。

☆☆☆

「……こうなるともう哀れだな。所詮はガキか……」

壁によつて永久と分断された緑谷。そこに襲い掛かるオーバーホール。

しかし、そこで『戦闘』は起こらなかった。

それまでの戦闘のダメージに加えて、落雷の直撃。最早緑谷に、戦うどころか、満足に動けるだけの力も残されてはいなかったのだ。

「そこを……どけ！ 僕は……彼女をつ……まだ……」

「そういうセリフは、せめて自分の足で立つてる状態で言うもんだ」

オーバーホールの『個性』で、地面から巨大な腕を生やして、薙ぎ払った。

そのたった一撃で……常ならば、砕くもかわすも容易い物だったであろう攻撃で、緑谷は既に、立ち上がれないほどに体を弱らせ……地を這っている状態だ。

しかし、目だけはまだあきらめていない、爛々と輝き、オーバーホールを睨み返している。

（まだ、まだ間に合うかもしれない……早く病院で手当てを受けさせれば……例え、もしもう『個性』を奪われていても……生きてさえいれば！）

重傷を負った永久を助けなければ、その一念で闘志を燃え上がらせ続ける緑谷。

しかし、それを嘲笑うかのように……あるいは、気に留めてすらないかのように、無感情な顔で、オーバーホールは魔手を伸ばし……緑谷に触れた。

——バツン！

「っ……がああああっ!？」

突如、腕に走った激痛。

見ると……右腕が、半ば程からなくなっていた。もぎ取られたように。

もぎ取られた腕は……オーバーホールが持っている。肘から先の装備……グローブやらスーツをつけたままの状態で……筋肉の反射ゆえか、ぴくぴくとまだ動いている。

今まで、『ワン・フォー・オール』の力を込めて、幾度となく『敵』を殴り、その力を見せつけて来た腕、そして拳。

それを失った。これではもう、この場を生き延びたとしても……今まで通りの戦いなど、到底できない。

ショックと激痛で、到底思考する余裕がないながらも、それを悟って……流石に動揺している緑谷に、オーバーホールは語り掛ける。声のトーンを一切変えずに。

「これは後で使うから貰っていく。さて……もう抵抗することの無意味さはわかったと思うから、さっさと答えろよ？ ……壊理は、どこだ」

「……………っ……………」

やはり、それが狙いか。

緑谷は応えず、オーバーホールを睨み返し……しかし、オーバーホールはそれを返事と読み取ったのか、また何も言わず……今度は

——バツン！

「っ……………っ——!」

左足をもぎ取った。

そして、緑谷の体を、ボールのように蹴り飛ばす。

細身な見た目に反して鍛え上げられているその脚力に、緑谷は数m蹴り飛ばされて転がった。

その拍子に、右腕と左足を、傷口もろとも強く打って激痛が走るが……あまりの痛みに逆に声が出ない。

「こつちは……いらん」

その場に残った緑谷の左足は……雑に蹴飛ばしてどけた。

「表が騒がしくなって、あつちに目が向いてるうちに、壊理1人さらって逃げるのが一番面倒が少ないんだ……仕事を増やしてくれるな、死にぞこない」

もう抵抗する力もない、息をするだけで、意識を保つだけで精いっぱいいな緑谷を見下ろしながら、オーバーホールは問いかける。

「壊理のことを考えてるのか、さっきの女のことを考えてるのかは知らないが……無駄に意地を張るな。ここで耐えてもお前にもう、何もできることなんてない……考えるだけ無駄だ、自分が苦しくなるだけだぞ。さっさと吐け。そうしたら……せめて、苦しませずに終わらせてやる」

「……………」

「俺はこれが終わったら、壊理を迎えに行つて……俺にまた力を貸すよう『説得』しなきゃいけないんだ……この腕は、その為に使つていく。自分をたぶらかして、無駄に希望を持たせたバカの末路を知れば、壊理もきつと素直になつてくれるだろう。無駄なことは考えずにな」

「……………!?!」

「わかるか、時間がないんだよ俺には……だからさっさと……」

まだオーバーホールが何か言っているが、緑谷の耳には入ってこなかった。その前に聞いた言葉を、ひたすら耳の、頭の中で反芻していた。

（僕の腕を、壊理ちゃんの『説得』に使う……あの子を……また脅して、怖がらせて……せつかく、せつかく自由になって、笑うことができるようになったあの子を……!）

脳裏に浮かぶのは、つい数時間前に面会で会った、壊理の顔。

怖い目に合った自分達を心配してくれて、大丈夫だとわかると、ほっとしたようにして。

そして、無事を喜んで笑ってくれた。

最初のころは、上手く笑うこともできなかった……自由の意味も知らなかった彼女が、ようやく、普通の幸せを掴めそうな所まで来ている。それを、この男は……

(また、奪うつもりか……そんなの……そんなの、許さない……! 許して、たまるか!)

痛みと絶望を押しつけて余りある闘志を目に宿し、キツとオーバーホールを睨み返す緑谷。

まだダメか、とため息をついて、今度は右足に手を伸ばし……

しかし、その瞬間、

緑谷の全身から、赤い光があふれ出し……その光は、物理的な力を持ったようにして、オーバーホールを弾き飛ばした。

(っ……!? 何だ、コレは!? 攻撃か!?)

困惑するオーバーホールの前で、緑谷の全身……の、コスチュームに組み込まれている『サイコフレイム』が放つその光は、どんどん強くなっていく。緑谷の意思の力に呼応して、輝きを、力強さを増していく。

「もう……何も、奪わせない……!」

ただの光、と切手は捨てられない謎の力を前に、オーバーホールも流石に困惑する。

既に文字通り手足をもがれ、何もできないはずの子供を前に、攻めあぐねていた。

そして……次の瞬間、

「壊理ちゃんは……渡さない! 永久も……助ける!」

赤かったその光の全てが、

「これ以上……誰からも……何一つ……! 奪わせて……たまるか!」

緑色に……『覚醒』の色に染まり……緑谷の英雄の精神が、その光に乗って拡散していった。

そして、その光が届いた先で……

「……………みど……………りや……………！」

消えかけていた命の灯火が、輝きを取り戻そうと、あがき始めていた。

第137話 真骨頂

「……力が、欲しいか？」

「……………何だこの状況」

今私は、何かこう……よくわからない空間にいる。

もうちよつと具体的に言おうと……コレ確かアレだよな？ 今まで何回か夢で見た……緑谷とか、よくわかんない人達が出てくる、謎な空間。

風が吹いてるような、霧がかかっているような……そもそも空間とか景色そのものが安定してないような……だめだ結局上手く説明できない。

そんな空間に、私は今……さつきまでの戦闘直後の、ボロボロの状態でたたずんでいた。

腹と腕、足に穴が開き、コスチュームもボロボロで血だらけ。けど不思議と、痛みとかはない。

それが、これが単なる夢とかそういうのだからなのか、はたまた私は今死にかけて、そういうのを知覚する段階も既に過ぎてしまったからなのかはわからんけど……まあいいか。

それよりも気になるのは……今のその私を取り囲むように立っている、何人もの……1人を除いて、見覚えのない人達だ。

除外したのは、母さんである。なぜか、『アナライジユ』の装束を纏ったヒーローモードの母さんが、私の隣に立っている。話しかけても微笑み返すばかりで、何も言っってはくれないが。

そんな中、尼僧のような装束の女性が、私の目の前に進み出た。……えっと、誰だろこの人。

「困惑していることですが、残念ながら説明している時間はなさそうですので、要点だけ簡潔に説明します……よく聞きなさい、わが末裔よ」

「あっはい」

今のでちよつとだけ、この人がどんな人なのか分かった気がしたが（言ってることが本当なら、だが）、ひとまず言われた通りに説明に耳

を傾けることにする。

「あなたは今、命を失う瀬戸際にいます。そして、あなたが主君と定められた、緑谷出久もまた……今はしのいでいますが、長くは続きません。このままでは遠からず、命を奪われることでしょう」

「っ……！」

突きつけられた事実……体は痛まないのに、心が痛む。

この身を挺してかばった緑谷が、しかし……結局また危機に陥っているという。しかも今度は、私はそこにいられず……盾になることすらできない。

こんな、どことも知れない空間で、歯噛みすることしかできない。『異能』に目覚めたあなたならば、本来なら、己の全てを力に変えて、窮地の主君に捧げ、それを脱する一助となることもできたでしょう……しかし今のあなたは、その『異能』すら失っている。体に残った僅かばかりの残滓によつて、この夢を見ることができているにすぎません」

それを聞いて、なんとなく……ここ最近見ていた、あの『夢』の意味が分かった気がした。

あれは……私の体が、そして『個性』が、その全てを緑谷に合わせ作り替えて……最適化させていたという意味だったんだ。

私を基準にはなく、緑谷を基準に。私よりも、緑谷に都合がよく、使いやすいように。

そして、いざという時には……最適化された私の『全て』を、緑谷に捧げて……私自身が、彼の力の一部になつてでも、彼を助けて、勝たせることができるように。

それが、『オール・フォー・ユー』を持つ者の力であり、宿命であり……私自身の意思でもある。

しかし聞く限り、今の私には……それすらできないという。媒介にすべき『個性』が、恐らくはあのナインとかいう『敵』に、奪われてしまっているから。

なら、もうできることはないのか、と思つたが……そう聞くと、尼僧は首を横に振つた。

「我らの『異能』は、そう簡単に奪って使えるようなものではありません。今は大人しくとも、あなたの手元になくとも……持ち主と、その主以外に尻尾を振るようなことはない。すぐにそれをあの男も思い知るでしょう。その時こそが、あなたの最後の反撃の機会です」
……何でかさつきからこの人、『個性』のことを『異能』って呼ぶけど……

超常黎明期とかその周辺にはよく通った呼び方だったらしいな……ひよつとして、時代が違う？

いや、そんなことはどうでもいい。

重要なのは、今の私に何ができるか、何をすればいいのか……だ。

「……どうすれば？」

「それは……」

☆☆☆

ナイン、ウォルフラム、キュレーター。

3人のネームドヴィランによって繰り広げられる、周囲への余波・被害など知ったことかとはばかりの戦いは……ヒーローも、雄英生も寄りつくことができない、恐ろしい規模の破壊を伴って続いていた。

金属が巨大な槍のようになって殺到し、全てを貫き、薙ぎ払い、押しつぶす。

巨大な鯨の異形が、時には衝撃波とすら呼べる超音波で、時にはその巨体から繰り出される圧倒的なパワーで全てを破壊する。

大空を支配する『個性』が、竜巻を、雷を、さらには吹雪や霧を操って、全てをねじ伏せんと、大自然の猛威を振るう。

巻き込まれるだけで死んでしまうであろうその戦いを……生徒達には、部下であるスライズ達の攻撃をしのぎながら、見ていることしかできなかったが……異変は、その時起こった。

「……ぐっ……!?!」

突如、ナインが胸を押さえて苦しみだし……それに合わせて、あれほど荒れ狂っていた風も、何もかも、ふっと収まった。

完全にではないが、ほとんど脅威にもならないレベルにまで。

(何、だ、これは……!? 『細胞障害』の反動がまだ……いや、違う……!)

「ナイン!」

「まさか……まだ副作用の克服が十分では……!?」

異変に気付いたスライス達が声を上げるが、当のナインは、その予想が『違う』と直感していた。

今まで幾度も味わった、『気象操作』の個性の反動である、細胞が死んでいく感覚とは違う。

今、自身を蝕んでいるのは……まるで、何かが自分の体の中で暴れているような、内側から食い荒らされているような……今まで味わったこともないような感覚だ。

しかもそれにともなつて、『個性』が上手く使えなくなつていく。風はどんどん収まっていき、爪弾や衝撃波を放とうとしても、バリアを張ろうとしても上手くいかない。

不思議に思いながらも……およそけん制か様子見のつもりでキュレーターが放つたのであろう、超音波によって……なすすべなく、ナインは吹き飛ばされてしまった。

「くそつ、このような無様を……一体、何が……!? まさか、あの少女の『個性』に、未知の副作用か何かか……」

「その通りだよ、この強盗殺人犯」
「っ!」

その瞬間、背後から聞こえて来た声に……ナインは驚きながら、とつさに振り向き……

がしつ、と、その頭を……わしづかみにされた。

半死半生……いや、ほとんど『死』の状態に至っているであろう永久が、そこにいて……血の気の引いて真っ青な顔で、獰猛な笑みを浮かべていた。

その手は、死にかけとは思えないほどの力で、ナインの頭をつかんで離さない。

「貴様、なぜその傷で……!?」

「うるさい……さつきと……返せ！」

その瞬間、ありえないことが起こった。

ナインが感じたのは……今まで何度もその身に覚えて来た感覚だった。他人の『個性』を奪い、我が物とする時の……他人の『個性』が、自分の中に入ってきて、馴染んでいく感覚。

苦しい人体実験を耐え抜き、その末に得た……他者から奪う側に立っていることを体現するかのような力。この世界の頂点に立つことを許されたがごとき、恐るべき力。

しかし、今感じているのは、それとは真逆だった。

他人の力が、自分の中に入ってくるのではない。今、これは……自分の力が、他人に流れていく。

「バカ、な……!?!」

自分の『個性』が、他人に……目の前のこの少女に、奪われている。

「ありえ、ない……!?! なぜ、こんな……お前も、同じ力を……」

「違うよ……コレは、私の力と……お前の力……! それが、合わさった結果だ……!」

謎の空間で、尼僧は、永久に語った。

「そろそろ、あなたの『異能』が……今の時代は『個性』と呼ばれているものですが……あの男の体の中で暴れ始め……そして、報いを受けさせることでしよう。我々の力は、主のため以外で使われることを決して良しとしない。むしろ、奪われた状況すら利用して、主のために己を作り替える」

「……作り替える……それって……」

『変容』……それこそが、あなたの『個性』の、もう1つの真骨頂。主のために、その身のあり方そのものを最善のそれに作り替える、全てを懸けた献身。あなたの意思がそこに沿ってある限り、たとえ離れたところにいようと、異能に染み着き、魂に刻み込まれた……我ら『奉生』が紡いできた意思がそれに応えます。望むのです、我の力となれと、そして、彼の力となれと。さすれば……」

「利子付けて、返してもらおうぞ……私の、力を！」

ナインの体の中で、永久の『個性』が変容していく。ナインの『個性』を、体の中から食い荒らし……取り込んでいく。

かつて、初代『ワン・フォー・オール』継承者の体の中で起こったことが、繰り返される。

2つの……いや、それ以上の『個性』が混ざり合う。原型をわずかにとどめたまま、全く別なものとなって……変わっていく。

そしてそのまま……あるべき場所へ……永久の体の中へ、戻っていく。

混ざり合い、ナインの制御を離れた『個性強奪』が……自分を強奪『させた』。

『オール・フォー・ユー』の、そして、永久の意思のままに……永久の力として。

「あり、え……ない……！」

自らの体の中に、最早『個性』が残っていない、空虚な感触と共に……ナインは、そのあまりの精神への負荷の大きさをゆえに……意識を手放した。

9つ持っていた『個性』を一度に抜き取られ……意識を保っていられなかった。

動かなくなったナインとは対照的に、永久は、ボロボロの体に緑色の光を灯して……ゆっくりと立ち上がる。

『爪ビーム』……『衝撃波』……『バリア』……『個性見破り』……『青ドラゴン』……『気象操作』……『個性強奪』……『細胞活性』……

そして、『オール・フォー・ユー』……！　こんなに持つてやがったのか、こいつ……！　名前適当だけど……。まあいい、とりあえず……！

不思議なもので、奪った『個性』の使い方は、何となくわかった。あるいはそれも、『個性強奪』の持つ力なのかもしれない。

エネルギーと『細胞活性』の合わせ技で、ひとまず応急処置的に傷を癒しながら……永久は立ち上がり、体が動くことを確かめる。

「おかえり、『オール・フォー・ユー』……じゃ、行こうか、私達の……ご主人様のところに！」

☆☆☆

力強い緑色の光にたたらを踏んだオーバーホールだったが……驚きはしたものの、焦っても困ってもいかなかった。

よくわからないことが起こってはいるが、今、緑谷出久は……目の前の少年は、半死半生であることに変わりはない。武器だった腕や足も失い、最早戦える状態ではない。

この光も、警戒こそしたものの、特にこちらに害になるような気配もなく——なぜか、やや嫌な気分になる気がしなくもないが——ただまぶしく、なぜか近づけないだけ。それも、先程から徐々に収まりつつある。

なら、それを待つて尋問を再開すればいい……そう、思っていた。そして実際に、急激に弱まっていった光が、せいぜい緑谷の周囲を照らす程度になったところで、オーバーホールは再び歩み寄ろうとして……

「人のご主人様に、何してんだこのクチバシ野郎」

——ゴロゴロゴロゴロ……ピシャアツ!!

「っ、が……!?!」

突如起こった落雷に、体を撃ち抜かれ……何が起こったのかも分からないまま、どう、と倒れ伏すこととなった。

わけもわからず、体は動かなくなり……がつん、と頭から地面に落下する形で倒れる。気絶する寸前で、どうにか繋ぎ止められていた意識が……その拍子に、あっけなく沈んだ。

が、その更に次の瞬間、強風が巻き起こってその体を浮かせた。

浮かせたまま、連れ去っていき……その、飛んでいった先で、待ち受けていた永久が……アイアンクロウの要領で、オーバーホールの顔をわしづかみにする。つい今しがた、ナインにしたように。

そして……今しがた、手に入れたばかりの『個性』を、容赦なく奮った。

「もらうぞ……その、『個性』」

数秒後、気絶したオーバーホールをその場に投げ捨てた永久は……あまりに突然のことに、呆気にとられている緑谷に、すたすたと近づいていく。

しかし、その緑谷の表情は……目の前に立っているのが誰なのかをきちんと認識するのに伴って、安堵と歓喜が湧き出してきて……ぽろぽろと涙までこぼれ始める。

それと永久は、みつともないとは微塵も思わなかった。

なんなら、自分とてそうしたい気分だったが……その前にやることがある。

永久は、離れたところに置かれたままになっている、緑谷の右腕と左足を、風を起こして手元に持つてくると……その手を、緑谷とそれらに触れさせて、

「ちよつと痛いよ、我慢して」

「えっ……っ？」

——バツン！ バツン！

「っ……っ！」

一瞬、鋭い痛みにも歯を食いしぼる緑谷。

「もーっおまけに……っ」と

——バツン！

三たび響く、その特徴的な音。こんどは、痛みはない。

すぐに痛みも引いたので、見て見ると……緑谷の腕と足は、元通りになっていた。

感触もある、動かすこともできる。それどころか……ボロボロに破損していたはずのコスチュームすら、修復されて元通りになっていた。

さらに2度、『バツン！』という音が聞こえて……視線を上げると、永久もまた、体の負傷も、コスチュームの破損も修復された姿になっ

ていた。

ことが急に動きすぎて、正直なところ、緑谷の頭はあまりついていない状態になかったが……それでも、この目の前の光景が、今はただ嬉しく思っていた。

だから……ほとんど勝手に、口が動いていた。2人共。

「……おかえり……永久……！」

「ああ。ただいま……ご主人様」

第138話 狂気と執念の大怪獣

それまで猛威を振るっていたナインが、突如として退場した。

キュレーターの一撃で吹き飛ばされ、警戒し続けるも、それきり帰ってこず、音沙汰もない。

一度、全く関係ないところに落雷が起こった——自然の落雷ではありえないので、恐らくナインの仕業だろう、とは誰もが思った——ものの、それ以外何も起こらない。

ウォルフラムはドクターから、ナインの『個性』は強力な副作用があるタイプであり、あまり大規模に使用はできないと聞かされていた。どちらかと言えば、因子が適合して使えるようになった、AFOの『個性』、そしてそれによつて奪った『個性』の方を注意すべきだと。だからこそ、枷などありはしないとばかりに『気象操作』を使っていたのに、むしろ驚かされたのだが、ひよつとしたら別に克服したわけではなく、時間制限が伸びただけだったのかもしれない、と、今のこの沈黙から思い直す。

ならば当初の予定通り、戦えなくなったナインを回収するだけだと、キュレーターと共に追おうとするが、それをさせまいとカメラ、マミーが立ちはだかる。

自分達のリーダーであるナインに何かあったのなら、助けなければならぬと、2人が足止めに回つてスライズが様子を見に行こうとする。当然ながら、ウォルフラムとキュレーターは、それを蹴散らして目的を達成しようとする。

もちろん、その際に周りにいるヒーローや、生徒達が巻き込まれようが、そんなことはお構いなしというつもりで。

しかし……その時だった。

——ドツゴオオオオオン!!

「!?!」

突如、ナインが飛んでいった方向にあった瓦礫の山の一部がはじけ

飛び、崩れ……るかと思いきや、なんとそのまま、起き上がるようにうごめきだした。

いや……実際に起き上がったのだ。瓦礫で形作られた……人の形をした、何かが。

誰もが『何だアレは?』と疑問を浮かべ、困惑する前で……その全容がようやく明らかになる。

「……常闇の……黒影?」

『ハア!? 何言ツテンダヨ、俺ハココニイルゼ?』

「あ、ホントだ……でも似てない? くちばしあるし……」

「でも、腕四本あるね……アレ、何……」

——オオオオオオオオ!!!

それは咆哮し……突如として、その4本あるうちの腕を、思い切り薙ぎ払うように動かした。

「なっ——!?!」

幸いそれは、誰かに当たるような軌道ではなかったものの……地面の瓦礫を盛大に破碎し、まき散らすように飛ばしたため、それに巻き込まれそうになった生徒達が、すんでのとところでそれを回避する。

しかし、その位置の一番近くにいたスライスが、それを回避し損ねて……瓦礫の1つが頭に直撃し、吹き飛ばされてそのまま動かなくなっただ。

「なっ……スライス!?!」

「ゴイツ一体……くそっ、マミー、スライスを回収しろ!」

そう言つてキメラは、その間に囷、もしくは盾になるつもりなのか……瓦礫の怪物の前に立ちはだかるように動く。その瞬間、怪物の顔が……目らしきものは見当たらないが、キメラの方に向いたように見えた。

マミーは、倒れたまま動かないスライスに駆け寄ろうとして……しかしその瞬間、ふいに近づいてくる気配を感じ、とつさにミイラ達を差し向け、自身も剣を構えて警戒する。

しかしその瞬間、ちょうど自分とその『気配』の間に割り込んだミイラ達が……凄まじい衝撃波に吹き飛ばされて一掃された。

「なっ……!!? これは、ナイ……」

「セントルイススマッシュユ！」

「がはあっ!?!」

そして、その向こうから急襲してきた、緑谷の蹴りの一撃が顎に直撃し……困惑のまま、キレイに意識を刈り取られた。ドサツ、とその場に力なく倒れ込む。

その横に着地した緑谷に、『衝撃波』でミイラを一掃した永久が追いつく形で合流した。

「あつ、と……思わず蹴っ飛ばしちゃったけど、こいつってさっきの奴の仲間だよね？」

「ああ。こっちの女も……あー、コレはあのバケモンの攻撃か、その余波食らった感じか」

「おーい、緑谷！ 栄陽院！ 速えってー！」

そしてそのさらに後ろから、瀬呂や峰田、砂藤や尾白、宍田や鎌切などといった面々が追いかけてくる。

その場にいた他の生徒達が、急転を繰り返す状況について行けず、啞然としている中、いち早く思考を取り戻した飯田が、緑谷達のところに駆け寄って説明を要求した。

「緑谷君！ 栄陽院君！ 無事で何よりだ……しかし、いったいこれはどういう状況だ？ あの……何と言ったものか、瓦礫の怪物は？ 説明できるか？」

「ああ、うん、一応。アレは……」

遡ること……数分前。

緑谷と永久は、永久が新たに手にした……というか、奪い取った『分解と修復』の力で傷を治し、さらに緑谷はエネルギーを永久から補充することで回復した。

その後、ナインとの戦いで倒れ、気絶している生徒達を手当した。

幸い、そこまで重傷な者はおらず、応急手当とエネルギーの補充だけで十分に動けるようになった。いずれも、『分解と修復』を使うまでもない程度のものばかりだ。

それを知って、永久はほっと息をついていた。

彼らが無事だったから、というのものもあるが……ここまでの『個性』を使った時の感覚で、あることに気づいていたからだ。

現在、永久の個性『オール・フォー・ユー』は、ナインの個性と強制的に融合し変質し、その上で自分を『強奪させる』ことで永久の元に戻ってきた。そのため、永久は今、ナインの持っていた全ての個性を奪っており、使うことができる。

さらにそれを利用して、先程オーバーホールからも『個性』を奪ったため、無力化と同時に、治癒系・修繕系個性としては最高峰であろうそれを手に入れた。それを使って、緑谷と自分の体を万全の状態にまで直した（誤字にあらす）。

だがその過程で永久は、他者から奪った『個性』を使うのは、酷く難しく……使いこなそうとすると、出来なくはないが、その分『エネルギー』を消費してしまうようだと思っていた。『個性』が強力であるほど、複雑であるほど、消費量が多くなる。

まだまだ残量に余裕はあるとはいえ、無駄遣いは避けたいと思っていたのだ。

一応、コスチュームが破損したりしていた者については、直しておいたが。

ほどなくして全員が意識を取り戻し、さあ戻って皆に合流しよう……という段階にまでなったところで、予想外の事態が起きた。

なんと、気絶していたナインが起き上がり、その『個性』を使って攻撃してきたのだ。

咄嗟に反応した永久がバリアを張ったおかげで、放たれた『爪弾』が誰かに当たることはなかったが、『個性は奪ったはずなのになぜ？』という当然の疑問が、永久の脳裏によぎる。

確認もかねて、永久も『爪弾』を使い、ナインを攻撃。

ナインは今度は、バリアを使ってそれを防ぎ……しかし、続けざま

に放たれた、永久の『衝撃波』を防ぎきれず、粉々に砕かれ……吹き飛ばされた。

そこで、周囲の土煙が晴れたことで見えるようになったのだが、ナインの姿は、色は白く、やせた、死ぬ寸前の重病人のような姿になっていた。

ナインは『個性』使用の反動で細胞が死滅するリスクがあった。

そのカバーのため、『細胞活性』と『無限エネルギー』を使って、ウオルフラムとキュレーターと戦っていたわけだが、大きな誤算があった。

そもそも『無限エネルギー』は、事前に十分にエネルギーを補充しておくことが前提となる……いわゆる『溜め込む系』の能力である。

そして、『個性強奪』で、ナインは確かに一時的に『無限エネルギー』を奪っていたが、永久がため込んでいたエネルギーまで奪えたわけではなかった。当然ながら、ナインは永久のように、事前に暴飲暴食してエネルギーをため込んでいたわけでもない。

そんな状態で、加減すらわからないままに、全能感に酔って併用を続けてしまった結果……またたく間にエネルギーの枯渇と、『自食作用』オートファジーまでも引き起こし、肉体的にも極限まで衰弱してしまっていたのだ。

それでも、執念で永久達に攻撃を仕掛け……あえなく返り討ちになった。

ここまでは、結果的にナインが自爆しただけと言っているわけなので問題ないが……問題は、なぜナインが『個性』を使ったか。

永久が『お前そんな技使えたっけ?』と、起き上がったクラスメイト達に問い詰められ、『いや何か色々あつて使えるようになったっぽくてよくわかんないけど便利だから使ってる』と、説明にもなっていない説明をしている間、ふと緑谷は、1つの可能性に思い至っていた。(ひよっとして……『残り火』みたいなもの……かな?)

それは、『平和の象徴』の真実を知っている緑谷だからこそ思い至った可能性。

今現在、自分に『ワン・フォー・オール』を譲渡したオールマイト

は、その『残り火』だけで戦っている。

それと同じことが、今、ナインに起こっていたのではないかという予想。

『オール・フォー・ワン』によって『個性』を奪われた者は、その『個性』を使えなくなる。しかし、すぐに使えなくなるのか、少しの間『残り火』が灯るのか……それはわからない。

さらに言えば、永久曰く、今彼女の中にある『個性強奪』の能力は、『オール・フォー・ユー』が融合して変容したものだ。オリジナルがどうであれ、そういう形に変わって、そうなっている可能性はある。

加えて言えば、それは『ワン・フォー・オール』の元となった個性でもあるのだ。『ワン・フォー・オール』がそういう性質になっている以上、可能性はなくなるはない。

もつとも、思考したところで結局答えは出ないので、まあいいか、と緑谷が思いかけたところで……全然よくないことに気づく。

もう1人いたからだ。永久が、『個性』を奪った状態で……放置している『敵』が。

(まずい、ということとは……オーバーホールも、まだ『個性』が……)

——パリン。

——バツン！ バツン！

そんな不吉な音が聞こえた直後……

「まだだ……まだ、終わっちゃ……いない……！」

狂気の融合によって生まれた、瓦礫の巨獣が、立ち上がった。

その瞬間を、一部始終を見ていたわけではない緑谷は、それを見ていた他の生徒達の証言をつなぎ合わせて……そして、何が起こったのかを悟った。

気絶したと思われていたオーバーホールが息を吹き返し、死力を振り絞って……恐らくは残り火であろう『個性』を発動し、自身の体を修復した。

そのあと、偶然『衝撃波』で自分のいる方に飛ばされてきていた、瀕死のナインを……あろうことか、『分解と修復』で、自分に合体させた。

そうして、四本腕の異形の姿となったオーバーホールは、さらに懐から、注射器のようなもの……『個性強化薬』イデオ・トリガーを取り出して自身に注射し、個性因子を暴走に近い形で強化する。

そして、周囲の瓦礫を取り込んで、瓦礫の巨獣となって……立ち上がった。

身動きするだけで周囲に破壊を振りまくその巨獣から逃れるべく、縁谷達はその場から駆け出し……

そして、現在に至る。

「つまり何？ あのバケモンは、『オーバーホール』とかいうネームドヴィランが『個性』を暴走させて、しかも他の人間と物理的に合体して、さらに瓦礫とか取り込んで巨大化した姿ってこと？」

「付け加えて言うなら、まともな思考回路残ってつか結構微妙だな。それ以前までにかなりダメージ受けてたってのもあるけど、『イデオ・トリガー』使ったつてのがヤバイ。あれ、かなり精神的にも負担あつて、思考能力弱る割に妙にハイになったりするらしいから」

「……そういや、ファットガム事務所に『ワーキングホリデー』行つた時に戦つた犯罪者がそんな感じだっけな……つてことは、アレ無差別に暴れる可能性があるつてことかよ!？」

「マジかよオ、何だよそれ、もう勘弁しろよ、お腹いっぱいだよネームドヴィランは……」

記憶を掘り起こしながら呟く切島と、そろそろ泣きが入ってきた峰田。

視界の先にいるオーバーホール……の、なれの果ては、先程からさらに異形と化している。

(……つてか、ちよつと見ない間にまたバケモン度増しとる!?)

その姿は、鳥と狼が合わさつたような頭部に、牛のような蛇行した角が生え、蛇のような長い尾を振り回し、地を踏みしめる足は、猛禽のような鋭い爪に、ネコ科の肉食獣のようなしなやかさ、強靭さを併せ持っていた。

さらに、4本だった腕は6本に増え、内2本は、背中から生えた鳥

の翼と一体化しており……いわゆる『翼腕』とでも言えそうな形になっていた。

残り4本のうちの2本は、人間のそれのような形状。残る2本は、5本指の猛禽のようなそれになっており、地面につくほど長い。実際に地面につけたら、4足歩行の獣、あるいはケンタウロスのような動きすらできそうである。

どうやら、足止めのもりで立ち向かったキメラを瞬殺した上で、そのまま、ナインと同様に取り込んでしまったらしい。血だらけのコートの切れ端だけが、地面に落ちている。

複合型の異形型であるキメラを取り込んだ成果、外殻であろう瓦礫の巨体がそのまま、異形の姿となり、最早原型などわからない大怪獣と化していた。

「……あれを相手にするには、こつちも巨大合体ロボが要ると思う。もしくは光の国出身の銀色の宇宙人とか」

「いつもながら言ってること分かんないよ栄陽院。でも確かにアレ大きさが違い過ぎでしょ……ロボは無理でも、Mt.レディとか来てほしい」

「ま、まままま、ままま……」

「やべえ、また峰田が壊れた」

「ホント職場体験で何見たんだアイツ……」

「ヤオモモ、マジ〇ガーZ作ってー」

「無茶を言わないでくださいまし……栄陽院さんの助力があっても多分無理ですわ。というか、あの怪物……何をしているのでしょうか？」

「こちらに攻撃してくる様子はありませんわね？」

オーバーホールは、キメラを取り込んだ後……きよろきよろと周囲を見回すような動作をしている。必然、生徒達やヒーロー達の姿も見えているはずだが、襲い掛かってくる様子はない。

何をしているのだろうか？ 危険がないのなら放っておいても大丈夫か？ いやあの凶体だ、動くだけで破壊を振りまくのなら十分危険だ。そんな会話が交わされ、この後どうするか生徒達が考えている中……ふいに、オーバーホールが動いた。

——ズガアアアアアアン!!

「……………?!」

振り下ろされた腕。そこを中心に、蜘蛛の巣状にひびが……どころではない。地面が砕け、めくれあがらんばかりの破壊が巻き起こった。

次いで、他の場所にも同じように巨腕を振り下ろす。また、クレーターができる。

先程までの沈黙が嘘のように、咆哮し、オーバーホールは破壊を振りまき始めた。

が、その中で……咆哮以外のものを聞いていた者がいた。

今は大人しいとしても、何かあつてはいけなないと、『複製腕』で目と耳を増設して様子をうかがっていた障子が。

「……エリ、だど?」

「!? 障子君、今なんて……」

「あの怪物……の、頭のあたりからだと思うが……暴れ出す直前にそう聞こえた。確か、この病院に入院している少女の名だな? 緑谷と栄陽院が面会に行っていると聞いた……」

それを聞いて、緑谷は直感した。

今までなぜ、オーバーホールは大人しくしていたのか——近づいてきたカメラへの迎撃や、もともとから近くにいた自分達への攻撃を除けば、だが——そして、どうしてあののように、無差別に暴れ出したのか。単にオーバーホールの思考力が、『イデオ・トリガー』で低下しているだけではない。あれは……

「まずい、アイツを止めなきゃ!」

「と、止めるったって緑谷!? あんなデカブツをどうやって……俺の電撃も、下手したら爆豪の爆破や轟の氷でも止まらねえぞ!? 取り込まれる前のあの獣ヤローにだってろくに効かなかつたし」

「ああ!? なめてんじゃねーぞあんなもん余裕で——」

「はいはい爆豪君ええからちよつと黙つとこ? な?」

「ける。上鳴ちゃんも不用意に爆豪ちゃん巻き込まないでちようだい。毎度のことながら脱線するわ」

「わ、悪い……でも実際緑谷、あんなん止めようがねえぞ？ その、さ……『イディオ・トリガー』って時間制限あるんだろ？ それまで待てば、反動でアイツ勝手に自滅するんじゃない……」

「でも、それ待ってて大丈夫かな？ もしあれが、制限時間になる前に、病院の敷地の外に出ちゃったら……被害が……」

「それじゃダメなんだよ、上鳴君、芦戸さん！ アイツの狙いは壊理ちゃんだ！ あいつ、壊理ちゃんを探してるんだ！」

緑谷の言葉を聞いて、彼女を知っている面々ははつとする。特に、彼女を救出する作戦に直接参加した、永久、切島、八百万といった者達が。

「そりゃそうか……アレの元がオーバーホールなら……いや、多分あいつそもそも、壊理ちゃんを取り戻すためというか、攫うためにここに来たんだろうな」

「思考回路が鈍っている今、元々持っていた目的に執着して……いえ、待ってください……まさか！ そういうことですか緑谷さん!？」

と、八百万が何かに気づいて青ざめる。

加えて、横で会話を聞いていた者達のうち、聡い何名か……轟や爆豪、拳藤や取陰、骨抜や青山といった面々もはつとする。そして、同じように……冷汗を浮かべて青ざめた。

「……おいデク、そのガキ今、どこにいる？ お前とデカ女が避難させたんだろ？」

「緊急避難用の……地下シエルターの中」

「そうか……恐らくあの野郎、緑谷と栄陽院がそこに避難させたことに気づいてやがるな。そして、それを探そうとして、あんなふうに殴りまくってるわけだ」

「ちよつと待て……だとしたらアイツ、ああやってるのは……地下シエルターぶつ壊してその壊理って子を掘り出すために、あんなふうにかスカ地面殴ってるのか!？」

「や、やばいってそんな……シエルターの中には、一般人の患者さんや病院スタッフが何百人って避難してるのに、そんなことになったら……」

「崩落で死者が大勢……というか、その壊理ちゃんだつて死にかねないな」

「そこまでは頭、回ってないんだらうね……薬の副作用で☆」

オーバーホールは、地面を……正確には、地面の中に設置されているシエルターを攻撃して、破壊しようとしている。しかし、その位置まで知らないがために、ああして手当たり次第に壊しているのだ。

今はまだ見当はずれな場所を攻撃しているが、いずれは本当にシエルターが埋設されている場所にまで行ってしまいかもしれない。そうなれば、死傷者は100や200ではきかないだろう。

だが、助けてくれるヒーローはいない。外部から応援に駆けつけてくれたヒーロー達は、皆、戦いの中で倒れてしまった。死者こそ出ていないが、復帰はできないだろう。

ここで動けるのは……アレを止められるのは……自分達しか、いない。

『やるしか、ない』

ある者は闘志を漲らせ、またある者は冷静に判断した結果として、またある者は弱い心を必死に鼓舞して、

ヒーローの卵たちは、罪のない人々の命を守るために、戦う決意をした。

第139話 GIANT KILLING

オーバーホールとの戦闘は、すぐには始まらなかった。

先のキメラの時の反応から察するに、自分に近づいてくる、あるいは敵対行動をとるような存在がいなければ、オーバーホールは恐らく近づいてこない。それだけの理性が、もう残っていない。

ゆえに最初、永久達はオーバーホールの破壊行動を放置することにした。見当違いの場所を破壊しているうちは、だが。

地下シエルターに近づいて移動するようなら、その時は迎撃せざるを得ない。しかし、ギリギリまで様子を見て……時間切れで力を失うまで待つ。

それが望み薄だということもわかっている。そしてその間に、もし戦うことになった場合に備えて、作戦を練る。

雄英高校1年A組、B組、そして編入最有力の普通科2人も加えた全員の力で……シエルターの中で、悪夢が終わるのを待っている人々を、絶対に守り抜くために。

そして、その時はやってくる。

「……あー、こつち来たー……ちくしょー」

「覚悟決めな上鳴！ ウチらの手に、病院の人達皆の命かかってんだから」

「やれるだけのことはやった。作戦も、最善と言えるものを考えた。ならばあとは、俺達にできる全てを尽くして……あの巨神を倒すだけだ」

後に引きこそしないものの、さすがに弱音が漏れてしまう上鳴。それを耳郎が叱咤し、常闇が鼓舞もかねて淡々と述べる。

「最善の作戦……そうだね。ちよつと怖いけど、これが一番確実で……効率的だ」

「戦力の逐次投入は愚策というのは、古今東西どこでも言われていることだからな。加えて、敵の『個性』を考えた場合、中途半端に損傷を与えても修復されてしまう可能性が高い。なら……再生する暇を

与えないくらいに、一気に叩き潰さなければならぬ」

緑谷と飯田がそう続け……締めくくるように、八百万と拳藤、そして永久が、

「皆さん、用意はいいですわね!? 勝負は一回きり……雄英高校ヒーロー科1年(予定含む)、全員の全力をもつて、あの怪物を止めます!」
「練習する暇もなし、ぶっつけ本番、A組B組普通科混成、初の合同作戦! 不安なんかあつて当然だよね……でも、やるっきゃないんだ、覚悟決めていくよ! じゃ、発案者、締めて」

「あいよ……よおおし! 野郎共及び女性諸君! やろうとかやれるとかまどろっこしいことはもう言わない! 今私達がやらなきゃいけないことは……いつも私達がやってることだ! 敵が強かろうが、こっちはそれを超えていけ! 雄英高校、校訓!!」

「Plus Ultra!!」

☆☆☆

一步を踏み出した瞬間……どぷん、と、巨獣の足が地面に沈み込む。

「!?!」

骨抜の『柔化』によって、底なし沼のごとく変わった地面に足を取られ、バランスを崩す。

しかしその瞬間、骨抜は逆に『柔化』を解除。足から下の地面の硬さを復活させ、足を固定する。

「よし、今! 芦戸!」

「オツケー! 濃度・粘度MAX! 『アシッドベール』!」

さらにその直後、骨抜が右足へ移動してそれに触れ、『柔化』を発動。同時に芦戸が左足に、極限まで濃縮した酸を放ち、ドロドロに溶かしてしまう。

反対側の足も、泥のように柔らかくなったことで、バランスを崩して盛大に倒れ込む。倒れ込んだ先の地面がまた『柔化』していて、沈み込む。

「成功……！　そして、俺の『個性』で柔らかくできたってことは……このデカブツ自体は『生物』にカテゴライズされてない。あくまで装甲扱いってわけだ」

しかしさすがに、いつまでもいいようにやられてはくれない。即座に腕の2本を横に伸ばし、柔らかくなくなった範囲外の地面に手を突く形で、オーバーホールは体を支えた。

「やはりそう来るか……轟君！　凡戸君！」

「おう……『穿天氷壁！』」

「行くよ！　『グレースコール！』」

その着いた腕2つに、右からは轟の巨大な氷壁が、左からは凡戸の『セメダイン』が大量に襲い掛かり、動きを止める。

しかし、いずれも、素の身体能力のキメラにも通用しなかった手だ。バランスを崩して上手く力が伝わらなくなっているとはいえ、すぐに抜け出されてしまうだろう。

だが、拘束はわずかな時間だけで構わなかった。その間に、さらに次なる手が打たれる。

「よっし……常闇！」

「心得た……力を開放しろ、『黒影』！」

『ド派手ニ……行クゼエツ!!』

常闇の号令と共に、夜の闇の中で最大限の力を発揮する『黒影』が、その力を開放し……巨大化してオーバーホールに突撃していく。

凄まじいパワーで真正面からぶつかった『黒影』は、咆哮と共にオーバーホールをなぎ倒し伸び切って脆くなっていた腕2本を、拘束を振りほどくよりも早く粉碎した。

しかし、オーバーホールもすぐに起き上がり、残る4本の腕で反撃を試みる。鋭い爪を持つ2本と、翼腕になっている2本。それらを叩きつけようとして……しかし、下側の2本のうちの1本が、塩崎の『ツル』によって拘束されて持ちあがらない。

ただの『ツル』だけなら引きちぎられていたかもしれないが、巻き付けられているそれは、八百万が作った超合金製の鎖を巻き込んでいるため、拘束能力は倍増している。

加えて、もう1本の腕には、2匹の青いドラゴンのようなものが巻き付き、噛みついていてる。そしてそのまま、締め上げて砕き、食いちぎってしまった。

「うっわー……何か意味わかんないことできるようになったね、永久」
「ほめ言葉として受け取っとく」

残る2本の翼腕は、『黒影』が普通に受け止め、力で拮抗している。その間に、芦戸と骨抜が、塩崎が拘束している腕の所まで駆け寄り、その腕を『酸』と『柔化』で根元から落とした。

さらにその隙に、足元（半ばからもがれているが）にも手が入っていた。

吹出が放った『ツルツル』『スベスベ』という文字がいくつも地面に張り付き……押し込まれてそこに足をついたオーバーホールは、効果音のおかげで極度に『滑りやすい』状態になっているそこに足を取られ、転倒する。

その決定的な隙に、『黒影』はマウントを取って猛攻を加える。巨大化した腕を、爪を何度も振り下ろし、残る腕2本に加え、胴体の大部分も粉碎した。

だが、オーバーホールは、最後に残った胴体……そこから生えていた尻尾を勢い良く振るい、その反動で辛くもマウントから逃れる。胴体の大部分が粉碎され、拘束されていない状態になったことが逆に幸いしたようだ。

そして、バツン！ と音が鳴る。

その周囲にあった瓦礫を再び取り込み……欠損した体を再生させる。今の一瞬では、さすがに元通りとはいかなかったようだが……それでも、翼腕2つと、猛禽の爪の腕2つは再生していた。残る腕2本と足は再生する暇がなかったようだが、質量を考えれば十分すぎる戦闘能力を取り戻したと言えるだろう。

ただ惜しむらくは……それすらも、A組の頭脳、八百万の予想の範疇だったことだが。

「今です！ 小大さん！ 庄田さん！」

「ん！ 『解除！』」

「了解した！ 『ツインインパクト』！」

その瞬間……オーバーホールの体のあちこちで爆発が起こった。それも……内側からはじけ飛ぶような形で……しかも、炎は上がらないという不自然な爆発だ。

仕組みは簡単である。オーバーホールが倒れ込んだ場所の周囲には、庄田があらかじめ殴りつけた上で、小大があらかじめ『サイズ』で小さくしておいた瓦礫が無数に散らばっていた。

再生する時、オーバーホールはそれらを巻き込んで体を作ってしまった……小大が『サイズ』を解除したと同時に、瓦礫が元の大きさに戻って、周囲を押しわけ、はじけ飛んだ。更に、同時に庄田の『ツインインパクト』が発動し、衝撃がまき散らされ……それも加わって、破壊が起こった。

結果、再生したばかりの体は、たちまち飛び散って、先程よりも小さくなってしまった。先程、九死に一生を得る切り札となった尻尾も、空しく爆散してしまっている。

そしてそこに……『無重力』で自分を軽くした麗日が、蛙吹に運ばれて素早く近づき……

「お茶子ちゃん、行ける？」

「まかせて！ このくらいの大きさなら……浮かせる！」

一瞬、すれ違いざまに指先の肉球で触れる。

巨大な瓦礫の山が、融合した1つの物体として認識されているオーバーホールの体は、その瞬間、重さがゼロになって……ふわりと浮き上がった。

すぐさま蛙吹は麗日連れてそこを離れ……

黒影が腕を伸ばしてつかみかかり、思い切り……放り投げる。

「よしやった！ これで……あいつはもう、周りに取り込むものはない！」

「できれば真上に放り投げたかったが……位置と体勢が悪かったか。角度がついた。だが、落下さえしてこなければ構わんだろう」

「でかした麗日、常闇！ 麗日、『無重力』はもうちよつと持たせて！

者ども！ 集中砲火……撃てエエエ!!」

永久の号令で、遠距離攻撃系、あるいはそういう使い方ができる『個性』の持ち主が、一齐に、宙に浮いているオーバーホール目掛けて攻撃していく。

耳郎の音波、鱗の鱗、青山のネビルレーザー、角取の角砲……それらが当たって、空中に浮いたまま、なすすべのないオーバーホールの体を徐々に削っていく。

このままではまずいと思ったか、オーバーホールは体を構成する瓦礫を弾丸に変えて吐き出して反撃してくる。しかしそれも、大部分は遠距離攻撃と相殺される形で撃ち落とされ、残ったものも尾白や鎌切、穴田や回原といった前衛が叩き落とし、打ち払い、円場が空気の壁で防ぎ、後衛を守り抜く。

瓦礫を吐き出したことで余計に体積が減ったオーバーホールは、最後の反撃とばかりに……口を大きく開き、そこに赤い光を集中させる。カメラの『個性』……その必殺技とも呼ぶべき破壊光線を放つ。

「よし……ようやく俺達の……」

「出番ってわけだなア！」

だが、その前に立ちほだかるのは……A組、B組、それぞれで最堅の盾。

全身を全力で『硬化』させた切島と、全身を鋼の塊に変えた鉄哲の2人。

『安無嶺過武瑠』——ツ!!!」

「なめんじゃ……ねえぞオオオ!!」

角度がついたことで、むしろかえってクラスの皆を守りやすくなっていた。その背の後ろに学友達を退避させ……真正面から1歩も引かず、2人は破壊光線を受け止める。

激流が岩にたたきつけられるがごとく、2人に当たった光線は収束を散らされて弾け、その身を傷つけること叶わない。もちろん、その後ろにいるクラスメイトらも。

そしてその間にも、他の面々の遠距離攻撃は続き……ついに、オーバーホールの体はその異形の首1つとなってしまうた。

そして、それを待っていた面々の……最後の攻撃のG○サインが出

される。

「よし……緑谷！ 爆豪！」

「うん」

「ツシヤア！」

「取陰！ サポート！」

「はいよー！」

手のひらで爆発を起こして爆豪が飛翔し、緑谷はそれを追うように跳躍する。

その途中、空中に浮いているのは……取陰が『トカゲのしっぽ切り』で飛ばした無数のパーツたち。緑谷はそれを足場にして、空中で体勢を整える。

その間に、高速回転しながらオーバーホールの横合いに到達した爆豪が……ためにためた一撃を解き放った。

「ハウザアアア……インパクトオ!!」

合宿の『個性伸ばし』によってさらに火力を増した爆豪の一撃は、瓦礫の外殻を粉々に粉碎し……中に潜んでいた、オーバーホールの本体をついに露出させる。

キメラとナインを取り込み、6本腕に獣の特徴を発現した異形と化しているオーバーホールは、血走った目で、今の一撃を放った爆豪を睨む。

その6本の腕のうちの2つは、瓦礫の巨獣の時と同じ、翼腕になっていて……それを羽ばたかせ、オーバーホールは爆豪に向き直った。

「邪魔を……するなアアア!!」

瓦礫の装甲がなくなつた代わりに身軽になつたオーバーホールは、その、触れれば即死と言つていい凶悪な手のひらを、爆豪目掛けて突き出してきた……

『集光屈折ハイチーズ』!!」

「……っ……目があぁ?」

取陰のパーツの1つに捕まって、いつの間にかその眼前に忍び寄っていた葉隠の目眩ましの閃光をモロにくらい、視界を奪われる。

そして、『気象操作』で起こした暴風に乗って飛び上がり、隙だらけ

のその背後に迫っていた永久が……その背中に触れた。

——バツン！

その瞬間、『分解と修復』により、オーバーホールは6腕の異形から……元々の姿である3つの体に戻った。オーバーホール自身のそれと、キメラ、ナインの3人分の体に。

それを待つていた緑谷が『黒鞭』でキメラとナインを絡めとり、地面に向けて投げつける。そして、残ったオーバーホールには……

「カリフォルニア……セントルイス……スマッシュユー！」

回転をつけて放ったかかと落としを空中で炸裂させ、地面に叩き落とす。

奇麗に入ったその一撃で意識を刈り取られたオーバーホールは、落下して地面に叩きつけられる直前……柳の『ポルターガイスト』で浮かせられ、激突を免れる。同じく気を失っている、キメラとナインも同様に。

「拘束ー！」

そしてトドメに、宙に浮いて無防備な3人を、残る待機していたメンバーが拘束する。

既に体力を使い果たしているナインは、瀬呂が『テープ』でがんじがらめにして拘束。その際、着ている特殊そうなスーツが危険かもしれないと予想し、黒色が同化して操作することで脱がせ、その上で拘束した。

下手な拘束は馬力で解除してしまえそうなキメラについては、峰田が『もぎもぎ』を体中に張り付けて動け無くした上で、『捕縛布』を巻き付けて心操が拘束。その上からさらに、八百万が作った鎖でがんじがらめにした。

最も拘束が難しいオーバーホールは、腕以外の部分を『もぎもぎ』と『テープ』で拘束した後、あらかじめ作っておいた拘束具に泡瀬の『溶接』を組み合わせ、腕ごと固定し、手のひらを何にも触れさせないような形にすることで、『分解と修復』を封じた。

こうして、付け入る隙を与えない連携攻撃で畳みかけ……終わってみれば、集中していた彼らは気づいていないだろうが、ほんの5分足

らずの出来事。

ネームドヴィラン『オーバーホール』は、雄英高校1年の、ヒーローの卵たちの手によって……再び拘束され、その野望は潰えることとなった。

こうして、思いがけず始まった、永久達の、物騒で、危険で、しかしそれでいて……大切なものをつかむことにつながり、また貴重な経験を積むことができた夜は……ようやく終わったのだった……

……と、誰もが思っていた。

☆☆☆

「おったまげたな……勝ちちゃったぜ、あのガキ共……オーバーホールによ」

「袋叩きの上、戦略勝ち……なんて評価はできねえな。なるほど、世間の評判通りの『金の卵』だ」

離れたところからオーバーホールと生徒達との戦いを見ていた、ウォルフラムとキュレーターは、感心したようにそうつぶやいていた。

回収するはずだったナインが、オーバーホールの『個性』で取り込まれてしまったと知った彼らは、とりあえず合体したまま帰って帰るか、という結論に達し、生徒達との戦いで、あるいは『イデオ・トリガー』の時間切れを待つて疲弊したところを叩く作戦だった。

しかし、予想に反して生徒達が勝利を収めたばかりか、合体していたナインを引きはがしまでして、無力化・拘束までやってのけた。これにはさすがに、ウォルフラム達も予想外だと認めざるを得なかった。

「ま、好都合ではあるな。これでオーダー通り、ナインを回収できる。無力化する手間も省けた。それに……何人か、面白そうなのもいる。ついでにドクターへの土産にするのもいいな」

強力そうな、ドクターやAFOが好きそうな『個性』を持つ生徒に……とりわけ、事前に聞いていた『最悪の個性』を持っているはずの、永久に目をつけてニヤリと笑うウォルフラム。

見ている限りだと、オーバーホールやナインのものであるはずの『個性』を使っている。一体何があつてそうだったのかはわからないが、いずれにせよドクターが喜びそうだ。

「……確かにな。俺も今回は、仕事以上のことはする気はなかったんだが……売りに出したら高く売れそうなのが何人かいるな。東洋人は今人気があるし……雄英生つてブランドがあれば、いい値段がつきそうだ。いけそうなら、何人が攫ってくか」

一方でキュレーターは、いつか取陰を狙ったある『敵』のように、人身売買の商品として生徒達に目をつけ、誰を狙うか考え始めていた。

集団戦法とはいえず、ネームドヴィランを無力化するほど優秀で、見た目もいい。売ればいい商売ができそうだと。

「さて、んじやそろそろ行くかキュレーター。目の前の『敵』1人倒したくらいで油断して気を抜いたら痛い目に合うつてこと、きちんと学ばせてやらねえとな」

「結局痛い目見るわけだけどな……まあ、学生の本分は勉強だ、ちよつくら手伝つてやるのもいいか」

「それには及ばない。その辺は後日……俺達がきちんと教えるからな」

その時、突如として聞こえた声に反応して、ウォルフラムとキュレーターはとっさにその場から飛びのいた。

その瞬間、一瞬前まで自分達がいたところに……ではなく、飛び

退った先に、先読みしていたかのように『捕縛布』が飛んできて、2人を拘束しようとする。

ウォルフラムは、地面に手をつけて『個性』を発動し、それを防ごうとするが……

(……っ、やはり『消されて』いるか)

代わりに、キュレーターが超音波を放って、飛んでくる布を弾く。

そのまま、その向こうにいる者にも攻撃を届かせようとするも……

『音が温いんだよ雑魚野郎オがアアアアアア!!!』

それをかき消す威力の轟音が飛んできて逆にダメージを受ける。

どうにかそれに耐えて睨み返す2人。

その視線の先にいたのは……今しがた彼らが狙っていた、雄英高校の生徒達……その彼らを、守り、導く立場にある者達。それが……4人。

油断なく構えて、いつでも『眠り香』を放てるように風上に立っているミッドナイトに、血の鞭をうねらせてこちらの出方をうかがっているブラドキング。

そして……常の無気力さやお気楽さが全く見て取れないほどの……殺意すら籠っていそうな、凄まじい怒りを宿した目で睨み返してくる……イレイザーヘッドとプレゼント・マイクだった。

第140話 残酷な真実、数多

オーバーホールの撃破、及び、そこに取り込まれていたナイン、メラ……そして、既に気絶していたスライス、マミーの捕縛。

危険度に差はあれど、ネームドヴィラン5人という大戦果を挙げた、雄英高校1年ヒーロー科プラスアルファだったが、その直後、勝利の余韻に浸る暇もなく……事態は動き出す。

もつとも、その後を起こったことに関しては、彼ら、彼女らが特に何か関わる、あるいは巻き込まれるよりも前に、事態は勝手に推移し……そして終わってしまったのだが。

周囲を警戒しつつも、一息ついていた彼らの元に、突然の破壊音と……それをかき消して余りあるような大声が響き渡った。

特に後者のおかげで、一体、少なくとも誰が来ていて何が起こっているのかについては、すぐに生徒達は把握し……すぐに動ける者が、移動して様子を見に来た。

そこで目にしたのは……

「マイク先生……に、相澤先生も!？」

「ブラドキング先生にミッドナイト先生まで……」

「不用意に出てくん、下がってろお前ら!」

ウォルフラムとキュレーターを相手に大立ち回りを繰り広げる、イレイザーヘッド、プレゼント・マイクの姿。

直後、ブラドキングが自分達と『敵』2人との間に割り込む。距離を詰めつつ、とっさにかばうような形で。

ミッドナイトだけは動こうとしないが、風上に立っていることからその意図は読めた。

ウォルフラムは銃火器や軍用ナイフを使つてイレイザーをけん制しているが、『個性』を使う様子はない。否、使えないのだ。イレイザーが消しているから。

一方で、異形型であるキュレーターは、使おうと思えば使えるだろう。だが、変身に多少なりとはいえ時間がかかる上に、正しく音速で

攻撃が飛んでくるプレゼント・マイクと、一息吸えば一瞬で終わってしまうミッドナイトが射程圏内にいる以上、隙を晒すわけにはいかない。

ほどなくして、

「……こりや無理だな。やってやれないことはねえが……相性が悪い。退くぞ、キュレーター」

「ち……この分じゃ、長引くと応援が来るか。おい、ワープ！」

「黒霧、ですよ。名乗ったはずですがね」

その瞬間、2人の背後に黒霧が現れ……ゲートを開く。

2人はそこに飛び込んで姿を消し……

「逃がすか！」

「待ちやがれ……待て！ 白雲！」

先程までも怒髪冠を衝く勢いだった2人が、さらに頭に血を登らせた。相澤は捕縛布を飛ばし、マイクは声を衝撃波にして。

「おい、イレイザー、マイク！ 不用意に……」

「……白、雲……？」

常の彼らにはない、まさしく『不用意』な追撃に、やや驚いたブラドキングが叫び……その一方で、聞こえて来た不自然な単語に、ミッドナイトは疑問符を浮かべた。

（それって確か……高校時代の2人の同級生の名前じゃ……？ なぜ今、そんな名が……）

ミッドナイトの思考が終わるよりも先に、ゲートは閉じる。その場に、沈黙が戻ってきた。

☆☆☆

その数分後、戦闘が終了したことで、生徒達はかけつけた相澤の号令によって集められ……全員の無事が確認されたところだった。

敵は倒れ、あるいは去り、イレイザーら教員も駆けつけた。ようやく、この惨劇の夜が終わったのだ、と、一同は安堵して……は、いなかった。できなかった。

これだけの規模の襲撃があったのだ、当然、戦場となった病院は、病院『跡地』とでもいうべき状態になっている。まともに建物の形が残っている部分が、果たして何割残っているか、というほどに。

だが……生徒達が、勝利の余韻や、安堵に浸ることができない理由は……やや不謹慎ながら、そんなところではなかった。

自分達の目の前で、かつてないほどに怒りを迸らせている、A組担任・相澤がいるがゆえだ。

(やべえよやべえよ……何コレ？ 相澤先生メツチャ切れてんだけど？ 何、やっぱ俺らやり過ぎた？ 病院施設ここまでぶっ壊れちゃったし……)

(いや、コレやったの『敵』だから！ ていうか、今回はほら、あの変なアナウンスで戦闘許可、しかも公的っていうか、法律に基づいて出たっしょ？ なら問題ないはず……)

(じゃあ何で相澤先生あんなブチ切れてんだよ！ 俺にはマジで除籍される5秒前にしか見えねーよ！ M・J・5だよ畜生！)

(上鳴、変な単語作んな、爆豪じゃねんだから)

(俺が何だっつんだ殺すぞしようゆ顔コラア！)

(小声で怒鳴るな爆豪……無駄に器用だなお前)

「お前らちよつと静かにしろ、全部聞こえてるからな」

「「すいませんでした！」」

喋ってなかった面々まで一緒になって、A組全員の声が揃った。その一系乱れぬ統率に、隣で整列して見ていたB組がちよつとぎよつとしていた(含、担任：ブラドキング)。

通算除籍指導回数120回オーバー。さらには、その後に『続き』があるとはいえ、昨年度、受け持ったクラスを丸ごと1つ除籍処分にした過去を持つ相澤。

入学から4ヶ月ともなれば、多少なりそういう噂も生徒の耳に入ってくし、仲良くなった2年、3年の先輩から、その恐怖の実態を聞いた者もいる。

それを鑑みれば、生徒達から多少の畏怖は向けられていても仕方がないかもしれないが、だからといってきつちり統率され過ぎではない

か、という思いをブラドキングは禁じ得ない。

とはいえ、A組の懸念やら恐怖は、今回に限って言えば不要なもののだが。

「……心配しなくても、別に何か処分とかは考えちゃいないし、そもそもお前らに怒ってるわけでもない、安心しろ」

「え、そうなんですか？」

「ああ……単なる別件だ。怯えさせちゃったことはむしろ詫びる」

その言葉に、目に見えてほっとするA組一同。

しかしそれならそれで、『一体何でこんなに怒ってるんだ？』という疑問が今度は出てくる。

生徒である自分達を傷つけられて……というのも考えられなくはないが、重軽傷者多数だった林間合宿の時よりも、一応全員（一部は治療済みとはいえ）軽傷で済んでいる今の怒り方が激しいのは、やや違和感がある。

加えて、相澤だけでなく、プレゼント・マイクも一緒になってブチ切れているという状況が余計にわけがわからなくさせていた。この2人は確か、高校時代からの仲だったというのは聞いたことがあるが、それに何か関係があるのだろうか？

相澤もマイクも、何も言わない。

隠しきれない苛立ちを滲ませて……しかし、聴力に優れる耳郎や障子が聞き取ってしまう可能性を考えて……心の中にとどめている。

先程知ってしまった、あまりにも残酷で、悪趣味で……はらわたが煮えくり返るような事実を。

遡ること十数分前。

病院が、超がつく危険度のネームドヴィラン4人（ナインの部下も加えれば7人）に襲撃されたという報告は、雄英にも当然入っていた。警備員や、駆けつけたヒーローが軒並み蹴散らされたという凶報もセツトになって。

それを受けて、相澤ら4人の教師兼ヒーローが出勤し、病院にいる一般人、及び生徒達の救助と『敵』の撃退に赴いた。

本来であれば、今の雄英からヒーローを動員するわけにはいかない。しかし、生徒達がひとところにまとまっているという状況と、その病院で超法規的措置が発動されているという緊急性、そしてトドメに、別件の『摘発』で有力な動けるヒーローがほとんどそちらに行っているという状況がそれを可能にし、根津校長に決断させた。

放置していれば、生徒達はもちろん、数百人に及ぶ一般人が死傷される可能性がある。すぐに動ける4人が選別され、相澤達は数分後には現着していた。

だがその直後に事態は急変する。

丁度その時、緑谷がサイコフレームの光で戦場全体を照らし——光自体が届いていなくとも、多少なりその力は及んでいた——それが、思わぬ事態を引き起こしたのだ。

サイコフレームの光は、いわば『心の光』。それを通して、触れた者達の心をつなぐ力がある。

それにより、緑谷の存在の意思の強さを感じ取り、消えかけた永久の意識は覚醒した。

永久以外にも、あの光の影響を受けて……不思議と勇気が湧いて出たり、恐怖が薄らいだり、気を失っていたところ目覚めた者達がいる。中には、緑谷の存在をふと感じた、という者や、共に戦っている他の生徒達と、無意識に共感できた者もいた。

永久がこれを知れば、『サイコフレームだけじゃなくてGN粒子混ぜてね?』という感想を抱いたかもしれない現象が起こっていたわけだが……これが、イレイザーヘッドとプレゼント・マイクにも作用したのである。

そして……もう1人、この場に潜んでいた……黒霧にも。

もつとも、ここに来ていた黒霧は、トウワイスによる複製である。本物は、現在すでに神野区でエッジショットによって気絶させられている。

だがそれでも、それは発動した。してしまった。

その結果、あるつながりがあった3人の心は共鳴し……知ってしまったのだ。ある残酷すぎる事実と……そこに込められた、途方もな

い悪意を。

『敵連合』の保有する戦力の1つ……『脳無』。

たびたびニュースでも報道され、その存在が周知のものとなりつつあるこの怪人……もとい『改人』は、人間の死体を改造して作られている。

生きた人間を改造して作られている者もいるかもしれないが、捜査線上に上がってきた者の中には、公的な記録上、既に死んでいる者とDNAが一致している個体も複数確認されている。

少なくとも、今回は……その例に該当する。

異形型の『敵』であると思われる『黒霧』が、知性を持つ『脳無』であるということ。

そして、そのベースに使われている遺体が……相澤とマイクのかつての学友……『白雲朧』のそれであるということ。

サイコフレイムの光を通した『心の共鳴』で、2人はそれに気づいてしまった。

一体何が起こって、どうやって自分達はそれを『知った』のかを理解できたわけではなかったが、漠然と『それは事実である』という、妙な確信だけがあった。

その結果が、あの激昂である。

いつそ何かに八つ当たりしたいほどの憤怒を必死に押し殺しながら、相澤とマイクは、生徒達の点呼や状況の確認、雄英への報告をこなしていく。

……もう1人、それによつて……目覚めかけている者がいるとは知らずに。

☆☆☆

神野区で始まった、オールマイトとオール・フォー・ワンとの決戦。

周囲に誰も近づけないほどの凄まじい激突。

それを、余波が届かない程度に離れたところで……死柄木は見えてい

た。

逃げもせず、かといって手を出すでもなく、ただただ見ていた。

黒霧が気絶しているため、逃げる手段がないというのもある。

もつとも、AFOならば、『個性強制発動』という手段によって、無理やり黒霧の『個性』を発動させて彼らを逃がすことはできるのだが、それも蹴って。

『もう少しで何かつかめそうなんだ……先生。ここにいさせてくれ』

そして、そういう意図はなかったとはいえ、彼の存在は……否応なしに、オールマイトの拳を鈍らせていた。

(彼が……お師匠の孫……？ 彼女の……家族……!?)

ここに来る前に告げられた、衝撃的にも程がある事実。

それに合わせて並べたてられた、壮絶と言う他ない過去。聞いてしまえば、歪んでしまっても当然とすら言えそう。

かつて、オールマイトの師匠……七代目『ワン・フォー・オール』継承者、志村菜奈は、『敵』の襲撃で夫を亡くし……『巨悪』との戦いを見据えて、息子である志村弧太郎を里子に出した。そして、自分に何かあっても、その子には関わらないで欲しい……と、オールマイトやグラントリノに言い残していた。

それに従い、2人はその息子、そしてその家族を探すこともしなかつた。

それが……最悪の結果を招いたことに、オールマイトは内心ひどく困惑していた。

(今までどんな気持ちで……そんな彼を、我が物顔で追い詰めて……私は、何を、何とということ……！ 何とか、話が……できれば……！ 話を、せねば……！)

「考え事かい？ 余裕だね、オールマイト」

「ぬぐつ!?!」

AFOが放った空気の弾丸がオールマイトを捕らえ、ビルをいくつも貫通させて吹き飛ばす。

だがその数秒後には、跳躍して戻ってきたオールマイトが殴りかかり、ふたたび戦闘が再開される。

「凡その予想はつくよ。甲の話聞いて、話をしようとか、説得したいとか思っているんだろう？ 僕には珍しく善意で忠告しよう……無駄を通りこして余計なお世話だ、やめておくんだね」

「AFO……貴様、どこまで悪辣な……！ お師匠の家族を探して、悪の道に引きずり込んで……！ 私への嫌がらせか！ それとも……」
「そういう一面がないとは言わない。彼女の家族を探した動機がそれであることも認めよう。しかしだねオールマイト……彼の境遇そのものには、僕は何一つ手を出してなんかいないんだよ」

「嘘を……！」

「嘘じゃない。実際あの時は、僕も本気で驚いた。長いこと生きてるが……あそこまでの悲劇が、それも、誰の意図したことでもなしに天然物で起こったのを見るのは初めてだった」

ガキン、と硬質な音を響かせて、オールマイトの拳を弾くAFO。
返す刀で放たれる薙ぎ払いに、『衝撃反転』の個性を使ってその威力をはね返し……体制が崩れたところに、突風を叩きつけて無茶苦茶な軌道で吹き飛ばす。

宙に浮いたところに再びの空気弾。しかしオールマイトも空中で拳を放ち、強引にそれを相殺する。

だが、踏ん張るものがない状態ではなかったため、ダメージは軽微ながら、再びオールマイトは吹き飛ばされ、別なビルに突っ込んだ。
『地獄への道は善意で舗装されている』というのは、僕が生まれた頃から存在する、ある種の格言だが……上手く言ったものだと思っただね。あの時ばかりは、素晴らしいものを見せてくれた君のお師匠の英断に感謝してしまっただくらいさ。墓前に花を持って行って報告しようかとすら思った」

「お師匠にッ……そんなつもりはなかった！ 彼女はただ……貴様のような『敵』から彼を、子供を守ろうと……巻き込むまいと！」
叩き込まれた先のビルの中から、『テキサスマッシュ』の爆風が飛んできて……それをAFOは、同じく暴風で相殺する。

その背後に回り込むように跳躍したオールマイトが、地面を殴りつけて足場を壊し、しかしAFOは別な『個性』で浮遊してバランスを

崩すことはない。

だが、それにより先程の自分と同じく踏ん張ることができなくなったAFOを、オールマイトは殴り飛ばす。

「だから素晴らしいんじゃないか。不器用だが混じりつけのない、純粹な善意と愛情……それが子供に、上手く伝わらずに歪み、孫に届くころには悪意と憎悪に変わった。まるで極上のワインのように、熟成が進んで、そして……あの子が誕生したんだ」

「それに目をつけて、悪の道に引きずり込んだのか……貴様は……！」
「放っておけばよかったですか？ 全てを失って茫然自失となり、とぼとぼと歩く彼を？ まあ……君からすれば僕が拾ったこと自体が気に食わないだろうね。でもなら、誰が拾えばよかったですか？
彼が全てを失ってから1日余り……誰一人として彼を助けようとはしなかったぞ？」

「っ……!？」

「誰か他の人が助けるだろう。放っておいてもどうにかなるだろう。ヒーローが何とかしてくれるだろう……彼を目にした大人達は、ことごとくそんな風に言い訳して彼を避け、逃げ、突き放した。衰弱し、絶望し、生きる氣力を失いかけ、ついには自ら辛い記憶を封印するまでになった1人の少年に……そのまま野垂れ死ねばよかったですか？」

路地裏でうずくまり、不良に蹴飛ばされ、明日か明後日には冷たくなっていてもおかしくなかった……その時はまだ『志村転弧』だった少年。

若干5歳にして全てを失い、最後に残った命すら失おうとしていた彼の姿を、AFOは今でも覚えている。見えなくなった目に、その姿が焼き付いていた。

自分が手を差し伸べた時の……安心でも警戒でもなく、困惑した表情も。

他人に手を差し伸べてもらう、という経験にあまりに乏しかったがゆえの表情だった。

「熟成された悪意の中で育ち、社会の悪意にさらされて、そうして出来上がったのがあの子だ。確かに『敵』としてのイロハを……破壊衝動

の解放の仕方や、裏社会の渡り歩き方をの教えたのは僕だが、それは彼を利用しようと思つてのことじゃない。……最初はそうだったがね、思い直した。見出したのさ、僕も……彼に、破壊と恐怖の象徴としての器をね。君が緑谷出久に見出した、英雄の精神と同じように。既に……継承も済んでいるようだしね」

「……気づいていたのか」

「むしろ隠すつもりがあったのか？ 体育祭からこちら、あれだけ派手に活躍させておいて……僕が気付かないとでも？ ああ、その頃はまだ僕が生きているとは思っていなかったのかな……まあいい」

わざとらしく『痛たた……』と、オールマイトの拳を受け止めた腕を振るAFO。

直後、その指先から長い触手のようなものを伸ばし、オールマイトを刺し貫かんとする。

オールマイトはそれを回避して距離を詰め……超人的な反射で、背後から追ってくる触手をさらに回避。間合いにとらえたAFOに拳を叩きつけるが……受け止められる。

「もう君の中に『ワン・フォー・オール』はない……拳を合わせて気づいたよ。そうでなくとも……随分と衰えたようだな」

「ああ……お互いにな！ 6年前とは戦法も、使う『個性』も違うようだ……激しく動くのが辛いなら、ベッドで寝ていればいいものを！ 安心しろ、私が手配してやろう、飛び切り寝心地のいい……24時間監視付き、一言でも口を開けばナースコールになる、監獄のベッドをな！」

「それはありがとう。代わりと言つちやなんだが、僕も君に棺桶くらいなら用意させてもらおう。埋葬と火葬、どっちがいい？ 君は一応日本人だが、ホームをアメリカだという声も世の中には多いからね……それによつて棺桶の材質と、墓のデザインを変えないと」

一瞬遅れて、激突した衝撃が地面に流れて、その場の周囲の瓦礫ごととはじけ飛ぶ。

人の領域を超越した力を振るう2人の戦いは、何者も邪魔に入ることを許さず、終わる兆しを見せず続いていく。

……そんな、死柄木も、連合メンバーも、遠くで飛んでいる報道の
へりも、見守っているしかない戦いの端で……

「……………シヨ……………タ……………」

何かが、起ころうとしていた。

第141話 絆が呼ぶ奇跡

(死柄木のごとは一旦忘れる！ 後で連合メンバー共々全員捕まえてからでも……いやむしろその方がゆつくり話せるはずだ。今は……この場を切り抜け、この男を倒すことだけを考えろ！)

「おや……ひとまず、ではあるが、ようやく振り切ったかな？」

「ああ……色々しなければならんことはあるが、後回しだ！ まずはお前を黙らせなければ、何も始まんし……集中できてないと先生に怒られそうなんぞでな！」

「阿呆、手遅れだっつーの」

その瞬間、ギュン、と空を切る音と共に、シンプルなデザインのヒーロースーツに身を包んだ小柄な老人が飛来した。

「先生……ご無事で……バーの方の脳無達は？」

「エンデヴアーと他の連中が応戦中だ。一匹やべえのがいて、そいつへの対処で大分てこずってる」

「それは……いえ、彼を信じさせてもらいます。こちらにも余裕があるとは言えない」

「ああ、だと思つて……」

と、グラントリノが言い終わる前に……

——ズドオン!!

明後日の方向から猛烈な勢いで飛んできた『何か』が、その近くに着弾……いや、着地した。

濛々と立ち込める土煙。が、煩わしいとばかりにブオン、と振りぬかれた足がそれを吹き飛ばし……その中から出て来たのは、1人の女性ヒーロー。

「到・着！ んで!? あれ蹴っ飛ばせばいいのか!？」

「蹴っ飛……え、何?」

「ミルコさん、急ぎ過ぎよ！ 状況もわかってないのに……」

「ねえねえ、あっちの方に『敵』がいつぱいいるよ？ 行かなくていいの？ それともこっちからにした方がいいの？」

それに加えて、巨大なドラゴンが飛んできた……かと思うと、それはチャイナドレス姿の美女となって着地し、その背中に乗っていた、青色の髪の女の子も同じように地面に降り立った。

さらに、陸路で……と言えいいのか、瓦礫の山を乗り越えて、2mを軽く超える巨体と、それにつき従うようにもう1人、戦場に飛び込んでくる。

「何やコレ、エラいことになつとるな……あのパイプ仮面がやったんか？」

「みたい、ですね……まるで災害現場だ」

グラントリノに続くような形で、次々とその場に降り立つヒーロー、あるいはその卵たち。

トップヒーローの一人に数えられるミルコにリューキュウ、対凶悪犯の分野では屈指の実力者であるファットガム、そしてインターン生として事務所に勤務している、雄英ヒーロー科3年、波動ねじれと天喰環。

そして……

「ミリオ……いや、ルミリオン、今回ばかりはジョークはなしだ。油断するな、一挙手一投足、全てに全力でかかれ」

「……わかりました、サー」

「……！ ナイトアイ、君もか」

元・オールマイトの相棒……サー・ナイトアイに、インターン生のルミリオンこと透形ミリオ。

「先生、これは……？」

「後詰めつてことで手配されてた連中だよ。移動時間の関係上、作戦開始時刻には間に合わない奴も含めて……何かあつた場合のフォローってことで要請がかかってたんだと」

「脳無保管庫の制圧に失敗したり、逃げ出した『敵』が市街地で無差別に暴れ出した場合などの鎮圧要因として、ですがね。バーに突入するにせよ、周囲を包囲するにせよ、あまり大人数集まりすぎても動きづ

らいですし、戦闘の相性もありますから……別動隊という形を取って
いました」

グラントリノに続く形で、ナイトアイが言う。

その目は、まさしく怨敵を睨むがごとき眼力で、AFOに向けられて
いて……しかし、少しして、遠く離れたところで見ている、死柄木
たちの方に移る。

「……駆けつけておいてなんですが、オールマイト……奴の相手はお
願います。我々は……あそこにいる連中を、今度こそ確保しますの
で」

出動を要請された、ナイトアイ達、後詰め組の仕事は、AFOと戦
うことではない。AFOが回収した『敵連合』のメンバーの捕獲であ
る。

狙いがこちらに向いたことを悟った死柄木達は、身をこわばらせ
た。

「本当はもっと静かに、それこそ可能なら気づかれずにでもやる予定
だったんですけど……すいませんねオールマイト、騒がしくして」

本当なら、背後からでも奇襲をかけて数人はまず確実に奪取する予
定だったのだが、ミルコが跳んでいってしまったおかげで意味がなくな
った。そのため、全員こうして普通に出て来た、という経緯があつ
たりする。

もともと……ミルコもミルコで、単に浅慮でそうしたわけではないな
かった。彼女も伊達にトップヒーローと呼ばれているわけではない
のだ。

「無駄だリューキュウ、こいつもう私達が近づいてきた時点で気づい
てたよ。オールマイトと戦いながらも注意がこっちに向いてた。奇
襲なんか成功しねえ。なら真正面から行った方がいいだろ？」

「……だったらそう言うてくださいよ」

「言ってる暇があったら跳んでって蹴っ飛ばした方が速いだろ？」

「やっぱ滅茶苦茶……」

色々考えてるかと思いきややっぱりあんまり考えてないミルコと、
ちよつと感心しつつも呆れるリューキュウ。

その会話を聞いて苦笑する、英雄ビッグ3。そしてただ1人表情を変えないナイトアイ。

だが、ほどなく全員、仕事に臨むプロヒーローの目になり、まだ少し離れた位置ではあるもの——もともと、その気になればミルコやルミリオンであれば一瞬でゼロになる距離だが——『敵連合』のメンバーを見据えて、いつでも戦闘に入れる構えを取る。

「弔」

「わかってるよ。でも……できればもう少しほしいかな。我が儘だつてのはわかってるが……」

「ふふふ……わがままな子だ。だが……いいだろう。どのみち、ヒーローの増援は予想の範疇ではある」

ぱちん、とAFOが指を鳴らすと、何も無い虚空から、オールマイトとグラントリノ、それに連合のメンバー達にとつては見覚えのある、黒い液体があふれ出す。

そして、バシヤバシヤ、という水音と共に……何体、いや何十体も
の脳無が姿を現した。

姿かたちが同じ、あるいは似ている者もいれば、全く異なる者もいる。また、色が白いものもいれば、黒いものもいる。そして……

「アハハハハ！ 楽シソウナトコロダネー！」

「標的……確認。任務……ヒーローノ抹殺、了解」

「よろしく頼むよ。弔達が安全に観戦できるように、彼らの相手をしてあげてくれ」

「……っ……!? まだ、これほどの数を……！ しかも……喋る脳無だど!？」

「こつちにも居やがったか……おい、全員注意しろ。あつちにも喋る奴が出たんだが……No. 2の小僧が苦戦するレベルだった」

「エンデヴァーが、ですか……わかりました」

グラントリノの言葉に、さらにその場の緊張感が増す。

それに加えて、さらにグラントリノは悪態をつくように、

「つーか、どんだけ頑張ったんだお前……そもそも、保須市のあたりから思っちゃいたが、どれだけの生産設備を用意してんだ？ 1体用意

するのだって手間だろうに……大量生産用の工場でも作ってんのか？」

「惜しいね……何、ちよつとした裏技を使っていたんだよ」

「ばちん、とAFOがまた指を鳴らす。同時に、その背後に黒い水があふれる。」

だが、予想通りそこから出て来たのは脳無だったが……今さっき呼び出された者達と比べて、明らかに違う所が1つ。

(デカイ……!? こいつは、一体……!?)

異様な見た目の脳無だった。

体の色は、上位のそれであることを示す『黒』。その大きさは……10mほどにもなろうかという巨体である。

形がまた、異形と言う他ないそれだ。いくつもの太い触手が生えているが……タコやイソギンチャクなど、それらしい生き物に例えようとしても難しい。なにせ、手や足の延長というような感じで生えているのではなく、触手の集合体として巨体が形作られているような見た目なのだ。しかも、触手の太さも長さも一定ではなく、伸長・膨張と収縮を繰り返している。

まるで、どこぞの神話に出てくる、見ただけで発狂すると言われるは邪神のような容姿だ。

そんな体の頭頂部？から生えるようにして、あるいはそこにくっついていてような形で……人の上半身だけの脳無が接合されている。しかし、ぐったりとうなだれたまま、その人型の部分は動く様子もない。

禍々しい、悍ましいという表現すら生ぬるいこの怪物は何なのか。オールマイトラヒーロー達はおろか、敵連合のメンバー達までもが驚愕している中、得意げにAFOは語る。

「こいつは脳無の中でも特殊なものでね……『女王』と呼んでいる」
「女王、だと……!?! まさか……」

「アリやハチと同じさ。一度に多数の脳無を生み出すための、元となる個体。そういう意味では、そこにいる、志村の友人が言っていた『工場』というのも、あながち間違いではないね」

「こいつが……脳無を生み出す母体だつてことか？　つまり、脳無つてのは改造人間じゃなく、そういう生き物だと……」

「少し違うね。君達の予想通り、脳無は僕の協力者が作ってくれる『改人』……うん、改造人間と言つていい。ただし、作るにしても、薬物投与や外科手術など、やることは多いし時間もかかる。下位脳無1体作るにもバカにできない手間がかかる。これがいい例だ」

そう言つてAFOは、出現させた脳無の1体を指さした。

それを見て……オールマイトは気づく。その脳無に、見覚えがあることに。

「そいつは……まさか！」

「そう、USJで君と戦つた脳無さ。もつとも、ほとんど一蹴されてしまったようだがね」

『個性』を用いない、素のパワーでオールマイト級（弱体化後）。加えて、『衝撃吸収』と『超再生』の個性を持っている……当時の死柄木曰く所の『特別製のサンドバッグ』。

膂力が『個性』によるものでないがゆえに、レーザーヘッドはその力に対抗することができず、……一方的に打ちのめされてしまったほどの怪物だ。

改造手術を受けたがゆえだとはいえ、『個性』なしで生身の肉体にそれだけのパワーを持たせることがどれほど異常なことか。そして、その為にとれだけの技術と知識が要求され、どれだけの手間がかかるのだろうか。

この黒い脳無のスペックは極端な例としても、多かれ少なかれ、脳無はそういつた一面を持つ。翼を持って飛翔することができたり、動物を思わせるしやかな肉体を持っていたり、様々な特徴、ないし武器がある。

となれば、脳無1体を作るのにどれだけの手間が要求されるか……漠然とでもわかるだろう。

手間もかかる。時間もかかる。普通に考えて、量産などできるはずもない。

その問題を解決するために生み出された、禁忌に輪をかけた禁忌の

産物。それこそが、『女王』^{クイーン}であった。

「こいつに素体となる死体を取り込ませるとね、体内で『熟成』してくれるんだ。母親が子宮で子を育むように、栄養を与え、体を作り替えて……産み落とす。長くても1ヶ月程で、強靱な肉体を持った脳無の素材が出来る。あとは少し調整して、形を整えてやるだけで、それこそプラモデル並の手軽さで脳無が作れてしまう。まあ性能は流石に、ドクター自らがワンオフで一から調整したものほどじゃないが、下級や中級程度なら、ほとんど手を加えずに作れてしまうんだよ」

「全自動の……死体改造装置、ということか……」

「そう取ってもらって構わない。ただ、その為にはこいつにきちんと栄養を補充してやる必要があるんだがね。だから普段コイツは、常に高カロリー輸液の点滴を数本つないで、栄養補給をし続けている。その栄養を使つて、こいつは受胎している複数の脳無に栄養を与え、育み続ける」

余りにも冒瀆的なその所業に、リユーキュウやサンイーターは、えづきそうになってしまうのを必死でこらえていた。他の面々も、表情をゆがめ、不快感をあらわにしている。

人とはここまで悪辣な悍ましい所業に手を染められるものなのかと。どうしてそんな、死者を冒とくするような真似を嬉々として語れるのかと。

「もつとも、こいつが完成したのはごく最近のことなんだ。もともと、『母体』を用意して脳無を量産するアイデア自体はかなり前からあったんだが、その為には決定的な問題が1つあった。その『母体』自体が、脳無に供給する膨大なエネルギーをため込んで、与えることができなければいけない、という問題点がね。その『母体』も当然脳無なわけだが、いかんせん死体を元に行っている以上、命を持つことが前提となつている生体機能……『生殖行動』というものが、脳無にはできないんだ」

脳無はいわば、かりそめの命を与えられた死体である。

命令を聞いて戦ったり、傷ついた体を再生することはできて……命あるものならば、皆等しく行うことができる、『子孫を作る』『命を

はぐくむ』ということができない。

より正確に言うなら、『体内に子Ⅱ別な生命体を格納し』『自分の体を通してその生命体に栄養を与え続け』『万全な状態になるまで育成する』ということができない。ドクターの技術をもつてしても、死体である脳無にそのような機能を持たせることはできず、培養用の機材と外科手術を用いてワンオフで行うしかない作業部分だったのだ。

……その作業に、非常に適した『個性』が見つかるまでは。

「本当に幸運だったよ。たまたま持っていたんだ……与えられただけエネルギーを蓄え、ため込み……それを、必要に応じて分け与えることができる、という『個性』をね。自分で使うことができなかつたら、長らく死蔵するばかりになっていたものなんだが」

「……っ!?!」

「まさか……それは……」

その『個性』が何なのかに思い至ったオールマイトとナイトアイ、それにグラントリノの顔色が変わったのを見て、可笑しそうにAFOは笑い……その予想を、肯定した。

「君たちの思っている通りのそれだよ。彼女が持っているのと同じ『個性』や」

（やはり……『無限エネルギー』……いや、『オール・フォー・ユー』か！）

「もつとも、もう一度同じことをやろうとは思えないし、そもそもできないだろうけどね。かつて僕がこの『個性』を入手した時、その者にはまだ『主』がおらず、白紙とっていい状態だった。それでもなお、とても扱えなかつた『個性』だったんだ。徹頭徹尾、使い手以外の意思を拒絶するじゃじゃ馬。今を生きる者達のそれは、あの頃のそれよりもはるかにタチが悪くなっているだろうし、『主』も定まっている。使えるとは思えないし……そもそも、奪った段階で何が起ころかわかつたものじゃない。だからこれが、最初で最後の『女王』^{クイーン}ということになるだろう」

「異様なスピードとペースで『脳無』が増産されていた理由がようやくわかつたぜ……そして今の話が本当なら、そいつを倒して、あるいは

抑えちまえば、もう今までみてえなペースじゃ、脳無は作れないってこつたな！」

「それには及ばないよ。もうこいつは要らないからね」

「何……？」

そう言った直後、AFOは何かの個性を発動し……呼び出したばかりの『女王』を……一瞬で炎上させ、燃やし尽くして灰にしてしまった。これんは流石に、グラントリノも絶句する。

「な……!?!」

「もともと寿命だったんだ。ここ最近酷使しすぎたせいか、母体としての機能は落ちてきている上、『個性』の移植も、複製も上手くいかなかった。まるで、『個性』そのものがすり減ってしまったかのようにね。まあ、もともと自力で『変容』したり、よくわからない部分がある『個性』だから、無理もないとも言えるかな……ここに至るまで、数をこなしてドクターの研究の役に立ってくれたから、よしとすることにするよ。今までご苦労だったね、ゆつくり眠ってくれ……『女王』感情など籠っていないであろう、白々しいもの言い。

それを最早聞いてもいないであろう、『女王』脳無の残骸は、灰になって崩れ、風に吹かれて夜の空に消えていった。

さて、と、気を取り直すように言って、AFOはオールマイト達に向き直る。

「時間稼ぎにつき合ってくれてありがとう。おかげで……脳無達がきちんと目覚めるまでの時間を与えることができた」

格納庫から取り出したばかりの脳無達。

すぐに戦闘に放り込める状態ではあるとはいえ、いわばその直後の彼らは『寝起き』。脳が完全には覚醒していないため、本来のスペックを發揮できるようになるまでに時間がかかる。

特に、『最上位』^{ハイエンド}など、高い知能を持つ脳無ほど、その傾向が強い。それに加えて……AFOの背後で黒霧のゲートが開き、中からウォルフラムとキュレーターが現れる。

「立て続けにすまないね。もうひと仕事頼むよ、2人共」

「……ま、いいけどよ。ナインとかいう奴を回収できなかった負い目

もあるしな」

「アジトに戻って一息ついたと思つたら、また呼び出しだもんなあ。黒霧にも面倒かけちまうし」

「いえいえ、仕事ですからね……それに、私はコピーですから、何も遠慮はいりませんよ」

そんなやり取りをしながら、危険度超級のネームドヴィラン2人が降り立った。

病院跡地から撤退した後、一度拠点に戻った2人だが、ドクターからAFOの現状と追加の要請を受けて、再び黒霧のゲートでここに来た、という形だった。

「これでこちらの準備は万全だ。待ってもらって悪かったね」

「……気にするな、構わんとも」

しかし、オールマイトから返ってきたのは……底冷えするような、低く、冷たい声。

「むしろ多少歯ごたえが出てきてきている方が都合がいい……八つ当たりなんて、ヒーローらしくないことなのはわかるがね……ちよつとさすがの私も、今のこの怒りの矛先に、難儀しそうなところだったんだよ……！ 暴れさせてくれるなら、むしろお言葉に甘えようじゃないか」

「そうか。例には及ばないよ……存分に、文字通りの死体蹴りを楽しんでくれ」

「貴様はッ………ん………？」

「……うん？」

死者を、命を、尊厳を、徹底的に貶め、辱め、愚弄するAFOの所業の数々に、オールマイトの怒りが爆発しかけた刹那……その目が、あるものを捕らえた。

同時に、AFOもまた、何かに気づいて……正面に立っているオールマイトへの警戒は残したまま、振り返ってその方向を確認する。

そこには……エツジショットに気絶させられて倒れている、黒霧が転がっている。

特に何の変哲もない——靄状の姿かたちが既に異形ではあるのだ

が——様子で、ただ気絶しているだけに見えるが……オールマイトとオール・フォー・ワンは、両者ともに、その黒霧に何かを感じ取っていた。

そして次の瞬間、その予感が正しかったことが証明される。

黒霧の頭部と両腕……霧になって『ワープゲート』になる部分が膨れ上がっていく。

「何ッ!？」

「……おや……う？」

「黒霧!? 先生、これは……!？」

近くに立っていた死柄木は、何が起こったのか……あるいは、A F Oが何かしたのか、問いかけるように視線を向けるが、それを受けたA F Oもまた、態度にはほとんど出ないが、困惑している。

何もしていないし、命じてもないのに、そもそも意識がない黒霧の『個性』がなぜ今、発動しようとしているのか、と。

しかも……

(これほど大規模にゲートを……一体何が起きている?)

両腕と頭部の霧が膨れ上がっていき……まるで、漆黒の入道雲のように、上空数mまで立ち上って、見上げるまでになった。一体何が起こるのか、誰にも予想がつかない。

その場にいる、脳無以外の全員が呆気にとられる中………それは、起きた。

霧のゲートの向こうから………彼らは、やってきた。

「「うっわああああああ!!」」

☆☆☆

時は少しさかのぼり……病院跡地にて、A組の面々が『何で相澤先生(と、マイク先生)こんな怒ってんの?』という疑問を抱いていた時のこと。

イレイザーヘッドとプレゼント・マイク、この2名は、緑谷のサイ

コフレームの光によって、先程までその場にいた黒霧の分身と共鳴し、それによって、黒霧の正体が、学友・白雲朧……の、遺体を改造して作られた存在だと知った。

しかし、この時……彼らも、さすがに予想していなかった。

その黒霧の分身を通して……気絶している、本体の黒霧にもまた……『共鳴』が起こっていたなどと。

『黒霧』の意識の奥底に眠っていた、わずかに残っていた『白雲朧』の意識が……ほんのわずか、友の声に反応して……そして、奇跡を起こそうとしていた。

——俺は……

「……ッ!」

その声なき声を……2人だけが聞いた。

何かに過敏に反応し、バツと明後日の方向を振り向いた、相澤とマイク。その様子に、横にいたミッドナイトが『えっ、何!』と驚いているが……2人共、虚空を睨むまま、何も答えない。

(今は……!?)

(気のせいかな? 声が……白雲の……!?)

そして次の瞬間、

目の前の空間に……猛烈な勢いで、黒霧の『ワープゲート』が出現して広がり、またたく間にその一帯を包みこみ……教師も、生徒も、皆、飲み込んでいく。

「は? ……は!?! ちよっ、これって……」

「おい何だよいきなりこれ!? コレあれじゃねーか、USJの時の……」

『敵連合』のワープ『敵』の……! ちよつと、このままじゃ……」

「皆! 逃げるんだ、この霧の外に出……」

「ダメだ、間に合わな……」

生徒達が、特に、この黒い霧に強烈に見覚えのあるA組の生徒達が、怯えすら表情に含ませてパニックになりかける中、

相澤とマイクだけは……今度こそ、その声を聴いていた。

霧の向こうから聞こえてくる……助けを求める、友の声を。

「白雲オ!？」

「どこだアア!？」

——俺は……

——俺は……!

——ここにいる!!

……その次の瞬間、悲鳴も怒号も消え……静かになる。

霧が晴れ、そこには誰も残っておらず……病院跡地には、静寂だけが残った。

……そして、

「「うっわあああああああ!!」」

「「……………は?」」

漆黒の入道雲のごとく立ち上った、黒霧のゲート。

その向こうから飛び出してきた、というよりも、吐き出されたのは……雄英高校1年ヒーロー科(予定含む)、総勢42名。プラス、教員4名。

普通科の2名を除き、全員がコスチューム着用で完全武装。

ついでに言えば、教員約2名の士気が、登場時既に限界突破状態。

奇跡が『引き起こしてしまった』、誰一人予想できなかった展開に……オールマイトも、AFOも、その場にいた全員が、40人を超える人間が空から降ってくる光景を、呆気に取られて見ているしかなかった。

第142話 最終決戦

あ、ありのまま今起こったことを話……やめよう、アホなことやってる場合じゃない。

わけのわからない事態なのはそうだけでも、それ以前に今のコレはあれだ……即座に対応して、必要ならば『応戦』しないといけないパートナーだ。そういう現場だ。

だって、右を見ても脳無(いっぱい)、左を見ても脳無(いっぱい)、向こうの方に死柄木を始めとする『敵連合』のメンバー達や、ウォルフラムとキュレーター。

横とか後ろにはミルコやリューキュウやナイトアイといったプロヒーロー達、しかもほとんどがトップヒーロー級の面子と来たもんだ。

おまけに、ガチで戦闘モードのオールマイトもいて……その向こうに、やばい威圧感を放っている、正体不明の仮面の『敵』らしき奴がいるし……どう考えてもドンパチの現場だろコレ。しかも本来なら、一般人とかヒーローの卵が首突っ込んだじゃいけないレベルのヤバい現場。

というかここどこよ？ 見渡す限り瓦礫の山なんだけど……さっきまで戦ってた『病院跡地』よりもっとボロボロ……っていうか、何もないんだけど。紛争地帯の最前線でももうちよつと色々残ってるだろってくらいにひどい有様なんだけど。マジで何、空襲でもあったのかここ？

ヤバいってこと以外、何一つ状況がわからん……どうすりやいいんだコレ？

誰か、状況説明してくれ……

「緑谷少年!?! それに、他の皆も……っていうか、相澤君達も!?! 何でここに……コスチュームまで着て……」

「オールマイトこそ……僕らは病院で、『敵』の襲撃を受けた後に、黒霧のゲートで全員飛ばされてきて……というか、一体ここは……?」

ミルコやリューキュウ、サー・ナイトアイまでいるし……一体どうい

う状況ですか？」

「似た瓦礫の山……でも、病院じゃねえな、遠くに見える景色が違うし、ブロック塀もねえ」

「むしろこっちの方がより何も無いくらい空間になってやがるな。しかも、かなり広範囲が均一に……爆弾でも爆発したのか？ この惨状は……」

「っていうかあっちにもこっちにも脳無だらけじゃねーかよ!? 何なんだよここマジで、地獄!? 夢なら覚めてくれ早く……」

「現実見ろ、上鳴。……あっちには『敵連合』の連中や、さつきまで病院にいた、テロリストの『敵』達もいる……おまけによくわかんねえ仮面の男……」

「それに、周囲にいるのはプロヒーローや……英雄ビッグ3の先輩方です。そんな面子が集まっているという時点で、ただ事ではないとわかりますわね……」

「まるで局地的な戦争ね……私達のいた病院へ襲撃があったのと同時に、何かが起こっていた、ということかしら？」

突然のことに困惑しながらも、生徒達は獣医の状況を見て、懸命に事態を飲み込もうと推理していく。無論、私も含めて。

そんな中で再度『オールマイト！』と問いかけられ、

「ええとだね、緑谷少年……ここは……」

と、オールマイトが何か言いかけた時、パチパチパチ、と拍手の音が響いた。

皆、困惑している中でいきなり聞こえてきたそれに、思わず、といった形で視線が集中する。

私達生徒だけじゃなく、先生達や、オールマイトを含むプロヒーローの人達のも……後者に関しては、がつつり警戒心を滲ませた上で。

「実に面白い」

そんな視線が無数に突き刺さる中で、しかしそれを何でもないかのように、普通の声でさらりと言う、仮面の男。ドクロを思わせ、何本もパイプがくつついている仮面のデザインは……どこことなく、さつ

きぶつ倒した『敵』……ナインに似ているような気がした。

「一体なぜ、黒霧の『個性』が勝手に発動して、こんな事態を引き起こしたのかはわからないが……これはこれで楽しめる。君と関わると、刺激的な出来事が多くて退屈しないな、オールマイト」

「……貴様が意図して起こしたことではないということか、これは」
そう、これまでにないくらいに緊張感を孕んだ声で言いながら、とつさに私達を後ろにかばうようにして立ち位置を直して言うオールマイト。

いつも、目の前にいるだけでこの上なくらいに安心できる、その大きな背中が……なぜだか今回ばかりは、切羽詰まっているような、余裕がないような感じに思えた。

「僕としては君達の方が何かやったんじゃないかと一瞬思ったよ。記者会見をミスディレクションにした奇襲じみた摘発に加えて、今度は数の不利に対抗するために、学徒動員でも企てたのかとね……そうだったら面白かったんだが、反応を見る限り違うようだな」

「当たり前だ。彼らはまだ子ども……守るべき、未来あるヒーローの卵たちだ。貴様との戦いの場などに連れ出してくるなど、ありえるものか」

「そのありえないことが起きてしまった以上は、この状況を楽しもうじゃないか。と……自己紹介もなしにだらだらと話してしまったな、これは失礼だった」

そう言うのと、謎の男は、おほん、と咳払いを一つして、

「ようこそ、雄英高校の諸君。いかなる導きがあつて君達がここに来たのかはわからないが、歓迎しよう。アポイントもなしでの訪問には驚いたが、気にすることはない。君達の人生の最後を彩るにふさわしい舞台になるよう、我ら一同全力を尽くさせてもらうよ。存分に楽しんでいってくれ」

……つまりコレ、『ここで君達を皆殺しにします』って宣言されてる……よな？

しかも、全然冗談に聞こえん……どうしよう、予想通りかそれ以上にヤバいだろうコレ。

生徒達の中には、今の言葉の意味を理解して緊張感を増してる者や、まだよくわかっていない者が混在してる感じだが……その理解を待たずに、男はさらに言葉を紡ぐ。

そんな中、何かに気づいたように、はっとした表情になる緑谷。

そのまま、大分向こうの方に、他の『敵連合』のメンバー達と一緒に立っている死柄木を見つけて、……どうやら、2人の目が合ったみたいだった。

「はー……お前、マジでどこにでも現れるよな。まさかこんなところでまで会うとは思わなかったわ……こないだは因縁とか運命とか何となく言ってみただけど、マジでありそうに思えて来た」

「死柄木……！　お前……まさか、あの男は……！？」

「よかつたな、会えて。知りたがってたもんなお前……先生のこと」「！　その呼び方、やっぱり……！」

死柄木の言葉に反応したのは、緑谷だけじゃなかった。

『先生』というワードに、私もそうだが……轟や爆豪、それに八百万や拳藤なんかも、よく見ないとわからない程度だけど、ぴくつと反応してた。

前々から、話にはなってたからな。『敵連合』には、現時点でボスと見られている死柄木以外に……黒幕、あるいはブレインのような存在がいる可能性がある、って。

そして今の会話……つまり、それが……

「申し遅れた。私は……そうだね、素直にこう名乗らせてもらおう

……『オール・フォー・ワン』」

「……っ……!!」

「自分からこう名乗ったわけではないんだがね。皆、私をこう呼ぶよかつたら覚えておいてくれ」

……偶然、か？　私の『個性』や、緑谷の『個性』に、名前が近いのは……

いや、今それはいい。それよりも……

同じように油断なく、その男を睨みつけていた相澤先生が、目線を外さずに問いかける。

「オールマイト、つまりこの男が……」

「そうだ……捜査会議で幾度となく、その存在の可能性について論じられていた男。『敵連合』の真のトップであり、死柄木にとってはブレーションとも呼べる存在。個人的な評価も合わせて述べさせてもらうなら……超人世界最強最悪の『敵』だ」

オールマイトが、『平和の象徴』として知られるNo. 1ヒーローがそう称したことに、聞いていたほぼ全員が表情をこわばらせる。

雰囲気からして、大げさに言っているわけでもなさそうさだ。

加えて、周囲を取り囲むこの脳無の数……結構な割合で、黒い個体が混じってるし。保須市での経験上、黒い奴は白い奴よりヤバイ。

……あと個人的に気になってるんだが……今、私達が立ってるこの場所について。

私達がさつきまでいた、病院跡地と言う名の瓦礫の山と似た光景だけど……よく見ると、壊れ方なんかがあつちとは違うことがわかる。

あつちは、敵連中の度重なる破壊や戦闘の余波で次々に壊れていった感じなのに対して……こつちは、ほとんどの部分がほぼ均等に吹き飛んで崩壊している。この壊れ方は……さつき轟もちらつと言つただけど、一撃で壊れたような感じに近いと思われる。

……おい、ひよつとして、この破壊痕……

「相澤君、生徒達をどうにか逃がしてくれ。これからここは……戦場、と呼ぶのも生ぬるいレベルの死地になる。プロヒーローとして生き残れるかわからない地獄だ、彼らには……」

「お言葉ですがオールマイト……ここを脱出しようとする方が危険です。この脳無の数じゃ、背を向けて逃げようとした瞬間にどれかしらのターゲットになるし、守ろうにも手が足りなすぎる」

「賢い判断だ。それにオールマイト……凶らずも折角用意された場だ。つまらないことをしなくとも……素直に、生徒達にいつもの自分の仕事を見てもらえばいいだろう？ ……気恥ずかしいなら安心して、君と僕の仲だ……少しばかり、手伝おうじゃないか」

そう言うと同時に、AFOの左腕が、ぶくつと風船みたいに膨れ上がって……しかし不思議と、どこかマツシブで力強い感じも残ったま

ま。

そして見た目から感じられる以上に……ヤバい予感がビンビンしている。

そうなった左手が私達の方に向けられると同時に、オールマイトが飛び出して拳を振りかぶっていた。

『空気を押し出す』＋『筋骨発条化』＋『瞬発力』×4＋『臂力増強』×3＋『乱気流』＋『気体圧縮』……」

「っ……『アトロイトスマッシュ』!!」

そしてその直後、AFOが左手から空気の弾丸?を打ち出すのと同じ時に、オールマイトも必殺の拳を突き出して……

——ドツゴオオオオオン!!

その2つがぶつかった瞬間、とんでもない衝撃波があたりにまき散らされた。特大の爆弾でも目の前で爆発したようなそれは、鼓膜を破らんばかりに響いて……体の軽い生徒を吹き飛ばすほどの威力だった。

というか実際に吹っ飛んでいる。峰田とか、小森とか……細身、あるいは小柄なあたりが、何人も。

しかも、炸裂した空気は、ただ広がるだけじゃなく渦を巻いたり、攪拌されたりで滅茶苦茶な気流になって……あっちこっちでデタラメな動きで飛ばされていく。まるで台風だ。

「何だよ今のおおお!」

「オールマイトの拳と、威力が互角……!? おい、あの『敵』……マジでやべえぞ! 下手したら、あのUSJん時の脳無と同じ……いや明らかにアレ以上だろ! どう考えても俺達がいていい空間じゃねえって!」

「泣き言言うな、来ちまったもんは仕方ねえだろ! それより覚悟決めろ! 始まるぞ!」

「始まるって何が……」

言いかけて止めたのが誰だったのかはわからないが……もうその

辺はどうでもいい。

それよりも、その前に言われていたように……明らかに今のコレは、私らは私らで、泣き言言わずに覚悟を決めなきゃいけない場面だ。さつきまで、沈黙と共にたたずんでいた、周囲を取り囲むように配置されている無数の『脳無』達。奴らが……何が合図だったのかはわからないが、動き出した。

ぎよろり、とその目で周囲を見回し……私ら生徒や、ヒーロー達を見つけて止まる。

そして、臨戦態勢に入り……まあ、この後の描写や予想なんて要らないだろう。

加えて、脳無以外の連中にも火が付き始めてるし……そうならばこつちとて、ぼーつとしてるわけにはいかない。

要するにあれだ……戦わなければ生き残れない！

『まだよく状況を飲み込めていない生徒がいるようだね。なら、ごくわかりやすく説明しよう』

と、今度はAFOの声が直接頭の中に……さつきから何となく思ってたんだが、こいつもナインと同じように、いくつも『個性』使っていないか？

しかもコレ、明らかにこつちの方がナインより危険だろ、色々……

まあそれは今は置いて……恐らくは、マンダレイの『テレパス』みたいな個性を持っているんだろう。瓦礫が崩れたり地面が割れたり、悲鳴があちこちで上がったり……そんなえらい状況なのに、AFOの声はやたらはつきり聞こえる。何かしらの『個性』なのは間違いないだろう。

『簡単なことだ、君達がいっつもやっていることをやればいい……『敵』と戦い、倒せ。それができなければ……自分が死ぬだけだ』

「……随分と親切、ないし紳士的な『敵』だな。わざわざ教えてくれるとは」

「いやいや、ねえだろそりや常闇。こんな場所できなり合戦おっぱじめることを強要してくるくらいだし、明らかにこつちが何人か死ん

で、それに対するリアクションとか込みで楽しもうとしてる感じだったぞ。仮にそうじゃなくても……」

「これだけの数の脳無……どの道、放っておくわけにはいきません。数でヒーローや皆さんを圧殺しようとするか、あるいは制御を外れて市街地に散っていけば……」

「保須市の悲劇再び、ってどこか……そりや確かにほつとけないな。もつとも……」

「もつとも？」

「それ以外にもヤバいって言うか、野放しにしとけねえ奴とか多そうだし……むしろそいつらの方が、私らを放つといってくれなさそうだ、と思つてな……こんな風に」

「さて、と。さっさと仕事に移らせてもらうか……時間も遅いし、いい加減に時間外勤務も切り上げたいしな」

潜水用マスクをかぶって、白いコートに身を包んだ男が、私らの目の前に立ちはだかるように姿を見せる。

その目は、どこか気だるげなものを感じつつも……はつきりところらに対して殺意を滲ませる、底冷えのするような冷たいそれだった。

ネームドヴィラン『キュレーター』……ヤクザの一件の時から何かと縁がある男。

こいつとの因縁も、できればもう今回限りにしときたいところだが……まあ、あつちはあつちで、物理的というか、皆殺し的な意味でそういうの断ちにくるだろうからな……

「何人が拾つて『商品』にしようかと思つてたが、やめだ。雄英に、特に今年の1年に関わるとろくなことがねえ」

そりやそうなるようなことばっかしてっからだだろうが……しっかし、よりによつてこいつが相手か……

近くに居るのは、常闇、八百万、塩崎……そして私。

相性、いいとは言えないんだよなあ……この面子で、こいつが相手だと……

よそに助けを頼もうにも、よそはよそで……

「まだ学生でコレとは、未恐ろしいこった……だがまあ、将来の厄介者を事前に摘んでおける機会だと思えば……それも悪くはないか」

「ぶっ殺す……おい、クソ髪、半分野郎、手伝え」

「……まあ、やることは変わらねえか」

「こいつら2人共……っ！ いや、いい！ ここまで来たら俺も最後までつき合うぜ！」

爆豪、轟、切島がウォルフラムと対峙し、

「わあい、また会えたね、梅雨ちゃんにお茶子ちゃん！ しかも他のお友達もいるー！」

「けろ……私達は会いたくなかったけどね」

「うん……流石にもう、意味わからへんもん。怖いし」

「合宿でこんなのに絡まれたのか……災難だったね、麗日も蛙吹も」

麗日、梅雨ちゃん、取陰がトガヒミコに絡まれ、

「俺の相手がこいつか……気でもきかせてくれたつもりか？」

「そんな奴がいるとしたらよっほどのバカだな。今回は俺もいる上に……ちよつと諸事情でブチ切れ中だったのに」

「……………」
相澤とマイクが、USJを襲撃してきた黒い脳無（他、脳無数体）の前に立ちふさがり、

……そして、

「ちよいちよい会う機会、見る機会があった……けど、こうして最初から真正面から向かい合うのは、何気に初めてかもしれないねえな。USJは、そんな雰囲気じゃなかったし」

「死柄木……！」

緑谷と、死柄木。

何だろう……まるで宿命の敵同士みたいに、真剣な顔で向かい合っている。

「君の生徒達と、僕の生徒やその部下たち……一体どんな戦いになるのか……楽しみじゃないか。言うまでもないかもしれないが……君も負けてはいられないぞ、オールマイト」

「心配するな……貴様をさつさと倒して、私も彼らにお節介を焼かせてもらって、全部！ さつさと！ 終わらせるだけだ！」

それら全てを束ねる、まさしく『頂上決戦』に挑まんとする構成。オールマイトと、オール・フォー・ワン。

まさしくこれらは……この闘いは……『最終決戦』って奴だろう。

長かった夜を締めくくる、しかしそれまでで一番ヤバい戦いが……いよいよ始まろうとしていた。

第143話 スーパーヒーロー大戦

「死ねエ!!」

そんな、A組一同にとっては聞きなれた罵声と共に、大威力の爆破が放たれ、前方の広範囲を瓦礫ごと吹き飛ばす。

が、その中心に突如として立ち上がった、瓦礫と鉄屑の壁が、それを防いでその使い手を守る。

「おいおい、お前さんホントにヒーロー志望かよ?」

かと思えば、その半分崩れた壁が形を変え、何本もの触手——ただし、金属製で超重量のため、色気は皆無。殺傷力だけだ——となつて爆豪目掛けて襲い来る。

今度はそこに氷の壁が割り込み、受け止める。

しかし、質量と硬度の差ゆえか、ほとんど時間を稼ぐこともできずに碎かれ、貫かれてしまう。

だがその時には既に、轟も爆豪も、壁の背後から退避していて無事だった。

「それとも、思うように戦えねえからイラついてんのかい?」

「いや、爆豪は大体いつもこんなんだな」

「そうかい。そりやなんというか……死柄木の奴が目をかけて勧誘しようとしたのも頷けるな」

「寝言は……寝て死ね!」

今度は、貫通力に優れた『徹甲弾』でウォルフラムを狙うが、即興で作る壁では防げないと見るや、ウォルフラムはコートを翻してそれを回避し、同時に手に持った金属を変形させて投げナイフのような形状にして投擲、爆豪と……反対側から迫ってきていた切島に同時に投げつける。

爆豪は爆破による爆風でそれを回避し、切島は体を『硬化』させて強引に突破。そのまま拳を握りしめて突っ込んでいく。

「効かねえよ、そんなもん! 『烈怒頑……』」

「そうかい、じゃあコレならどうだ」

が、次の瞬間ウォルフラムが懐から取り出したのは、何やら機械仕掛けのギミックらしきものが見ついたナイフだった。

自分の胸元に向かって突き出されるそれに、言いようのない嫌な予感を感じた切島は、とつさに技をキャンセルして、『硬化』しているにもかかわらず、全力で回避した。

コスチュームの仕様上、むき出しの胸元をかすめるようにナイフが突き出され……

「熱っづ……がああ!？」

かすめた瞬間に、刃の部分に火花が散り……放たれた電撃が、僅かにはあるが切島の体を走って怯ませる。

「クソ髪！ 気張れ！」

動きの鈍ったところにウォルフラムの追撃が、今度は首元を目掛けて迫るが……そこに、爆豪がまたしても大威力の爆破を放った。切島も巻き込んで。

ウォルフラムは寸前で回避し……それを食らったのは切島のみ。しかし、直前の一声で、それだけで何をするつもりなのか察した切島は、全力で全身を『硬化』させ……衝撃はあつたものの、爆破で傷を負うこともなく、その場を離脱することに成功していた。

「悪い、助かった爆豪！ にしても……何だ今の……スタンガンか？」
「……『I・アイランド』のエキスポに同じのが展示された。物理攻撃が聞かない『敵』への対処用サポートアイテムの、ナイフ型スタンガン。日本じゃまだ発売されてねえ奴だ」

「裏稼業なんぞやってると、お前さんみたいに単に真つ正面からの戦闘じゃあ苦勞するような奴が敵に回ることも多くてな、悪いが手馴れたもんさ。俺をこの平和ボケした国の、お行儀のいい『敵』なんぞと一緒にするなよ……小僧共」

轟の考察を補足するように言うウォルフラムは、地面を蹴って走り出す——と見せかけて、踏みつけている部分の瓦礫の金属を操って、踏み出す以上の速度で、轟と切島に一気に迫る。

咄嗟に轟が氷の壁で防御するが、ウォルフラムは金属の足場の一部分を横に伸ばして回り込むようにして回避、横合いから襲い掛かる。

しかも、もともと伸びていた足場はそのまま伸ばしたため、一瞬横に気を取られた隙に、それが氷壁を突き破り……反射的に轟をかばった切島がそれをその身で受ける。

ダメージは殺せたが勢いは殺せず、そのまま轟を巻き込んで突き飛ばされて地面に転がった。

爆豪が助けに行こうとするが、轟が作った氷の残骸が邪魔なのに加え、ウォルフラムが操る金属塊が剣山のように飛び出してきて妨害する。

その間にウォルフラムは、いつの間に取りだしたのか、空いていた方の手に手榴弾……それも、ピンが抜けたものを2つ持っていて、それを轟達目掛けて投げつけてくる。

切島は『硬化』すればダメージはほとんどないだろうが、轟はそうはいかない。しかも、切島と密着している今の状態では、氷による防御も使えない。

『個性』は大したもんだが……経験不足だな。場数も錬度もまだまだ足りてねえ」

「すまん、あいにくとそいつはまだ……反抗期が終わっておらんのだ。教育不足は認めよう」

が、その瞬間……手榴弾が爆発するよりも早く、爆炎の奔流、とても呼べそうなすさまじい炎が、針の孔を通るような正確なコントロールで吹き付け……爆発の際の爆風ごと手榴弾を消し飛ばした。

その光景に驚く轟達。

ウォルフラムも驚きはしたが、とつさに金属の壁を作ったその炎の来た方向から身を守り……

「赫灼熱拳……『ヘルスパイダー』!!」

直後、炎が圧縮されたレーザーのようなそれが幾筋も襲い掛かり、その壁を紙同然に切り裂いた。しかも、それだけではとどまらず、背後にある瓦礫ごと消し炭にしていく。

「ちい……」

ウォルフラムは回避したものの、コートの端が焼き切られ、切断跡が嫌な臭いと共に黒焦げになっていた。

耐熱性の繊維が全く意味をなしていないレベルの攻撃に、表に出さないまでも戦慄する。警戒心を一気に最大まで上げながら、ウォルフラムは今一度、その攻撃が飛んできた方向を見た。

同時に轟達も見ていたそこに立っていたのは……陽炎が発生するのではないかというほどの熱を迸らせ、夜の闇を押しつける勢いの炎を放っている男。

「親父……」

右腕を前に突き出す形で仁王立ちしている、フレイムヒーロー・エンデヴァアの姿。

「これはこれは……No. 2ヒーロー様のお出ましか。バーの方で『最上位』と遊んでると聞いてたが……」

「あれしきの敵で俺を止められると思うな。……と言いたいところだが、苦戦したのは認めよう。そうだな、俺一人ならば時間もかかったろうし、手傷も負ったかもしれん。運がよかった」

「ほお？ その物言いだと……っ!？」

間髪入れず、上空から何かが来るのを感じ取ってウォルフラムは飛びのいてそこを避ける。

一瞬前までいたところに、鋭くとがった部分すらある超重量の瓦礫が叩きつけられ……同時に、暴風が吹き荒れて周囲を席卷した。とつさに作り上げた金属のバリケードが半分以上吹き飛ばされる勢いだ。

そして、その残った半分弱も、着弾した暴風の弾丸によって吹き飛んだ。

常人であれば立っているのはおろか、目を開けているのすら辛いかもしれない暴風の中、ウォルフラムは気配を感じた上空を見て……

「おいおい……流石に予想外だぞ。何でこんな所に、ドイツ軍のエアオブエースがいる……?」

「貴様が気にする必要はない、さっさとやられろ。それが嫌なら……死ぬ」

旧式のライフル銃を構え、風を纏って空中に浮遊している……軍服

姿の、金髪の幼女。

戦場に似合わない愛らしい見た目ながら、放っている威圧感や、先
の言葉に乗っていた殺意は、完全に本物というミスマッチな特徴を持
つ、ドイツ軍所属のトップヒーロー・シルバーピクシーこと、ターニャ
だった。

爆豪が口癖のごとく言う『死ぬ』と違い、本当に殺す気で放たれる
言葉に加え……先の瓦礫の弾丸も、直撃すればウォルフラムを殺すだ
けの威力を持っていた。

ためらいなくそれをやってのける彼女の襲来に……正面に立つて
いるエンデヴァーの存在もあり、ウォルフラムは迷いなく、警戒レベ
ルを最大まで上げた。

『最上位』をこれだけ早く突破してここに来れたのはそういうわけか
……これはちと、余裕がなくなってきたかもな』

「親父、あの子は……ヒーローなのか？」

「見た目で判断してはいけない者の筆頭例だがな。それよりも下がっ
ている焦凍。爆豪達もだ……お前達ではアレの相手は、荷が重いどこ
ろではない」

「アア!? ざけんじゃねえ、俺達はまだ……」

「彼我の力量差、戦力の適切な配分……状況を鑑みた適切な対応の選
択もできんようでは早死にするぞ、小僧」

「んだとこのガキ! つかどう見てもテメエの方が年下だろうが!

誰が小僧だ!」

「待って爆豪! エンデヴァーさん、見た目で判断するなって言っ
てただろ!?! プロヒーローみたいだし、あれで多分俺達より年上かも
しれ……」

「知るか! そーだろうと関係ねえ、俺に指図すん……」

と、爆豪が言い終えるよりも前に、そのあたり一帯を、地震のよう
な振動が襲い始める。

はつとして見ると、ウォルフラムの周囲一帯の地面がうねるように
動き……無数の金属塊が、極太の触手のようになって立ち上がってい
た。その中心で、即興で作った足場に立ちながら、ウォルフラムはあ

たりを見下ろして寧猛に笑っている。

その足元には、薬品か何かが入っていたと思しき、注射針付きのアンプルが落ちていた。

それを見たエンデヴァーとシルバーピクシーは、何が起こったのか察して舌打ちする。

「……ちっ、『個性強化薬』か……厄介な」

「しかもあのアンプルのデザイン……欧米で出回っているタイプだな。アジア製の粗悪品とはわけが違う……強化幅も、持続時間もだ」「よく知ってるじゃねえか……シカゴのブローカーから買い付けた上等な品だ。1本1万以上する一級品、俺の切り札だが……お前さん達になら惜しくない」

「……1万って、そこまででもなくね？ 俺でも買えるぜ？」

「アメリカで買ったつってただろうが、クソ髪。多分ドルだ」

「日本円で100万かそこらか……そりゃ確かに切り札だな」

どんどん、振動が大きくなっていく。

周囲の地面から、めくれ上がるように金属が湧き出していく。

「こっからは油断はなしだ……巻き込まれて知らねえうちに赤いシミになってても文句は言うなよ……その2人が相手じゃ、俺もさすがに全力でやらざるを得ないんでな！」

まるで、鋼の巨人でも従えているかのような、凶悪極まりない質量攻撃が始まる。叩きつけられる金属の腕、あるいは触手は、1本1本、一撃一撃が家すら粉々にする威力。

それを前に、逃げる暇すらなくなった爆豪達を含め……ここからが本番だと、そこにいる全員が思っていた。

☆☆☆

「オツツラアアアア!! 『俺拳』！」

「ぬぐっ……流石は雄英、金の卵というわけ……か！」

そこから離れた場所では、刃物を相手に拳が金属音を打ち鳴らし、火花を散らす戦いを繰り広げていた。

全身を金属化した鉄哲が、真正面からスピナーに殴りかかり、繰り出される刃物攻撃をもともせず、両の拳で攻め続けている。

「効かねえつつんだよそんなモンはよオ！ 相性最悪だぜ、俺とお前ってばよオ！」

「刃物の扱いもなつてねえしなア！」

「うお!？」

そして、彼と連携して鎌切が踏み込み、『刃鋭』の個性で体から飛び出す何本もの刃を振りぬいて舞うように切りつける。

相性の悪さに加えて、武器、リーチ、手数……その全てで上を行かれている現状に、スピナーは防戦一方になっていた。

どうにか立ち回りを工夫して距離をとっても、その瞬間第三者が攻撃を仕掛けてくる。

横合いから飛び込んできて、突き出された拳……それが、いきなり巨大化して襲ってくる。

「鉄哲！ 鎌切！ 立て直して！ フォーマーシヨン元に戻せ！」

「おう、すまねえな拳藤！」

「言われなくてもすぐにやってやるよオ！ 切り刻んでやるぜこのトカゲ野郎お！」

「貴様こそトカゲみたいな見た目だろう……がっ！ くっ、3対1……流石に余裕がないな」

「ガチの喧嘩、それもてめえらから売ってきたんだ、泣き言言うんじやねえぞトカゲ『敵』ンン！」

「……トカゲトカゲ言うのやめない？ 取陰に悪い気がしてきた……いや、何となくだけど……っ、また来たか！」

と、拳藤が何かに気づいて背後を振り返ると、周囲で暴れまわっている脳無のうちの何匹かが、こちらに狙いを定めて飛びかかってくる光景だった。

それに同時に気づいた鉄哲が、スピナーの相手を鎌切に任せ、拳藤の援護のために飛び込んでいく。

スピナーが3人を相手に戦い続けていられる理由の1つがコレだった。A F Oが大量に呼び出した脳無がそこら中において、通りが

かつて攻撃を仕掛けてくるのだ。

幸い、今まで白い個体……下級か中級までしか来ていないが。

尾白や庄田など、他の生徒が相手をして着々と数を減らしてはいるが、さすがに元々の数が多い上に戦い方も多彩、タフネスもあるため簡単にはいかない。

「厄介だが関係ねえ、俺達は俺達にやれることをやる！ あつちは……あつちで戦ってる奴らに任せてな！」

「ひゃひゃひゃひゃひゃ、そつちは任せたぜ2人共！ 俺はこつちの奴を切り刻む！ トカゲつぽいから切っても再生しそうだが、もしそうなくても何百回でも斬ってやるぜえ！」

「コイツつ……本当にヒーロー志望か!?」

☆☆☆

一方その頃、そのトウワイスが戦っている場所ではというと、

「うわあああああ！ 何なんだよ今年の雄英はよおおお！ なんてこんな、オイラ達ばかりこんな目に遭うんだよオウ！ もおやだつっんだチクショー!!」

「はっはっは、ヒーローが何泣きわめいてんだよなっさけねえな！ わかるぜその気持ち、今は思いつきり泣いていいんだぜ少年！」
「いやそれどつちだよ」

瀬呂の放ったテープや、峰田の『もぎもぎ』をかわして、手首に仕込んでいるメジャーを鞭のように使って攻撃してくるトウワイス。

しかし、呆れたり泣きわめきながらも、2人も訓練を積んでいるヒーロー科生徒、単調な攻撃に当たってやられるほど弱くはない。

（こいつ……戦闘能力は高いタイプじゃないな。物間の奴が言ってたことからして、恐らくコイツが、敵を増やす『個性』を持つてるって奴だ。けど、それを使う気配がねえな……何でだ？）

戦いながらも、冷静にトウワイスを観察する瀬呂。

一方で、トウワイスも支離滅裂な言動からはわかりづらいが、かなり焦っていて余裕がない。

(チッククショーはこっちのセリフだっつーの！ こいつら2人とも、雄英の中じゃそこまで強くなさそうだからいいけどよ……今もう『2人』増やしちまつてる！ 黒霧と、戦闘開始直後に増やしたコンプレス……どっちも今どこにいるのか分かんねえけど、どっちもまだ消えてないのはわかる……から、新しく誰かを出せない！ あーもうちよつと考えて使えよかつた！)

トウワイスの『個性』……『二倍』は、耐久力以外全く同じ状態で、あらゆるものを『増やす』ことができる。しかしその制約として、『1度に2つ以上増やせない』というものがある。

ウォルフラム達が戦線離脱等の緊急避難のために連れて行った、黒霧。

加えて、この闘いが始まった直後、倒れていた茶毘を回収するために増やしたコンプレス。

これで2人。そして、トウワイスは自分の意思で複製を解除することができない。増やしたものは、ある程度ダメージを与えない限り消えない。

この性質は、彼のあるトラウマの元にもなっているが……今は置いておこう。

この性質ゆえに、どちらかがダメージを負って消えない限り、これ以上『個性』を発動できないのだ。

そのため、今はトウワイスは、仕込み武器で戦うしかできない状態なのである。

(だが、見方によっちゃ都合でもある……黒霧の本体が気絶しているなら、移動手段になるコピーの黒霧は逆にいらなかった方がいい。いざって時に逃げられる。……何せ黒霧は、測った直後しか『二倍』にできねえからな……なら、むしろいらなかった方がいい)

彼の『二倍』のもう1つの制約は、イメージがはつきりできていないと複製できない、というものだ。

身長、胸囲、腹囲、足のサイズなど、しっかり測ってしっかり見て、初めて二倍にできる。

トガヒミコや茶毘、コンプレスなどについては、事前にその測定や

観察を終わらせているため、その気になれば増やせる。コピーを作つて戦わせることができる。

ただし、これは『測定』と『イメージ』が両立しない場合には不可能となる。

例えば、死穢八斎会が作っていた『個性破壊弾』だが……その実物をトゥワイスが手にしたとして、じっくり見てすっかり大ききやら何やらを測つたとしても、『個性を破壊する弾丸』というイメージが定まらない以上、その複製は不可能なのだ。

同じ理由でコピーできないのが黒霧である。彼に関しても、トゥワイスは『測定』も『観察』も終わらせているが、黒霧はその体そのものが霧状であるという、異形型が多いこの個性社会の中でも際立って異質な見た目というか体構造を持つており、それが邪魔して『イメージ』の部分が上手く定まらないのだ。

トゥワイスが今回『増やした』黒霧は、『測定』の直後、さらに『個性』を使ってワープする光景、その使い方やら何やらをよく見て、視覚から得たイメージが新しく鮮明なうちに急いで実行してようやく成功したものなのだ。しかも、それでも2度ほど失敗してしまつている。

ゆえに、トゥワイスはいつでも黒霧を増やせるわけではない。例えば、『二倍』のストックに空きがある状態であつてもだ。

それを踏まえれば、脱出経路である黒霧が今こうして、コピーの状態でも無事であることは好都合とされる。前向きに考えて、トゥワイスは改めて瀬呂と峰田に向き合った。

「そおらどうしたヒーローの卵共！ そんなんじや俺は倒せねえぜ、覚悟決めてかかって来いよ！ あ、でも別に帰つてくれてもつていうか、今日のところはここまでにしてくれてもいいのよ？」

「うるせえええ！ こうなりや自棄だチキショー！ お前『敵連合』の中で一番弱そうだから他行くのやだしこのままやったらー！」

「なんてこと言いやがる、舐めてんじやねえぞこのチビ！ 大正解だ！」

「……コレ、ツッコまねえ方がいいのか？ こいつの口調……」

☆☆☆

「つたく……やりづれえったらありやしねえ……」

「それはありがとう、最高のほめ言葉だよ、三流芸人さん！」

軽快なステップで飛び退って回避するコンプレス。

それを追う物間は、右手から鱗の弾丸を放ってコンプレスをけん制しつつ……左手には、パチンコ玉のような大きさの球体をもっている。

コンプレスにとっては、なじみ深い物体だ。何せ、自分が個性で作りに出すものなのだから。

ただし、それを作ったのはコンプレスではなく、『コピー』によって『圧縮』をかすめ取って再現した物間なのだが。

そして中身は、先程トウワイスが作り出した、コピーのコンプレスである。乱戦の中、一瞬の隙について個性をコピーすると同時に、『圧縮』して閉じ込めたのだ。

それを見せつけるようにしつつ、ポケットにしまう物間。

『個性』を『コピー』するとね……大まかにではあるけど、その使い方や条件、弱点がわかるんだ……コイツをこうして、倒さずに封じておけば、あの全身タイツはこれ以上敵を増やせない。増やせたとしてもその時は、あっちの『出入口』が消えたってことだ……それはそれで都合」

「それで俺の『個性』をかすめ取ったわけか……手品の種を暴くとか、奇術師泣かせのつまらねえ客だぜ、おい。無粋つてもんだろ」

「知らないね、そんなのはバレるような安いトリックしか用意できない方が悪いのさ。それよりもほら……ボーツとしてると危ないよ？」

「……!? おわ!？」

——ドクン!!

咄嗟にその場から飛び退ったコンプレスは、間一髪で耳郎の音響攻撃をかわすが……それを追って柳が瓦礫を飛ばし、さらにその逃げ道を塞ぐ形で物間が鱗を放つ。

ちっ、と舌打ちして、コンプレスは懐から取り出した玉を投げつけ……そこに『圧縮』されていた廃材を使って鱗を防ぎ、その下をくぐるように逃れる。

そのまま、一番近くにいた耳郎に駆け寄ろうとするが、今度はそこに物間が作ったのであろう玉がこんこん、と転がってきたことで急停止し、警戒する。

が、そんな彼をおちよくるように、玉から出て来たのは……小さな小石1個だけ。

その間に、3人は距離を取ってフォーメーションを組みなおしてしまっていた。

(……っ……こいつ、俺の手を警戒して……徹底的に俺を遠距離で削る気だ……加えて、俺だからこそ警戒せざるを得ないような手や、それを逆手に取った手も……やりづらい……！)

(……毎度毎度アホなこと言って突っかかってくる変な奴、くらいにしか見れてなかったけど……やっぱ謀略やらせたらコイツ一級品だわ。今だけは頼もしい……)

「人を煽って手玉に取ることで、僕の上を行けると思うなよ、エセエンターテイナー……あんたとあの全身タイツは、単純な戦闘能力以上に、その『個性』や立ち回り方が、戦場を引っ掻き回しかねない厄介な存在だ。ここでもうしばらくつき合ってもらおう」

☆☆☆

「やー、また!? 邪魔です、どいてくださいー!」

「どいてって言われて素直にどいてやる奴はいないっちゅーの!」

無数に分裂した取陰のパーツが飛び交う中で、その1つを斬りつけて攻撃するトガヒミコ。しかし、直前でそのパーツが自分からさらに2つに分かれて、刃が素通りする。

「むー……また! 切れない! 刺せない!」

「だろっね! だから私があんたの相手してんだよ……まあ私だけじゃないけどさ」

その直後、背後から蛙吹の下が伸びてきてトガに襲い掛かる。

それを察知したトガは、振り向きざまに斬りつけようとナイフを振りかぶるが、着地寸前に足元に割り込んできた取陰のパーツがバランスを崩させ、鞭のような舌が直撃する。

体勢をさらに崩したところを目掛けて麗日が飛びかかるが、トガはわざと倒れて、転がってから起き上がって体勢を元に戻すと、一気に何本もナイフを投げて麗日をけん制。

「わあ、来てくれたんだお茶子ちゃん！ やっぱり私達友達だね、大好き！」

「この状況でどないしたらそんなセリフ出てくるん!？」

殺気丸出しで攻撃しながら言うセリフでは絶対にならない、と麗日が思っている前で、トガは妨害に飛んでくる取陰のパーツを無視して突撃し、手に持ったナイフを麗日に突き立て……る直前、その切っ先に取陰のパーツが割り込んでかばった。

しかも、ただのパーツではなく、腰の部分、ベルトのバックルがある個所をかばったため、きいん、と甲高い音を立ててナイフの軌道がそれ、麗日を外れる。

その一瞬の間隙について、蛙吹が麗日を舌で回収した。

「っ、と……ごめん2人共、失敗してもた！」

「気にしないで。あの子、近接戦闘は相当レベル高いわ……油断せずに行きましょう」

「っ、う〜！ またですか！ 邪魔しないでください！ 血も見せてくれないのに！」

「何その文句……っっていうか、友達の血なんて見たいもんじゃないし、そりゃ邪魔させてもらうに決まってるでしょーが」

「何ですか、血だらけでポロポロの方がかっこいいし可愛いのに！」
「もうこの時点でなんか価値観について共有するの無理な感じだわー……」

「うわー、とでも言いたげな三白眼になる取陰だが、そこにさらにトガが、心底不思議そうな顔で、

「何ですか？ あなた達も緑谷出久君がよく血だらけでポロポロに

なつてかっこいいから好きになつたんじやないんですか?」

「ちやうわー!」

「動機のところはね」

と、すかさずツツコミを入れる麗日と蛙吹。

だがよく見るとわかるのだが、2人とも……さらに、その2人から少し離れたところで、分割した体を元に戻して時間制限をリセットしている取陰も、少しだけ顔が赤くなっている。

このようなやり取り、ないし指摘がなされるのは今が初めてではない。

どういう理屈、ないし思考によるものなのかはわからないが——あるいは単純な勘によるものなのかもしれない——トガヒミコは、この3人の思い人が緑谷であるということに気づいていた。

そしてその上で、自分も彼が好きだということを告白し……そこから特に話題をつなげることもなく、こちらを普通に殺しに来ている。

脈絡が全く見えないとか、好きになつた理由が物騒すぎるとか、そもそもその価値観は何なんだとか、色々ツツコミどころ満載ではあるのだが、ひとまず麗日たちは、自分達の目の前にいるのは『敵連合』のメンバーであるという点のみを考えるようにして動いていた。

これがもう少し話を通じるような相手であれば、もう少し色気、ないし彩のある展開に……言ってみれば、『あの人は渡さない!』的なそれになつていたかもしれないが、いかんせんそこにいるまでに話が続かないので、突発的にこういうセリフが出て話題になる時以外は、まともな戦闘である。

そんなわけで、この手の会話の先に実のある結論の類が待つていないことは承知している取陰が、気を取り直して再び体を分割させ、麗日と蛙吹の援護のために散開させ始めたところで……予想外の横槍が入ってきた。

「んもお、コイバナなんかしちやつて、青春してるわねえあなた達……でも、油断大敵よ?」

「っ? なつ、コレ……わああああ!」

「っ!? 取陰さん!」

ばらけさせたパーツが、本体ごとまとめて引つ張られていく。

その先にいるのは、巨大な磁石のような武器を構え大柄な男……マグネだ。

「こっちにいらっしやい？ 私とも女子トークしましょうよ」

「つ……そうか、マンダレイの話にあつた……」

マグネの『個性』は、周囲半径4.5m以内の任意の人間に『磁力』を発生させることができるというもの。男ならS極、女ならN極となる。

マグネ自身には磁力は付与できないが、彼（彼女？）の武器である巨大磁石に向かって引き寄せるといふ形で、相手に付与した磁力を利用できる。

それを利用して、取陰にN極の磁力を付与し、自身の持つ巨大磁石のS極に引き付けていた。

「いやあんた男じゃん！ 何が女子トークだよ！」

「んまつ、なんて差別的な発言なのかしら！ やーねイマドキの娘って、心は乙女なんだったことがわからないのかしら？」

「別にそれは結構ですけどね……だからってこの子たちに手上げるのは違うんじゃないの？」

そんな、会話に割り込んできた声と共に、何かが猛スピードでマグネに向けて突っ込んでいく。

それに反応し、とつさに磁石を盾にしたマグネは、突っ込んできた何かを防御するが……その拍子に『個性』が途切れ、取陰は引力から解放された。

弾かれたようにその場から飛び退り、その小さな影は取陰とマグネの間ですたつと降り立つ。

その姿を見て、ある者は困惑し、またある者は驚愕した。

「お、女の……子？」

「？ 誰ですかあ？ 迷子？」

「……けろ？ どこかで見たような……」

「あら、あらあらあら……すごい人が来たわねえ」

「えっ、うそ……び、ビューティービスケット!? 本物!?」

「うーん、認知度40%! あたしもまだまだわね」

戦場、と読んで差し支えないその場に似合わないゴスロリ調の服に身を包んだ、見た目はかわいらしい少女にしか見えない、しかし中身は歴戦のプロヒーローであるその者の名を、マグネと取陰の2人だけが知っていた。それを聞いて少しして、蛙吹も思い出す。

「え、取陰さん知つとんの?」

「むしろ麗日知らないの!? 美容関係のビッグネームだよ、戦闘も超強いとは聞いてたけど……」

「けろ、そう言えば思い出したわ。あんまりメディア露出自体はないけど、化粧品とかいろいろんなものの開発現場で活躍してるって、時々ニュースで見るわね」

「そうなんですかあ……すごい人なんですネ」

「ええ、多くの女の子の憧れよ。……でも、ここでこうして遭ったってことは……残念だけど敵みたいね」

「そゆこと。慕ってくれてるのは嬉しいし、あなたみたいなのに理解がないわけでもないけど……自分の欲望のために他人様に迷惑をかけて白々しくも笑ってるようなのは、男だろうが女だろうが論外つてもんよ。一応聞くけど、自首するつもりはあるかしら?」

「あつたらこんなことしてないわよ……ふふっ、貴方にお相手してもらえるなんて光栄ね。一生の思い出になりそうだわ」

相変わらずの軽口で言いつつも、磁石を手にして油断なく構えるまマグネ。

その様子を見て、ある程度予想はできていたのか、特にビスケは何も言わず……ため息を一つだけつくと、自分も拳を握って構える。

「お嬢ちゃん達、一応自力で戦えてたみたいだし……そっちは何とかなさいな。こっちの漢女おとめは私が相手しておくからね。その後で合流してあげる」

「何か語感に違和感が……」

やや気になる部分がありつつも、介入して来ようとしたマグネに対

しては、参戦してきたビスケが相対することとなり……麗日、蛙吹、取陰の3人は、再びトガヒミコとの戦いに戻るのだった。

☆☆☆

——ドツゴオオオオオン!!

爆弾でも爆発したかのような衝撃。地面ごとはじけ飛ぶ無数の瓦礫。

それに巻き込まれまいと必死に回避、あるいは迎撃する、プロヒーローと雄英生徒達。

「だーもう！　ここだけ怪獣映画だよ！　割り込める気しない！」

「泣き言を言っていては変わりません、栄陽院さん！　私達は私達にできることをしましょう！」

「同感ですわ！　と行っても、現状それが中々ないのが辛いのですけど……」

永久、塩崎、八百万の視線の先では……今まさに永久が言った通り、『怪獣映画』をほうふつとさせる光景が広がっていた。

『砕け散レエエエエエ!!』

『ヴォアアアアアア!!』

ぶつかり合う、2つの巨体。

片方は、夜の闇によって力を増した、常闇の『黒影』ダークシャドウ。

そしてもう片方は……個性『鯨』によって、人と鯨の中間のような姿……しかも、『黒影』が小さく見えるほどの大きさになった、キユレーターである。

フルパワーの『黒影』と真正面から殴り合い、その上押し返すほどのパワーとタフネスで、先程から何度も押し返している。

その戦いで、『黒影』を支援するために、永久が、ナインから奪った『青いドラゴン』——正式名称『空遊咬鯨・サメラ』や、塩崎が大量の茨を使って立ち向かうも、どちらも容易く蹴散らされ、やはり押し返されてしまう。

単純な力と力のぶつかり合い……だからこそ、『地力』で負けてしま

うほどの相手になると、単純であるがゆえに逆転が難しい。

夜の『黒影』は、この面子の中では最大火力である。それすら通じない相手となってしまうと、塩崎の物量も永久の馬力も、八百万の武器もろくに効果がない。

塩崎に至っては、今が『夜』であるという点が致命的だった。彼女の『ツル』は、光と水が十分にあればいくらでも髪……ツルを生やせるものの、この時間帯、月と星、それに街灯のわずかな光では限界がある。

ある程度今戦えているのは、八百万が作ったライトと、永久が渡した『エネルギー』によるものであった。

今が昼であれば、永久の『気象操作』で天候を変えるのも手だが、さすがに時間帯までは変えられないし、仮にそれはできたとしても、今度は『黒影』が光でパワーダウンしてしまう。

(常闇と塩崎って、互いの弱点を補い合っではいるけど……共闘するとなると相性悪いな！ いや、仮に塩崎が万全の状態で参戦できたとしても、あのパワーを相手に戦うのはそれでもしんどいか……)

永久達の見ている前で、強烈な尻尾の一撃で『黒影』がなぎ倒され、それを追撃しようとするキュレーターに、永久が『サメラ』で迎撃し、立て直す時間を稼ごうとするが……その直前、空から何か巨大な影が舞い降りて……いや、飛び込んできた。

それも、2つ。

「キャニオンカノン!!」

「ドラゴンパニッシュ!!」

倒れた黒影を飛び越える形で、巨大化したMt.レディと、『ドラゴン』の個性を開放したリューキュウが突撃し、その威力でキュレーターにたたらを踏ませた。

距離が開いたところで、リューキュウはドラゴンの姿のまま着地する。

Mt.レディも同じようにするが……既に浅くない傷を負っているらしい様子の彼女は、着地と同時にふらついて片膝をついた。

「無理するのはよしなさい、Mt.レディ。AFOとかいう奴にやら

れた傷、結構きついんでしょ?」

「後輩達が頑張ってるのに寝てたりなんかできません。ここでやらなきや女がすたる!」

「……君の出身校は英雄ではなかったと思うが」

「プロヒーローとその卵なんだから十分先輩後輩です! 異論は認めない! ……っていかそんなこと言ったら、ギャングオルカさんも結構フラフラでしょう?」

さらにそこに、同じく傷を負っている様子のギャングオルカも追いついて言った。

3人並んで、常闇と『黒影』を含む生徒達をかばうように立つ。

「鬱陶しいのがワラワラと……人の仕事を増やすんじゃないよ。カス共が……!」

その光景を見て、苛立ったらしいキュレーターが、超音波を放って全体を一度に攻撃してくる。

人間の形態で放つよりも俄然強力なそれは、最早特大の衝撃波と言つていいもので、とつさに同じ超音波で迎撃したギャングオルカのそれを容易く打ち消し、永久達をかばって盾になったリューキュウとMt.レデイの全身に打ち付け、それも乗り越えてまで届く。

「キヤアアアアアア!」

「んなるつ……コレ、下手したら全力のマイク先生以上……つ!? Mt.レデイ、大丈夫ですか!」

どうにか耐えていた永久の眼前で、やはり傷が深刻だったのか、立ち膝でもいらなくなつたのか、ふらりと倒れ込むMt.レデイ。同時に『個性』も解除されてしまい、普通の成人女性サイズとなつた彼女を、頭を打つ直前で、駆け寄つた永久が受け止めた。

「つ、ぐ……あ、ありがと……でも、あんた達、早く逃げなさい……戦つてたなら、わかると思うけど……ガチでヤバいから……」

「そうしたいのはやまやまですけどね……背を向けて逃げるのも危ないでしょ、アレ。それに危険度からして、プロヒーロー数人がかりで止めるような奴なのに……」

「自分達だけ逃げるのは嫌? あー、わかるわかる、私もよくあるもん

そういうこと……でもね、だからこそその気持ち……」

「とりあえず傷治すんでちよつと歯食いしばってもらつていいですか
Mt. レディ？」

「あの、ちよつと今私割といいこと言うところだったんだけど……つて、
え？ 治せるの？ つていうか、歯食いしばるつて何……」

——バツン！

「言つて痛つだあああああつ!? ちよつ、何したの今!? なんか
めっちゃ痛つ……体バラバラになったかと思つ……あれ？ 痛くな
い？ てか……治つてる？」

と、『オーバーホール』によつて即座に治した……というか『直した』
ことで、コスチュームごと無傷の状態に戻ったMt. レディが、きよ
んととして自分の体を眺めたり、不思議そうに手を握つたり開いたり
していた。

その様子を見て、異形型ゆえ表情からはわかりにくいのが、驚いてい
るギャングオルカ。

「それは……傷を、治した？ 君の『個性』は増強型のはずでは……一
体……」

「あー、色々ありましてこんなこともできるようになってます。いや、
私自身よくわかつてないんですけど……あ、ギャングオルカさんも直
します？」

「……色々と気になるが、今はそんな場合ではないか。すまん、頼も
う」

「わかりました。ただちよつと、いやかなり、いやだいぶ……いやすご
く痛いですよ？」

「構わん、やれ」

——バツン！

マフィアか何かを思わせる白いスーツごと、今度はギャングオルカ
を『直す』永久。

ギャングオルカは、激痛が走ったはずにも関わらず、うめき声、身
じろぎ一つせずにそれを耐えると、短く一言『感謝する』と言つて……
キュレーターと戦っているリユーキュウに合流すべく駆け出して

いった。

それを見て、はつとしたように立ち上がるMt. レディ。

「いつけない、ブーツとしてる場合じゃなかった。よし、治療ありがとね後輩達！ でもここが危険なのは依然変わらないから……なるべく早く隙間見つけて逃げなさい？ あんた達は確かに優秀で強いけど、まだ私達大人に守らr……」

「Mt. レディさん！ 栄陽院さん！ 少しよろしいでしょうか!？」
「れる立場でつてよろしくないわよ!? 何なのさつきから人がいいこと言おうとするたびに!」

と、途中で割り込んできた八百万のセリフに、またしても言いたいことを邪魔されたMt. レディが、さつきより幾分元気になったツツコミを返すが、それすら気にせず八百万は、

「申し訳ございません。その……若輩の身で恐縮ですが、1つ提案……というか作戦がございます。上手くいけば、あの巨大な『敵』……キュレーターを倒す力になるかもしれません」

「! それマジ、八百万?」

「はい、ただ……」

そこまで行つて、八百万はちらりとMt. レディの方を見る。

やや機嫌悪そうな表情でふくれていた彼女だが、向けられる八百万の視線が真剣なものであることに気づき、たたずまいを直して聞く姿勢を取る。

「この作戦は……恐らく、Mt. レディさんを含めた、ここにいる全員が協力して初めて達成できるものです。生意気なことを言うようですが、もし叶うならば……お力添えをいただけませんか?」

「……言ってみなさい、一応聞いてみたげる」

「! ありがとうございます! では……皆さん、こちらへ! 簡単にですが説明します!」

と、どうやら八百万が立てた作戦を説明するために、後ろに控えていた面々にも、振り返って声をかけて……そこで永久は、さつきまでよりも生徒の数が増えていることに気づいた。どうやら、このわずかな間にここに合流してきていたらしい。

とすれば八百万の作戦とやらは、おそらくその、新たに合流してきた生徒達の『個性』も含めてのものなのだろう。そう、永久はあたりをつけた。

塩崎、常闇、それに……小大、泡瀬、黒色、そして青山。

そこに八百万自身と、永久、そしてMt.レデイが加わり……9人で円になったところで、八百万は自らの立てた作戦を説明し始めた。それを聞いて、永久は……

(やべえ、何それ!? 不謹慎は承知で……めっちゃ面白そう! 燃える!)

第144話 VS ハイエンズ

目の前で『クルルル……』と、唸るような鳴き声を口から漏らす脳無。

それも、USJですでに一度一戦交えているその個体を前に、イレイザーヘッドとプレゼント・マイクは、正面からだが油断なく構えていた。

「よりもよつて、相手することになるのがコイツとはな……リベンジを前にやる気は十分か、イレイザー?」

「あいにくとそんな感傷なんぞ持ち合わせちやいない。目の前にいるのが『敵』なら、ヒーローとしてやるべきことをやるだけだ」

「ごもつとも。そんじや早速……」

言い終える前に、脳無がドン、と地を蹴って突撃してくる。

相も変わらずすさまじい速度だが、USJで戦った時よりも遅い、と相澤にはわかった。人間離れしているが、目で追えないことはないし、対処もできる程度だ。

(何か月も警察で拘留されていたわけだからな……改造人間とはいえ、調整も何もなしじゃ、多少なり筋肉も衰えるか。それに……)

というより、既に対処は終わっている。

跳躍してきた空中で、突如として体勢を崩す脳無。

その足元、というより地面には……ビー玉のような金属のアイテムがいくつもばらまかれていて、バチバチと火花を散らしていた。

「撒き菱型スタンガン……踏まなくても上を通過しようとするだけで感電させる、モーションセンサー搭載の空中放電タイプだ。本来は暴徒鎮圧用だが……特別にリミッター外して、常人なら感電死確実レベルのをくれてやった。さすがに少しは動きも鈍るようだな……マイク」

と、相澤の合図に応じる形で、

『そのまま寝とけこのボケェ!!』

衝撃波すら引き起こす大声、それも指向性スピーカーでその破壊力を集中させた音の砲撃が脳無に直撃し、鼓膜を破壊、その向こうにある三半規管にまでダメージを与えた。平衡感覚を保っていられなくなり、倒れ込む脳無。

その直前に相澤が放った捕縛布が縛り上げ、身動きの取れない状態で倒れる。

その直後、未だ放電を続けている『撒き菱型スタンガン』の上に倒れてしまったがために感電し続け……しかもその瞬間、巻き付いた捕縛布が、よりぎつちりと巻き付いて、ほとんど完全にその動きを封じた。

よく見るとその捕縛布は、相澤が首に巻いているものではなく、新たにどこかから取り出したものであるらしかった。

「おお、何だありや……新武器だったのか。見た目同じだから気づかなかったぜ」

「通常の捕縛布用の合金繊維に加えて、ニチノール合金つてのを追加して編み込んだのである。熱に反応して変形する形状記憶合金……だったか。面白かったんで取り入れさせてもらった。加えて、さつきから『消し』続けてるから『超再生』も『シヨック吸収』も発動しない。そして……」

言いながら、トドメとばかりに相澤は、懐から取り出した拳銃を脳無に向けて撃つ。

しかし、発射されたのは弾丸ではなく、注射針付きのアンプルだった。命中し突き刺さったそれから、中に入っていた薬剤——即効性の筋弛緩剤が脳無に注射される。ほどなくして、脳無は全身の筋肉を弛緩させて動かなくなった。

『超再生』は外傷には強い。欠損レベルの傷すら問題にならないほどにな。だが毒や金属片など、体の中に異物が入っている場合には、それを排出することまではできない……以前にお前と戦った生徒達が突き止めた弱点だ」

「なるほど。そういやさつき合金も、お前んとこの八百万が期末で

……こんな仕事やってると、教えることも多いが教わることも多いってこつたな」

「ゴイツに言っても仕方ないがな。……命令を聞いて動くだけの頭しか残されてない、取り調べもできなかつた……人形だ」

「……こいつは、な」

「……わかつてる。だが言うな、今は……」

動かなくなった脳無を手繰り寄せ、追加で筋弛緩剤を注射して当分動けないようにし、さらに手元の捕縛布で念入りに縛ってから……ようやく『抹消』を解除。乾いた目に目薬をさして潤わせた。

そして相澤とマイクは、ふと、先程まで黒霧が転がっていた場所を——しかし、今は誰かが移動させてしまったのか、どこにもいない——見て、

しかしその後すぐに、自分達は今やるべきことがある、と思い直して動き出した。

☆☆☆

「ヘイNINJA！ こつちが片付いたから加勢に来た……つてうおお、こつちはこつちでやべーのと戦ってやがんな!？」

「っ、プレゼント・マイクに、イレイザーヘッドか！ すまん、情けない話だが……こ奴ら、拙者達だけでは手に負えん！ 手を貸してくれるとありがたい！」

2人が向かった先では、忍者ヒーロー・エッジショットと、ラビットヒーロー・ミルコが、それぞれ1体ずつの『喋る脳無』……『^{ハイエンド}最上位』と戦っている所だった。

ミルコが戦っているのは、背中から昆虫のような翅を生やした脳無だ。大きさは成人男性ほどだが、目にも留まらぬスピードで飛び回り、ミルコに加えて、グラントリノとルミリオンの3人を同時に相手をして、それでもなおとらえきれない速さで動き、かく乱している。

姿を現した時は人型だったはずだが、今のその姿は、人間と昆虫を足して2で割ったような形になっている。手は四本あり、その全て

に、カマキリを思わせる鋭い鎌がついている。一振りすれば、鉄骨の入った瓦礫を苦も無く両断するほどの威力・切れ味を持っていた。

一方、エツジシヨットが戦っているのは、こちらも最初は人型だったが……戦闘が始まるや否や、その体をスライムのような流体に変化させて変幻自在に攻撃してくる脳無だった。

しかもその体は金属質のようで、流体ながら重量と硬度を持たせた攻撃が、縦横無尽に繰り出される。時に刃、時に鞭、時に槍……形を変えて、エツジシヨットと、協力して戦っているファットガム、そしてサンイーターを追い込んでいた。

ファットガムとサンイーターは既に痛打を受けたのか、回避と防御で手一杯だった。

エツジシヨットも高速で動きながら、何度もその脳無の胴体を貫いたり、触手を撃ち抜いて狙いをずらしたりしているが、有効打になっ
ているようには見えない。

「イレイザー……こいつに『抹消』を……」

「もうやつてる……だが効いてねえ。こいつのこの変形……発動型
じゃなくて異形型だ」

「体そのものがもうそういう仕組みってことかい！　というかこい
つ、どこ殴っても貫いても効いてる感じせえへんで!?　どないしたら
倒せるんや!?!」

「まるでター○ネーターだ……全身を流体化できるなら、物理攻撃は
効かないってこと……ならもつと、熱とか他の……っ!?!」

言い終わらないうちに、サンイーター目掛けて迫っていた鈍色の触
手が鞭のように波打って振るわれ……とつさに腕に、手甲のようにハ
マグリの貝殻を発現させて防いだものの、どうにか1発分の衝撃を殺
して、貝殻は砕け散った。

範囲外に逃れはしたものの、受け止めた腕が痺れてしばらくまとも
に動かないと悟る。

「……所詮ハコノ程度。脅威足りエナイ様だな」

「ほお……言ってくれるやないけ……。このファットさん達が敵や
ない、ってかあ?」

「けど実際、向こうの攻撃は強力なのに加えて、こっちの攻撃はろくに通じない……非物理系の攻撃ができる、エンデヴァーや、波動さんあたりがいればあるいは……」

「難しいな、どちらも今は別なネームドと戦っているようだ。プレゼント・マイクは……あつちの昆虫の方に行っているか」
「……！」

エッジショットが言っている最中、ふと相澤が、何かに気づいたような表情になったが、それに気づいた者はいなかった。

そのまま、警戒は保ったまま、しばし考える姿勢に入る。

「諦メロ、抵抗シナケレバ一瞬デ済ム。抵抗スレバ苦シミハ長ク続キ、ソシテ無駄ニ終ワル」

「そう言われて諦めるようなヒーローなんぞおらんつちゅーねん！
人間舐め取ると痛い目見るでこのエセターミーター!! いや、体ドロドロやしT-2000かあ?」

「……内臓も頭部も、全て流体化して攻撃を受け流される。物理一切が通じないとなると、捕縛も、『千枚通し』も通じない……やはり、非物理系のヒーローの合流まで時間を……」

「……いや、俺に考えがある」

と、呟くように相澤が言った言葉に、その場にいた全員が、警戒は保ったまま、意識を向ける。

恐らくは、今の声が聞こえていたのだろう。流体の脳無の視線が向けられたのを感じながらも、相澤は懐から、あるものを取り出した。
「少しだけ、隙を作ってくれ。上手くすれば……これで決められる」

☆☆☆

「アハハ！ アハハハハ！ 遅イ襲イ！ ソンナンジャ捕マラナイヨ
！」

「待アてコラア！ ちょこまかと……こんの虫野郎！」

「熱くなるなよサギの嬢ちゃん！ 深追いしすぎると足持ってかれるぞー」

追いつけないスピードで飛ぶ昆虫脳無。ミルコの蹴りも、グラントリノの蹴りもかわされ、あるいは防がれる。

しかも昆虫らしく、甲殻も頑丈。命中した蹴りも痛打にはならない上、損傷はすぐさま『超再生』で回復されてしまう。

唯一当たる攻撃と言えば、

『止まれっつってんだろオがア!!』

音速で飛んでいき、しかも範囲攻撃が可能な、プレゼント・マイクの音波砲撃くらい。

それも火力不足ではあるが、僅かに動きを鈍らせることはでき……そこに、地面をすり抜けて突撃してきたルミリオンの拳がヒットする。

が、やはり帰ってくるのは、金属を殴ったかのような感触のみ。

「硬った……やっぱり、生半可な攻撃じゃ全く……っ!？」

「アハハハハ！ チョットビツクリシタヨ！」

間髪入れずに振るわれる鎌での連続攻撃を、ルミリオンは『透過』して回避し、離脱する。

「よし、アレなら当たるんだな！ おいDJ！ 次は私にやらせろ、ひ

るんだとこころを蹴っ飛ばす！」

「アア!? バカ言うなバニー！ できるわけねーだろが！」

「あ!?! 何で!?!」

「俺の音波砲撃は無差別攻撃なんだよ！ 味方も巻き込まれてんの！」

アレは音も『透過』できる通形だから連携になってるんであって、あんなん普通の奴が、特にお前さんみたいな耳がいい奴がやったら速攻で鼓膜破れるし、そもそもお前さんの動きも止まっちゃうわ！」

「何だよそれ、気合で何とかならねえのか?！」

「なるか! ……ってやべえ、来るぞー!」

「今度はコツチカラ行クヨ！」

4本の刃を構え、左右にジグザグな軌道で、しかし恐ろしいスピードで飛びながら向かってくる昆虫脳無。幾度もフェイントを入れて、迎撃に出て来たルミリオンとグラントリノをおちよくるかのようにかわし……飛びかかった先は、ミルコ。

それを察知したミルコは、逃げも隠れもせず、真正面からあえて懐に飛び込んで、薙ぎ払うような軌道で蹴りを放つ。

速度に加え、体重を乗せて放たれたその一撃は、振るわれた鎌2本を横から、腕の付け根から粉碎し、顔半分をも砕き割った。

が、元より痛覚すらない脳無である。その程度では止まらず、狂気を感じる笑い声を響かせて、残る2本の鎌を動かす。

位置関係から、1本はミルコの体には届かない。だが、もう1本の刃が、吸い込まれるように彼女の胴体目掛けて振るわれる。

体をひねってかわそうとするミルコだが、間に合わない。このままでは上手く行っても、腕1本は持っていかれる。

……と、悟ったミルコは、あろうことか回避を最低限にして諦め、腕一本くれてやるつもりでカウンターの蹴りを放つべく、足を振るい……

「忍法・千枚通し!」

——ドスツ!!

「……エ?」

しかしその瞬間、凄まじい速さで伸びて来た1本の錐のような何か——体を長く、細く、鋭く引き伸ばしたエッジショットが、今まさに振るわれんとしていた腕を貫いて軌道を反らす。

腕を飛ばすルートで動いていた刃は狙いをそれ、振り乱されていた髪の毛を僅かに切り裂く程度にとどまり……ミルコの足はかかと落としとなつて振り下ろされ、背中の翅と、そのまま首を粉碎して、昆虫脳無を地面に叩きつけた。

一瞬遅れて、ミルコや他の面々も、その乱入者に気づく。

「え、エッジショット!? あつちで、もう1体の『最上位』と戦ってたんじゃない? 倒したんですか!」

「いや、そういうわけではないが……」

「何だつていい、トドメ刺す。そこどけ」

疑問はあるが後回しにすることにしたらしいミルコは、腕と羽、顔

の半分以上を損傷してもなお動こうとする脳無に追撃を加えんと、エッジショットをよけて進もうとする。

既に生け捕りは不可能だと割り切り、頭を砕いて確実に息の根を止めるつもりで。

それを察したのか、はたまた単に回復までの時間を稼ぐためか、昆虫脳無は片方だけになった翅を動かし、半端に残った足でどうにかその場を離脱しようとして……

「コノ程度、スグに再生ス……エ？」

しかし次の瞬間、伸びて来た金属質の触手に絡めとられ、縛り上げられて地面に倒れ込んだ。

その伸びてきた先には……

「あん？ どういうことだ、ありや……」

「アレって……もう1体の『最上位』!? なんで仲間を……」
「……………」

昆虫脳無を縛り上げていたのは、流体に変化する異形の肉体を持った、もう1体の『最上位』。

エッジショット達が戦っていたはずの、ターミネ○ターのごとき脳無だった。

グラントリノ、ルミリオン同様、ミルコも、この仲間割れと思しき状況に困惑していたが……とりあえず、当初の目的を果たすために動いた。

「ま、いいか。『月墮蹴』!」
ルナフォール

「ア」

再生しかけていた昆虫脳無の頭部が、ミルコの必殺の一撃で、背中
の半ばまでを巻き込んで粉碎され……死体を改造して与えられた偽
物の命は、今度こそ潰えた。

☆☆☆

……さかのぼること、ほんの1〜2分ほど前。

エッジショットが、ファットガムが、サンイーターが、縦横無尽に

繰り返される鋼の鞭の連撃のなかをかいくぐり、それをさばいている中、イレイザーヘッドはじつと脳無を観察しながら、時を待っていた。手に持った小さな、金属の筒のようなものを握りしめて。

その様子は当然、脳無の方からも見えている。

暫くそれを繰り返した後、はあ、とため息をついて、脳無は言う。

「ソノ筒ガ虎ノ子ノ武器力？ 大方、小型ノ爆弾、アルイハナパームカ何カダロウ。物理ガ効カナイノナラ、炎デ焼コウトデモ考エタカ？」
「……………」

「ソレデ私ヲ焼クツモリナラヤメテオケ、無駄ダ。確力ニ物理攻撃ニ比べレバ効果ハアルガ、ダカラト言ツテ言痛打ニナリ得ルモノデハナイ」

その声には、哀れみすら込められているように感じられた。届くはずのない目標に向けて、無駄な望みを胸に懸命に努力する者達に対しての。

「衝撃ハ受ケ流セル。痛覚モ元ヨリナイ。『超再生』モアル。才前達ノ決死ノ努力ハ徒勞ニ……………」

「うだろうだとうるせえんだよ」

言い終わるのを待たずに、相澤は忠告をばつさりと切って捨てた。

「そんなに余裕だつたら食らって見るか？ それともホントは怖くてやめて欲しいのか？ どっちだ言ってみろこのタコ野郎」

「……………イイダロウ、ソノ見エ見エノ挑発ニ乗ツテヤロウ。対価ハ……………貴様ヲノ絶望ダ」

そう言うと、脳無は不意に触手を振り回すのをやめる。同時に体の変形をやめ、元の人型の体に戻った。

そして、来てみる、とでも言うように、両手を広げてみせる。受け止めて見せる、とでも言うようなジェスチャーだった。

相澤はその、ノーガードでがら空きの脳無目掛けて、手にしていたそれを投げつける。

勢いよく飛んで、脳無の胸に当たったそれは、即座に炸裂し……………

しかし、中から噴き出したのは大量の煙だけだった。

視界を塞ぎはするものの、僅かな熱も、爆風も起こらない現状に、脳

無は逆に困惑する。

「……何ダ、コレハ？ 炎スラ出ナイダト？」

「かかったなバカが。そいつは麻酔毒の煙だよ、即効性のな。そのまま寝ろ」

それを聞いて、なるほど一本取られたのか、と納得する脳無。だが、煙の向こうの相澤達を憐れむ態度が変わるわけではなかった。

元々遺体から、生命活動の止まった状態から作り出されるのが脳無である。生身の人間ならば致命的な攻撃であっても、ちよつとやそつとの毒や薬品でどうこうなるほど、やわではない、ないし、繊細には作られていないのだ。

現に、林間合宿の時などは、現地で投入された中位の脳無でさえ、マスタードがばら撒いた毒ガスの中で平然と活動していたくらいである。これしきの、恐らくは対人制圧用のツールであろう麻酔毒程度、警戒する必要すらない物だということを、脳無は理解していた。

「浅ハカナ。ソレシキノ毒デ……」

……その瞬間だった。

そんな小細工は無駄だという残酷な現実を告げようとした矢先……ふいに、脳無は言葉を止めた。

その場で硬直し、かくん、と糸が切れた人形のように、脱力して動かなくなった。

突然のことに、それを見ていた面々が驚く中で……ふう、と相澤は息をついた。

「成功だ。よくやってくれた……心操」

そう言った直後、相澤の背後の瓦礫の裏から、雄英のジャージに身を包み、首元に、相澤と同じ捕縛布を巻いた、紫髪の少年……心操人使が、その姿を見せた。

その口元には、見慣れない、メカニカルな見た目のマスクを装着している。

「心臓口から飛び出るかと思いましたよ……コイツのお披露目初回のぶっつけ本番で、プロヒーロー殺せるような怪物を相手にするとか……よくやる気になったなと思います。我ながら」

かちや、と口元のマスク……心操用のサポートアイテムであり、他人の声真似を可能にする変声装備『ペルソナコード』を外して、はあ、と安心したように彼は息をついた。

およそ5分前、相澤が脳無の背後に心操の姿を確認し、その心操がハンドシグナルで相澤に作戦を提案してきたところから、この芝居は始まった。

心操が大回りして、脳無に気づかれないように相澤達の背後に移動してくるのを待つ間、相澤はいかにも一発逆転の攻撃手段があるかのように装って、脳無の油断を誘う。

結果として、予想以上に脳無がこちらからの攻撃を進んで受けるまでに油断してくれたため、その際に投げつけた煙幕弾——麻醉ガスですらない——で脳無の視界を遮る。それにより、喋っているのが相澤かどうか、視界で判別できなくする。

そして、『ペルソナコード』で相澤の声を模倣した心操が声をかけ、油断して返事をした脳無は……心操の個性『洗脳』にかかり、こうして動かなくなってしまった……というのが全容である。

なまじ知性を持ち、返事をする事ができ、そしてこちらを侮っていたがゆえの結末だった。

「それでぶつつけ本番やってのけたつちゅーわけかい！ 大したもんやのお……しかもコレで普通科やってんから余計にびっくりや」

「確かに……しかし、この成果は大きい。コレでこいつは戦力外……いや、そのままこちらの戦力として数えることすら可能だ」

「え、でもそれは流石に危険なんじゃ……心操君の『個性』は、叩いたり衝撃が加わると解除されてしまうんですよね？」

「ええ、少し強めに叩いた程度で解除されてしまうんですが……衝撃を受け流せる上に痛覚もないのなら、多少ぶつかった程度じゃ解除されないと思います。体育祭の時とか、そんな場面が何度かあったんで……少なくとも、本人が明確に『痛い』と感じるくらいの衝撃が要るようでした」

現に心操は、体育祭の時、第1種目の障害物競走では、氷結した地

面を超えるために他人を文字通り乗り越えて、というか踏み越えて進んだり、騎馬戦よろしく自分を運ばせたりしていた。

その際、踏みつけたり運ばせる時には、多少なり『痛い』と感じるような場面もあっただろうが、そう簡単に解除には至らなかった。簡単ではあるが、衝撃や痛み自体はそれなりのものが必要なのだろう、と心操自身は理解していた。

そしてこの脳無は……ちよつとやそつとのどころか、プロヒーローが思い切り放つ攻撃ですら、痛くも痒くもないほどの打たれ強さがある。

体は金属質で堅牢であり、多少の打撃は無効化する。

それを超えるような衝撃は、体を流体化させて無効化する。

そもそも痛覚がないため、攻撃を受けても怯んだり、気に留めるということがない。

「……つまり、なまじ打たれ強いがために、ちよつとやそつと攻撃したくらいじゃ、逆に洗脳が解けない可能性が高い、と？」

「……過信はできないが、魅力的ではあるな。どのみちこの乱戦の中、流れ弾の被弾ゼロで連れ出すのは無理だし、それなら……適宜利用させてもらうか。その後は……可能なら『移動式牢獄』に収納。それが難しければ……エンデヴァーさんあたりに頼んで焼き尽くしてもらうか、13号あたりに吸い込んでもらうしかないな。動きだしたら危ない」

「あるいは……物間と合流できればいいかもですね。敵に、物を圧縮して閉じ込める『個性』の持ち主がいましたから、それをコピーしてもらって……」

と、そこまで話したところで、エツジショットが、昆虫脳無と戦っているミルコ達の危機に気づいて飛び出し……その直後に、動けなくなつて危険も少ないと見て、洗脳した脳無の運用テストも兼ねた援護の末、もう1体の『最上位』を打倒することに成功していた。

第145話 VS ウオルフラム

吹き荒れる鋼の鞭の乱打。冗談のような質量を持った物体が、広範囲を叩き、抉り、薙ぎ払う。

轟、爆豪、切島、そしてエンデヴァーにターニヤの5人は、ほとんど無差別と言つていい勢いで、四方八方に放たれ続ける攻撃を、どうにかかわし続けていた。

エンデヴァーとターニヤはその最中にも反撃を飛ばしているが、遠距離攻撃手段がない切島は防戦一方。爆豪と轟は時折、氷結や『徹甲弾』を飛ばしているものの、ほとんど届きもせずにかき消されてしまっている上、届きそうな時にはしつかり反応されて防御されていた。

「くっそ、近づけねえ……ってか手数多すぎだろ！ それに、なんか金属以外にも動かしてねえ!? あいつが動かせるの、金属だけじゃなかったのかよ!?!」

「金属に巻き込んでコンクリとかを一緒に動かしてんだ。あるいは、中に鉄骨が含まれてる瓦礫とかを、だな……そうやって金属の総量以上の質量を叩きつけてくる。それに、叩きつけるだけじゃなくて、瓦礫を飛ばして散弾みたいにして遠距離攻撃もしてくるしな」

冷静に考察こそしつつも、全く手が及ばない現状に変わりはなく、切島同様、轟も歯噛みしていた。

爆豪はそれに加えて、ウオルフラムは無差別に攻撃しているように見えて、実は明確に自分達を危険度で区分していることにも、狙って攻撃と防御を行っていることにも気づいていた。

現に、鋼の鞭は、よく見ると、狙っている数が個人個人ごとに違う。爆豪の見立てでは、爆豪に全体の1割、轟と切島に合わせて1割、エンデヴァーに3割、そして残りはターニヤに向けて振るわれている。

加えて、エンデヴァーとターニヤに対しては、飛礫などによる攻撃の頻度が段違いに高い。

自分達に向けられる数の少なさは、そのまま危険度の評価というこ

とに他ならない。

エンデヴァーによりもターニヤの方が数が多いのは、瞬間的な火力ではエンデヴァーが上だが、速度と手数、そして攻撃範囲で大きくターニヤが勝っており、しかも縦横無尽に空を飛んで遠距離攻撃を雨あられと放ってくるからだろう。

それに負けじとターニヤも、暴風の弾丸を幾度も放って攻撃する。それらは単体でも凶悪な威力を誇っているのに加え、周囲に落ちていく細かい瓦礫などを巻き込んで、殺傷力を増した状態で容赦なくウォルフラムを狙う。

ウォルフラムも似たような形で応戦しているため、最早弾幕飛び交う戦場である。

「噂には聞いてたが、おつかねえお嬢ちゃんだな！　こんだけの規模で軍人相手にやり合ったのはいつ以来だか……ナムサク、いやアザデイスタン以来かね！」

「いちいち覚えている余裕があるとは羨ましい！　こっちはまだ生まれ落ちて15年かそこらだというのに、もう立った戦場や紛争地の数など、途中から数えておらんよ！」

「はっ、相変わらずあのへんの治安の悪さは筋金入りだな！　その強さも納得つてもんだ……それに引き換え、あんたはちよつと苦しそうだな、エンデヴァー？」

と、ウォルフラムがちらりと視線を向けた先では、超高熱の炎で鋼の鞭を焼き払っているエンデヴァーの姿があった。

勇壮な立ち姿だったが、ウォルフラムは気づいていた。先程から徐々に、炎が噴き出す威力やスピードが鈍くなってきたことに。距離があつてわからないだろうが、その顔には玉の汗が少なくない数浮かんでいる。

「……人の心配をする余裕があるのか？」

「そりゃ自分に言い聞かせてんのかい？　やせ我慢とは、トップヒーローは大変だねえ」

ウォルフラムの指摘通り、徐々にエンデヴァーには余裕がなくなつてきていた。

『個性強化薬』を使ったことにより、怒涛の勢いで振るわれる鋼の鞭。それに対する応戦は、決して彼にとつても楽なものではない上……彼は、バーで既に『最上位』^{ハイエント}との戦闘を経てからここに来ている。ターニヤの助力があり、比較的すぐに終わつたとはいえ、その時に使った炎も、決して小規模ではなかった。

（熱がこもってきている……もう長くは戦えん、早めに決着をつけねば……！）

そしてその様子を、離れたところにいる轟と切島も見ていた。

轟の個性を使えば、エンデヴァーは自分の体を冷やして力を取り戻すことができる。

記憶の中にある、傲慢で独善的な父親であれば、さっさとそう命じていてもおかしくはない。

にも関わらず、一度こちらにちらりと視線を寄こした以外は……何も命じてくることはない。

「つまんねえ意地張りやがって……」

そう悪態はついたものの、轟は内心、エンデヴァーが助力を命じた理由を察していた。

自分達がいる位置から、エンデヴァーが戦っている位置までは、今言った通りかなり離れている。この距離で、エンデヴァーの体を冷却する規模の氷を使おうとすれば、それなりにためを作るか、あるいはもっと接近するために移動する必要がある。

そうなれば、意図を察したウォルフラムは轟達を襲いだすだろう。先の挑発からして、彼もエンデヴァーの不調の原因はもちろん、それを解決する手段についてもわかつているはずだ。

つまるところ、轟達の安全のため、エンデヴァーは指示を出すことができないのである。

率直な話、轟としても異変には気づいているのだから、指示を待たずに自分で動けばいいのだろうか……こちらはこちらで似たような『意地』を持っているから始末に悪い。

利用する目的で『職場体験』や『ワーキングホリデー』に行つてはいたが、だからといって距離が縮まったり、歩み寄れたわけではない。

彼にとってエンデヴァーは、ヒーローとしては認めざるを得ない優秀さと強さを持っていても、母親を苦しめ、家庭を壊した怨敵でもあり続けている。

そのことを遠目に察している爆豪は、苛立ちをこめて『ケツ』と吐き捨てるように言つて、そのまま動き続ける。

察していても、だからといって何か言つてやったり、背中を押してやる義理も、彼にはなかった。

が、それとは別に……背中を押すどころか、蹴飛ばすくらいの勢いで考えている者ならいた。

『おい、轟焦凍』

「？ この声……『シルバーピクシー』か？ 何でこの無線に……」

耳にセットしている通信機から聞こえて来た声に、驚いてそう問いかける轟。

『周波数を合わせているだけだ。それよりも単刀直入に言うぞ……お前、名よりも実を取る気はあるか？』

「……………」

(……いつから、そう思うようになっていったのだったか)

限られた残り時間の中で、炎を吹き出して応戦を続けるエンデヴァーは、ふとそんなことを考えていた。無論、戦いに差し障りのない範囲で、ほとんど無意識に。

『職場体験』と『ワーキングホリデー』で、事務所に轟と爆豪を受け入れてからと言うもの、持てる全てを伝えてその強さを完成させるつもりで、彼らを鍛えて来た。

オールマイトを超えさせるために作った最高傑作。その内心に偽りはなかったし、『左』を使うことを解禁して以降は、ようやく自分の完全な上位互換となった息子を、今までにも増して徹底的に鍛え上げるつもりでいた。

そして同時に受け入れた爆豪に対しては、轟のやる気に火をつけるための好敵手として選んだにすぎず、だがそれもあつて同様に鍛えていた。

当初、それだけのつもりだったはずが……徐々に変わってきたのは、事務所の仕事を手伝わせるために、パトロールに連れ出したり、その一環で敵と戦ったり、あるいは町の人達を助けたりと、ヒーロー活動を経験させていた時。

あるいは、自分が稽古をつけてやっていた時も、もしかしたらそうだったかもしれない。

そのさなかに、エンデヴァーは、ふと気づいていた。轟と爆豪の、その目を見て。

ああ、彼らは、ヒーローを目指しているんだな、と。

何を今更、という話になるかもしれないが、実際その時は、そうとしか表現のしようがなかった。

他に言い方が思い浮かばなかったし、言い換えれば、そのことに今まで気づいていなかった……ということに、エンデヴァーは気付かされたのだ。

かつて、己の息子がエンデヴァーを見る時に向けて来たのは、恐怖と憎悪の視線だけだった。

肉親を見る目では断じてなかった。頼んでもいないのに自分のためだと言って自分を痛めつけ、自分をかばってくれた母親を苦しませ、壊してしまった怨敵、あるいは『敵』に向けるそれだ。

体育祭の時までは、それは変わらなかった。それをエンデヴァーは『反抗期』と一笑に付して気にも留めていなかったし、『職場体験』に来て以降、それが見られなくなったことに、ようやく自分の中の力を受け入れたと、己についてくる気になったのだと満足していた。

そして、同じ『職場体験』ないし『ワーキングホリデー』の中で、そうではなかったのだと気付く。

時に真剣さが、時に優しさがこもった目。エンデヴァーにとって、今まで見たことがなかった目。

体育祭以降、ようやく見ることでできるようになったそれが……自分以外には、普通に向けられている。それこそ、初対面の相手に対してすらも。

家族である姉や兄にも。

学友である爆豪や緑谷、飯田にも。

教員である相澤やプレゼント・マイクらにも。いずれ超えさせる相手であるオールマイトにも。

ヒーロー活動の中で助けた一般人や、協力したことにあたったサイドキック達や、他の事務所のヒーローにも。

そうでない相手など、戦闘の中で相対した『敵』くらいのものであった。

そして気づいた。これが普段の彼なのだ。

自分には見せることのなかった、オールマイトもエンデヴァーも関係なく、ただヒーローの卵として真剣に夢を追いかける姿であり……言ってみれば、普通の姿なのだ。

自分についてくる気になっただけではない。ただ、自分のことを色眼鏡で見えることをやめ、N.O. 2ヒーローとして、学ぶべきことの多い、1人の先達として割り切って見始めただけなのだ。

その結果、今まで見ることのなかった姿を、自分は見る事ができるようになった。それを勝手に自分が勘違いして、ぬか喜びしていたにすぎない。

それを理解してもなお……不思議とエンデヴァーの心に不快感はなかった。むしろ、ひたむきに努力する彼の姿を見て、応援してやらねば、などと不意に思ってしまったほどだ。

そしてそれはきっと、己の望んだとおりの道を進んでいるから、ではない。

今まで、自分と息子は、『N.O. 2』と『最高傑作』だった。

『N.O. 2』と『ヒーローの卵』という間柄になってみて、そして、『最高傑作』としてではなく彼の姿を見るようになって、今まで影も形もなかった思いが、自分の心の奥底に湧きあがってくるのを自覚し、困惑した。

だが不思議と、その感情が不要なもの、邪魔なものとは思えなかった。

すつと受け入れることができ……むしろそのおかげで、今まで顧みることのなかった、家で待っている他の家族に目を向けることすら

増えてきていた。

今も病院に入院し続け、ここ数年顔を見ることもできていない妻。気丈にふるまいながらも、家庭として壊れてしまっている今の轟家を嘆いている長女。

焦凍以上に徹底的に自分に反発し、怒り、父親とも思っているから疑わしい次男。

そして、最後まで歪んだ見方しかしてやれぬまま、永遠に会えなくなってしまう長男。

今でも、自分が焦凍に向けている期待に変わりはない。自分を超え、オールマイトを超えて、頂点に立つて欲しいと思っているし、そのために打てる手は全て打つつもりだ。

だが、それ以前に……今はまだ彼は子供だ。未熟で危なっかしい、守ってやるべき子供であり……自分は父として、ヒーローとして、彼らを導いてやらねばならないのだ。

それが、親というものだから。

それが、彼の進む道の遥か先を歩いている者としての務めなのだから。

(……たったそれだけのことを知るのに、俺はどうしてこれだけの時間を……！ その間に、一体いくつの、取り返しのつかない過ちを……！)

心を壊してしまった妻を、消えぬ傷を負った息子を前に、自分が言った言葉は何だった？

『最高傑作』の安否や今後を案ずるよりも、もつとすべきことがあつたのではないのか。

悪影響だからと兄や姉と合わせずに、鬼籍に入った兄や病院に送った妻を顧みず、ただこの一人の『最高傑作』を育ててさえいればいいと思っていた自分が、今では信じられない。

その自分に、家族が反発して、言うことを聞かないことを不思議に思っていたことが、なおさら信じられない。

体に籠る熱よりも、余程痛みと苦しみを与えてくる熱が、脳裏を焼いているのを感じながらも、エンデヴァーは再度迫ってくる金属塊を

前にして、体に鞭打って炎を出そうとする。

(ならばせめて、俺はヒーローとしてくらいは、お前に誇……)

しかし、その瞬間、

——パキン!!

——ジュウウウウウウツ!!

「……っ!」

突然、自分の背後から現れた巨大な氷の壁が……それも、視界を塞がないように形状をきちんと考えられたそれが、金属塊を飲み込んでその動きを止めた。

そして氷の塊はエンデヴァーの体をも半分近く包み込み、しかしその体に籠っている熱によってまたたく間に解かされる。

当然ながら、相対的に、エンデヴァーの体は急激に冷やされていた。常人であれば凍傷になってもおかしくない、すぐさま治療が必要であろう程の低温。だが、今のエンデヴァーには、ただ心地よいただけのものだった。

背後を見ると、そこには……予想通り、右半身から氷結をほとばしらせた、轟焦凍の姿があった。

「焦凍……」

「……勘違いするな。俺はヒーローとして、やるべきだと思ったことをしただけだ。……あんたをどうこう思うような、何かがあったわけじゃない」

そのぶつきらぼうな物言いに、彼を『気流』で一瞬でここまで運んできたターニヤは、『どんだけ不器用な親子なんだ』と半ば呆れていたことを、2人は知る由もない。

しかしその直後、そのどちらかがさらに口を開くよりも先に、轟が作った氷が砕け、中に封じられていた鉄塊がまた、いくつも流動して襲い掛かってくる。

それを操るのは、面白い見世物を見たかのように、愉悦の表情になっっているウォルフラム。

「ハハハハッ! 美しき親子愛という奴か!? 実に結構なことだが……隙だらけだぞ!」

その光景に、轟は思わず身構えて、再度水壁を放とうとするが……次の瞬間、

「……『ヘルスパイダー』……!」

ほぼノーモーションから、振り向きざまに放った熱戦が、鉄塊を周囲に散らばっていた氷塊ごとバラバラに切り飛ばし、その余波で水蒸気爆発をも巻き起こした。

その攻撃の一部は、ウォルフラムが立っている場所にまで届き、ウォルフラムがとつさに構築した鋼の防壁を半ば以上切り裂いて、ようやく消えた。

「俺のどこに……隙があるか?」

「ちっ……冷えてコンディションが戻りやがったか」

ウォルフラムは悪態をつくように言いつつ、再び金属を操りだすが、それを警戒しつつも、エンデヴァーは……物理的に冷えた頭の中で、またしても己を恥じていた。

(……ここにきて、まだ俺は、バカだったということだ……ああ、そうだ。焦凍は、ヒーローとしてやるべきことをやった。ならば、俺は……俺の方こそ……!)

「……焦凍」

「!」

「俺を、見ている」

言葉少なく告げて、そのまま完全にウォルフラムの側に向き直って背を向けるエンデヴァー。

「今、お前の目の前にいるのは……No. 2のヒーロー……エンデヴァーだ。それだけ考えて、それだけを見ている。それ以外の余計な認識は……捨てて構わん」

「……安心しろ。そのつもりだ」

「そうか……なら、いい」

(それでいい……今の俺が焦凍に見せられる背中など、それくらいのものだ。どの口で父のなの、家族だのと言えようか……今の俺は、ただヒーローとして、焦凍の前にいさえすればいい……それ以外を、それ以上を……望むべきではない)

限りなくベストコンディションに近い状態まで力を戻したエンデヴァーは、凄まじい威力の炎熱によって、次々襲い来る金属塊を燃え散らしていく。

重さというものがなく、質量で攻めてくるのに不利であるはずの金属の猛攻を前にして、一步も引かず、むしろ押し込む勢いだ。

当然、かなりの勢いで体に熱が戻っていくが、タイミングを見極めて放たれる轟の氷結が、援護と同時にその熱を冷やし、再びそのコンディションを戻してしまう。ほとんど絶え間なく押し寄せる爆炎の奔流に、ウォルフラムの表情から余裕が失われていく。

その凄まじい光景の前に、轟も、離れたところでそれを見ている切島や爆豪も、目を丸くすることしかできなかつた。

そんな中、

『エンデヴァー、轟焦凍、それに爆豪勝己と切島鋭次郎だったか……提案がある、そのまま聞け』

無線を介して、再び、白銀の名を持つ妖精が語り掛ける。

全員が、戦闘に集中しつつも耳を傾ける中、ウォルフラムはエンデヴァーの後ろで彼を支えている轟に狙いを移し、下支えを絶つたために、大回りしてそこを狙って攻撃を放つ。

だが、その最中に割り込んできた爆風がそれを蹴散らし、残った鉄塊については……轟の前に立ちはだかつた、『安無嶺過武瑠』で全身を固めた切島が全て受け止めて砕いた。

「俺らのこと忘れてんじゃねえぞ鉄クズ野郎！」

「チツ、鬱陶しいガキ共が……隅っこでガタガタ震えて小さくなつてりゃいいもんを……！」

「ガキをなめていると……意外と足元をすくわれるぞ、テロリスト？」
と、さらにトーンの高い、澄んだ声が聞こえた。

と同時に、不意に今まで吹き付けていたエンデヴァーの炎がやみ……しかし代わりに、恐ろしい光景が目の前に広がっていた。

エンデヴァーと轟の上空数メートル。そこに浮かぶ『シルバーピクシー』ことターニヤが、『気流』の個性で台風、あるいは竜巻に等しい風を起こし……しかもそこに、周囲に散らばっていた無数の瓦礫や鉄

屑、さらには轟が作った氷壁が砕けた後の氷塊などを巻き込んで、白と黒、そして灰色の入り混じった暴風を作り出していた。

あんなものに例えば人が放り込まれば、無数の瓦礫やら何やらに削り取られて砕かれて、あつというまに血霧になって消し飛んでしまおうだろう。

そしてその直後、誰が何を言うより早く……凶悪な笑みを浮かべたターニヤが腕を振り下ろし……それに追従するように、殺傷力の塊と化した竜巻がウォルフラムに襲い掛かる。

「う……うおおおおおっ!?!」

ウォルフラムは全力で周囲から金属をかき集めて、目の前で縦横無尽に振り回し、疾風怒濤の勢いで吹き付ける地獄の大嵐をどうにかしのぐ。

さすがにこれだけの規模の風を操るのは大変なのか、ターニヤも決して楽そうではない。

「っ……ははっ、苦しそうだなシルバーピクシー！　さすがにちと無理してんじゃないのか!?!」

「その言葉そっくりそのまま返そう……貴様こそもう限界が近いのではないか？　そろそろ薬も切れてくる頃だろうしな!」

「……っ!」

「欧米製の『個性強化薬』は確かに強力だが、さすがにリスクもなしに長時間効能を維持できるようなものではない……加えて『個性』によつては制限時間がさらに短縮される！　広範囲に影響を及ぼすような『個性』はその傾向が顕著であることは周知……その証拠に、先程から徐々に鉄塊の動きが精彩を欠いているし、効果範囲も不安定になつてきているぞ!」

凶星を突かれたウォルフラムはしかし、ならばとあえてその力を一気に引き上げる。

「ならもうこの一撃でケリをつけなければいいだけだ……ありがたいことに、お前ら全員一方向にまとまってくれているからな！　そのまま仲良く……掃り潰される!!」

ウォルフラムは持てる力を振り絞つて金属を集め、真正面からター

ニヤの竜巻ごと全てを圧殺するように、その全てを一塊にして叩きつける。

さながら、鋼の大津波とでも呼べそうなそれは、その極大の質量で持ってターニヤの竜巻をも押しつぶし、言った通りにひとところに集まっている、エンデヴァー、轟、爆豪、切島、ターニヤを飲み込まんと迫る。

が、しかしそれを見て……ターニヤは、凜猛な笑みを浮かべて言った。

「よし……狙い通りだ！ お前達！」

「うるせえ、指図すんじゃないねえ！」

突如、ターニヤは風の操作をやめて突如上空に逃れる。

そしてその向こうから……エンデヴァーの後ろに隠れる形ではないの轟と、それを守っていたはずの切島、そして爆豪が姿を見せた。しかも、轟は左側の炎をボボボボ……と細かく弾けさせ、その隣で、爆豪と切島は、爆豪の手榴弾を模した『籠手』を構えている。その片方を、取り外して切島に託して。

困惑するウォルフラムの前で、その3つが……一斉に火を噴いた。

「膨冷……熱波!!」

「吹っ——」

「——飛べや!!」

圧縮してから一気に放出された轟の炎熱に、2つ一気に放たれた爆豪の籠手の大砲。

3つの爆炎が前方に向けて放たれて迸った。

ターニヤによって今しがた、瓦礫と鉄屑以外にも……轟の氷を大量に含んだ状態で攪拌され、しかも途中で次々と轟が後方で作っていた氷塊を補充しつつ、散々に冷やされていた空気目掛けて。

しかも、何気にターニヤが、その空気が拡散しないよう、退避後も『気流』で操って圧縮していた、そこ目掛けて。

結果……体育祭のステージで、緑谷VS轟の準決勝で起こったのと同じ現象が起こった。

さんざん冷やされた空気が、叩き込まれた熱で一気に膨張し、あの

時をはるかに上回る規模の空気の爆発が起きた。

撃った轟達の側については、ターニヤが『気流』を集中させて反動を極限まで抑えた。

その結果、思い切り踏ん張らなければ吹き飛ばされそうな爆風が帰ってくる程度に抑えられた。

もちろん、反対側はそんなレベルではない。

ウォルフラムが渾身の力でかき集めて放った、鋼の大津波を押し返し、吹き飛ばす。

ひしやげて、千切れて、制御を離れて飛んでいった。

それでもなお、どうにか自分にまでそれが届いて吹き飛ばされることは……周りに残った金属で防ぎ切ったウォルフラム。

しかし、最早前にすら意識を向ける余裕がない彼を目掛けて、

極大規模の『膨冷熱波』によって、障害物が一扫され、射線がクリアになったそこ目掛けて、

「赫・灼・熱・拳……!!」

とどめの一撃が、放たれる。

「『プロミネンスバーン』 ツツツ!!」

立ちはだかる全てを貫いて放たれた、エンデヴァーの渾身の一撃が、彼の全力をつぎ込んで作った鋼の塊ごと……ウォルフラムを飲みこんだ。

決戦場となった瓦礫の山を縦断し、そこだけ昼間のような輝きを放ち、夜の闇を押しつけた爆炎は、時間にしてほんの数秒のそれ。

しかし、射線上にあったものをことごとく焼き、溶かし、蒸発させ……後に僅かに残ったのは、申し訳程度の溶けた鉄の塊。

それを挟んでエンデヴァーから反対側で、意識も、力も、最早ひと欠片も残さず奪われ、後に残ったのはわずかな命の灯くらいであるう、1人の『敵』が……どう、と倒れ込み、動かなくなった。

第146話 VS キュレーター

エンデヴァーらがウォルフラムを打ち果たしたのと同じ頃。

キュレーターを相手取っていたリューキュウと、その事務所に勤めるインターン生である波動ねじれは、そのあまりの攻撃力とタフネスに、さすがに攻めあぐねていた。

リューキュウの個性『ドラゴン』は、その身を巨大な龍に変えて戦闘できる。その力は決して見掛け倒しなどではなく、並の『敵』であれば、片手で制圧できてしまうほどの圧倒的な近接戦闘能力を發揮する。

波動ねじれの個性『振れる波動』は、手や足から強力なエネルギーを出して攻撃するものだ。なぜか螺旋状に『振れて』しまうためにスピードこそ出ないものの、その威力は巨大化型の『個性』を持つ敵さえもなぎ倒してしまえる威力である。

2人共、並の『敵』であれば相手にもならないレベルの戦闘能力を誇るが、ことここに至っては相手がそれ以上に規格外と言う他ない。

ドラゴン化したリューキュウを軽く超える巨体に、その2人の攻撃を幾度食らっても揺るがないほどのタフネス。それでいて、肉弾戦はもちろん、『鯨』の潮吹きや超音波攻撃により遠距離戦にも隙がない強敵。

ウォルフラム同様、国際的に活動し、幾度も各国のヒーローや警察組織による摘発をはねのけ、時に商売敵の裏稼業を力尽くで叩き潰している実績は伊達ではないということのようだ。

(現状は千日手、いや、こちらが劣勢……果たして、他のヒーローの加勢が届くまで持ちこたえられるかどうか……っ!?)

リューキュウが、残り多いとは言えない体力を鑑みながら、どう戦ったものかと思案していたその時……その横を通り抜けて、巨大な影が突如現れた。

いや違う、横を通り抜けた瞬間に、巨大な影『に、なった』のだ。

「復活のオク……キャニオンカノン!!」

ちょうど、波動ねじれに対して追撃を行おうとしていたキュレー

ターに、巨大化したMt. レディの飛び蹴りが直撃し、大きくたたらを踏ませる。

それをさらに蹴飛ばす形で、反動で飛んで帰ってきたMt. レディは、地響きと共に着地した。

その体には、先程までであったはずの傷がなくなっており、リユークユウは『ギャングオルカの話、ホントだったのね』と感心していた。雄英生の中に、一瞬で傷を治癒、あるいは修復してしまえるほどの強力な『個性』持ちがいたという話で、現に彼もその身に刻まれていたはずの傷を、服の損傷ごと直されていた。

そのギャングオルカは、再び傷を増やししながら、『シヤチ』である自分の上位互換と言っている『鯨』の個性持ちのキュレーターを相手に、臆することなく近接戦闘で戦い続けていた。

体格差を考えれば、有効打は与えられないことはわかりきっていたので、主にリユークユウや波動ねじれのフォローのために。

「痛った……なんつー石頭よ。鯨って頭全部頭蓋骨か何かなわけ!？」
「……巨大化しても所詮は女の一撃だな。凶体だけの半端な野郎が、いまさら何の用だ?」

「野郎じゃないですー、女ですー! ふん、ちよつと前までの私と同じだと思ったら大間違いよ!」

そう言いながら、なぜかMt. レディはその体を再び小さくする。何のつもりだ、と、キュレーターのみならず、リユークユウ達も同様に注目する前で……『持つてこおい!!』と腹に力を入れて叫ぶMt. レディ。

まるで応援団か何かを思わせる、雄々しさすら覚える迫力である。すると、いつの間にかその背後に来ていた八百万と永久、そして泡瀬が、手に持っていた何かをぱぱつとマウントレディの全身に装着させる。加えて、そのいくつかを、

「泡瀬さん!」

「おう! 早業着工『ウエルドクラフト』!」

泡瀬が『溶接』の個性で一瞬で組み合わせて結合し、そうして形作られたのは……鎧だった。

と言っても、甲冑のような重厚なそれではなく、プロテクターか何かを思わせる、急所と関節、それに手足の一部を覆う程度のもの。八百万の『創造』で作った超硬合金製のパーツを、永久が『分解と修復』で形を微調整して作り、泡瀬が組み合わせたものだ。

特徴的なところとしては、背中にいかにもヒーローと言った見た目になるような黒いマントを、両腕と両足に重厚な手甲脚甲を装着している。マントはともかく、いかにも肉弾戦用といった姿だ。

「よおしご苦労。そんでもって……『巨大化』！」

「小大！」

「……ん。……『大』」

直後、Mt.レディの再びの『巨大化』に合わせて、小大が『サイズ』の個性を使い、装着している鎧を一緒に巨大化させる。Mt.レディは、鎧をまとった姿で、20m級の巨体となった。

そこに今度は、塩崎が大量の『ツル』を出して、可動部や、鎧に覆われていない個所のいくつかに巻き付かせて保護したり、鎧ごと巻き付かせて接合を強めたり、鎧と体の隙間に入り込ませてクッション材代わりにしていく。

そこにさらに、

「纏え『黒影』……その身をもって、降臨せし戦乙女の鎧となれ！『深淵闇駆』！」

夜の闇によってパワーアップし、巨大化した『黒影』が、ちょうどその巨大に見合った大きさとなっているMt.レディに覆いかぶさるように一体化し、鎧の上から『深淵闇駆』を発動。

鋼の鎧と、茨と闇の衣を見にまとい、先程までとは全く違う姿となったMt.レディが誕生した。

「これぞ本邦初公開！ Mt.レディ・Ver. U A スペシャルよ！ この姿になった私を破れた者は未だかつていないわ……覚悟なさい鯨怪獣！」

「そりやそうだろ、今日初めて使う……ってか、さっき考えたんだから。しかも八百万が」

「おだまり！ 決め台詞の最中に要らんこと言わなくていい！ ほら

仕事終わったんだからとつと下がってなさいあんた達は！」

『はい』と返事をして後方に下がっていく面々。

ただし、常闇と塩崎だけは『個性』の関係上、その肩に乗ったままである。きちんと2人が捕まれるように、手すり足場、それに風防まで計算して作られていた。

そんなやり取りを見て、リユークユウやギャングオルカは『大丈夫だろうか』という思いを禁じ得なかった。

波動ねじれは『楽しそうだなー』とか思っていた。

そしてキュレーターは最早呆れ交じりで、特大のため息すらついていた。

「アホか……まるでヒーローごっこ……いや、こりやもう完全にヒーローごっこが悪ふざけそのものだ。いつそ楽にしてやるのも1つの情けじゃないかって気がしてきたぜ」

「へっへーん、好き放題言つてられるのも今のうちよバーカバーカ！」
余計に残念なことになる視線を受けながら、しかしMt.レディ・Ver. U A スペシャル（以降省略）は先程までに倍する勢いで踏み出し、瓦礫の地面を盛大に踏み砕きながら直進して……大きく振りかぶった拳を、キュレーターの頭にたたきつけた。

が、その頭部でそのまま受け止められ、今度はしつかりと踏ん張って構えていたキュレーターは、僅かに体を揺るがせもせず耐える。

「っ……ホント、硬いわね！ 手甲つけててもこっちの手が少し痺れちゃったわー！」

「小手先の道具で埋まるほど、俺とお前の間の溝は浅くねえぞ……おら、どうしたこんなもんか」

そう言つて、逆に頭を突き出して押し返そうとするキュレーター。

Mt.レディは、手をグーからパーに変えて、さらに両手を突き出してそれを受け止めるが、徐々に押し込まれていく。

「ふん……やっぱヒーローごっこ……!?!」

と、呆れ交じりにキュレーターが言おうとした瞬間、

纏っている部分から伸びた『黒影』の腕が、ゴッ!! と横から振りぬかれてキュレーターに直撃し、その巨軀をわずかにふらつかせる。

その隙を逃さず、Mt.レディは、強く踏み込んでその巨体を押し戻す。

「……………つ、こすい真似……………を?!」

かと思えばその直後、腰のあたりから伸びてきた『ツル』が、踏ん張ろうとしたキュレーターの足元に滑り込んで引つ掛けて思い切り別方向に引つ張って足を取る。

バランスを崩したところに、

「まず一ぱあつ!!」

Mt.レディの飛び膝蹴りが、頭ではなくその顔面に直撃して蹴り飛ばす。

「ぐっ、が……………このアマ……………!」

「やつと一発いいの入ったあ……………つてそこで止まってあげるもんですかあ!!」

その直後、今度は肩口あたりから、青い2匹のドラゴンが現れて首を伸ばし、キュレーターの両肩に噛みついて……………蹴飛ばして離れそうになった巨体を強引に引き戻す。

(……………!? ああ青い龍は、軍服の生徒の……………逃げたはずじゃなかったのか!?)

後方に下がっていったはずの永久が、それどころかあの場にいた生徒ほぼ全員が、いつの間にか肩から延髄のあたりに乗って待機していたのを見て、さすがにキュレーターも驚く。

いつの間に、どうやってあんな場所に、と。

それでも、とつさに頭を前に出して構えたキュレーターだったが、Mt.レディは突如跳躍すると、そのままその体を『サメラ』が引つ張って、噛みついていっているキュレーターの体を支点にする形で、立体軌道のごとく空中で動かし……………わずかな時間で横合いに移動。

そのまま、変則的な『キャニオンカノン』を横つばらに叩き込んで痛打を与える。

「まだまだアー!」

さらに着地するより早く、『黒影』が2本の腕を伸ばして連続攻撃を加え、着地と同時に、Mt.レディが踏み出して殴りつけ、キュレー

ターがこちらを向く……ことすら許さずに、そのまま『黒影』の腕と合わせた4本の腕で、ドガガガガ……とラツシユを叩き込んでいく。

その様子を見ていたギャングオルカは、彼らの狙いに気づいて眩いた。

「なるほど……あの形態、狙っていたのはM t. レデイの強化ではなく……『連携』と『手数』か」

もともとキュレーターに対して有効打足りうる攻撃を放つことができるのは、よほど威力のある攻撃を放つことができる者に限られる。千差万別の『個性』、それだけの条件を満たすそれを持っている者は、プロヒーローの中にも限られるだろう。

それに加えて、キュレーター自身もきちんと防御や回避を行って応戦してくるがために威力をそがれ、やはりそのバカげたタフネスに負けてしまうのだ。

ならばどうするか。M t. レデイ達が……立案の八百万が導き出した答えは、単純だった。

防御する暇がないくらいの苛烈さと頻度で、防御を許さないくらいの数を叩き込む。

だが、単にタイミングをずらして交互に攻撃するだけでは難しい。相当に訓練を積み重ねた上でのコンビネーションならばともかく、急造のチームアップでは、別々に攻撃する以上上手くいかないだろう。それくらいの隙間があれば、恐らくキュレーターは多少なり対応してくる。

ならば、全部1つにまとまってしまう方がいい。

ほとんど同じ場所ないし位置取りからならば、タイムラグは最小限になる。手を出すタイミングもつかみやすい。

というか極論、隙あらば各自打つていくくらいの心づもりで問題ない。

攻撃を繰り出す向きが同じ上に、的がやたら大きいということとは、すなわち友軍誤爆も起こりづらいのだ。

M t. レデイが殴る。蹴る。

常闇の『黒影』が黒い爪を立てた腕で叩きのめす。

さらにそれを、永久の『サメラ』と塩崎の『ツル』が援護する。腕も足も、尾びれも、攻撃が形になる前に出足を潰す。

それでも隙はわずかに生じてしまうが、そこにリューキュウや波動ねじれが飛び込んできてそれを潰し、再び攻撃が再開される。

なお、波動の技『グリングウェイブ』は光を伴うため、下手をする
と『黒影』が弱ってしまうのだが、それを見越して、発動を察知した
瞬間に塩崎がツルで遮光幕を張り、それを防いでいる。

説明する時間がないため、八百万はそれ自体作戦に盛り込んで
いた。

息もつかせぬ乱打に、キュレーターの鎧のごとき皮膚にも、さすが
に傷が増えていく。

だが同時に、その胸のうちの怒りもまた、ふつつつと膨れ上がって
いた。

「調子に、乗ってんじゃねえエエエエエ!!」

咆哮と共に、その目に怒りを滾らせたキュレーターが、叩きつけら
れる連撃を無視して、強引に振りほどいて突っ込んでいく。

止めようとしたリューキュウを押しつけ、ギャングオルカや波動、
塩崎や永久の妨害ものともせず、体に傷が刻まれるのも無視して
飛びかかり……そのあまりの勢いに、Mt.レディも受け止めきれず
に体勢を崩す。

そして、そのまま頭を突き出して頭突き……かと思いきや、ぐあつ
と口を大きく開いた状態で飛びかかる。

ずらりと並んだ鋭く巨大な牙。1本1本が人間の手よりも大きい
それを見れば、噛みつかればどうなるかなど想像するまでもない。

そのまま食いちぎらんとするキュレーターを、Mt.レディと『黒
影』が4つの腕でどうにか止めるが、徐々に押し込まれていく。

「その不細工な面……削り取ってやる……っ!」

「誰が不細工よっ、この、美麗セクシー大注目株に向かって……け
どっ、残念だったわね鯨野郎! 私達はむしろ……この時を待ってた
のよー!」

「何……!?!」

M t. レディの言葉に、キュレーターが驚いた直後のこと。
その装甲の胸元にあった飾りのようなパーツが左右に開き、そこから……

「——この一瞬に、キラメク☆」

青山が放った最大威力の『ネビルレーザー』が、大きく開かれていたキュレーターの口の中に放たれ……その上あごを貫いた。

「ごっ……があああああ!?!」

その一撃が命を刈り取る……などと言うことはなかったようだが、異変はすぐに起こった。

動揺した隙に蹴飛ばして距離を取ったM t. レディ。その見ている前で、キュレーターの口から……恐らくは今、青山の『ネビルレーザー』が穿った穴から、ボトボトと多量の液体が流れ出てくる。

異様な光景にぎよつとする者も多いが、これはM t. レディの言った通り、八百万が作戦の一環として狙っていた展開である。

もし狙う機会があれば、という程度のそれではあるが。

「やはり……思った通りですわ。『脳油』……ありましたか!」

彼女の有する膨大な知識の中には、鯨という生き物に関するものもあった。

恐らくは、その外見からして、キュレーターの変形のモデルである『マッコウクジラ』……その特徴の1つに、『脳油』というものがある。

潜水の際に使われる身体器官であり……そこにたまっている液体を個体にしたリ液体にしたリ切り替えることができるのだが、それは固めれば恐ろしく硬質になる。『個性』として磨き上げられているとすればなおさらだろう。

先程からの驚異的な威力の頭突きや、ろくに攻撃を通さぬ防御力は、恐らくそれによるもの。

しかしそれならば、それを抜き取ってやれば……キュレーターは、己の矛と盾を同時に失うことになる。

「Mt. レディの拳、『黒影』さんの爪、リユーキュウの爪と牙、波動先輩の衝撃波……どれも外側から貫くには至らなかつた。やるならば最も脆いであろう口の中から、それも至近距離で、貫通力のある一撃を。ある種の賭けでしたが、上手くいきました」

青山の『ネビルレーザー』は、デメリットも多いが威力だけならばヒーロー科を合わせてもトップクラスと言つていいレベルである。至近距離で全力で放てば、厚さ1mを超えるコンクリートの塊すら容易く貫通するほどであり、うかつに人間に向けられないほどの殺傷力なのだ。

ゆえに、『その時』が来るまで青山には徹底的に隠れてもらい、見事今、それが結実した。

巨壁のようだったキュレーターの頭部が、少しずつしぼんでいく光景に、Mt. レディ達は作戦の成功を確信し、一気に攻勢に出る。

降り注ぐ拳と爪の乱打。

その衝撃を防ぐ盾をなくし、ダイレクトにダメージが叩き込まれていく。キュレーターはまたたく間に追い込まれ、体力を削られ、窮地に陥つていった。

「こん、っ……の、お!!」

キュレーターは死に物狂いで力をため、『脳油』を失つても使える能力である超音波を放つが、その瞬間、Mt. レディのマントが、まるで意思を持つかのように翻つてその正面を覆った。

そこに届いた衝撃波は、そこに至るまでの瓦礫を粉碎する威力で進んでいたが……まるでそのマントに阻まれてかき消されたかのようになくなってしまった。

「体育祭の時、芦戸さんと発目さんの試合で目にした防護シート……そこに使われている振動・衝撃吸収構造を再現したマントです。超音波対策にと作つておいたもの……そして」

「黒く塗っていたのは……この俺が潜むためだ」

姿を隠していたもう1人……黒色支配の姿が、マントの漆黒の表面の中から浮かび上がる。

黒い色のものの中に潜むことができ、その『黒』を操ることができ

ガガガガガガ——ドツゴオオオオオン!!

その意識は、蹴りが決まっている最中に既に刈り取られていた。倒れ伏して数秒後、一拍遅れてその体が縮み始め……人間の大きさに。

後には、ぴくりとも動かなくなつて倒れ伏す、『個性』が解除されたキュレーターと、その眼前で、握った腕を大きく突き上げて勝利のスタンディングを見せるMt.レディが残った。

「完・全・勝・利っ!!」

第147話 VS 連合メンバー

——バキイツ!!

骨に硬いものが当たる鈍い、しかしどこか乾いた音が響き、小柄な少女……ビューティービスケットこと、ビスケット・クルーガーの小さな体が瓦礫の地面に転がる。

振り抜いた巨大な磁石で彼女を殴り飛ばした男……マグネは、にんまりと笑顔を浮かべて、倒れたところから起き上がろうとする少女を見下ろしていた。

「ふふっ、すばしっこいのは噂通りね。武術の腕も一級品みたい。でも……やっぱりあなたの腕じゃ力不足みたいね。これなら虎ちゃんの方がよっぽど強かったかも」

中身の性格と感性とは違い、むしろその見た目通りに接近戦に関して高い実力を備えているマグネ。林間合宿においては、その道のプロである虎を相手に、防戦一方にはなれど、危なげなくその『キャットコンバット』なる近接戦技能をさばき切っていたほどに、フィジカル、反応速度ともに一級品だった。

接近戦において、増強系個性でもない限り……いや、たどえそうだととしても、本人の身体能力と言うのはどうしても重要なファクターである。

それを鑑みれば、いかに技量が一流レベルであっても、目の前の華奢な少女の体躯から自分を脅かすものを感じられないのは、仕方のないことだった。

「別に私達、あなた達を皆殺しにしようと思っただけにいてるわけじゃないの。個人的にはあなたみたいな人を傷つけるのは心が痛むし、そのまま寝てれば見逃してあげても……」

「ふふふ……もう勝った気になってるなんて……ちよつと気が早いんじゃない?」

言葉を遮って……なぜか、心底おかしそうな声でそんなことを言ってくるビスケ。

それを聞いたマグネは、強がりか、と少し呆れた様子でため息をつ

くが……直後、まるで信じられないものを見たかのように、目をぱちくりとして白黒させる。

実際に目の前で、信じられない光景が繰り広げられていた。

起き上がりつつあるビスケの体が、膨れ上がっていく。

強く握れば折れてしまいそうな細い腕は、丸太のような太さに、

厚みも薄くはかなげな方は、鎧でも来ているかのように盛り上がり、厚くなり、

ゴスロリドレスに包まれていた体は、内側からはちきれんばかりにパツパツになり、

輪郭はおろか、身長や骨格すら変わり、冗談のような変貌が目の前で起こった。

儂さすら覚える美少女にしか思えなかったビスケット・クルーガーは……鋼の筋肉に全身を覆われた、マグネや虎をはるかにしのぐ、筋骨隆々の巨体となり、そして……

「こうなる時は、1発殴らせてあげることになっているの。だってこうなると、大抵……」

とつさにマグネは、本能的に危機を感じ……冷汗を流しながらも、手にしていた巨大磁石を眼前に構えて盾にし……

「大抵、一撃で終わっちゃって……ずるいからねエ!!!」

——ドツゴオオオオン!!

その磁石を容易く粉碎し、ぶち抜いて叩き込まれた必殺の拳に、顔の形が変わるほどしたたかに殴りつけられ……インパクトの瞬間、既に意識を刈り取られていた。

放物線を描いて吹き飛んだマグネは、磁石……だったものの残骸が派手に降り注ぐ中、どしや、と瓦礫の地面に墜落する。

そのまま、ぴくりとも動くことはなかった。

「え、何アレ……え、何なんアレ?」

「あ、マグ姉さんやられちゃいました……ていうか、アレ誰ですか?」

「ける……変身系の『個性』かしら？」

「……聞いたことある。『ビュートイービスケット』は肉体活性系の個性持ちで、本気で戦う時はそれを使って極限まで肉体を強化して、すごい筋肉ムキムキのアマゾネスみたいな感じになるんだって……でも本人、その見た目好きじゃないからあんまり使いたがらないんだって。都市伝説かと思ってたんだけど……マジだったんだ」

(聞こえてるつちゅーの小娘ども……ていうか、今そんな噂になってんのね。まあ、都合いいけど)

正確には、ビスケット・クルーガーのこの筋骨隆々の肉体と、偉丈夫のごとき彫りが深い顔は、『個性』で変身しているわけではない。むしろ、本来の彼女の姿がこの形であり……普段は『個性』の応用で体を極限まで筋肉を縮めることで、華奢な美少女になっているのである。

理由は取陰が言ったそのまま。この姿が醜くて嫌いだから。

なお、この真実を知っているのは、一部の親しい者のみ。永久やその母などくらいだ。

☆☆☆

(やばい、マグ姉がやられた……助けに行きたいが、こつちも余裕ねえし……)

横目にその光景を見ていたMr. コンプレスだったが、彼を取り巻く状況も中々に切迫している。

先程まで、物間の戦略によって遠距離で徐々に削られていた彼。そのままでもかなり苦戦と言っているいい状況だったのだが……ここに来てさらに状況が悪化している。

「……一度だけ言う。そのまま投降しろ」

「そう言われてはいそうですかかって頷くと思うかい、イレイザーヘッド」

「嫌なら別にいい。ただし……今の俺は機嫌が悪い。本物かどうかの

確認もかねて、腕の1本や2本は覚悟しろ」

「……最近のヒーローの学校は生徒から教員まで物騒なこった」

戦慄しながら後ずさるコンプレス。

それを睨みながら、今度は相澤の隣に立つマイクが、物間に尋ねる。
「Hey、B組物間、あいつが『圧縮』の個性持ちで間違いねーんだよな？」

「……？ はい、『個性』を使う所も見ましたので間違いありません。

……それが何か？」

「……そうか、なら問題ない。それなら……白k……黒霧を回収して持ってるのもアイツつてことで間違いないな」

それを聞いてコンプレスは、『狙いは黒霧か』と解釈する。

マイクの想像通り、コンプレスは今、黒霧（本体）と茶毘の2人を回収している。ゆえに自分が捕まるということは、連合メンバー一度に3人が確保されるに等しいと理解していた。

（どうにか離脱……いやしかし、さすがにプロ2人相手となると俺も……しかも何だか2人ともブチ切れてるような……？ まあ、生徒をこんだけ騒動に巻き込まれりや無理もないかもだが……）

何も事情を知らない彼が……かつての学友をもとに作られた……と予想される黒霧の回収に、イレイザーもマイクも、身を焼くほどの最大級の怒りを懸命に抑えていることなど、想像できるはずもなく、無理もないと言っているいいが。

ビスケによるマグネの撃破を皮切りに、現状は一気にヒーロー優勢に傾いていっていた。

『最上位』脳無の撃破に成功した面々が手分けして、残りの厄介な脳無や連合メンバーへの対処に乗り出していった。相澤とマイクがこうしてコンプレスの目の前に現れたのはそのためだ。

同じように、スピナーの元にはファットガムが現れ、トウワイスのところにはサンイーターが、トガヒミコの元にはルミリオンが駆けつけた。

ミルコを始めとした他のメンバーは、周囲の脳無への対処に動いて

いる。

「ちくしょうがつ……」

マイクの衝撃波を伴った大声で怯まされてからの、イレイザーヘッドの捕縛布により、あえなく捕縛されてしまうコンプレス。

だが、万事休すと思われたその瞬間……捕まえた側であるはずの相澤が、ふと何かに気づいたように表情を変え……物間達をかばいながら、ぱつとその場から飛びのいた。

そして次の瞬間、相澤達が立っていたそこに、無数に枝分かれした金属の触手が突き刺さった。

「コレはッ……あーくそ、間に合わなかったかよ!? 誰だやりやがったの!?!」

「ちつ……あと少しで物間に封印させられるところだったものを……!」

何が起こったか理解して歯噛みするマイクと相澤。助かったのはよかったものの、何が起こったのかわからず困惑するコンプレスと、突然自分の名前がなぜか出てきてやはり困惑している物間。

そんな彼らの眼前に、ズシン、と音を立てて……それは舞い降りた。

そして、無機質に見える目に、しかし明確にわかる怒気を滾らせて

……

「貴様ラ……ヨクモコノ私ヲ虚仮ニシテクレタナアアアアアッ!」

許サン、許サンゾオオ!!」

全身金属質の軟体という特徴を持った、『最上位』の脳無が咆哮した。

☆☆☆☆

時は少しさかのぼり……それが起こったのは、峰田達とトウワイスが戦っていた場所であった。

瀬呂と峰田を相手に立ち回っていたトウワイスだったが、そこにさらにサンイーター……天喰環が参戦してきたことで一気に追い詰められつつあった。

「ちつくしよう、3対1って卑怯じゃねえのか、それでいいのかよ未来のヒーロー様よお!? 戦いつてのは非常なもの、手段なんか選んじやいられねえんだよな!」

「うるさい黙れ……卑怯と言われようが後輩が見てようが緊張して胃が痛いのがなんかに負けるな頑張れ俺……なんかすごい『助けに来たぜ』って感じで登場した、してしまっただけでもプレッシャーになつてることなんか忘れろ、負けるな俺……こんな敵の言葉に耳を貸すな……!」

「はっはっはー、知らねえなこの全身タイツ野郎オ! 勝てばよからうなのだア——!!」

「峰田お前、援軍が来たら調子よすぎ……」

英雄ビッグ3とまで言われる先輩であり、ファットガム事務所でのインターン生として現場で既に活躍している天喰の加勢により、一気に優勢となった現状に安心したがゆえの露骨な復調。

そんな峰田に対して、気持ちは理解しつつも、瀬呂は呆れており……加勢しに来た当の本人である天喰がむしろ緊張している。

そして当然ながら、一気に追い込まれたトウワイスは、言葉の上では軽口を叩きつつも、どうにかしてこの場を打開しようと、パニック寸前の頭を必死に回していた。

しかし、それも空しく、マグネが倒れ、トガヒミコとスピナーも、援軍として現れたルミリオンとファットガムに防戦一方。コンプレスの方には、プレゼント・マイクとイレイザーヘッドの2人が。

(ちくしよう、このままじゃ……皆捕まっちゃう! 何か、何かないか……ッ!!)

多勢に無勢。しかもその『多勢』の方が、非常に強力なヒーローとその候補生達。

このままでは遠からず、『敵連合』は全滅する。そう危惧したトウワイスだったが、その時、彼の『個性』を介してある情報が飛び込んできた。

そのことに最初、一瞬、トウワイスは絶望しかけたものの、即座に頭を切り替え……今頭でわかっている情報を整理し、ここからとれる

最善の策を導き出し……実行した。

「調子に乗ってるなよヒーロー共……！ こつちにだつてなあ……守りてえもんや、貫かなきゃならねえ意地つてもんがあるんだよ!!」
言いながら、トウワイスは『二倍』を発動する。

どうやってかはわからないが、既に出したコピーの片割れである、黒霧が消滅させられたのを、トウワイスは感じ取った。

これで逃げる手段も失ってしまった形になるが、代わりに『二倍』の枠が1つ空いた。それを利用し、即座に作成したのは……茶毘のコピーである。

連合の中でも危険な、戦闘能力が特に高い1人として聞いていた者の出現に、否応なしに緊張感を高めるが、

「茶毘イ!! 行けエ!! 行つてくれ!!」

「増やして直後に人使いの荒い奴だな……しかも3人相手かよ」

「いや違う、こいつらの相手はしなくていい! お前は……」

最後だけ小声で言われたその指示を受けて、茶毘は即座に動いた。トウワイスの言葉通り、3人の相手をするのではなく、いなすような形でその場を離脱し……困惑する3人を放つて、その場所目掛けて走る。

その狙いに少しして気付けたのは……戦っていた当事者だった、天喰だけだった。

「……まさか! まずい! 君達、ここを一旦任せる!」

「え、ちょ、ちよつと先輩!」

ケンタウロスのような姿に一瞬で変身し、茶毘を追う。その姿を、信じていた者に裏切られたような絶望の表情で呼び止める峰田と、一体何が起こったのかと困惑する瀬呂。

それをさらに背後から見るトウワイスは、隙を見せている彼らを追撃するでもなく、

「……見えてたんだよ……何でか知らないけど、さつきから味方のはずの脳無が脳無を攻撃して捕まえてるのが……それってつまり、そういうことだよなあ……!? 体育祭見てたぜ? 確か、簡単に解除されちまうんだよなあ!」

ここを突破してそこに行くために、最も攻撃力と射程距離のある茶毘を選んだ。

加えて、トウワイス自身は狙ったわけではなかったが、茶毘の青い炎を操るといふ個性は、物理攻撃を無効化してしまうというその体質に対しても相性が良かった。

ただの衝撃……殴った程度では、相澤達が予想していた通り、その防御力ゆえに無効化されてしまう可能性もあったからだ。

間に合え、と天喰が必死で走るも、開いてしまった距離を縮めるには至らず、焦る天喰をあざ笑うように、茶毘は前方に見えたそれに目掛けて、青い炎を放つ。

そして……

「……オノレ……」

炎を吹き付けられた熱とダメージによって、傷を負いつつも……即座に『超再生』でそれを回復させ……同時に、地の底から響くような声を、それは、絞り出す。

「オノレエエエエエ!!」

心操の『洗脳』から解放されてしまった『最上位』脳無は、こうして意識を取り戻した。

相澤は最初、コンプレスを確保後、物間に『圧縮』をコピーさせ、それによって『最上位』を封印し、確実に回収するつもりだった。

しかし、あと一歩でというところで、最悪の脅威が解放されてしまったことに、さすがに焦りを隠せない。

反射的に物間達生徒を背にかばいながら、『最上位』の殺気のこもった視線を受け止める。

個人差はあるが、心操の『洗脳』は、かかっている間もうつすらと意識がある。

それゆえに、はつきりと意識していたままではないが、いいように使われていたという屈辱を身に受けていた『最上位』は、怒りのままに吼える。

「許サン、許サンゾイレイザーヘッド！ プレゼント・マイク！ 楽二

死ネルト思ウナヨ!!」

「改造人間にしちや随分高性能なこった……そんな風に感情まであるのかい？ それとも……もともなくなった人間の影響か？」

「ターミネーター感もだいぶなくなっちゃったな。結構人間味あるじゃねーか、H A H A H A」

「黙レ！ 貴様ラハココデ……イヤ貴様ハ後ダ！ マズハ、貴様ラガ大事ソウに庇ッテイル、ソノ生徒達カラ……」

しかし、その『最上位』や相澤、トウワイスらも予想もしないころから……さらにそこに介入する者が現れた。

「無粋なことを考えるものではありませんよ。すでにその命を燃やし尽くした者なれば……今の世を生きる者達にちよつかいを出すのもよろしくない。分をわきまえてはいかがです？」

「!?!」

上空から聞こえた声。

それに、相澤達のはつとして上を向くと同時に……『最上位』を除く全員が、突如、その場から大きく飛ばされた。しかし決して乱暴に、ダメージを与えるような形ではなく、あくまでそつとどかすように。

幾人かは、自分の体の一部に、一枚のしなやかな翼が引つかかっていることに気づけただろう。

同時に、追撃しようとする『最上位』の触手を、上空から降り注ぐ何本もの光の矢が貫き、弾き、妨害する。

上空にいたのは、2人。

大きく翼を広げて飛翔し、その翼……『剛翼』を飛ばして『範囲内』にいる者を避難させる、No. 3ヒーロー・ホークス。

そしてその横にいる、黄金の鎧と背中に翼を持つ、弓を構えた鳥人。しかしその姿はすぐに崩れ……軍服姿の異形、パンドラス・アクターとなった。

「遅くなってすいませんね、イレイザー、マイク。もう少し前についてたんですが……ちよつくら外側で一仕事してきたもんで」

「外側？」

「ええ、崩壊した市街地部分に取り残されてた要救助者の救助と、そっちにまではみ出して暴れてた『脳無』です。どっちもかなりの数だったんで、苦勞しました」

「最低限我々がやるべきことは済ませましたので、後はウワバミ氏ら、感知系の『個性』を持つヒーローや、警察や救助隊に任せています。遅くなったお詫びと言ってはなんですが……その者は、私が処理いたしましよう」

そう言つて、浮遊状態を解除して、周囲に誰もいなかった状態で、たた一体そこに残る『最上位』の前に、パンドラス・アクターは降り立った。

「処理スルダト？ 貴様一人デ、コノ私ヲカ？ 戯言ヲ……」

「戯言かどうかは実際に体験してみればよろしい。横から出てきて手柄を奪うようで、少々気は引けますが……まあ、相性を考えれば、こうするのが最善」

「モウイイ……ソナニ死ニタイノナラ……今スグ死ネ!!」

そう言つて触手を殺到させる『最上位』だが、それよりも早くパンドラス・アクターは変身を終えていた。

白磁のごとき骨の面に、豪華な装飾のついたローブを身にまとい、眼窩の奥に赤く光る目。

その姿は、表現するならば……『死』そのもの、『死の支配者』といった風貌だった。

同時に、地面から無数の白骨のようなものが現れ、『最上位』の全身を貫き、絡めとるような形でその場に縫い留める。

「コンナモノデ……」

「この姿、この力は……できればあまり使いたくないのですがね。強力過ぎて、味方を巻き込む……いやそれ以前に、ヒーローとしての戦いに、あまりに向いていない」

特に『最上位』の反応を気にした風ではなく、パンドラは続ける。

その背後に突如として、機械仕掛けの時計版のようなものが現れ……カチコチと時を刻んでいく。12時の位置にあった針が、文字通り時計回りに進んでいく。

その光景に、改造人間であるはずの脳無が、言いようのない怖気を覚える中、

「何より、この方との思い出は私にとって大切なものだから……。私の『個性』は、あまり強い力を使いすぎると、その変身した相手との思い出が少しずつ消えていく……。できることなら、風化させないままにしておきたい。しかし……。そうも言っていられません。ここで自分のことを優先して場を見逃してしまえば、それこそ申し訳が立ちませんから。……。『困っている人がいたら、助けるのは当たり前』……。そうですよね、父上」

その馬力で持って骨の拘束を砕き、白骨の魔王めがけて突進する『最上位』。

しかし、その瞬間……。針が12時に戻り、そして……。終焉が訪れた。『The goal of all life is Death（あらゆる生ある者の目指すところは死である）』。見るがいい、命無きものにすら死を与える力を……。』

「死ネエエエエエ!!」

「嘆きの妖精の絶叫」

その瞬間、絹を裂くような女性の悲鳴のような音が響き渡り……。範囲内にあった全てが、まるで死柄木の個性を使われたかのように、砂になって崩れ去った。

瓦礫も、鉄屑も、大地も、水も……。そして当然、『最上位』の脳無も。触手の1本、肉片の一片も残さず……。自分の死すら悟ることなく、跡形なく……。この世から姿を消した。

「既に役目を終えた命。せめて、安らかに」

その姿を元に戻したパンドラス・アクターは、軍帽の位置を確認して直しながら、風に吹かれて散っていく砂の行方を……。どこからどこまでが何だったのかすらわからなくなったそれを、見送った。

第148話 緑谷VS死柄木

「ジーニスト!? 大丈夫ですかベストジーニスト!」

「っ…………ぐ…………あ…………? だ、ダイナージャ、か…………? なぜ、ここに…………」

朦朧としていた感じだったが、名前を呼ばれたからか、急速に瞳に光が戻っていき…………それでもちよつと頼りないというか、不安定な感じではあるものの、意識は戻ったようだ。

その目にきちんと、私を映している。

「いやまあ色々あります……………すいません非常時つてことでそれは流してください。ギャングオルカから、負傷してるはずだつて聞いてきたんですけど…………大丈夫、じゃないですね聞くまでもなく」

ギャングオルカから聞いた話じゃ、彼らはベストジーニストをリーダーに、脳無保管庫を襲撃して、死柄木達が戦力として運用できる脳無を奪うのがその役目だったらしい。

実際最初は上手く行つてて、そこに保管されてた『脳無』は全部回収できた。

だがその直後、あのパイプ仮面…………『オール・フォー・ワン』とかいうラスボスのにヤバイ『敵』が現れ、一撃で全滅させられ…………このいやに開けた瓦礫の大地もそれで作られたという。

その攻撃で、Mt.レディもギャングオルカも大ダメージを食らつたらしい。さらには、一緒に来ていた虎さんも、おそらくは。まだ見つかつてないけど。

(……………って聞いてたけどこの傷明らかにおかしいな……………よっぽど当たり所が悪かった? 瓦礫が当たった? いや破片とかはないし……………その後応戦しようとして追撃でも食らつたか?)

広範囲を破壊する衝撃波を食らつたんなら、全身打撲とかになつてると思つてたんだが……………ちよつとコレ、R18—Gなレベルの傷だ。胸の部分がえぐれてるぞ……………子供見ちゃいけない奴だよ。

肋骨碎けてるし、内臓とか、欠けたり潰れてるかもしれない……………気のせいかもしれないが……………左右で肺の形が違う気がするんですがコ

レは……

この大傷は普通の措置じゃヤバイ。間に合わないかも。

今すぐ医療機関とかに搬送できれば、命は助かるかもしれないけど……内臓とはいえ欠損レベルの大傷となると、確実に後遺症が残る。最上級の治癒系個性を持つリカバリーガールでさえ、欠損に至った肉体は治せない。

……だが、手がないわけじゃない。

『治』せないなら……『直』せばいい。

『治癒』じゃなく、『修復』すればいい。ちょうど私の手元には、うつつけの『個性』が……『オーバーホール』がある。

ただ、それにも問題がある。直すにも、材料が要る。

緑谷の手と足を直した時は、千切れたそれが……。パーツがきちんと取ってあったからどうにかなかった。しかし、ジーニストのそれは、どうやら明らかに消し飛んでしまっている。

他のところから持ってくる？ それじゃ別な不具合を起こすかもしれない。それなら……

「ないなら……作ればいい。ジーニスト自身の体を、ジーニスト自身が……それを後押しする……材料だけ、こっちから提供すれば……」
できるはずだ。できる気がする。今の私なら。

何となくわかってきている。あの時……ナインから『オール・フォー・ユー』ごと、色々な『個性』を奪い返してからこっち……『個性』が融合・変容して、私にとって使いやすい、都合がいい形になっているということに。

それこそが、恐らくは……『オール・フォー・ユー』の真骨頂。

主のあり方に、あるいは『個性』に合わせて自らを作り替え……持ち主ではなく、その主にとつて最適な『個性』となる。そしてそれは、『混ざった』個性にも適用される。

ナインが使っていた『気象操作』が、私が使った時と奴が使っていた時で微妙に感じが違うのは、そういう理由なんだろう。治崎を気絶させた落雷や、Mt.レディを援護した暴風……ナインが使ってた時よりもスケールは小さいというか、コンパクトにまとまっていた。

てつきり、まだ奪いたての力だから、私がいこなせてないだけだ
と思つてたが……違つた。

変わった分、使いやすくなつていたんだ。私に……そして、緑谷に
とつて。

なら、『気象操作』だけじゃない……『オーバーホール』も、きつと
……私に都合よく、私の力を生かせる形で……変わっているはず。

いや、変わっていないなくても構わない、今から変える。変われ。

作り替える、力を……全ては主の、緑谷のために。

応えろ、『オール・フォー・ユー』……！

足りない材料は、私が補う。それならたつぷりある。

作るものは、ジーニスト自身の体の一部。なら情報は、設計図は
……遺伝子という形で、ジーニスト自身が持つてる。

「ダイナージャ、何を……！」

「痛いですけど我慢してください。すぐ終わらせます」

傷口には触れないようにして、首元の、肌が露出してる部分と、デ
ニムのコスチュームの部分の両方に触れる。幸い、痛くはない様子
で、表情は変わらない……いや、もしかしたら痛みを感じてないのか
もしれないけど……なら余計に余裕はない。

細胞分裂とかの延長上だと考えろ。ジーニストの肉体を媒介に、私
の『エネルギー』を材料に、肉体のパーツを作る。本来は自然治癒で
は作り出せないようなパーツも、作らせる。

それを使って、修繕を実行する。これらを一続きにやれば……理
論上は、欠損だろうと、材料がなかるうと……『修復』できるはずだ。
それだけでも超一級品の『オーバーホール』を、作り替えて、進化
させろ。

名前どうすつか……そうだな、『個性』名までは変えなくていい。あ
くまで技として……そういうこともできる的な感じで……よし、行け
る。行け。

治癒系・修復系の最上級……イメージしやすいものがないな。私の
知ってるものの中で、何でもありレベルで、問答無用で『直す』力と
くれば……これだ。

——ドクン!!

……来た。ここに来た。

アレだ。『個性』の胎動……緑谷が力を欲した時、私の『オール・フォー・ユー』がそれに応えようとしている感覚。

正にたった今新しい力に目覚めというアレだけど……それ以上を欲するか。

……前言撤回。ゆっくりしてる時間はないな。

求められるなら、応えよう。さて……緑谷は今、どういう状況だ？

私は今、何を求められてる……？ 感じ取れ、教えろ、『オール・フォー・ユー』。

私は、何をすればいい……何をすれば、何を捧げれば、彼の力になれる？ 緑谷を助けられる？

「……どうした、ダイナージャ？ できれば、この状況の説明を……」

「よろしいかしら、ジーニスト。申し訳ないのだけど……今、ちよつと『個性』の関係で取り込み中みたい。声をかけるのはよしてあげて」

「！ あなたは……」

「職場体験では、娘がお世話になったようで。状況の説明は私がするわ」

「……わかった、お願いしよう、アナライジユ。しかし、彼女は放っておいても？」

「ええ。……同じ『個性』を持つ者として、私もよくわかっているわ。大丈夫よ」

（今この子は……この子の『個性』は、覚醒と変容の最中にある……邪魔はしちやいけない。一体どういう形になるかはわからないけど……ここが正念場よ、永久。主が求めるならば、それこそは至上命題。『幾瀬』の名に恥じぬ献身を。己の全て、見事、彼に捧げてみせなさい！

……私が、あの人にできなかつた分まで……！ あの人の『個性』と共に！)

☆☆☆

故意か偶然か、周囲に遮るものがなく、かなり開けた空間で……その2人は戦っていた。

互いにインファイトにおいて効果を発揮する力を持つ者同士ではあるのだが、それにしてはその2人……緑谷と死柄木の戦いは、傍から見ているとやや奇妙なやり取りになっている。

攻撃と回避はともかくとして、やたらと寸止めや、自分から攻撃を外したり、動きとしてやや強引なモーションのそれが多くみられる。

緑谷が突き出した拳を死柄木が受け止める……というよりも、その突き出される軌道の先に手をそっと置いておくようにすると、緑谷の方がそれを察知して拳を止める。あるいはわざと外して、その際の勢いを次の攻撃に利用する。

死柄木がつかみかからんとする手を緑谷は回避する、あるいは払いのけるようにしてかわし、カウンターで攻撃を叩き込もうとするが、死柄木はネコ科の肉食獣を思わせる、予備動作がほとんどないしなやかで素早い動きで追撃をかける。薙ぎ払うようにして振りぬかれたその手を、緑谷はかなり無理やり体勢を変えながら回避する。

傍から見れば、緑谷が奇妙な動きをしているように見えることだろう。攻撃しようとはしているものの、徹底的に死柄木に手で触れられないよう、時にビビつてると言われても仕方ないくらいの強引な回避を行い、攻めたいんだか逃げたいんだかよくわからない、奇妙な動きだ。

が、その駆動は決して間違った判断や臆病な精神のもとに行われたものではない。

チツ、と死柄木の手が何かにかするだけで、今回の場合はそこにあった瓦礫が、その一部をまたたく間に『崩壊』させ、塵になる。

(……っ……掠っただけでコレって……USJの時より、『崩壊』が段

違いに速い……！ 死柄木の『個性』も、成長してるのか……！）
「Plus Ultra、だっけか？ まーまーいい言葉だよな……
やってみて成功して見ると、これはこれで面白かった」

まるで緑谷の頭の中を読んだかのように言う死柄木だが、

「まあ、俺の場合は微妙に違うんだけどな……どっちかっていうと、
『戻った』感じらしいし」

「戻った……？ どういうこと、だっ!？」

『個性』だけでなく、身のこなしまでも以前とはまるで違うものになっ
ている死柄木は、2段、3段構えの、引つ掻くような連続攻撃で
緑谷を攻め……何度目かの緑谷の回避の際に、かなり大きな瓦礫にそ
の手をばしん、と叩きつける。

たちまち崩壊する瓦礫。しかも、その周囲にある鉄骨やら何やらに
至るまで『崩壊』が伝播し、崩れ去っていく様子に、緑谷はぎよつと
した。

（速いだけじゃない！ 直接触れてないものにまで『崩壊』が……ここ
まで凶悪になってるなんて……洒落にならないぞ、この『個性』……
!?)

（当たらねえ……USJの時とは、いや体育祭から比べても動きがま
るで別物……フィジカルもそうだが、反応がやたら早くなってるな。
まるで反射、あるいはそれ以上……）

一方で死柄木もまた、予想を超えて強くなっている緑谷の現状に舌
を巻いていた。

AFOから指南を受けて（直接ではないが）戦う術をもともと身に
着けており、さらに最近、自分の過去、封印されていた記憶を呼び起
こした死柄木は、今までとは一線を画する戦闘能力を身に着けてい
た。自分にこんな力があつたのか、と、確かめた際には死柄木自身驚
いたほどに。

そこに、さらに強化された——正確には、本来のスペックに戻った
——『個性』を含めて考えれば、そこらのヒーローの1人や2人は相
手にならないであろう実力になっている。

それでもなお、触れられもしない見事な体さばきを見せる緑谷。

焦りこそなければ、死柄木はこのまま続けても決定力にかけると判断し……どうしたものかと考える中、ふと、視界の端に……AFOと戦っているオールマイトが目に入った。

死闘を繰り広げている両者ではあるが、よく見ると時折、オールマイトの視線がこちらに向いているのを確認することができた。

偶然ではない。明らかにこちらを気にするような視線を伴って。

向けられるそれは、緑谷に3割、死柄木に7割、といったところ。

それを見て……死柄木の心中に浮かんだのは、どうしようもない呆れと、苛立ちと嘲り。

そして、すぐに思考の外にその光景を追いやることによる『無関心』。はあ、とため息すらこぼして見せた。無意識のうちに。

そして、昨今そういった感情の動きに敏感になってきている緑谷が、『感情感知』で僅かにそれを感じ取って……困惑する。

緑谷もまた、視界の端で、AFOとオールマイトが戦っているのは気づいていた。自分を心配してか、はたまた別な理由か、頻繁にこちらに視線を寄こしていることにも。

オールマイトに対して、『社会のゴミ』だの『ラスボス』だのと散々に言っていた死柄木である。憎しみや怒りといった感情を湧き出させるならまだわかるが、まるで憐れむかのような感情を向けたり、鬱陶しそうにするのはなぜか。

(そういえば、こいつの雰囲気自体、前に会った時とは何か違うような気もするし……いや、後にしよう。時間もあるわけじゃないんだ……兎にも角にも、まずはこの場を……！)

深呼吸して心を落ち着かせながら、緑谷はそれと同時に、心を乱さず、しかし強く震わせ……そこに外付けでつながる感覚器を呼び起こす。コスチュームの各部に組み込まれた『サイコフレーム』が、それまでとは違う、鮮やかな、透き通った緑色の光を放ちだす。

「本気モードって奴か？　なら、こっちも……」

そう言っただけ死柄木は、膝について地面にしゃがむ形になり……その右手を押し当てた。

瓦礫の地面にぼん、と置かれたその手から……凄まじい勢いで『崩

壊』が周囲に伝播する。

死柄木を中心に、前後左右の全てを砕き割りながら広がっていくそれは、あつという間に緑谷の足元にまで届き、その靴が乗っている瓦礫にひびきを入れ……

その瞬間、緑谷は地面を割る勢いで蹴飛ばして跳躍した。

一瞬で死柄木の面前にまで飛び込み、しかしそれを読んでいた死柄木は、残る左手を突き出して、緑谷を貫かんと迎え撃つ。

それをさらに予測していた緑谷は、『ニューハンプシャー』と『オクラホマ』の合わせ技で、空中にいなから軌道を変えて回避する。

そしてそこから死柄木の側面、手が届かない位置を蹴り上げる……というよりは、その無理な姿勢ゆえに掬い上げるような形になって、しかし狙いどおり、地面から引きはがす。

その状態で自分は地面に降り立ち、改めて、地面を踏みしめて勢いをつけて拳を放つ。

だが死柄木もとっさに、掬い上げられる勢いを利用して体勢を変え、空中にいなからその身を緑谷に向き治らせることに成功し、手を突き出す。

交差する両腕。そして攻撃。

クロスカウンターののように、緑谷の拳は死柄木の鳩尾に吸い込まれ……死柄木の手は、緑谷の顔と肩、荷の腕をかすめた。

瞬間……一瞬だけ、緑谷の放つ『サイコフレーム』の光が、ひと際大きくなったように思え……

「うっ……ぐうううっ!?!」

「ぐ……がつ、は……!」

次の瞬間には、死柄木はそのまま数m吹き飛んで地面に転がり……緑谷は右肩の部分を押さえてその場に膝をついた。

瓦礫の地面を転がって、その体に細かい傷をいくつも作る死柄木。どうにか止まったところで起き上がろうとするが、クリーンヒットした拳により、息が詰まって体が上手く動かない。肋骨も……折れてはいないようだが、ひびくらしいは入っただけでもおかしくはない。鳩尾を中心に全身の痛みが、動く力を奪う。

緑谷もまた無事ではない。掠っただけでまたたく間に瓦礫を塵にするその『崩壊』により、緑谷の二の腕から肩にかけてと、顔の右側の一部に、深刻なダメージが入っていた。塵になってこそいないものの、ひび割れたようになっていてそこからは、どくどくと血や、よくわからない液体が流れだしている。激痛が走り、右の目は見えず、音も右側は聞こえづらくなっていた。

どちらも決して浅くない傷を負った2人だったが……今、彼らの心において、その意識の大半を向けられているのは……その傷や痛みではなかった。相対している敵ですらなかった。

(何だア、今の……?)

(今、何か見え……?)

2人が交差した瞬間……よくわからないことが起きていた。

それが気のせいでも何でもないことを、2人共が感じ取っていた。

恐らくは、『サイコフレーム』の放つ『心の光』が引き起こしてしまったのであろう、ある種の『奇跡』が……またしてもここで、予想外の出来事を引き起こしていた。

緑谷と、死柄木。

2人は今の、一瞬としか言いようがないほどに短い時間の中で……

2人は、互いの心を垣間見ている。

『ごめんなさい、ごめんなさい、お父さん……!』

『この人が……おばあちゃん……?』

『ヒーローだったんだって!』

『あの女はおばあちゃんじゃない、家族を棄てた鬼畜だ! ヒーローは……他人のために、家族を傷つけるんだ!』

『だって……転弧が見たいって言った!』

『待って、やりすぎだよ!』

『……もう、やだ……皆、嫌いだ……!』

『死ねえ!』

(これ……って……)

突然のことに、緑谷と死柄木は、とつさに互いに距離を取り……そのまま沈黙している。

その時、緑谷の脳裏に、一瞬にして駆け巡った光景は……衝撃的、などという言葉では到底収まらない光景、そして……事実だった。

(おばあちゃん……祖母、ってこと？ この人って……オールマイトが言ってた、先代の……志村、菜奈……死柄木の名前、志村、転弧って……じゃあ、死柄木はそんな……！ しかも、コレは……死柄木の、これ……記憶？ 家族……『個性』の事故……死んで……)

死柄木弔が、まだ『志村転弧』だった頃の記憶。

ヒーローについて話すことすら禁じられ、家の『ルール』に背いたことを咎められ、手を上げられ……助けてもらえず、裏切られ……

そのさなかに起こった『個性』の発現。

制御しきれない『崩壊』。巻き込まれ、崩れ去って死んでいく家族。その中心で泣き叫ぶ子供。

そして、殺意と共に突き出された手……明確に、父をその手にかけた。

その時感じた、途方もない快感。

善意が悪意に、愛情が憎悪に裏返り……『志村転弧』が『死柄木弔』になった、そのあまりにも残酷な真実が……一瞬にして、緑谷の頭の中に流れ込んできた。

そして……予想外の事態は、他ならぬ死柄木の方にも。

(っ……何だコレ、一体……精神攻撃か？ ……いや、違う……何だこれは……コレは、誰……いや、俺は……知って……なぜ、この人の顔が……今……何だ、この記憶、感覚、感、情……!?)

『心の光』を通して垣間見たのは……かつて一度だけ、たった一枚の写真でだけ目にした……自身の祖母だという女性の姿。

ヒーローコスチュームに身を包んだ……多くの人を救い、多くの人に愛されたという人物。

しかし……その家族だけは、救わなかった、幸せにしてくれなかった……父をして『鬼畜』と呼んでいた存在。

記憶が戻ってなお、写真一枚分の知識しかなかったはずの、その祖母が……なぜかその一瞬、目の前に現れた。幻や錯覚などとは、到底思えない、はつきりとした『気配』と『意思』と共に。

『辛い時、苦しい時こそ笑うんだ。世の中、笑ってる奴が一番強いんだからな！』

『もう限界だつて思ったら、自分の原点オリジンつてやつを思い出すんだ。それがお前を、もうちよつと先へ連れて行ってくれる』

『弧太郎、大好き。お母さんはお空からずっと、見守ってるからね』

(こいつは……なんで緑谷出久の中に、この人の意思が……!?)

動き、表情、声、性格……何も知らないはずの自分が、単なる錯覚でこんな映像を思い描けるはずがない。

ならば、精神攻撃の類か何かとあたりをつけるも、なぜかそうではないと実感できてしまう。知らないはずの出来事が、知るはずのない感情がなだれ込んできて——それこそ、知りたいとも思わなかったことすらも——盛大に死柄木の頭の中を引っ搔き回す。

『志村菜奈』がオールマイトの師匠であり、『オール・フォー・ワン』と敵対していたこと。戦いに敗れ、『オール・フォー・ワン』にその命を奪われたこと。

子供の……志村弧太郎のためを思って、戦いから遠ざけようと、息子を里子に出し、以降関わらないようにし……しかし、それが最悪の形で裏目に出てしまったこと。

ここまでは知っている。見ても驚くようなことではない。

だがそれも所詮は、AFOと、自身の父親というフアクタを通して告げられて知った事実であり……こんな、まるで直接面と向かって告げられた時のような感覚は知らなかった。

(何だ……これ……何だつてんだ……!?)

『皆』を身に着けた時のような、忌々しくて、鬱陶しくて、反吐が出

るような……しかし、なぜか落ち着くような感覚。

それと似ていて……しかしそれよりももっと、染み込んでくるように……温かい。

忌々しくても、鬱陶しくても、反吐が出そうでも……それらを乗り越えて、彼女が自分に伝えたいと思っている気持ち、問答無用で心に届く。染み渡ってくる。

(今更ッ！ 何だっつてんだ!!)

それがかえって、死柄木には……くすぶっていた苛立ちを再燃させる燃料となった。

これが、恐らくは……彼女が、志村菜奈が、志村弧太郎に向けた愛情であり、幸せになってほしい、平和に暮らしてほしいという、ただその一念での願いだっただろう。

認めざるを得ない。確かに自分は、これに……この女性の『気持ち』を受けて、少しだけ、心が温かくなった。

かつて、これを欲していた時期が自分にもあった。それを、思い出しすらした。

(だから!?! 今更それが何だっつてんだ!?!)

一番欲しかったその時に、一番必要だった時に、誰もそれに応えてはくれなかった。

『すぐヒーローが来るからね』……そう言っつて皆、歩き去っつていった。

結局、先生に拾われるまで、自分は1人だった。

結局そうなのだ。どれだけ耳心地のいいことを囁かれても、それが届かなくて壊れ、失われていくものは必ずある。

皆が救われるわけもなく、救われなかった者は置き去りにされる。そのまま、いかにも万事うまくいっている、平和で何事もないというように世界が続いていく。

置き去りにされた者達は、終ぞ見向きもされず、そこにいたことすら忘れられていく。そのことに、罪の意識も抱かれることはない。

だったらもう壊そう。今の社会が自分達を救わないなら、自分達の居場所がそこがないのなら、それどころか、せつかく手にした居場所

も奪いに来るのなら……全部壊してしまおう。

その方が楽しいし、スカツとする。気分が晴れる。

もしかしたら、その向こうにもっとましな世界があるかもしれない。

少なくとも、今のままでは世界が自分達に優しくなることなんてありえないのだから。

(知ったことか……あんたがどんな気持ちでこの世界を守ろうとしたのかも、どんな風に俺達を思っていた、思っているのかも……もう知らないし、関係ない……！ そのいかにも幸せそうな、やることやって満足そうな顔を、俺に見せるな！ 失せろッ！)

その瞬間、死柄木は『心の光』の向こうに見えた、志村菜奈の幻影を振り切り……そのわずかな間に心の中に生じた、動揺や苦悩、絶望……それらを含めた全てを苛立ちに、怒りに、そして……破壊衝動に変えた。

せめぎ合いの末に、『死柄木弔』は『志村転弧』を食らいつくした。ふと視線を上げると……ちょうど自分の方を見ていた緑谷出久と目が合う。

その目に宿っていた動揺と、こちらの心のうちを探ってくるような、そしてそれ以上に、何やらヒーローとしての意思や使命感を燃やしているらしいその眼光を見て……死柄木は、チツ、と機嫌悪そうに舌打ちをする。

「……せつかくいい気分だったつてのに……余計な世話焼きやがつて……これも、ヒーロー特有のお節介つて奴かよ？」

「……そう、かもしれないね。『余計なお世話』は……ヒーローの本質でもあるから」

互いに、今まで自分が知らなかったことを知った。

そして同時に、知っただけでは何も変わらないこともまた、理解した。

信じられない、信じたくないほどの真実を知り、緑谷は思わず死柄木を問い詰めようと、むしろそのまま声をかけて説得しようとする思ったが……目を合わせた瞬間、その目の中に燃える、どす黒い怨嗟

の炎を見て……やめた。

だめだ、何を言っても……届かない。

何を知っても、何を思っても、全ては破壊への燃料になってしまおうだろう。

……それでも、だからといって……諦めたり、切り捨てたりするという選択肢もまた、緑谷の中には存在しなかった。

(……『声』は聞こえない。でも、確かに今……僕の中の『ワン・フォー・オール』が騒いでる……いや、多分……その中の、あの人が、かな……) 死柄木が何を見たのかは、大体想像がつく。

いや、具体的な内容がわかるわけではないが、恐らくは……彼の祖母が、志村菜奈が、いかに彼や彼の父を、そしてこの世界の平和を思っていた……それを、片鱗だけでも知ったはずだ。

他ならぬ『ワン・フォー・オール』の中に生きている思念。感じ取れる感情があるとすれば……そういったものであるはずだ。

そして、その上で死柄木が、この炎を燃やしているのなら……言葉などではもう止まらない。

もとより、祖母の仇だった人を、その事実を知りながら『先生』と慕っているくらいなのだ。もう、言葉でどうにかなる段階など、とつくの昔にすぎているということなのだろう。

それなら、自分がやるべきことは……緑谷は考え、痛みをこらえて、拳を握る。

(だめだ、足りない。僕一人じゃ……それも、今の僕じゃ無理だ……。力も足りない……きつと、今の『ワン・フォー・オール』じゃ、それだけじゃまだ足りないんだ……それなら……僕が使える、もう一つの力を、彼女の力を合わせれば……)

心を落ち着け、自分の奥底から……力を引き出すイメージをする。

それは、自分の力ではないが、自分の力と言つていいもの。求めさえすれば手に入る……自分に捧げられた力。それこそ、その力の持ち主……その、全てごと、自分のものになった力だ。

(力が必要だ……永久！ 『オール・フォー・ユー』！ 僕に……力を貸して！)

(……OK、もちろんだ……ご主人様……！)

刮目。

(不思議だ……目の前どころか、見えもしない位置にいるのに……緑谷の存在を確かに感じる。すぐそこにいるみたい……いやむしろ、今まさに触れ合っているみたい……！　そして、この感覚が何を意味しているのかも、これをどう利用すればいいのかも……どうすれば、今の緑谷の役に立てるのかも……わかる……わかった！)

瞑想の後、自分がやるべきことを、今緑谷が必要としているものを悟った永久は、カツと目を見開いて……動き出した。

(鍵は、私の新しい2つの力……！　1つは、ナインとオバホから奪った力。そしてもう1つ……今まで、私の中にあることも知らず、使えもしなかった……父さんの力！　この2つだ！)

第149話 名もなき英雄の拳

交差する攻撃と攻撃。

一見すれば、先程までの戦いの焼き直し、延長上のようなものになっているが、死柄木と緑谷の戦いは……徐々にその様相を変えたものになってきていた。

自分を縛る鎖を引きちぎるかのようには、まるで見た目も態度も、まるで肉食獣のように激しく、しかししなやかな動きで襲い掛かる死柄木。その手に触れたものは、生物、無生物、無機物、有機物を問わず崩壊し、塵となって風に散っていく。

かと思えば、攻撃を受ける側に立ったとしても、その『崩壊』と、驚異的な反応が牙をむく。

相手の攻撃に合わせてそれに手を触れ、攻撃が形になる前に『崩して』しまうことで無力化する。『攻撃は最大の防御』を体現するかのようには、相手の繰り出す刃を破壊してしまう。

たった1つの手札、その使い方ですら翻弄し、何一つ形にさせずに、『関係ない、全部壊す』と言わんばかりに猛威を振るう。

むしろ攻撃も防御も、考えて戦うことすら鬱陶しい、煩わしいと言わんばかりに、自分を縛る者、妨げるもの……分け隔てなく全てを塵にする。

まるで、自由になっていくことに強さを増していくかのようなその姿は、その心情通り、『全てを壊す者』そのものだった。

そんな死柄木だからこそ……社会の評価や、自分を縛るルール……色々なしがらみを抱えつつも、精一杯その中で輝き続け、夢へ向かって歩み続ける緑谷の姿は……他の何よりも、自分と近いにも関わらず、絶対に理解できない……何よりも『壊したい』と思えるものだったのかもしれない。

傷つき、体をひび割れさせながらも、一步も退かずにあがき続ける1人の『ヒーローの卵』を塵にして、その向こうに見える、いびつな地平線を眺めたかったのかもしれない。

……そんな光景を求めて、死柄木が突き出した手は……空しく空を切り

……
——バキイツ!!

「がっ……!?!」

代わりに……その頬に、緑谷の拳が突き立てられた。

殴り飛ばされつつも、空中で体勢を立て直して着地し、すぐさま緑谷に向き直った死柄木は……一目見てその姿に違和感を覚える。

一瞬前の緑谷の姿と……今もそうであるはずの姿と、今見ている緑谷の姿が、あまりに違っていた。

(こいつ……傷は……ひび割れはどうした? なぜ……治ってる……!?)

数分前のせめぎあいの中、自分の『崩壊』の手が掠ったことで、ひび割れる形で傷を負ったはずの緑谷。その顔と腕。

腕はまともに振るえないくらいにはなっていたはずだし、顔は目が開けられないくらいに傷になっていたはずだ。

それが、両方ない。

血や土埃の汚れはあるが、傷がない。目はきちんと開いているし、そもそも今、思い切り振りぬいて自分を殴ったのは……ひび割れたはずの『右』だった。

コスチュームの破損は、どうやらそのままのようだが。右腕のサポーターにもなっているグローブが破損し、肌が見えている。そしてその肌に、やはり傷はない。

(こいつの『個性』は増強系のはず……これじゃあまるで、再生系みたいな……)

不思議に思う死柄木の目の前で、さらに不可思議な出来事が起こる。

緑谷の左手が、右腕のコスチュームの破損した部分に添えられたかと思うと……次の瞬間、

——バツン!

そんな音と共に……コスチュームの破損が『修復』された。

その光景に加えて、死柄木の耳に届いたその『音』は……強烈に聞

き覚えのあるそれだった。

数日前、その男を助け出した時に見た……目の前のこの男が持つて
いるはずのない『個性』によってもたらされるもの、だったはずだ。
(間違いない、今のは『オーバーホール』の……何でこいつがそれを使
える!? 報告にあったエネルギーの紐といい、さっきの再生といい
……こいつの『個性』は一体何なんだ? いや、むしろ……こいつの
『個性』に、こいつ自身に、何が起こってる……!?)

(……そんな風に、多分死柄木は考えて、戸惑ってるはず……。無理も
ないだろうな、目の前で、使えるはずのない力や、使い手が違うはず
の力をポンポン使われて、しかもそれがどんどん『増えて』いく……
僕自身戸惑ってるくらいだ。その原因、というか犯人を知らなければ、
パニックになつてたかもしれない……。でも、今の僕のははつきり
わかる。この力は……彼女のおかげだって)

そして、緑谷は再び構えを取る。

今の『修復』により、右腕だけでなく、それ以外の個所も……コス
チュームの破損は全て修復されていた。万全の状態となつて、緑谷は
死柄木に向き直り……その目で、力強く死柄木を見据える。

(彼女の力は、僕の手……前に彼女自身が言ってくれていた通り、全て
を僕に捧げてくれて……そして今きつと、彼女は僕のために動い
てくれている! 体の中に感じる力が、どんどん大きくなって、しか
もどんどん『増えて』いくのがわかる……! 少し怖い、けど……怖
がる必要なんかないんだ! これは僕の手……彼女が捧げてくれて
いる力……なら、使いこなしてみせる!)

緑谷の心の中、困惑と恐怖を乗り越え……それにより、極限まで思
考が研ぎ澄まされていく。

己の肉体と『個性』を最善の形で使うために、余計な考えが抜け落
ち、余計な力がそぎ落とされ……荒々しく散っていた『フルカウル』の
火花と、周囲を照らす『サイコフレーム』の光が、静謐な、澄んだ輝
きに変わっていく。

思考を放棄したわけではない。むしろ、極限まで集中して、なおか
つそれがストレスになりえないほどの自然体を保っている。

今、目の前にある戦いのため、なすべきことを成すために、全ての力を使う準備が……知識、経験、本能、直観、全てを総動員して戦う準備が整いつつあった。

それこそ、今まで使ったことがないはずの力であろうと。膨大な経験と、研ぎ澄まされた感覚、そして、リアルタイムで彼女と繋がっている絆が、それを可能にしていた。

今まさに彼は、限界を超え……『兆』から『極』に手を届かせんとしている。

言葉にできない寒気を感じた死柄木が駆け出すと同時に、緑谷も地を蹴り……しかし、先程までとは比べ物にならない速さで死柄木に接近する。

驚きつつも突き出された手を、緑谷は空中で、ありえない軌道で飛んで回避した。

しかも、先程見せた、技の反動による強引な軌道変更とは違う。まるで空を飛んだかのような、急激で、なめらかで、予備動作も何もない動きだった。

それゆえに体勢を崩すこともなく、横合いからの蹴り……『セントルイススマッシュ』が死柄木の肩に突き刺さる。

間一髪、逆方向に跳ぶことでその衝撃を逃がし、またその間に手を割り込ませて、『崩壊』によるカウンターを成功させた死柄木。蹴り飛ばされて地面に転がりながらも、攻撃した緑谷の足が、膝のあたりまでひび割れていくのを目にし……

しかし、『バツン！』という音と共に、即座にそれが無に帰してしま

う。血すら噴き出していた足は、コスチュームごと即座に修復され、1秒後には力強く地面を踏みしめて、再び自分の元へと跳んでくる。またしても、凄まじい速さで。

今度は死柄木は回避を選択した。邪魔な瓦礫を『崩壊』させて道を作り、ぎりぎり緑谷とすれ違うようにして回避し……その瞬間、違和感に気付く。

(風……？　今、すれ違った瞬間、猛烈な風が……)

まるで、緑谷に対してだけ、強烈に追い風が吹いているような感覚を覚えた。

しかしその直後、何もない空中で緑谷は突如方向転換して蹴りを放とうとしてくる。

それを受け止めようと死柄木は手を突き出す、足の動きはフェイントだった。

どう勢いをつけても無理だろうと思うような動きで緑谷は、またしても空中で移動してその場を回避し、代わりに腕からエネルギーの紐……『黒鞭』を伸ばして死柄木の手をからめとってくる。

死柄木はそれが引つ張られるのを感じながらも、とっさに手でそれに触れる。

実体がないエネルギーの塊であるにもかかわらず、煩わしくも死柄木を縛っていた『黒鞭』は、その力に負けて崩壊した。

非実体のものですら崩壊させられるのか、と思ったのだろう。わずかに緑谷の顔に動揺が浮かび……。しかしそれによって動きが止まることはない。着地し、再度死柄木目掛けて跳ぼうとして……。しかし、突如横に飛びのいた。

緑谷はもちろん、死柄木にとっても予想外なことに、1体の脳無が背後から緑谷に襲い掛かっていた。あっさり回避されてしまったが、どうやらパワータイプらしいその脳無の一撃は、瓦礫の地面を碎き割る。

しかもその横合いから、もう1匹、脳無が走ってくるのが見えた。どうやら、ヒーロー達の対応を生き残っていた脳無がまだいたようだ。

どちらも体の色は白。中位のようなだが、利用できるか、と一瞬考えた死柄木だったが、その望みは即座に絶たれることになる。

緑谷は回避直後にその脳無の傍に戻ると、その頭にぽんと手を乗せ……。勢いよく地面にたたきつけた。

そして、次の瞬間……。バチバチバチ!! と派手な音を立てて、その手から電撃が放たれて……。盛大に脳無を感電させ、動きを止めたのである。

ショックで動けなくなったらしい脳無を、はるか遠くまで蹴り飛ばし……その直後に到着して襲って来た、もう1体の脳無の攻撃を、腕1本で緑谷は受け止める。

その脳無の体の大きさ、腕が振るわれた瞬間の猛烈な風切り音を鑑みれば、見掛け倒しであるはずがない、先程の脳無と同等かそれ以上であろう臂力による一撃。

それを、ケガ一つなく受け止めた緑谷は……次の瞬間、裏拳を叩き込み……それと同時に、よく見ないとわからないが。追加で発した衝撃波で脳無を吹き飛ばした。

狙ったのか偶然か、ちょうどその射線上にあった瓦礫の山に突っ込んで、そのまま崩れた瓦礫に埋もれる形になり……戻ってくる気配は、ない。

(どういうことだ、さつきから……もう、複合型とか、隠された力とか、そんなレベルじゃねえぞ……まるで、どんどん使える力が増えていくような……！　どんなからくりだ……？)

死柄木がそれを理解できないのは当然であるし、なんなら緑谷自身、なんとなく察しているとはいえ、どういう仕組みで力を使っているのか、力が増えていっているのかを理解しているわけではない。

暫定名『身勝手の極意』により、その身に備わった力を最高効率で使うことができているに過ぎない。その詳しい仕組みまではわかっておらず……しかしその代わりに、その主犯であろう、自分に全てを捧げている少女を、信頼していた。

そして、その少女はと言えば……

☆☆☆

叩き伏せて地面にめり込ませ、ぴくぴくと痙攣している、1体の脳無。

その脳無の頭を手でわしづかみにしていた永久は……ゆっくりとその手を放し、脳無を放置してその場から走り去る。無論、もう脳無に動くだけの力がないことは確認した上でだ。

力がないというか、今まさに永久が奪ったのだが。
力も……『個性』も。

「これで6匹目……6個目の『個性』、よし、順調順調」
彼女がやっていることは実に単純である。

まず彼女は感覚的、ないし直感的に、自分と緑谷の間に『個性』によるつながりができていることを理解していた。

それが、自分の中に隠れていた……個性因子という形で確認できずとも、確かにそこにあった、実の父親の『個性』……『同調』^{シンク}によるものであるということも。

緑谷が心の底から『欲した』ことにより、今しがた完全に覚醒した『オール・フォー・ユー』……そこからたらされた気付き、確信……その1つだった。

永久の父親そのものについては、今触れて説明するべきことではないがため、省くことになるが……その『個性』は、他人と感覚や感情をリンクさせる『同調』というものだった。

自分が見ているものを他人にもそのまま見せたり、自分が感じた『感情』を相手に伝えたりすることもできた。その逆も然りだ。

緑谷に発現した謎の能力『感情感知』は……実は、ワン・フォー・オール由来のものではなく、この『同調』の影響、その片鱗だった。

幾度となく永久から『エネルギー』の譲渡を行う中で、彼女の中にあった力の因子の中で、最も相性がよく、最も緑谷が求めるそれに近い能力である『同調』が、彼に根付いてその力となり始めていたのだ。それこそ、もともと因子を遺伝的に保有していた、永久よりも早く。

これにより緑谷は、他者の感情を感知することができるようになり……そして永久との間においては、クルーザーの時の最終局面でそうだったように、互いに互いの存在や感情を感知できるまでの力になっていた。

そして、その『同調』の力が双方に極限まで高まった上で、『オール・フォー・ユー』の特異性である『変容』と合わさった結果として発現したのが……緑谷と永久の間での、『保有する『個性』の共有』という能力だった。

読んで字のごとく、緑谷は永久の、永久は緑谷の持っている『個性』を使うことができる。

ゆえに緑谷は、永久が持つ『オーバーホール』や『気象操作』を使うことができ、永久もまた今……緑谷の『黒鞭』を使って、離れたところにいる脳無をからめとり、引き寄せて叩き伏せる、ということを繰り返している。

（っ……扱いづらっ……緑谷、よくこんな自在に使えてるな……最近じゃ、出し続けてられる時間もかなり伸びてきてるっぽいし……やっぱすごいわ。でもまあ、それなら私は私で……今、私にできる最善の手を尽くすだけだけどっ！）

無論、ただ単に闇雲に脳無を叩き伏せているわけではない。その先に目的あつてのことだ。

動けなくした脳無の頭を、またわしづかみにし……永久は、『オー・フォー・ワン』を……ナインから奪い取った、『個性』を奪う『個性』を発動する。

脳無の中に格納されていた『個性』のうち、お目当ての『個性』が、自分の中に流れ込んできて、自分のものになる感覚を、永久は味わっていた。

それが終わると、永久はまた脳無を開放し、走り去る。

「よし……『空気伝導』ゲット……これで、『超再生』『衝撃吸収』『エネルギードレイン』『残像』『受け流し』『高速反応』……合わせて7つ目か。いいのが集まってきてる……よし、続き！」

永久はそのへんに山ほど転がっている『脳無』の中から、緑谷に相性がよさそうな、ナインから奪った能力の一つである『個性看破』の目によって、接近戦向けの『個性』を選んで、片っ端から奪って回っていた。そしてそれを、リアルタイムで緑谷と『同調』させて共有することで、どんどん緑谷の戦闘能力を強化していつているのである。

さらに、無意識のうちにはあるが、緑谷により使いやすくなるよう『変容』させて調整して。

1つ、また1つと、緑谷は使える『個性』が増えていつている。

そんなことをすれば、常人であれば頭の処理が追い付かず、かえっ

て混乱してしまうだろう。しかし、思考による負担を極限まで0に近づけて、体全体が考えて戦う『身勝手の極意』により、緑谷はその問題を解決していた。

その結果が……今まさに死柄木が目になっている、緑谷の急変である。

『気象変動』で起こした暴風を纏って加速し、空中を自在に飛び回る。攻撃にけん制に自在に使える電撃も、合わせて使いこなす。

『衝撃波』によって、直接触れない位置から、広範囲に攻撃を届かせる。

『超再生』により、下手な傷は即座に治癒してしまう。

『オーバーホール』により、コスチュームの破損すら即座に修繕する。

『衝撃吸収』により、かつてのUSJの脳無のように、打撃攻撃はその威力を吸収されてしまい、ほとんど意味をなさない。それを超えて通った衝撃や、蓄積している衝撃も、今度は『受け流し』によって大部分が無力化されてしまう。そしてわずかなダメージは、『超再生』が帳消しにする。

今はまだ使えていないだけで、永久の持つ個性はまだ他にも……『バリア』や『サメラ』、『爪弾』などまだまだまだあるし、現在進行形で『個性』を奪って増やしている。際限なく強くなっていく。

まさにチート、理不尽そのものと言えるほどの強さを、緑谷は手にしつつあった。

勝てない。

このままでは、負ける。

死柄木の脳裏に、否応なしにそんな予感がよぎる。

実際それは正しいのだろう。いかに『崩壊』が凶悪な『個性』でも、それを超える再生能力と、それを突破してくる攻撃力を相手が持つていれば……刃が自分に届きさえしてしまえば、負けるのは自分だ。それをリカバリーするだけの手札が、自分にはないのだから。

否応なしに、焦りも生まれる。苛立ちも、怒りも。

しかし、死柄木が一番今苛立っているのは……理不尽なパワーアツ

プで覆されようとしているこの状況ではない。それに対して手も足も出せない、自分にでもない。

(何だよ、お前……何なんだよ、その目は!? 顔は!?)

今もまた、自分を蹴り飛ばした緑谷が、その顔に浮かべている、表情。眼差し。

極限まで戦闘に集中した状態でありながらも浮かんできてしまう……彼のいわば『本質』とでも呼ぶべきもの。

(何で、勝ってるお前が……そんなに苦しそうにしてる。何で俺に、そんな目を向ける!?) そんな……可哀想なものを、見るような目を!!)

☆☆☆

もしかしたら、自分もこうなっていたのかもしれない。

形成が逆転する前と後を問わず、緑谷の心の中には、こんな思いが常にあった。

『無個性』……この超人社会においての、マイノリティそのものだった過去。

普通に生きるだけなら特に問題はない。もとより私的な『個性』の使用が半ば禁じられている世の中だ、使えなくても、日常生活で困ることはない。せいぜい、少し生活において便利なアドバンテージが——それすら『個性』によるだろうが——ないくらいだ。

が、ヒーローになる、という夢を見るのにおいては致命的だったそれ。

たったその一点だけで、将来が全て閉ざされたような気持ちだった。そんな気持ちのまま、それが明らかになってからの10年という期間を過ごしてきた。

なんで『個性』がないだけでそうなるんだ、どうして自分の人生は、最初から、スタートラインにも立てないんだ……そんな風に考えたことは、ないとは言えない……どころではない。

1回や2回ではない。数えるのも忘れたくらいに、幾度となく心の中に覚えた思いだ。

本当なら、そのままゆつくりと腐っていく、あるいは、どこかできつぱりと諦めをつけて、『無個性』なりの人生を歩み始めることになるはずだったのかもしれない。

幸運にも、オールマイトに出会い、見込まれて、『ワン・フォー・オール』を受け継ぐという将来を手に入れたがゆえに、自分はこうしてヒーローとしての人生を歩み出している。

それどころか、学友に恵まれ、着々と力を磨き上げ、既にプロでも十分に通用するとまで言われるほどの力を手に入れている。学内でも一目置かれるまでになり、先輩や現役プロからの覚えもめでたく、さらには、自分を慕い、全てを捧げて尽くすとまで言ってくれる人もできた。

そしてその人……永久の献身により、今自分は、さらなる上のステージへと駆け上っている。それこそ、どんなプロヒーローでも手にすることのできないような、超人社会にあつてなお常識外と言うしかないような力すら手に入れて。

しかし、それらがもしなかったら？

あるいは、全く別な何か『力』や『きっかけ』を経てしまっていたら？

暗く淀んだ心、閉ざされた未来、希望の持てない人生……そこにも、何もかも全て壊すような……社会も、法律も、ヒーローすらも……何もかもが妨げでしかないような力が手にあつたら？

あるいは、手を差し伸べてくれたのが、眩いばかりの光の元に生きるヒーローではなく、闇の世界にその名を響かせる絶対者であつたら。

自分は……自分も……全てを憎み、全てを壊す者になっていたのかもしれない。

オールマイトに見込まれた自分と、オール・フォー・ワンに見込まれた死柄木、

力を持たなかった自分と、望まぬ力を持ってしまった死柄木、

両者を分けた壁は、実はそれほど分厚いものではないんじゃないか。そんな風に、緑谷は思った。

そして、それを理解した上で……緑谷は、拳を握っていた。

例え自分達が似ていても、だからといって、それで自分が死柄木の思いを理解できたわけではないし、理解できたとしても何かが変わる、変えられるわけでもない。

死柄木はもう、言葉では止まらない。家族にすら拒絶され、傷つけられ、その果てに全てを失い、自分で壊しすらした死柄木に……今更もう言葉は届かない。

それでもなお、彼を止めようと思ったなら……道を分かった自分の思いを伝えようとするなら……もう、正面からぶつかるしかない。

無論、殴つて言うことを聞かせる……というわけではない。それでは何も変わらない。

ぶつかる、受け止める、ここが重要なのだ、と緑谷は心のどこかで理解していた。

(鍵は……死柄木の記憶の中で触れた、あの感情……いくつも『似ている』所のあった中で、唯一『同じ』だと思えたあの部分！)

『違うんだよ、お母さん……』

『俺が……お父さん達に……』

『そうじゃないんだ……あの時、僕が……』

『そうじゃない……あの時、俺が……』

『『本当に、言っただけでよかったのは……！』』

☆☆☆

(生まれる前に突き放された。生まれてからずっと押し込められてきた。禁じられ、責められ……皆、父をかばって、自分には『泣くな』というばかり。誰も俺を、見ているようで見ようとせず、波風立つのを嫌って、我慢しろと言ひ、何もしてくれなかった！)

(俺の中で、あれは……家族を失ったあれは、悲劇なんかじゃない……今、こうしてここに立っている俺は、不幸なんかじゃない！ 『不運』

も『間違い』も、全部的外れだ！ 血筋も、思いも、何もかも関係ない……俺は……死柄木弔は、生まれるべくして生まれ、来るべくしてここに来た！）」

『恐れるな』

『何をしてもいい。手の中にあるもの……握って潰すも、転がして遊ぶも、全部君が決めていい』

『憎悪と愉悦を重ねられたなら、君は自由だ』

（遮るもの、縛るもの……全部思いつきり壊すと嬉しい……スカツとする……！）

（俺は自由だ。何をしてもいい、そんな気分になれる。今までも、これから……そのためだけに、俺は壊し、滅ぼし、笑う……それを望んで、ここに……！）

「そんな、憐れむような目で……俺を見るな！ 緑谷出久!!」

ここにきてさらに、死柄木の『崩壊』は強力になっていく。

掠っただけでひび割れが全てを砕く。しかしその瞬間に緑谷はそれを『修復』する。

恐れも何も抱くことなく……いや、違う。抱いて、それも飲み込んで、歯を食いしばって……自分に向かってくる。

「人の気持ちも知らないで、わかったような気になって、いかにもな正論を口先で嘯く……！」

何度崩しても、何度壊しても、止まらない。

「お前が……お前らが、嫌いだ！」

「あっそう！ で!?!」

「……は!?!」

帰ってきた予想外の、あんまりと言えばあんまりな言葉に、一瞬呆気にとられる死柄木。

それに構わず、緑谷は全力のまま、腹から声を出す。

「それで!?!」

「それで、つて……お前、何を……!?!」

「それで何だ!? 嫌いだからなんだ!? 言いたいことがあるなら全部
言え!!」

次々と緑谷の口から出てくる言葉。

その1つ1つは、さして難しくもないもので……まるで、思いついたことを片っ端から言っているかのよう。

しかしだからこそ、1つ残らず、死柄木の耳に、頭に突き刺さる。

「つ……言ってどうなる……!?! もしかして、お前が助けてくれんのかよ!?!」

「何だよ、お前助けてほしいの!?!」

「バカか! もう誰もそんなこと思っちゃいない……何を言っても誰も何も変わらないし、何もしてくれない! そんなことはもうわかっている! だから決めたんだよ、全部ぶっ壊すって! もう誰が……誰が助けなんか欲しがるか! わかった気になってるんじゃないやねえよ!

お前が俺の……」

「わかってもらった気になるんじゃない! お前の気持ちなんか誰が知るか!」

「はあああ!? 何……っだよさつきからお前!? わかったとかわかってないとか……」

「わかるわけないだろ!?! 僕はお前じゃない! それ以前に、お前が何も言わない、わかってもらおうとしないんだから、そんなんで自分のことをわかってもらえないはずないだろ! 僕はただ……お前が、まだ何も、言うべきことを言っていないのが、その結果こうなったのがわかるだけだ!」

気がつけば2人、喉が張り裂けるのではないかと思うほどの音量と必死さで言い合っていた。

一瞬のタイミングのずれで命が落ちるであろう、極限の殺し合いの中で。

それでも……一言一言を、真剣に。

「本当に欲しいものがあるなら……目指したいものが、向き合いたいものがあるなら! 全部投げ捨てたり、全部壊すより先に、やらな

きやいけないことがあるんだよ！ それに気づかずに、もうダメだつて決めつけて、何も言わずにふさぎ込んで、全部抱え込んで、勝手に結論出すから腐るんだ！ お前のことは知らなくても、僕はそれを……一番よく知ってる！」

「……………」

「僕はお前のイエスマンじゃない、全部を肯定したりはできない！ 否定もするし殴りもする！ 取ってつけたような正論だつてぶつけるし、全てに応えることなんてできるわけがない！ けど、お前が助けを求めるなら、そうでなくても何かを伝えたいのなら……たとえそれがどんな悲鳴でも！ 話も聞かずに突き放したりはしない！ だから全部……ぶつけてこい、死柄木弔！」

この男は……自分と、向き合おうとしている。

言葉で飾らず、誤魔化さず……逃げも隠れもせず、正面から向かって来ている。

やっていることが戦闘でも、言葉ではなく拳が飛んでくるとしても、

(壊……せない……！)

全部知った上で、敵と味方だと、理解し合えないと理解した上で、それでもなお、

この少年は、自分に向き合おうとしているのだ。

(こいつを……壊せる気が、しない……！ 何でだ、何で……！)

すぐに治るからではない。例え全てを塵にしたところで……こいつを壊せたとはいえない、そんな気がする。

血も肉も骨も、布も金属も、何もかも全て崩してしまつたとしても、目の前からこいつはいなくならないんじゃないか。意味の分らないそんな思いが、自分の頭にこびりつく。

そんなことがあるはずもないのに。なのになぜ、消えてくれない。

父も、母も、祖母も祖父も、姉も、飼犬も、家も、敵も、味方も、何もかも壊してきたこの力が……時に疎ましくすら思った力が、なぜこの男には、こんなにも頼りない!?

「俺を、憐れむな……そんな目で見るな！」

こんなにも苛立つ。

「俺の前に立つな！俺の視界を遮るな！」

こんなにも苦しい。

なのに、

「何なんだよ、お前はア!?!」

なぜ……どこか、温かい？

縁もゆかりもない他人が、それどころか現在進行形で殺し合っている相手が、そのまなざしが……どうして、ほんのひと欠片……忘れかけていた、ずっと欲しかった安らぎを、心にもたらす？

この目の前の男は、一体俺に何をもたらそうとしている!?

わからない、理解できない、怖い。

今までこんな奴、見たことがない。

どうしてこんな気持ちになる？

知りたい。でも知りたくない。知るのが怖い。

知ってしまったら、後戻りできなくなりそうで。

何かが壊れてしまいそうで。

壊れるなら構わない？もとより全て壊すつもりだ。

いや違う。何かが違う。『壊れる』の種類が違う。

まるで、そう……今まで見えていなかったもの、忘れていたものに気づいてしまいそうで。

そして、それに気づいたが最後……自分が自分でなくなりそうで。

今まで生きて来た『死柄木弔』が崩れ去ってしまいそうで。心の奥底に忘れ去り、捨てたはずの『志村転弧』が目を覚ましそうで。

俺が壊せない、壊せなかったものに……俺が、壊されてしまいそうで……

「……バカバカしい……!」

そこまで考えて……死柄木は、ふっと体から力を抜いた。

まるで、限界にきてブレーカーが落ちたように脱力し、膝をつくようにしやがみ込む。

「何を、迷ってる……俺が俺を縛ってどうする……!」

しかし、倒れ込んだわけではない。

その両手は……ばしん、と、叩きつけるように地面に押し付けられていた。

「俺はただ、壊すだけだ……」

その光景と……静かな声音の奥にある感情に、緑谷はこれから何が起こるかを察した。

「止められるもんなら止めてみる……緑谷出久！」

察してなお、退くことはなく。

その身にまとう『サイコフレーム』の、『心の光』を全開にして……地を蹴った。

「目障りなもの……鬱陶しいもの……邪魔なもの……。俺が見たい景色に、必要ないもの……！ 全部……全部……！ 全、部ツ……！」

崩壊が、広がっていく。

死柄木の手から、その周囲へ……あまりの威力に、反動ゆえか、死柄木自身の手や腕、肌にひび割れを起こすまでになり、

それでも止まらぬ崩壊は……目に移る全てに伝播していく。地続きになっている全てが巻き込まれ、崩れていく。

「ぶっっ壊れろ!!」

全てが塵になっていく。

崩れ重なった瓦礫も、飛び出した鉄骨も、倒れている脳無も、その下の地面すらも。

連なる全てが『崩壊』し、風に吹かれて消えゆく中で、

舞い上がる塵の嵐の中を切り裂いて、一条の緑色の流星が飛ぶ。

『崩壊』にかすりでもしたのだろうか、その身を覆う『心の光』が、徐々に削げ落ち、剥ぎ取られるように虚空に消えていく。ともすれば、空気すら伝って『崩壊』が広がっているのかもしれない。

非実体すら破壊するまでに至った死柄木の『崩壊』は、何一つ例外なく、全てを壊す。

そんな中で、しかし、最後に残った欠片のような光を、緑谷はその

右手に握る。

体中に激痛が走る。ひび割れて、崩れ始めているのがわかる。目が見えなくなる、耳が聞こえなくなる。再生が追いつかない。

それでも止まらない。逃げない。諦めない。

腕を引き絞る動作を利用して、右腕をかばうようにし……吹き付ける『崩壊』のエネルギーから少しでも生きながらえさせるように。その手に握った、最後の心の光と共に。

そして、崩壊の中心で、絶望に吼える死柄木の元にたどり着き、

——ゴッ！

突き出した右手は、凄まじい光景の中で放たれた最後の一撃としては不釣り合いなほど、軽くて浅い音しか出さなかった。

『ワン・フォー・オール』も『オール・ワン』も関係ない。

『死柄木弔』も『志村転弧』も、『志村菜奈』も関係ない。

緑谷出久が、ただ彼と向き合うためだけに放ったその拳は、確かに死柄木に届いた。

そして、握った拳が頬に叩き込まれたその一瞬、

『お父さんはね、転弧が嫌いなわけじゃないの。ただ、知ってるの。ヒーローが大変だったこと』

『私、転弧のこと、応援してるから。2人で、姉弟ヒーローになっちゃおう！』

『今ならどんな困難にも、立ち向かえる気がするよ』

あの家で、ほんの少しだけ幸せだった頃のこと……ほんの一瞬、甦った。

☆☆☆

「……だから何だったんだ」

目を覚ました死柄木が、仰向けに倒れて寝転んだ状態で、夜空をその目に映して言った。

すぐ横に、緑谷出久が倒れているのが見えた。

猟奇的に見えるほど、血だらけで傷だらけの姿。手足は崩れ、なくなる寸前だ。骨が見えている個所すらあり……他の場所に比べて、胸から上と、死柄木を殴った右腕は、少し無事に残っているように見えた。

それも、すぐに『超再生』と『オーバーホール』で修復されていく。10秒と経たない間に、傷一つない状態の姿を取り戻し、緑谷は2本の足で立ち上がった。

血の汚れだけはそのままだが、それを乱暴に拭って、死柄木に向き直る。

「……こんなもん見せてどうしようってんだ。俺は別に、何も考えを改めたりとかしてねえぞ」

「……いや、こんなもんとか言われても……別に僕、お前に何を見せた覚えとか、そんなつもりで殴ったわけじゃないんだけど……」

「じゃお前コレ、つまりアレ……勢いとか、行き当たりばったりだったのかよ……バカだろ。何でお前、そんなんで死にそうになってんだよ」

「……返す言葉もない」

「そこは何か用意しとけよ」

先程まで、割り込む隙間もないほどの殺し合いを演じていたとは思えないほどに、力の抜けたやり取り。

ゆつくりと体を起こせば、死柄木の全身はあちこちがずきずきと痛む。手も足も、腹も胸も肩も、内側も外側も。

緑谷との戦いで攻撃を受けたがゆえのそれもあれば、最後の全力で放った『崩壊』の反動と思しきそれもある。

恐らくはその中で一番大したことがないのが……最後に顔面に食らった一撃だった。

少し脳が揺れたかもしれない感触はあるが、それだけだ。『崩壊』が全身に伝播してろくに力が入っていなかったであろう拳。いかに『フ

ルカウル』で基礎となる身体能力を増していたとしても、たかが知れている威力だった。

ただ、その一撃が……死柄木にとって、何か、妙な『新鮮さ』を持っていたのもまた、事実だった。

対して痛くもなっていない頬に触れる。熱を持っている気もしたが、そんなものは多かれ少なかれ全身に出ている症状だ。

それまで散々食らっていた拳や蹴りよりもよほど軽かった、しかしなぜか響いた拳。

かつて父親に振るわれた平手や、自分のことを化け物を見るかのような目で見ながら叩きつけられた、枝切りバサミでの殴打とはまるで違う……自分への嫌悪や恐怖、身勝手な独善だけで振るわれるのとは違うものだった。

ふと思った。なぜ自分はここで、父親の顔を思い出したのかと。

……本当なら、さつき緑谷が自分にたたきつけた拳は……本来なら、父が子に向けるべきものではなかったのだろうか。

道をそれてしまった子を咎め、しかるばかりでなく正すための……ただ何も言わず、伝えず、禁じるばかりだった父が、ついぞ自分にはもたらしてくれなかったもの。であるならば、この不思議な『新鮮さ』も理解できると……

(……だから、何でこんなこと考えてんだっての……)

何も悪いことはしていないのに、理由も言わず抑圧するばかりだった男。最早敬愛や親愛の1つも沸いて出てこない、血のつながっているだけの他人に、思う所などない。今なお、殺意を持ってあの男の顔をボロボロに崩してやった時の記憶は、思いだせば胸がすくようだ。

あの男だけではない。それまで、優しく自分を否定し、緩やかに自分を追い詰めてきた、あの家の全てが……崩れ去った瞬間、気分が軽くなった。

今も変わらない。あの時のことは、自分に取って悲劇なんかじゃない。

……ただ、

ほんの少しだけ、顧みる思いが増えたのも……確かだった。
棄てたと思っていた、忘れ去っていた記憶が。

ふと、死柄木と緑谷の目が合った。

今の死柄木には、もう力は残っていない。緑谷と違って——正確には、緑谷と『同調』でリンクしている永久の作業なのだが——再生系の能力も何も持っていない死柄木には、ここまで傷つき、疲弊した状態で、戦い続けることも、逃げおおせることもできるとは思えなかった。

ともすれば、獄中で反省でもさせるがために、狙ってこれを引き起こしたのか、とも死柄木は思ったが……

「……ないな」

「え、何？」

「……別に。ヒーローってのは、ホント……バカばかりだと思っただけだ。どいつも、こいつも……」

きよとんとした様子の、緊張感のない緑谷の顔を見て、ため息をつくしかなかった。

こんな奴に負けたのかと、何だか微妙な思いに死柄木が襲われた……その時。

——ドツツ！

「がっ!？」

「!」

死柄木の目の前で、緑谷の体が……何かに勢いよく突き飛ばされたように、ブレて横に飛び……そこに残っていた、瓦礫と塵の混ざった山に突っ込んだ。

塵を派手に巻き上げ、それが収まった時……そこには、胸に大穴を開けられた状態で倒れ込む緑谷の姿があった。

その穴自体はすぐに『超再生』で塞がっていくが……その痛々しい状態で、どうにか体を動かし、顔を上げた緑谷。

その視線の先、だいぶ遠い位置に……それをやった下手人が、空中

にたたずんでいた。

「志村といい、オールマイトといい……」

何かの『個性』を使った直後だろうか。左手をこちらに向けた状態で、宙に浮いている……巨悪・オール・フォー・ワンが。

「君の言う通りだ、弔。本当に、ヒーローというのは……どいつもこいつも、どうしてこう……僕を苛立たせるのが上手いんだろうね」

落ち着いた口調ながら、ほんの少しの苛立ちを、声ににじませているような気配と共に。

第150話 VS オール・フォー・ワン

「げっほ!? なん、だよ……またか!」

「おえ……臭いです、この水……水?」

何もない虚空に、ばしゃばしゃ、ごぼごぼ、という水音が響くと共に、そこから『敵連合』のメンバーが次々と現れる……『転送』されてくる。

スピナー、Mr. コンプレス、トガヒミコ、トウワイズ……意識を失っているマグネや黒霧、荼毘もだ。

荼毘と黒霧は、Mr. コンプレスの『個性』によって『圧縮』され、球体に封印されていたはずであるが、AFOの『転送』はその状態を無視して呼び出すことができるようだった。

AFOはさらに、指先から黒いエネルギー体と思しき、先端の尖った触手のようなものを伸ばし、それを浅く黒霧の体に突き刺した。

その直後、AFOが使った『個性強制発動』の効果により、意識がない黒霧の『個性』がAFOの意味で発動し、霧のワープゲートが開かれる。

そしてそのまま、有無を言わず、呼び出したばかりの連合メンバーを包んで、ゲートの向こうに飛ばしていく。

メンバーが困惑したまま、次々と霧のゲートに飲み込まれていく中……最後に残った死柄木は、AFOの方を見た。ドクロを模した仮面越しに、目が合ったような気がした。

「さあ弔、君も」

「……先生」

「さすがに今日はここまでだよ。大丈夫、そう欲張らなくても、もう十分君は強くなった……今日この僅か1日の間に、大きく成長した。僕自身驚いてしまうほどにね。けど……これ以上は駄目だ」

「……………」

「その腕ではもう、戦闘も『個性』の行使も無理だろう。それに……これ以上は、少なからず君に悪影響を与えてしまうものがあるようだ。」

さあ」

「……先生は？ あんた、その体じゃ……」

「心配はいらないさ。奥の手もある……今は休め、弔。そして……考え続けて、戦い続ける。仲間達と……これからも」

その気になれば、強制的に死柄木を転送することもできるであろう AFOだが、あくまで丁寧な、言い聞かせるようにして、死柄木にゲートを通るよう促す。

死柄木は、少し考えていた様子だったが、こくり、と頷いて歩みを進める。

「っ！ 待つんだ死柄木弔！ まだ話が……ぐっ！」

「よそ見をする余裕があるのかい、オールマイト。君の困惑した顔を見るのは楽しいが……今日はこれ以上、僕の生徒にちよつかいを出さないでもらおうか」

十数秒前、AFOによってビルをいくつも貫通させて吹き飛ばされたオールマイト。AFOが、死柄木との戦いを終えた緑谷を強襲する、ほんの少し前のことだ。

戻ってくるなり、ゲートの向こうに消えようとする死柄木を止めようと駆け出すも、AFOの放った空気弾が横合いから直撃し……ガードこそしたものの、またしても吹き飛ばされる。

痛打にはなっていないだろうが、これでもう、制止の手は間に合わないだろう。

黒い霧の向こうに消えていこうとする死柄木は……しかし、その寸前で歩みを止める。

そして、首だけで振り返り、まだ瓦礫の山の上で動けないでいる緑谷に視線をやると……『緑谷出久』と、さほど大きくはないが、不思議とよくとおる声で呼びかける。

「今回は負けた。けど……だからって何が変わったわけじゃない。俺は『志村転弧』じゃない……『死柄木弔』だ。覚えとけ、お前も……オールマイトも」

ポケットにしまっていた、手の形のアクセサリ——少なくとも、その『由来』を知らない緑谷達は、そう思っている——を装着して顔

を隠し、その指の隙間から除く目。

その視線を緑谷と合わせて、死柄木は告げる。

「今回は……だめだった。でも……次は殺すぞ、緑谷出久」

「……………」

「お前も、お前の意思も、夢も……何もかも。俺がこの手で……壊す。その時まで、せいぜい……」

最後まで言い終わるより先に……死柄木は、ゲートの向こうに消えた。

最初からそのつもりだったのか、タイミングが狂っただけか……はたまた、そもそも聞かせるつもりもなかったことなのか……その答えはわからない。

その姿を見送ったAFOは、『さて』と、空間に溶けるように消えていく黒い霧から視線を外し……その瞬間、叩き込まれたビルから舞い戻ってきたオールマイトが、目の前数mのところに着地する。

そのトレードマークである、V字型の前髪が、先程よりもやや垂れ下がり気味になっていることに、目ざとくAFOは気づいていた。

「見送りは、間に合わなかったね」

「……………」

「そこにいる彼が、君への伝言を預かっていたよ。後で聞くとい……おや？」

そこでAFOは、視線を外したわずかな間に、倒れていた緑谷出久がいなくなっているのに気づいた。

まだ再生には時間がかかると見ていたが、どうやら第三者の手が入ったらしい。

(……僕の方も、空間把握が甘くなってきているか……いや、いけないな、弔にあれだけ啖呵を切っておいて、先生として、へばるわけにはいかないだろう)

再びの水音。AFOの周囲に、黒い水がはじけ、何かが『転送』されてくる。

(……脳無？　だが……何か様子が……)

オールマイトの目の前で、何体もの脳無が虚空から『転送』されて

現れる。

しかしそれらは、『上位』や『最上位』のように、知性を持っていたり、強大な戦闘能力を有している雰囲気ではない。体色も白色……『下位』の印だ。

体そのものもあまり大きいとは言えない。せいぜい、異形型でもない中肉中背の若者、といった程度の体格だ。見た目は十分に異形そのものだが。

「……Plus Ultra……だったかな？」

「……？」

「君の母校であり勤め先……そして彼らの通う、雄英高校の校訓。今だけは、あやかってみようか」

そう言つて、AFOは……その脳無達に手をかざし……

☆☆☆

『クレイジー・ダイヤモンド金剛石は砕けない』……！』

「あつ……がああ！……はっ!？」

朦朧としていた意識の中、緑谷は耳に届いた少女の声と……突如として全身をバラバラにされて、その後またつなぎ合わされて……それを何十回も繰り返したかのような激痛に襲われた。

たまらず意識を覚醒させ、その目にとびこんできたのは……声の主である、永久の顔だった。

「よかった、無事で……悪い、『超再生』で回復は進んでたけど、アレ本人の体力に依存するところあるし、疲労も残るし……何より早い方がいいかと思つて、気付けも兼ねて直した」

「え？ あ、うん、そう……ありがと」

死柄木との決着から少しして、緑谷の危機を『同調』で察した永久。すぐさま駆けつけて、『黒鞭』で素早く緑谷を回収。

オールマイトと互角に渡り合っているという、危険どころではない相手であるAFOから距離を取って隠れ、まだ再生途中だった緑谷を、『エネルギー』と『オーバーホール』の合わせ技である新技

『クレイジーダイヤモンド金剛石は砕けない』で即座に『修復』した……というのが、ここまでの経緯である、

意識を取り戻した緑谷は、永久から大方の現状を聞いて把握した。同時に、自分が今、朦朧とした意識の中ではあるが、見たことも報告して、情報交換の形にした。

まとめると、こうだ。

死柄木以下、『敵連合』メンバーは、黒霧のワープゲートによってこの場を離脱。追跡は不可能。

『最上位』を含む脳無の大半はすでに対処を完了。戦闘区域外へ出た者も含めて、少なくとも、確認できているものについては全て制圧、あるいは討伐した。

ネームドヴィラン2名……キュレーターとウォルフラムについては、いずれも制圧完了。現在はそれぞれヒーローが護送し、警察へ引き渡して『モバイルデズ移动式牢獄』へ収容しているだろう。

総合して、この場における残る敵は、AFOだけということになるのだが……言うまでもなく、それが最大の難敵である。

ベストジーニストやギャングオルカといった、トップヒーロー級の面々ですら一蹴したその実力は、驚異的などという言葉では表しきれない。オールマイトとの戦闘に巻き込まれるだけで、視界に入る暇すらなく消し飛ばされてもおかしくはない。

……と、いうようなことを話している最中に、他のクラスメイト達や、B組の面々、普通科の2人も集まってきていた。

「えーと……おし、42人全員いる。皆無事だな……よかったよかったです」

「数えんの早っ！ いや、まあよかったけど……けどこれで残る『敵』は、あのラスボスっぽい、パイプだらけの仮面の奴1人なんだよね？

今、オールマイトが戦ってるっぽいけど……」

と、耳郎が『個性』も使って、瓦礫の壁の向こうの様子をうかがいながら言う。同様にしている障子が続けてさらに、

「周囲に散開していた脳無もあらかた片付いて、ネームドヴィラン2名も確保したと聞いている。そこに割かれていた分のヒーローの人

手が、じきに合流するはずだ」

「となると……エンデヴァーやエツジショット、ホークスにミルコ、サー・ナイトアイやファットガムやリューキウetc……絵に描いたようなドリームチームですわね……」

「あ、さつきベストジーニスト治療して戦線復帰したからあの人も加わるかもだわ」

「ていうかここに相澤先生達いないのって、先生達もオールマイト先生に加勢に行ったからじゃね？ 合宿に来てたパンドラズ・アクターとかもいたし……」

「猶更頼もしいな……じゃあ、そのへんのプロヒーロー達とオールマイトで、あのドクロ仮面の『敵』、袋叩きにできるってこと？ それもう勝ったも同然じゃね？」

「上鳴君、確かに頼もしいことこの上ない面子だが、最後まで気を抜くのはよくないぞ！ 何が起るかわからないのが実戦の現場だと、オールマイト先生も言っていただろう！」

「それはわかるけどよ、飯田……そうはいつでも、気を抜くとか抜かないとかそれ以前に、俺らにもうできることないんじゃないやね？ せいぜい、巻き込まれてケガしないように避難するとか、人質にされないように避難するとか、後方の避難誘導のために避な……避難誘導に協力するとか……」

「峰田お前そんなに避難したいのかよ……願望駄々洩れだぞ……」

と、瀬呂がツツコミを入れるも、援護は意外なところから向けられた。

「けどさ、実際その方がいいんじゃない？ 私達元々、あの変な『ゲート』に巻き込まれてここに飛ばされてきたわけで……言ってみればここにいないはずの、いちやいけな立場でしょ？」

「だな。実際峰田の言う通り、俺達がここにいると、ヒーロー達は俺らを巻き込まないように少なからず注意を割かなきゃいけないわけだし……『邪魔にならないようにする』ってのも、立派に俺達がやるべきことの1つだと思う」

と、B組委員長の拳藤と、冷静沈着&柔軟な思考で参謀ポジション

である骨抜から。

確かにそれも一理ある、と一同は思った。

結果的に、大量の『脳無』とかに対しての戦力として機能することになったものの、本来ならば自分達は病院で安静にしているべき立場だった。それが、急変する事態の連続でいつの間にかこのような場所まで引つ張り出されてしまったが。

いわゆる『戦わなければ生き残れない』な状況を達した今となつては、自分達は規定通りに大人しく避難し、ヒーロー達に守られる側に戻るのが正しい判断なのかもしれない。

少なくとも、流れ弾に当たって怪我人を出したりなどすれば、それだけヒーロー達の負担になるし、後から面倒になることになる可能性も高くなる。

そのことを、冷静になつて考え……皆、理解していた。

緑谷も、永久も、轟も、飯田も……爆豪ですらも。今自分達は、もう既にやることは終えた。後は、本当に現場で戦うべきプロヒーロー達に、信じて任せるべきだと。

なお、「オイラの時には文句言つたくせに何でこいつらが言うと!?!」という峰田のクレームは黙殺された。

全員が冷静な判断を下そうとした……まさにその時。

——ドツゴオオオオオン!!!

「「ツツツ?!?!」」

鼓膜が痛くなりそうな爆発音。続けて、地震でも起こったかと思うような振動がそこら中の地面を揺らした。

何事かと驚いた面々が、しかし慎重に、警戒心は保つたまま、瓦礫の陰から外を見て……その光景に、全員が残らず、息をのんだ。

……壮絶、その一言に尽きる。

先程話になつていた通り、そこでは、そうそうたる面子が戦いに参加していた。

No.2エンデヴァーを筆頭に、ホークス、ベストジーニスト、ミルコ、ギャングオルカ、ファットガム、リューキュウ、グラントリノ、シルバーピクシー……その他、何人もの凄腕のヒーロー達。

その彼ら、彼女らを率いて、オールマイトが立ち向かうという、誰がどう聞いても必勝の布陣。

そんなドリームチームが……一人残らず、瓦礫の山に倒れ伏していた。

☆☆☆

「何ッ、やねん……あの、バケモン……!」

ファットガムが思わずつぶやいてしまった言葉は、この場にいる全員に共通の思いだった。

幸いにも、再起不能とまで言うような状態になっている者はいないように思える。まだ戦いを続けられる者がほとんどであるとも言えるよう。

しかし、それで事態がいくらかでも、この現状よりもマシかと問われれば……返答に窮せざるを得ない。

エンデヴァーの炎も、ベストジーニストの拘束も、ホークスのかく乱と支援も、ミルコの蹴りも、リューキュウの馬力も、ファットガムの防御力も、ターニヤの風も……そして、オールマイトの拳すらも。

小細工の1つもなく、全て正面から打ち破られ、叩き伏せられた。それをやってのけた男……AFOは、先程まではなかった赤黒い、禍々しいオーラをその身にまとい、不気味な様相で空中に浮遊している。

その力は、先程までオールマイトと一対一で戦っていた時よりもさらに増していた。

具体的には……呼び出した脳無達に向けて手をかざし、その『個性』を抜き取って自分のものにして、使い始めてから……だ。

「弔がせっかく壁を超えてみせたんだ。ここで『先生』である僕が、情けない姿を見せるわけにはいかないからね……少し、無理をしてで

も、格好つけさせてもらおうとするよ」

「……やはり、貴様にとつても過剰なドーピングだったか」

ぐい、と口元の血を拭いながら立ち上がるオールマイト。

「おや、やはりわかかってしまうか……ごほっ。勘がいいね、オールマイト」

咳き込みながらも、言い当てられたことに微塵も動揺することなく、しれっと認めるAFO。

個性『オール・フォー・ワン』は、他者から『個性』を奪い、あるいは与える力である。その力を使えば、『個性』を2つ以上持った人間を作り出すことも可能だ。

ただし、『個性』の複数所持は、所有者に対してすさまじく大きな負担になる。過去、そのように後付けで『個性』を与えた者が、精神を崩壊させて廃人同然になってしまった例もある。

『脳無』は単なる戦力として改造しているという他に、この『複数個性所持』に適応させるために手を入れているという側面もあるのだ。もつとも、『最上位』以外の脳無は結局、一言も口を利かなくなってしまうため、大差はないのだが。

脳無への改造なしで『複数個性所持』に適応している者といえば、AFO本人と、その側近であり、現在は姿を隠しているある男……そして、永久とナインくらいである。

もつとも、ナインは『脳無』とはまた別な実験・改造を受けているし、永久は『変容』によって手にした個性を自分に都合のいい形にしてしまうことができるのだが。

だが、そんなオール・フォー・ワンでも、際限なく保有する『個性』を増やしていくことはできない。

『個性』と、それを使う者の肉体は、いわばハードディスクと、使用するメモリないしデータ量のような関係にある。

どれだけのデータを記録できるかは、ハードディスク……すなわち肉体の性能と密接にかかわってくる。2つ以上の『個性』を受け取って精神が崩壊した前例は、ハードディスクの要領に対して、詰め込まれたデータが多すぎて、結果、容量を超過して壊れた、ということだ。

そしてAFOは、数年前のオールマイトとの戦いで、体はまるで万全とは言えない状態にある。

かつてよりも大きく衰えたその肉体では、今までに持っていた『個性』のストックの大半を保有し続けることができず、手放さざるを得なかったという。

そして、今AFOがやっているのは……恐らく、その時に『手放した』力の再取得だろう。

あれらの呼び出した脳無達は、単に『個性』保管用の、人間の形をした金庫程度に思っていた。その彼らに預けていた力を再度吸収することによ手AFOはパワーアップに成功し……しかし、決して小さな負担に身を焼かれることとなる。

そしてそれを承知で、AFOは『力』を選び……結果、ここまで圧倒的な状況が出来上がった。

それでもまだ、以前の、全盛期のそれではないだろうが、こうしてヒーロー達が束になってかかってもなお、真正面から押し返すだけの力をその身に宿していた。

「よくわかんねえけど、アレは『個性』をいくつも重複して使ってるがゆえのヤバさなんだろう!? おいレイザー、それなら!」

「もうやってる……つか、さっきからずつとだ。が……効かない」

ゴージャルの内側で目を赤く光らせている相澤が、マイクにそう言い返す。

AFOの強さは無数の『個性』の掛け合わせによるもの。なら、その発動自体を潰してしまえば、という思惑だったが、既にそれは通じなかったと聞かされ、マイクはもちろん、ミッドナイトら、その場にはいた他の者達も驚く。

「レイザーの『抹消』で消えない……? 異形型ならそれもわかるけど、明らかに発動型の『個性』が色々混じってるのに……」

「……『個性』による干渉を無効化する『個性』でも持ってんのか?」
「そんなものがあれば便利だったんだけどね、残念だが違う。ただの小細工さ……君達から見た僕の姿に、あらかじめフィルターをかけているだけだよ。君は僕を直接見ているつもりかもしれないが、その

実、僕ではない虚像を見ているんだ」

「……何だそりゃ？」

意味を理解できないらしいマイク。だが、相澤を含む数名は、今の説明で、いかにして『抹消』が破られたかを理解しつつあった。

「レイザーヘッド。君は対象の体の一部でも直接見るだけで『個性』を消せる……だが逆に言えば、直接見さえしなければ消せない。例えば、監視カメラの映像・画面越しとか……鏡に映った姿を見たりとかではね。今僕は、光を屈折させる『個性』で、僕の姿の蜃気楼を身にまとっている。だから、君が今見ている僕は、僕だけど僕じゃない。僕のそのままを映した虚像なのさ」

姿かたちはそのままAFO本人のものに間違いはない。

だが、見えている像自体は、蜃気楼というフィルタを一枚挟んだものであり、間に余計なものがあるがゆえに『抹消』が発動しないのだ。

「同じように、こちらへの視覚や聴覚、嗅覚などを介した干渉系『個性』にも対策済みだよ。外部からの音声や光情報は、『個性』によるフィルターを通してから僕に届くようになってる」

（つまり、心操の『洗脳』や、ミッドナイトの『眠り香』も効かねえってことか……）

「それでも……さっきの話が本当なら、それほどの力、いつまでも持つものではないはず……！　時間さえ稼げば……」

「まどろっこしい……蹴っ飛ばしやいいだけだろうが！」

と、リユーキュウの言葉を遮って言うミルコ。

圧倒的な力を前にしてなお、その目にはギラギラと闘志の炎が燃え続けている。

「ミルコさん、あなたまた……もうちよつと冷静に……！」

「コイツがそんな、エネルギー切れになんて大人しくなってくれるタマかよ……そうなるまでにどんだけぶっ壊されるかって話だ。『心置きなく』戦わせてなんざくれねえぞ……だったら、こっちからガンガン攻めて、ガンガンエネルギーを使わせる方が速いし安全だろうが！」

「……成程、確かにな。まあ、安全なのは私達ではないが……仕方ない
ことか」

ミルコの言葉の意図を察したギャングオルカがそう言うのと、ほう、
とAFOは感心したように、

「なるほど……直情的で深慮とは無縁と言われているらしいが、その
分……野生の勘かな？ そういったものは鋭いようだ。その通り、僕
が君達ヒーローに対して、お行儀よく相手をさせてもらう道理など
……ないからね」

言い終わらないうちに、AFOの腕がミルコに向けられ、ブクツ、と
膨れ上がる。

「今も昔も、ヒーローというのは、大変だよなあ……守るものが、多す
ぎて」

それが、空気弾発射の予兆だと察したミルコは、なぜかほんの一瞬、
後ろを確認すると……地面を踏みしめて体重の乗った渾身の蹴りを
繰り出し、直後に放たれた空気弾を真っ向から迎撃する。

しかし、一瞬の拮抗の後、足を振り抜くこともできずに、吹き飛ば
されてしまう。

直前にターニャが暴風を起こして衝撃波の威力をわずかにでも弱
めなければ、足が砕けていたかもしれない。それほどの威力だった。

「ミルコさんっ!?! 何で避け……」
「避けられへんかってん……やろ！」

そのミルコが吹き飛ぶ前に、さらにその射線上に割り込んでいた
ファットガムが空気弾を受け止める。

彼を含め、幾人かは気づいていた。ちょうどミルコの背後、崩れた
ビルの中に……生存者が残されているということに。

ミルコが最初に音で気づいていたその一般人は、空気弾がこのまま
の軌道でビルに直撃すれば、間違いなくその崩落で命を落としてしま
うであろうことに。

しかしやはり、ファットガムも受け止めきれずに弾かれる。まるで
大型トラックにはねられたかのように、その巨体を豪快に回転させて
はね飛ばされた。

その更に背後に……オールライトが割り込んで、拳を振りかぶっていた。

そして……ここまで既に、AFOの予想、ないし狙いの通りだった。『時間さえ稼げば』……その条件で困ることになるのは、何も僕だけじゃないだろう?」

その狙いを察し、ナイトアイとグラントリノははつとするも……時すでに遅し。

「いい加減にカミングアウトしてもいい頃だ、やせ我慢はこの辺りにしようじゃないか……さあ、本当の姿を見せてくれ。平和の象徴……君が無理を押し隠してきた、その矜持を」

幾度も超級の攻撃を迎撃し、とうの昔に限界を超えていた。

そこにこのトドメの一撃。真っ向から拳を振るって迎え撃たなければならぬ、その消耗は決して小さくはなく。

そうしてついに……限界は、訪れる。

上空を飛ぶ、1機の報道ヘリ。

その気になれば、AFOはいつでも撃墜できていたであろうが……あえて見逃していたそれ。

そのカメラのレンズが……1つの『真実』をとらえた。

『えっと……み、皆さん、見えますでしょうか……? これは……?』

『お、オールライトが……しぼんでしまっています……?』

第151話 折れない意思と鍍金の平和

「…………え？ 誰、あれ…………？」

誰かがそんな風に呟いた。

誰が言ったのかは、わからない。誰がそう言ってもおかしくない状況だったし…………もしかしたら自分が言ったのに気づいてないだけかもしれない、とすら思う。

あ、ありのまま…………やめようふざけるのは。さすがにちよつとそういう雰囲気じゃない。…………てかなんかさつきもこんなやつだな。

もうなんかシリアスが過ぎてむしろそういう空気に逃げたくなつてくるくらいだけど、ちよつと今は真面目に思考しなければならぬようだ。

簡潔に言おう。オールマイトが…………しぼんだ。

さつきまで、筋骨隆々を絵にかいたかのような、逞しく、頼もしい姿で拳を振るっていたオールマイト。AFOとやらを相手にしても、一歩も引かない勇猛な戦いぶりを見せていた。

それが…………今、AFOの何度目かの攻撃を相殺した直後…………土煙の中から現れたその姿は…………一瞬前まで見えていたそれと、全く違うものになっていた。

鋼のような筋肉に覆われていた体は、ヒョロヒョロとしか言いようがないような痩せた体躯に。

体にぴったりフィットしていたスーツは、隙間ができてぶかぶかに。

頬がこけ、骸骨を思わせる、不健康そのものな見た目になり…………トリードマークだったはずのV字の前髪は、力なくしなだれている。

…………私の、私達の記憶が確かなら、あそこに立っていたのはオールマイトだったはずだ。

あるいは、見えないくらい速度で入れ替わりやら何やらが起こっていないのなら…………つまり今あそこに、同じように立っている彼が、オールマイトだということになる。

見た目で一致するところが、金髪くらいしかパツと出てこないが。「な、なあ、アレ……オールマイトか？」

「え、や、いやいやいや……何で？ え、見た目、全然違……え？」
思わず、と言った感じでつぶやいてしまったらしい切島に、ちょうど隣にいた取陰が、狼狽えた様子を隠せないままに言い返す。それを皮切りに、皆次々と……

「服、は、同じっぽいけど……何なの？ あの姿……」
「ひよつとして、あの黒仮面の攻撃とか『個性』でああなった、とか？」
「つか、あの顔、つかあの見た目……どこかで見たことあるような気が……」

皆、いきなり目の前で、オールマイトがあんな姿になってしまった現実を受け入れられていない。

というか、私もそうだが……いきなり、あまりにも意味の分からないことが起こったせいで、どう反応していいものかすらわからない、って感じだ。いやホント、この状況何なんだ？

周囲にいる他のプロヒーロー達も、状況がわかってないみたいできよとんとしてるし……いや、ナイトアイとグラントリノだけは様子が違うような……？

あれが本当にオールマイトだとして……さっき誰かが言ってたように、デバフ系の『個性』か何かで、力を奪われてあんな風になった、と考えるのが適当だろうか？

……そんな風に私も思っていたんだが、すぐ近くで、

「そん、な……ひみ、っ……！」

かすれたような声で、すぐ隣にいた私くらいにしか聞こえないであろう音量で……愕然とした表情で呟いていた緑谷を見て、何か違うと思うだ、と思い直した。

同時に、彼は何か知っているっぽい、とも。

どうということか、と聞くよりも早く、場面が動く。

「大したものだね、その姿……『トゥルーフォーム』を晒されようとも、依然『平和の象徴』は、少なくともその精神は健在というわけか。本当に、大した人柱っぷりだな、オールマイト」

トウルーフオーム……直訳で、本当の姿？

やっぱり、アレは間違いなくオールマイトで……しかも、デバフでああなったわけじゃない、と？

というか、私達が話していた間にも、AFOとオールマイトは話していた風だったんだが……そんなに大きな音量じゃなかったからか、聞き逃してたな……。

そこから、話は私達に、あるいは聞いている全ての者達にとって都合のいい方向に進んでいく。

あるいは、AFOは狙って語り、聞かせていたのかもしれない。一体、この光景はどういうことなのかを。今日の前で、何が起こっているのかを。

その話の通りなら……オールマイトとAFO、この2人は、数年前にも一度戦っている。

その時の壮絶な戦いに、オールマイトは辛くも勝利したものの、その代償は大きかった。

本来なら、引退どころか、そのまま病院で寝たきり生活になってもおかしくないほどの傷を負い……重篤な後遺症も残り、大きく力を落とすこととなった。

戦闘時には筋骨隆々の姿に変化できるものの、本来の姿はやせ衰えてしまい、戦えるのは一日にせいぜい数十分から数時間が限度。それも、徐々に短くなってきていた。

そんな体でも、『平和の象徴が倒れるわけにはいかない』と、無理を押しつけて戦い続けて来たのだという。最早戦えない体であるという事実を、必死に押し隠して。

と……皆が聞き入る中で、そこに横から割って入る人が1人いた。

☆☆☆

「……何だ、それは……？」

呆然と立ち尽くし……といった様子ではないが……わなわなと震える声で、目の前の出来事が信じられないとでも言うように。

その身から噴き出す炎の揺らぎに、まるで精神の動揺を現しているかのようにして……エンデヴァーは、目の前で大きくその姿を変えたオールマイトを、ただ1人、自分が超えられずにいる男を凝視していた。

超えられないと絶望した圧倒的な力強さが、微塵もなくなってしまうその瘦躯を。

「ふぎけるな……何だ、その姿は……何だその情けない姿はア!？」

オールマイト以外見えていないかのように吼える姿に、ヒーロー達も……轟も、何も言えない。

「ショックだったかな、エンデヴァー。長年君が超えられずにいた絶対強者……その真の姿が、そんなにも……おっと」

直後、AFOの頭があつた位置を、目にも留まらぬ速さで、錐のように細く長く尖った、エッジショットの足が通過する。

さらにそこから追い込むように、ジーニストの操る繊維が縛り上げ、動きが鈍ったところに、ミルコの蹴りが叩きつけられる。

「抜かせ、破壊者……!」

「動揺しているかと聞かれれば……成程否定はできん。だが……だからといって……」

「ムキムキだろうがヒョロヒョロだろうが……オールマイトはオールマイトだろオがよ!」

立て続けにぶつけられたその言葉に、内心AFOは驚いていた。が、すぐに納得する。ヒーローとは、こういう生き物だった、と。

そのままミルコの蹴りを難なく、その後続いた4連撃も含めて受け止めるも……今度はその反対側から、凄まじい速さで飛び込んできたホークスが、『剛翼』の中でも長く大きな羽を剣のように振り抜く。そのまま通り抜けて、攻撃直後で体勢を崩していたミルコを抱えてその場を高速で離脱し……そこに、エンデヴァーの『ヘルフレイム』の炎が吹き付け、AFOを包みこんだ。

それすらこともなげに、腕の一振りでも打ち消してしまうAFO。しかし、周囲を取り囲むヒーロー達の目には、あきらめも絶望も微塵もない。

追撃しようとするれば、放った攻撃を阻むかのように、暴風が吹き荒れて盾になる。空から舞い降りて来たターニヤが起こしたそれで防ぎきれなかったものを、今度はパンドラズ・アクターが姿を変えた純銀の聖騎士が切り払い、届かせない。

ふと見れば、周囲の瓦礫の山と化した建物から、虎やシンリンカムイ、ウワバミやラバーエンプレスといった面々が、瓦礫をどけ、取り残されている人々を懸命に救助している様子が見られた。

「我々には……あなたと共に戦うだけの力は、ない。せめて、これくらいしか……」

「あなた達の邪魔にならぬように……！　　周りは我々にお任せくださいー！」

「だから……お願いします、オールマイト！」

——勝ってくれ！

その場にいる者も、そうでない者も……あるいは、テレビの向こうでこの闘いを見ている者達も、かもしれない。

皆がそう思っているかのように、声を上げたかのように……オールマイトは、全身にそんな思いが叩きつけられたように感じた。

もしかしたら、錯覚かもしれない。いや、普通に考えてそうだろう。遠く離れたここに、日本中に散らばっている人々の声など、聞こえようはずもないのだから。

それでも、そんな意思を感じたと……それだけで、オールマイトが……No. 1ヒーローが奮起するには、十分なきっかけだった。

そして、その周囲を囲むように立つ、他のヒーロー達もまた、それぞれの思いを胸に秘めて、一步も引かずにAFOに相対している。

炎を燃やし、翼を広げ、足を疼かせ獰猛に笑い、襟元を正して隙無く構え、暴風を起こし、姿を変えて万能の個となって……いかなる言葉が飛んで来ようとも、揺るぎなどしないと云わんばかりの、肩を並べるにこれ以上ない頼もしさ。

とうの昔に限界を迎え、その身から力が抜け落ちようとも……仲間

達とともに、揺るがぬ闘志を宿した目で、オールマイトは、中空から見下ろす巨悪を睨み返す。

そんな彼らを、AFOは……仮面ゆえに、その目を見ることはできないが……明らかに冷ややかなものを視線に乗せて見下ろしていた。「皆が君の勝利を望んでいる……か。いかにも、ないし、これぞヒーローといった状況だな」

ちらりと視線を上げるAFO。

斜め上に向けられた目の先には、夜空を飛び回りながら、恐らくはこの光景を中継しているであろう、テレビ局のヘリコプターが見えた。

「物は言いようだな……と、つくづく思うよ。いい気なものじゃないか、特に当事者でもなく、対岸の火事で物事を見ていられる者達の、その場その場の適当な応援……それでよく、君達ヒーローという人種は、命すら懸けて戦えるものだ、いつも思う」

ちやうどズームで戦場の様子を捕らえていたカメラマンは、AFOの視線が明らかにこちらに向いていることに気づき、どつと冷汗を流すが、プロ根性でも言うべきものか、必死に動揺を抑えて撮り続けているようだった。

それにわずかに感心しつつも、AFOの冷ややかな視線は、そのカメラの、むしろ向こう側に向いている。

カメラの向こう、すなわちテレビの前には……視聴者が、この戦いを、安全圏から飲み物でも飲みながら、ゆつくり見ている一般人がいるのだろうか。

「恐らく彼らは、最初こう思っていたことだろう。『何だかんだで今回もオールマイトが勝つ』『オールマイトが何とかしてくれる』と……あるいはもつと偉そうに、『最近『敵』が暴れすぎだ』とか、『最近のヒーローはたるんでる』とかわかったようなことを言っていたかもしれないね。そして今は、きつとこう言っていることだろう……『負けないでくれオールマイト』『あんたが勝てなきゃ誰が勝てるんだ』『どんな姿になってもあなたはNo.1ヒーローだ』……こんなところかな」

「……それが何だというんだ、AFO」

「よくもまあこんな無責任な応援を力に変えられるものだ、と思つてね。結局は皆、対岸の火事を見て騒ぐ野次馬でしかない。厚顔無恥で偉そうな評論すら飛ばして、テレビの前でわかつた風な口を利いている。そのくせ、自分の足元に炎が迫る段階になると、いかにもな被害者面をして、君や他のヒーローに泣きついてくる。一見、ヒーローを信頼し、希望と未来を託す美しい絵面に見えるかもしれないが、結局は現実が何一つわかっていなかった愚か者が、突きつけられる当然の未来に『どうしてこんな目に』と泣き喚いでいるだけだ」

心底呆れているかのように、淡々と話し続けるAFO。

「超常黎明期、力がなくとも必死で明日を手にするために1人1人が抗い戦っていた時代を知っている僕からすれば……今のこの国は、無様を通り越して滑稽としか言えない。よくもまあこんな、無責任な傍観が成り立つような、墮落しきつた平和を作り上げたものだ、逆に感心するよ」

世が荒れているのは、人々が縋れるものがないからだ。自分がその柱に、平和の象徴になるのだと……まだ志村菜奈が健在だったころ、当時のオールマイトがそう語っていたのだと、楽しそうに話していたのを、グラントリノは思い出していた。

有言実行。オールマイトは見事にそれを成し遂げてみせた。

華々しい活躍により、その存在そのものを『敵』に対する抑止力とし、犯罪率を、世界平均が20%に対して、日本のそれを6%にまで抑えた。さらには6年前には、死闘の末に一度はこの宿敵・AFOを打ち果たすまでに至った。

1人の偉大なヒーローがもたらした偉業。無敵の英雄が作り出した奇跡の平和。まさにそんな風に評されるにふさわしい世界が、いつしか形作られていた。

だが一方で、彼1人にもたれかかって形作られる、歪な平和でもあった。

「問題は多いが、人々が自力で必死に支えるがゆえに、ちよつとやそつとでは揺るがない平和。水準は高いが、たつた1人に頼り切りになつて、それが失われればあつというまに転げ落ちていく鍍金^{メッキ}の平和……

どちらが正しいなんて言わないし、そもそも興味もないが……教えてやるのも一興かもしれないね。今の時代しか知らない者達に……この世界の、本当の姿というものを」

「そうやって我が物顔で……人の幸せを、未来をまた奪うか、AFO！ 貴様はいつもそうだ……人の弱みに付け込んで、戯れに掻き回し、付け入り、支配し、弄ぶ……。日々を暮らす人々の日常を……理不尽をもって脅かし、壊し、奪い、嘲り笑う！ 私は——」

言い終えるより先に放たれた、AFOの攻撃。

幾度となく放たれ、地形を変え、町を破壊した空気の砲弾が……トップヒーロー達ですら、受け止めること叶わなかったそれを……

『フルカウル』を思わせる火花と共に、一瞬だけ、右腕一本を『マツスルフォーム』に変えたオールマイトの一撃が、相殺し、打ち消した。「私は……それが、許せない！」

テレビを通して人々が見守る前で、オールマイトは……歪な姿のままで、堂々と言いつつ切った。

「尊大な物言いだ……際限なく抱え込み、守り、支え、戦い続けたその果てが……今のこれかい？」

「貴様が以前言った通りだ……ヒーローは、守るものが多いんだ……だから、負けないんだよ！」

とうに限界を迎えているのが明らかにもかかわらず、微塵も衰えぬ闘志を見せるNo.1。

その姿を、その目で見ていたヒーロー達は……今の一撃もあって、悟っていた。

エンデヴァーの炎も、ミルコの脚も、ターニヤの風も……この中で特に攻撃力のあるいずれの攻撃も、通じなかった。パンドラの奥の手ならあるいは、とも思えるが、あれは隙が大きすぎる。

より強さを増したあの巨悪に……AFOに届き得る刃があるとすれば、それは……依然、1つ。

衰えてなお、頂点に立ち続けた……最強のヒーローの拳のみ。

それを悟った彼ら、彼女らは、不本意、ないし複雑な思いの者も含めて……誰が何を言うまでもなく、やるべきことを見据えて心を決め

る。

道を作る。

守り、導き……こじ開ける。

オールマイトが、AFOに……その一撃を叩き込むまでの道のりを……自分達を作る、と。

相手の攻撃は、どれも一撃でこちらを葬るだけの力があるものばかり。それを上手くさばきながら、オールマイトを守り……できるならば、そちらに攻撃自体届かせないようにする。

未だに全容すら見せていないであろう伝説の『敵』を相手に、それを成す。文字通り、全員が決死の覚悟で挑まねば不可能……いや、それでも実現に足るかどうか怪しいとすら言える。

それでも、そんなことで尻込みする者は1人もいなかった。

場の空気が変わったことを悟り、AFOはふう、とため息をつく。

「ヒーローというのは、つくづく奇特定の集まりだな……よかったじゃないかオールマイト、あの世への道連れには事欠かなそうだが、死後の旅路も寂しくはないだろう」

「生憎とそんな予定は入れられないさ……こちとら今年は学校の先生だ。さっさとこの騒動を終わらせて、向上心豊かな有精卵共のために、2学期の学習計画を立てないといけないんでね！」

最強のヒーローと、同じく平和のために戦うヒーロー達。対するは、超常黎明期より裏の世界に君臨する、最凶最悪の『敵』。

とうとう始まる、最後の大一番の前に……

……そこより少し離れた場所で、密かに火がついている者達が……いた。

「ねえ、皆……話が、あるんだけど」

「何だよ、緑谷……まあ、何となくわかるけど」

「緑谷君、何を考えて……あんな戦い、僕らが割り込んでいいものじゃ

ないぞー！」

「けろ……それにさつきも話になったけど、私達は本来は、ここにいるべきじゃない立場なのよ？ 連れてこられたのは強制的にだったけど、これ以上私達の側からしゃしゃり出るのは……」

「けどよつ……オールマイトや先生達があままでやってんのに、俺達だけ何もしないなんてよ……まだ自分達が未熟だつてことなんてわかり切ってるけど、それでも……ああ、上手く言えねえー！」

「言わなくても言いたいことはわかるよ切島……ここにいる連中、大体同じこと思ってるだろうしさ」

「……何もできずに、指くわえて見てるよりは……確かに、な」

「そもそも私ら、帰れるのかねこのまま……避難しようにも、この大所帯で動いたらまず間違いなく狙い撃ちだよ？」

「こ、怖いと言わないでほしいノコ……でも確かに……あの空気砲一発、適当にこつちに向けて撃たれるだけで壊滅間違いなし……少なくとも数人は死ぬかも」

「それに……A F Oだっけ？ あいつがオールマイト達を始末したら、次はどう考えても私達の番じゃん？」

「ちよつとやめろよ取陰！ まるでオールマイト達が負けるみたいな、そんな……」

「けど実際、オールマイトは著しく弱体化し、N o . 2 以下のヒーロー達はまるで相手になってない。正味な話、ジリ貧というか、時間の問題だと思うね」

「物間、あんたまで！ こんな時にまでそんな……」

「別に嫌みで言ってるわけじゃないよ拳藤。……味方を鼓舞するだけじゃない、時には冷静に、冷徹に戦況を分析して、正確な現状と、今取るべき最善の方策を提示するのも大切な役目だ。……それが例え残酷な現実でもね」

「けど……実際、あんなレベルの戦いに、私達ができることなんてあらへんよ……トツプヒーローでもだめだったのに、私達みたいな、ヒーローの卵なんかじゃ……」

「……さて、それはどうだろうか？」

「「!?!」」

「え、栄陽院さん？ それはどういう……ま、まさかあなたまで……」
「……いや、別に勢いとか自己満足とかでじゃなくてよ……意外と私
ら、出番回ってくるかもしれないぞ？」 というかむしろ、いやまさに、
だな……今、取陰と物間が言った通りだ。逃げられないなら、逆に
……」

第152話 世界よ、これがヒーローだ

四方八方から絶え間なく飛んでくるヒーロー達の攻撃に、流石のAFOも、楽に応戦とまではいかない戦いを強いられていた。

単なる火力だけなら圧倒できただろうが、プロヒーロー達は高い攻撃力を有するメンバーを、徹底的にその他がサポートする形で戦うことで、極限まで隙をなくし、相手の攻撃に当たらず、回避後即反撃に移る、ということを繰り返して戦っていた。

そうして彼らがAFOを引き受ける間に、オールマイトは接近し、必殺の一撃を叩き込む。

乾坤一擲を物にせんがための、極めてシンプルな作戦。

だからこそ、全員がやるべきことを定めやすく、そこに全力を注ぐことができる。

……が、それはAFOにとっても同じこと。

「ぐう……っ!？」

「オールマイト!」

「っ……すまん、抜かれた!」

「っ……私なら、大丈夫だファットガム! それより、君こそ……」

わずかな隙を突いて、ヒーロー達の包囲網を突破し、AFOの攻撃がオールマイトに届く。

それを、なけなしの残った体力で相殺して防ぐオールマイトだが、その分、AFOにぶつけるための力が、確実に減っていく。

この作戦の核は、いかにオールマイトに力を残したまま、AFOの元にたどり着かせ……そして、そこで必殺の一撃を叩き込めるかという一点にある。

もともとオールマイトは、最早『マツスルフォーム』を保つこともできないほどに疲弊してしまっている。もう後何発、満足に拳を突き出す力が残っているかも怪しいレベルだ。

そのために、言ってしまうえばヒーロー全員が剣にして盾になるのがこの作戦であるが、AFOという存在を前に、その場にいるヒーロー

全員の力をもつてしても、その役割を成すことができない。わずかではあるが、力が足りていない。

一発、また一発とオールマイトに攻撃が通り、ダメージが刻まれる。「ここまでくると……もうどう言ったものかな。無様も、滑稽も通り越して……哀れと言うか、痛々しいと言うか」

「何とでも言うがいい……例えどんな姿だろうと、幾度土をつけられようと……この拳を貴様に届かすまで、私は何度でも立ち上がってみせる！」

「口先だけは元気だな……死にかけの、平和の象徴」

そう言うAFOの声音は、呆れと愉悦が混ざったようなそれだった。

「トップランカーがこうもそろって、1人の『敵』を袋叩き。にも関わらず攻めきれず、もう無様に何度地面に転がったか……あきらめの悪さとは、時に見ている方を悲しくさせる。僕にとっては愉快的な娯楽だが……今は声を上げて応援している民衆も、いずれ沈黙と嗚咽に変わるのだろうか」

「てめえの方こそ……口先は随分元気じゃねえかよ、悪の親玉……！」と、そこに横から、ミルコの声が割り込んで聞こえた。

あちこちから流血し、肩で息をしているも……その瞳には未だギラギラと闘志が燃え盛り、獰猛な笑みと共にAFOを睨みつけている。

いや、ミルコだけではない。多かれ少なかれ、そこにいるヒーロー達は皆、その目に闘志を宿し、微塵も衰えぬ戦意と共に、その中央に立つ『敵』を見返していた。

「気づかねえとでも思ったか？ お前、さつきからちよつとずつ攻撃のタイミングが遅れ気味になってきているなあ？ 規模や範囲もブレてきているし、全体的に大雑把になってきている……！」

「動きが精彩を欠いてきている。疲労が蓄積してきたかと思っただが……そうではなさそうだ」

ミルコに続いて、ジーニスト、そしてホークスも、

「さつきのオールマイトとの会話からして、あんたのパワーアップも諸刃の剣なんだろ？ 多数の『個性』を宿し、大幅に力を引き上げる

代わりに、あんた自身にも遠からず限界が来ると見た」

「つまりこの勝負……無様だろうがみつともなからうが、あきらめの悪い方の勝ちってことだ！ 気合と根性でヒーローに勝てると思っ
てんじゃねえぞスカシ仮面！」

締めくくって言ったミルコのセリフに、AFOはふむ、と感心した
ようにつぶやくと、

「……なるほど。なら……大衆受けしそうな精神の話は置いておい
て、現実の話进行しようか」

直後、AFOは……何かする前に潰さんと、今一度、周囲から包囲・
攻撃を繰り出してくるプロヒーロー達を、衝撃波を放って押し返す。

そして、がら空きになった正面から、オールマイトを見据える。

「最早まともに歩く力も残ってしまい……人は気合だけで動けるよう
にはできていない。この闘いの中、一体君はいくつの限界を超えてこ
うしてここに立っているのか……だがそれも、もう終わりにしよ
うじゃないか。無様に、みつともなく、あきらめ悪くあがいた末に迎
える終わりとしては……上出来だろう」

させまいと、行かせまいとして殺到するヒーロー達の攻撃をさばき
きり……その一瞬の隙について、AFOの放った攻撃が、オールマイ
ト目掛けて飛ぶ。

「君の死をもって、時代に終わりを告げよう……最後の瞬間まで、報わ
れぬあがきを続けて……その末にバラバラになれ。平和の象徴」

地面が盛り上がってできた何本もの石の杭、あるいは槍のような
尖ったそれが、地面を伝って生えていき、オールマイト目掛けて伸び
る。見た目よりもはるかに硬く、そして鋭いらしいそれらは、途中に
あるコンクリートの瓦礫を容易く粉碎しながら迫っていく。

直撃すれば、人体など容易く貫かれる。ヒーロー達による援護も間
に合わない。

オールマイトは残り少ない力を振り絞ってそれを迎撃しようとし
……しかし、その時、

「ぎ・せ・る・かアアアアア!!」

その眼前に飛び込んできた小さな影が、その石の槍を、その身で受け止めた。

ガギイン、と硬質な音を響かせて、全力の『安無嶺過武瑠』を発動させた切島が、凶刃からオールマイトを守っていた。

「なっ……き、切島少年!」

「切島……!? 何でお前、出て来た!」

「頼雄斗!? ライオット ちよ、おま……自分何で、つてか何しとんねん!? なんぼなんでも……」

「すみませんっす、オールマイト! 相澤先生も、ファットも……でも俺ら……もう黙って見てるだけなんて出来っこないんすよ! ナマ言ってるのは百も承知っす、それでも……っ!!」

ガガガガ……バキバキ……と硬質な破砕音が響く中、僅かに押し込まれつつも……石の槍を1本たりとも後ろに通さず、受け止め、砕き、防ぎきる切島。顔面すら、眼球すら硬化させ、顔面目掛けて飛んでくる切っ先すら受け止め、砕く。

硬質に、鋭角に変化したその体でもわかるほどに、その体と瞳には不退転の意思が漲っている。

それを退かそうと、あるいは砕かんと、さらなる数と大きさの槍が迫り……

「自己満足かもしれねえ……無謀だったのもわかってる……それで、自分にできることがあるなら、少しでも役に立てるなら! 誰かを助けられるなら!」

「そこで退くってことができねえんすよ、何せ俺達、筋金入りのバカなもんでえエエエツ!!」

切島と肩を並べ、全身を鋼に変化させた鉄哲が、共にそれを受け止める。

その身で受け止め、拳で砕き……一步も引かずに石の槍袂に立ち向かい……そして、

「ファイトオオオオオ!!」

「いッッ……ぱアアアアアッ!!」

切島と鉄哲、2人の漢が繰り出した拳が、とうとう最後の1本の槍を砕き……見事その凶刃から、オールマイトを守り切って見せた。

ガラガラと石の槍が砕け散る音の中、力を使い果たしたらしい2人は、『個性』を解除させて……その場に倒れ込む。

「切島少年……鉄哲少年……！」

「すん、ませんつす……オールマイト……。ナマ言っておいて、たったこれだけで……」

「今の一回で、俺ら、限界つス……後は……」

「ほお……なるほど、大したものだ。面白いものを見せてもらったよ……プロヒーロー達が塞ぎきれなかった穴、学生の君達が抑えてみせるとはね」

感心した様子の声音で言うAFO。その直後には、また、ヒーロー達の攻撃の隙間を縫って、今度は地面から巨大な岩を出現させ……勢いよく転がして、倒れ伏す切島と鉄哲もろともオールマイトを押しつぶさんとし……

しかしその手前で、突如としてその大岩は、ぼちゃん、と水音を立てて地面に沈んでしまった。

見れば、鉄哲と切島の2人の間……2人を守るように、地面に半分体を沈めた形で、骨抜がその『個性』を発動し、底なし沼を作り上げて大岩を沈めていた。

「悪いけど、2人はそつとしといてもらうよ。俺、こう見えて意外と友達思い。そして……追試や合宿で、めっちゃ友達増えたもんで」

「骨抜、お前も……いや……！」

そこまで言って、相澤はようやく気付いた。

先程まで、オールマイト1人しかいなかったはずの、その周囲に立つ、無数の人影に。

極限までAFOに意識を向けて集中していたがために気づけなかった。そこに……自らが面倒を見ている者達も含め、40人を超える生徒達が集結していることに。

そして、

「いいかお前ら！ 3人ばかり先走ったが……作戦名は……『マト

リョーシカアタック!」

そのほぼ中心に立つ1人、軍服姿の男装の麗人……永久が、後ろを振り返ることなく、声を張る。

「あくまで私らは『露払い』! あのパイプ仮面の攻撃は9割方ヒーローが遮つてくれてるから、残りの1割がオールマイトに飛んでいかないようにだけ考えて守れ! ぶっちゃけ私らじゃそれで精一杯だから高望みはなし! できることを全力でやれ! 以上……つーわけでいつもの!」

『Plus Ultraア!!』

「……つたく、あ・の・バカ共……」

「だっはははは!! おいおい、今年の雄英の1年はイキのいい奴が多いじゃねーかよ! こりゃ将来楽しみだな、大物になるぜこいつら!」

頭痛をこらえるように頭を抑える相澤に、心の底から面白そうに笑うミルコ。

「……率直に言つて、色々と問題だらけ、ツツコミどころだらけではある……が……」

「いいんじゃないですか? ……いい流れができそうだ。どっちみち俺らにだって余裕なんかないんだ……この際、使えるものは何でも使う気持ちでいきましようや」

さらに、ジーニストとホークスもそう続け……エンデヴァーがまとめるように言い放つ。

「生意気な小僧共の後れを取るな! プロの現場で戦う真のヒーローの何たるか、その背中で、戦いでもって見せつけろ! 情けない姿なぞ見せている暇はないぞ、気合を入れろお前達イ!!」

「それ半分くらい自分に言い聞かせてませんか?」

「やかましい、黙っている灼くぞホークス!」

一方で、オールマイトを守って囲むように立つ生徒達。

その中心、オールマイトのすぐ隣に、緑谷は立っていた。

「すいません、オールマイト……こんな場面で、生意気にしゃしゃり出てきて……」

「緑谷少年……」

「わかってるんです。すごくバカなことをしてるんだってことくらい……でも、ダメでした。ボロボロになってでも諦めないあなたや……一時とはいえ、同じ戦場で一緒に戦ったヒーロー達が、力の全てを尽くして戦ってるのを見ていて……僕ら、結局、黙ってられなかったです……!」

「……君って奴は、ホントに……最初に出会った時から、変わらない。いや、それどころか……2クラス分以上、全員巻き込んでとはね……とんだPlus Ultraもあつたもんだ!」

「まー、そう言いっこなしにしましょうや、オールマイト先生?」

と、反対側から永久も言う。

「もうここまで来たら最後まで一緒に走りますよ。入院してたところに『敵』だのテロリストだのに襲われて、死にかけて、それに勝ったと思っただら拉致られてこんなところにきて……ぶっちゃけ戦いっぱなし+深夜テンションでアレになってる部分もあるでしょうけど……そんなバカげた一日の最後が、ヒーロー社会の明日を占う大一番つても悪くない!」

「あんたは前だけ見てろや、オールマイト……俺らは俺らで勝手にやる。あんたの邪魔にはならねえし、邪魔はさせねえでおいてやるからよ」

「……僕らで道を作ります。だから……あなたは、最後まで……最後に……!」

「全く、この……有精卵共は……!」

大人としては、教師としては叱るべきなのかもしれない。

しかし、自分より小さいながら、あまりにも堂々として頼もしい、そこにいる42人を前に……オールマイトは、こみ上げてくるものを抑えるだけで必死だった。

「本当に恵まれているね、オールマイト。ここにきて、道連れ追加とは」

そんな言葉と共に、AFOの次なる手が迫る。

それを撃ち落とそうとした、プレゼント・マイクとギャングオルカ

の超音波ないし衝撃波をくぐり抜け、鉄の槍のようなものが何本も飛んでくる。

が、オールマイトの前にいくつもの瓦礫の欠片？らしきものが割り込み……次の瞬間、

「唯！」

「ん！ 『解除』！ と、『大』！」

「ツイン……インパクト！」

柳が『ポルターガイスト』で浮かせて並べた瓦礫達を、小大が元の大きさに戻し、どころかささらに巨大化させる。同時に庄田が、槍と瓦礫が衝突する瞬間に合わせて『ツインインパクト』を発動。

瓦礫が全て巨大化し、さらに『ツインインパクト』の衝撃で、炸裂する盾となる。

『土魔獣』との模擬戦でも猛威を振るったコンビネーションが、飛来した槍の大半を防いだ。

それをなおも抜けて飛んでくる数本を前に、

「超強酸&粘性MAX……『アシッドマン』!!」

全身に溶解液を大量に纏い……いや、最早溶解液でできた着ぐるみを着たかのような状態の芦戸が飛び込み。その酸の体で槍を受け止め、突き抜けて外から出てくる間に溶かしてしまう。

鉄の槍は内部で全て溶けきるか、突き出しても、勢いを失って力なく墜落してしまう。1本としてオールマイトに届くことはなかった。

と、さすがに一度に出す『酸』の量が多すぎたのか、少しふらついている芦戸と、一瞬目が合い……彼女はニカツと笑ってみせる。

オールマイトも頷いてそれに応えながら、1歩、その足を前に踏み出した。

今度はまるで隕石、あるいは流星群のように、上空から無数の巨大な岩が降り注ぐ。

大半はヒーロー達が防ぎ、砕く。しかも、狙って落としているわけではなく、どうやら無差別に範囲内を攻撃しているだけらしい。こちらに当たる可能性があるものだけを選んで砕いている。

それでも出てきてしまったうち漏らしに対し……吹出が『ガキイイ

「イーーン!!」と巨大な擬音の盾を出して受け止める。

さすがに重量ゆえ、それも数瞬の間しかもたずに割れてしまうが、その前に、蛙吹の舌に絡められて一緒に接近した麗日がタツチして『無重力』を発動。

「まだ……まだっ！ 梅雨ちゃん……次！」

「ける。わかったわ、こっちへ」

掛け声を受けて、蛙吹が跳ぶ。

たった今麗日が無重力にした岩に向けて跳躍し、それを足場にして蹴り飛ばすことで空中でさらに移動。同時にその岩を遠くに蹴飛ばして……さらに、その滞空中に舌を伸ばして麗日をつかみ、ぐいっと引き寄せる。

その瞬間、麗日が『個性』を解除して重量を戻し……ズシン、と音を立てて岩は落下する。

その時には蛙吹は別な大岩のところに跳んでおり、巻き取られて回収されていた麗日がまたそれに触れ、『無重力』にする。

そこからは繰り返した。蛙吹がそれを足場にして、蹴飛ばすのと跳躍を同時に行い、麗日を回収。麗日は『個性』を解除して岩を落とす。そして次の岩を迎撃……を繰り返す。接近が間に合わないものに対しては、これも適宜吹出が盾を出す。

麗日の『個性』のキャパシティを考え、『無重力』にするのは一瞬。『個性伸ばし』のおかげで、麗日の許容量も蛙吹のペロ力も上がっているがゆえにできたコンビネーションだ。

オールライト目掛けて落下してくる、あるいは余波がダメージになるものにしぼって行ったとはいえ、その全てを範囲外にたたき出してみせた。

空中にいる2人と、一瞬交差する視線。

互いに笑顔を見せ……オールライトは、また一歩歩みを進める。

「ふむ……中々やるものだね。さすがは卵は卵でも金の卵、数が揃えばそれなりの力にはなるか……なら、その優位を潰してみようか」

すると今度は、AFOの足元に、暗い緑色に輝くオーラのようなものが収束し……まるで渦潮か、あるいは魔法陣か何かのように渦巻き

だす。それらはいくつかに分かれてさらに収束していき……数秒後、何十匹もの狼、あるいは猟犬のような姿になって、散らばって襲い掛かってきた。

猟犬たちは、オールマイトと生徒達を標的として駆け抜ける。当然これもヒーロー達が応戦して減らすも、その素早さと数、そして動きの不規則さゆえに、かなり多くの数に抜けられる。

が、ヒーロー達の包囲網を粗方が抜けたところで……轟が一気に広範囲に放った冷気が大規模な氷結を作り出し、その大部分を制圧する。

大ダメージを受けた猟犬たちは、その場で消滅していく。『個性』で生み出されたものであるがゆえか、後に死体は残らないようだ。

それらの広範囲攻撃を抜けて迫ってくる残りの猟犬たちは、こちらも数で真っ向から迎撃する。

「尾空旋舞！」

「ターゲットエレクト!!」

「グレースコール！」

「グレイプラッシュ!!」

「アイキャントストップウィンクリングスーパーノヴァ!!」

「長えよ」

尾白の尻尾が薙ぎ払い、上鳴の電撃が撃ち抜く。凡戸と峰田の『セメダイン』と『もぎもぎ』で捕縛したところを、青山が大威力・長射程の『ネビルレーザー』で薙ぎ払う。

それに冷静にツツコむ心操は、『捕縛布』でからめ取ると同時に他の猟犬に叩きつける。

それらを避けて大回りしてくるものに対しては、鱗や角取が遠距離で鱗の弾丸や『角砲』^{ホーンほう}を放って撃ち抜く。青山もこちらに加わる時もある。

さらに耳郎が、知覚外からの奇襲がないよう、それらの動きを常に警戒しながら、自らも『ハートビートサラウンド』の衝撃波で迎え撃つ。

遠距離組に近づく者に対しては、拳藤と回原がその更に前衛を担っ

て彼ら、彼女らを守る。拳藤は同時進行で、前線指揮官のように随時周囲に指示を出し続けていた。

近距離でも打ち漏らしがないよう、防衛ラインに障子が構え、その感知能力で周囲を警戒しつつ、適宜『オクトブロー』で抜けて来た猟犬をなぎ倒していく。

その周囲では、同様に索敵と援護のために取陰がパーツを飛ばし、さらに口田が蝙蝠たちを操って、超音波による『エコーロケーション』で周囲の状況をすべて把握していた。

前衛達と連携して1匹の打ち漏らしも許さず、オールマイトにその牙を届かせない。

1歩、また1歩とオールマイトが歩みを進めるのに合わせて、徐々に戦線を押し上げていく。

そこにさらに加わる、AFOの戦力。

どうやら、周囲に残っている者を呼び寄せたらしい……黒い水が虚空に溢れ、数体の脳無が戦場に姿を現す。いずれも体の色は白……下位か中位だ。

だが、ヒーロー達がすぐさま迎撃に移ろうとしたところで……その脳無達は、ほとんど移動もしないままに、再び黒い水に包まれて見えなくなっていく。

バーで死柄木達を取り逃がした時にも見た……『転送』の予兆だ。

それも、そこからいなくなる時の。

その狙いにいち早く気付いたグラントリノが、はっとして警告を飛ばす。

「いかん……おい、受精卵共！ 警戒しろ！ こいつのコレは……」

「そう……僕の元へ呼び寄せるか、僕の元から送り出すか。そして、送り先は……『人』だ。それも、僕がよく知っている人に、酷く短い距離しか送れないが……問題ない。これだけ近ければね」

次の瞬間、オールマイトの周囲に黒い水があふれ出し、今姿を消した脳無が現れる。ヒーロー達と生徒達の防御陣を突破するため、直接それらを送り込んできたのだ。

姿を現した脳無達は、次々とオールマイトに襲い掛かるが……しか

し、半歩と踏み出さないうちに、周囲に展開していた塩崎の『ツル』がそれら全てを縛り上げる。

「謀は悪に通ずる……転送系の個性を持っているとわかった時から、^{はかりごと}この手の奇襲はずっと警戒していました。思い通りにはさせません……！」

それでも前に出ようとする脳無達だが、即座に円場が張った『空気凝固』の壁に阻まれ、攻撃がオールマイトまで届かない。

加えて、塩崎がそれを引きはがして、離れたところで拘束したところに、小森が『キノコ』による胞子攻撃を、それも呼吸器その他に同時に効くような毒性の強いものを叩き込んだため、脳無達はまとめて無力化された。

トドメに泡瀬が、胞子を吸わないようにガスマスクをつけた上で、脳無全ての両手両足を地面に一瞬で『溶接』して完全に動きを封じた上、顔面に鉄材をくつつけて視界すら封じた。

「やるねえ……なら、これはどうかな？」

再び、今度は黒いオーラが収束していく。大量の猟犬たちを繰り出した時と同じ光景に、見ていた者達が身構えるが……今度のそれは、さほど数は多くない。20にも届かない数のようだ。

だが、その大きさは数mにもなる、二足歩行の巨体の怪物ばかりであり、その半数近く……8体が、ヒーロー達の妨害を振り切つてオールマイトに襲い掛かる。体が大きい分馬力もあり、さらに意外と動きが速いため、簡単には止められないようだ。

『集光屈折ハイチーズ』ツツ!!」

が、突如その眼前で、葉隠の技による強烈な光が放たれ……どうやら普通に視力を持って行動していたらしい4体はたじろぐ。

「やっぱでけえモンスターには閃光が効くなー！」

その直後、瀬呂がテープを伸ばして葉隠を回収し……それと入れ違いで、飯田、鎌切、穴田、砂藤、黒色が飛び出す。

視界が利かず隙だらけのところ、フルパワーの砂藤とビーストモードの穴田が、それぞれぶつかって2体を押し倒す。

そこに、『レシプロターボ』でトップスピード状態の飯田の蹴りと、

高速回転の遠心力に自分の体重、そして刃物の重量を乗せた鎌切の一撃が放たれ、首元に吸い込まれる。

飯田の蹴りは延髄を粉碎し、鎌切の刃は首を切り落とし、それぞれ巨大な怪物を倒した。

「どれだけ強大な怪物だろうと、今の僕達には……一步もここを通さないという覚悟がある！ 容易くここを抜けられると思うな、巨悪よ！」

「何だっついていい！ 手加減も遠慮もなしにぶった切れるって最高だなアおい!!」

「お前、鎌切……台無しだぞ色々……」

「ま、まあ……半ば予想できていましたかな……」

その横で、怪物の体が『黒い』ことを利用し、黒色がそのうちの1体を支配して、他の2体をなぎ倒す。そして自分はその後で、首を差し出すように頭を下げた姿勢になり……鎌切が嬉々としてその首を斬り落とした。とてもいい笑顔で。

「いずれにせよ些事。ここは戦いの場なれば、目的の達成こそ至上命題と言える……！」

「同感だ。そのためならば、この身は暴虐の獣となりて戦場いくさばを駆けよう！ 『黒影』ダークシャドウ！」

『任セトキナア!!』

そして残る4体を……闇によってパワーアップした『黒影』ダークシャドウの、限りなく暴走に近いとすら言える全力攻撃により、一気に全て叩き潰してみせた。

1歩、また1歩……生徒達に守られながら、オールマイトは歩みを進めていく。

生徒達の中には、最初の切島や鉄哲のように、戦いの中で力を使い果たし、どう、と倒れ込んでしまったり、動けなくなる者も出始めていた。

そんな死地を、追い抜く生徒達と視線を交わしながら……オールマイトは進む。

気のせいか、その歩みは、変わらずゆっくりではあるが、徐々に力強くなっているように見えた。

生徒達の健闘を間に挟んでそれを見ているAFOは、その視線を受け止めながら、また口を開く。その声に、呆れや嘲りを滲ませながら。「とんだ英雄だな……オールマイト。どんな気分だ？ プロヒーローですらない、二回り以上も年下の子供達に庇われて、守られて……彼らを犠牲にして、屍を踏み越えて悠々と歩くのは？ そこから見えるのは、どんな景色だ？」

誰かが、『死んでねーっつ』と呟いた気がしたが、その直後……地の底から響いてくるような、決して大声ではないが、力強く、よく通る声があった。

やせ衰え、今にも倒れそうなほどに疲弊している男のそれとは、到底思えない声が。

「お前にはわかるまい……オール・フォー・ワン……！」
「……？」

「彼らがどんな気持ちで私を送り出してくれているのか……私がどんな気持ちで、彼らが倒れる中を歩いているのか……彼らが私に託してくれているものがどれ程大きいか、どれほど力強く背中を押して、どれ程大きな思いをこの拳に握らせてくれているのか！」

気のせい、ではない。

1歩、また1歩……歩みを進める中で、オールマイトは、失ったはずの力を徐々にその身に取り戻しつつある。

いかなる理屈なのかかわからないが——あるいは、そもそも理屈があるのかすら定かではないが——ぶかぶかのヒーローコスチュームの下に、徐々に筋肉が戻り始めている。背筋は伸び、ザツ、ザツ、と地面が力強く踏みしめられている。

距離があるとはいえ、その気迫を真正面から受け止めているAFOには、決してそれが無視していいものではないということが、直感的にわかった。

今再び、目の前のヒーローは……限界を超えようとしている。

「精神の話はよして、現実の話しよう……と、言ったはずだ。オール

マイト」

直後、AFOの両腕が膨れ上がり……それを見たヒーロー達は、あの、神野区を一瞬で瓦礫の山にした空気砲を思い出し、何としても阻止しようとする攻撃を集中させた。

しかし、ヒーロー達の予想とは違い、直後にAFOが見せたのは、空気砲発射のモーションではなく……さらに悍ましい異形の姿。

『筋骨発条化』『瞬発力』×4『臂力増強』×5『増殖』『肥大化』『エアウォーク』『鋏』『槍骨』『阿修羅』『超合筋』『空気を押し出す』『伝導』『溜め攻撃』『渾身』『火事場力』『鉄の拳』『力持ち』……僕が今使える最高・最適の……いや、それを超えた『個性』達の組み合わせだ」
両腕を覆っていたスーツが肩のあたりまで千切れて破け、その腕は……2本から6本に増えていた。

さらにその1本1本は、無数の腕や骨のような何かが混ざり、より集まったようになって形成されている上、しなやかで、かつ硬質なものになっているように見えた。

まさしく阿修羅のような姿となったAFOは、その6本の腕のうち4本を、斜めの前方と後方、4方向に向ける。上から見ると、ちょうど『×』の字が出来上がるように。

そして、わざと拡散させるように空気砲を放ち……周囲を囲んでいたヒーロー達を一掃した。

1発1発が、ビル群を瓦礫の山に変え、オールマイトの全力の『デトロイトスマッシュ』を相殺するほどのエネルギー量。拡散して大分威力が散っているとはいえ、それらを受けたヒーロー達はひとたまりもなく蹴散らされてしまった。

遮る者がなくなったそこで、巨悪の視線が直接生徒達に降り注ぐ。

そのあまりのプレッシャーに、硬直してしまう彼ら、彼女らを、誰も責められないだろう。

「さて……今までのように、『9割方』を削ってくれるヒーローはもういないぞ……どうする、金の卵諸君……？」

青ざめる生徒達に言い放ちつつも、その答えを待たず、AFOは腕の1本を生徒達に……その向こうにいるオールマイトに向け……今

度は、収束させた空気砲を放つ。

直撃せずとも、巻き込まただけで死を免れないであろうその一撃を前に……しかし、一切躊躇することなく飛び出した者が、1人。

「だからどうしたってんだ、クソ敵……」
ウイラン

「爆豪ッ!?!」

両手から爆破を放ち、それを推進力に飛び出してきた爆豪。

戦闘に躍り出ると、両腕に装備した、手榴弾をかたどった籠手……そこについている安全装置を、両腕とも解除した。溜めたニトロ口汗を使つて放つ『大砲』の引き金を、いつでも引ける状態にする。

さらにその状態で、発射の引き金になるピンを両方口にくわえて、両腕は掌を前に向ける。

（籠手は……最大威力の爆破を、ノーリスクで放てるようにする小道具。けど、オールマイトと同等の敵に、ノーリスクで勝とうなんざ、虫のいい話だ……なら、超えるだけだ……限界を!）

「っ……『穿天氷壁・三重』!」

直後、爆豪の意図を察した轟は、その爆豪の眼前に巨大な氷壁を、しかも3つ重ねて展開する。

その形状は、今までのようにただ大きいばかりのものではなく……前方に向けてとがらせており、叩きつけられた衝撃を散らすことができるような構造になっていた。

そこに命中した空気砲は、容易くその氷壁を木端微塵に砕きながらも……碎ける力すら利用して、その威力を拡散させ続ける。

そして、3枚目のそれが粉々になったところで……

「余計なことすんじゃねえよ……半分野郎オがア!!」

爆豪が、両腕の籠手のピンを引き抜くと同時に、最大出力の爆破を両手からも放つ。

本来ならば、1発放つだけでも、鉄筋コンクリートのビルを半壊させるほどの威力と、肩が外れそうになるほどの反動を生むそれが、4発同時に放たれ……しかも『個性伸ばし』で限界突破することによって極限まで高められたその威力。

そこに加えて、3重の氷壁と、それが砕けたことにより余計に冷氣

が冷やされていて……そこに爆炎の熱が加わったことで、想定外に『膨冷熱波』が発動。

合わさって生まれた巨大な爆風は……AFOの空気砲を、氷壁で大分威力が散っていたとはいえ、なんとほぼ相殺してみせた。

これにより、『立っていられないほどの突風』程度にまで威力を激減させた空気砲は、力を使い果たした爆豪を含む、ほとんどの生徒達を一気にそこから吹き飛ばしつつも、オールマイトにダメージは通らず、また生徒達にも死者・重傷者を出すことなく消え去った。

「ほお……やるものだね。しかし……次に続くかな？」

しかしAFOは、別な手を向けて再度、空気砲を放つ構えを取る。どうにか意識を保っていた轟は、こちらも再度氷壁を展開しようとするが、その前に……ぽん、と肩を叩いて、またしても誰かが進み出た。

無論、今度は爆豪ではなく、そこに立っているのは……フォーマルな正装とも呼べそうな服装に身を包んだ、すらりとしたやせ型の体躯だった。

「面白いんだよねえ、さつきから、A組ばかり目立たれてちゃさあ……悪いけど今度は出番、譲ってもらおうよ」

冷汗を流しつつも、不敵な笑みを顔に浮かべたままにした物間は、その両手を体の前で向かい合わせるようにする。そして、あらかじめ『コピー』しておいた『個性』を発動させていく。

「円場の『空気凝固』……」

手元に、空気を固めて作った、一抱えある大きさの球体を出現させる。

中が空洞になっているそこに、

「轟の『半冷半燃』……」

それとほぼ同じ大きさと形の氷の塊を作り出して、内部に収める。その後すぐにそれを熱で溶かし、水にする。そしてそこに両手を突っ込んで、

「上鳴の『帯電』……も一つ、『空気凝固』と『半冷半燃』」

水の内側だけで電気を発生させ……水を分解して、水素と酸素を作

り出す。同時に、最初に作った球体よりもさらに多くな球体を作り、最初の球体をその中に収めて包むようにする。

分解してできた2つの気体は、2つの球体の間のスペースに逃がしていく。体積が減ったその分、『半冷半燃』で氷↓水を作り続け、『帯電』で水素と酸素に変え続ける。

「栄陽院の『気象操作』……いや、いつの間にこんな使えるようになってるんだか……まあいいけど。風を操って、気体を圧縮すると同時に、形を整える。それでいて、決して2つが混ざらないようにしつつ……中央の球体の中には、氷の代わりに、雷雲を」

酸素と水素が極限まで詰まった球体を持ち、さらにその内部に、雷雲を固めて詰めた球体を忍ばせる。パンパンに張っているビーチボールのようなそれを手に持って……物間は最後に、

「そしてここで、吹出の『コミック』」

そうして『バシュツ』という効果音……射出音を出し、それに手に持った球体を乗せると……矢のような速度で、前方に高速で射出された。

丁度同時に、A F Oがまたしても空気砲を放ち……轟がそれを氷壁で相殺し、威力を削る。

そこに加えて、物間も同じようにして氷壁を出す。轟ほどのコントロール能力がなく出力も低い、それでもやや小さめの『穿天氷壁』を展開。4つのそれが威力を大きく殺す。

その直後、物間が射出した球体が空気砲と接触する……その瞬間を狙って、物間は『空気凝固』を解除した。

その瞬間、封じ込められていた雷雲……そこから迸る雷が、極限まで圧縮されて充填されていた酸素と水素に引火し……大爆発を起す。

その時には、物間はそれを見越して、自分達の目の前に氷壁を展開していたため……空気砲を相殺した大爆発は、その壁を砕きつつも、やはりこちらにはさほどダメージを与えることもなく……またしても、A F Oの攻撃をしのいでみせた。

だが今度はA F Oは、その更に直後、何も言わず、3発目の空気砲

を放ち……

「やられっぱなしでは……ありませんわよー」

しかし、既に八百万は『創造』を終えていた。

この展開を……大威力の攻撃同士の衝突を見越して、最初からずつと作り続けていたそれ。

見た目は、体育祭などでも作っていた大砲に近いが、アナログな構造のそれよりもメカメカしく……この超人時代にあつてなお、近未来的な印象を受ける構造になっている。

そこに、物間と上鳴が電力を供給し続けており……絶えず機械の駆動音が鳴り響いている。この時点で、単なる大砲などではないことは明白だった。

その武器の名は……『電磁加速砲』。カタカナで書くなら……『レールガン』である。

充電完了と同時に、その砲口から、キュオン！、という、砲撃にしては甲高い発射音と共に……音速をはるかに超える速さで金属の砲弾が発射され……空気砲と衝突。

本来、人に向けるどころか、都市部で使うようなものではないそれは、電熱による空気膨張やら何やらで周囲に途轍もない衝撃をまき散らしながらも、空気砲を見事相殺、またしてもオールマイトや生徒達を守ってみせた。

だが、この武器は連射が効かない。後に続かない。

それを理解している八百万は、この後さらに続くであろうAFOの攻撃にどう対処すればいいか、残存の戦力を頭に思い浮かべて、必死で頭を回転させるが……警戒し焦る八百万の前で、AFOはいつまでたっても構えなおす様子を見せない。

なぜかといぶかしむ八百万だが、数秒考えるようにした後、

「……なるほど、君達を甘く見ていたのはよくわかった。想定が甘かったと認めよう」

しかし、と続ける。

「ならば、もっと確実性のある方法を取ることにしよう。遠距離からの衝撃波では、こちらもクールタイムが必要になる上、威力も大して

出ない。例えオールマイトに当てられたとしても、体力を削るにとどまって確実性がない。だから……直接、殴ろう」

言うが早いのか、空気を蹴って跳んでくるAFO。

こちらの間合いに入ってくる形になるが、完全なクロスレンジまでは飛び込んでこなかった。

距離をある程度詰めたところで、片側3本の腕が1つにまとまってさらに巨大化し、その拳を握った大きさは、体よりもはるかに大きく……10トントラックか何かを思わせるほどのサイズになっていた。

それを振りかぶり、殴る、というよりは叩きつける、あるいは抉るような軌道で繰り出される一撃。

降りぬかれれば、八百万を始めとして、多数の生徒を巻き込んで炸裂し……その全てを跡形もなく粉碎し、地面をえぐり、クレーターを作るであろう一撃を前に、対抗手段が思い浮かばず、頭が真っ白になりかける八百万だが……その眼前に、軍服姿の背中が立ちふさがった。

「バトンタッチだ、八百万。下がってな……コード■■■■—■■■

■。封印解除承認、『プラスターフォーム』発動」

言いながら永久は、軍服の襟のあたりについている制御用ツールを操作し……音声入力で、コスチュームに内蔵された『奥の手』を発動する。

永久のコスチュームの各所に走っていた、エネルギーの流動経路である『フォトンストリーム』。本来は、エネルギーが走ると、黒を基調とした軍服の各所に、金色に光るラインが浮き出る形となるが……『プラスターフォーム』の発動と同時に、その色彩が逆転する。

金色に光っていたラインが黒く染まり、代わりに、そこから広がるように……軍服の、今まで黒かった部分に金色の光が広がっていき、見た目にも派手な黄金に光る軍服となった。

派手な見た目だけと侮るなかれ。全身を巡らせるだけでも強力だった『エネルギー』を、全身に直接纏う形となるこの形態は、消耗も激しいが、通常時とは一線を画す戦闘力を生む。

それまでとは比べ物にならないほどのエネルギーが充填されてい

き、全身黄金の輝きの中でも、ひととき大きく腕が輝き出す。収まりきらないエネルギーが体表からあふれ出し、オーラのようにその周囲を、渦を巻いて漂っていた。

収まりきらずあふれ出し、しかし霧散せずとどまっている。体外にまで及ぶコントロール能力とコスチュームによる補助により、永久は肉体の限界を超えた強化を実現していた。

「ついでだ、ものの試しというか……参考にさせてもらおうとするか。『無限エネルギー』『衝撃吸収』『超再生』『受け流し』『空気伝導』『背水の陣』『気象操作』『オーバーホール』……使えそうな『個性』と、今まで学んだ技術をフル稼働……この一撃に全部を込める……!」

『個性伸ばし』で強化された許容限界をもさらに超えた、あまりのエネルギー量に、腕が今からきしみ出す……のも構わず、拳を握り、力を込める。

「っ、っ……まだ、まだあアア!! 限界、超えろオ……!」

さらにそこに、外付けで力を加算する。

エネルギーを充填されたバイオ人工筋肉が威力を倍加させ、その強化幅は『プラスターフォーム』のおかげで限界をさらに超えたものになっている。

『気象操作』で追い風の暴風を起こし、さらにそれを拳に乗せることで威力と速度を強化。

『オーバーホール』で踏みしめる地面の強度を上げ、砕けないようにして、『空気伝導』と『受け流し』で衝撃を全て逃がさず前側に叩き込めるように、環境すら整えて味方につける。

とどめに、発生するであろうことを前提にしている反動については、『超再生』や『衝撃吸収』などでカバーできるよう整えた。

(後に続かないのはヒーローとしてアウト……だけど、今だけは後のことは考えるな! 結果的にでも続かせなけりや死ぬ場面だ……後に続けるためにこそ、今のこの一撃に全てを込めろ!)

目の前の敵に、渾身の一撃を繰り出す。ただそれだけのために全身全霊をつぎ込み……まるで、自身が強大なエネルギーの塊そのものになったかのような感覚の中、限界まで練り上げた力を……待つ正面か

ら、AFOの拳に叩きつける。

『全力全開』も、『限界突破』も超えた、最強最後の一撃。

「完・全・燃・焼!! 3000%パアアアアンチ!!」

己の輝き全てを叩きつけるかのようなその一撃と、AFOが放った巨大な拳の一撃がぶつかり合う。

すぐに地力の違いが出る。ここまで強化した力でも競り負けそうになり……腕が悲鳴を上げる。

筋肉が千切れ、骨がきしんでひび割れるのがわかる中、『超再生』で無理やりそれを直し、『衝撃吸収』で耐え、『受け流し』で余剰分を可能な限り地面に逃がし、砕けた地面を『オーバーホール』で修復する。『変容』によるものか、本来は手で触れる必要がある『オーバーホール』を、足で触れている地面に使っていた。無意識でだ。

実際にはほんの数秒……しかし、その時間が永遠にも思えるほどに、僅かな時間で何度もそれを繰り返し……そしてついに。しのぎ切った。

僅か数秒の間に何度も破壊と再生を繰り返した腕からは、見た目は変わらないが、おびただしい量の血が流れ出て……それでも逃がしきれない衝撃があったのか、目や耳、鼻や口からすらも出血の痕跡があった。相当強く食いしばったのか、歯にひびすら入っている。

お世辞にも格好がついたとは言えない形である。込めていた力も尽きたのか、あるいは維持するだけの気力が今はもうないのか……『プラスチックフォーム』の光も消えている。

拳を振り抜いた姿勢すら崩し、その場に膝をついて、そのまま倒れ込む。

しかし、その拳は確かに、殺すつもりで放たれたAFOの一撃を、その力全てをそぎ落とさせ、相殺する形で防ぎ切り……

「なるほど……ここで、君か……緑谷出久」

「ワン・フォー・オール」……100%……!!」

その後に控えていた、緑谷に繋いでみせた。

先程の永久の『プラスターフォーム』を上回る緑色の輝きがあたりを照らす。

『フルカウル』によるものか、はたまた『サイコフレーム』の心の光か、あるいはその両方か……最早区別はつかないし、つける意味もないのだろう。

(永久……かつちゃん……轟君……物間君……八百万さん……みんな、みんなここまで繋いでくれた！ 今度は、僕の番……そして、これで最後だ！ 全部、出しきれ!!)

最早意識するまでもない。緑谷はその身に刻み込まれた、今までの膨大な修行の成果を、次々とその身に発現させていく。

連綿と受け継がれてきた、巨悪を討つための力『ワン・フォー・オール』。

頭だけでなく全身で考え、最高・最善・最適・最強の駆動を繰り出す『身勝手の極意』。

その身にいくつも搭載した、『サイコフレーム』や『フルガントレット』を始めとする武装。

永久との『同調』を通して使えるようになった、共有している数々の『個性』。

それら全てを背負い、握り……暴風を背負い、雷と光を纏い、翠色に輝く流星となって、緑谷は地を蹴る。

永久が弾き飛ばしたのとは逆……もう片方の、3つの腕をまとめた、AFOの拳に立ち向かう。

「こうして見ると……ある意味、感慨深くもあるな。『ワン・フォー・オール』……僕の気まぐれと偶然が生み出し、僕の弟から始まった『個性』が……今もこうして、息づいている……しかもどういうわけかな……こうして君を見ていると、弟を思い出す」

「……………!?!」

「力が伴わず、理想ばかりが先行し……ついで僕に心を開いてくれず、最後まで敵であり続けた。今思えば、その『個性』を受け継いでできた者達は、皆、似たような性格をしている気がするね」

どこか、昔を懐かしむような声音と雰囲気で語るAFO。

緑谷に自分の弟の影を重ねているのか、ほんの少しだけ時間を置いて感傷に浸り……しかし、その間を置かず、その拳を握り……振りかぶる。

「結局、最後まで僕と共に在ってはくれなかったな、弟も、その力も……それどころか、君のように、哀れにも戦いの日々にも身を投じる犠牲者を生み出してしまった。せめてもの手向けだ……僕がこの手で、その因縁を終わらせてあげよう。これ以上、君達が苦しむことがないように……」

「終わるもんか……こんなところで……！ 託されたんだ、平和の象徴を……巨悪と戦う力を、願いを！ ここで、終わらせて……たまるか！」

振り下ろされる、必殺の一撃。それにも微塵も怯まず……一步を踏み出す。

緑谷の意思に、その身の内の『ワン・フォー・オール』が呼応しているのか、その身が一層強く輝きを放つと共に……地面を砕くほどに強く踏み込み、空気が唸るほどの勢いで、思いと力の全てを込めて、その拳が繰り出される。

「デトロイトオオオオ……スマアアアアツシュ!!」

無数の『個性』が束ねられた拳と、受け継がれてきた思いを握りしめた拳が激突し……あまりの衝撃に、空気が震え、地面が砕け、音にもならない音が響き渡って世界を震撼させる。

超常黎明期より、闇の世界に君臨し続けた支配者の拳は、9人の人間を渡って強化された力をもってしてなお、あまりにも強大だった。

『オールマイトの拳でも3発は耐えられる』とメリッサが太鼓判を押した『フルガントレット』が、あまりの負荷に耐えきれず砕け、それに守られていた緑谷の拳が、腕が、悲鳴を上げる。

だが、それでもその手を、身を、僅かでも退くという思考自体が、緑谷の頭からは抜け落ち……ただひたすらに、この拳を前に突き出すことだけを考えた。

(負ける……もんかあアアアア!!)

(……っ……これは、ここにきて……!?)

その瞬間、緑谷の脳裏に……永久や爆豪、麗日に轟、飯田に八百万……ここまで共に戦って来た者達の顔が浮かび、同時に、何かが彼らと『繋がった』ような感覚が襲った。

そして同時に、歴代の『継承者』達の顔も。

まるで、生きた時代も立場も違った彼らが、同じように並び……自分に力を貸し、自分の背中を押して、支えてくれているかのよう。直後、限界を迎えていたはずの拳に凄まじい力が湧き出して宿り……先程までのそれを塗りつぶす勢いで光があふれ出し、夜の闇を押しける勢いで輝く。

発揮された力は、AFOの拳をそのまま押し返し、弾き飛ばしてすらみせた。

予想外どころではない、全く想像だにできなかった反撃に、AFOは空中でたたらを踏む。

この後のオールマイトに力を残すことも考え、確かに全力でこそなかったが……それでも今の一撃は、トップヒーローですら、正面から潰し、殺すに十分だったはずの威力。それを、押し返された。

(今のは、一体……僕が、相殺どころか押し切られるとは……。明らかに、火事場の馬鹿力では説明できないほどの力だった……今の緑谷出久には、到底出しえないほどの……。『ワン・フォー・オール』が何かしたのか？ それとも……ん?)

そこまで考えたAFOだったが、直後、目の前で……拳を振り抜いた姿勢だった緑谷が、がくつと姿勢を崩す。

その体からは急激に光が消えていき……今の一撃で全ての力を使い果たしたことは、考えるまでもなく一目でわかった。

それでも完全には崩れ落ちず、意識を保ち、片膝立てて耐えているのは、執念と強靭な意思のなせる技か。

どういう理屈だったかはともかく、やはり後に続くことはない、その場限りの物騒な奇跡だったようだ、と、ひとまずAFOは結論付けたが……その直後。

ザツ、と……その彼の横の地面を、力強く踏みしめる足が目に入った。

「……！ 来たか、とうとう、間合いまで……」
「……………」

緑谷の横を、無言で通過する……弱り果てて瘦躯となった、しかし未だ心は折れず、今なお輝き続けている『平和の象徴』。

何も語ることはなく、ただその目に闘志を燃やし……AFOを睨み上げていた。

「オール……マイ、ト……！」

視界の横に映ったであろうその姿に、安堵と達成感、そしてその身に刻まれた、無視できないダメージから、意識を手放しそうになるも……最後の気力を振り絞り、緑谷は、

……否、緑谷『達』は、

「オールマイトオオオ!!」

『行ツツけええエエエ!!』

「ツ……ウオオオオオオツ!!」

その瞬間……裂帛の咆哮と共に、オールマイトは……『繋がった』。数秒前の緑谷と同じように。

ここまでの道を切り開いた緑谷達。

AFOを抑え続けたヒーロー達。

テレビ越しに、あるいは遠く離れた場所から、自分を応援している全ての者達。

そして……OFAの中に息づく、師である志村菜奈を含む、歴代の継承者達。

それら全てと、気のせいではなく、確かに『繋がった』を感じ……その瞬間、消えかけだったはずの『残り火』が、大火となって燃え上がる。

あふれ出す力がオールマイトの全身を満たし、右腕だけだったマツ

スルフオームは全身のものとなり、その全身から、緑谷の『フルカウル』を思わせる……黄金の輝きがあふれ出す。

弱り、衰えた様子など微塵も見せぬ、地面を蹴り碎かんばかりの勢いで飛び出す。

AFOはそれを、腕を再び6本に分裂させて迎え撃つ。

6本のうち2本から一度に『空気砲』を放ち、残る4本にはさらに増強系の『個性』を掛け合わせ……1本1本に先程、緑谷達が相殺した拳の威力と同等か上回るレベルの力を込めて。

だがオールマイトは、その剛腕で、虫でも払うかのように2発まとめて空気砲を打ち払って消し飛ばす。周囲への余波被害すら発生させることなく、完全に、一瞬で、一撃で。

直後に繰り出される拳の連撃も、真正面から全て打ち抜いて押し返した。

「オール・フォー・ワン!!」

さらにぶつかり合う拳。

正面から激突した拳と拳……オールマイトのそれは、AFOの拳を粉碎し、二の腕辺りまで消し飛ばす。『個性』で増やした腕だったゆえか、そのまま粉々に碎け散って空気に溶けて消えた。

「全ての悪よ!!」

また拳が拳を砕く。

「いや、これを見ている……全ての者達よ!!」

砕く。また砕く。

最早勝負にならない。オールマイトの拳は、AFOが繰り出した拳のことごとくを粉碎。

残った2本の、本物の腕でかろうじてガードしたAFOを、その上から殴り飛ばす。ガードが弾かれ、がら空きになる。

「とくと見よ、目に焼き付けよ!!」

だがAFOは、残る全ての力と『個性』を右腕に集中させ、これまでに倍する大きさと禍々しさの巨腕を作り出し……オールマイト目掛けて繰り出して来る。

オールマイトもまた、右腕に全ての力を込める。夜明けの旭光かと

見間違ふような輝きが、圧倒的な迫力と存在感がそこにあった。

「世界よ……これが！」

皆が見守る中……空中で、平和の象徴と闇の魔王、2つの巨星の最後の一撃が、真正面からぶつかり合う。

そして、

AFOの、数多の増強系『個性』や、力の差を覆す補助系『個性』、物理攻撃に対して天敵となるはずの『衝撃反転』すらも押し切つて……

「これが!! ヒーローだアアアア!!」

オールマイトの拳は、AFOの異形の拳を……粉碎する。

そのまま、渾身の一撃がAFOの顔を覆うマスクに直撃し……そこを守っていた防衛系のいくつもの『個性』すら貫いて、ドクロの意匠のマスクを粉碎。

その向こうにあった顔面を捕らえ……一瞬で意識を飛ばす一撃でもって、撃ち抜いた。

振り抜いた拳は、AFOを地面に叩きつけ……人が人を殴った結果とは思えないほどの音を立て、ありえない大きさのクレーターを作り、地面を盛大に揺らした。

余波となって周囲に放たれた衝撃波は、戦場全体に立ち込めていた土煙を残らず消し飛ばし、ヒーロー達、生徒達に突風となって吹き付け、上空を飛んでいた報道ヘリが、一瞬バランスを崩して慌てるほど。

その後は……打って変わって、不気味なほどの沈黙が訪れた。

ヘリの飛行音や、その他、機械の駆動音、切断された電線から火花が散る音などが響く中……狙ったかのようなタイミングで、瓦礫の山が形作る、いびつな地平線の向こうが……明るくなる。

本物の、真正正銘の朝日が差し込み……一夜にして、戦場さながらの破壊痕となった神野区を、労わるように優しく照らす。

その光を浴びながら……オールマイトは、力強く……拳を突き上げた。

その瞬間、カメラ越しにその光景を見た日本中で、歓声が上がった。『皆様、見えますでしょうか！ 敵は……動かず！ 勝利！ オールマイトの勝利！ 堂々たる……勝利の、スタンディングです!!』

ある者は笑い、ある者は涙を流し、ある者はこんな時どうしていいのかすらもわからない中、夜がようやく終わったのだと、皆が安堵し……歓喜していた。

それはもちろん、オールマイトと共に戦った、緑谷や永久……全ての生徒やヒーローにも言えた。

ダメージと疲労で最早動けない者ばかり。体を動かすことすらできず、倒れたまま。緊張の糸が切れて気絶してしまっただけ者すらいる。

それでも……皆の心には一様に、朝日を前にした、全て終わったのだという安堵があつた。

『終わりました……オールマイト氏の拳をもって、全ての悪が打倒され！ 悪夢の夜は、ようやく今、終わりを迎えました！ 凄惨な光景と言う他ありませんでした、多くの人が傷つき、失い……ギリギリの戦いの末につかんだ勝利だったのかもしれない！ それでも、私達は今、こうしてこの……このつ、今……懸命に戦つ……皆、美しく……あつ、ダメ……っ！ う、上手く、言えませつ……涙ツ……ひつく……不甲斐ない、リポートしか、できな、私を、どうかお許しください……!』

報道ヘリの飛行音と、各機にのっけているリポーターが張り上げる声。

そして、少し遅れて突入してくる警官達。運び込まれる移動式監獄その他、後始末のための設備の数々。

少し騒がしい、どこかしまらない、しかし、戦闘とも破壊とも違う騒々しさが……本当に、ようやく、悪夢の夜が終わったのだと教えていた。

皆がどこまでも深く安堵し、1人、また1人と……忘れていた疲労に限界を迎え、意識を手放していく。

その光景を……よくがんばったと労うように、ありがとうと礼を告げるように……それが『平和の象徴』としての責務であり、共に戦つ

てくれた戦友たちへの礼節だとも言うように……オールマイトは、最後まで立ち続け、見守り続けていた。

光が消え、力が抜け、トウルフオームに戻ってから……その姿を恥じることなく、最後まで……心からの笑顔と共に。

最終章 栄陽院永久のヒロインアカデミア
第153話 OFA・AFO・AFY

『神野区の悪夢』

『夏の夜の惨劇』

『8月〇日同時多発テロ』

『崩壊の夜』

『リアルバルスの夜』

あの日起こった出来事は、こんな風な名前で各所で呼ばれるようになった。

一番ヤバいことがあったのが神野区だっただけに、一番よく通っている名前は、『神野区の悪夢』である。

何せ、大量の脳無を動員した『敵連合』と、トップヒーローのほとんどが動いた上になんやかんやで私達雄英生がまたしても巻き込まれた総力戦みたいなのが巻き起こり……そこで出た被害は、区1つが壊滅状態といつていくらいになったわけだから。

ただその他にも、同じ日に病院襲撃事件が起こったり——まあ、こつちも私達が入院してた場所なわけだけでも——それ以前に襲撃のあった拘置所の一件も、『敵連合』が絡んでたこともあって、短期間にあちこちでこれだけのヤバいことが集中して起こったわけだ。

そのせいもあって、色んな呼び名がついたってわけ。

……なお、最後の1つだけなんか明らかに感じ違うんだけど……聞いた話だと、あの日の夜、どっかの局で某天空の城のアニメ映画を放送していたらしい。マジかよ。

そして、さあクライマックスだつて時になって臨時ニュースで神野区の映像が流れ、肝心の『その瞬間』は放送されないままに終わったとか何とか。ばるす。

つか、そんなことになってたのかよ……知らなかった。雄英の記者会見の特番見てた裏番組でそんなのが……いや、そういえば一回そん

な話題になった気も……？

ともかく……まあ、もう終わったとはいえ、思い返すと、マジで大変な夜だった。

……もつとも、その事件の余波は……事件から数日が経った今も、この社会を引つ掻き回し続けているんだけどな。未だに。

ちよつと振り返って、整理してみようか。

あの事件から数日が経ち、まあ何と言っても大きなニュースは、オールマイトのことだ。

あの後正式に発表されたんだが、オールマイトはかつてあの『敵』……『オール・フォー・ワン』という名前らしいそいつと一度交戦しており、その際に大きな傷を受けていた。

その傷は重い後遺症を残しており、本来はもう戦えるような状態じゃない中、無理を押しして戦い続けていたらしい。あのやせ細った姿が、本当の姿なのだそう。

けどさすがに今回の戦いでもうガタが来たとかで……記者会見の場で詳細を説明の上、無期限の活動休止を発表した。

活動休止……とは表向きには言えど、事実上の引退と見られているけど。時間の問題だろうな、っていうのが、大方の予想である。

……っていうか、どおりで私、オールマイトのあの姿に見覚えあつたわけだよ……1回会ってるじゃん、『ワーキングホリデー』の、クルーザーの事件の時に。緑谷の病室に来てたわ。

その時にもらった名刺……『八木俊典』ってアレ本名だったんだな。どおりでデヴィッド博士が『トシ』って呼んでるわけだわ。

オールマイトについては、まあ……他にもあるけど、ひとまずこのへんで。

次に、その時戦った『敵』達についてだが……『敵連合』については、主犯格である死柄木を含め、ほぼ全員が逃げおおせている。

まあ……黒霧とかいう『ワープ』系個性持ちの、反則級の移動手段があるからな。

ただ、そいつらと協力関係にあった大物首を複数確保している。

国際テロリストとして手配されているウォルフラムに、大物ブローカーのキュレーター、脱獄中だったオーバーホール……あと、病院を襲って来たナインと、その一味もだ。

ナインだけはそこまで広く知られてはいないらしいけど、結構な件数の犯罪に関わっているらしく、警察が余罪を洗っているらしい。

そいつらに加えて、大量の『脳無』と……なんといつても、『AFO』本人。

こいつらのうち、オーバーホールは特別拘置所へ逆戻り。同じ場所にキュレーターとウォルフラムも入れられた。

後者2人は、海外にも余罪がたんまりあるから、そのへんこれから調整していくことになりそうだとのこと。現在はそれに加え、2人と繋がっていた組織の摘発のため、各国の警察が大忙しとなっている。

そしてAFOは、その危険度を鑑みて、特例中の特例として、裁判による刑の確定を待たずに、大監獄『タルタロス』送りになったらしい。恐らくこのまま、二度と生きて解放されることはないだろう……との見込みである。

……まあ、そのへんのこととは本職の皆さんに任せよう。ヒーローの仕事は『敵』を倒すところまでだ。……私まだヒーローですらないけど。

そして今回の一件では、ヒーロー業界、ひいてはこの個性社会そのものに対しても、大きな打撃となった。

一夜にして壊滅し、多くの死傷者を出した神野区はもちろんのこと。

AFOとの戦いの跡地、『グラウンドゼロ』なんて呼ばれるようになったらしい……その他にも、連中がアジトにしてたバーの周辺や、その『グラウンドゼロ』周辺では、連中がばら撒いた脳無による破壊その他の被害がかなり発生した。

その過程でさらに死傷者も出てる。鎮圧に動いたヒーローにも。

『敵連合』及びAFOとの決戦に赴いたヒーロー達にも同様だ。皆、大なり小なり傷を負った。現在は療養中で、一時的に活動休止も視野に入れている者も少なくない。

ただ、進退に関わるような傷や、活動休止が長期になるような傷の人がいなかったのは幸いだったが。

ジーニストとか、あのままだと明らかにやばかったかもしれないけど……あの時に治して、もとい『直して』おいてよかったよホント。

あの後AFO戦でまたケガしたっばいけど、きちんとそれはすぐ治る程度の傷らしいし。

さらに、林間合宿で拉致されていた、ワイプシのラグドールも、無事に救出・保護された。

救出された当時、なぜか全裸だったらしいんだが……R18なことになってたわけではないのは一安心である。

……むしろあの連中のことなので、他の方面に『利用』される予定だったんじゃないかって心配だ。監禁された場所、脳無達が保管されてた格納庫だったらしいし……もしもうちよつと救出遅れてたら……怖っ、考えんところ。

現在は療養のため、一時的に活動を休止しており、落ち着いたら復帰する予定だ……とのこと。

さて、社会情勢についてはこのへんで。

ここから先は、私や私の周辺における個人的な話……そして、オフレコの話になる。

まず、今話したばかりのことに関わる話なんだけども。ラグドールについてだ。

彼女、実は……救出当初、『個性』を使えなくなるという謎の変調を訴えていた。

どうやら、AFOに『個性』を奪われてしまっていたらしい。強力だもんな……ラグドールの『サーチ』。私らの合宿でも大活躍だったし……お世話になった。

しかしそうなると、最早ヒーローとしての復帰は絶望的か、という感じになった。一度は。

ただし、現在その悲劇ムードはきちんと綺麗に霧散している。

近く、ラグドールの『サーチ』は、きちんと戻ってくる見込みだか

らだ。

「というのも……あの戦いの時、最後の最後あたりで私、『完全燃焼（略）』でAFOに一発かましたわけなんだが……その時にどさくさに紛れて、何個か『個性』失敬してたんだよね、適当に。」

「少しでもこいつを弱体化させられれば、と思つてのことだったんだが……その中に、運よく『サーチ』があつたのだ。つまり、『サーチ』は今、私が持つてる。」

「落ち着いたらというか、後できちんと日程決めて、返すことになつてる。」

「ただし、すぐには無理だが。」

「世間が今、この話題で騒ぎまくつてるところで、下手にすぐには動けないつていうのもあるし……他の理由もある。それはまあ、後で。」

「加えて、雄英のことについて。」

「合宿が中止になって以降（中止つつつても7日程中6日終わつてたんだが）、自宅待機だった私のところに、プリントが先日届いた。」

「何か雄英、全寮制に移行するらしい。生徒達により確実な安全確保と、近い距離での効率的な指導のために、その他色々な理由が並んでたけども……まあ、今回の件あつてのことだろうな。」

「その説明と、今回の件のお詫びもあつて、近々先生が家庭訪問に来る、と書いてあつた。」

「で、今、来ている。」

「それではイレイザーヘッド、オールマイトも、今後のカリキュラムの進行や、『全寮制』の開始による生徒達への指導をいかに効率的に行つていくかについて、こちらに案を4つほどまとめましたので、急で申し訳ありませんが読んでご意見を……」

「いや待つてくださいいアナライジユ。何を当然のようにビジネス関係の、つていうか学校こっちの立場で話を進めようとしてんですかあんだ。あなた今日は保護者としてここにですな……」

「今現在、ここは我が家の……というか、私が住んでるマンションの」

応接室だ。

実家というか、『栄陽院』の本邸は遠いし、あんまりあそこ行きたくないの。

「そう言われても……とりあえず今後も雄英にご厄介というか、お世話になることは確定していますし、だつたら少しでも建設的に、それこそ私が絡ませていただく以上は、今以上に安全かつ効率的なカリキュラムを組むことに注力した方がいい、って昨日家族会議で決まっています」

「あ、なんかもう結論でてらしたんですか」

「すみません、オールマイト先生、相澤先生。うちの両親、っていうかうち大体こんなんです」

「……お父様も、それでよろしいということでしょうか？」

と、相澤先生は……私を挟んで、母さんの反対側に座っている人を目を向けて言う。

そこに座っているのは、有名ブランドのビジネススーツに身を包んだ、実年齢よりも結構若い見た目の……人のよさそうな男性である。

栄陽院コーポレーションの代表取締役社長、栄陽院豊。それがこの人の名であり、立場だ。

そして当然、私の父……義父でもある。

より正確に言えば、成実義姉さん達の実父であり、私にとっては、母親の再婚相手。血縁はない。

「ええ、もちろんです。彼女もそう望んでいる……なら、親としてしてやれることはしてやりたいですし、彼女の夢の邪魔をするのも嫌ですから」

相澤先生としては……母さんの仕事モードに足突っ込んでる対応は、まあ、母さん個人が特殊なんだとしても……義父さんも、あつさりこの学校の提案を認めたことが意外なようだ。

まあ、これだけ騒ぎが続いた上での、突然の『全寮制』だもんな……普通に考えれば、反発だつてありそうなもんだらう。病院で尾白達が言つてたように、今回のことを、雄英の不祥事としてとらえている人や、不信感を持っている人は、少なからずいるわけだし。

ただ、うちの場合はそのへん、理解もあるし……ある意味特殊でもある。

「先生方から見れば、意外な反応に映るんでしょうね……私のこれは。親としてはもっと、子供を心配して、守れなかった学校に不信感を持つのではないかと」

「いえ、そのようなことは……」

「いいんですよ。まあ……うちは色々特殊なんです。ご存じのことかと思いますが……私と妻は、両方再婚同士で……しかも、私の実家が『栄陽院』だということも相まって、妻と永久には随分、苦勞をかけた。いや、今もかけていますから」

まあ、この辺の事情はもう、大分前に話したというか、振り返ったというか……連れ子の私が、『栄陽院』の本家でよく思われていないことも、義父さんはそれをきちんとできる範囲でカバーしてくれたり、一人暮らしの私を色々と助けてくれることも。

加えて、どうしても父さんは現役の会社経営者って立ち位置にいるから、家族の時間もとれず……って感じになってるんだよな。私や母さんに限らず、成実義姉さん達とすらも。

今回は、上手いこと時間作ってこうして来てくれたわけだ。

まあ……普通の家庭なら、それはごく当たり前のことなんだろうとは思う。

自分の娘がこんな大変な事件に巻き込まれて、それでも『仕事がある』ってこない父親って……まあ、控えめに言っておアレだと思っしな、客観的に見たら。

……ひよつとしたら、こうして義父さんが『来てくれた』ことに対して『ありがたいな』とわざわざ思ってる私は……まだ、彼に対して他人意識みたいなものが残ってるのかもしれない。いや、残ってるんだろうな、やっぱ。結構、私も大きくなってからの、母さんの再婚だったし。

信頼はしてるし感謝もしてるけど、そこはやっぱ……どうしようもないラインがあるかも。

義父さんとしても、不器用なりに色々私のことを気にかけてようとし

てくれているのはわかるけど、それが他人には伝わりにくかったり、実際ピントがずれてたり、家や会社その他の関係で、父親なら、家族なら当然すべきことができなかったりするからな……。

とはいえ、これはこれでというか、うちは上手く回ってるので……問題ないと思ってる。

基本的に私の意思を尊重してくれて、かつ放任主義などところもあるから……ちよつとほったらかしというか、適当な部分も目立つけど、きちんと私のことも考えて、大事にしてくれてるから。

実際今回、本家でも、日本中の注目が集まったこの一件や、そこに通ってる私のことは、『体育祭』の時以上に話題になったらしく……『仮にも『栄陽院』の家の末席を、こんなことがあった学校に通わせ続けるのはどうなんだ』って意見が一部で上がった時に、黙らせてくれたらしいし。

「今回のことに関して、思う所や、言いたいことがないわけじゃありません。それでも、永久からきちんと事前に話を聞いて、先生方が、永久や、生徒達のために全力で戦ってくれたことは……私も理解しています。だから……永久さえ望むのなら、私からは何も文句はありません。この子を……私達の娘を、よろしく願います」

「……こちらこそ、よろしく願います」
相澤先生も一緒に頭を相互に下げる形になって、無事に『家庭訪問』はまとまった。

うん。刺々しいことにならなくて、よかったよかった。

「……よし、それじゃああらためてイレイザー、今後のカリキュラムその他について……」

「いや、アナライジユ。ですからそれは流石に日を改めましょう。我々、この後まだ行くところありますし」

オチもついた。

ま、実際私の中に、雄英を離れるって選択肢はないに等しいからな。昨日の時点で、緑谷（実家に帰省中）から『通い続けられることに決まった』っていう連絡は既に貰ってる。先に家庭訪問済んだそうなので。

だから、緑谷が……『ご主人様』が雄英に通い続ける以上は、私が
そうしない選択肢はありえない。反対されようがそうするつもり
だった。

……そうそう、その緑谷との今後の付き合いと……もう一つ。

私の『個性』、そして、緑谷の『個性』についても……オフレコの話
があつたんだよな。

話し合いがあつたのは、実は、一昨日の夜である。

その時点で、実は既に話は済んでた。

もつとも、うちの両親も、相澤先生もいない……なんならその内容
はおろか、話し合いがあつたことさえ知らない、超オフレコの場合、だ
けど。

あんな事件があつた後なので、原則私ら生徒達は自宅待機、外出は
控えるように、ということになってたんだが……それを承知で呼び出
しがかかった。

呼び出された場所で待っていたのは、緑谷と、オールマイト。そし
て、グラントリノと、校長。そして、サー・ナイトアイの5人。

秘匿性を確保できる＋集まりやすい空間ってことで、集合場所に
なったのは、他ならぬ雄英高校。その応接室で、鍵をかけて……秘密
の話し合いの場が設けられていた。

そこで私は、世間一般には公開されていない……どころか、ごく限
られた人間しか知らない、超のつくトップシークレットについて、知
らされることになった。

緑谷の『個性』——『ワン・フォー・オール』について。

単なる『個性』ではなく、人から人へ『継承』されてきたというそ
の特殊性。

他ならぬ『オール・フォー・ワン』と、その弟……そして、私の祖
先の『ストック』の力に端を発するという、知られざるそのルーツ。

かつてはオールマイトがこの『個性』の持ち主だった。そして、『継
承者』である緑谷に譲渡して以降は、その『残り火』によって戦い続
けて来たという事実。

その『残り火』も……あの日、AFOとの神野区での戦いで、もうほとんど残されていないレベルにまでなってしまった、という現実。今後、オールマイトは恐らく、戦い続けることはもう難しい。ゆえに、次代の継承者である緑谷の育成に注力していくことになり……ひいては、私にも協力してほしい、ということだった。

まず大前提として、この『ワン・フォー・オール』の秘密は、誰にも知られてはいけない。

理由は色々ある。『譲渡』できる、それもこれだけ強力な『個性』の存在が明らかになれば……絶対によからぬことを考える奴はいる。脅して奪い取ろう、とか。

加えて、この『個性』は……もう引退が半ば決まったようなものだとはいえ、オールマイト……『平和の象徴』が、ナチュラルボーンヒーローであることに直結するものでもある。

依然としてその名前の持つ意味は、力は大きい。ゆえに、こんな力が存在していたという事実自体、これからも伏せていかなければならない。

ゆえに、私にもこの『個性』については、絶対に誰にも話さないでほしい、とのこと。

もちろん、そんなつもりは欠片もないが……そうまで嚴重に情報管理しなければならぬことを、なぜ私にも聞かせたのだろうか。当然疑問に思った。

この話を聞いて、今まで緑谷が随所で見せていた、『隠し事』の内容……恐らくはオールマイトと関わりがあるのであろうそれについて、ようやく納得がいった。

それに、話してくれたのは純粹に嬉しかった。信頼してくれたみたいに思えて。

しかし、ダメならダメで構わなかった。どれだけ怪しくても、気になっても、何も聞くなと言われれば、そうするつもりだったし……この話ってそういうレベルの話だろうし。

聞けば、やはりきちんと、信頼以外にも理由があった。

さつきちらつと話になったと思うが、『ワン・フォー・オール』の誕

生には、私のご先祖様が……正確には、その『個性』が絡んでいる。生み出される際の、材料の1つになっている。

ゆえに、私の個性『オール・フォー・ユー』とは兄弟みたいな関係にある『個性』であり……それに加えて、私が緑谷を『ご主人様』と定めて、色々と関わりを持ったのもあって、たびたび私と緑谷の夢やら何やらがリンクし、相互に色々なものが見えたり、聞こえたり、影響を及ぼし合っていた。それを、オールマイト達は、緑谷に聞いて知っていた。

実際今、緑谷と私の『繋がり』は、気のせいなんかじゃ絶対ないレベルになってるもんな。

互いの『個性』や『技』を共有して使えたり——ただし、その特殊性ゆえか、私は『ワン・フォー・オール』を使うことはできないみたいだ——共通の夢を見たり。

恐らくこの繋がりには、今後さらに強まることはあっても、消えることはない。ならば、それを通して色々なことを今後、私が知ってしまう可能性は極めて高く……その時になって困惑させるよりも、今から味方に引き入れた方がいい、と判断したそうさ。

幸いにして、私は緑谷の言うことに基本、逆らうことはない。絶対と言っていいくらいに忠誠を捧げているという立場にあるから。求められれば何だっつてするし、何だっつて差し出すほどに。

加えて、私を事情を知った上での協力者に引き込めれば、この上なく色々都合がいい、って面もあるらしいし……今となっては、私自身、『個性』的な意味で無視できない存在になっている。

場合によっては、警察や、ヒーロー公安委員会から危険視されるのではないかってレベルで。

私は、あの病院での戦いの中で、一度ナインに『オール・フォー・ユー』を奪われた。

あのナインって『敵』は、調べによれば、どうやら、自分から望んでAFOの下で人体実験を受け……AFOの『個性因子』を定着させたことよって、『個性』の複製による自己の強化に成功した、という内情を持っていたらしい。

裏社会の技術みたいだが、『個性』の複製って……そんなもんなんであるのか。

ゆえにナインは、自分の元々の『個性』である『天候操作』に加えて、『オール・フォー・ワン』その他いくつもの『個性』を、他人から奪って持っていた。

そして、『個性』を使うほどに細胞が死滅していくという反動を克服するために、『細胞活性』を狙っていた。それが、真幌ちゃん達のお父さんと、活真君が狙われた理由だった。

しかし、それよりも使い勝手のいいであろう——表面だけを見れば、だが——私の『オール・フォー・ユー』を見つけて、標的を移し替え……奪ったわけだ。

ところが、『個性』そのものに拒絶され、さらには逆に『個性』を根こそぎ『変容』の性質によって取り込まれて奪われるという事態になった。その結果、私は『オール・フォー・ユー』の奪還と同時に、『オール・フォー・ワン』を含むいくつもの『個性』を手に入れた。

さらにその後の戦いでは、これ幸いと脳無やAFO、オーバーホールなどから多数の『個性』を奪いまくり、一部は自分に使いやすく『変容』させすらした。

結果的にそれはそのまま、緑谷のパワーアップにも繋がったし、各所で『敵』に痛打を与え、ヒーローを救う要因にもなったものの……私が絶対に放っておけない存在になったことに変わりはない。

ゆえに、今回の『ワン・フォー・オール』との関連の件と合わせて、私を完全に自分達の側に取り込むということになったわけだ。

さて、色々ややこしい事情、隠されていた事実があったために、説明が長くなったものの……私の答えは1つ。至極単純である。

緑谷のためになるならば、彼がそう望むならば、否はない。

私の全ては彼のものだ。彼のためになるなら全力でこの力を使うし、彼のためにならないからやってはいけないことがあるならば、死んでもやらない。

当然、今回の求めにも全面的に協力させてもらうこととした。秘密は決して洩らさないし、私の力が必要なことがあれば、何だつて協力

する。それがもちろん、個性としての『オール・フォー・ワン』を使つたあれやこれや、実験なんかであっても。

説明の長さに対して非常に単純かつ簡潔ではあるけど、その私の返答を持って、その話は終わった。

これからくれぐれもよろしく、ってことになって。

こうして私は、公私ともに……に加え、裏表を問わず、緑谷を陰から支える立場になったわけだ。

これから始まるであろう、『全寮制』を始めとした、新しいスタイルでの学生生活の場で……彼の隣に立ち、私自身のスキルや知識はもちろん、『オール・フォー・ユー』と『オール・フォー・ワン』、そしてその他の数多の『個性』を使って。

あ、ちなみに、緑谷を支えるっていう、願ったりかなったりな仕事の他に、あまりにも強力で、しかし味方にいれば心強いことこの上ない『オール・フォー・ワン』を使う形で、色々な仕事を任されることもあるかもしれない、とのことだ。

その1つが、さつきも言ったラグドールへの『サーチ』の返却である。今私が持つてるから、直接会えさえすれば、さっと返せるので。

ただ、ラグドールの療養がきちんとすんで、心身がばっちり健康に戻ってからになるけど。

オールマイトやグラントリノ曰く、『オール・フォー・ワン』による個性のつけ外しは、個人差はあるが、どちらも対象にはかなりの負担になるらしい。

救出された直後、ラグドールの意識がもうろうとして受け答えがでない状態だったのも、恐らくその影響だろうとのことだった。

最悪の場合……精神が崩壊して廃人に、ないし……物言わぬ人形のようになることすらある……否、実際にあったんだとか。その負荷に耐えきれずに。

もつともそれは、既に『個性』を持っている者に、新たに別な『個性』をつけた場合とかだそうだけだ。

だから念のため、ラグドールに『サーチ』を返す際も、彼女の心身

の状態が最善のものになるのを待って行うことになったわけだ。

まあ、そう時間はかからないとは思うけどね。

ひとまず今は……新生活の準備を進めよう。

引っ越しまで、意外と時間なさそうだったしな。

第154話 全寮制へ

8月がお盆、墓参りの時期だというのは、どこの世界でも同じのようだ。

色々あつてずれ込んでしまったけど、私は今、そのお墓参りに来ている。

誰のか？ 私の、実の父親のだ。

「でも、何で今まで教えてくれなかったのに、今年は連れてきてくれたの、母さん？」

「……あの人からは、自分のことは忘れるように……つて言われてたからね。お墓の場所も、聞いてはいたんだけど……一回行つたつきりで、それ以降は……つて感じだったのよ。でも、今回は……あなたがあの人の『個性』を使えるようになったつて、流石に報告しなきゃつて思つてね」

墓参りつてことで、ご丁寧^{ごとうてい}に黒を基調とした服装で来ている母さんと……私は雄英の制服。

『そうまかいり想間解理』……これが私の父親の名前。

まあ、さすがにこれは知つとる。写真あるから、顔とかもわかる。ただ、墓参りは……さつき言つた通り、この年になつて初めて来た。エゴサーチっぽく調べてみて、どんなヒーローだったかも知つてる。

前に母さんが言つてた通り、そんなに強くも有名でもないヒーローだったらしいから、そこまで情報見つからなかったけど。

ヒーロー名『リンクマン』。シンプルだな。

『個性』は……非公開。珍しいことに、メディアとかにも情報を出さないスタイルだったようだ……アングラヒーローの相澤先生でさえ、『個性』は知られてるのに。

そして、母さんからは……さつき言つた墓の場所を含め、前の父親のことはほとんど聞かされることはなかった。

が……先日^{さきひ}の一件を皮切りに、話してくれるようになった。今まで

は知らなかった、私の実の父親のことを。

「あの人の『個性』はね……『同調』というものだったの。文字通り、他人の心と自分の心をつなげて『同調』ないし『同期』させ……感情や情報、記憶を共有する能力。他人が嬉しいと思ったり、悲しいと思ったりすることを理解できるし……それによって、相手が嘘をついているかどうかを見破ったりすることもできる、っていうものだったわ」「へー……応用幅ありそうな能力だね。戦闘向きじゃないけど、裏方としてなら重宝しそうだ」

「だと思おうでしょう？　けど、キャパシテイ許容限界が結構重めでね……同調している間中、ずっと精神力を消耗する上、射程距離も短いし、他にも色々制約があつて……『個性伸ばし』を繰り返しても、かなり使い勝手は悪い方だったわ。『個性』がそんなだから、そのぶん地方の方を鍛えなきゃいけない……育てるの大変だったなあ」

「そーいや、母さんの解析・育成能力は、もともと父さんを育てるために培われたんだっけな……雄英在学中に育成関係のアドバイスをしたりしたのも、プロヒーローになってからのそれも、全部データを集めてそつちに反映させるため……」

聞けば、父さんの出身校は雄英ではない。聞いたこともないような私立校のヒーロー科だ。

仮免試験の時に偶然一緒になって意気投合して、そこから遠距離恋愛みたいな感じになったそう……そんななれそめだったの。

しかし、そうするとやっぱり……

「緑谷の『感情感知』や、私との『個性共有』は……」

「ええ、間違いなくあの人の『同調』が変化して受け継がれた形でしょうね……出力、射程距離、応用範囲……何もかもけた違いになつたから、最初は全く気づかなかつたわ」

なるほどね……緑谷のアレは、『ワン・フォー・オール』由来のものではなく……私の中に眠っていた、父さんの『個性』由来のものだったのか。感情を『感知』するんじゃない、その感情を持つ他者に『同調』してただ……それも、遠く離れた相手のSOSを受け取れるほどに、射程距離を強化して。

恐らくは、私の『オール・フォー・ユー』の性質の一つである『変容』の影響だな。緑谷が望む、彼にぴったりの形に能力を組み替えていたんだ。

その因子を、緑谷は私から『エネルギー』を受け取るたびに、少しずつ受け取って取り込んで、定着させていったんだろう。

そして私の『個性共有』は……まあ、考えるまでもないな。自分が持つ力の全てを、リアルタイムで緑谷と共有することで、彼をより強化するため……

まあ、『同調』って単語が使える点以外は何もかも違ったものになっちゃってるけども……私が言うのもなんだが、『オール・フォー・ユー』、頑張り過ぎだろ……面影ねえよもう。

それでも、母さんの助けもあって、いっぱいしのヒーローと呼べるだけの戦闘能力その他を身に着けて、地道ながらも順調にヒーロー活動を行っていた。

幸い、戦闘の才能はないわけじゃなかったもので、そんなに爆発的に、つて程じゃないけど、徐々に力もつき始め、プロになって以降も少しずつ伸びていったとか。

母さんも、献身的にそれを支え続け、やがて2人は結婚し……私が生まれた。

そしてそれから少しして、母さんと父さんは離婚し……そのしばらく後、父さんは殉職した。

以前聞いた時には、母さん以外に好きな人ができたから、母さんの方から身を引いたって聞かされてたけど……どうやら真相は違うようだ。

「当時、あの人はね……チームアップして、かなり大きな犯罪組織の捜査にあたっていたの。私はどうしても外せない別な案件があって、一緒にはいられなかった。けれど、他にもかなり大きくて優秀な、サイドキックも大勢いる事務所が参加していたから、大丈夫だと思っていたわ。けれど……敵の組織の規模が予想以上に大きかったの。ヒーローが何人も返り討ちに遭って……しかもあの人は『同調』を使って尋問を担当していたから、敵組織に目をつけられて……狙われる身に

なった」

「……ひよつとして、父さんは母さんを……」

「そう。その時私は、その案件の捜査に参加していなかったから、まだ間に合うかとも思ってた……私に、あなたを連れて逃げて、しばらく身を隠すように言ってきたの。この案件が無事片付いて、狙われる心配がなくなったら、また一緒に暮らそう。けど、もしそうならなかったら……自分のことは忘れて、新しい恋を見つけて幸せになってくれて……日付の入ってない離婚届置いて……」

そして……ダメだったのか。

浮気だの、他の女だのなんて理由じゃなかったんだな。そこは……変な言い方だけど、ちよつとよかったかもしれない。

「その犯罪組織って、今は？」

「その後、あらたにチームアップされた、より強力な……対凶悪犯罪のヒーロー達によって壊滅させられたわ。そのことを墓前に報告したのが、最初で最後のお墓参りだった」

「そっか……しかし母さん、よく聞き入れたね、それ？ 私も『幾瀬』の女で、『オール・フォー・ユー』の使い手だからわかるけど……そんなことになるくらいなら、最後まで一緒に戦うと思う」

「……当然、そうしたかったわよ。できることなら、最後まで一緒にいたかったし、なれるなら盾にだってなりたかった……でもね、言われちゃったのよ、『これは命令だ』って……」

「あー……」

そう言われたら……断れないわ……

「そして、『無事に逃げて、俺達の子供を立派に育ててくれ』って……他にも、あなたが立派に成長するまで、このことを話すの禁止されるわ、父親に未練が残ったり、新しい家庭に影響が出ないように、離婚の理由も誤魔化すように言われるわ……総合して、自分のことは忘れろって言われてるようなものだったわ……でもね、私やあなたのためだって言われて、泣きそうな顔で懇願するように、必死に『命令』なんてしてきてさ……そうまでされたら、断れなかったの……」

「……よりもよつて私達みたいなのに、キツイことを言ってくれた

もんだ、父さんってば」

「ホントよ……でも、こうしてきちんと幸せになったんだから……永久も、立派に大きくなったんだから……もういいかなと思ってるね」

「ヒーローとしては、まだ卵だけどね」

買ってきた花をさして、線香を立てて、手を合わせて……とりあえず、声には出さずに、現況でも報告しておこか。

えーと、雄英に入りました、『ご主人様』ができました、なんか『個性』がえらいことになりました、その他色々……

たつぷり30秒くらいも使ってお祈り&報告した後、私達はその場を後にした。

そして、途中にある駅で母さんとは別れる。母さんはこれから仕事だ。

そして私は……これから電車で雄英に『帰る』。

家ではなく、雄英に。これから先、私の家となる……雄英の『寮』に。

☆☆☆

ハイツ・アライアンス。

雄英敷地内、校舎まで徒歩5分の築3日（単位おかしい）。

今回の全寮制に伴って急遽用意された、私達の新しい家だ。

でかかかと看板に『1-A』って書かれてる……わかりやすい。

必要になったからってそんな3日とかで、建造物用意できるものなのかと思っただけ……この『個性社会』、その手の『個性』さえあれば割と何でもありだからな……。

おそらく、セメントス先生が頑張ったりしたんだろう。というか、設計図と材料さえ用意してもらえれば……私も『オーバーホール』で同じようなことできるかもしれない。

相澤先生に連れられて入寮する前に、注意事項の説明があった。といっても、寮に関することじゃなく、今回の騒ぎについてだ。

今回私達は、どうも相手にとつても不測の事態っほかったが、黒霧のワープで半ば拉致されるような形で連れてこられたので、あの時は

『戦わなければ生き残れない』状態だったことで、一応おとがめなしにはなっている。

最後のAFOに対して仕掛けた『マトリョーシカアタック』の時には、結果的には上手くいったとはいえ、本来はターゲットとして見られていなかった私達が飛び出してきたことに、相澤先生はいい顔をしていなかった。

『色々棚に上げた上で』とわざわざ言った上で、もし状況が違えば、除籍処分が下つていてもおかしくない事態だったと覚えておけ、とのこと。

ま……勇氣と無謀は別物だったのは、色んな所でさんざん言われることだしな。きちんとこの辺は、注意事項として受け止めて、心に刻んでおこう。

そんな感じで注意事項とこれからの方針……『仮免』習得に向けて進めていく、というのを話した上で、いざ皆で寮に入ることに。

「広キレー!! そふあああ!!」

「中庭もあんじゃん!」

「豪邸やないかい」

「風呂・洗濯が共同スペース? 夢か?」

「男女別だ、おまえいい加減にしとけよ」

「はい」

「部屋はエアコン、トイレ、クローゼット、冷蔵庫完備……デスクと椅子もあるんだ」

「我が家のクローゼットと同じくらいの広さですわね」

まー色々いるな……リアクション。

喜ぶ芦戸、感心する瀬呂、気絶する麗日、息を荒げる峰田、個室に感心する耳郎、ナチュラルにセレブリティな感覚を吐露する八百万。

……半分くらいアレなりアクションが混じってたけど、まあとりあえず普通に楽しく暮らせそうな寮でよかったよ。

……と、私も個人的に気になってるところをきちんと確認、と。

「おお……いいねえ……! おい砂藤、来てみ!」

「うん? 栄陽院、何で俺呼ん……ああ、なるほど、こういうわけか」

呼ばれてきた砂藤と主に、恐らくは私らの縄張り、ないしホームグラウンドとなるであろう、キッチンを確認する。

いい感じに設備整ってるな……大人数用だから流し台も広いし、蛇口も複数ある。ここにも大きな、共用の冷蔵庫きちんとあるし、床下収納もある。

食器や調理器具も色々そろってて、しかもその収納スペースにはきちんと余剰スペースもある。後から色々買い足しても大丈夫そうだ。

大人数用の炊飯器や寸胴鍋、電子レンジやオーブントースター、網焼きグリルもある。……おい、中華なべや蒸籠なんてものものであるぞ、充実しすぎだろ。

「林間合宿で、お前ら2人を筆頭に、料理ができる面子なのは把握してるからな。予算は降りてたんで、その辺充実させてみた。使い方は任せるから、やるなら上手くやれよ」

「マジすか相澤先生！ あざっす！ やべーちょっとコレ腕なるわあ」

「確かに……おお、加熱設備、IHとガス両方あるじゃねえか、わかってるな……」

「IHは安全だし省エネだけど、火力使う中華なんかはガスが一番いいんだよなあ……なんか話してたらエビチリかチャーハン作りたくなってきた。中華鍋あるし」

「俺はちよつとシフォンケーキでも焼きたくなってきた。いや、オーブンあるし、タルトもいいな」

「どんな衝動だよ。横で聞いているだけで腹減ってくる会話やめてくれ2人とも……」

「とりあえず食生活は問題なさそうだな。なんか、料理は交代制らしいから……お前ら2人中心にシフト組んでいい？」

「任せろ」

振り向くと、尾白と瀬呂がなんかよだれが出そうなのをこらえてました。

わんぱくどもめ。期待しているがいい。

……にしても、まあ住む以上は当然と言えばそうかもしれないけど

……きちんと電気・ガス・水道通ってるんだな……この短期間で。

どっだけ迅速に業者動かして備品手配して工事したらこんな可能になるんだ……？　まだ見ぬプロフェッショナルの存在だろうか。

その後、今日は各自部屋を作つてろとのことだったので、夜までかかって荷解きから何からやった。各自の部屋の中で完結するようなことではあるが、普通に大仕事だし大変そうだったな。

当然途中で腹も減る。その頃には、私と砂藤が自発的にキッチンに立って(まだ料理当番のシフトとかなないしね)用意していたエビチリ、チャーハンその他中華中心のガッツリ系メニューで、皆存分に腹ごしらえしてもらった。

その後も各自続け……時刻は9時を回り、とつぷりと夜も更けたくらいになって、皆ようやく部屋が完成。

そっから何か『お部屋披露大会』……ないし『部屋王決定戦』なるものが始まった。

まあ、お互いに部屋を見せあつて色々褒めたり騒いだりしようつてだけの、テンション重視系イベントのようだった。

オールマイトのグッズだらけのオタク部屋と化している緑谷の部屋や、彼の中の中学二年生が大暴走している常闇の部屋、アジアンテイストになっている瀬呂の部屋や、畳が敷かれて純和風になっている轟の部屋など、特徴的な部屋もあれば……

飯田や尾白、砂藤みたいに、取り立てて特徴とかもない、普通な部屋もあり、

あ、でもピンポイントで特徴的な部屋とかはあるな。飯田の部屋にメガネがめっちゃ置いてあったり、口田の部屋にペットの兎がいたり。てか、ここペット可なのか。

手あたり次第つて感じで騒がしい上鳴の部屋に、逆にほとんど何もない障子の部屋、色々と暑苦しさ全開の切島の部屋……

あと、峰田の部屋はなんかヤバそうな匂いがしたのでスルー。

爆豪は『くだらねえ、寝る』つて不参加だったそう。

その後は女子の部屋に移ったわけだが……大体は普通と言うか、イ

インテリアの趣味に可愛い系、色鮮やか系の差はあれど、芦戸、葉隠、麗日、梅雨ちやんと、そこまで突拍子もない感じではない部屋がほとんど。

耳郎の部屋が楽器だらけですごいロッキンガール風味だったり、八百万の部屋にスペースの大半を占拠するお姫様ベッドが置いてあったりと、中々強烈な部屋もあつたけど。

で、別に何を狙ったわけでもないんだが……最後に私の部屋になった。

まあ、別に何も見られて恥ずかしいものはないので、見たければどうぞ、ということ……普通に招き入れたんだが、

「「なんか近未来っぽい!」」

「何だよその感想……まあ、言いたいことはわかるけども」

「つか、生活スペースってより、仕事場とかオフィスっぽいんだけど……」

私の部屋は、今大半のメンバーが叫んだのに加えて、耳郎がツッコミ?を入れた通り、なんか色々ハイテクあるいは機能性重視タイプの機材が並んでる上、レイアウトがオフィスっぽいので。

部屋の中央に、PCや各種周辺機器その他内蔵型のオフィスワーク用システムデスクを置いてある。何も置かれていないように見えるが、天板の一部が変形してPCのディスプレイとかキーボードが出てくるし、プリンターやスキャナも全部内蔵されてるのだ。当然引き出しには、アナログな文房具やら資料・教科書類も入っている。

その周辺も漏れなく全部機能性ハイテク家具で固めている。椅子は電動リクライニングチェア。背もたれの角度は自在に変えられるし、感触もふわふわで快適。座ってて全然腰とか背中が痛くならないやつ。マッサージ機能までついてる。

収納スペースには電動開閉・展開型キャビネットを使っている。普段は埋め込まれる形で壁と同化していて、ボタン一つで収納された服とか本棚とか、シユバツと伸びて出てきて取り出すことができ、用がなくなればまた引っ込むハイテク収納家具だ。

もちろん壁にホントに埋め込んだわけじゃなく、もともとクロー

ゼットになつてゐる部分に、ほほびつたりはまるようにセットしただけである。

ベッドも機能性ベッドで、寝心地抜群なのはいいとして、姿勢調整機能や照明、時計機能も内蔵されてるので朝スッキリ起きられる。時間になると顔の近くが明るく照らされる上に、ベッドがわずかに起き上がる、音が鳴るなど、ガッツリ起こしてくれる仕組みだ。

しかもこのベッド、修行でもお世話になつた『高圧酸素カプセル』に変形することができ、その機能を使うことができる。定期的に酸素タングの交換が要るけど。

窓にも電動ブラインドをつけてあつて、しかも特殊素材のため遮音機能もばっちり。外の騒音をシャットアウトしてくれる。

テレビはパソコンでも見れるが、壁際にホログラム式の投影装置がついているので、デスクのオーディオ機能と合わせて、場所を取らずに大画面で見れる仕様だ。臨場感も出る。

その他にも、証明とか電子ロックとか色々あるが、これらのハイテク器具の数々の操作は……

「OK 『アーファイ』、ブラインド閉じて」

——ウィーン…… ↑ ブラインドが閉じる音

「音声入力——!?!」

「やべえ、ガチでハイテクの巣窟だぞこの部屋……」

ガチでハイテク家具で固められたこの部屋に、なんか皆戦慄していた。

なおコレ、全部自社製品……『栄陽院コーポレーション』の製品である。一部、まだ発売前のものも混じっちゃいるが……義姉さん達に頼んで発注してもらつた。

貯まる一方である貯蓄を吐き出すつもりでいたんだが、なんか義姉さん達がプレゼントしてくれたんだよね。全部買うと100万や200万じゃ足りないくらいにはなつたと思うんだけど……なんか悪いなあ、また今度お礼言わないと。

そして今やって見せた通り、これらのハイテク家具にはすべて私の音声データを登録してあるので、ボタンやリモコン操作すらくなく動かせる。

その際のキーワードも合わせて任意設定可能なので、『AFY』から読み方ですべて『アーファイ』にした、という経緯があつたりする。……どうでもいいか。

そんなこんなで、私達の入寮1日目は無事に終わった。

なお、栄えある今回第1回の『部屋王』は、砂藤に決まった。

理由は、部屋で焼いてたシフォンケーキが美味しかったから。おい、部屋は!?

……次やる時は、私もガトーショコラか何か用意して待ち受けよう

……なんかますます『部屋』から離れていく気がするけど。

まあそれはまた今度として、今日はもう就寝……

……と言いたいところだが、まだやることがあるんだなあ……ふ

ひひ♪

(さあて……今行くから待ってるよ、緑谷……♪)

第155話 『仮免試験』へ追い込み

S i d e . 緑谷出久

「……………」

枕元に置いてある時計を見る。

現在時刻、朝5時56分。もう4分で、登録してあるオールナイトボイスの目覚ましが鳴る。

けど、それより前に僕は目を覚ましていた。

『デウス・ロ・ウルト』の修行の日々のおかげで、早起きする習慣は体に染みついてる。今じゃ、目覚ましより早く起きるのなんて、難しくないどころか、デフォルトと言ってもいいくらいだ。

起きて、着替えを終えて、必要なら寝汗その他を処理して……で、そのあたりでなり始める目覚ましを……せっかくなのでワンコールくらい聞いてから止めるのがいつもの朝のパターンだ。

……いや、折角のオールナイトボイスだから……ね？ 聞かないで止めるのももったいないというか。

この日もそのパターンなわけだけでも……

「……………あああ……………」

なんというか、目覚めが最悪だった。

いや、ある意味では最高なんだけど……状況としては最悪というか……

(な、なんて夢を、僕は……いや、別にアレ僕のせいじゃないし、そもそも夢と言っているのかも微妙なアレではあるんだけど……はっ！) その直後、はっとして僕はパジャマの下を確認する。

夏の夜つてこともあり、寝汗はけっこうかいてるけど……それ以外は普通だ。

……あの時みたいに、パンツの中が大変なことになってたりは……しない。

よ、よかった……見た夢が夢だったから、どうなったかと……いやだから夢じゃないけどさ、厳密に言えば。

何のことかって？ ……例によって、栄陽院さんなんだよね。

『神野区』での戦いを経て、栄陽院さんは『オール・フォー・ワン』を始め、様々な『個性』を使えるようになった。

その中には、敵から奪ったものもあれば、もともと素質を持っていたものもある。

その一つが、栄陽院さんのお父さんの『個性』である、『同調』……それが恐らくは『変容』して誕生した能力だ。

これを使つて、僕と『個性』を共有したり色々できるみたいなんだけど……この『個性』には、まだ他の利用法があった。

その一つが……昨日の夜に見たやつで……

明日からまだ色々やることがあるつてことで、僕は『部屋王決定戦』の後、すぐに部屋に戻つてベッドで眠つただけど……いや、眠つたはずだったんだけど……そのしばらく後、ふと目を覚まして……目の前の光景に仰天させられた。

だつて……

「え、栄陽院さん!?! な、何でここに……!?!」

「! おー、上手くいったか……よし。にひひ、ちよつとサプライズもかねて遊びに来たよ、緑谷」

「あ、遊びに来たつて……い、今もう夜中だよ!?! ていうか、ここ男子の部屋……」

何そんな、入寮初日からとんでもないことしてるのさ!?! 一応規則で、夜中の男女の部屋の行き来は禁止されてるよね!?! 破るとしたら峰田君だけだと思つてたよこの規則!

は、早く見つかからないうちに帰らないと、問題に……ていうか、僕の方にも別の問題が発生するから!?! 主に今君がまたがつて自重で圧迫してるあたりに!

こ、ここは雄英の寮であつて、僕らが暮らしてたタワマンとは違うんだよ!?! あそこではまあ……言つてしまえばフロア丸ごとプライベートスペースだし、合意の上だし、なんならアナライジユとか承知してたというか公認と言うか……講師であるターニャさんも『強くな

りたくば食らえ』な方針だったからよかったけど……ここでそれはま
ずいよ!?

……いや、正直全寮制始まるって聞いた時に、『これからは前みたい
に頼めないな』ってちらっと思わなかったわけじゃないけど! この
状況が嬉しくないわけじゃないけど! デメリットが果てしなく
……ああ、相澤先生が冷たい目で『除籍』と宣告するのが見えるよう
で……

「大丈夫だって緑谷。コレ、夢だから」

「……へあ? ゆ……夢?」

と、告げられた言葉にきよとなる僕。

「そう、夢。今、きちんと緑谷の体も、私の体も寝てるよ……ただ、私
の『同調』の応用で、寝てる間の精神をリンクさせてるだけ」

聞けばどうやら……『同調』はそんなことまでできるらしく、今見
えているこの光景は、真正銘の夢……いわゆる明晰夢って奴なんだ
そう。夢であることを自覚して見る夢。

一説には、自分の夢をコントロールする技法っていうのは、それこ
そ超常以前から研究されてきていた、っていうのは聞いたことがある。
精神トレーニングの一種で、狙った夢を見ることによって、寝て
る間にストレスを上手いこと発散したり、そういう方面の研究だった
ようだ。

まあ、実用に至ったものなのかどうかは知らんけど……そういう要
領で、栄陽院さんは自分と僕の夢をつなげ、こうして夢の中にお邪魔
している、というわけらしい。

「と言っても、それ専門の『個性』とかじゃないから、夢の内容とか細
かく操れるわけじゃないんだけどね……ホラ、今見てる景色、この
大枠は多分、緑谷の夢でしょ?」

「え、ええと……あれ、本当だ。ここ……寮の部屋じゃない」

よく見ると今僕が寝ているのは、『デウス・ロ・ウルト』中に寝泊ま
りしていたタワマンの部屋、そのベッドだった。もう引き払ったはず
の。

僕……ここに居る夢を見てたのか? もともと。

そして、栄陽院さんは『繋げる』以外は夢にほとんど干渉できない、となるほど、だから彼女は身一つ（服は着てるけど）で来て、僕の夢の中にいる現状なわけだ。

なんか、そう理解すると興味深いというか、不思議な体験な気がするな……とか思ってたんだけど、『それはそれとして』とニヤニヤする栄陽院さん。あつこれ何か企んでる顔だ。

「そういうわけで、コレは夢です。緑谷」
「うん」

「夢の中でなんて、誰がどこで誰に何をしようが、誰にも文句は言われ
ないし問題ありません」

「うん……うん？」

「さて、緑谷。それを踏まえて……」

…… どうする？

……その後は、察してください。

『あーさーがー、来た！ あーさーがー、来た！ あー（カチツ）』

丁度なり始めたオールナイトボイスを、僕は、ちよつぴりの罪悪感
とうしろめたさと共に、止めた。

……さあ……うん、朝だ。朝なんだ。あれは夢だったんだ。

何もやましいことなんかしてない。なんか夢だったとは思えない
くらい気分的にはスッキリしてるし、そもそも『繋がってる』結果と
して彼女に思いっきり処理してもらったわけなんだけども……合意
の上だし、そもそも彼女は僕のだから問題ないはい解決。切り替えて
行こう。

☆☆☆

共同生活の中でも、緑谷への『ご奉仕』のめどが無事についてほっ
としている私ですハイ。

いやー……この『個性』の因子を受け継がせてくれた父さんには感謝だわ……やってることは不純異性交遊だけど。

許せ。娘とそこご主人様の幸せのためである。

いや、でも実際緑谷もほら……ここんところご無沙汰だった分、やっぱり色々和我慢してた部分はあるみたいでね？

夢じゃなかったら、ちよつとその……確実に朝に疲れが残るレベルでいろいろやっただというか、お相手させていただいた。

緑谷ってほら……普段はオドオドしてるけど、一旦スイッチ入ると結構獣だから……うん……。

いやまあ、疲れとか腰痛その他は『オーバーホール』でいくらでも直せる（誤字にあらず）けど……ベッドとか、匂いとか、色々……

鮮明に描写すると年齢制限必須なのでぼかすけど、流石の私でも『どんだけたまってたんだ』って言いたくなるくらいに……うん。

もしこれが現実だったら、布団も体も絶対洗わなきゃいけないし換気も必要だけど、シーツや布団は洗濯機（共用）に放り込むのが躊躇われるレベルだし、換気扇回したら吐き出される匂いで絶対何があったか気づかれそうだし、そもそも風呂場共用だから……あのカツコと匂いで利用は……うん、無理だ……

繰り返しになるが、ホント夢でよかった。

まあ、夜のことは夜のこととして、今は朝だ。切り替えて行こう。

トーストと白いご飯という2種類の主食と、それにそれぞれ合うおかずを栄養バランスも完璧で用意し、鉄壁の布陣でA組の腹ペコ共を迎撃した私と砂藤は、見事完全勝利を収めた。

「うーん……作った分を全てキレーに平らげられた、この空の器の美しさよ」

「料理人冥利に尽きる瞬間だな。いや、俺ら料理人じゃねーけど」

「あー、食ったー……ご馳走様……」

「やべえ、家で食うより数段美味しいし健康的だわ……コレ毎日食えるとか普通に天国じゃね？」

「おいコラ、切島、瀬呂、近いうちにちゃんと生活班とかのシフト組ん

で手伝わせるかな？　いくらなんでも私と砂藤だけに全部やらせようとするなよ。」

「わかってるってそれは。いやでも実際コレ、1日2回の食事が楽しみになるよなあ……」

「2回……ああ、そうか、お昼はお弁当とか学食だし……はっ!?　ねえ永久ちゃん!?　食事当番って……頼んだらお昼の弁当とかも作ってくれる感じ!？」

「落ち着け葉隠。あーそっか、それどうするかって問題もあるよな……昼、学食派と弁当派、両方いるよな、このクラス。どうする砂藤?」

「いや、さすがにそこは各自用意にするしかないだろ。そこまで俺達で……それこそシフト組んでも作るのは難しいだろうし。自分で作るか、学食で食うか、あとは買うか……そんなところか?」

「だよな、流石に手間と時間がな……ちなみに砂藤はどうする予定?」
「そうだな……夜、晩飯の後なら、ほぼ誰もキッチンに使わないだろうし、前日の用意して自室の冷蔵庫に入れておいて、朝それを弁当箱に詰めてく、つてのが安定じゃねえか?」

「奇遇だな、私も多分その方向だろうなって考えてた。あるいは、朝のシフト入ってる時に……作る人の特権でちよつと詰めてくか」

「あ、それいいじゃん永久。ねー、あらかじめ多めに朝食作ったりして、希望者が詰めて持つてくとかにすればよくない?」

「それでもいいかもだけど……それだと、いただきますの前に、弁当の分を取って詰めといた方がいいな。今日みたいにキレーに平らげられるパターンもあるだろうし」

「ただ作ってもこいつら残さず食うからな。いつそ気持ちいいほどに。」

「まあ、同じ種類の料理であれば、量を用意するだけならさほど苦労はしないんだけどさ。」

「それによ芦戸、そういうやり方なら楽でもいいかもしれないけど……必然的に朝昼同じメニューになるぜ?　まあ、そういうの気にするかどうかは人それぞれだろうけどよ」

「あー、なるほど……ううむ、奥が深いな、ベン・トー問題……」

「皆！ 昼食の話題も大事だが、朝の時間は有限で貴重だぞ！ 遅刻してはいけない、皆で協力して後始末をしよう！」

と、飯田の号令でひとまず雑談は切り上げ、動き出す私達だった。そうそう、今日登校日だもんな。遅れられないし、準備せんと。

さて、そんなこんなで私達は今日、雄英のトレーニング施設の1つ……『TDL』に来た。

なお、読み方は『トレーニングの台所ランド』らしい。

USJ以上に危険なので絶対に別な読み方をしてはいけないと思っただ。

セメントス先生考案の施設であるここは、床全面がコンクリでできている、生徒1人1人に合わせた地形やモノを用意できる。林間合宿では、ピクシーボブが似たようなことやってたな。

土よりも柔軟性はないが、強度があるから色々やれることは多いだろう。

ここでやるのは、まあ早い話が、林間合宿の続きと言うか、延長上と言うか。

『個性伸ばし』と『必殺技作り』の続きである。もう既にできている者は、それらに磨きをかけて完成度を上げたり、それを組み込んだ戦術何かを考える時間になるそうさ。

A組は半分くらいはその水準に達しているので、残り半分がそれに取り組むのと……それから、考案した必殺技や戦術と並行して、コスチュームの調整も進めていくように、とのこと。

指導には、さつき言った通りセメントス先生に加え、『分身』の個性を持つエクトプラズム先生がついてくれるとのことだ。

林間合宿では、ピクシーボブやパンドラス・アクターがやってた役回りだな。敵キャラとしてのバリエーションはないけど、技能は本人と同じな上に、1人1人が指導もしてくれる。最悪、危険な攻撃を当てても大丈夫……なるほど、『磨き上げる』という視点では最高の人材だ。

これらのメニューを駆使し、『仮免試験』まで残り約1週間の夏休みは……そこでの合格を確実にするための、圧縮訓練になる。

なるほど、こりや……気合入れていかないとな ……!

と、相澤先生の説明を聞いて、皆思ってたところだったんだが、さあいざ始めるぞって段階になって……私と緑谷だけが呼び出された。『ちよつと残れ』って。

何か、注意事項あるみたいで。

「さて……緑谷、栄陽院。お前ら2人についてだが……『仮免試験』受験にあたって、確認しておくことがある。まず緑谷……お前、普段の増強型の『個性』以外に……また使える技が増えたる？ しかも聞いた話だと、栄陽院と『個性』や『技』を共有するんだったな？」

「あ、はい……神野区のアレ以来、できるようになりまして」

「すでに説明したかと思いますが、アレは多分ですけど……私と緑谷の潜在的な『個性』に共通、あるいは類似のものがあってのものがあるからかと……まあ、確信はできないんですが」

「前例のないことだからな、それは仕方ない。まあ……お前らの場合、あれもこれも前例のないことだからな……はつきり説明しろって方が難しいのかもしれないねえし」

と、先生。もともとそこまで期待はしてなかったのかな……はつきりわかるとは。

緑谷と私の『個性の共有』。これについては、隠せるものでもないの
で、普通に公開というか、学校内でも秘密にはしない方針である。

その理由については……オールマイト達と相談の上、ちよつと小細工したが。

「オールマイト先生の紹介で、デヴィッド・シールド博士に解析をお願いしたんですが……自分と緑谷の体内に存在する『個性因子』の中に、極めて性質が近いものがあることが確認されました。そしてその『個性因子』が、『同調』というそれのものなので……この現象は、それに誘発されたと考えられるそうです。私の実の父親の方の『個性』がそれに当たりますが……」

「僕の家系には、知ってる限りではそういった『個性』の持ち主はいな

いので、結局何とも……もつとさかのぼったところからの隔世遺伝か、あるいは……もつと極端な話、僕と栄陽院さんの父方の家系が、遠い親戚とかなんじやないか、という推測になるそうで……」

「とはいえ、結局推測どまりなんですけどね……確かめる手段がないんで」

「なるほどな……まあ、推測でも理屈がわかってるなら……危険なものでないなら問題ない。元々お前、『よくわからないけど使えるから使ってる』って技も多いしな……少々『普通』とは異なるが、それも立派な力だ、使いこなせるようになって」

「はいー」

と、緑谷への話はこれで終わりのようだが……もう一つ、私にも、

「で、栄陽院。お前にはまあ……連絡事項というか、注意だな」

「注意……すいません、私何かやらかしましたかね？」

「いや、むしろ『やらかさないようにするための注意』だ。身構えなくていいし……単純な内容だよ。お前、神野区での一件で、『オール・フォー・ワン』……『個性を奪う個性』を使えるようになったろ？」
「ええ……もつとも、そつちも緑谷のアレ同様、よくわかってないメカニズムですけど。これもシールド博士に相談したんですが……こつちはホントに、まあ現段階ではですが、何もわかんないよう……半ば個性事故みたいな扱いになるんじゃないか、とまで言われませんでしたね」

もちろん、事情を知ってるデヴィッド博士が色々適当に言ってくれて、提出するための書類もそんな感じで上手いこと作ってくれてるんだけどね。

ただ、あながち嘘でもないんだよな。『オール・フォー・ユー』関連のところを隠している以外は……ホントに何であのナインが、AFOの『個性』を持っていたのかとか、むしろ本気で私のことを調べて解析しなきゃいけない、ただし情報の扱いにはかなり慎重になる必要がある課題だそうで。

「まあ、だろうな……それはいい。言いたいことは一つだ。まあ、わかってると思うが……お前、『オール・フォー・ワン』は原則として

使用禁止な。学校の内外問わず」

うん、だよ。ヤバすぎるもんね……普通に考えて、『個性を奪う個性』なんてもの。

ヤバい『敵』が使ってたからってのもあるが……性質がそもそもヤバいだろう。これ。

「でしようね。ちなみにそれ、あー、気が早いのは承知で聞きますけど……仮免取ってからも同様ですかね？」

「当たり前だ。恐らくだが、卒業してプロヒーローになってからも同様だろう。まあ、ある程度なら自己裁量になる部分もあるかもしれないが……それでも、他人から『個性』を奪うなんて能力……この『個性社会』じゃ劇薬もいいところだ。使うにしても色々と規制がつくだろう」

「あーまあ、真つ当に生きていくうえでなら、まず必要に何かならない……というか、なっちゃいけない能力ですしね。使うとしたら……『敵』から『個性』を奪って無力化するとか？ あるいは、きちんと後で返すことを条件にとか……」

「使用条件の想定すら難しい個性ってのも中々ない。難儀なもんだ……まあ、要はお前がきちんとそのへん良識と節度を守れば問題ない話だ」

「そうですね。ちなみに、それ以外の……『神野区』でぶんどった『個性』は？」

「それらについては使って構わん。まあ、色々会議でも意見は出たが……有効利用できる可能性や余地があるなら、むしろ使いこなして力に変える方向で行くべきだった。ただ、使える『個性』はきちんと把握しておけよ」

「あ、はい、了解しました」
つまり『オール・フォー・ワン』はそういう余地はないってことですねわかります。

「それと……ラグドールの『サーチ』同様、『個性』を奪われた被害者が判明している場合は、返却する必要がありそうだ。これについては今調査中だそうだが……そういうわけだから、全部は手元には残らん

だろうか……返せるんだよな？」

「あ、はい、問題なく」

真幌ちゃん達のお父さんの『細胞活性』とかもそうだな。

手札である『個性』が減るのは、正直言えばちよつと残念だが……コレがなくて困ってる（かどうかはわからないけど）人もいるんだろうし、それなら元の持ち主がきちんと持ってた方がいいだろう。緑谷も同じようなこと言ってたし……喜んで返却させてもらうつもりだ。

返却の必要がない『個性』……『気象操作』とか『オーバーホール』についてはもらっちゃっていいそうだし。

まあ、返却先がヤバイ『敵』だもんね。わざわざ力持たせてやるよりは、私のものにしとけていう……大人たちの打算もあるんだろう。せつかなのでありがたくだいておくとする。

この他にも……持ち主不明の『個性』や、持ち主が『敵』だった『個性』、持ち主は判明したものの、持ち主が受け取りを辞退した『個性』や、持ち主がすでに死亡している『個性』なんかは、そのままもらえる見込みらしい。

一部、喜んでいいのか微妙なものも混ざってるが……まあいいとしてよう。

よし、じゃ、始めますかね……『仮免試験』に向けて、林間合宿から始まった修行も大詰めだ。

第156話 仮免試験・1次

あつという間に訓練の日々は過ぎ……『仮免試験』当日。
場所は、国立多古場競技場。なんか、緑谷や爆豪の家（実家）から
近くらしい。

ここを試験会場として、仮免試験が実施されるわけだが……当然ながら、
雄英以外にも、色んな他の学校から来てる人達がいるわけで。
その中でも、『東の雄英、西の士傑』と並び称される『士傑高校』と、
到着早々に絡むことになったりして。

さらにその後は、相澤先生の昔馴染みらしい『M.S. ジョーク』と
いうヒーロー……が、教師として受け持っている『傑物学園高校』つ
てところの人達とも交流したり。

……なんか、爽やかすぎて笑顔が胡散臭い人とかいたな……いやま
あ、初対面の人にそんな変な偏見持つのはよくないかもしれないけど
も。

あと、なんかその『士傑』からの人で……変わった経歴を持つ人が
いた。

いきなりうちのクラスの円陣に乱入してきた、かなり大柄な坊主頭
の……いかにも体育会系、つて感じの男子だった。その場のテンショ
ンとか勢いで全部持っていきそうな感じの。

瀬呂曰く『切島と飯田を足して二乗したような』奴だったが……名
前は、夜嵐イナサ。

昨年の雄英の推薦入試の時に、トップの成績で——つまりは轟すら
抜いて——合格していたにもかかわらず、なぜか入学を辞退したとか
なんか……まあ別にいいけど。何か事情あったんだろ。

向こうの方では、なぜかM.S. ジョークが相澤先生にプロポーズし
ながら爆笑してるが……他校のヒーローや学生にもなかなか濃い奴
多いな……

「えー……では、仮免の奴を、やります。あ、僕、ヒーロー公安委員会

の目良です。好きな睡眠はノンレム睡眠……よろしく。仕事が忙しくてろくに寝れない……人手が足りてない……眠たい！ そんな信条のもと、説明させていただけます……」

「他に人いなかったのか、説明役っていうか、司会進行……」

「まー……今まさに『人手が足りてない』つつてたしな……仕方ないんじゃない？」

と、瀬呂は返すが、だからってあんな、適材適所って言葉に真つ向から喧嘩売ってるような人選せんでも……思いつきり演台に寄りかかりながら話してんぞあの人。どんな信条だよ。

今私達は、コスチュームに着替えて、競技場内で開会式やら内容説明を受けてるところだが……いやまあ、壇上で現代社会の闇を隠そうともしないブラック勤務の被害者は、まあいいとして。

人、超多いな……さつき聞いた話じゃ、今日の受験者、1500人超えてるって話だし。

それがこんなひとところにまとまっていれば、まあ……当然人口過密状態になるわけで。ちよつと動くだけで隣の人とぶつかりそうな感じだ。

なお、それを利用してぶつかろうとしてくる峰田は、男子に頼んで前後左右を男子で囲んでもらった。全く油断も隙も無い。

で、今あつた説明だと、その1500人のうち……第一次試験で合格できるのは、なんと上位というか、条件を満たした先着100名だという。会場にどよめき走る。

「合格率5割を切る……どころじゃねーじゃん。えらい倍率だな……15倍か」

「まあ、大丈夫じゃね？ 私ら雄英入る時に300倍競り勝ってるし」「けろ、それとこれとは違うと思うわ。油断大敵よ」

さらに続く説明で、各自体的というかターゲットをつけて、それ目掛けてボールのぶつけ合いをする、というルールが周知された。ターゲットはボールをぶつけられると点灯し、3つ全部点灯したら『倒された』ことになり、失格。

2人『倒した』者から勝ち抜け、とのことだ。

で、この試験の本質……学校同士の対抗戦になる、と即座に見抜いた緑谷により、一塊になって協力しよう、という方針で動くことになった。先着順なら、同校でつぶし合いはない……最もだ。

ただ、相変わらず協調性に難ありな爆豪が早速離脱。それについて切島と上鳴も離脱。

それとこっちはきちんと戦略考えてかもしれないが、轟が離脱。密集してちやかえって力を発揮できないからって。

まあ、あの連中なら大丈夫だとは思うけども。性格アレだが、強いし。

それに、私達の方だって、必ずしも余裕があるわけじゃない。

これも緑谷の予測……というか、私や、その他にも大勢同じこと考えてる奴いると思うけど。

試験開始までのカウントダウンが始まり、それがゼロになった瞬間

……

(そら来た)

「杭が出てれば……そりゃ打つさー!」

固まつてる私ら雄英に向けて、他校から一斉攻撃。

まあ、『体育祭』のせいで『個性』はぼつちり割れてるし、実力的にも野放しにしとくと危険なのが揃ってると言える——自画自賛失礼——学校だしな。そりゃ標的になるだろう。

ただ、そのくらいは皆わかってるし、即座に反応して防御する。蹴り飛ばし、酸で溶かし、『もぎもぎ』やテープで絡めとってくっつけて……etc。ちなみに、私は単純に『バリア』で防いだ。

脱落者ゼロ……どころか、1人としてポインターに当たってすらない。

その後も、様々な『個性』を駆使して私ら雄英を仕留めようとあちこちから狙ってくるが、全部防いでいる。

暫くそれが繰り返された後……よおし、来たな。

「離れるー! 彼ら、防御は堅そうだ……割るー!」

と、駐車場で爽やかスマイル(疑)で交流してきた、傑物学園高校の人が、何やら地面に両手を押し付けるようにして構え……次の瞬

間、

「最大威力……『震伝動地』!!」

そこから発生した『揺れ』が地面に伝わり、とんでもなく広い範囲を、言葉通り『割る』。

そのせいで、いくらなんでもまとまって立ってなんかいられなくなり、狙い通りに、私達雄英は分断されて少数ずつの集団に分かれ……纏まっている他校からは格好の的になる……

……と思つてたんだろが……

ところがぎつちよん、そうはいかないんだよなあ。

——バツン!!

「……っ……!?!」

と……割ったはずの地面の大部分が、一瞬にして『修復』されてしまったことに、驚きを隠せない様子の、傑物のスマイル君(名前何だっけな)。

他の連中も……傑物の思惑が外れたことにか、はたまたいきなり割れた地面が、これまたいきなり直ったことにか、驚いている様子。

……まあ、誰が何をやったかなんて言うまでもないけどね。

「ナイス、永久!」

と、芦戸の言う通り……私だよ、犯人は。

私の『オーバーホール』で、『分解』して『修復』したんだよ。

『必殺技』の訓練の追い込みの中では、皆の自主トレにつき合つて、セメントス先生の代わりに『TDL』の地形操作とかやって、慣れて、鍛えまくつてたからな。この程度、造作もない。

いきなり思惑を外されてご愁傷様だけど、まだ終わらないからね。

「さて……作戦なのはわかるけど、こんな危ないことを遠慮なくされたらさあ……こっちもガチでやるしかないじゃんね?」

「お、何栄陽院、アレやる気?」

「ああ……注意が入らないとこ見ると、このフィールドぶつ壊そうが

とまあ、そんな感じで皆さん、ひるまず、むしろやる気出してこの『風雲英雄城』を攻略するため、次々と扉や、堀を飛び越えて突入してこようとするが……

(ヤーて……それはどうでしょうねえ……?)

ことごとく狙い通り。楽しくなってきた♪

覚悟しなよ先輩方(年数的な意味で)……ここから先、私らの独壇場だぜ……?!

そもそも私が何で、こんな派手で……しかし、この試験の場においては、目的その他を考えればさして意味もない『城塞』なんてものを作ったのかと言え……もちろん、狙いあつてのことだ。

大前提として、この試験は、守って閉じこもってれば勝てるものじゃない。

きちんと攻めて、相手の『ターゲット』にボールを当てる必要がある。閉じこもっても、他人がよそで戦って抜け出ていくだけだ。

加えて、この試験……的当てみたいに考えてる人が多いみたいだが、こんなもん投げてても当たるかと言われれば……ねえ。

むしろ、そんな射的の技術よりも、逃げられないように抑えた上で、確実に当てる……というか、ボールを押し付けるなり、ボールで殴るなりすればいい。というか多分コレ、そういう試験だろ。

だったらそうすればいいという話にはなるんだが、ここでやつぱり出てくるのが、数と地形の不利。

全国生放送の『体育祭』により、それぞれの『個性』が割れており、実力もあるがゆえに『出る杭』として狙われる英雄。やられる前にやれとばかりに、他の学校からまー狙われる狙われる。

例年その『英雄潰し』とやらにやられて落ちる生徒が何人かいるらしい。

混戦状態になればなるほど、どうしても『事故』は起きやすくなる。戦場で流れ弾に当たるように。

だからこそ、それを避けて……同時に、確実に『獲物』を取るためにコレを作ったんだ。

例えば、こう。

「こんなもんで俺達から隠れられるつもりかよ！」

「こんななんひとつ飛びだぜ！ 見つけて追い詰めて当て……ああああああああ!!」

とまあ、軽業系、あるいは飛行系の『個性』を駆使して、堀や塀を飛び越えてきた連中を……私が『気象操作』で暴風を起こして叩き落とす。

塀の内側に落下した彼らだが、そこにスタンバイしていた瀬呂と峰田が、『テープ』と『もぎもぎ』で速攻で拘束し、城の中に連れて行く。

「なっ、なん、コレ……は、放せ、放せえ！」

「ちよっ、何コレ、何で私達拉致られ……え、マジで何!？」

「やめろっ、雄英！ ぶっとばすぞ！」

「うへへへ……大丈夫、何もしないよオ、お兄さん達とちよつと奥へ行くうねうへへ……」

「ちよっ、このちっちゃいのガチで怖いんだけど……ねえ、大丈夫だよね雄英!?! ねえ!?!」

「峰田、お前やめろ顔やべえから……ああ、大丈夫すよ、変な真似はしないっすから……脱落は覚悟してもらいますけど」

「あ、ならよかつ……え、いや待ってダメやっぱよくないって。ちよっ、放して……た、助けてー!」

はい、あんな感じでがちり拘束の上、回収されていきます。

あとあのエロ葡萄……回収班に入れない方がよかつたなやっぱ。

……つと、そんなことを言ってる間にまた別な獲物が。

「ちっ、対策バツチりってわけかよ……なら正面突破だ！ 地に足着けて確実に攻めるー!」

「ああ、力なら負けねえ！ 閉じこもってなん——」

——パカッ ↑ 落とし穴が開く音

WELCOME。八百万特製の麻酔ガスがたっぷり充満してる落とし穴へようこそ。

はいこれでまたさらに生贄確保、と。

こんな感じです。この『風雲英雄城』は、籠城のための城じゃない。攻めて来た連中をはめて落とすためのトラップダンジョンだ。

そして同時に……私達A組の力を最大限発揮できるように調整した、闘技場でもある。

例えば、城の中の一室は、まるで森、あるいはジャングルジムみたいに、縦横に突き出て飛び出すように柱が設置されている部屋なんだが、

「尾空旋舞！」

「があっ!？」

「ちつくしよ、このサル野郎、あっちこっち飛び回ぐはっ!？」

「だめだ、逃げろ！　ここ完全にアイツのホームグラウンドだ、動きが立体的過ぎて追えねえ！」

「逃げろっつったってお前、扉があかねえ……っっていうか扉なくなっただけだ!？」

とまあ、その部屋では柱を足場として生かし、尾白が縦横無尽に飛び回って敵を倒していく。

なお、迷い込んだ哀れな獲物達には、退路は残していません。戦いが始まった時点で、私が『オーバーホール』で入り口は消しましたので。

こんな風に地形が味方になってる場所であれば、今の尾白の錬度なら、たかが10人程度沈めるのはわけない。

それに加えて、

「ちつくしよう、まずは守りを……ん？　おい、あいつどこいった？」

「え、さっきまでそこに……いない!?　まさか、はぐれた!？」

「バカいえ、こんな閉所でどうやって……しかし、今ここではぐれるのはまずい……おい、探すぞ！　早いとこ合流して……おい、返事を……!?!　い、ねえ……だと……!?!」

その尾白を陽動に、スニーキングで影に隠れて行動する梅雨ちゃんと葉隠が奇襲で沈めていく。

葉隠はもちろんのこと、必殺技『保護色』を体得した梅雨ちゃんの

スニーキング能力もまた脅威のレベルになっているので、気付かれずに近づいて、静かに仕留めていく。

見ていないうちに、1人、また1人と減っていく光景は、割と見てホラーだ。

さて……それでもムキになって攻め込んでくる奴に、漁夫の利を狙って侵入を試みる奴、まだまだ獲物はいる。

あと、城作る段階で内部に巻き込んで閉じ込めた奴なんかも実は結構いる。

『壁の中にいる』状態にはならないようにだけ注意したけど……何人かちよつと危なかった。

なのでどんどん行こう。テンポよく行こう。

敵が誰もいない通路を通っている時に、曲がり角で向こう側を警戒して止まっている時、

——ドツクン!!

「「ぎゃあああああああ?」」

何の前触れもなく、壁の向こうから響いた耳郎の音波攻撃が直撃して全員気絶。そのまま捕獲、とか。

八百万に協力してもらって、この一部分だけ、音波をよく通す素材で作ってたんだよ。曲がり角なら、待ち伏せを警戒してほぼ確実に止まるから、そこを突けるように。

「よっし、3人捕獲……と。んじゃ、運ぶの手伝って、口田」

「……………(こくり)」

また別な通路では、

——ガシヤン！ ガシヤン！ ガシヤン！

「なっ……い、いきなり壁が！」

「ちくしょう！ 閉じ込められた……」

「おい、大丈夫か！ くそっ、何のつもりだ一体、こんな壁……」

「そりゃもちろん……こういうつもりだよ！」

「「!?」」

『セントルイススマッシュ!』

『シユガーラッシュ!』

『深淵闇駆・夜宴!』

『ぐわああああつ!』

こんな風に、壁で区分けして各個撃破とか。

さらにまた別な通路……縦方向一直線に長い通路なんだけど、そこに可燃性の粉塵を満たして……

——ドツゴオオオオオオン!!

『ぎゃああああああ!』

通路そのものを砲身に見立てて『粉塵爆発』で全部吹き飛ばしたり、

あるいは、ちようど近くにある他のエリアにこっそりパイプラインをつなげて……

『う、うわああああ!』 な、なんだこれ!』

『み、水?!』 やばい流されゴボゴボ……』

そこから水を引っ張ってきて水攻めにしたり。

そのまま溺れないように必死で水面より上に顔を出させたところ……そこに麻酔ガスを流したり(溺れないようにちゃんと配慮はしてるよ)。

水洗トイレよろしく流され、あるいは盛大に吹き飛ばされ……あえなく気絶した面々は、中庭部分に排出されるようになっていく。

死屍累々、中庭に力なく転がる面々を、回収班がよっこいせと運んでいく。意識なんてとつくに失われていきますとも。

あ、ちなみに今、私は、戦場全体を俯瞰するために、城の屋根……天守のあたりに立っているのです、戦場全体がよく見える。

使える『個性』の1つである『個性看破』によって、相性のよさそうなのを選んで各種トラップゾーンに送っているのだ。確実に狩れるように。

まあ、『風雲英雄城』を作る前からそうしてはいたけど、ヤバそうな

『個性』を持つてる奴がいなかったか、確認して対策するため。

ついでに言えば、さっきの傑物高校の爽やかスマイル君の一撃もこれで見破ったというか、気付いていた。『個性』が見えると、やろうとしていることも予想できて楽でいいな。

ちなみにそのスマイル君は、さっきもう1回『割ろうと』してたけど、この城は何気に耐震構造きっちりしてるので（思いつきり彼対策だが）さして揺れなかったし、破損箇所は速攻直したので、その後は諦めて立ち去っていった。賢明な判断である。

そんな中、ふと気になつたらしい耳郎（索敵担当）と八百万（参謀兼素材作成担当）が、

「しかし栄陽院、いつの間にこんな、何だろ……戦略拠点みたいなのアイデア練つてたの？ しかも、瀬呂とか峰田とか……何人かはコレが存在知ってたみたいだったし」

「フォーメーションとして考えて、練習や打ち合わせでもしてらしたのですか？」

「いや、実はこの城さ……こないだ暇つぶしに皆でやってたマ○ンクラフトで作った奴なんだよね。結構な力作が出来上がったなってみんなで言ってたんだけど、ふとコレ、現実でも使えるんじゃないかってその時話題になつて……で、実際にやってみた」

「マジかよ」

驚きと呆れと感心が入り混じった器用な表情になっている耳郎。マジなんだよ、これが。

その時にノリノリで皆で武装とかトラップとか考えてさ、だから作った私以外にも、何人かこの城の構造理解してる奴がいて、即座に連係プレーに移れたわけ。

その時、ふと下の方を見ると、巨大な牛に変身する『個性』の持ち主が、その巨体で『風雲雄英城』に突っ込んでくるところだった。この城ごと壊す気かなアレ？

まどろっこしいことはやめだとも言いたいのか、はたまた捕らわれた仲間を助けたいのか。

まあ、どつちにせよ好き勝手させるわけにはいかないが。

外側の門を破り、今まさに城の壁をえぐって砕いて突っ込もうつて時に……

『撃龍槍』！ 発射ア！』

——カラカラカラ……ズドオン!!

『ゴげっフツ……ッ!?!』

入り口のすぐ上の壁に隠して設置しておいた、体が巨大な『敵』を相手にした場面で活躍できるように設置しておいた、巨大な槍……『撃龍槍』が発射され、直撃。突っ込んできた生徒はひっくりかえった。

某ハンティングアクションゲームなら、BGMが切り替わる瞬間である。

その受験者はそのまま気絶したようだが……あ、大丈夫。先はとがらせてないので、ぶっ飛ばすにとどまつてるから。多少の怪我は許せよ？

しかしあれだな……今の牛も含めて、この、眼下に広がる死屍累々の光景……

「ふははははは！ 見ろ、人がゴミのようだ！」

「ここで言うんかい……」

「ええー……いやいやいや、ちよつとコレ今回の雄英ヤバすぎだろ……どんな教え方してんだよ？」

「体育祭の時にも言った気はするが……俺は何も。あいつらが火いつけ合つて、自主的にガンガン向上心燃やしてんだよ。……おかげでむしろ、合わせるこつちが大変だ」

そんな、呆れの混じった声で相澤先生とMs. ジョークが言い合つてるのを聞いていたが……その直後、城の内部を通しておいた伝声管を通して連絡が入った。

トラップその他でとらえた人数が40人を超えたそうさ。

なので、監禁ルームに全員で行って、拘束して転がしてある連中のターゲットを、各自ポンポンと事務的にボールで叩いてクリアしていく。楽なものである。

……あ、でも爆豪達が別行動だからその分の人数余るな、忘れてた……まあいいか、普通に開放しよ。もう要らんし。

で、その爆豪達や轟も、行った先で同じようにクリアできたらしいことをその後知った。クリアした人がいく控室に入っていくのが遠目に見えたから。早いな、流石だ。

ここまでの時間、実に僅か10分弱。この時間で、なんと雄英1年A組、全員1次試験を通過しました。よかったよかった。さあ、私もさっさと会場出て控室に移ろう。

あ、でもその前に……八百万に頼んでレコーダー作ってもらって、わざわざ用意していた最後の仕掛けもせつかくだから起動させて、と。

私達が全員外に出ると同時に、もうネタでしかないその最後のギミックを発動。

やっぱ、こういうイベントとかをダンジョンでやるには……コレが付きものだろう。

『風雲英雄城』にいる皆様にお知らせします。只今を持ちまして、雄英生徒全員の合格を確認できました。それに伴い、本施設の『自爆装置』が発動しましたのでお知らせします。本施設は、90秒後に木っ端微塵になりますので、早めに避難してください。繰り返します……』

「「ぶっつぎけんなアアア!!」」

なお、アナウンスの声は飯田に頼んだ。『可能な限り業務連絡っぽく』って注文つけて。

で、90秒後、ホントに自爆させました。そうなるようにセットしておいた。

あー面白かった。

第157話 結束と協調と未来予想図

毎年行われる『雄英潰し』という慣習の存在により、実力はあるものの、ある種ハンデを背負っているも同様の条件にある雄英高校。

今回はしかし、開始早々にその全員が1次試験を突破するという事態になった。

永久の『風雲英雄城』あつてのものである点は否めないが、自分達に有利なステージを作り、その上で連携によって『全員での勝利』を勝ち取るという結果は、ヒーロー公安委員会にとっても、無視できるものではない……いやむしろ、重要視すべき点だった。

今回の試験、いや今回以降の試験においては、公安はよりいっそう、ヒーローに『個の力』だけでなく『群としての優秀さ』をも求めた内容にしていく方針になっている。

オールマイトの復帰が絶望視されている今、その穴を補う力が要る。

しかし、あれほどの実力及びカリスマを持つヒーローはそう簡単には現れない。

今現在No. 2、繰り上げでNo. 1の地位に就くことが確実視されているエンデヴァーですら、衰えたオールマイトとの間にすらも、圧倒的な差があった。

個人の強さでは、『穴』を埋めるのは最早難しい。いやそもそも、オールマイトという圧倒的な『個人』に、治安やら何やらを依存してきたのが問題だった。

これからのヒーローには、オールマイトが1人で背負っていたそれらを、結束・協調によって補うことが求められる。公安委員会及び警視庁はそう未来を見据えた上で、この判断を下していた。

実際、例年の試験から見ると、その難易度も方針も、決して小さくない転換になっているため、観客席でこちらの様子をうかがっている相澤達は、冷静を装いつつも驚き、そして自校の生徒達のことを考えて、多少なり不安になっていた。

それを理解しつつも、必要な能力を持っている者を見極めることこそ試験の本質だと、眠い頭に鞭打って試験を目良は監督していたわけだが……現在彼は、率直に言って驚かされていた。

（今年の雄英は粒ぞろいですねえ……あの生徒一強のように見えて、1次試験も2次試験も、各自の協力及びその個々の実力が光っている。努力や経験あつてのものだろうが……とんでもない世代だ）

今現在、既に始まっている2次試験。

課題は『救助』。会場内に散らばっている要救助者を、いかに的確に救助できるかを見るものだ。

もちろん、その要救助者は、本物の怪我人ではなく、役者……どころではない。

『HUC』——『Help Us Company』という団体に所属する、いわば『要救助者のプロ』であり、救助に当たる生徒達の採点すら行う。彼らを助ける過程で、どれだけ点数を稼げるか……ではなく、持ち点から『減点されないか』が判断基準となる。

すなわち、ただ自分の力を誇示するだけのワンマンプレーはむしろマイナスであり、いかに他者と——それが例え他校の生徒であっても——協力して効率よく、時に役割に徹してでも、救助にあたれるかが重要となる。

そして、その採点基準において……今年の雄英高校、1年A組は圧倒的だった。

『こちら八百万！ エリアF4要救助者2名救助完了！』

「こちら栄陽院了解、同エリアにおいて暫定発見されている要救助者全員救助完了を確認。八百万班はそのまま、隣接するエリアE4へ。未探索のエリアだから、移動して要救助者捜索に当たれ。蛙吹班、先程新規に要救助者発見の報告が入ったが状況詳細は？」

『ける、人数は2名。うち1名が水辺にいるから私が行く予定だけど、老人でケガをしていて出血もかなりあるから体力の消耗を避けるために遠浅の部分を大回りする予定よ。その他は現在救助中、トリアージはいずれもイエロー。急を要しないから安全と負担軽減第一で作業中、応援は不要よ』

「救助見込み、応援不要、了解。……入電。こちら栄陽院、どうした緑谷？」

『こちら緑谷班！ 新たに要救助者2名発見、トリアージグリーン1、レッド1！ レッドの方は出血が酷くて処置に急を要するけど、背中から腰に掛けて痛みを訴えている。状況から背骨に損傷がある可能性があり迂闊に動かさない！ 固定具がいる、瀬呂君か八百万さんを応援に欲しい！』

「了解。八百万、応答せよ。緑谷班より応援要請、トリアージレッド、脊椎損傷防止のため固定具を要する。場所はC7、対応可能か」

『八百万班了解、直ちに向かいますわ！』

ほとんどの者が、他者と相談しながらも個人で動く中で、雄英は最初から『組織』として動き始めていた。チームを組んで現場で身軽に動きつつも、無線を通して報告を密にし、逐一状況を報告して情報を共有しながらことにあたっている。

試験開始直前、試験としての設定が発表された段階で、永久は八百万に頼んで試験場の簡単な図面を人数分作成してもらい、それを縦横にマス目状に区切ってエリア分けをした。

その上でクラス20名を3〜4人一組に班分けし、緑谷、爆豪、飯田、永久、蛙吹、八百万をリーダーとして、合計6班で行動を開始。

さらに永久をその中で『司令塔』役とし、各班からの情報の集約と情報の管理、状況に合わせた配置の指示等を一手に行う立ち位置とした。

どこで要救助者を何人見つけた、どんな状況、状態は、トリアージは……そういった情報を集約して全員で共有できるようにしておくことで、必要な人員を即座に手配し、またこの時、各自がいる場所を即座に把握するにあたり、事前に分割して用意したエリアの図面が役立つ。

1つ1つ単純とはいえ決して少なくない情報量を、永久はコスチュームの新機能も駆使して見事にさばりてみせた。

軍帽の鍔の部分に格納されているヘッドマウントディスプレイを使い、さらに音声入力機能で自分が口にしたこと、及び無線で入って

くる各班の情報を記録。必要に応じて適宜見返しながら、時に、複数の班から同時にあげられる報告にすら対応する。

『こちら八百万班、C7エリアでの処置完了しました』

『こちら緑谷、八百万さんに手伝ってもらって救助無事を完了。後は僕らの班だけで対応可能……あつ、内容ダブっちゃったかな？ とりあえず八百万班、フリーで』

『こちら飯田班、G2エリアにて、瓦礫の下から要救助者の声がするのだが、暗くて位置及び状況が確認できない！ そう深いところではないと思うが……』

『こちら蛙吹班よ。ちょっと大きな瓦礫がいっぱいあってルート確保が難しいの。場所からして、多少手段荒っぽくてもいいからどかせる人よこしてほしいわ』

『全部了解。八百万、G2エリアの飯田班合流、ライト作って照らしてやってくれ。緑谷班、救護終わったらさつきまで八百万班が向かったE4エリアの探索に移ってくれ。爆豪班、今手空いてるな？ H8エリアの蛙吹班に合流してルート確保の手伝い頼む』

『ああ!? こつちも今忙しいんだよ、声はするけどどこにいるか見つからねえ！ 探し中だ！ 他の奴行かせろや！』

『お前の班、お前と切島と上鳴だろ？ 感知タイプいないから姿が見えない奴の搜索は不利だ、私が行くからお前は蛙吹の方頼む』

『ふぎけんな！ 俺がやるつつつてんだよ、誰がテメエの……』

『あつそう。あ、緑谷すまん、やっぱお前蛙吹の方に行ってくれ、なんか爆豪が俺には無理だつて言つてて当てにできなくてだめだわ、お前なら楽勝だろうからちよつと代わりに……』

『ふぎつけんな誰がんなこと言つたクソが！ ぶっ壊してやるからとつとつとその瓦礫と蛙女の場所教えろやア！』

(上手く使ってる)

(さすが司令塔)

無線の向こうでは、切島と上鳴がそのやり取りを聞いて感心していた。

ちなみにこの2人、『爆豪班』と銘打ってはいるが、1次試験に引き

続き、単独行動をとる爆豪になんとかなくついて行っただけである。

☆☆☆

「1次に引き続きあの女子か……いや、それに加えて個々の完成度も高いし……今年の雄英すごいな。マジでどんなカリキュラム組んでるんだよ？ デート行こうぜ」

「行かねえ。……カリキュラム……も、まあなくはないだろうが……さつきも言っただろ。あいつらが勝手に火イつけ合ってるだけだ。あとはまあ……経験、だろうな」

やや苦々し気な声音を交えさせて、相澤はM.s. ジョークの冗談交じりのトークに返す。

『病院跡地』及び『神野区』での総力戦を経て、うちの連中の頭の中には、死地で生き残るため、そして他を生かすために必要なことが何か……即座に状況を判断し、時に自分は役割に徹してでも他人に任せることの重要さが刻み込まれてるはずだ。加えて栄陽院は、もともと後方支援系の技能を優先・重要視して習得している上、状況を分析する能力は母親譲りだ。今回みたいなケースは、むしろ得意分野……奴は『司令塔』として、流動する局面で他を動かすことにこそ真価を發揮する）

最終決戦での『マトリョーシカアタック』然り、その前の暴走オーバーホールを含む敵や脳無達との戦い然り。

各自が最も力を発揮すべき場面で全力を出し、後は他を信頼して任せる。その繰り返しで、自分の教え子達が、あのプロヒーローすら簡単に死ぬ戦場を生き抜き、どこか見事決定打への道しるべすら築いてみせたことを、相澤は知っている。

否応なしにチームプレイの重要さを、そしてそれが生む力の大きさを知ることとなった。1+1が10にも100にもなるということ、実感どころか実証してみせた。

本来ならば、もつと時間をかけてカリキュラムの中で学んでいくはずのことだった。それを、死と隣り合わせの極限状況で彼らは知っ

た。

とても『合理的』などとは言えず、素直に喜んでいいものかとすら思える。それでも、その経験は確かに彼ら彼女らの『力』になっている。

眼下に広がる光景は、それをこの上なくわかりやすく物語っていた。

(……ま、教師としては、結果を生かすことは考えても……決して喜ぶべきことじゃないんだが)

一連の事件において、雄英生徒42名がとつた戦闘行為については、病院跡地のそれについては、ターニヤが手を回した『超非常事態宣言』によつて法に触れないとされてはいるが、その後の神野区での戦いにおいては、かなりグレーゾーンであつたため、しばし公安委員会で協議されていたことを、相澤は知っている。

『敵連合』の黒霧によつて42名全員が『拉致』される形でその場に現れた、という証言が、現場にいた複数のプロヒーロー達によつてなされているため——ごく一部の者だけが、その裏にあつたさらなる事情及び『奇跡』の存在を知っているが——自発的に規則違反を犯したわけではないことはわかっている。

また、オールマイトを含め、その場にいたプロヒーローの大半が重軽傷を負うほどの激戦だつたこと、大量の脳無や強力なネームドヴィランがいたこと、世界最大級の危険度を誇る『オール・フォー・ワン』という存在がその場にいたことなど、『個性』を用いて応戦するに値する事情が十分にあつたと認められた。

そして、やや俗な理由ではあるが……当時、各種放送局によつて生中継でテレビ放送されたその光景を見た視聴者たちにより、生徒達を称賛・擁護する声が多数上がったことも大きい。

オールマイトやプロヒーロー達と力を合わせ、その身を盾にして道を切り開き、前代未聞の凶悪な『敵』を倒したその一夜の出来事は、当然ながら日本中、いやまたたく間に動画が拡散したため、世界中の知るところとなっている。

もちろん、無資格の未成年による『個性』使用や、他でもない『マ

トリョーシカアタック』を、無謀だなどと批判する声もあったが、それを大きく上回る規模の賞賛があり、言ってみれば、民意は完全に生徒達の味方だったのだ。

そして公安も、これから来ることになる『平和の象徴』不在の時代を乗り切るために、利用できるものは何でも利用することに決めた。『神野区』で生まれた英雄譚をその起爆剤とするために、生徒達の行動を処罰するという選択肢は、その瞬間完全に消失した。

結果として、厳重……ともつかないような口頭での注意だけで決着となったのだ。

そしてその、ある意味特赦とも呼ぶべき判断は、その場にいた全ての者達に対して向けられることとなった。

何を隠そう、相澤もそれにあずかった1人である。

幾度も生徒達に対する襲撃を許したことが学校の不始末となり、記者会見で頭を下げた相澤は、今後の展開によっては、教師を続けることが難しくなるかもしれない、とも覚悟していた。

入寮の時、蛙吹が『いなくなってしまうかと思つて怖かつた』とこぼしたが、相澤がその時に返した『俺もびっくりだ』という言葉は、冗談でも何でもなかったのだ。少なくとも、相澤にとっては。

雄英への風当たりという状況ももちろんあったし……ごく一部のみが知っている、『奇跡』についてのこともある。あの時、相澤とマイクは、聞こえて来た親友の……白雲隴の声に応えた。あの時の自分達の声が、あの大規模転移の発生に全く関係がなかったとは思えない。

考えすぎかもしれないが、それでも、原因の一端が自分達にあるという思いは消えず。

ゆえに、二重の意味で覚悟をしていた相澤だったが、前述の理由と、他にもいくつがある思惑からこうして教鞭をとり続けることを許され、そうなった以上は、今まで通り、いやそれ以上に生徒達を立派なヒーローに育て上げて見せると心に決めてここにいる。

なお、いざと言う時には生徒達の分の責任も自分が、と用意していた辞表は、出番を失つて机の中にしまわれ……ようとしていたところを、プレゼント・マイクの手によって強奪され、問答無用でシユレッツ

ダーにかけられている。

『これからだろうが、俺達が気合入れなきやいけねーのはよ』という、珍しく騒がしくない激励の言葉と共に。

きつとその時、彼の机の上に、学生時代、『A組の3バカ』が並んで撮った写真が置かれていたのは、偶然でも何でもないのでろう。

そんなことを考えてしんみりしていた相澤の横顔を、横目で眺めるMs・ジョーク。

彼女はかつて、幾度となく相澤を『個性』を用いて爆笑させようと挑んだ過去があるのだが、そのたびに一瞬早く相澤が『抹消』を発動させるため失敗してきた

が、何か今なら成功しそうな気がする、でもなんかそういうことして良さそうな雰囲気じゃなさそう、という相反する感情に苦しんでいたが……ふと眼下に広がる光景を見て、とりあえずそれも後回しにしようと思える程度には、その展開を面白いと思ひ、普通に相澤に声をかけた。

「見ろよ、イレイザー。またなんか面白いことになってるぞ」

「あ? ……!」

「おい、すげえな雄英、あんた達! さつきから見てるけど、1から10まで効率よく動いててさ」

「うえつ!? あ、ありがとうございます……」

「俺達も何か手伝えることないか? 俺達の学校、2次に残ったチーム、応用が効きづらい個性ばかりでさ……行き当たりばったりだと救助するにも限界があるんだよ。あんたんこの指揮系統なら、情報把握の網も広そうだし、適材適所で指示がもらえるんじゃないかって」

「それは……えつと、聞いてみますね」

「……!」

「はっはっは、いよいよ他の学校まで巻き込み出したぞ……その場その場で協力するだけならまだしも、指揮系統にまで組み込むって。仮

免試験でコレはちよつと、前代未聞じゃないか？」

無線を使いながら、きびきびと動いて救助その他を進めていく雄英を見て、経験や知識はあるが、能力の相性などからどうしても手が進まなかった者達が、意を決して声をかけ始めていた。

その胸中にあつたのは、試験に受かりたいという切実な思いか、それとも雄英の面々の手際に感銘を受け、少しでも学びたいと思つたからかはわからない。

だが、そこから確かに……試験場全体へ広がっていくほどの『流れ』は生まれたのだった。

「連絡を受けて来た、増強系個性2名！ 状況は？」

「こつちの瓦礫を退かしたいんだ、手を貸してくれ！ 1人はこつちを俺と一緒に、もう1人はそつちを支えてくれ！」

「よしきた。手の空いてる奴、運び出しを頼む！」

「こちらエリアG1！ 救助中なんだが周囲の瓦礫が不安定で迂闊に動かせない！」

「おう、来たぜ！ えつと……じゃあ、俺がテープで鉄筋やらそのへんを上手く固定するから……」

「あ、私の『個性』、磨いたものをツルツルにするので、体勢を低くして……そうすれば、引つ張る感じで運び出せると思います！」

「よし、それで行こう。もう大丈夫ですよー、もう出してあげられますからねー！」

「……っ！ わかりました、ここと、ここのコードを切ってください。それで通電は止まって、漏電や、それによる火災などの二次的な被害もなくなるはずですよ！」

「了解した。誰か、切断ができる『個性』を持つてる奴はいないか？」

「俺が。俺の個性は、周囲の鉄分を操ってはさみやカミソリを作れる。コレで切ろう」

「なら頼む。にしても……君もすごいな、紅茶を飲んで目を閉じた時

は何事かと思つたが、即座にこの基盤の内部構造を理解して……いやすまない。だからどう、という意味ではないんだが」

「いえ、構いませんよ。自分でも少し変わったというか、独特なプロセスを有するものだという自覚はありますから。その分、この『IQ』の能力自体には自信がありますしね。さあ、どんどん参りましょう！司令塔、次の解体を要する危険物はどちらに？」

「こつちだ！ この辺りで確かに声がしたんだ……探知系の『個性』は？」

「俺の『レーダー』で見してみる。生物が出す二酸化炭素を検知するか、呼吸さえあれば……っ！ いた、あの位置……瓦礫の下になっている！ やばいぞ、呼吸が浅い、急がねえと！」

「今連絡した！ 『無重力』の個性持ちが来てくれるそうだから、大きさ関係なく瓦礫は退かせる！ 現着まで1分強あるらしいから、私達はそれまでに、応急処置用の設備を整えよう！ 呼吸が浅いってことは、えーと、考えられる症状は……」

「轟！」

「……何だ、坊主の奴」

「すまん、俺正直、お前のことやっぱりまだ好かん！」

「……それはさつきも聞いた。それだけか？」

「でも！ そんな自分の都合で他の人の迷惑になったり、できることをしなかつたり、助けられる人を助けられなかつたりする方が嫌だ！

だから……」

「……それだけわかつてるなら十分だろ。別に俺のことは嫌いでない、だから今だけは……ヒーローとしてできることを全部やれ。後になつてから後悔だけはするな……！」

「っ……応！ あ、轟、お前ちよつと今、つていうか何か前より熱くなつてるな！ 俺、今のお前はちよつと好きかもだぞ！」

「……ああ……？ 左、熱でも漏れてたか……？」

「いや、多分そういう意味じゃないと思う……」

「アオハルだねー」

「……まるで集団合同演習だな」

「あつはつは、いいじゃないかコレはコレで！　こりゃこの国の未来も明るいかもしれないぞ？」

各学校の教師も、生徒も、もちろん公安委員会も予想もしなかった展開。

しかし言ってみればその光景は、『個』ではなく『群』としてヒーロー……の、卵たちが共闘し、1人1人が出せる限界以上の成果を上げていくその様は、彼らが望む未来そのものを描いているかのようであり。

M s. ジョークの言葉は、冗談でも何でもなく、むしろこの先の未来が、決して暗黒に閉ざされたものではないということ、聞いていた者達の脳裏に、どこか予感させていた。

この十数分後、無事試験は終了する。

途中に『敵が姿を現し追撃を開始』というシナリオによる『対敵』の要素までもがプラスされたものの、そこでも変わらず冷静に戦況を判断し、最終的に50名を超える受験生達が協力して挑むための『司令塔』であり続けた永久。

彼女の采配により、救助の手は一切止まることなく、また襲撃してきた『敵』——役の、ギヤングオルカを始めとしたヒーロー達——への対応も即座に行われた。

前線指揮官として、飯田や真堂、毛良など、各学校の中でも特に戦況判断その他が速く的確なメンバーを選任し、戦闘能力に優れる者達を選んで『対敵』の担当として配置。

救助活動の邪魔をさせないように応戦を任せ、残り少なくなった要救助者を一気に回収していき……ほどなくして、終了のブザーが鳴り響いた。

最終話 私達のヒーロー・ヒロインアカデミア

「そんじゃお前ら、飲み物持ったな？ ……よし、では高いところから失礼して……雄英高校ヒーロー科、1年A組B組、全員の『仮免試験』合格を祝して！ 乾杯！」

『カンパァー!!』

もちろんソフトドリンクだけでもね。まあ、気分つてことで。

今私が取った乾杯の音頭のとおり、私達は無事に、A組も、別会場で受けていたB組も、全員が『仮免』を取得することができた。今、全員の手元には、発行された名前・顔写真入りの許可証がある。

これでめでたく、私達は『ヒーローの卵』から、『尻に殻のくつついたひよっこ』にランクアップすることができたわけだ。

まだまだ未熟であることに変わりはないが、大きな前進であることもまた確かである。

なので、あくまで反省会を兼ねるって名目でだけ……今日くらいは騒いでもいいだろうってことで、AB合同で祝勝会、ということになったわけだ。

帰ったら急いで料理作らなきゃいけないかな、と思つてたんだけど、寮に帰ってみると、なぜか私達が帰ってくるよりも先に、ご馳走がどっさり届いていた。

有名料亭の折詰、洋食のオードブル、J〇J〇苑の『お家で焼肉セット（超特上）』、同じく『お家でしゃぶしゃぶセット（超特上）』、『超神田寿司』の持ち帰り特上、その他色々、豪華なご馳走が。

『仮免試験合格おめでとう』というメッセージと共に置いてあった。それらに驚いて確認してみると、送り主は連名になっていた。

しかもそれが、オールマイト、ホークス、ベストジーニスト、ミルコ、サー・ナイトアイ、リユークユウ、ファットガム、ワイプシ、シルバールピクシー、パンドラス・アクター……その他、あの『神野区』と一緒に戦ったヒーロー達からだった……あ、すっごい端っこにエンデ

ヴァーの名前もあつたわ。シャイか。

思わぬサプライズに驚かされつつも、ありがたくいただくことに。大喜びでそれらの、B級グルメから高級お取り寄せまで色々揃ったご馳走を開けて作って、今に至る。

とりあえず作ってる間の時間を利用して、個人的に付き合いがある範囲ってことで、ターニャに電話した。

明らかに予約とかしてなきゃ用意できないものばかりだったので、野暮な問いだとは思いつつ、『落ちてたらどうするつもりだったんだよ』って聞いたたら、

『お前らなら全員落ちるってことはないだろう。9割か、少なくとも過半数は受かると思っていたし、大きなミスさえしなければ全員問題なく受かると思っていた。もし落ちた奴がいたら、『残念だった者は次回頑張れ!』的な激励のメッセージカードも同封するつもりだったよ』

とのこと。さいですか。

いやしかし、たまには食べるばかりの立場でのんびりするのもいいもんだな。

幸いにして、ご馳走は40人という人数でも、そして食べ盛りであることを考えてもなお食いきれないほどあるので、各々好きなように食べている。作り足しを心配する必要はなさそうだ。

見回してみれば、皆、思い思いに楽しんでるようだ。

あつちでは寿司を食べながら、上鳴や瀬呂、泡瀬や回原が、今日はここが大変だったとか、誰がどんな風に活躍したとか、振り返って面白おかしくはしゃいでいる。

上鳴の鉄板の話題は、あつちこつち突撃していく爆豪についていくのが大変だった、っていうあたりのようだ。本人に聞かれるなよー、あつちで焼肉セットについてきた激辛肉味噌でご飯食べてるから大丈夫だと思うけど。

同じようにはしゃいでるようだが、こつちは女子メンバーだな。芦戸や葉隠、取陰や角取が一緒になって……そしてこつちは、あつちこつちのグループに積極的に乱入していつてる。『いえーい、盛り上

がってる?』みたいな。

まとも役、ないし抑え役として何気に奮闘してる拳藤がちよつと大変そうだ。

……あ、口田と障子と常闇と小大と柳が一緒になって食べてるところに突撃してつた。いやなんでもよりによってその、基本無口なメンバーが揃ってるとこに……困ってるだろ、やめてやれよ。

ほら、あっちで騒いでる切島とか鉄哲とか鎌切とかがいるところ行って。あの連中ならお前らにも負けないテンションで応対してくれつから。テンションしかないけど多分。

つか、A組の3人はわかるけど、小大と柳は何で……いつの間になんか良くなったのそこ? 知らなかった。……何、ちようどそこに美味しそうな料理があっただけ。あ、そう、偶然か。

はしやいでる連中がいる一方で、真面目に今日の反省点を洗ったり、これからのことを考えて色々意見をつつからせてる面々もある。

飯田に八百万、骨抜に塩崎あたりがそうだな……あ、宍田と尾白も加わった。真面目と言うか、向上心ゆたかというか。

もつとも、きちんとしてご馳走も楽しんでるみたいだし、本人達がそれでいいなら別にいいか。

途中からは、合格の話を聞きつけた通形先輩達『ビッグ3』や、普通科の2人……心操と青山も来たので、半ば強引に『入れ入れ! 食ってけ! いっぱいあるから遠慮すんな!』って巻き込んで。

さらには『あんまりバカ騒ぎしすぎるなよ、明日から新学期だぞ』って一応一言言いに来た相澤先生やブラドキング先生、そして何となく様子を見に来たマイク先生とミッドナイト先生も巻き込んで——テンションに任せて結構すげーことしたな、今思うと——夜は更けていった。

アルコールこそ入らないが、まー皆騒ぐ騒ぐ。

途中からカラオケ大会まで始まって、マイク先生が衝撃波が出ない程度に熱唱しつつMCもこなしてたり、ミッドナイト先生のJ—P O

Pや小森のアイドルソング（ダンス付きでノリノリ）、吹出のアニソン、麗日と蛙吹のデュエット、青山の洋楽、ブラドキング先生の演歌（!?）が響き渡り、

採点機能使って遊んだら耳郎がなんと100点出して大盛り上がり、対抗意識燃やした爆豪が熱唱するも96点MAXで無念の敗退（十分すげーと思う）。

余興ってことで『ロシアンルーレットタコ焼き』が開催され、今回の試験で2次の点数が70点未満だった面々が参加することで（どうしてもいやな場合はやんなくていい。強制はよくない。パーティは楽しく）、

5つの激辛タコ焼きを誰が食べるか注目の中……当たってしまった田場が転げまわり、黒色がキャラが崩壊する勢いで嘔き出してせき込み、鱗が水をがぶ飲みしてどうにか堪え、あんまり表情に出ない轟が何も言わずに崩れ落ちそうになっていた。

残る1つは爆豪だったんだが……もともと辛いもの好きなためりアクションがなく、『なーんだ』『つまんねーの』と落胆の声を浴びてキレそうになっていた。

いや、結局その後の物間の『あはははは、点数でも合格ギリギリでこういう場でも見せ場ないなんてつくづく（以下だいたい省略）』という煽りで結局キレた。ぶっ飛ばされた物間は、凡戸と庄田が回収していってくれた。ご苦労様。

流れに乗っかって爆笑ギャグ（自称）を繰り出そうとして、通形先輩が大事故を起こしたり、

合宿で私と砂藤がスイーツやら何やらを作った話を聞いた波動先輩が『ねえねえ私も食べたい！』っていいだして結局作ることになったり（サツと作れたから手間でも何でもなかった）、

周りのテンションについて行けずに気分が悪くなり、『帰りたい……』と隅っこで体育座りを始めてしまった天喰先輩を相澤先生が連れて帰ったり（自分も上手いこと離脱したな）、

再三の注意にも関わらず、偶然を装って女性陣にボディタッチしようとしたり、執拗に王様ゲームや野球拳の開催を推してきたり、精神

的に未成熟(?)なのを利用して波動先輩にいらんことを囁く峰田を、心操が『洗脳』して『パーティ終わるまで大人しく座つてろ』つて言つて止めてたり、

それによつて一躍英雄扱いされた心操が、一時的に女子に囲まれて対応に困つてたり、

あと、かかったことがある尾白や緑谷によると、心操の『洗脳』つて、個人差あるけど、ぼんやり意識が残つてる(けど体は言うことを聞かない)場合があるらしい。体育祭で緑谷は『このままだとステージの外に出ちゃう、でも体が言うことを聞かない!』つて感じだったんだつて。

……だから心操が女子に囲まれてる間、置物みたいに部屋の隅でじつとしてた峰田は、『洗脳』の影響で無表情なまま、目から血涙を流してたのか。位置関係上、それが見える位置だったからな。

気づいた時はめっちゃびびくりしたぞ……軽くホラーだった。

そんなこんなで夜は更けていき、

生徒達のテンションもピークを過ぎた頃、

「よつす、緑谷」

「あ、栄陽院さん……お疲れ様」

風に当たろうと思つて庭に出た……けど切島たちが騒いでたので、Uターンしてきた屋上で、どうやら同じことを考えたらしい緑谷とばったりあった。

『お疲れ』つて軽い感じで声をかけて、隣に座る。

それで思わず、緑谷は赤く……は、ならない。このくらいはもう平気か。

「どうだ、思う存分食べて騒げたか？」

「あははは……うん、すつごく楽しめたよ。なんかもう、皆すごく元気でテンション高くて、ついてくだけでも大変だったかもだけど……途中からは僕も乗つかつて楽しめたし。高級グルメも一生分食べたんじゃないかってくらいに……」

「あつはつは、そりゃよかつた。まあでも、高級料理なんて、緑谷がこ

れからトップヒーローになっていけば、いくらだって食べる機会あるだろうよ」

「ははは、そっか、そうだね……トップヒーロー、か……」

不意にそこで会話が途切れ……緑谷は、ポケットに手を突っ込んだ。

定期入れを取り出し、そこに入っている……今日、手に入れたばかりの、1枚のカードを……仮免の許可証を取り出して、見ている。

しみじみと、色んな感情が込められた目で、眺める。

その中でも、特に強く表れていたのは……やる気だったように見えた。

「たぶん、ちよつと前までの僕だったら、『なれるかな』とか言ってたんだらうね」

「そうかもな。今はもう？」

「言わないよ。……なるつもりだから、絶対に」

緑谷は、カードに印刷されている緑谷の写真を見ながら、はつきりと、そう言った。

自分に言い聞かせるように聞こえなかったわけでもない。しかし、だとしても……もう、緑谷の目に、迷いや弱気さみたいなものは、ない。

いや、違うな。そういうのがないわけじゃない……そういうのを忘れず心に持ち続けているっていうのも、むしろ緑谷の長所の1つだ。

持っていて、持ち続けていて……その上で、全部背負って飲み込んで、歩き続ける……そんな決意が、彼の心の中では定まってるんだ。

「体育祭の時に、轟君に似たようなことを言ったんだけどさ」

「? うん？」

「僕は……いろんな人に助けられてここにいる。知識も、チャンスも、環境も……それこそ、『個性』すらも。……なんだかんだ言って、やっぱりそういうの、負い目に感じないわけじゃないんだ。僕だけの力ではここまでこれなかった、助けられて、助けられ続けて、今の僕がいるんだって」

でも、と続ける。

「それでいいんだと思う。いや、開き直るわけじゃなくて……むしろ、ヒーローつてもともと、そういうものだと思うから」

「……そうだな……今日の『仮免試験』然り、『神野区』然り……よく知ってるもんな、私ら」

「うん。1人1人じゃ大したことはできない、みんなで力を合わせるから、大きなこともできる」

「中には、1人で何でもできちまうようなものもいるけどな。オールマイトとか……それに、爆豪とかもそうだよ。人には頼らねえ！　またいにもう、年がら年中」

「ははは、そうだね。でもそれなら、そんなすごい人が他の人と協力したら、もつとすごいことができるようになるでしょ？」

まるで、子供の理屈。

現実はそのような単純なものじゃないってことくらい、大人なら、ましてヒーローなら、誰でも知ってるだろう。1+1が2にならないケースは、何も増えるばかりじゃなく、ゼロやマイナスになる場合もある。相性やかみ合わせ次第で、それは起こってしまう。

それでも、緑谷は何のためらいもなく、そう言つてのけた。

「僕はいつか、トップヒーローに……いや、No.1ヒーローになる。なってみせる。でも……その時に僕がなってるヒーローは、きつと、オールマイトとは違う形なんだろうな、って思う」

「ほお、そのころは？」

「オールマイトは確かにすぐくて、僕の憧れで……何だって一人でやられて、絶対に助ける、最高のヒーローだ。僕もそんな風になりたいって、ずつと思つた。いや、今も思ってる。けど……僕は、オールマイトそのものになりたいわけじゃないし、なれるとも思つてない。オールマイトだって、そんなこと望んでないと思う。……僕は、僕が最高だと思ふ在り方で、No.1になる」

「……………」

「正直、勢いで言ってる部分もある。けど、本気でそう思う。全部1人でなんてできないだろうし、色んな人と協力して、色んな人に助けてもらつて……それでも、胸を張つて、そんな繋がりや、協力して勝ち

取ったんだ、つていう結果すら誇って、皆で一緒になって笑えるような……そんな『平和の象徴』になりたいんだ。まだうまく言えないし、すごく大変な道のりだと思う。何年、いや、何十年かかるかだってわからない。けど……」

「……つき合うさ、緑谷。どこまでも」

話の途中から……ちよつと不安そうな、けど決意自体は固そうな目でこつち見てくるんだもんな。

可愛い、けどカッコいい奴め。

懂れてる人とは違って、困難な道のであることがわかり切つていて。まして、1人ではたどり着けないかもしれないって思えてすらいて。

それでも迷わず、その道を歩いていくと言えるまでに、こいつはなった。

そんな緑谷が、一緒に歩んでほしいって言ってくれる。私のことを、求めてくれる。

あー……なんだかなあ、ホントになあ。

私は、なんて素敵なご主人様に巡り合っただろうなあ。

好き合ってる男女なら、ここでぎゅつと抱き合ったり、『そつと影が1つに重なった』的なアレになったりするんだろう。青春ドラマとか、いかにもそんなのありそう。

けど私達の場合は、

——ゴツン！

拳と拳で。

告白の時に引き続き、色気ないなあ……でも、こんな感じでもいいんだと思う。

目指す先、見るものが見るものだし……そこに行くまでの私たちの関係は、何も男と女だけじゃないだろうしな。学友だったり、修行仲間だったり、ヒーローとサイドキックだったり、ビジネスパートナー的なもの……うん、纏まらん。

いいか、その辺は今では考えなくても。

何を考えたところで、これからさんざん苦勞して歩いていくのは決定してんだから。

その先に、絶対になつてやるぞ、つてどこまで含めてさ。

だから今は、これでいい。

「これからもよろしく、永久」

「ああ。よろしく、ご主人様」

夏休み最終日、時刻はまもなく午後10時。

寮の消灯時間も近づく中、そろそろお開きにしようつてことになり、

シメの挨拶を請け負った飯田が、私達がちょうど今日『仮免』という新たなスタートラインに立ったことや、明日から二学期だつてこともあつてか……『俺達の戦いはこれからだ!』という往年の名台詞を素で口にして、その場が爆笑に包まれた。

しかしまさにその通りで……私達の戦いは、まだまだこれから続いていく。

戦いに限らず、勉強も、修行も、恋愛も……その他色々。

まだまだこれからも続いていく。なんなら、これから始まることすらあるだろう。

楽なことばかりなわけがない、困難なこと山ほどあるはずだ。

そしてそれは時に、1人では乗り越えられないものでもあるのかもしれない。最後まで止まらず走り続けることなんて、できないのかもしれない。

けど、それを悲観することはない。

疲れたら休めばいい、迷ったら止まればいい、1人でできないのなら、皆で立ち向かえばいい。

寄り道したり、遠回りしたり、時にはさぼったりしてもいいだろう。

その全部が、きつと糧になる。

きつと、そうやってがむしやらにあがき続けて、やつと手に入れた未来でこそ……私達は、自信をもって名乗れる『ヒーロー』としての

自分を手に入れてるんだと思う。

何せ今はまだ、1年の夏休み終わったところだ。まだまだこれから、ずっと続くんだ。

私達が、立派なヒーローになるための時間は。

私の、あるいは僕の……ヒーローアカデミアも、ヒロインアカデミアも。

1歩1歩、歩いて行こう。積み重ねていこう。

ずっと、これからも。みんなで。

エピソード One for All All
for One

長い、長いと思える時間も、いつしか過ぎ去っていくものである。密度濃く、やることも覚えることもまー多く、この時間が永遠に続くんじゃないかとすら思えた学生時代も……思い出がたくさん詰まった過去のものになってから、既に早数年。

日々の仕事の中で、学友の活躍をふとテレビで耳にしながら、その日々を思い出すような生活を送るようになり……まー要するに何が言いたいのかというのだ。

「はい、ヒーロー事務所『One for All All for One』です！ はい……はい、では少々お待ちください。副社長にお繋ぎします。『ダイナージャ』！ 雄英高校からお電話です！」

「はいよー、内線飛ばして！ はいもしもし、こちら……おー、八百万か。あーうん、何？ え、職場体験の……うん、希望が……あーそう、うん。じゃー1人、来週ね。了解、あとでメール送っておいて」

——ガチャ（電話を切る音）

——ガチャ（ドアを開けて緑谷が帰ってきた）

「ただいまー、どう？ 何か変わったことなかった？」

「あ、お疲れ様です社長！」

「あ、『デク』！ ちょうどよかった、今雄英の八百万……あー、『クリエティ』先生から電話入ってさ、来週、職場体験生1人受け入れ頼むって。冴汰君来るぞ」

「ホント!? うわあ、そっか、指名受けてくれたんだ……楽しみだなあ！」

こんな風に、ヒーロー事務所構えて、いっぱしのプロヒーローとして活躍するようにもなるってことだ。5〜6年も経てばね。

☆☆☆

めっちゃ色々あつて、今思うと私らとんでもない青春過ごしてたもんだなー、とか思えてしまう高校1年の時から、既に6年の歳月が流れ、

3年前に雄英を卒業した私達は、社会人としてそれぞれの進路に進んでいた。

つつても、あの時のあの面々は、見事にというか、1人残らずプロヒーローになつてるけども。

ある者はプロヒーローの事務所に入社して下積みの時代を過ごし、ある者は自ら事務所を立ち上げてバリバリ仕事をこなしていき、ある者はフリーランスのヒーローとして、特定の拠点を持たず全国各地を回りながら活動している。

けれど、皆それぞれにやりたいことを見つけて、迷いなく進んでいるってのは同じだ。それならそれで、何の問題もない。

例を挙げれば、そうだな……今ちようど話してた、八百万——クリエティとか。

卒業後、彼女は雄英高校に就職し、教師として後輩たちを指導していく道を選んだ。

その優秀な頭脳で、在学中からほぼ休日返上で講習を受け続け、卒業と同時に教員免許を取得。その後、実習やら何やら半年で全部終わらせて、翌年から教壇に立った。

彼女の指導は、時に甘えを許さず厳しく、しかし時には親身になつて一緒に考えてくれると評判である。授業そのものもとてもわかりやすく教えてくれるとのこと。

そのルックスとコスチュームも相まって、(特に男子に)非常に人気があるそうだ。

彼女自身、雄英在学中に何度も悩み、苦しみ、そして乗り越えて来た身だ。その体験をもとに、悩める後輩達を今日も導いていることだろう。今年度の1年A組担任のクリエティ先生として。

なお、拳藤共々ウワバミ事務所に誘われていたらしいが、メディア進出が望みつてわけではないので、丁重にお断りしたそうだ。2人と

も。

ちなみにその拳藤も雄英高校に就職し、なんと今年度1年B組担任である。おかしな縁だな。

続いて、飯田。

卒業後は、お兄さんから名を受け継いで『インゲニウム』を名乗り、以前から考えていた通り、そのお兄さんの事務所に所属して、下積みから始めて……今ではバリバリの即戦力に。

超俊足でどこへでも駆けつけるヒーローとして、最前線で活躍している。

そしてそのお兄さん……元・インゲニウムなんだが、現在は、というかもう4年位前に、プロヒーローとして復帰している。

一度は『ヒーロー殺し』に脊髄をやられて歩けなくなった彼だが、私の『オーバーホール』にかかれば……まあ、うん。人間2人くっつけて1人にしたり、その後さらに分離させたり、何でもありな『個性』だからね。

仮免取った後、色々手続きして……治したよ。飯田にはめっちゃ感謝されたっけな。

その際、飯田は『インゲニウム』の名前も返そうとしたらしいけど、結局固辞されたとのこと。現在はお兄さんは、別なヒーローネームを名乗っている。

サイドキック達からの人望や、復活を喜ぶファンたちからの人気は変わらないそうだが。

弟共々、ターボヒーローとして今日も市街地を縦横無尽に駆け回っているはずだ。どっちも早すぎてテレビカメラがろくすっぽ追えないのが玉にキズだそうだが。

轟は卒業後、エンデヴァー事務所での下積みを経て、独立して自分の事務所を起こした。

父親……エンデヴァーは自分の事務所で一緒に働きたがってたそうだが。まー、あそこんちの家庭……後から聞いたけど、色々と闇深いからな。

それでも、在学中から徐々に仲直り？が進んで、関係もそこそこ良

好などころへ収まったらしいし、時々チームアップで事件解決に臨んだりもしてるとのこと。

その時はエンデヴァーの機嫌がめっちゃよくなって、気前よくサイドキック達に「馳走してくれたりするともっぱらの評判である。やっぱ親バカだよなあの人、本質が。」

エンデヴァー事務所以外にも、事務所が近いってことで、『レップウ』——夜嵐ともよく組むことがあるらしい。最初は気まずい、距離の開いた関係だったけど、今はすっかり仲直りしている。

で、一旦関係改善してからはもうなんかあいつ、ウザいくらいに寄ってくるし話しかけてくるから、『前の方がよかったんじゃねえかコレ』ってちよつと辟易してたな、轟。

他にはそうだな、ヒーローとしての活動で見れば、切島や梅雨ちゃんの活躍が著しい。

どちらもプロヒーローとしてバリバリ最前線に立っている。自分の事務所までは持っていないが、サイドキックでありながら、その人氣は今やチャートでも右肩上がりだ。

それぞれ、ファットガム事務所で都市部での凶悪犯罪と、セルキー事務所で海難救助を主に手掛け、いくつもの事件を解決して、大型新人としてその名を響かせている。ファンも多いそうだ。

ヒーロー業に専念して有名になっている奴もいれば、『副業』の方で知られている者もいる。

お菓子メーカーや老舗洋菓子店とのタイアップで有名になり、自らも凄腕のパティシエとしての顔を持つヒーローとして知られている砂藤なんかいい例だな。

在学中に調理師免許に加え、管理栄養士とか色々資格取ってたし、もうすっかりその道のプロだ。料理学校とかに招かれて講演することもあるって聞いた。

音楽業界やダンス業界でそれぞれ脚光を浴びている、耳郎や芦戸もその系統だな。どっちも在学中からさらに腕を磨いて力をつけ、そっちでもプロの現場で通じるスキルを身に付けて活躍している。色んな番組に引っ張りだこでテレビその他での露出もどんどん増えている

し。

芦戸は持ち前のフレンドリーさで子供からお年寄りまで大人気だし、耳郎はそのクールな雰囲気に加えて、その中に垣間見える女の子らしさとのギャップにやられる人が急増中だ。

あと、口田。動物園の飼育員やブリーダーを副業にしている、『愛犬のしつけ講座』なんかと呼ばれたりすることもあるとか。

最近、ウワバミとギャングオルカに紹介してもらったタイアップ先の動物園で、破天荒なウサギ顔のプロヒーローに振り回され気味だそうだが、同じく苦勞人体質のサイっぽい人やゴリラっぽい人と一緒に、何だかんだで楽しくやってるらしい。『今度遊びに来てね』ってメール来てた。

芸能関係で言えば、B組の小森がアイドルヒーローとしてデビューして人気急上昇中である。ルックスもレベル高いのに加えて、歌って踊れて、さらにバトれるとあって、今注目の新人だ。

こないだCMデビューも果たした。……何となく予想してたが、『キ〇コの山』のCMだった。

もつとも、本人曰く、『まだ芸能界という激流のほんの入り口に立ただけノコ！ 私の戦いはこれからノコ！』とのことらしい。……うん、まあ、気合十分ってことで結構。

派手に活躍しているヒーローもいれば、地域に根差した活躍に注力しているヒーローもいる。

実家近くに事務所を構えてる麗日なんかその典型例だな。ヒーローとして自分のやりたいことはするけど、同時に親孝行もきちんとするんだって、実家の工務店を含めた地域の活性化のために色々と精力的に活動している。

それが結果として、庶民派・人情派で親しみやすいヒーローとして人気を博していて……本人も予想外で驚いてたな。今度『情熱〇陸』出るとまで聞いた。マジか。

あとビックリしたのは、まさかまさかの、爆豪が日本を飛び出したことだな。

轟と同様、エンデヴァー事務所での下積みを経て、独立する……か

と思いきや、さらなるレベルアップのために、ヒーローの本場アメリカに渡った。

恐らくだが、かつてアメリカに渡って修行したオールマイトを意識してるところもあるんだろう。当時のオールマイトは、AFOとの戦いのため、アメリカで個性犯罪の激流の中に身を置いて戦い抜くことで膨大な経験値をためてレベルアップしていた過去があるそうだから。

暫くして、『日本の神風ボーイ』だの、『爆炎迸るラストサムライ』だの、『クレイジーボンバーマン』だの呼ばれる留学生ヒーローが話題になり始め……お前あつちでもそんな感じなのかよ。

色々不安ではあるが、戻ってくる頃には多分、いや確実に、奴は大きくレベルアップしているだろう。

なお、渡米する直前、高校3年間ずっと爆豪のお守りだった切島が、『あつちでも頑張れよ、誰彼構わず喧嘩売っちゃだめだぞ、ちゃんと3食きちんと食べ……』『オカンか teme はア!?!』って心配するあまり漫才を披露して、空港で見送りの連中や、野次馬達を爆笑させていた。そして、私と緑谷は……ある事務所で1年ほどサイドキックとして下積みをした後、独立。

ここを……ヒーロー事務所『One for All All for One』を立ち上げ、対『敵』からイベントへの参加、各種企業とのタイアップに後進の指導まで、幅広く活動している。

緑谷を社長に置き、私が副社長兼サイドキックリーダーとして事務所を運営している形だ。規模はそこそこ、事務員やサイドキックもそれなりの数を雇っている。

緑谷はあの『神野区』の事件以降もめきめきと腕を上げ、世代最強の1人に数えられるだけでなく、『雄英史上最強の1人』とか、『新たな平和の象徴』とか言われるまでになり、1年次後半のインターン生時代から、もうあちこちでサイドキック争奪戦になっていた。

その緑谷を支えるべく、私も全力で色々なサポート系技能を習得し、さらに事務所運営に必要な資格やスキルも片っ端から取得して、インターンも同じようにあちこちの現場で色々な経験を積んで

……今に至る。

なお、ここまでくるとまあ……私と緑谷の仲は半ば周知というか。明言はしてないことから、『友達以上恋人未満』『でも実際は特別な感情を抱いてるかも』という感じに見られている。実際そういう感じだし、なんなら1年の時からもつとすごいことになってたりもするんだが。

ただ、いずれはとは思ってはいるものの、まだヒーローとして仕事やら何やらが軌道に乗ってきた時期だったのもあるし、色々と忙しくもあるから……当分は入籍とかもする予定はないな。

いずれは、とは思ってはいるけども（2回目）。

……いや、緑谷がそれでもきちんと私のことを思ってくれてるのは知ってるし、私はそれで十分嬉しいし、信頼だっしてしてるから別に問題ないんだけど……不安要素があるとすれば、学生時代からの恋敵達がね……。誰一人、諦めてないんだよ。

麗日を筆頭に、梅雨ちゃん、塩崎、取陰……その他、学内外に、年齢の上下を問わず何人か……程度に差はあれど、未だ変わらぬ思いで緑谷を狙っている。油断できない。

麗日は学生時代から、私を除けば最も距離が近い友人だし……梅雨ちゃんと塩崎は仕事関係で一緒になることが多いし……取陰も同様なのに加え、たまに『終電なくなっちゃった』とかいって事務所のゲストルームに泊まってくし……

まあ、もう皆社会的な立場ってもんがあるから、無茶なことはしないと思うけど……思いたいけど……

今紹介した面子に限らず、他の皆も……私達の世代は、立派にヒーローとして活躍している。

巷では、幾度も凶悪な『敵』との戦いを経験して生き残り、今日の『結束と協調』のヒーロー新時代を切り開いたとされ、その優秀さも相まって『黄金世代』と呼ばれているとか何とか。嬉しいは嬉しいけど、なんだかこそばゆい思いである。

……そして、最後に。

私達に関わる人で、まあ何というか、絶対に語るに避けては通れない

い人が1人。英雄関係者としても、私達の個人的な付き合いという意味でも……うん。

今丁度、番組が始まるところだつてことで、緑谷が席についてテレビをつけた。

その目は……学生時代から変わらない、憧れのヒーローを見る少年の目になっている。

まあ、今から画面の中にその人の活躍が流れるわけだから無理もないんだが。

誰のことかって？ 決まってるだろ……おつ、始まった。

『もう大丈夫！ なぜって!? 私が来た!』

夕方のニュース番組……その速報というかトップニュースとして、今日起こった強盗立てこもり事件を、即座に駆けつけて解決した、『N.O.1ヒーロー』の姿が、

見覚えがあるどころではない、金色V字の髪が特徴的なあの人が、そこに映し出された。

『神野区の悪夢』で力を使い果たし、最早戦える体ではないことが世間に周知となった、『平和の象徴』オールマイト。

長期の活動休止とは言いつつ、これはもう引退を待つのみかと思われていた彼だが……その約1年後、まさかの完全復活を遂げ、日本のヒーロー社会に再臨した。そしてそれ以来、今までと同じように、いやそれ以上の勢いで大暴れし続けている。

確かにあの時……オールマイトに、最早戦える力は残されておらず、事件解決時に言い放たれた『次は、君だ』の言葉は、緑谷に『私はずもう、出し切ってしまった』という意味を持って重く突き刺さっていた……が、そのちよつと後に、私がそれを台無しにした。

それこそもう、デウスエクスマキナもかくやって感じのご都合主義的展開で。

まず、かつてAFOとの戦いで、呼吸器半壊、胃袋全摘その他によりボロボロだった体については、『オーバーホール』……もとい、

『クレイジーダイヤモンド
金剛石は砕けない』で直した。

流石にN.O. 1ヒーローの肉体……完全な状態への再構築にはどれくらいエネルギーが必要で、栄養補給しつつ何日もかかったけども。そしてもう一つ、オールマイトを『最強のヒーロー』たらしめていた力である……個性『ワン・フォー・オール』について。

既に緑谷に譲渡され、残り火も消えかけだったはずのそれがどうして甦ったのか……いや、そもそも今オールマイトの中にあるそれは一体何なのか、という話だ。

『神野区』の決戦のさらに最終局面……『マトリョーシカアタック』の最後に、オールマイトと、その場にいた生徒達やヒーロー達全員が『繋がった』感覚と共に、オールマイトは一時的に、完全な『ワン・フォー・オール』を宿したがごとき強さを発揮し、AFOを粉碎した。あの時は単純に、何かこう、ヒーローの諦めない思いが奇跡を起こした、みたく思ってたんだが……実はあれ、きちんと理屈というか仕組みがあったのである。夢壊して申し訳ないが。

あの奇跡の正体は……あの瞬間に生まれた『もう一つのワン・フォー・オール』だ。

あの直前、私がAFOから無我夢中で奪った『個性』の中に、ラグドールの『サーチ』と一緒に……恐らくは、かつて私のご先祖様からAFOが奪ったのであろう『オール・フォー・ユー』があったのだ。長い年月の中で、すり減って弱ってしまった……しかし、今なお、主の仇を打とうと最後の執念に燃える、『個性』の、『魂』の残骸が。

そして、『ワン・フォー・オール』はもともと、『オール・フォー・ユー』と『与える個性』の融合によって生まれたもの。すなわち、似た材料がそろっていたのだ。

ここで私の中の『変容』の力がまた仕事をして……残骸の『オール・フォー・ユー』が、『エンゲージ』を通じて全てのヒーロー達の思いを受け取るにより、そして、オールマイトの中にあつた『残り火』と融合することにより、新たな『ワン・フォー・オール』に生まれ変わった。

緑谷の中にあるそれが、何人もの人間を渡って練り上げられた、世

代・継承という『縦方向の繋がり』による力による『ワン・フォー・オール』だとすれば……あの時オールマイトが手にしたのは、その場にいたヒーロー達の思いによって作り上げられた、絆や願いという『横方向のつながり』による『ワン・フォー・オール』だった、と言えるのかもしれない。

こうして、便宜上『ワン・フォー・オール・オルタナティブ』と呼ぶことになった力に加え、回復した後リハビリによって力を取り戻したオールマイトは、約1年後、奇跡の復活を遂げ、その直後のビルボードで再びNo.1ヒーローの座に返り咲いた。後はもう……お察しだ。

ちなみに、復活したオールマイトは、コスチュームも更新し、『ヤングエイジ』『ブロンズエイジ』『シルバーエイジ』『ゴールドンエイジ』に続く最新のスタイル……『プラチナエイジ』と呼ばれるそれに今は身を包んでいる。もちろん、作ったのはデヴィッド博士だ。

大本のデザインは『ゴールドンエイジ』を踏襲しているそれは……色彩の派手さは若干控えめになり……体の各部にアクセントとして『緑色』のラインが入ったデザインになって……まあ、わかりやすいな。意図というか、コンセプトが。

めでたしめでたし、だとは思うけど……問題がないわけじゃないんだよなあ。

まともな肉体と、新たなOFA……全盛期ほどではないにせよ、活動制限やら何やらの心配もない力を取り戻した結果……今までのうつ憤を晴らすかの如く、あの人ますますワーカホリックになって……朝から晩までどつかしらで元気に『私が来た』って働きまくるようになって……

しかも、本来そのストッパーになるはずのナイトアイが、オールマイトの『完全復活』に歓喜するあまり、なんと事務所畳んでまたサイドキックになっちゃって……それが強力に活動を後押しするもんだからもう手が付けられなく……

正直、『あのまま隠居させた方がよかつたんじゃないか』って、時々……いや、割と頻繁に思う。

けれど、この人の復活——治療に専念した結果、ということになっている。一般向けの発表では——によって、上がり始めていた日本の犯罪発生率もまた下がってきたし、そこにさらに私達の世代から重要視されるようになった『結束と協調』のヒーローとしてのあり方が加わった結果、去年なんか犯罪率、ついに5%台に突入したからな。

よくなってる実績が確かにある以上、間違いだったなんて言えんし……何だかなあ。

まあ、いいか。また、この人一人きりに頼り切った平和にならないように、私達が頑張っていけばいいだけの話だ。

幸いと言っていいのか、活きのいい若手がそろってるからね。今の時代は。

私ら『雄英黄金世代』はもちろん……復活したオールマイトを今度こそ追い抜くと吼えているエンデヴァーとか、プロヒーロー・トップヒーローの多くの方々も。

あ、ちなみに私と緑谷が卒業後に下積みとしてサイドキックやったのは、何を隠そうこの事務所だ。オールマイトとナイトアイ直々に、私達の修行を仕上げてもらった。

それに見合うだけの……オールマイト事務所のサイドキック経験者として恥じないだけの力は身についたと思ってるし、これからもそれを見せていくつもりである。

しかし……光が強ければ、闇もまた強くなる。

今なお、この社会には、まだまだ悪が潜み、息づいている。それらに対しての警戒は、いくら慎重になっても、なりすぎってことはないだろう。

あの『敵連合』だって、主犯格の死柄木を始め、まだまだ捕まっていない面々が数多くいるし……水面下で勢力を拡大させている、って話も聞く。

ともすれば、いつか第二のAFOが誕生するんじゃないか、とすら話になっている。

私達の卒業間際の時期だったかには、『異能解放軍』とかいう連中が暴れ出した事件もあったし。

ただ、それも散発的なテロみたいな感じだったから、あつという間に鎮圧されて下火になって、現在、細々とその残党が色々やっつてるとどまつてるけど。

なんでも、ネームバリューとして自分達以上に有名になってた『敵連合』が目障りで喧嘩売ったはいいものの、AFOが残した戦力である『ギガントマキア』だかによつて軍団が半壊させられ……で、もう半分はさらに『崩壊』の力を増した死柄木に『ぶつつ壊』されたらしい。

あえなく壊滅した解放軍。その残党の一部が『敵連合』に吸収され……そのまた残党が今色々やっつてる連中ってわけだな。

むしろ、その解放軍のメンバーに各界の著名人が結構な数名を連ねてたつてことで一時期騒動になったつ。そつちの方が影響大きかつたかもしれないな。

……それに乗じて『栄陽院』の本社や八百万んちが、デトネラツトとかF G I社とか、関係各所の株式大量に買い占めて経営権やその他利権、技術を、パイを切り分けるようにまあ見事に……うん。大人の世界つてすげーな、つてあの時は思った。

在学中も幾度も戦つた、死柄木率いる『敵連合』。

『解放軍』の残党を取り込んで勢力を増し、今現在は潜伏中と思しきあいつらと……きつと、これからも戦う時が来るんだろう。死柄木を倒して、メンバー全員を捕まえて、タルタロスにぶちこんで……決着がつく、その日まで。

そんなことを考えていた時だった。

——TRRRR!! TRRRR!!

『地区内のヒーロー全員へ応援要請!! HTA204地点にてバスジャック事件発生! 現在対象車両は国道〇〇号線を南東方向へ向けて逃走中、乗客12名が人質となっている模様、至急応え——』
「皆! ちょっと行つてくる、あとよろしく!」

『行つてくる』じゃないよ現場まで何キロあると思つてんだ。車出す

から30秒待つてな、支度してりやすぐだ！」

相変わらず『考える前に体が動く』という持病の発作が起きそうになつている緑谷を止めて、オフィスの机についている、黄色の黒の縞模様で縁取られている上、ガラスカバーで保護されているスイッチを、カバーを開けて押す。

見るからにヤバそうなデザインだが、別にコレで事務所が自爆したりするわけじゃない。ただ、私専用の特別車両の発信準備が整うだけだ。

押してすぐに私と緑谷はガレージへ向かい、そこで出動用レールの上にスタンバイされている、近未来的というか、宇宙世紀とかにありそうな容姿のマシンに乗り込む。

車体全体が真っ赤で、流線型のデザイン。車体の各部に、噴射口が見え隠れしている、ヒーロー事務所として認可貰ってなかったら絶対に車検通らない、超がつく特殊車両だ。

聞いた話じゃ、昔、デヴィッド博士がオールマイトとバディを組んでた時に乗り回してたマシンをデザインの参考にしてるらしいが。

運転席に私、助手席に緑谷。『一応』シートベルトを締めて、と。

キーを差し込んでエンジンをかけ……ない。そんな必要はない。

インテリジェントキーなのかって？ それも違う。このマシンは、私の『個性』で走るんだ。走るといふか、飛ぶが。

事務所が提携している研究機関(『栄陽院』の傘下企業)に特注して、そこで働いているメリッサや発目の技術の粋をつぎ込んで作られたコレは、電力やガソリンで動かすこともできるが、基本は私が『気象操作』……もとい、それを『変容』させて作り出した力『ウェザー・リポート』によって発生させた風と雷を動力にして動く。

毎度天候を変えるほどの規模で発動するんじゃないなく、それをそのまま手元で操れるような感じで……いわば『天候のミニチュア』を作り出して使うように扱えるようになってるのだ。

「セットアップ完了。コンディションオールグリーン。発・進！」

動力部に直で発生した暴風と雷を力に変えて、殺人的な加速で動きだすマシン。

メインのブースターに加え、機体のあちこちにつけられた『フレキシブルスラスト』……補助用の噴射口によって、立体的に動き、急カーブも何のその。減速せずに曲がる。

本来は減速して曲がる必要があるところとかを、噴射口を増やして、違う方向に力を加えることで急制動をかけるっていう滅茶苦茶な設計思想でこのマシンはできている。相当無茶苦茶なGがかかるので、緑谷とか私レベルの肉体強度じゃなきゃ、多分、乗ってるだけで、最悪死ぬ。

数キロ、あるいは十数キロあった道のりをあつという間に走破し（飛んでるが）、通報にあった地点に到着すると、そこには……

『来るんじゃないえええええ!!』

「……えええ……アレ、バスジャックつて言うのかよ?」

「ま、まあ……確かに、バス1つ占拠して乗客を人質にしてはいる……よね」

「占拠つてか掌握? 手に持つてんじゃない、バス。なんか持ち帰ろうとしてんじゃない」

巨大化、あるいは怪物化の類の『個性』だろうか。10mくらいの巨体になった男が、小型のバスを手に持つて、周囲を包囲するヒーローや警官隊を威嚇していた。

見た目通りのパワーがあるようで、抱えているバスがギシギシ、メキメキ、と嫌な音を立てている……説得に耳を貸す様子も、当然ない。

これ以上興奮させると、自棄になって、あるいは力加減をミスってバスを握りつぶしかねない。そうなったら、乗客の皆さんが……まあ、ダメだなそれは。

もちろんそんなことを、私の横にいる彼が許すはずもなく。

隣で緑谷が、シートベルトを外して、風防の上部分を開いて……

「じゃ、行ってくるー!」

「おう、じゃ、私は下からだな」

とだけ言葉を交わして……座席を蹴つて、飛び出していく緑谷。

同時に私は、『敵』が立っている高架橋の下側に車を潜り込ませ、そこから直角に急上昇……鯉の滝登りみたいな動きで足元から奇襲す

る。

そして、突然の奇襲に反応できずにいる敵の手に握られているバスに触れて、

——バツン！

『オーバーホール』を発動し、バスの外側のフレームを分解して再構築……一回り小さくして、ほんの一瞬、敵の手の指との間に隙間を作る。

そしてその一瞬を見逃さず、緑谷が『黒鞭』でバスを引っ張り出して敵の手から奪う。

「なっ!? 返……うがああああ!」

それを追って突っ込んで来ようとした敵を、私が局所的な突風を生らせて押し返す。こつち来んな。

で、押し返しながら『個性看破』でこいつの能力を見る。……ふむ……

「緑谷、こいつの『個性』はあくまで発動型。気絶させれば縮むっぽい」「了解、それだけわかれば十分だ!」

無線越しに言うと同時に、緑谷から投げ渡されたバスを、青いドラゴンでキャッチし、優しく道路に降ろす。

そしてその時には……勝負は既に決まっていた。

「SMAASH!!」

お決まりの掛け声とともに、『敵』の顎に吸い込まれるように決まった拳が、その巨体を天高く吹き飛ばし……一撃でキレイに意識を刈り取る。

そのまま空中で気絶し、しゆるしゆると縮んだ『敵』に……私が、車に搭載されている武装から、対個性犯罪者用『牢獄弾』を発射。

警察が使う『移動牢^{メイデン}』を、欧州で発眼目覚ましい圧縮技術によって武装転用したそれは、命中と同時に展開し、内部にその敵を收容。ものの1秒足らずで拘束を完了した。

なお、この車同様、開発者は発目とメリツサである。相変わらずい

いもん作るな。

ここまで10秒足らず。

あまりにあつという間のことで、それを見ている野次馬や、当事者だったバスの乗客達すらも、何が起こったかよくわかっていない。

むしろまだ、自分達が助かったことにすら気づけていないかも。バスの窓から見える彼ら・彼女らの表情は、困惑がほとんどだから。

もうここから先は、いつものことだ。見なくても、何が起こるかわかる。

あと数秒もすれば、このどよめきや困惑は大歓声に変わることだろう。

まあ、でも見るけども。私のご主人様の決め台詞は……いつ見てもかっこいいから。

不安でたまらない、助けてほしい、そんな気持ちでいっぱいの人々に向けて、今日も彼は言うのだ。見る者を安心させる、満面の笑みで。

ヒーローはただ、それだけで、人々を笑顔を守ってみせるのだ。

「もう大丈夫！　僕が、来た！」